

魔法青年リリカル恭也Joker

アルミ袴

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「人の妹をこんなにしておいて、五体満足でいられると思うなよ……！」

闇の書事件の冒頭、ヴォルケンリッターズに襲われたなのはの下へ、兄の恭也が駆けつける。

古流殺人剣術の達人が今、絶対強者であるはずの魔法世界の住人へとその牙を剥いた。

『リリカルなのは』とその原作『とらいあんぐるハート』のクロスなのはの兄である「とらいあんぐるハート3」の高町恭也が主人公です。

もはや何番煎じか分かりませんが……。

時期はA's冒頭から。傾向としては所謂KYUYAです。好きな方、お付き合い下さい。自サイト(<http://nejihakama.wp.xdomain.jp/>)にも掲載しています。

目次

魔法青年リリカル恭也Joker

第1話 人の妹をこんなにしておいて | 1

第2話 お兄ちゃんの方がよっぽどファンタジーなの | 33

第3話 私なんか | 78

第4話 敵ながら | 133

第5話 ありません、いません | 175

第6話 おにいちゃん | 214

第7話 緊急事態 | 257

第8話 君をさらに来たんだ | 306

第9話 わたしでも、わたしだけど、わたしだって | 337

第10話 悲しいな | 384

第11話 馬鹿 | 415

第12話 身勝手な願い | 453

魔法青年リリカル恭也Triangle

第13話 幸せ | 503

第14話 ただの女 | 541

第15話 やっぱりちよつと黙ってくれる? | 581

第16話 どう見ても、天使 | 627

第17話 今の私はもう | 677

第18話 良い子ちゃん | 707

第19話 世界で一番 | 758

第20話 五年前の俺になら | 788

魔法青年リリカル恭也Triangle — substage

第19・5話 初心な反応 | 821

第20・5話	それはちよつと、勘弁して欲しいんだけど	835
第20・6話	苦手な事	856
第20・7話	ランキング一位	873
第20・8話	ファイアツセ・クリステラ	896
魔法青年リリカル恭也Heart		
第21話	それも甘えか	930
第22話	刃を研ぐ	975
第23話	認めてあげて — 許してあげて (前編)	1024
第24話	認めてあげて — 許してあげて (後編)	1051
魔法青年リリカル恭也Stingers		
第25話	どんな人、なのかしらね	1110
第26話	どうか気楽に構えて頂けると助かります	1150
第27話	ああいう人種がいるかいな	1196
第28話	じゃあ、だめなんですか？	1234
第29話	抜けてくる弾	1277
第30話	歪	1332

魔法青年リリカル恭也 Joker

第1話 人の妹をこんなにしておいて

いわゆる、超常現象には慣れている。身近にそういったもの達が割と多数存在していたし、またそれらにそれなりに深く関わってもきた。

だから、今更なにが起ころうとあまり驚きはしない。

やるべきことを、やるだけだ。

「……………」

高町恭也は走る。生身の人間とは思えぬほどのスピードでビルの中を駆け上るその足取りには、迷いや躊躇いは一切ない。ただただ、速く、疾く。

音を置き去りに、闇の中を走る。

これで、終わり？

向かいくる脅威へ、必死に杖——レイジングハートを向けながら、高町なのはは思う。

これで終わりなのだろうか、と。

目の前の赤いドレスを着た少女は、ゆつくりと歩み寄ってくる。自分にはもう、彼女に対抗できる力は残っていない。彼女の目的が何なのかはわからないが、未だ攻撃の意志はひしひしと感じられる。

絶望が、目の前にあつた。

諦めたくはない。しかし、諦めなかったらどうにかなるのだろうか。

目の前の赤い少女がデバイスを振りかざした。呆れるほどわかりやすく、終わりが近づく。

気丈に抗ってきたなのはは、ついに目をつぶった。そして心の中、
絶る。

仲間や友に。そして何より家族に。

様々な名が浮かんでは消える。目に熱が宿り、ほおに涙が伝うのを感じた。

そして、

「たす……け……て」

鈍い痛みに包まれた、暗く冷たい世界の中で、なのはは最後に強く、鮮明に、一人を想った。

それは、

「……たす、……け……て」

誰よりも頼り、誰よりも信じ、誰よりも慕う、最愛の人。

「……おにい……ちゃん」

どんな時でも無条件で安心をくれる、大好きな兄だった。

もちろんいくらなんでも、事ここにおいて、兄の助けが期待できないことは、理性ではわかってる。

しかしそれでも、なのはは継りたかった。決定的な絶望が振り下ろされるその瞬間までは、自分にとって絶対とすらいえる人に助けを願うことで、心に温もりを保ちたかった。

希望を持つていたかった。

心のどこかでわずかに、ほんの少し、しかし確かに、理性とは別のところで、なのはは想うから。

もしかしたら、と。

「……たす……け、て……っ」

もしかしたら、

「…………お……に……ちゃん……っ」

兄ならば、まるでヒーローのように、こんな時でも助けに来てくれるのではないかと。

風切り音。凶器が振り下ろされる音だ。

なのはは身を固める。

そして一瞬、間を置いて。

辺りに、金属のぶつかり合う音が響いた。

「……あんだてめー？ そいつの仲間か？」

次に、舌足らずな声で少女がそう囁み付くように唸るのが聞こえ

る。自分の体に、覚悟していた衝撃はきていない。いつたい、何が。

確かめようと、目を開き、なのはは見る。

「仲間？ 違うな。……—兄だ」

「はあ？ なんだよ、管理局の魔導師なのか？」

「……管理局？ 魔導師？ なんのことだ」

「あーもういい。……邪魔するよーならぶちのめすだけだ」

「……やれるものならやってみるがいい。ただ、一つだけ忠告だ」

かばうように、守るように、自分の前に立つ、見慣れた姿を。

瞬間、一気に力が抜け、無理矢理レイジングハートを構えていた右手が床に降りる。もう、なのはにできるのはただ目の前の光景を見ることだけだった。

しかし、それだけでよかった。

なのはは理解している。

これが夢じゃなく現実ならば、勝手な考えかもしれないが自分はどう、助かったも同然なのだから。

だって、

「人の妹をこんなにしておいて、五体満足でいられると思うなよ……！」

世界で一番頼りになる背中が、今日の前にあるのだから。

……迅速に、可及的速やかに、この少女を制圧する。

戦闘者として切り替えた意識で、恭也は荒れ狂いような感情をなんとか制御、集中力を高めていく。

後ろにかばう妹——なのはの状態確認を今すぐにでもしたいところだが、しかし、現在はそれができる状況ではない。

「なんだか知らねーが、どけ！」

とにかく、そう声を上げる、目の前の敵を潰さなくては。

冷えた目で、恭也は敵——赤いドレスを身にまとった少女をみやる。彼女は手に持ったハンマーらしきものを振りかぶり、

「テートリヒシユラーク！」

恭也へ声とともに一息に振り下ろした。

その一撃は速く、そして何より力強い。少女の見かけからは想像もできない勢いでハンマーが振るわれたことに、さすがに内心、驚愕を覚える。

だが、

(……粗すぎるな)

驚愕はすれど、脅威ではなかった。恭也からしてみれば少女の技は、臂力にのみ頼った、モーションの大きいテレフォンパンチ同然だ。恭也は右足を軸に体を少女に対して半身にするだけの最小限の動きでもって、それを躲す。少女のハンマーが床に突き刺さり、大きくひびを入れた。

少女の目が見開かれる。仕留めるつもりで放ったであろう技をいとも簡単に避けられれば、それはある意味当然とも言えるが。

しかし、その動揺は一瞬の隙を生んだ。

それを逃さず、後ろに回した左足で強く地面を蹴り、恭也は体当たりでもするかのように少女に肉薄。

素早く振り上げた二刀を、その突進の勢いも足して叩きつけた。

御神流奥義 雷徹

左右の刃がインパクトの点で寸毫のズレもなく重なるように放つその一撃は、奥義の中でも一、二の破壊力を誇る。

相手が少女であろうが何だろうが、護るべきものに害なさんとするならば、潰す。

「があっ！」

少女は短い悲鳴を残し、吹き飛んでいく。どうやら効いたようだがしかし、恭也は表情をわずかに曇らせる。

(……どういいう硬度だ、あれは?)

そう訝しむ恭也の手には硬い感触が残っている。普通の人体を斬った感覚とは思えなかった。

まず真っ先に思い浮かぶ可能性が、HGS・Pケース。なんらかの特殊能力でバリアでも張っているのでは、と言う考えだ。だが、しか

しそれにしても羽が見あたらない。次に思い浮かぶのは、自分が知らない型の自動人形。それならばあの膂力も硬度も納得がいかないでもない。他の可能性としては、夜の一族や久遠のような存在……と言ったところだろうか。

だが、とりあえずは、気にしている場合じゃない。

どうせ今考えてもわからない。ダメージは通るのだからそれでいい。恭也はそう結論を出すと、

「くっそ……！」

「落ちられては困るな」

悪態をつきながら割れた窓ガラスから外に飛び出し落下しようとする少女へ、鋼糸を放った。

「な、なんだ……？ バインドか？ ……うわあああああああああ！」

鋼糸はまるで意志を持っているかのように驚きの声を上げる少女に巻き付き、その体を無理矢理引き寄せる。

「くそっ！ くそっ！ なんだこれっ！」

「そう簡単には外れん。終わりだ」

少女がもがく間に、恭也は二刀を鞘に戻していた。そして、自ら少女との距離を詰めるように走り出す。

そこから繰り出すのは、自身がもつとも信頼する技。

御神流奥義 薙旋

突進、抜刀からの斬りつけ二つ、背後に回ってさらに二つ。闇の中、同時かと思まごうばかりの一瞬で刃は四度閃く。

「ぐあっ！」

悲鳴を上げる少女。高速の体捌きで成された四連撃は少女の体を無慈悲に斬り裂く……はずであった。

「……………まで硬いか！」

返ってきた感触はどこもかしこも非常に硬質であり、思っていた以上のそれに刃が通った手応えはない。

(初撃がダメージを与えたのは、徹のおかげと見るべきだな)
徹。

衝撃を対象の内側に通し、表面の硬度を無視して破壊する、御神の剣士が持つ技術の一つだ。

初めに放った雷徹は、その発展形の奥義である。二刀の斬撃を一点に集中させ、生まれる衝撃を内側へ送り込み響かせる。

単に威力の高さで効いたものと思っていたが、防御をすり抜けるその特性こそがこの相手には重要だったようだ。

「……こんの、やろお」

少女は悪態をつき、ふらつきながらも手に持った得物を苛烈な面構えで構えた。鋼糸は雑旋を放った際に制御を解いたため、すでに床に落ちている。

「よくも……!」

少女の眼はまだまだ死んでいない。信頼する技がどうやら本当に通じていないらしい現実には、恭也は僅かながらも臍をかむ。

「やありやがったなあ! ぶっ潰す!」

しかし、それで隙を作るようなミスはまさか犯さない。咆哮を上げこちらに踏み込み、奇つ怪な形のハンマーを殺人的な勢いで振り下ろす少女の豪撃を見切って躲す。多少の動揺で動きを澱ませるような甘さを、自分の修める剣術は使い手に許すものではない。

(どんな仕掛けかは知らんが、大したものだな……)

少女のハンマーは易々と床へ盛大にヒビを入れ、コンクリートの破片が辺りに舞い踊る。膂力だけで言うならば、自分が今まで戦ってきた相手の中でも間違いなくトップクラス。

まともに当たれば、自分は一撃で死ぬだろう。

「でえええりやああ!」

床から槌を引き抜きぎざまに、斜め一閃こちらを挽き肉にせんとする一振りを屈んで避ける。

数センチ身体的位置がズレるだけで命を落とす状況で、恭也の頭は極めて冷えていた。

目の前の圧倒的な力を振るう存在は目的も正体もわからないが、奴がやった事は唯一つ、はつきりしている。

生まれた時から、否、生まれる前から全てを賭して護ると決めた恭

也の宝に、あろうことか槌を振り下ろした。自分が割って入って止めなければ、確実にそれはなのはの華奢な身体を叩いていたろう。

そして未だなお、その意思は健在と見える。
ならば、止めるまで。

必要ならば仕留めるまでだ。

「ちよこまかとオー！」

腕を振りぬいた姿勢の少女がこちらをギロリと睨んでいる。

(……どれだけ強かろうと、それでも身体があるのは確かだ)

神咲一灯流のような魔を払う剣でなければ斬れないというのなら
まだしも、刃が当たり力が伝わるのなら、まさか殺せない道理はない。

問題は、あの異様な硬さだが……。

屈んだ姿勢から身体を伸ばして後方へ飛びつつ、置き土産とばかり
にコンクリートの細かい破片を巻き上げる。

「っそれがどうした黒ずくめ！」

地面に着地する恭也の視線の先、少女は気にしたそぶりもない。顔
面、特に眼を狙って放たれた破片を払う事すらしなかった。

「……いや、払うどころか破片が顔に当たる寸前で勝手に弾かれてい
たな。露出した部分にも何らかの庇護がある……?」

御神の剣士、特に不破である恭也の眼は特別製だ。暗い室内で離れ
ていても、それくらいは見て取れる。

しかしそうになると、眼へ刀を刺して脳を破壊するのは難しいか。

「騎士甲冑……ミッドだとバリアジャケットだったか? んなことも
知らねえってんならほんとに魔導師じゃねえんだな」

「魔導師……魔法使いという事か? 生憎と、ファンタジー世界の住
人ではないんでな」

「人外の動きしといてよく言うぜ……だけどてめえ、てことはアイゼ
ンに殴られりや一発お陀仏だぞ」

ブオンと一振り、脅すようにどうやらアイゼンと言うらしい槌を鳴
らして言う少女に、恭也は表情を変えずに返す。

「そうだな、そうなるだろう。当たればな」

「っ、てめえの攻撃なんてなあ! いくら当たっても痛くも痒くもね

えんだよ！」

そう吠えるだけの防御力が、確かに少女にはある。

「……とは言え、最初のはもう撃たせねえ。あの距離には近づかせねえ」

「ほう、警戒されたものだ」

雷徹は二刀を至近距離で同時に当てなければならなかったため、当然ながら距離を詰める必要があるのだが、どうやらそれは許してくれないらしい。

近づかせないと言われたからといって近づかないのでは剣士などやっていられないが、とは言え相手の手の内がわからない以上、リスクは高い。

怯えずに戦う事と、わざわざ危険な戦法を採る事はイコールではない。

「では、別のやり方で決めさせてもらおう」

言いながら構えを作る。右腕を引き、左腕は前に。

「俺の得意技ではないんでな、悪いが手加減は出来ない。死んでも文句を言ってくれるなよ」

「……言ってるおー」

怒りの声を上げる少女の手に、どこからともなく鈍く光る小さな鉄球が現れる。今更ながら、本当にファンタジーな光景だ。

あれを飛ばすなりなんなりして、遠距離から攻撃してくるつもりだろう。なかなか冷静だ。

しかし、距離がある事からどうやらこちらからの攻撃は届かないものと思っっているらしい、悠々と鉄球を宙に並べるモーシオンをとっている。

普通の人間と比べたら、それこそ比べものにならないくらい存在としては強いんだろうが、だからこそ、そういう所が少々甘い。

思いながら、恭也は脳の回転数を一気に引き上げた。

御神流奥義 神速

モノクロに染まった世界の中で恭也は地を蹴った。対して少女は彫像のようにぴくりとも動かない。

この神速の世界は同じく神速を使えるものでない限り、認識すら出来ない一瞬の領域だ。

ここを認識する事が出来、その中で動く事を可能としている御神の剣士は、だからこそ銃火器の蔓延る現代社会においても、古めかしい刀でもって無双を誇る。

普段とは違いゼリーののように重い空気を裂き、恭也は右の刀を前へと伸ばす。

その切っ先に、膂力の全てを集中して。

それは、弟子にしてもう一人の妹が得意とする技だ。

御神流奥義 射抜

超高速の突きが吸い込まれるように少女の鳩尾に突き刺さり、そのタイミングで世界に色が戻った。

「っか!」

全身全霊で力を籠めた切っ先から、一点突破で放たれた徹が衝撃を防護の内側に響かせる。少女の表情が苦痛と、そして驚愕で歪んだ。

徹は別に、当然ながら雷徹でしか放てないわけではない。しかしそれはこちらの技など知らない彼女には、予想外だったと見える。普通の人間にはありえない瞬間移動じみた速度による接近は言わずもなだ。

人の形をしているならば、急所も人と同じはず。

そんな予想をもって放たれた一撃は狙い通り少女の意識を刈り取りつつ、その小柄な体軀をはじき飛ばした。

「これでよう」

気絶した少女を鋼糸で念入りに拘束し終えた恭也は、そう呟き息をついた。

殺すことも選択肢に入れて戦闘を行ったとはいえ、そうならず済んだならば無闇に命を奪いたくはない。事情も聞かなければならぬいし、とりあえずは無力化したから問題はなからう。

念のために腕の一本でも切り落としておくべきかとも思ったが、それも止めておいた。いざ無力化してしまうと、やはり少女相手にそれ

を行うのは憚られるし、なのはにそんなトラウマになりかねない光景を見せたくもない。

それに何より、

「おにい、ちゃん……」

今は、そのなのはの状態確認が最優先だ。

恭也はなのはの前に歩み寄る。そして、壁にもたれながら座り込むなのはと片膝をついて視線を合わせ、声をかける。

「待たせたな。大丈夫か、なのは」

「……うん。大丈夫」

そう言って笑顔を作るなのは。だいぶ疲れているようだが、見たところ大きな負傷はない。恭也は安堵の息をつく。

「あの、お兄ちゃん……その」

「……いろいろ聞きたいことはあるが」

「……あ」

恭也はなのはの頭に手を置き、優しくなでる。

「後にしよう。とにかく、無事でよかった」

「……おにいちゃん……。あの……その、あ、……ありがとう。助けてくれて……」

「礼はいらない。当然のことだ」

微笑みながらそう言って、恭也がなのはを抱きかかえた、その瞬間だった。

「……っー」

急速に近づく気配と強烈な殺気を感じ、恭也は腕に抱えたなのはとともにその場から飛び退く。

直後、天井を突き抜け、紫の光が恭也となのはが居た位置へ飛び込んできた。

「これを避けるか、なるほど」

響いた衝撃と、舞い散る粉塵。それが晴れると、そこには、

「ヴィータはお前にやられたと見ていいの？」

どこか騎士を思わせる格好の、桃色の髪を後ろでくくった精悍な顔つきの女性。傍らには、先ほど恭也が鋼糸で縛り上げた少女を素早く

背中に負った、蒼い毛を持つ大柄な狼。

……新手か。

恭也は内心舌打ちする。

「……お前が何なのかは知らんが、邪魔をするなら排除させてもらう」
女性はそう言うと、手にした西洋剣を構えた。

その構えの隙のなさ、そして何より先ほどの攻撃。

異常なまでの戦闘能力を有していると見ていい。狼のことも考え
ると、現在の状況は非常に不利だ。

だが。

「なのは、……済まないが、少し待っていてくれ」

「お、お兄ちゃん……」

なのはがいる以上、諦めるといふ選択肢は恭也には存在しない。たとえ命と引き替えであつても、家族だけは必ず守る。

今まで必死に鍛え上げてきた力は、技は、大切な人を守るためにあるのだ。父を失ったその日から、家族は自分が守ると決めた。その誓いは、決して破らない。

「お兄ちゃん、私も……っ」

「その体では無理だろう。兄に任せておけ」

一瞬だけ優しく微笑み、なのはを床に下ろし、後ろにかばう。そして、

「……っ」

殺気を放つ。剣を構えた女性が息をのむ音が聞こえた。

低く、冷たく、鋭い、刃のような声で恭也は言う。

「御神不破流の身内を狙ったことを、あの世で後悔しろ」

「……ほざけ」

答えるように、女性も肌を刺すような気配を放つ。

睨み合う均衡状態、それを破り、二人がまさに駆け出さんとするその時。

唐突に床が光り、恭也には全くなじみのない不思議な模様が浮かび上がったかと思うと、

「なのはっー」

響く高い声、そして金髪の女の子、茶髪の男の子、犬のような耳が生えた赤髪の女性が姿を現した。

（また新手か？ どうやって現れた？ 近づく気配は感じなかった、何者だ？）

思考を巡らせながらも、前方の一人と一匹、右方に現れた三人、どちらにもいつでも対応できるように恭也は刀に手をかける。もし敵方だとすればいよいよ本当にまずいが……。

「管理局か……？」

前方の女性は剣を構えたまま、新たに現れた三人に警戒を向けていた。

三人はなのはのもとへ、つまりこちらに駆け寄ろうとしている。

敵の敵は味方、か。とは言え。

「なの……っ！」

警戒を怠るわけにはいかない。

恭也が射抜くような視線を向けると、金髪の女の子は声を押し止め、茶髪の男の子、赤髪の女性と共に足を止めた。

一瞬、緊迫した空気が流れる。

が、すぐにそれを消し去るような声が響いた。

「待ってお兄ちゃん！ お友達なの！」

「……ん、そうなのか」

「うん！ フェイトちゃん！ ユーノくん！ アルフさん！」

「な、なのは。その人は？」

フェイトと呼ばれた少女がなのはに問いかける。

「私のお兄ちゃんだよ！ 助けてくれたのっ」

「すまない、不躰な視線を浴びせてしまった」

そう言っつて恭也は目の前の騎士姿の女性への警戒体勢を維持したまま、三人に謝罪する。

「い、いえ。そんな……」

フェイトはそう言っつて手と頭を振る。その顔には冷や汗が浮かんでいた。

殺気を当てすぎたか、怖がらせてしまったようだ。

(ん、……そうか)

そして少し冷静になり、思い至る。

この娘がフェイトか。

恭也は、なのはが半年ほど前からビデオメールを送り合っている相手の名前とその顔を思い出し、それが目の前の少女と一致することに気がついた。

なるほど、この少女もこういった事態に一枚噛んでいたのか。となればいろいろ聞きたいところだが……。

「ザフィーラ、ヴィータを連れて下がれ」

そんな暇はないだろう。

一連のやりとりを見ていた女性は、傍らの狼に指示を出した。狼はその言葉を理解したらしく、素早く身を翻し、割れた窓から夜空の闇に飛び込んでいった。

果たして逃がしていいものか、判断がつきかね、少女たちを見ると彼らは追いたい様子だった。駆け出そうする身を途中で止め、なのは、恭也、剣を構えた女性、そして狼が去っていた方向の間に忙しく視線を泳がせている。

彼らは、なのはの友人らしい。つまりどうやら味方だ。そしておそらくは自分よりも状況をわかっているのだろう。

ならば。

「役割分担をしよう」

恭也はそう提案した。三人が恭也に視線を固定する。

「俺があ的女性を押さえる。君たちはさっきの狼を追うものと、なのはの傍に付くものに分かれてくれ。頼めるか？」

「あ、あなたがあの人の相手をするんですか？ それは」

「少なくとも俺ではあの狼は追えん。君たちにその術があるならば、そちらを担当してもらいたい」

「……わかった。フェイト、とにかくあいつは私らが追う」

「フェイトはここを頼むよ」

有無を言わさぬ口調で言う恭也に、犬のような耳を持つ女性と茶髪の男の子が従った。二人はすばやく駆け出し、夜の闇に消える。剣を

構えた女性は一瞬だけそれを止めようとする気配を見せたが、

「……っ」

「お前の相手は俺だろう」

「……その剣、デバイスではないな。魔導師ではないのか、お前は」

「ああ。その魔導師とやらがなんなのかは知らんが、違う」

「命知らずな……しかしいい気迫だ」

恭也の殺気を警戒してか、結局はその場にとどまった。

「さて、フェイト」

「は、はいっ」

「なのはを頼む」

「え、ま、待つてくださいい！ 戦うのなら私が……！」

その申し出には悪いが、これ以上、問答している余裕はない。

「頼むぞ」

「え、あ、あのっ」

ほんと彼女の頭の上に手を置き、その金髪をなで、

「それから君も気をつけてな。そっちに何かあればすぐに俺が行くから、無茶はするな」

「え……」

そう声をかけてから恭也は、

「っ！」

短く呼吸をはき出すと同時に、強く地面を蹴り、身構える敵へと躍りかかっていった。

(速い！)

黒い衣服に身を包んだ男は、魔法もなしに恐ろしいほどの速度をその身に纏い、斬りかかってきた。

シグナムは思わず心の中で驚嘆の声を上げ、……しかしもちろんそんな動揺は表に出さず、男が右手にもったやや短い剣で繰り出した抜刀からの逆袈裟斬りを自らの愛剣——レヴァンティンで受け止め、左の剣から追撃がくるより先に毅然と反撃を放った。

男は斜めに振り下ろされたレヴァンティンを左の剣で流し、再度右

の剣でシグナムの首を切りにくる。

「くっ！」

スウエーバツクでそれを避けつつ、レヴァンティンを横に振るい、男の体を両断せんとするシグナム。

だが、剣は空を斬る。男は驚異的な反応速度でシグナムの剣撃を見切ると、軽業師のように空中を舞ってそれを回避したのだ。

そして男の行動はそれだけで終わりではなかった。

軽い金属音が幾度か響く。

一瞬の後、闇の中、小型の刃物らしきものが数個、床に落ちた。

ほぼ同時に男も着地する。

「躲しながらこんなものまで放つとはな……」

「見切つて斬り落としたそちらもそちらだろう」

凍てつくような冷たい視線。貫くような鋭い殺気。

そして今の攻防。

ここにきて、シグナムは完全に認める。

今日の前に立つこの男は、驚異的なことに生身であるのにも関わらず、間違いなく自分たちにとって脅威となりうる強者だ。

「すまない。心のどこかでお前を侮っていた。ヴィータを破ったらしいとはいえ、魔導師でないのならば、と」

故に、シグナムは、彼に敬意を表す。

「私はヴォルケンリッターが将・ベルカの騎士、シグナム。この剣の名はレヴァンティン。……そちらの名も聞かせてもらいたい」

自身の誇りある名を示し、同時に相手の名を尋ねる、その行為によつて。

果たして男は、それに答えた。

「永全不動八門一派・御神真刀流小太刀二刀術師範代、高町恭也。剣の銘は、八景」

「その名、覚えておこう」

「こちらこそ」

そして空気はまた、戦場のそれになる。

「レヴァンティン、カートリッジロード！」

コツキング音が響き、レヴァンティンにカートリッジから供給された魔力が満ちる。シユベルトフォルムでのカートリッジロード、これによりレヴァンティンは炎を纏う。

「はああああっ！」

気炎万丈、今度はシグナムから恭也へ斬りかかる。

（火炎を纏った斬撃、どう対処するタカマチ！）

（いよいよフアンタジーめいて来たな）

女性……シグナムが妙なかけ声をあげたかと思うと、彼女の持っていた剣の一部分が稼働。そして次の瞬間には、刃部分が炎に覆われていた。

一体どんな原理であんなことを、恭也にはさっぱりわからなかった。忍あたりが見たら興奮しそうだなと、場違いな考えが一瞬浮かぶ。

しかしいつまでも呆気にとられてはいられない。

「ふっ！」

恭也はシグナムの斬りつけを大きくステップし躲す。

「……おおおおー！」

裂帛の声とともに、シグナムは追撃にくる。それもまた大きく躲す。次も、次もその次も。

恭也は回避に専念する。

せざるを得ない。

「……厄介だな」

思わずそうつぶやく。実際、非常に厄介だった、あの炎を纏った刃は。

自分との相性で言えば最悪に近い。

恭也の使う二刀術、その優秀な点には間違いなく防御性能が挙げられる。一刀で攻撃しながらも、もう一刀は防御に回すということが可能だからだ。

しかし現在はその利点が完全に潰されている。恭也にとっては意味不明な現象と言えるがとにかく現実として、相手の刃が炎を纏って

いるせいで、刀で敵の斬撃を受けるといふことができないのだ。そんなことをすれば刀を持っている腕は火傷ではすまない。

「……どうした、タカマチ！ 避けてばかりか！」

さらに回避するにしても、炎を警戒して通常より大きく動かねばならないため、反撃のチャンスがなかなかない。よって今、恭也はひたすら襲い来る連撃を躲けている。

しかし、もちろんずっとそうしているつもりはない。持久戦に持ち込むのは敵の体力が読み切れないため、リスクが大きい。

恭也は、見ているのだ。

御神流の剣士としての眼で、敵の斬撃を。

そして、狙っている。己の斬撃をねじ込む隙を。

否、作っていると云ってもいい。

貫。

御神流の技術の一つ。攻防の中、ないはずの隙を突き自分の攻撃を通す技。相手からすれば、こちらの攻撃はまるですり抜けてきたかのように見えることになる。

呼吸、視線、剣筋、パターン。

それらを読んで、誘導し、空白を作り出す。

そして、

御神流奥義 虎切

そこへと鞘に戻しておいた刀を奔らせ、高速の抜刀術を放った。

「なっ！ く……」

「……やはり硬いのか」

その攻撃は完全にシグナムの虚を突き、まともに入ったはずだった。剣で弾かれたわけでもない。しかし、返ってきた感触はあの赤い少女の時と同様、不自然に硬かった。

手応えありとは間違っても言えない。

「こんなに嫌な汗をかいたのは久しぶりだ。すさまじい技量だな……」

「それはごっちの台詞だ。あれを叩き込んでも致命傷にならないとはな」

「あれで倒れるほどベルカの騎士は柔ではない……が、タカマチ、お前……何かしたな？」

「……」

だがそれは、さすがに予想済みだ。赤い少女の仲間なら、彼女と同じ能力を有していると見るべき。ゆえに恭也は彼女の時と同じ対策を講じておいた。

貫を使って奥義の一つ虎切を通す。さらにそこに、

「最初の一合の時にも感じたが、お前の剣は妙に響く。体の内部に衝撃が入ってくる」

徹を仕込んでおいた。これなら斬れないくらいに硬かろうが、関係はない。

斬れないくらいで殺せない等と言っていたら、人斬り家業などやっていられない。

雷徹を放てればそれが一番いいのだが、あれは大きく回避する合間に出すには向いていない技だ。

よって恭也は、隙を突くための貫、長距離から繰り出せる奥義である虎切、そして効力を上げるための徹という、御神の技術の粋とも言えるこれら三つの並列使用に踏み切った。

より正確に言えば、そうせざるをえなかった。

「悔しいが、剣士としてはお前の方が文句なしに上だな。感服する。もう一度言うが、すさまじい技量だ」

「……こうでもしなければ、貴方には通じなさそうだったんでな」

そんな事をしなければならぬほど、シグナムは恭也にとって強敵、難敵なのだ。

お互いがお互いに対する警戒と敬意をまた一つ引き上げ、そして剣劇は再開される。

シグナムは炎の魔剣で美しくさえある連撃を見せ、恭也はそれらを躲しながら隙を突き、射程と速度に優れた技である『虎切』か『射抜』に『徹』を乗せ放つ。

一撃でも食らえば恭也の敗北はほぼ確定する。

綱渡りの勝負だ。

だが、それでも恭也は退かない。恐れがないわけでは決してないが、後ろには自分の命などよりも遙かに大切な存在がいるのだ。

御神の剣は守るために。

強靱な精神で恐怖をねじ伏せ、恭也は闇の中、炎と踊る。

フェイト・テスタロッサは迷っていた。

眼前で展開される、見たこともないレベルの近距離戦闘。そこに介入すべきか否かを。

妙な機構を有したデバイスを使う、先ほどの名乗りによるとシグナムと言うらしい女性。

剣撃の鋭さといい魔力の力強さといい、相当の実力者だ。詳しくはもちろんわからないが、魔導師ランクで言えば少なくともAAAよりは上に見える。つまり……現時点での自分では敵わないレベルだ。そして。

「おにいちゃん……」

なのはが心配そうに呟きながら見つめる、黒い衣服に身を包んだ男性……恭也と言うらしいなのはの兄。

彼に至っては、正直、何かの冗談だろうと言うのが本音だった。

魔法を使っている様子は一切ない。本人も魔導師ではないと言っていたし、それどころか魔導師がなんなのかすらわかってないようだった。

だと言うのに、優れた近接戦闘魔導師であるだろうシグナムをスピードで凌駕し、その刃を躲し続け、その上隙がないように見える彼女の連撃を時折それこそまるで魔法のように潜り抜け、反撃を重ねていく。

こんな人が、存在するのか。

まるで、ファンタジーだ。

夢を見ているような光景だった。

「フェイトちゃん……これって」

「……うん……なのはの兄さん、押してる」

ガキインと、また音が響く。それは恭也がシグナムに一刀を浴びせ

た音。どうやっているのかはわからないが、バリアジャケット越しても彼の斬撃は有効打となっっているらしい。それが積み重ねられたせいでだろう、シグナムの動きは徐々に鈍ってきている。その表情も心なしか険しい。

本当に信じられないが、一般人が高レベル魔導師を追い詰めているという光景が目の前で展開されていた。

「すごい……」

フェイトは思わずそう漏らす。

(すごい……すごい、綺麗だ)

自らも近接戦を行うからこそわかる、目の前の光景の美しさ。

剣舞と呼ぶにふさわしい、現実感さえ遠ざける魅惑の舞台。

しかし。

しかし、これは、現実だ。いくら信じられなくとも。

フェイトは気を入れ直す。

これは現実、であれば、冷静に今やるべきことを判断しなければならぬ。

状況は、恭也有利ではある。

だが、それはいつひっくり返るかわからないものだ。いかな恐ろしいまでの体捌きと剣の冴えを見せる彼とはいえ、それでも生身であることには変わらない。バリアジャケットがなければ、シグナムの剣に一度でもその身を捉えられればそれで勝負はついてしまう。

こんなことは戦っている彼が一番わかっているだろうが、余裕の戦いなどでは決していないのだ。むしろ、身を、心を削るような戦法だ。技術云々を抜きにしても、並の精神ではそもそも不可能な行為と言える。

だからこそ、戦える自分はずいぶん加勢に行くべきだ。

しかし、それには問題があった。

「……くっ」

彼の戦いが、あまりに危ういバランスの上に成り立っている事だ。

傍で見ているだけでも背に汗が浮かぶような苛烈なシグナムの剛撃を、バリアジャケット無しの生身でギリギリのところまで躲しすれす

れのところで潜ってそして反撃を重ねるといふあまりに危ういその戦闘に、自分が下手に介入して状況を刺激してしまえば、最悪それがきっかけで彼に傷を負わせかねない。そしてその傷は彼の命を奪いかねない。敵が非殺傷設定で魔法を行使する保証などないのだから。彼と同等の技量があれば間違いなく助けに入れるのだろうが、自分では、賭になってしまう。そしてベットされるのは自分の命ではなく、彼の命なのだ。

フェイトは歯噛みする。

遠距離射撃での援護も、彼の動きが速すぎて誤射しかねない。

打つ手が、ない。

加勢すべきなのに、できない。

本当にそうか？ なにかできるのでは？ すべきでは？

だけど、でも。

思考は堂々巡り。時間だけが過ぎていく。

フェイトは迷う。迷い続ける。何が最善かわからない。

そして、

「……レヴァンティン、カートリッジロードッ！」

響いたその声とともに、ついに状況が変化した。

シグナムと名乗る桃色の髪的女性は、叫んで後ろに大きく跳んだかと思うと、

「シュランゲフォルム！」

その手に持つデバイスの形を劇的に変化させた。

剣は今や、連結した刃からなる長い鞭のような形になっている。

まるで蛇のようだ、なのははそう思った。

「お兄ちゃん……」

刃の蛇が恭也に襲いかかる。四方八方自由自在に迫り来るそれなのはその視界の中、恭也は美しい体捌きで躲していく。

だが。

「っー」

なのはは息をのむ。恭也の腕に刃がかすつたのだ。鮮血が散る。

一瞬、恭也の動きが止まり、その表情がはつきり見えた。

果たして、それは。

「おにい、ちゃん……」

恐れでもなく苦しみでもなく、焦りでもなかった。
窮地に立たされてなお、それは。

——紛れもなく、決意。

戦い抜く、覚悟の表情だった。

なのはが今まで見たことのない、しかし今まで見たどんな顔よりも
精悍な。

それを見て、思う。

自分は、何をやっているんだろう。

疲れているから、傷ついているから、……兄よりきつと弱いから。
足を引つ張るだけだから。

だからこうして、ただ見ているだけなのか。

自惚れでもなんでもなく、妹である自分のためだけに死地に立つ兄
を、ただ見ているだけなのか。

そんな馬鹿なことがあっていいのだろうか。

なのはは、首を振った。

いいはず、ない。

「……なのは？」

「フェイトちゃん、ちよつと支えてて、くれないかな？」

「え？」

なのははそう言って、震える体に入れレイジングハートを握り
しめ、立ち上がった。フェイトは疑問の声を挙げながらも言われたと
おり、そんななのはに肩を貸し、支える。

「ありがとうフェイトちゃん。……レイジングハート、ごめんね、……
一緒にちよつと、無理してくれる？」

フェイトに礼を言うとなのはは、相棒にそう問いかけた。

『Be happy to, my master. I believe
you』

「ありがとう」

快諾してくれた相棒を、なのはは労るように撫でた。そして、

「なのは……恭也さんの援護は、その……」

「わかってる、フェイトちゃん。私じやあ足で纏いになるだけだよね。だから」

「だから……?」

「それ以外の方法で、私は私のやるべき事をやるの!」

構える。シグナムが突き破った天井……そこから見える空へ向けて。

「まさか!？」

「そう、結界を壊す……! そうすれば転送で逃げられるよね」

「……でも、それには」

「うん、強力な砲撃魔法を撃たなきゃだめ。だから……」

そしてなのはの想いを正確に汲み取り、レイジングハートは羽を広げた。大きな魔方陣がなのはの頭上に展開される。

「レイジングハート、カウントお願い!」

『all right! count……9……8……』

レイジングハートが、カウントを刻み始める。展開した魔方陣の周囲に魔力球が作り上げられる。

「くっ……」

「な、なのは……」

これから放とうとしているのは、なのはの持つ魔法の中で最大級の威力を持つもの。それだけに負担も最大級だ。

正直、今の体調ではかなりの無茶だと言うことはわかっている。自分にも、傷ついたレイジングハートにも。

でも。

それでも。

視線の先に、猛攻を躲し続ける兄の姿がある。

優しい兄。気高い兄。……愛しい、兄。

これ以上、傷つけさせるものか。

『……7……6……』

足がふらつく。倒れそうになる、が。

「ありがとう、フェイトちゃん」

フェイトが支えてくれているおかげで、立ち続ける事ができた。

「ごめん、なのは」

「え？」

「なのはは、傷ついた体でこんなに頑張ってるのに、私は何もできなくて……っ！」

そのフェイトは、震える声でそう言った。なのはは首を振る。

「ううん、フェイトちゃんがいてくれるから、こんな無茶ができるんだよ。ありがとう、フェイトちゃん」

「なのは……」

それは本心からの想いだ。信頼する友が傍らにいる。その心強さは確かに今、自分の力になっている。

『5……………4……………』

なのはは、フェイトと眼を合わせる。そしてどちらともなく強くうなずき、空を見据えた。

敵は恭也、アルフ、ユーノ相手に手一杯なのだろう。妨害の動きはないようだった。

『……………3……………2……………1』

なのははただレイジングハートを強く握りしめ、魔法に集中する。万が一何かが起きても大丈夫だ。隣にいる親友が、きつとなんとかしてくれる。

だから、

『……………0』

自分は、自分にできる精一杯を放つのみ。

(これが私の、全力全開！)

「スターライト……………ツブレイカアアアアアアアア!!」

まばゆい桜色の閃光が、夜空を切り裂いた。

「スターライト……………ツブレイカアアアアアアアア!!」

後ろにすさまじい気配を感じる。響く声に、恭也はなのはが何かをやったのだと理解した。

(あの体で無理をする……)

自分がいかに危機的な状況下にあるかが、やはり恭也が気にかけるのは自らの大切な、守るべき者——なのはの事だ。こういう思考回路はもう一生直らないものだろうし、直す気もない。

「くっ！」

どうやら敵にとって現在の状況はあまり好ましくないらしい。恭也に向かい多方向から刃を振るうシグナムは目に見えて苦悶の表情を浮かべていた。動揺からか、奔る刃も徐々に速く強く、そして隙が大きくなっていく。

いきなり質量保存則に喧嘩を売るように剣から蛇腹のような連結刃を展開し、運動量保存則に戦争を仕掛けるようにそれを自在に操られた時はさすがにどうしたものかと思ったが、これなら。

恭也は近づいてくる勝利を、冷静に待ち続ける。

今とはとにかく、躲す、躲す、躲す。

連結刃を相手取るようになってから、まだ恭也は一度も反撃していない。正確にはできていないのだが。

だがそれもあと少し、もう少しだ。

恭也は待つ。相手の焦りによる、決定的な隙を。

今までの感触からして、後一撃さえ入れられれば勝負は傾く。それがわかっているからこそ、相手も奥の手を出してきたのだろう。

終わりは、近い。

だが決して油断はせず、浮き足立ちもしなければ勇み足も踏まない。ただ徹底して最適な動きをするのみ。それが御神の剣士だ。

やがて、その時は訪れた。

大きくたわんだ連結刃が唸りをあげて襲い来る。しかしそれは、
「……しまっ！」

放った敵も自覚するくらい、あまりに不用意な一撃だった。躲しやすく、隙が大きすぎた。

そして恭也は、ここで、満を持して。

自らの奥の手を、放った。

御神流奥義 神速

世界がモノクロに染まる。音が遠のき、空気が一気に重くなる。ま

るでやわらかいゼリーの中にいるような感覚。

その中を、恭也は走る。体はゆつくりとしか動かないがそれでもできる限りの速度を出し、シグナムの後ろに回り込んだ。シグナムには気づかれていない、いや、彼女には気づけないのだ。

この神速の世界の中では、おなじく神速を使った者にしか動きを知覚されることはない。

一瞬にも満たない、そんな世界。

そして、やがてそこに色が戻る。

「っー」

それは強者の勘によるものか、もしくは僅かに漏れた殺気を感じてか、シグナムは恭也が一瞬にして自らの後ろへ動いたということを知ったらしく、前に飛び退こうとする。

だが。

さすがに避けきれんだろう。

思いながら、完璧なタイミングで、恭也は刀を握った腕を、

「……なっ？」

振るおうとした。

油断をしていたわけでは決してない。常に警戒心は持っていた。

しかし。

さすがに恭也にも、自分の胸から腕が生えてくるなどという状況は、予測できなかつた。

それは百戦錬磨のシグナムにとっても、まさに怒濤の展開と言えた。

結界を打ち破る強烈な一撃の発動を許してしまい、その焦りから失敗とすら言える攻撃を放ってしまった。そして反撃を警戒した瞬間、目の前にいたはずの敵が消えた。

刹那、背後に幽かな殺気。直感的に前へ飛び退いたものの、そのときにはすでに敗北を覚悟していた。

(後ろに居るのがタカマチキョウヤなら、しくじるハズはない)

敵に対する信頼というのも妙な話だが、それほどの相手だったの

だ。シグナムは自分の負けを確信していた。
なのに。

「……なっ?」

覚悟していた衝撃が、こない。代わりに後ろから来たのは、妙な声。
とりあえず着地し、振り向いて、やっと事態を理解した。

「……シヤマルか」

自分は仲間に救われたのだ。

恭也の胸にはシヤマルの腕が。そして。

シヤマルの手の中には、——恭也のリンカーコアがあつた。

さすがに狙ってこのタイミングで実行したわけではないだろう。
自分が追い切れなかった恭也の動きを、戦闘向きでないシヤマルに追
えたとも思えない。

そもそも戦いの様子を、きつとシヤマルは見っていない。クラー
ル
ヴィントと闇の書の導きに従い、狙いを定めたのだろう。

おそらくは、先ほどの瞬間移動が引き金だ。一体どうやったのかは
知らないが、生身であんなことをすれば体への負担は相当なもの
はずだ。終えた瞬間、リンカーコアにシヤマルが手をのばせるほど
体が疲弊したのだろう。

ここまで一瞬で考え、そしてシグナムはちらりと視線をずらす。そ
の先には、呆気にとられたような顔で固まる二人の少女。

その内の一人、もともとの標的である砲撃を放った少女が狙われ
なかったのは、傍らに疲弊も負傷もしていない仲間がいたからか。

そう結論づけ、再びシグナムは恭也へ視線を戻した。恭也のリン
カーコアはシヤマルの手の中その輝きを徐々に鈍らせていく。魔力
が抜かれているのだ。

さて、どうするか。

今ならば、隙だらけだ。排除できる。

魔力を抜き取ったとしても、しかしこの男は今まで魔法なしで戦っ
ていたのだ。リンカーコアから直接魔力を吸われた人間が直後にそ
う動けるものとは思えないが、この男に限っては何をするかかわらな
い。

警戒するに越したことはない。今の内に排除を……。

そう思いつつ立ち上がり、通常の直刃剣——シユベルトフォルムに戻したレヴァンティンを握り直す。が、

「お兄ちゃんっ！」

「はああああああつ！」

我に返ったのか、少女二人、一方はよろめくように、もう一方は素早くこちらへ向かってきた。

こちらの狙い——タカマチキョウヤの排除を察しその阻止にきたか、それとも魔力蒐集を止めるつもりか。あるいは、両方だろう。だが、

「させんー！」

シグナムとて、ダメージは体に残っているもののまだ戦える。これではあの男の排除にまではこぎ着けないかもしれないが、少なくともシヤマルが魔力を蒐集し終わるまでの時間くらいは稼げるだろう。

鎌のような武器を手に飛び込んでくる金髪の少女を、構えた愛剣で迎撃せんとする。

まさにその時だった。

「あああああああああああああああああああああああああああああああー！」

遠くから悲鳴が響き渡った。それは、シグナムが聞き違えるはずもない者の声。

「シヤマルっ!?!」

仲間の一人、魔力蒐集作業中であるはずのシヤマルのものだった。

なにが起こったのかと、シグナムは思わず目の前に敵がいるのにも関わらず、後ろへ視線を向ける。すると、そこには、

「……なに!?!」

「……っ!?!」

信じがたい光景が広がっていた。それは金髪少女にとっても同じなのか、彼女の息をのむ声が聞こえた。

鮮血が滴り落ちている。

「なにを……して……いるのかしらんが……!」

リンカーコアから魔力を抜かれている最中のはずの、黒衣の男、タカマチキヨウヤが、

「……やめて……もらおう……!」

手にした二刀の内、左に握った一振りをシャルルの腕に突き刺していた。

そしてさらに、もう一振りをがくがくと激しく震える右腕で上段に構え、

「おにい……ちゃん……?」

「きよ、恭也……さん?」

「なのは……フェイト………みないほうが、……いい」
そう言った。

(——斬り落とす気だ)

戦慄と共に、シグナムは悟った。

あの男ならば、やりかねない。腕にもバリアジャケットの庇護はある、あるがしかし、あの男ならば。どうやったかは知らないが、その証拠に一刀はすでに腕に刺さっているのだ。このままいけば本当に、容赦なくシャルルの腕は斬り落とされる。

実際に刃を交えて嫌と言うほどそれがわかっているからこそ、シグナムは、

『シャルル! 腕を戻せ! 早く!』

『くううううっ! あああああああっ!!』

シャルルへ念話で必死に指示を飛ばした。すると、刃が振るわれる瞬間、まさに間一髪のタイミングで、

『はあっはあっ……』

「に、がした、か……」

もがいた腕は自らを貫く刃からなんとか逃れ、恭也の胸から消え去った。

「なんとという奴だ……」

それを確認しつつそう呟き、シグナムは大きく後方へ跳び退った。こんなことになった以上、ここに留まり続けるのは得策ではない。

『ザフィーラ、シャルル、撤退するぞ!』

窓から空へ全速力で離脱にかかる。同時に仲間へ撤退を呼びかけた。

『っ、了解した!』

『わかつ、たわ……』

金髪の少女はどうやら追ってはこないようだった。自分の仲間の状態確認を優先したか。

左方に目をやれば緑の光、右方に目をやれば蒼の光。その二つにも追っ手はついていなかった。目を凝らせばザフィーラがヴィータを背負っているのが見えた。

(一応、全員が離脱できたか)

胸をなで下ろす。

しかし、とはいえ油断はできない。結界が破られた以上、管理局からロックされる可能性がある。できるだけ迅速に離れなければ。

それに。

「あの様子では、蒐集は完全には終わっていないなかっただろうな……」

どれくらい集められたかはわからないが、当初の標的とも違うという事もあるのだ、予定よりはきつとかなり少ないだろう。

加えてヴィータは気絶させられ、ザフィーラも二人相手だったのだ、無傷ではあるまい。自分も深手は負ってないが、負傷していないとは到底言えない。シャマルに至っては言うまでもない。

総合的に見て、失敗と言ってもいい有様だった。

(すみません、主はやて)

心の中、シグナムは愛する主、八神はやてへ頭を下げた。そんな事を主が望まないであろうことはわかっているし、そもそも魔導書の蒐集も主の意に背いたものだ。そんなことはわかっている。いたが、それでも自分の不甲斐なさを謝らずには居られなかった。

「タカマチ、キョウヤ……」

胸に刻むように、その名を口にする。自分も含めた仲間四人の内三人がああ男に手傷を負わされた。

魔導師ですらないという、ああ男に。

まるで悪夢のようだった。

「お兄ちゃん、しつかりして！ お兄ちゃん!!」

『ユーノ、すぐこっちに！ アルフ、管理局に連絡して医療班を手配して！ 最優先でお願い!』

フエイトは仲間二人に指示を出す時、

「おにいちゃん!! おにいちゃんっ!!」

「なのは……落ち着いて。大丈夫、大丈夫だから……」

シグナムが去った後、崩れるように倒れ伏した恭也の隣で半狂乱と なっているなのはをなだめる。だが。

(大丈夫、なのだろうか)

フエイトも内心、自らの言葉が信じられないでいた。

戦闘による身体負荷は相当なものだったろう。一体どうやったのか全くわからないが最後に行った瞬間移動なんて、どう考えても体に負担がかからないはずがない。

まさか捨て身の技だったのでは……、そんな嫌な考えが頭をよぎる。

その上、リンカーコアから魔力を抜かれ、さらにその状態で無理矢理動き、敵の腕を串刺しにし、斬り落とそうとするという無茶まで行ったのだ。

果たして大丈夫なのか、あまりに行動が規格外すぎて、判断が、つかない。

なのはは床に膝をつき、仰向けに倒れている恭也の腕にしがみついて彼へ必死に声をかけている。

フエイトも隣に座り込み、恭也の手を握った。

それはとても硬い手だったが、しかし確かに温かで……暖かだった。

この人は、……この人は生きるべき人だ。

フエイトは、強くそう思った。

この人は、管理局の人間ではない。ましてや魔導師ですらない。だ というのに、ただ妹のために、ただ妹を守るために、その身一つで戦ったのだ。敵の一撃が自分の命を奪いかねないものであることは百も

承知だっただろうに、それでも一切の躊躇をしなかった。

”なのをは頼む”

”それから君も気をつけてな。そっちに何かあればすぐに俺が行くから、無茶はするな”

”なのには……フェイト………みないほうが、……いい”

自分が一番危険で、負担がかかっている状況であるのにも関わらず、それでも常になのはを、……どころか、思い入れなんてないはずの自分のことまで気遣ってくれていた。

こんな人が、こんなところで終わるなんてことがもしあったら、そんな運命は絶対に間違っている。

「フェイト……その人の治療だね!」

「フェイト、管理局との連絡はついたよ!　すぐに医療班を送ってきてくれるし、あっちの医務施設の手配もしてくれてる!」

「ユーノお願い!　ありがとうアルフ!」

やがてやってきた二人にそう声をかけながら、フェイトは震えていた。

大切な友達の大切な人が倒れてしまった恐怖と、他でもない自分自身への怒りによって。

何も、できなかった。

結局自分は何もできなかった。

なんて、情けない。なんて弱いんだろう。

なのはをなだめ励まし、ユーノの治療を見ながら、そっと、しかし強く拳を握りしめる。

もっと、もっと。

もっと、強くなりたい。

大切な人を、優しい人を、この手で守れるように。

フェイトは心の底から、力を欲した。

彼女のデバイス、バルディッシュはそんな主の思いを汲み取るように、まるで返事をするかのように、コアを一瞬輝かせた。

第2話 お兄ちゃんの方がよっぽどファンタジーなの

「以上が、襲撃を受けた高町なのは、その場に駆けつけたフェイト・テスタロッサ、ユーノ・スクライア、使い魔アルフの証言と、解析班から回ってきたデータをまとめたものになります」

息子であり部下でもあるクロノ・ハラウンから、今回発生した事態についての報告を受け、アースラ艦長リンディ・ハラウンは、「……うんありがとう、わかったわ。信じられないことって一周回ると、逆に全部簡単に信じなくなるものなのね、母さん勉強になったわ」天井を仰ぎながら、おどけたようにそう言った。

「情けない事を言わないでください、艦長。……まあ気持ちはわかりますが」

そんな母であり上司でもあるリンディを軽く叱りつけるクロノはしかし、目の前のリンディと同じような表情をしている。

彼もまた、信じられないのだ、自分が話した内容が。

しかし、疑っているかと言えばそういうわけでもない。証言者は皆、信用に足る人物である。

だから信じたい、信じるべきだが、しかしその内容があまりにも。

「第一級搜索指定のされているロストログア、闇の書。それが作りだしたプログラムである守護騎士たちが、闇の書完成のため、魔力を求めて様々な世界で魔導師たちを襲い、リンカーコアを食っている……なんて話で管理局はにわか騒がしかった」

「そして、その襲撃の手が強大な魔力の保持者であるのはに及んだ……由々しき事態ですが、これ自体はありえない話じゃありません」「そうね、そうなのよね」

言葉を交わす二人がいるのは、アースラ内のブリーフィングルームだった。そこに設置された大型のスクリーンに、闇の書についての資料が表示される。

闇の書、リンディとクロノにとっては、因縁浅からぬ存在である。

だが、今二人が俎上にあげているのは、それ自体ではなく。

「信じられないのは……その襲撃者たちを破ったという人物、ね」

「はい……」

襲撃者、守護騎士。

騎士とは、ベルカ式の魔法を使う魔導師の中でも特に実力が高い者に授けられる称号だ。

事実、なのはを襲ったという守護騎士は説得・抗戦するなのはを力尽くで黙らせた。その後新たに現れたという守護騎士、その内の一人もフェイトが言うには、現時点のフェイトよりも実力は上である、らしい。

それはもう、かなりの戦闘能力を有しているということと同義だ。

なのはもフェイトもまだ子供ながらにその実力・才能は非常に高く、管理局の中でも一握りの逸材なのだから。

しかし、

「なのはさんを破った守護騎士も、フェイトさんよりも強いらしい守護騎士も、なのはさん、フェイトさん二人の証言によれば……魔法を知らない一般人であるなのはさんのお兄さん、高町恭也さんによって撃破、ないしその寸前まで追い詰められた、ね」
その守護騎士達を魔法もなしに、退けた者がいると言う。

証言者が証言者でなかったら、まともに取り合う気にもならない戯れ言だ。

「実はその高町恭也さんは凄腕の魔導師でした、っていうのはどうかしら？」

「なのはとフェイトの証言では、魔法を使った様子はなかったそうですよ」

「……わかってるわよ、言ってみただけ」

そうであつたらまだ信じられるくらいの信じられない事であつた。だが、現実はまだ本当に信じられないくらいの信じられない事であるらしい。

「とにかくまあ、この事についてはこれ以上話しててもしょうがないわね」

「そうですね……」

「その高町恭也さん本人に後で話を伺わせてもらいましょう。……それです」

釈然としないが他に話し合わなければならぬ事も多々あるため、リンデイはそう言つて表情を変え話の方向を切り替える。

「その後の恭也さんの容態は？」

「最初の報告から特に変化はありません。大きな負傷はなし。身体疲労がずいぶん溜まっていたらしいですが、それも細かい傷とともに概ね治療・治療は済んでいるとのこと。……そして、闇の書の蒐集を食らったという彼のリンカーコアですが、それも順調に回復してきているそうです。総合的に言えば、早期完治の見込みは十分。意識もすぐに戻るだろうと」

「そう……」

ふーつ、と、リンデイは大きく息をつく。なにはともあれ、協力者であり被害者でもある彼の身に大事がないのは喜ばしいことだ。

「よかつたわ……。ほんとに」

「ええ、そうですね」

二人は、彼が運ばれてきたときの、傍らに連れ添っていたなのはとフェイトの悲壮に染まった表情を思い出し、再度安堵の息をつく。

「なのはさんとフェイトさんは？」

「なのはは……お兄さんの傍からどうしても離れたくないとのこと、お兄さんの病室で一緒に治療を受け、それが終わった後もそのままその場に残っています。フェイトはさつきまで僕と事件についての細かい報告をし合っていました……、多分今はなのはと同じく、なのはのお兄さんの所へ」

「そう……。でもまさか、こんな形でフェイトさんとなのはさんが再会することになるとはね……」

「ですね……。あの、恭也さんには」

何うようにそう言うクロノに、リンデイは言い切る。

「……お話ししましょう、すべてを。ここまで関わらせてしまったんだもの、誤魔化すわけにはいかないわ」

「……そうですね」

「それじゃ、そういうことでお願いね。次に、本局への報告についてだけど——」

「はい、どうぞ」

遠慮がちに響いたノックの音に、なのはは返事を返し入室を促した。

「失礼……します」

「あ、フェイトちゃん！」

ドアが開き、入ってきたのは金髪の少女——フェイトだった。なのはは、フェイトに言う。

「フェイトちゃん、さっきお医者さんが言ってたんだけど、お兄ちゃん、大丈夫だったー！」

「ほんとう!?!」

「うんっ、すぐに意識も戻るだろうし、体の傷もだいたい治ったってっ」

「……なのは」

「リンカーコアも、回復し始めているから心配ない、って……っ！」

その声は、兄の状態を語る声は、涙混じりだ。

「よかった………よかったよ………っ！」

つぶやくなのはの両手は、恭也の右手に添えられている。なのははそうすることで確かめているのだ、兄に温度があることを。

兄に命があることを。

兄が倒れてから、医者診断結果を聞くまで生きた心地がしなかった。

頭はくらくらするし、足下はぐらぐらした。それは戦闘による負傷や疲労とは違う原因によるものだ。

「お兄ちゃん……」

愛する人を失うかもしれないと言う恐怖。

なのはが今まで一度も味わったことのないそれは、今まで生きてき

た中で一番の痛みと軋みをなのはの胸に与えた。

それは想像を絶する苦しみで、そして、

「大丈夫だよ、なのは」

「……うん」

「お医者さんがそう言ってくれたなら……きつとすぐに目を覚ましてくれるよ」

「……うん、そうだよね」

未だ幽かに続いている。もしかしたら、もしかしたら。

そんな思いがどうしても止まない。

なのはは、恭也の顔を見つめる。フェイトはそんななのはの隣、医務室特有の味けのない椅子に腰掛けた。キィ、と、少し耳障りな高い音、軋みの音が鳴った。

少しの沈黙の後、なのはは言う。

「……実はね、お兄ちゃんの寝顔を見たのって、これが初めてかもしれないんだ」

「え？」

どういうことか、意味をわかりかねたのだろう疑問の声をあげるフェイト。なのはは少し微笑んで、語りだす。

「お兄ちゃんって、起きていても……眠っていても、人が近づくとすぐにわかるんだって。修行の成果、って言った。……私、怖いことがあった日は、たまにお兄ちゃんのお布団に潜り込みに行くんだけど、そしたら絶対お兄ちゃんは眼をさますの。私がお兄ちゃんの部屋のドアの前に行くと、どうした、なのは、って。入って来ていいぞ、って。ノックしなくても声かけなくても、私だってわかって、そう言ってくれるの。……いつ行ってもそうだからずっと起きてるってわけじゃないんだと思うし」

怖い映画を見た夜、怖い夢を見た夜、不安で眠れない夜。

そんな時はいつも兄の部屋に行き、兄の傍で眠った。兄の傍で眠れなかった日なんてなかった。兄の体に抱きついて、優しく頭を撫でられながら眼をつむれば、すぐに穏やかな眠りが訪れた。

なのはにとって兄の傍は、世界で一番安心できる場所だ。

「朝もお兄ちゃんの方が絶対に先に起きてるし……だから本当、お兄ちゃんが眠っているのを見るのって、これが初めてかもしれない」

「そ……っか」

「……うん。お兄ちゃん、こんな風に眠るんだね」

眼を閉じ、静かに寝息を立てる兄の顔は、——穏やかだった。

なのはの兄は、時折優しく微笑むがそれ以外はいつも仏頂面か真顔をしている。

今、この寝顔を見て気づいたことだが、それは自然な表情なのではなく常に少し気を張っていたという事の表れだったのだろう。

兄は高町家において、少なくともなのはにとっては父親の代わりでもあった。

父は、なのはが生まれる前に死んでしまった。だから顔は写真でしか知らない。もちろん、母や兄、姉の話聞いて、会うことはなかった人とは言え、慕ってはいる。

だが、やはり実質的な父親役は、兄だったのだ。

さらに言えば、母は仕事で非常に忙しかったため、兄はある意味で母親のような役目もこなしていた。

姉や姉のような人たちも身近にいてくれたが、それでも一番なのはを包んでくれたのは兄だ。四六時中傍にいてくれたわけではもちろんない。だがそれでも兄は、なのはが寂しい時には一番近くで一番深く愛してくれた。

だから、高町なのはにとって高町恭也は、敬愛すべき父でもあり、寵愛をくれる母でもある、何より最愛の兄であったのだ。

それは逆に言えば、恭也は父が死に、なのはが生まれた時から、今のなのとはほとんど変わらない歳の頃から、そんな重圧を背負ってきたということだ。

彼の普段の表情は、生来の気質もあるだろうがやはりそういった事と無関係ではないのだろう。

そんな事を、なのはは眠る兄の顔を見て思う。

どれだけ自分が兄に頼り切っていたのかを、頼る一方だったのかを、思い知る。

「フェイトちゃん……私ね、私……」

だから、なのはは言う。否、

「私、強くなる……。お兄ちゃんに守られてばかりじゃなくって、いつかお兄ちゃんを守れるくらい、強くなる……」

誓う。

悲しみと悔しさに揺れながらも、しかし確かな声で、誓う。

「いつかお兄ちゃんから、頼ってもらえるくらいに……。強くなるよ……」

「なのは……」

「もう弱いのは嫌だよ……。私が弱いせいで、大好きな人が辛い思いをするのは、もう嫌だ……」

うつむいたなのはの瞳から、ぽろぽろと大粒の涙がこぼれる。それはなのはの両手と、それに包まれた恭也の手の上に落ちた。

「弱いのは、私も一緒だよ」

そんななのはにそう声をかけながら、フェイトはなのはの手の上——恭也の手の上に、自らの手を重ねた。

「私も……。強くなる。守るために、守れるように。……。一緒に、強くなるろう」

「……。うん。うん、うん……」

二人の少女は、誓い合う。力をつけると、その胸に誓う。

それは、小さな願いで、しかし切実な想いだ。

そんな彼女達へ、

「……。どう……。した、なのは」

「……。えっ」

今はその背を押すように、温もりが舞い降りる。

聞こえた声に、なのはは弾かれるように顔をあげる。そこには、微笑みがあった。

「何か、悲しい事でも、……。あつたか……？」

そしてすぐに、目元に硬く、しかし暖かい感触。

「おにい、ちゃん……」

恭也が、その身を起こし、左の手で労るようになのはの涙を拭って

いた。

「おにいちゃんっ!」

「ああ、兄はここにいるぞ」

胸に飛び込んだなのは恭也は優しく抱き留め、その頭を撫でる。

「よかった……。よかったね……。なのは」

そんな二人を、フェイトは暖かく、そして少しうらやましそうに見つめていた。

「おおよそんな所なのですが」

「……」

「わかっていただけたでしょうか?……というか、信じていただけただけででしょうか?」

「……なかなか信じられるものではありませんが、一周回って信じるしかない気がしてきましたね」

(そもそも、実物を見たどころか、戦うハメにもなったしな)

医務室のベッドの上、そう思いながら目の前はどこか自身の義母に似た雰囲気を持つ女性——リンディ・ハラオウンの言葉に、恭也は曖昧にうなずきつつ返答した。

そんな恭也の返答に、リンディは隣にいる彼女の息子で部下だというクロノ・ハラオウンと一瞬視線を交わし、苦笑を浮かべる。

「……それにしてもずいぶんと無茶をしていたんだな、なのは。兄としては非常に心配だぞ」

「あ、あははは……」

魔法や管理局、次元世界の存在。それらの説明に加え、妹であるなのはの関わった事件についての顛末を聞いた恭也は、隣でごまかすように笑ったなのはに少し厳しい視線を浴びせた。が、

「……だが、心配すると言うのは俺の勝手だ。その……PT事件だったか、それについて、なのはが自分で決め、その意志を貫いたと言うのなら何も言うことはない」

「あ……」

「よく頑張ったな、なのは」

結局は、優しく頭を撫でた。

こういう所が甘いと言われるのだが、やはり恭也には直せそうにない。

それに、語った言葉にも嘘はない。家族としては心配だとは言え、なのはの行い自体はきつと褒められるべきものだと思はれる。

なのはは頬を染め、ただされるがままになっている。

「それに、いい友達もできたようだしな。ビデオメールの交換相手とそんな風に知り合っていたとは思わなかったが……フェイト」

「え、あ、は、はい」

突然呼ばれて驚いたのか、金髪の少女——フェイトはすこし慌てたように返事をした。

「頑固でねぼすけな妹だが、よろしく頼む」

「お、おにーちゃん、目が回るよー」

一転して乱暴に頭を撫でられるというよりは回されたなのはは、恭也にそう文句を言う。

「い、いえ、そんな、私の方こそ、と言いますか、……今の私がいるのは、なのはのお陰ですから」

「フェイトちゃん……」

「……その……また会えて嬉しいよ、なのは」

「……うん！ 私も、私もだよ！フェイトちゃん！」

こんな形になってしまったとは言え、半年ぶりの再会。

なのはがどれだけフェイトと会うのを楽しみにしていたのかを普段の家での様子でよく知っていた恭也は、そんな二人を微笑ましく見守る。

リンデイもクロノも同じ気持ちなのか、しばらくは恭也とともに二人の様子を見ていたが、

「あー、なのは、フェイト、そろそろいいか？ 話さなきゃいけない事がまだあるんだ」

「ごめんなさいね」

聞けば二人ともそれなりの立場にいるらしく、さすがに忙しい身で

あるためか、そう言って話の軌道を修正した。

「あ、はい、すみません……」

「ごめんなさい、はい」

「いや、こちらこそ悪いな。それで、さっきまでの事を踏まえて聞いて頂きたいのですが、今回の事件についてお話しします」

クロノはそう前置きして、小型のパソコンのようなものを操作し恭也の前に投影型のスクリーンを展開すると、そこに資料らしき映像を映し出した。

そして、説明を開始する。それは闇の書、守護騎士、なのはが狙われた理由、そして。

「つまり、恭也さんの胸から出てきたという腕……おそらくは守護騎士の腕ですが、それが恭也さんにしたのは、恭也さんの魔力の核……リンカーコアからの魔力抽出ということになります」

「なるほどな……」

恭也の身に起こったことについてだ。

「ですがご安心ください。リンカーコアの魔力はいずれ戻ります。それに本来は限界まで抜かれるところを、恭也さんはその……途中で抵抗されたようですし、損失は半分程度で済んでいるみたいです。完全回復までそう時間はかかりませんよ」

「あの……クロノ」

「ん、なんだ？ フェイト」

「恭也さんのリンカーコアが狙われたのって……やっぱり」

「お兄ちゃんも、いっぱい魔力を持ってたってこと？」

フェイト、なのはの問いにクロノは恭也を見つつ答える。

「ああ、その通りだ。やはり兄妹だからかな。治療班からのデータによれば恭也さんのリンカーコアが持つ魔力は魔導師平均を大きく上回っています。なのはには一歩及ばないですけど、まあそれはなのはがおかしいだけですから」

「そうか……、ふむ」

「お、おかしいって……。……。？ お兄ちゃん？ どうしたの？」

微妙な反応を返した兄が気になったのか、声をかけるのは。恭也

は答える。

「いや、なくなつた物がちやんと元に戻るといふのは喜ばしいことだし、その、魔力つてものをたくさん持つているのもいいことなのかもしれないが……正直、全く実感がなくてな。そんな物が自分の身にあつたという事自体がそもそも驚きだ。ファンタジーの世界に一步、足を踏み入れた感覚だな」

「……」

「……」

「……」

「……」

恭也としては思ったことをそのまま言っただけなのだが、なのは・フェイト・リンデイ・クロノの四人全員から返ってきたのは、なんとも言えない反応。

失言だつたらうか。

「なのは、どうした？」

とりあえず恭也としては一番聞きやすい妹に伺つてみると、

「私たちからしたら、お兄ちゃんの方がよっぽどファンタジーなの」

そんな答えが返ってきた。

「……なぜ？」

恭也としては釈然としないので聞き返すも、

「魔法もなしに高レベル魔導師である騎士と渡り合う人物なんて、僕たちからしたらありえないんですよ」

「少なくとも私の知る限りでは、一般人が単身で高レベル魔導師を撃破、ないしその寸前まで追い詰めたなんて記録はどこにもありませんわ」

「生身で人があんな動きをするなんて信じられません……。最後の瞬間移動なんてある意味で魔法以上のものでしたし……」

残る三者からそんな反応が返ってきた。リンデイはさらに言葉を続ける。

「今度はこちらからお聞きしたいのですが……。あなたは何者なんでしょうか？　本当に魔導師ではない？」

「お兄ちゃん本当に人間なんだよね？」

「妹よ、実の兄に向かつてなんたる言いぐさだ……」

確かに普段周りから人間やめちやつてるとは言われている恭也ではあるが、実の妹から言われるとさすがに少し傷つく。

「ご、ごめんなさい……。でもお兄ちゃんがあんなに、ていうか、あそこまで強いなんて知らなくて……」

「……まあいい。質問に答えますが、俺は魔導師ではありません。そもそも今の今まで魔導師というものを知りませんでしたし、少なくとも魔導師としての訓練も受けていない。俺が何者かと言えば……御神の剣士です」

「ミカミノケンシ？」

聞き覚えのない言葉に疑問をあげたクロノには、なのはが答えた。

「お兄ちゃんは御神流っていう剣術の師範代さんなんです」

「剣術、ですか。しかしその若さで師範代とは……」

少し驚いたのか、リンディはそう言ってまじまじと恭也を見る。

恭也は現在二十歳。確かに師範代となるには若いと言えよう。そこから辺には複雑な事情があるのだが。

「まあ色々あります。身分を正確に言えば、永全不動八門一派・御神真刀流小太刀二刀術師範代、高町恭也。流派の通称が御神流と言うわけです」

「なるほど……。と言うことは、あなたの強さはその御神流の剣士として鍛えあげられたもの、と言うことですか」

「そうなりますね」

「そう、ですか……。しかし……」

リンディは答えを聞き、だが未だ少し納得がいかないようだ。すると今度はクロノが尋ねてくる。

「あなたの世界の剣士と言うのは、そこまで強いものではなかったはずでは？ いかな熟練者と言えど、質量兵器……銃などを持った者ですら、相手にして戦えるような力はないはず……」

「ふむ……。俺の流派、御神流は少し特殊ですね。積み上げた研鑽と技によって、非常に実際的な実力を得ているのです。完成された御

神の剣士は、銃火器を持った者が100人いても仕留められるかどうかと言うレベルになります。……俺は出来損ないなので、そこまでの力はありませんが」

「で、出来損ない、ですか？ 恭也さんが？」

実際に恭也の戦いぶりをその目で見たフェイトが疑問の声をあげる。

「ああ。師範代を名乗ってはいるが……俺は、過去に自分のミスで右膝に古傷を、爆弾を抱えている。だからあまり無茶はきかんし、そんなものがある限り、俺はずっと御神の剣士としては出来損ない、欠陥品だ」

「そ、そんな……」

フェイトは納得がいかない表情だった。あれだけの剣武を、剣舞をみせた人が剣士として完成していなく、また完成することもないなんて。そんな考えがありありと浮かんでいた。恭也は苦笑する。

「……その話が本当だとして」

そこにクロノが割ってはいる。

「完成したその……御神の剣士が、銃火器を持った者100人を相手にできる実力を持っていたとして、恭也さんがそれに近い実力を持っていたとしても……、しかし」

「疑問がありますか？」

「……ええ、失礼ながら。たとえそれだけの力があっても、騎士を凌駕しているかと言えば疑問なのです」

「ふむ……」

そうだろうな。恭也としてはそんな風に言われる事はある程度予想済みだったので特に何も思わず、それについて自分の考えを語りうらと思っただけだが、

「むー……」

それより先に妹からうめき声。長年の付き合いである恭也にはわかるが、……これは結構機嫌を損ねている。

「な、なのは？」

にらまれ、すこしバツの悪そうな声をあげたクロノになのは言

う。

「クロノくんはお兄ちゃんが強いのが、守護騎士さん達に勝てるって
いうのがそんなに信じられないの？ お兄ちゃんをそんなに信じた
くないの？ お兄ちゃんじゃどうやっても守護騎士さんたちには勝
てないはずだって言いたいの？」

「あ、い、いやそう言うわけじゃないんだ！ ただ、その……」

「なのは、落ち着け。いいんだ、クロノさんの言うことは正しい。それ
に、クロノさんは何も意地悪でああ言ってるわけじゃない、言わざる
を得ないんだよ、立場的にな」

恭也はなだめるようになのはの頭をぽんぽん、と柔らかく二度叩
く。

「……そう言っていたけると助かります」

「いえ。そちらとしても、確かな証拠が欲しいのだろうということ
わかりますから」

「お兄ちゃんどういうこと？」

なのはの声にはリンディが応えた。

「私たちの都合で悪いんだけど……、今のままではさすがに本局に今
回の件について報告ができないのよ。……私たちは、証言者のなのは
さんやフェイトさん、ユーノくんにアルフさんをよく知っているか
ら、今回の件についても根本的には疑いはしないのよ。それはもちろ
ん、申し訳ないことに信じられない気持ちがあるのは否定できないけ
ど、結局は全部信じるつもりでいる。……でも、本局の人たちは違う
わ」

「全員が直接的に証言者のなのは達を知っているわけじゃないから、
この件についての報告は、今のままではある程度疑いの目で見られて
しまうだろう。あまりに僕たち魔導師にとっては、信じがたい事だか
らね」

「ごめんなさいね、わかってくれるかしら、なのはさん」

「あ、はい……」

二人の言葉に、なのははうなずく。リンディは続けた。

「そういうわけで私たちとしては、証言者を知らない本局の人たちに

生身で騎士を凌駕する人物が実在すると信じてもらうための、確かな証拠、もしくは論拠がほしいのです。ですから、なにか恭也さんにお考えがあれば聞かせていただきたいのですが……」

「わかりました、構いませんよ。……ただ」

「ただ？」

「いえ……」

どう言ったものか。とりあえず恭也は語り出す。

「まず、これだけは言っておきたいのですが……、戦闘者として見たとき、俺はあの赤い少女と長い髪の女性……守護騎士の二人には本来、力は及びません。あの二人と俺の間には戦闘能力的に決定的な差がある。はつきり言えば、俺はあの二人よりも確実に弱い」

「え？」

「でも……」

そんなはずが、それならなぜ、そう言うかのようになのはとフェイトが恭也を見やる。

「そう。なのはやフェイトの見た通り、しかし俺はあの二人と渡り合えた」

赤い少女は無力化できたし、シグナムと言うらしい女性とも互角以上の戦闘を繰り広げることができた。

「つまり、それにはきちんとした理由があります。……ただ、これは口で言ってもあまり理解されないというか、信憑性が薄いかもしれません。ここで言っても仕方のない事かと思えます。ですのぞ」

恭也はいったん言葉を切り、リンディとクロノを見、そして言った。「もしよろしければ、模擬戦でもやらせて頂ければと思います。実際に俺が魔導師と戦う所を映像として記録できれば、その……本局？でしたか、そちらの方も認めてくださるでしょう」

『準備はよろしいでしょうか？』

スピーカーらしきものから聞こえた、オペレーターでエイミイと言う名の女性の声に、恭也はうなずいて返答した。

『フェイトちゃんもいい?』

「はい、大丈夫です」

恭也の格好は、守護騎士と戦ったときと同様のものだ。違う服も借りられたが、これには飛針や鋼糸を仕込んであるので、恭也としては戦うというのならこれでいきたい。

対するフェイトは黒のボディスーツに、スカートとマント——バリアジャケットと言うものらしい、彼女の魔導師としての戦闘服姿だ。

二人が立つのは、アースラ内の訓練室。魔導師能力計測などにも使われる部屋だ。天井の高さや部屋の大きさは、あのビルの一室と同程度。あの時となるべく条件を合わせている。

「模擬戦、ですか?」

「ええ、てっとり早いでしょう」

「だ、駄目、そんなの、駄目です!」

しれっと言う恭也に、反対したのはなのはだ。

「お兄ちゃん怪我してるし疲れてるしさつきまで倒れてたのに!」

「魔法での治療とやらのおかげで、怪我也治ってるし、疲れもとれてる。問題はなからう」

「で、でも! 駄目です!」

この後十五分ほどにわたる押し問答が展開され、結局”危なくなったら即中断”という条件をつけ、さらにその条件を何度も何度も確認してから、何とかなのはは承諾した。

恭也が良いというのであればリンディやクロノにとつては願ってもない話だったらしく、すぐに場所や機材の手配などは行われた。

そして、対戦相手は、

「あの、その模擬戦の相手、私にやらせてもらえませんか?」

フェイトが自ら手を挙げ、強く希望した。

「フェイトさんが? そうね……半端な人では意味がないし、やってもらえると言うのであれば……」

「ごっちとしては助かる。できれば騎士達と同程度の実力者が望ましいから、フェイトなら条件に適ってるしな」

リンデイとクロノはうなずく。

「恭也さん、私が相手でもいいでしょうか？」

しつかり恭也を見据えて問うフェイト、

「ああ、構わない。よろしく頼む」

彼女に恭也はうなずきそう答え……。

そして今、二人は少し離れたところで向かい合う。

『それではこれより、模擬戦闘を開始したいと思います』

響いた声に、恭也は二振りの小太刀を、フェイトは黒い戦斧を構える。

『カウントいきます……5……4……3……』

恭也は静かにフェイトを見遣る。見た目がいかな少女とはいえ、その身に宿す戦闘力がそれ相当ではないことは百も承知。

よって油断や様子見など論外。恭也の意識は既に、完全に戦闘者として切り替わっている。

『2……1……』

恭也が魔導師と戦うのは、これで三度目。経験としては決して多いわけではないが、それでも、

(……ある程度のノウハウはできている)

『0！』

そして戦闘が開始された。

(近づかせちゃ駄目だ)

自分の得意は近距離戦。とはいえ、この人を相手にそれは得策ではない。フェイトは開始前に言われたことを思い出す。

”遠慮や手加減はしないでくれ。勝利を目指す戦いを頼む、そうではないという意味がないだろうからな”

ほんの少し、相手の戦法が戦法なので、遠距離射撃は卑怯ではないかという考えがあったフェイトだが、それを見透かしたのか、恭也は

そうやってきた。

であれば、自分は勝つ戦いをしよう。それが礼儀だ。

『O!』

響いたカウントは開始の合図、

「フォトン……」

フェイトは手を振り上げ、雷槍を周囲に作り出し、近づく恭也に放とうとする、が、

(わかってたけど、速いっ！)

いざ目の前になると想像を絶するとしか言えないようなスピードで突っ込んでくる恭也に、一瞬動きが止まりかける。

しかしすぐに我に返り、フェイトは大きくバックステップ、距離を稼ぐ。そして、

「ランサー！マルチショット！」

向かいくる黒衣に雷槍を射出。だが、

「くっ！」

(しまった！)

フェイトは即座に己のミスを悟った。

雷槍は恭也がいたあたりに集中し、床に着弾。閃光が一瞬辺りに広がる。

数発を同時発射させるマルチショット、それらの同時着弾により発生した光は一瞬恭也の姿を隠してしまった。

あの速度を持つ相手を見失うのはまずい。一、二発ずつ丁寧に撃つていくべきだった。

焦ってしまったか。足を止め、目を眇めつつ恭也の状態を確認せんとしながら、その後悔するフェイトは、

「っ！」

さらなる己の失態に気づく。

一瞬とは言え、なぜその場に足を止めてしまったのか。

(バインドじゃ、……ない！ 物理的な糸!?)

右足に突如巻き付いたそれはフェイトの体を前方に勢いよく引いた。

「くうううっ！ バルディッシュユ！」

バルディッシュユから光の刃を展開、サイズフォームとし、あわてて糸を断ち切る。

そして視線を前に戻すと、

「え……」

至近距離、黒衣の男がそこにいた。

一瞬だけでも糸に視線をそらせ、その間に接近する事が狙い……
フェイトはそう悟る。

三度に渡る失態。そのツケはすぐにやってきた。

(ガード、間に合……)

目の前の恭也は手にした二振りの刀を十字に合わせ、振るう。

フェイトはそれをまともに食らった。響いた衝撃に体が吹き飛ばされるのがわかった。

「ううっ!!」

なんだ、これ。それがフェイトが抱いた感想だ。頭がちかちかする。体全体が痺れる。まるで雷撃にでも撃たれたかのようだった。

ガードが間に合わなかったとはいえ、自分はバリアジャケットを展開しているのに。

それなのに、このダメージ。

背中に硬い感触、一瞬息が詰まる。

壁か。どうやら自分は端まで飛ばされたようだ。

「くっ、うう……」

フェイトはすぐに足に力をいれ、なんとか倒れず、その場に立つ。

「っ！……はあああっ！」

そしてサイズフォームに変形させた黒い戦斧を振るい、またしても素早く間を詰め目の前に迫っていた恭也に斬りかかる。

とにかく迎撃しなくては。

しかし攻撃は空を切る。恭也は屈んで避けると、反撃に抜刀術を放ってきた。

「っ！」

今度はバルディッシュユでガードできた。しかし……。

(痺れる……)

腕にはやはり衝撃が通っていた。自分と同じくバリアジャケットを着ていたはずのシグナムを追い詰めたのは、これか。

フェイトは得心するも、

「くっ！ はっ！」

打開策は浮かばない。

フェイトがいくら鎌を振り回しても、それは恭也の体を捉えることはなく、そして合間を縫うようにして恭也はフェイトに確実に刃を叩き込んできた。

近接戦の技術に差がありすぎる。前、横、そして上に逃げる暇は一切与えられない。その上後ろは壁だ。

まずい。このままでは。

それでもおそらくは、一撃まともに入れたら自分の勝ちだろう。

もちろん非殺傷設定にしてあるとは言え、サイズフォームの刃で切り裂けば、勝負は決まる。

わかっている、そんなことは。

だけど。

「……っ！」

恭也と目があった。瞬間、フェイトの背にぞくりと嫌な感覚が駆け巡る。

一撃、ただ一撃とは言え。

この人に、入るのだろうか。

そんな弱気な思考が戦闘においてはいかに致命的かくらい、フェイトにもわかっている。だが、それでも。

(怖い……！)

どうしても、その考えが振り払えない。

それくらい、目の前の黒衣の男性から発される気迫は、鋭く冷たく、貫くようだった。

きつと最初のフォトンランサーを同時発射してしまったミスは、これのせいだとフェイトは今にして悟る。この、とてつもない、殺気。きつと自分は最初からこれに『当てられて』いたんだろう。

冷静な思考、正確な挙動。それを阻害するほどの、気という武器。それを操る相手に対し、自分はまるで丸腰だ。

近接戦の技術の差と相まって、バリアジャケットという有利がいか
に霞むか。

フェイトは歯噛みする。このままではどうやっても勝てない。届かない。

「くううっー!」

思考の間にも打ち合いは続いており、自分の刃はただ避けられ、相手の刃によるダメージはどんどん蓄積していく。

バインドや補助魔法で形勢を変えようにも、こんな半密着状態では発動を許してもらえそうにない。

……いや、そもそも、恭也の刃から意識を少しでもそらせば、即座に刈られる、そんなイメージがぬぐえず、結局多少のチャンスがあったとしても、補助魔法の発動は出来そうにない。
どうする。

このままでは、きつともうすぐ、勝負はついてしまう。

嫌だ。フェイトは思う。

願う。

(もつと、もうちよつと……)

この人と、こうしていたい。

身を削るような気に当てられながらも、体を揺らすような衝撃を受
けながらも、それでもフェイトは今この時を、もつと続けたかった。

一合が過ぎるたびに、自分の体に今まで纏わりついていた無駄な挙
動が、ほんの少しずつとは言え、削れていく。

微々たる違いとはいえ、フェイトは確かに、それがわかった。目の
前の強者が、自分を引っ張り上げてくれているのがわかった。

「はあああああつー!」

フェイトは吠え、渾身で相棒たるバルディッシュを振るい続ける。

「あああああつー!」

元々、模擬戦の相手として手を挙げたのは、ある種の期待によるもの
だった。

自分は強さを欲している。もつともつと、強くなりたくて。そして、そのための何かを、目の前のこの人は持っているような気がしたのだ。

自分を魅了した剣舞、あそこにフェイトは眩い可能性を感じた。

この人と戦えば、なにかわかるかも、掴めるかもしれない。そう思い、気がつけばフェイトは手を挙げていた。

そしてその選択が間違いでなかったことを、フェイトはすでに確信している。

きつと自惚れじゃない、今このとき、ほんの少しとは言え自分はずかに手を掛けているはずだ。今までとは違う強さの領域へ。

だから。

だから、もつともうちよつと。

今このときを、今しばらくは。

(続けたい!)

「バルディッシュユ!!」

『yes, sir!』

フェイトは、バルディッシュユへ魔力を一気に注ぎ込むと、形成する刃を巨大化する。できる限り大きく、大きく。

「っ!」

恭也が息を飲む声が聞こえた。少々驚いたような顔をしている。しかし、そこで動きが止まる彼ではなかった。

フェイトはバルディッシュユをそのまま振り回さんとするが、

「くっ!……うう」

恭也はそうはさせないとばかりに、できた隙に容赦なく斬撃を浴びせてきた。フェイトの口から苦悶の声が漏れる。

足がふらつく、倒れそうになる。

が、フェイトは耐えた。

「ああああああああああああああっ!」

そして雄叫び一閃、バルディッシュユを振るった。光刃による軌跡が大きく描かれる。まさに必殺の一撃。

しかし。

(やっぱり、か……)

恭也には、あっさりと躲かれた。

彼はバルディツシユが振るわれる寸前、大きくバックステップを踏み、距離をとっていた。完全に読み切られている。

荒い息を吐きつつ、フェイトはバルディツシユを握る手に力を入れる。

(これでいい、狙い通りだ)

こんな攻撃が通じる相手ではないことは百も承知。

フェイトの狙いは、こうして距離をとらせることであった。

「フォトン……」

近接距離では刃が立たない。だから、当初の考え通り、ミドルレンジ戦に切り替える。距離を保ち続け、フォトンランサーで仕留める。隙を見せず、あの糸には注意だ。

そこまで考えながら、フォトンランサーの射出用意をしつつ、横へ大きく飛ぶため足に力をこめた、次の瞬間。

「……え？」

フェイトの視界は急激に闇に染まっていく。体から力が抜けていく。

気絶する寸前だとわかった。

突然身を襲った衝撃が、その原因だと言うこともなげ。

意識を手放す寸前、視界に集中すれば、そこには、目の前には。

離れた位置にいたはずの恭也が、いた。

(瞬間、移動……?)

その言葉にたどりつき、そしてフェイトは倒れ伏した。

戦いの様子をモニターしていたアースラ管制室は、異様なほどに静まりかえっている。

やがて、恭也が気絶したフェイトを抱きかかえ、訓練室から出て行く様子が映し出された後、しばらくして、リンデイが声を発する。

「……エイミイさん、医務室の手配はできてるわね？」

「あ、はい……。……あ、連絡来ました、フェイトちゃんを預かったとのことです。気絶しているだけのようなので特に問題はなさそうだと」

「そう、よかったわ。……今の映像、記録はできてる？」

「はい、それはバッチリですけど……」

エイミイはそこから言葉を濁す。リンディはため息、クロノに至っては、

「……」

硬直している。

「リンディ提督、この映像、本当に本局に回すんですか？」

「まあ、そうなるわね。そのためにやったんだし」

「……衝撃映像ですよ、これ。管理局の近接戦闘型の魔導師が観たら卒倒ものですよ。オールレンジタイプのクロノ君ですらこの様子なのに」

「それはそうなんだけど、紛れもなく現実なんだから受け入れるしかないわ」

魔導師は一般人に対し、絶対的に強者である。

この意識は基本的に魔導師全員が持つ者であり、誇りにして自負、責任であった。

（もしかして、ちよっとその常識は塗り変わっちゃったのかもしれないわね……）

リンディは、奇しくもその瞬間に立ち会ってしまったことに対し、非常に複雑な心境を抱く。

彼女も魔導師の一人として、己の常識が眼前で破壊された直後なのだ。シヨックがないかと言えば嘘になる。

しかし。

それでも彼女はアースラ艦長にして、時空管理局提督だった。

「クロノ、恭也さんの魔力適正解析結果の詳細、そろそろ出る頃よね？」

「……」

「クロノー、クロノー執務官」

「……え、あ、は、はい！ まりよくてきせいかいせきけつか……。あ、はい、魔力適正解析結果ですね、もう出ている頃かと。……艦長、まさか」

常時人手不足、有能な者は喉から手が出るほど欲しい。

「そう、そのまさか。ふふ、逆転の発想よ。考えてもごらんさい。魔法なしでここまで強いのです？」

そこから先の言葉は、言われずともその場にいる誰もが察した。魔法なしでここまで強ければ。

魔法を使えるようになったら、一体どれほどのものになるのか。

「……あ、ん……。……」

フェイトが目を開けると、そこには白い天井があった。次に、自分の体が柔らかい物の上に横たわっていることに気がつく。

「起きたか」

「フェイトちゃん、大丈夫？」

「恭也さん……。なのは……」

自分が眠るベッドの右脇にはなのは、その隣には恭也が座っていた。数瞬間を置いて、

「……あ、そっか」

フェイトは思い出した。自分が恭也と模擬戦を行ったことと、その内容を。

そして、

「私……。負けちゃったんですね……」

結果を現状から悟る。

「……勝ち負けで言えば、一応は俺の勝ちにはなるんだろうがな。吐き気はないか？ 目の焦点は合うか？」

そう言っただけで恭也は椅子から腰を上げると、フェイトの顔を覗き込んできた。

「え、は、はい！ だ、大丈夫です！」

はつとするほどに端正な顔がいきなり目の前にきたので、思わず言葉を噛みつつ、フェイトはそう答えた。

その様子に、恭也は息をつき、優しく微笑んだ。

「たいした物だ。こちらは大人げなく奥義を連発した上にさらに奥の手まで使ったんだがな。それでも意識を落とすのでやつとだった」「いえ、そんな!」

恭也の言葉にフェイトは身を起こし、勢いよく反発する。

「フェ、フェイトちゃん、駄目だよ」

「そんなに急に起き上がるな、今の今まで気を失っていたんだからな」「あ、すいません……」

優しく労るように掛けられた言葉に思わず氣勢をそがれるも、しかしフェイトは続ける。

「……私、魔法を使って戦ったのに、全力を出したのに、全然刃が立ちませんでした。……戦ってて、少しも勝てる気がしませんでした」

「そんなことはない、俺は綱渡りの心境だったぞ。一瞬だって気を抜けなかった、いつ君が勝つてもおかしくない勝負だった。君は強い」

「……いえ。恭也さんは、恭也さんは……なんて言うか、強さの質が……私なんかとは全然違ったような気がします」

「……買いかぶりすぎだと思うがな」
恭也は苦笑しつつそう言うが、フェイトにとって、それは確信に近い思いだ。

恭也は明らかにフェイトがこれまで出会った誰よりも、ステージの違う強さを持っている。

だから、フェイトは、言う。拳を握りしめつつ、真剣な声音で言った。

「あの、恭也さん……! 私に、戦い方を教えてくれませんか……!」
それは、模擬戦を行う前から考えていた事で、そして行った後、今では切望にも近い思いだ。

この人に、教わりたい。あの短い試合の中でも自分を引っ張り上げてくれたこの人に、強くなる方法を、教えてほしい。

そうしたら、もしかしたら、自分も。

この人みたいに、強くなれるかもしれない。

浅い考えかもしれない。でも、フェイトにはこの思いを抑えることができそうになかった。

「いきなり変な事を、厚かましい事を言ってるってことはわかってます。でも、私……どうしても、強くなりたいんです！」

「……ふむ」

恭也は口に手を当て、うなつた後、

「さすがは親友同士、と言ったところか」

そう言った。

どういう意味か考えて、フェイトはすぐに思い至り、

「フェイトちゃんも、やっぱりそのつもりだったんだね」

そう言つて自分に微笑みを向けるなのはに視線を向けた。なのは続ける。

「私もついさつき、同じこと頼んでたの。私は遠距離タイプだけど、でもきつとお兄ちゃんから教えてもらえることってたくさんあると思う。私もフェイトちゃんと同じように、お兄ちゃんは私たちとは違う強さを持つてると思うから」

「なのは……」

「うん」

二人は目を合わせ、うなずき合つた。これは、あの時の誓いを果たすための、第一歩だ。強くなる、その誓いのための。

「お兄ちゃん、駄目かな……？」

「恭也さん、お願いします！」

「そうだな……」

恭也は二人の少女の言葉に、目を閉じ数秒黙つた後、
「聞こう。二人とも、なぜ力を欲する？」

嘘やごまかしを許さない声で、そう問いを放つた。

二人は答える。

「大切なものを、守るために」

「守りたいものを、守れるようになりたいんです」

「……そうか」

恭也は、深く息を吐いた。その胸中はフェイトには推し量れない、ただ想いが通じることを願うばかりだ。

体感的には非常に長く感じられた時間の後、
「なのはについては、十年ほど兄妹をやっているからな、どんな奴かくらいわかつているつもりだ。だが、フェイト、君について俺はほとんど何も知らない」

恭也はフェイトを見つめて言った。

「フェイト、俺に君のことを教えてくれ」

「私のこと、ですか？ それは……」

「PT事件のあらましは聞いたし、なのはから人となりも聞いているが、そう言う事ではない。君の口から、君の言葉で、君の事を聞きたい。君がどうやって生きてきて、君がどんな考えを持っているのか、それを聞きたい。その上で、君に指南するかどうかを決めたい」

恭也の視線はまっすぐにフェイトの瞳を貫いている。

決して目は逸らせなかったし、逸らしたくもなかった。

「……はい、わかりました」

きちんと、向き合い、話したかった。まだ出会って間もないが、この人になら聞いて欲しい、なぜだかそう思った。

「私の今までを、今を、すべてお話します」

そう言つて、フェイトは始めた。

自身の生まれ。

母の事。

アリシアの事。

リニスの事。

育った環境。

やってきた事。

なのはとの出会い。

母の終焉。

そして、管理局囑託となった今。

どちらかと言えばフェイトは、喋るのが得意な方ではない。

それでも、ところどころつつかえながらも、

「これで……全部、です」

包み隠さず、すべてを話した。

「……そうか」

唐突に、頭に感触。硬いけど、とても優しい感触。

「ありがとう、よく話してくれたな」

撫でられているとわかって、フェイトはやはり気恥ずかしくなったが、それでもなぜか安心感を覚える自分がいることにも気づく。

しばらくそのまま時が流れ、やがて恭也はフェイトの頭から手を離した。

フェイトは名残惜しきを感じたが、さすがに声には出せなかった。

「君が話してくれたのに、俺がそうしないのはフェアじゃないな」

そんなフェイトを見ながら、唐突にそう言う恭也。

「フェイト、……そして、なのは」

「は、はい」

「え、う、うん」

「フェイトがそうしてくれたように、俺も今から話す。……なのはにも、きちんと話すのはこれが初めてだな。きつと、いい機会なんだろう」

ギィ、と椅子が音を立てた。そこに座る、声のトーンを落とした恭也の顔からはどんな感情も読み取れない。

「俺の過去、と、今について。二人が俺から学ぼうとしている、俺の持つ力について。……二人とも、聞いてくれ」

フェイトは一瞬だけなのはと目を合わせ、

「はい」

「はい」

そして二人そろって答え、恭也へうなずいた。

そして語られた話は。

「……こんなところだな」

自身決して平坦な道を歩んできたわけではないとの自負はあるフェイトをして、壮絶と言わしめるものだった。

暗殺を生業とする家に生まれ。

生みの母には捨てられ。

父と放浪して育ち。

親類はそのほとんどがテロ組織に殺され。

父の結婚で新しい家族を得るも、その父も失い。

残された家族を守るため、力を得るための過剰な鍛錬で自分を壊し。

そして、義妹と共に、理解し合うため叔母と戦った。

「母に捨てられ、家はなくなり、父を失い、自分を壊し、叔母と戦い、今の俺がある。そんな風にして俺は生きてきたし、今こうしている」

恭也が淡々と語ったのは、そんな話だった。

「……おにい、ちゃん」

見れば、なのはは蒼白な顔をして、兄を見つめている。

「なのは、すまない、嫌な話だろう。だが真実だ。俺は自分の身に起きたことについてすべて納得してはいるが、それでもお前の兄は、綺麗に生まれたわけではない。そして、何より決して綺麗に生きてきたわけでも」

「そんなことないよっ!」

なのはは、恭也の言葉を遮って叫ぶように言葉を放ち、恭也の体にしがみついた。

「そんなことない! お兄ちゃんがどれだけ優しい人か、そんなのは私が一番よく知ってます! お兄ちゃんが綺麗じゃないなら、私は綺麗さなんて知らない! お兄ちゃんは、お兄ちゃんは……っ」

「なのは……」

そんななのはを、慈しむように、恭也は見つめる。

「……なのはは俺を、まだ兄と呼んでくれるんだな」

「当たり前だよっ! 怒るよお兄ちゃん!」

にらむなのはに、恭也は苦笑し、

「すまない。ありがとう、なのは」

頭を抱くように、撫でた。それは、宝物を扱うような手つきで、どこか、切ない仕草だった。

「話が、逸れたな」

しばらくして、なのはを離し、恭也は言葉を紡ぐ。

「俺の力は、きつき話したような形で手に入れたものだ。彷徨いながら失いながら、自分の体を壊しながら得たものだ。だから俺に学んだからと言って二人が同じような強さを得られるとは言えないし、俺はそうなってほしくもない」

その声音は平坦で、しかし強い意志が籠められている気がした。

だからフェイトは、なのはと共に静かに耳を傾ける。

「だが、守るため、そのために強くなりたいと二人が言うのなら……いいだろう。二人に指南する、というのは構わない。なのはにもフェイトにも、二人の体を壊さないような、俺と同じ過ちを繰り返させないような形で、出来る限り強くなる方法を伝えよう」

「……お兄ちゃん」

「……恭也さん」

「ただ、勘違いはするな、これは甘い鍛錬をするという意味じゃない。限界はきちんと言極めるというだけだ。鍛錬自体は、厳しいものになる。それに俺の鍛錬が魔導師としての強さに繋がるかどうかとも保証できない。それでもいいか？」

その言葉に、フェイトは迷いなくうなづく。視界の中、なのはも同じ仕草をしていた。

「ありがとうお兄ちゃん！」

「ありがとうございます、恭也さん！」

「……いいさ。それじゃあ……、お二人とも、話は終わったので入ってきてもらって構いませんよ」

微笑んだ恭也が唐突にそう言うと、病室のドアの外から幽かな物音と驚いたような声が聞こえてきた。

「……いいさ。それじゃあ……、お二人とも、話は終わったので入ってきてもらって構いませんよ」

そんな風に恭也は、ドアの外でこちらの話を聞いているであろう二人へ声をかけた。

「え？ 二人って……」

「だ、誰かいるの？」

フェイトがそう声をあげ、なのはがドアに向かい問いかける。すると、

「ご、ごめんなさいね……立ち聞きするつもりじゃなかったんだけど……」

「すみません……入れる雰囲気ではなかったもので、そのままつい……」

謝りつつ、リンデイとクロノが部屋に入ってきた。

「リンデイさん、クロノ君！ い、いつから聞いてたの？」

「俺が、俺の話をするあたりからだな」

御神流の技術の一つ、気配を探る『心』を使える恭也にはすぐにわかったことだ、なのはの質問には恭也が答えた。

恭也としては責めるような声音にしないよう注意したつもりだが、さすがにバツが悪そうに二人は頭を下げる。

「ごめんなさい……、恭也さん……」

「すみません……」

「いえ、構いませんよ。ただ……さっきの話は、他言無用でお願いします」

恭也は二人にそう念を押す。この二人がまさか喧伝して回るとは思わないが、一応だ。

恭也の言葉に、二人は神妙な顔でうなずいた。それを確認してから、

「お二人は、フェイトの様子を？」

そう声をかけ、恭也は話を変えた。

「ええ。フェイトさん、大丈夫？」

「は、はい。私はもう特に、この通り」

リンデイの言葉に、そう言っつてフェイトはベッドから下り、床に立つ事で答えを示した。

恭也から見ても特に怪しい挙動はない、本当に回復していると見ていいだろう。

「そう、よかったわ……ありがとうね、フェイトさん」

「いえ……そんな。私が、恭也さんと戦わせてもらいたかっただけですから」

「それでも礼は言わせてくれ、フエイト。おかげで、報告に付け加えられる映像がきちんと撮れた。助かったよ」

フエイトにそう言うと、二人はそのまま、恭也にも礼と労いの言葉をかけてきた。

「恭也さんも、ありがとうございます」

「お怪我はありませんでしたか？」

「いえ、特には。問題ありませんよ」

「そ、そうですか」

普通に返したつもりだが、クロノは若干引きつった顔をした。怪訝に思っていると、

「あ、すいません。もちろん、お怪我がないのはいいことなんですが……、フエイトほどの魔導師相手に無傷か、と思うと……やはり……」
恭也の様子からそれを悟ったのだろう、クロノはそう釈明をしてきた。そしてさらに続け、恭也に問いを放つ。

「あの、質問なんですが、最後の瞬間移動は……一体どうやって？」

「あ、私も……それ、気になっていたんですけど……テレポート、ですか……？」

フエイトもおずおずといった様子で、クロノと同じく尋ねてきた。

「いや、テレポートというような超能力じみた物ではないさ。あれは純粋な体術の一つだ」

恭也はそうフエイトに向かって答えてから、クロノに向き直り説明する。

「御神流の奥義の一つで神速というものです。……簡単に言えば、自分の知覚速度を意図的に無理矢理引き上げ、その中で動くことであたかも一瞬で移動しているかのように見せる技、ですね。ただ……」

「あ、あの……」

「なんででしょう？」

「僕に敬語を使うことはありませんよ……？ 僕はたしかに管理局ではある程度の立場ではありますが、恭也さんは外部の人ですからそんなのは関係ありませんし、どうも……恭也さんに敬語を使われるのは、少し……」

「そうですか……わかった。じゃあ普通に話そう、いいか？」

「ええ、すいません、割り込んでしまつて。続けてください」

「ああ……ただ、神速はさすがに体にかかなりの負担がかかるから、日にそう何度も使えるわけではないという欠点がある。特に俺は膝に爆弾を抱えているから……そうだな、一日三回程度が限界と言つたところか。だから万能便利な技じゃない、奥の手だな」

「え、だ、大丈夫なお兄ちゃん？」

恭也がそこまで説明すると、黙つて聞いていたなのはが唐突に声をあげる。

「お兄ちゃん、あの守護騎士さんと戦つたときも、たしか二回……。一日三回が限度の技を三回……お膝、痛いんじゃない？」

「恭也さん……」無理をさせてしまったんじゃない？」

なのはに続けて、フェイトにも少し泣きそうな声でそう言われ、少し慌てて恭也は付け加える。

「いや、別に心配はないさ。本当に感心するが、魔法の治療のおかげで一回目の神速を使った疲労はほぼとれていたからな。無理はしていない、大丈夫だ」

安心するように息をつくなのはとフェイト。すると今度はリンデイが恭也に声をかけた。

「恭也さん、私からも質問いいでしょうか？」

「ええ、構いませんよ」

(講義のようになってきたな……)

思いつつも、リンデイの言葉に耳を傾ける。

「恭也さんは模擬戦の前、守護騎士に、魔導師にご自身が勝てたのは理由があるとおっしゃっていましたが……それが具体的にはなんなのかよろしければお聞きしても？ 本局への報告は先の試合映像があれば十分なのですが、個人的興味としては是非それもご教授頂ければ、と思ひまして」

「あ、私も聞きたいです、是非！」

「私も！お兄ちゃん、教えて！」

「……僕も、魔導師の一人として、かなりそれには興味があります。お

「願いますか？」

「……そんな大層なものじゃないんだが」

「そこまで興味を持たれてもな。恭也は思いながらも、そう前置きして、」

「俺が魔導師に勝てた理由は、主に三つあります」

結局は続けた。

「まず一つは……言葉を選ばずに言えば、魔導師の戦いにおけるある種の歪み、魔導師の戦闘者としての歪みを突いたに他なりません」

歪み。それは、あの赤い少女の初撃からして感じたものだ。

「といたしますと？」

「本当に失礼な言い方になってしまっていますが……」

「かまいませんわ。お願いします」

答えるリンデイの傍ら、クロノもうなずいている。なのはもフェイトも同じだ。

意を決して、恭也は言う。

「……魔導師はとも、その身が出せる力に対し、それを戦いの武器として活用する技術が少々低いように見えるんです。行使できる力はたしかに強大なんでしょう。ですが、それをどうにも武器として効率的にうまく使い切っていないように思える。アンバランスなんです」
やはり嫌みのような言い方になってしまふな、恭也は内心冷や汗をかく。

恭也としてはもちろん、魔導師を侮辱するつもりはない。

実際、守護騎士の二人も、そしてフェイトも、間違いなく賛辞を送るべき強者だった。

あくまで彼らが強い存在であるという前提の上であえて弱点を言うのであれば、とこんなことを言っているのだ。

「俺は、御神の剣士は、もちろん鍛えてはいますが、それでも体は普通の人体で、出せる力は普通の人間の枠を超えません。御神流は、その普通の人体で戦闘者としていかに効率よく動くかという技術を死にものぐるいで、文字通り命をかけて研鑽することで強さを得ていきました。限られた力を髓の髓まで使いこなす術を磨いてきたんです。

その観点から見れば、魔導師はそう言った意味、戦闘における力の運用において少し無駄があり、そしてそこを俺は突き、勝ちにいったという事です」

「……すごい説得力ですわ」

リンデイが息を吐きながら言う。

「あなたの戦い方を実際に見たあとだと、さすがに反論ができません。あなたを一般人だなんて呼んでいたのがどれほど間違っていたか今ならわかります。むしろ……恭也さんからすれば、魔導師は魔法と言う武器を持っているだけの一般人……、なのかもしれませんね」

「いえ、そんなことは！ 本来的には俺なんかよりも魔導師の方が強い存在ですよ。力の効率運用について多少その……無頓着であるというのは、それだけ引き出せる力自体が強大であるからでしょうし。あくまでも、俺は“戦えば勝つ”御神流として、勝ちを拾っただけです」

フォローはできただろうか。

家族や翠屋の店員仲間から、曰く『お客さんを気持ちよくさせるような話術』というものをたびたび強制的に学ばされてはいるものの、恭也は基本的に口が上手いほうではない。

自分の意がうまく伝わったかどうか、少し自信がなかった。

そんな恭也に、フェイトがぼつりと言った。

「……私、恭也さんと戦っている間、恥ずかしかったんです」

「……なぜだ？」

突然の言葉に、意図がつかめない恭也は聞き返す。フェイトは少し俯いたまま続けた。

「恭也さんの動きを見れば見るほど、どれだけ自分が無駄だらけかわかったから……。魔力に、魔法に頼って戦っているかって思い知らされましたから。だから、恥ずかしかったんです。魔法がなくなつてあんなに強い恭也さんと、魔法に頼り切つて戦うのが、恥ずかしかったんです」

その意見は、やはり恭也が先ほどどうまくフォローしきれていなかったが故に出てきたように思えた。

が、しかし。

それとは別に、恭也はその言葉に少なからず衝撃を覚えた。

「フェイト……」

この少女が、あの短い戦いの中でそこまで感じていたとは思っていなかった。

刃を交える中で、フェイトの動きに光る物を感じてはいたが、しかしこれは。

(磨けば、かなりの物になるかもしれない……)

師範代として長く、才ある義妹を鍛えていた恭也の勘は、自らにそう告げている。

もちろん彼女、フェイトを本格的に御神流の弟子として取るわけではないが、教える対象がそんな少女であることは、喜ばしいことである。

恭也は思わず、フェイトを撫でた。フェイトはそれに少し驚いた仕事をみせたが、頬を染め、はにかんだ。

そんな二人の様子を見て、

「う、うう……魔法に頼り切り……私には少し耳が痛いです……」

なのはは寂しそうに声をあげる。

「なのはは、基本的に遠距離で戦うというのだから、それは仕方ない部分ではあるだろう。遠距離でも魔法に頼らない攻撃方法はあるが、得意な魔法という武器があるのならそれを使うべきだ。……その中で、改善できる点や向上させるべき点を見つけたらいいさ」

「そ、そうかな……ほんと？ お兄ちゃん……」

「ああ、だからそんな情けない声を出すな」

そう言っただけのように頭を撫でてやればなのははすぐに笑顔になり、兄としてそれは嬉しくも微笑ましくも感じる。

「それで、お兄ちゃん、あとの二つは？」

「ああ。二つ目はな」

問いかけるなのははに恭也は答える。

「戦った場所が御神流の得意なフィールドである室内であったことだ。さすがに外で空飛ぶ相手とは戦えん。だが、室内であれば床・壁・

天井すべてが足場だ。あのビルの一室やさっきの訓練室程度の大きさの部屋ならば、相手に飛ばれようがなにしようが渡り合うことができる」

さらに加えて言えば、守護騎士と戦った際は部屋が暗闇の中だったこともあげられる。

暗い室内は、御神……その中で恭也の学んだ不破流にとって本領の場所だ。

「なるほど。……生身で床・壁・天井すべてが足場と言うのもすさまじい話ですが」

「御神流にとつて身の速さは重要だからな、足は特に鍛えてあるんだ。脆い床なら本気で踏めばそれだけで割れる程度にはなる」

恭也のその言葉にクロノは、訓練室の床が頑丈でよかったですと言
い、苦笑する。

「聞けば聞くほど常識が崩れていきますわ……。恭也さん、それじゃあ三つ目は？」

「三つ目……、これは守護騎士と戦ったとき限定のことではあるんですが、簡単な話です」

リンデイの質問に、すこしだけ微笑んで恭也は、
「後ろに、負けられない理由がいたもので」

そう言つてなのは頭の数を、優しく柔らかく叩いた。

ほんの一瞬きよんとした表情で固まったものの、すぐに言葉と仕事の意味を理解したのか、なのはは少し俯き、顔を真っ赤に染める。

守るべき者を守る時、御神流は決して負けない。それを恭也は実践
しただけだ。

「……感服します、本当に」

そんな兄妹の様子に、リンデイはまぶしいものを見たかのように、
ほんの少し、目を細めた。

「素敵なお兄さんね、なのははさん」

「……はいっ！ お兄ちゃんは、世界一ですから！」

そう言つて、俯いた顔を上げ、なのはは恭也の腰に抱きついてきた。

聞けば類い希な才を持った、若干九才にしてエース級の魔導師……

とは言え、やはり恭也にとっては、なのは可愛い妹だった。

頼られれば応えるし、飛びつかれれば抱き留めよう。

恭也にとつて、なのははどうしたってそういう存在だ。

そんなことを思いながら、恭也は和やかとすら言える気分になっていたのだが、

「そういえば、なのはさん、フェイトさんも、恭也さんから戦いのご指導をして頂くんですってね」

「あ、はい」

「そうなんです」

「そう、そうですか」

突然、

「……ね、恭也さん」

「は、はい、なんででしょう」

ぞくつと、背中に嫌な感覚が走るのを感じた。

(やはり、似ている……)

戦慄とともに、思う。

こちらに笑顔を向けてきた、リンデイ・ハラオウン。

彼女はやはり……恭也の義母、桃子に似ていた。

顔立ちが、ではない。その、雰囲気がおつとりとしながらも、

「それなら……恭也さんも一つ、手遊びに、ではありませんが、せつかくですし習ってみませんか？」

いざと言う時には、自分の意見を通しきる、その有無を言わさぬ強さが。

「な、なにをでしょう……？」

問う恭也に、リンデイはにっこりと、まるで一児の母とは思えぬほど若々しく、いつそ可憐に微笑んで、言った。

「ま、ほ、う、です。恭也さん、魔導師になってみませんか？」

「シヤマル……、主は？」

「さつき、やっと眠ってくれたわ。……さすがに腕のこと誤魔化すの、

大変だった」

「だろうな……。大丈夫なのか？」

「うん、落としたお皿で切っただけって事で通したから」

静かにドアを開け、部屋に入ってきたシャマルのそんな返答に、シグナムは少し眉をひそめ、言う。

「そのこともそうだが、お前の腕自体は大丈夫かと聞いているんだ」

「……。うん、やられてすぐに回復魔法をかけられたのが大きいかな。さすがに早期完治とはいかないけど、じきに治るわ。後遺症も残らないだろうし」

「……。そうか」

主——八神はやてが眠りについた、夜の八神家。そのリビングにシグナムの息を吐く音が響いた。

ソファーに腰をかけるシグナムの足下、動物形態で座り込んだザフィーラが言う。

「シグナム、お前の傷はどうなのだ？」

「……。そこまで深手は負っていないからな。あちこち痛みはするが、大したものじゃない」

答えるシグナムの言葉に嘘はない。傷自体は大きくなかった。

「問題は、どちらかと言えば疲労だな」

シグナムは軽く目を閉じ、検査するように自らの体の状態を確認。

(鈍く、かつ重い疲れだ)

そしてそう結論を出し、その原因となった相手を使う。

「……。あいつの相手をするのは、本当に神経を使った。動きは冗談のように速いし、妙な技も使ってくる。その上、気迫はこちらの精神を削ぐかのような鋭さだ」

あれほどの強者との戦いに、剣士として喜びを感じなかったと言えは嘘にはなる。だが、果たさねばならない使命がある身としては、

「正直、もうやり合いたくはないな」

そう思わざるを得ない。

「お前にそうまで言わしめるとは、相当の腕だな」

「ああ」

「……ねえ、その人、ほんとうに魔導師じゃなかったの？ だって……」

シグナムの隣に移動し、しかし座らず立ち続けながら、シャマルはいまだに信じられないのか、そんな声をあげる。

「言いたいことはわかるが、真実だ。奴はその身一つと二振りの刀、それだけで戦っていた。私の見る限りだが魔法もなければデバイスもなかったさ」

「そんな……」

「俺は戦っていないから何とも言えんが、我らの将はこういう事で虚言を吐くような者ではないだろう、シャマル」

絶句するシャマルにザフィーラがそう言う。

「それはわかっている、わかっているけど……、でも……。じゃあ一体その……タカマチキョウヤって人は何者なの？」

「……あいつは、化け物だよ。化け物、ぜってーそうだ」

シャマルへ今度、その声をかけてきたのは、

「ヴィータ……、起きてきたか」

シグナムの視線の先、先ほどのシャマルと同じく静かにドアを開け現れた、今の今まで眠っていたはずのヴィータだった。

「ヴィータちゃん、体はどう、大丈夫？」

「一応動ける、シャマルが治療かけてくれたんだろ？ さんきゅーな」

「ううん……、でも、まだ辛そうね」

その言葉通り、ヴィータは少しふらつきながら、シグナムの隣へ崩れるように腰掛けた。

「……あいつは化け物なんだよ」

そしてヴィータは、重い声で再度そう言った。

「なんかの冗談だ、あんなの。実在するわきやねーはずの存在だよ、あれ。少なくとも人じゃねー」

「……その気持ちもわかるがな」

シグナムにも、ヴィータの言葉には少なからず頷きたい気持ちはあった。

自分たちの常識からすれば、あれはあり得ない存在なのだ。

騎士に生身で挑み、渡り合い、凌駕する一般人など。

「だが、奴は実際にいるし、信じられんが人間なんだろう。当初標的にしていた少女の、身内、だったか」

「兄だっつってたよ。管理局のことも魔導師のこともしらねーみてーだった」

「なにかの拍子で結界内に入りこんだとしても、妹のために奴としては正体不明であるだろう我らに単身挑むとは、敵ながらあっぱれではあるが」

「こつちからしたらたまったもんじゃねー」

「……だな」

イレギュラーもいいところだ。

シグナム達守護騎士としては、魔力蒐集による闇の書の完成、そのためにあの少女の持つ強大な魔力は是非とも欲しいところだったが、おかげで結局は奪えなかった。

「あれからどうなったんだ？」

「ああ……」

その問いに、シグナムはヴィータへ、その後の状況をすべて説明した。

ヴィータは苦虫を噛みつぶしたという表現がぴったりの顔で言う。

「シグナムまでやられそうになった上……シヤマルの腕は串刺しかよ……。無事なのはザフィーラだけか……」

その言葉に、シグナムはため息を吐き、シヤマルは苦い顔で右腕をさすった。

「リンカーコア喰われてる最中にいったいどうしたらそんな事ができんだよ……。どんな精神してんだあいつ……。やっぱ人間じゃねー」
「おかげで、彼からはその魔力の半分くらいしか集められなかったわ」
あんな形で魔力蒐集を中断させられるなど、シグナム達の記憶にはないことだ。

つくづく恐ろしい、シグナムは胸中でつぶやく。

「……しかし、それでもかなりの量が集まったというのは一応幸いと
言っただろうな」

そして取りなすようにそう言った。

「そうなのか？」

問うヴィータにシヤマルが頷いて答える。

「うん、そうなの。結構ね」

「そりや良かった……」

今回のことは完全に失敗だと思っていたらしいヴィータはそう明るいい声をあげ、喜びそうになったが、

「……けどよ」

途中で何かに気づいたのか、そう言っただけで表情を固くした。

「ああ、わかってる」

それが何か、検討のついたシグナムもやはり表情を引き締める。

「魔法なしであれだけ強いにも関わらず、保持する魔力は膨大だ。……もし奴が魔法を身につけたら」

「……考えたくねーな」

あの戦闘の中、どうやら管理局とおぼしき者達も乱入してきた。そして標的の少女は、その管理局の者達と協力関係にあるようだった。という事は今頃、少女の兄だというあの男も管理局側についているかもしれない。

そしてそうなれば、自分たちとしては非常によくない状況になる。自分たちの行為は、管理局に目をつけられている。となれば、最悪の場合、管理局の下『魔法を身につけたあの男』を相手にする状況が生まれかねない。

「少なくとも、あの少女をまた狙うのであれば、奴を相手にすることを前提にしなければならぬだろうな」

「……あの白い奴の魔力はほしい。あれがありや20ページは埋まる」

親指を噛みつつ、そうつぶやくヴィータに、ザファイラが言う。

「だが、管理局に拿捕される事だけは避けねばならん」

「……わかってるよ」

「シグナム……どうする？」

シヤマルがそうシグナムに問いかけた。ヴィータもザファイラも

伺うようにシグナムを見つめている。

「……当面はどのみち、我らの状態も万全ではない。管理局も警備警戒を強化しているだろうしな」

「他の標的を狙いに行くってことかよ」

うなずき、シグナムは補足する。

「管理局に補足されにくい、なるべく遠い世界へな」

「そんな事やっている間にあいつが本格的に魔法身につけちゃったらどうすんだよ」

「わかっている」

魔法が、少なくとも自分たちと戦闘できるくらいの魔法技術が一朝一夕で身につくものとは思えないが、あの男に関して話話は別だ。

なにせ、単純にバリアジャケットを着られるだけでもかなり厄介になる。

そして時間をかければ時間をかけるほど、その度合いは高まってくるだろう。

「主の様子を見つつ、闇の書の完成を今より急がねばならなくなったなら、またあの少女を狙うことも考えねばならん。その時は、確実にあの男と戦うことになるだろう。もし奴が魔法を身につけていたならば………四人掛かりだ」

「……卑怯とか、言ってられねーな」

「もとより我らの行為は褒められたものではないのだ、今更だろう。……標的の少女をバインドで固め、それが破られる前に四人掛かりで可及的速やかに奴を排除する」

戦いに喜びを、強さに誇りを感じるシグナムにとっては、齒がゆい選択ではある。

正直に言えば、一人の騎士としては、魔法を身につけたあの男と一対一で戦ってみたいという気持ちはあるのだ。

だが、そうも言っていられない。

主、はやての身のためには、そんな思いはささいなものだ。

「わかった」

「わかったわ」

「了解した」

シグナムの言葉に、残る三人は頷いた。守護騎士四人、想いは同じだ。

「とりあえず、ヴィータは体の回復に専念しろ。その間の蒐集は私とザフィーラで行おう。シャマルも無理はするな。ヴィータが治り、この世界の近くで蒐集を行う事になったら、その時はなるべく単体ではなく四人全員で動くぞ。……シャマル、現在闇の書は何ページまで埋まった？」

「ええつと……」

そして、シグナム達はこれからの手順を確認していく。魔力を、ペーシを埋めるための手順を。

すべては、主のために。

たとえそれが、主の言葉に背く行いでも。

第3話 私なんか

「よし、ここまで」

「あ、ありがとうございます！」

恭也の言葉に、そう大きく声を上げしつかりと礼をしてから、フェイトはふらふらと歩き出し、壁際——高町家道場内の端に座り込んだ。

その場にへたりこまず、きちんと移動するところが彼女らしい。

出会ってから今日で十日ほど。その間に可能な限り毎日稽古をつけて、そんな風に思えるくらいには、恭也はフェイトを知った。

「大丈夫？ しっかしフェイトちゃん、恭ちゃんの鬼しごきによく耐えるねー。はいタオル」

「あ、ありがとうございます、美由希さん。……鬼だなんてそんな」

「いいんだよ遠慮なく言っちゃって。稽古つける時の恭ちゃんなんて鬼の化身みたいなもんなんだから。人の情なんてどこかにいたあああああああつ！」

「言いたいことはそれだけか馬鹿弟子」

好き勝手に言葉を放つ弟子であり義妹である美由希に徹入りのデコピンを放ち、

「フェイト、しばらくは休憩していてくれていい。さっきの反省点、わかるか？」

「体重移動がぎこちないことと、その場しのぎの後方回避に頼り過ぎていることと、全体的に判断が遅いことと、……えつと……」

「……いや、その三つが挙げられれば今は十分だ。次は少しその辺の修正を目標とした鍛錬をする」

「はい、お願いしますっ」

そんな風に、フェイトと今し方まで行っていた近接戦闘における動作の最適化訓練、端的に言えば動きの無駄のそぎ落としについての総括を交わした。

フェイトはふーっと、天井を仰ぐような格好で目を閉じ息を吐いた。

休憩の邪魔をしないようにと、そんなフェイトの傍からそっと離れた恭也に、

「ね、ね、ね、恭ちゃん。いい娘拾ってきたじゃなーい！」

いつの間にか復活したのか美由希がそう明るく声をかける。

「拾ってきたってな……お前も知っているだろう、フェイトはなののは友人、ビデオメールの相手の娘だ。俺が連れてきたわけじゃない」
「それは分かっているけど、恭ちゃんの強さに憧れて教わりにきてるんでしょ？」

「そういう言い方をすればそうなるがな……。何が言いたい？」

美由希はいぶかしげな恭也の視線とその言葉に苦笑した後、すこし表情を真面目なものに変え、言う。

「いやー、だから、あの娘、……ものすごく良い筋してるなって。動きは鋭いし、学習能力も優れてる。才能はある、根性もある」

「……まあな。かなりのものだ」

恭也からしても目をみはるほどの熱意に、瑞々しい才。

魔導師としても逸材なのだろうが、純粹な近接戦闘者としても有望だと、恭也はフェイトに対し世辞抜きに思っている。

「彼女が本格的に御神流、修めてくれたらなー」

フェイトを横目で見ながら、そう美由希がこぼした。

「気持ちわかるがな、フェイトは小太刀二刀を使うわけじゃない、別に決めてある得物がある。そこまで本気で御神を学んでも、フェイトにあまり得はないんだ」

あくまでも、恭也がフェイトに指南しているのは、体捌き、体や力の効率のいい使い方、相手の動きの読み方や状況判断と言った、近接戦闘において得物を選ばず必要となる技術だ。

御神流を教えているわけではない。

「それに、わかっているだろう。俺達の剣は……」

「……うん」

「彼女の才は彼女が使いたいように使うべきもので、なにより……彼女の未来を切り開くためのものだ」

御神の剣は、どれだけ鍛えても、極めても、前にも後ろにも道のな

い、行き場のないものだ。

彼女の未来には、似つかわしくないだろうと思う。

「……………うん、だね。……………あ、才能と言えただけど、あれには驚いたね」

あれ。

話を変えるように少し唐突に言った美由希のその言葉が何を指すのか、すぐに察した恭也はうなずく。

「そうだな。むしろ、今の今まで気づいてやれなかったことに、兄としては申し訳ないくらいだ」

「ねー、私も姉としてちよつと反省してるよ。まさか、なのはにあんな得意分野があったなんて」

「まあ、気づく機会がなかったと言えればそれまでなんだがな」

恭也と美由希、二人が口にするのは、妹、なのはの、

「類い希な空間把握能力に、動体視力、か。運動はあまり得意じゃないようだが……………あれは、凄まじいの一言に尽きる」

その身に宿す才についてだ。

なのにも近接戦闘についての指南は行っているが、やはりフェイトと比べてそれはかなり基礎的なものだ。その代わりとして彼女の得意分野も伸ばそうと、飛針の鍛錬を応用した練習メニューを与えたのだが、なのははそれに対し高い適性を示した。

番号の書かれたボールを部屋に同時に、大量に放り、壁・床に当たった順番、番号、その後の経路などを読み取らせたり、様々な方向からピンポン球を投げつけ避けさせてみたり、恭也と美由希、恭也とフェイトの打ち合いを見させ、どこにどのようの攻撃が入ったかを当てさせてみたのが、どれもあっさりとして恭也の考えていたレベルを超える結果を叩き出した。

その才は、恭也をして凄まじいと言わしめるほどだ。

さらに魔法の才も相まって、なるほど確かに遠距離戦闘者としてかなり有望なのだろう。

「でもなのは、一体どうしたの？ 急に恭ちゃんに鍛えて欲しいなんて」

「……さあ、まあ本人にも色々あるんだろう」

さすがに本当のことを言うわけにはいかず、恭也はそう誤魔化した。

「ふーん、ま、フェイトちゃんも鍛え始めたし、ってところかな？」

「どうだろうな」

「今日は、なのはは？」

「外でユーノの散歩ついでに、ランニングだ」

これも、本当は公園での魔法練習だが、もちろん言うわけにはいかない。

なのはは、フェイトと比べればやはり恭也が教えられる部分がどうしても少ないため、恭也がフェイトの指導に専念する間、その分ユーノと魔法の技術向上につとめていることが多い。

「ふーん、そして恭ちゃんはフェイトちゃんと二人つきりと」

「変な言い方をするな……なんだ、お前はもう上がる気か？」

「かーさんからお店の手伝い頼まれててね、ちよつとそつちに行く」

「そうか、わかった」

「金髪美少女と濃密な時間を好きだけ過ごせるよ、恭ちゃん」

「お前な……」

そんな会話が聞こえたわけではないだろうが、視線は感じたのか、

「あ、あの……何か？」

床から腰を浮かせようとしながら、フェイトが問うてきた。

「いや、少しな……」

もちろん正直に話せるものでもなく、恭也はどう誤魔化そうものか迷いつつ口を開くが、

「いやー、フェイトちゃんが恭ちゃんのお嫁さんになってくれたらなーって話してただけだよ」

しかしそれよりも早く美由希がそう口走った。

「……え、はっ、えっ、そ、そのつわたしっ」

フェイトは一瞬惚けたような表情を見せた後、顔を真っ赤に染めた。

「美由希」

「あ、や、ちよつとした冗談じゃない最近あんまりに恭ちゃんがつエイトちゃんばかり構ってるから弟子として寂しかったというかそんな気持ちの表れというかいいいいたたたたたたたたたつ!!」

恭也に腕をひねりあげられ、涙目で悲鳴を挙げる美由希。

「すまんな、フェイト、馬鹿が馬鹿を言ってしまった。忘れてくれ」

「い、いえそんな……その、私は……えつと……その……」

「……?」

途中から顔を俯けたフェイトの様子に首をかしげながら、やがて恭也は美由希の腕を解放した。

「うろうろう……ひどい、ひどいよ……」

「いいからさつきと店に行つてこい」

「……わかつたわよー、もう……。やつぱり鬼……。なんでもないです

……! そ、それじゃね、フェイトちゃん」

フェイトにそう言つて手を振ると、慌てたように美由希は道場から出て行つた。

「さて、フェイト、少しここで待つていてくれ」

そんな義妹の様子にため息を吐きつつ、恭也も道場の出口へ向う。

「……え、はい、あの……」

疑問を声に浮かべるフェイトに、振り返つて微笑とともに恭也は答える。

「飲み物を取ってくる。水分補給は大切だからな」

「あ、それなら私が取りに……」

「いいさ、体を休めている。すぐ戻るから」

フェイトにそう言つて、恭也も道場から出た。そして母屋の方へ歩き出しながら思うのは、

(……相当疲れているだろうに、子供らしかぬ遠慮ぶりだな)

やはりフェイトの事だ。何もさつきの事だけではない。

基本的に彼女は、人からの好意に驚くほど慣れていなかった。

彼女自身の口から聞いた、彼女の事情、過去。それが原因で、ああまで人に甘えることに不器用になつてしまったのかと思うと、恭也にはやるせない思いが募る。

彼女と触れあうようになって、そうたくさんの日が過ぎたわけではない。

だが、その中でどれほど彼女が優しく、純粹で、そして繊細であるかは十分に伝わってきた。

その少女の身に起こった事に対し、自分は何もできない。考えても栓のないことではあるし、それを思うのが傲慢だと言うこともわかっているが、それでもやはり憤りを感じ、あり得ない仮定かも知れないが、もし知っていれば何かできたかもしれないと思ってしまう。

「……いや」

だが、恭也は頭を振る。やはりこれは意味のない思考だ。

彼女の過去に対し、自分は無力。

であれば、であるならばこそ、自分は彼女の現在と未来のために、できることをするべきだ。

そう結論を出し、恭也は別の事へ思考を向ける。

彼女の適正や現在までの上達具合、それを鑑みてのこれからの鍛錬方法、力を欲した彼女に、自分ができる範囲でそれを授ける方法を考える。

そして、

（――俺も、もっと自らを磨かなければな）

そう改めて決意を固める。これから何かあったらその時は、彼女のこと守れるように。

そんな恭也の左手、その小指で、恭也の想いに応えるように銀の指輪が光った。

「これが、お兄ちゃんのデバイス？」

「正確に言えば、現段階ではその候補となる一つ、だ」

なのはの声に、クロノが応えた。

時は少し遡り、恭也が守護騎士と戦闘を繰り広げ、その後もろもろの説明を受け、フェイトと試合をした日から二日後のことだ。

管理局へ呼び出された恭也となのはは訓練室へ通され、そこでクロ

ノに銀の指輪を差し出された。

「でもクロノ、これって……」

クロノの傍らにいたフェイトが、疑問のこもった声をあげる。そういう反応をされると予想していたのか、それにクロノも少し複雑な表情で頷いた。

一方の恭也となのはとしては、そのやりとりの意味がつかめず、お互い顔を合わせる。

「恭也さん、とりあえず展開してみてくださいますか？」

そこへ、そう指示を出すクロノ。しかし、

「……いや、展開してみろと言われてもな」

そんなことを言われても恭也としてはいったい何をどうすればいいものか、皆目見当もつかない。

「あ、そ、そうでしたね、すみません。えつとですね……」

そこからクロノ、時折なのはとフェイトも交えて、恭也には聞き馴染みのない用語が飛び交う説明が始まった。

そして、

「……だいたいわかった。とりあえずは、心を澄ませ、魔力とやらを流し込む感覚をイメージすればいいんだな」

十分ほど後、そう自分なりにかみ砕き、一応は理解した恭也はそう言った。

クロノはその言葉に頷く。

「ええ、それとバリアジャケットの姿を。恭也さんの思い浮かべやすいもので構いませんから」

「わかった」

魔力、と言われても恭也にはいまいちピンとこないが、しかしあの”リンカーコアから魔力を抜かれる”という経験のおかげで、体にあるようなものがあるというのを強烈に体験したので、

「……」

なんとなくではあるが、できる気がした。

左小指にはめた指輪に意識を集中。同時に、自らを守る衣となるものをイメージする。

「展開」

恭也は、眩くように、しかしはつきりとそう言った。すると、

「……おお、すごいものだな」

漆黒のバリアジャケツトがその身を包んだ。形自体は、香港警防隊と合同訓練を行った際に着用したものとよく似たものだ。そして右腰、左腰には、

「鞘付きの剣……しかも小太刀サイズで二振りか……。あつらえたよ
うな得物だ」

小指から消えた指輪の代わりに、それぞれ一振りずつの剣の重みがあつた。

「ええ、恭也さんが使う剣術に合った形であつたこと、それがこのデバ
イスを候補にと選んだ理由の一つですから」

「そうか……。ありがたい話だな」

クロノの言葉に礼を言ってから、恭也は剣に改めて視線を落とす
た。

（日本刀、ではないのだろうか……似ているな）

柄は拳銃のグリップのようで、角張った鍔に浮かぶ装飾は恭也には
馴染みのない紋様。だが、全体的な形状としては西洋剣と言うよりは日本刀のような姿だ。

「クロノ、抜いて、振ってみてもいいか？」

「ええ、もちろん。どうぞ」

了承を得、恭也は柄を握り両の刀を抜いてみる。鞘とこすれる済ん
だ音がして、白い刀身が露わになった。

「ふむ……」

重さは八景よりも上。重心も八景より前にあるようなので余計に
そう感じるのかもしれない。刃は壮麗な乱れ刃文の浮かんだ片刃で、
抜刀術を使えるくらいに反りは十分、斬にも適度。

そして、やはりこうして抜刀した姿を見ても日本刀、それも恭也の
扱う小太刀に近い形をしていると言えた。

矯めつ眇めつ眺めてみても、歪みは一切ないようだった。夜を塗り
込めた様な漆黒の鞘、鍔、柄は蠱惑的な魅力を放ち、またその中で唯

一白く輝く刃がよく映える。
ひどく、美しい姿だった。

恭也は右手に握る一方を一度鞘に戻し、
「っ！」

抜刀術を放った。続けて連続で振ってみる。もう一方も同様に、一度鞘に戻し、抜刀してから振る。

そこから舞うように二刀を幾度か閃かせた後、

「……いい刀だ」

そう言つて静かに両方同時に鞘へと収めた。

美しさだけでは決してない、むしろ実直と言えるくらいにしっかりとした実戦的な造りだ。握り振るうのはもちろん今日が初めてではあるが、不思議と恭也の手になじんだ。

知らず、恭也は鞘を慈しむように撫でる。すると、

『Vielen Dank, Ich bin froh』

突如、女性の声が響き渡った。

「驚いた……君も喋るんだな」

『Ja. Ich freue mich, Sie kennen zu lernen』

「……待った待った、ちょっと待ってくれ、全くわからん」

デバイスが流暢に声を返してくれたが、恭也にはなんと言っているのかさっぱりだ、単語一つさえ拾えない。自信はないが、どうも英語でもないような気がする。これではお手上げだ。

『Einen Moment, bitte』

「いや、悪いんだが……」

『これでどうでしょうか、貴方よ』

どうしたものかと逡巡する恭也へ、今度はそんな風に耳馴染みのある言葉でもって声がかけられた。

「……む、こちらに合わせてくれたのか」

『はい、問題はありますか？』

「ああ、大丈夫だ、ありがとう」

『いえ、礼を言うのは私です、貴方よ』

恭也の礼に、しかし彼女はそう返した。心当たりのない恭也は疑問の声をあげる。

「いや、俺は何も……」

『見事な腕で振るってもらいました。心からの感謝を、素晴らしき貴方よ』

「それは俺が勝手にやったことだ。むしろ君に許可をとらなかつたことを謝らなければな」

「どうやら彼女は感謝してくれているようだが、恭也としてはどちらかと言えばそんな気持ちの方が強い。だが、

『貴方よ、そのような瑣末事、どうかお気になさらずに。貴方は私に、剣としての喜びを与えてくれたのですから』

彼女はそう言った。

「……君が嬉しく感じてくれたならよかつたよ」

苦笑しながらも、恭也はもう一度彼女の鞆を撫でた。

「だが、見事な腕というのは言い過ぎだな、それほどでもないだろう」

『そんな事はありません、謙虚な貴方よ。素晴らしき技でした』

「買いかぶりすぎだ……ええと……、名前を聞いていなかったな」

『Entz・ckend Mondと言います、貴方よ』

「エン……あー、発音に自信がないな」

流暢に発されたその言葉は、恭也には上手くトレースできそうになかった。すると、

『貴方の主言語で”魅惑的な月”と言う意味です。呼びやすいようにお呼びください』

すかさずそこへ助け船を出された。彼女はどうも、気が利く性格らしい。

「すまん、それじゃあ……そうだな、魅月はどうだ？」

『魅月……素敵な響きです。感謝を、貴方よ』

「気に入ってくれたなら光栄だ。そうだ、俺の名は……」

「ちよ、ちよつと待って待って待って！ ど、どーいうことなの……？」

と、そんな恭也の言葉を遮るように唐突に、なのはが声を挙げた。

「……？」

恭也としては何に驚かれているのかわからない。しかし、なのは隣のフェイトを見ても、彼女も啞然としながら、

「やっぱり……でも、こんなことが……」

と、言葉を漏らす。そして、なのはが驚きの滲む声で言う。

「さっきお兄ちゃんがセットアップしたときに出た魔方陣って……正三角形だったよね……？ ミッド式じゃない、っていうか……それって騎士さん達と同じ……」

「……いやそう言われても、何のことだかさっぱりなのだが……」

説明を求めるように、恭也はクロノに視線を移した。それに答え、クロノは口を開く。

「簡単に言うそうですね、魔法には大きく分けて二つの体系があるので。一つは、僕やなのは、フェイト、そして現在の魔導師の多くが使用するミッドチルダ式。そしてもう一つが、あの守護騎士達、そして今恭也さんが用いたベルカ式になります」

「ふむ。それがなぜベルカ式だとそこまで驚く？」

「先ほども言ったように、現在はミッド式の使い手がほとんど、ミッド式が主流なんです。ですから管理局においてもベルカのデバイスはほとんどありませんし、やはりベルカ式魔法の使い手もほとんどいません。言ってしまうえば、ベルカ式魔法は現在においてはレアスキルの一つでさえあります」

「……なるほど。だからなのはもフェイトも驚いているのか」

納得するが、そこで恭也も疑問に思う。

「……じゃあなぜその珍しいらしいベルカのデバイスがここに？ それに、それを俺に渡してしまってもいいのか？ さらに言えば、なぜ俺はベルカ式が使える？」

恭也の問いに、回りくどい説明になってしまっていますが、と前置きし、クロノは語り出す。

「魔法には先天的な資質が大きく関わってきます。ですので、恭也さんに渡すデバイスを選ぶ時、当然恭也さんの魔力適正を参照したんです。その結果が示していたのは、なのはほどではないにしろ膨大な魔

力を持っていることと、そしてミッドよりもむしろベルカに適正があるだろうと言うこと。迷いましたが、たしかに恭也さんの戦闘スタイルを鑑みても、ベルカ式は合っているように思えたので、まずはベルカのアームドバイスを候補として渡すことに決めました。

……恭也さんの質問にお答えしますと、一つ目、珍しいと言っても管理局が保有していないわけではないわけではありませんから。二つ目、むしろ使用できる者が少ないため、正直に言えば、管理局の技術部などからすればデータを取る意味でも使えるのならば使ってほしいのです。三つ目は……生まれもつてのものなので、なんとも言えません」

「なるほどな……ありがとう」

だいぶかみ砕いてくれたのだろうクロノの説明に礼を言い、恭也は魅月に視線を落とす。

「いい刀なんだがな……。あまり使える者が多くなかったということか」

「いえ、……正確に言う……正直に言う……」

一人言のようにつぶやいた恭也の言葉に、言いにくそうにしながらも、クロノは、

「むしろ、使えても使わなかった、ですね」

そう言った。

「え、どうして？」

「なにか特殊な機能でも？」

なのはとフェイトは疑問の声をあげる。そして、恭也としても気持ちと同様だ。

「なぜだ？ 本当にいい刀だぞ、こいつは。眠らせておくのは惜しいだろう」

そこに魅月が割って入った。

『情け深き貴方よ、いいのです。仕方がないので』

「魅月？」

『魔導師にとってみれば、私は役立たずですから』

「……役立たず？ なぜだ？」

そんなことを言われても、恭也としては納得がいかない。

「役立たずは言い過ぎですが、……実際のところ、そのデバイスを有効に使える魔導師なんてほとんどいないんです。ベルカ式であることを抜きにしても」

「なぜ？」

問われたクロノは、また回りくどくなりますが、と言ってから説明を始める。

「デバイスには得手不得手というものがあります。デバイスなしでも魔法は使えます。デバイスはその使える魔法の中からデバイス自身が得意とする分野の魔法の発動を強化増幅補助するものなんです。……そしてそのEntzuckend Mond……魅月が得意とする魔法分野が、通常の魔導師にとってはあまり有用ではないのです」

「ふむ……どんな魔法なんだ？」

「“身体強化”と“斬撃強化”です。魅月は、この二つの魔法に非常に特化して作られています。魔導師の肉体を強化して力を強く動きを素早くし、そして斬撃に魔力を加えることで斬撃自体も強化する……そのためのデバイスなんです」

「……あー」

「……なるほど」

その説明に、なのはとフェイトは納得したような声をあげた。

しかし、恭也は眉に皺を寄せる。

「……いや、そのどこが役立たずなのかわからんぞ。いい能力じゃないか、願ってもない力だろう」

「あのね、お兄ちゃん」

恭也になのはが、魅月へ気を遣っているのだろう少し言いくそうに言葉を放つ。

「その願ってもないって、それって、その………剣士として、だよね？」

「……ああ」

その言葉にようやく恭也も見当がつき始める。

クロノがまとめるように言う。

「魅月は、使う者がそもそも剣士として優れている事が前提のデバイスなんです。”身体強化”も”斬撃強化”も通常の魔導師にとつて役に立たないわけでは決してありません。近接戦闘系にとつては重宝するでしょう。しかし、魅月はその二つの魔法の強化増幅にあまりに特化しすぎている。たとえば、フェイトのバルディッシュと比較してみればわかりやすいかもしれません。バルディッシュも近接向きですが、魔力光の刃やフォームに応じての近距離中距離・さらに特定用途の使い分け、インテリジェント故の魔法自動発動もあり、その機能はかなり汎用的でしょう。対し魅月は、”身体強化””斬撃強化”の魔法への補助機能は非常に強いものの、それ以外の魔法に関してはほぼ何の補助機能もありません。汎用的とはさすがに……」

「ふむ……」

さらにクロノは続ける。

「また、元々、ベルカ式アームドデバイスというのは武器の形状をしている事が多く、使い手に近距離戦の技術を求める面があるのですが、やはりその中でも魅月はそれが際だっていると言えます。ベルカ式の大きな特徴に、カートリッジシステムという、カートリッジと呼ばれる魔力を籠めた弾丸を装填することで一時的に出力を上げる、というものがあります。それ自体は魅月にも備わっているのですが……」

ちらりとクロノは魅月を見る。彼も魅月に気を遣っているのだろうが、言わないわけにはいかないとばかりに説明を続ける。

「恭也さんも見たかと思いますが、騎士の武器、変形しませんでしたか？」

「ああ、したな。質量保存則を無視したような……それが？」

「ええ、そのように、ベルカ式アームドデバイスの特徴の一つに、カートリッジシステムによる出力増強を利用した大規模な変形があるのですが……魅月にはそれがないのです」

「……ない？　しかし、そのカートリッジシステムとやらは搭載しているんだろう？」

「ええ、そうです。ですから、魅月でのカートリッジシステムの利用法

と言うのは、通常魔法の強化のみなんです。そして魅月を通して発動する通常魔法は基本的に”身体強化”と”斬撃強化”のどちらかですから、それらの強化となると……」

「……やはり、使用者がそもそも優れた剣技を持っていないければあまり意味がない、か」

「ええ」

そして、何とはなしに、しばしの沈黙が訪れた。

それを破ったのは、

「な、なんていうか、すごく渋いんだね、魅月さん……」

なのはのそんな感想。

「玄人好みと言うか……突き抜けた設計思想であるのは間違いない。だから、あえて自分のデバイスに魅月を選ぶというような人はいませんでした。そんなわけで、今まで魅月は誰にもまともに使われてこなかったんです」

「なるほど、話はわかった」

ふーっと、恭也は深いため息をついた。

「お前も、苦勞してきたんだな」

そして、本日三度目ながら、今日一番の勞りを籠めて魅月の鞆を撫でた。

『お氣遣い感謝いたします、心優しき貴方よ。貴方に会えただけでも、今日は私にとって今までで最良の日です』

「大げさだな……。まあいい、それじゃ、これから頼むな」

『……え？』

「……いや、そんな意外そうな声を上げられても困るんだが……」

『貴方よ、先ほどまでの説明は聞いたでしょう』

「まあ、聞いたが」

恭也としては至極当然に言っただけなのだが、魅月から帰ってきたのは呆氣にとられたかのような反応。

「クロノ、確認だが、管理局としては魅月を俺が使ってもいいんだよね？」

「ええ。それはもちろんですが……」

「……？ どうした？」

「あくまで、魅月は候補の一つのつもりでお持ちしました。適正検査結果を見る限り、恭也さんはミッドの魔法も使えそうなので、近接向きのミッド式デバイスもいくつか持つてきてあります。魅月ほど突き抜けたものでなく、汎用性のあるものです」

そう言つて、クロノはいくつかの、待機状態のデバイスを取り出した。

「ミッド式では珍しいのですが剣形状のものを揃えてありますし、二刀のものもあります。こちらを試してみてください」

「……いや」

乗り気ではない恭也に、魅月が声を掛ける。

『どうか私の事は気にせずに、貴方よ。きちんと貴方のためになるデバイスを選んでください』

「……わかった」

その言葉に、恭也は魅月を解除し、

「じゃあちよつと見てみよう」

他のデバイスをそれぞれ展開し、具合を確かめていった。

「どうでしょうか？」

一通り試し終わった恭也に、両手の上へ待機状態のデバイスを並べたクロノが問うてくる。

「ここに揃っているものはすべて、恭也さんへお譲りする許可は出ています。好きな物を選んで頂いてかまいません」

「……いいのか？ 前にも言ったとおり、俺は管理局に所属しようと思っているわけではないし、正式に協力しようと言うのでもない。あくまでなのはがこの件に関わり、さらに狙われる可能性があるのであれば、場合によってはあの騎士達と戦うと言うだけだ。それなのに……」

「いえ、いいんです。闇の書の事件においてやはり騎士は強敵です。で、こちらとしても……その……生身で騎士と渡り合い、さらに魔力適正もある人物が一時とは言え協力してくれるとあれば、是非とも魔法を身につけて頂きたいですから。それに……」

「それに？」

「なのはの兄で、フェイトの師となる人なら、人柄に関しても問題ないだろうからと艦長が」

どうリアクションしたのか、迷う恭也の隣ではなのはは嬉しそうに微笑み、フェイトは少し照れくさそうに下を向く。

「まあ……そういうことなら。それじゃ、選んでいいか？」

恭也は結局、そう言っただけ話を進めることにした。

「お兄ちゃん、もう決まってるの？」

「ああ、そもそも迷ってすらいない」

なのはの声にそう応え、そして恭也は、

「よろしくな、魅月」

控えめに輝く、銀の指輪を手にとった。

『……情け深き貴方よ。その言葉と心だけ、受け取っておきます』

しかし、魅月は首を振るように明滅し、そんな言葉を返した。

「なぜだ？ すまん、俺ではやはり不満か？」

『断じて違います、謙虚な貴方よ。貴方の秘めたる魔導の才は相当なものでしょう。貴方に展開されたとき、流れ込む魔力から、感じる貴方のリンカーコアから、それが分かりました。そして、貴方の剣の腕は言うまでもありません。あなたはきつと、すぐにでもとても強き騎士になる』

「褒めてもらえるのは嬉しいが、ではなぜ？」

『今、私の隣に並ぶデバイス達は、近接上級向けの立派なものでしょう。どうか彼らを使ってあげてください。それが彼らのためであり、そして何より貴方のためです、才ある貴方よ』

魅月は続けた。

『今日、貴方に振るってもらい、本当に嬉しかった。そしてそれだけで、役立たずの私には十分な幸福なのです。さあ手を離して、私を置いてください、眩しき貴方よ』

そうして魅月は言葉を切り、押し黙った。

クロノ、なのは、フェイトはそんな彼女に何を言うべきか惑い、言葉を詰まらせる。

そして恭也は、

「そうか。悪い、断る」

躊躇なく、自らの小指に魅月をはめた。

『なにを……っ』

「展開」

疑問の声をあげる魅月を黙殺し、恭也はバリアジャケットと共に二刀を展開する。

そして、二振りを同時にすらりと抜きはなちつつ、言う。

「……ああ、やはり、君はいい刀だ」

『……私に関する説明は聞いたでしょう、私と違って有用なデバイスも見たでしょう、少々強引な貴方よ。私は魔導師にとって、あまりに』

「魅月」

『……何でしょう』

「俺は魔導師である遙か前に、剣士だ。であれば、自らに感動を与えるくらいの刀があれば、それを放ってはおけない」

感動。魅月を抜きはなつたときの感覚を言葉にするなら、まさにそれだった。

『ですが……』

「それに、”身体強化”に”斬撃強化”特化、いいじゃないか。むしろ俺からしてみれば、願ったり叶ったりだ。シンプルで、清々しい。剣士としての俺を最大限生かしてくれる」

他のデバイスと比べてみても、圧倒的に自分に合っている気がする
と、恭也は思う。

「頼む、俺の力になってくれないか、魅月。大切なものを守りたいんだ。君の力が欲しい」

そして恭也は自らの眼前に魅月を掲げ、彼女に向かって頭を下げた。

「お兄ちゃん……」

「恭也さん……」

そんな恭也の様子に、思わずというように、なのはとフェイトは自分たちのデバイスを優しく握る。

『It's a happy thing that can serve a splendid master』

『Just like us』

そんな主に、デバイス達はそう声を返した。

そして幾ばくかの時が過ぎ、魅月が声を発する。

『……貴方よ』

「ああ、なんだ？」

『……私は、貴方が思うほど、貴方の役には立てないかもしれない。それでもいいのですか？』

その声に、恭也は苦笑しながら事もなげに返した。

「そうしたら、それは俺が未熟なだけだろうさ。だから、俺が精進する」

その言葉に、嘘はない。

「魅月、頼む」

さらに重ねて、もう一度、恭也は声をかける。

『……貴方よ』

「ああ」

そんな恭也に、

『…………——主と呼んでも、いいのですか？』

控えめな声で、しかし確かに、魅月はそう言った。

「それは俺が聞きたい。俺を主と呼んでくれるか？」

『……はいっ』

その返事に、恭也は掲げるように持った魅月の柄に額を合わせ、彼女に礼をつぶやいた。

そしていったん、彼女を鞘に収めると、

「っー」

御神流奥義 薙旋

抜刀からの四連撃、自らが最も得意とする技を虚空に放つ。

彼女への、挨拶のように。

次いで、言う。

「名乗るのが遅れたな。永全不動八門一派・御神真刀流小太刀二刀術

師範代、高町恭也だ。よろしく頼む」

『その名、この鋼の体に刻みます。ベルカ式アームドデバイス・Ent zuckend Mond……いえ、改め——魅月』

「む、改めというのは……」

『どうかこう名乗らせてください。私は、貴方に頂いたこの名をこそ、我が名にしたいのです』

「君がいいのなら、歓迎だ」

『感謝を。では……、ベルカ式アームドデバイス・魅月。願わくば末永く、この身果てるまで貴方の傍に。愛しい、……ああ、愛しい、我が主よ！』

「これでなのは、フェイト、そして恭也さん三人とも、カートリッジシステム使用者か」

アースラの廊下、管制室へと続くその途中でクロノは少し感慨深そうにそう言った。

「でもレイジングハート、大丈夫かな？」

「バルディッシュも、突然改修要求なんて……びつくりした……」

傍らのなのはとフェイトはしかし、心配そうに声を返す。

「インテリジェントにカートリッジなんてあまり推奨される行為ではないけど……彼らが望んだんだ、大丈夫さ。ただ完全に改修が終わるまでは無理は禁物だから、そこはきちんとエイミイの指示に従ってくれよ、二人とも。特になのは」

「は、はい……」

「わかった」

なのはは乾いた笑いを浮かべ、フェイトは素直に頷いた。

なのはのレイジングハート、フェイトのバルディッシュとともにデバイス自身の望みにより、カートリッジシステムを取り付けることが決定したので、二人は相棒達を技術部に預けてきたのだ。クロノはその付き添いである。

「お兄ちゃん、魔法の練習進んでいるかな」

二人が説明を受けている間恭也は、訓練室に残り晴れてパートナー

となった魅月と、管制室のエイミイの指示を受けながら魔法の練習をしている。

「恭也さんなら、きつとすぐに覚えるよ」

「検査結果を見る限り、かなり素質はあるみたいだからな。さすがはなのはのお兄さんと言ったところか」

クロノ、フェイトは恭也に対し、そんな意見を述べる。

「あはは……ちよつと照れるけど、うん、お兄ちゃんならきつとそうだね。魅月さんともすつかり仲良しだろうし」

「というか、魅月は完全に恭也さんに心酔しているな、あれは。よつぽど嬉しかったんだろう」

恭也のデバイスとなることが決まった後の魅月の様子を思い出し、クロノは思わず苦笑を浮かべる。

「……ねえ、クロノ」

「ん、なんだ？」

そんなクロノに少し考え込むような仕草をしながら、フェイトが声をかける。

「魅月のことだけど……、本当にただのアームドデバイスなの？ 魅

月、とても高い知性を持つていたように思う。アームドデバイスにA

Iが搭載されていること自体は不思議じゃないけど、あそこまで高度なのって……」

「あ、私も思った。まるでインテリジェントデバイスみたいだったよね、魅月さん」

二人の質問に、クロノは、

「正直に言えば、僕もあれには驚いたんだ……」

そう答えた。

「え？」

「驚いた、つて……？」

疑問の表情を浮かべるのはとフェイトに、クロノは説明を加える。

「本当に、彼女は扱える人も扱おうとする人もほとんどいなかったんだよ。だから使用データなんてほぼないし、彼女も今考えればそんな

管理局をあまり信用してくれなかったのか、最低限しか喋らなかつたんだ。だから、恭也さんに剣として振られた後、流暢に喋り始めた姿を見て、正直なところ……」

「そうだったんだ……。じゃあ、ほんとにお兄ちゃんに振るってもらえて嬉しかったんだね、魅月さん」

「ああ、だと思う。今回彼女を持って行ったのだったって、結構駄目もとみたいなものだったんだ。もしかしたら、くらいいな。本命は後に出したミッドのデバイスさ。でも結果的に恭也さんはずいぶん気に入ってくれたみたいだし、魅月はあの通りだ、良かったよ。……そんなわけで、管理局にはあまり魅月に関するデータはないんだ」

「それじゃあ、魅月は管理局が作ったデバイスじゃないの？」

フェイトの言葉に、クロノは頷く。

「おそらくな。管理局内の資料にも大したことは書かれていない。”使用者の能力を活かし切る”ためのデバイス、っていう説明書きと、判明している基本的なデータだけだ。どこからか流れてきたのを管理局が保管しておいたのか……」

詳しいことはわからない、とクロノは首を振った。

「フェイトが指摘したとおり、アームドにしては過剰と言っていていろいろ高性能と言えるAI、……。それに、内部での演算処理方式もなんだか妙なんだ。プロセスが変というか……古代ベル方式だからミッド式と比べて差異があるのは当然だけど、それにしたって少し特殊だ。現状、謎が多い。……ああ、もちろん危険性がないことだけはきちんと確認してあるから安心してくれ。暴走したりはしないから」

「それは安心だけど、……でももし危険があるって聞いても、お兄ちゃんならそのまま使い続けるって言いそう」

「確かに……」

兄の性格をよく知るなのはと、まだ短い付き合いながらもなんとなくその人柄がわかってきたフェイトとしては、恭也はあまりそう言ったことに頓着しなさそうに思えた。

「でも、本当に恭也さんと魅月は相性がいいと思う。身体強化はわからないけど、斬撃強化なら恭也さん、デバイスなしでも発動させてた

くらいだし」

「えっ！ 嘘、いつ!？」

「初耳だな、それ……」

話を変えるように放たれたフェイトの言葉に、なのはとクロノは強い反応を示した。そんな二人にフェイトは続ける。

「本当に一瞬だし、かなり粗い使い方だったけど、魔法としてみるなら斬撃強化行為相当のものを一度だけ、多分恭也さんは発動させたと思う。あの、騎士の腕が恭也さんの胸から生えてリンカーコアを掴んだ……その後」

「あ、守護騎士さんの腕をお兄ちゃんが……その……」

「……剣で刺したとき。守護騎士はバリアジャケットを着ていただろうし、それなら腕にもその効果はあるはずだから、いくらなんでも力技だけで腕に刀を刺すことはできない……はず。リンカーコアが露出するっていう事態も相まってだと思うけど、本当に突き立てるその一瞬だけ、魔力が剣先に纏わった、ように感じたんだ。私の勘違いって言う可能性が高いから正式な報告の場では言わなかったけど、恭也さんの適正検査の結果を聞いた後で考えてみたら、やっぱりありえる話になって思っ」

「なるほどな……たしかにありえない話じゃない。そうすると本当に、魅月を持って行ったのは正解だったな……っ」と

そんな話をしている間に、

「着いたか」

三人は管制室のドアの前まで来ていた。

恭也はまだ訓練の最中だろうから邪魔するのも悪い、しかし様子だけは見たい、ということ、モニターされているだろうここへ訪れたのだ。

三人はドアを開け、中に入る。

「エイミー、どうだ、恭也さんの調子は……エイミー?」

クロノはすぐに、椅子に座る、恭也の指導を任せておいた自身長い付き合いの女性、エイミーにそう声をかけた。

しかしクロノの言葉に声では答えず、エイミーはただ無言でモニ

ターを指さした。

「……………？ なんのつも……………つ!? なんだあれは!？」

訝しげに思いつつもその仕草に素直に従い、顔を上げ、モニターの方を向いたクロノの目に飛び込んで来たのは、

「どんな状況だ!」

色とりどりの眩い弾丸雨あられ。訓練室の天井近くで飛空しつつ半円状に並んだ、数十人の武装局員と思しきものたちが、眼下に向かって射撃・砲撃魔法を射出しまくっていた。そして、

「あれって、お兄ちゃん!」

「恭也さん、だよね……………」

その先には、驚異的なスピードでそれこそ瞬くように身を翻し、弾丸の間を舞い続ける黒衣の姿。

間違いなく、高町恭也その人だった。

「最初はね……………一人だったの」

そして沈黙を保っていたエイミーが唐突に口を開いた。

「ある程度の基礎の練習が終わった後、恭也さんが避ける練習と斬る練習がしたいから、もし誰か手が空いていたら撃ってくれないかって……………。それで、まあいいかって、近くにいた武装局員の一人に頼んでやってもらったの」

でも……………と、エイミーは続ける。

「二人じゃ話にならなくて。これじゃ練習にならないなって思ったから私、さらに人数を増やしたの……………。三人、四人って。でも駄目で、かすりもしなかった。恭也さんはどんどん動きが良くなっていったから、むしろ最初よりお話にならなくなって……………。十人目までは私の指示。そしてそこからは協力してくれてる局員が自主的にね、どんな人集めて……………、プライドを刺激しちゃったのか単にノリが良かったのかはわからないけど、今は、確か二十五人、かな」

「にじゅう、ごにん……………」

そんな人数の射撃・砲撃を、魔法を覚えて間もない者が捌ききれものなのか。

クロノは既に、恭也に関してはおもう常識的に考える事を放棄したはずだったのだが、しかしやはり衝撃を隠せない。

「エ、エイミィ、恭也さんの動き、アップにできるか？」

「……うん、はい」

エイミィはその指示通り、コンソール上の手を動かし、全体俯瞰だったモニターを恭也周辺にクロースアップさせる。

「……うわあ」

思わず声をあげたクロノが見たのは、

「……なんと言うかまあ」

「すごいでしょ？」

躲し、斬り落とし、確かに弾丸の雨をやり過ぎす黒衣の姿。

そして黒衣は、

「すごいと言うか凄まじいと言うか……。しかし、どういうスタイルだ……？」

床や壁だけではなく、『空』も蹴ることで、自在に移動していた。飛んでないにも関わらず、あまりにも自由に跳ぶことで、もはやその様は空戦的とすら言える。以前彼は床・壁・天井すべてが足場と言っていたが、これはそれを超え、何もなければの空間すら蹴って身を翻しているのだ。

まさしく、縦横無尽自由自在。彼は決して狭いとは言えない訓練室の中を、三次元的に所狭しと駆け回っている。

これはいったいどういうことだと、よく目を凝らしてみれば、

「……あれは」

彼が空を蹴るその直前から直後にだけ、

「空中に足場を生成しているのか……？」

黒色の魔方阵が現れていた。彼はそれを蹴り、移動しているのだ。足場を作る魔法。

特段珍しいものでも難度の高いものでもないが。

「エイミィ、飛翔魔法は教えなかったのか？　なんだってあんな方法を……」

空戦においてはやはり、飛翔魔法が主流だ。足場を使う戦法がない

わけではないが、どちらかと言えば補助的な意味合いが強い。少なくともあんな風にメインの空戦方法に使う物ではない。

「教えたんだけど、本人曰く、あんまりしつくりこないって。できないわけじゃなかったし、私から見れば筋も良かったと思うんだけど、どうも本人的には『脚で移動した方が断然速い』って。それで足場を作る魔法か何かないかって聞かれたから、教えてみたらご覧の通り」
「なるほどな……」

恭也の元々の戦闘スタイルや体捌き、そして魅月の”身体強化”を考えると、下手に飛翔魔法を使うよりたしかにこの方法の方がいいのかもしれない。……魔導師の常識からは大きく逸脱しているが。

「でも、さすがはなのはちゃんのお兄さんって感じかな。”身体強化”と”斬撃強化”は魅月の補助もあってだと思っけど、あつという間にもものにしたよ。足場生成だって、こつちは魅月の補助がほとんど期待できないにも関わらず、まあまだちよつと危なっかしい構成も雑だけど、でも見ての通り実戦で生かすレベルに使えてる。すごいよ、あの人。まあ元々の戦闘能力からおかしかったけど、あと一週間もして基本を完全にマスターしたら、魔導師ランクは多分、相当なものになるんじゃない？」
「だろっうな……」

そもそも生身で戦闘力的にはAAAレベル程度のものがあったのだ。それに加えて魔法を身につけたら、その力は恐ろしいくらいのものになるだろう。

クロノがふと隣を見れば、

「うわあー……、すごいね、フェイトちゃん。私、お兄ちゃんに射撃当てる自信ないや。何撃つても避けられそうだし斬られそう」

「私も……、改めて、全然勝てる気がしない……。近中距離戦は言うまでもないし、遠距離だってすぐ詰められて終わり、かな」

なのはとフェイトの二人は、そう声を漏らしていた。

この二人だって、本当に一握りの逸材なのだ。

その彼女らにそう言わせる彼は、クロノにとって、未だ持ってやはり何かの冗談としか思えなかった。

「でもほんと突き抜けたスタイルだね。恭也さん、この練習初めてからまだ一回もシールド魔法使っていないんだよ。全部避けるか斬り落としてる」

「……そんな馬鹿な。教えはしたのか？」

「一応ね。まあ本当に原理的な部分は足場生成と同じだからそれと一緒に。持続させるのがちよつと苦手みたいだったけど、でもちゃんとできてたわ」

「それでも使わないのか？」

『両の手に剣を持つ御神の戦いに盾は不要。防ぐ間があれば斬る』
だって」

その言葉に、最早お手上げとばかりにクロノは両手を宙へ、そして首を振った。

「ふむ、大分コツを掴めてきた気がするな」

『この短時間でよくぞここまで。素晴らしいです、雄々しき主よ』

訓練室の中、視界を埋め尽くすほどの弾丸を躲し捌き斬り落としたしながら、どこか平然と呟いた恭也の言葉に、魅月が賛辞を送った。

「魅月の力も大きいのだろうか？ やはり君を選んで正解だったな」

『いえ、これは主の実力によるものかと。しかしそのお言葉を頂けるのは幸せです、主よ』

会話を交わしながらも、右から迫った光弾の纏まりを一度にまとめ、斬り裂き宙へ散らせ、すぐさま足下に足場を生成、ステップを踏み、空いたスペースに飛び込む。

そして体勢を直し、次なる弾に備える。基本的に恭也がやっていることはこれの繰り返しだ。

『眩体は安定して持続しています。晃刃の発動もかなり滑らかに、そして強力になってきました。総じて順調です、主よ』

「そうか、ありがとう」

定期的に現状を教えてくれる魅月の声に礼を言いつつ、恭也はさらなる向上を目指し集中力を高めながら、教わった事を心の中で再確認する。

眩体げんたいは身体強化の魔法だ。

一度発動させればその後は意図的に切らない限り持続するタイプで、使う魔力を増減させることでその効果の大きさはある程度可変。また、術者の体に負荷がかかるため推奨はされないが、重ね掛けをすれば大幅な出力向上も可能らしい。

だが魅月としては、大幅な出力向上を狙うのであれば、効果は一時的だがそれゆえに重ね掛けよりも恭也の負担が少ないカートリッジロードを使用して欲しいと言っていた。

晃刃こうじんは斬撃強化の魔法。

刃に魔力を漲らせその強度を跳ね上げるとともに切断力も向上、斬るという行為自体を強化する。指導をしてくれたエイミーが言うには、アクショントリガーと言う行動に付随にして発動するタイプの魔法、らしい。眩体は発動時に口で魔法の名前を言ったが、晃刃にはその必要はない。斬る動作と共に魔力を奔らせ、発動する魔法だ。二刀による連撃をする事が少なくない恭也にとってこれは非常に助かった。さすがに、いちいち口にしてなどいられない。

こちらも使用する魔力の増減により効果のほどは可変。眩体と違い重ね掛けは存在しないが、カートリッジロードによる威力向上は行える。また、もちろん晃刃は魅月の刃への使用に限定された魔法なわけではないので、飛針や鋼糸の強化にも使える。恭也としてはこれも有り難い話だった。

ちなみに眩体、晃刃ともに元の名称を日本語訳した名である。魅月曰く、それと分かれれば元の名称以外で呼んでも特に問題はないらしい。

どうも発音に自信がない恭也としてはこれまた有り難い話だ。

「しかし……」

『いかなさされました？』

「いや、魔法というのはすごいものだな……と思っただけ」

眩体、晃刃。二つの魔法の効果は、劇的と言えた。

生身とは比べものにならないほどに動作は機敏に強力になり、振るう刃の切れ味は格段に向上、魔法の弾すら切り裂ける。恭也からして

みれば反則技とすら言える。

そしてさらに、身体強化魔法である眩体は、思わぬ効能をもたらした。

(どうやら、神速の使用回数は大分増えたみたいだな)

魔法により強化された体は、神速の負担に今までよりも多く耐えることができるようだ。

試しに何度か使ってみたが、生身の時のような疲労はない。

これなら右膝に古傷を抱える自分でも、少なく見積もっても一日……十回程度はいけそうだ。

それに、眩体を重ね掛けやカートリッジロードを行ってさらに強化した状態で神速に入れば、通常の神速を大幅に超えた速度を出すこともできるかもしれない。

今日は初日であるし体の事も考えそこまで無茶はしないが、後々試してみようと決める。

そんな恭也へ、

『……主よ、しかし私からしてみれば、やはりすごいのは貴方ですよ』
先ほどの言葉に少し呆れたように魅月が声を返す。

『お話を聞きましたが、生身でベルカの騎士に勝利したのでしょうか？
それに今こうしていて伝わってくる技量の高さ、心身の強さ。貴方を知れば知るほど……貴方という主を持てた喜びで壊れてしまいそうです、偉大なる主よ』

「……いや、本当にそれは言い過ぎだ、魅月。君は俺を過大評価するくらいがあるな。というか壊れられたら困るぞ」

『いえ、ご安心を。そうは言いません、貴方が私を必要として下さる限り、私が碎けることはありません。貴方の下に居る限り、私は世界で最も強靱な刃です』

「……そうか。頼もしいことだ」

『貴方のためなればこそです』

いつそ穏やかとすら言える会話をしながらも、しかし状況は非常にめまぐるしい。誘導弾を斬りふせつつ、直射弾を身を捻って躲し、足場を瞬間的に生成、移動、その先でまた新たな光弾の相手をする。

思いつきで提案してみたが、いい訓練だ。協力してくれている方々へ感謝の想いも浮かべつつ、恭也はそう胸の中満足げに思う。

『足場生成もだいぶ安定してきたようです。強度、精製速度共にかなりの向上が見られます』

「ふむ、まあ最初は何度も踏み外し・踏み抜きがあつたからな。それと比べればましになったか。だがまだ意識についてこない部分があるから、全速機動とはいかないな。要精進と言ったところか」

『……申し訳ありません』

突然に、今までの嬉しそうなものとは打って変わって悲壮な声で謝罪する魅月。

『どうした？ なぜ魅月が謝る？』

『こちらの魔法に関しては、私はほとんどお手伝いできませんので……。お力になれず……』

そういうことか。

しかし恭也にとっては、それは謝られることではない。

「君はそういうデバイスなんだろう。そしては俺はそれを納得づくで、それでも魅力的な君に力になって欲しいと頼んだんだ。君に非など一片たりともない。感謝している、魅月」

『主……』

揺れる声をあげる魅月。状況が状況でなかったら、鞘を撫でてやれるのだが、さすがに今は厳しい。どうしたものかと少し悩む恭也だが、

『お言葉感謝します、主よ。……では私は私が力になれる部分で、貴方に全力で尽くします』

「……ああ、頼む」

魅月は力強くそう言った。

これなら心配ないか、小さく息を吐いた恭也に、

『主、……実を言えば、私が強化補助できる魔法は、眩体、晃刃だけではないのです』

突然、魅月はそう言った。

「……なに？ そうなのか？」

思わず驚き聞き返す恭也。魅月は答える。

『はい、主よ。言い訳をするのではありませんが、決して貴方を試していたわけではないのです。ただ、眩体、晃刃……特に晃刃を上手く使えなければ出せない魔法であるので、その習熟具合を見つつお伝えしようと思っていたのです。……不快に思われましたら』
「いやいいさ、そんなことは。俺の事を考えてくれたんだな、ありがとう」

もちろん彼女の言葉を疑うわけではないが、むしろ恭也としてはもし試されていたのだとしても一向に構わない。彼女に協力を頼んだのは自分であり、頼まれた側である彼女からすればそれは当然の権利だろうと思っている。

「それで、それを言ってきたと言うことは、教えてくれると考えていいのか？」

『はい、主よ。お伝えしたいと思います。主はもう眩体、晃刃を十分に使いこなしています。問題ないかと』

「そうか。それで、どんな魔法なんだ？」

『はい、名を影刃と言います。これは、ある種の中・遠距離魔法のようなものです』

「中・遠距離？　ん、読めてきたな……。もしかして」

予想がついた恭也は、それを口にしてみる。

「飛ぶ斬撃、か？」

『はい、正解です！　聴い主よ』

魅月は嬉しそうに声を響かせた。その様子に思わず苦笑する。

「しかし……そうか、飛ぶ斬撃か……」

『……お気に召しませんでしたか？』

「まさか、逆だよ。子供の頃からの憧れの一つだ」

剣を持ったものならば一度は考えることだ。飛ぶ斬撃、周囲から人間止めちゃってると言われる恭也だがさすがに生身では到達できそうになかった領域だ。

正直、胸が躍る。

『そうですか！』

「ああ、ありがとう。まさか叶うとは思っていなかった。それじゃ、説明を頼む」

『はい。影刃は、晃刃の発展技のような魔法です。晃刃にて振るわれる刃は魔力で強化される私の体たる実体の刃と、それに付与される斬撃効果を持った魔力そのもので出来た刃、その二つが重なり合わさったものですが、影刃はその内後者、魔力の刃のみを切り離し飛ばします。実の刃の裏にある、影の刃を飛ばす魔法。故に、影刃です』
「なるほどな……」

魅月はさらに詳しい説明を加えた。

それによれば、影刃もまた晃刃と同じくアクショントリガータイプの魔法らしい。魔法名やかかけ声の発音は問わず、刃を振るいつつその斬撃を切り離すイメージで魔力を奔らせることにより発動する。またカートリッジロードでの増強も眩体、晃刃と同じく可能とのことだ。

「それじゃ隙を見つつ、早速試してみるか」

そう言つて恭也は、躲し斬り落とし避けの作業のなか、空白となった瞬間を利用し、魅月の指導の下何度か試して見る。

すると、五度目ほどで、

「っ！ おお……」

『素晴らしい！ お見事です、才気溢るる主よ！』

思わず漏らした恭也の声と、弾けるような魅月の歓声を置き去りに、刀身から奔った三日月状の黒い刃は前方へ鋭く飛んでいった。

「……速いな。切れ味もなかなかのようだし」

その速度は恭也に襲いかかってくる光弾と比べても一段上に見える。また、途中ぶつかつた光弾を幾つも切り裂いていった様子を見ても、その威力にも期待が持てそうだった。

『はい。速く鋭くがモットーの魔法ですから。さらに所謂、溜めの時間も存在しませんので出は早く、連射も可能です』

「いいことだな」

『光栄です。……ただ、その代わり一度に発射できるのは刀一振りにつき一つまで、つまり同時発射は私を両方とも振ることによつて実現

する二発までです。また、誘導性は皆無で、軌道は直進だけです。それと、発動には必ず本体を……つまり私を振るモーシヨンが必須となります、どれだけ慣れても上達してもそれを略することはできません。以上の事をご理解ください』

「ああ、わかった」

数発の同時撃ちによる範囲攻撃が望めないというのは多少痛いですが、発動に溜めがないのであればそれは恭也が刀を速く振り、高速連射することで擬似的に実現可能だ。自分の腕次第、ならば望むところすら恭也は思う。

それに直進のみというのはなんの問題もない。元より、愛用する飛び道具である飛針には追尾機能などなかったのだから。

また、刀を振るモーシヨンを略せないと言うのは仕方ない話だろう。そこは二刀の利点を使い、上手く補うのみだ。

影刃、総じて自分好みの技と言えそうだ。恭也は満足げに笑みを浮かべつつそう思った。

しかし、同時に疑問も沸く。

「気に入ったよ、いい魔法だ。……だが、なあ、魅月」

『なんででしょう?』

「これがある事はクロノの説明にも出てこなかった。つまり、管理局も知らなかったのだろうか?」

『はい、お話したのは主が初めてです』

「なぜだ? 晃刃の習熟具合を……という話もそれはそれでわかるが、しかし影刃を強化できる事を言っておけば、周りが君を見る目もずいぶんと変わったろうに」

強化補助できる遠距離技の一つあるのとないのでは、大分デバイスの印象も変わるだろう。そう考えると、なぜ魅月が黙っていたのかわからない。

問いに、魅月は答える。

『……無駄だからですよ』

「無駄? 何がだ?」

『影刃の事を話しても、です。私は主のような、己の技を生かし近距離

で戦い抜く志を持った者にこそ力を与えられるデバイスであり、影刃で多少気を惹いても、結局眩体と晃刃のみで戦い抜けるような者でなければ私を使うことに意味はありません。そもそも優れた剣技を持つ者でなければ鋭い影刃は出せませんし。だから、無駄なのです』

『……それに』

そして少し声のトーンを下げ、言う。

『怖かったのです。半端に使われた挙げ句、途中で投げ出されるのが。だったら初めから、選ばれない方がいいと思っただけです』

「魅月……」

その言葉にその声に彼女の苦悩が滲み、恭也は知らず彼女を握る力を少し、強めた。

『主、ですから私は今本当に幸せなのです。貴方に巡り会えたことが、嬉しくてならない。私はきつと、貴方のために作られたデバイス、そう思ってしまうくらいに』

そして彼女は、本当に嬉しそうにそう言うのだ。

「魅月」

『何でしょうか?』

「俺は、強くなる。君がどれだけ素晴らしいデバイスか、みんなに教えてやらなきゃな」

『……主』

魅月の声に、恭也は再度、彼女を強く握る事で返事を返した。

「さて、とは言ったものの、そろそろこの訓練は終わらせなければならぬ、か。ずっとやってるわけにはいかんしな」

『あ、はい、そうですね。もうかなりの時間続けていますから……。どうします? エイミイさんに連絡を?』

「ふむ……いや」

その言葉に一瞬考えるも、

「もっとわかりやすく終わらせよう、せっかくだしな」

『わかりやすく?』

「ああ」

そう答えた恭也は、自らの頭上を見やる。そこには自分に斉射を繰り返す武装局員達。

恭也はその中から、

「あの人だな……」

リーダー格らしき男に目星をつけた。そして、

「いくぞっ！」

周りの光弾を斬り落とし、作った一瞬の時間に、

「……はあああっ！」

頭上へ両の魅月から、覚え立ての影刃を連射。黒い刃が光弾を斬り裂いていく。

ざわめく局員達。しかし影刃は誰にも当たることなく後方へぬけていく。

避けられたのではなく、

(これでいい。あちらに攻撃する許可はとっていないからな)

わざと外したのだ。

恭也の狙いは、射撃手を倒すことでなく、影刃により光弾をかき消して上空への道を作ることだ。それはもちろん、一瞬だけしか現れない道ではあるが、恭也には、否、御神流には、

(一瞬で十分！)

瞬くような、わずかな時間さえあればいい。

御神流奥義 神速

世界がモノクロに変わる。周りのものたちはすべて制止し、動くのは恭也だけとなる。その中を眩体の身体強化によりいつもよりも機敏かつ力強い動きで、あらかじめ必要な位置に作っておいた足場を強く踏み、恭也は一気に上方へ抜けた。

「……な、どこいった!?!」

そして世界に色が戻り、消えた恭也に動揺を見せるリーダー格の男、その後ろから、

「ありがとうございます」

恭也はそう声をかけ、彼の肩へ手をおいた。

「おかげ様で、いい訓練になりました」

既に魅月は納刀し、そう爽やかな笑みを浮かべる恭也に、

「……………いい、いえ。お役に立てたなら……………」

信じられないものを見たという目と、引きつった表情で、男はそう言った。

『お見事です、礼儀正しき主よ』

それきり少しの沈黙が訪れた訓練室に、やがてそんな魅月の嬉しそうな声が響いた。

(やっぱり、恭也さんはすごいな……………)

高町家道場の隅で一人恭也を待ちながら、彼がデバイスを手に力を発揮する様を思い出しつつ、フェイトは改めて彼に対してそう思った。

魅月というデバイスを手にした恭也は日々魔法の鍛錬を重ねている。ユーノやアースラスタッフに遠隔で結界を張ってもらった道場や公園で、地道に魅月と研鑽を続けている。

そしてその実力は順調に伸びていっているようだった。……………いや、むしろ、順調なんていう言葉では控えめなくらいの成長速度だ。

彼には元々、その身に剣士として達人と言つていいほどの力があつたわけだが、フェイトが思うに、彼の魔導師としての成長速度の一因はそこにある。

彼は新たに得た魔法という力を、一から伸ばしていくのではなく、すでにある剣士としての能力、技術、そしてそれを積み上げたノウハウの上に展開していつているのだ。故に歩みは速く、得ていく総合的な力は強大だ。

彼は、剣士としての力に魔法を足し合わせているのではない、掛け合わせているのだ。

そんな事ができるくらいに、彼は自分を高める方法を血の滲む思いで、これまでの人生の中で獲得していたのだ。

それはやはり、すごい事だと思う。

そして、さらにすごいのは、

「……いいのかな、こんなに甘えて」

それを誰かに伝える能力にも長けているということだ。思わず呟いてしまった言葉のとおり、フェイトとしては、なのはとは違い大して彼に関係がないはずの自分が、その恩恵をこんなに受けてしまった方がいいかと思ってしまう。

自分は、強くなっている。

それははつきりと自覚できた。

まだ本格的に教わりはじめて十日ほどだが、動きは日に日に洗練されていくし、近接戦における理論と経験はどんどんその深みを増していく。

自分が思っていたより遙かに、自分は強くならせてもらっている。彼の鍛錬はあの医務室での言葉通り確かに厳しいものであったが、しかしその厳しさには一切の無駄がなく、ただ自分を強くするためだというのがよくわかるものだ。むしろ、厳しさというよりは、これは彼の優しさなのだと思う。

本当に、本当に心からありがたく思う一方、しかし、だからこそ、やはり迷惑なのではないかと言う考えが、どうしてもフェイトにはぬぐえない。

こんなに手を尽くし、心を配ってもらっているのか。

自分は彼にこうまでしてもらえるような存在ではないはずなのに。フェイトはやはり、そう思ってしまうのだ。

だが。

だが、それでも、同時に強くこうも思ってしまう。

願ってしまう。

(このまま、ずっと……)

そんな風に、望んでしまう。

ゆつくりと、無自覚に、フェイトは自らの頭を、髪を触る。

そこは、昨日恭也に撫でてもらった場所だ。

回避の訓練で今まで出来なかったレベルでの見切りを成功させた自分に、恭也は優しく頭を撫でて、よく出来たなと褒めてくれた。

いや、昨日のその時だけじゃない、上手くいった時は必ず、彼はそう

言つて褒めてくれる。

頭を撫でて。

よく出来たな、と。

たったそれだけの仕草と言葉、彼としてはきつと何も特別なことをしたという意識はないだろう。

でも。

でも。

自分にとっては、そうじゃなかった。

嬉しかった。暖かかった。いつそ、泣きそうになるくらいに。

頑張ったら、認めてもらえる。上手くいったら、褒めてもらえる。

それはフエイトが求めて止まないものだった。

かつて、リニスは自分に、その喜びを教えてくれた。

そして、母は結局最後の最後まで、それを自分に与えてはくれなかった。

欲しかった、ずっとずっと、欲しかった。

自分を見て欲しかった、自分を認めて欲しかった、自分を肯定して欲しかった。

リニスがいなくなつて以来、胸の中にはずっとそんな渴望があつた。

だけど、それを一番満たして欲しかった人は、自分が何度手を伸ばしても、冷たくはね除けるばかりだった。それは最後の最後までそうであり、そしてもう、自分は半ば諦めてしまつていた。

否。

諦めたというよりは、恐れたに近い。

あんな風に、望んでも決して届かない思いをするのは、もう嫌だ。

だから、いい。望まないようにしよう。

そう思つていた。

なんとかして、そう思い込んでいたのに。

至極あっさり、彼はくれた。抱えていた思いを、願いを、叶えてくれた。心の中の満たされなかつた部分を埋める、仕草と言葉で。

リニスと比べることに意味はないし、母と比べることはできないけ

ど、それでも確かに、彼は満たしてくれたのだ。

「……恭也、さん」

彼は、優しい人だ。

もしかしたら一見、怖そうに見えるかもしれない。普段の表情は柔らかないとは言えないものだ。

だけど、その裏に隠された優しさは、少しでも彼と触れあえばすぐにわかる。何気ない気遣いに、仕草に、言葉に、雰囲気、それは如実に表れる。

そして、決して優しいだけでなく、美しいとすら言える強さを持つた人だ。肉体的なものはもちろん、精神的なものも含め、彼はとても強かった。自分の意志を貫き通す、力と心を持っている。彼が自らの命を微塵も惜しむことなく、大切な人を護る姿を目の当たりにしたフェイトにとって、それは疑うべくもないことだった。

なのはがあれだけ慕うのがよくわかる。

自然に、とても純粹に、フェイトはなのはを羨ましく思う。

あんな人に、あんなにも愛を注がれているなのはを、羨ましく思う。

どれだけ暖かいのだろうか、どれだけ満たされるのだろうか、どれだけ幸せなのだろうか。

想像すら出来ない。

なのはにとつて、この世で一番はきつと恭也なのだろう。なのはが家族を皆愛しているだろうが、その中でもきつと恭也は特別だ。なのはが家族たちと触れあう様子を幾度か目にして、なのはが家族について語る言葉を幾度も耳にして、なんとなく、しかし確かにフェイトはそう思う。

なのはが世界で一番に想うのは、間違いなく恭也だ。

そして恭也はそんななのはに、惜しむことなく愛を注いでいる。

彼らのそんな様子を見ることを、決して辛いとは思わない。むしろ、こんなに素敵なのがこの世にあるんだということを伝えてもらっているようで、暖かい気持ちすら抱く。

だがやはり、羨ましいとも思ってしまう。

誰かにあんなに風に愛されたら、誰かにあんなに風に想われたら、

誰かにあんな風に抱きしめてもらえたら。

いや、恭也と言う人を知り、その暖かさにわずかにでも触れてしまった自分はもう、『誰かに』ではなく『恭也に』と思っているのかもしれない。

(駄目、だよ。こんなこと思うのは)

しかしフェイトは頭を振り、自分を戒める。

わかっている、自分が彼にとってそんな存在ではないことはわかっている。

望んではいけない。

導いてくれる、褒めてくれる、それだけで十分、十分すぎることなのだ。

それ以上を望んではいけない。

叶わないと思っていたことを叶えてくれた彼だからこそ、フェイトは今以上を求められない。そんなのは彼に悪いし、そして彼に本気で求めてしまつて、彼が応えてくれなかった時の事を考えると、怖すぎて出来はしない。彼は冷たくはね除けるなんてことは決してしないだろうが、それでもだ。

今で十分、今で満足、今で幸せ。

そう思わないと。そう思うべき。

「……そうじゃなきゃ、駄目なんだ」

「なにが駄目なんだ？」

「っひゃー！」

眩かれたフェイトの一人言に返ってきたのは、今の今まで思い浮かべていた人の、そんな言葉と、

「すまんすまん、そんなに驚くとはな……」

「い、いえ……あ」

目の前に差し出された一本のペットボトル。大きな手に握られているそれは、どうやらスポーツドリンクらしい。

「とりあえず、飲んでくれ。季節が季節だから温かい飲み物と迷ったんだが……、運動したばかりでまだ体は火照っているだろうと思つてな。それでいいか？」

いつの間にか道場に帰ってきていたらしい恭也は、
「あ、はい！ 冷たいもののほうが、今は……。ありがとうございま
す」

「いや」

答えを聞くと一つ頷き、フェイトの隣に腰掛けた。

「なにか悩みごとか？」

そしてそう問うてくる。

「いえ、その……」

まさかフェイトとしては、さつきまでの考えを正直に話すわけにも
いかない。知らず頬が熱くなるのを感じながら、言葉を濁す。

そんなフェイトの様子に恭也は苦笑し、言う。

「悪い、無理に聞く気はないんだ。ずいぶん真剣に考え込んでいるよ
うだから、何か悩んでいるのかと思ってな。俺で良かったら話を聞く
が、無理にそうさせるつもりはない」

その言葉に、フェイトの胸は、少しうずく。

言ってしまうたらどんなにいいか。

色々あるけど、一言で言えば、貴方に甘えさせてほしいんです、な
んて。

言ってしまうたらどんなにいいか。

(そもそも、今でも十分すぎるくらい甘えているんだから……)

やはりフェイトは、言葉を飲み込んだ。言えない、言わない。それ
でいい。

しかし、

「……」

やはり胸はうずく。そして、うずくだけでなく、暖かくもある。彼
に心配をかけて悪いとも思ったが、しかし心配してもらえた事が嬉し
い。

「……あの」

だから、フェイトは口を開いた。そして代わりに、違う言葉を口に
する。

「聞いても、いいですか？」

「ああ、何だ？」

「……どうして、恭也さんは私に鍛錬をつけてくれる気になったんですか？ どうして、……私にこんなに良くしてくれるんですか？」
それはずっと思っていたことだ。先ほどまで考えていたこととは少し違うとは言え、まったく関係ないことではない。だから、聞いてみたかった。

純粹に、わからなかったからだ。

どうして自分なんか、そんな思いを滲ませながらフェイトは恭也にそう問いかけた。

「……どうして、恭也さんは私に鍛錬をつけてくれる気になったんですか？ どうして、……私にこんなに良くしてくれるんですか？」

隣に座る金髪の少女、フェイトは顔を少し俯かせながら恭也にそう問うてきた。

これがさつきまで彼女が考え込んでいたことなのかは恭也にはわからない。だが、この質問自体は今思いついたもの、というわけではなさそうだった。彼女の声音は真剣で重みがあるものであったし、なにより彼女の性格を考えればある意味彼女がこれを思っていないはずがないとも言えるからだ。

どうして大して関係のないはずの自分にこうまで教えをつけてくれるのか。

彼女がそう思わないはずがないのだ。

共に過ごしてまだ日は浅いとは言え、恭也からみて彼女、フェイトはそういう子だった。

ほんの少しの間を置いてから、恭也は答える。

「君が守りたい人を守るようになりたいと言ったことに、俺は敬意を感じた。まずそれが一つの大きな理由だ」

敬意。それは嘘偽りなく、恭也がフェイトに大して抱いた感情の一つだ。

「け、敬意、ですか？ 私に……？」

驚いたのか、フェイトは目を見開きつつそう問い返してくる。恭也

は彼女に大きく頷いた。

「ああ、敬意だ。俺は君を尊敬する。……誰かを守りたいと思うことは、ひどく単純なことだがそう簡単なことじゃない。君の身の上は君の口から聞かせてもらったが、君の歳で、君の人生で、その想いを抱いたというのは間違いなく尊いことだ。少なくとも俺はそう思ったし、そんな君のために俺が力になれるなら、喜んでなりたいたいと思った」

「わ、私は、そんな……恭也さんに尊敬なんかしてもらえるような……」

フェイトは恭也の言葉に、戸惑ったようにそう否定を返す。

そんな彼女の、声に、顔に差す陰。

(……やはりそうだ)

それをみて、改めて恭也は自分の考えが正しいことを確認する。
そしてだからこそ、

「フェイト」

「は、はい……」

「今から俺は君にとって不快な言葉を口にするかもしれない、無神経な物言いをするかもしれない。だから先に謝っておく、すまない」

「え?」

そう前置きをして、恭也は、語ることにした。

「実は、俺が君に教えをつけようと思ったのには、さつき言ったものは別に、もう一つ理由がある」

言おうか言わまいか、迷った。ある意味で彼女の傷をえぐる事になると思ったから。

だが、勝手な考えだとは思うが、この話はやはりしておきたかった。その上で、どうしても伝えたい事があるから。

「……はい。その、遠慮なく言ってくれれば、嬉しいです」

恭也の目を見て、そう言うフェイト。

彼女に、恭也は言う。

「君はな、俺と似ているんだ。だから、放っておけなかった」

「…………わ、私が、恭也さん……と?」

唐突な言葉に、またしてもフェイトは驚きの声をあげる。

「ああ。もちろん全部じゃないが、しかしある部分で、君と俺は似ている。まあ俺と似てると言われても嫌だろうが、しかしやはり俺はそう思う」

「そ、そんな嫌だなんてことないです！　で、でも、私なんかには恭也さんと似てる部分なんて……」

「……あるさ。フェイト、あるんだよ」

私なんか。その言葉がある意味示しているとも言えた。恭也とフェイトが似ている部分、それは、

「フェイト、君は自分に価値がないと思っっているだろうか？」

一言で言えばこうなる。

「っー」

恭也の言葉に、フェイトは息をのんだ。その反応が答えだった。

私なんか。

私が駄目な子だったから。私がちやんとできなかつたから。

彼女が彼女の過去を語るとき、幾度となく、その種の言葉が使われた。彼女が彼女を責める言葉であり、彼女が彼女を蔑む言葉であり、彼女が彼女を見下す言葉だ。

失敗作。

いらぬ子。

彼女は母にそう言われたという。

そしてそれは、彼女の心を強く縛っている。

「わかるんだ、フェイト。それがどうしようもなく強い思いで、抜け出せない考えだと言うことが俺にはよくわかる。俺も、そう思っている部分があるから」

「……恭也さん、が？」

そして、縛られているのは恭也も同じだ。

「ああ。前にも話したが、俺は御神の剣士としては紛れもなく、……出来損ないだ。出来上がってないんじゃない、出来上がることが、もうないんだ。未完品じゃなく、欠陥品だ。俺には、御神の剣士という在り方において、価値がない」

「……あ」

語る恭也の言葉に、表情に何かを……自身と通じるところを感じたのか、フェイトは小さく声を挙げた。

過去に壊した膝。治ることのない傷。掴むことの叶わない夢。なれることのない存在。

完成された御神の剣士、自分が求めて止まなかったその在り方に、自分はもうたどり着くことはない。

それは恭也の心にかけて訪れ、そして今も静かにある絶望だ。

「俺も、きつと君も……つまり俺たちは、自分があまり……好きじゃない。そうだろう?」

母に愛される自分。

剣士として完成された自分。

そうじゃない自分を、好ましくは思えない。

「……………はい……………」

フェイトは、ゆっくりと、大きく頷いた。

「そう、だよな」

それは、どうしようもないシンパシー。

同じ傷を持つ者同士という、清々しいほど後ろ向きで、悲しいほど確かな共有感。

似ているのだ、自分と彼女は。

そして、

「それとな、フェイト。まだあるんだよ、似ている部分」

言葉通り、まだあるのだ。彼女と自分が抱える同じような傷は、まだあった。

「なん、ですか?」

顔をあげたフェイトに、恭也は少し微笑んで言う。残酷な事実を、口にする。

「君は、お母さんに愛されなかった。それ自体も俺と同じなんだ。これも前に話したが、俺を生んだ母親は数日で俺を捨てた。俺も生みの母親に愛されなかった。俺も君も、生みの母親に愛してもらえなかった」

「……………」

フェイトははつきり告げられたその言葉に目を伏せ、唇を噛んだ。「すまん、こんな事を言って」

ふるふると、フェイトは首を振る。

「……それなら恭也さんだって同じです」

「……そうか」

こんな事をはつきり言われたのが自分なら、こんな事をはつきり言わなければならなかったのが恭也。だったら、辛いのは同じ。フェイトはそう言いたいのだろう。

恭也は、フェイトの頭に手を置いて、彼女の髪を撫でた。

自分とよく似た少女を撫でた。

「辛いよな、切ないよな、寂しいよな」

似ているからこそ、わかることだ。それ故に、言える言葉だ。

「はい……、はい、はい……っ！」

返答は少し、涙混じり。

そして恭也は、優しく、柔らかく、フェイトを抱き寄せた。

フェイトはそれを拒むことなくされるがまま、いや、ほんの少しだが自分から、恭也の胸に縋り付いた。

しばらく、静寂が続いた。

そして、恭也がそれを破り、言う。

言わなければならない。

「フェイト、条件がある。俺が君にこれからも指導を続ける上で、条件が、一つある」

これを言うために、この話をしたのだから。

恭也は決して、傷を舐め合うために、この話をしたのではないのだから。

「……はい」

胸の中、顔をあげ、濡れた瞳でこちらを見つめるこの少女が、

「絶対に守ってくれ。できるな？」

「……はい」

前へ進むために、この話をしたのだ。

言葉を待つフェイトに、真剣な顔で恭也は言った。

「これからは、できる限りちゃんと、人に甘えろ」

「……………え？」

言われた事を理解したらしいフェイトは、その顔を純粋な驚きと疑問で染め上げる。

それも当然かもしれない。恭也が口にしたのは『条件』という言葉にあまりに沿わない内容だったから。

「もう一度言うぞ、ちゃんと人に甘えろ」

だが、恭也としては、これは確かにフェイトに示す条件だった。遵守させねばならない事であり、

「それ、は…………」

「難しいだろう？ 君には」

フェイトには、自分と似ている少女にとっては、これは確かに難しいことであるだろうから。だからこれは、条件だった。

「君は、人に甘えるのがあまりに下手くそだ。不器用で、やり方を知らない。そうだろう？」

「…………はい」

頷くフェイトに、恭也は続ける。

「フェイト、それじゃ駄目なんだ。子供の内に甘えることを覚えておかないと、大人になったとき、本当に誰にも甘えられなくなる」

「…………それ、って」

予想がついたのか、フェイトはそう言って恭也を伺う。恭也は優しく微笑んで、頷き、言う。

「ああ。…………そんな生き方は、少し寂しいものだ」

これは、経験談なのだ。

「俺は生みの母親に愛してもらえず、甘えることを教えてもらえなかった。父親は俺を愛してくれたし、俺も父を愛しているし尊敬しているが、父親は俺にとって素直に甘えられる存在ではなかった。目標のような人だったからな」

恭也にとって父の士郎は、追うべき背中であって継りつく胸ではなかった。

「その後、他に家族ができたが、…………父が仕事で死んでしまつて、俺に

とつて残った家族は何より”守るべき者”になった。だから、やはり素直に甘えられはしなかった。そして守りたいがために無茶をして、今度は自分を壊した。なりたい自分になれなくなった。そんな自分は好きになれなくて、そんな自分を許せなくて、ますます誰かに甘えるなんて考えられなくなってしまった。……そしてそのまま今日まで生きてきてしまったし、たぶんこれからそれは変わらない」

もちろん、恭也は家族を恨んでなどいない。早くに逝った父も、守りたいと思えた義母も、義妹も、妹も、他の家族達も、すべてが大切な人たちであり、あくまで自分が人に甘えられないというのは、自分の責任だと思っている。

そう、自分はいいのだ。

自分が人に甘えられないのは、自分が悪いのだから。そしてもうそれは手遅れで、今更変えられるものでもない。

だが、

「だが、君はそうなってはいけない」

今胸に抱くこの少女は、違う。

「だから、きっきの条件だ、フェイト。もっとちゃんと、人に甘えろ。いいな？」

自分と違って、彼女は何一つとして悪くない。

そして、まだ間に合うはずなのだ。彼女はまだ子供だ、人に思いきり甘えていい子供だ。今の内にそうすれば、きっと彼女はまだ間に合う。

「君はちゃんと、人に甘えることを覚えるべきだ」

これが、恭也がフェイトに伝えたかったことだ。彼女の傷をえぐるような話をしてまで、伝えたかったことだ。

自分を好きになれなくて。一番に愛してくれるはずの人から、そうしてもらえなくて。そんな点で、自分と彼女は似ている。

それを彼女にわからせた上で、彼女が似ている自分と同じ道を辿らないようにしたかった。

フェイトはこのまま進めば、もしかしたら自分によろしくなってしまうかもしれない。

それは、あまりに悲しいことだと恭也は思ったのだ。
そして、恭也のシャツに、感触。

「……でもっ」

「……どうした？」

「でも、でも……私は……っ」

白くて、小さな手が、恭也のシャツ、その胸の辺りを強く掴んでいた。

「私は……いい、いらぬ子だから……」

手の持ち主、フェイトは絞り出すように、言う。

「だから、だから……あ、甘えちゃ、駄目なんです……っ！ いらぬ子だから……っ！」

それはまるで悲鳴のようだった。

いや、事実、これは悲鳴なのだろう。恭也はそう思う。これは彼女がずっと、心の中であげていた悲鳴なのだ。

「いらぬ子、君のお母さんは、君にそう言ったんだな」

フェイトは顔を自らの腕にこすりつけ、あふれ出ようとする涙を必死に拭ってせき止めながら、何度も頷いた。その間も、無意識にか、手だけは決して恭也のシャツを離さない。

「そうか」

だから恭也は、彼女の頭を優しく撫でる。背中をあやすように柔らかに叩く。そして言う。

「辛かったな。辛かったな、フェイト」

似た傷を持っているからこそ出せる声音で、言う。

「……は……いっ」

フェイトは頷く。

「そっか、そうだよな、辛かったな。……頑張ったな、フェイト」
「……え？」

そしてその言葉に、びくりと体を震わせ、疑問の声をあげる。まるで、自分はそう言われるべきじゃないとでも言うかのように。

だから、恭也はもう一度口にする。心から、彼女に伝える。

「君がお母さんのために頑張った事は事実だろう？ 頑張ったな、

フェイト。君は、頑張ったんだ」

「……っ……っわた、し……っ」

だめ押しのように、もう一度。認めていいんだと言うように、もう一度。

「頑張ったな、フェイト」

そう言っただけ、恭也は、ゆつくりと自分の胸に押しつけるように、しっかりフェイトを抱き直した。

「いい子だ」

「う……っ……あっ……わ、……た……しっ……」

「いい子だ、フェイト」

「う……っ……あっ……うあ、あ、あ……っ……っ！」

「いい子だ。君は、いい子だよ、フェイト」

「う、あ、ああ、ううう……っ！」

「頑張り屋で優しくして真っ直ぐで……だから、——泣き虫でもいいんだぞ」

「う、……う、……うあ、……うあああああああああ
あっ!!」

フェイトは、決壊したかのように泣きじゃくった。顔を恭也の胸に埋め、両手でシャツを掴み、声をあげ、泣く。

小さな子供のようになり、もうそこまで小さくはないがしかし、子供の彼女は、そうして泣いた。

「わっ……っ……っ…… わたしはっ！」

「いい子だよ。知らない子だなんてことがあるものか」

そんなフェイトは、恭也は抱き続けた。頭を背中を優しく撫でながら、言葉と行為で彼女を包む。

「わたしっ！ わた……っ……しはっ！」

「泣いていいんだ。泣いていい。今までずっと頑張ってきたんだろ
う？ だったら、今は泣いていい」

「っあああああああ！」

「辛かったんだ、頑張ったんだ……甘えたかったよな、フェイト」
その言葉に、

「……は……いい……はい……！ わた、し………ずっと
………ずっと………！」

嗚咽混じりの肯定を、しかし確かな肯定を返した彼女に、それでいいんだと答えた恭也は、フェイトが泣き止むまで、優しく柔らかく、彼女を抱き続けた。

「落ち着いたか？」

「……はい」

フェイトは真つ赤な顔を両手で隠すようにしながら、そう答えた。さきほどまでの自分が少々恥ずかしいらしい。

既に恭也はフェイトを離しているが、しかし二人の間に距離はほとんどない。お互いの温もりが感じられる位置に、二人はいる。

「あの……ごめんなさい……、シャツ、汚しちゃって……」

「そんな事気にするな。……それで、フェイト」

「……はい」

「あの条件、守れるな？」

「………」

恭也の言葉に、フェイトは顔を覆っていた手を下ろし、目をつむり、しばし沈黙する。

恭也は急かさず、彼女の答えを待った。

やがて、

「……はい。がんばり、……ます」

フェイトはそう答えた。

「いい子だ」

恭也は微笑んで、少し乱暴にそんな彼女の頭を撫でた。

「フェイト、君は君が思うよりもずっと周りに愛されているし、これからもっと愛される」

「………そう、ですか？」

「ああ。たとえばなのはだ。あいつは君のことを親友だと思っている。フェイトに会えるのをとても楽しみにしていたし、家での話ではよくフェイトの名前が出てくる」

なのはは、なのはが生まれてからの付き合いである恭也から見

も、本当にフェイトを親しく思っている。当たり前だが、なのははフェイトをいらぬ子だなんて決して微塵も思っていない、それは兄として恭也には断言できる。

「フェイトはなのはをどう思ってくれている？」

「……ずっと、親友でいたいです」

「そうか、それなら大丈夫だ」

はにかみながら言う彼女に、恭也は当然のように言い切る。

「それに、リンデイさんとクロノ。……養子の話、もらってるんだろう？」

「……はい」

今はまだ気持ちの整理がつかないから返事は待ってもらっているが、そんな話があるのだということ、少し前にフェイトは恭也に話してくれていた。

「君を想っているからこそ、二人からはそんな話が出たんだ。家族になるっていうのはそんなに単純なことじゃない。確かな絆と、そして重い責任が生まれる。それでも君を家族にしたいと二人は思っているんだ。君を想ってくれているんだ。それは、決して疑ってはいけない」

「……はい」

「それにうちの他の家族だって、もうずいぶんと君の事を気に入っている。特に母さんや美由希なんてしよっちゅう君に飛びついてるんだからわかるだろう？」

「は、はい」

「むしろ俺はあれが迷惑でないかと気が気でないんだが……。嫌だったら言うんだぞ」

「い、いえ！ 嫌だなんてことないです！ ……お二人とも……。その、あつたかいです」

「……そうか」

恭也としては、その返答に半ば本気で安心する。まさしく猫かわいがりするものだから、見ていてあれは放っておいていいものかと心配だったのだ。

晶やレンもフェイトがお気に入りだ。フェイトが昼食や夕食を共にするとなると非常に張り切ることからもよくわかる。その度に二人して喧嘩し、なのはに怒られているのはどうかと思うが。

「他にも、なのはに聞いたが学校でも友達ができたんだろ？ アリサやまずかと仲良くなったらしいな」

「あ、……はい。お友達に、なりました」

アリサやまずかはよく高町家に遊びに来るし、すずかなんかは恭也の友人である忍の妹ということもあって、恭也もよく知っている。二人ともいい子だ。

「あとはアルフ……は、まあ俺が言うまでもないだろう。……フェイト、君の周りにはこんな君を好きな人がいて、そしてそれはこれからどんどん増えていくだろう。だからフェイト、その人たちには甘えなかったら甘えていいんだ。君が少し甘えたくらいで迷惑に思う奴なんていないだろうし、むしろ甘えられたら喜ぶタイプが結構いる」

「ああ。特にうちの母さんと……なるほど、そうだまだあつたな」

「……？ 何がですか？」

急に言葉を切ってそう言った恭也に、フェイトが聞く。恭也は苦笑して答えた。

「フェイトが俺と似ているところだよ、何だろうな。……新しく出来た母親が似てるんだ。まあフェイトの場合新しく母親になるかもしれない人、だが」

桃子とリンディ。以前にも思ったが、やはり二人は似ている。

「あのタイプはな、すごいぞフェイト」

「な、なにがですか？」

「おっとりしててちよつと抜けてて結構強引で芯が強くて案外ノリがよくて……そして、子供を全力で愛してくれる」

「あ……」

恭也と桃子に血のつながりはない。美由希もそうだ。桃子とは、血筋で言うなら赤の他人だ。だが、恭也も美由希も、桃子を母として確かに愛しているし、子供としてしっかり愛されていると自信を持って

言える。

「うちの母さんもリンディさんもおそらく、甘えられれば甘えられるだけ喜ぶタイプだ。しっかり甘えろ、いいな。……そうだ、リンディさんには時々確認するでしょう、ちゃんとチェックするからさぼるなよ」

「……はいっ」

真顔の、しかし少しおどけたようなその恭也の台詞に、フェイトは笑顔を見せた。年相応と言うにはやはり大人びている気もするが、陰のない、綺麗な笑みだ。

恭也は内心、息をつく。

よかったと思う。

この子はこうして、笑っているべきだ。まあ今日泣かせたのは自分だが、その分はこれから彼女の笑顔に貢献することで挽回すると思う。

「あ、あの……恭也さん」

不意に、そう決意を固める恭也のシャツが引かれた。見れば、裾をフェイトが控えめに握っている。

「どうした？」

「あの、……きよ、恭也さんは、その」

恥ずかしそうに、言いくそうに、しかし何かを問おうとする様子のフェイト。

(……ああ、そうか)

彼女が言う前に、恭也は気づいた。当たり前すぎて、言葉にしていなかったか。

「俺でよかったら、いつでも甘えに来い」

「……はいっ!」

どうやら正解だったらしい、フェイトは笑顔を見せた。今度は年相応と言えなくもない、あどけない笑み。あまりに嬉しそうなその顔に、

「……あー、それじゃあ、そうだな、そろそろ鍛錬、再開するか」

「はいっ!」

さすがに少し気恥ずかしくなり、恭也は誤魔化すようにそう言っ
て立ち上がった。

第4話 敵ながら

「カートリッジロード！」

『Cartridge Load』

なのはの声に、レイジングハートが応える。装填動作とともに力強いコツキング音が辺りに響いた。

(……お話、聞かせてもらいます！)

前方の、好戦的な表情でこちらを睨みつける赤い少女を見据え、なのはは胸の中そう宣言、体と相棒にはカートリッジから装填された膨大な魔力が滾った。

張り詰めるような十二月の夜空の下、鋭く声を放つ。

「アクセルシューター！」

管理局武装局員が守護騎士を捕捉したとの連絡を受け、先に現場に向かったクロノを追う形で、なのはとフェイトは結界内に飛び込んだ。待っていたのは、赤い少女と蒼い獣の耳を持つ男性、そして途中から侵入してきた桃色の髪の女性。

なんとか話し合おうとはしたものの、受け入れられなかった。結局はこうして戦闘になっている。

なのはは、戦うことが好きではない。争いは嫌いだし、諍いはなければそれが一番だと心から思っている。

でも、それでも、言葉を伝えるために、想いをわかり合うために、それが必要なら。

戦うことを迷わない。傷つくことは厭わずに、傷つけることも恐れない。それは力を振るう者の責任だから。

エゴイズム。自分でもそう思う。

でも、それでも。

いつか友と、部屋で語った。想いを伝えようとするのは無駄じゃない。そのために戦うことが必要ならば迷わない。

なのはは思う。

私は、戦う。戦おう。わかり合うために、笑って過ごせる明日のために、いつかのために。

『Axel Shooter』

「シューター！」

不屈の心をその胸に、十二発の魔力弾が夜空を駆ける。

「アホか！ こんな大量の弾……制御できるわけがっ」

そう言つて、赤い少女は鋼鉄の玉を取り出し、魔力でもって射出する。計四つ、なのはに向かいくる。

なのはは凜々しく笑みを一つ浮かべ、目を瞑り集中。少女を魔力弾で囲いつつ、

「こんなの、余裕だよ」

その内四つを呼び戻し、

「なっ！」

正確に同数の敵弾を撃ち抜いた。

「お兄ちゃん相手に比べたら、ね」

『That's it』

同意を返す相棒を握り、なのはは目を開き、赤い少女を見、言う。

「約束だよ！ 私たちが勝ったら、事情を聞かせてもらおうって！ アクセル……」

「くっ」

そしてカットされた宝石のような形の障壁を作り出した少女に向かい、

「シュートッ！」

右手を大きくあげ、声とともに、展開した魔力弾で攻撃を開始した。

「……あっ……、こんのお……！」

なのはの魔力弾は、少女の障壁に確かにヒビを入れていく。それを見た少女はハンマーを構え直し、凜猛な顔でなのはに敵意を浴びせる。

「……」

なのははそれを、真正面から受け止めた。

受け止めながら、微塵も怯まない。

” 戦場では、決して揺らぐな”

心に浮かぶのは、兄の声。その教えを忠実に守り、なのははどれだ

け少女が凄もうと動じず恐れず竦まない。そして頭ではこの後の展開を幾通りもシミュレート、戦術を組み立てていく。

目の前の、赤い少女は確かに強い。

以前はまともに反撃もできず、一方的にやられてしまった。相棒たるレイジングハートまで砕かれかけた。

だが、今のなのはの心は静かだ。

レイジングハートは、強くなってくれた。インテリジェントデバイスにも関わらずカートリッジシステムを組み込むという無茶によって、自分のために強くなってくれた。

そして自分も、そんな彼女と胸を張って一緒に戦えるくらい鍛えた。自信をもってそう言える。慢心などももちろんないが、意志と誇りはたしかにある。

「……………ありがとう、お兄ちゃん」

自分をそうしてくれたのは、他でもない兄だ。

なのはほんの一瞬、兄との訓練を思い出した。

「い、一発も……………当たりませんでした……………」

「……………ふむ」

響いたなのはの弱々しい声に、恭也は頷き一つ応えてから、

「まだまだ甘いな。フェイントをかけるならもつとさりげなく、しかし徹底的に、だ」

続けざまにそう講評する。戦いに関しては厳しい彼の戦闘者としての意見だ。なのはは素直にその言葉を受け、

「うん、わかった。もつと練習するよ!」

そう意気を上げた。

「ああ、頑張れ」

恭也はそんななのはに、今度は優しい兄の声で応援をくれた。

二人がいるのは、早朝の公園だ。アースラに頼み、結界を張ってもらっているので気兼ねなく魔法の練習が出来る。朝の鍛錬に向かう恭也に付き、メニューをこなす彼の傍ら魔法の練習をし、最後は彼を相手取った実戦訓練を行う。あの守護騎士襲撃以来の、なのはの日課

となっていた。

実戦訓練の内容は単純なもの。避ける兄に誘導弾を当てる、それだけ。

本当に単純だが、先の結果が示すとおりその難易度は非常に高い。先回り、フェイント、囲い込み、どれもまともに通じない。速すぎて先に回れないし、フェイントはすべて読まれ、囲い込んでも最小限の体捌きで躲され掻い潜られる。

「おにーちゃん、もう一回お願い！」

「ああ、いいぞ」

目下の目標は、とりあえず制限時間内に一発でも当てることだ。ストップウォッチの時間をセット、再度、なのはは恭也に挑む。

挑んだのだが。

「……な、なんで……」

「惜しかったな、狙いはよかったが」

結果はまた、惨敗に終わった。

「うう……死角をついたと思っただんですが……おにーちゃん後ろにもう一つ目があるの？」

「あるわけあるか。魔力弾とはいえ、風切り音と存在感はある、ならば見ずとも察知は容易だ」

「……そうですか」

相変わらず人間離れたその言葉に、なのはは最早そう返すしかなかった。

「ま、今日はこれくらいにしておくか」

「はい」

ひとまず、今日はこれでおしまい。なのはは恭也とともに、少し歩き、やがて二人でベンチに腰掛けた。

訓練の後は、いつもこうして休憩をしてから家に帰ることにしている。

訓練自体もちろんとても実になるものだが、なのはは兄と二人でゆっくり話せるこの時間が、密かにいつも楽しみだった。

「でも、お兄ちゃんほんとすごいね。魔法なくてあんなに速く動ける

なんて」

「一応鍛えているからな」

「……言葉に重みがあります」

しれつと言う兄に思わずなのはは苦笑する。恭也に戦いの指導を願ってから、なのはは初めてまともに彼の本気の鍛錬を目にしたのだが、それは想像を超えたものというか常軌を逸したとすら言える内容で、兄には言っていないが正直少しカルチャーショック的ですらあった。

「だが、俺からしたらデバイスなしであんなに魔法を使えるなのはもすごいと思うがな。それに、やはり空間把握と動体視力は大したものだ」

「そ、そうかな……」

「ああ、そうさ」

兄に褒められ、なのはは少し顔を赤くする。

レイジングハートは未だに修理中、よって今のなのははデバイスなしの状態だ。だがデバイスなしでも魔法はある程度使えるし、練習もできる。自分の実力不足で壊れかけてしまったレイジングハートのためにも、彼女がいなくとも鍛錬は怠らない。

そんななのははに合わせ、実戦訓練では恭也は安全のため一応バリアジャケットだけは展開するものの他の魔法は使わない。その身一つで付き合ってくれている。

さすがは生身で守護騎士と渡り合った兄と言ったところか、実際のこの訓練を初めて、それでも今まで一度も恭也のバリアジャケットが役に立ったことはなかった。そういうわけでちよつと自信を失いかけていたなのはだが、

「魔法自体も、目に見えて操作精度や速度が上がっている。上達しているさ」

「う、うん……ありがとう、お兄ちゃん……」

その兄に褒められ、頭を撫でられればすぐにやる気がみなぎるのだから、自分でも単純だと思う。

だが少し照れくさくなってきたので、なのはは話を変えた。

「お兄ちゃんの方はどう？ 魔法の練習」

「ああ、……まあ問題ないと言ったところか」

『ご謙遜を、大した上達具合ですよ、慎み深き主よ』

自分に厳しい兄に代わり、きちんと応えてくれたのは彼の指にあるデバイス、魅月だった。

兄と魅月の関係はなのはから見ても非常に良好、いいコンビと言えた。

ちなみに魅月は、恭也との二人きりを楽しみに思っているなのはの気持ちを察してくれているのだろう、この休憩の時間に言葉を発することはあまりない。なのはとしては自分と同じく兄を慕っている魅月の事も好きなので色々話してみたいのだが、反面悪いと思いつつ、そんな魅月の気遣いが嬉しくもあるのも事実だった。

彼女は、優しいデバイスだ。優しい兄にぴったりだと思う。

「まあ一応、眩体と晃刃、それと影刃はかなり馴染んだか。実戦でも力になってくれるはずだ。ただ、やはり足場生成がまだ少し不安だな」
「それはお兄ちゃんの動きが速すぎるのが原因な気がしないでもないけど……」

兄の空戦スタイルはかなり特殊である。飛翔魔法を使わずに足場を作って跳びまわり戦う。魔導師としては間違いなく異端だが、しかしその実、異常とも言える超高速機動を実現している。魔法なしでも速かった兄だが、眩体と言う名の身体強化魔法を使うことでさらに、驚くほどさらに速く、そして足場を作る魔法も覚えることでまさしく縦横無尽に動くようになったのだ。

クロノなどは、恭也と並の魔導師ではもうまともに戦いにすらならないと言っていた。

「だがな……あれでは実際のところまだ完全に全速では動けん。要精進だ」

それでも本人はまだまだだと言う。あれで全速でないらしい。その上神速と言う、なのは達からしてみれば瞬間移動としか言えない技もある。

「そ、そっか……あはは……」

なのはとしてはもう、そう乾いた笑いを浮かべるしかない。

(すごいな、おにーちゃんは)

そんな兄が、なのはにはやはり誇らしい。

なのはは、兄が大好きだ。

世界で一番好きな人、と言われたら、もちろん家族はみんな好きだけど、それでも一番と言われたらなのはは恭也の名をあげる。

高町なのはは、高町恭也が大好きだ。彼の暖かさが恋しいし、彼の優しさが愛しいし、彼の強さを尊敬している。

その思いは日に日に募っていく。それは最近頓に顕著だった。兄の強さを目の辺りにし、その強さを支える精神を感じるたび、彼への憧憬が募る。彼が肉体的にも精神的にも強いことなど、その彼にずっと守られてきたなのははもちろん知っていたがしかし、それを具体的に見ることになって、憧憬が今までよりも遙かに募るようになった。強くなりたい。

あの時、病室で眠る兄の隣で誓ったあの想いも日増しに大きくなる。守られてばかりじゃない、兄のように守れるように、そしていつか、兄に頼ってもらえるくらいに。さらに言えば……兄を守れるくらいに。

なのはが目指すのは、恭也の隣だ。

いつまでも、後ろに隠れているのは嫌だ。自分がいくら安全でも、それで兄が傷つくのはもう嫌だ。

隣に立って、一緒に。

それがなのはの目標。どれだけ遠いかなんてわからないくらいのもゴールではあるが、なのはにとってそこは立たなくてはならないスタートラインだ。

「ねえ、おにーちゃん」

「なんだ？」

「強くなるために、一番必要なものってなにか？」

だから、なのはは恭也に尋ねる。兄のようになりたいのなら、兄に聞くのが一番だと思うから。

「……そうだな」

少し唐突なののはの問いに、恭也はしばし目を閉じてから、

「忘れないことだ」

そう言った。

「忘れない、こと？」

「ああ、決して忘れないことだ。強くなりたいたいという想いの根源を」

やがて恭也はなのを見つめながら語る。

「なののは、覚えておいてくれ。強さは同時に弱さを生む。硬さが同時に脆さを生むように、強くなればその分、人は弱くなる。自分が得た強さに飲み込まれるという弱さをもってしまう。……力は、人を時に苦しめ狂わせる」

恭也は続ける。なののはそんな彼の言葉を一言だって聞き漏らすまいと、精一杯耳を傾ける。

「だから、強くなるには、ずっと強くなっていくためには、最初の想いを忘れてはいけない。なぜ自分が強くなりたかったのか、それを決して忘れてはいけない。それを忘れてしまえばいくら強くなっても、得た力に溺れ、それ以上に弱くなってしまうんだ」

「だから、忘れないこと、なんだね」

「ああ、そうだ」

晴天の下、朝の静謐な空気の中、響く兄の声はなのには素朴で、そして荘厳なものに思える。なののは恭也の言葉を胸に刻んでいく。彼のように強くなるために。

真剣な面持ちのなののはに、恭也は、

「ついでだ、これも言っておこう、なののは」

さらに言葉を紡ぐ。

「なののはがこの先どうする気なのかはわからん。なののは自身もまだ、決めていないのかもしれないがな。時間はたっぷりある、ゆっくり決めていけばいい。……だが、もしなののはが、魔導師として戦場に立つことを選ぶならば、そしてそうでなくとも今後、戦場に立つ事になったならば」

恭也は静かな声で、揺らぐなど、そう言った。

「迷ってもいい、惑ってもいい、悩んでもいい。しかしなののは、決して

揺らぐな。戦場では、決して揺らぐな。……俺の今やっている仕事に
関しては少し、話したな？」

「……うん」

恭也の仕事。恭也は今大学生ではあるが、同時に護衛などの仕事も
やっているらしい。その手に握った剣を振り、自らの命を盾にして、
守るべき人を守る仕事だ。

「俺の戦場ではな、極端に言えば、どんな達人であつても素人の拙い一
撃ですらまともに当たってしまえば死ぬ。どれだけ鍛えた者でも、一
発の銃弾が当たればそれだけで命を落としかねないからな。俺だつ
て、いつ死んでもおかしくはない」

「……っ」

その言葉に、思わずなのは息を飲み、目を伏せた。
わかつている。

兄はそういう仕事を、戦いをしているのだ。

バリアジャケットはない、シールド魔法もない。治癒魔法もなけれ
ば、非殺傷設定なんてありえない。こんなに強い兄だつて、たった一
発銃弾を、その身に受ければそれだけで、死んでしまつてもおかしく
ない。

兄がいるのは、そんな戦場。故に、彼の言葉は重い。

「なのは、だから、戦場で揺らいではいけない」

とても、重い。未だ十にも満たないなのはには、悲しいくらいに重
い言葉だ。

だからなのはは全力で、その言葉を受け止める。その心と体にある
力すべてで彼の言葉を受け止める。

「揺らいでできたその際には、敗北や死が入り込む。そこに素人も達
人もない。戦場で揺らぐのは、平等に致命的なんだ。戦場は、自分と
他人の想いがどんな形であれぶつかり合う場所だ。殺したいと思う
者もいれば死にたくないと思う者もいて、逃げたいと思う者もいる
し、守りたいと思う者もいる。そんな者達がぶつかり合い、お互いに
揺らし合うのが戦場なんだ。だから大切なのは」

「揺らがない、気持ち……」

「そうだ」

頭に固くて、とても暖かい感触。兄の手だ。

「難しいか、なのは？ 怖いか、なのは？」

なのはは撫でられながら、正直に頷いた。しかし恭也はそんなのはに、それでいいと言った。

「難しいことだし、怖いことだ。それがわかっていればいいさ」

恭也は、厳しくて、しかし優しい声で、そう言った。

(私は、揺らがない)

「うおおおおおっ！」

なのはのアクセルシューターが障壁が破ると同時に、赤い少女はハ
ンマーを可変、ジェットのようにその後部から光をあげ、回転しながら突っ込んできた。

「……っ！」

『Protection Powered』

それを見たなのはは即座にバリアを展開、受け止める。バリアにハ
ンマーが食い込み火花があがるが、

「硬え……！」

思わずと言ったふうには眩かれた少女の言葉の通り、破られる様子は
ない。

「レイジングハート！」

そして強固さに驚く少女に向かって、

『Barrier Burst』

「なっ、うあああああっ！」

そのバリアを爆発させる。吹き飛ぶ少女、これで隙と間合いがとれ
た。

「ダイバイイン……」

であれば即座に追撃だ。

揺らがない。戦うと決めたなら、徹底的にだ。勝ってみせる。自分
にとっての勝利をこの手に掴んでみせる。

なのはは強い決意と共に、魔力を迸らせる。

「バスター——ッ！」

『Divine Buster』

桜色の閃光が闇を切り裂きながら、少女へ躍りかかる。弾速・威力ともに申し分ない。

「ぐううっ！」

着弾、響く少女の声。が、

「直撃は、してないみたいだね」

『So it seems』

一瞬だけシールドを展開し防ぎ、その間に何とか身をそらしたのか、少女は閃光にその身を完全に捉えられはしなかったらしい。だが、それでも攻撃は入った。その証拠に、少女は大きく遠方に吹き飛ばされている。

「……悪魔めっ!!」

風に乗って、少女のそんな叫びが遙か遠くから幽かに聞こえてきた。

なのは苦笑する。そして思い、呟く。

「……悪魔でいいよ」

(悪魔らしいやり方で、話を聞かせてもらうから)

ここは戦場。であれば、容赦も躊躇も遠慮もいらぬ。するべきじゃない。

それが兄の教えであり、なのは自身もそう思っている。

『Master』

「うん、レイジングハート！」

その声を合図に、レイジングハートがその姿を、

『Buster Mode, drive Ignition』

「いくよ！ 久しぶりの長距離砲撃！」

バスターモード、改装によって得た新たな長距離砲撃用のものへと変えた。

なのははスコープ越しに、標的たる赤い少女を見据える。少女は砲撃の構えをとったこちらに驚きの表情を浮かべていた。わからなくもない、通常、この距離は少し遠すぎる。

だが、自分とレイジングハートなら。

『Load Cartridge』

続けざまに二発、排出された空薬莖が勢いよく宙に舞った。

『Divine Buster Extension』

「デババババ……」

なのはは溢れる魔力を完全に制御、眼前に魔方陣を展開し、その中に光を作り出す。狙いは少女、そして、

「バスタ——ッ！」

轟音と共に、閃光が奔った。

一拍の間を置き、

（——捉えた）

驚愕に揺れる少女の元に届いたそれは、夜空に爆炎の花を咲かせた。

それをしっかりと視界に収めつつ、しかしなのはは警戒を緩めない。

廃熱部を開き、蒸気を排出したレイジングハートに、なのはは言う。

「今度は障壁、抜けただろうけどまだ確定打じゃないかもね。レイジングハート、第二射の準備を」

『Yes, master』

「場合によってはアクセルシューター主体に切り替えつつ、目指すは迅速な撃墜。お話はその後にゆっくり聞かせてもらおう」

『Master』

「なあに？」

『You have become like your elder brother』

その言葉に、なのはは一瞬惚けたものの、

「ありがとう。最高の褒め言葉だよ」

笑みと共に、すぐにそう返した。

『I also think it's a good thin
』go』

「うん。でも、まだまだ」

そう、まだまだだ。

浮かれすぎないように自らを戒めつつ、夜の闇の中、なのははレイジングハートを握りしめた。

「はああっ！」

裂帛の声と共に放たれた突きを、フェイトは身を捻ってかわした。そしてすぐさま、相手の刃と自分の体の間に自らの相棒たるバルディッシュを挟み込む。

金属音が響いた。

「っ！」

剣筋を読まれた驚きからか、眼前の騎士から声が漏れる。

突きを躲されたとみるや、刃はそこから横薙ぎに振るわれた。フェイトはそれを読み、バルディッシュを挟み入れ防いで見せたのだ。さらに続けざまにそこから反撃、バルディッシュを刈るように振るった。バルディッシュはすでに光刃を展開したハーケンフォームとなつている。まともに入ればそれなりのダメージを入れられる。

「……っ！」

フェイトの手に、確かな感触。

だがそれは、騎士の体を捉えたものではなかった。

(……鞘、か)

剣から離れた片手を素早く引き戻し、そこに顕現させた鞘で攻撃を受ける。緊急回避的な手段であるのだろうが、多くの実戦経験に裏打ちされた技術なのだろう、それを行った敵の動作は淀みのない流れるようなものだった。

そしてすぐさま、片手でのすくい上げるような斬撃がフェイトに放たれた。フェイトは鞘で受けられていたバルディッシュを回転させそれに迎撃をかける。

剣と光刃がぶつかり合う。響いた衝撃で、両者の体は共に弾かれた。

『Plasma Lancer』

「プラズマランサー！」

フェイトは後方に流れながら、声を放つ。

「ファイアー！」

それに呼応し周囲に光球が五つ出現、それは槍の形となり騎士に躍りかかった。

「っはああっ！」

対する騎士は、剣に炎を纏わせ力強く振るった。その一撃は雷撃の槍をすべてはじき飛ばすことに成功する。だが、

「ターン！」

雷撃の槍は、再度響いたフェイトの指令に反応、

「……っ！」

飛ばされたその場で再射出、騎士に再度躍りかかった。様々な方向から同時に襲い来るそれらに対し、騎士はほんの一瞬驚きを顔に浮かべた後、今度は回避を選択、当たる寸前に上方へ移動。

騎士が雷槍から逃れたまさにその瞬間、

(……だ！)

『Plasma Lancer』

「なっ！」

フェイトは、温存しておいた残り三発分のプラズマランサーを一発に纏めて高速射出した。

今度のはつきりと驚愕の声を挙げた騎士へ、夜を裂くように巨大な雷槍が奔る。

「くっ！」

避けられないと判断したのかその場で防御を固めた騎士に、下方から追いつがった五発の雷槍と、新たに射出された高速の雷槍が同時のタイミングで突き刺さった。

雷撃と閃光、そして爆炎が辺りに広がる。

「ぐうっうっ！」

多少の間を置いて、そこから飛び出すように騎士が姿を現した。バリアジャケットが所々損傷しているが大きなダメージは入っていないのか、動作は機敏だ。

「っ！ カートリッジロード！」

『Schlangeform!』

そして騎士は何か気づいたような反応を見せた後、手に持つデバイスを連結刃に変形、自らの周りを囲うように振り回した。そこに、

『Haken slash』

閃光と爆炎の煙で姿を隠していたフェイトが、光刃で斬りかかった。

辺りにもう一度、爆炎が広がった。

やがてそれが晴れたころ、

「……強いな。お前も、お前のデバイスも」

「……あなたも。そしてあなたのデバイスも」

そう言葉を交わしたフェイトと騎士は、少しの距離を置いた場所で静止、向かい合った。

「二度聞いているかとは思うが、改めてお前に対して名乗ろう。私はヴォルケンリッターが将・ベルカの騎士、シグナム。剣の名はレヴァンティンだ」

「管理局囑託、フェイト・テストロッサ。この子は、バルディッシュ」
騎士——シグナムの名乗りにも、フェイトは答えた。そんなフェイトにシグナムは続けて、

「一つ、聞きたいことがある」

「なんですか?」

「お前はあの男の身内なのか?」

唐突な質問を投げかけてきた。

「……………え?」

「私と前に戦ったあのタカマチキョウヤだ。髪の色は違うようだが……お前はあの男の身内なのか?」

「……………」

「テストロッサ?」

自分が、恭也と身内。フェイトはその言葉で思わず彼の妹となった自分を想像してしまい顔がゆるみ、……そしてその後すぐに違う意味で身内となった事を想像しかけて顔が赤く、熱くなる。

「……テストロッサ?」

「……あ、え、は、はい………いい、いえ、ちがいます！ 違います！ 身内じゃありません！」

固まっていたフェイトだが、怪訝そうなシグナムの声に我に返り、なんとかそう返答した。

「そうか、違うのか……」

「ど、どうしてそんなことを？」

「いや……お前の動きや太刀筋に奴を感じたのでな、もしやと思っただけだ」

そしてシグナムのその言葉に、今度は胸が熱くなった。

(私から……恭也さんを……)

自分の動き、太刀筋から恭也を感じた、それはフェイトにとってこの上なくらいの褒め言葉だ。だからと言うわけではないが、フェイトはシグナムへ正直に告げる。

「……家族ではありませんが」

「ん？」

「家族ではありませんが、恭也さんは私の、師です」

「……なるほどな、そうか」

フェイトの言葉に、シグナムは納得がいったとばかりの表情を浮かべた。

「妙な事を聞いて済まなかった。どうしても気になったものでな」

「いえ」

「……お前は強い。この身になさねばならぬ事がなければ、心躍る戦いだっただが、仲間達と我が主のため、今はそうも言ってもらえん」

シグナムは表情を切り替える。そしてレヴァンティンを鞘に戻し、

「殺さずに済ます自信がない。この身の未熟を、許してくれるか」

腰に構えて、そう言った。彼女の足下には正三角形の魔方陣が浮かび上がっている。

彼女の言葉に嘘はない、それが、刺すような気迫と魔力からひしひしと伝わってきた。

フェイトはそんなシグナムに対し、改めてバルディッシュを構え直した。そして言葉を放つ。

「構いません。勝つのは、私ですから」

そう、勝つのは自分だ。

(……私はまだまだ弱いけど、でも前より確かに強くなった)

今日の前にいる守護騎士……シグナムは、速く鋭く硬く力強い。まさしく、百戦錬磨の強者だ。

だがそんな相手に、自分に対応できている。

もちろん押しているわけではない、一進一退、どちらに転んでもおかしくない勝負ではあるが、それでも、以前見たときは自分よりもはつきり上であると思つた相手に、今は確かに届いている。クロスレンジもミドルレンジもついていけているし、速さで隙を突けている。

それは自分のため、危険を顧みず、強度の問題から本来は推奨されないカートリッジシステムの搭載という選択をしてくれた相棒バルドイツシュのおかげであり、

(恭也さん……)

厳しく、しかし心を籠めて、教えをくれるあの人のおかげだ。

だから、自分は負けない。

フェイトは彼の言葉を、教えをその胸に浮かべた。

「フェイト」

「はい」

「どうして今こうなつたわかるか？」

「いえ……わかりません」

高町家の道場、その中心でフェイトは恭也の言葉に正直に答えた。わからないのだ。

「速度を上げてても上げてても……なんで逃げ切れなかったのか、わからないです」

今の今まで行っていたのは、限られたフィールド内で制限時間内ひたすら恭也の手を躲す、回避の訓練の一つ。フィールドは十五メートルほどの円、広くはないが逃げ回れる大きさだ。フェイトに魔法の使用は許可されている。ブリッツアクションなどを使って速度強化を施し、迫る恭也の手を全力で回避した。

そして結果は、現状が物語っている。

フェイトの頭上には、恭也の手。端的に言って、額の辺りを中心に
して頭を鷲づかみにされている。お陰で視界も半分くらいふさがれ
ていた。

自分で言うのもなんだが、かなり間抜けな格好だった。

訓練の結果自体も相まって情けない気になったが、しかし恭也の凄
さの一端を目の前で見られたという事で嬉しくもある。

「俺の動きはフェイトより速かったか？」

「……いえ、単純な動きの速度なら、私の方が上だったはずです」

自分は魔法も含めた全力、対して恭也は魔法なし。どころか、若干
手を抜いている気配すらあった。魔法ありの彼の全力にはほど遠い
速度、それでも自分は避けきれなかった。

「私の方が速いのには、恭也さんの方が……速かった……というか」

不思議な感覚だった。自分を抜くはずのない速度で後ろを走って
いた人が、なぜかいつの間にか前にいたような不可解さ。

「君の側からすれば、そういう風になるだろうな」

「はい……」

「いいか、フェイト。君の上達の鍵がそこにある」

言葉と同時に、頭上にあつた感触が消えた。恭也が手を離れたのだ。
撫でられていたわけでもないのにそれでも離れていくその温もりに
対し、少し寂しいと感じてしまい、さすがに自分でもどうかと思った。

しかし今はそんな事を考えている場合ではないと気をとりなおし、
フェイトは恭也の顔を見つめ、言葉を待った。

「俺に言わせてみれば、君の動きはものすごく勿体ないんだ、フェイ
ト。君は速い。動作は機敏で思考も鋭敏だ。だからこそ、惜しい。そ
の単純な速さにもみ頼り切っている事が惜しい。つまり、君の動きは
……単発に過ぎる」

単発、どういうことだろうか。

フェイトは恭也の顔から視線を少し落とし、思考を巡らせる。頭の中、
自分の動きと彼の動きを比較し、そこにある違いを与えられた
キーワードを元に抽出を試みる。自分は単発、では彼は……。

「あ……」

そして、フェイトは少し声を上げ、視線をまた恭也の瞳へと戻した。「わかったか？」

問いかける声に、答える。

「なんとなく、ですけど……恭也さんの動きって、全部繋がっていたよ
うな……一つの動きが、それだけで終わるんじゃないやなくて次の動きのた
めの準備にもなってる……気が、します」

少し曖昧なその言葉に、しかし恭也は満足げに頷いた。

「そういう自分できちんと思えるところは、フェイトの長所の一つだ
な。ふむ、その通りだ。現在の動作を次の予備動作にする、そうする
ことで動作自体の速度を上げなくとも、全体として見れば短い時間で
動けるようになる、この考えが今のフェイトには足りない」

ぶつ切りで単体としての速度しか持っていない動作。個々の動き
をいくら上げて、全体として無駄が多くては折角の速さに意味がな
い。速さを生かし切れていない。だから恭也はもったいないと言っ
たのだろう。

「避けるのも防ぐのもそして攻めるのも、その場ののぎ、その場限りで
は意味がない。繋ぐことを意識するんだ。それが結果的に単純な速
度ではない速さとなる。これからは重点的にそこらへんを鍛えるぞ。
体も頭も思い切り使うことになるが、覚悟はいいか？」

「はいー」

問いに、フェイトは明るい声で返した。厳しい鍛錬ならば、むしろ
望むところだった。

彼の鍛錬における厳しさは知っているが、しかしそれが優しさによ
るものであることもまた知っているし、それに何より、厳しい鍛錬な
らその分強くなれる、

(ほんのわずかでも、恭也さんに……)

彼に近づける。いつの間にかできていたその目標の事を思えば、胸
が弾むくらいだ。

笑顔を浮かべるフェイトを見、恭也は小さく苦笑を浮かべた後、

「いい返事だ」

そう言って、手を伸ばした。

「あ……」

恭也はフェイトの頭を今度は掴むのではなく、撫でた。フェイトは目を細め、その感触を味わう。

(褒めてもらって、撫でてもらった……)

今日は、いい日だ。恥ずかしくてさすがに口には出せないが、確かに胸の中、フェイトはそう思った。

「ふむ……フェイト、”体を割る”という言葉を知っているか？」

そんなフェイトに、恭也はそう唐突に問いを発した。

「いえ……知りません」

フェイトは正直に答える。体を割る、聞いたことのない、自分の知識にはない言葉だった。恭也は説明を始める。

「簡単に言うと、体の部位を間接・筋肉単位で一つ一つ単独・個別に操作して動かすことで、最終的に動作全体にかかる時間を減らす技術だ。たとえば腕を上げる動作、腕を腕全体として一纏めに認識して動かすと、ところどころに時間的な無駄が発生する。ところがこれを間接の集合と考え、一つ一つの間接を個別に認識し、そしてその複数の間接を適切に並列に操作すれば無駄は発生しなくなる。これが洗練されてくると、相手から捉えられない動きをすることが可能になる」

「……じゃあさつき、恭也さんはそれも？」

「ああ、御神の持つ速さの秘密の一つだ。もともと、古武術では割とメジャーな技術だから御神固有というわけではないがな」

「……すごいです」

恭也は謙虚に言うが、話を聞いただけでも未熟とは言え自身近接戦を行うフェイトには、その技術がいかに高度かということがわかった。一朝一夕のものではない、達人というべき者のみかたどり着く境地だろう。少なくとも、二十才という若さで手に出来る類のものではないはずだ。並大抵の事ではその片鱗は掴めても、恭也のように完成された形で実戦に生かし切れるようにはならないだろう。

一体、どれほどの鍛錬を重ねたのか。

「いや、そんな事はないさ、地道に鍛錬すれば身につく。今のフェイトにはこれよりも覚えることがあるからそつちを先に鍛えていくが、い

ずれこれも教える気だ、君ならものにできる。今はとりあえず、そういう技術もあるんだという事を知った上で、注意して俺の動きを見て学んでおいてくれ」

「……………はい」

声を返しつつも、

「……………フェイト？　どうかしたか？」

「……………あ、いえ、なんでもありません！」

フェイトの胸中は複雑だった。

もちろん、自分にも教えてもらえるとというのはとても嬉しい。彼の下にいると、どうやって強くなったらいいか、などと悩むことはない。彼は次から次へと、道を示してくれる。それはとてつもなく幸運なことだろう、自分が今、いかに恵まれているかというのは言うまでもない。

だが。

そんな風に、こんな風に尊い教えをくれる彼は、自身を全く誇らない。自らを決して優れた武芸者だと思うことはない。

それは一見、美德に思える。謙虚さによるものだと思える。

しかし、そうじゃないとフェイトは思う。誇らないことと、驕らないことは別だ。彼は微塵も驕らないが、そして同時に誇ることもまたないのだ。

これだけ優れた技を持つことにも、そしてそれを得るために途方もない鍛錬を重ねたことにも、彼は誇りを持っていない。

それはきつと、完成された御神の剣士、そこに届かなかったから、だろう。

「まあ、道は遠いように思えるかもしれないが、大丈夫だ。君は強くなれるさ、フェイト。それだけのものを持っているし、努力も怠らない。高みに上り詰めることができるだろう。……………いずれ俺などよりも、高い所へたどり着く」

黙り込んだフェイトの様子を気にしてか、気遣うようにそう恭也は言った。

「……………そんなことは」

「まあ信じろ。一応は、師匠の言葉だぞ」

そして、フェイトの頭をたまになのはにやるように、少し乱暴にかき回した。

フェイトは思う。間違っていると、そう思う。

恭也の言葉、自分が恭也よりも高みにいけると言う事それ自体もやはりフェイトには信じられないが、そのことではなく。

あんなに凄い人が、あんなに素敵な人が、あんなに暖かい人が、自分を誇らないなんて間違っていると、そう思うのだ。

だから、フェイトは言う、誓う。

「私は、絶対負けません」

「……いい気迫だ。まるで、あの男のようだな」

(恭也さん、私は負けません)

強敵とにらみ合いつつ、フェイトは胸の中、彼に誓う。

バルディツシュを強く握った。そしてまっすぐに前を見据える。

目の前にいるのがどれほどの強者かは正確に認識している。だが、だからこそフェイトは確かに誓う。自分は決して負けないと。そして。

そして証明してみせる。

それは、願いであり目標だ。フェイトは、自分が強くなることで、自分の強さを示すことで証明したいものがある。

脳裏に浮かぶのは優しい、そして決定的に寂しげな笑顔を浮かべる男性。彼は自分に、かけがえのない大切なものをたくさん与えてくれる人だ。甘える喜びを、抱きしめられる暖かさを、誰かを信じる勇気を、強さへの道筋を、そして泣きたくなるくらいに誠実な存在の肯定を、自分にくれる人だ。

フェイトは、証明したい。

そんな高町恭也という人の素晴らしさを、証明したい。それは他の誰にでもない。

出来損ないと、自分をそう言っていた彼に。自分を好きになれないと、諦めきった笑顔で言っていた彼に。

高町恭也という人の素晴らしさを、『高町恭也』に証明したい。

言葉にして伝えるのは簡単だ。だが、それでは、今の自分の言葉では彼にはきつと届かない。だから、だったら。

確かな行動で、揺るぎない事実で、絶対の真実で、証明してみせる。(――あなたがどんなに素晴らしい人か、あなたにわかってもらいます！)

だから、そのためには……目の前の相手には負けられない。彼の教えを受けた自分が強い相手に勝つことで、彼の教えがいかに優れているか、そして彼自身がいかに優れているかを示してみせる。

「バルディッシュユ！」

覚悟なら、とうに決まっている。

『Barrier Jacket, Sonic form』

響いたバルディッシュユの声とともに、フェイトの纏うバリアジャケットがその装いを変えた。マントは消え、手首足首には光の羽が輝く。

ソニックフォーム、低耐久高機動の姿だ。

「……薄い装甲をさらに薄くしたか」

「その分、速く動けます」

「緩い攻撃でも、当たれば死ぬぞ。正気か、テストアロツサ」

その言葉に、フェイトは微かな笑みとともに答える。

「あなたに、勝つためです。強いあなたから勝利を得るには、こうするべきだと思ったから」

単純な速度向上だけでは意味が薄いことは、恭也との修行でフェイトは学んでいるが、それでもだからこそフェイトは速度を上げる。その上で彼に教わった技術をきちんと振るえば、この目の前の強者に勝つことだってきつとできるから。

危険は承知、それで退くほどフェイトの想いは軽くない。

「……こんな出会いをしていなければ、私とお前は、一体どれほどの友になれただろうか」

覚悟の表情を浮かべるフェイトに、惜しむようにシグナムは言った。少し伏せたその顔からは、表情は読み取れない。

「……まだ、間に合います。なにも、今ここでこんな風に戦わなくても

いいはずです」

フェイトには、シグナムに戦って勝ちたい理由が、事情がある。とは言え、だがそれは何もこんな奪い合う戦場でなければならぬわけではない。それこそ、友となれたら純粹に力を技を競い合うことだつてできるはずだ。

こんな風に戦うことはない。ここで、こんな風に争うことはないはずだ。

どれほどの友となれただろうか、そんな風に言ってくれる相手を、無闇に傷つけたくはない。今この場を、話し合いのみ終わらせられるのであれば、それが一番いいに決まっている。

だが、

「止まれん。我ら守護騎士、主の笑顔のためならば、騎士の誇りさえ捨てると決めた……もう、止まれんのだ！」

シグナムは、そう言った。その声は硬く、その意志は堅い。顔を上げ、こちらを見据えた彼女の瞳は、これからの戦いが避けられないことを如実に示していた。

ならば、

「止めます。私と、バルディツシュが」

『Yes, sir』

止めてみせる、勝利でもって。

一瞬の間を置いて。

そして、戦いが再開された。

『見つかったか？ ユーノ』

『いや……こっちはまだ。そっちは？』

返ってきた声に、クロノは答える。

『いや、こちらはまだだ』

なのは、フェイト、アルフが守護騎士と交戦している間に、クロノとユーノは、どこかに潜んでいるはずの闇の書を持った他の守護騎士、あるいは主を探していた。

夜の闇の中、桜色と赤色、金色と桃色、オレンジ色と青色の光の瞬きを横目に、クロノは慎重に空を裂き身を飛ばしつつ、あたりを注意深く探る。

『そうか。この結界内にはいないのかな……、そういえばクロノ、結界外はどうするんだ？ 僕か君がそちらに向かうかい？』

『いや、結界外はすでに担当してくれている人がいる』

『そうなのか？ ……っでもしかして』

その人物に思い当たったのか、そう言うユーノに、クロノは正解を告げる。

『ああ、恭也さんだ。彼の移動速度はもう僕らより圧倒的に上だ。範囲の広い結界外は彼に任せられた方がいいと思ってな』

抜けられない仕事で遠出していたらしく、少し遅れて現場に到着した恭也は当初、すぐになのはとフェイト、アルフの戦いに加勢する気でいたようだが、彼らの一対一という強い要望により引き下がった。

そして、せっかくこの場に来たことだと、守護騎士・主の搜索を申し出てくれたのだ。

『そうか、まああの人なら守護騎士でも主でもなんとかしちやいそうだね』

『そうだな……』

少し苦笑混じりのユーノの声に、クロノも同意を返す。

デバイスを手にし、日々鍛錬を重ね魔法を身につけていく恭也は、戦闘力だけならばもうクロノをして手に負えないレベルに達している。本人はまだまだ改善点でいっぱいだと言っていたが、そもそも生身であれほどまでの力を持っていた事、そしてさらにこの短期間であそこまで魔法をものにした事自体が既に驚嘆すべきものであるというのに、この調子で伸び続けることを予感させるその台詞はもはや恐ろしいとすら言える。

『なにかあれば、彼やモニターしているエイミーから連絡が入ることになっている。問題はないだろう』

『そうか、わかった』

リンディなどは、毎日着々と彼への勧誘準備を進めている。近々行

う予定である彼の魔導師ランク測定後に一気にたたみかけるつもりらしい。

上司の、母の押しが強さを知っているクロノは、今からすでに内心恭也に申し訳ないような気持ちを抱えていたりする。

だが、正直なことを言えば、クロノとしても恭也には管理局に入つて欲しくはある。単純な強さに関しては言うまでもないが、それだけでなく、彼と魔法とのファーストコンタクトの例をとってみてもわかるように、彼は冷静な判断力と強靱な精神力も持っている。戦闘経験もかなりのものだし、非常事態に慣れているという点からも管理局にとつてみれば喉から手が出るほど欲しい人材だ。

さらに、個人な事を言えば、会話を交わした数はそう多くないとは言え、彼とは気が合うと思っている。上司にして母や同僚にして友人などに振り回され気味なクロノとしては、彼との会話はかなり安らぐ。どうも、そこらへんに関しては彼は自分と同じように振り回されてきた同類の匂いがするのだ。

それに、某友人などには「お兄ちゃん的存在が出来てよかったじゃないクロノくん！」等とからかわれはするものの、正直彼の持つ頼れる人という雰囲気に着かれるのも確かだ。

もちろん、さすがに直接口に出したりはしないが。

『そういえばさ、クロノ』

『なんだ？』

『恭也さんって、探知魔法も使えるの？ 敵も姿を隠蔽しているかもしれないし、目だけで探すのは大変だと思っただけど』

『……ああ、いや、たしかまだそれは使えないはずだが、問題ない』

そんなユーノの疑問に、今度はクロノが苦笑しつつ答える。

『なんでも、あの人は気配を探って周囲の状況を察知できるらしい』
『……は？』

『実際前にも扉越しに話を聞いていた僕と艦長の事を簡単に見抜いていたからな、本当なんだろう。それに、あの人はこういう事で嘘を言うような人じゃない』

『いや……でも、気配って……』

『その気持ちはわかるけどな』

ユーノは驚いているようだが、クロノはもうさすがにそろそろ慣れた。

『ほんとに、なんなんだ、あの人……』

『とりあえず、僕らの常識が通じないってことは確かだ』

『はは、そうかも』

と、そんな風な会話をしていると、唐突に、

『クロノ、恭也だ。敵の守護騎士、もしくは主らしき者を発見した』

『っ！』

件の人からそんな声が届いた。今まで話していた内容が内容なので、思わず驚きの声をあげてしまったが、

『……わかりました、詳しい状況をお願いします』

すぐに気を取り直し、クロノはそう言った。

『……わかりました、詳しい状況をお願いします』

夜の暗闇の中、頭に響いたその声に、恭也は答える。割と覚え立ての、念話という技術だ。未だあまり慣れないがそうも言っていられない。

『どうやら一人のようだ。外見は十代後半から二十代前半程度の金髪の女性。西側のビルの上に、以前に画像で見せてもらった闇の書と酷似した外見の本を抱えて立っている。俺も同じビルの上にいる。距離を置いて気配も絶っているから気付かれはしていない』

『……西、ですか。こっちは反対ですね……』

クロノが苦い声で言う。中心で戦闘が繰り広げられていることもあり、反対からこちらまで来るのは少々時間がかかってしまう。さらに、恭也の目の前で状況が変化しだした。

『……本を広げ始めたな、なにかするつもりようだ』

『……まさかっ！　闇の書の魔力で結界を破壊するつもりか！　……』

恭也さん、すみませんがつ』

『ああ、わかった。阻止して拿捕する』

『お願いします！　僕もすぐにそちらへ向かいます！』

『ああ、それじゃあな』

そう言つて恭也は会話を切つた。そして、改めて敵の姿を見据え、『いくぞ……魅月』

『はい、主よ』

相棒とそう念話を交わし、恭也は音もなく、しかし強く速く地を蹴つた。黒衣のバリアジャケットで覆われた体は、既に眩体で強化してある。

まさに一瞬で距離を詰め、魅月を抜きはなち、

「動くな」

「っー」

金髪の女性の首筋に押しつけた。

「悪いが身柄を確保させてもらう、大人しくしてくれ。でないと斬る事になる」

「……………え……………あ……………あ……………」

殺気を思い切り当てつつ言うと、女性から、引き攣つたような、上擦つた声が漏れた。

戦闘に加わらずこの場にいる事と、立ち振る舞いからある程度予想していたが、この様子ではやはり彼女は直接戦闘向きではないようだ。抵抗されなければもちろんのこと、たとえ抵抗されても無力化できるだろう、恭也はそう算段を立てた。もちろん油断は禁物だが。

「さあ、どちらを選ぶ」

「……………わ、わたし、は……………」

「……………ちっー」

油断は禁物、そう自分に言い聞かせた言葉は、結果的に言えばすぐに役に立った。響いた足音と、突然現れ急速に肉薄する気配を察知し、恭也は女性の背後から飛び退いた。

「はあっー」

直後、寸前まで恭也の体があつた位置に、白い服に身を包んだ仮面の男の蹴りが突き込まれた。

「仲間か……………」

恭也は跳んだ先で構え直しつつ、その人物を睨みつけた。

仮面の男は、かばうように恭也と女性の間割り込んでいる。先ほ

どの強襲や鋭い気迫から、かなりの実力者である事が伺えた。

「……貴方は？」

「続ける」

「え？」

「闇の書に蓄えられた魔力を使って結界を壊すのだろうか？　あの男はこちらで抑える、その間にやれ」

（仲間ではないのか？）

警戒する恭也の前で交わされた仮面の男と女性の会話、さらに女性の態度からは、予想に反してどうもそのように思われる。だが、

『主よ』

「ああ、わかっている」

仲間であろうとなかろうと、関係はない。こちらの邪魔をするというのならば、悪いが排除させてもらおう。

恭也は一気に加速、すぐさま仮面の男に詰め寄ると、先ほどのお返しとばかりに、右手に握った魅月で、晃刃の籠もった容赦のない逆袈裟斬りを浴びせる。

「っ！　ぐっ……」

仮面の男はそれを身を捻って回避するが、完全には避けきれず魅月の切っ先がジャケットを切り裂いた。

その様子を見て、恭也は内心達成感を得る。

以前の戦いでは、バリアジャケットにはなかなか刃が通じず苦勞させられた。しかし今、魅月に晃刃を籠め振るうことでそれを切り裂くことに成功したのだ。徹で無理矢理ねじ込まずとも、攻撃は通る。

とは言え、もちろん気を抜きはしない。今の一撃への反応を見ても、仮面の男が高い近接戦闘能力を持つことがわかる。さらにこちらはまだ魔法に関して実戦で初使用、対してあちらはどうかは知らないが、さすがに自分より経験は上だろう。何をされるかわからない。

冷静に冷静に。

恭也は殺気とともに追撃の刃を奔らせる。

「ぐうっ！」

今度は、仮面の男は青みがかった渦をまくようなシールドを展開

し、それを受け止めた。かなりの硬度・耐久度を誇るらしく、おかげで刃は男の体まで到達せずに弾かれる。

(ならば――)

恭也は左手でもう一振りの魅月を抜刀、そして、

御神流奥義 花菱

二刀による連撃を見舞った。眩体による身体強化と晃刃による斬撃強化で彩られた剣劇の嵐が、夜の闇の中咲き誇る。

「な、こんな……ぐうっ！」

さらにその一撃一撃には、徹も籠めてある。どうやらシールド越しでもある程度は有効らしく、男の体が苦しげに揺れる。そして、

「……もらった」

そう時間はかからずに、シールドはあっさりと碎け散った。そこへ、恭也は踏み込み、男の体へ水平斬りを叩き込んだ。

「があっ！」

ジャケットが大きく切り裂かれ、男の体は後方へ吹っ飛んでいく。

恭也はそこへ追撃をかけようとするものの、

『主、女の方を！』

「む、そうだな！」

魅月の声に、視線と意識を女性へと向ける。

女性は、本を広げ、なにか詠唱のようなものを唱えていた。結界を破壊する魔法とやらを放つつもりだろう。

そうさせるわけにはいかない。牽制とばかりに恭也は、

「はあっ！」

「……え、きやあっ！」

影刃を放った。黒い三日月状の刃は、女性がとっさに展開したシールドに阻まれたが、その体を転がせ、詠唱を中断させることに成功する。続けて本格的に無力化させようと踏み込もうとするが、

「……させんっ！」

復帰したのか、仮面の男が恭也に躍りかかってくる。

またしても襲い来た蹴りを、恭也は無駄のない動きで回避。返しざまに突きを放つ、男は辛くもそれを避け、今度は拳を振るいにかかる。

恭也はそれを突きから派生した横斬りで潰す。

男の拳と恭也の刀が互いに弾き合う。男の拳から鮮血が散った。

「ぐう……い！」

「ふっ！」

男がほんの一瞬ひるんだ隙を逃さず、恭也は影刃を放つ。それは、
「なっ、くっ……い！」

目の前の男に対してではない、またしても詠唱を始めた女性にだ。
今度は転倒はしなかったものの、緊急のシールド展開を余儀なくされ、女性の詠唱はまたも中断される。

「貴様っ！」

「悪いが、結界を破壊されるわけにはいかないでな、つと！」

声をあげた仮面の男にそう言いつつ、恭也はまた放たれた蹴りを躲す。

そこに反撃を浴びせようとしたところで、

「っ！」

妙な気配を感じ、その場から跳び退る。すると恭也の体があつた辺りに突然現れた光の輪、もしくは縄のようなものが縛りかかった。

反応が遅ければ捕らわれていただろう。

「……外しちゃった」

小さく響く女性の声、詠唱よりも恭也の排除を優先したのだろうか。

「魅月、今のはバインドとか言う奴か」

『はい、主よ。主であれば抜けるのにはそう時間はかかりませんが、しかし少しの間身動きがとれなくなるのは確かです』

「この状況でそれはまずいな、くっ！」

そう言うそばから、仮面の男が恭也へ突っ込んできた。先ほどのバインドを警戒しつつ攻撃を躲す恭也へ、

「みんな、お願い！」

女性の高い声と共に、緑の色彩を纏った小さな竜巻がいくつも囲うように襲いかかる。

前方からは仮面の男の猛撃、右・左・後方からは女性の魔法らしい

竜巻。

バインドも警戒しなければならぬ中、じりじりと囲まれていく。
(こうしていても仕方ない、か)

状況を打破するため、恭也は、

御神流奥義 神速

温存していた手を放った。

世界がモノクロに染まる。重みを格段に増した空気の中、恭也だけがその身を奔らせた。仮面の男に一撃を加えてから、右手から迫る竜巻の間を潜り抜け、包囲を脱する。

そして世界に色が戻った。

「な、いつの、まに……」

恭也が一瞬にして包囲から抜け出たことに驚愕の声をあげる
仮面の男は、

「……ぐっ！」

知覚のないまま斬られた事によるダメージでよろめく。

それは決定的な隙だった。

「魅月、装填！」

『はい、主よ！』

恭也の言葉に応え、魅月の鏢が上下に稼働、コツキング音が響き、柄尻から空薬莖が排出された。恭也の身と魅月に膨大な魔力が満ちる。

そして恭也は、魅月を納刀。そこから、

御神流奥義 虎切・飛

抜刀による一撃を放った。いかな長射程を誇る虎切と言えど、刀自体はこの距離で届くことはない。だが、
「なっ！」

超高速で振るわれる刀身から放たれた巨大な黒い刃は、一瞬で仮面の男のもとへ奔り、男がとつさに展開したシールドを易々と引き裂いて、飲み込むかのようにその体に食らいついた。

「がああああああっ！」

声を残し、後方に吹き飛んでいく男。

虎切・飛。

抜刀術の虎切からカートリッジロードで膨大な魔力出力を得た影刃を放つことで、高速で巨大な刃を生成する、恭也の持つ御神流の奥義と魔法を組み合わせた技だ。

『実戦初使用、上手くいきましたね』

「ああ」

早々に勝負を決めるために放ったが、上手くいってよかった。

これでは、あの女性を捕縛……、

「……待て、まさか！」

そこまで考え、慌てて女性の方に視線を向けた恭也の目に、浮かび上がった黒球がドーム状の結界へ巨大な雷を落とす様が写った。

(今の攻防の際に詠唱を完了したのか……！)

バインドや竜巻を放ったのは、恭也の排除を優先したのではなく、そう思わせて自分が詠唱するという可能性をこちらの考えから排除するため、だったのだろう。

そもそも恭也には、あの規模の結界を打ち破れる強さの魔法にかかると詠唱の時間、と言うものの検討がつかなかった。そのせいで、結果的には見積もりが甘くなってしまった。

「くっ……」

だが、今は悔やんでいても仕方がない。恭也は即座にビルの屋上のコンクリートでできた地面を蹴り、一瞬で女性との距離を詰め、斬りかかる。

そして、女性は、そんな恭也の動きを予想していたかのように、恭也の刃に対しシールドを、

(——なにっ!?)

張らなかつた。

「転送っ！」

代わりに彼女の口から響いたのはそんな声。同時、恭也の刃が彼女の体を捉えた。

ジャケットを切り裂かれ、音をたて女性はその場に倒れ伏した。

その傍らに、本は、ない。

『自分の身よりも、闇の書の転送を優先したようですね……』

「そのようだな……」

恭也は倒れる彼女の傍へ膝を突き、意識がないことと、息があることを確認する。非殺傷設定の上、峰打ちとした結果だった。

自身よりも闇の書の待避を優先したと言うことは、この女性は主ではなく守護騎士なのだろう。

「……先ほどの策と言い、敵ながら天晴れだ。守護騎士とはやはり、大したものだな」

彼女の体を念のため鋼糸で拘束しながら、恭也はそう呟いた。そしてクロノへ念話を飛ばす。

『すまない、クロノ。敵の魔法の発動を許した、……俺のミスだ』

『いえ、こちらにも間に合いませんでしたし、そもそも予期せぬ妨害を受けただんです、気にしないでください！ それになにより敵の拿捕、感謝します』

『む……そうか、エイミイか』

こちらの状況をクロノが知っていたことに疑問を抱いたが、すぐにモニターしているエイミイに思い至った。彼女がクロノに伝えたのだろう。

『ええ、そうです。仮面の男、でしたか、その敵襲を読めなかった管理局にそもそもその落ち度があります。それを受けながらも守護騎士または主を捕獲できたのは僥倖です、お疲れ様です』

『だがな……、いや、すまん、こんな事を言っている場合じゃないな。この敵の魔法はかなり強力なようだが、やはり結界は破られそうか？』

『そうしたら中にいる君達は……』

『いえ、結界は破られてしまうでしょうが、大丈夫です。アルフとユーノと僕でシールド魔法を展開しますから。ご心配なく』

『そうか……よかった』

その言葉に、恭也はひとまず胸をなで下ろす。

『こちらは大丈夫です。恭也さんはその場での待機をお願いしますか？ 折角捕まえて頂いた重要参考人を、逃がすわけにはいかないので』

『わかった』

『それでは、お願いします』

『ああ、……なのはやフェイト達を、頼む』

『はい、任せてください』

そう言って、クロノとの念話は終わった。その最中に女性の拘束作業も完了、よほどの達人でも抜け出せないような縛り方をした上、鋼糸自体も晃刃で硬度強化してある。デバイスらしきものも確保させてもらったし、ひとまずこれで大丈夫だろう。

『お疲れさまです、主よ』

「ああ、魅月もな」

『……自戒心強き主よ、どうか自分を責めないでください』

恭也の声から陰を感じたのか、魅月がそう言った。恭也は苦笑し、彼女の鞆を撫でる。

「ありがとう、魅月。だが、魔法の発動を許し、本の確保もできなかった。……情けない」

『執務官の言われたように、仮面の男の強襲を退け、守護騎士を無事拿捕した、というわけにはいきませんか？ 私の見たところあの仮面の男はかなりの実力者です、この結果を出せたのは主だからこそです』

閃光と轟音があたりを響いた。結界が破られ雷が街に落ちたのだ。目を細めながらその光景を見つつ、恭也は言う。

「だが、結局はその仮面の男も吹き飛ばしてしまったせいで捕らえられなかった。本来なら、不確定因子で不穏分子たるあいつも拿捕すべきだっただろう」

『今回の状況でそれは二の次でしょう、撃退した事で良しとするべきです。それに案外……どこかで倒れていて今頃、局員が確保しているかもしれませんし』

「……そうだといんだがな」

音と光が止み始めた。街に、徐々に静寂が戻ってくる。

「すまん、魅月。愚痴っぽくなってしまった、もっと精進せねばな。

……魅月は今回、本当によくやってくれたよ」

『それこそ主こそ、です。純粹な戦闘として見るならば敵を圧倒していましたよ。それに、実戦初のカートリッジ使用もうまくいったでは

ありませんか』

「……ああ、カートリッジシステムの使用はあまり練習していなかったからな、うまくいってよかった」

『そう言えばたしかに、今まであまりぐ使用になられませんでしたね。眩体、晃刃、足場生成魔法の通常使用はそれらもう入念に鍛錬されていましたが……カートリッジはお気に召しませんでしたか？』

魅月の疑問の声に、恭也は答える。

「気に入らないというか……そうだな。戦闘スタイルとして好みではないのは確かだ」

『理由をお聞きしても？』

その言葉に、どう言ったものかと恭也はしばし逡巡、そして語りだす。

「……カートリッジシステムを利用した魔力増強はたしかに強力だが……どうにも、あれには隙が多すぎるんだ。あれに頼り切りでは、戦闘が大味になってしまいそうだな。駄目とは言わないが、効率とスピードが旨の御神としては、ちよつとな」

『隙、ですか？』

「ああ。カートリッジは装填のために幾つかのプロセスを踏まねばならず、さらにそこから充填した魔力を使って魔法や技を繰りだそうとすれば、加えてその準備とモーションが入ることになる。つまり結果的に動作としては、カートリッジ装填発令、装填動作、空薬莖排出、魔力充填、発動魔法準備、モーション、魔法発動という流れになるだろう」

細かい差異は場合と状況によってあろうが、基本的にはこのようになるはずだ。

そしてこれは、あまり恭也にとっては好ましくない。

「これでは、御神の実戦で使うには少々段階が多すぎるし、敵に悟られやすすぎる。カートリッジ装填発令はともかくとして、装填動作や空薬莖排出などは明らかな隙となる上、敵にそれらが丸見えだからな、これから大技を撃ちますよと伝えているようなものだ」

それでもそこから強力な攻撃を発動し、力で敵をねじ伏せるという

戦法をとるのであれば、それはそれで問題ない。だが自らの隙を徹底的に殺しきり、そして敵の隙を突く御神……特に恭也の不破流の戦闘スタイルとしては、あまりそれはよろしくない。通常、御神の戦闘は生身で銃を相手にするので、敵の攻撃に当たらない事がまず第一となる。故に、敵の攻撃・迎撃を覚悟の上で、それを上回る攻撃をもって潰すという考えは、どうにもしづらいのだ。

「実際、今回は神速で敵の隙を無理矢理作り、こちらの準備時間を確保できたから使用に踏み切ったが、それでも結局はシールドの展開を許した。攻撃自体は読まれていたわけだ。これではいかに強力とは言え……」

『……』

「……いや、魅月、今のは、その、な」

しまった、無神経だったか。

押し黙った魅月の様子に恭也は焦る。今の言い方ではまるで彼女が悪いようにもとれてしまう。恭也が言いたかったのはそういうことではもちろんない。ただ、スタイルの話として好みがあるというだけだ。

魅月は恭也を自戒心の強い、などと言ったが、恭也からしてみれば彼女の方がそうだ。自分で責任を負いたがってしまふ。

その彼女に、この言い様はなかったらう。

「まあ、なんだ、今のは御神の剣士としての意見なわけだな、隙があると言ってもバリアジャケットやシールドのある魔導師としての戦いではまた勝手が違うし、相手のシールドの発動を許すとは言えそれを切り裂ける威力を出せるならばそれはそれで活用の仕方がある」

『……いえ、主』

「カートリッジシステムが悪いのではなく、つまり俺と相性があまり良くないだけで、それはこれから……」

慌ててフォローする恭也に、魅月は、

『主よ、お聞きください。違うのです』

珍しく恭也の言葉を遮って声をあげた。

「む……、なに、違う？」

『ええ、違うのです。私が気を落とすとお思いになってくださったの
でしょうが、違うのです、主よ』

「……そう、なのか？」

無言の様子と彼女の性格からてつきりそう思い込んでいた恭也に
は、すこし意外な発言だった。

魅月は続けた。

『ええ。私は今、……とても嬉しいのです、主よ！ 我が主よ！』

「嬉しい？」

意図の読めない恭也に、魅月は言う。

『ええ。嬉しいのです。やはり、やはり私は貴方のために作られたデ
バイスなのではないでしょうか！』

本当に嬉しそうな声で、言う。

『他のデバイス達ではどうしようもなかった問題でしょうが、私なら、
私と貴方なら！ どうかかなるのですよ、我が主よ！』

「み、魅月？」

『主は私を選んでくださいましたが、それでも一抹の不安はありまし
た。私よりも貴方にふさわしいデバイスがあるのではないか、そう
思っただけです。ですが……他でもない私だからこそ、私が私だからこそ、他のデバイスではなく私だからこそ！ 今、貴
方の力になれます、愛しい主よ！』

「す、すまない魅月。喜んでくれるのはいいんだが……説明をお願い
できるか？ 正直、一体なんの話をしているのか……」

魅月が嬉しそうなのは一向に構わないし、自分の力になれることを
喜んでくれるというのは有り難い話だ。だが、さすがにどういふこと
なのかの説明は欲しかった。

『ええ、ですから、主、先ほどの話ですよ！』

「さっきの……、カートリッジの話か？」

『そうです！ 主がカートリッジについてお気に召さない点について
です！ 主の指摘は実を射たものでした。そして、私と貴方な
ら、それを解決できるのです！』

「……なに？」

カートリッジにおける問題点、おおざっぱに言えば隙が大きすぎる
ことと、敵に丸分かりなこと、だが。

「なんとか、なるのか？」

驚きと期待をこめて、そう恭也が魅月に問うと、彼女は嬉しそうに
返してきた。

『ええ、なります、なりますとも、主よ。本当に主は優れた方です。ま
さか、わざわざご説明するまでもないと思っていた私のあの機能が、
こんな風に役に立つ日がくるとは！ むしろ、どうして今まで気づか
なかったのか……。ああ、そうです、そうです主よ、なんとかなるの
です！』

そして。

魅月は、詳細を語った。

聞き終えた恭也は、

「……なるほどな。いや、本当に魅月が俺のデバイスになってくれて
よかったよ」

『光栄です、主よ』

そんな風に彼女への賞賛を送り、

「それじゃあ早速、次の鍛錬で試してみるとするか」

『はいっ』

期待を胸に、夜空の下、そう言った。

(くそ、しょーじき、助かったな……)

頭上で結界にヒビを入れていく巨大な雷を見つつ、ヴィータは心の
中呟く。

はつきり言って、かなり押されていた。バリアジャケットは所々は
じけ飛んでいるし、体力も魔力も相当削られている。

ヴィータの視線の先には、白い衣装を身に纏った少女の姿。少女は
力強い瞳でこちらを見据えている。

「ヴォルケンリッター、鉄槌の騎士、ヴィータ。あんたの名は？」

ヴィータは騎士として彼女に敬意を表し、そう名乗り、問うた。

「……なのは。高町なのは」

「高町なの……な……ええい呼びにくいっ！」

「逆切れっ!？」

心外だと言わんばかりに少女——なのははそう言うが、知ったことではない。実際に呼びにくいのだから仕方ないだろう。

「ともあれ勝負は預けた！ 次は殺すかんない！ ぜってーだ！」

そしてヴェータはそう言い放ち、身を翻そうとするが、

「……逃がすと思う？」

「……っ」

なのははデバイスを構え、恐ろしい気迫でこちらを睨んでくる。

話し合いだなんだと甘いことを言う割に、いざ戦いとなったらまるで容赦がない。

だからヴェータとしては、

「さすがはあの化け物の妹だな……」

状況への苛立ちも相まって、本当になんとはなしについ口走ってしまった言葉だったが、

「……化け物？」

「……あ、いや」

(やべ、地雷踏んだか……!?)

それを聞いたなのはの瞳と声はその温度を大きく下げ、気迫ははつきりと鋭さを増した。

「……ねえ、それ、お兄ちゃんのこと？ 今、お兄ちゃんのこと、化け

物だなんて言ったの？」

「あ、や……その……」

まずい、これは、非常にまずい。背中を嫌な汗が伝った。

「お兄ちゃんのこと、なんにも知らないのに、そんな事言うんだ……ふうん」

「……ふうん……ふうん」

どうやら本当に失言だったらしい。

「そう……ふうん、そう、そんな事、言うんだね……ふうん」

なのはの周囲に、彼女の怒りを表すように、桜色の光球が次々と浮

かび上がる。

(やばいやばいやばいやばいやばいやばいっ！)

「……っじゃ、じゃあな！」

ヴィータはもうさっさと逃げるに限ると判断、大きめの赤いスフィアを作り出し、

「吠えろ、グラーフアイゼン！」

『Eisen ge heul!』

それを手に持つ相棒で思い切り叩いた。直後、爆音と赤い閃光が辺りに広まる。

「っうあー！」

思わずと言った様子で目と耳をふさぐのは。

ヴィータはそれを横目に、全速力でその場から離脱した。

「すまんテストタロツサ、この勝負、預ける」

「シグナムっ!?!」

シグナムは、結界を食い破らんとする雷を見、目の前の好敵手にそう告げた。

「お前も私も……このまま戦って、あれに吞まれては無事ではすまん」
「……そう、ですが」

今の今まで戦いを繰り広げていた二人は、有り体に言って共に消耗が激しい。シグナムはバリアジャケットに大きく損傷を受け、肉体にダメージも入っている。そしてフェイトも大きな一撃こそ受けてないものの、高速機動の連続で疲労がかなり溜まっているはずだ。

戦いを続けながら、あの雷の余波を防ぐのは困難だ。

「損傷のある私もだが、装甲の薄いお前は今の状態では本当に危険だろう。……刃を引いてくれ」

シグナムは、レヴァンティンを鞘に収めた。

「……わかりました」

少しの逡巡の後、フェイトもそう言って光刃を消し、さらに姿を最初のマントを羽織った形に戻した。

「今回はどちらの勝ちでも負けでもない。見事だ、テストアロツサ」

「貴方こそ……シグナム」

言葉と視線を交わしあい、そしてシグナムは、

「……ではな」

一時の別れを口にし、上空へ離脱した。

そしてすぐに雷が結界を破り、街に落ちる。

『ヴィータ、シャマル、ザファイラ！』

（駄目か……）

仲間に声をかけるもしかし、迸る魔力の影響で念話がどうにも通じない。仲間達が簡単にやられるとは思えないが、

「……無事でいてくれ」

思わず、そう呟く。

実際、自分が戦ったフェイトは世辞でも何でもなく、本当に強かった。力も技も、そして心も、強靱だった。ヴィータやザファイラの相手がどうだったかはわからないが、もしフェイトと同じレベルだったとすれば少々危うい。結界外のシャマルにも管理局の手が伸びていないとは限らない。

それに、

（あの男は、いなかったのか……？）

管理局とまみえる事となったら、ある意味一番警戒すべきと思っていた相手の姿がなかった。よかったと言えばよかったのだが、少し、嫌な予感がする。

だが、ここでうだうだとしている暇はない。雷の影響が残っている内に去らなければ管理局のサーチャーに捕捉されてしまう。

仲間の無事を祈りつつ、シグナムは夜の闇の中転移魔法を起動、その場から姿を消した

第5話 ありません、いません

「現状を整理しましょう」

海鳴市臨時発令所となったマンションの一室、展開された空中投影モニターの前で、恭也から見て六つ七つ歳下のはずの少年は実に堂々とした立ち居振る舞いだった。

室内に集まったアースラススタッフたちと共にモニターへ視線を向けながら、立派なものだと恭也は感心に一つ頷きを落とす。

モニターに、映像が映し出され始めた。

「昨夜、守護騎士二名を強襲結界内に捕縛。その後、僕と囑託魔導師のフェイト、使い魔のアルフ、民間協力者のなのは、ユーノが現場に向かいました。フェイトとなのはが守護騎士と交渉を行いました、決裂。戦闘へ」

なのはと赤い少女——ヴィータ、フェイトと騎士姿の女性——シグナム、アルフと獣の特徴を持つ男性——ザファイラ、三組による張り詰めるような十二月の夜空での魔法戦。

それを、特になのはとフェイトの戦いを目にし、何人かが歓声に近い声をあげる。

「なのはさんもフェイトさんも……ずいぶんと強くなったわねえ」

しみじみとリンディが言うが、まさに彼女の言葉通りだ。二人はモニターの中、守護騎士相手に一步も引かず、勇猛に戦っていた。

どうやらリーダー格らしいシグナムと互角に苛烈な近接戦を繰り広げるフェイトに、シグナムほどではないにしろ強大な力を持ち、それこそ一度は自身を沈めたヴィータを、今度は逆に撃墜寸前まで追い込んでいるなのは。

元より才ある二人だが、ここまでのものになるには相応の、相当の努力があつたことであろう事を周囲に思わせる戦いぶりだった。

「ほんと、レイジングハートとバルディッシュの改修が間に合つて良かったよ。ちゃんとカートリッジの説明とかできたしね」

そう言葉を漏らしたのはエイミー。

レイジングハートとバルディッシュの修繕及び改造は、この戦いの

三日ほど前に終了している。すぐに二人には新しく積んだシステムの説明がされたので、今回の実戦でもそれを使いこなすことができたようだ。エイミイの声に安堵の色が強いのは、オペレータとしての責任感ゆえだろう。

「いやー、でもすごいね、なのはちゃんフェイトちゃん。これはかなり練習頑張ったんじゃない？」

その場にいる者たちの声を代表するかのようになら続けた彼女にしかし、当のなのはとフェイトはゆっくりと首を振った。

「ううん、違います。ここまで出来たのは、レイジングハートと……」
「バルディッシュの、……そして」

席を一つ挟み座る二人は、少し身を前屈み、横を向きお互いの顔を見て頷き合うと、

「お兄ちゃんのおかげだよ」「恭也さんのおかげです」
間に座る恭也へ、笑顔でそう言った。

「……二人の努力さ。誇って良いことだ」
そう返す自分の声には、さすがに多少の照れが乗っていた。

「ううん、何よりお兄ちゃんのおかげだよ」
「あの、ほんとに、やっぱり恭也さんはすごいです」

なのはがべったりとこちらの腕を抱くようにとってそう言えば、反対側でフェイトが少し顔を赤くしながら小さく袖を掴んでいる。

「……まあ、二人の力になれたのなら良かったよ」
妙に暖かい周りの視線が気になるが、しかしまさか振り払うという

選択肢があるはずもなく、されるがままの状態の一つ苦笑を浮かべてから、

「だが、それに比べて……、俺は情けないものだな」
モニターに視線を戻し、眉間に皺を寄せながら思わずこぼしてしまったのは、そんな台詞だった。

ちょうど映像が切り替わり、ビルの上に立つ金髪の女性——守護騎士の一人を発見した場面が流れる。

映像はそのまま続き、モニターの中、間合いを詰めた自分が女性に刃を突きつける。

「いえ、恭也さん。改めて言いますが、貴方に落ち度なんてありません」

こちらの言葉に、クロノがきつぱりと返した。

映像はさらに進み、仮面の男の強襲が映る。

管理局のサーチャーにも反応せず、まさに突然死角から襲い来たそれを、

「うそっ！ 避けた!?」 「な、なんでわかったんだ……? 攻撃来たの……」

一応それなりに余裕をもって躲した自分の姿に、スタツフ達がどよめく。御神流の剣士としてはそう難しくもない事でこんなにも驚嘆されると、これがなかなかこそばゆかった。

そんな中、クロノがため息を吐いた。

「というか、どうしてここまでの働きをしてくださったのに、ご自分の評価はそんなに低いんですか?」

仮面の男と恭也の戦いが始まる。映像の中の無愛想な男は、仮面の男の攻撃を躲し、それなりの反撃を叩き込んでいる。こうして客観的に観ても、まあ一応は及第点をやれるであろう太刀筋だが、やはり室内のどよめきは照れくさい。

「いや……だがな」

映像が進む。

仮面の男と守護騎士の女性の魔法に囲まれるシーンだ。それを見て少し身を固くした両脇の二人を安心させるように、恭也は彼女達の頭を撫でた。

「出た！ 瞬間移動!」 「……うわー、ほんとに魔法じゃないの? あれ」 「何度見ても信じられませんね……」

室内を三度のざわめきが包む。

そしてそれは、カートリッジロードからの抜刀術、巨大な黒刃生成・射出の場面で最高潮となった。

黒刃が仮面の男を呑み込み吹き飛ばすと、その威力・速度・規模に對し、賞賛の声があちらこちらで上がる。

そしてその後、巨大な雷の魔法が発動、恭也がその発動者たる金髪

の女性を拿捕するシーンまで流れ、そこでクロノが映像を停止した。「恭也さん、本来ならば貴方は簡単に守護騎士を捕らえて結界の破壊も阻止出来たのです。そこにあの仮面の男の強襲があったのは予測外の出来事ですし、それを看過した僕らに責任があります。恭也さんはその中で奮闘してくださって、守護騎士の拿捕をなしてくれたのですから、もう一度言いますが貴方に落ち度などありません」

クロノ以外のアーススタッフ達も同じ意見なのか、皆一様にクロノの言葉に同意の声を上げる。

「……わかった。そう、だな」

さすがにここまで言ってもらって、まだ持論を貫くほど人の情がわからないわけではない。頷き、そう返した。

「……さて」

少しの間を置いて、リンデイが言う。

「それじゃ現状の確認、まとめをお願いできる？ クロノ執務官」

「はい。書は逃したとはいえ、守護騎士の一人を拿捕……、昨夜の件で、状況はかなり動きました」

クロノの声は静かな、しかし強い意志の籠もるものだ。

「拿捕した守護騎士から情報を引き出せる可能性はもちろんありますし、側近が奪われたのです、あちら……闇の書の主側から何かしらこちらへのアクションもあるかもしれません。もし、焦ってくれればチャンスでしょう。……こちらの戦力は、僕や貸し出してもらえた部隊に加えて、協力を申し出てくれたなのはに、フェイト、アルフ、ユーノ。……それに」

「ああ、なのはやフェイトがこの件に関わり続けると言うのなら、何もしないでいる事などできないし、俺自身も関わりたい理由が出来た。俺で良ければ、出来る限り手を貸そう」

「ありがとうございます。恭也さんの実力は先ほどの映像の通り、現状、この事件に対応するために揃った戦力はかなりのものです。主の素性やあの仮面の男など不確定要素は多いですが……」

「事態の収束は、近いかもしれないってことね」

リンデイにまとめるようなその言葉に、クロノは頷く。

「はい。もちろん、闇の書が完成すれば被害は甚大ですし、管理局のサーチャーを抜いたあの仮面の男の事も考えれば決して気を抜ける状況ではありませんが」

「そうですね。……できれば、アレ、使わずに済めばいいんだけど」

「……そうですね」

リンデイのため息まじりのそんな言葉に、クロノは同じような声音で返した。

「アレ、って……何ですか？」

「こんな事態じゃないと使用許可が下りないような、物騒な武装のことだよ」

疑問をあげたなのはに答えたのはエイミイだ。

「アルカンシエルっていう魔導兵器なんだけど、今、アースラに配備されている最中なの」

「そうなんですか……」

「まあ、使わなきゃいけないときは使わなきゃいけないんですけどね。

……エイミイさん、守護騎士さんの様子はどうかしら？」

少々驚きの籠もった声をあげるなのはに苦笑しつつのリンデイは、そう言っつて話の方向を変えた。

彼女に、エイミイは医療班からの資料をモニターに映し、答える。

「未だ眼を覚ましません。ただ、少々特殊とは言えバイタル反応はあるようですから、活動停止しているわけではなさそうですね。医療班の見解ではすぐに意識を取り戻すだろうと」

「そう、それじゃあ……このまま起きるのを待つて、その後、彼女から事情聴取ね」

「あの……」

「リンデイ提督……お願いが」

なのはと、そしてフェイトがおずおずと手を挙げた。

「それ、私たちがやっちゃだめですか？」

続けてそんな言葉を発したのはなのはで、それにリンデイは少々驚きの表情を見せる。

「……事情聴取を？ あなたたちが？」

「はい、お願いします、リンディ提督」

フエイトも、はつきりとした口調でそう言った。

「そうねえ……」

元々、なのは、フエイトは守護騎士たちと話をしたがっていたし、それで問題を解決したがっていた。恭也から見ても、であれば今、こう言い出さないわけがないと思う。

「……本来ならそういうわけにはいかないんだけど、二人の気持ちもわかるし、どうしようかしら」

申し出た二人の心境がわかるのだろう、リンディは複雑な表情で。
やがて、そんな彼女はなぜか恭也の方を向いてきた。

「……恭也さん、あなたはどう思われますか？」

「……俺ですか？」

急に話を振られ、虚を突かれた心地の恭也にリンディは微笑む。

「今回、守護騎士を実際に拿捕してくださったのは恭也さんですし、ご意見をと思ひまして」

「ああ、なるほど」

「それに、貴方なら的確な判断を下してくださいとも思いますし」

「……ご期待に添えるかどうかはわかりませんが、そうですね、俺は」
そこで一旦言葉を切り、目も瞑りつつ黙しながら、改めて思い出す。

あのときの、彼女の眼を。

(そうだな……やはり)

出た結論は、はつきりしていた。眼を開け、口を開く。

「なのはとフエイトに任せるのが、正解だと思います」

「理由をお聞きしても？」

「あの守護騎士……彼女には、尋問や詰問はおろか、拷問でさえ何の意味もなさないからです。であれば、友好的に話し合うのに向いた人員を向けるのがベストでしょう」

「……管理局としても法外的手段に頼る気はありませんが、しかし、意味をなさない？」

「ええ、あのタイプは、守るべき物のためならば自分の身など厭わない。そんな相手に力尽くなんて、何の意味もない」

彼女は当初、刃と殺気に向けられて目に見えて萎縮していた。声は震え引き攣り、体は強張っていた。

しかし、だと言うのに。

いざ自分に刃が迫ったそのとき、彼女は全くそんなものを意に介さなかつた。怖れても、怯えなかつた。ただ、仲間のために、主のために動いた。自分が逃げることなど考えず、自分を守ることなど思いもせず、ただただ、躊躇なく書を逃がすことを優先した。迷いのない瞳、誰かを想う決意と覚悟の眼で。

「彼女から一方的に情報を引き出すことなど不可能でしょう。あちらから話を聞き出すのではなく、まずはこちらの話を聞いてもらうことから始めなければ。……そして、それに向いているのが誰かと言ったら、それはこの二人でしょう」

恭也は両脇の二人の頭に手を置いた。なのは嬉しそうに笑みを恭也に向け、フェイトは照れたように下を向いた。

「……そう、ですか」

「もちろん、俺個人の意見ですが」

「いえ、……そうですね、その通りだと思いますわ」

リンディは柔らかく微笑み、視線をなのはとフェイトへ。

「なのはさん、フェイトさん、彼女が起きたら、お願いできるかしら？」

その言葉に二人は大きく頷き、

「はいっ！」「はい！」

そんな風に、しっかりと意思の乗った声を返した。

「ありがとう、二人とも。……そうそう、ついでにもう一つ、お願いしたいことがあるんだけどいいかしら？」

「……艦長」

「いいじゃないクロノ、必要性はあなただって十分理解しているでしょっ。」

「それはそうですが」

渋い顔と声で口を挟んだクロノの意見を、少しいたずらな表情でリンディははね除けていく。

「あの……リンディさん、なんのお話なんでしょうか？」

「私達に出来ることならもちろんご協力しますけど……」

なのはもフェイトも何の話かわかっていないらしい。当然わかっておらず首を擦る恭也の両脇、彼女たちはそんな風にリンディに問う。

「ああ、ごめんなさいね。ええつとね、二人だけじゃなくって、恭也さんにもお願いなんですけど……」

「……俺にも？　なんででしょう？」

「恭也さん対なのはちゃんとフェイトちゃんペア、ちよつと戦ってみて頂きたいんです」

「基本的には私が前衛で抑えるから、なのはは後衛、よろしくね」
「うん」

フェイトの確認に、向かい合うなのはは彼女らしい強い意思の籠もる瞳で頷きを返してきた。

敵に回していた時はこの上なく恐ろしい魔導師だったが、ゆえに当然の如く、味方になると馬鹿らしいくらいに頼もしい。そんな彼女の身体はバリアジャケットで包まれており、そしてそれはフェイトも同様。

さらに手にはそれぞれの相棒、つまり臨戦態勢である。

「私一人じゃ抑えきれないし、なのはだけでも捉えきれない」

「お互いにカバーし合わないとね」

その言葉に頷いたこちらへ、なのはは拳を突き出してきた。

「頑張ろう、フェイトちゃん。確かめよう、フェイトちゃん。私たちがお兄ちゃんにどれくらい近いのか、どれくらい遠いのか」

「……うんー」

フェイトは自らの拳を軽く、しかし想いを籠めてなのはのそれに当たった。

『二人ともー、準備できたらきてねー』

「はい、今行きます」

スピーカーから響くエイミイの声。それに返事をしたなのはと一
緒に、フェイトは更衣室を出た。

向かうは恭也の待つ訓練室だ。

リンデイのお願い、それは恭也の魔導師ランク測定をやらせてほし
いというものだった。

これからの作戦や予定を立てる上で恭也の実力をなるべく正確に
知っておきたい、との事らしい。

彼もそれを了承したので、早速行われる運びとなったのだ。

なのはとフェイトは、その相手役を請われたわけである。

「うう、やっぱりちよつと緊張するね……」

「うん、……勝てる、かな？　なのははどう思う？」

「うーん……」

自分たちは二人がかり。恭也は一人だ。

しかし、だからと言って勝てるだろうか？

「本気のお兄ちゃんの動きにどれだけついていけるか、かなあ」

「そうだね。一番注意しなきゃいけないのは神速だけど、そもそも普
通の機動速度が速すぎるから、恭也さんは」

「それを二人でどれだけ押さえ込めるかの勝負になると思う。お兄
ちゃんシールド魔法は基本的に使わないらしいから、回避不可能な状
態に持って行って当てれば通るはず」

「うん。私の動きとなのはの誘導弾で囲い込む……、もしくはバイン
ドで捉えれば」

「対抗できないことはない……はずんだけど」

なのはは苦笑を漏らす。

「戦えば勝つのが御神流」

「恭也さん、たまに言ってるね」

「うん、なんかいざ戦いになると、どうしたって勝てる気が……うう
ん、ごめん、こんな事言っちゃだめだね」

「いいよ、……恭也さんに勝てる気がしないっていうの、私も同じだか
ら」

それこそ一度魔法なしの状態の彼に敗れ、さらに毎日のように訓練

をつけてもらいその力量を目の当たりに行っているだけに、フェイトも正直に言えばそう思っているのは事実ではある。

事実では、あるが。

(……それでも)

「だけど……負ける気で戦うつもりはないよ」

「うん、……そうだね。全力全開、ぶつかりにいこう」

拳を思わず強く握りながらのこちらの言葉に、なのはも力強い言葉を返してくれた。

やがて、訓練室にたどり着く。ドアが自動で開き、自分たちを招き入れた。

目の前に広がったのは白で統一された、障害物の一切ない大きな室内だ。天井も高く、少人数であれば空戦も問題なく行えるだろう。

その中央、そこには両の腰に剣を下げた黒衣の男性が立っていた。

「来たか、二人とも。準備はいいか？」

男性、なのはの兄にしてフェイトの師、恭也はそう問いかけた。

「うん、待たせちゃってごめんね、おにいちゃん」

「お待たせしました、恭也さん」

なのはとフェイトは室内を小走りに、恭也の元へと寄った。

「いいさ、俺も少々魅月との打ち合わせがあったからな、ちようど良い待ち時間だった」

「そう？ ……打ち合わせかあ、なんかちよつと怖いかも」

「内容は秘密だ。まあ、これからわかるがな」

そう言つて珍しく、恭也は悪戯っぽく笑みを浮かべた。

一瞬それに見蕩れてしまいがらも、フェイトはすぐに表情を引き締める。ちらりと隣を見れば、どうやらなのはも同じような顔をしている。

「……負けないよ、お兄ちゃん」

「挑ませて頂きます、恭也さん」

「ああ、こちらこそだ」

『さて、準備はよろしいですかー？』

視線を交わし合う自分たちの頭上、そんな声が響き渡る。無論、才

ペレータのエイミイのものだ。

『ごっちの準備は完了してしますので、そちらがよろしければ、そろそろ初めさせて頂ければと思います』

誰からともなく頷き合い、用意が整っていることをこちらが示すと、エイミイは声をがらりと真面目なものへと切り替えた。

『ではこれより、外部協力員高町恭也さんの魔導師ランク測定のための模擬戦を行います。皆さん、指定の位置についてください』

空中に出現したスタート位置を示す目印に従い、部屋の中央から移動する。

フェイトはなのはと隣り合って訓練室の西側、向かい合うように五十メートルほどの距離を置き、東側に恭也が立った。

『バリアジャケットの損傷率が一定値を超えるか、意識を失った場合に決着となります。なのはちゃんとフェイトちゃんはペアで戦いますが、どちらかが敗退しても一方が残っていればなるべく戦闘を続行して下さい』

なのは・フェイト対恭也。

二対一、だ。

ランク測定にはなるべく近い実力の者を当てることが望ましい。

自分は一応、幼い頃から魔法の訓練を積んできたし、隣のなのはも途方も無いくらい優れた資質と弛まぬ努力でもって、そんな自分と間違ひなく同等の力を持っている。

口幅つたいことを言わせてもらうのなら、自分たちは魔導師の中でもそれなりに上の方にいると思う。

しかし、魔法を身につけた恭也の実力を計るのであれば、自分たち二人を同時に相手取るくらいで妥当だと、管理局の提督としてリンデイは判断を下した。

(……異論は、まったくくない)

実に妥当な判断だと、フェイトとしては思うところだ。

実際、自分たちがそれぞれで相手をして、おそらくは彼の本気は引き出せない。

二対一という設定に心苦しい思いがないではないが、現実的には、

それでも勝てるかどうかわからないというのが自分たちの見解だった。

『ただ、無理はしないようお願いします。三人とも、リタイアはいつでもしていただいて構いません。それでは、カウントいきます。5
……………4……………3……………』

(だからこそ、しつかりやろう)

フェイトは昂ぶる心を抑え、呼吸を整え、前を見据える。
戦いでは、常に冷静に。

それが今、自分たちの前にいる人がくれた教えだから。

『……………2……………1……………』

緊張と興奮がないまぜの感情が胸に浮かぶが、それでもそれを抑えつけ、フェイトは思考を戦闘用へと切り替える。

目の前の人に、全力を出してもらうために。

目の前の人に、全力を見てもらうために。

『……………0! スタート!』

そして、状況は開始された。

『Axel Shooter』

「シュート!」

気合一閃気炎万丈、十二発の魔力弾が弧を描きながら前方へ奔る。

『Barrier jacket, Sonic form』

フェイトはなのはが放ったそれらを、最低限の装甲以外をパージし手首足首にフィンを付けた高速戦闘体勢でもって抜き去り、走る。

相手は恭也、ついていけなければあつという間に一方的に沈められてもおかしくないのだ。

だからこそ、初手から奥の手。ソニックフォームの使用にフェイトは躊躇をしなかった。

バルディッシュも、走り出すと同時にハーケンフォーム、光刃を展開した近接特化へ移行してある。

迫るフェイトになのはの魔力弾。対し恭也はこちらと同等……………否、それ以上の速度で持つて応えた。

まさしく、疾風と呼ぶにふさわしい速さで真正面から向かい来る。

あつという間にフェイトと彼の距離は埋まって。

クロスレンジ戦が始まる。

一、二、三、四、五、六、七合。

一瞬でそれだけの打ち合いがなされ、

「くっ！」

こちらのバリアジャケットに、いくつかの損傷が入る。

しかし、これくらいであれば予想の範囲内だ。

問題はここから。

上段からの斬り下ろしを恭也の右の魅月でいなされ、体が流れたフェイトに、左の魅月が迫る。

が、体に衝撃はこない。

「むっ！」

なぜなら、追いついたなのは誘導弾が恭也に躍りかかったからだ。

「いい連携だっ！」

恭也の刃は両サイドから襲い来たそれらへの対応を余儀なくされ、結果フェイトへの追撃は見送られる。

「はあっ！」

その間隙をつき、体勢を立て直したフェイトは反撃にかかる。

光刃が唸りを上げ、恭也の足を払いにいく。最小限のステップでそれを躲す彼に、またしてもなのは誘導弾が迫った。その左右と上方からの三発はすぐさま斬り落とされたが、そこへ再度フェイトは仕掛ける。

先ほど躲された攻撃の勢いを殺さないようバルディッシュを振り回し、勢いを増して今度は腹部を裂きに行く。攻撃を次の攻撃の予備動作に、それは、他ならぬ恭也の教えだ。

(これなら！)

今度は完全に入ったかに思えた一撃、しかし、

「……っ！」

躲された、否、流された。

フェイトの斬撃は斜め上方へとその方向を変更され、恭也はその下

に潜っている。

分かつてはいたが、恐ろしい技量だった。

誘導弾を斬り伏せた後の隙をついたはずなのに、完璧に対処された。

正直、フェイトには今恭也が何をどうしたのかよくわからなかった。こちら辺は、フェイトと恭也の間に存在する近接戦の技術の差によるものだ。あまりに素早く無駄のない恭也の動きは、現在のフェイトでは追い切れず捉えきれないことがある。

そう、だからこれはそこまで驚くことではない。実際、普段の訓練で嫌と言うほど体感している感覚であり、もはや慣れているといってもいい。

だから、

「……え？」

思わず、そんな風に呆けた声を挙げてしまったのは、それが原因ではない。

（——どういう、こ……と？）

フェイトの頭を混乱が支配する。そんな、だって、こんなことがあるはずが。

目の前の恭也と、彼が握るデバイス魅月。

そこには、突然突如、膨大な魔力が漲っていた。

こちらを混乱に叩き込んだのはそれだった。

こんな風に唐突に大きな魔力を得るにはカートリッジロードが必要なはずで、しかし、この打ち合いの中にそんな暇は決してなかった。それにコツキング動作もまったく見えなかったし、空葉莖排出も同じだ。もししていれば、それをこんな間近で見逃すはずがない。

そう、カートリッジロードなんてする時間などなく、そんな動作もしていなかった。

なのに。

なぜか、恭也と彼のデバイスには、それをしたとしか思えないような魔力が漲っていた。

なぜ。

なんで。
どうして。

明らかに、なにかがおかしい。

そして高速で思考するフェイト、その眼が、

(……あれ、は……でも……そんな……)

恭也の後方、地面に跳ね落ちる空薬莖を捉えた。

いよいよもって本当に、何かがおかしい。

確かに恭也の後方には空薬莖が落ちている。しかし、あれが排出される場所をフェイトは見えていない。

おかしい。

なんだ、これ。

まるで、コマ落ちの映像のようだった。あるはずの場面が切り落とされたかのような違和感。

そしてフェイトが感じたのは、圧倒的な気迫。恭也が剣を構え、まさに必殺の技を放たんとこちらを見据えている。

(……っ避けられない！)

何をされるからはわからないが、とにかく仕留められると、素直に思った。

『フェイトちゃんっ！』

「っ！」

背筋が凍ったそんな時、頭の中に響いたのは相方の声だった。

それだけで彼女の意図を察し、フェイトはすぐさま後ろへ跳んだ。

こんなことをしても恭也の攻撃からは逃れられないだろう。だが、

「イイインバスター……!!!」

割り込みが入るのなら別だ。

なのはの声に続いて迫り来たのは、桜色の閃光。

それは巨大で恭也の体を呑み込むような規模ながら、しかし跳んだフェイトを巻き込まないように放たれている。狙い澄まし、標的のみを喰らう一撃。

膨大な魔力と高い制御能力、フェイトと恭也の打ち合いを見切る動体視力に、的確な位置からの的確な位置への的確なタイミングで攻撃を放

つ空間把握能力と戦術。

それらを合わせ持つなのはだからこそできた離れ業だ。

(……これなら！)

フェイトの胸に、灯るのは期待。

どうやったのかは知らないが、とにかくとして恭也は一瞬にしてカートリッジロードを行ったらしい……しかしとは言え、それでも彼は有効に扱えるシールド魔法は持っていない。

であれば、この攻撃を防ぐことはできないのではないか。

そして視界の中、恭也に迫った桜色の閃光は、

「……惜しかったな」

フェイトの耳に届いた彼の呟きが示すとおり、結果としてその身に届くことはなかった。

『フェイトちゃん、……なにがっ!?!』

辺りを包んだ閃光と爆煙が晴れる頃、なのはから念話が入った。彼女からしてみれば、防御技を持たないはずの恭也の身を渾身の一撃でたしかに捉えたはずなのに、彼が無傷で立っていることが不思議でならないのだろう。

『……防が、れた』

そしてそんなのはに、一部始終を目の当たりにしたフェイトは、バルディツシュを構えながらそう答えた。

『……え、でも』

『シールド魔法じゃ、なかった……あれは……斬撃だ』

『……斬撃? ……まさかっ』

『……うん。飛ぶ斬撃をいくつもいくつも連射して、盾を……!』

恭也の持つ魔法に、影刃というものがあることは知っている。速く鋭い飛ぶ斬撃だ、何度か目にしたこともある。しかし、あんな使い方ができるだなんて。幾重にも幾重にも連ねることで、盾とすることができるなんて――。

「ぼうつとしていて良いのか?」

その声が響いたと思った次の瞬間、

「なっ!?!」

唐突に膨大な魔力が奔り、驚愕に声を上げたフェイトの視界の中、その端にいたなのはが黒い閃光に吞まれて吹き飛んだ。

「なのはっ!？」

彼女は痛烈に背中を壁にぶつけ、そのまま崩れ落ちる。

キーンと、遠く、音が鳴った。

それは、落ちる音。恭也の遙か後ろ、そこへ空葉莢が落ちた音だった。

「……なの、は、くっっ！」

またしても、だ。

またしても、気付く間もなく一瞬にして恭也の魔力は膨れあがっていた。普通のカートリッジロードであれば警戒と対策と準備ができるものを、あれではどうしようもない。

自分となのはに認識されることなく恭也はカートリッジロードを終え、そしてすぐさま魔法を、技を放ったのだ。

今のは突き技、たしか奥義の一つで射抜と言う技だ。そこから影刃を繰り出したのだろう。

カートリッジロードには気づけず、また技の出もあまりに速かったため、なのはは完全に無警戒でそれを受けてしまった。

「……………っっ」

(……………もう、とにかく攻撃するしかない!)

手数で押す、止まっていたらやられるだけだ。フェイトは可能限界数の光球を作り出し、

「ファイアッ！」

即座に全弾を発射。

間髪入れずに、素早く床を蹴りフィンを稼働させその身を加速、恭也の下へとバルディッシュを手に飛び込んだ。

彼と斬り結びながら、みるみる内に、当然のように、フェイトのバリアジャケットはその損傷率を上げていった。

「くっっー！」

胸が焦りに染まる。このままではいずれ。

……………いや。

またあの知覚できないカートリッジロードからの魔法を放たれたら、どうしようもない、一撃でやられる。

高速で思考を巡らせ、なんとか打開策を練らんとして。

「……シュートー！」

(なのはっ!?)

そこに入ったのは、桜色の誘導弾による援護だった。

「……立ったか！」

眼前の恭也が驚きと……心配と喜びをないまぜにしたような声を上げた。好機と見、フェイトは持久度外視でスピードを上げ、猛攻をかけにいく。

『フェイトちゃん、まだ、いけるよー!』

『……うん!』

届いたなのはの声に、力強く返答を返す。

まだ何か、何かやり方が、勝つ方法がきつとあるはずだ。

想いを胸に、フェイトは相方と共に力を振り絞り――。

『現時刻をもつて、模擬戦を終了とします。お疲れ様でした』

訓練室に、エイミイの声が響いた。

「……ふむ」

『お見事でした、主よ』

「いや、魅月もな」

言葉と同時に、恭也は両の魅月をそれぞれ鞘に納める。

「やて……」

眼前、一、二メートルほどの距離を置いて床にはフェイトが崩れ落ちており、視界の隅、壁にはそこへ寄りかかるようになるのが倒れ伏していた。

「二人を医務室につれていかなくてはな」

『ええ。ところで主、お二人はどうでしたか?』

「よく鍛えている。本気で斬り合ったし、魔法を併用した奥義も容赦

なく使わざるをえなかつたよ」

虎乱に影刃をのせ超多数の魔力刃を発し重ね擬似的にシールドを作り出す虎乱・盾、射抜に影刃をのせ高速の閃光として打ち出す射抜・奔。両方とも使わなければ危なかつたし、またフェイト相手の斬り合いも一切手を抜いていない。

「それに、例のアレも使ったことだしな。掛け値なしの本気で相手をした」

言いながら、フェイトに歩み寄りその身を抱き上げ、続けてなのはの下へと足を向ける。

「……よく頑張つたな、二人とも」

二人を抱え、最後に小さくそう呟いて、恭也は訓練室を後にした。

「お疲れ様ー！ 体はだいじよ……う……ぶ………え、何この空気」

模擬戦後、すぐに意識を取り戻し医療班の診断も受け問題なしと判断され、戦闘終わりの身支度を整えているのはとフェイトがいるはずの更衣室へ、挨拶を告げながら飛び込んだエイミイの目に映ったのは、

「……ごめんね、フェイトちゃん……。完全に私のミスだよ……あれをまともに喰らっちゃったのは油断だったんだ……遠距離だからって」

「ううん……それを言うなら私の実力不足だ……なのはの援護があった打ち合いでまともに一撃も入れられなかつたんだから……」

「そんな……」

「……ううんそうだよ」

(……暗っ！)

陰惨鬱々、室内にいた二人が揃って長椅子に腰掛け俯きながら、この世の終わりを見たかのような声音でひたすら先ほどの戦闘の反省を繰り返す様だった。

「ちよ、ちよつとちよつと、二人とも、そんなに落ち込まないでよー」

二人の元へと駆け寄り、膝を折りしやがんで下から顔を覗き込ん

で、

「ほら、顔上げて……………うつ」

思わず、引き攣った声を漏らしてしまった。

「あ……………エイミイさん……………。あはは……………ごめんなさい……………あんなにあつさりやられちゃデータも取るの大変ですよね……………」

普段の明るくはつらつとした、愛くるしい様からは想像も出来ない虚ろな表情を浮かべ、なのはは乾いた笑いをこぼし、

「もつと速くもつと強くもつと鋭くもつと的確にもつとしつかりもつと、……………もつともつとちゃんと戦わなきゃいけないのに……………これじゃ恭也さんに会わせる顔なんてない……………なんで……………もつともつとちゃんと……………」

未だこちらに気付かず、端正な顔を堅く硬直させながら小さく唇だけ動かし、フエイトは空寒い声で呟き続けている。

(……………怖っ！)

醸し出される雰囲気だけで言うならば、まるでホラー映画のワンシーンだった。

「……………えええええいほら、ほら、立って！」

エイミイは勢いよく立ち上がり、二人の手を引く。

「……………え、あ、はい……………」

「……………あ、エイミイ……………」

二人は抵抗することもなく、よろよろとそれに従って椅子から腰を浮かせた。

「もう、気持ちちはわかるけど、シヤキつとしなきゃ駄目だよ。データのことなら大丈夫、ちゃんと解析は出来てるから」

「そう、ですか……………」

「でも……………」

だが、立つてもなお、未だ俯くなのはにフエイト。

「恭也さん、心配してたよ」

「っ！」「っ！」

しかし起爆剤を投げ込めば、その反応は劇的。二人は揃って顔を上げた。

「二人とも診断終わったらすそくさと更衣室に行っちゃうもんだから、体はほんとに大丈夫なのか、とか、やっぱり落ち込んでるのか、とか、ずっと言ってたよ。いいの？ 心配かけっぱなしで」

「……よくないです」「……よくないです」

「でしょ？ なら、ほら、いっ？」

ドアに向かって歩き出したこちらに手をとられながら、二人はとぼとぼと後を付いてきた。

「なんて顔をしてるんだ、二人とも」

エイミーに手を引かれブリーフィングルームに入ってきたなのはとフェイトを見、恭也は開口一番そう言った。

ほら、とエイミーに背中を押された二人は、こちらへと力ない足取りで歩み寄ってきた。

なのはの顔は悲痛に染まり、フェイトの顔は痛々しいほど蒼白で、
(参ったな……)

胸の中、恭也は思わず嘆息する。

「体は大丈夫か？」

「……うん」

「……はい」

問いに、ゆるゆると頷く二人。医師の診断でも問題ないとのことだったので本当だろう。ひとまずは胸をなで下ろす。

「……」

「……」

しかし、二人はそれきり押し黙ってしまった。なのはは今にも泣きそうで、フェイトは今にも倒れそうな顔だ。

「なのは」

「……うん……ひゃっ！」

とりあえずと、恭也はなのはの両の頬を引っ張った。

「いはいっ！ いはいよおにーひゃんっ！」

「案外伸びるな……」

白く滑らかな妹の頬は、思っていたよりも優れた伸縮性を有していた。

「いひやいつへえー！」

限界に挑戦してみるかと思いついたこちらに、元より泣きそうだったのはは瞳いっぱい涙を溜め抗議の声をあげてきた。つまんでいる部分が赤くなってもきたので、さすがに可哀想かと手を離す。

「うむ」

「うむじゃないよー！」

「その元気があれば大丈夫だな。気持ちはわかるが、あんまり下を向いてるものじゃないぞ」

今度は頬ではなく頭に手をやり、少し乱暴に撫で回す。

「で、でも……」

「なのは、一応言っておくが先の試合、俺は本気を出した。手加減など微塵もしていない」

「……そう、なの？」

「ああ。だから、必要以上に背負い込むな。己の力不足を嘆くのは向上に繋がるが、変に罪悪感を持つな。たしかに今日は俺が勝ったが、それだけだ。全力のお前に俺も全力を出した。相手として全く不足はなかったし、いい試合だった」

「……うん」

「よし」

ぽんぽんと、念を押すように最後に二度軽く叩き、恭也はなの頭のてっぺんから手を離れた。

「さて、フェイト」

「は、はい……」

「フェイトもだ。まず、顔を上げろ」

「……」

しかしフェイトは俯き続け、頑なにこちらと目を合わせようとしな

い。

「……よしと」

「……あ、きやつー！」

フェイトの腰に手をやって、その華奢な体を持ち上げる。上を向いてくれないのなら、こうして下から覗き込むまでだ。

「あ、あの……」

蒼白だったさつきまでと一転、真っ赤に顔を染め、彼女は恥じらうように身をよじる。まるで小さな子供にやるようなこの格好が恥ずかしいのだろう。

そんなフェイトの瞳をまっすぐに見て、言う。

「いいか、フェイト。さつきなのにも言ったが、俺は今日本気を出したぞ」

「……で、でも、私、……せつかく恭也さんに鍛えてもらってるのに……あんな……」

「魔法に関しては習いたてだが、こと近接戦なら俺は物心ついたときからやってるんだ。まだフェイトには負けないさ」

「はい……でも」

「悔しいと思うのはいい。だが、恥じるなフェイト。今日、力が及ばなかった事は、明日への糧にこそすれど、昨日への後悔にすべきじゃない。まさかとは思うが、俺が君に失望したとでも考えているんじゃないだろうな？」

「……………っ」

フェイトは、切なげに瞳を揺らした。

凶星か。恭也はため息をつき、彼女を床に下ろした。

「……………私……」

「よく聞け、フェイト」

そしてなのはへしたのと同じように、少し強めに頭を撫で回す。

「俺が君に教えるのを止めるのは、俺が君に教えることが何もなくなったときだけだ。もしくは、フェイトがもう教わりたくないと言ったときだな」

「そ、そんなこと言いませんー！」

弾かれたように、フェイトは顔を上げた。

「やっ自分からこつちを向いてくれたな」

「……あ」

「それでいい」

そしてまたしてもなのはへしたのと同様、確認するように二回軽く柔らかく頭を叩いた。

「……はい」

フェイトは小さく、しかし確かに返事をしてくれた。

これなら、大丈夫だろう。

「……さて、それじゃあその内リンデイさんが戻ってくるから二人とも……」

これで一件落着、事はとりあえず収まったたと胸をなで下ろしたのだが。

「なのは？」

「……………むー」

「どうした？」

なぜか妹は、不満がありますと言わんばかりのジト目を向けてきた。

「……私はほつぺた引つ張られて、フェイトちゃんは優しく抱き上げられて……この差はなんですか？」

「……………ふむ」

「ふむじゃないよー！」

氣勢を上げ、なのははぴょんぴょんと跳ね上がる。その仕草に合わせ、両脇で括られた髪も揺れる。

「わかったわかった、ほら、これでいいか？」

「わっ！」

(……懐かしいな)

不満顔の妹を抱き上げて見れば、恭也の心には思わずそんな感想が浮かんだ。

「そう言えば、昔はよくせがまれたものだな。どうだ、なのは、久しぶりのコレは」

「うう……しよーじき、……………恥ずかしいです」

頬を赤く染めながらのそんなコメントに、恭也は苦笑。

「じゃ、下ろすぞ」

「あ、う、うん……」

すっかり大人しくなったなのはを地面に下ろして、これで今度こそ一段落だと息をついて。

「あの……恭也さん」

「どうした？」

自分の服の袖を引く感触に気付いた。視線を向ければ、そこを控えるためにこちらの袖を握りつつ、見上げてくるフェイトがいる。

「わ、私には、しないんです、か？」

「ん？ いや、何をだ？」

期待を籠めたようなまなざしで見られても、彼女を抱き上げるのはもう既にやった。フェイトが何を望んでいるのか、恭也には検討がつかず、

「その、なのはと同じこと、です……」

「同じことって……」

「ほっぺた……」

「………いや」

そこまで言われてようやくわかった。

わかったが、しかし。

「わざわざ頬を引つ張られなくともいいだろう？」

「………」

「……いい、だろうか？」

「………」

無言の圧力。上目遣い。

逆らえる気が、しなかった。

「………っ」

「………どうだ？」

なぜわざわざ痛い思いをフェイトがしたがるのかは全くわからないが、とりあえず、注文通りに彼女の両の頬をつまんで左右に引いてみる。

精緻な彫像のような、幼いながら恐ろしいほどに壮麗に整った美し

さを持つフェイトだが、その頬は温かく柔らかで。
なのはほどではないが、なかなかによく伸びる。

「……いひゃい、れす」

「……そうか」

フェイトはそんな感想を口にしたが、

(……気のせい、か?)

どうも、嬉しそうに見える。頬が緩んでいるかどうかの判断はつかないが、目元は弓なりにしなっていた。

ずっと摘んでいるわけにもいかないの、やがて恭也が手を離すと、

「……あつ」

やはり少し残念そうな声を上げ、

「……えへへ」

フェイトは、それでも嬉しそうに自らの頬を両手で押さえた。そんな彼女の頬は引つ張られたことによる赤みだけでない朱色に染まっております、

「ま、満足か……?」

「はいっ」

恭也を多少、戦慄させた。

「えーつとお三人さん、お茶が入りましたけどー」

そんなやりとりの後、いつのまにか紅茶を用意していたエイミイが
その声をかけてくる。

「ああ、ありがとう、エイミイ。なのは、フェイト、頂こう」

「うんっ」

「はい」

恭也となのは、フェイトは揃って椅子に腰掛けた。恭也を真ん中にして右になのは、左にフェイトだ。

エイミイに礼を言ってから、紅茶に口をつけ一息をつく。実家が喫茶店を営む関係で多少肥えてしまっている舌を持つ自分からしても、素直に美味しいと感じる出来映えだった。

「そう言えば、リンディさんは?」

「艦長なら今、クロノ君と一緒にさっきの模擬戦の結果とか、まあ、その、……その他もろもろを取りに行ってるよ。もうすぐ帰ってくるんじゃないかな」

なのはの問いに答えるエイミイは、なぜか少しだけ複雑な顔をしていた。

「もう結果、出てるの?」

今度はフェイトがそう問うて、エイミイはそれに頷いた。

「うん、出てるよ。まあこれは艦長の口から発表されるだろうから」

そこまでエイミイが口にしたタイミングで、部屋のドアが開いた。

「お待たせしました。ごめんなさいね」

「すみません、恭也さん……なのはにフェイトも来ていたか、待たせてしまったな」

そう言いながら、ハラウオン親子が室内に入ってくる。エイミイの言葉のとおり、二人はその手に何かしらの書類らしき物を持っているようだった。

「三人とも、お疲れ様でした。体は大丈夫ですか?」

「ええ、問題ないです」

「はい」

「大丈夫です」

返事に安堵の表情を浮かべてから、リンデイとクロノは恭也達の対面に腰掛けた。エイミイが二人にも紅茶を出す。

「ありがとうございますエイミイさん、頂くわね。……うん、美味しい。………さて、それでは早速なんですが」

一口、喉を湿してからリンデイは威厳のある真面目な表情でそう言うのと、何枚かの紙が綴じられて出来た、恭也にも馴染みのオーソドックスな形のレポートをこちらへ差し出してきた。

「こちらに、以前行った魔力適正解析の詳細と、今回のランク測定の結果を記してあります」

「……すみません、何が何だか」

ペラリと何枚かめくってみたものの、正直、まったく内容は把握できなかつた。

恭也は戦闘に必要な魔法知識はおおよそ得ているものの、それ以外に関しては未だ基本的にはまるで無知だ。故にこのレポートも、そもそも出てくる用語すら逐一不明であり、何がどういうことなのかさっぱりわからない。

「とりあえず今回見ていただきたいのは、一番後ろのページです」

「一番、後ろ……はい、ここですか」

言われ、めくって最終ページを開く。

そこにあつたのは、またしても恭也には何を指しているのかわからない項目で構成されたリーダーチャートと、その横に大きく書かれた二つのSマーク。

恭也の両脇、なのはとフェイトが息を呑んだ。

「え、……だ、だぶるえす……SS!?!」

「……近接戦闘技能、機動技能、状況判断・察知・対応力が振り切れる……。こんな……見たことない……」

二人は大きく身を乗り出し、恭也の手元のレポートを覗き込んでしきりに驚きの声を挙げている。

しかし、当の恭也としては、いまいちピンとこない。

「よくわからんが、良い結果なのか?」

なので、ざつくばらんにそう問うた。

「良い結果と言いますか……凄まじい結果と言いますか……」

苦笑いのエイミィ。クロノが後を継ぐように言う。

「魔導師ランクは、+やーによる細かい分け方もありますが、大まかに言えば昇順でF, E, D, C, B, A, A A, A A A, S, S S, S S Sとなっております。恭也さんのランクは上から数えて二つ目、最上級に肉薄する超高位ランクですよ」

「……そう、なのか? いや、しかし魔法に関してはまだ習いたてのはずだが……」

恭也のあげた疑問の声に、リンディが答える。

「魔導師ランクは様々な要因で決定されるんです。”魔導師”ランクと言うのですから魔法資質や魔法制御技能はもちろんですが、他にも直接的な戦闘能力や達成可能な任務規模・難度などにも重きが置かれ

ます。恭也さんのランクがここまでの物になった要因は、まず、やはりその戦闘能力ですわ」

リンディは微笑みながら続ける。

「管理局の魔導師の中でも、正直、ずば抜けていると言っても過言ではありません。もともと、魔法なしでも純粋な戦闘能力だけなら陸戦A A A相当のものがありませんが……魔法を会得した今、それは本当に突き抜けています、超一級と言って差し支えありません」

「……何というか……お褒めにあずかり光荣ですが……買いかぶり過ぎな気がしますよ」

「そんなことありませんわ。規格化された客観的な測定による確かな評価です」

「そう、でしょうか……」

恭也は御神の剣士として力を積み上げてきた。それはつまり、生身の体で銃をも相手に勝てるような技術と精神を身につけてきたという事だ。よって、こと戦いに関しては多少の自負はある。

あるが、そこに魔法が加わったとは言え、ここまで褒められてはどうも少し据わりが悪い。

「……ううん」

唸る恭也の前、リンディは続ける。

「その他にも、ここまでランクを押し上げた要因はあります。元々の魔法資質の高さもそうですし、特殊技能もあげられますわ。まず一つが神速ですね。相手の知覚を超えて自分だけが行動できるというあれは、単なる加速魔法とは一線を画したその汎用性から、非常に高い評価を出しています。次に、心、でしたでしょうか、あの特殊な周辺状況察知能力が挙げられます。隙や死角を消し去り不意打ちが通じない上に、見ずとも相手の位置を把握可能であるというこれにも、また非常に高い評価が出ています。そして、それと……」

「あのカートリッジロード、ですね。あれには驚きましたよ。観測・解析班なんかは今あれについての話題で持ちきりです」

そんなクロノの言葉に、なのはとフェイトが反応する。

「あ、そうだあれ！ 何だったのにおにーちゃんあれ！ あんなのある

なんて聞いてなかったよ!」

「気がついたらカートリッジロードが終わってて、目を逸らしてなんかいなかったのに気づけませんでした……。あれは一体……?」

二人としてはあれに煮え湯を吞まされたばかりだ、気にするなという方が無理なのだろう。

「神速と、心、そしてあの瞬間的に行われる特殊なカートリッジロード。これらの能力があれば戦闘を一方的に進めることすら可能ですし、通常の魔導師では介入不可能な状況に対応することもできる……結果として単身で達成可能な任務難度は非常に高評価になり、それがランクを押し上げたんです」

「できれば、種をお教え頂きたいのですが……」

「ええ、構いませんよ。ただ……」

リンデイとクロノにそう答えてから、ちらりと、恭也は自らの小指を——そこに嵌められた相棒たる銀の指輪を見やった。

「あのカートリッジロードに関しては、俺というよりかは、魅月の機能なんですがね」

「そうなんですか?」

「ええ、あれは……」

『それは違います、慎重深き主よ』

リンデイに頷き、そして皆に説明を始めようとした恭也の言葉を遮って、魅月が声をあげた。

『たしかにあれは私の機能を活用してのことですが、しかし主以外の者ができることでもありません。したがって、あれは主の機能です』
「む、だがな」

『どうしても言うのであれば、主と私の合わせ技です』

「……そうか、そうだな」

「あー、ええと、お二人とも、できればその……説明の方を頂けると……」

エイミイが控えめにそう促す。

「ああ、すみません、……あれは平たく言えば、そうですね……」
どう言ったものか。恭也は少し逡巡した後、口を開く。

「神速を利用した高速カートリッジロード、と言うことになります。仕組みは単純で、神速に入った状態でカートリッジロードを行うんです」

「……………」

(……………あまりピンとこない言い方だったろうか)

その場の恭也以外の五人から返ってきたのは、無言で首をひねるという要領を得ない反応だった。

「いえ……………いくら恭也さんが神速に入っていたとしても、デバイスの処理速度や動作速度がそれについていくわけでは……………」

代表としてか、そう口を開いたリンディは、しかしそこで一旦言葉を切り、

「……………じゃあもしかして、魅月さんは、神速状態の恭也さんについてけるだけの超高速動作が可能、ということですか？」

半信半疑と言った表情でそう言った。

それに答えたのは、当の魅月だ。

『いえ、正確には違います』

「では……………」

『私はただ、”使用者の能力を活かし切る”ためのデバイス、であるだけです。常に高速ではなく、主が高速であれば、私も主の足を引っ張らないよう高速になるだけです。つまり処理、動作速度が主の思考速度に追従するのです』

とはいえ主が気を失った場合などの時のために、最低動作速度だけは保証されていますが。平然と言った魅月は、そう最後に結んだ。

「……………」

今度は皆、一様に唖然とした表情を浮かべた。

「動作速度が可変……………!? いや、そうか、あの妙な処理方式はそういうことか！ では、君のAIが高性能なもの……………」

いち早く復帰したらしいクロノが、驚きの声を上げる。

『その機能のためです。ただ単純に動作、処理速度を向上させるのならAIは載せないほうが良いのですが、可変させるとなるとそう言うわけにもいきません。私の速度可変機能は主の状態に合わせ

基本的にはオートで走っていますが、最適化にはやはりAIによる状況に合わせた処理が必要ですから』

「なるほど……」

クロノは、納得が言ったとばかりに顎に手を当てながら頷いた。

「し、使用者に合わせ速度を可変……相当高度な技術だけど、なんていうか」

「やっぱり……渋いね。魅月さんって」

フエイト、そしてなのはがそんな感想を漏らす。

渋い。

それは確かに、魅月から説明を聞いた時の恭也も思った事だった。

「神速を有する恭也さんが使っているからこそあんな反則的な性能が引き出されはしたものの……、そうじゃなかったら本当に裏から支えるサポート機能、ってところか」

『ええ、その通りですクロノ様。ですからわざわざ主にお伝えする事もないと思っていました』

「……僕も、デバイスの速度にはこだわるタイプだ。だからメインのS2UもAI非搭載タイプにしている。確かに、自分が高速で思考すればそれに合わせて高速の処理、動作をしてくれるデバイスというのは、魅力的ではある。………だけど」

ううん、と。クロノは腕を組んだ。彼の話を引き継いだのはエイミイだ。

「それをメインデバイスを選ぶ決定的な要因とするか言うともた微妙な話だよね。使われているだろう技術はすごく高いだろうし、処理だけでなく動作速度も可変することを考えると設計の根幹に組み込まれている機能なはずだけど、それにしてはちよつとその……控えめっというか」

『私のこの機能は、地味ですからね。使用者の思考速度に合わせた処理、動作速度可変。あれば確かに役に立ちますが、取り立てて口にするほどのものでもありません』

自らを語る魅月は、しかし泰然としている。

『私自身には、派手な機能はありません、いりません』

彼女の声と言葉は、深く静かだ。

『私は近接戦用デバイスとして、”使用者の能力を活かし切る”ための存在ですから。主が強く輝いて下さればこそ、私もまた強く輝くことができます。それでいいのです、それこそが私です』

「あ、じゃあ、魅月さんの名前の由来って……」

なのはの声に、頷くように魅月は明滅した。

『はい。だから私は、月なのです』

「……なんだか、ここまできると運命的な物すら感じますわね、恭也さんと魅月さんが出会えたのは」

リンデイはそう言っつて、彼女らしい温和な微笑みを浮かべた。

「管理局としても、ここまできちんと使っつてくださる方にお渡しできたんですもの、よかったですわ。……さて、それではあのカートリッジロードは、恭也さんが神速に入り、魅月さんがそれに追従し、その中で装填発令から装填動作、空薬莖排出まで行っているものと考えていいのでしょうか？」

「ええ、そうなります」

「神速は体に負担が……たしか、眩体を使つた上でも一日十回程度と以前言っつていましたが、それはやはりこれでも？」

リンデイに続くクロノの問いには、恭也は首を振つた。

「いや、この場合、神速には入るものの中で俺自身がやっているのは装填発令だけだからな。ほぼ動きはしないから体への負担は最小限で済む。そうだな……魅月のカートリッジをすべてこの方法でロードしても、疲労は神速一回分と言つたところか」

魅月のカートリッジは一刀に六発、左右合わせて十二発。それらすべてを神速の中でロードしても、眩体を使つてさえいればそこまで大した負担ではない。

「……では事実上、予備カートリッジを含めなければ恭也さんは基本的にカートリッジロードはすべてその方法で行えるわけですね」

「そうなるな」

「なんかもう、反則だよ。あれほんとに唐突だから対処できないし」
呆れたようになのはが言う。

「接近戦の最中、打ち合いの間隙でさえロードできるって言うのは、すごい強みですよ」

フェイトも感心したように続けた。

「まあ、あのロード方法に行き着いたのはそういう理由からだな。通常のロードでは、少し御神流としては使いづらくてな」

「なるほど……」

「うーん、折角ですからあのロード方法、とかじゃなくて何か名前付けませんか？ 今後報告書に書きやすいですし」

そこに、エイミーがそう口を挟んだ。

「名前……かあ。うーん……普通のがカートリッジロードだから……シークレットカートリッジロードは？」

そう提案をくれたのは、恭也の隣に座るなのはだった。

「……ふむ」

「なんかやられた側としては、まさにそんな感じだったんだけど……」

駄目かな？ と、彼女は上目遣いで問うてきて。

「よし、それでいこう。いいか、魅月？」

『問題ないかと。良き名です』

「うわあ迷いが無い」

エイミーが思わずと言った風に、そんな声を漏らしていた。

恭也としては、実は魅月とこのロードについて打ち合わせを行った段階で、既に“瞬装填”と言う名を付けてはいたのだが、誰でもないなのはにこんな目をして言われたらまさか駄目とも言えない。それに、そこまで自分で付けた名に愛着があつたわけでもない。それならば、なのはが付けた方を採用しようと言うわけだ。

「長ければSCLとでも略せばいいし、うむ、いいアイディアだ、ありがとうなのは」

「えへへへへ」

礼を言うと、なのはは思い切り相好を崩す。しっかりとしている妹だが、やはりこういうところが本当に可愛らしいと思う……照れくさいので、絶対に言わないが。

「あー、えっと……すいません、いいですか？」

「ああ、すまん」

「あ、うん、ごめんなさい」

恭也は平然と、なのはは少し顔を赤くして前へ向き直り、揃って表情を改めた。

「では……。今回の測定で、恭也さんはその非常に高い戦闘能力と、有する神速と心、シークレットカートリッジロード——SCLと言う特殊技能、加えて優れた魔法資質に、まだ荒削りなところはありますが、局所的には既にかんりのレベルに達している魔法制御能力、そして鋭い判断力や冷静な思考力などの高い精神性から、魔導師ランクはSSとなりました。闇の書の事件について現在ご協力を頂いているわけですが、これからはこの結果を元に作戦協力などをお願いしていきます」と思います」

「ああ、わかった。俺で力になれることなら、何でも言ってくれ」

恭也は頷き、そう言っ

て。そして直後、少しばかりこの言葉を後悔することになる。

「そうですね、それではお願いがあるのですが」

手に感触。

見れば、リンディの両手が恭也の右手をがっちりと包み込んでいた。

「な、なんででしょう?」

もちろん嫌ってなどいないが、相性問題としてリンディに若干の苦手意識をもっている恭也は冷や汗をかきつつ問う。

「恭也さん。恭也さんは、この先をどのようにお考えでしょうか?」

もしよろしければ、それを今お聞かせ願いたいのですが……」

リンディは満面の笑み。一児の母とは思えないほどに若々しく、そして美しいそれを見てしかしやはりどうしてだか背中には汗が伝う。

捕捉された、なぜかそんな風に思った。

「すみません……。恭也さん……」

リンディの傍ら、クロノは本当に済まなそうな、申し訳なさそうな声と表情で、それが益々恭也の不安をかき立てる。

「この先、ですか。それは」

「お仕事などのことです」

「……そう、ですね」

何でも言ってくれと言ってしまったばかりだし、とりあえずは話を進めよう、そう思い、恭也は答える。

この先、どうするつもりか。

「……現在俺は大学に通っていますが、それと同時に護衛の仕事などを請け負っています。ですからまず一つは、大学卒業後もそれを続け、フリーの護衛として働く、ですかね。幸い各方面にツテもありますし、見通しもある程度立っているのです、今は基本的にこの方向で考えています」

「そうですか。でも、まず一つは……ということは、他の道も視野にはあると?」

「ええ。他には、香港の特殊部隊に、などですね。叔母が所属しています、何度か合同訓練にも参加させてもらっていますし、誘いも受けているのでそこに属するかもしれません。また民間の警備会社や、縁のある団体から専属にと言う話も頂いていますので、そちらの方も考えています」

「なるほど、そうですね。恭也さんほどの方ですもの、色々なところからお誘いを受けるのは不思議なことではありませんよね」

「いえ、そう大したものではありませんが」

「いえいえそんな。でも、そうですね。組織に属する気もあると、そうですねか」

ここで、にこにここと朗らかな微笑みを浮かべるリンディの手が恭也のそれから離れた。

そして彼女は、

「どうぞしよう、恭也さん」

彼女とクロノが持つてきて机の端に積んであつた資料の束の中から、一冊の薄い冊子を抜き、両手に掲げて言う。

「その選択肢の中に、時空管理局って、入りませんか?」

冊子には、大きな文字で”時空管理局入局案内”とあつた。

平たく言えば、それは勧誘用のパンフレット、と言うことなのだろう

う。

「ここここに来て、やっと恭也は話の趣旨を理解した。」

「あ……いや……」

戸惑う恭也の前で、リンディはまた違った資料を次々と取り出し広げ並べて見せる。

ランク測定のレポート以外にいったいなんの資料を持ってきていたのだろうかと多少疑問は持っていたものの、まさかそれが自分の勧誘のためのものだったとは、露ほども考えていなかった恭也は、思わず圧倒される。

「管理局には様々な部署がありますが、恭也さんであればどこでも大歓迎です。次元航行部隊、地上部隊、教育隊、遺失物管理部……いずれにせよ、相応の地位と待遇をお約束できると思います。執務官や捜査官という道もありますね」

流れるような文言。

恭也は助けを求めるように、リンディの傍らのクロノとエイミィに視線を向けるが、

「……」

「……」

二人はただただ“申し訳ない”といったばかりの顔をした後、頭を下げるのみだった。

「私としては、戦技教導隊がお勧めですね。これは教育隊の上位組織なのですが、武装局員達を教え導く、管理局の魔導師の中でも選りすぐりのトップエリート、エースオブエース達が集まる部隊です」

「お、俺にはそのような……」

「いえいえいえいえいえ、一度訓練学校に入っていただけで必要こそありますが、現状の恭也さんの実力はもうこのまますぐここに入って頂いても誰からも文句など出ないレベルに至っています。それに、なのはさんやフェイトさんの上達ぶりを見ればはつきりとわかることですが、恭也さんには非常に優れた指導力もあります。是非それをここで活かして頂けたらなと！」

がしつと、またしても恭也の手が捕まれる。

「管理局は慢性的に人手不足ですが、特に教導官のそれは深刻です。恭也さんのような方が必要なんです！ 生身で騎士を制するような技能を持った方に近接戦指導官となつて頂き、その力を教え伝えてくださったら一体どれほどの恩恵があるか……実は軽くシミュレーションもしてみたのですがこれが驚くような結果で、ええつとどれだったかしら」

そんなことまでしていたのか、どんどん逃げられないように囲われていく恭也は内心驚愕の声をあげる。

リンディはまた新たに資料を引っ張り出し、折り目のついたページを開き恭也の前に広げる。

「もちろん恭也さんの技術に関しては、こちらも解析しきれない点が多々あるのでおおよっぱな予測ではあるのですが、ご覧になつてください、1年・5年・10年と務めて下さつた場合の試算がこれなのですが、教導隊が現状のままだった場合と比較してこれほどの差が……」

「あ、あの、すみません、待つて下さい！」

グラフを指さし解説を続ける、もはや止まるそぶりの見えないリンディに、恭也はとりあえず待つたをかける。

「お話を頂けるのは嬉しいのですが、すこし、その……」

「ああ、申し訳ありません。私としたことが」

恭也の言葉に、リンディは柔らかな笑みを浮かべ、

「そうですね、教導隊以外のお話もうちよつとするべきですよね」

「いえつ、そういう事ではなくて……！」

「私としては次にお勧めなのは遺失物管理部ですね。ロストログア関連の任務を遂行する、こちらもエリート級の魔導師が集う部署ですわ。現在機動一課から五課までありますが、どこからも恭也さんなら引っ張りだこでしょう。優秀な戦闘能力に柔軟な対応力を持った魔導師は喉から手が出るほど欲している所ですから、恭也さんがここに配属願いを出されたら、一課から五課で確実に取り合いになりますね」

「いえだから……！」

結局。

「前向きに検討させて頂くので、お返事は今回の事件が終わった後に……」

「……わかりましたわ。そうですね、急なお話ですものね」

約一時間にも渡った熱烈な勧誘は、疲れ切った恭也の提案でもって終焉を見た。

「それでは、ご質問がありましたらいつでも。色良いお返事をお待ちしておりますわ」

まるであどけない少女のような、しかし海千山千の猛者のような、相反する要素を兼ね備えたリンディの美しい笑みに、恭也はただ力なく頷くのみだった。

第6話 おにいちゃん

「ん、あれ?」

がくと、嫌な振動と妙な音がしたかと思うと、

「なんや? ちよお……え、嘘やろ……ええ?」

長年の愛機である電動式の車椅子は、それきり操作レバーをいくら引いても倒しても、なんの挙動も示さなくなった。

バッテリー残量ランプは五段階中の四を示している。本来なら、まだ十分動くはずだ。

「……ええ、ちよ、ええ……なんでや……動け動けっ、がんばりっ!

お願いやからー!」

執念深く、ガチャンガチャンと少し乱暴に操作してみるも、やはり結果は同じ。

「ならこつちで……重っ!」

ならばと車輪外側に取り付けられたハンドリムを握り、手で動かそうとするものの、しかしまったく回らない。自分がいくら非力だとは言え、これはおかしい。

ということとは、

「こ、こしよーか……?」

どこかが壊れた、ということか。

「嘘やろ……」

図書館の一画で、八神はやては顔を青ざめ、呟いた。

今日は一人で来ている上に、ここは奥まったなかなか人のこないエリアだ。このままでは身動きがとれない。

自然、深いため息がこぼれた。

(どないしよう……)

誰かに来てもらうかと一瞬考え携帯電話に手を伸ばしかけるが、

「図書館内やし……みんな忙しいみたいやしな」

頭を振り、結局は止めた。

シグナムもヴィータもザフィーラもここ最近はあまり家にいない。今日もどこかへ出かけていった。

そして、一番身近に付いてくれていたシャマルは、唐突に姿を消した。

シグナムの話では、急にどうしても外せない用事ができたのでしばらく帰ってこれない、らしい。

「……………」

本当、だろうか。

シグナムを疑うわけではないが、あのシャマルが、自分に何も言わずいきなりどこかに行ってしまったって、その上連絡もとれないだなんて。

(…………あかんあかんっ！)

嫌な想像を頭を振って、文字通り振り払う。

きつとシャマルはちゃんと帰ってきてくれるし、それにそれは今考えても仕方のないことだ。

まずは自分がなんとか家に帰らなければならない。

とりあえず、現実的な案としては誰かが通り過ぎるのを待って、その人にここから図書館のロビーあたりまで連れて行ってもらい、そこで車椅子のメーカーサポートに連絡……あたりだろうか。

「…………いや、やっぱ自力でなんとか!」

はやては両手に渾身の力を籠め、ハンドリムを回しにかかった。

これで車椅子が動きさえすれば、時間はかかるが自分で家に帰れる。あまり人に迷惑はかけたくないし、自分で何とかできるならそれが一番だ。

「うー……………」

歯を食いしばり、体を前のめり、全力をかける。

「う、っ、け……………うあっ!」

しまったと思った時にはもう遅かった。

ハンドリムから手が滑らせたはやては、その勢いのまま、

「っ……………い、たあ……………」

車椅子から転げ落ち、床に体を打ち付けた。

思わず、泣きそうになる。

暖房が効いているとは言え、それでも床は冷たくて、まるで容赦の

ない現実を突きつけられているような気さえしてくる。

「……………」

痛みやら情けなさやら寂しさやらが一気に襲いかかってきて、いつその事このままここでずっと倒れてしまっていたという、どうしようもない欲求すら生まれてきた。

顔を腕で拭って、それらと共に浮かんでできてしまった涙を払った。

こうしていても仕方ないのだ。都合良く誰かが助けに来てくれるわけでもない。

とりあえず、椅子に戻らなければ。

なんとか意志をまとめ上げ、そう決意し、顔を上げたはやは、

「大丈夫か？」

「……………」

思わず数秒、固まった。

「物音がしたから来てみたんだが、転んだんだな。どこか痛めなかったか？」

いつの間にか自分の前にいたその人は、膝を立てて座り込み、こちらを心配そうに覗き込んでいる。

「え、えっと……………」

「……………？ やはりどこか……………」

「い、いえ。あ、あの……………その……………」

(い、いけめんさんや……………！)

黒っぽい衣服に身を包んだ彼は、非の打ち所がないほどに端正な顔立ちの男性で、そんな人に至近距離で見つめられることにはやては全く免疫がなかった。

「だ、大丈夫れすっ」

そのせいかどうかにも舌がうまく回らず、恥ずかしくて顔が赤くなる。

「そうか、よかった。あの車椅子は君のだな？」

「は、はい……………」

「じゃあとりあえず、……………失礼」

「わっ！」

気がついた時にはもう、背中と膝の下に男性の腕が通り、はやてはそれに持ち上げられていた。

いわゆる、お姫様だっこの状態だった。

「あ、あの、私……」

「ああ、すまん、嫌だったか？」

「い、いえいえいえ、そんなことはっ」

両手と頭を振って否定する。男性は安心したように少し微笑み、またしてもはやての心拍数を跳ね上げたかと思うと、

「あ、ありがとうございます……」

「いや、いいさ」

優しくはやてを車椅子に座らせた。

（め、めっちゃかつこええ上にめっちゃ優しい……こんな人がおるんやな……）

感動しながら、はやてはついまじまじと男性を眺めてしまう。モデルや俳優と言っても十二分に通用するルックスに、軽々とはやてを抱き上げる力強い腕、それに甘い声。

また、抱き上げるのも椅子に下ろすのものとにかく柔らかく丁寧で、その細かい気遣いに男性の優しさが伝わってくる。

「……どうした？」

「あ、いえ、なんでもありませんっ！」

じっと見つめるはやての視線が不思議だったのか、問うてきた男性だが、まさかかつこいいから見てましたなんて言えないので、そう言って誤魔化す。

「そうか？」

「は、はい……あ、あの、ほんまにありがとうございます」

はやては彼に、改めて頭を下げた。

「気にしないでいいさ、怪我がなかったのならよかったよ。何か取りたい本でもあったのか？ 俺でよければ……」

「あ、いえ」

「だが、また転んでは……」

「えっと、そ、そうやなくてですね」

「どうやら男性は、はやてが本を取ろうとして転んだのだと思っただしい。」

「そうやなくて、……その……車椅子が壊れてしもて。なんとか動かんもんかと頑張ってるにちよお手え滑らせて……」

「む、……そうだったのか。まったく動かないのか?」

「はい。電動式なんやけど、バッテリー切れてへんのに……、手で動かそうにも変に堅くて重くてどうにも」

「ふむ、ちよつといいか?」

男性はそう言うのと、はやての後方にまわり、バックハンドルを握り軽く前へ押した。

しかしやはり、車椅子は動かない。

「駄目だな……。駆動部分あたりで、部品が外れてどこかに挟まったか何かしたのかもしれない。無理矢理押すわけにもいかないな」

「……そうですか」

「今日は、誰かと一緒に来ているのか?」

「いえ、一人です」

「そうか。ご家族に連絡は取れるか?」

「……えっと、その……いえ」

シグナムもヴィータもザファイラも携帯電話などもっていないし、念話という技術もどこにいるのかわからない相手に自分から繋ぐような事は、はやてには出来ない。唯一、携帯を持っていたシャマルにも、今は連絡がつかない。

「で、でも、大丈夫です! 車椅子のメーカーさんに連絡とかすれば来てくれるし……」

「だが、この場で直るものかどうかもわからないぞ」

「そ、そうなんですけど……そしたらその……何とかして……」

タクシーか何か呼んでどうにか……しかし、自分で言っていてなんとかできる自信のないはやては、声が小さくなる。
すると、

「……家は近いのか?」

男性が今度はそう問うてきた。

「はい、十分くらいで……」

「そうか。なら、俺が送ろう」

「え、で、でも」

「迷惑ならもちろん無理にとは言わないが……」

「そんなことないです！ で、でもこっちこそご迷惑ゆうかそんなお手数おかけできないゆうか」

「困った時はお互い様だろう。それに」

ぽん、と頭に感触があった。撫でられていると理解した時、顔は火がでるくらいに赤くなり、

「子供がそんな風に遠慮するものじゃないぞ」

その言葉に、胸に暖かい想いが灯った。

予期せぬ事態で味わった不安が、溶けていくのがわかった。

「……あの」

なるべく人には迷惑をかけず、自分で出来ることは自分で。そういう風に生きてきたはやてにとつて、会ったばかりの人に甘えるなんていうことは、通常ありえないことで。

「ん？」

「お、お願いしても……、大丈夫ですか？」

だから、そうすんなり言えたのは、自分でも意外だった。

「恭也さんって、力持ちなんやね……」

「そうか？」

「そうやって。それ、百キロ近くあんねんで」

図書館で出会った少女——はやては、恭也が右手に持つ物を指さして言った。

恭也の右手、そこには、彼女の車椅子が、その左側のハンドリムから握られ持たれている。

無理矢理押すわけにもいかないので、恭也が手で持ち上げて運んでいるのだ。

「へーぜんと片手で持ってるって、どういうことや」

「鍛えているからな」

二人は今、図書館を出て、はやての家へと続く道を行っている。

「むしろ、はやての方が車椅子よりも重いかもしれないな」

「う、嘘や！ なんぼなんでも私かて百キロはないで！」

「はは、冗談だ。むしろ軽すぎるくらいだぞ、もつとちゃんと食べないとな」

車椅子に乗せておくわけにもいかないの、はやては現在、恭也が左腕で抱いている。言葉通り、その小さく細い体躯は恭也にとつてみれば重さの内には入らない。

「食べとるんやけどな。でもどっちかって言うと、食べるよりも作るほうが得意や」

「む、はやては料理が出来るのか？」

「うーん、まあ、それなりやけど」

「……やはり中華が得意なのか？」

「え、中華？ まあ中華もできるけど特に得意なわけじゃ……」

「……そうか」

そこまで似ていたら本当に驚きだったんだけどなど、恭也は自らの家の居候を思い浮かべつつ、はやてを改めて見やる。

「な、なんや、どうしたん？」

「……いや、なんでもない」

やはり、口調、髪型、顔、体型に至るまでそっくりだった。あとで晶やなのはに教えてやろうと、恭也は心に決める。もつとも、そっくりの小学生がいたなんて言われたら当のレンとしてはさすがに忸怩たる思いがあるかもしれない。

レンには黙っておこう。

「そ、そか？ あ、恭也さん、着いたで。ここや」

そんな話をしている内に、いつの間にか目的地についたようだ。

八神と表札のある、品のいい一軒家がそこにはあった。

「恭也さん、悪いんやけど……ちよお庭の方に連れてってもらえへん？」そこに予備の車椅子があるから」

「わかった」

玄関前に手に持った電動車椅子を一旦置き、言われたとおり、家の回りを周って庭に出ると、倉庫らしきものがあつた。

「この中か」

「そや」

入ると、目当てのものはすぐにあつた。きちんとカバーがかかった状態で保管されてあつたので汚れもない。

それを持って玄関前へ戻り、広げて、恭也ははやてを座らせた。

「大丈夫そうか？」

「うん、いい感じや」

予備の物であるからか流石に電動式ではないようだが、はやての操作に従い、滑らかにきちんと動くようだった。

「ほんまにありがとうな、恭也さん。助かったわ」

「いいさ。やりたくてやった事だ」

「……そか？ 優しいんやね、恭也さん」

「そうでもないさ。……っと」

恭也がそう言つて微笑むと同時、風が吹き抜けた。季節は十二月、それは体の芯まで通るかのような冷気を帯びている。

「風邪を引いたらいけない。もう家に入った方がいいぞ、はやて」

「あ、うん。そやね」

「ああ。それじゃあな」

はやてが頷いたのを確認し、恭也はその場を後にしようとして踵を返すが、

「え、あ、待って待って恭也さん！」

「ん、なんだ？」

その声に、またすぐに彼女に向き直つた。何か他に困つた事でもあるのだろうか、恭也がそう思っていると、

「せつかく来てくれたんやからお茶でも飲んでつてや。お世話になつた人このまま追い返すわけにはいかん」

はやてはそんなこと言つた。

「……む、いや、だがな」

「あ、それともこの後予定か何かあるん？」

現在時刻は午前十一時半を少し回ったところ。今日は土曜日であり、大学の講義もない。また、闇の書の事件に関わってからというもの、護衛の仕事の方も、どうしても断れないものを除けば基本的に休業状態にしてある。

それに、管理局の方からも、守護騎士を捕らえて四日が経つが、今日は特に連絡はない。

「……」

実を言えば、守護騎士は、すでに一旦目を覚ました。

そこで事前の話の通り、なのはとフェイトが事情聴取に向かい、恭也も念のため随行することになっていたのだが、

（――自閉モード、だったか）

クロノの話では、現在、彼女は話をするしない以前の状態、らしい。彼女は、目覚めて現状を把握するやいなや、まるで彫像のようにただただ黙り動かない、外界刺激に対して一切の反応を示さない状態となったらしいのだ。

クロノ曰く、主や仲間の情報を渡さないために、敵の手に落ちたときに発動するようにプログラムされていた可能性が高い、とのことだ。

現在魔法によってその状態の解除を試みているため、なのは、フェイト、恭也達には今のところは通常生活を送って待機していて欲しいとのことのお達しが出ている。

「恭也さん？」

「ん、ああ、すまない」

（今考えることでもなかったか……）

はやての声に、恭也は思考の海から我に返る。

「いや、特に予定は何もないが」

「だったら、あ、そや、ほらちようどええ時間やし、お昼ご飯作るから食べてってやー！」

「うーむ……」

もちろん、はやてと食事する事が嫌なわけではない。知り合ったばかりだが、おっとりとしながらもなかなか利発な少女で、会話も弾む。

言葉に甘えて昼食を共にすれば、きっと楽しい時間が過ごせるだろう。

言ったとおり、これから予定があるわけでもない。

だが。

しかし、

「いいか、はやて。見ず知らずの人を、それも男を、そう簡単に家へ上げてはいけない。何かされないとも限らないんだぞ」

この無警戒な少女に注意を促す意味で、今ここで自分が気軽に家へ上がらせてもらうわけにはいかない。こんな形で前例を作ってしまったって、もしこれからまかり間違った事が起こってしまったてはまずい。

「いや、誰彼構わずこんな事言わへんよ。人くらいちゃんと選ぶで」

そんな恭也の注意に、はやては心外だとばかりに言葉を返した。

「恭也さんは見ず知らずの他人やない、恩人やん」

「だがな、騙しているだけかもしれないぞ？」

「恭也さんが私をどーこーしよ思うたらわざわざそんなことする必要ないやん。百キロの車椅子片手で軽々持ち上げて運ぶ人が小学生相手に回りくどい嘘まで吐いて、なんておかしいわ、力づくでどーともなるやろ。何かするんならもうとつくにやってるはずや。それに」

はやてはそこで一旦、言葉を切って、

「なにより、恭也さん、そんな人には全然見えへんしな」

笑いながらそう言った。

理屈立てた上に感情を乗せた見事な反論に、恭也は思わず舌を巻く。やはり、利発な娘だ。

「……うーん」

こうまで言われては、さすがに無碍にはできないか。

思い悩む恭也に、

「それとも、恭也さん、家上がったらなんかするん？」

はやてはさらに言葉を重ねた。

「いや、しないが」

「だったらええやん、な？」

そして笑顔で、恭也の服を小さく掴んできた。

「……わかった」

その仕草に、降参とばかりに恭也は両腕を上げ、言う。

「悪いが、昼をぐ馳走になってもいいか、はやて」

「もちろんや！」

はやては嬉しそうに声を上げ、恭也を家に招き入れた。

「……うまいな」

恭也は八神家のリビングで、椅子に腰掛けながら、振る舞われたはやての手料理を口にし正直にそう感想を述べた。

晶やレンのものと比べても遜色のない出来だ。素直に驚き、感心する。

「ほんまか？ よかったわ」

対面に座るはやては安心したように息をついた。

「その歳で本当に大したものだな」

「な、なんや、ちよお照れるな……」

聞けばはやては九歳だと言う。なのはとちようど同じ歳だ。それでこれだけのものを作れるというのは、驚嘆に値する。

ちなみになのはも最近は桃子に料理を教わり始めている。桃子の話では、喜ばしいことに美由希と違って有望なようだ。

「いつも、料理ははやてが作っているのか？」

「そうや。やっぱり好きやからな。作るのも、食べてもらうのも」

「そうか」

言葉を交わしつつも、着々と料理は減っていく。

「こんなに美味しい昼飯をぐ馳走になれるとはな。得をした気分だ」

恭也がはやてを助けたのはもちろん何か見返りを期待してのことではない。なのはと同じような歳の娘と言うこともあり、ただ単に放っておけなかったからである。

それなのに、まさかそのおかげで適当に何か外食で済ませようと思っていた昼食がこんなに恵まれたものになるとは思わなかった。

「ありがとうな、はやて」

だから、改めて恭也はそう礼を言ったのだが、

「……ちやうよ。お礼を言うのは私の方や」

はやては首を振った。

「困ってたとこ助けてもらったし……それに今こうしてご飯に付きおうてもらってる」

そして少し俯いて、恭也に小さな、消え入りそうな声で言った。

「最近、一人で食えることばかりやったから……寂しかったんや」

「……そう、なのか」

「しゃーないんやけどな。家族が、なんかみんな忙しいらしくて……その内一人なんかは、突然の用事ができたみたいで、帰ってこーへんくらいやし……」

語るはやての顔と声には、確かな陰が差していた。

「あ、いや、みんなが外でやりたいことがあるんなら、私はそれでええんやけど……はは……」

誤魔化すようにそう言って浮かべた表情は、……押しつぶすような笑みだった。

事情と感情を呑み込んで、現状を受け入れるための笑みで。

たしかにそれを見てしまった恭也はしかし、見ていられないとすら思ってしまう、そんな笑みだった。

「はやて」

「ん、なんや?」

だが、だからこそ、恭也ははやてを見つめる。

「……俺は、はやての家の詳しい事情を知らないからどうとも言う事は本来できない。だから、戯れ言くらいに思っただけ聞いてくれていいんだが」

そして、そんな風に前置きしてから、しっかりと、はっきりと言った。

「寂しいなら、寂しいと言わなければいけない。それは子供の義務で権利だ」

「え?」

「家族が好きなんだろう? そばにいて欲しいのだろう? 叶うかどうかは別として、そう思うならそれをちゃんと伝えなきゃいけない」

「で、でも……そんな事言ったら……その、……めーわくやし」

「迷惑をかけることのどこが悪い？ 他人じゃない、家族なんだろう？ わがママを言い合って、わがママを聞き合うのが、家族だ」

迷惑面倒、かけあってこそ。それすら愛する、それごと愛する。

少なくとも、そういうものが、恭也の思う家族の形だ。

「何も、傍若無人に振る舞えと言っているんじゃない。ただ、あんまりに本心を隠すのはよくない。隠した方も隠された方も、寂しい思いをするだけだからな」

「……」

はやては、虚を突かれたように、ただ呆然としていた。

「……すまん、やはり戯れ言だったな。聞き流してくれていいぞ」

その様子に、恭也はそう付け足すように言った。

先ほどまでの言葉に嘘偽りはないが、それでもそれはやはり恭也の持論に過ぎない。押しつけても仕方のないことである。それこそ、自分彼女の家族ではないのだから。

出過ぎた真似だったかと少し反省する恭也、しかし、

「……ううん」

はやてはゆるゆると首を振った。

「恭也さんの、言うとおりかもなあ……。なんや、そやな。私が遠慮したったら、みんなも私に遠慮してまうかもしれんよな。……それは、寂しいな。家族、なのになあ」

うん、と、一回大きく頷き、はやては今度はさつきとは違う力強い

笑みを浮かべた。

「みんなが帰ってきたらゆうてみる。……せめて晩ご飯くらいは、一緒に食べたいって」

「……そうか」

「うんっ」

そんな彼女の笑顔を見ながら、恭也は胸の中、少女のその願いが聞き届けられることを祈った。

晶が吹き飛んだ先がソファアだったというのは、晶への配慮ではなく、室内ゆえの器物破損を憂いてだろう。

「……あ、……あ、ぐ、うううう……」

さすがに堪えたのか、苦悶の表情の晶。

「お、おししよー!! そんなに似てはったんですか!? その子とうち!」

少し涙目のレンが、振り返って問うてくる。

「ま、まあ……そうだな、完全に、完璧に瓜二つと言うわけではない。ベースが同じ、というか、格闘ゲームの2Pキャラクターのようだった」

「なんのフォローにもなってませんよ!」

「ぐ、ひ、はははははははは! 見てえ……超見てええ……!!」

ソファアの上、蹲りながらも、またしても笑い声を上げ始める晶。

「……なの、ちゃんがつ、風呂から出たら、教えてやろう……!」

「やってみたい……、ぶち殺すぞサル……!」

「そ、そうか……、そうだなっ、ひっ、ははっ、そうだな……! な、なのちゃんが、その……はやてちゃん? と、もし友達に、なっちやつたらっ、お前と見分けつかなくなっ、困るもん……っ!」

「ぶち殺す!」

二人は、ソファアの上、取っ組み合いを始めた。

「……二人とも、一応、高町母が電話中だから、静かにな」

そんな恭也の注意には、

「ひひっ、は、はい……っ、ははははははっ!」

「こ、この……! おししよー! ちよおお待ちを! すぐに静かにさせます!!」

そんな返答が返ってきた。……一応は、この諍いの種を持ち込んでしまった身の恭也としては、それ以上の事は言えなかった。

「でも……そんな事があったんだねえ。はやてちゃん、か。なのはと 同じ歳だっけ?」

テーブルを挟み、対面に腰掛ける美由希に恭也は頷き返す。

「ああ。だが、歳の割には落ち着いていたな。本当に良い娘だったぞ。

もしかしたらお前よりもしっかりしているかもしれない」

「そ、そんな！」

「少なくとも料理は作れるな、それもかなりのレベルで。その点ですでに大差がついている」

「……………うう、耳が痛い」

「洗い顔をする美由希。

「……………うん、前に言ってたわね。……………うん、そうそう。すごいじゃない」

かすかに聞こえてくるのは、親しげな口調で電話をする桃子の声。電話はついさつきかかってきたもので、恭也が桃子に取り次いだ。相手は何回か恭也も話したことがある桃子の友人だった。桃子と同じように洋菓子の道を行っている女性である。

「私もお料理、やっぱり練習して」

「止めておけ、高町家から死人と犯罪者を出す気か」

「ひ、ひどい！ 向上心を持った妹に言う言葉じゃない！ なのはのお料理は応援してるくせに！ 食べるくせに！」

「そりゃあ、まだ確かに習いたてとは言えなのはの作るものは立派な料理だからな、出されたらありがたく頂くさ。だがお前のは違う。生物兵器だ、バイオテロだ、キッチンジェノサイドケミカルだ。お前の料理の腕は低いと言うよりマイナスなんだ。むしろ絶対値をとれば、世界トップの料理人ともとんかもしれんな」

「兄の台詞じゃあ、家族の台詞じゃあ、いや、人の台詞じゃあないよそれ！ 傷つきやすい繊細な十代の少女に放つ言葉じゃないよそれ！

私にだって心はあるよ！」

「俺にだって命がある。お前に迂闊に料理をさせて致死性の毒物を生成されるわけにはいかん」

「兄が、兄がいじめる……………」

テーブルの上、崩れ落ちるように突っ伏す美由希。

「まあ半分くらいは、いや、三分の一……………五分の一……………十分の一……………全部冗談ではないのだが、そう気を落とすな」

「ちゃんとしたフォローが欲しい！」

「いつか何かの拍子にうまいこと何かしら作用して何とかなるかもしれないとも限らんぞ、望みだけは捨てるな」

「気休めはいらない!」

と、悲痛な声で美由希が叫んだところに、

「ええ!? いや、それは、ええ、ちよつと無理よお!」

そんな声が聞こえてきた。

未だ取っ組み合う晶とレンのものでも、恭也のものでも美由希のものでもない、桃子のものである。

「かーさんは無理だと思ってるのか……。まあ、それこそ無理もないことだがな」

「あれは電話の相手との話でしょ!? 私の料理の将来性に対してのコメントじゃないよ!」

二人がそんな会話を交わす間にも、桃子の方も話が進んでいる。

「……うーん、いや、わかるけど、わかるけど、でも、明日でしょ?」

明日は駄目なの。明日はどうしても……。え、あら、ええー、あららら、そ、それはまずいわね……。ほんとにまずいわね……。……。うううううううう……。うううううう……」

唸り声を上げ、受話器を握り締めて葛藤する桃子。

「どうしたんだろ、かーさん」

「なにか頼みごとでもされているのかもしれない……」

盗み聞きは趣味が悪いとはいえ、なにぶん動揺しているのか桃子の声は大きく、恭也達のところまで否が応でも届いてきてしまう。

漏れ聞こえてくる会話からすると、明日に何か頼まれているらしいが、

「でも、明日って……」

「ああ、なのはのアレだな」

その明日には、桃子には予定が入っている。

なのはの授業参観と三者面談である。

両方ともに午前中には終わるとはいえ店主である桃子が簡単に店を空けるわけにはいかない。だが、それでもなんとかスタッフのシフトを上手く調整し、作り置きやなにかも出来る限り準備して、どうに

か行ける算段をつけていたはずだ。

「……そうよね、それはほんとに。他のスタッフは？ うん、うん。うーん……それはちよつと、そうね……厳しいわね……。……でも、うーん、明日は……」

だが、電話相手もそうとう粘っているようだ。あちらもあちらでのつぴきならない事情があるらしい。

どうなるのだろうか、さすがに気になってきた恭也と美由希の耳に、

「……………わかったわ。うん。うん」

やがてそんな複雑な感情のこもった言葉が聞こえてきた。

その後、少しのやりとりを交わし、桃子は電話を切った。

そして盛大にため息をつき、その場に崩れ落ちる。

「か、かーさん!？」

「かーさん、大丈夫か？」

慌てて駆け寄る美由希と恭也。

「恭也、美由希、どうしよう……。ごめん……。ごめんね……。なのは……」

「あー……」

「……まあ、だいたい事情は察せるが」

友人の店で、懇意にしている非常に高名なお客がパーティーを開く。しかし、それが明日に迫った段になって、主要スタッフの数人が不慮の事態で入院、当日に作業が出来ない状況となった。だが今更取りやめるわけにもいかず、しかし生半可な腕のものをヘルプに呼ぶわけにもいかず……。

そういうわけで、桃子に声がかかった。

桃子が沈んだ声で語ったのは、おおよそそんな話だった。

「詳しい状況も聞いたんだけど、本当に切羽詰まってるみたいで……。事前準備は全部終わってるみたいなんだけど、当日スタッフがどうしたって足りなくて……。このままじゃ下手したら店の危機だって……」

「そんな状況の友達に手を貸すのは、間違った事じゃないと思うけど」
美由希の言葉にしかし、桃子は首を振る。

「でも……でもでも母親としては間違いよ……。普段だつてちやんとかまつてあげられてないのに、こんな時までこんな事じゃあ……」
「さすがに今回は状況が状況だろう。それに、あいつに寂しい思いをさせているというのなら俺達だつて同罪だ。かーさんだけの事じゃないだろう」

「二人とも……ううううう」

「ほら、立ってくれ。茶でも煎れてやるから、な」

恭也は落ち込む桃子をほとんど抱えるようにして立たせ、椅子へと座らせる。

そして言葉どおり、キッチンへ向かうと棚から茶葉を取り出し、暖かいお茶を煎れ、桃子の前のテーブルに置いた。

「ありがとう恭也……ごめんなさいね……」

桃子は力のない笑顔を浮かべると、恭也の出したお茶に口をつけ、

「美味しい……はあ……」

ため息を吐いた。

「なのはがお風呂から上がったら、ちゃんと説明しないとね……」

「……そうだな」

「あの娘、楽しみにしてくれてたから……きつと悲しむわ。でも、多分、”しょうがないよ、大丈夫” って言ってくれちゃうのよね」

「なのは、そういう娘だもんね」

甘えんぼではあるが、それを隠して人一倍気を遣う娘。それが恭也達のなのはへの共通認識だ。

だからこそ、伝えるのが辛い。

怒りもせず、泣きもせず、裏側で悲しみながらそれでもきつとなのはは笑顔を作ってくれるだろうから。

寂しいなら、寂しいと言わなければいけない。それは子供の義務で権利だ……今日、恭也がはやてに言った台詞だが、ある意味でこれはなのはへの願望も含まれていたと言える。

「なんとかならないかなー」

美由希が困ったように言う。

「そうだな……。しかし、まさか俺たちが代わりにその友人の店の手

伝いに行くわけにもいくまい、なんの役にも立たんだろうからな。洋菓子作りの腕でかーさんの代わりになるような人物のあては……うむ……」

誰かいただろうか、考え込む恭也。晶やレンを筆頭に料理上手なら心当たりは何人かいるか、菓子作りとなるとなかなか……。

己の人脈に考えを巡らせ、うなる恭也だったが、

「……………」

「……………」

「どうした？ 二人とも」

不意に、自分に視線が向けられていることに気付いた。

恭也を見つめる二人——美由希と桃子は、

「そっか、そうだよ」

「……そうよ、その手があったわ！」

そしてそう言って、恭也の手を力強く掴んだ。

「ふむ……こんなものか」

現在時刻は朝の八時半。

恭也は自室の鏡の前、全身を細部までくまなくチェックした後、そう一言呟き頷いた。

髭も剃り、眉も整え、髪もきちんとセット。

左手には時計をはめ、身に纏うのは品の良いスーツ。

「……サイズ、ぴったりだったな」

時計もスーツも、士郎のものだ。

自分のものでもよかったのだが、仕事用の血と硝煙にまみれたそれを着ていくのはどうかと悩んでいたら、桃子が出してきてくれたのだ。

格好だけでも父のもので行けるといいうのは、別の意味でも良かったと言えるかもしれない。

なにせ、今日は、保護者として、桃子の代わりになのはの授業参観と三者面談に向かうのだから。

(喜んでくれるだろうか……)

恭也は心の中、自信なさげに呟いた。

昨日の晩、桃子に拝み倒され、なのはのためになるならと引き受けたことではあるのだが、しかし自分が行ってそれで果たしてなのはが喜んでくれるのかどうか。

なのはには、今日、恭也が行くことは伝えていない。どうせなら驚かせちゃったら？ との美由希の言葉によりそうなった。何を意味のわからないことを恭也は反対したのだが、結局は押し切られてしまった。

「……なのはに恥ずかしい思いをさせることだけは避けなければな」

そう一人ごち、恭也はもう一度鏡を覗き込む。

着飾りこそしないが、普段から身だしなみにはある程度気を遣ってはいる。

そんな恭也をして、今日は特に入念に整えたと言えた。

変な格好をしてしまつては、恥をかくのは自分ではなくなのはなのだ。それだけは死んでも避けなければならぬ。

その後も、何度も何度も確認し、

『主、ご心配なようでしたら母上様にご確認頂いたらいかがでしょうか?』

という魅月の意見に従い、恭也は部屋を出た。

美由希達はみな、既に学校に向かったので、リビングには準備をする桃子一人だけだった。

「かーさん、すまないんだが」

「あら、恭也、支度はでき……」

かけられた声に振り向いた桃子は、恭也の姿を見て、固まった。

「……かーさん?」

やはりどこか変だったか。魅月の言うとおり確認してもらつてよかった、そう思いつつ恭也は再度桃子に声をかける。

「すまない、かーさん。どこが変だ? 自分ではよくわからなくてな」

「……」

「かーさん?」

「……え、は、はい！ えっと、何かしら？」

やっと再起動した桃子に、そこまで自分の格好はおかしかったかと若干落ち込む恭也。

「いや、どこかおかしな所があるかどうか聞こうと思ってな。その様子では相当まずい部分がありそうだが……すまない、どこがおかしいか教えてくれ」

しかし桃子は、要領を得ないとばかりの様子で言った。

「え？ おかしいところなんて一つもないわよ」

「……？ だがさっきの反応は……」

「あ、ああ、違う違う、違うのよ。ごめんなさい、ちよつと驚いちゃつて。……すごいわよ恭也、我が息子ながら驚くほどの完成度よ」

「そ、そうか？ まあ変でないのならいいのだが」

「全然変じゃないわ。それどころか、……うん、完璧よ。桃子さんが太鼓判を押してあげる」

言いながら桃子は、上から下まで改めてまじまじと恭也を見つめる。

「いやあ……本気でばつちり決めるとここまでのものになるのね。そうだ恭也、今度この格好で宣伝チラシと店内メニュー用の写真撮りましようね。これは世間様に広く公開しないと罪になるわ」

「さすがにそれは身内鼻根の引き倒しだぞ、かーさん」

「その自覚の無さささえなければねえ……恋人の一人や十人や百人……」

「そんなにいたら問題だろう……」

本人としてはひどく真つ当に突っ込みをいれたつもりだったが、しかし桃子はあきれたように肩をすくめた。

「……？」

「まあ、恭也のその性格をどうにかしなきゃってのは後々の議題にするとして」

そして桃子は、真剣な口調に切り替え、言った。

「今日は、よろしくお願いね」

急遽代わりをまかせる恭也に対して、そして何よりなのはに対し

て、罪の意識を感じているのだろう、少し陰のある声だった。

「昨日も言ったが、あまり気に病むな、かーさん」

「……うん、ありがとう」

「やれるだけはやってくるから安心してくれ。まあ、俺でなのはが満足してくれるかはわからないがな」

「……本気で言ってるの、それ？」

一転、呆れた風に問う桃子に、恭也は頷く。

そんな恭也に、頭を振ったため息を吐いてから桃子は言った。

「もうちよつとちゃんと自覚するべきよ、恭也」

「なにをだ？」

「なのはのことよ。あの子は、なのははね、恭也が自分で思っているよりもずつとずつと、恭也の事が大好きよ」

とは言われたものの、

(大丈夫だろうか……)

恭也の胸の中には、不安が渦巻いている。

本当に自分でなのは喜んでくれるのか、そして、恥ずかしいと思わないか。

不安だった。

なにせ、現在、聖祥大学附属小学校に着き、なのはの通う三年一組へ向かう廊下を歩いているのだが、

「……やはり、俺では場違いか」

教室を通り過ぎるたび、誰かとすれ違うたび、まとわりつくような視線を感じる。

いちいち、じっくり見られている。

自意識過剰かとも思ったが、見られているかどうかということをも“心”を使える自分が間違えるはずもない。

堪らず、一度トイレに駆け込み、身だしなみを再確認したがやはりおかしな点はないように思えた。

それはつまり、おかしな格好をしているのではなく、自分がいるこ

と自体がおかしいということではないか。

恭也はため息を吐く。

これでは、なのはに喜んでもらうなど……。

『主』

そんな風に沈みかける恭也に、魅月が念話で声を掛けてきた。

『む、なんだ？』

『お聞き下さい無自覚な主よ』

『無自覚？ いや、自覚はしているんだ、場違いだから見られているというくらい』

『違います。ですから無自覚なのです』

会話を交わす間にも、またしても前方から歩いてきた同じく授業参観に来た保護者と思われる婦人二人組が、恭也の姿を見るやいなや思わずといった様子で足を止め、興味津々、視線を向けてきた。

「……あの、何か？」

「え、あ、何でもないのー！」

「ごめんなさいねー！」

恭也がそれにこらえきれず声をかけると、弾かれたように顔と手を振り、二人はその場から去っていった。

「……はあ」

ため息をこぼす。

さつきからずつと、こんな調子だ。どころか、写真を撮られたことすら数回あった。

『主、貴方は先ほどの女性二人の反応をどのようにとらえましたか？』

『場違いなものを見たリアクションそのままだろう……』

『勘違いですよ、それは。母上様もおっしゃっていましたが、貴方はもう少し、ご自身の魅力についてご自覚するべきです』

『そう、言われてもな』

恭也には、あまりピンとこない話だった。

『よろしいですか、貴方は……いえ』

魅月はそこで言葉を切った。

そうこうしているうちに、なのはの教室が近づいてくる。そして、

魅月は続きを口にした。

『これを伝えるのは、私などよりもはるかに適任の方がいらつしやいますね』

『……………』

『貴方の魅力を、世界で誰よりご存じな方のことです、愛されし主よ』

また、教室のドアが開く音が響いた。

担任の先生からは、あまり後ろは見ないで授業に集中するように言われているが、それでも皆、やはり気になるもので、それはなのも例外ではなかった。

(今度こそ、お母さんかな?)

いけないとは思いつつ、しかし後ろを見たいという欲求も強く、葛藤していると、

「……………」

教室がざわつき始めた。

いや、浮つき始めたと言ったほうが適切かもしれない。ところどころで黄色い声が上がっている。

教壇に立つ先生すら、授業を進める手を止めて、教室の後方を見つめている。

結局釣られるように、なのも皆と同じく後ろに目を向けて、

「っ!?!」

声を抑えられたのは、自分でも自分を褒めてあげたいくらいだった。

(お兄ちゃんっ!?! なんで!?!)

振り向いた後ろ、他の保護者達に混ざり立っていたのは、兄だった。

「お父さん……………じゃないよね。お兄さんかなっ?」

「超かっこいいー!」

あの俳優に似てるだの、あのモデルに似てるだの、あちらこちらでそんな声があがっている。

それもそのはずだった。

普段から身なりはきちんとしている兄だが、今日は一段と整っており、その姿はもはや完璧というタイトルをつけて額に飾ってもいいくらいだった。

端正で精悍な顔立ち、すらりとした体躯、それらを引き立てる品のいいスーツに、洗練された立ち居振る舞い。

上から下まで余すところなく隙がない。

恭也を見慣れているのはですら思わず見入ってしまい、恭也の魅力を深くわかっているのはだからこそ誰より魅入ってしまう、そんな姿だった。

有り体に言って、ものすごく格好良かった。

そして、そんな兄はどうやら、向けられる視線の意味を正しく理解していないようだった。

恭也はため息と同時に、憂うような表情を浮かべた。そして教室を見渡し、

「……あ」

すぐになのはを見つけ、申し訳なさそうな顔をしてくる。手に取るようにわかる。

やはり俺では場違いだったな。

恥ずかしい思いをさせてすまない。

……あれは、確実にそんなことを思っている顔だ。

豊かでない恭也の表情から感情を推し量る事にかけては世界一の自負があるなには、はつきりとわかった。

「え、えっと」

もちろん、なのはそんなことは思っていない。兄を恥になどどうして思うものか。

事情は、なんとなく察せる。

母が何かしらの事情で来られなくなって、代わりに来てくれたのだろう。今にして思えば、昨日の晩、自分がお風呂を出た後あたりから、母の様子はどうもおかしかった気もする。元気がなかった、というベキか。

母は忙しい身だ。楽しみしていただけに、来てくれないことはやは

りとても残念に思うが、責めるつもりもない。

そして、兄が来てくれたことは、それはそれで、というか、それも十分、いや十二分になのはにとっては嬉しいことだった。

どうにかしてそれを伝えなければ。

だが、

「は、はい、皆さん！ 前を向きましようね、授業に集中しましょう！」
そんな担任の声が響き、また兄にも仕草で促され、なのははやむなく前を向く。

念話を使えばよかったと気付いたのは、授業が終わってからだった。

「恭也！」

「つと、いきなりだな」

授業が終わり、恭也の元へ一番に飛びついてきたのは、なのはの友人、アリサ・バニングスだった。恭也は彼女を優しく受け止める。

「久しぶりねっ、恭也！」

「ああ、久しぶりだな、アリサ。元気だったか？」

「うん、もちろん！ でも今日は私のことより恭也のことよ！」

「俺のこと？」

「うん！ 今日の恭也、すっごく決まってるわよ！ ハリウッドスターみたい！」

そんな言葉に、思わず恭也は苦笑を浮かべる。

「褒めてくれるのは嬉しいが、世辞が過ぎるぞ、アリサ」

「お世辞じゃないわよ。私お世辞なんて言わないもの。ほんとの事よ」

「いやしかしな……」

「アリサちゃんっ！」

と、そんなやりとりを交わす二人のもとに、なのはが走り寄ってきた。
た。

そして恭也に抱きつくアリサに後ろから組み付いて、引っ張り始め

る。

「はーなーれーるーのっ！ なにやってるんですか！」

「いやーよ！ いいじゃないちよつとくらい！ どうせなのは家で恭也にべったべったくつついてるんだから今くらい譲りなさいよ！」

アリサもアリサで離れるものかと、恭也にしがみつく力を強める。

「べ、べたべたなんか……………してないよ！」

「絶対嘘よ！ 今間があつたもの！」

「いいからとにかく離れるの！ お兄ちゃんから離れるの！」

「早いもの勝ちよ！ 前の方の席にいた自分を恨みなさい！」

「二人とも、落ち着け。教室で騒ぐな」

どうにも収集がつかないような気配を感じたので、恭也は二人に軽くデコピンを当てた。

「きゃんっ！ 痛いじゃない恭也……………！」

「わっ！ うううう頭に響きます……………」

アリサもなのはも額を抑えたおかげで、アリサは恭也から手を離し、なのははアリサから手を離す。勢い余って少しよろめいた二人だが、倒れるほどではなく。

「うむ」

一件落着だ。そう言わんばかりに恭也は頷いた。

「アリサちゃん、二人を困らせちゃ駄目じゃない」

「なのは、気持ちはわかるけどあんまり騒いだら駄目だよ」

そこに、すずかとフェイトが静かに歩み寄って来た。

「恭也さん、お久しぶりです」

「久しぶりだな、すずか。元気そうで何よりだ。月村達も変わらないか？」

「はい。たまにはまたうちに遊びに来てください」

「ああ、今度そうさせてもらおうよ」

その言葉に、すずかは待ってますと言って微笑んだ。

「学校で恭也さんに会うのって、なんだか新鮮ですね」

そう声を掛けてきたのは、フェイトだ。

「そうだな。……む、そういえばフェイトの制服姿をきちんと見るのは初めてかもしれないな」

「あ、そうかもしれないですね。いつも運動着とか……ですし」
「だな」

正確には運動着かバリアジャケット、だ。さすがにそこを言うわけにはいかないからだろう言葉を濁したフェイトに、恭也も頷いた。

「よく似合っているぞ。黒もいいが、白も映えるな」

「え、あ、え、そ、そうですか……？」

「ああ」

頷く恭也に、

「ありがとうございます……」

フェイトは真っ赤に染めた頬を両手で抑えながらそう言った。

「さて、なのは」

「あ、うん」

そして恭也は、なのはに向き直った。膝を折り、屈んで、視線を合わせる。

「……ごめんな。かーさん、今日は来られなくなつたんだ」

「あ、やっぱりそうなんだ……うん」

「昨日の夜、かーさんの友達でうちと同じように店をやっておられる方から、電話がかかってきてな」

恭也は、昨日の話なのはに説明した。

「店の危機とまで言われたらしくてな……そっちへ行くことになってしまった。すまない、なのは。勝手な事を言うようだが、かーさんもずいぶん悩んでいたみたいだし、許してやってくれないか」

「そ、そんな、許すっていうか、怒ってないよ。お友達がそんな大変な事になってるなら助けに行くのは当然だろうし」

「そうか？」

「うん」

「……ありがとうな」

恭也はなのはの頭を優しくなでた。なのはは恥ずかしそうに、しかし嬉しそうに微笑んで言う。

「だからおにいちちゃんが来てくれたの?」

「ああ、そうだ。……悪いが、今日は俺で我慢してくれるか?」

「我慢だなんてことないよ!　なのは嬉しいですつ」

そう言っつて飛びついてきたなのはを、恭也は抱き留める。

「つと、そうか?」

「うん!」

「そう言っつてくれると安心するよ。どうにも俺は場違いみたいでな、変な目で見られるし、迷惑かとも思ったんだが……」

「……やっぱり勘違いしてたんだ」

ため息を吐くのは。

「みんながおにーちゃんを見てたのはそういう理由じゃないよ」

「そうなのか?　じゃあ……」

「おにいちちゃんがかつこいいいから、みんな見てたんです」

「……………ふむ」

「ぜ、全然信じてないね……」

そう呆れたように言われても、恭也としては到底信じられることではない。

「まあ、その励ましてくれる気持ちだけ受け取っておくさ」

「……はー」

その言葉に、なのははさつきよりも大きいため息を吐いた。

「あ、そう言えば、大丈夫なの?　大学は……」

「今日は自主休講にした。問題ない」

「そ、それは問題ないんですか?」

「なに、もとより仕事で休むことも多々あるし、単位に影響するほどじゃない。平気さ」

もちろん無闇に休むわけにはいかないが、実際一回休んだくらいでどうこうなるものではない。それに、そんなことよりなのはの方が恭也にとつては大切だ。

「せっかくこうしてなのはの様子を見に来られるチャンスなんだ、来ないと損だしな」

「そ、そーですか?　えへへへ………痛っ!」

緩みきった笑みを浮かべるのはは、突然声をあげ、後頭部を押さえた。

そして後ろを振り向き、言う。

「痛いよ！　なんで叩くのアリサちゃん！」

「そっちこそなんで私がやったって決めつけるのよ」

「こんなことするのはアリサちゃんくらいだよ！」

「これみよがしに見せつけるのはが悪いのよ」

「やっぱアリサちゃんじゃない！　それに見せつけてなんていないよ！」

心外だとばかりに抗議するのはを、ジト目半眼でアリサは指さした。

「見せつけてるじゃない、そんなにべったりくっついて」

「これは……よくある日常のワンシーンです」

「なのは、今あなたはこの教室の約半数を敵にまわしたわ。これからの学校生活が穏やかなものになるとは思わない事ね」

「そ、そんな！　そんなことないよ、ね、フェイトちゃん、さすがちゃん」

同意を求めるように、なのはは二人に目を向ける。

「ごめんね、なのは。私はアリサに一票かな」

「私も、かなあ」

しかしフェイトもすずかも笑顔でそんな風に返した。なのははうめき声を上げ、嘆く。

「培ってきた友情がこんなにも簡単に崩れるなんて……」

「……まあ、仲良くな」

恭也は姦しい四人娘に、苦笑しながらそう言った。

(……………参ったな)

『お疲れ様です、主よ』

魅月のそんな労いの言葉に、恭也は苦笑で答えた。

授業参観が終わり、次は三者面談。

各々、割り当てられた時間まで生徒は教室で自習、保護者は待機と

なった。

そして今、恭也は待機場所として用意された教室ではなく、その前の廊下に立っている。

『大変でしたね』

『ああ、物珍しく思う気持ちもわかるんだが、あれはな……』

魅月と念話を交わしながらも、恭也は深くため息を吐いた。

待機場所へ案内してくれたなのはのクラスの担当教諭がこの後の予定を話し、その場から去ってから、恭也に待っていたのは回りの保護者の皆さん、主にお母さん方達からの質問攻めだった。

もみくちやにされたと言う表現がまさにぴったりだった。

どういう流れでそうなったのかは良く覚えてないが、ツーショット写真まで何枚も撮らされた気がする。

さすがに堪らず、トイレに行つてきますと言つてその場から逃げ出してきた次第である。

すぐに帰るのは精神が拒否しているので、どこかで時間を潰そうかと考えていると、

「……ん？」

(あれは………)

「リンデイさんか」

廊下の先からリンデイが歩いてくるのが見えた。リンデイの方も恭也に気がついたらしく、相変わらずの若々しい笑顔で手を振ってくる。

ほどなくして、リンデイは恭也の隣に着いた。

「こんにちは、恭也さん。……もしかしなくてもなのはさんの三者面談、ですか？」

「ええ、そうです、母の代理で。リンデイさんはフェイトの、ですよね」

「はい」

リンデイが来ることは事前にフェイトから聞いて知っていた。

ちなみに、すずかにはノエルが来るらしい。忍とノエルの二択であれば、考えるまでもなくそうなるだろうなど、忍に言えば激怒されること間違いなしの感想を抱いたのが恭也の正直なところだった。

「授業参観は来られませんでしたが、なんとかこっちには時間が作れましたので。クロノとエイミイさんが仕事を肩代わりしてくれまして」

「なるほど。……フェイト、リンディさんが来てくれるって、嬉しそうに言っていましたよ」

恭也のその言葉に、

「そう、ですか……」

リンディは安心したように一つ息を吐き、

「……ありがとうございます。恭也さん」

深々と頭を下げた。

「いえ、俺はなんにも……」

突然の礼に恭也は慌てる。こんな風に感謝を示される覚えは自分にはないはずだ。

そんな恭也にリンディは頭を上げて、静かに微笑む。

「……フェイトさんは、最近、少しずつではありますが自分の要望をちゃんと言ってくれるようになりました。あの娘にとっては、”わがまま”のつもりなんでしょうね」

「……それは」

「私やクロノに、ほんのちよつとは言え、甘えてくれてるんです。それとなく話を聞いたなら、貴方の名前が出てきました。ちゃんと甘えろって、言ってもらったって」

これからは、できる限りちゃんと、人に甘えろ。

それはあの日、恭也がフェイトに出した条件だった。

どうやら彼女はそれを、きちんと守っているらしい。……凶らずも、冗談めかして言った通りに、リンディから確認がとれた事になる。「今日のことだって、フェイトさんから言ってきたくれたんです。迷惑じゃなかったら、もし時間があつたら、無理にとは言わないから、もしよかったら、そんな前置きは沢山ついてましたけど、でも、あの娘から言ってきたくれたんです」

嬉しかった、リンディは続けてそう言った。

激務と言っていいはずの艦長職の勤務の中、部下の助けを得ながら

も今こうしていることは、その表れと言っているのだろう。

「だから私は、貴方にお礼を言わせて頂きたいのです」

「俺は……俺がしたいことをしただけ、ですよ。本当に、それだけなんです」

「……それでも、それでもやはり、ありがとうございます」

もう一度、そう言ってリンディは恭也に頭を下げた。

ほんの少しだけ湿りの色を含んだその声に、恭也は胸の中思う。

きつと、フェイトとこの人は、良い親子になれるだろう。

「おにいちゃん、これ、おいしいよー!」

「……それはわかるがな」

目の前にはなのはの笑顔と、差し出されたフォークの先、刺さったハンバーグの欠片。

「ほら、あーん」

「……」

「……いや、ですか?」

「有難くもらおう」

元より拒めるはずもない。周囲からの視線が気になるが、意識から切り離す。

無我の境地に達する心持で口にしたハンバーグは確かに美味だった。しかし味がわかると言うことは、無我の境地にはほど遠いと言うことだろうか。

「おいしいでしょっ?」

「ああ、うまい。ふむ、この店は当たりだったな」

「うんっ!」

授業参観と三者面談が終わり、午前中で解散となったので恭也となのはは街に寄り、見つけた洋食店で昼食をとっている。

ちなみにフェイト達も誘ったのだが、リンディがすぐに本局の方に戻らなくてはならないらしく、フェイトはそれに付いてあちらでクロノ達と食べる予定らしい。アリサやすずかもそれぞれの事情で共に

出来ないとの事だ。

「なのはも学校でなかなか頑張っているようだし、いいご褒美になったな」

「えへへへへへ」

三者面談はつつがなく終わった。成績も授業態度も交友関係も問題なし。得意な理数系は元より、苦手な体育も最近は良くなっていく。授業はいつも真面目に受けているし、友人も多い……なのはの担当教諭が笑顔で告げたのは概ねそんな内容だった。

普段の様子から予想はしていたとは言え、楽しくやれているようだ。

「担任の先生も若いながらしっかりされた方だったしな、安心だ」

「うん、先生、とつても頼りになるよ！」

「そうか。穏やかで綺麗な人だったし、あれでは人気があるだろう」

「……へー」

恭也としては素直な感想を述べたつもりだったが、それを聞いた途端、なのははなぜかジト目で恭也を見つめ始めた。

「なのは？」

「綺麗な人、ですか。……ずいぶん、仲良くなってたよね、おにいちゃん」と先生

「話が合ったのは確かだな」

赴任したてと言うことで年も近いし、聞けば恭也の通う海鳴大学の出身らしいと言うこともあり、多少関係ない話で盛り上がってしまったくらいだ。

「……おにいちゃんはああいいう人がタイプなんですか？」

「タイプ？」

「女の人の好みです」

「いや……うーん」

恭也にしてみればそれは唐突な問いだったが、何分なのはが桃子譲りの有無を言わさぬ無言の迫力でプレッシャーをかけてくるので、答えざるを得ない。

「特段そう言うわけでもないがな。と言うか、会って少し話したくら

いでわかるものでもないだろう」

「そ、そーですか」

なのはは安心してように息を吐いた。

「なんだ、なのははもそう言う事が気になる歳になったのか……」

「一応もう小学三年生です、当たり前です！」

小学三年生が果たしてそう言うことを気にしだしても違和感のない歳なのかどうなのか、恭也にはよくわからないが、女の子は成長が早いと言うし、ましてやなのはは歳に比しては大人びている方だ。

なるほど、いつの間にか、それでもいつまでも小さいままだと思っていた妹はしかし、着々と大人になりつつあるらしい。

「少なくとも、私はおにいちゃんよりはそう言う事をわかっている気がします」

「む、随分言うな。まあ俺が恋愛事と縁がないのは事実だが」

「……………おにいちゃんて本当に気付いて……………いや、なんでもないです」

なのはは言いかけて止め、頭を振った。

何かを諦められたような気がして、悲しくなる恭也だった。

「だが、そうか。じゃあその内、なのははにも恋人が出来てもおかしくないのか」

「……………え？」

「そう言えば小学生同士で付き合う……………と言うのも今は珍しくない、とか美由希達が言っていたような気もするな」

何となくなのはは恭也の中でそう言う事と結びつかなかったが、冷静に考えてみればなのははにだってあり得ることだ。

身内鼻根かもしれないが、なのはは自慢の妹だ。可愛らしいし、性格だっていい。そう言う相手がすぐに出来てもおかしくないだろう。

「来ていたお母さん方にちらつと聞いたんだが、なかなか人気があるみたいじゃないか」

「クラスのかわいい娘、と言えばなのはの名前は確実に挙がるらしい。」

「俺よりも、なのはの方が先に相手を見つけてるかもしれんな」

「……ないです、そんなこと」

冗談めかした恭也の言葉に、なのはは思いのほか強い口調で答えた。

「私、誰かと付き合ったりなんて、絶対しないよ」

「む……そうか？」

「うん、絶対」

絶対、なのはは恭也をしつかり見つめてそう言った。

「それとも……おにいちゃんは私がそういう人を作った方がいいと思う？」

「……うーむ」

こうは言っているものの、いつかはなのはも嫁に行ってしまうのであろう。

それはやはり長く兄としてなのはを見守ってきた恭也にとって、寂しくない事と言えば嘘になるが、しかし仕方のない事だとも思う。実際そんなことになったらショックでしばらくはどうかなくなってしまうそうだが、反対したりする気はない。

だが、それはあくまでまだ先の、未来の話だ。

「……いや。何も無理に作ることはないだろうと思う。正直に言えば、俺の価値観からすればなのはにそう言うのはまだ早い気がするからな」

「……そっか」

恭也のその返答に、なのはは、

「うん、そっ、か……」

あまり子供らしくない、ひどく複雑な表情で頷いた。

それについて、恭也が何か言葉を発する前に、

「おにいちゃんは、どうなの？」

「なにがだ？」

なのはは問いを重ねてきた。

「そう言う相手……恋人さん、作る気あるの？ 相手がいるいない

じゃなくて、作る気自体はあったり、するの？」

「……そうだな」

十以上も年の離れた妹相手にこんな話を真面目にするのはどうかと思わないでもないが、しかし普段の何気ない会話ならともかく、きちんと答えを欲しているなのはに嘘や誤魔化しは出来る限り言いたくない。

恭也は真摯に返答を口にする。

「ない、かな」

「そ、そーなの?」

「ああ。というか、そういうのは、作る気になって作ろうとするんじゃない、誰かを好きになった結果として出来るのが正しい姿だと思うからな」

「そっか……。……じゃあ、今おにいちちゃんは特に好きな人は、いない、の?」

「そういうことになるな」

恭也の身の回りには、幸運な事に魅力的な女性が多く、またそれに深く関わらせてもらってもいる。だが、恭也にとって彼女達はあくまで友であり、そういう対象としては今のところ見てはいない。

そんなひどく正直な恭也の返答を聞いて、

「そっ、か。うん、そうなんだ」

なのはは、随分と嬉しそうだった。

安堵したように息を吐き、顔をほころばせている。

(兄離れしていない、ということなんだろうな)

その様子を見て、恭也は内心苦笑する。

なのはも、自分と同じなのかもしれない。

自分が妹離れ出来ておらず、なのはにももうそういう相手が出来てもかもしれないと思って寂しい思いを抱いたのと同じように、なのはも自分にそういう相手が出来てもかもしれない事を寂しく思っており、それがいないと知って安心している……ということだろうか。

「そっか。うん、えへへへへ」

「なのは、ハンバーグ冷めるぞ」

「あ、うん！ 食べる食べるっ」

なのはは笑顔で食事を再開する。

それを見守りつつ、恭也も自分の料理に取りかかった。

水滴の落下音、立ちこめる湯気。

「ふー……」

高町家の風呂場、その浴槽に張られた暖かい湯に肩までしっかり浸かりながら、なのはは声を漏らした。

湯加減良好、お風呂は最高、だ。

「ふん、ふん……」

思わず鼻歌を口ずさむ。

顔が緩んでしまう。

その原因は今日一日のことだ。

(おにいちゃん、かつこよかったな……)

母が来てくれなかったことは残念だが、代わり兄が来てくれたことはとても嬉しかった。今日のごことは、たぶんこれからもずっと覚えていよう。それくらい特別な日だった。

それに、

「………いない、んだよね、好きな人……」

そんな事まで聞くことができた。

兄には、今、特に好きな人はいない。

その事実は、とてつもない安堵をなのはに与えた。

良かった、本当に。

良かった。

安心、した。

「……」

なのはは、鼻歌を止めた。

そして、今日恭也の前で見せたような複雑な表情を浮かべると、湯船に張られた湯の中へ、ゆっくりと沈んでいく。

(兄離れできない妹、とかだろうな、おにいちゃんが思ったのって)

今日の、あの昼の会話で兄が得た感想は、きっとそのようなものだろう。

それは当たり前前だ。それが当たり前前だ。世間一般通常の、正常な反応だろう。

普通の、”お兄ちゃん”の反応だろう。

兄は、普通だ。

そう、だから。

おかしいのは、自分だ。

(——おにい、ちゃん……)

高町なのはは、高町恭也が好きだ。

愛している。

好きで。

愛している。

幾度となく胸の中浮かべた言葉。

それは、もちろん家族として、そして兄妹として、と言うのもある。

そう言う意味でも、当然、心の底から慕っている。

だけど。

「おかしい、よね、……こんなのって」

そう言う意味以外でも、高町なのはは、高町恭也を好きで、愛して

いた。

勘違いでも、考えすぎでもない。

純然たる事実として、その感情はある。

男の人としての高町恭也を想う気持ちだが、高町なのはの中にはある。

家族という言葉で誤魔化せない、兄妹という言葉で包めない、幼さ故の感情という言葉で片付けるにはあまりに色褪せない、そんな想いが確かにある。

強い強い、想いがある。

この気持ちがいっから生まれたのかは、実のところなのは自身にもわからない。

通常の家族という枠を超えて、彼を求める自分がいる事を、なのははずっと前から当たり前前のように知っていた。いつからと言われても明確には答えられない。

だから、” 兄妹は結婚できない ” と言うことを知ったときは、極自然に、順当に、当然の帰結として、なのはは絶望を味わった。

届かない願いがこの世にはあるのだと言う事を、痛いくらいに思い知らされた。

なのはが、フェイトと友達になりたいと思った理由の大きな一つは、これだった。

手を伸ばしても届かない絶望。

そして、それでも手を伸ばすことを止められない渴望。捨てられない希望。

自らが抱えるそんな想いと似たものを、出会い、戦い合ったその中で、フェイトの瞳の奥に感じたのだ。

フェイトのそれは、母へのもので。

なのはのそれは、兄へのもだった。

結婚は出来なくても。

そういう形で結ばれることは出来なくても。

一人の男性としての高町恭也に愛してもらえる日が、いつか、もしかしたら。

来るはずない、来てはいけない。

でも、どうしたって来て欲しい。

そんな想いを抱いたまま、なのはは今まで生きてきたし、それがこれから変わるとも思えない。

高町恭也を想う気持ちは、高町なのはの根幹で、それが消失することとは高町なのはの終わりを意味する。

これは、もはや悟りに近い考えだった。

彼への想いを誤魔化そうとして忘れようとして取り消そうとして、そしてそれらが悉くもの見事に失敗に終わった結果として得た考えだった。

私が私である限り、これはもう変わりようがない。

そう、なのはは分かりきった。

自分について理解しきり、自分について納得しきった。

そんな自分を認めよう、そう思った。

彼を、好きで、愛している。

どうしようもなく。

「はっ、ふう……」

物思いに沈みながら湯にも沈んでいた顔を水面に出し、息を吐く。呼吸と、ため息だ。

「……」

なのはは、そのまま視線を下げ、自分の体を見る。

「はあ……」

もう一度、ため息がでた。

清々しいくらいに凹凸のない子供の体。九歳の、流線型フォルム。女性らしさなど一欠片もなかった。

もちろん、わかつてはいる。もし子供でなかったとしても、そもそもが妹だ。兄が自分をそういう対象として見ることなどありえない。わかつては、いるのだけだ。

それでももし、もつと大人だったら、なんて事を考えてしまう自分のどうしようもなさには、流石にもう慣れている。

「おにい……、ちゃん」

彼には今、特に好きな人はいないらしい。

彼自身は全く気がついていないが、彼の回りには彼を強く想う女性がたくさんいる。綺麗な人、素敵なお人、大人な人。なのはの持たないものを沢山持った、彼と並んでも何の違和感もない、彼と結ばれても何も不思議ではないそんな人たちが、いる。

なのははいつも、気が気でない。

いつか彼が恋人を作ってしまったらどうしようと、いつも思っている。

自分がちゃんとした恋人になることが不可能だからと言っても、彼が自分以外の人と結ばれていいとは、なのはには思えない。そんなに清らかではない。

暗い気持ちも黒い気持ちも重い気持ちも、この小さな胸に詰まっている。

張り裂けそうな思いを抱え、なのはは今日まで生きてきたし、明日

からも生きていく。

「おにいちゃん……っ」

眼を瞑り、もう一度、そう彼を呼んだ。

どこが好きか。どう好きか。語ることはできるけど、語り切るには無限の時間を要するだろう。

彼を想う気持ちなら、掛け値なしに、決して誰にも負けない自信がある。

最初で最後の恋。ありふれた、しかしドラマチックなそのフレーズは、なのはにとってはただの事実だ。

この恋が、もう自分の一生をどういう形であれ貫いてしまっているのだという事を、なのははどうしようもないくらいに自覚している。

第7話 緊急事態

「すみません、折角恭也さんに頑張って頂いたのに」

「いや、気にしないでくれ。仕方ないさ」

管理本局の一室で自分へ頭を下げるクロノに、恭也はそう返した。魅月の使用状況の定期確認のため本局を訪れ、そこでたまたま会ったクロノについてと守護騎士の現状についての説明をしてもらっているのだ。

現在、守護騎士は本局内に留置している。

が、彼女の展開した自閉モードは未だに解けず、何も情報は聞き出せないままらしい。

「どうやらあれは、相当強固な魔法耐性を誇っているらしくて……」

「さすがは闇の書と言ったところか。ああ、いや夜天の魔導書、だったか」

ユーノが無限書庫、という所で調査した結果によるとあれは正確にはそう言った名前のもらしい。

その本来の目的は各地の偉大な魔導師の技術を収集、研究するためのものであったのだが、歴代の持ち主の誰かがそのプログラムを改変。そのせいで破壊の力を振るうようになった上、旅をする機能と自動修復機能が暴走、転生と無限再生を備えるようになった。

また主に対する性質も大きく変化、一定期間収集がなされなければ主自身の魔力等を浸食、さらに書の完成がなされれば主に魔力を無差別破壊のために際限なく使わせる。主もそれが原因で命を落とす。

最悪にして災厄、元はただの資料本がとてつもない危険物に成り果ててしまった、ということらしい。

エイミイなどは、夜天の魔導書もかわいそうに、と言っている。

魅月もそのような意見だった。

仕え、守り、愛すべき主を喰い殺す存在に改変されるなど、悪夢以外の何物でもない、悲しそうに呟いていた。

恭也も、出来れば何とかしてやりたいと思っている。

恭也が闇の書事件に対し積極的に協力する姿勢になった原因の一

つに、あの金髪の守護騎士の事がある。

ビルの上でまみえた時、恭也が捕らえた彼女の瞳は破壊や殺戮、暴虐を好む非道の目などではなく、ただただ純粹な護る者の目だった。

恭也と同じ、護るべき者を護る者の目だった。

きつと、何か事情があるはずだ。

そう思っていた所に、闇の書——夜天の魔導書の真実を聞いてしまい、なおさら放っておけなくなった。

元はなのはを守るためだけに関わり始めた今回の事件だが、もうそれだけではなく恭也はその解決を願うようになっていく。幸福な解決がなされればいいと思うようになっていく。

「しかし魔法方面からのアプローチは難航、か」

「かと言ってそれ以外のやり方がなくて……。管理局の法では容疑者に無闇に苦痛を与え情報を引き出すのは禁じられていますから。もちろん、僕達もそんなことはしたくありませんし」

「そうだろうな。……む、では、物理的な刺激によるアプローチは一切行っていないのか？」

「ええ、基本的には魔法で自閉モードをなんとか出来れば、と思いましたが」

「……物理刺激に、反応自体はするののか？」

「あまり試していないから何とも言えないのですが、今のところ反応はしていませんね。ただ、ややこしいのですが、刺激自体は確かに伝わっているはずなんです。それを無視されているので結果的に反応しない、ということでしょうか。単純に刺激の強さが足りない、また痛覚系の刺激に対しては鈍くなるようにもしているのでは、との見解が出ています。もちろん、どちらにせよ、本格的な痛覚刺激によるアプローチはやるわけにはいかないのですけど」

魔法による自閉モードの解除は難航。物理的な痛覚刺激は倫理的な面からも出来ず、また敵の手に落ちたときのための自閉モードなどと言うものが用意されている以上、それにも対策がとられている可能性が高い。

そんなわけで、現状、管理局は手詰まりらしい。

「なるほど……」

(だが、物理刺激それ自体をあまり行っていないというのなら……)

恭也の見る限り、どうも管理局というのは基本的に魔法至上主義らしく、何事も魔法でなんとかしようとする傾向がある。

だから、それ以外の方法というのはそもそもあまりとる気がない。

そこに、鍵があるかもしれない。

「ふむ……」

恭也は一つ、アイデアを思いついていた。

それはおそらくまだ管理局が試していないアプローチ。そして自分はその効果を、かつなるべく倫理的に問題が発生しない形で行う技を持っている。

「何か、お考えでも?」

恭也の表情から読んだのか、クロノがそう問うてくる。

「ああ。一つ、試したいことがある。ただ……」

「ただ?」

「割とグレーな方策だな。許可が出るかどうか微妙なんだ。というか、おそらく出ない」

「……? とりあえず、内容だけでもお聞かせ願えますか?」

その言葉に従い、恭也はクロノに自身の考えと、その技を説明する。聞き終わったクロノは、

「……た、たしかに、もしかしたら有効かもしれませんが……。少なくとも僕達もまったくやっていない方法ですし試してみる価値は、……でも……」

逡巡の表情と声音を浮かべた。恭也も頷き、言う。

「まあ、自分で提案しておいてなんだが、俺もかなりどうかと思う。だから無理には言わん」

「……少し、待つて下さい。艦長に連絡してみます」

そう言ってクロノは、端末からスクリーンを展開し、

「艦長、お時間よろしいでしょうか?」

「あらクロノ、いいわよ、何かしら?」

そしてリンディに先ほどの話を説明。

結果、

「許可、出ました……」

恭也の案は、実行を許された。

「……そうか。……リンデイさんはなんと？」

正直、まさか本当に通るとは思っていなかった恭也は、そう問う。

クロノは苦笑いで答えた。

「恭也さんがやるのならアリだと思っわ、とか言っていました」

「ここらへん、だよね」

「うん、たしかこのフロアの、この区画なはずだけど」

なのはとフェイトは、きよろきよろと辺りを見回す。

ここは管理本局の一画。

二人が探しているのは、恭也が捕らえた守護騎士が在する部屋だ。

事件の進展具合を聞こうと本局に訪れてみれば、どうも恭也がそこに向かったらしいとの話を聞いたので、二人も行ってみることにしたので。

「お兄ちゃんが行ったってことは、守護騎士さん、起きたのかな？」

「うーん……でももしたら恭也さん、私たちに連絡くれると思うんだけど」

「だよねえ。変だなあ……。……でも、まあ、行けばわかるよね」

「そうだね」

元々、守護騎士の事情聴取は自分たちとそこに随行する恭也に任ざれていた話だ。

どういう事情が詳しくはわからないが、恭也が向かったというのなら自分たちも行くべきだろう。

そう判断し、二人はここまで来た次第だ。

「あ、ここかな？」

「うん、そんな気がする」

しばらくうろついていると、どうやらそれらしい部屋の前にたどり着いた。

無骨なドアはぴったりと閉じている。中の様子はうかがえない。とりあえず入れてもらおうと、ドアをノックしようと手を構え、

「おにいちゃ」「恭也さ」

「つああああああああん!!」

呼びかけたところで、二人はぴたりと停止した。

原因は言うまでもなく、部屋から響いてきた声だ。

「……あ、えっ？」

「な、なに、今の？」

二人は顔を見合わせる。

お互い、わかっていないという表情だった。

気のせいか、なにかの聞き間違えか、そう思おうとした矢先、

「う、あ、ああああんっ！ あ、ああ………で、でも、それは……あ、あああああっ……!!」

またしても響く声。さすがに二度聞いてしまえば現実だと認めざるを得ない。

「な、なななななななな……」

「なに、なに、なにが……!?!」

声は、女性のものだった。

そしてそれは、悲鳴というよりは、叫びと言うよりは、

「あっ！ は、んんっ！ あ、だ、もう……あ、ああああっ……！ あああああああああんっ！」

あえぎに、限りなく近い。

艶やかな、声だった。

なのはとフェイトは再度顔を見合わせた後、二人同時にドアに耳をつけ、中の声を伺った。

「そろそ………どう………念して頂けま………か？ 何も………らの情報………してく………言っ………のではないん………。まずこ………の話………くれと、それだ………すから」

「でも………も、………」
「………」

「……あつ！ ああああんっ！ あつ！ んんんっ……！」

「油断も……あり……。んね……。です……。れ以上……当に辛……し……。ど……」

「まだ……まだ……負けませ……」

「……ルを上げ……」

「え、……ま……が……？」

「大き……すよ」

「——あつ!?」

「辛……し……?」

「つな、なんですか今の!? や、ちよつと待って下さいこれは無理ですほんとに!!」

「では、こ……の話……いて……さい」

「……は」

「……続け……」

「……あああああああああああああああつ!! あああつ！ あつ……！ なにこれえつ……！ こんなやつ無理いいつ！ ああ！

あああつ!!」

響く嬌声。所々聞き取れないが、それに混じってたしかに恭也の声もある。

あの守護騎士は女性で、その人が兄と一緒にの部屋にいて、こんな声が。

なのはの頭の中に浮かんだ方程式には、一瞬にして解が出た。

最悪の、解だった。

「そんなの、そんなの……そんなの駄目なのっ！ 絶対駄目なのっ!!

レ、レイジングハート！ カウントスタート!!」

『Master……』

レイジングハートを展開、叫んだのはをフェイトは慌てて後ろから羽交い締めにする。

「な、なのは！ 落ち着いて！ 落ち着いて！」

「落ち着いてなんかいられないの！ 大丈夫ちゃんと出力絞ってドア壊すだけだから！」

「絶対大丈夫じゃないよ！ スターライトブレイカーで壊れるのがドアだけなはずないでしょ！」

「でもでもこのままじゃお兄ちゃんが！ お兄ちゃんが！」
暴れるなのは。

「おねがいだから落ち着いてっつてばーっ！」

「落ち着いてなんか、落ち着いてなんか！ フェイトちゃんはいいの!? 平気なの!? お兄ちゃんが……中で……中で女の人と！」

「平気なはずないじゃない！ 私だって、私だってっ！」

正直に言えば、暴れたのはフェイトだって同じだ。

簡単な話、先になのが暴走し始めたから止める側に回れたに過ぎない。

「じゃあいいじゃない！」

「でも、でも駄目だよ！ こんな所でそんな……」

「こんな所でそんなことやっちゃってるのはお兄ちゃんとあの女の人だよー！」

「そ、そうと決まったわけじゃ……！」

言いながら、フェイトも自分の言葉が信用できない。

もういつその事感情に従い流されてしまおうか、そう思い始めた矢先だった。

「やつほー、なのはちゃん、フェイトちゃん。本局に行ってるんだって？ ちよつと連絡したいことが」

なのはとフェイトに持たされた海鳴市駐屯地との連絡用携帯端末から、エイミイの声が響いた。

「……！ エイミイさん！」

なのはは即座に反応、操作を施す。展開された小型スクリーンにエイミイの顔が表示された。

「え、え!? なんてなのはちゃんレイジングハート展開してるの!? なにしてるの!?!」

「エイミイさんお兄ちゃんが お兄ちゃんが お兄ちゃんが お兄ちゃんが お兄ちゃんが お兄ちゃんがっ！」

「エイミイ！ 恭也さんこそ何してるの!?! 何してるの!?!」

フエイトもスクリーンを覗き込み、エイミーに問いかける。

「え、あ、え?! 二人がいるのつてもしかして守護騎士を留置してる部屋の前!」

「そうです! そしたらお兄ちゃんの声と! お、女の人の、こ、声が!」

「……うあっちゃー。遅かったか……。二人は終わるまで近づかせないようお達しが来てたんだけど……。失敗した……」

「お、終わるまでって……終わるまでって何が!? だから恭也さん何してるの!?!」

「ええっと落ち着いて落ちついて。だからね……」

困り顔のエイミーが説明を始めようとするタイミングで、

『騒がしいと思ったらなのはとフエイトか。……来てしまったんだな』

恭也の念話が届いた。

『お、お兄ちゃん! なななななななななにしてっ!』

『恭也さん! なにをつ、なにをつ!』

『……? まあ少し待っててくれ。あとちよつとで押し切れるはずだから』

そう言っつて恭也は念話を切ってしまった。

呆然とするのはとフエイト。

「お、押し切れるって……」

唇をわなわなと震わせ、眩くなのは。

「……………」

最早言葉もなく固まるフエイト。

「あー、二人ともだから落ち着いて、ね?」

そこにエイミーが再度説明にかかる。

「恭也さんは、守護騎士の自閉モード解除をやってくれているだけだよ。管理局が出来ないようなアプローチを思いついてくれて、さらに恭也さんはそれを上手くやってくれる技を持ってるって言うから、お任せしたの」

「アプローチって、技って、……な、なんのですか!?! こんな、こんな

……」

「なのはちゃんが何を想像しちゃったのかはわからないでもないけども、それは誤解だから、安心し」

「うああああああんっ！ あ、ああっ……………！ ああんっ！ や、だ、駄目っ、あ、あああああ……………！ ああああああんっ！」

「あらー、すごいね……………」

「これのどこか誤解なんですか！」

「いや、でも違うのよ。だからね」

「も、もうやっぱりドア壊して！」

レイジングハートを構え直すのは。

エイミーは慌てて制止をかける。

「ちよ、駄目だよ！ 落ち着いてなのはちゃん！ フェイトちゃん止めて！ 止めて！」

「…………手伝うよ、なのは」

「いやいやフェイトちゃんまで何言ってるの!? 駄目だよ二人とも！ ちよつとー！」

ついにフェイトもなのはと同じくデバイスを展開、バルディッシュを構えドアをにらむ。

「なのはちゃん！ フェイトちゃん！ ちよつとふた」

なのはとフェイトは、端末の電源を落とした。そして叫ぶ。

「カートリッジロードッ！」

「カートリッジロード……………」

『Please settle down, master…………』

『No, sir…………』

そんなデバイス達の制止を振り切り、二人は魔力をその身に漲らせる。

「デバババババババ……………」

「プラズマ……………」

二人は行く手を塞ぐドアに向かい、まさに魔法を放たんとするが、

「え？」

「あ」

唐突に、そのドアが、音も立てず滑らかに開いた。

「……何やってるんだ、二人とも」

部屋の中には、驚きと呆れの表情を浮かべこちらを見つめた恭也がおり、その傍らには、椅子に腰掛け少し顔を赤らめた金髪の女性の姿があった。

「何やってる、はこつちの台詞です、おにいちゃん!」

「……きよ、恭也さん……」

とりあえず、なぜか展開していたデバイスを納めさせ部屋に入れたものの、どうしてだかなのはは怒り心頭、フェイトは涙目だ。

「何って、見ればわかるだろう? ほら」

恭也はそう言って、視線を自らの横に向けた。

そこには、

「あ、あははは……」

困ったように微笑む、金髪の女性——守護騎士の姿がある。

「……えっと、あの……そんなに睨まないで……」

「こら、なのは。失礼だろう、何て眼をしてるんだ」

彼女に、普段の愛らしい様からはほど遠い恐ろしいまでの怒気を孕んだ表情と眼を向けるなのはを恭也はそう叱責する。

友好的に話し合うのに最も向いている人材であるはずなのはは、なぜか今はその対極に位置するような存在に成り果てていた。

「……その人を、かばうんだ」

「……? 当たり前だろう。何を言ってるんだ、お前は?」

「当たり前前、なんだ。もう、そんな、仲、なんだ」

「もうそんな仲? まあ、今までとは少しは違う関係になったのは事実だが……」

「……そうなんだ。そういうこと、なんだ……」

暗い声で呟いたなのはは、

「う、うううう……」

やがて唸り声を上げ、自らのスカートの裾を握りしめ、

「うううううう……!」

細かく震え始め、そしてしまいには、

「な、なのは……?」

(……—まずい!)

恭也が直感的に危機を悟ると同時、

「……うああああああああああああああああんっ!」

大声を上げて泣き出した。

「な、なのは、落ち着け……!」

「うあああああああんっ! おにーちゃんのばかあああああああああ

あああっ!」

恭也がこの世で最も恐ろしいことの一つは、なのはに泣かれる事である。

なのはは基本的に泣くことは少ない。特に、嫌なことがあつて大声を上げて泣く、というのはほとんどしない。

その彼女がこんな風に痲癩を起こしたように泣きじやくるといのは本当に今まで数えるほどしかなく、それは恭也にとっては超が幾つも付くほどの緊急事態だ。

突然訪れた危機に、恭也は顔から血の気を引かせる。

(ど、どうすればいい!?)

「うあああああんっ! あああああああああああんっ!」

「なのは、すまない、俺が悪かった、悪かったから!」

「わ、悪いような事してたんだ! うううううっ! うああああああああああああんっ!」

なだめようと声をかけても効果無し、どころか逆効果。

「……な、なのは。なあフェイト………っ!?!」

助けを求めるようになのはの隣のフェイトへと視線を移せば、

「………っ、っ」

「フェ、フェイト……!?!」

(……なぜこっちまで!?)

フェイトまで、その瞳から大粒の涙を幾つもこぼしていた。

声押し殺し、しかしこらえきれずに嗚咽を上げ頬をぬらすフェイトの姿は、こちらもなのはと同様とてつもない罪悪感を恭也に与え

る。

「まずい、とてもまずい。」

「しかし、一体どうすればいい？」

「そもそもなぜ二人が怒り悲しんでいるのかが、恭也にはよくわからない。」

「ドアの前にいたということは、さっきまでの声を聞かれていたということだろう。」

「若い二人に聞かせる類の声では確かになかったろうが、しかし当惑するのならまだしも、なぜ今、泣きじやくるのが理解できない。」

「な、なんだ、何が嫌だった？　なのは、フェイト、さっきのあれは」「うああああああああああああああああんっ！」

「……………っ、うっうううっ！」

「さっきのあれ、という言葉に反応してさらに泣き出す二人。」

「なんだ、一体どんなミスを俺は犯した、八方ふさがりで固まる恭也。」

「助け船は、意外なところから来た。」

「だ、だめですよ、こんな状態でさっきの事を蒸し返しても余計こじらせるだけです！」

「恭也の隣にたたずんでいた守護騎士が、念話で語りかけてきたのだ。」

「え、そ、そうなんですか？」

「そうなんです！　…………あ、駄目です、こっちを見ないで下さい！　その娘達の方だけ向いて、私との会話はこのまま念話で！」

「な、なぜ？」

「なぜって…………。ここで私と親しくしてる風を出したら、もう本当にどうしようもなくなっちゃいますよ！　……………あ、も、もしかして、この娘達がなんで泣いてるか、わかってないんですか？」

「恥ずかしながら…………。」

「え、ええええ…!?!　わ、わかりました。ええっと、そしたら、ええっとえっと」

「驚きを口にした後、彼女はどうしようかしらと呟く。」

「どうやら、打開策を練ってくれているらしい。」

(……この人)

お人好し、なのだろうか。

なんとなくどうもそんな気がしていたが、そう言う事らしい。彼女は泣きじやくるかつての敵二人を前に、どうにかその涙を止めようと考えている。

今ここで彼女が慌てることなどないはずなのに、どうやら真摯に二人の心情を慮ってくれているらしく、どうしようどうしようと切羽詰まったような呟きを幾度かこぼした後、

『……そうね、そうです！ いいですか？ もう、何も言っではいけません！』

『え、えっとそれは……』

『代わりに、しっかりと抱きしめてあげて下さい！ この娘達がこんなに貴方を慕っているなら、それがきつと一番です！』

そう言い切った。

『わ、わかりました』

その言葉に従い、恭也は床に膝を突き高さを合わせ、二人を纏めて少し強めに腕の中に抱いた。

「ううううっ！ ……うううううううう」

なのはは少しだけ抵抗するように体をよじらせたが、

「……うう、ううううう」

やがて、大人しくなった。

「……っ、……」

フェイトも最初は身を固くしたが、なのはほとんど同じタイミングで、力を抜いて恭也の胸に体を預ける。

(落ち着い、たか?)

恭也はとりあえず、安堵の息を吐いた。

『いいですか！ このままキープです、キープですよ！ 泣き止むままでこのままです！』

『は、はいっ』

その言葉に従い、恭也は姿勢をそのまま維持する。

『泣き止んだら、優しく、ゆっくり、さっきの事を説明して上げてくだ

さい。ストレートに言っちゃ駄目ですよ！ 最大限オブラートに包んで、かつ誤解を与えない言い方で、です』

『わかりました。……なんか、すいません』

『え？ あ、あー、いえ、私にも責任がありますから……というか、私に責任がありますから』

『そんなことは』

『そうなんですよ』

『……お優しいんですね』

『え、い、いえ……』

そんな彼女の様子に、やはり疑問がわく。

こんな人が、果たして主に破壊の力を振るわせるために魔力蒐集などするだろうか？

主もその後すぐに命を落とす、という事もあるのにだ。

(……そんなわけがない)

何か、事情があるのだ。

恭也は強くそう思った。

やがて、なのはとフェイトから漏れる泣き声がなくなった。

「……なのは、フェイト、聞いてくれ」

「……」

「……」

返答はないが、拒否をしている様子もないようなので、説明を開始した。

「えつとな」

恭也が自閉モード解除のために彼女にやったのは、物理的な刺激によるアプローチだ。

だが、もちろん痛みを与えるものではない。

むしろその逆だ。

恭也の学んだ御神不破流は、暗殺などを旨としている。

その関係で、拷問と籠絡のための技も磨かれた。今回恭也が使ったのは、その後者である。

平たく言ってしまうえば、房中術の一種だ。恭也が父の残した書を元

に、それを身につけたのはつい最近のことである。

拷問の技が苦痛を与える物ならば、籠絡の技は快樂を与える物。快樂。

気持ちが良い、刺激だ。

刺激であることには変わりはなく、かつ、闇の書側もまさかそつち方面まで鈍くするような仕掛けは施していないのではないか。そんな予想を元に、もしかしたらいけるかも知れないとやってみた次第である。

効果は、思いのほか絶大だった。

結果として彼女は反応し、なんとか言葉を伝えることが可能になった。

だがすぐに自閉モードに戻ろうとしたため、恭也もその度また技を使用。

それを繰り返し、その間に出来る限り説得を試みた結果、なんとか彼女はとりあえずこちらの話を聞くだけは聞く……と言ってくれらるまでになった。

あの声はそうした間に彼女があげた物である。

そしてもちろん、そもそも、快樂刺激を与えるとは言っても、何も直接的な性刺激を行ったわけではない。

言ってしまうと、ツボを押すマッサージと同じような行為だ。それも恭也は丁寧に配慮し、背中という効果は薄いながらも一番問題がなさそうな部位だけを刺激するに留めた。

と、このような話を籠絡、などの部分についてはなるべく伏せつつ、マッサージのようなものという事を強調して伝えた。

「ほんとに背中くらいですから、それ以外にはどこも。あんな声あげちゃいましたけど、ほら、肩とか揉まれて気持ちいいとちよつと声出ちゃうじゃないですか？ あれの少し大げさなバージョンみたいなものですよっ」

途中からは状況を慎重に見極めつつ、守護騎士の彼女も恭也の援護に回ってくれた。

その甲斐あってか、

「……わかり、ました」

なんとかなのははそう言ってくれ、フェイトも同様に頷いた。

「ご迷惑をおかけしました」

「ごめんなさい……」

「すいませんでした……」

恭也、なのは、フェイトはそう言って、守護騎士の女性に揃って頭を下げた。

「い、いいいですよそんな、気にしないで下さい！」

彼女は両手を振ってそう言う。

ともあれ、先の騒動は一応の落着をみた。

「……さて、すいません、お待たせしましたが、本題の方、いいですか？」

「あ、……はい」

本題、闇の書事件についてだ。

「なのは、フェイト、頼んだぞ」

恭也はそう言つて二人の背を押した。ここからは、なのはとフェイトが担当することになっている。

「うん」

「はい」

二人は恭也に返事を返すと、一步前へ進み、

「あの、さつきは本当にごめんなさい……。私、高町なのはって言います」

「私は、フェイト・テストアロッサです。すいませんでした……。それで、えつと、まず、お名前を聞かせてもらつてもいいですか？」

最初に、そう言った。

名前。

そう言えば、恭也も聞いていなかった。と言うか、聞く暇がなかったというのが正しい。

「ヴォルケンリッター、湖の騎士、シャマルです」

シャマル、それが彼女の名らしい。

シャマルは名乗った後、恭也に視線を向けてきた。

「あの……貴方の名前は、確か……」

「あ、すいません。申し遅れました。俺は高町恭也と言います。この子の、なのはの兄です」

問われ、少し慌てて恭也は返事を返した。ここは自分から名乗るべきだったな、無礼になってしまったと、胸の中反省する。

「なのはちゃんに、フェイトちゃんに、恭也さん、ですね。……皆さん、すみませんが、私は仲間や主の事については一切何も言う気はありません」

堅い口調でシャマルはそう言った。

「いえ、いいんです。とにかく、私たちの話を聞いてください。もし答えられることがあったらそれだけでいいんです」

「……………」

無言でゆるゆると、一応は頷いたシャマルになのはは続ける。

「守護騎士さん達は、書の完成のために魔力蒐集を行っているんだと思いますけど……」

「えっと、これは間違っていないですよね？」

「……………」

フェイトの問いかけに、シャマルは無言。なのはは少し困ったような表情を浮かべた後、さらに続ける。

「でも、それって主さんのためにはならないですよ？ それなのになんで主のためって言って魔力蒐集をするのか私たちにはわかりません」

「はや……主のために、ならない？ そんなことは……」

なのはの言葉に今度は口を開き、異を唱えたシャマルに、フェイトが言う。

「だって、今の改変されてしまった書は、魔力蒐集が完了して完成したら、ただ無差別に破壊の力を振るうだけの存在のほずです。それが一体何の役に……？」

「……………え？」

現在の闇の書は、完成させても自由に魔法が使える代物ではなく、ただ主に無差別に破壊の力を振るわせるだけだ。到底何かの役に立

つものではない。少なくとも、主のためにはならないはずだ。

「それに、最終的には主さんの命まで奪っちゃうのに……。だから、これじゃあ完成させたところで主さんのためになんかならないんじゃないかって」

なにせ、なのはの言った通り、今の書は最後は主をも喰い殺してしまふのだから。

追い打ちのような言葉に、

「……………」

シヤマルは、沈黙で答えた。

恭也は一瞬、また自閉モードに入ってしまったのかと思ったが、

「シヤマル、さん？」

どうやらそういうわけではないらしい。

なのはに声を掛けられたのにも気付かず、シヤマルはまるで頭痛を抑えるように自らの頭を両手で抱えると、

「そ、んな、こと……………」

そう呟いた。

こちらの言い分が信じられない。そういう反応だろうか。

しかし、

「そん な、 そん な こと …… そん な こと ……………… わかって、ま
す」

彼女は続けてそう言った。

「わかってるって……。シヤマルさん、でも」

「じゃあ、いいんですか？ あなたたちの主が命を落としても……」

「い、いいはずないじゃないですか！ そんな、そんなこと、でもそうしなきゃ……。あれ、でもそうしたら……。あれ、あれ、なんで、なんで私……………」

(……………なんだ?)

様子が、おかしい。

「そう、そんなこと、書が改変されてて、そんな存在になってることくらい書の一部である私たちが一番よく知ってて、でも、わたし、あれ、

そんなの知らない……そんなの……だって知ってたら魔力蒐集なんて……でも、あれ……私は知ってる……なんで、あれ……」

明らかに今までの理性的な振る舞いとは違い、言葉の前後が繋がらなくなってきた。

有り体に言って、混乱している。

見れば、眼の焦点すら危うくなっている。

「シャ、シャマルさん？」

「大丈夫ですか？ シャマルさん？」

なのはとフェイトがそう声をかけるが、シャマルは虚ろげにつぶやき続ける。

「私、私なんで……なんで、あれ……そうだ、もう闇の書は……壊れて……私……はやてちゃん私……」

そんな彼女の手を、

「落ち着いて下さい、シャマルさん」

なのはが優しく自らの両手で包んだ。

「どうしてシャマルさんが今そんなに混乱しちゃってるのかはわかりませんが、でも、私達にはわかっていられることもあります。それは、貴方が今、一つ確実に間違っているってことです」

「え……？」

なのはは、シャマルの手を握ったまま、至近距離から見つめて言った。

「闇の書じゃ、闇の書なんて名前じゃ、ないでしょ？ ほんとの名前が、あったでしょ？ どうしてその名前と呼んであげないんですか？」

「ほんと、の、名前……？」

「はい。闇の書さんの、ほんとの名前です」

「……わから、ない。そんなの、わからない……」

「忘れちゃってるなら、思い出してあげて下さい。変更される前、本来の姿だったときの、本当の名前を」

「な、まえ。本当の、名前……」

「ゆっくりでいいんです。思い出してあげて。あるんです、ちゃんと、

本当の名前が」

「や、みの、しよ、じゃなくって……………」

「はい、大丈夫、大丈夫ですから。ゆっくり、思い出してあげて」

(これは、もしかしたら…………)

「恭也さん、これって…………」

「ああ…………」

なんとかなるかも知れない。

通じ合おうとするなのはの姿に、恭也とフェイトはそんな感想を抱く。

守護騎士達が書が壊れていたことを知りながら蒐集を続けていたのなら、説得は難しいだろうとされていた。その場合は元より破壊の力を振るうために動いているだろうからだ。

だがもし守護騎士達が、書が壊れていたことを知らずただ主のために純粹に書の完成を目指していたのなら、その主の目的によっては説得の余地がある。

そして現実には奇妙なことに、守護騎士である彼女は様子を見る限りどういうわけか、書が壊れていることを知っていながらも知らなかった、理解できていなかった…………もしくは、なぜか表層意識にその記憶が浮かんで来なかった、という状態のようだ。

詳しい事情はわからないが、これならケースとしては後者に近い。少なくとも完全に前者というわけではない。

まだ説得のしようがある。

そして、彼女の心は、今なのはが開きつつある。

いけるかもしれない。

そう思った矢先だった。

けたたましいアラート音が、部屋に鳴り響いた。

「なんだっ!?!」

発信源は、恭也の持つ、海鳴市駐屯地との連絡用端末だった。恭也は慌てて教えられた操作を施し、スクリーンを展開する。

「恭也さんっ! 緊急事態です!」

すぐにそこには、焦った顔のエイミイが映し出された。

「ああ、どうした？」

「残りの守護騎士三人がまとまって、管理局近くの世界に現れました！　そこは文化レベル0ですが、巨大なリンカーコアを持つ指定保護魔法生物がいます。おそらくはそれを狙って……！」

「……っ、そうか」

「ええ、それで……えっと、そこになのはちゃんとフェイトちゃんもいますよね？　端末の電源切られたらしくて連絡できないんですけど……ていうかあれからどうなったのかもわからないし……」

「ご、ごめん、エイミー！　なのはも私も一緒にいるよ！　い、一応あれは……その……解決したから……ごめんなさい」

バツが悪そうに、しかししっかりとフェイトはエイミーに恭也の端末越しに謝罪を述べた。

「いやいいのいいの、何もなかったならそれで！　ていうかすみません恭也さん、私のミスで二人がそっち行っちゃって！」

「あ、いや、構わない……それより守護騎士の話だ」

まだ蒸し返すには若干危険な話題であるし、守護騎士の話を優先するべきであるというのも事実なため、そう言って恭也は話を変える。

「そ、そうですねでした。それですね、ですから三人にはその世界に向かって守護騎士に対応して欲しいんです。結界を張れる武装局員の集合は厳しいですが、本局から三人転送する程度なら、十分間に合いますから」

転送ポートにはすでに連絡をしてあるので、向かってもらえばすぐに、そう続けるエイミーの台詞をフェイトが遮った。

「エイミー……、なのはは行けないよ」

「え？」

「なのはは今、守護騎士の説得の真っ最中で、それが上手くいきそうなの。守護騎士の様子も少しおかしくて中断できる感じじゃないし、だから今なのはを出勤させるわけにはいかない」

「あ、そっか、そうなんだ……それじゃ駄目だよ……でもどうしよう、クロノ君も今は本局の用ですぐに出られる状態じゃないし」

困ったように自らの唇に手を当て、考え込むエイミー。

「エイミイ、私と恭也さんの二人じゃ駄目かな？」

「……相手は三人、こっちは二人、か」

「私が恭也さんの足を引っ張らなければ、対応できると思う」

「……恭也さん、どうします？」

エイミイが意見を恭也に求める。フェイトも視線を向けてきた。

恭也は、口を開く。

「いや、駄目だ。……俺一人で行く」

「え？」

「ちよ、何言ってるんですか!？」

恭也は、当惑するフェイトと慌てるエイミイに、落ち着けと言うように手をかざす。

「先の理由でなのはは行けない。そしてフェイトにも、やってもらわなければならない事がある」

恭也はフェイトを見つめる。

「恭也さん……？」

「フェイト、君は今すぐ、海鳴市駐屯地へ向かえ」

「エイミイのところへ、ですか？」

「ど、どうしてです？ こっちは別に……」

疑問の声をあげるフェイトとエイミイに恭也は気持ち早口で説明する。

「警戒のし過ぎかもしれないが……畏かもしれないからだ。残る守護騎士三人がまとまって管理本局周辺世界に現れた。そうすればもちろん管理局はそこに注意を向ける。その間に……主が駐屯地を襲撃する。そしてこちらの機材、人員を拿捕し、奪われた守護騎士の奪還を計る……あり得ない話じゃない」

「っ！」

「なっ?! いやでもそれはちよつと穿ち過ぎじゃ……」

「もちろん、俺も考えすぎだとは思う。そもそも、もし仮に駐屯地の存在、およびその場所が相手方にばれていたらこんな事があり得る、程度のことだろう。ただ、………仮面の男のことを考える」と

「あ……」

その言葉に、虚を突かれたように固まり、顔から血の気を引かせるエイミー。

「あいつは前回、管理局に全く補足されることなく出現しこちらの妨害を働いた。あいつが書の主側についていると考えると、駐屯地の所在がばれているなんて事があっても不思議じゃないし、またいかなせキュリテイの張つてあるその駐屯地と言えど、もしかしたらがあり得る」

補足できなかったという過去の事例から、仮面の男の脅威をある意味一番よく知っているエイミーには、その言葉は説得力と信憑性があつたらしい。

「……ごめんなさい、こつちに今、書の主とあの仮面の男に襲撃をかけられたら対応できない可能性が高いです。主に関してはまだ何もわかってませんが、魔導師として優れた資質を備えた人間が選ばれますから……、そんな人と仮面の男が同時に来たりしたら……」

苦しそうに、エイミーはそう言った。

「いや、それは仕方ないさ。だから、フェイト、君には海鳴市に戻ってもらい、万が一に備えてエイミーと駐屯地の護衛を頼みたい。アルフもいるだろうし、君ならば機を見て退却なりなんなりできるだろう」

「……で、でもそうしたら恭也さんはお一人で騎士三人を！」

「なに、まあ何とかしてみせるさ。場合によっては粘ってクロノや他の武装局員の応援を待つことだってできるだろう。やりようはある」

恭也は安心させるようにフェイトの頭を少し強めに撫でた。

そして、言う。

「師匠を信じろ。戦えば勝つのが御神流だ」

「……」

フェイトは少し逡巡を見せた後、

「……はい」

恭也の眼を見て頷いた。

「武運を、マスター」

「ああ。君も、気をつけてな」

恭也はもう一度、労るようにフェイトを撫で、そしてエイミーに言う。

「そういうわけで、そっちにはフェイトが、守護騎士の元へは俺が行こう」

「……わかりました、お願いします。……恭也さん、ご無理だけはどうか」

申し訳なさそうな顔のエイミーに、恭也は安心させるように頷く。

「ああ、引き際はわきまえているから大丈夫だ。それに、脚には自信がある、その気になれば逃げ切れるさ」

恭也の桁外れの機動性を思い出したのか、エイミーは少し笑って言う。

「そうでしたね。……恭也さんに追いつける相手なんて、いませんよね」

恭也もそれに笑みを返し、

「それじゃ」

フェイトと共に部屋の出口へ向かう、前に、なのはの方へ視線を向けた。

『お兄ちゃん』

気付いたのか、なのはの声が届く。それが念話だったのは、普通の会話はシャマルに集中しなければならぬからだろう。

『……行くんだね』

『ああ。シャマルさんの事は任せたぞ、なのは』

『うん。……お兄ちゃんも、お兄ちゃんも……』

恭也が、騎士三人が待つ戦地へ一人で行くことも聞いてはいたのだろうが、なのはは、

『気を、つけてね。お兄ちゃんなら大丈夫だって、信じてる』

そう言った。この言葉を出すまでにどれだけなのはの中で葛藤があったのかはわからないが、それでもそう言ってくれた。

『もちろんだ。ありがとう、なのは』

妹の声援と信頼ほど、兄の力になる声はない。

恭也は力強い足取りで、

『フェイトちゃんも、気をつけてね。何かあったら無理しちゃだめだよ』

『うん、ありがとう。でも無理しちゃ駄目っていうのは、なのはに言われたくないかな』

『む、うう……』

『ごめんごめん、それじゃ、行ってくるね』

フェイトとともに部屋を後にした。

「手早く済ませるぞ。ここは本局に近い」

堅い荒野に降り立ち、シグナムは言った。

「承知している」

「わあつてるよ。それにはとにかく早く、今回の獲物みつけねーとな」
言葉を返したザフィーラとヴィータに領き、シグナムは辺りを見渡す。

「巨大なリンカーコアを持つ生物で、戦闘力も高い。加えて、保護生物らしくてな、管理局の監視の目も厳しいはずだ。正直あまり狙いたくはない相手だが」

「そんなこと言ってられねえ……!」

「その通りだ」

ヴィータの意志の籠もった力強い声に、シグナムは領いた。

主、八神はやてが倒れた。

すぐに病院に搬送したところ、脚の麻痺が広がっているのが原因と診断され入院が決まった。

闇の書の浸食によるものだ。

もう、時間がない。

「管理局の連中が来たら、あたしとザフィーラで足止め。その間にシグナムが蒐集、だよな」

「そうだ」

「……なあ、管理局のやつとつかまえば、シヤマルを」

「……駄目だ」

ヴィータの言葉を遮って、シグナムは言う。

「今、管理局と本格的にやりあうことはできません。そんな時間はない、わかってるだろう」

「だけどっー」

「ヴィータ、将もお前と気持ちは同じだ。察してやれ」

ザファイラが、なだめるようにヴィータの肩に手を置いた。

「……わかったよ」

ヴィータは苦しげな表情で言う。

シグナムは、すまないと言うようにザファイラに視線を向ける。ザファイラも、気にするなど言ったふうの一つ頷いた。

シグナムとて、今すぐ管理局に襲撃をかけ、捕らわれたシヤマルを救出したい気持ちは抑えがたいものがある。

だがヴォルケンリッターを束ねる将として、主を守る騎士として、その選択をとるわけにはいかないのだ。

「シヤマルはとりあえずは無事だ。もし万が一のことがあれば、私たちにはそれがわかるだろう」

「そう、だよな」

先の戦闘で、シヤマルは管理局に拿捕された。

結界を破壊し闇の書も転送させたのは、彼女の最後の抵抗だったのだろう。おかげでシグナム達は蒐集を続けることが出来ている。

「主はやてが書の主として完全に覚醒すれば、シヤマルをこちらに呼び戻すことだってできる。だからそれまでは……」

「……そうだよな、うん……。……なあ、シヤマルを捕まえたのって、さ」

ヴィータは、暗い表情で言う。

「やっぱ、あいつ、かな。あの化けもん……」

「そう、かもしれない。いくらバックアップが本領とはいえ、シヤマルも騎士だ。並の武装局員に遅れをとる奴ではない。であれば、結界内に姿のなかったあの男の仕業である可能性は高い」

「……あいつが出たら、どうする?」

「三人がかりだ。それしかあるまい」

魔法を身につけていることを前提で考えるならば、そうなる。

「まあ、現れないことを祈るばかりだな」

「だな。ほんと、出ないでくれよ、頼むから」

眉間に皺を寄せ、吐き捨てるように呟いたヴィータに、ザフィーラが言う。

「随分と警戒するな、ヴィータ。お前らしくもない」

「うっせ！ ザフィーラはあいつと直接やり合ってねーからそんな事が言えるんだよ！」

そうだな、とシグナムがヴィータの後を継ぐ。

「奴の恐ろしきは直接対峙し、肌で感じないと分かるまい」

「……あいつは、なんつーか、強いっつーかもうこえーんだよ。殺気の鋭さが桁外れで……あいつぜってー気迫だけで人殺せる。とにかくやべーんだ。あの兄妹はどっちもやべーけど、特に兄の方はやべえ」
トラウマにでもなっているのか、ぶるりとヴィータは体を震わせた。

あの男が魔導師でも騎士でもなかった、というのもヴィータがこれほどまでに奴を怖れる一要因なのだろうと、シグナムは思う。

魔法を使って強いというのならわかる話だが、魔法を使わないで魔法を使う者より強い、というのは自分達にとっては非常に不可解な話だ。わけがわからない。

そして、わからないもの、というのは根源的な恐怖を誘うものだ。

「とにかく、手早く蒐集を終わらせ帰還するに限るな」

シグナムの言葉に、ヴィータは大きく頷く。

「そ、そうだな。もたもたしててあいつが出てきたら嫌だもんな」

「……どうやらターゲットはこの近くにはいないようだが」

ザフィーラが辺りを見回しながら言った。

「そのようだ。このまま固まっついても仕方ないな。ヴィータは南へ、ザフィーラは西へ、東と北は私が担当しよう。一旦分かれるぞ」
「あ、ああ」

どこか不安げに返事を返すヴィータ。シグナムは嘆息を一つこぼしてから言う。

「……安心しろ。そこまでターゲットの生息範囲は広くない、分かれると言つてもなにかあればすぐに再集合できる距離だ」

「べ、別に一人になんのが怖いとか、そういうわけじゃねーよ!」

「そうか?」

「そうだ! あ、あたしだって騎士だ! あいつが出たついでに戦うとなりや……び、びびったりなんか」

「ふむ、見たところ蒐集前のようなだ。間に合つてよかった」

「——っ!?!」

突如響いたその声に、ヴィータは目に見えて体を硬直させた。シグナムとザフィーラは慌てて声の方向へと視線を向ける。

そこには、

「久しぶりだな、シグナム」

「……タカマチ!」

地面に浮かんだ転送用のものと思われる魔方陣と、その上に立つ、以前戦つたときと同様の格好をした男の姿があった。

(まさかこんなに早く……!)

シグナムはすぐにレヴァンティンを青眼に構え、ザフィーラも拳を眼前に掲げ臨戦態勢をとる。

見れば、現れたのは恭也一人。後続が来る様子はない。

「強襲結果を展開できる部隊を送るのではなく、管理局はお前一人を寄越したということか……?」

「まあ、そうだ。部隊一つを送るのにはそれなりに時間がかかるらしくてな。その間に逃げられてはかなわん」

「……だからと言って一人とは、我らも舐められたものだな」

「こちら色々事情があつてな。侮っているわけじゃないさ」

会話を交わしながらも、シグナムは注意深く恭也を見やる。

相変わらず隙は全くないが、しかしなぜかその手には剣はなく、また戦う構えもとっていない上に殺気も放っていない。

(……なんのつもりだ?)

シグナムが訝しげに思っていると、

「お、お前………で、出やがったな!」

やっと硬直から解けたらしいヴィータがそう叫んでから、両手で握るグラーフアイゼンを恭也に向けた。

「出やがったって……、人をお化けみたいに言わないでくれるか」

「うっせー化け物！」

「……ひどい言われようだな」

ヴィータの言葉に、恭也は苦笑を浮かべ、

「い、いいぜ。やるんだろ、やってやるよ！ 今度はこの前みたいにはいかないかな！ おめーがいくら化け物だからって騎士三人相手に勝てるだなんて思うなよ！」

「卑劣との誹りは甘んじて受けよう。だが、今の我らには騎士の誇りよりも守らねばならないものがある。悪いが、正々堂々とは相手してやれん」

「……行くぞ」

さらに続いたヴィータ、シグナム、ザフィーラのそんな言葉に対し、「待った待った、待ってくれ」

そう言つて両手を挙げた。

「タカマチ、なにを……？」

「和平の使者は槍を持たない、だったか？」

「そ、それがどーかしたかよ？」

その言葉は以前、ヴィータが対話呼びかけてきた目の前の男の妹、高町なのはに言い放った言葉だ。

「見ての通りだ。俺は今武器を手にしていない。戦いに来たわけじゃないさ。話し合いに来たんだ」

「……話し合いたと？ 貴様の妹や弟子に言ったはずだ。我らは止まるわけにはいかん。いまさら何を言われようと」

「シヤマルさんは一応、こちらの言葉を聞いてくれているぞ」

「……っ!？」

シグナムの台詞を遮るように放たれた恭也の言葉は、短いながらも衝撃的な内容だった。

捕らわれた仲間、シヤマルが、まさか。

「嘘吐け！ そんなはずがあるか！」

「世迷い言を……！ シヤマルは我らと同じ書の守護騎士だつ！ た
とえどれだけ苦痛を与えられたとしても、敵に情報を漏らすような奴
ではない！」

「ああ、その通りだろう。だから、シヤマルさんからお前達について核
心に触れるような情報はもらっていない。……ただ、こちらの話を聞
いてくれているというだけだ」

「話……？」

「ああ。管理局が調べ上げた、書に関することだ。そちらにとって聞
く価値はあるものだと思うが、どうだ？」

恭也は至って真剣な、真摯な顔でシグナム達を見つめている。

こちらに喋れと言っているのはなく、ただ話を聞けと、彼は言っ
ている。

たしかにそれだけなら、聞いてやらないでもないのだが。

「……悪いが、その気はないぞ」

シグナムはそう言い切った。

「なぜだ？」

「お前は謀り事をするようなタイプではないとは思うがな、お前の話
が仲間が来るまでの時間稼ぎやこちらの混乱を誘うためのものかも
しれんと、私は疑わねばならん」

恭也はその言葉に、眼を伏せて、低い声で呟いた。

「……なるほど」

「っー」

ヴィータが息をのんだ。シグナムも剣を握る手に力をこめ、ザ
フィーラも拳を強く握り締めなおす。

シグナムは思わず辺りの様子を瞳のみを動かして探る。しかしそ
こには特になにが見つかるわけでもない。先ほどまでと変わらない、
赤茶けた荒野が広がる光景があるのみだ。

そう、先ほどまでと、何も変わっていないはず。

だが、それでも。

「では、ここは今から戦場、それでいいんだな？」

目の前の男が発した途方もない殺気は、一気にこの空間の色合いを

塗り替えた。

まるで、違う場所にでも転送されたのでは、そう思わされてしまうほどに。

「ああ……構わんぞ」

そしてそんなシグナムの返答に、恭也は、

「……展開」

左腰に二振りの剣と、その身に軍服じみた黒衣を纏った。

それは疑うべくも考えるまでもなく、デバイスにバリアジャケット。

彼が魔法を身につけたという証左。

「な……お……おま、え……」

じやり、と、音が響いた。

シグナムの隣に立つヴィータが、よろめくように半歩後ずさった音だ。砂塵舞う荒野の中、すぐにそれはかき消えた。

だが、ヴィータの、そしてシグナム、ザフィーラの受けた動揺と衝撃は消えるどころか、冷静に現実を認識するにつれて増大していくばかりだ。

「……それは」

ザフィーラが、低く唸る。

シグナムも続けて苦々しげに言葉を吐く。

「冗談だと、思いたいな……」

「どうしてだ？　なのはやフェイトと言葉を交わし彼らの立ち位置を知ったのなら、俺が管理局の側につき……魔法を身につけることくらい予想していなかったわけじゃないだろう？」

「あ、あたりめーだ！　それくらいわかってた！」

「ではなぜそれも驚く？」

「なぜって、だってお前それ……——あたしらと、同じ、ベルカ式じゃねーか！」

恭也の言葉通り、シグナム達とて恭也が魔法を身につけていることくらいは予想していた、というよりはそれを想定して行動していた。だから、それについて驚いたわけではない。

問題はヴィータが吠えるように言ったとおり、恭也がセットアップした際に現れた魔方陣、それが正三角形をとっていたことだ。

それは恭也が使う魔法が、デバイスが、ベルカ式である事を意味する。

「ああ、そうだったな。お前達と同じだそうだな。まあ、だからどうと言うことでもなからうが」

恭也は本当にこともなげにそう言うが、しかしシグナム達にとってそれは瑣末事でありはしない。

ベルカの質を、特性を、向き不向きを騎士として随までよく知る自分たちだからこそ。

この男に、ベルカは、まずい。

それが、痛いくらいにわかってしまう。

最悪と言つていいだろう。

なにせ近接戦闘に重きを置き魔法によって肉体や武器を強化し戦うことこそ本領であるベルカと、この男との相性は、最高とすら言えるのだから。

「飛ぶぞっ！」

シグナムは鋭く指示を出した。すぐさまそれに従ったヴィータとザフィーラ、そしてもちろんシグナム自身、地を蹴り飛翔魔法を発動、空中にその身を舞わせる。

そして下方、地面に立ったままの恭也に対し各々武器を構えた。

(奴の速さは身をもって知っているが……空中戦であれば！)

いくら地上で速かろうと、魔法を覚えてそう間もないであろう今、同等の速度が飛翔魔法を使った空戦で出せるものとは思えない。

シグナムの考える前回の敗戦の原因の一つは、室内戦であったこと、そしてその低い天井のせいで飛ばずに戦わなければならなかったことだ。そうでなければ前回はそもそも戦いにすらならず勝利を得られていたはずなのだ。もともと、戦っている最中はその殺気と剣撃に当てられ、どうしたってその場で戦わざるを得なかったのだが。

だが、今回は同じ轍は踏まない。

まさか飛べないと言うことはないだろうが、それでも空中戦なら自

分たちに分があるはずだ。

加えてこちらは騎士による三人がかり。

油断はもちろん禁物だが、何も絶望的な状況などではなく、普通に考えれば自分たちが圧倒的優位にいるはずだ。

「……今度は空で、か。いいだろう」

届いたそんな声に、シグナムの背中にちりちりと焼かれるような感覚が奔る。

(……くっ！)

それは紛れもなく、この状況下で感じるはずのない、追い詰められたような焦燥感だ。

振り払うように、シグナムは叫んだ。

「来いっ！ タカマチ！」

「来いっ！ タカマチ！」

響いた声に、

「行くぞ、魅月」

『はい、勇猛なる主よ』

「眩体……！」

恭也は魔力を漲らせ強化した身で強く地面を蹴って応えた。

(まずは攪乱だ)

正面にシグナム、左にヴィータ、右に獣の耳を生やしたアルフの話ではザフィーラというらしい男がいる。

向かう先は、左。しかしヴィータの近接攻撃範囲には入らない程度の位置だ。

「なっ！ てめっ！」

空に身を躍らせた恭也は、そこでも足下に一瞬だけ魔法による足場を生成、ステップを踏み、今度は三人の後方へ回る。

同じように今度も攻撃には入らず、また生成した足場の上でステップ。彼らの下方へ。そしてそこでも足場を作ってステップ。潜るようにして、こちらの動きに翻弄され身を固くする三人の前方へと躍り出る。

「貴様っ！」

シグナムが上段に構え、斬りかかってくる。しかしこれにも恭也は応じず、その場でまたしても足場を生成、それを強く踏んで素早く身を翻し回避する。

右、左、上、下。

360度、恭也は三人の回りを高速で舞い続けた。

その動きを追いきれず、戸惑うように武器と視線を彷徨わせる騎士三人。

おそらく、敵方は空中戦であればこちらは速く動けないと思ったのだろう。魔法を身につけて間もなければ、少なくとも地上ほどの機動は出来まい、と。

結果的に言えば、それは間違いだ。

たしかに飛翔魔法を使っていればそうなたろう。だが、恭也は徹底した鍛錬によりかなりのレベルにまで達した足場生成魔法により飛ぶのではなく跳ぶことで、今や地上とさして変わらぬスピードを実現している。

むしろ、さらに言えば、地上よりも空中の方が今となつては恭也にとって都合のいいフィールドだ。なにせ、空中であれば敵の回りを全方位跳びまわることができる。

戦略的自由度で言うならば、地上よりも上だ。

かつては、室内であれば床・壁・天井すべてが足場……であったが、今ここに至っては、掛け値無しにすべての位置、場所が足場だ。

(——これで主導権は、こちらが握らせてもらった)

その代償を、払ってもらおう。冷徹な眼で三人を見据え、恭也は標的を定めた。

「私が動きを止める！ 援護を！」

それはそう叫ぶ、司令塔であり、そしておそらく最も手強い相手。

「レヴァンティーン！ カートリツジロード！」

仲間に指示を飛ばしつつ、その手に持つ剣を蛇腹状の姿に変えんとカートリツジロード動作を行う、シグナムだ。

シグナムの左方にいた恭也は、そこで脳のスイッチを切り替えた。

御神流奥義 神速

世界がモノクロに染まり、空気がその質感を重く変化させる。眩体により強化された体で足場を蹴り、恭也はその中を跳ぶ。

シグナムの背後に回り込み、そこで素早く新たな足場を作りそれを使って体に急停止をかけ、そして両手に握った剣を構える。すでに二刀は抜き放つてある。

まだ神速は解けない。

「装填」

『装填』

恭也の声に応え、そして恭也の思考速度に合わせ高速化した魅月がコッキング動作の後、空葉莢を排出した。

シークレットカートリッジロード。

なのは達に言わせれば反則技であるこれは、今相對する騎士達はもちろん知らないはずだ。

つまり、完全な不意打ちとなる。

世界に色が戻った。

「……っ!？」

シグナムは僅かに硬直する気配を見せた。背後に突然現れた恭也の気配と巨大な魔力に、だろう。

だが、もう何をするにも遅い。

今回は、シャマルの腕が来ることもない。

恭也は構えた二刀を、同時に、交差するように振るった。

御神流奥義 雷徹・轟

シグナムの背中に、両の魅月が喰い込む。

「——あああっ!!」

絞り出されたような悲鳴と、爆砕音のような轟音はほぼ同時に上がった。

雷徹・轟。二刀を同時に振るい強力な徹を叩き込む御神の奥義雷徹を、魔法で強化、進化、昇華した近接技だ。

カートリッジロードにより晃刃の出力を大幅に向上、それにより籠める徹の力を爆発的に跳ね上げている。

虎切・飛や射抜・奔のような遠距離攻撃でこそないが、しかしその

分、威力自体は申し分ない。

徹は内側に衝撃を通すというその特性のためバリアジャケットやシールド等の防御に対し非常に有効であり、その発展系である雷徹を、さらに魔法の力で劇的に強化したこの雷徹・轟は、結果的に、魔導師相手には凶悪とすら言える相性の良さから比類なき破壊力を発揮する。

これの直撃に耐えられる者などほとんどいないと、魅月も太鼓判を押した。

そんな技を恭也は、神速で死角をとつてからのSCLによる急襲という、盤石の組み合わせで使用した。これは、守護騎士の将シグナムがそれだけの強敵であるからこそこのことであるが、

「ふむ……」

『お見事です、主よ』

その結果は、恭也の思うよりも上の物だった。

「な、……う、嘘、だろ……」

「将が、まさか……」

ヴィータとザフィーラから、驚愕に満ちた声上がる。

「……シグナムが………一撃、つて」

恭也の眼下、赤茶けた堅い荒野の上には吹き飛ばされまともに受け身もとれず墜落し、二、三度派手にバウンドして最終的にあお向けに倒れ伏し、そしてそのまま動かないシグナムの姿。

騎士の意地か、剣だけは手放していないがしかし微塵も身じろぎせず、また目も閉じられており意識があるとは思えない。恭也の腕に返ってきた手応えからしても、少なくとも、もう戦える状態ではないだろう。

まずは、一人。

それも、一番厄介な相手を潰せたことになる。

「……てんめええええええええええええええええええええええつ!!」

だがもちろん、相手はまだ二人残っている。

「鋼のツ軛ッ!」

「……つと」

恭也の元に、半透明の白い結晶のような素材で出来た巨大な棘が地面から次々に突き立ってくる。

即座に高速機動を再開、殺到する棘の群から身を躲す。

「ずいぶんな攻撃だな。串刺しにするつもりか」

『いえ、主、これは攻撃魔法ではありません』

「む、そうなのか？」

『はい。これはベルカのバインド魔法の一つです』

「バインド、捕縛魔法……？ ……これが？ いや、一体どうやって捕縛すると言うんだ、どうみても串刺しにかかってくるぞ」

『ですから、相手を串刺して捕縛するのです』

「……なるほど。恐ろしい手法だな」

喰らったらかななか厄介そうだ。

とは言え、実際のところ棘は恭也にしてみれば緩いスピードであるため回避は容易だ。当たることはないだろう。

「む」

突然、大きな魔力反応が現れた。考えるまでもなく、それはカートリッジロードによるものだ。

こちらを攻撃、否、捕縛しにかかっているザフィーラにその様子はない、と言うより元より彼はデバイスを手にしていない。

であれば、残りは一人しかいない。

「——おらあああああああああつー！」

雄叫び一閃、身に纏う赤いドレスをはためかせ、ヴィータがこちらにハンマーを上段に構え突っ込んでくる。見れば、手に持つハンマーの形状が変化、まるで推進エンジンのように後方から光を放っている。

重厚な唸りを上げる殺人的な勢いを孕んだその特攻は、一見しただけで大した破壊力を誇っているであろうことが十分にわかる代物だった。

「ぶつとべえええええええええええええええええつー！」

(だがまあ、当たらなければ、という奴だな)

恭也の身を喰らわんと一気に一直線に向かい来たその重撃に、恭也

は強く足場を蹴って自ら飛び込んでいった。

そしてインパクト寸前の距離で身を屈ませ、ハンマーをかすめるように躲し、

「…………ぐあっ！」

すれ違いざまに斬りつける。相当な相対速度の乗った一撃に、ヴィータは苦悶の声を上げ大きくよろめいた。

止めを刺すため、追撃の刃を奔らせようと魅月を振りかぶる恭也。

「む…………っ！」

「おおおおおおおおおっ！」

そこへ体を割り込ませるように、蒼い影が飛び込んで来た。

「ザファイラッ！」

「下がれ、ヴィータッ！」

ヴィータは一瞬迷いを見せたが、すぐに後方の空に飛ぶ。

見るからに防御の堅そうな彼が前衛、ヴィータが後衛として体勢を立て直す気なのだろう。

「はあっ！」

恭也の前に残ったザファイラは、お前の相手は自分だと言わんばかりに裂帛の気合いを携え殴りかかってきた。

(連携をとられると厄介だな…………)

ザファイラの後ろに眼をやれば、鈍く光る球を取り出すヴィータの姿がある。あれで援護をかける気だろう。奇しくも、なのは・フェイトがとった戦法と同じだ。

対処できないわけではないが、まだ状況の整っていない今のうちに、さっさと片方を潰してしまった方がいい。

そう判断した恭也は、ザファイラの太く力強い腕から繰り出された右ストレートを半身に体勢を変えて躲すと、そこからまず左の魅月で胸をすくい上げるように一撃。

「が……………」

のけぞった所に、腹へ右の魅月で突きを加える。

「…………ぐっ！」

一転して今度はくの字に身を折るザファイラ。

そこへ左の魅月で肩口に水平斬り。

ザフィーラの体が強引に回され、背中が恭也に向けられる。この隙に右の魅月を素早く納刀。

そこから、間髪入れずにSCL。

膨大な魔力をほぼノータイムで身と刀に宿し、放つは、

御神流奥義 虎切・絶

超高速の抜刀術。

斬れぬ物など何もない、そんな意志を体現するかのような鋭く精錬で歪みのない白い軌跡が奔った。

「ぐううっ!!」

バリアジャケットとその内の体を切り裂かれたザフィーラは、きりもみしながら落ちていく。

虎切・絶。影刃強化の虎切・飛に対し、こちらは晃刃強化を施した抜刀技であり、その切れ味は魔法を併用した奥義の中でも最高レベルだ。

「ザフィーラアアアッ!」

ヴィータの絶叫が響く。

その声に反応してか、ほんの僅かにザフィーラの落下スピードが緩まった。

(まだ意識はあるようだな……)

三連撃からの抜刀奥義を身に受けてなおまだ気を失わないとは、アルフの話によればベルカでは使い魔を守護獣と呼ぶらしいが、なるほどその名に恥じぬ大した耐久力だった。

恭也は袖口から、飛針を右手に四本ほど取り出した。

振りかぶる。

「てめえええええやめろおおおおおおおッ!!」

恭也の動きを阻止せんと、ヴィータが鉄球を手に持つハンマーで打ち出した。

しかし、間に合わない。

恭也は、握る飛針をまとめて眼下のザフィーラに投げつけた。

その動作の間のみ、眩体の維持に使う魔力を増加させその効力を増

強、また飛針も晃刃で硬度と鋭度を強化。

音速を超える速度で放たれた、容赦のない、小さな鋼の槍がザフィーラの体を捕らえた。

一瞬の間を置いて、派手な音が響く。

ザフィーラの巨体が、地に落ちた音だ。

彼もまた、シグナムと同様、幾度か体を跳ねらせた後、動かなくなつた。

恭也はそれを視界の端で捕らえつつ、自身に迫つた鉄球を斬り落とした。

これで二人。残るは、一人。

「う、ああ、うあああああああつー！」

絶叫を上げたヴィータは、ハンマーを自身の頭上に掲げるように構えた。

「化けもの、化けものめ……！　ぶっ殺してやるううううううううううううツ！！　アアアアアアアイゼン！！」

『J a w o h l ! G i g a n t f o r m !』

彼女の足下に、正三角形の魔方陣が展開、ハンマーの一部が稼働しコツキング、空葉莢を排出。

膨大な魔力がヴィータの身とその手に持つ武器に宿り、

「……え」

しかし、それが使われることはなかった。

おそらくは大規模な変形を伴った大技でも放つつもりであったのだらうが、彼女がカートリッジロードを始めた時点で恭也もSCLを
行い、そして、

御神流奥義 射抜・奔

彼女が技の準備を終えるより先に、黒い閃光が空を裂いた。

「……——ツ！！」

最早声もなく、技の展開準備中という戦闘において最も無防備な状態の一つと喋っている所を狙われ、まとも防御もできずにそれに呑まれたヴィータは大きく吹き飛ばされた後、そのまま落下。

隙を逃さず、さらに恭也は追撃をかける。

足場を蹴りながら素早く彼女との距離を詰め、落下していくその体に先ほど閃光を放った刀とは逆の方で突進の速度を乗せた刺突を放つ。

御神流奥義 射抜・追奔

「がッ!! ——あ……………」

既に先の攻防で受けていたダメージ、それに元々おそらくはシグナムやザフィーラと比べれば打たれ強いタイプではないのだろう、それを喰らったヴィータは意識を手放したようで、彼女も一直線に仲間二人と同じく荒野にその身を打ちつけ、やがて動きを止めた。

——これで、三人。

恭也は、深く息を吐いた。

そして自らも地に降り立ち、改めて回りを見渡す。

「……………どうにか、なったか」

『(謙遜を)』

眩きに、魅月が言葉を返す。

『騎士三人相手に無傷の勝利。これを誇らずしてどうするのです、主よ』

「……………まあ、かなり必死だったが。不意打ちから一気に畳みかけてもぎとったような勝利だ」

神速にSCL、さらに魔法を組み合わせた奥義。

最初から持てる力を全て出しにいったようなものだ。

「それに、彼らも決して本調子ではなさそうだったしな」

シグナムもヴィータも、以前見た時よりいくらか動きが鈍かった。おそらくはザフィーラもそうだろう。

度重なる蒐集作業と、バックアップのシャマルの不在、この二点から来る蓄積疲労によるものか。

『それでも、ですよ。我が主よ』

嬉しそうに言う魅月。恭也は一つ笑みをこぼしてから、労るように彼女の鞆を撫でた。

「魅月も、本当によくやってくれた。神速についてくるのはやはり負荷が高いだろう」

『それは事実ではありませんが、この身はそんなに柔ではありません。それに、貴方に合わせて自らを変えることは、何にも勝る喜びなので。多少の負荷は、何とすることもありません』

(……頼もしい限りだ)

魅月の率直な言葉に、恭也はそう胸の中、思った。

「さて、それじゃ……とりあえず、三人を拘束しておくか」

さすがにすぐに意識は戻らないだろうし、戻っても戦える状態ではないだろうが、念のためだ。

『はい。しかし主、お疲れなのですからご無理はせずに』

魅月が心配そうに言った。

神速一回、カートリッジは三発使用、ロードはすべてSCLで、魔法を使った奥義を三度。さらに三人相手という精神負担も相まって、疲労困憊とまではいかないが、それなりに鈍い疲れが体の芯にまとりついている。

だが、拘束作業も出来ないほどではない。大丈夫だと、魅月に言ううと口を開きかけ。

瞬間。

恭也はその場から飛び退いた。

鋭い風切り音が唸りを上げて体のすぐそばを通過する。

「……ちいっ！」

続いて、歯がゆそうな男の声。それは、

(……来たか！)

突然現れ、恭也に蹴りを放った仮面の男のものだった。

騎士たちを倒した後も、一応は警戒を解かなかったのが幸いした。心配を読める恭也とて、油断していたら避けられたとは限らない。

心配。

直感に従い、恭也はまたしてもその場から身を跳ばした。

直後、青いリングのようなものがさつきまで恭也の体があった辺りを囲うように出現し、締め付けるようにその半径を縮めた。

バインド魔法。

恭也の背に、汗が伝う。

気付くのが一瞬遅かったら、捕らわれていた。

「……そこだっ！」

意識をまた戦闘用の第一種警戒状態に引き上げた恭也の”心”が、隠れた気配を感じ取った。

こちらを向く仮面の男、その左後方目がけて影刃を放つ。

奔った黒い刃は、仮面の男からその十メートルほどの距離を置いて、何かに阻まれ消えた。

「……規格外の反応速度と身のこなし、そして察知力だな」

その何かが、声とともに姿を現した。

『面妖な……同じ姿の仮面の男が、二人とは』

それは魅月の言葉どおり、最初に恭也に強襲をかけた男と全く同じ姿の男。

「……分身魔法というものはあるのか、魅月」

『いえ、少なくとも私の持つデータにはありません。幻術魔法ならありますが……それはおそらく主であれば気配の有無で見破れるはずですよ。どうですか？』

「少し妙だが気配自体は両方とも確かにあるな……。では、分身でも幻術でもないということか」

「妙だというのは、姿と気配の形がどうも一致しないというもので、気配がないというわけではない。」

両方とも確かに存在する。

つまり、戦うならばどちらとも相手にしなければならぬと言うことだ。

「……なぜ、管理局の邪魔をする。お前たちは何を考えているんだ？」
「時が来れば、いずれわかることだ」

「今はこのまま大人しく帰ってくれ、黒き騎士よ」

恭也の問いに、二人からは答えになっていない答えが返る。

『主……どうしますか』

「残る守護騎士を全員確保できる機会だ。逃すわけにはいくまい」

恭也は刀に手をかけた。

対し、前方の一人は両手を構え、後方の一人はカード型のデバイス

をその手の中に出現させる。

前方の一人が言う。

「お前の強さはわかっていているが、この状況でも退かないつもりか」

「ああ」

恭也は短く答えた。

すると、今度は後方の一人が突きつけるように言葉を放つ。

「五対一、でもか」

「五対一……？」

訝しむ恭也の視界の中、横たわる三人の守護騎士の体が青い煌めきを放ち始めた。

「……まさか」

「そう、回復魔法だ。……いずれ、五対一になる」

(さすがに、まずいな……)

あの三人がすぐに戦える状態まで回復するとは思えないが、それでも長期戦に持ち込まれればいずれそうなるだろう。

こちら時間も経てばクロノや武装局員達の援護を考えられるが、それでも騎士三人と仮面の男二人の相手は辛いものがある。

当然いかな恭也とて、万全の状態ならまだしもこれから五対一に持ち込まれてはかなり厳しい。

つまり、長期戦はやれない。

リスクを考えれば、速やかに片を付ける必要がある。

二人がかりで戦いを引き延ばせばいいあちらに対して、こちらの立場はあまりに不利だった。

(あれしかない、か)

瞬時に考えを巡らせた恭也は決断、腹をくくる。

『主……』

恭也の考えを悟った魅月が心配そうな声を上げた。安心させるように、恭也は彼女の鞆を撫でる。

正直、かなり体に負担はかかるが、仕方ない。

この状況を打開するためには、これしかない。

そしてこれをやるなら、今しかない。

仮面の男が二人、近い位置にいる今しか、ない。

恭也は即座に地を強く蹴り体をトップスピードに乗せ、前方へ躍りかかった。

「……………」

「くるかつー！」

仮面の男二人がそれぞれ迎撃の構えをとる、そのタイミングで、

御神流奥義 神速

恭也は自身の視界を、世界をモノクロに染め上げた。

『魅月、装填』

『装填』

その中で、カートリッジロード。コッキング動作の後、左の魅月から一つ、右の魅月からも一つ、空薬莖が合わせて二つ排出された。

カートリッジ一発分で、眩体を強化。

それにより、恭也は空気の重い神速の世界の中でも通常のように動けるようになる。

だが、魔法を使つてのものとはいえ肉体への負担はかかる。骨は軋み、筋は悲鳴を挙げた。

「くっ」

思わずうめき声を挙げてしまうが、しかしそれでも強い意志で体を動かす。

恭也は疾走、まず、前方の一人に斬りかかる。

刀に籠もる晃刃は、もう一つ分のカートリッジで飛躍的にその効力を増強してある。

右の抜刀からの、背後に回つてのものも含めた軌道の異なる斬撃四連。

さらに、一旦刀を鞘に収めてから、先に斬った跡をなぞるようにもう一度四連。

四連二つからなる八連撃、それを浴びせた恭也は前方の男から離れた。

そしてまた疾走、向かうはもちろん、後方の男。

そこへ、前方の男と同じように四連に次ぐ四連、八連撃を叩き込ん

だ。

御神流奥義 薙旋・舞

神速の中、敵の知覚の外から浴びせる不可避の剣舞。

大幅に出力増強した眩体で強化した体で振るう、同じく大幅に出力増強した晃刃の籠もった刃での斬撃、その数、計十六。

世界に、色が戻った。

「なあっ!？」

「……………ぐあっ!!」

恭也の眼前、二人が苦悶の声を挙げ、膝から崩れ落ちた。

「……………くううっ」

同時、恭也も激しい目眩と吐き気に襲われる。

カートリッジロードで得た膨大な魔力を制御し、奥義と合わせて魔法を行使する。これはそれだけでそれなりに負担の大きい行為であり、それをある種の極限状態である神速の中で行ったとすればこうなるのも自明だ。

故に恭也は、通常のSCLを使った戦法では神速の中で行うのは装填発令から魔力充填までで留め、魔法と技の発動自体は神速を解いてから行っているのだ。

薙旋・舞はその中で例外的に、一貫して神速内で技の発動まで行うことを前提としており、急激な身体的負荷というその性能に比した代償を払うことになる技だ。

考案した当初から、恭也の身を案じた魅月に”よほどの事態でない限り、どうかこれのご使用は避けて下さい”と進言を受けたほどだ。

だが今はきつと、よほどの事態だろう。

そう判断し、恭也は使用に踏み切った。

「ぐ……………、なに、が……………」

「お前、なにをした……………」

仮面の男二人は震える膝でなんとか立つも、しかし受けたダメージは深刻なようでその体は大きくふらついている。

無傷の彼らを同時に、かつ一瞬でここまでの状態に出来たことを考えれば、リスク覚悟でやっただけのことはあると言っていいたいだろう。

恭也は揺れる視界をなんとか制御し、

(あとは、とどめだ！)

『主、あれからの連続は無茶です！　せめて少し間を……！』

「いや、ここで押し切るしかない……！」

さらに、悲鳴を挙げる脳と体に鞭を打つ。

相手は回復魔法を使える、ならば今、勝負を決めに行くべきだ。

一瞬だけ神速に入り、カートリッジを装填、巨大な魔力を得る。さ

きほどの雑旋・舞のためのものも合わせれば、今日で五度目のSCL。

「ぐううう……！」

そこから歯を食いしばり、右の魅月を鞘に戻し、

「おおおおおおおおおっ！」

咆吼をあげ、抜刀を放つ。

御神流奥義　虎切・飛

奔った白刃から放たれたのは、対照的な黒い刃。

高速を纏って前方に向かうそれは、仮面の男二人を同時に呑み込むのに十分すぎるほどの大きさを誇っている。

「……なあああああっ！」

「ぐうううああああっ!!」

夜を塗り込めたような漆黒の三日月に喰われた二人は、大きく水平に吹き飛び、地面の上を転がり、滑り、

「——やつ、た、みたい、だな」

そして動かなくなった。

それを見届けてから、恭也はその場に片膝を突いた。

『主、お体は……!?!』

「大丈夫だ、少し、目眩が、それだけだ……」

『無茶をしすぎです！』

魅月の声を聞きながら、俯き眼を閉じ深く息を吐く。呼吸を整えると吐き気と目眩は収まったが、代わりにひどく頭が痛んだ。

体も鉛のように重い。

『主、安静にしてください。じきに管理局の救援隊が来ます。それまでほ……』

「いや、駄目だ。だからこそそなおさら休んではいられない。万が一があるから、今度こそちゃんと鋼糸で彼らを拘束……」

そう言いながら顔を上げて、

「なっ……!?!」

恭也は絶句した。

「どういう、ことだ……?」

恭也の視界、そこに横たわる人影は、全部で五つ。

数自体は合っている。

合っているのだが。

「あれ、は……」

長い髪を一つくりにした女性——シグナム、赤いドレスを着た少女——ヴィータ、獣の耳をもつ男性——ザフィーラ。この三人は変わっていない。

だが、残る二人、仮面の男が、

「たしか、リーゼロッテと……リーゼアリア……」

少し前に知り合った管理局提督グレアムの、双子の猫の使い魔の姿になっていた。

以前の闇の書事件を担当したというグレアムは恭也、なのはと同じ世界の出身らしく、また恭也にとっては縁深いイギリス人ということで紹介された時は思わず話し込んでしまったものだが、今日の前で倒れ込む二人は、恭也の記憶が正しければその時彼の傍らにいたリーゼロッテ、リーゼアリアと全く同じ姿をしている。

「なにが……」

戦闘が終わり緊張が解けた事と、頭が疲れ切っている事とで状況を把握できず呆然とする恭也に、魅月が言葉をかけた。

『……主、分身魔法はありませんが』

「む……?」

『分身魔法はありませんが、変身魔法ならあります。おそらく、彼らは……』

「……じゃあ、つまりさっきまでの仮面の男の姿は変身魔法で作っていた仮初めの物で……俺はこの二人と戦ったってことで、いいのか

？」

『はい。そうなるかと』

「……なおさら状況がわからなくなったな」

リーゼロットとリーゼアリアは当然管理局の側の立場であるはずで、それがなぜ守護騎士達の蒐集を援護するのか。

「どうなっているんだ、一体……」

ふらふらと立ち上がりながら、恭也は困惑を滲ませた声で呟いた。

第8話 君をさらいに来たんだ

「こんなに早く、事の全てを詳らかにされるとはな……クロノもほとんど助っ人を連れてきてくれたものだ」

グレアムは、苦笑を浮かべつつ言った。

「まさか、守護騎士三人に続いてロツテとアリアまで沈めるとはね」

「提督にしてみたら、都合の悪いイレギュラーでしたでしょうね」

「ああ、まったくだ」

クロノが本局で調査部隊からグレアムに対する嫌疑の報告を受けている間に、事態は急変していた。

捕らえた守護騎士の自閉モードが恭也の技で解除、続いたなのはの説得により、彼女は情報の提供を開始。

その間に、管理局近くの世界に保護生物を狙って、残る守護騎士が全員出現。

恭也が単身でこれを拿捕。

そこに仮面の男が襲撃をかけ、戦闘の末こちらも恭也相手に破れ倒れ伏し——その真の姿を現した。

これらにより明らかになった真実を、今、クロノはグレアムと彼の使い魔たちに突きつけ。

彼らはそれを認めるに至った。

「提督、ロツテ、アリア。わからないわけではないでしょう。あなたたちのやったことは、やろうとしていることは……違法だ」

「そのせいでっ！」

クロノの言葉に対しリーゼロツテは反駁の声を上げた。

「そんな決まりのせいで、悲劇が繰り返されてんだっ！ クライド君だって！ あんたの父さんだってそれでっ」

「……ロツテ」

「……っ」

グレアムの声にロツテははっとした表情を浮かべて押し止まった。

クロノはそれについては何も言わず、座っていたソファから腰を上げると、ドアに向かって歩き出し、彼らに背を向けた。

「法以外にも……提督のプランには問題があります」

そのままの姿勢でクロノは続ける。

「凍結の解除は、そう難しくはないはずです。どこに隠そうと、どんなに守ろうと、いつかは誰かが手にして使おうとする。怒りや悲しみ、欲望や切望、そんな願いが導いてしまう……封じられた力へと」

沈黙が、部屋を包んだ。

ロツテ、アリアは黙して俯き、グレアムも眼を瞑ったまま何も言わない。

そんな彼らに向き直り、クロノは頭を下げ、言う。

「拿捕した守護騎士たちと話をしなければいけませんし、主の事もありませんので、すみません、一旦失礼します」

「……クロノ」

再度ドアへと歩き出したクロノに、立ち上がったグレアムが声をかけた。

「……はい」

「アリア、……デュランダルを彼に」

「父様……!?!」

「そんな……!」

その言葉にアリアとロツテは反発を滲ませた声を上げるが、グレアムは諭すような口調で言う。

「私たちに、もうチャンスはないよ。持っていたって役に立たん」

「……っ」

俯いたアリアは、一瞬の逡巡の後、硬い表情でクロノにカードを差し出した。

それは銀に輝き、中央に青い石を持つ、デバイス。

グレアムが、言う。

「どう使うかは、君に任せる。氷結の杖、デュランダルだ」

「お待たせしました、恭也さん」

部屋を出たクロノは、そこで待っていた恭也に声をかけた。

「いや、気にしないでくれ」

言葉とともに手をかざしてそう返す彼は、万が一のために警護についていてくれたのだ。

二人は、廊下を歩き出す。

「提督は、全てを認めました」

「……そうか」

恭也には既に、クロノに分かる範囲での事情は全て伝えてある。騎士達を捕縛したのも、ロッテとアリアを止めたのも彼だ。一番の功労者に何を隠すこともない。

「恭也さん」

「なんだ？」

「今回の事は言わば、こともあろうに管理局の者が事態をかき回したようなものです。こちらからご協力をお願いしておいて、本当に申し訳ありません」

恭也には管理局から助力を頼み込んだ。それなのに、管理局員であるリーゼ達の妨害を二度に渡って受けさせてしまった。

それはどうとも言いつくろえない失態であり、どんな叱責であつても受けなければならぬ。

それがアースラススタッフとして、執務官として、この件を担当する自分の責任だと、クロノは思う。

本当に、彼には迷惑と苦勞を掛けっぱなしだ。

「それに、恭也さんに騎士三人相手という悪条件で戦って頂くことになってしまったのも、見通しの甘かった僕の落ち度です」

グレアム達に感づかれぬよう、秘密裏に彼らの動向を探るという作業に気をとられるあまり、現場への配慮を怠った。結果、肝心なときに自分は出撃できない状態にあり、また駐屯地への警護も甘かったせいで結局は杞憂だったとは言えフェイトはそちらに付くこととなり、加えてなのはは守護騎士の説得中、よって恭也は一人で現場に向かうことになった。

結果として、彼は守護騎士三人の無力化ばかりか、仮面の男として暗躍していたアリアとロッテまで捕縛してくれたのだが、だからと言つて彼にかけた負担がとつてもないものだったのは事実だ。

「この度は、何から何まで負担を強いてしまつて……」

「クロノは、今回の事でグレアムさん達を責めるか？」

「……え？」

「答えてくれ」

唐突な問いに、呆けた声を上げてしまったものの、急かされてクロノは自らの胸にその答えを尋ねる。

自分は、グレアム達を。

「……いえ」

答えは、すぐに出た。

「今回の事は管理局員としては許されない行動でしたし、彼らのプランは……人としても決して褒められたものではない考えでしょう。

……でも」

「でも？」

「……勝手な事を言うようですが、提督やロツテ、アリアも………被害者、なんです。闇の書事件の。だから、……執務官としては罪を突きつけなければいけませんでしたが、僕個人としては、彼らを責めることは……できません」

直接的に傷を負ったわけではなくとも、それでも。

グレアム達は、被害者だ。

部下をその手で撃たなければならず、その無念から自ら局員として道を踏み外した被害者なのだ。

撃たれたその部下が、クロノの父の父であつたとしても、それは変わらない。

「では、闇の書の……夜天の魔導書の事はどうだ？ 書自身や、守護騎士達を恨んでいるか？」

「……それは」

恭也には、父の殉職した事情については話してある。だからこれは、それも加味して、という問いだろう。

答えは、また、すぐに出た。

「恨んでは、いません」

それは、素直な気持ちだ。

「もともと、誰かを恨むようなことじゃなくて……仕方のない事情が、重なっただけなんだと、そう思います。魔導書だつて、言ってしまうば無理矢理改悪された被害者なんです」

強いて言うなら、恨むとすれば改悪を行った過去の主たち、だろうか。だが、そちらについても一人一人は連鎖の一要因に過ぎない。

誰が今の事態を決定的に作り出した張本人というわけではないのだ。

「ただ、仕方なかったんです。それだけなんだと思います」

「だったら、クロノについても同じ事だ」

「……え？」

「仕方なかったことだろう。間が悪かったただけだ。クロノは必死に、一生懸命やっていたし、責められることはしていない。ただ少し、言ってしまう間が悪かったただけだ。結果として多少なり俺のやるべきことが増えただけで、それは仕方のないことだ」

「でも……」

「それにそもそも俺はやりたくてこの件に協力しているんだぞ、自己責任だ。誰かに、少なくともクロノに文句を言うつもりなどない。俺は、クロノに対しては」

ぱん、と背中に感触。

それはまるで友にやるかのような気軽さと親しさを感じさせる、軽い平手打ち。

「すごい奴だと、そう思っているだけさ」

続く言葉は、笑みとともに向けられた。

「す、すごいって……いやそんな」

「十四だったか？ その歳で、いや、歳のことを抜きにしたって、こんなに立派に職務を全うしてるんだ。なかなかできる事じゃない。すごいよ、クロノは」

「……あ、いや、……その」

うまく言葉が出てこなかった。

でも、自らの内にわき上がった感情は呆れるほどに明確で、それは、やっぱり。

……嬉しい。

その一言に尽きた。

送ってきたのは壮絶な半生。

常日頃から努力を惜しまず、その身に宿すのは確かな力と驚嘆すべき技、気高い精神。そして、愛する者のためならば、微塵も躊躇することなく死地に赴く度量。

どれをとっても、最上の敬意を払いたくなるそんな人に、こんなことを言われて、嬉しくないはずがない。

「それに、共感もあるしな」

「きよ、共感、ですか？」

恭也は続けて言った。

「ああ。遠い父の背中を追う者同士、だ」

「……恭也さんの、お父さんは」

たしか、いつか聞いた話では。

「仕事中に死んだよ。子供を護って」

「……っ」

「元々護衛の仕事ではあったとは言え、その子供の事は依頼には入ってなかったらしいんだけどな、放っておけなかったんだろう。……父が死んだことは悲しかったし、やりきれない思いもした。死んで欲しくなどなかった。だが……それでもやはり、父のした事は誇りに思ってる。クロノは、どうだ？」

「……僕は」

クロノが幼い時に、亡くなった父。

彼が死んでしまったことはとてもとても悲しかったけど、それでも、彼の最期に、クロノは敬意を払っている。

父は、クロノにとっては、憧れで誇りだ。

「僕も、そうです。父を誇りに思います」

「……そうか。お互い大変だな。父親が遠い」

「……はい」

「頑張らなきゃな」

恭也は、拳を突き出してきた。

クロノはそれに答えて、彼の拳に自らの拳を軽く当てる。堅い感触が手に伝わった。

彼の意志のようだ、と思った。

見上げれば、恭世の顔がある。

自然に、極自然に、この人のようになりたいと、そう思った。

クロノ・ハラオウンにとって、今日は、憧れの人が父以外に出来た、そんな日だった。

「……………なんだよ。ただの……………馬鹿じゃねーか……………あたしら」

ヴィータの、苦渋を塗り込めたような暗い声が部屋にこだまする。

「そうだよ……………なんか、なんか忘れてると思ってたんだ。でも、それがなんなのか思い出せなくて……………なんで……………なんで思い出せなかったんだよ……………こんな、こんな大事なこと！」

「ヴィータちゃん……………」

気遣わしげなのはの声を振り払うように、ヴィータは強く叫ぶ。

「そうだよ！ シャマルの言うとおりだよ！ あたしらも！ 書も！

もう全部とつくの昔に壊れてんだよ！ そんなの書の一部であるあたしらが一番よくわかってたんだ！ 書を完成させたって……………はやては……………はやては……………！ 死んじまうだけだよっ！！」

「……………っ、そう、その通り、よ」

シャマルは、ゆつくりと、泣きそうな顔で頷く。

「なんと……………」

「……………くそっ！」

ザフィーラの重々しい言葉に続いて、シグナムがやりきれないと言った風に声を漏らす。

「なにが騎士だっ！ なにが……………主のための……………騎士だっ！ 主につ

……………害なすだけじゃないか！ くそっ！」

きつく拳を握りしめ、体を震わせながら堅く俯き、

「……………家族だと」

シグナムは絞り出すように言った。

「家族だと……道具に過ぎない我らを、家族だと、そう言ってくれたのに……！」

事実が、書の真実が、いかばかりの痛みを、苦しみを、軋みを彼ら守護騎士の胸に与えているか、直接言葉と刃を交わしたなのはとフェイトにはよく分かる。

彼らは主を心から愛していて。

だから、現実が突き刺さる。

「……………テスタロッサ。我らは、これからどうなる?」

「……………このまま管理局で身柄を拘束させてもらって、事件の状況が収束した後、裁判という事になるかと。正式な事は、もうすぐここにこの事件を担当している執務官が来ますから、その時に……………」

「……………そうか」

フェイトの返答に頷いた後、

「恥知らずだと罵ってくれ。厚かましいと誹ってくれ。その通りだから」

「シ、シグナムっ!?!」

「シグナムさん!?!」

シグナムは、フェイトとなのはの前に跪いた。

そして、深く頭を下げる。

「頼む。この身がどうなってもいい。どんな事でもする。実験体になれというのなら喜んでなる。死ねと言われたらその通りにする。だから、だから」

どうか、主を。

シグナムは、そう言った。

「主はなんの罪も犯していない。書の蒐集も我らの独断だ。主は何も知らない。ただ、ただ我らに取り憑かれた被害者であるだけなんだ。だからどうか、我らが頼めた義理ではないことは承知だが、その上で、どうか、頼む! このままでは主はそう時を待たずに命を落とされてしまう! 頼む、なんでもする、なんだってするから、主を救ってはもらえないか……………」

「頼むよ！　ほんとに、なんだってするから！」

ヴィータも、そしてシヤマルもザフィーラも、シグナムに習い、揃って頭を下げた。

「あたしらなんか消えちまったっていいから！　書を壊すしかないってんならそれでも全然構わないからっ！　はやてだけは、はやてだけはっ！」

「お願い、お願いします……お願いします……！」

「頼む……どうか！」

もちろん、

「あ、え、えと……」

「と、とにかく、頭を上げて……」

なのはとフェイトとしては、彼らの願いを叶えてあげたいと思っ
ている。

出会い方こそ不幸であったが、それでも、すべての事情を知った今、
彼らとは、やはりきつと友になれるはずだと思う。

ゆえに、彼らの願いは、なのはとフェイトの願いだ。

まだ見ぬ、彼らが愛する主を、救いたいと強く思う。

だが、状況が状況であり、彼らの命がけの要請に対し、自分達が軽々
に返答をするわけにはいかない。

どうしたものか、顔を見合わせたところに、

「……どうやら、なかなか込み入った状況みたいだな」

「そのようですね」

ドアが開く音、次いで、二人のよく見知った男性が入ってきた。

「お兄ちゃん！　クロノ君！」

「待たせたな」

恭也はそう言って、クロノと共になのはとフェイトの隣に立つ。

「………うう………」

「タカマチ……」

怯えた様子のヴィータの横で、シグナムはすまなそうな声を挙げる。

「……お前があのとき我らに言おうとしたのは、この事だったんだな」

「ああ、そうだ」

「……………すまない。要らぬ手間を掛けさせた」

「気にするな。俺がもしそっちの立場だったなら同じ判断をしているさ。とにかく、良いからみんな、まずは頭を上げてくれ。それでは話ができないだろう」

その言葉に、跪いた姿勢はそのままに、ゆっくりと守護騎士四人は伏せていた顔を上げた。

彼らに、クロノが厳正な声を放つ。

「僕は管理局執務官のクロノ・ハラオウンだ。書の守護騎士、シグナム、ヴィータ、ザフィーラ、シャマル。魔導師及び保護魔法生物襲撃の罪で、君たちの身柄は預からせてもらう。何か弁明は？」

「いや……………、なにもない。私たちは確かに罪を重ねたし、それについてはどんな罰であつても受ける覚悟だ」

「わかった。では次に、……………君たちの主、八神はやてについてだ」

その言葉に、四人は自分達の罪状を告げられたときとは打って変わった、苦しい表情を見せる。

シグナムが、強い口調で言う。

「書の蒐集は我らの独断だ、主は何も関与していない」

「……………こちらが調べた限りでもそのような結論が出ている。八神はやては魔力資質こそ優れているが、現状、ただの、普通の子供だ。書の悪用など考えつきはしないだろう」

「では……………」

「だが、だからと言って彼女をこのまま放っておくわけにはいかない。彼女は、どうしたって、書の主なんだ。事件に無関係というわけにはいかない。悪いが、管理局で身柄を預からせてもらうことになる」

「っ！」

息をのむシグナム。

ヴィータが、必死に、叫ぶように言った。

「で、でも、ほんとに、書の蒐集は、あたしたちが勝手にやったことなんだ！ はやてに言われてやったことじゃないんだ！ 悪いのは全部あたしらだ！ はやてはなにもしてねーんだっ！」

シャマル、シグナム、ザフィーラも同じように、強い口調で続ける。「お願いです、信じてください！ はやてちゃんは、ほんとに何も！」
「主は善良なお方で……悪人は我らだけだ！ だから罰するのは我らだけにしてくれ！ ただでさえもう体が限界に近いのに、これ以上負担がかかったら本当に……！」

「罪人が、言葉を信じろというのも厚かましいだろうが……頼む……！」

「お、おちついてくれ。それは分かっている、だから」

「……クロノ。厳正に表現を選んだんだろうが、あの言い方は少し悪かったかもしれない」

四人の剣幕に押され、困ったような声をあげたクロノに、恭也が声を掛ける。

「あれでは、まるで彼女が留置されるようになってしまいうだろう」

「そ、そうですね。すみません」

訝しげな表情で、シグナムが問う。

「……どういうことだ？ では管理局は何のために主を……」

クロノは、それに、ゆっくりと答えた。

「管理局は書の主、八神はやてを保護、及び治療する決定を下した」

「え……？」

「保護……？ 治療……？」

呆けた声をあげるヴィータとシグナムに、クロノは続ける。

「ああ。侵食に対し対症療法で進行を送らせつつ、書の修復を試み根本的解決を図る。主と……そして書の、完治を目指そう」

誰も来ない。

ため息、一つ落として。

はやては病室のドアから視線を引き剥がした。

「……………せつかくの、クリスマスイブ、なんやけどなあ」

体調悪化に伴い入院となってしまうため、もちろん盛大にパーティなど出来るはずもないということにはわかっていたが、……それで

も家族と過ごす事くらいは、願っても、仕方ないんじゃないだろうか。シグナム、ヴィータ、ザフィーラ、そしてシヤマル。

はやての家族達は、今日、この部屋を訪れず。

忙しいみたいだから……なんて思ってはみても、やはり、それは、………馬鹿みたいに寂しかった。

面会時間はとうに過ぎ、夕食も食べ終えて、後は、寝るだけ。

眠ってしまえば、イブの夜は、終わりを告げる。

だからはやては、何をするでもないが、ベッドの上、体を起き上がらせている。

………まだ、眠りたくはない。もしかしたら、なんて思うから。

「……アホやな」

呟く。

………望みが極々薄いことくらいわかってはいるのだ。わかつては、いるのだけど。

「……はあ」

もう何度目かわからないけど、ため息を、また一つ。

吐いた時だった。

「……っ!？」

ガタン。

そんな音が、鳴った。

それはすぐに、カチャカチャと何かをいじるような響きに変わった。

発生源はどうやら、閉めてあるカーテンの向こう、………窓からだ。

「……な、………なに、なんや?」

カーテンには、手を伸ばせば届く。開けられる。しかし。

「か、勘弁してえや……」

そんな勇気、とてもじゃないがはやてにはない。

………夜、窓から物音。個室であるこの部屋には、自分一人。

普段は、誰にも心配をかけないようにと大抵の出来事には気丈に対処するはやてではあるが、それでも、未だ十に満たない女の子であり。

こんな状況で、自ら積極的に動けるほど豪胆ではなく。

シグナム達かも……なんて思いもするが、しかし、そんな自分に都合の良い予想よりは悪い考えの方が遥かに色濃く脳裏に浮かぶ。

音は、やがてガゴ、ガゴ、と、何かをずらずような響きに変わった。いや、何か、じゃない。

……どう考えても、窓をずらす音だ。

病院の窓というのは、基本的に人が出られないような角度までしか開かない。

それを何やらずらしてくるというのは、つまり外からここに侵入しようとしているという事に他ならず。

(ナ、ナース……コール……！)

壁に設置してあるボタンに手を伸ばそうとするが、恐怖ですくんでしまい、思うように体が動かない。

(う、うそやろそんな。こ、こんな日に、ふほー侵入者さんに襲われて終わるとか……ちよお………うそやろ？ ……い、いやや！ そんなんないやや！)

心の中、強くそう叫ぶが、声にはならず、相変わらず体は上手く動かない。

そして、短いようで、長いような、時間が過ぎ。

はやては結局、何もできないままで。

ガコン、と、窓が完全に外されたような音。

……ような、ではないことが、差し込んできた冷氣からわかって。

「……う、あ」

もう、駄目だ。終わった。

はやてがぎゅつと眼を瞑ろうとしたその寸前、風が、吹いた。

それはカーテンを揺らし、跳ね上げ、……外した窓を手に、窓枠に足掛けこちらを見やる、侵入者の姿を露にして。

「……………」
はい？」

はやての口から出てきた言葉は、そんな間抜けなものだった。でも。

しかし。
だって。

……こんなの。

呆氣にとられるな、という方が無理な話だ。

「な、……な、なな……」

そこに居たのは、背後に広がる漆黒の夜空に溶ける、黒ずくめの衣装を着込んだ――。

「こんばんは、はやて。良い夜だな。良い子にしていたか？」

「……きよ」

見覚えのある、精悍な顔つきの、男性だった。

「きようや、さん？」

彼――高町恭也は、はやての声に、笑みを浮かべて答えた。

「ああ。だけど、違う」

「え？」

「今日の俺は、……サンタクロースだ。良い子にしていたか、はやて。良い子にしていたよな、はやて。だから、プレゼントがあるぞ」

「君達は本来の状態ではないし、君達の行動も主の本意ではないだろう？ もちろん、犯した罪は罪だから、それに対し償いはしてもらおう。だが、それよりも先に、治療の必要があるはずだ」

「わ、我らはどうなってもいい！ どんな罰でも受けよう！ どんな償いだってしよう！ 主を、主を助けてもらえるのなら！」

「……出来る限りの、事はする。約束しよう」

シグナムに、生真面目な表情で、嘘のない瞳で、クロノは言い切る。
……父の仇とすら言っていない相手に対し、迷いなく言い切った。

書を恨む気持ちはないと語っていた彼の言葉は、やはり疑いようもなく真実で。

(やっぱりお前は、すごい奴だよ)

横目で見ながら、恭也は心の中、賞賛を送った。

「すまない、すまない！ なんと、なんと礼を言えればいいのか……！」

「あたしら……あんな事、したのに……っ」

「ありがとうございます……ごさいます……!」

「すまない……! この恩は、決して忘れん!」

「あ、い、いや、いいさ……頭を、上げてくれ。……それで、八神はやては現在、海鳴病院に入院しているんだよな? ……調べた限りでは病状も深刻そうだ。今からすぐに迎えを出そう」

「……あ、……あの、さ」

クロノの言葉に、歯切れ悪く、声を返したのはヴィータだった。

「その、迎え、つてさ。……あたしらが、行くわけには……」

「……悪いが」

クロノは、これには苦い顔で首を振った。

「万が一の事を考えると、……それは流石に」

「……そ、そう、そうだよな……わかっている。普通、そうだよな。……で、でも……!」

「……ヴィータ」

「っ! だって!」

シグナムの嗜めるような声にも止まらず、ヴィータは、食い下がる。「誰か知らないような奴がいきなり来たら、はやては……こ、怖がっちゃうよ! ……それに、今日は、よくしらねーけど、クリスマスイブって奴なんだろ?! はやて、楽しみにしてたんだ! それなのに、私らは来なくて、来たと思ったら知らない奴で、突然どつか連れてかれるなんて言われたら、は、はやてが……そんなの……。もちろん悪いのは私らだつてわかつてるけど! でも!」

「……すまない、だが……それでも、こればかりは」
眼を伏せ、再度首を振るクロノ。

シグナム、ザフィーラ、シャマルも、悲痛な顔でうつむく。

(……口にごさしないものの、思いはヴィータと同じなのだろうな)
彼らの様子に、恭也は心の中一人ごちた。

彼らの主を思う気持ちは、痛いくらいに伝わってくる。
だから。

「……クロノ、その迎え、俺では駄目か?」

気がつけば、恭也はそう言っていた。

「恭也さんがですか？ それは……特にこちらとしては問題ありませんが……」

しかしなぜ、という風な瞳を向けてくるクロノ。

「タカマチ？ 何を……」

シグナム、そしてザファイラも、同様の視線を向けてくる。

ヴィータに至っては。

「お、お前が……？ な、何考えてんだよ？ あ、あ、あれか!? まさかはやての事食べるのか!? そ、そんなんぜってーゆるさねーぞ!!」
「食べるって……。お前は俺を何だと思っているんだ……」

恭也は思わず苦笑する。

「う、うううう……！ お前こそ何のつもりなんだよ！ 何考えて……」

「……八神はやて。身長はなのはと同じくらい。年齢は九歳。これものなと同じだな。髪は茶色がかったショートボブ。喋り口調は関西のものだ。電動式の車椅子を使用している。読書が趣味で、童話を好む。それと、料理が上手い。和、洋、中と満遍なく作れる。……こんな所かな」

《っ!?!》

驚きを露にしたのは、ヴィータ達だけではなく。

「え、お、お兄ちゃん?」

「きよ、恭也さん、どうして、そんな……」

「管理局の調べでも、趣味や特技なんて……なんで……」

なのは、フェイト、クロノも一樣に眼を丸くし、恭也を見やった。「すまない、特に重要だとも思わなかったから言わなかったんだが……」

「い、いえ、それは構いませんが……そういう事でなく……。な、なぜそんな……」

「シ、シグナムツ!!」

クロノの言葉を遮ったのは、ヴィータの悲鳴ともいえるような響きの叫びだった。

「だ、だめだ、やべえよ！　ここから逃げよう！　んで、はやてのここに行つて、はやても一緒に！」

「お、落ち着けヴィータ！」

「落ち着いてなんかいられっか！　やべえよあいつ！　馬鹿みてえにつええだけじゃなくてつ、こつちの心の中まで読めるんだ！　やべえよやべえよ！　ほんとにやべえよ！　やっぱ化け物なんだ！　ここにいたらあたしら食われる！　んで次はきつとはやてだ！　だ、だからもうはやくここから逃げ……」

「……ヴィータちゃん？」

「ひっ!？」

ヴィータの涙交じりの台詞を止めたのは、なのはの……驚くほど冷えた声で。

(な、なのは?)

……正直、恭也も聞いたことのないような声音だった。

「ごめん、ちよつと、よく聞こえなかつただけど、……今、お兄ちゃんのこと、なんて?」

「あ、……あ、あ……いや……」

「なんて言ったの?　もっかい、はっきり、言ってくれる?」

なのはの顔に浮かんでいるのは、笑顔と呼ぶべきものなのだろうが、しかし、朗らかな柔らかな優しげな、なんて言葉は決して結びつかないもので。

「ねえ、なんて、言ったの?」

「あ、そ……、その……」

「な、なのは、いい、いいから。……ありがとう、いいんだ、な?」

「……でも」

「ありがとうな。けど、ここは俺に任せてくれ」

「…………わかり、ました」

情けない事に内心おっかなびっくり、恭也が頭をなでると、ようやくなのはは引いてくれた。

(俺のために怒ってくれたというのは、もちろん嬉しいが……)

しかし、庇われたはずの恭也の背にまで冷や汗が浮かぶほど、なの

はの見た怒りは重く、低く、冷たく、そして強烈だった。

……やはり妹は着々と、いろんな意味で成長しつつあるらしい。ともあれ、気をとりなおし。

「ヴィータ」

「な、なんだよ……」

恭也はヴィータに向き直った。

「……お前が、お前達が、俺の事をどう思っているか、正確にはわからないが……しかし、多分それは間違っている」

「え？」

「俺は、ただの人間だよ。つまり、脆弱な生き物だ」

「はあ!? だって! ………………え?」

反駁の声を上げるヴィータの前で、

「ちよ、お、え、え、え、な、なにしてんだよ!」「タ、タカマチ!」「恭也さん!」「なにを……?」「え、そ、わわ、わわわわ……!」「きよ、恭也さん?」

恭也は、上着、次いで、シャツまで脱いで。

上半身を露にした。

《…………》

そこで、恭也の突然の行動に驚きの声をあげていたヴィータ、シグナム、シャマル、ザフィーラ、フェイト、クロノは、息を呑み。

唯一、恭也の行動の意図を悟っていたのだろう、なのはだけが、

「おにい、ちゃん……」

悲しげに、呟いた。

皆の前に晒した恭也の体。

そこには、無数の傷跡がある。

「無様だろう? それなりに力を持つてはいるが、しかしそれは幾度も己を愚かに、情けなく傷つけて、そしてどうにか手に入れたものなんだ。這い蹲って手に入れたものなんだ。俺は、ただのちっぽけな人間なんだよ。そんなに大層な存在じゃない」

「……………」

恭也の言葉を、伝えたかった想いを理解してか、ヴィータは、表情

を揺らし、俯いてから。

「……………悪い」

そう言った。

「いいき。……ああ、そうだ、はやてとは、図書館でたまたま知り合っ
たんだ。車椅子が故障したらしく、困っているようだったから、声を
かけてな。それで家まで送っていったら、お礼にと昼食をご馳走して
もらったんだ。別に、お前達の心が読めるわけじゃないぞ」

諸肌脱ぎにした衣服を着なおしながら、恭也はそんな風に、簡単に
はやてとの出会いを語った。

「……………だから」

「ん？」

「だから、……はやての事、迎えに行く、なんて言ってくれたのか？」

「まあ、もちろん、それもある」

頷いてから、しかし恭也は続けて言う。

「だが、……独善的かもしれんが、勝手な想いだろうが、お前達の力に
なりたいたいと思っただんだ」

「……………え？ な、なんでだよ？ だってあたしら、お前と……………」

「確かに戦いはした。一時、敵ではあった。しかし、お前達は、俺とお
前達は、……わかってくれるだろう？」

「タカマチ……………。……………それは」

恭也の言いたいことを察したのだろう、シグナムに笑みを向けてか
ら、恭也は言う。

「お前達は、護る者だろう。大切なものを、護るべきものを、護る者だ
ろう」

ぽん、ぽんと、やわらかくなのはとフェイトの頭に手を置いて、恭
也は言う。

「誰かを護りたいという気持ちは、俺にも痛いほどわかるんだ。俺は
お前達を……言ってしまうば、尊敬だっと思っている。だから、少しで
も力になりたい、なんて思うんだ」

「おにいちゃん……………」

「恭也さん……………」

頬を赤く染めながら、見上げてくるのはとフエイトに微笑を返し。

「……ヴィータ、シグナム、シャマル、ザフィーラ。お前達の主を、大切な人を、俺が迎えに行ってもいいか？」

問うた恭也に。

問われた四人は、頷きと、謝礼を返して――。

「プ、プレゼント……？ なにゆうて……、いや、いやいやちゆうか……な、何から聞いたらええんかわからんけど、とりあえず……恭也さん……、三階やで？ ど、どうやって……」

「知らないのか？ サンタは空を飛べるんだ」

「そ、そりに乗ってか？」

「最近はそのり無しでもいける」

「サ、サンタにも時代におーじてそんな変化が……いやいやいやいや！ そうやなくって！」

何がなんだかわからずに、何をすべきかもわからずに、意味もなくわたわたと手を振るはやてに、病室の床に降り立った恭也は言った。

「はやて、とりあえず、大事なものを持ってくれ」

「え、え、は、はあ……」

まったくもって状況はわからないが、とりあえず言われたままに体は反応、

(だ、大事なもの、ゆうたら……)

ベッドサイドに置いてあった書を手に取り、腕に抱いた。

「よし。じゃ、行くぞ」

「え、きやつ!？」

すると、間髪居れずに……いつかと同じく、またしてもお姫様だつこの形で抱えられた。

「ちよ、ちよ、恭也さん!？」

「静かに。一応後々根回しするとはいえ、今は誰かに見つかりと面倒

だからな」

「は、はあ……。え、え、な、ど、どっかに行くん？」

「ああ。俺は、君をさらに来たんだ」

至近距離、少し悪戯に微笑む恭也に、はやての心拍数と体温が一気に跳ね上がる。

(——さ、さらに、て……)

殺し文句もいいところだ。

「サ、サンタさんがそんな事してええん？」

「俺は不良のサンタなんだ」

「……せやから、紅白やのうて黒づくめなん？」

「……ふふ、ああ、そうさ。紅白衣装をもらえなかった」

またしても、悪戯にそう言う恭也。

……やはり、状況はわからない。なぜ彼が突然来て、こんな事を言って、どこかに自分を連れて行くこうとするのか、全然わからない。わからない。

……わからない、けど。

はやては、その腕を恭也の首筋に巻きつけた。

「……なあ、サンタさん、プレゼントはあ？」

そして、おねだりする。

何かなんだかわからないけど、……もう、それでもいい。

悪いサンタ、なんて言っていたけど、それでもやつぱり、……彼が自分にひどい事をするなんて微塵も思えない。

わからないことだらけだけど、だから、だったら、この素敵な状況を楽しんでしまおう。

はやては、もう、そう決めた。

「ああ。待ってる、すぐにあげよう。断言するが、……はやては絶対に喜ぶぞ」

「ほんま？ 何くれるん？」

「秘密だ」

「あー、いじわるサンタやあ」

甘えるようにそう言うと、彼は頭を優しくなでてくれた。

(なんやもう、これだけでプレゼントやなあ)

思っていると、恭也ははやてを抱いたまま、窓枠に足をかけて、

「え、わわわわわわ……!」

宵闇に身を躍らせた。思わず彼にしがみつく手に力をこめ、ぎゅつと眼を瞑るが、

「……あれ?」

いつまで待っても、落下の感覚はこない。

恐る恐る眼を開けると、

「そ、空に、……たつとる?」

「サンタだからな」

恭也の足元、そこに何やら魔法陣のようなものが浮かんで、恭也はそこに足をつけ、空の中、平然と立っていた。

「サ、サンタっちゅうか、魔法使いみたいやな……」

「……鋭いな」

「え?」

「いや、なんでもない。……これでよしつと」

こんな会話をしている間に、彼はそれこそ魔法のような驚くほどの手際によさで、外した窓を嵌め直して。

「それじゃあ行こう」

「え、うわ、うわわわわわ!」

空を、真上へ駆けていく。

月明かりがまぶしい。満月が、綺麗だった。

濟んだ空気の中、まるで、夢みたいな光景。

でも、自分の内側から奔る熱、そして抱かれて感じる彼の熱は、驚くほどリアルで。

「はは」

気がつけば、はやての口からは、笑みがこぼれる。

「はは、はははははは! あはははははははは! すごいなあ! なんやこれえ! はは! はははははははは!」

「気に入ったか?」

「うんっ!!」

程なくして、

「つと」

「おくじょー？ あ、なんかある……」

はやてを抱いた恭也は、フェンスを外側から越えて、病院の屋上に降り立った。

そこには、さきほど恭也の足元に浮かんだものとは違うが、似たような雰囲気の、魔法陣のようなものが浮かんでいた。

「待ってる、すぐにプレゼントをやろう」

「……うん。……でもな、恭也さん」

「なんだ？」

魔法陣に歩み寄る恭也の腕の中、はやては少し眼を伏せて言う。

「……わたしなあ。プレゼント、なんて………——ほんまは、いらんよ」

「はやて……」

「何にもいらん、いらんのや。………わたしは、わたしは………家族さえ、家族さえ傍にいてくれたら、それで、良かったんや」

「……そうか」

「ごめんな、我俣で……」

「……何も謝られることなどないさ」

「でも……」

魔法陣、その中心へと着いた。すると、恭也とはやての体が、光に包まれる。

「あ、な、なんや、何が……」

薄れていく夜の屋上の景色を呆然と見ながら、零したはやてに、恭也は優しく言った。

「はやて、前にも言ったろう、我俣を言っついでいいんだ」

「えっ？」

「だって……」

そして。

「君は、君達は、家族なんだから」

「……………え？」

「プレゼントだ、はやて。君が一番、欲しいものだろう？」

光が収まって、いつの間にか、はやては恭也と共に、見知らぬ白を貴重とした部屋の中に居て。

そこには。

「はやてっ!!」

「はやてちゃん……………」

「ああ……………」

「主……………」

「……………みんな、な？」

赤い髪を三編みにした女の子。

金の髪を揺らす優しげな女性。

長い髪をくくりにした精悍な女性。

たくましい体つきの大きな男性。

はやての、一番欲しいもの。

一番傍に居て欲しい人たちの姿が、あった。

「この度はほんまに、迷惑お掛けしまして……………」

管理局の医療センター、そこに宛がわれた一室で、ベッドの上、はやては見舞いに来てくれた茶色がかった髪、聞けば自分と同じ歳だという少女——なのはへ深く頭を下げた。

「そ、そんな！ いいの、気にしていないから、ね？」

「で、でも……………」

あれから一夜明けて。

事情は、全て聞いていた。

書の事や、自分の家族達がした事……それは、してくれた事と言いたい気持ちはもちろんあるが、周りに掛けた迷惑を思えば、してしまつた事と言うべきで。

ただただ、頭を下げる他ない。

「いいの。ヴィータちゃん達にも事情があったんだし、仕方のない事で……それに今、こうしていられるから、いいの」

「……すまんなあ」

なのはは、聞けば才ある魔導師らしく、その魔力を狙ったヴィータに襲撃されたという話。

申し訳がなさ過ぎるはやてとしては、そう言ってもらえるのは、……助かる。

なのはは争う中でも、ヴィータ達へ向かい対話呼びかけていたらしく……また、今、自分にかけてくれた言葉や、向けてくれる笑顔からも、優しい心の持ち主であろうという事がよくわかった。

「改めて、あの……自己紹介。私、高町なのは。私立聖祥大学附属小学校三年生。よろしくね！」

「なのはちゃん、な。八神はやてです、よろしくお願いします」
「うん！」

弾けるような笑顔。花のようだった。つられてはやても笑顔を浮かべた。

「……あ、そや、なのはちゃんって、恭也さんの妹さんなんやってね？」

「うん、そうだよ。歳は結構、離れてるけど」

「そかー。……恭也さんにも、えらいことを……」

「お、お兄ちゃんも気にしてないだろうから大丈夫だよ！」

「……うう、ほんま、そう言ってもらえると助かるわあ……」

君の下へシャマルが帰ってこなかったのは自分が拿捕したせいだと、恭也は事情説明の後、済まなさそうに謝ってきたが。

とんでもない。

完全に、迷惑をかけたのはこちらである。

「お兄ちゃんとは、えっと、図書館で知り合ったん、だよな？」

自分の様子を見てか、意図的にだらうなのはは話を覚えてくれた。やはり、優しい子だ。兄弟揃って、とても優しい。

「あ、うん。助けてくれたんや。それがまさかこんな風に繋がつとるとは思わなかったけど……。すごい偶然もあったもんちゆうか……」
「そうだねえ。それはお兄ちゃんも言ってた」

「……でも、ほんまに最初は固まってもうたわあ。あんなかつこええ人、雑誌とかテレビでしか見たことないから、もうどう反応してええかわからなくて。その上めっちゃ優しいし」

「あ、う、うん。それは、えへへへへへ」

「なのはちゃん、ええなあ。あんなお兄さんが居て……」

「そ、そう？ えへ、えへへへへへへへ」

はやての素直な感想に、なのはは頬をほころばせた。兄を心から慕っているのであろうことが簡単に伺える。

（まあ、あんなお兄さんやつたら、そうなるよなあ……）

優しいし、格好いいし、頼りになるし。

「あ、で、でもほら！ シグナムさんも格好いいよね」

「ああ、確かに。シグナムもイケメンや」

そういえば、雰囲気や口調が、どことなく恭也と似てもいる。

「あ、シグナムと言えば……恭也さんも剣士なんやつて？」

「うん。御神流っていう剣術のせんせーさん」

「そかあ。……なんか、あの二人気い合いそうやなあ」

並んで立って、違和感がないというか。

「くっついてもおかしくないっちゆうかな」

（——あれ）

言っただとたん、胸に、痛みが走った。

……何故、だろうか。

本当に、二人はお似合いだと心から思うけども……なんだか、それが。

……嫌、というか。

（恭也、さん……）

思い出すのは、あの温もり。

あれ。

あれ。

なんだろうか、この気持ち。

少々混乱して、そして前を見て。

「——っ」

思わず、息を呑んだ。

「……くつついても、おかしくない、か。そうだね」
目の前の少女、なのはの顔に浮かんでいたのは、
複雑な。

それでいて、きつと、ひどく単純な。

表情で。感情で。

それは、直感だった。

(同じ、ちゆうか……)

自分が今、胸に感じた痛みと同種のものを、抱えている顔だと。
思った。

「なのは、ちゃん？」

「……え、……あ、あ、ごめんね！　ちよつとぼーつとしてた
！」

「う、ううん、ええけど……」

さつきまでの雰囲気打ち消し、また花のような笑顔を浮かべるな
のはに、

「な、なあ、なのはちゃん……」

「ん、なあに？」

「あ、あの……」

(……恭也さんとは、兄妹、なんよね？)

そう聞こうとして、寸前で思いとどまる。

だって、それはついさつき確認したことで。今更、何を。

「いや、ご、ごめん。な、なんでもない、はは」

「……っ」

……でも。

首をかしげるなのはに、誤魔化し笑いを浮かべながらも。

それでも、……しかし、はやては心の中、思ってしまう。

あんな顔を、……ただの”兄”を想って浮かべるだろうか、と。

「……あ、そうそう、そうだよ。はやてちゃん、体、大丈夫？　辛いと

ころとか……」

「え、あ、うん！　それは、今は特にはないで。ありがとうな。大丈夫

「や」

「本当？ よかった。……早く良くなるといいね」

「クロノ君たちが、いろいろ調べてくれてるみたいや。ほんまにありがたいわあ」

無限書庫、というところで、シグナム達と共に頑張ってくれているらしい。

恭也も今は、そこにいるとの事で。

……やっぱり、彼を想うと、はやての胸は疼いた。

「おお……それで内容がわかるのか。すごいな、ユーノは」

無限書庫の中、積んだ本を次々と精査していくユーノに、恭也は感嘆の声をあげる。

「い、いえ。こういうのは、うちの一族の本領なので……」

「何照れてるんだ、気持ち悪いぞ」

「……クロノ、なんでお前ここにいるんだよ？」

「なんでって、……君の調査の結果を待ってるんだよ」

「わざわざここで、じゃなくてもいいだろう。……もしかして恭也さんに付いてきたいだけじゃ」

「馬鹿な事を言っていないで作業に集中したらどうだ？」

「吹っ掛けてきたのはそっちだろ！」

「……二人は、仲がいいんだな」

「よくないです！」「よくないです！」

揃って上げられた声に、恭也は思わず苦笑した。

「なあ、……あたしたら、何かやることないか？」

そこに声を掛けてきたのは、ヴィータだった。

「ただ立っているだけ、というは心苦しいのだが……」

シグナムもそう続いた。

彼らの足元には緑色の魔法陣があり、それはユーノの下へと繋がっている。

「いえ、お二人にはそこで立っていてもらうのが一番です」

「むー……」

「そうか……」

じつとしてるのが苦手らしいヴィータと、自分が休んでいるような状況が許せないのか生真面目らしいシグナムは、少々やりきれないような表情を浮かべた。

書の主と守護騎士達が協力的であり、さらに調べれば出てこない情報はないとまで言われる無限書庫の搜索能力に長けたユーノのような人材がいる状況は、かつてなかった事であり。

守護騎士たちの身体や魔力情報を元に、ユーノが書庫に検索を掛ければ、今まで見つからなかった夜天の魔導書についての情報が得られるかもしれない。

うまく元々の魔導書の構成プログラムを知ることができれば、書の誤り訂正が可能になる。そうすれば、……はやての命は助かるし、書の暴走もなくなる。

これが、現在、クロノ達管理局が立て、実施している方策である。ちなみに、シャマルとザフィーラは医療センターで詳細な身体スキャンや、プログラム精査を行っている。守護騎士のプログラムから書の元々のプログラムや改悪された箇所を解析できれば、無限書庫からめぼしいものが見つからなかったときや、見つかっても不完全だったとき、役に立つだろうから、との事だ。フェイトもリンディやエイミイに付いて、今はその作業を手伝っている。

「な、なあ、……見つかりそうか？」

痺れを切らしたように、ヴィータが問う。

「いえ、今はまだ確定的なものは……。でも、僕一人で探していた時より、遥かに効率もよければヒット数も多い。手ごたえはあります」

「そうか……。すまない、よろしく頼む」

シグナムは、神妙にユーノに礼を告げると、恭也へ視線を向けた。

「……厚かましくて申し訳ないのだが、タカマチ、お前にも頼みが……」

「遠慮はいらんぞ、なんだ？」

「……四六時中とはもちろん言わんが、……時間があるときに、主の下

へ見舞いに行つてはもらえないだろうか。主は、タカマチが来れば喜ぶ」

「そうか？ ああ、もちろんいいぞ。……というか、ここに俺が居ても特にやれる事はないだろうからな。今すぐにも行つてこよう」

「済まないな、タカマチ……」

「いや、俺もはやての様子は気になるしな……それはそうと、シグナム」

「なんだ？」

「……タカマチと言えば、俺の妹も、なのはもそうだ」

「……あ、ああ、そうか」

「そうだ。だから、名前で呼んでくれていい。もちろん、嫌なら無理にとは言わないが」

その言葉に、シグナムは少し慌てた様子で頭を振り、言った。

「い、嫌などという事はない……っ！ ……そ、それでは、……——恭也、で、いいんだな？」

「ああ」

「……お前とは、いずれ、……その、よかつたら、じっくり話してみたいと思つている」

少し頬を染めてのそんな台詞に、恭也は笑みを返す。

「俺もだよ。事態が落ち着いたら、うちにでもきてくれ。茶くらいだせるし、道場もあるからな、何なら打ち合える」

「そ、そうか。ああ、楽しみにしている」

シグナムの凛々しい顔に、……もしかしたら恭也は初めて見るかもしれない、笑顔が浮かんだ。

次いで、恭也はヴィータに視線を向ける。

「ヴィータも、よければ名前で呼んでくれ」

「……あ、ああ。キョ、キョーヤだな。わかつた」

未だ苦手意識は持たれてしまつていようで、ヴィータはさつとシグナムの背後に隠れてしまったが、しかしそう言つてくれた。

「なのはとも、仲良くしてくれよ」

「……でも、あたしあいつに散々ひどい事……。それに、怒らせちまつ

たし……………」

「引きずるような奴じゃない。それに元々、お前と話がしたいと言っていたんだ。大丈夫さ。……頼むよ」

「あ、う、ま、まあ、うん。わ、わかった」

「ありがとう。……それじゃあ、ユーノ、クロノ。俺ははやてのところへ行ってくる」

礼を言っ、恭也はユーノとクロノに声を掛けた。

「わかりました」

「……ええ。……いえ、僕も連絡事項がありますから、折角なので一緒に行きます」

「クロノ……やっぱお前……」

「行きましょう、恭也さん」

「……？ ああ」

急かすように行ったクロノと共に、恭也は書庫を出て。

訪れたはやての病室で、そこに居たなのは、後から来たフェイトらと一緒に、穏やかな時間を過ごした。

第9話 わたしでも、わたしだけど、わたしだって

『はい、どなたでしょうか?』

「恭也です、……フェイトに、少し用がありました」

インターフォンから響いてきたリンディの声に、恭也は答えた。

ここは、元海鳴市駐屯地、アースラの改修が終わった今はフェイトやリンディ達がただ住んでいるだけの普通のマンションの一室、そのドアの前だ。

言つたとおり、フェイトに用があつてきた。

『あらあら、恭也さん。どうぞどうぞ』

「……すいません、こんな時間に」

時刻はもう午後七時過ぎ。夕飯時と言つてもいい。あまり人様の家へ出向くような時間ではない。

もう少し早く来るつもりではあつたのだ。しかし、いつもの、というか、久しぶりの治療を受けるか、と、海鳴病院のフィリス先生の下へ寄つてからにしたところ、酷使しすぎだと叱られ、念入りなマッサージを受ける事となり、結果、予定より大分遅くなつてしまった。がちやりと音がして、目の前のドアが開き、リンディが穏やかな笑みを浮かべて顔を出す。

「こんばんは、恭也さん」

「こんばんは。……すいません、すぐに帰りますので」

「そんな、折角来て頂いたんですから、ああ、そうですね。よかつたらお夕飯、一緒に如何ですか? ちようどもうすぐ出来るところです」

「いえ、お構いなく」

こんな時間に訪れれば、こういう話にもなるわけで。

しかし、家族……ではまだないが、きつとこれから家族になるのであろう人達の、折角の団欒を邪魔するのはあまりに無粋だろう。恭也は首を振つた。

が。

「よかつたですわ、多めに用意しておいて。……エイミイさーん！
食器、もう一セット追加してちようだーい！」

「……いえ、あの」

如何ですか、と、聞いておいて、リンディはしかしこちらの返答は全く意に介していなかった。

……この若さで提督に上り詰めるだけはある押し強さ、というか。

「フェイトさんとクロノが喜びます。さき、上がってください」

「いえ、ですから……」

「寒かったでしょう？ お鍋ですから、暖まりますわ」

リンディはあくまでニコニコと、恭也の遠慮には耳を貸さず。

「ね？」

断り切れる気なんて、微塵もせず。

「……ご馳走になります」

結局恭也は、そう答えていた。

「恭也さん、どうぞ、お茶です」

「ああ、すまない。ありがとう、クロノ」

「いえいえ」

リビングに通され、席についた恭也の前に湯のみを置いて、クロノは対面に腰掛けた。

「今日はどうされたんですか？」

「少し、フェイトに用があつてな」

そのフェイトは、すぐに嬉しそうに挨拶に来てくれたが、料理の途中だったらしく、ほどなくしてキッチンへ引っ込んでしまった。

「……すまないな。折角の団欒に」

「そんな！ 母さんもエイミイもフェイトも喜んでますし、……その、僕も嬉しいです」

「そうか？」

クロノとは最近、一緒にいる事が多い。親しくなれたということだろうか。

恭也はクロノに笑いかけてから、出されたお茶に口をつけ、一息ついた。

キッチンからは、実に美味しそうな香りが漂ってくる。

「……アルフは寝ているようだが、フェイトは、なんだ、結構料理を手伝ったりするのか？」

「ええ。母さんとエイミーに教わっているみたいです。……僕は大概調理中のキッチンから追い出されますから、様子はあまり見られてはいませんが。エイミー曰く、男子厨房に入るべからずとの事で」

「はは、意外にというか、エイミーはずいぶん古風なんだな……いや、いい嫁さんになるだろう」

「もらってくれる奇特な男がいればいいんですが」

はあ、と、クロノはため息を吐いた。

「む、……てつきりクロノとエイミーはそういう関係だと思っていたが、違うのか？」

「違います。ただの腐れ縁ですよ」

「そうなのか……」

「ええ。そ、そうだ。そんな事より……」

と、ここでクロノは急に声を小さくして、一旦キッチンの様子を伺ってから、

「丁度良かったと言いますか……実は、折り入って、恭也さんにご相談があるんですが……」

気持ち前かがみで、そんな事を言った。

「ん、なんだ？ 俺で力になれるのなら……」

合わせるように声のポリュームを絞った恭也に、礼を言ってからクロノは切り出した。

「その……まだ少し気が早いとは思いますが、恭也さんに……兄としての心構えを教えて頂きたくて」

「……む、それは」

「まだ正式に返答をもらったわけではありませんが、フェイトが……その、僕の妹となってくれた時のために……」

「……なるほどな」

それは、几帳面で生真面目で気配りの利く、クロノらしい相談だった。

しかし。

「……兄としての心構え、か」

「美由希さん……でしたか、もう一人の妹さんにはお会いできていませんので何とも言えませんが、でも、なのははあれだけ恭也さんを慕っていますし、もちろん僕が恭也さんと同じように出来るとは思いませんが、ご助言を頂ければ、と……」

「ううむ……。いや、もちろんそれは構わないのだが」

恭也は、渋面を作る。

「………悪いが、クロノ、俺はお前にあまり実のある事を言つてやれない」

「え?」

「……俺は、お世辞にも、いい兄ではないからな」

「………え? いえ、いえいえいえ、そんなはずが」

「本当だよ」

ふう、と、ため息を落とし、眼を伏せて、恭也は言う。

「……特にあいつには、なのはには、寂しい思いをさせてばかりだ。自分の事にかまけて、十分にあいつに構つてやれていない。兄としては、落第もいいところだ」

「そんな……つ。で、でも、なのははあれだけ恭也さんを慕っているじゃないですかっ」

「それはあいつが優しくて、……いい妹だからさ。俺がいい兄だからじゃない」

「………守護騎士になのはが襲われた時、恭也さんは生身で、命がけで立ち向かいました。それでも、ですか?」

「それは兄として至極当然の事だ。何も誇るような事じゃない」

恭也にとつて、愛する家族であるなのはの命は、何よりも重い。

それを護るためならば、軽い自分の命程度、何時だって何処だって何度だって賭けよう。

そんな事は、呼吸くらいに当然の事だ。

「で、でも……」

納得がいけない様子のクロノに苦笑してから、言う。

「……まあそれでも、………そんな俺でも、強いて兄の心構え、なん

てものを口にするとするれば……そうだな、——泣いている事にちゃんと気づく事、だな」

「……それは」

「声をあげず、涙も流さず、それでも人は泣く事がある。……フェイトのような抱え込むタイプは、特にな。ちゃんとそれに、気づいてやるといい」

なのはも、そういうタイプだ。

笑いながら、裏で泣く。

辛い涙こそ、人に、家族にさえ、見せない。……恭也自身もきつと、情けないことに全部に気づいてやれてはいない。

だが、だからこそ、少なくとも、そう言う意識を持つことだけは怠ってはならない。

「大丈夫、こんな風に俺に相談までするクロノなら、気づけるさ。……お前は、いい兄になるよ」

「……ありがとうございます。でも、……恭也さん以上になれるとは思いません。だって、僕には、やっぱり恭也さんはとていいお兄さんであるとしたら……」

「そんな事はないさ」

「……恭也さんは、もっと……」

「ん？」

「……いえ」

何かを言いかけたらしいクロノは、しかし飲み込んだらしい。

何だったのだろうか、思いながら、恭也はまた湯のみに口をつけた。

「んー、何話してるのかな。最近クロノくん、よく恭也さんと一緒にいますよね。懐いてるっていうか、弟みたい」

キッチンで食事の準備をしながら、リビングで話し込む恭也とクロノの様子をちらりと見たエイミーがそう言った。

「そうねえ……。クライドさんが早くに逝っちゃったから、余計、そういう部分があるのかもしれないわね」

「あー……なるほど。……確かに、恭也さんはなんか、包容力という

か、そういうのありますもんね。父性と言うか」

「うんうん。……近くにみると、すごく安心する」

エイミイの言葉に、皿を用意しながら、フェイトは頷いた。

「恭也さんって確か、二十歳だっけ？」

「うん、そうだよ」

「その歳でよくあの境地に……」

「なのはさんのお父さん代わりもしていらしたみたいだから、それ、かしらね」

「んー、凄いですよねえ」

エイミイが心底関心したように言った。

凄いというのは、確かにフェイトももちろん同感だ。

……ただ。

(恭也さんは、自己評価が低すぎる、よね……)

いつかも思ったこと、いや、彼と過ごすたび、いつも思うことだ。

彼は、彼を誇らない。それは徹底的に、とすら言えるほどで。

フェイトにはそれが、……歯がゆくて、仕方がなかった。

そつとため息一つ零して、棚に並ぶ皿に手を伸ばし、掴んで持って、

「いやでも、ほんと、兄弟みたいだねえ。……あ、そっか、フェイトちゃんも恭也さんが結婚すれば義兄弟になるか」

「っ!?!」

危うく落としかけた。……というか、一回完全に手の内から滑らせてしまったが、床に落ちるよりも先に掴み直した。……恭也との鍛錬の成果、と言えるかもしれない。

「な、ななななな、エ、エイミイ、何言つて……!」

「あらあらあら、でも、そうねえ。フェイトさんが私達の家族になってくれて、それで恭也さんと結婚すれば、そうなるわね。ふふ、あらら、楽しみだわ」

「り、リンディ提督まで……! わ、私は……!」
結婚。

自分が、恭也と。

考えただけで、フェイトの顔はこれでもかというくらいに朱に染

まった。

「あれ、だって、フェイトちゃんってつきり恭也さんの事好きなんだとばかり思ってたんだけど、違うの?」

「す、好きだけど! それは、その……。そ、そういうのとは……」
違う、と。

言おうとして、しかし。

(――……。違う、の、かな?)

疑問が胸の中、首をもたげた。

思い出すのは、あの、シヤマルの自閉モード解除の際の騒動だ。

……。あの時、自分の心には耐え切れない痛みが奔って、気がつけば抑える間もなく涙が溢れて。

はつきり、嫌だと思っただのだ。

彼の隣に誰かが立って、彼がその人を愛して、なんて。

……。ああ、そうだ。

あまりに身の程知らずな考えで。

知らず、押し込めてきたけれど。

誰か、なんて、

(私、は……)

……。自分以外、なんて、嫌だと思っただのだ。

「そういうのとは、違うの?」

エイミイの問いに、フェイトは答えた。

「……………ちが、……………わ……………ない」

そうだ。

自分は。

自分は、彼を、どうしようもなく……………——そういう意味で、好いて
いるんだ。

フェイトは結局、あっさり、極自然に自覚した。

「やっぱり!」

エイミイは、フェイトの返答に、にんまりと笑みを浮かべた。

「で、でも……………私なんかじゃ……………恭也さんには絶対、全然、釣り合
わないし、……………いや、何よりそもそも子供だし……………」

複雑な事情が絡むので正確な事を言えば多少揺れるのだが、外見・肉体的には自分は九歳。

子供もいいところであり、

「あー、歳の差はあるかもねえ」

「うん……………」

二十歳の恭也とは十一歳差もある。それは、フェイトには途方もない差に、隔たりに思えてならない。

だからといって自分の中にある気持ちが消える事はないが、しかし叶う事もないだろうと、思えてしまう。

「そうかしらねえ。フェイトさんが例えば、今の恭也さんくらいに…………、いえ、そこまでいなくてもいいわ。今のエイミイさんくらいになれば、もう歳の差なんて大した問題じゃなくなるわよ」

「そ、そう、ですか？」

「ええ」

そう、なんだろうか。

リンディは、につこりと頷いてくれたが…………。

しかし、フェイトには信じられない。自分が彼に、女性として愛される可能性、なんて。

彼への想いを自覚した今となっては、心から願う事ではあるが。

「でも…………もし、歳の差とかを抜きにしたって、…………私じゃ恭也さんには…………釣り合いません」

眼を伏せながら、フェイトは言った。

嘘偽りのない本音だ。

あんなにも素敵な彼に愛してもらえるような何かが、自分にあるとは思えない。

「そんな事ないわ。フェイトさんはとっても魅力的よ。もっと自信を、自覚を持つべきだわ」

「…………いえ、そんな事は」

「……………そういう所、恭也さんと似ているわね」

苦笑しながらリンディは言った。

「んー、しかし、フェイトちゃんが私くらいの歳になる頃には、恭也さ

んは二十代後半、かあ」

「そうねえ。……私の勝手な予想だけど、いえ、でも断言したつていいけれど、……多分恭也さんつて、それくらいからがむしろ本領よね」
「え?」「本領つて……?」

疑問の声を上げたフェイトとエイミーに、リンディは続ける。

「男性はそのくらいからどんどん色気が出てくるの。恭也さんみたいなタイプは特にね。だから、恭也さんは今でももちろん十分に素敵な男性だけど、多分、これからもっともつと素敵になるはずよ」

「い、色気、ですか?」

フェイトにはあまり、ピンとこない話だった。

というか、現段階でこの上なく素敵に思える彼の、どこがどうなつたら、これ以上になるのか、わからない。

しかし、エイミーは多少なりか得心がいったようで、

「……色気、かあ。なるほど……」

そんな風に呟いていた。

「でも、そうなる……、周りの女性はますます放っておかないわよねえ」

「あ、そうですよね。……そういえば、恭也さんつて、今、恋人とかいるの?」

「それは、……いない、はず。この前、ちらつとなのはがそんな事を」
彼についての情報でなのはが間違えるはずがないので、
「確実だろ
う。」

「そつかあ。もてるだろうにねえ」

「……恭也さん、でも、そういう事には凄く鈍いらしくて……」

「あら、そうなの?」

「はい。これもなのはが言っていました」

「……それはやはり、あの自己評価の低さがその一要因と言うか、主
要因だろうと思う。」

「まあ、でも、そうでもなきやあのルックスにあの性格でフリーなんて
事があるはずないか。局内でも、結構話題になつてるもんね」

「え、そ、そうなの!?!」

「あ、うん。ほら、訓練とか、魅月の使用状況確認とかメンテとか、あともちろん闇の書事件についてとかで、時々恭也さん本局に来るじゃない？ その度、結構色んなところの女子局員に見られてるらしくて」「そういえばこの前、他の隊や管轄の女の子達から色々聞かれたわね」「あー、艦長のところにまで……。となると、アースラスタツフはほとんど全員聞かれてるんですね……。私なんか、紹介してくれって頼み込まれましたよ」

「え、え、しよ、紹介、しちやつ、た、の？」

顔から血の気を引かせたフェイトに、エイミイは笑いながら答える。

「ううん、してないよん。いや、だから私的にはフェイトちゃんが恭也さんの事好きだろうから、止めとこうと思って」

「エ、エイミイ……」

「それにそんな事したらなのはちゃんに本気で恨まれそうだし！」

「……そ、それは、そうかもね……」

「でしょ？」

「うん……。で、でも、ありがとう、エイミイ」

「いいっていいって！ だから、頑張っってね！」

エイミイはぐつと握りこぶしを突き出して、そう言った。

「……………あの」

「ん？」

「が、頑張る……………って、……………その、どう、やって……………何を、すればいいの、かな……………？ そういうの……………、わかんなくて……………」

フェイトにとってはこれが所謂、初恋というもので。

そもそもがそういう話とは無縁の人生を歩んできたという事もあり、何をどうしたらいいものか、皆目検討もつかない。

「……………あ、もちろん、……………私が、その……………恭也さんと……………なんて、本気で思ってるわけじゃないっていうか、無理だっってちゃんとかわかってるけど、……………でも、その、……………せめて努力くらいは……………」

「いやいやいや、まあ流石に今すぐどうこう、っっていうのは無理だろう

けど、でも艦長が言った通り、フェイトちゃんがもうちよつと大きくなれば十分、ううん、十二分に可能性はあると思うよ」

「そうよ、フェイトさん。自信を持って!」

「実際、相性はいいと思うし。二人とも、どことなく似た雰囲気あるじゃない?」

「そ、そう、なの……?」

「うん。あと、一緒にいると絵になる、非常に。金髪美少女と黒髪美青年。写真集作ったら売れそうなくらいだよ」

「きよ、恭也さんの写真集だったら私も欲しいけど……」

自分は完全に余計だろうと思う。フェイトは自分が美少女だなんて、露ほども思っていない。

「あー、話が逸れた。それで、何をすればいいか、だっけか。……んー、そうだねえ」

エイミーは人差し指を自らの顎に当て、考え込む仕草。

すると、リンデイが言った。

「やっぱり、地道に着々と絆を深めていくのが一番じゃないかしら?」

「絆、を……」

「ええ。結びつきを強く、距離を近くに。恭也さんの中でフェイトさんという存在を自然に、でも確かに大きくしていくの。そうすれば、今は無理だとしても、これから何年か経った後、フェイトさんが女性として見てもらえるような年齢になったときに、一気に惹きつける事が出来るわ」

リンデイは、さらに続けた。

「具体的には、そうね、単純だけど、一緒に過ごす時間をとにかく多くしていく事ね。無理に女性として見てもらおうとする必要は今はないから、とにかく、少しでも多くの時間を一緒に過ごすの。きつとフェイトさんと恭也さんは、今までとても濃密な時間を過ごさせてはいるのでしょけど、でも、それでもまだまだ過ごした時間自体は短い。時の長さがそのままそっくり絆の深さになるわけでは決していないけれど、それでもそれはとても重要な要因の一つではあるから」

「おお………」

「な、なるほど……」

淀みなく紡がれたリンデイのそんな言葉に、エイミイと、そしてフェイトは知らず感嘆の声を零す。

「幸い、鍛錬の事もあるわけだし、口実……なんて言い方はするべきじゃないけど、機会は設けることが出来る。大丈夫、先は明るいわ、フェイトさん」

「リンデイ提督……」

リンデイの勇気付けるような、そして包み込むような暖かい笑顔に、フェイトは思わず涙ぐむ。

そして、気づく。

それは、フェイトのみならず、三人同時に。

「……あれ、なんか、焦げ臭くないですか?」

エイミイの言葉通り。

何かが、焦げたような匂いが、辺りに立ち込めていた。

「あららららららら……」

「お、お鍋が!」

何か、なんて、それは言うまでもなく。

喋るのに思わず夢中になっていたせいで意識から外れていた、火に掛けっぱなしの料理からだった。

「あの……それで、恭也さん。私に用って……?」

「……む、すまん、そうだったな」

振舞われた夕食をご馳走になり(調理中のキッチンから焦げ臭い匂いがしたときは若干心配になったが、出てきた料理は結局非常に美味だった)、他愛もないが穏やかな空気の中雑談に興じて、……当初の目的を忘れていた。

恭也は懐から一冊の、厚めのノートを取り出し、それを自らの隣に座るフェイトに差し出した。

「フェイト、これを」

「は、はい。えっと……?」

受け取るものの、何なのかわからずだろう疑問を浮かべるフェイトに、恭也はノートを開くように促した。

「……………わ。こ、これ……………恭也さんが？」

「ああ、そうだ。フェイトの身体能力や適正を鑑みた上での、最適な鍛錬方法を記しておいた」

恭也がフェイトに渡したのは、直筆の、鍛錬指導書とでも言うべきものだ。フェイトに指南を始めた当初から作成に取り掛かっていたのだが、細かく丁寧に丹念に書き記していた事もあって、ようやく完成したのは昨日だ。

「わ、私、の、ために…………？」

「ああ、もちろん。貰ってくれ」

フェイトはノートに視線を落とし、それから顔を上げて恭也を見て、もう一度ノートに眼をやり、

「……………あ、ありがとう、ございませ……………！ 私、私、大事にします……………！」

愛おしそうに、ぎゅつとそれを抱き締めた。

「ああ。……………いや、ぼろぼろになるくらいに使ってくれたほうが嬉しいな」

「は、はい！ それはもちろん……………いえ！ やっぱりこれは大事に、大切にとっておきます！ スキャンして複製を作って、それを使いますっ」

「い、いや、そこまでしなくても……………」

「いえ！ 折角の原典に傷や汚れをつけたくありませんから……………。恐れ多くて書き込みも出来ませんし」

原典、恐れ多い……………なんて、大層なものではないんだがなあ、と、恭也は苦笑を浮かべた。

「まあ、なんにせ、喜んでもらえて何よりだ。……………遅くなっただが、クリスマスプレゼントとでも思っておいてくれ」

今日は12月26日。クリスマスはもう過ぎてはいるが。

「クリスマス……………プレゼント……………。……………ほ、本当に、ありがとうございます……………ますっ！」

「良かったな、フェイト」

「フェイト、アタシにも後で見せておくれ」

「恭也さんが自ら作ってくださったものですね、何より心の籠った贈り物ですわね」

「恭也さんの教えが書かれたノート……言っちゃあなんですけど、教導隊が欲しがりそうな代物ですね」

「……本当に、そんなに大層なものではありませんが……。まあ、とにかく」

リンディ達の言葉に照れつつ、恭也は言った。

「これで、俺がいなくてもフェイトは鍛錬を積めるだろう」

『え』

ピタリ、と。

恭也以外の五人が、その動きを止めた。

「……？」

恭也が首を傾げた、一瞬後。

「そ、それ、それって……わ、私にはもう……教えて……
くださらな……っ！」

「あ、いや、違う！ フェイト、違う……！ そういう事じゃないんだ
！」

みるみるうちに瞳に涙を浮かべ、フェイトは決壊寸前の表情。

(言葉が足りなかったな……)

反省しつつ、恭也は説明を追加する。

「そういう事ではなくてな。ほら、フェイトは……執務官、だったか、
それを目指して、色々勉強しなくてはならないんだろう？」

「……え、はい」

これはフェイトの口から聞いたものだ。管理本局所属の執務官、ク
ロノと同じような道を行くつもりだと。

「俺も、この闇の書事件が終わったら流石にきちんと大学にも行かね
ばならんし、護衛の仕事の方も本格的に再開する。つまり、お互いに
忙しくなる」

「あ……、それじゃあ」

「そう。だからそれを渡しておこうと思ったんだ。もちろん可能な限り都合はつける気だが、それでも、今までのように頻繁には会えないだろうからな」

そんな中でもフェイトが鍛錬を続けられるように。

そして、それと同じくらいに。

「……それとフェイト、これだけは言っておく」

「は、はいっ」

「身体鍛錬に関しては、そこに記してある以上の量は絶対にやるな。下限に関してはフェイトが自分で決めていい。だが、上限に関しては必ず守ってくれ。……もし、それを破るようなら、俺は君を殴り飛ばさなくてはいけなくなる」

これだけは、どうかわかって欲しくて。

「っー」

恭也から見て、フェイトは非常に生真面目で、根気強く、熱意がある。

だからこそ、心配だった。

無茶をして、無理をして、無謀をして、壊れてしまわないか。……自分のように。

厳格な声音に、フェイトは息を呑んだ後、一瞬だけ眼を瞑り、そして開いて、

「誓います」

恭也の眼をしっかりと見て言った。

「必ず守ります。絶対に破りません。お約束します、マスター」

「……ああ、信じている」

恭也は満足げに頷き、微笑んで、フェイトの柔らかな髪をくしやりとなでた。

眼を細め、嬉しそうにそれを受け入っていたフェイトはやがて、

「……あ、あの。……でも、恭也さん」

「ん？」

おずおずと遠慮がちな様子で、しかし……何かしらの決意が籠っているような瞳で、恭也を再度見据えた。

それから、エイミイとリンディをちらりと見て、頷く二人に頷き返して、

「もちろん、恭也さんがお忙しいときは、無理にとは言いません。でも、私の方の都合なら、その……最優先で空けますからつ、だから、出来れば、やっぱり私は……、恭也さんに、……会いたいです。一緒に、過ごしたいです」

顔を真っ赤に染めながら、そう言った。

「……ああ。俺も、もちろん君の成長を自分の眼で見ていたい。出来る限りは、会いに来よう」

恭也のそんな返答に、フェイトがうれしそうに微笑んだ時だった。ピピピピ、と、味気のない、甲高い音が部屋に響いた。

「あららら、ちよつとごめんなさいね」

音はリンディの持つ携帯端末かららしく、リンディはそれを片手に席を立つ。

「何だろ、アースラからかな？」

「どうだろうな。……まさか、急な仕事が出来たとかじゃあないだろうな」

「うわあ……、ありえるねそれ」

そして、エイミイとクロノのそんな予想は、

「……ごめんなさい、クロノ、エイミイさん。ランディからの連絡で、アルカンシエルの整備の件で、私たち三人、今から本局に来てくれて、つて」

ほどなくして戻ってきたリンディの言葉によれば、どうやら的中したらしかった。

「アルカンシエル絡みかあ。まあゴタゴタしてたし仕方ないっちゃ仕方ないですよ。でも……」

「ああ。僕達がいいが、……そうなる」と

「……ごめんなさい、フェイトさん。今日は皆、家にいられるって話だったのに……」

「いえ！ お仕事なら仕方ないですから」

申し訳なさそうな顔のリンディ達の言葉に、フェイトは首を振っ

た。

「アルフも居ますし」

「……そう？ ……いえ、でも………うーん」

フェイトを残していく事が忍びないらしく、憂いの表情を浮かべうなっていたリンディはやがて、

「……あ」

「……なにか？」

恭也の顔に視線を向けた。

次いで、

「恭也さん、この後何かご予定はありますか？」

そんな事を聞いてくる。

予定、と言われても特にないので、恭也は正直に首を振る。

「いえ、ありませんが」

「そうですか！ じゃあ恭也さん、今日はここに泊まっていきませんか？」

「……はい？」

「ミッドチルダの繁栄には、こういった要因がありました……」
「ふんふん」

スクリーンに浮かぶ映像を見ながら、恭也は相槌を打ちつつ頷く。

魔法の体系、最先端のデバイス技術に次いで、現在の講義内容はミッドチルダの歴史、だった。

アルフもいるとは言え、残していくのは心配だから……と、リンディに頼み込まれ。

まあ確かに、しっかりしているとは言え未だ幼いと言ってもいいフェイトに留守番させるのもどうかと思い。

何より、一瞬確かに見せたとても嬉しそうな笑顔を抑え、でもそんなのは迷惑だから……と遠慮するフェイトの姿が、胸に刺さって。

結局、恭也は今晚、泊まっていくことにした。

今は、三人が出て行った後ふとしたはずみに始まった、魔法使いの常識や基礎知識についての話をしている。フェイトが先生で恭也が生徒、いつもとは逆の形だ。

「……つまり、管理局というのも、こんな背景があつて出来上がったものなんです。今では、もう次元世界になくってはならない組織ですね」「なるほどな」

ちなみにアルフは、途中までは一緒に聞いていたのだが、難しい話は嫌いだと言って今はソファアの隅で寝ている。

「フェイトももう、管理局に正式に所属しているんだっただか？」

「いえ、囑託ですから、半分正式と言いますか」

「ああ、そうなのか」

「はい。ですからこれから、訓練校に入つてちゃんと局員としての基礎を学んで、その後に正式に入局と言う形になりますね。……出来ればその時には、執務官候補生になれていればなと思います」

「……そう言えば聞いていなかったな。どうしてフェイトは執務官を目指そうと思つたんだ？」

目標があるのももちろんいい事だし、恭也も出来る限りの支援・応援はしようと思つているが、しかしフェイトの動機を聞いていなかったたので、せつかくの機会とばかりに恭也はそう尋ねてみた。

「それは………母さんみたいな人とか、今回みたいな事を、少しでも早く止められるように、って」

「………そうか」

「はい……。こんな私での力でも、出来る事がきつとあるって、思つたんです。ま、まあ、私に出来る事なんて高が知れてるとは思いますけど……」

照れたようにそう言うフェイトに、恭也は苦笑し、首を振る。

「そんな事はないさ。……いい考えだよ、フェイト。君の力は、想いは、優しきは、きつと多くの人の救いになるだろう」

この強くて優しい少女なら、きつと沢山の人を救える。

恭也には自然と、そう思える。

「そ、そうでしょうか……。えっと、その……が、頑張りますっ」

「ああ。ただ、無理だけはしないようにな」

頬を染めて言うフェイトの頭をぽんぽんと柔らかく叩いて、恭也は微笑んだ。

そして流れた少しの沈黙を破って、

「あの……恭也さんは、どうして護衛のお仕事を？ やっぱり、お父さんの後を……」

今度はフェイトがそう問うてきた。

「……いや、まあそういう気持ちがないと言えば嘘にはなるが、一番は違う」

「えっと、じゃあ?」

「単純な欲求さ。自分が大切に想う人達の行き先を切り開いて、進むその背を守りたい。突き詰めれば、それだけなんだ」

知らず、恭也は自分の手を見つめる。

「立派な大儀があるわけじゃないし、……この手だつて血に塗れている。決して少くない数の人を斬り、少くない数の人を殺めた。真つ当な、人に褒められる、人に誇れる生き方じゃない。……だが」
それでも。

「俺みたいな奴が、この世の中には必要な事もある。必要としている人がいる。そしてその人を護りたいと思えた時に、俺はそうするだけなんだ」

勝手だろう、と、恭也は最後にそう結んで。

手を、包まれた。

暖かい手に、だ。

「……恭也さんに護られた人は、きっと自分を誇りに思います」

手の持ち主、フェイトは、静かな声で言った。

「貴方に護られた事を、貴方に護られた自分を、誇りに思います。だって、こんなに素敵な人に護りたいって思つて貰える事は、やっぱり素敵な事だから。誇れる事だから」

それは、誠実さのにじむ、彼女の口調。

一言一言、優しく重ねて、包むような声音。

「……ありがとう」

零すように、自然に、恭也は礼を口にしていた。

「……………そうだったら、嬉しいよ」

「絶対、そうです」

力強い言葉。迷いのない断言。

心のどこかを、抱きしめられたような、そんな気持ちになった。

「……………君と結ばれる男は、幸せだろうな」

「……………え？ ……………え、え、あ、……………え!?!」

「ああ、すまん。急に変なことを言ってしまったな」

だが、事実、そう思ったのだ。

こんなにも暖かい言葉を、暖かい手を、暖かい想いを、この少女から一番に与えられる男は、とても幸せだろうと、思ったのだ。

そして、何より。

その男の隣で、何より、……………この娘が幸せであってほしい。

「あ、あの……………わ、私……………」

真つ赤な顔で混乱したような様子のフェイトに苦笑してから、恭也は尋ねる。

「フェイト、今の生活は楽しいか？ ……幸せか？」

「え……………えっと、それは……………」

突然の問いに、フェイトは少し驚いたようだが、しかし、すぐに、

「……………はい。色々ありますけど、でも……………とても、とっても、楽しくて

……………幸せ、です」

はにかんで、そんな風に、答えた。

「そうか」

どうかそれがこれからも続き。

願わくばもつともつと良きものになって欲しい、と。

恭也は、心からのそんな想いを籠めて、フェイトの柔らかな髪をそつと撫でた。

「ねえフェイト、貴方はお人形よ。あの娘にはならなかった、あの娘の

代わりにもならなかった、ただのお人形」

(ごめんなさい、母さん……)

「失敗作よ。不用品よ」

(ごめんなさい……)

「ずっとずっと、私は貴方が大嫌いだったわ」

(ごめん、なさい……)

「お人形、失敗作、いらぬ子。ねえ、わかっている?」

(……わたし、は……)

「そんな貴方が誰かに愛される事なんて、あるはずないって」

(……それ、は……)

「ねえ、ちゃんとわかっているの? 貴方を作った私すら、貴方を愛す

る事なんてとてもじゃないけどできやしなかった。なのに……」

(……わたし……わたし、し……)

「それでもまだ誰かに愛してもらえるなんて、本気で思っているの?」

(……でもっ)

「ねえ、わかっているんでしょ?」

(……っ)

「今は傍にいる人間達も、時が経てばいずれ離れていくわ」

(……う、ああ)

「だって彼らは、——人間だもの。お人形の貴方とは違って」

(……うううっ)

「貴方は、お人形として遊んではもらえても」

(う、ううう、うううう……っ!)

「人間として愛される事なんてないわ」

「っ!!」

声無き絶叫を上げて。

フェイトは体を、跳ねるように起き上がらせた。

「はっ……はっ……あ、う、うああ……」

周りは暗闇。自分の身は、白いベッドの上にある。

時計を見れば、その針は真夜中を指していた。

混濁した頭で記憶を探り、数時間前にこの自室に戻って就寝したん

だと思ひ出す。

「あ、……………う、あ……………」

背中が冷たい。こんな季節に不釣合いなくらい、ひどい寝汗。

「……………」

フェイトはベッドから這い蹲るようにして抜け出し、部屋を出て、廊下を走り、キッチンにたどり着く。

「……………はっ、はっ」

銀のシンクに手を突いて、荒い息を吐く。

「はっ……………はっ……………う、うううう……………！」

夢。

さつきまでの、母との会話は、夢で。

でも。

夢でも……………母が言っていた言葉はすべて、真実ではないか？

だって。

だって……………。

自分は、いらぬ人形で……………。

「……………はっ……………はっ……………はっ……………」

息を吐いて、吐いて、吐いて。

視界が揺れて、やっとなびいて。

でも、すぐに吐き出してしまつて。

手が馬鹿みたいに震える。

「う、あ、うううううううう……………」

がちがちと歯が鳴つて。

肩に、熱が触れた。

「フェイト」

次いで、声。

振り向けば。

「……………きよ、うや、さん」

「ああ……………どうした、フェイト」

いつの間にかそこに居た彼は、屈んで自分と視線を合わせ、

「怖い夢でも見てしまったか？」

そう、微笑んで問いかけてくれて。

「わ……たしっ、……………う、あ」

彼の胸に飛びついてしまいたい衝動と。

先の夢を見た事で、どうしても浮かんできてしまうはね除けられるかもしれないという恐怖との、板ばさみになる。

「……あ、あの……………わ、たし……………きようやさん、おこしちやっ……………」
そして口から出てきたのはそんな言葉。

だって、彼はリビングに布団を敷いて寝ていて。そこと半分繋がったこのキッチンに自分が来たから……………。

彼を起こしてしまった。

眠りを妨げてしまった。

迷惑を掛けてしまった。

「ごめ、ん、なき、……………い……………わたし、わたし……………」

そんな風に現状を理解して、恐怖が打ち勝つ。

彼にはね除けられる恐怖。

彼に嫌われる恐怖。

そんな、そんなのは。

「フェイト」

「……………」

静かな呼びかけに、しかしフェイトの体はびくりと跳ねる。

怖い。

拒絶の言葉を放たれるのが、何より怖くて、でも、何もできなくて。

「ごめんなさい……………ごめんなさい……………ごめんなさい……………ごめんなさい……………」

ただただ震えて謝罪を口にして。

「フェイト、……………言ったはずだ。教えたはずだ。約束したはずだぞ」

そんなフェイトを、まっすぐに見据えて恭也は言う。

「辛いかな？ 切ないかな？ 寂しいかな？ なら、そういう時はどうするんだった？ 君が下手くそで、不器用で、やり方を知らなくて、でも、やらなきゃいけない事があつたらう？」

ただそう言って、恭也は押し黙って。

じつと、フェイトの瞳を見つめ続けて。

一瞬か、一秒か、十秒か、もつとか。

どれくらいそのままだったのかは、わからない。

気がつけば、フェイトは、

「……………っ！」

「……………良く出来たな」

恭也の胸に飛び込んでいた。

「う……………うう、……………うううっ！」

あらん限りの力でもって、彼の体を抱き締める。

自分の身を押し付けて、彼の熱を感じ取ろうとする。

恭也はそれに応えるように、優しくフェイトを抱き上げた。

「わたし……………わたし、し……………っ……………っ」

何かを言いたくて。伝えたくて。

「……………っ……………っ！」

でも、うまく言葉にできず、フェイトの口から漏れるのは嗚咽。

瞳からは、涙が零れる。止められない。

恭也は、そんなフェイトを抱き上げたまま、

「いい子だ」

背を柔らかく、トン、トン、と、あやすように叩く。

「甘えんぼで、泣き虫で、怖がりで、——とびきりいい子だ」

恭也はそのまま少し歩いて、リビングのソファアの上に座る。

彼の左手は相変わらず、フェイトの背を優しく叩き続ける。

安心する、眠くなる、心臓と同じリズム。

フェイトは、恭也の腕の中、目を閉じた。

「……………わ、たし……………母さんに、愛してもらえ、なく、って……………」

「……………」

「他の誰にも、愛してもらえないって、言われ、て……………」

「……………」

「お人形、だから……………、あ、遊んでは、もらえても……………人間と

して……………っ、愛してなんかもらえないって……………っ」

「……………」

恭也は何も言わず、ただただ優しく背を叩き、時折髪を撫でてくれる。

だからフェイトは、心から溢れるままに、想いを言葉にする。

意味が通じているかどうかすら、自分ではよくわかっていない。彼からしてみたら、いきなりなんの話をしているのかわからないかもしれない。

それでも。

それでも。

あんまりに、彼の手が優しく、胸が暖かで、熱が心地良いから、フェイトは続ける。

「でも……………あれは、母さんが言ったこと、だけど、……………それだけじゃ、なく、て……………っ」

そうだ、あれは。

「私、がつ、私に……………っ。……………私、わたし……………っ！」

自分の弱音であり、そして、紛れもない本音だった。

「わたし、みんなと……………ちがつて……………！　ちゃんと、したっ、人間じゃ……………ない、から……………！」

今は幸せだけど、いずれそれには終焉が訪れるんじゃないか、なんて考えて。

そんな恐怖を裏打ちする要因を、自分は内に抱えていて。

自分の持つ、周りとの違い。

異質な生まれ、愛なき育ち。

それはやがて、周囲の人たちと自分の間に、深い溝を生み、高い壁をつくり。

決定的に道を分かつ、なんて。

そんな風に思ってしまう。

時折、疼くのだ。

お前は幸せにはなれないと、愛されやしないと。だって、まともな人間では、存在ではないからと。

胸の内、疼いて呻いて唸って蠢く、否定したいけれど、しかし決して否定し切れない思い。

フエイト・テスタロッサのコンプレックスにして、どうしようない
アイデンティティ。

「だってわたしまでもじゃなくておかしくてちがって！ だからそのうち、みんな離れていっちゃうってっ！」

吐き出すように、フエイトは言葉を連ねていく。

「わたしがわたしに言うんですっ！ おまえは幸せになんかなれないってっ！ だってわたしだからって！ わたしは愛されやしないって！ だっておまえだからって！ そんな存在じゃないからって！」

自分を包む温もりに、必死にしがみつきのながら、言う。

「でもっ！ でもっ！ わたし、わたしっ、わたしっ！ ……………——
そんなのやだよおっ!!」

願いを、口にする。

「やだ、やだやだやだやだやだっ！ いやだっ！ いやだ!! わたしでも、わたしだけど、わたしだっ!!」

心からの願いを、フエイトは口にした。

「愛して、ほしいよおっ!!」

乾いた心は潤いを欲し。

冷えた体は熱を探して。

孤独な魂は、愛を求め。

「うああああああああああああっ！ うああああああんっ!!」
枯れるほど叫んで、痛みを晒す。

「ううううううううううううううううううううううっ!!」

だって。

そうだ、だって。

「……………」

ただただ静かに、背を叩き髪を撫でるこの手はこの腕は、自分を包むこの人は。

「うあああああああああああああああああああああんっ!!」

——受け止めてくれるって、わかっているから。

……ああ。

そうか。

これが。

「きょうやさんっ、きょうやさんきょうやさんきょうやさあんなんっ!!」

「……ああ」

この、いくら泣いても、悲しくても、それでも寂しくない心地よさが。

人に甘えるって事の喜びで。

人に甘えるって、事で。

「うああああああああああんっ!! きょうやさあああああ
んっ!!」

「ああ」

「わたし、わたし……!! あああ、うあああああああああ
ああっ!!」

「ああ、……いいんだよ、フェイト。それでいいんだ」

「うあああああああああああああああああああ
……!!」

叫んで叫んで。咽び泣いて。

「フェイト。きつと、……自分を完全に肯定できる奴なんていないさ」
意識はぼやけ。現実が薄く。

「誰もが自分自身の中に、嫌な自分、認めたくない自分、いなくなっ
て欲しい自分を抱えてる」

ゆめ、うつつ。

「でも、フェイト、わかってくれ。だから人は、誰かと手を繋ぐんだ」
ふわふわとした浮遊感。

「自分が肯定できない自分を、それでも否定もし切れない自分を、誰か
に認めて欲しくて、それでいいんだと言っただけで欲しくて」

それでも確かな安心感に包まれて。

「人に甘えて、人に頼って、人に縋って、——それが、人と手を繋ぐこ
となんだ。……なあ、フェイト」

フェイトは。

「まともじゃなくてもおかしくてもちがっていても、いいさ。それが
フェイトなら俺はいい」
やがて。

「愛しいよ、フェイト」
安らかな、柔らかい、優しい眠りに落ちていった。

(……眠った、か)
腕の中、穏やかな寝息をたて始めたフェイトを、恭也は静かに見つめる。

孤独に塗れ、愛を求めて涙を流した、少女を見つめる。

「……………」
起こさないよう細心の注意を払いながら、絹のような手触りの髪を撫で、

「……………」
恭也は、唇をかみ締めた。

こんなにも痛みを抱えたこの娘に、自分は何が出来たろうか。……
何か、出来たろうか。

フェイトの、その幼くも美しい顔には、涙の痕が残る。

どうかこの涙が、彼女の笑顔に繋がることを、恭也は祈る。
どうか、どうか。

”愛して、ほしいよおっ!!”

「……大丈夫さ、フェイト」
そう呟いたときだ。

「……………キョウヤ」
足音と気配が、声とともに暗いリビングに入ってきた。
アルフだ。

「ごめん、ごめんよ、キョウヤ……。アタシも、途中から来ちやいたんだけど……キョウヤに任せたほうがいいって、思ってた……」
見やれば人型をしているアルフは、すまなそうにそう言って、恭也

の正面、ソファの前の床に座り込んだ。

「いや……」

アルフが来ていた事には、もちろん恭也も気づいてはいた。自分がキツチンでフェイトを抱き上げたあたりから、ずっと彼女はこちらを見ていた。

「……いいさ。やりたくてやった事だ」

アルフがどれだけフェイトを慕い、大切に思っているか、そんな事は言うまでもない。

それでも、彼女はフェイトのために、今は恭也が一人でフェイトを包んだ方がいいと判断し、出てこなかった。フェイトの傍に駆け寄りたいたいであろう衝動を抑え切ったのだ。

それはやはり、アルフの、フェイトへの愛に他ならず。

「……ありがとう。ありがとうねえ、キョウヤ……」

「……アルフは、フェイトが大好きなんだな」

「……ああつ。……フェイトは、群れから見放された私を助けてくれてさ、ご主人様になってくれて、……温もりをくれたんだ」

「そうか……」

「ああ……。……。あの、さ、キョウヤ」

「ん？」

「……今日は、フェイトはさ、ちよつと、その……」

アルフは床を見つめるように一旦顔を伏せ、

「こんな……。こんな風に、なっちゃったけど、さ。……。……。でも

！」

しかし、すぐに勢いよく面を上げ、恭也を見つめる。

「でも、ほ、ほんとに、最近、フェイトは明るくなつたんだよ！ よく笑うようになったし、自分の言いたい事も言ってくれるようになった

！ほんとだよ！ フェイトは、フェイトは……。ちやんと、前を見てて……。今日は、こんな風になっちゃったけどさ！ フェイトは、フェイトは！」

「……ああ、わかっている。わかっているよ」

今日は、今夜は、こんな風に弱音を吐いて、過去に怯えたけれども。

それだけじゃないんだと、前に進もうとしているんだと、どうかそれをわかってくれと、必死に言い募るアルフに、恭也はうなずく。

「ちゃんとフェイトは前を見てるさ、歩き出してるさ、わかっているよ。……今日、こんな風になってしまったのは、ある意味、きつと、だからこそなんだ」

「え？」

「揺れ戻し、みたいなものだな。前を見て、先に進んだからこそ、後ろに、過去に引かれた。ただその場に立ち止まっていればそんな事にはならないけれど、でも、この娘はちゃんと進んで、だから、今夜はこうなってしまうんだろう」

「デトックス、とも言えるかもしれない。」

「大丈夫、抱えた痛みをこれだけちゃんと吐き出して、抱えた願いもあそこまで正直に叫んだんだ。この娘は、先に行けるさ」

「……キョウヤ」

ぽとり、ぽとり、と。

小さな音が、暗闇のなか、響く。

「アルフ……」

こぼれる涙をしかしぬぐわず、アルフは床に手をついて、恭也へ頭を下げた。

「ありがとうっ、……ありがとねえ、キョウヤ……！　ア、アタシは、ほんとに、リンデイヤクロノ、エイミイ達、何よりやつぱり、なのはとキョウヤには、ほんとに、感謝、してるんだよお……！」

震える肩、そして声。アルフは続ける。

「なのはが手を掴んでくれてさ……！　キョウヤが胸で包んでくれてさ……！　だからフェイトは続いているんだ……っ！　生きて、笑って生きてくれているんだよ…………！」

「アルフ……」

「アタシは、フェイトの母親のことが、大っ嫌いだけどさあ！　フェイトは、きつと、好きで！　好きになって、欲しくて！　でもアイツはそれに応えなかった……！　フェイトを、鞭でぶつんだよっ！　何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も……！」

「……っ！」

その言葉に、思わず恭也はフェイトを抱く力を強める。

「なんでだ、って思った……！　なんでこんな、って！　ふぎけんなんて！　なんでフェイトがこんな目にあわなきゃなんないんだって！

こんなに優しいフェイトに、なんでこんなって！

……でもっ」

——でも、やっただ。

アルフはそう言った。

「やっど、やっど、やっど……！　フェイトをわかって、愛してくれる人達が、やっど……！　やっど……っ！　……なあ、お願いだよキョウヤ……！　これからも、フェイトの傍に居ておくれよお……！」

「……ああ」

「フェイトはさあつ！　ほんとに、ほんとにキョウヤが大好きなんだっ！　キョウヤの話を、ほんとによく、何より嬉しそうにするんだよお……っ！　……こんな、こんな言い方するのは、間違ってるのかも知れないけどっ、お願いだっ……！　アタシに出来ることなら何だってするからっ！　フェイトを、フェイトを、……撥ね除けたりしないでくれよお……！　見捨てたりしないでくれよ……っ！」

撥ね除ける。見捨てる。

それはきつと、……いや、きつとじゃない。実際に、過去にあったことなんだ。

フェイトは、……フェイトの愛は、ずっと、撥ね除けられてきて。最後の最後、結局は捨てられて。

今、自分が腕に抱くこの華奢な体の少女は、そんな風にして生きてきたんだ。

「キョウヤにそうされたらっ、もしそうされたら……っ、……フェイトは、フェイトはもう……っ、ほんとに、ほんとにつ、駄目になっちゃまうよお……！　アタシにはわかるよ！　フェイトにとって、キョウヤはもうそういう存在なんだ……！　会ってまだ、一月くらいだけ

どきあつ！ それでも、それでもキョウヤがフェイトにしてくれた事は、それだけの事なんだ！ キョウヤは、フェイトがずっと欲しかったものをくれたんだよ！」

涙を零し、嗚咽をあげ、それでもアルフは言葉を紡ぎ続ける。

「フェイトが、さ……っ。言つてたんだ、言つてたんだよ、キョウヤア……。なのはと友達になれて、キョウヤに抱き締めてもらえたから……。生まれてきて良かったって！ う、生まれてきちやいけなかったのかもしいけど、……。でも、生まれてきて良かったってっ！」

「——っ！」

「あんな目にあつてきたフェイトが、そんな事言つたんだ……。言えたんだけ……。言つてくれたんだよ……。アタシはっ、それが、それがっ、嬉しくて、さあ……。っ！」

なんて。

なんて、言えばいい？

アルフが懸命に語つたフェイトの言葉は、想いは、……。あまりにも。あまりにも、——愛しくて。

「なあ、アルフ」

だから、恭也は口を開いた。

「俺は、……。この娘が、フェイトが、可哀想だからこの腕に抱いているんじゃないんだ」

「キョウヤ……」

「ただただ、……。愛しいから。愛しいから、抱いているんだ。だってそうだろう？ こんなにいい娘を、愛しい娘を、抱き締めない腕があるものか。……。その、フェイトの母親がどうだったのかは、俺は詳しい事は知らないが、でも、少なくとも、俺の腕は、この腕は、この娘を抱きたいと言っているよ」

抱いて。抱き締めて。

こんな自分でよければ。こんな自分の、愛でよければ。いくらだって、君に。

そんな想いを籠めて、恭也はフェイトを抱き続ける。

「大丈夫さ、アルフ。こんな娘を愛さない世界があるか？ こんな娘

が愛されない未来があるか？ ……あるはずが、ない。ありえない。絶対に、ありえないさ」

「そう、そうだ……っ、そうだよねえ……！ そうだよねえ、キョウヤア……！」

「ああ、そうさ。……大丈夫、大丈夫だ。あと一年もしないうちに、この娘は確かな家族の繋がりを得るだろう。あと二年もしないうちに、この娘は多くの友に囲まれるだろう。あと三年もしないうちに、この娘は大勢の人たちの救いになるだろう。あと四年もしないうちに、この娘は沢山の尊敬と憧れの眼で見つめられるだろう。あと五年もしないうちに、……そうさ、この娘をきつと、周りの男達は放っておかないだろう」

心から想う。

君に幸あれ、と。

「……この娘は今、俺を必要としてくれている。でもな、多分、それは一過性のものだ。俺なんかなくなつて、今にこの娘は、すぐにこの娘は、温もりに包まれる。暖かな世界がこの娘を待ってる。そんな事は、決まりきっている。大丈夫、大丈夫だよ。……フェイトが俺に求めているのは父親の愛、みたいなものだろうが、それはずっと必要なものじゃない」

「………父、親？」

「ああ。父親だ、父親の愛。高い空に飛び立つために、翼を広げるその時まで、支えてくれる地面のようなものだ。今は必要なだろうが、一度空に飛び立てば、もう大丈夫。懐かしむことはあつても、無くて困るものじゃない。いいのさ、それでいいんだ。そういうものだ。もちろんいられるかぎりには傍にいるが、しかし、例えば俺がいなくつたつて、この娘は………アルフ？」

「………父親、ねえ」

正確に言えたかどうかはあまり自信がないが、しかし正直に語った恭也に、アルフはあまり納得のいっいなさそうな顔だった。

「どうした？」

「……うーん。いや、キョウヤが言ってくれたことはその通りだと思

うよ。……うん、フェイトは確かに、キョウヤにそういうのも求め
ちやいるんだろうけど………うーん……、でも、………うーん、そ
れだけなのかなあ………?」

「……いや、だと思いが………」

「うーん……。父親、父親、ねえ……。なあキョウヤ、父親つての
は、ずっと一緒にいてくれるものかい?」

「いや、そういうものじゃない。一番の男を、相手を見つけるまで代わ
りに傍にいて、護るもので、つまりあくまで代役だろうからな、ずつ
と一緒にはいない」

「じゃあ違うよ」

驚くほどはつきりと、あつさりとアルフは言った。

「違う。それじゃ違うよ、キョウヤ。だってフェイトはきつと、いや、
絶対だ。キョウヤにずっと傍にいて欲しいって思っているよ。アタ
シにはわかるよ、絶対だ」

それは確かに、自分などよりはアルフの方が、よっぽどフェイトを
わかつているとは思う。
しかし。

「……いや、それは」

「なあ、キョウヤ。父親じゃなくなつて、その、代わりじゃなくなつて、ずつ
と一緒にいられる関係は、相手はなんだい?」

「まあ……愛する男、添い遂げる人、結婚相手、とかだろうな」

「そうかつ、じゃあ簡単じゃないかつ!　なあキョウヤ、フェイトと
ケツコンしておくれよ!」

嬉しそうに、さつきまでの泣き顔とは打って変わつての明るい笑顔
を浮かべて、アルフはそんな事を言つて。

「……はは」

つられるように、恭也も笑つて。

「なあ、アルフ。駄目だ、アルフ。それは間違っているよ、アルフ」

アルフに答える。

「俺はフェイトとは、結婚できない」

「どうしてだい?　フェイトじゃ駄目かい?　フェイトは本当にい

「娘だよ？」

「知ってるさ。……だからさ。だから、駄目だ」

恭也は、ゆっくりと腕の中、眠るフェイトの髪を梳くように撫でる。「結婚できるくらいに大きくなれば、この娘は本当に、誰もが放っておかないだろう、魅力的な女性になる。誰もが振り返り、手を伸ばし、愛を欲しがる、そんな素敵な女性になる。そんな事はわかり切っていて、そんなフェイトと俺じゃ、とてもじゃないが釣り合わないさ。……まあ、そもそも、歳だって十以上離れているしな」

釣り合わないし、結ばれない。結ばれるべきじゃないだろう。間違っても、こんな男とは。

「そんな事ないよっ！ キョウヤはいい男じゃないか！ 優しいし、強いし、フェイトとお似合いだよ！ それに歳なんて関係ないよお！」

「……いや」

実際、歳の事を抜いたところで。

傷を負って。

血に塗れて。

中途半端で。

欠陥品の。

そんな自分なんかは、こんなにも素敵なこの娘の傍に、ずっと居るべき者じゃあない。

「まあ、アルフも、……フェイトも、いずれわかるさ。俺なんかよりもいい男が、この世にはごまんといってるって事をな」

「……そうかねえ？ いや、そんな事は……」

「そうさ。……さ、いつまでもこうして話しているのもなんだ、そろそろ寝よう」

そう言つて、恭也はフェイトを抱いたまま立ち上がった。

「あ、う、うん……」

「フェイトは、……部屋に連れていかなくてはな。案内してくれるか？」

フェイトが本来眠っていたであろう自室の位置を知らないので、恭

也はアルフに尋ねたのだが、

「……いや」

アルフは首を振った。続けて言う。

「なあ、キョウヤはここで寝るんだろう？」

「ああ、そこに敷いてある布団で……」

「じゃ、じゃあさ、……フェイトもここで、一緒に寝かしちゃくれないか？」

「……む」

「だ、だつてさあつ」

アルフは、弾かれたように立ち上がり、恭也の腕の中、眠るフェイトの顔を覗き込んで、

「……そうだ。やつぱりそうだよ。………こんなに気持ちよさそうに寝てるじゃないか」

嬉しそうな笑顔を見せる。

「こんな風に眠るフェイトを……アタシは滅多に見た事ないよ。……フェイトはさ、よくうなされるんだ。苦しそうな顔で、悲しそうな声で、ごめんなさい、ごめんなさい母さん、つてさ……」

「……そう、なのか」

「ああ。……でも、でも今日は、今夜は、キョウヤの傍なら、……見ておくれよ、こんなに気持ちよさそうだ……。なあ、頼むよキョウヤ……」

「……うーん」

どうするべきか、悩む恭也にアルフはさらに言い募る。

「それに、ほ、ほら、こんなにがっちりシャツを掴んでいるじゃないかつ、無理やり外そうとしたら、起こしちゃうかもしれないし……」

確かに、フェイトの両手は恭也のシャツを、その生地が伸びるくらいに強く掴んでいる。

まあ、生地的事はどうでもいいが、たしかに、外そうとすれば起こしてしまうかもしれない。

……それは、忍びないか。

「わかった。そうだな、……折角だ、一緒に寝るか」

「本当かいっ!？」

「ああ」

「ありがとうねえキョウヤ……! やっぱりキョウヤはいい男だよお!」

特徴的な犬歯を見せつつ、気持ちのいい笑顔で言うアルフに、恭也は苦笑を返した。

完璧に、夢だと思った。

次いで。

完璧な、夢だと思った。

だって。

(睫毛、長いなあ……)

目の前には、目を閉じた恭也の端正な顔があつて。自分の身は、彼の温もりに包まれている。

……都合が良すぎる。

つまり、夢。

なるほど、であれば。

「……………んんっ」

フェイトは思い切り、恭也の胸に顔を押し付けて、その熱と匂いを堪能する。

一秒でも長く、この夢が続きますようにと願いながら、

「……………んんっ、きよーやさん……………」

大好きな、その名を呼んで。

「……………ああ、起きたか、フェイト」

「……………」

えっ?」

返答に、がばっと顔を上げれば、そこには眼を開き、こちらを見やる恭也がいた。

「……………ん、……………え? ……え……………」

？」

「……なんだ、寝ぼけているのか？」

そう言つて恭也は、フェイトの頬に手を伸ばし、柔らかく触れた。その感触は、やっぱり、いまさらだけど、あまりにリアルで。

「……………夢じゃないんですか？」

「ああ」

周りを改めて見渡せば、光の差し込むリビングの光景があつて。

「……………朝ですか？」

「ああ」

自分は、彼と、白い掛け布団に包まれていて。自分の記憶が確かなら、これは。

「あの、ここ、どこですか？」

「俺の布団の中……………いやまあ、俺のために用意してもらつた布団の中、だな」

「……………ああー」

そうか。

なるほど。

フェイトは胸の内、納得の声をあげて。

「………………………………………ごめんなさあああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああいつ!!」

自らの身を、後方へ、布団の外へ、跳ね飛ばした。

恭也との鍛錬で敏捷性の上がつた体は勢いよくそのまま床の上を転がり、

「……………あうっ！」

柔らかい何かに当たつて止まった。

「いたたたたたた……………」

ぶつけた頭をさすりながら振り返れば、そこにあつたのはソファア
で。

ソファア？

「……………あ」

思い、出した。そして、推測して理解した。

——夜の記憶と、この、朝の理由を。

「大丈夫か？ 朝から元気だな……。……まあ、いいことか。つと」
視線を前に戻せば、そこには腕を伸ばし、なにやらストレッチのよ
うなものしている恭也がいて。

「……ともあれ」

「あ、あの……。わたし……」

「おはよう、フェイト」

「……っ」

お礼とか、謝罪とか、その他沢山伝えたいことはあつたけど。

閉じられたカーテンからこぼれる、眩しい朝の日差しの中、微笑ん
だ彼の顔があまりにも。

あまりにも、——愛しくて。

「……お」

「ん？」

「お、おは、よう、ごきい、ます……」

結局、なんとか口に出来たのは、たどたどしい朝の挨拶だけ。

「ああ」

「……っ」

それでも彼は、やっぱり優しい笑みを浮かべてくれた。

痛いくらい高鳴る心臓に、これが夢ではないという実感がようやく
沸いてきた。

トントントントン、と、小気味のいいリズムで、音が響く。

火に掛けた鍋からは、いい香りが漂ってきて。

「……恭也さんって、お料理、上手なんですね」

台所に立つ恭也の傍で、彼の美しい包丁さばきを見ながら、フェイ
トは思わず感嘆の声を漏らす。

「……まあ、嗜む程度さ。晶やレン、それこそ一応はプロの高町母には
とてもじゃないがかなわん。勝っているのは……。そうだな、こういう
切断技術くらいだ」

よどみなく振り下ろされる彼の包丁は、まな板の上、にんじん、た

まねぎ、ピーマンと、そんな食材たちを瞬く間に細かく、それでいて均等に刻んでいく。

「リビングで待っていてくれてもいいんだぞ？ 手伝いが欲しくなった呼ぶから」

「……………いえ、……………あの、見ていたいんです。……………あ、お、お邪魔ですか？」

「いや、そんな事はない。フェイトがそうしたいなら、好きにしてくださいさ」

雑談を交わすうちに、朝の時間はあつと言う間に過ぎていって、現在の時刻は十一時半。

リンディ達はまだ帰ってきておらず。

恭也が作ってくれているのは、言うまでも無く昼食。

「……………しかし、そう言えば初めて聞いたな」

リクエストはあるか？

そう、恭也に聞かれて、フェイトが答えたのは。

「オムライスだったんだな、フェイトの好物」

「……………はい」

「なんというか、……………うん、似合うな」

「そ、そうですか？」

「ああ、外見にぴったりだ」

そうだろうか。

(……………髪の毛と、色が同じだからかな?)

自分の髪を一房つまみ上げながら、そんな風に思う。

「……………よしっ、と」

どうやら食材を必要な分だけ刻み終えたらしい恭也は、手際よく、今度はフライパンを使つての炒めの作業に入った。

ジュウジュウと、食欲を誘う音。香りも、隣で煮込まれるスープのものと混じりつつ、辺りに広がる。

「……………おおおおおっ、いい匂いだねえ……………」

「あ、アルフ」

すると、眠そうに目をこすりながら、アルフがキッチンに入ってきて

た。

「おはよう、フエイト。美味しそうな匂いがするから起きてきたよ」「も、もうおはようって時間じゃないけど……、うん、きつと、とっても美味しいご飯だよ」

「すぐに出来るから、待っていてくれ」

「おお、おはようキョウヤっ。楽しみにしているよ！ ……そうか、キョウヤは料理も出来るのか」

「そう言っと、なぜだかアルフはうんうんとうなずく。」

「……？ どうしたの、アルフ？」

「なあフエイト、キョウヤはいい男だよねえ？」

「え、うん」

突然の問いだったが、フエイトは迷わずに答える。

フエイトにしてみれば、それはあまりに当たり前の事だ。彼がいい男でなくて、誰がいい男だと言うんだ。

「そうだよねえ。ほら、聞いたかい、キョウヤ」

「料理が出来る男なんて、それこそごまんというぞ」

「……？」

にんまりとした笑顔のアルフト、苦笑の恭也。

フエイトには、よくわからない会話だった。

「ごちそうさまでした。とつても、とつても美味しかったです」

「うんうん、美味しかったよっ、キョウヤー！」

「そうか、それは良かった。お粗末様だ」

フエイトのリクエストどおり恭也が作ってくれたオムライスは、お世辞抜きに非常に美味だった。

「……恭也さん、あの」

「ん？」

「き、昨日の、あの、……その、夜の、こと………なんですけど」

他愛のない朝の雑談を経て、穏やかな昼の時間を終え、なんとか決意を固めたフエイトは、テーブルを挟み対面の椅子に腰掛ける恭也へそう切り出した。

今更だと言う気もするが、しかし、あそこまで物の見事に彼に甘えてしまつて。

やっぱり、自らその話題を口にするのはかなり気力が要つたが。でも、それでも、伝えなければいけない言葉があるから、と。

「あの……」

「お礼ならいらぬし、謝罪ならもつといらぬし」

「……………え？　で、でも……………」

意を決して伏せがちだった顔を上げ、言い掛けたところへそんな言葉当てられ固まったフェイトに、恭也は続けた。

「いいんだよフェイト、いいんだ。いくらでも泣いてくれていい。俺でよければ、いくらだって泣きついてくれていい。いいんだよ、いいんだ。……代わりに」

そこで一旦言葉を切つて、恭也は目を細め、まるで、——慈しむようにこちらを見つめ。

「泣いた分より少しでも多く、君が笑つてくれたなら、俺はそれでいい」

「……………」

やばい、と思つた。

撃ち抜かれたと、そう思つた。

「……………あ、……………う、……………あ……………」

「どうした？」

「……………い、いえ、あの、その」

彼の目を、顔を、とてもじゃないがまっすぐに見られない。

恋をしていると、昨日、やつと自覚して。

恋をしていると、今日、強く強く実感する。

体中にもどかしさが満ち充ちる。

今すぐに、目の前に座る彼の胸に飛び込んで、その熱と匂いと愛しさとその他言葉に出来ない沢山のものたちを、貪つて。

思ひの丈を、ぶちまけて。

全存在を懸けて、伝えたくなる。

好きです、と。恋しています、と。

愛しています、と。

「……………っ」

でも、流石にそれは出来なくて。

彼を困らせてしまおうし、……………それに。

今、それをしても、自分が望むものは得られない気がして。

「が、が、頑張りますっ！ わ、私、じゃあ、頑張って笑います……………！」

必死に決死に衝動を抑え込んで、搾り出すように言うフェイトに、

「……………いや、頑張らなくていい。頑張らないでくれ。頑張って笑われ

るよりは、……………そうだな、頑張らないで泣いてくれた方がいい」

苦笑した恭也はそう返して。

「——っ！」

ああ、わからない。

どうやってこの気持ちを抑えつければいい？

彼が好きで。

彼が好きで。

彼が大好きで。

身が焦げるほどに、愛してる！

「もちろん、だから、一番はやっぱり、頑張らないで笑ってくれればいい

い。自然に笑ってくれればいい。俺は、フェイトのそんな笑顔が愛し

いよ」

「う、あ…………………………！」

死にそうだ。

素直にそう思った。

なんでこのひとはこんなに。

こんなに。

こんなにも。

いつそおかしいくらいに、優しく、暖かくて、格好良く、頼り

になって、傍に居たくて……………ああ、止めよう。

いくら挙げてもきりが無い。

「ううう……………」

きつと自分の顔はこれ以上ないくらい、真っ赤に染まっているだろ

うと、思いはするもののどうにもならない。

「…………… どうした、フエイト？」

「そ、その……………」

世の中の、恋をしている皆さんは、一体全体どうしているんだろう。心の底から、そんな疑問が沸いてくる。

こんな、ものすごい気持ちを内に秘め、普通に生活を送っているのだろうか？

すぎすぎる。

そう思つて、しかし、…………いやでも。

でも、あれか。彼ほど素敵な男性なんて世の中にそうはいなくていや一人もいなくて絶対いなくてだからだから。

盲目と言われればその通りなのかもしれないけど、みんながみんなこんな気持ちを抱えているわけじゃないのかな、なんて、そんな風に思い直して。

そう、つまり、だから。

こんな思いを抱える事になるのは、同じように彼に恋した人だけかな、なんて思つて。

それは例えば。

例えば。

「……………」

「……………？ フエイト？」

「い、いえ、な、なんでもないです……………」

彼にそう言いつつも。

心の中、かつちりと、…………パズルのピースが嵌ったような感覚を得る。

そうだ。

そうなんだ。

(なの、は……………)

ずっと、疑問ではあった。

あんなにも暖かい家族に囲まれて、それこそ、こんなにも素敵な彼の傍に居て。

なのに。

それなのに、驚くほどはつきりと。慄くほどくつきりと。なのは顔に時折浮かぶ、深く暗くあまりに濃い影。疑問だった。どうして、と思っていた。

そんなものを抱える要因が、いったいどこに、なんて思っていた。不意に浮かんではしかし、すぐに消え去るそんな表情について、今までなのはに問えた事はなかったけど。

結局、もうその必要はないようだ。
わかったから。

今、わかったから。

彼女の抱える絶望が、何か、わかったから。

(……そう、だよ。それは、そんなの、………絶望だよ)

自分が恋してやっとなかった。気づいた。そうだ、そうなんだ。

少なくとも、なのはと恭也の住むこの国では、兄妹同士の婚姻は許されない。

あれだけ愛されていても結ばれることはなく。

あれだけ愛していても報われることはない。

兄妹の枠を越えた想いを、彼女は兄に抱いてしまつて。

しかしそれは、許されないもので。

それが、彼女の、高町なのはの抱える絶望。

(……でも)

でも。

それでもきつと、そう、手に取るようにわかる。

それでも彼女は、希望を捨てる事なんて出来なくて。

だからあんなに悲しげな瞳の中には、それでも決して消えそうに無い眩い光があるのだろう。

熱があるのだろう。

炎が、あるのだろう。

それはきつと、永遠の炎。

高町なのはが高町なのはである限り、決して消える事のない、永遠の炎。

やっとわかった。
わかった。

(わかったよ、なのは。……だから、私は君と)
友になりたいと思っただ。

その懸命さに振り向いて。その優しさに惹き寄せられて。
そして決定的に、その炎に焦がされた。

焦がれ、憧れを抱いた。

儂くも力強い、美しく壮麗なその炎に、鮮明に憧れを抱いた。

だから、友に。

そして、共に。

自分は彼女と同じものに、手を伸ばした。

でも。

でも、違うんだ。

わかってほしい。

これだけは、確信を持って言える。

彼女の炎に焦がされて、その輝きが焼きついたけど、でも。

燃え移ったわけではないんだ。

自分が結局彼女と同じものに……同じ人に手を伸ばしたのは、

彼女の炎が燃え移ったからじゃないんだ。

これは、自分の炎なんだ。フェイト・テストロッサの炎なんだ。

これを宿すのはこの瞳で、これを燃やすのはこの心で、これが輝くのはこの胸で、これを生んだのはこの魂。

だからこれは、紛れもなく、自分の炎。自分自身から湧き出た炎。

フェイト・テストロッサの炎で。

自分が自分である限り、決して消える事のない、永遠の炎。

「大丈夫か？ ……ほんとに、どうしたんだフェイト？」

「……いえ」

瞳に、心に、胸に、魂に。

誇るように灯る、愛の炎。

彼を想う、永遠にして無敵な、——私の炎。

「なんでもありません……」

少しでもこの熱が伝わるように、と。

「……………恭也さんっ」

フェイトは、彼が愛しいと言ってくれた自然な笑顔で、大好きなその名を呼んだ。

第10話 悲しいな

「そう言えば、もう年末だねー」

なのはがしみじみと、そう零した。

言葉の通り、ここはやての病室がある管理本局がどうかは知らないが、しかし恭也たちの世界では現在12月30日。

紛うこと無き年の瀬だ。

「そうだな。……早いものだ」

「そやねえ。もうそんな時期やなあ」

「年が明けたら初詣とか、皆で行きたいねえ」

「ハツモウデって何？」

どうやら知らなかったらしいフェイトが、なのはに聞き返す。

「えつとね、年の初めに神社にお参りに行くの。そこで神様に、お願いごとをするの」

「へえ、……神様、に。宗教行事なんだね」

「……まあ、この国ではあまりそう言う自覚を持って行われているものじゃないがな」

「え、そうなんですか？」

「ああ。日本人というのは実にそこらへんに関しては無節操でな。季節固有のイベント事、くらいの認識の者が多数だろう。宗教行為への自覚が基本的に薄いと言うか……ほら、ついこの間まではクリスマスだと騒いでいただろう？ あれは初詣とは別の宗教の行事だ」

「ええ？」

「クリスマスで盛り上がって、除夜の鐘聞いて年越して、そこから初詣、やもんなあ。たしかに節操はないかもな」

驚くフェイトへはやてがころころと笑いながら言ったように、日本では年末年始の一週間程度、キリスト教、仏教、神道と立て続けに宗教を跨ぐ。そもそも、寺と神社、仏教と神道の違いすらよくわかっていない者も多いくらいだろう、……他の国には多少理解し難いかもしれないが、日本とはそう言う国だ。

「まあだから、こう言ってしまったては何だが気楽に参加していいと思

うぞ。……そうだな、先生に許可が取れたら、はやても一緒に、皆で
行くか」

「あ、ええなあー！」

「は、はい！」

出来たらクロノやリンデイ、エイミイも呼んで、……シグナム達も、
流星に厳しいかもしれないが、掛け合ってみるだけ掛け合ってみよ
う。

「楽しみだね！……まあ、晶ちゃんがはやてちゃん見てちよつと騒
ぎそうだけど」

「……レンに黙らされるだろうがな」

確実にひと悶着はあるだろう。厳かな新年早々、あまりにうるさい
のは勘弁してほしいので、……場合によっては鎮圧しよう。

「あの、恭也さん」

「ん、なんだ？」

「お願いごとって……何を願うものなんでしょうか？」

「ああ、そうだな。行く神社の祭神によるんだが、……家内安全、無病
息災、夫婦円満、金運上昇、学業邁進、商売繁盛、恋愛成就……なん
かだろうか。まあ、好きに願うといい」

「れっ………は、はい、わ、わかりました！」

フェイトは力強く何度かうなずいた後、少し顔を赤くして俯いた。
……願い事が決まったのだろうか。

顔が赤くなった理由はわからないが、少なくとも、何か心に決めた
ような様子には見える。

「………ん、どうした？ はやて」

「……え、あ、や、な、なんでもないで！」

不意に、視線に気づいて顔を向ければ、そこには、ベッドの上から
じつとこちらを見つめるはやての姿。

「………？」

「あは、あはは、ほんまなんでも………そうか、そうなんやね。
………あ」

何事か呟いたはやては、そこで恭也の脇に視線を移し。

釣られて恭也も自らの隣、——そこに座るなのはへ目を向ければ。

「……なののは？」

「……………ん？ なあに？」

(……………たまに、するな。この表情……………)

長い、それこそなのは生まれたときからの長い付き合いである恭也が、しかしどうしてか推し量ることの出来ない、複雑な顔があつて。

だが、それについて問う事も、なぜかいつも、出来ずに。

「……………なののはは」

「ん？」

「……願い事は、決まっているのか？」

結局恭也は、別の質問を口にした。

しかし、聞いておいてなんだが、……………この問いにはあまり意味が無い。

「……………うん。いつもと同じ。家族と友達、みんなが幸せでありますように、かな」

「そうか」

なのはは決まって、こう答えるからだ。

まるで、判で押したように。

その願いに心が籠ってないわけではもちろんないのだろうが、……………どこか、なにか、……………誤魔化しているよう、なんて思うのは。

(……………穿ちすぎか)

胸の中、恭也はひそかにため息を吐いた。

「お兄ちゃんは？」

「……………ん、そうだな。まあ、俺も同じだ。皆が幸福であるように」

「そっか」

「ああ」

にこっと、なのはは笑みを浮かべて、それを見て恭也も微笑む。

「……………」

「……………」

フェイトとはやては、そんな恭也達二人を……………特になのはを、どこか伺うように見て。

「……む」

そして流れる、……微妙な雰囲気。

破ったのは、はやてだった。

「あ、そ、そや！ お正月と言えばあれやな！ おせちも楽しみやな！」

「ああ、そうだな。はやては、おせちも作れるのか？」

恭也も、それに乗り、はやてに問いかける。

「い、一応な。まあそんな大したもんやあらへんけど」

「そうか。いや、すごいな。晶たちと話が合いそうだ」

「あ、そなんや。その……晶さん？ お料理得意なん？」

「うん。ご馳走になったこと何度もあるけど、晶さん、とっても上手だよ」

「他にもレンちゃんとか、あとやつぱりお母さんとか。あ、お兄ちゃんも……」

戻ってくる、穏やかな雰囲気。

そのまま、やはりやや姦しいそんな雑談に興じて。

破ったのは、——またしてもはやてだった。

「そなんやあ。高町家はなかなかすご………
………っ!? あ、………が………っ！」

「はやてちゃん!？」

「はやて……!？」

胸を押さえ、突然苦悶の表情を浮かべ、脂汗を流し始めたはやてに、
なのはとフェイトはあわてて椅子から立ち上がり、ベッドに寄った。

「だい、じよ………ぐっ!! うううううう……!!」

(——発作か……!)

それもかなり、……深刻そうだった。

恭也は素早く連絡用端末に手を伸ばし、緊急呼び出しボタンを叩いた。

「プランは、現状、……二つあります」

アースラ内カンファレンスルームで、展開された大型スクリーンの前、クロノが厳しく、険しく、重い声で言った。

「どちらを採るか、今ここで速やかに決定しなければなりません。……もう、時間がない」

室内には、リンデイやエイミイを筆頭としたアースラスタッフに加え、なのは、フェイト、恭也、ユーノ、アルフに、

「……はやて」

「くっ……」

心配そうにつぶやいたヴィータ、苦しげな表情のシグナム、その隣にはそれぞれ沈痛な面持ちのシャマルとザフィーラ——守護騎士四人の姿もある。

発作を起こしたはやての病状は、もはや抜き差しならないところまで来ていた。

彼女は集中治療室に搬送され、そして闇の書事件に対応するメンバーは、今この場に全員揃っている。

「まず、プランA。書に魔力を充填、完成させ、……暴走させる。その上で、衝撃を与え、防衛システムを切り離し破壊する。成功すれば一応は、この急場は凌げることになる」

だが、とクロノは続ける。

「これは結局のところ、対症療法に過ぎない。……書が改悪されている限り、そう遠くないうちにまた同じ事が起きる。……守護騎士の皆とも、話したんだが」

「……そうなれば、おそらく……」アイツ”は、自らの破壊を進言するだろう」

硬い声のシグナムが言う、”アイツ”とは、書の管制プログラムの事だ。恭也も、シグナム達から聞いて知っていた。

もつとも深く主と繋がり、もつとも深く主を愛する。

管制プログラム。融合騎。

”アイツ”は、そういう女だ」

主のために、自らの存在を良しとせず、……むしろ、喜んで。

消えるだろう、と。

シグナムは言った。

「……そんな」

瞳を揺らし、なのはが声を上げる。

「……っ」

フェイトも息を呑み、俯く。

「……最初にも言ったとおり、策はもう一つある。プランB、だ」
相変わらずの重い声で、クロノが言った。

「ユーノが無限書庫で調べ出してくれた情報を元に作った、修正プログラム——ワクチンを使う」

「そ、それ！ 完成、してるの!?!」

期待のこもったなのはの問いに、クロノは、

「……ああ」

うなずくも、しかしその表情は暗かった。

「完成は、している。……しかし、完全じゃない。万全じゃあ、ない」
「……時間が足りないわけじゃないんだ。無限書庫から引き出せるだけの情報はもう、おそらくは全部引き出した。あのワクチンはあれ以上の出来にはもうならない。だからつまり、完成は、してるんだ。だけど……」

クロノに続き、そう説明するユーノの顔も同じく暗い。

その先は、クロノがまた引き継いだ。

「書を治すことはできるが、……打ち込み、展開する作業の中で、書は激しい拒否反応を起こすだろう。防衛プログラムはこれ以上ないくらいに活発になって、……おそらく、進化してしまう。有体に言ってもう、……何が起るわからない。完全なワクチンだとはとてもじゃないが言えないし、万全な手法と言えるわけもない」

『っー』

その場にいる多くの人間達が、息を呑み、表情を陰しくした。

「やるならば、周りに損害の出ないよう大規模な演習空間を利用することになる。そこでまず守護騎士達を通して、とにかくそのワクチンを書の完成のために必要な魔力と共に打ち込む。……その段階から

もう、防衛プログラムは拒否反応で激しく暴走するだろう。そもそも今の書は、真の所有者以外のアクセスは認めず、下手に外から弄ろうとすれば主を呑み込んで転生してしまう性質を持ってしまっている。それを独立プログラムとは言え本体とリンクしている守護騎士達を通す事で、何とか裏技的に転生を抑えながら介入を行うんだ。無理矢理もいところで……結果、その場で起きる暴走は、どんな規模になるかわかったものじゃない」

クロノは眉間に皺を寄せ、首を振り、続ける。

「その上、そのままでは、打ち込まれたワクチンは展開し切らない。あの程度の衝撃を、ダメージを与える必要がある。つまり、戦わなければならぬ。うまくダメージを与え、ワクチンが展開し切れれば、書は修復され、書のコントロールも完全に管制プログラムと、主、八神はやてに戻る。そうなったら、書の改悪部分を外部に排出し、そしてそれを完全に破壊すれば事態は終息する。……だがその排出された改悪部分も、どんな代物になっているか予想もつかない……聞いてのとおり、ハイリスクだ」

クロノは一瞬だけ目を瞑り、そして開いて、強い声で言う。

「二択です。犠牲を前提にしたローリスクなプランAを採るか、うまくすれば犠牲はないがハイリスクなプランBを採るか」

問う。

「今ここで、決めます。どちらを、採るか」

こうしている間にも、はやての病状は悪化している。一秒だって惜しいのだ、速やかに決めねばならない。

それは皆、わかっているのだろうが、しかし、軽々に口は開けず、黙り込み。

やがて。

「……プランBを」

今までずっと黙っていた恭也が、声を上げた。

「俺は、プランBを、推したい」

「……恭也さん」

クロノが、気遣わしげに、……気まずそうに、恭也を見る。

「恭也さん、わかっているんですか？ ……いえ、貴方がこんな事をわかっていないはずがありませんね……………」

「……………ああ」

恭也はうなずく。

そうだ、自分は、わかっている。

「不測の事態が起こったときに、一番負担がかかるのは、一番危険を被るのは、どうしたって、——その場で最も力を持つ者になります。そしてそれは言うまでもなく、……………貴方です」

「……………まあ、一応は、そういう事になるだろうな」

そんな事は、わかっているのだ。

わかっているからこそ、言い出すのは、自分でなければならぬのだ。

「……………それでも俺は、プランBで行きたい。もちろん、俺には何の権限もない。ただの外部協力員に過ぎない。だから、この場にいる中の一人の意見というだけだが、……………出来る限りの事はするし、この身に惜しむものなど何もない。負担も危険も最大限、俺が引き受ける」

「お兄ちゃん……………」

「恭也、さん……………」

見上げてくる二人の髪を優しく撫でて、恭也は続ける。

「はやては、何より家族を大切にしている。心の底から愛しているんだ。その彼女のためなどと言って、……………彼女の家族の犠牲が前提の作戦なんて、俺は、したくない」

普通に考えれば、プランAで行くべきだという事くらい、恭也にもわかっている。甘いことを言っていると、わかっている。

だが、それでも。

”この子も、ずっと一緒にあったんよ。大事な大事な、私の家族や

”

管理局に保護されて。

そして、全てを告げられて。

自らの生活を、身を、命を、蝕んできたのがその書だと告げられて。

それでもはやてはそう言って、笑顔で書を抱きしめた。

家族だと言って、抱きしめた。
だから、だったら。

「……………もう一度、言おう。俺は、プランBで行きたい」
「どうして……………」

苦悩のにじむ声をかけてきたのは、シグナムだった。

「恭也……………、どうして、どうしてお前が、そこまで……………」

「なあ、シグナム」

「……………なんだ？」

「”アイツ”、……………管制プログラムに、名はあるのか？」

「あ、ああ……………」

突然の問いに当惑しながらも、シグナムは答えた。

「まだ”アイツ”自身には伝えられていないが、つい先日、主がお決めになった名がある。リインフォース、だ。強く支える者、幸運の追い風、祝福のエアール、リインフォース」

「……………リインフォース、か」

リインフォース、リインフォース。

恭也はうなずきながら、確かめるように、何度もその名を口にする。

「リインフォース、か。……………ああ、いい名だ。美しい名だ。護りたい、名だ」

「恭也……………」

「俺には、その想いだけで十分なんだ。十全なんだ。この拙い腕で精一杯、剣を振るう理由に足るんだ」

守りたい。護りたい。それだけが、自分の剣の全て。

そんな事は恭也にとつてはあまりに当たり前で、言うまでもなく今更だ。

「俺は、許されるならばその名を、その存在を、護りたいよ。永全不動八門一派・御神真刀流小太刀二刀術師範代、高町恭也の名にかけて、――全身全霊、護り抜きたい」

その言葉の後、場には少しの静寂が訪れて。

「……………我らは」

やがて響いたのは、俯いたシグナムの声。

「我らは、災いを撒き散らして、生きてきた。……だから、こんな事を言う資格はない。ないが、ないが、……。……我ら自身も、また、不幸に、不運に、不遇に塗れて生きてきたんだ……」

シグナムは、一粒、二粒と、涙を零して。

「望まぬ戦い、望まぬ行い、望まぬ生き方……。そんなものに染められて、ずっと、生きてきた……。……っ」

「シグナム……」

「将……」

「……。……そう、ね……」

同じ想いなのだろう、ヴィータ、ザファイラ、シャマルが、切なげにつぶやく。

シグナムは、続けた。

「だから、だから、……。そんな我らにとって、一番の幸福は愛する主はやての傍に居ることだが、……。一番の幸運はきつと、恭也、お前に会えた事だ……。……っ」

「俺は……」

「護りたい、なんて、言ってもらえた事は……。一度だって、ただの一度だってなかった……。……！ 一番辛い思いをしてきた”アイツ”を、護りたいなんて言ってもらえた事は、一度だって……。……、なかったんだ！ 言ってくれる者は、一人だっっていなかったんだ！」

揺れる声で、しかし強い声で、シグナムは恭也に言う。

「当所も無く彷徨って、誇りも無く服って、意思も無くただ剣を振るつた……。……！ 振るってきた……。……！ 行く先々には悪意と悲劇ばかりで、だから、好意も奇跡も信じてなかった！ 信じて、なかったんだ！ なのに、なのに……。……！」

これはきつと、発露。

騎士を束ねる将として、いつだって辛い日々のその先頭に、身を置いてきた彼女の、感情の発露。

思い通りになりはしない生を送ってきた彼女の、まっすぐな、想い通りの言葉の数々。

「こんな事が、この世には、あつてっ、こんな、こんな光がつ、我らに、

降るっ、なんてっ!」

「……これからだろう、シグナム」

恭也は、シグナムに歩み寄り、その肩に手を置いて、その顔を覗き込む。

「恭也……っ」

「月並みな言い方だが、その涙は、……事態が終わった後まで取っておいてくれ。なあ、シグナム、……ヴィータも、ザフィーラも、シャマルさんも」

恭也は、守護騎士達を見回して、言う。

「これからだろう、これからだ。これからなんだ、君達の幸せは。そして、こんなもんじゃあないだろう。はやての傍で、あの優しい娘の傍で、生きていくんだろう? だったら、これからで、こんなもんじゃあない。きつと、ずっと、もつと、幸せに生きていくさ、君達は」

「恭也、さん……っ」

シャマルは、感極まった様子で、瞳に涙をためて、恭也を見据え。

「………………!」

ザフィーラは無言で、しかし大きく、力強く、頭を下げて。

ヴィータは。

「…………っ、…………ううっ!」

「……そんなに、泣かないでくれ。取っておいてくれって、言ったらろう?」

「うううううううっ!」

ヴィータは、決壊しきった泣き顔だった。

「おまえにっ! さあっ! 初めて会ったときはっ! なんなんだよってっ、思った! 気がついたらっ、ぶっ倒されてたしさあ! んでっ、二回目に、会ったときは、心底、ふざけんなって思った! 勘弁しろよって思ったっ! 三回目に会ったときも、やっぱ、それでも、怖くてっ、でも、でも、今は、今はさあっ!」

すん、と、すすり上げて、ヴィータは言う。

「なあ、キョーヤッ! アタシ、今から馬鹿な事言うけど、怒らないでくれよ! 頼むから、怒らないでくれよ!」

「……ああ、怒らないよ。なんだ？」

「………なんで、なんでお前もつと早くアタシらの前に出てきてくんなかったんだよおっ!!」

「………いや」

ヴィータの叫びに、まず、呆氣にとられて。

「………すまない、それは、………どれくらいの単位での、話だ？」

「百年とか二百年とか、もつとだよっ!!」

「………は」

さすがに、そんな返答には。

「っ！ いや、それは、はは、すまん、っ！」

吹き出して、笑って、しまった。

「わ、笑うなよおお！」

「い、いやだつて、百年二百年つて、俺は、生まれてすらいないんだぞ？ そんなこと、言われてもなつ、っ………」

「知らねーよそんなことっ！ お前あんだけ強いんだからなんとかなるだろおっ！」

「なんともつ、ならんだろうっ………」

恭也はもう、笑いを堪えるのに精一杯だった。

まさか、こんな事を言われるなんて、………思ってもみなかった。

「なんだよおお！ だつて、だつて、お前みたいのが居てくれたらっ、アタシら、アタシらっ、あんな風に生きてくことなかったんだ！ お前が、いてくれたら！ はやてもつ、お前もつ、もつと、もつと早くさああ！」

「っ………、っ、っ！」

「笑うなよおおおおおお！」

泣きべそをかきながら抗議するヴィータに、なんとか腹筋の痙攣を抑えて、恭也は言う。

「わ、わかった。わかったわかった。笑わん。笑わんから、………笑わないから、泣き止んでくれ」

「それは今がんばってんだよおおおお！」

「………っ、っ」

「笑うなよおおおおお………！」

恭也にとつて、基本的にヴィータはずっと、ハンマーを振り回す苛烈な少女で。

はやての口から可愛い娘だとは聞いていたし、そのはやてと触れ合う様子は確かに微笑ましかつたものの。

こんな風に、恭也に対して素直にその情を溢れさせたのは、これが初めてかもしれない。

そうだ、だからある意味、今、初めて。

なのはを抜かせば、恭也が最初に出会った魔法の世界の住民である、ヴィータ。

そのヴィータに、恭也は、”ヴィータ”に、今初めて、会えたのかも知れなかった。

(……これは確かに、可愛いかもしれない)

娘が出来たら、こんな感じなんだろうか。

そんな風に、思った。

「……あー、話が、そうだな、話が半分逸れた」

頭をかきつつ、後ろを振り返って、

「なあクロノ、だから、プランBで……あー」

そこにあつたのは、恭也と守護騎士達以外全員の、実に実に、暖かい視線。

生暖かいと言ってもいい。

「……まあ、ここでプランAなんて言い出す人は、アースラにはいませんわ」

リンデイが、につこりと笑ってそう言えば、アースラスタッフ一同は、力強く同意の声を上げた。

となると、あとは。

なのはが一步、前に出た。

「……決まってるよ、お兄ちゃん」

「なのは……」

なのはは、そしてフェイトやアルフ、ユーノ達と頷きあつて。まっすぐに、言った。

「全力全開、プランBで!!」

準備された大規模な演習空間……というのは、高層建造物の立ち並ぶ海辺の街、といった風貌の場所だった。

当たり前ながら誰も住んでおらず、建物もすべて模擬建造物らしい。

ビルの屋上、そこに描かれた魔法陣の上、横たわったはやてを見、恭也は魅月を握り締める。

すでにバリアジャケットも魅月も展開してある。眩体で身も強化しており、……つまり、臨戦態勢だ。

恭也の周囲、並び立つなのは達も同じく、いつでも戦闘ができるよう各々の装備を展開してある。

『魔力充填及びワクチン注入準備、整いました』

念話で、エイミイの声が届く。

少し離れた所には、シグナム達守護騎士とワクチン注入作業を担当する局員の姿がある。

シグナム達を介して、リンクされた書に魔力とワクチンを注入、後、展開制御することになる。よってシグナム達は少なくとも、ワクチンが展開し切り書が正常な状態に修復されるその時まで、戦いには参加できない。

拒否反応を起こし暴走した書の相手をするのは主に、恭也、なのは、フェイト、クロノ、ユーノ、アルフの六人だ。他の武装局員もいるが、予想される敵のレベルからしてまともに戦力になりうるのは現状、恭也達だけと言っている。

潮の匂いを含んだ海風が吹きぬける中、

「始めてくれ」

クロノの声を合図に、眠るはやての身の下の魔法陣が輝き始め、彼女の傍らに置かれた書が宙に浮かび上がる。

ページが自動的にめくれていき、白紙だったその表面にどんどんと文字が刻まれていく。

『ええ、おそらくは。彼らの、主との戦闘記録が、戦闘記憶が、リンクしている彼女にも流れてしまっているのでしょう。……それを元に、対策を打ってきたようです』

なるほどな、と、胸の内で納得の声を上げるが。

「ブラッディダガーッ!!」

状況は、ゆっくりしていられるようなものではない。

声とともに襲い来た赤い刃を、躲し、斬り伏せ、

「っ!?!」

怖気を感じて飛び退る。

一瞬の間において、先ほどまで恭也が居た場所を爆炎が包んだ。

(……刃であり、爆弾でもあるのか)

これまた、厄介だ。

思うがしかし、——いつまでも、防戦をするつもりもない。

面倒でもなんでも、とにかくあの靄を吹き飛ばそうと、

「ふっー!」

彼女の周りを高速で舞いつつ、恭也は両の魅月から影刃を連射する。

そして響く、硬い音。

「……シールドも、張ってあったんだな」

『そのようですね……。靄をさらに包むように、外からの攻撃に対し、三百六十度全面、常時展開の障壁ですか』

どのタイミング、方向から放った影刃も防がれたということは、そう言うことになる。

『……………』

「まあだったら、まずはそれからだな」

言って、恭也はすぐさまSCL。右の魅月を納刀し、

御神流奥義 虎切・飛

抜刀奥義からの、影刃による巨大な黒刃射出。

奔った黒刃はシールドに喰らいつき、飛び散る火花と硬い音。

「……………むっ」

そして、……完全に防ぎ切れられ、消えていく黒刃。

シールドを破るには至らなかった。

その様に、自らの技を過信していたつもりはないが流石に恭也は表情を険しくして。

『……………やはり、そうですか』

魅月は、そう言った。

「魅月？」

『……………主、あの娘は……………。あの娘は、本当に、先を見ていないようです』

「……………？ どういうことだ？」

唸りを上げ襲い掛かってくる砲撃と赤い刃を躲しつつ、尋ねると、『あの数の影刃を、どころか、今しがた放った虎切・飛をも完全に防ぎ切るほどのシールドを常時全面展開なんて……………通常、いくらなんでもありえませんが。運用効率の観点から言えば、いかなあの書が膨大な魔力を持つとうと愚かな選択と言ってもいいものです。……………本当にあの娘は、先を見ていない』

魅月は悲しそうな声でそんな風に返してくる。

『ただ、敵として貴方が目の前に立ったから、後先考えず、するべき事と出来る事をしてしまっているだけで、……………力任せに暴れる、駄々っ子のようなものです』

「……………そうか」

『……………はい』

だったら暴れさせるだけ暴れさせて、疲れさせればいいかと言え、しかしそうもいかない。戦闘にかける時間が長ければ長いほど、拒否反応により起こる暴走の影響は大きくなってしまふ。

悠長に戦うことが出来ないのは、こちらも同じだった。

「じゃ、……………まあ、早く泣き止んでもらおう」

『策が？』

「ああ、いくぞー！」

生成した足場の上、SCL。そして即座に恭也は左手を前に掲げ、右手を引いた構えを作り、

御神流奥義 射抜・奔

そこから、高速の突き。右の魅月から黒い閃光が奔り、シールドに刺さりなんとか押し破らんとする。が、

『駄目、ですか……!』

魅月の言葉通り、力及ばず空に溶ける。

「いや、まだだ!」

恭也はそこから眩体に費やす魔力を増強、身の膂力を上げ。

「はっ!」

全力で持つて、晃刃を箆めた飛針を投擲。鋭く空に瞬いた数本の刃は、先ほどまで射抜・奔が押し破らんとしていた箇所へ狙い変わらず突き刺さる。

バグインと、高く耳障りな音と共にそれらは弾かれるもの――。

しかし、狙い通り。

(入った!)

シールドには、幾つかのヒビ。

恭也は足場を強く踏み込んで、一気に接近。

御神流奥義 射抜・追奔

ヒビへ速度の乗った左の魅月による突進を見舞う。

「おおおおおおおおおおおっ!」

「っ!」

銀髪の下、彼女の顔が驚きに揺れて。

一瞬の均衡の後。

高い音を響かせシールドは、――割れ、破れた。

恭也はそこから間髪入れずに、

御神流奥義 虎乱・散

SC Lからの影刃の乗った一刀連撃。射出する黒刃は虎乱・盾とは違い、前方に集めるということはせず、広範囲に散らす。

紫がかつた靄を一気に吹き飛ばし。

しかし、達成感に浸ることは無い。なぜなら今までの攻撃は、全て、言わば前座。

本命は、これからだ。

恭也は、脳のスイッチを完全に切り替える。

御神流奥義 神速

世界をモノクロに染め上げ、その中を疾走、彼女に肉薄し、カートリッジロード。

身と魅月に、膨大な魔力を充填。

「やがて、世界に色が戻って。」

「っ！」

眼を見開いた彼女に、ようやくと、

御神流奥義 雷徹・轟

本命の一撃を、叩き込んだ。

爆碎音が響き、振るわれた両の魅月が彼女の体に食い込んで、返ってくるのは確かな感触。手ごたえ。

晃刃でその威力を大幅に強化された徹の籠る乾坤一擲の豪撃が、通り切った実感。

「——っ!!」

声無き悲鳴を上げ、彼女は一直線に吹き飛んで、背後にあつた高層ビルへ音高らかに突っ込んだ。

恭也は、続けて、なおもSCL。

勢いよく排出され、遠い空に消えていく空葉莢を横目に、右の魅月を納刀。

リベンジとばかりに、駄目押しとばかりに、

御神流奥義 虎切・飛

抜刀奥義。大きく、速く、何より鋭い、生み出された黒刃は青空を裂いて進み、彼女が突っ込んだ箇所を通って、ビルを斬り抜けた。

ビルの上半分が地鳴りのような音とともに左方へずれ、地面にゆっくりと崩れ落ちる。

巨大なビルは、あまりに易々と斜め真つ二つ。

また、後方に立ち並ぶ似通った高く巨大な建造物の数々も、奔った黒刃に続けて斬り裂かれ分かれたれ、習うようにビルと同じくその半身を次々と地面に落としていく。

粉塵の巻き上がりに低く重い轟音の多重奏、そして断続的な地響きが、収まって。

『——お見事っ!!』

響いたのは、魅月のそんな賞賛の声だった。

『これぞまさにつ、騎士! ……いえ、鬼神!! そう呼ぶに相応しき御業ですっ! 強化壁をふんだんに使った模擬高層建造物も、主にかかればまるで豆腐……!』

『……褒め過ぎだ、魅月』

『いえ! 歴代ベルカの騎士の中にも! これほどまでの者は数えるほどしかいないでしょう! 海鳴の黒い鬼神、高町恭也ここにありですっね!』

『いやいやいや……』

そんなあまりにあまりな魅月の言葉に、恭也は流石に苦笑して。

『……いや、魅月』

『はい?』

視線を鋭くした。

『本当に、言い過ぎだったな。……見てみる』

『え、……なっ!?』

恭也の鋭利な視線の先、そこには、

『あれを喰らって……まだ立つとは!』

ふらりふらりと、揺れながらも。しかし確かに身を起こし、立って、その高さが半減したビルの中から抜け出て浮かび上がった、銀髪の女性の姿。靄も展開し直されている。

『ダメージは、まあ、結構入ったようだが』

『……ワクチンが展開し切るには及ばず、ですか』

『そのようだな』

『なんと……主もさることながら、あちらもあちらですね』
『……さて、どうしたものか』

今の攻防を終え、既に使用したカートリッジは通算五発。魅月の搭載カートリッジ数は、左右合わせて十二発。もう半分近くを使っただけまってる。

予備マガジンが二本あるにせ、この後を思えば控えめなペースとは言えない。

「……………悲しい……………、ああ、悲しい……………。悲しい……………」
思い悩む恭也の耳に、眩きが届く。

誰のでもない、それは銀髪の、……………涙を流す彼女のもので。

「悲しい……………、ああ……………、……………悲しい……………」

その言葉は、本当に、心の底から悲しげで。

「……………大丈夫だ」

たまらず恭也は、彼女に声をかける。

「大丈夫、大丈夫だ。すぐに、……………その悲しみは、君の悲しみは、癒える時が来る。もうすぐだ、もうすぐなんだ。だから……………」

「違う」

返ってきたそれは、強い言葉だった。力の籠った口調で、方向の定まった声音。

向かう先は、

「違う、違うんだ。黒き騎士よ」

「……………違う？ 何が、違うんだ？」

他でもなく、恭也。

長い銀髪を海風になびかせながら、彼女は恭也を見た。

「違う、違う、違う、違うんだ、黒き騎士よ。違うんだ」

まっすぐに、しっかりと、そしてなぜだか、

「悲しいのは、……………悲しいのは」

慈しむように。

彼女は恭也を涙の零れるその赤い瞳で見、見据えて、見つめて。

そして言った。

「悲しいのは、……………お前だよ」

「…………………………は？ 何を

言ってる」

要領を得ない恭也に、彼女は続ける。

「お前だったんだな、黒き騎士よ。お前だったんだな。あの、あの、

……………あの悲しいリンカーコアの持ち主は」

「何を、言ってる……………」

返しながら、なぜだか、恭也は口の中に乾きを感じる。

彼女の言葉は、視線は、射抜くようで。

「私は今まで、数多くのコアを喰らってきたが……、あんなに強く、あんなに気高く、あんなに優しい、それでいてあんなにも悲しいリンカーコアは、初めてだった。だから、よく憶えている」

言い当てられるようで。

「今さっき、お前の魔法を身に受けてわかったよ。お前だったんだな、あのリンカーコアの持ち主は。……ああ、悲しい。悲しいよ、黒き騎士。強く、気高く、……寂しい騎士よ」

「なに、を……」

「なあ、騎士よ。——もう、いいだろう?」

「なにが、だ?」

『主、惑わされしないで下さい!』

魅月はそう言うも、しかし恭也は彼女の眼から声から、意識を逸らせない。

「もう、いいだろう、騎士よ。……だってお前は、どれだけ生きてもどう生きてても、満たされることなんてない」

「っ!」

「お前を満たす世界なんて、ありはしないよ。だって、そうだろう?」

わかってはいるだろう? 自分自身を慈しむ心を持たないお前が、他でもない自分自身に後ろ指さして生きるお前が、幸せに、満たされて、生きていける世界なんて、ない」

「お、れは……」

「そもそもお前はあろうことか、自分の幸福なんて露ほども世界に期待していないのだろうか? お前のリンカーコアの輝きは、煌きは、お前自身を少しも照らしていなかった。……お前は、自分が幸せになろうだなんて思っていない、思えないんだな。それなのにどうして生きる? そんな生き方に、生に、なんの意味が……ああ、そうか」

彼女の、恭也を見つめるその瞳がまるで眩しいものを見るかのよう

に眇められ、切ないものを見たかのように大きく揺れる。

「護りたい者がいるから、か。そうか、だからお前は生きるのか、だか

らあんなにもコアを輝かせるのか、護りたい者達の幸福のために。自分の幸せが訪れる世界なんてないとわかってはいても、自分のコアが自分自身の未来を照らす事などないとわかってはいても……生きるのか、生きてしまうのか、その孤独な生を。………ああ、優しい騎士よ、なんて、なんてことだ」

彼女は、本当に寂しげに悲しげに、切なげに、頭を振った。きらきらと、散った涙が陽光に照らされ光を放つ。

「やはりこの世は狂っている……！ おかしいんだ……。お前のような者が、決して幸福を掴めずに、掴もうと思えずに、それでも生きていかなければならない世界なんて間違っている……。おかしいんだ……。なあ、もういいだろう？」

彼女は、恭也に手を伸ばす。決してそれが届く距離ではないが、しかし。

「もう、止めよう。いいんだ、騎士よ」

掴まれそうだが、なんて思っ

(……俺は)

掴んでしまいたくなる、なんて思ってしまったのは、……きつと気のせいじゃない。

振り払うように、恭也は言う。

「……すまん。君の気遣いは嬉しいよ。だが、わかってくれるだろう？ いいんだ、俺の事は。今は君が幸せを掴むための空なんだ。俺の事などどうでもいい」

「……悲しいな、騎士よ」

「………いいんだ。そういう言い方をすれば、確かに悲しいのかもしれないが、……俺はこの生き方がいいと思っている」

『主……？』

魅月が、困惑したような声を上げる。

そうだろう、この会話は、こんな会話は、きっと本当に、当の恭也と彼女にしかその意味は通じていない。

「悲しいな、騎士よ。そうしてお前がお前を、どうでもいいと言うのが悲しい。そして、それでもお前の瞳がそこまで揺ぎ無く強いのが悲し

い。悲しいな……、悲しいよ。お前は、揺れないんだな。どれだけ寂しさを、孤独を、痛みを、抱えていても揺れないんだな。いつだって、強くある。……ああ、なんという、悲劇だ」

「……いいんだ」

恭也は、魅月を握る手に力を入れ直す。

いいんだ、……いいんだ。

彼女の声は、まだ続く。

「弱ければ、守ってもらえる。怯えていれば、かばってもらえる。震えていれば、抱き締めてもらえる。……でも、お前は、強いから。いつだって、守り、かばい、抱き締める側で、……誰もお前に、そうしてはくれなかつたんだな。そしてお前も、それが当然だと思っっている。誰にも助けを求めない」

続くが、これ以上、恭也には聞いていられなかった。

「すまない、戦いを続けさせてもらおう。……悠長にしている時間はないんでな」

「………悲しいな」

「いいんだ」

「悲しいな、孤独な騎士よ。……悲しいな」

「………いいんだ！」

言い切つて恭也は、SCL。

魔力を得、突きを放つ。

御神流奥義 射抜・奔

青空の下、奔る一条の黒い閃光。

「………」

それは、無言で涙を流す彼女の前、シールドに阻まれ、

「悲しみなど……！」

声を搾り出すように吐きながら恭也はそこへ、飛針を投げつける。やる事は、さつきと全く同じだ。

刺さった飛針は、弾かれるもシールドにまたしてもヒビを入れて。

御神流奥義 射抜・追奔

足場を踏み込み、恭也は身に高速を纏いそこへ突撃をかける。

「……………」

彼女は、それでも無言で、ただ、ただ。

「悲しみなどっ、ない……………」

強く叫び、シールドに刃を突き立て破らんとする恭也を、ただただ、流れる涙も拭わず見つめ続けて。

ぱきいんと、硬いシールドがまた、割れて。

恭也は悟る。

揺らがないなんて彼女には言われたものの、しかし結局自分は、……動揺していたんだろう。

彼女の言葉に、動揺していたんだろう。

あんなにも、物の見事に本音を、本心を、言い当てられて。

揺れるあまりに。

愚かにも、一度成功したからと言ってまるきり同じ戦法を、——的確な対策を立ててくるわかっている相手に対して、繰り返した。

シールドが割れた瞬間、

「……………なっ!?!」

彼女は靄を払い、眼前に書を広げ自ら恭也の元へと突っ込んできた。

シールドを割り切り勢い余った恭也の体は、刃は、そんな彼女へと向かい。

掲げられた書に当たる寸前、新たに展開された紫がかった正三角形のシールドに、弾かれて。

「……………なにつ!?!」

「……………悲しみなど、ない? そんな言葉を、そんな悲しい顔で言おうと、誰が信じるものか」

「なに……………、なにを……………なにをした……………つ!?!」

恭也の身は、光に包まれて。

「……………な……………」

「……………なに……………」

体からはどんどんと力が抜けていく。

「いいんだ、騎士よ。もういいんだ、騎士よ。優しい騎士よ。悲しい騎士よ。——眠るといい、我が内で、永遠の園で」

「……

く

……………

あ、

……
ああ……………」

意識は、遠くへ。

「全ては安らかな、…………眠りの内に」

恭也が最後に聞いたのは、そんな彼女の、やはり悲しげな声だった。

デイベインバスターで踊りかかってきた三体の影をまとめて消し去り、ああ、やはり一体一体はたいしたことは無い、問題は数だけだな、なんて考えて。

兄は、大丈夫だろうか。

それが気にかかって、彼のいる方向へ、なのはは視線を向けて。

「……………え？」

眼に映ったのは、光に包まれ、…………薄まり消え行く兄の体。

そして、数瞬の時が経ち。

光が強く瞬いて、同時、——兄の体は消え去った。

「……………え？」

次いで響いたのは、パタンと、書が閉じられる音。

残ったのは、悲しげな顔の銀髪の女性だけ。

まばたき一つ、それでも兄はいなくなつて。

まばたき二つ、それでも兄はいなかった。

「……………お兄ちゃんっ!？」

なのはの声が、兄のいない空に響いた。

第11話 馬鹿

チチチチチ、と、遠くどこかで鳥の鳴く声。

閉じた瞼越しにも感じる強い日射しに、恭也はまどろみから抜け出して。

「……………ん」

身の下には、固い感触。見やれば、自分が寝ていたのは見慣れた高町家の縁側で。

空は青く、薄く漂う草花の匂いと、何よりこの刺すような日の強さからして……………夏、だろうか？

「……………いや……………いやっ！」

がばつと、勢いよく身を起こす。

夏？

そんなはずはない、何を言っているんだ、自分は。

今は、そう、年越し目前の真冬で。

なにより、自分が居たのは自宅の縁側なんかじゃ――。

「あれ、お兄ちゃん、お昼寝してたの？」

「……………なの、は？」

声がして、振り向けば、廊下の先、立っていたのは。

「……………？ どうしたの？」

見まごうはずも無い、妹、なのは。

「なの、は……………？ ………………はやて達はどうかだったっ!? 一体、何が!?」

「え、え、え、な、なになに、ど、どうしたのお兄ちゃん？」

とんとんと、少々あわて気味の足取りでなのはは恭也の元へと駆け寄って。

「……………あ、わかった！ お兄ちゃん、寝ぼけてるんだ！」

途中で、得心がいったようにそう言うと、歩調を緩めてにっこりと笑った。

「……………は？」

「あやや、私、お兄ちゃんが寝ぼけてるのなんて初めて見るよ……………」

「寝ぼ、けて……?」

「うん、きつとそうだよ」

呆然とする恭也をまっすぐに見つめ返してくるなのはの瞳には、
……嘘はないように思えて。
だが。

そんなはずが。

「おいおい、なんだなんだ、寝てたのか恭也。まったく若いもんがこんな日の高いうちから……」

「……あ、お父さん！」

「っ!」

そして恭也は、今度こそ言葉を失った。

だって、そこに居たのは。

「お父さん！ お兄ちゃん、寝ぼけてるみたいなの。珍しいよねえ」

「寝ぼけてる? はは！ なんだ恭也、らしくねえなあ……おい、どうした?」

そこに居たのは。

「どうしたよ、恭也。そんな、まるで」

そこに、居たのは。

「——幽霊でも見たような顔しやがって」

「……父、さん?」

死んだはずの、父、士郎だった。

「……お兄ちゃん!? おにいちゃんっ!? ……エイミイさん!!」

『状況確認っ、……恭也さんのバイタル、まだ健在！ 夜天の書の内部空間に閉じ込められただけ！ 助ける方法、現在検討中!』

そんなエイミイの返答に、一応は息を吐くも、なのはの暴れる心臓は大人しくなんてなってくれない。

いない、いない、いるはずの兄がいない。

それはなのにとって、この世で考えられる限り、最上級の、最大級の恐怖。

「……あ」

足の止まった自分に、突っ込んでくる影の獣。自らの身の丈三倍はあろうかと言うその姿に、なのはの煮立った頭は反応できず。

立ち尽くして。

「……なのはー！」

牙に喰らいつかれる寸前で、飛び込んできたフェイトに抱えられ、辛くも避けた。

「……フェ、フェイトちゃん」

「なのはっ！ しつかりしてっ！ ここで、……ここで私達が出る事をしなきゃっ、やるべき事をやらなきゃっ！ 恭也さんは帰ってこない！」

「……っ！」

フェイトのその言葉に、なのはの頭は心は、やっと動き出す。

そうだ、……兄を。

兄を取り戻さなければ。

「……クロノくん！ 私たちが夜天の書さんの相手をするよ！」

やや遠方、数多くの影達を相手に奮戦するクロノへそう叫ぶ。

「クロノ達は、影をー！」

フェイトも、同じく強い口調で声を上げた。

「いや僕が………わかった………！なのはと

フェイト、二人で対応してくれ！」

自分が相手をすると言いかけたのだろうが、しかし、なのはとフェイトが二人で組んだ場合における戦闘力、執務官としての全体統制の職務、そんなものを鑑みてだろう、苦渋の表情で、少しの逡巡を置いて、クロノはそう許可を出した。

「フェイトちゃん………！」

「うん………！」

頷き合い、なのははフェイトと共に空を駆けた。

そして宙に浮き静かな表情で、しかし相変わらず涙の流れる顔で胸に手を当てたまま静止している銀髪の女性の下へと向かう。

「……夜天の書さん！」

なのはの声に彼女は無反応。

しかし、言葉が通じないわけではないはずだ。だから、なのはは言った。

「お願い！ おにいちゃんを返してっ！」

果たして。

果たして、その言葉に。

「返せ……？」

彼女は反応した。首をこちらに向け、その赤い瞳でなのはを見、

「……ああ、そうか。なるほど、そうか。……お前、愛されているな？」

こちらを指さして、はつきりとそう言った。

「お前、この騎士に愛されているな？ ……ああ、お前もだ、愛されている」

次いで、フェイトも指さす。

「え……？」

「な、なにを言ってる……」

突然の台詞に、何がなんだかかわからず疑問の表情を浮かべる二人へ、彼女は構わず続ける。

「わかるぞ、お前らを見てみると、愛しい気持ちが湧いてくる。騎士を納めたこの胸から、愛しい気持ちが沸き上がってくる。そうか、そうなんだな」

一人納得の声を上げ続ける彼女の様子に、言い知れぬ不安を感じて。

なのはは、再度言った。

「……あ、あの、何を言いたいのかわからないんですけど、と、とにかく、おにいちゃんを返して下さい！」

「……返せ、か」

「は、はい！ 返してっ！ おにいちゃんをつ、かえ」

「……ふざけるなああああああああああああ!!」

「っ!?!」

『Protection Powered』

突然の咆哮と放たれた紫がかった砲撃に、なのはは咄嗟にフェイトを後ろへかばって障壁を展開。

「……くうっ」

多少は押されたものの、防ぎ切る事に成功する。

「なのは、ありがとう……！ 大丈夫？」

「……うん。最初のと きみみたいな、膨大な力は残っていないみたいだね……。対応できない強さじゃないよ」

「……………恭也さん相手に、魔力のほとんどを使っちゃったんだね」

「多分ね、だと思う。……でも」

でも、どうして。

どうしていきなりあんなに、……怒り出したのか。

着弾により発生した煙が、吹いた海風に飛ばされる。

その寸前だった。

「お前があああああああああああああああああああああああああああああ
ああっ!!」

煙の中から、憤怒の形相を浮かべた彼女がなのはの目の前に飛び出してきた。

そして、彼女はそのままなのはの至近に一気に入り込み、

「なっ！ ぐうううっ!!」

その両の手で、

「うううううう……!」

「なのはっ！」

なのはの首を締める。

「お前が！ お前がっ！ どの口で!! 返せだとおおおおおおとおお
おおっ!!」

「う、うううううううううううう……!」

「なのは！ ……このっ！ 止めろっ!!」

なのはへ全意識を向けているらしく隙だらけではあったその体に、フェイトがバルディッシュで横なぎの打撃を見舞う。

やはり何の防御もしなかった彼女はそれを腰元へまともに喰らって、なのはの首から手を離し横方へ吹き飛んだ。

「……はっ！ ……っ！ ……っ」

「なのは！ 大丈夫!？」

「う、……うん。ありがと、フェイトちゃん……」

荒い息を吐いてなのははそう答える。少し視界が揺れてはいるが、そこまで大事ではなく。

そう。

……もう苦しくは無い、息も、首も。

だけど、どうしてだろうか。

(……胸、が)

胸が、苦しい。胸の奥が、痛みを発している。

自分の首を締めてきたとき、彼女の瞳も声も表情も、全てが怒りに染まっついていて。

それは、なのはへの怒りであり。

前後の会話に加えて、直感。わかった。

あれは、兄の、恭也のための怒りだった。

「……あの、騎士の！ 心がっ！」

吹き飛ばされ、ビルの壁にぶつかった彼女はしかしすぐに体勢を立て直しこちらを、……特になのはを、恐ろしい表情で、眼光で睨み付け。

「あの、強く！ 気高く！ 優しい騎士の！ あの騎士の心がっ！」

そして、叫んでくる。

「どれだけ……どれだけ空虚かつ！ わかっているのかっ、お前はっ

！ どれだけ空虚なのか!!」

怒りを、憤りを、叫ぶ。

「っ!？」

なのはは、思わず息を吞んで。

彼女は、続ける。

「空っぽだ！ 何も無い！ なぜだと思っ!？ ……簡単だっ！ 簡単なことだ……!？」

叫び続ける。

「お前らにあげてしまうからだ！ 労わりも、慈しみも、愛しい想いも

！ 全部、全部、自分には少しだつて向けず、やらず、与えず！ 全部お前らにあげてしまふからだ！ ……そして！」

彼女はもう一度、なのはを指さした。

「……度し難い！ ……救い難いな！ ……そして何より許し難い!! お前、お前だ！ 特にお前だ！ 一身にこの騎士の愛を受けているお前だ！ ……お前、お前は………返してこなかったな！ 騎士につ、愛を!!」

「なっ!? そ、そんなこと………! 私は………!」

「与えられる愛を、好きなだけ貪つて！ それが当然とでも言わんばかりに生きてきたな！ この騎士の傍で！ 一番近くで！ ……わかっていないなら教えてやる！ 聞け！」

そして彼女は、なのはを指さしていた腕をまるで首を切るようにぱつと横に払い。

宣告した。

「この騎士は……、お前を愛するこの騎士は！ ——お前に何も求めていない!!」

「——っ!」

それは、あまりに。

残酷な宣告だった。

「この騎士はな………! お前に対して！ 与える事しか考えてない！ 愛をただ、与える事しか頭にない！ お前から愛が返ってくる事を、そもそも微塵も期待していない！」

「な………あ………!」

唐突な言葉に。

しかし、………心当たりのある言葉に。

「この騎士はお前に何も求めてはいないんだ！ ……いつだって、ただ与える側にだけいようとしてる！」

「え………あ………!」

なのはの視界がぐらりと揺れた。顔から血の気が引いていくのがわかる。

「お前に対しこれほどまでに惜しみなく愛を注いでいるのに！ 自分

にはそれが少しも返ってこなくていいと思っっているんだ！ それ
どれだけ悲しい事かわかるか!? それがどれだけ寂しい生き方か
わかるか!? ……それなのに、お前は！ それを、お前は!! わかっ
ていなかったのなら度し難く！ わかっていたのなら救い難く！ ど
ちらにしても許し難い!!」

「そ、……そんな、な……………」

「な、なのは…………。…………あ、貴方につ！」

ふらついたなのはの身を支え、フェイトが叫び返す。

「貴方につ！ なのはと恭也さんの何がわかるっ！」

「わかるさ！ 胸の中、取り込んだ騎士の心が私には手に取るように
わかる！ それに…………私はよく知っている！ 孤独な世界の悲しみ
を、寂しさを、切なさを！ よく知っている！ ずっとそんな世界で
生きてきたんだ！ ……だから、同じような世界に生きる、この騎士
の悲しみが私にはわかる！」

彼女は、眼を見開いて強く言葉を放ちつつ、胸に手を当てる。

「…………今、騎士は私の中で、……………楽園にいる！ あの騎士が幸せに
生きられる、あの騎士が幸せを掴める、あの騎士が自らの生に幸福を
期待できる、そんな世界の中にいる！ ここにいれば、あの騎士は救
われるんだ！」

「……………………え？」

その言葉に呆然とするなのはへ、彼女は続けた。

「お前らの傍にいても、決して幸せになれないあの騎士が、幸せになれ
る楽園にいるんだ！ ……それを、返せなどと！ 馬鹿を言え！ お
前の都合でっ、のうのうと愛され生きてきたお前の都合で！ あの騎
士をまた！ 救いの無いこの世界に引き摺り戻す気か!!」

「…………………………………あ」

ぼろりと、零れたのは涙で。

そして、…………戦意だった。

「…………あ、あ、…………………………………あ」

もう、止まらない。

零れ落ちていく。

「なの、は……う？」

そうだ。

そう、だ。

だって、真実なんだ。

彼女の言葉はきつと……そう、真実だ。

なののはの兄は、そういう人だった。

なののはの愛する兄は、愛しい人は、なののはを心の底から愛してくれていて。

その実、自らに愛が与えられる事なんて、期待していないのだ。

彼自身、彼を愛さず。

誰かに愛されることも期待せず。

ましてや、それをなののはに求めることなんて、微塵も無かった。

薄々……なんて言い方はしない。

わかっていた。

わかっていたんだ。

わかって、いたんだ……。

「もう………いい、よ」

「なののは!？」

「もう、もう、もう、………やめよう。やめよう。」

……だって、そうだよ。言うとおりでだよ……。そうだ、そうだよ……。

返せなんて、きつと、私は、本当に……」

ああ、本当に。

「馬鹿な事、言ったよ……」

「ほおら、沢山食べてね」

「ああ、うまそうだ。さっすが桃子だな」

リビング、テーブル。

昼食。

恭世の頭は、いまだ、うまく働かず。

そんな、端的な現状認識が精一杯だ。

「おいしそー！ あ、シチューもある！」

「うん、なのはの大好きな、甘いシチューよ」

献立の中に好物を見つけて満面の笑みを浮かべるのはに、微笑み返す桃子。

「よかったね、なのは」

「うん！」

美由希が、なのはの頭を優しく撫でた。

「うおーうまそー！ やっぱ桃子さんすげえなあ」

「お菓子づくりはともかく、料理までこの域やもんなあ。ハイスペツクや」

はしやいだ笑みを浮かべつつ晶は快哉をあげ、レンはうんうんと何度も頷きながら目の前に並んだ料理をじっくり見やる。

「……恭也？ どうした？ 早く座れ座れっ、飯が始まらんぞっ、俺はもう腹がぺこぺこなんだ！」

桃子も、美由希も、なのはも、晶も、レンも、……そう言って急かす士郎も。

皆、既に席についている。

立っているのは自分だけ。

「おにーちゃん？」

「……あ、ああ」

なのはにも疑問の顔で促されて、恭也はとりあえず席に着いた。

「うん、それじゃあ、いただきます！」

「いただきますっ！」

桃子の、嬉しそうな声。

士郎の、弾んだ復唱。

「いただきます」

「いただきますっ！」

美由希、なのはも明るくそれに続いて。

「いただきますっ！」

「いただきます」

晶の元気のいい、レンの柔らかい言葉の後、

「……いただき、ます」

最後に呟いた恭也の、困惑の滲むそんな声で食事は開始された。

「おいしいっ！ そうだおカーさん、そろそろなのはもお料理覚えたんです！」

「あらっ！ そう！ それじゃあちよつと練習してみる？ そうねえ、土曜日とか日曜日のお昼は一緒に作ってみよっか？」

「うんっ！」

流れる、穏やかな時間。

「お、なんだなんだ、なのはももうそんなに大きくなったか？」

「おとーさん！ もうなのはは小学三年生です！」

「はは！ そうかそうか。うん、そうだな！」

「……小学三年生のなのはお料理を覚えられたら、私の立場はないなあ……」

「美由希、……お前の料理は……その、まあ、なんだ、……いいじゃないか、な？」

「え!? とーさんフォローしてくれないの!？」

「お前の父さんにもな、出来る事と出来ない事がある」

「ええ!？」

緩やかな、日常。

会話の中、美しい音色が混じり始めた。

「あ、ファイアツセさんだ」

「お、ほんまや」

テレビを見やれば、そこには白い衣装を見にまといその煌くような歌声を響かせるファイアツセの姿。

「CSSの、イギリスでのライブ映像みたいね」

「だな。……あんなちっちゃかったのに、いつの間にかいい女になったなあファイアツセは」

「へえー、あらあら士郎さん、浮気かしら？」

「え、いやいや！ そういう訳じゃないぞ！ おいおい勘弁してくれ

桃子！ 俺は桃子一筋だよっ」

「ふふ、冗談よ」

焦ったように言い募る士郎に、桃子は少女のように微笑んだ。士郎も笑みを返して、

「そうか、はは、ま、俺の方は冗談じゃないけどな。何年経っても桃子一筋だ」

少しいたずらに言う。

「も、もう！ 士郎さんたら……」

赤面する桃子の対面、美由希が呆れたように苦笑する。

「とーさん、かーさん、……お願いだからこんな真っ昼間っからいちやつかないでよ……。胸焼けしそう」

「なんて言うか、見た目も雰囲気も未だにバリバリの新婚さんっすよねえ」

「ええことなんでしようけど、二人の周りだけいっつもピンク色や」

晶とレンも美由希と同じく、苦笑しながらそう言った。

「なあに、いいことなんだからいいのさー」

士郎は堂々と、気持ちのいい笑みを浮かべて。

そんな、まるで。

それは、まるで。

ごくごく普通の。

ごくごく普通の、どこにでもある、……幸せな一家の日常だった。

差し込む日射しが、眩しくて。

開けた窓から流れ込んでくる風が、優しくて。

包むこむ雰囲気、懐かしくて。

身じろぎ一つ、出来なかった。

「……あら？ 恭也、どうしたの？」

見かねた桃子が、声をかけてくる。

「ぜんぜんお箸進んでないじゃない、珍しいわねえ……。恭也の嫌いなものとか入ってたかしら？」

「いやいやいや、俺の息子に嫌いなものなんてないはずだ。それも桃子の料理とくれば、たとえ食った後に腹の中で爆発するとわかっていようが食うはずだ！ そうだろっ、恭也？」

「もう、士郎さん！ 私、そんな料理作らないわよ！」

「はは、わかってるわかってる！ 桃子の料理はいつでも最高に美味くて、そして最高に体に良いものばかりだ！」

明るく、笑う士郎。

ああ、そうだよ。

嫌いなものなんて、ない。

愛する人に先立たれて、それでも、交わした約束を守ろうとして。

大好きなお菓子作りにのめり込もうとした、今貴方の前で幸せそうに照れて笑うその人の、……新作お菓子作りの実験台になり過ぎたせいでもともと苦手だった甘いものはさらに苦手になってしまったけど。

それでも、嫌いなものなんて、なくて。

……強いて言うなら、酒くらい。

貴方と、酌み交わすことのなかった、酒くらいだ。

「……ほんとにどうしたの、恭也？ なんか、ちよつと変よ？」

「まあ……恭ちゃんが変なのは、割と普通のことだけど……」

「お、お姉ちゃん……」

苦笑する美由希に、さらに苦笑するなのは。

「なんかあつたんですか師匠？」

「おししょっ！」

晶とレンが揃って恭也の方へ視線を向けてくる。

どうすればいいものかわからず、黙る恭也の代わりに士郎がからかうような口調で言う。

「いやあそれがなあ、聞いてくれよ、桃子、美由希、晶、レン。こいつ、さつきまで縁側で寝こけてたみたいでな、その上なんと、起きたら起きたで寝ぼけてたんだぜ。なあ、なのは」

「うんつ。あんなおにーちゃん初めてみたよ」

「あらあらあら、ほんとに珍しいわねえ。寝ぼける恭也……、なんだか見たかったかも」

「寝ぼける恭ちゃん、確かに珍しい……」

「……というか、まだ寝ぼけてるみたいだな。だーいじょうぶか、恭也

？」

対面に座る士郎に顔を覗き込まれ、恭也はたまらず眼を逸らす。

「あ、……ああ」

「……まったく、御神の剣士ともあろうものが情けない！ よし、これ食ったら打ち合うぞ、恭也！」

「あ、父さんと恭ちゃん、試合うの？ 見たい見たい！」

「ああ、見るといい。……恭也あ、いくら御神の剣士として完成をみたとはいえ、この父を超えるにはまだまだ至らないからな、みつちりしごいてやる」

「……………え？」

がぼつと、恭也は顔を上げた。

……今、なんて言った？

「え、つてお前なあ……。なんだ、もう父を超えた気でいたのか？」

「ち、違う……。違う……。……俺が、完成？ 御神の……剣士として？」

「……お前本当に大丈夫か？ 去年、そう言つたらろうが」

これは重症だ、と、士郎は頭を振って隣の桃子に笑いかける。

「なあ桃子、桃子さん、やっぱ爆発する食い物ないか？ ちよつとこいつに眠気覚ましを」

「ば、爆発しちやったら眠気覚ましとかそんなレベルじゃすまないでしょ！ もう、……でも、そうね、苦あいコーヒーでも煎れようか、恭也」

笑顔で、そんな風に桃子は言つて。

その顔には、一切の影はなくて。

「…………… どうしたの、お兄ちゃん」

なのはも、

「恭ちゃん？」

「師匠？」

「おししょ？ ほんまにどないしたんですか？」

美由希も、晶も、レンも、実に屈託なく、幸せそうで。

テレビから響き続けるフィアツセの声も、美しく、迷いのないもの

に聞こえて。

「おおい、恭也、どうしたんだ？ コーヒー、いるのか？ いんねえのか？」

そして、士郎が居て。

父、士郎が、居て。

自分は、——御神の剣士として完成していると言う。

……ああ。

そうか。

そうか。

ここは。

（——楽園、か）

「はああああああああつ！」

「おおおおおおおおつ！」

高速で飛びあい、ぶつかっては離れて、ぶつかっては離れてを繰り返す、金色の髪と銀色の髪を持つ、二つの人影。

金色の髪……フェイトは、戦うことを選んだ。

戦い、兄を、恭也を取り戻すことを選んだ。

エイミーから入った通信によれば、やはり結局、ワクチンが展開し切れば兄は出てこられるとの事で、最善にして唯一の策が、戦い、魔力ダメージを蓄積させること。

フェイトは、奮戦し続け。

なのはは、ただ、それを傍観し続ける。

戦闘の余波のせいかわ、影の獣はただただビルの脇浮かんでいるだけのなのはの下まで襲い掛かってはこなかった。

「……………」

音もなく流れ、落ちていく涙。拭う気にすらならない。

戦う気には、なれない。

だって、わがままな気がしてならないから。

楽園にいる兄を、ここに引き戻すのは。

彼を幸せにできない自分が、ただ彼の愛を貪ってきただけの自分が、そんな事をする権利は無いような気がして。

恭也を、兄を、彼を、愛している。

それは絶対の真実で、揺ぎ無い事実で、なのはの確かな現実で。

でも、結局それは、兄に届いていなかった。

独りよがりの愛だった。

あの人は自分に、愛なんて期待していなくて。

なのはがたとえ、彼を憎んでいたとしても。微塵も愛していなかったとしても。

彼は変わらず、なのはを愛してくれるだろう。

自分の愛に、一体なんの意味がある？

少なくとも、彼の幸せには繋がらなかった。

馬鹿みたいだ、……いや。みたいじゃない。

馬鹿だ。

ずっとずっと、馬鹿だった。

大馬鹿者だ。

「この……わからないのかっ!? この騎士の幸福をお前は邪魔する気なのかっ!?!」

夜天の魔導書、銀髪の女性が空の下、一旦高速機動を止めその場に浮遊し、両の手のすぐ上へ黒い球体を浮かび上がらせつつ苛立たしげに叫ぶ。

「お前も、愛されているっ! この騎士に! それをいい事に……これからも貪る気かっ、恥知らずが!」

同じく機動を止めたフェイトは辛辣なそんな言葉に、しかし、

「……私はっ!」

凜とした、声を返す。

「私はっ、出会ってからずっと、ずっとその人に甘えてきた! 甘えて、頼って、縋ってきた!」

彼女の姿はもうソニックフォーム……低耐久高機動のもので、風にはためくマントはないけれど。

海風抜ける青空の下、誇るように堂々としている。

「……ならばっ！ そうであるならばっ！ この騎士を想う気持ちが
あるならば……！」

「あるよ！ 想ってる！ 私はその人を想ってる………——好
きでっ、愛してる！ だからっ！」

ああ。

眩しいなあ。

「だから、今度は私の番！ 今度は、今度は私が！ 守ってもらった私
が、かばってもらった私が、抱き締めてもらった私が、泣かせてもらっ
た私が、甘えさせてもらった私が、笑顔をもたらした私が、……幸せに
してもらった私がっ！！」

眩しくて、眩しくて。

なのはは、眼を逸らす。

「私がつ、その人を……恭也さんを、幸せにするっ！！ 世界一、幸せに
してみせる！！」

(フエイト、ちゃん……)

——わかっていた。

この、凛々しく強く美しい、自分の親友が。
兄を好いていることなんて。

本人が自覚したのがいつごろかは知らないけれど、でも、少なくとも
も鍛錬を始めるころには惹かれ始めていて、……その後、何かきつ
かけがあったのかもしれない、十日か、それくらいか、経ったころには
もう、決定的に、彼女は兄を好いていた。

わかっていたし、そして、わかってる。

彼女は、……似合いだ。

「私はその人に、甘えることを教えてもらった！ だから、今度は私
が、……すぐには出来ないかもしれない、でもいつかは私が！ その
人に甘えることを教えてみせる……！ 私に、甘えてもらう！ だっ
て私は知ってるからっ、教えてもらったから！ すべてを委ねて甘え
ることが、どれくらい幸せなことなのか！」

胸に手を当て毅然と言葉を放つフエイトは、誇らしい自分のこの親

友は、……兄と、似合いだ。

あと数年も経てばなんの違和感もないどころか、きつとぴったり嵌まると言っただけじゃない、私は沢山の事を教えてもらった……！ だから、

「それだけじゃない、私は沢山の事を教えてもらった……！ だから、きつとそれ以上を、恭也さんに、贈ってみせる！ 大きくなって、大人になって、力をつけて、強くなって……」

外見だけの話じゃあもちろんなくて。内面もきつと、いや絶対、ぴったりで。

本当に、お似合いだと思う。

「……隣に立って！」

「……あ」

寄り添い歩く二人の姿は、簡単にイメージ出来て。

その度に、気が狂いそうになる。

いいなあ。

いいなあ。

いいなあ。

想いの強さも深さも大きさも、どこの誰にだって、フエイトにだって、絶対に負けない自信はある。

あるけれど。

それは、許されるものではなく。

そしてその上、何の意味もないとはつきり宣告されて。

自分は、もう、立ち止まってしまった。

「……世迷いごとを……」

「なんとでも、言ったらいい。好きに言ったらいい。私も、好き勝手に言う……」

すう、と、遠くからみても不思議とわかるくらい明確に、フエイトは息を吸って。

「——恭也さんを、返せ!! 私の、大好きな人を!!」

お腹からの、力強い声。

心からの、誇り高い意思。

ああ、眩しい。

「……なにを、この……！……駄々っ子があああああああああああああああ！」

「……っ!? それは……！」

驚きに揺れるフェイトの前、夜天の書の手のひらの上、浮かんでいた球体がその姿を変えた。

それは、剣。否、刀。

全てが黒い魔力で構成された、各々の手に一本ずつ、計二振りの日本刀。

見覚えがある。魅月、ではなく、あれは八景だ。

兄が、父から継いだという愛刀。

ヴィータに襲われたあの時に、なのはを守り戦った彼の手に握られていた、刀。

「言う事を……っ、聞けえ！」

はき捨てるようにそう言って、銀髪の彼女はそれを手にフェイトへ斬りかかる。

「……それはこっちの台詞だ！ いいからっ、さっさとっ、あの人を返せ!!」

勇猛に、フェイトはそれを受け止め、捌き、いなし、そして反撃の刃を奔らせる。

またも再開された激しい打ち合いは、互角に見える。

呆然と見やるのはの前で、

「ぐっー！」

「うあっー！」

書の彼女とフェイト、お互いにお互いの一撃が入り、同時、揃って後方へ吹き飛んだ。

それを見て、理性は告げる。

ここで、後衛の自分は追撃の砲撃を放つべきだ、と。

すばやく魔力を充填すれば、未だ体勢を直しきれない書の彼女にデイバインバスターを当てるのは容易だ。

そうすれば、戦況は傾き。

そして勝てば、兄は帰ってくる。

……わかつてはいる。
いるけれど。

今の自分に、どうしても、それは。

そして、轟音。

広がった煙は、着弾の証。

「……………ぐうう、お前っ！ まだっ！」

損傷したバリアジャケットをはためかせ、こちらを睨んでくる書の
彼女――。

「……………えっ？」

「なのは……………」

眼前に漂う魔力の残滓、手に残る感触。

そして何より、いや、何ということもない。……先ほど、彼女へ奔つ
た閃光、その色は。

桜色。

まさか見まごうはずもない、自分の、魔力の、魔法の、色。

つまり、撃つたのは、自分で。

そう、自分は、……撃つた、らしい。

「なん、……………で……………」

なぜ。

なんで、……撃つた？

兄を楽園から引き戻すことを自分は望まず、だから、戦う気なんて
なくて、なのに、なんで。

なんで……………」

——そして勝てば、兄は帰ってくる。

「あ……………」

思考を遡って、引つかかったのはその考え。

ついさつき、頭の中、思ったことで。

「あ、……………ああ……………！」

手ががくがくと震える。

「あ、ああああ……………！」

……そうだ、簡単だ。だから自分は、撃つたのだ。撃つて、当てて、

それを続けて、勝てば。

兄が帰ってくるから。

自分の傍に、帰ってくるから。

だから、撃つたのだ。

「ああああああああああああああああああああ……！」

なんて、なんて、なんて。

なんて——……醜い。

「なのは……」

「……っ」

こちらを見やる友の眼を、見返す事なんて出来なかった。

今すぐに、ここから逃げ出したかった。

こんな醜い自分を、あんなに美しい友の前に晒すのが、あまりに
恥ずかしくて。

兄を引き戻す事を望まないなんて思っておきながら、それでも結局
は兄を求めて撃つた自分が、あまりに恥ずかしくて。

こんなにも薄汚れた自分が、……こんなにも白いバリアジャケット
を着ていることすら、滑稽に思える。

「違う、違う、違うの……！ わたし、わたしは………っ」

自分の口は怯えてただただそう言うも。

違うのか？

何が？

……違う、と言うよりは間違いで。

一体いつからどこから、自分は間違ったのか。

わからない。

「う、うううううううううう……！」

眼を閉じ、しかし涙はこぼれ続ける。

この涙は、何の涙だろうか？

許しても請うつもりなのか。

……だとしたら、本当に、自分は救えない人間だ。

「お前の……」

書の彼女の、重々しい声が聞こえた。

「お前の涙を見ていると、胸が引き裂かれるようだ……。……………」
の騎士の愛が、暴れ出すんだ。その涙を止めたいと」

「……………」

「愛されて、いるなあ！」

目標を変えたらしく、彼女はこちらに踊りかかってくる。

ガキンと、響く高い音。

「……………」

間に割り込んだフェイトが、書の彼女の黒い二刀を同じく黒い相棒バルディッシュで受け止めつつ、叫ぶ。

「わかんないよ！ わたしには！ ……なのはその涙の意味が、理由が、私にはわからない！ ……なんで泣いてて、どんな涙で、なんて、わからない！」

なのはに背を向けながら、しかし確かになのはに向けた言葉を放つ。

「それはわからないけれどっ！ ……でも、なのは！ ……ねえ、なのは！

……………一つ、わかることがあるよ！」

ギギギギ、と、擦れあい、押し合う音と、火花を飛ばして。

フェイトは叫ぶ。

「そんな……………、そんな涙じゃ！ ……涙なんてものじゃっ！ ……消えないでしょ!!」

「……………」

「消えないよ！ ……なのはの、瞳に！ ……心に！ ……胸に！ ……魂に！ ……」

——燃える炎は消えないよ!! ……涙なんかで、消えるもんか!!」

「……………」

……………?

……………炎？

……………炎。

……………ああ、そうか。

……………そう、だ。

……………これは、……………炎だ。

……………ずつとずつと、……………燃えて、燃えて、なのはを内から焦がし続けた、

灼熱の、豪熱の、爆熱の。

想いの、炎。

「炎……」

……そうだ。

炎、だ。

ずっとずっと、……消えて欲しかった炎だ。

”どうした、なのは”

だって、なんにもならない。

”ほら、そんなに泣くな、なのは”

いくら燃えたって、なんにもならない。

”大丈夫、俺はここにいるから、なあ、なのは”

なんにも、ならないんだ。

”なのは”

「……………おにい、ちゃん」

その人を、いくら想っても、駄目なんだ。

結ばれない。

報われない。

だから、消えてくれと。消えてくれなければ困るんだと。その熱も輝きも、存在すら、意味がないんだからと。

何度も、何度も、何度も言った。叩きつけるように、押しつぶすように、吹き飛ばすように。

何度も、言って。必死に、消そうとした。

なのに。

一度だって、一瞬だって、消えなかった。

「おにいちゃん……………」

その手に、声に、言葉に、心に、優しさに、強さに、愛しさに、存在に、触れるたび燃え上がって、思い出すたび燃え盛って、つまりいつだって燃え続けて。

消えないんだ。

消えたことなんて、なくて。

消えることなんて、ない。

永劫の、永久の、——永遠の、炎。

高町なのはが高町なのはである限り、決して消える事のない、永遠の炎。

そうだ、だから、さっきの一撃は、火の粉。

なのはの内、燃える炎が飛ばした火の粉。

彼を求めて燃え続ける炎が、身じろぎするように飛ばした火の粉。

正しいとか、間違いとか。

そうするべきとか、そうしないととか。

そんなものを、しがらみを、まるで無視して奔った、一筋の火線。

そして。

この炎は、……言うまでもなく、自分自身で。

だから、さっきの行為は、自分の本意で。

『Master』

「……………レイジングハート……………」

『Yes. It's my name "Raising Heart"』

「……………レイジング、ハート」

『Yes, master. I, your "Raising Heart"』

「レイジングハート……………」

『Yes, my master』

レイジングハートは、言った。

レイジングハートだと、言った。

私は貴方の、"レイジングハート"だと、そう言った。

「そう、っ、……………だね……………」

星は、天に。

「そう、だよね……………」

風は、空に。

「そうだ、そうだよね……………っ、レイジングハート……………っ」

不屈の心は、そう、この胸に。

この手に魔法を。

そうしたら。

「……………そう、だ……………」

愛しい人は、——私の傍に。

思った瞬間、はつきりわかった。

炎が、その温度を、規模を、存在を、大きくした事が。

「……………そうだ、そうだよ、……………そうだよ、レイジングハート……………！ 私、間違ってたね……………！ 馬鹿だったね……………！ 大馬鹿者だったよ……………！」

そうだ、間違っていた。

馬鹿だったんだ。

「手加減なんか……………するべきじゃなかったんだ……………」

ましてや。

火加減なんて、もつての他だった。

「いつだって、全力全開、それが私だったのにね……………っ！」

「ありがとう」

恭也は、そう言つて頭を下げた。

「ありがとう、本当に、ありがとう」

「え、いや、コーヒー煎れるってくらいでそんな、なに言ってるの恭也？」

困惑する桃子に、首を振つて。

「いいんだ。……………いいんだよ。ありがとう」

「恭ちゃん？」

「お兄ちゃん？」

「……………師匠？」

「おししょ？」

不思議そうに見てくる妹達に、笑いかけて。

「……………素敵な時間をありがとう、幸せな世界をありがとう。でも、いいんだ。——俺はここには居られないよ」

ピシ、と、音が響き。

ついで、士郎のため息。

「……………恭也、いいのか？」

桃子、美由希、なのは、晶、レンの五人は、まるで彫像のように動きを止めて。

きらきらと、光を散らせて消え去った。

残ったのは、士郎と、恭也だけ。

父と、自分だけ。

「ここにいれば、お前が欲しかったもんは全部手に入る。……………幸せに、なれるぞ」

「……………ああ、そうだと思う」

穏やかな日常。

父の存命。

そして、——自分の剣士としての完成。

願って止まなかった、自分の欲しかったそんなもの達が手の中にある。ここは、幸せな世界だ。

「……………けどな、父さん」

恭也は眼を瞑り、言う。

「俺は別に……………いいんだよ。ここに来て、改めてわかった。結局、そうなんだ」

こんなにも満たされた世界に置かれて、いくら自分が死ぬほど欲しかったものを手にしても。

それでも想うのはやはり、……………外にいる大切な者たちの事だった。

そうだ、そうなんだ。

「……………俺は、俺はな、父さん」

この”自分の幸せがある世界”に来て、改めて強く実感する。やっぱりそうなんだと再認識する。

そうだ。

「俺にとって……………——俺自身が幸せになることは大して重要なことじゃないんだ」

高町恭也にとって、高町恭也自身の幸福は、どうでもよかった。

血に塗れ傷を負い這い蹲って生きてきたこんな自分の幸福なんて、自分が好きになれないこんな自分の幸福なんて、もうとつくの昔に、どうしてもよくなっている。

「俺は、周りの大切な人達さえ幸福であれば、彼らの幸福さえ護られれば、それでいいんだ。それだけでいいんだ」

誇るわけでもなく、驕るわけでもなく、それはただの端的な事実。前向きな思想ではないだろうが、別に後ろ向きだとも思わない。

ただ単に、自分はどうしようもなくそういう人間だと言うだけだ。

「ここは、……永遠だぞ。それでもか？」

恭也は、苦笑を浮かべて、また首を振る。

「永遠なんて、……ない。皆変わっていくし、変わっていくかなければならない。……俺は、もう大して変わる事は出来ないけれど」

恭也は前を見る。士郎を見つめる。

「それでも、変わっていく大切な人達を、護りたいんだ」

返ってきたのは、はああ、と、再度の大きなため息だった。

「馬鹿だな、お前」

「知ってる」

「俺の息子だ」

「……そうかな」

「そうさ」

「………なあ、父さん」

いつの間にか、ファイアツセの歌は止まっています。

相変わらずどこからか遠く聞こえてくる鳥の鳴き声をバックに、恭也は士郎に言う。

それは、ずっと言えなかったこと。

それは、ずっと言いたかったこと。

「ごめんな、父さん」

「何がだ？」

「出来損ないの、息子でごめん」

無言の士郎に、恭也は続ける。

「俺は貴方のように、明るく大らかじゃなくて。俺は貴方のように、稀

代の天才じゃなくて。俺は貴方のように、家族を優しく愛してやれない」

多少改善されたとはいえ、仏頂面の暗い雰囲気。少し明るい展望が見えてきたとは言え、故障を抱えた欠陥剣士。心から愛しているとは言え、不器用な触れ方。

それが、自分で。

父とは、似ても似つかない。

「ごめん、ごめんな、父さん」

「……お前は、何回俺にため息を吐かせる気だ、恭也。お前は本当に馬鹿だよ」

渋い表情で、言葉の通りため息を吐いて、士郎は言った。

「馬鹿野郎が、俺の息子を馬鹿にするな」

「……………」

その言葉に、恭也は俯いた。

「なあ恭也、いいじゃねえか。それがお前ならいいじゃねえか。……俺の息子だ、いいのさ、それで」

言つて、士郎は席を立った。

「……父さん？ どこへ……」

「庭だ、行くぞ。ここから出るんだろ？ ついでに、……一個、技を教えてやる」

言われたとおり、父と共に夏の匂いの色濃い、見慣れた庭に出て。

「ほらよ、恭也」

「……っ、と。……………」

放られたのは、銀の指輪。

嵌めて、展開する。

恭也の身を漆黒の衣が包み、腰には二刀が下がる。

「いい刀だな」

そう言う士郎の腰にはいつの間にか、恭也も長い時を共に過ごした刀、八景があった。

「なんていうんだ、そいつ」

「魅月」

「……いい名だ」

士郎は満足気に微笑んだ。

「恭也、……俺の動きをなぞって、お前が完成させろ。なあに、俺には出来なかつたけれど、お前になら出来るさ。俺の息子だからな」

「……ああ」

頷いた恭也に、士郎は、唄うように言った。

「これを極めた剣士の前では、すべてが零になる。間合いも距離も、武器の差も。御神の奥義、その極み……、行くぞ」

そして始まった素早く、無駄のない、あまりに美しい、その動きを。まばたき一つせず、見つめ、そしてなぞり、自分の中で消化して、押し上げていく。

父から技を受け渡される懐かしい感覚を、感触を、味わいながら。

御神流奥義乃極 閃

青空が裂け、世界が割れた。

一つ、誇れることがある。

高町なのはには、一つ、誇れることがある。

暗い気持ちも黒い気持ちも重い気持ちも、抱え込んで、生きてきて。そう、だから決して、綺麗ではないけれど。この身に纏うバリアジャケットのように、純白ではありえないけれど。

まっしろでは、ないけれど。

「……………」

眼を閉じ、思う。

そうだ。

まっしろでは、ないけれど——まっすぐでは、あつたんだ。

愚直でも、正直に。

そんな道を生きてきた。それだけは、これだけは、誇れるんだ。寄り道なんかするはずなくて、周り道なんかあるはずなくて、帰り

道なんかなくていい。

いつだって、一本道。

まっすぐに、兄の下へ。

大好きな、彼の所へ。

愛する、あの人の傍へ。

それが自分の、生きてきた道で。生きていく道で。

「……………そう、だ」

行き先を照らすのは、自らの内にいつでも、いつまでも、宿り輝き燃えるこの炎。自分自身が生んだ、この炎。

「……………そうだよ、間違ってた。馬鹿だった」

届かない？

意味がない？

私の愛は、求められていない？

……………だったら、話は簡単じゃないか。シンプルだ、ごくごく単純な事。

なのはは、大きく大きく息を吸った。青空の下、堂々と。自らの身の内、燃える炎に空気を、酸素を、燃料を、送り込むように。

そして。

「……………あああああああああああああああッ!!!」

咆哮をあげる、これは叱咤だ。馬鹿だった自分への、叱咤にして、

……………激励。

もう間違うなど。

この想いは間違いじゃないんだと。

「……………なにを、なんの……………っ、つもりだ……………!」

フェイトと鏝迫り合う銀髪の書の彼女が、こちらを睨み、困惑気に見える。

「……………遅いよ、なのはは」

フェイトが、親友が、——恋敵が、首だけ振り向きにやりと笑う。

「……………ははっ」

なのははも、笑う。笑った。気持ちよく、清清しく。

そうだ、そうだ。

届かない？ なら、届くまで。

意味がない？ なら、意味を成すまで。

求められていない？ なら、求められるまで。

方法が、方向が、間違っていたわけじゃない。ただ、足りなかっただけ。力が、熱が。

愚かな事に手加減していて、馬鹿らしい事に火加減していて。

足りなかった、ただそれだけだ。

「そうだ、そう、そうだ……！」

彼に飛びつき抱きつく時、いつもなのは少し力を抑えていた。手を抜いていなくとも、加減をしていた。

全力じゃなく、全開じゃなかった。

だって、まっすぐ前へ進んではいても、やっぱり後ろめたかったから。

許されない想いを、普通じゃない想いを、抱いてしまっているから。

だから、いつも少し、力を抑えた。全力全開で抱きしめて、全部を伝えてしまつたら、いけないと思っていたから。

(馬鹿だな、本当に……)

今ならわかる。もう、わかる。

好きな人を、好きだと叫んで何が悪い。

愛する人を、溶けるほど愛して何が悪い。

……いや、悪くたって構わない。構うもんか。悪くたって、いい。

間違つてないから。

転んでも、倒れても、汚れても、傷ついても、血を流しても、いい。

それは正当で、それが正答だ。

だから、燃えろ。燃え盛れ。燃え上がれ。大丈夫、燃え尽きることもなんてありはしないから。

未来永劫絶対に、永遠に、消える事などありはしない。

それが自分の、この、永遠の炎だ。

瞳に、心に、胸に、魂に。

誇るように灯る、愛の炎。

彼を想う、永遠にして無敵な、——私の炎。

『Master, call me Exelion Mode』

「……………本体の補強は終わってない。私がコントロールに失敗したら、レイジングハートは……………壊れちゃうよ?」

『I, unbreakable if you have the eternal blaze』

「……………レイジングハート」

『Please call me, my master』

「……………うん!」

相棒のその言葉に、なのはは片手に握った彼女を眼前に掲げた。カートリッジが一発、勇壮なコッキング音と共に空へ排出される。

なのはは魔力を身に漲らせ、強く叫んだ。

「レイジングハート、エクセリオンモード……………ドライブッ!」

『Ignition』

声に応えレイジングハートの各部が稼動、その姿をエクセリオン——リミッターを解除したレイジングハートのフルドライブモードへと変える。

「お前……………っ! なんだっ、結局は、自分の欲に生きるのか!」

なのはの戦意を取り戻した様子を見て、顔をしかめた書の彼女はそう叩きつけるように罵倒の言葉を向けてきて。

「私の中で幸福を享受せんとするこの騎士のっ! 邪魔立てをするのか!?! お前は所詮っ、結局……………」

なのははそれに俯いて——

「うるっさいなあ」

「なっ!?!」

「……………うるさいって、言ってるの」

苛立ちを隠さずに、言葉を返す。

「(ご)ちや(ご)ちや(ご)ちや(ご)ちや好き勝手……………まあでも、そうだね、貴方が私に、気付かせてくれたっていうのは事実か。大切な事を教えてくれたっていうのは確かか。……………うん、じゃあ、私も、教

えてあげるよ。知らないでしょ？ そう、知らないはずだよ。私以上にこれを知っている人なんて、悪いけど一人だっていないんだから」
「すごいんだよ？」

なのはは、困惑の表情を浮かべる彼女に、そう続けた。

「おにいちゃんの愛はね、すごいんだよ？ すつごく、すつごく、……気持ち良いの。わかる？ ねえ、わかる？ すごい、傍に居るだけで、声をかけられるだけで、あの手に触れられるだけで、もうそれだけで、頭が溶けそうになる。正気を保っていられる自分を褒めてあげたいくらいだよ。ねえ、わかるかな？ すごいんだよ？」

あんな感動ほかになく、あんな官能ほかになく、あんな快樂ほかにない。

あははは。あははは。

「熱くて甘くて、頭を溶かして、あつという間に体全体に染み渡って、骨抜きにされちゃうの。気持ち良くて、ほんとに、気持ちよくて……ああ、そう、そうだよ、本音を言えば、一時だって、一秒だって、一瞬だって離れたくない。あの人の傍から、愛から、離れたくない。だってそんなの生きている意味ないよ。私はあの人を愛して、あの人に愛されるためだけに生きているんだ。ねえ、だからさ」

そこで一旦言葉を切って、なのははレイジングハートを両手で構え、顔を上げ。

「返せ」

睨みつけ、言う。

「いいから返せ。さっさと返せ。即座に返せ。とつとと返せ。即刻返せ。今すぐ返せ。返せ、返せ、返せ……！ ……………おにいちゃんは」
息を吸って、言った。

「おにいちゃんは、——私のだ!!」

「……………呆れて物も言えんっ！ 自分のものだなどと、そんな戯言を……………」

「戯言じゃないよ、冗談でもない。……そう、いやはやほんとに冗談じゃないって言うか、寝言は寝て言えって言うか、何を考えてるのって言うか、何も考えてないんじゃないのって言うか、勘違いしてる

方々が世の中にはずいぶん多いんだよねえ、困ったものなの。……ねえ、今まで一体何人いたと思う？ 私のおにいちゃんに手を出そうなんて人が、今まで一体何人いたと思う？」

タガが外れたように、なのはの口は正直に言葉をつむぐ。

「私の知っている限りでも、両手両足の指の数じゃあ足りない。……まったく、勘弁してほしいの。私のおにいちゃんに手を出そうなんて、ほんつともう、止めてよね。あの人の隅から隅まで一切合財一つ残らず全部が全部、私のなのに」

相棒、レイジングハートが限定解除の姿となったと言うのなら、自分だってそうだ。

今まで、思ってはいたものの決して口にはしなかった言葉を、もうなのはは隠さない。

完全に、本気で本音の本心で。

正真正銘にして、全力全開。

高町なのはのフルドライブ。

「いい？ おにいちゃんね、私のなの。わかったら早く返せ。誰にも渡す気もなければ譲る気もない、おにいちゃんは、私のだ。……もう、ほんと、それをほんとに、わかってない人が多い………ああ、そこにもいたね」

「……さっきまで泣いてたくせに、言うねえなのは！」

なのはの言葉と視線に、鏢迫り合いを続けながらもしかしフェイトは、……中々に獰猛な笑みを返した。

受けて、なのはも苛烈な微笑を浮かべる。

「言うよ、言うておくよ。釘を刺させてもらうよ。出る杭は打たせてもらうし、場合によっては撃たせてもらう。私のおにいちゃんに手を出すのなら、私とおにいちゃんの邪魔をするのなら、撃ち抜かせてもらう」

「……………いい加減に、しろっ!!」

耐え切れないといったように、周囲の空気を吹き飛ばすような勢いで書の彼女が怒号を上げる。

「本当におめでたい頭をしているなお前は！ 確かに、お前はこの騎

士の傍にいればそれはそれは幸せなのだろうがな！ 何度言えばわかる!? この騎士はどうなるんだ!? 幸せになれるのか、それで!!」
「なれるよ。するよ、してみせる」

なのはの即答に、一瞬鼻白むも、すぐに反駁の言葉は紡がれる。

「っ！ だが、実際！ お前の傍にいても、今まで、今の今まで、この騎士は内に孤独を、虚無を、決して埋まらぬ空白を！ 抱えて生きて……」

「そうだね。……それに関しては、本当に、心の底から反省してる。後悔もしてる。申し訳ない気持ちで一杯だよ、ほんとに。だから、もう繰り返さない」

そう、もう繰り返さない。同じ徹は踏まない。

「馬鹿だったよ、私は。いけない事だなんて思っ、手加減して、火加減して、……だから、おにいちやんに届かなかった。届いてなかったんだ、私の愛は。意味も無く、求められることもなかった。あの人の幸せに繋がらなかった。だから、——もう抑えない！」

なのはは、強く言い放つ。

「私は誰より、愛される喜びを、悦びを、歡びを、知ってる……! ……だから、おにいちちゃんにもそれを味わってもらおう！ おんなじ気持ちになってもらう！ 私はこれからはもう、あの人への愛を、想いを、抑えない!! 私の愛がおにいちやんに届きさえすれば、……おにいちちゃんも幸せになれるはずだから!!」

「っ!?!」

「この世で一番の幸せは、愛されることだ!!」

あの人は、あの人自身の幸せなんて、望んでいないのだろうけど。そういう人なんだろうけど。

でも、それでも。

「そして、この世で一番おにいちやんを愛してるのは私だ!!」

自分のこの想いで、炎で。

「だから、私の傍にすることが!!」

焼いて、焦がして、溶かして。心から愛して、芯まで愛して。

「おにいちちゃんが一番幸せになれる道だっ!!」

——あの人を、誰より幸せにしてみせる。

そして、幸せな事というのがどれだけ素晴らしい事なのか、あの人にわかってもらうんだ。

それを自分に教えてくれて、与えてくれる、愛しいあの人に、あの感動をあのお能をあの快楽を、わかってもらうんだ。

きっと自分は、……そうだ。

なのはは胸の中、想う。

自分は、高町なのはは。

そのために、生まれてきたんだ。

あの方は私のだと、あの方の隅から隅まで一切合財一つ残らず全部が全部私のだと、そう傲慢に、強欲に、厚顔無恥に口にする勝手な自分は、高町なのはは間違いない、その身体の心の存在の、隅から隅まで一切合財一つ残らず全部が全部、あの方のためにあるんだ。

「……都合の良い、論理を！」

「都合が良くても悪くても構わないよ……どっちでもいい、そんなの！ 間違つてさえないなければ！ ……繰り返してきた過ちは、もう終わらせる!!」

レイジングハートから勢いよく、二発の空薬莖が排出される。充填された魔力によって展開されるのは、輝く桜色の翼。

あの人へ向かい飛ぶための翼。

『A. C. S. stand by』

「アクセルチャージャー起動！ ストライクフレーム！」

『Open』

なのはの声に合わせて、レイジングハート、その金色の先端部から、展開された翼と同じく桜色の半実体魔力刃が突き出した。

A. C. S 展開、レイジングハートを突撃槍とする……まさに今の自分に似合いの戦法だ。

「エクセリオンバスター、A. C. S. ……」

奔る魔力を高めていき、まさに飛び出さんとする、飛び立たんとするその寸前、なのははフェイトへ視線を向けた。

アイコンタクト。

……わざわざ念話を使うまでもない。

「ドライブッ!!」

レイジングハートから輝く六翼を大きく広げ、疾風怒濤の勢いで前方、書の彼女へなのはは突撃を敢行し。

フェイトはその邪魔とならないよう、そして突っ込んでくるのはを避ける余裕を書の彼女に与えもしないような、完璧なタイミングで鏢迫り合いを弾いて中断、上方へ離脱した。

恋敵で、それでもやっぱり親友にして戦友だ。同じ思いを胸に抱く同志だ。

これくらいの連携は造作も無い。

「ぐうううっ!!」

二刀を交差させるように眼前に構え、なのはの重厚な刺突を受け止める書の彼女。

「な、ぜ……………なぜっ、わからない!? この世は悲しみに満ちていて……………そんな中で生きても傷つくだけなんだ!!」

「そんな……………こと、あるもんか!!」

「ある、さー! 少なくとも……………私や! あの騎士にとってこの世界はそうだったはずだっ! だから……………あの騎士は私の中にいるべきで……………」

「っ!! ああああああああああああああああああああああああああああももうっ!!」

その許せない言葉に、事実には、なのはは激昂、吼える。

「それ、さああああああああああああああ!! それ!! さっきからっ、ずっとなっ!! あんまりに苛立つて!! 頭が焼き切れそうでっ、妬き切れそうだよ!!」

「な、なに、なにを……………?っ!?!」

至近距離、火花を間に挟んだなのはの憤怒にとまどう書の彼女へ、「ああっ! やっぱりなのはもそう思ってたんだねっ!!」

上段から振り下ろされる金色の巨大な両刃剣。なのはと書の彼女が拮抗する間にザンバーフォームへと姿を変えたバルディッシュだ。

書の彼女はやむなく二刀のうち一振りを頭上に掲げ、そちらへの防

御に回した。

「そうだよねええええ！ やっぱり許せないよねえええええええええええつ!!」

容赦なく黒い刃へ斬りかかり、押し切らんとしながら、フエイトもそう叫ぶ。

「あつたり前だよ!! こんな事を、そんな事を、許せるもんか!!」

言いながら、なのはも一振りとなった眼前の邪魔な黒刃を突き破らんと出力を上げていく。

「お、まえ、たち！ さつきから……何を………つ」

必死に受け止めながら、しかし二人の怒りの意味がわからず、書の彼女は相変わらず困惑気で。

「だからさああああああああ!! わかんないかなああああああああ!! 許せないのっ!!」

「大好きな大好き大好きな!! あの人がつ!! 恭也、さんつ、がああああああああああああつ!!」

「——他の女の!! ”中” にいるなんて!!」
そして、ビキビキと、

「あ、あああああ………つ! ………そんな、な………つ」

猛撃を受け止める黒刃にはヒビが入っていき。

「我慢できるかあああああああああああああああツ!!」
「我慢できるかあああああああああああああツ!!」

揃っての、そんな咆哮が響き渡るとほぼ同時、
「っ!?!」

甲高い音を立て、粉々に砕け散って。
桜色と金色の爆発が、辺りを包んだ。

も、苦しいのも……、辛いのも痛いのも……っ、嫌なんです……っ
……もう、もう……」

それは、絶望に塗れた声で。

でも、確かに切望の滲む声だった。

(ああ……そうか。この子は……”あの子”や)

自然にわかって。

「……そかあ。……色々、大変やったんやね」

はやては、なんとか車椅子の上、片手で体を支えながら立ち上がる
うとする。

だって、このままじゃあこの子に手が届かないから。

しかしやはり少し無理があつて、バランスを崩してしまい。

「あ……、っと、ありがとなあ」

前方に倒れこみそうになつたはやてを、彼女が抱きとめてくれた。

悲しそうなのに、それでも心配そうな顔を彼女は向けてきて。向け
てくれて。

ああ、やっぱり優しい子なんだと、それがよくわかつた。

「……なあ、泣いたらあかん、なんて言わんよ、言わん。悲しいと
きは泣いてええんや。ええ。……ええんやけど、な。ずっとは、やつ
ぱあかんねん」

はやては抱かれながら、彼女の頬に手を伸ばした。

「泣いてもええけど、……いつまでも泣いてたらあかん。いつかは泣
き止んで……笑わなあかん」

「わら、う……？」

「そや。……そんなに美人さんなんやから、笑つたらめっちゃ綺麗や
ろ？」

困惑したような顔の彼女。その白い頬に、はやての手が触れた。

「……もう、泣き止んで、な？ 笑つてみせてや。ええもん、あげるか
ら。一生懸命考えたんやで、……まあ、すぐに決まつたんやけどな。
ぴったりのが、あつたから」

「な、にを……？」

少し悪戯に笑つて、はやては彼女に言った。

「名前をあげる。もう闇の書とか、呪いの魔道書なんて言わせへん。私と呼ばせへん。私は管理者や、私にはそれが出来る」

「……私はっ……でも、……貴方を……っ、どれだけ素敵な名を頂いても……貴方につ……害なすだけの……っ」

「そんなことあらへんよ、絶対あらへん。……たとえ、ちよつとくらい迷惑がかかったとしても、ええよ。だって……」

そう、だって。

あの人も、そう言っていた。

「だって、家族やん。せやからええんや。家族やから、ちよつとくらい、迷惑かけて、わがまま言つて、それでええんや」

「っ、か、ぞく……っ」

「そう、家族や。私の大事な大事な、大好きな家族や」

すうと、深呼吸一つ。はやては告げる。

「夜天の主の名において、汝に新たな名を贈る。……強く支える者」

一言一言、力を籠めて、想いを籠めて。

「幸運の追い風、祝福のエル、——リインフォース」

「リイン、フォース……」

「そや、リインフォース」

「わ、たし……っ、リイン、フォース……っ」

「……ああ、あー、……なんや、もつと泣いてもうたなあ……」

ぼろぼろと、彼女の赤い瞳からは大粒の涙が零れていく。

どうしたものか、悩むはやての前に。

「……リインフォース。いい名だ。君に、ぴったりの名前じゃないか」

現れたのは、精悍な顔つきの男性だった。

「恭也さんっ」

「泣き声が聞こえてな。気になったから、……ちよつと寄つてみた」

恭也はそう言つてはやてに笑いかけてから、震えるリインフォースの肩を優しく抱いた。

「……騎士っ」

リインフォースは顔を上げて、恭也を見つめ、涙を零しながら言う。

「騎士、……なあ、騎士よ……っ」

「ああ、なんだ？」

「この……世に……光は、……ある、のか？ わ、わたしは、……それを、……受け取って、しまっても……いいのか？」

「当たり前前の事を聞くな、リインフォース。そんな事は……当たり前だよ」

返答に、リインフォースは嗚咽を上げ、なおも尋ねる。

「お、お前は、お前は……どうなん、だ……？ あんなに悲しい世界を……あんなに寂しい瞳で生きて……お前には……光は、あるのか……っ？」

「あるさ。ある」

「……でもっ、……お前は……っ」

「……たとえ、俺自身に降っていないくとも、……俺の大好きな人達に降ってくれていれば、俺にとって、世界は光に溢れていて、優しいところなんだよ」

「……騎士……っ、……お前は、お前は……強いんだ、な……っ。本当に、……本当に、強いんだな……っ」

そう言っつてリインフォースは、はやての見ている前で初めて、……涙を自らの手で拭った。

「私も……強くなれるだろうか……っ？ お前のように……っ……強くなれるだろうか……？」

「それも当たり前前の事だ、リインフォース。強くなる。強くなれる。……だつて君にはもういるだろうか？ 大切な人が。君を大切にしてくれて、君が大切に想える人が」

恭也はそう言っつて、今度は柔らかくはやての肩を抱いた。

「リインフォース、簡単な事なんだ。強くなる理由なんて、強くなれる理由なんて、それだけでいいんだ。大切な人がいる、それだけでいいんだ」

「……そう……っ、か……」

「……なあ、リインフォース。私も強くなるよ。マスターやからな、み

んなの。家族をちゃんと護れるように、私も強くなる。……………だから、リインフォース」

未だ涙の流れる瞳でこちらを見返すリインフォースに、はやては言う。
「一緒に、強くなろう。これまでずっと一緒にやったし、これからもずっと一緒にや。……………一緒に、強くなろう」

「……………はいっ！」

リインフォースは、しっかりと頷いてくれた。

「そうと決まればほら、笑ってや、リインフォース。これが私達の新しい始まりや、折角の門出やで。せやったら、やっぱり、笑顔が見たいな」

そう言って、はやては微笑みかけて。

「……………ほら、リインフォース。マスターの言う事は、ちゃんと聞かなければな。……………それに、家族のお願いだ。聞いてあげるといい」

恭也も、優しく促して。

「……………はいっ、……………はいっ！」

やっぱり泣いてはいたけれど。

それでも、彼女は、リインフォースは。

美しくて、嬉しそうな笑みを、見せてくれて。

やがて、世界が光に包まれた。

(……………帰って、きたんだな)

海風の匂いに、恭也はそれを悟った。

自分の身にはバリアジャケットが展開されていて、両の手には魅月がいる。

「……………」

恭也は無言、頭を振った。

たしかに、魅力的な世界だった。去りがたい、世界だった。でも、それでも。

(……………いいんだ)

そう、いいのだ。

『主……………』

「いいんだよ、魅月」

答えたときだった。

「おにいちゃんっ!!」

「恭也さんっ!!」

眼下から、声。

視線を向ければそこには、こちらに一直線すごい勢いで上昇し向かってくる白と黒、少女が二人。

両方とも本当に速かったが……………しかし、単純な速度で言えば、やはり。

「……………恭也さんっ!!」

黒の少女——フェイトの方が上だった。フェイトは勢いそのままに、恭也の胸に飛び込んできた。

「つと」

「恭也さん！ 恭也さんっ！ 恭也さん!!」

「……………ああ、……………すまない、心配と、苦勞をかけてしまったな」

フェイトはその言葉に首を振って、

「いいんです……………そんなのっ!」

嬉しそうに恭也の胸に顔を埋めた。

恭也はそれに笑顔一つ浮かべ、魅月を鞘に納め、彼女の柔らかい髪を撫でようとして——。

「おにいちゃん!!」

そこへ、なのはの声。追いついたなのははすぐに恭也とフェイトの傍へ寄って。

「……………あれえ、なのは」

そんななのはをフェイトの、恭也からすれば珍しい……………言ってしまう
えば初めて聞くような調子での声が迎える。

からかうような、と言うか、

「どうしたの？ すいぶん遅かったねえ？」

挑発するような、と言うか。

「……へええ、そう、そうくるんだね、フェイトちゃん。……………ふうん」

受けてなのはも力の籠った言葉を返す。

「お、おい……………二人とも……………」

状況はわからないがなんとなく止めておいた方がいいような気がして、恭也がそう声をかけるも。

「ほいっ」と

「……………なっ!？」

遅かったらしい。フェイトの驚きに揺れる声が上がった。

フェイトの両手には……………桜色のリング。

「レストリクトロック!?! いつの間にな!?!」

「いつの間にな……………呑気な子なの。フェイトちゃんの方が速いなんてことわかってたからね、飛んでる時にはもう準備完了してたよ」

「な……………っ!」

「お、おいなのは……………。何して……………」

「……………おにいちゃんっ!!」

恭也と両手が固められたフェイトの間になのはは勢いよく、淀みのない動きで体を割り込ませ。

「……………おにい、ちゃん……………っ!」

すぐに恭也の胸に抱きついて、その顔をすりつける。

ああ、悪い。心配をかけて、苦勞もさせてしまったな、……………と、フェイトへ向けたものと同じような言葉を口にしようとして。

しかし、

「……………な……………んだ?」

恭也の体は、驚きに、戸惑いに、固まった。

「おにいちゃん……………! おにいちゃん……………っ!」

「……………っ!」

「……………なんだ? ……この……………熱さは」

自らの胸にすぎりつくなのは、その体が放つ熱が明らかに今までとは段違いで。

しかしそれは、——体温の問題ではない。

それは、行為が、言葉が、吐息が、雰囲気、存在が、持ち放つ熱の温度。

高町なのはの熱であり……。

「おにいちゃんっ!!」

「っ!」

恭也の胸から顔を上げ、なのはがまっすぐに恭也を見つめてくる。そうだ。

高町なのはの温度であり、彼女が高町恭也に向けてくる熱、その温度だ。

今までと明らかに、それは桁が違った。気のせいかとも一瞬思ったが、ほんの一瞬だけだった。気のせいなんかじゃない。

「おにいちゃん……っ、……おにいちゃんっ!!」

「なの、……は……っ?」

疑いようなもなほほどに、熱すぎる。焼かれ、焦がされ、……溶かされるような温度。

時間にしてどれくらいかはわからないが、恭也はその驚き、戸惑いから硬直し続けてしまい。

だから、何も出来なかった。

するりと体の位置を上方へずらし、こちらの首の後ろへ手を回して、少しの躊躇いもなく顔を近づけてきたなのはに。

気がつけば、

「——?」

「……………んっ……………んん……………」

「……………っ!?! っ!?!」

唇を奪われていた。

二度目のその衝撃は、あまりに予想外にして想定外の、馬鹿らしいくらいに大きすぎ強すぎたそんな衝撃は、今度は恭也の体を硬直から一週回って完全な脱力へとシフトさせ。

抗力を失った恭也の口は、機を逃さずすぐさま差し込まれたなのはの舌にいと簡単にこじ開けられて。

口腔内へ、なのはの柔らかい舌が押し入り。

完璧に思考を停止した恭也は最早何も出来ず、

「んんっ、ん、ん……………」

ただただ、されるがまま、歯列をなぞられ歯肉をなでられ、全体をなめ尽くされるままで。

「……………んんっ……………」

なのはが自分からその行為を止め、顔を少し離して、

「……………な、……………の、……………は」

そこでようやく、やっと、そう言葉を発せ、……………しかしそんな言葉を発するだけで、やっとだった。

「なあに？ おにいちゃん」

至近距離、瞳を潤ませ頬を上気させつつ、微笑みを浮かべるなのは。

「……………」

そこにあるのは。

鮮やかにして、あまりにも艶やかな、溢れかえるほどの――。

熱い愛情。

「ふふ……………、ねえ、おにいちゃん……………」

なのはは恭也を恐ろしく熱量の籠った瞳で見つめながら、自らの小さな桜色の唇を、舌を、愛おしそうに指で撫で。

「もういつかい、する……………？」

そう問いかけて。

「……………もういつかい、しよ……………」

答えを待たずにもう一度、顔を寄せてきて。

「……………ねえ、おにいちゃんっああああああっ!!」

「させるかあああああああああああああああっ!!」

勢いよく後方へ吹き飛んだ。

バインドから抜け出して、なのはの首根っこを掴み思い切り投げ飛ばしたフェイトは、肩を怒らせ叫ぶ。

「ひ、人のことを、バインドで固めておいて！ その隙に、あ、あんなっ

！ あんな!!」

フエイトは恭也を背に庇い、怒気を孕みに孕んだ声を上げる。

「みだらだつ！ ふしだらだつ!!」

足元のフィンを飛ばたかせ制止をかけたなのは、それを真つ向から受けて余裕の表情を返す。

「みだらう？ ふしだらう？ はっ！ 能気な子なの。飛んだまま寝言が言えるなんて、器用だねえフエイトちゃん」

「……………ふふ、……………いいよ、なのは！ 買うよ、その喧嘩っ！ 買ってあげる……………！」

「……………それはこつちの台詞だよ！ 折角の良い雰囲気をぶち壊してくれて、……………高くつくよ?」

「上等!!」

そして、取っ組み合いを始めるのはとフエイト。

「……………あ、……………いや、止める、べき、だよ、な？ いや、……………」

いや、……………いや……………そもそも何が……………いや……………

いや……………」

『主っ、主っ！ 大丈夫ですか!?!』

未だ状況を飲み込みきれずにひたすら疑問の声を諳んじ続ける恭也へ魅月が言葉をかけるも、しかし恭也の頭は醒めない。

「……………んん?」

『主っ！ お気を確かに!!』

収集がつかないような、そんな状況に、

「……………あ、あの一!!」

響いたのは少し遠慮がちな、

「……………わ、わたしの事も、ちよつとは、……………その、思い出してもらえるところ……………嬉しいんやけど」

はやての声だった。

「……………はやてっ!」

見れば下方に、金色の十字錫杖と書を手に持ち法衣のようなバリアジャケットに身を包んだはやて。

「はやてちゃん!」

「はやて!」

その姿を見てとりあえずは困惑と混乱から抜け出した恭也、取っ組み合いを止めたなのはとフェイトの三人は、すぐさま駆け寄る。

被った帽子の下、髪の色を変化させたはやてはまず真つ先に傍に着いた恭也を見上げて、

「……………もてもてやね、恭也さん」

少し困ったような顔で言った。

「……………いや、正直俺にはもう何が起こっているのかわからないんだが……………」

「……………」

はやては無言、頭を振って。

上方から来るのはとフェイトを仰ぎ見て、

「……………これは強力や、強烈や……………強敵や。ううん……………、前途多難……………。道は険しいなあ……………頑張らなっ！」

覚悟を決めたように握りこぶしを作った。

「……………はやて？」

「恭也さん！ わたしも頑張るで!!」

「あ、ああ……………」

よくわからずに、恭也は首を捻る。……………よくわからない事だらけだった。

『主……………』

「なんだ、魅月？」

『正直に言わせて頂きますと、……………いつかこうなるんじゃないかと思っております』

「……………」

魅月の言葉も、よくわからなかった。

「はやてちゃん！ 大丈夫!？」

「はやてっ、体は……………」

はやての左右に降りた二人に、はやては微笑んで答える。

「大丈夫や、ありがとうな。わたしも、それに——この子も、……………もう、全部良くなつとる。治つとる。……………壊れてた部分はちゃんと直つて、欠けてた部分も補修されて、それで、……………悪くなつてた

部分は……あそこや」

はやてが斜め下を視線と杖で指す。

指された方へ目を向けると、あそこ——演習空間内の海に、黒い半球体が蠢いていた。

「無事、ワクチン展開とそれによる治療は、終わったみたいですね」

不気味なそれを眺めていると、後ろから近づいてくる気配と声。

「あそこにあるのは……排出された治しようのない改悪部分にして改悪それ自体の原因、核、……闇の書の闇と言ったところでしょうか」

恭也達の背後、高速で飛んできたらしいクロノがキレよく減速して静止し、そう言った。

「クロノ」

「ご無事でなによりですつ、恭也さん！　なのはとフェイトも、ありがとう。……影の獣も、さつき全て消え去った」

その言葉通り、ぐるりとまわりに眼をやれば確かにあれだけいた獣達が一匹残らず姿を消していた。

「いや、……しかし、あれだな。危険も負担も最大限引き受けるなんて大口を叩いておいて、すまん、結局お前達に苦勞をかけてしまった」

「いえ、そんな！　最初の膨大な力を有した状態の、あの拒否反応で暴走した彼女の相手は恭也さんに引き受けて頂かなければ、本当にどうしようもありませんでしたよ」

「恭也さんが取り込まれてしまった後、私となのはで相手をしましたが、恭也さんとの戦闘で力の大部分を使い果たしてしまったようだったからこそ何とかなったようなものですよ」

恭也の謝罪に、クロノとフェイトが即座にそんなフォローを入れて。
「そうそう、そうだよ、おにいちゃんっ！」

なのはが素早く恭也の腕を抱くように取った。

「おにいちゃんが気にする事なんてないの。ちゃんと私のところに帰ってきてくれたんだしっ」

「あ、ああ、そうか……？」

「うんっ！」

弾んだ声をあげるなののだが、どうにも恭也は先の記憶が脳裏にちらつき、対応がぎこちなくなる。

「……ねえなのは、今、そんなに恭也さんにくつつく必要がある？　ないよね？　ううん、ないよ、ない。だから離れて、離れて、すぐに、さつさと」

なのはの右肩を掴み、恭也から引き剥がしにかかるフェイト。

「必要があるかないかなんてそんなのどうだっていいよ。したいか、したくないか。その二択だよ人生はいつだって。したいからする、それだけなの」

「そんなにくつつかれたら、恭也さんが動きづらくて困るよ」

「そんな事ないよ、ねえおにいちゃん？」

どう答えたものか、迷う恭也。

そうしている内に、

「まあ、ほら、”妹”さんにそんな迷惑やなんて恭也さんも言われへんやろ、な」

事態はさらに進んだ。今度ははやてがなのはの左肩に手を置き、フェイトと同じように後ろに引き始める。

「……へええええ。そう、……そうなんだ。はやてちゃん、そういうこと言うんだねえ……」

「正論やろ？　……それに、恭也さんは別になのはちゃんのところに帰ってきたってわけやないんやないかな思うんやけど」

「……へえええええええ。言うねえ」

きりきりと、恭也の目の前で張り詰めていく空気。

相変わらず、状況が把握できずに恭也は戸惑うばかりで。

「な、なのは？　フェイト？　はやて？」

「三人とも、今はそんな事している場合じゃな、んでもない、………
続けてくれ……」

見かねたクロノが仲裁に入ってくれたが、三人に睨まれ途中で言を翻した。

「ク、クロノ……」

「すいません恭也さん……僕にはどうする事も……」

すまなそうに頭を下げるクロノ。

「強いて言うならば……個人的にフェイトを応援する事くらいしか……」

「お前もお前で一体何を言ってるんだ……?」

恭也には本当に、よくわからなかった。

「おい、どういふことだよこれ。なんで修羅場ってんだよ……?」

「きよ、恭也、何が……?」

そう声をかけてきたのは、はやてが無事と見、文字通り飛んできたらしいヴィータとシグナムだ。

「あららら……すごい事になっちゃってますね……」

「むう……」

その後ろには、口に手を当て眼を丸くするシャマルと困惑気なザフィーラ。

「なんかよくわかんないけど……フェイト! がんばれ!」

「……こんな緊張感、どんな遺跡の発掘でも味わったことないよ……」

笑顔で応援の声を上げるアルフと苦笑いのユーノ。

人は増えるが、しかし事態は混迷を増すばかりで。

『あのー、皆さんすいません。闇の書の闇の暴走臨界点まで、あと十分切りました。各々準備をお願いします……』

届いたエイミイのそんな言葉で、やっと一応の落着を見た。

複合四層式の防壁を抜き、その後本体へ攻撃、コアを露出させる。そしてそれを強制転移魔法で軌道上に待機するアースラの前へ転送、アルカンシエルで消滅させる。

これが、闇の書の闇への対策として予め考案された作戦である。

個人の能力頼りでギャンブル性が高いものと言わざるを得ないが、しかしこれ以上の方策も挙がらなかったのだ。

闇の書の闇、その近くで海洋上に浮遊し、皆でその時を待つ。

「……………」

眼下、蠢く黒い半球体を見つめながら、恭也は集中力を高めていく。作戦を立てた時点での闇の書の闇の能力や危険性は、ワクチンへの拒否反応により引き起こされた暴走進化の影響を基本的には考慮に入れていない。正確には予測がつかなかったために、入れられなかったと言うのが正しい。

何が起こるか、わからない。

その場その場で判断、対処するしかないのだ。

悟られないように、恭也は周囲の顔をちらりと瞳のみを動かして伺う。

皆、一様に緊張した顔をしている。

(……………何かあったら、……………俺が何とかしなければな)

戦闘力そのものもそうなのかもしれないが、何より、この中で突発的な事態に対し一番対応力があると言えるのは、瞬間的に膨大な魔力を得る技、SCLを有する自分だ。

何かあったら……………何かあっても。

剣となって。

盾となって。

彼らを護らねばならない。

命に代えても、なんて事は今更決意し直す事でもない。プランBを推した時点で、……………ある程度の覚悟はしている。

恭也の、そんな意思是、意識は、

「っ!?!」

自らを包んでいた黒い膜を割り、ついにそのキメラのような姿を闇の書の闇が現した時にまず、すぐさま役に立つ事となった。

全員が息を呑んで、

「……………砲台!?! しかも、なんて数だ!?!」

クロノがそんな声を上げる。

言葉の通り、キメラのような闇の書の闇の周辺には、金属的な質感と肉のような生々しさの間をとったような素材で作られた、無数の砲台がせり出していた。

『なっ!? チャージがもう……!? ほ、砲撃、来ます!!』

エイミイの焦った言葉とほぼ同時、全砲台の先端に光が灯り、――間髪入れずに白い砲撃が恭也達へ向け放たれた。

「――っ!!」

眼前を埋め尽くすような規模・量の砲撃に皆が思わず固まる中、恭也は前方へ迷い無く飛び出した。

そしてすぐさまSCLで魔力充填、両の魅月から二発ずつ、計四発の空薬莖が排出される。

そこから放つは、

御神流奥義 花菱・夜

二刀による、迫りくる超多数の砲撃を上回るほどの、無数の連撃、斬撃。

連撃奥義である花菱に影刃を乗せ放つことで無数の魔力刃を生成・射出、その場を、空間を、漆黒に染め上げる。

青空の下、恭也の作り出した宵闇は迫った白い光、その全てを喰らい尽くし。

「……………な、……………んっ……………チートだろ、もう」

夜が去った後、響いたのは呆然としたようなヴィータの声。

「ノータイムであんなの出すって……………完っ全にチートだろお前……………」

「そう言われてもな……………」

苦笑を返すしかない恭也。

「あれだけあった砲台も、ほぼ全滅……。味方となると頼もしい事この上ないが……………」

我らはこんな奴を相手にしていたんだな……………と、シグナムも半ば呆れたように続ける。

シグナムの言った通り、恭也の連撃に喰われ闇の書の闇の周辺にあった砲台達はそのほぼ全てが斬り潰されていた。

「チェーンバインドッ!」

「ストラグルバインドッ!」

「縛れッ! 鋼のツ、軛ッ!」

アルフ、ユーノ、ザファイラが残った砲台や触手たちを切り落としていく。

その傍らで、ヴィータが己のデバイス、グラーフアイゼンを構えた。

「……よおし、ちゃんと見てろよキョーヤ！ お前みたいのが相手じゃなきゃ、アタシだって、守護騎士だってなあ!! いっくぞアイゼン!!」

『Jawohl!』

「鉄槌の騎士ヴィータと！ 鉄の伯爵グラーフアイゼン！」

『Gigantform!』

グラーフアイゼンがコツキング、カートリッジを装填し、変形。ハンマーヘッドを巨大化した。

「轟天爆砕！」

そして、ヴィータがぐるりと振り回し振りかぶれば、みるみる内にグラーフアイゼンはさらにさらに大きく、当初の数十倍の規模を誇る姿となり。

「ギガントツ、シユラーク!!」

掛け声とともに一息に、しなり、うなりを上げて闇の書の闇へ振り下ろされる。

豪撃と呼ぶにふさわしいその叩きつけは、威勢よく防壁、その第一層目を打ち砕いた。

「……大した破壊力だな。喰らわなくてよかったよ」

恭也がヴィータ達を拿捕したあの戦闘で、彼女が使おうとしていたのはおそらくこれだったのだろう。その威力を目にし、恭也はそう賞賛を贈る。

「……ど、どーせあんときやってても、おまえにや当たんなかっただろーよ」

手に握るグラーフアイゼンを元の大きさに戻しつつ、ヴィータはどこか拗ねたように……照れたように返した。

「高町なのはとレイジングハート・エクセリオン！ いきます！」

足元に魔方陣を展開し、天に向け相棒を掲げるなのは。

『Load Cartridge』

レイジングハートから響くコッキング音、その数四つ。

計四発ものカートリッジから魔力を装填、なのはは愛杖を振り回し、そして目標に向け構えを取った。

「エクセリオン……バスター！」

『Barrel Shot』

前振りとして、高速にして不可視の衝撃波が放たれたのはへと迫ってきた触手たちを吹き飛ばしつつ、障壁へと突き刺さり、道を作る。

「ブレイク……っ！」

続いて、四発の高密度にして高出力の砲撃が中央を空けるようにしてやや緩やかな軌道を描きつつ、奔り。

「——シュートツ!!」

最後に、満を持して傍目にもひしひしとその魔力の力強さが伝わってくる大規模な主砲が中央を轟音とともに迸り、第二層目の防壁を見事に撃ち抜いた。

実に重厚な一撃を見舞ったのはは、青空の下、

「おにいちゃああああああんっ！ 見てくれた!? 見てくれたっ!?」

満面の笑顔で恭也に手を振ってきた。

「……ああ。すごいな、見事だった」

苦笑しつつ、そう返して。

思う。

……この娘にはもう、自分の庇護なんていらないのかもしれない、と。

生き抜く力も、輝く光も、羽ばたく翼も、この娘には既に、ちゃんとおあって。

慕ってくれてはいるが……、この娘には、自分なんてもう必要ないのかもしれない、……そんな風に思った。

「……次っ、シグナムとテストタロツサちゃん！」

「剣の騎士、シグナムが魂……炎の魔剣、レヴァンティン」

シヤマルの声に答え、闇の書の闇を挟んでなのはの対面に浮かんだ

シグナムが、手に握る剣、その切っ先を誇るように空へ向け、「刃と連結刃に続く、もう一つの姿」

言つて、鞘を柄尻に合わせた。鞘は光に包まれて。

『Bogenform!』

その声が響いたときにはもう、シグナムの相棒は弓へとその姿を変えていた。

輝く弓弦をシグナムが引けば、瞬きと共に矢がつかえられ。

「駆けよ！ 隼!!」

『Sturmfalken!』

疾風の如き鋭く、何より速い一撃が空を裂いて放たれた。

一瞬にして闇の書の闇へ迫ったそれは、着弾と同時に、爆炎を上げて三層目の防壁を鮮やかに砕き、散らせてみせた。

「弓も使えたのか……、いや、流石だな」

恭也の呟きが風に乗って届いたのか、シグナムは顔をこちらへ向けて、

「……ま、まあ、……騎士の嗜みだ」

ヴィータ同様、少し照れたようにそう返した。

「フェイト・テストアロツサ、バルディッシュ・ザンバー……! いきます!」

バルディッシュから、三発の空薬莖が力強く排出された。

フェイトは体をぐるりと横に一回転させ、金色の大剣をうなりを上げて振り回す。

それにより発生した鎌いたちは素早く真つ直ぐに突き進み、闇の書の闇に組み付くやいなや、その巨体を竜巻で囲う。

その隙にフェイトは大剣を真上に向けて、刃に紫電を纏わせた。

「撃ち抜けっ、雷神!!」

『Jet Zamber』

そして後ろから前へ、上から下へ、背負い投げのように肩から構えた剣を大きく振るい落とす、豪快な唐竹割り。

バルディッシュの体もその斬撃に合わせ、大きく伸びて。

四層目、最後の防壁をその苛烈な一撃で叩き斬り、さらに本体の左

足まで豪断した。

「……よしっ、………あ」

凜々しい表情で己が技の結果をしっかりと見やった後、フェイトは恭也に視線を向けて、

「ええっと……その………」

どうだったか聞きたい顔と、褒めて欲しい顔が合わさった表情を浮かべる。

恭也は笑みを返し、素直に感想を告げた。

「迷いも淀みもブレもない、……いい太刀筋だった」

「……は、はいっ、ありがとうございます！」

青空の下、握る剣の刃と同じ金色の髪を陽光に輝かせながら、フェイトは嬉しそうな笑顔を弾けさせた。

「……む」

ザパン、とあちらこちらで水の跳ねる音。見ると、砲台付きの触手達が海面に次々と顔を出し、今にも砲撃を放たんとしている。

斬るか、そう思ったが、その必要はなかった。

「盾の守護獣、ザフィーラ！ 砲撃なんぞ、撃たせん！」

吼えたザフィーラが自らの眼前に白い魔方陣を展開すると、海中から棘が現れ触手達を串刺しにしていた。

「あれは、未だにバインドとは思えんのだが」

「……守れば、それでいい」

その鋭さに思わずそう零した恭也へ、ザフィーラは実に渋い声で返答。

方法なんて二の次で、守りきる事こそが何より肝要……そんな意図を感じる、恭也と思想の合致しそうな意見だった。

「………ああ、そうだな。その通りだ」

恭也とザフィーラは、視線を交わして頷き合った。

「はやてちゃんっ」

送られたシャマルの声と視線に、はやては書を広げ詠唱を始める。

「彼方に来たれ、宿り木の枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け！」

ひゅっとならぬ手に握る十字錫杖を横に払い、その魔力を奔らせる。

闇の書の闇の上空に黒い渦と白い魔方陣が現れ、

「石化の槍……ミストルテインツ！」

その声と掲げられた杖の振り下ろしを合図に、そこから幾本もの光の槍が放たれる。

壮麗にして荘厳な一撃一撃、一突き一突きが闇の書の闇の体へ深く刺さり、その周辺からみるみる内に石化させていった。

その変化に耐えられなかったらしい箇所は、脆くも崩れ去っていく。

「わたしとリインフォースも、なかなかのもんやろ？」

書と身の丈ほどもある長い杖をまとめて抱いて、恭也へ笑顔を向けてくるはやて。

「ああ、いいコンビだ。強いし、強くなるよ」

返答に、はやてはもう一度、にっこりと笑った。

「……………うわ、うわああ」

「なんだか……………すごい事に……………」

アルフとシヤマルの慄いたような声に眼下を見やれば、そこにはぐちやぐちやと、キメラのようなその身をさらにでたらめに変化させていく闇の書の闇。

元から統一性はあまりなかった体だが、より一層ひどくなったと言える。

「やっぱり、並みの攻撃じゃ通じない……………！ ダメージを入れたそばから再生されちゃう……………！」

「……………だが、攻撃は通ってる！ プラン変更は無しだ！ ……行くぞ、デュランダル！」

エイミィに力強く返したクロノは、右手に握るグレアム達から託されたデバイス……………氷結の杖、デュランダルに声をかける。

『Ok, Boss』

「悠久なる凍土、凍てつく棺の内にて、永遠の眠りを与えよ……………」

静かで、穏やかで、しかし強い意思の籠った声の詠唱。

応えて奔った魔力が、闇の書の闇を中心にして雪のように煌きながら海を凍らせていく。

「……凍てつけえっ!!」

『Eternal Coffin』

クロノの裂帛の叫びがデュランダルの声と共に響き渡り、闇の書の闇の体が冷たい氷に包まれた。

バキンと音が鳴り、凍てつきながらもなんとか闇の書の闇は蠢かんとするが、しかしクロノの作り出した氷が、凍土が、その動きを阻害する。

「……やっぱりお前は、すごい奴だよ」

「……いい、いえ……、これは、デュランダルの力ですから」

恭也の賞賛に、少し焦ったように謙遜するクロノ。

恭也は首を振る。

「お前とデュランダルの、だろう。見事だ」

「………は………はい………えと………ありがとうございます」

クロノにしては珍しい、……歳相応と言っつていい少し幼さの残る笑顔での返礼に、恭也も笑みを返した。

「………さて、行くよ! フェイトちゃん! はやてちゃん!

………おにいちゃん!」

なのはの言葉に、視線に、フェイトとはやては頷いて。

フェイトはなのはの下方右、はやては下方左に位置を変えた。

「ああ」

恭也も、声と共に頷きを返して。

三人の少女が作るトライアングル、その中心に立った。

そして二刀を前へ突き出すように構える。

「全力全開!!」

まっすぐに、一直線に、そんな強靱な意思の籠るなのはの声が上から響いて。

「雷光一閃!!」

美しく、深い、清廉な心の煌きを宿すフェイトの声が右から届いて。

「……ごめんな………おやすみな………っ………響けっ、終焉の笛!!」

少しの躊躇いと、しかし確かな決意、そんな想いを秘めたはやての

声が左から聞こえて。

応えるように恭也はSCL、魅月に残った最後のカートリッジ二発を装填し、自らの少し前方へ巨大な黒い魔方陣を作り出す。

これは元々、なのは、フェイトと共に合わせ技として考案していたものだ。はやてにも闇の書の闇が動き出す前に、既に説明と打ち合わせは済んでいる。

「スターライトオオオオ……ッ」

「プラズマザンバアアアア……ッ」

「ラグナロク……ッ」

三人からそれぞれ、特大規模にして超高威力の、魔力満ち充ちる砲撃が放たれた。

彼女達のような砲撃魔法を持たない恭也自身は、特別何かを撃ち出すわけではない。

ただ。

纏めるだけだ。

彼女達の、力を、想いを。

桜色、金色、そして白の閃光が漆黒の魔方陣へ吸い込まれるように突き刺さり。

うねるように一束の光となつて、さらに恭也の黒い魔力を外縁に纏い――

「ブレイエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエドッ!!」

一振りの巨大な剣が、なのは達の叫びと共に生み出された。

剣は間を置かず大きく上方へ振りかぶられて。

一刀両断、豪快な垂直斬りを闇の書の闇へと浴びせた。

青空を裂き蒼海を割る、鋭く、それでいて太く巨大な刃は闇の書の闇の体を触れ、斬った部分から瞬く間に消滅させていき。

「――ブレイクッ!!」

斬り抜いた直後、その合図で衝撃波、爆炎、轟音、閃光、そんなものを周囲へ撒き散らす極大の爆発を巻き起こした。

「本体コア、露出……! …… ……捕まえ……つた!」

クラールヴィントの紐を輪のように眼前に構えたシャマルが、露と
なった闇の書の闇のコアを捕らえる。

「長距離転送っ！」

「目標、軌道上っ！」

ユーノとアルフが逃さないとはかりにすぐさま、その上下へそれぞ
れの魔方阵を展開。

「転送!!」

三人合わせて声と共に腕を振り上げ、闇の書の闇、そのコアの上部
へリングを生成。

コアはそれに引きずり出され、打ち出されるようにして上空へ飛ん
でいく。

「コアの転送、来ます！ 転送されながら生体部品を修復中！ すご
い速さです……！」

『アルカンシエル！ バレル展開！』

アースラからの音声通信が響き渡る中、皆、固唾を呑んで上空を見
つめる。

『ファイアリングロックシステム、オープン。命中確認後、反応前に安
全距離まで退避します。準備を！』

リンデイが万感の想いを籠めつつであろう力ある声で指示を出す。

『了解！』

『了解！』

アースラクルーの返答後、そして少しの間を置いて。

『——アルカンシエル、発射!!』

上空、かすかに、しかし確かに、光が瞬いた。

皆、無言で空を見つめ続け。

「……どうなった？ やった、のか……？」

クロノが、そんな風に零した直後だった。

『——なっ!?!』

届いたのはエイミイの驚愕に揺れる声。

「どうしたっ!? エイミイ!?!」

ただならぬ様子と同僚に、焦りの含んだ声で問うクロノ。

一拍の間を置いて、エイミーから返ってきたのは。

『め、命中したアルカンシエルが……、魔力ごと………吸収、――蒐集、された!?』

「っ!？」

息を呑んだのは、この場の全員で。

状況はさらに変化した。

『こんな、こんな………え、な………転送反応!? ……ど、何処へ!?』

何処。

それは、しかし恭也達にはすぐにわかった。

なぜなら、今や白い光の球体と化した闇の書の闇のコアは、恭也達の眼下、元居た場所へ舞い戻ってきたのだから。

もう一度、場の全員が息を呑んで。

「……エイミー! コアの現状、解析は!?」

クロノがコアを睨みつつ、鋭く指示を飛ばした。

『い、今やってる! わかった事から言ってくよ! ええっと、とにかく、そのコアに魔力攻撃は効かない! 大部分が吸収されて終わり! アルカンシエルで仕留め切れなかったから、どんな大規模砲撃でもまず不可能! コアに魔力を与えちゃうだけ!』

早口でエイミーは続ける。

『次に、尋常じゃない回復速度と回復能力も備えてる! アルカンシエルは完全に吸収され切ったわけじゃないから多少なりダメージは通ったはずなんだけど、もう全部綺麗に回復されてる!』

「……くっ」

苦虫を噛み潰したという表現がぴったりのクロノ。

エイミーは続けて、

『それで、げ、現在コアは………っ!?! 大規模魔法の発動準備中――いや、これは………ア、アルカンシエル!』

「Arc-en-ciel」

エイミーの声とシンクロするように、目の前のコア、その周辺を囲うように一瞬だけ現れたリングにはそう書かれていた。

『しかも発射式じゃなく自分を中心にして……ま、まるで爆弾
……ク、クロノ君っ！ 皆っ！ 退避を!!』

「っ、わかった！ ユーノ、アルフ、シヤマル！ 転送を——」
『急いで！ 発射まであとっ、ええっと——』

解析結果を待っているであろう、焦りきったエイミイが少しの間
の後、そして告げたのは、

『……い、ち、……びよう？』

あまりに絶望的な残り時間だった。

「——ッ」

言葉を失い、この場の全員が退避完了するにはあまりにも時間が足
りないことを理解しながらも、クロノはユーノ、アルフ、シヤマルと
共に転送魔法を発動させようとし。

「おおおおおおおっ!!」

シグナムは、ヴィータ、ザフィーラと共に、アルカンシエルの威力
からすればほとんど意味などないとわかってはいても悲壮な表情で
障壁を展開しようとし。

「そ、ん……」

「……あ、あ……」

「な……」

なのは、フェイト、はやては余りの事態に固まり。

そして恭也は一人、両の手に握る己がデバイスから空のマガジンを
落とした。

よどみない動きで、素早く、カートリッジの満ちる予備マガジンを
左右それぞれの魅月へと込めて。

脳のスイツチを切り替える。

御神流奥義 神速

世界がモノクロに染まって。

恭也は、相棒へと指示を出す。

『魅月、全装填』

『………主っ』

神速内、念話で出された恭也の指示に魅月は反駁するも、

『魅月』

『つ、全装填……！』

有無を言わさぬ再度の声に、結局は従って。

魅月の柄から勢いよく空薬莖が排出される。その数、右から六発、左から六発、全十二発。

シークレットフルカートリッジロード。

刹那にも満たない時の中、体感的には無限にすら思えるほどの量の魔力を得て。

恭也はその全てを使い、眩体の効果を増強した。

はち切れんばかりの魔力を滾らせた身で空を駆け、闇の書の闇のコアへ接近。

二刀から、可能な限りの強さ、速さ、鋭さで連撃を叩き込んでいく。浴びせた太刀が百を超えたあたりで神速が切れかかり、迷い無く恭也は一瞬も挟まぬ完璧なタイミングで繋ぎ直す。

二度目の神速に入り。

恭也は、目の前の白く光る球体へ斬撃を続ける。

『主っ！ わかっているのですか?! こんな、こんな事を続ければっ！』

『ああ、わかっている』

コアは、神速の中であっても与えられたダメージをすぐさま回復、破損を修復していく。

それを目の当たりにしながらも、恭也の心は静かだった。

『わかっているぞ。……いいんだよ』

一秒以下の残り僅かな時間で、圧倒的で反則的な回復能力を持つコアを魔力攻撃以外の方法で破壊しなければならぬ。訪れた状況は、端的に言えばそういう事で。

恐らく、これが唯一の方策。

斬っても斬っても回復し続けると言うのならば、そのキャパシティを超えるまで、限界が訪れるまで。

いくら続けても一瞬にも満たぬこの神速の世界で、斬り続ける。

——たとえこの身が、砕けようとも。

神速が、三回目に入った。

『と言っかな、もうほとんど手遅れだろう』

『……それを、わかっていながら……っ』

カートリッジ十二発分もの魔力を注いだあまりにも無茶な眩体を使った時点で、肉体にはもう取り返しのつかないほどの負荷がかかっている。その上でこんな風に全開で神速内を動いているのだ、はつきり言っただけの体はもう、皮肉にも、その眩体がかかっているからこそ形を保つ事が出来ているようなもので……。

魔法が解けたら、既に自壊は免れないところまで来ている。

御神流奥義 薙旋・千舞

巻いたゼンマイが切れたとき、その身に破滅をもたらす技だ。

それを理解しながらも、やはり恭也の心は穏やかだった。

『主……っ、貴方は……』

『魅月、……別に、俺は何も美しい自己犠牲の精神でこんな事をしてい
るんじゃないんだ』

猛烈な勢いで斬撃を続けながら、恭也は静かに魅月へ言葉を紡ぐ。
過去を、思い返しながら。

人生を、振り返りながら。

『………なあ、魅月。俺はな、……結局、俺を愛せなかった』

『主……』

『人間としては、まあ、歪んでいたんだろうな』

暗殺を生業とする家の生まれ。学ぶ剣の黒さ。もらえなかった母
の愛。一族の潰滅。父との死別。家族や流派を護るといふ重圧。壊
した膝。味わった挫折と絶望。

原因を挙げればそんな所か、……もしくは、元々自分という人間は
そんな風に出ていたのか、わからないけれど。

高町恭也は歪んでいて。

それは結局、直せなくて。

でも。

『でもな、魅月。……そんな俺でも、周りの人達を愛する事は出来たん
だ』

自分を、愛せなくとも。

少し特殊とはいえ家族と言つて間違いのない人達を、そう数は多くないとはいえ友人と呼ばせてもらえる人達を。

愛することは、出来た。

『だからな、魅月。これは自己犠牲じゃない。俺のやりたい事なんだ、本望と言つたつていい。……だつてそうだろう？』

今後ろにいる、なのは、フェイト、はやて、クロノ、ユーン、アルフ、シグナム、ヴィータ、ザフィーラ、シャマル、リインフォース。

彼らは恭也の愛する、護りたい人達で。

『俺にとつては、俺よりも、俺の護りたい彼らの方が大切なんだ。俺の愛せない俺自身と、俺の愛する彼らを天秤にかけたら……結果は見るまでもない』

彼らを護れるのなら。

こんな自分の命一つ、何を惜しむ事がある？

自己犠牲なんかじゃない。

ただ、そうしたいだけだ。

(俺はやっぱり、……貴方の息子なんだろうな)

似てないところは多々あるが、しかし、それでも根つこの所はやはり同じようなのかもしれない。恭也は苦笑する。

爆弾から、その身を挺して護りたい人を護り切った父。

息子である自分は、今、その父と実に似通った最期を迎えようとしている。

父の最期に敬意を払っているように。

恭也は、この自分の最期に不満なんて何一つなかった。

『……私などよりも』

魅月は、悲しげに呟く。

『私などよりも、あの娘……リインフォースの方が、貴方の事をきつと、よくわかっていましたね』

『魅月……』

『……貴方は、主は、……そういう方なんですネ』

『……ああ。すまない』

恭也は、魅月に謝罪を口にする。

『すまない、魅月。君の主はそんな奴で………そしてもう、君の主ではいられなくなる』

『……………』

黙り込んだ魅月に、恭也は続ける。

『本当に、すまないな。……その上で、恥知らずに言うんだが、恥知らずを言うんだが、……二つ、頼みを聞いてくれないか？』

『……………』

魅月はまだ無言で、恭也はそれでも続けた。

『二つ目、……伝言を、残したいんだ』

『……………このまま、念話でお話下されば、お伝え致します』

『……………ありがとう』

答えてくれた魅月に、応えてくれた魅月に礼を言って。

恭也は伝えたい人達に、伝えるべきことを、どうか伝わってくれと願いながら、言葉を紡いで。

終わった後、また魅月自身に対して言葉を向ける。

『二つ目は……………』

『聞けません』

『……………魅月』

遮った魅月に、恭也は苦笑する。

ああ。

本当に、彼女はいいデバイスだ。

自分には、もったいないくらいなの。

『魅月、なあ、頼むよ』

『聞けません。聞きたくありません』

『……………魅月、それでも、言うよ。……………———どうか、俺以外の主を見つけて、そいつと一緒に生きてくれ』

『嫌です!!』

それは、初めての言葉。

聞き分けも察しも良く、何より忠誠心に厚い魅月が初めて恭也へ向けた、……………我がまま。

『私は、私の主は！ 貴方だけです！ これまでも……これからも……っ！ ずっと、貴方だけです！』

『……魅月』

『貴方以外の主なんて！ そんな、そんなの……私は要りません！ 嫌です！ 私の刃は貴方に振るって頂くためにあつて！ 私の柄は貴方に握って頂くためにあつて！ 私の鞘は貴方につ……愛しい貴方に撫でて頂くためにあるんです！』

そんな我がままが、やはり恭也には嬉しくて。しかし、聞いてあげるわけにもいかなくて。

『魅月、ありがとう。君と出会えてよかったよ。……短い付き合いだったが、でも、君の事を心から愛しく思っている。そんな君の最初の主であれたことを、俺は誇りに思うよ』

『……私はっ、……私、はっ……』

『ごめんな、魅月。ありがとう、魅月』

こうしているうちに、もう、続けた神速の回数のはべ百五十を超えて。体に、ほとんど感覚はない。

『……主……、貴方は……、これでよかったのですか……っ？』

『ああ』

……家族は実際の所、風芽丘を卒業したあたりからもう自分がいなくても大丈夫なようになっていく。

母、桃子の営む翠屋は順風満帆。義妹にして弟子、美由希はそろそろ完成に近く、何より美沙斗がいる。晶も巻島館長の下、空手への道を進んでくれるだろうし、レンも手術を終えて健康に、元気に過ごしている。フィアッセも遠い異国でその美しい歌声を響かせ続けているだろう。

そしてなのはも、もう自分がいなくても大丈夫なくらいに強くなった。

『……まあ、それなりに過酷な人生ではあったような気もするが、……いいさ』

そう、いい。

よかった。

そう言える。

『なあ魅月、いい人生だったよ。自分自身を愛せない俺が曲がりなりにも二十年、生きてこれたのは間違いない周りにおかげで、だからやっぱり俺は、幸せ者だったと思う』

痛みも傷も泥も血も。

抱えて被って生きてきたけど。

それでも、幸せに生きる愛する人達の傍に居させてもらえた自分は、幸せ者だったんじゃないかと思う。

『……いい人生だった』

出来損ないにしては、上等の。

いい人生だった。

エピソードは随分とファンタジーに染まったけれど、それも楽しかった。

そして、恭也の目の前でついにコアが、その再生を止めた。

容赦なく恭也は斬撃を続けて。

コアは、崩れていく。

合わせるように、恭也を強烈な眠気が誘う。

『………主、………——主恭也』

『ああ』

薄れていく意識の中。

『………どうか、………どうか安らかな眠りを。我が、主よ』

『………ああ、………ありがとう、みつ、き………』

『………安らかに。どうか、安らかに。優しい貴方よ、安らかに』

粉々になったコアの前。

『………お眠り下さい、我が、愛しい主』

そんな魅月の言葉を、最後に聞いて。

恭也は、深い眠りについた。

陶磁器やガラスが割れる時のような甲高い音。それが幾重にも幾重にも積み重なったような……そんな不思議な響きが聞こえて。

今にもその魔力を迸らせ、絶望の一撃を放たんとしていたはずの白いコアが、崩れ、さらさらと風に流れて消えていく。

「おにい、ちゃん……？」

なのはのすぐ近くにいたはずの兄、恭也は、いつの間にかその前に居て。

『コ、コア、完全崩壊……。再生反応、ありません……。っ』

エイミイの、半信半疑と言った調子のそんな声が届いて。

青い空の下。

蒼い海の上。

白い光の前。

黒い衣に身を包んだ兄から。

赤い花が咲いた。

真っ赤な、真っ赤な、大きな花だった。

海風が、鉄の匂いを運んできて。

「ツ!!!」

自分の口が何事か、叫んだらしいがよくわからず、とにかくなのは飛び出して。

海へ落ちていく兄の下へと急ぐ。

だって、だって。

飛ぶなのはの顔に濡れる感触。そして匂い。

だってそうだ、これは鉄の匂いじゃなくて。

あれは花じゃなくて。

兄から吹き出て、今自分の顔にかかっているのは――。

血、で。

自分と同様、飛び出して来たらしいフェイトとはやると共に、兄の体を受け止めて。

ぐちゃ、と。

そんな音がした。

なにが、どうなっているのだろうか。
わからない。

現状を、理解できない。

他の者達、リンデイやエイミイ、ユーノ、アルフ、シグナム、ヴィー
タ、シヤマル、ザフィーラ、そしてはやと融合を解いたリインフォー
スも、ただただ言葉を失って。

『——伝言が、御座います』

そして響いたのは、魅月の声だった。

治療ユニットの脇に置かれた彼女は、言葉を放つ。

『主より、伝言が御座います。……まず、クロノ様』

「っ！」

振り返ったなのはの視界の中、呼ばれたクロノがびくりと震えた。

『クロノ』

「恭也、さん……」

魅月から放たれたのは、確かに恭也の声で、恭也の言葉だった。

『クロノ、お前が今まで書の事で誰も責めてこなかったのなら、……お
前もお前を責めないでやってくれ』

「っ!? で、でも……ぼ、僕は……僕が……」

『こんな事にはなったが、俺が勝手にやりたくてやった事だ。本望だ
し自己責任だ、お前に非なんかない。前にも言った通り間が悪かった
だけで、お前は必死に、一生懸命やっていた。俺はもちろんお前を責
めなどしないし、……だから、頼むから、お前もお前を責めないでやっ
てくれ』

『で、でも、でも! 僕は! 僕はっ!』

『なあ、クロノ。お前がどう思っただけでいたのかはわからないが、
……お前と親しくなれて、俺は』

「ぼ、僕は……っ!」

「ここで何を言い募ったところで恭也へ届くことなどないとわかっ
てはいるのだろうが、それでもクロノは何かを言おうとして、

『弟が出来たみたいで、楽しかったよ。ありがとう、クロノ』

「——ッ!」

その言葉で、床に崩れ落ちた。

「……あ、……………あ、ぼ、くは……………ぼく、も……………う、うううう……………うううううううううう！」

頭を抱えて、クロノは唇をかみ締め、必死に涙を堪えて。

「クロ、ノ……………」

「クロノ君……………」

リンディとエイミイが悲痛な顔で傍に寄り添った。

『次に、……………はやて様と、守護騎士の皆様』

「っ、わ、わたし……………わたしのせいで……………」

『はやて、……………はやても、はやて達も、クロノと同じだ。頼むから、君と君達自身の事を責めないでくれ。……………いいんだよ』

「そんな！ い、いいことない！ いいことなんか、何もあらへん……………っ！」

引き絞るような声音で叫ぶはやてに、魅月は、恭也の伝言を続ける。

『俺は、君に悲しんでほしくて、悔やんでほしくてこうしたんじゃないんだ。……………すまない、勝手な事を言ってるだろうか、どうか、頼むよ。……………折角、これで家族揃って幸せに暮らせるんだ。気にしないでくれ、なんて言っても無理かもしれないが、……………せめて、気に病まないでくれ。やりたい事をやっただけなんだ、だから、いいんだ』

「そん、なあ……………っ！」

言葉を無くすはやて達に、恭也の伝言はまだ続く。

『シグナム、ヴィータ、シャマルさん、ザフィーラ、そして……………リインフォース。君達なら、わかってくれるだろう？ 護りたい人達を護れたんだ、俺は、本望だよ』

「恭也……………っ！」

「……………騎士……………ッ」

シグナムとリインフォースは険しい顔で苦しげに呟き。

「キョーヤア……………！」

「恭也、さん……………」

ヴィータとシャマルが切なく揺れる声と表情を浮かべ。

「……………っ」

ザファイラは俯き、拳を握り締めた。

『それと……出会いがあんな形で、終わりもまあ、こんな形にはなつたが……それでも、君達に会えてよかった。……俺に会えた事を君達が幸運に感じてくれたように、俺も君達に会えた事を幸運に感じる』

「……………騎士……………つ、騎士……………！ 私、私は貴方に……………、貴方に……………つ！」

『リインフォース、あんまり悲しい顔ばかりしているんじゃないぞ、綺麗な顔がもつたいいない。君には、笑顔が似合う』

「きよ、恭也、さん……………つ！ わ、たし……………つ」

『はやて、家族と仲良くな。皆が君の傍にいる、なにも心配なんてない』

「心配とかつ……………そんな……………」

『まあ、あまり駄々っ子でも駄目だが、……………我がままを言つて我がままを聞いて、八神家みんな、楽しく生きていってくれると嬉しい。……………じゃあな』

「……………つ」

「あ……………あ……………」

結ばれたそんな言葉に、崩れかかったはやてとリインフォースを、ヴィータとシグナムがそれぞれやり切れない表情で支えた。

『続いて、……………お弟子様。フェイト様』

「……………嘘、嘘……………こんなの……………嘘だ……………」

身じろぎ一つせず、空ろな表情のフェイトは呟き続ける。

『フェイト。……………すまないな、もう、君に指南する事は出来なくなつた。本当に、すまない』

「嘘……………嘘……………嘘……………だ」

『無責任な師匠で悪いが……………鍛錬自体は、君に渡してある指導書があれば何とかなると思う。もしわからない事があつたら、その時は遠慮なく美由希を頼ってくれ。君の力になってくれるはずだから』

「……………」

言葉を止めたフェイトは、彫像のように微動だにしない。

『なあ、フェイト。君は強くなつたし、もつともつと強くなる。それを

この眼ではもう見られないが、しかし、何も心配などしていない。君がこれから翼を広げて飛ばたいて、遙かな高みに辿り着く事は、俺にとっては疑うべくも無い。力も、技も、心も、君はもつともつと強くなる。……そして」

「……………つ……………」

その表情を、感情を、大きく揺らせながらも、しかしフェイトは頑なに固まり続ける。

動いてしまえば何かが終わってしまうとでも言うかのように。

『断言するよ、フェイト。君はその腕に胸に、一杯の愛を手に入れられる。大丈夫、君の未来は明るい。光輝く世界を、時を、これからを、君は生きていける』

「……………つ……………つ……………」

息を呑み、瞳を揺らし、それでもフェイトは停止を選ぶ。

『フェイト、……………ありがとう』

「っ！」

『一時とはいえ君に指南できた事を、君の師であれた事を、俺は心から誇りに思う。ありがとう。……………前にも後ろにも行き場のない、道の無い俺のこの力が、君の進む先を少しでも切り開けた事を、俺は誇りに、そして何より嬉しく思うよ。ありがとう』

「……………」

ついにフェイトは俯いていたその顔を上げ、横たわる恭也へ視線を向けて。

「……………う……………あ……………あ……………」

動かない恭也を視界に捉え。

『君のこれからに、幸多からん事を祈っている。愛しい人達と、手を繋いで、幸せに生きてくれ。……………本当に、君に会えて師になれて、本当に、よかった。ありがとう、フェイト』

「あ……………あ……………あ……………あ……………」

『さよなら、フェイト』

「あああああああああああああああああああああああああああああああああっ!!」

思ってしまう。

それを聞き終わってしまったら、本当に、決定的に。

兄は。

兄には。

もう。

『なのは、まず……家の皆によろしく頼む。勝手に、先に逝ってすまないと、……それから、あの家で生きて、愛する人達の傍で生きられて、俺は幸せ者だったと、ありがとうと伝えてくれ』

一瞬の逡巡の後に、魅月は恭也の言葉の再生を続けた。

「う、ああ、う、……………」

『そして、——なのは』

「う、ああああああ……………」

『約束してくれるか？ ……なんて事は、後出しになってしまいうから言えないな。だから、お願いだ。俺からの、お前への、身勝手な願いだ。聞いてくれないか？ 叶えてくれないか？』

「……………」

予感が走った。

兄が、何を言おうとしているのか、予想がついて。

『俺が死んでも、泣かない事』

「——っ!!」

そして、やはり、ああ、……当たってしまったって。

それは、その言葉は。

聞き覚えが、あった。

『俺は、いつだって明るくて、幸せそうに暮らしているのが、好きだから』

いつか、母が話してくれた、父がその命を散らす前に、母と交わした約束。

『だから、お願いだ。俺が居ても居なくても……ずっと笑って、幸せに暮らしてくれ』

それを今、お願いという形で、兄は自分に告げて。

『そうしたら俺は、……安心して、眠れるから』

「お、に、い、ちや……………」

『愛しているよ、なのは』

最後に結ばれたそんな言葉に、なのはは弾かれたように立ち上がり、兄の横たわるユニット、その透明な蓋に手をついて。

「おにいちゃああああああああああああああああああああああああああああああんっ!!」

叫ぶ。

「好きなの！ 大好きなの!! 愛してるのっ!! わた、しはっ、わたし、はっ、おにいちゃんの……………こと、が……………っ、世界の誰より、好き、で……………っ！ ……愛しててっ!!」

思いの丈を、血を吐くように叫ぶ。

「だからっ、無理だよおっ!! そんなの無理だよおおっ!! おにいちゃんが居なくなっっちゃったら!! 幸せになんかなれないよっ!!」

自分の幸せは、何より、大好きな大好きな、愛しいこの人の傍にいる事で。

それが叶わないのなら、そもそも一体どういう風に生きていけばいいのか、それすらわからない。

息の仕方すら。

わからなくなる。

「おにいちゃんさえ居てくれたら!! もう何にもいらないよお!! それだけでっ、それだけでいい!! だから、だからっ！ おにいちゃん!! おにいちゃんっ!!」

時々意地悪で、自分をからかうけれど。

「おにいちゃん!! おにいちゃん!! おにいちゃんっ!!」

それでもなのはが声をかけて、手を伸ばし、温もりを求めれば、いっただって応えてくれたその人は。

「……………おにい、……………ちゃん……………っ!」

必死に叫ぶなのはの前、ただただ、黙して、動かず、——冷たくなっていく。

「……………あ、……………あ、あ」

それを見て、現実がどんどん頭と心に入ってきて。

ここから先、なのはは自分が何を叫んで、どんな事したのか、おぼろげな認識しかできなくなつて。

とにかく叫んで暴れてのたうち回つて。

止める周囲の人間達に、おそろく。

方法があるのなら言つてみると。

兄を助ける方法があるのなら言つてみると、ないのだったら邪魔するなど、そんな言葉を吐いたのだろう。

「——方法なら……、ある」

そして、場に響いたのは、そんな声。

やけに、鮮明に聞こえた。

「方法なら、ある」

再度の言葉に、なのはは声のした、……ドアの方へと視線を向けて。

「……辛い、選択にはなるが……」

そこにいたのは、そう言ったのは、何人かの局員達に連れ添われながら二匹の使い魔と共に険しい顔を、苦しげな顔をした、グレアムだった。

無機質な部屋の中央、治療用の白い衣服を着込んだ兄の身体がふわりと宙に舞い上がつて。

「凍て、つけ……っ」

『E t e r n a l C o f f i n』

クロノとデュランダルのそんな声とともに、白い魔力が浮かぶその身の周囲に奔り。

兄は、あつという間に氷漬けになった。

宙に浮かんだ、中心に兄の眠る一辺三メートル程の大ききさを持つ正方形のその氷解をすぐさま周囲の局員達が注意深く降ろし、下方に設置された銀の台座の上へと乗せる。

そして、氷解はその上から透明なケースで囲われて。

これで完全に、兄に触れる事は出来なくなった。

「……………っ……………うっ……………くっ……………う……………っ」
零れそうになる涙を必死に抑え込み、嗚咽を押し込みながら、なのはは凍った兄の前、手にレイジングハートを構える。

「恭也……………さん……………っ」

「……………んな……………こんな……………っ」

なのはの両隣には、同じように己がデバイスを構えるフェイトとはやての姿がある。

二人は、その瞳から涙を溢れさせていて。

しかし、なのはは抑え切る。唇をかみ締め、時折まぶたを硬く硬く瞑り、流れかける涙をそれこそ死ぬ気で抑え込む。

「……………それでは、魔力の充填を」

グレアムの指示になのは達は前方、銀の台座にはめ込まれた青いコアへ、展開した魔法陣とデバイスを介して魔力を送り込んでいく。

”デュランダルによる凍結を利用した特殊治療”

グレアムが恭也の命を助ける方法として示したのは、そんなものだった。

氷結の杖デュランダルによって、恭也の身体を完全凍結の状態に置く。その身に流れる時を止め、もつてあと一、二時間だった命をそうして長らえる。

そしてその間に、この銀の台座が内部にセットされた魅月を仲介し、凍った恭也の身に身体修復魔法を送り込み、治療を行うのだ。

元々、この銀の台座はこの治療のために作られた代物ではなくただの遠隔魔法発動装置だったらしいが、あの戦闘をモニターし恭也の惨状を見たグレアムがリーゼ達ともに局内を駆けずり回って準備し、調整したらしい。

その機能から恭也と強くリンクする性質を持つ魅月が仲介となり、その上その魅月が身体強化を非常に得意とするデバイスであったからこそできる荒業であり。

凍結という老化や代謝の一切をも止める状態に置きながらも回復だけはさせるといふ矛盾を、凍結魔法継続中にまれに起こる僅かな揺

らぎ、凍結が解けたとは、溶けたとは決して言えないような微小時間の空白にねじ込むようにして少しずつ少しずつ身体修復魔法を送る事で踏み越える裏技であり。

奇跡のような手法ではあつて。

しかし、この奇跡は万能ではなかった。

——長い時を必要とする。

グレアムは、そう言った。

一年か、五年か、十年か、もつとか。

何年かかるかわからないが、とにかく、何年もかかると。

まれにしか来ないチャンスに僅かずつしか身体修復魔法を送る事ができないゆえに、それは避けようがなかった。

これから、長い時が過ぎ。

周りが、年を重ねて。

なのほも、歳を重ねるけれど。

凍った兄は二十歳のまま止まり、眠り続けるのだ。

「魔力充填率………20%………40%………」

技術局員のカウンタを聞きながら、なのほは胸の中、思う。

誓う。

「……………っ、……………っ、……………！」

泣かないと、泣くものか、と。兄がいつか起きるその時まで、決して泣くものか、と。

だって、それが兄の願いだから。そしてそれは、自分が叶えてあげられる唯一の願いだから。

それしか叶えてあげられないから。

笑う事も、幸せになる事も、出来るわけがない。だからせめて、泣かない事は、守ってみせる。

「60%……………」

「……………っ」

噛み締めた唇が破れたのだろう、口の中、血の味が広がる。それでもなのほは力を緩めない。

血は唇から溢れ、顎を伝って流れ、なのほの白い服を赤く汚してい

く。

涙の代わりに血を流し、震えながら、ひどく冷え切った心の一部分で。

なのはは、胸に刻む。

弱さは、罪で。

いずれ、罰が下って。

一番大切なものを、傷つける事になるんだと。

「80%……………」

優しい気持ちに守られて、きつとずっと、甘えていた。

その結果が、これだった。

強くなる。兄を守るくらいに強くなる。

あの日、病室で誓ったその想いは守れなかった。少なくとも、間に合わなかった。

結局自分は弱いままで。

その罪に下った罰は、自分でなく兄を傷つけた。

「100%……………稼動、開始します」

ヒイインと笛が鳴るような高い音が響いて、台座のコアに籠めた魔力が奔り始めたのを感じる。

「……………っ！」

前方、無言のクロノの肩が震えている。

「こんな……………こんな……………何でや……………わ、たし……………」

隣では、はやてが呆然と立ち尽くし。

「恭也……………、さ……………、ん……………っ！う、ううううううううう……………っ！うああああああああああああああああ……………」

……………っ！」

反対側で、フェイトが床に崩れ落ちた。

「……………っ、っ……………！」

なのはは、涙をこらえ続ける瞳で、ただ前を見据える。

氷の中、眠る兄を見つめる。

ああ。

ああ……。

訓練は毎日欠かさず行って、着実に堅実に確実に、一步一步、前へ進んでいたはずだった。

実践も実戦も経験を積んで、確かな力を掴んできたはずだった。

少し、強くなれたと思っていたんだ。

だけど。

だけど。

この手はこんなに小さくて。

自分は無力で。

なんにもできない。

運命を撃ち抜けない魔法なんて。

なんにもならない。

そう。

そうだ。

——守りたいもの、ありますか？

——守りたいもの、あったんだ。

——守りたいもの、あったのに。

——守られる、ばかりで。

「……………私……………っ、は……………っ！」

J
o
k
e
r

i
s
o
v
e
r
.

M
a
g
i
c
a
l

y
o
u
t
h

l
y
r
i
c
a
l

K
y
o
u
y
a

— 守れなかつたんだ。

l T
y o
r r
i i
c b
a e
l c
K o
y n
o t
u i
y u
a e
T d
r M
i a
n g
g i
l c
e. a
l
y
o
u
t
h

魔法青年リリカル恭也Triangle

第13話 幸せ

「どうかな、おにいちゃん。」

母の用意してくれた桜色の着物を身にまとい、そう聞いた自分に。

「馬子にも衣装、と言ったところか……」

いつもどおりの無表情からは、そんな答えが返ってきて。

ひどいよ、と、少しむくれて見せると、

「悪い悪い、……似合ってるよ」

兄は、今度は微笑と共にそう言ってくれた。

嬉しくて、抱きつく。

その大きな、硬いけど温かい、何より優しい手で兄は髪を撫でてくれた。

その手と、自分の小さな手を繋いで。

同じように晴れ着を着込んだ家族みんなと、にぎやかに家を出て、なじみの八束神社へ初詣に向かう。

街中を歩き、ほどなくしてたどり着いた山の麓から石段を登る。

慣れない着物と履物に少し苦戦する自分を、手を繋いだ兄は優しく引いてくれて。

石段の数は決して少なくなかったけれど、それでもあつという間に迫る鳥居に、もう少し多くてもいいのにと自分勝手な不満を胸の内零してしまった。

人で賑わう境内に入り、拝殿の前、手を合わせ。

二つの願い事を心の中で口にする。

一つ目は、家族と友達、みんなが幸せでありますように。

二つ目は。

二つ目は……。

「……もういいのか、なのは」

瞑っていた目を開き、掲げ合わせていた手を下ろした自分に、隣の兄がそう問うてくる。

うん、となのはが頷くと、

「そうか」

言って兄は手を差し出してくれた。
笑顔でそれをぎゅつと握って。

相変わらずにぎやかな家族達と、おみくじを引いたり、甘酒を飲んだり、写真を撮ったりして、初詣を満喫し。

神社を後にした。

手を繋いだままの兄と一緒に、長くて、でもやっぱり短い石段を下り、行きと同じ道をたどって家の前に着く。

他の家族達はもう中に入っていて。

当然のように続こうと歩みを進め、門をくぐる、その寸前。

するりと、なのはの手の内から温もりが抜けた。

振り返って。

おにいちゃん？ と、その足を止め、自分の手を離れた兄へなのが問いかけると。

「……俺は、ここまでだ」

優しいな表情と首を振る仕草と共に、そんな言葉が返ってきた。

どういふことか、わからなくて。

手を伸ばして。

背筋が凍った。

だって、——届かなかったのだ。

透明な、壁のような何かに阻まれて、微笑む兄になのはの手は届かない。

どうして、どうして？

ぼん、ぼん、と、それを叩いてみても、びくともしない。

おにいちゃん、おにいちゃん！ そう叫んでも、兄は微笑んだまま、また首を振った。

「さよならだ、なのは」

そんな言葉を放つ兄の身はいつの間にか、漆黒の軍服じみた衣服……彼のバリアジャケットに包まれていて。

「元気でな」

叫ぶなのはに背を向けて、兄はどこかへ歩き出す。

なんで？

嫌だよ！

待って！！

なんで、なんで……、混乱するのはは自分の愛杖を展開し、兄に当たらないように角度をつけ、阻み隔たる邪魔な壁へ。

力一杯の魔法を放つ。

奔った桜色の閃光は、轟音と共に着弾して、しかし。

突き抜けず。

撃ち抜けず。

なのはと兄の間、壁は在り続けた。

おにいちゃん待って！

お願いっ、待ってよお！！

行かないで！！

叫びながら魔法を撃ち続けるも。

壁は破れず。

兄は止まらず。

自分は、無力で。

何も、出来はしないまま。

待って！

待って！！

置いていかないでっ！！

いやだよ、こんなのっ！！

声を上げて、足掻いても、何もならず。

泣き叫ぶなのはの視界から、兄の姿は消え去って――。

「……ん」

差し込む日射しに、目を開く。

朝、か。

理解して、なのははベッドの上、身を起き上がらせた。

時計を見れば、六時四十分。どうやら目覚ましが鳴る前に起きたら

しい。

「……………」

目を伏せて、今しがた見た夢を思い出す。
もう何度見たかわからない夢を思い出す。

無力な自分が大切なものを手から零す、そんな夢を、思い出す。
それは、夢だけど、夢でもなんでもなくて。

「……………着替えなきゃ」

誰にとも無くそう一人ごち、ぎしりとスプリングを軋ませてなのは
はベッドから下りた。

寝巻きを脱いで。

ふと、部屋の隅にある鏡を見やる。

そこに写るのは、なんとという事も無い、今の自分の姿。

あの夢の自分よりも、背も髪もずいぶんと伸びた姿。

壁際にかかった聖祥大学附属中学校の制服を手に取り、着替えて。

十二月の冷えた空気に少し身震いしながら、なのはは部屋を出た。

「ああバカそれは年末年始用に買い込んだやつだよ使えんじやねえ
ぶつ殺すぞウスノ口亀……………あ、なのちゃん、おはよー!」

「やったら紛らわしいとこ置いとくなやつちゅうかお前この前うちの
作った秘伝のタレ勝手に……………お、なのちゃん、おはよう!」

「うん、おはよう」

一階に下り、顔を洗って髪を整えリビングに向かうと、隣のキッチン
には朝から賑やかに喧嘩しつつ料理をしている姉的存在二人の姿。

「なのちゃん、これ、お弁当ね」

近寄ると、晶から可愛らしいデザインの布で包まれた弁当箱を手渡
された。受け取り、礼を言う。

「あ、うん、ありがとう晶ちゃん」

「ちゅうかなのちゃん、今日はもう終業式やろ? お弁当いるんやつ
け?」

「午前中までは普通に授業があって、その後に終業式だから」

スタイルのいい高身長に艶やかで長い髪と、そういえばもしかした
ら自分以上にあの夢の頃からは外見が変わったかもしれないレンに

そう答えると、

「おお、そかそか。むう……お嬢様学校は勤勉や」

怠惰な大学生とはちやうなあと、苦笑しながら彼女は言った。

晶とレン、二人は揃って海鳴大学生だ。

「おはよー」

玄関から声、ほどなくしてリビングに母、桃子が入ってきた。翠屋の开店準備をしていたのだろう、一仕事終えた感がある笑顔を浮かべている。

「おはよう、お母さん」

「あ、おはようございます桃子さん」

「おはようございます、朝御飯できてますよー」

「ありがとー!」

なのも支度を手伝い、そしてテーブルに付き、四人で朝食を食べ始める。

「そういえば、美由希ちゃんそろそろ帰ってくるんですよね?」

なのはの対面、晶が言った。

「うん、年明け前には美沙斗さんと一緒にこっちに戻ってくるってさ」

魚を綺麗に骨と身に分けながら、答える桃子。

「香港警防隊で短期講習でしたっけ? すごいですなー美由希ちゃん」

湯気立つ湯のみを手に、レンが心底感心したように零した。

正確には従兄弟であるところの姉——美由希は去年御神流の皆伝を受け、今は基本的には翠屋を支えつつ、なのはから見れば叔母である彼女の実母、美沙斗の仕事を時折手伝っている。

「なのはも、年末年始はお仕事入ってないのよね?」

「うん。よっぽどな緊急出動でもかからない限りは、のんびりできるよ」

「フェイトちゃんとかはやめちゃさんもそやったっけ? ご一緒できそ?」

「てかハラオウン家と八神家ご一行、みんな集まれっかな?」

レンと晶のそんな問いに、

「うん、フエイトちゃんとはやてちゃんは大丈夫なはず。他のみんなは……どうだろう、今日あたり二人に聞いてみるね」

そう、答えつつも。

わざわざ聞くまでもないことだとは思う。おそらくは、皆、集まるだろうから。どんな予定があつたつて、こじ開けて、こじ空けて、来るだろうから。

だってそれがあの日、あの後、涙を流し声を震わせたただただ謝罪する彼らに、母が出した条件だから。

12月30日。

毎年その日は絶対に、悲しい顔をしないで、皆で、この家に集まつて笑つて騒ぐこと。

それが、母が彼らに出した条件。彼らの謝罪を受け入れる、そのために出した唯一の条件。

”あの子は、貴方達にそんな顔して欲しかったんじやなかったはずよ。だから、ね?”

瞳から一粒、二粒、雫を落として。

穏やかに微笑みを浮かべながら、母はそう言つて。

すぐ隣にいた自分にしか聞こえないくらいの声量で、小さく、——
まったく似た者父子なんだから、と、そう呟いていたのをよく覚えて
いる。

「来てもらえるんだつたらなつかなかの大人数になるからなあ。がつつり腕振るわないと!」

「いやいやあんたは脇役料理をちまちま作つとつたらええねん。メイ
ンディッシュはうちが華麗に用意するんやからな」

「ああん? 日本の年末なんだから高町家食担当ことこの城島晶様
本領発揮デーに決まつてんじやねえか、胡散臭い関西チャイニーズは
引つ込んでろ」

「おいそれは関西を馬鹿にしてるんか中国を馬鹿にしてるんかまあ
どちらにしてもぶち殺すぞ。ちゆうかな、男だか女だかわからん生命
体の料理なんて皆どんな顔して食うたらええんかわからんやろ」

「料理人の性別なんてどつちでもいいだろうが!」

「どっちでもええんやろうけどどっちだかわからんのはなんか嫌やろ」

「てめえなあちよつと背とか……………胸、とか、でかくなつたらうって調子乗ってんじゃねえぞー!」

「ちよつとおお? ちよつとやないやろ、見よつ、このダイナマイトバデイ! セクシーレンちゃん! これ見たらおししよもさぞ驚」
「っ、おま…………っ」

「あ…………っ、や……………その」

相変わらずの軽口の応酬が、そんなふうにして止まった。

晶とレンは、気まずそうに眼を伏せぎみにして。

「…………うん、そうだね」

なのはは、二人に微笑んで言う。

「おにいちゃん、今のレンちゃん見たらきつと驚くよ」

「そ……………そかな」

「うん。はやてちゃんを指さして、”俺の知ってるレンと言うのはこ
ういう…………”とか言うかも」

「…………うわ、師匠それ言いそうだなあ」

「あの子、そういうこと真顔で言うのよねえ」

桃子が苦笑しながら晶に続いた。

「それじゃ、行ってきます」

「行ってらっしゃいなのちゃん」

「氣いつけてなあ」

サイドアツプにまとめた栗色の長い髪を揺らしながら、通学鞆を手に玄関から出て行ったなのはを見送って、

「…………おい亀」

「……………わかつとるわ……………悪かった」

その姿が完全に見えなくなったところで、低い声で言った晶にレンは素直に非を認めた。

別に、あの人の事がタブーなわけではないけれど。

それでも、なのはの前では決して迂闊に口に出していいわけでもな

い。

やつてもうたなあと、レンは心の中自責の念を浮かべた。

「……わかってんならいいけどよ」

なんだかんだ付き合いが長いゆえにレンの反省の深さを感じ取ったのだろう、晶もそれ以上は責めてこなかった。

流れた少しの沈黙の後、

「でもよお……、改めて思うけど、——奇跡だよな」

目を細めなのは出て行った門を見つめながら、晶は言った。

そんな少し唐突な言葉に、しかしレンも頷き返す。

「……そやな」

そう。

奇跡なんだ。

「なのちゃん、……笑つとるもんなあ」

今では珍しくもなくなった、なののは笑顔。

それがあるのは、間違いなく奇跡だった。

「それこそ、あの後半年間ぐらいは……」

「……ああ」

後半を略したレンの言葉に、晶は同意の声を上げ、顔を伏せた。

レンも、眼を伏せて。

思い返す。

生気のない表情。抑揚の消えた口調。投げやりな挙作。

それでも、その眼だけは寒気がするくらいに爛々と、暗くて眩しく強くて怪しい、闇を纏った光を放って。

とてもじゃないけれど見ていられなくて、でも、とてもじゃないけれど眼を離す事もできなかった。

「ちゆうか、……こう言うのもなんやけど、笑えるようになった事どころか……なのちゃんが……その……」

「……大怪我一つ負わずに生きてんのだって、奇跡だよな」

「……せや」

あの頃のなのは、危うさの塊みたいなものだった。

いつ死んでしまってもおかしくないと言うよりは、生きている事が

不思議なくらいの。

「……今日だって、休日やからってちゃんと朝練やらんかったもんな」

「ああ」

あの日の後、晶とレンも管理局や魔法については教えてもらったが、それでもやはり門外漢ではあつて。

しかしその自分達から見ても、あの頃のなのはが行っていた訓練、鍛錬は常軌を逸していたように思う。

その身を省みず、むしろ自らを罰するかのようになり、眼を覆いたくなるような無茶を繰り返して。

破滅へ向かつて一直線、そんな言葉がぴったりだった。

「なごつけねえ事によお、あん時はやつぱ思っちゃまった。……師匠が居てくれたらなつて」

晶が下を向いたまま言った。

「……師匠が居なくならなかつたらそもそもあのちゃんはああなる事もなかったわけで、だからありえねえ仮定ではあるんだけど、……でももしあん時師匠が居てくれたなら、あのちゃんをちゃんと支えて、包んで、守つたらうなつて」

「……せやな、間違いない」

居なくなつて、改めて。

桃子が高町家の大黒柱だと言うのなら、あの人は屋根だったんだとレンは思った、痛感した。

激しい風からも、冷たい雨からも、硬い雹からも、重い雪からも、恐ろしい雷からも、……たとえ天から鋭い槍が降ろうとも、あの人はその全てを弾いて中に居る家族を守ってくれて。

自分達の誇らしい師は、あの人は、そういう人で。

「……次の誕生日が来たら、俺、師匠と同じ年になるけどさ」

「あー……そか、そやな。うちはまだ一個差があるけど、お前は、そうか……」

「ああ。でも、……あの域に達せてる気はしねえ」

「そりや当たり前やろ、うちかて無理や。……そもそも、おししよは

昔っから、……それこそうちらがあの人に会った頃からそういう人
やったやろ」

「……まあ、そうだな」

ため息ひとつ、晶は吐いて、

「しっかし、……あれだよな。玄関に居て、こういう話してると思い出
すな」

周りをちらりと見渡ししながら、少し口調を変えて言った。レンも苦
笑して頷く。

「せやなあ。いやはや、ほんまにうちらはヴィータちゃんはもちろん、
……フェイトちゃんにも足向けて寝られへんよな」

「だな」

晶も苦笑を浮かべた。

「もう結構経つけど未だに昨日のことように思い出せるぜ、N&F顔
面ボコボコ事件」

「別嬪二人が揃ってあれやったからなあ、強烈やったな」

「”この娘が馬鹿だから殴りました”ってなあ」

「……うちらには、出来んかった事や。ほんま、何度礼言ったって言い
足りんわ」

「違いねえ。……年末、ハラオウン家と八神家がうち来てくれたら
やっぱご馳走振るまわねえとな」

「ああ、うちの作ったご馳走な」

「馬鹿言え、俺のだ」

ど付き合いながら、あの娘達の好みのメニューはなんだったかど記
憶を掘り返しつつ、レンと晶はリビングに戻った。

「ねえフェイト、貴方はお人形よ。あの娘にはならなかった、あの娘の
代わりにもならなかった、ただのお人形」

(ごめんね、母さん)

「失敗作よ。不用品よ」

(ごめんね。……でも)

「ずっとずっと、私は貴方が大嫌いだったわ」

(私はやっぱり貴方が好きだったよ。……今でも、愛してる)

「お人形、失敗作、いらぬ子。ねえ、わかつている?」

(……ごめんね、母さん。——わかつてないよ)

「そんな貴方が誰かに愛される事なんて、あるはずないって」

(ごめんね、母さん。あるんだって思ってる)

「ねえ、ちゃんとわかつているの? 貴方を作った私すら、貴方を愛する事なんてとてもじゃないけどできやしなかった。なのに……」

(貴方には、愛してもらえなかったけど)

「それでもまだ誰かに愛してもらえるなんて、本気で思っているの?」

(うん、思っているよ)

「ねえ、わかつているんでしょう?」

(ううん、全然わかんないや)

「今は傍にいる人間達も、時が経てばいずれ離れていくわ」

(今は少し、離れてしまったけど、でも、言ってくれた人が居たから)

「だって彼らは、——人間だもの。お人形の貴方とは違って」

(大好きな人が、愛しい人が、言ってくれたから)

「貴方は、お人形として遊んではもらえても」

(まともじゃなくてもおかしくてもちがっていても、いいよって)

「人間として愛される事なんてないわ」

愛しいよって、言ってくれたから。

閉めたカーテンから溢れる朝の日差しに照らされながら、ベッドの上、胸の中、フェイトは呟いた。

「……んんっ」

身体を起き上がらせ、軽く腕を伸ばして、ストレッチ。

うん、いい朝だ。

そう思いながら、柔らかいベッドから降りる。

まあ、悪夢は見たかもしれないけれど。

「おはようございます、プレシア母さん、アリシア」

ベッドサイド、ケースに入れて立ててある写真へ微笑みつつ挨拶する。

悪夢は、見たかもしれないけれど。

だけど、恐れない。

だって。

だって。

母と姉の写真の隣、同じく立ててあるケースの中、幼い自分と手を繋いで精悍な顔つきに僅かな笑みを浮かべた男性を見やる。

そう、だって。

「おはようございます、——恭也さん」

この人が、あの夜、抱き締めてくれたから。

話す事も、触れる事も出来ない寂しさに押し潰されそうにはなるけれど。

それでもあの記憶が、熱が、喜びが、この心にある限り、自分は決して過去に吞まれず、影に竦まず、闇に怯えない。

愛しいその名前を、姿を、今日も胸に眼に焼き付けて。

フェイト・T・ハラオウンは聖祥大学附属中学校の制服に着替え、部屋を出た。

「おはよう、フェイト」

「……おはよう。……びつくりした、珍しいね」

身支度を整え、リビングへ向かうとそこにいたのは言った通りに珍しい姿。

「クロノが朝からここにいるなんて」

クロノ・ハラオウン。自分の義兄にして、時空管理局提督である多忙な人だ。

ここ、海鳴市のマンションに顔を見せるのは月に一回あればいい方。ましてや朝から居るなんて、本当に珍しい。

「まあな」

苦笑するクロノ。

「何かあったの？」

「いや……なんというか……」

「……？」

齒切れの悪い彼の反応に首をひねっていると、

「それがねえ、うふふふ」

「あ、母さん。おはようございます」

「うん、おはよう。ねえフェイト、お兄ちゃんからなんだか大事なお話があるみたいよ、聞いてあげてちょうだい」

なにやら上機嫌な義母、リンディ・ハラウンがエプロン姿でキッチンからこちらへ歩み寄って来て、そう言った。

「大事なお話？」

「ま、……まあな」

クロノに視線を向けると、彼は少し困ったような……照れたような顔をした。

促され、木製テーブル、彼の対面に座ると、

「……その、エイミィとな」

非常に言いづらそうな、そんな口調で紡がれ始めた言葉だったが、……そこまで聞いただけでピンときた。

テーブルの隣、リンディは立ったままでにこにこ嬉しそうな笑みを浮かべていて。

自分の予想が当たっていることを確信しながら、フェイトは言葉の続きを待った。

果たして、

「まあ、なんと言うか………結婚を前提に交際していな。それを、一応、伝えておこうと思って」

やはり、予想は当たっていた。

「……そうなんだ、うん」

フェイトは嬉しいという気持ちをそのまま笑顔にのせる。

「二人とも、すつごくお似合いだよ。よかった」

「……そうか？」

「うん、幸せにね」

「……ああ、ありがとう」

真面目で誠実な義兄と陽気で優しいエイミィは本当にぴったり嵌

り合う二人だと、ずっと前から思っていた。

腐れ縁の姉弟みたいなものだって、二人は事あるごとに言っていたけど。

それが変わり始めたのは、もちろん自然な成り行きもあってだろうけど、でも、……あの日の事もきつと無関係じゃないだろう。

尊敬していた、父のような、兄のような人が、長い眠りについてしまつて。

クロノはやっぱり、自分を責めて。そうしないでくれとあの人に言われてはいたものの、それでもやっぱり強く強く、潰れるくらいに自分を責めて。

そんなクロノを支えたのは、エイミイだったから。

「あまり、驚かないんだな」

「うん、だって、だろうなあって思ってた」

「……そうなのか？」

意外そうに眼を少し見開いたクロノに、フェイトは微笑んで言う。

「クロノ、あんなに人気あるのに誰にも振り向かないから。だからきつと、もう誰かがいるんだなあって。それで、その誰かが誰なのかなんて、考えるまでもないっていうか。エイミイよりクロノに近くて、エイミイよりクロノをわかつて、エイミイより……クロノを好きなんなんて、私の見る限りいなかったよ」

「……そうか」

ふ、とクロノは柔らかく笑みを浮かべた。

若くして執務官として活躍し、提督の座にまで上り詰め、そこでも堅実に実績を上げ続ける彼は局内でも有名人だと言える。

頼りになつて面倒見が良い性格に、声変わりし、一気に背が伸びてからは男性らしく、平たく言つて格好良くなつたそのルックスも相まつて、女性からの人気はかなりのものだ。

それなのに誰の誘いにも乗らない様子を見て、フェイトは先ほど言つた通りにエイミイとの仲をある程度予想していた。

エイミイの方だつてそうだ。優秀なオペレーターとして名が通つていたし、可愛い人だ。かけられる声は数多あつたらうけれど、フェイ

トの知る限りは歯牙にもかけなかった。

そんな二人が結ばれたというのは、何も不思議な事なんかじゃなくて。

「すぐく、ものすごく嬉しい事だった。」

「でもまさか、朝からこんな面白い話が聞けるなんて思わなかったけど」

「帰って来られるタイミングがここくらいしかなくてな」

「そうなんだ、やっぱり忙しい？」

「まあ、それなりにな。……………ああ、ただもちろん……………」

一瞬だけ眼を伏せて、クロノは言った。

「……………年末のあれにはちゃんと顔を出させてもらおうよ。その旨、よかったですね」

「あ、私もちやんと行けそうだから、桃子さん達に伝えておいてもらえらる？」

「うん、わかりました。じゃあ今日、高町家に寄らせてもらって言うっておきます」

「行ってらっしゃい、フェイト」

「気をつけてな」

「いつへらっさいふえいふお……………」

「はい、行ってきます」

リンディとクロノ、そして起き抜けで呂律の回っていないアルフに穏やかな笑みを返して、フェイトはマンションを出ていった。

「ふああああ……………」

「まだ眠いのか？ アルフ」

「うん……………」

問うたクロノにこくりと頷き、ふらりふらりと身を揺らしながらアルフは寝室へと向かっていった。

「どうやら二度寝する気らしい。」

「あの身体にしてから、どうも朝はほんとにダメみたいだね」
苦笑しながらリンディが言った。

フェイトの魔力をなるべく消費しないようにと、少し前からアルフは人型のデフォルトを10歳くらいに姿に変更した……という事はクロノも知っていたが、どうやらそれにはそんな副作用があったらしい。

「クロノはもう、すぐにお仕事行くの?」

「ああ」

「そう。じゃ、ほんとにあの話するためだけに帰ってきたのね」

「ま、まあな」

からかうように言ったリンディに照れながらクロノは頷いて。

「……しかし」

表情を改め、言った。

「よかったのだろうか、フェイトに伝えて」

「どうして?」

「……フェイトはもうずっと、片想いどころか話す事すら出来ていないと言うのに、無神経なんじゃないかと思ってしまうてな」

「……心配性ねえ、お兄ちゃんは」

リンディは少し呆れたように肩をすくめて、

「大丈夫よ。あの子は、私の娘は、貴方の妹は、そんなに弱い女じゃないわ。……強くなったもの」

力の籠る口調で言った。

「……そうか。……ああ、そうだな」

その言葉に、クロノは眼を閉じ思う。

そうだ、あの娘は本当に強くなった。

あの日の悲しみを、おそらくあの場に居た誰よりも早く乗り越えて。

彼の残した書を手にも、教えを胸にも、前へ進んで行った。

頑張つて頑張つて、でももちろん言われたとおりにちゃんと身体も大切にして、それで、強くなって。

あの人に、一歩でも近づくんだと。

そう言つて、自分を壊すことなく丁寧に丹念に鍛錬を積み重ねていった。

執務官試験にも一発で合格し、今や本局内でも一目置かれる高名な魔導師だ。

「でも……まあ、もちろん、強いからって辛くないって事はないんだけどね。……もどかしいから、大好きな人に、愛しい人に会えないって言うのは」

重みのある声で言ったりリンディに、

「……そうだな」

クロノは頷いた。自分達二人は、それこそ母は、それをよくよく知っている。

そしてフェイトにとって、あの人は疑いようもなく大好きな人で、愛しい人だろう。

大分の昔の事だが、よく頑張るなど鍛錬後の彼女に声をかけた事がある。

その時に、はにかんだ顔から返ってきたのは、

” 頑張って強くなればその分近づけるし、………それに、その………ちよ、ちよつと不純かもしれないんだけど”

” ほ、褒めてもらえるかな、って。いい娘だっと思ってもらえるかな、って。そ、したら………ほんのちよつとでも………”

” ——好きになってももらえるかな、って”

そんな言葉だった。

その想いはきつと、変わらず鍛錬に励む今も微塵も揺らいでいないだろう。

あの娘は、ずっと。本当に、ずっと。一途に、純粹に、深く深く、あの人を想い続けている。

「あの娘の気持ちは多分、色褪せないどころか日増しに強くなってるくらいでしょうし………やっぱりとっても辛くはあるはずよ」

「……ああ、だと思っ」

「だけど、だからと言って貴方とエイミイが幸せになる事で傷ついたりはしないわ。そりゃあもちろん寂しい思いはあるかもしれないけれど、それ以上に、嬉しいって思ってくれているはず。わかってるでしょ、そういう娘だもの。……優しい娘だもの」

「……………ああ、そうだな」

複雑な笑みを浮かべたリンディに、クロノも笑みを返した。フエイトの強さは、優しさは、沢山の人の救いになっている。それこそ。

あれだけ傷つき涙を流しながらも立ち直り、立ち上がった彼女の強さにクロノは力をもらったし。

自らを傷つけ破滅へと突き進むのはを止めたのは、彼女の優しさだった。

彼女はあれからずっと、周りの人々の幸せを支えて、護ってきたのだ。

「ほんっとーにいい娘よね。あれだけモテるのもわかるわあ」

湿っぽくなつた雰囲気消し去るように、明るい口調でリンディが言う。

「本人は謙遜してるけど、学校じゃあもう何人から告白されたかわかつたもんじゃないみたいよ。お兄ちゃんとしては心配？」

からかうようなリンディに、しかしクロノは余裕の笑みを返した。「心配なんてしていないさ。フエイトは恭也さん一筋だし、その恭也さんに比べればそこらの男なんて等しく木偶の坊に過ぎん。フエイトがよろめく事など万に一つもないだろう」

「……………何と言うかまあ」

断言したクロノに、本当にうちの兄妹は揃って恭也さん信者ねえとリンディは苦笑いを浮かべた。

「謝らないで」

「……………で、でも……………」

「お願いだから、さ。謝らないでよ、はやてちゃん」

「でもっ、わ、わたしが……………」

「ねえ、はやてちゃんはおにいちゃんをあんな風にしたかったの？」

「はやてちゃんが望んでこうなったの?」

「そ、それは……………」

「違うでしょ? 違うよね? 違うって言うてよお願いだから、謝ったりしないでよお願いだから。お願いだから、お願いだから、——私に友達を恨ませないで」

「っ!」

「折角出来た友達を、おにいちゃんが守った娘を、私は、恨みたくなかない」

「なのは、ちゃん…………」

「謝ったりしないで、悲しい顔をしないで、自分を責めないで、…………そんな風に生きないで。おにいちゃんはそんなの、望んでないよ。だからお願い、お願いだよ、はやてちゃん」

「わ、たし…………」

「笑って生きてよ、楽しく生きてよ、幸せに生きてよ。はやてちゃんや八神家の皆がそうしてくれたら、おにいちゃんは喜ぶよ。…………私には、ちよつと出来そうにないからさ、はやてちゃん達にお願いしたいんだ。ごめんね、勝手な事言ってるね」

「なの、は、ちゃん…………」

「謝らないでね、はやてちゃん。…………友達で、いさせて」

「朝…………」

眼を開いて、眩いた瞬間目覚ましが鳴った。はやては上部のボタンを押してアラームを止め、

「んつと…………」

手足を伸ばし、身体を目覚めさせて——。

「…………っ」

ぱん、と、頬を両手で叩き、自分に喝を入れる。

沈んではいけない。落ち込んではいならない。悲しむ、わけにはいかない。

八神はやては今日も幸せに生きるのだ。

謝る事は赦しを乞う事で、自分にそれは許されていない。

償いなんて出来ないし、そもそもしてはならないし、しようなんて思っではいけない。

ただ、感謝して。礼を籠めて。

一日一日、守ってもらった自分の幸せを噛み締めて、生きていくだけだ。

それがあの日、救われた自分の生き方だ。

ベッドから下り、両の足で床に立つ。

一步一步、歩ける幸せを。

一步一步、一人も欠けなかった家族のもとへ歩いていける幸せを。

一步一步、友達でいてくれるかけがえのない人達と歩き続けていく幸せを、噛み締めて。

聖祥大学附属中学校の制服に着替え、はやては自分の部屋から自分の足で歩いて出た。

「ああ、主はやて、おはようございます」

リビングへ降りたはやてへ、キッチンから穏やかに微笑む銀髪的美丽な女性。

「おはよう、リイン。そか、今日の朝御飯はリインの当番やったか」

「はい」

答えながらも、彼女——リインフォースの手はぱっぱと手際よく作業をこなしていく。

八神家において、リインフォースははやてに次いで料理上手だ。

「おはようございます、主はやて」

「おはよーはやて」

リインフォースの丁寧で鮮やかな手際をなんとはなしに眺めていると、背後からそんな声。

「おはようヴィータ、シグナム」

自分がついさつき閉じたばかりの扉を開き、そこから現れた二人にはやては挨拶を返した。

「はい」

「うんっ、お、今日の朝飯はリインのか」

キッチンへ視線を向けたヴィータが嬉しそうに言う。

「うんうん、いいこった。リインの飯はうめえからな」

「主はやてには遠く及ばないがな」

ヴィータの言葉に、照れたようにリインフォースはそう返した。

「なに、全く作れぬ我らと比べれば遥かに上等だろう」

「そうそう、シグナムの言う通りだ。それに何よりリインのおかげでシヤマルの飯を食う回数がぐつと減ったからな！」

「ヴィ、ヴィータ……」

あまりにあまりなその台詞にはやてはさすがに苦笑いするも、悪びれない様子のヴィータは笑顔で続ける。

「朝からシヤマルの飯なんて食った日にやあとてもじゃねえけどグラーフアイゼン振り回せねえよ。まったく、なんの罰ゲームだって感じだ」

「……え、なんで私朝からこんなぼろくそに言われてるんですか？」

「うわあ、どんぴしゃにあかんタイミングで入ってきたなあシヤマル……」

最悪なタイミングでキッチンに近い方のドアから部屋に入ってきたシヤマルは、そのあまりの間の悪さに苦笑するはやての前で、ええ、泣いちゃいますよ？ と、呆然とした顔で嘆きの声を零す。

「お、シヤマル。起きてたのか」

「ええ、玄関のお掃除をして……つて、ええええええちよつとちよつと今の発言に対して何かしららないんですかヴィータちゃん！ ひどい事言っでごめんとか、あんな台詞を本人に聞かれていたのに何もフオローないの!？」

「……?」

首を傾げるヴィータ。

「え、え、なんでそんな」何言っつてんのコイツ”みたいな顔で見るの……?」

「いや、だってアタシ嘘も間違った事も言っつてねえし、ひどい事言っつか事実だし、つうかひどいのはお前の飯だし」

「……………つ」

悪意の色すらないあまりに純粋な声音で吐かれたそんな言葉に、

シヤマルはその場に崩れ落ちた。

「や、……そ、その……シヤマルも、……もうちよつと練習すれば上手くなると思うぞ……。そ、それにまあ、何と言うか、シヤマルの作る食事もあるはあれで個性が……」

うずくまるシヤマルに駆け寄り屈んで床に膝を落とし、柔らかく声をかけるリインフォース。

「リ、リイン……ありが」

救いの女神はここに居たとばかりに、シヤマルは身を起こし顔を上げ――。

「おいシヤマル、リインは優しいから気遣ってくれてるだけだぞ。個性が、なんつうのは下手くそに対するオブラートの常套句だ」

「……………」

「あ、シヤ、シヤマル……っ」

再度のヴィータの言葉に、気遣わしげに声を上げるリインフォースの傍、シヤマルはもう一度床の上に崩れた。

「ヴィータ……、いくら何でももうちよつと言葉を選べ」

たしなめるシグナムに、しかしヴィータは険しい顔で返す。

「いや、あんな事言われてんのほうっておいたらシヤマルが勘違いして”個性を生かした創作料理!”なんてもんに手を出すかもしんねえ、ちゃんと叩き潰しておかねえと。考えろ、シグナム。仮にそんなもん毎日食わされでもしたらお前は生きていけんのかよ？」

「……………この身の未熟を許せ、シヤマル」

「謝られるのが一番辛いいいいいいっ！」

とうとう涙目でシヤマルは慟哭を上げた。

ま、まあ要精進ちゆうことで……、と、執り成すようにはやてが言おうとした時、

「なんの騒ぎだ……」

またしてもドアが開き、入ってきたのは蒼色の狼、ザフィーラと、「朝から賑やかですー！」

ちよこまかと浮遊する小さな、まるで妖精のような身の丈の銀髪の女の子。

「ああ、おはようザフィーラ、リンツ」

「おはようございます」

「おはようです、はやてちゃん!」

渋い声で返したザフィーラの頭上、銀髪の女の子——リンツがその顔に満開の笑顔を浮かべる。

リンツ、正式名称リインフォースII。

彼女は八神家末妹にして、リインフォースと同じく融合騎、ユニゾンデバイスだ。

姉のリインフォース不在時にその代わりを務める事が主な役割である。

リインフォースは、はやてとユニゾンした時こそ広域魔法特化になるものの個人としてはどの距離、種類の魔法も満遍なく使いこなすオールラウンダーであり、豊富な知識と経験、書が完全な形で本来の姿に戻ったために並外れた屈強さ・頑丈さと非常に高い回復速度を有する身体、そして膨大な魔力に言うまでもなく高い魔法行使技能を持つ、実に優秀なSランク魔導騎士である。

そのため単独で動くことを求められる状況も多々あり、はやてのユニゾンデバイスではあるものの常にはやての傍に付いていられるわけではなく。

そんな事情の下、リインフォースIIが生み出される事となった。

リインフォースの単独行動中ははやてがユニゾンを行う必要が出た時にその力を発揮するのが主たる役目であり、また、姉のリインフォースほどの力はないが単独での魔法行使も可能で、その上シグナムやヴィータ達とのユニゾンもこなせる、なかなか優秀な末妹だ。

「あつ、今日の朝御飯はお姉さまですか!」

「ああ、リンツの好物も入っているぞ」

「やたあああああ! さすがお姉さまです!」

優しいな笑みを浮かべるリインフォースに、はしやぐリンツは無邪気な声で続けた。

「やっぱりリンツははやてちゃんとお姉さまのご飯がいいです! お仕置きみたいなシャマルのご飯は食べたくないです!」

「おし……おき………つて………」

もはや固まるしかないシャマルに、ザフィーラが近づきその肩に手を置いて言う。

「……俺は、この姿ならお前の作った飯も問題なく食えるぞ」

「………なんのフォローにもなつてないわよおおおおおおおとお！」

シャマルの悲しい叫びがキッチンに響いた。

「……ほんま、朝から元気やなあ」

はやては思わず苦笑を零す。

八神家は、今日も賑やかだった。

「ほんなら、みんな年末はちゃんと行けるゆうことやね」

「はい。テストタロツサに言っておいてはありますが、その旨、宜しければ……」

「うん、なのはちゃんに伝えとくわ」

そうシグナムに返し、八神家玄関、靴を履き終えたはやては立ち上がった。

「主はやて、お鞆を。お弁当も入れておきましたので」

「うん、ありがとうな」

エプロン姿のリインフォースが差し出した鞆を受け取って、

「それじゃ、行ってきます」

「行ってらっしゃいませ」

「お気をつけて」

見送るシグナムとリインフォースに手を振り、はやては玄関から出て行った。

「将は、今日は？」

「この後、すぐに部隊へ」

「そうか。……栄えある首都航空隊の、第14部隊だったか？ その副隊長に抜擢だものな、多忙な身だ」

感心したように言ったりリインフォースに、シグナムは苦笑する。

「お前だって遺失物管理部にしよっちゅう出向を請われているだろ

う。引つ張りだこだと聞いているぞ」

「いや、そこまでのものでは……」

「そう謙遜するな、『銀の女神』」

「っ、そ、その呼び方はやめてくれ……!」

にやりと笑ったシグナムの言葉に、リインフォースはその白い頬を一瞬で真っ赤に染めた。

リインフォースは基本的には特別捜査官補佐としてはやてと共に任務についているが、本人自体がロストログアであることから遺失物管理部によく助力を請われている。

そこで任務を共にし、それこそ窮地を救われた者たちからは――

『祝福を運ぶ美しき銀の女神』、だったか」

そんな風に呼ばれ、半ば信奉されているのだ。

魔導騎士としての高い実力、神聖さすら感じさせる整った美貌に、優しく穏やかで気の利く性格。

まあ、そんな風に慕われるのも納得だ……と、シグナムとしては思っているのだが、

「わ、私は美しくもなければ、そんな女神だなんて呼ばれるようなものでは……」

本人はそんなやや大仰な呼び名に対し、それはそれは恐縮しているらしかった。

「いいじゃないか。私が見る限り、これを言っている奴らはからかい等ではなく心からそう思っているようだぞ」

「だ、だから余計に申し訳ないんだ、勘違いをさせてしまつて……。……だって、女神どころか私は……」

声と顔に影を落とし、困ったように言うリインフォースに、
「……いいだろう、リインフォース」

シグナムは少し表情を真面目なものに変えて言った。

「お前に救われた者たちからすればそれは真実なんだ。だからお前は祝福の風で、銀の女神で、それでいいんだ」

「でも……」

「アイツもきつと、お前のそんな評判を、活躍を聞いたら喜んでくれ

る」

「……………」

その言葉にリインフォースは瞳を揺らし、泣きそうな顔をした。

「そう、だろうか……………」

「そうだ。と言うか、…………それを疑うことは許さんぞ。だからこそ、アイツがそんな奴だからこそ、我らの今があるのだからな」

「……………」

リインフォースは項垂れ、沈んだ顔で、

「そうだな、その通りだ。…………馬鹿な事を言ったな、すまない将……………」

憂いを含んだ声を上げ、

「……………」

「すまない……………いたっ!？」

シグナムは無言でそんな彼女の頭を軽く叩いた。

「い、痛いぞ将……………」

「お前がそんな顔をするからだ」

顔を上げ、涙目で言うリインフォースにシグナムはしれつと返す。

「そ、そんな顔って……………」

「笑顔が似合うと、アイツに言われたんだろうが。だったら、ちゃんと笑っている」

「……………将……………」

無論、無理矢理笑わせたところで意味はないだろうが、それでもふとした事で沈みがちなこの女神にはこれぐらい言ってちようどいと、シグナムは思う。

そしてなんとなく沈黙が流れ、

「そこまで下手だと言うのなら練習するわよ! もちろん協力してくれるわよねヴィータちゃんっ、試食係として!」

「ふっぎげんな! 試食係どころか毒見係っつか人柱じゃねえか!

誰がやつかそんな役っ、アタシはまだ命が惜しいんだよ!」

「リンツも嫌ですー!」

「……………シヤマル、諦めも肝心だぞ」

「ザフィーラの言うとおりで！ お前はもう料理すんな！」

「そうですそうです！」

ドア越しに聞こえてくるのは、そんな賑やかな声。

それは、かつて終わらぬ悲しみと苦しみの中にあつた自分達が決して手に入れるはずのなかつたもので。

「……ふふ」

「騒がしい妹たちだ」

自然な微笑みを浮かべたリインフォースと共に、シグナムも笑つた。

「……なあ、将」

穏やかに、リインフォースが言う。

「……幸せだな」

「ああ」

「………本当に、幸せだ」

悲しいことばかりで、苦しいことばかりで、辛いことばかりで、痛いことばかりで、そんな世界がもう嫌で。

泣き叫んでいたあの日の彼女は、しかし今は温もりの中で微笑みを浮かべる。

それは、悪夢を斬り裂き未来を切り開き、光を降らせたあの騎士のおかげで。

同じ騎士としてシグナムは心からの尊敬を抱くと共に、……言うまでもなく彼に救われた者の一人として、深く深く感謝の念を浮かべる。

「この想いを、……あの騎士に伝えたいな。貴方のおかげで幸せだと、幸せに生きている、と」

「ああ、そうだな」

リインフォースが言った通り、胸に溢れるこの感謝をあの高き騎士に贈りたくて。

しかしそれは、未だ叶わない。

「………」

リインフォースもそうだが、やはりシグナムが一番心配なのははや

てだった。

シグナムの目から見て、自分達の主は幸福に生きていると思う。友に囲まれ、職務では活躍し、家族と共に過ごしている彼女は、幸せに過ごしているように思う。

だが、……幸せである事を強く自分に課すところがあつて。

その歪さは、気丈に振舞う彼女の心をおそらくは静かに苛んでいる。

夜天の主と言えどそれでも、彼女は繊細さを内に孕む、まだ子供と言つてもいい歳で。

護らなければと、強く思う。護りたいと、強く強く思う。

それこそあの日、あの騎士が、自らを省みず護り通してくれたのだから。

誰かを護る姿を、その尊さと美しさを、自分達に見せてくれたのだから。

それを見本とし手本とし、守護騎士を束ねる将として、誰より自分がしつかりしなければならぬ。

「……さて、それでは私もそろそろ行くとする」

「そうか、気をつけてな」

「ふ……、リイン、誰にもものを言っている？」

「……ああ、そうだったな」

微笑むリインフォースにシグナムは不敵な笑みを浮かべる。

そう。

己が信ずる武器を手に、あらゆる害悪を貫き敵を打ち砕くのがベルカの騎士だ。

……そうでなければ。

護るべきものを護り抜いたあの気高き御神の剣士に、——会わせる顔が、ないだろう。

「それじゃあハラオウン家と八神家みんな、来れそうなんだね？」

合流し、学校へと向かう道すがら聞いた年末の予定をなのははそう再確認した。

「うん、うちはみんな大丈夫やで」

「うちも、あ、エイミイもちゃんと来るみたい……………それと」

はやての後に続いたフェイトが、少しいたずらな笑みを浮かべて言う。

「その時に、ちよつといい話が聞けるかもしれないよ」

「え、なにになに？」

「ええ話？ エイミイ絡み？」

なのはとはやては、珍しいフェイトの思わせぶりな言葉にそう思わず前のめりになるが、しかし当のフェイトは、

「んー…………まあ、まだ秘密」

そんな風にぼかし続ける。

「え、えええ…………何その謎の秘密主義…………。フェイトちゃんがそんな事言うとなんかちよつと気になる…………」

「ええやん教えてくれたって！」

「んー…………ダメ、ふふ……………って、なのは！ 髪の毛引つ張らないで！」

毛先付近で一纏めに結われたフェイトの金髪をぐいぐいと下に引くなのは。

「ん、引いたら秘密、出てくるかなって」

「出てこないよ！……………って、はやて！ どこ触ってるの!?!」

なのはに気を取られている内に、はやてがフェイトの中学生にしては豊満な胸をぐにぐにと揉みしだく。

「ん、揉んだら秘密、出てくるかなって」

「出てこないよ！」

パンと、粗相を続ける二人の手をはたき落すフェイト。

「ほおら、フェイトちゃん。もつとすごい事されたくなければさつさとその秘密とやらを漏らそうか」

「朝っぱらからその綺麗な身体、汚されたくないやろお?」

「さ、最悪だ! この人達最悪だ!」

顔から血の気を引かせたフェイトが叫んだときだった。

「……朝から元気ね、三人とも」

「おはよう、なのはちゃん、フェイトちゃん、はやてちゃん」

呆れたような顔のアリサと、相変わらずの穏やかな笑みを浮かべた
すずかが、道の先、こちらを見ながらそう言った。

「アリサ、すずか!」

これ幸いとばかりに二人に駆け寄って、フェイトはその後ろに隠れ
る。

「どうしたの、フェイト?」

「駄目だ、あの二人は駄目だ」

「はあ? 何が言いたいのかわかんないんだけど……このでかい胸を
ぶるんぶるん震わせて走ってきたのは何かの嫌味?」

そう言ってアリサは振り返り、むんずとフェイトの胸を鷲掴む。

「うわああああもう! もうやだああああああ!」

アリサの手から逃れるも、フェイトはまさかの展開に涙目だった。

「逃げ場はないよフェイトちゃん。さあ、さっさと吐くの」

「そおしたら許したるから、な?」

フェイトがそんな事をしている間に追いついたなのははやては、
にいいいと口元に獰猛な笑みを浮かべる。

「も、もうやだあ……」

「なのはちゃん、はやてちゃん、アリサちゃん。フェイトちゃんが可哀
想だよ」

今まで傍観していたすずかが、怯えるフェイトを背にかばう。

「す、すずか……ありがとうっ」

「すずか、そのデカメロンをかばうの?」

「デカメロンって……」

アリサのあんまりな言に苦笑するすずか。

「そやで、すずかちゃん。慎み深いこの国の文化つちゆうのを調子に
乗ってるそのパツキンのわがままボディに教えてやらな」

「ふふ、私はまだ忘れていないよ。貸した体操着の胸元をびろんびろんに伸ばされた恨み」

すばあんと、音高く右の手のひらに左の握りこぶしを打ちつけて、なのはが言った。

「なんか趣旨変わってない!? て言うか、そ、それはちゃんと謝ったじゃない!」

「おっばいおつきくてすいませんでした☆ って? はっ! 言ってくれるよまったく……」

「ええええええええ言っていないよそんな事! 何その解釈!」

悲壮に表情を染めるフェイトに、アリサが追い打ちをかける。

「て言うかね、同じ外人組みとしてことある事にフェイトとスタイルを比較される私の身にもなれっての! 私だって悪くないのに! て言うかいのに! 平均考えれば遥かにいいのに! フェイトがデカメロンなせいで!」

「ええええええええええ!? し、知らないよそんな事!」

「まあまあ、三人とも」

憤る三人と震えるフェイトの間、さすがが穏やかに取り成す。

「フェイトちゃんが悪いわけじゃあないんだから」

「そ、そうだよ! さすがですか!」

それに乗り、声を上げるフェイト。

「私だって別に好きで大きくしたわけじゃないよ! なんにもしてないのに勝手に大きくなったんだよ! そもそも肩は凝るしっ、運動するときは邪魔だしっ、そんなにいいもの………で………も………」

こちらを見つめる三人の視線が険しく、そして冷たくなっていくのを感じ、フェイトは言葉を途中で止める。

「好きで大きくしたわけじゃない? なんにもしてないのに勝手に大きくなった? ……はああああ、へええええ、言ってくれるよ、ほんとに………。それで? そんなにいいものでも、なに? なんなのかなあ?」

底冷えするような声でなのはが言い。

「す、すずかあ……」

フェイトは救いを求めるようにすずかに声を掛け。

「フェイトちゃん」

すずかは笑顔で振り返り、伸ばされたフェイトの手をとって、

「ちよつと反省しようね」

持ち前の高い身体能力を活かしてぐいっと引っぱり、三人のもとへとフェイトをほうった。

「え、えええええええええ!? すずかあああああああ!」

フェイトの断末魔の叫びが、朝の通学路にこだました。

「しかし、今日は冷えるねえ」

「あんな、あんな事をしておいて! 何もなかったかのように世間話を始めるの!?!」

吹いた12月の風に身震いしながら言ったのはに、スキンシップの域をやや超えた暴行を受けたフェイトが怒りの声を上げる。

「まあまあ、朝からそんな血圧上げることないやん」

「その台詞をそっくりそのままさっきの皆さんにお返ししたいよ!」

しれつと言うはやてに涙混じりの声を返して、乱された制服を整えるフェイト。

「ひどい、ひどいよ……! こんな絶対おかしいよ……!」

「ま、まあまあ、……あ、ほら、そういえば三人とも、今日は終業式だけど、出られそう? お仕事あるの?」

「ごまかすようにすずかがそう言って話題を変えた。

「う、うとうとう、わ、私は、あるけど放課後だからだから終業式も出られるよお」

なんだかんだ恨み言をこぼしながらも、ちゃんと答えてしまうあたりがこの親友の人の良さだよなあと、なのはは内心微笑ましく思うも口には出さない。出せばどの口でそんな事をと怒られるに決まっているからだ。

同じように感じているのだろう、苦笑しながらはやてが言った。

「わたしも出られそうや。今は担当事件の事後処理やつとるだけやから、そんなに切羽詰ってるわけやないし」

「ふうん、なるほどね。なのはは？」

アリサに問われ、なのはは答える。

「私も、今日は本局行くけど終業式終わった後だから」

「そか、じゃあ三人とも式は出られるんだね。……でも、なのはもフェイトもはやても、お仕事大変ねえ」

「あ、私は……」

「ん？」

「今日は、……仕事じゃなくて」

そこまで言ったところで、先を予想したのだろうその場の全員の表情に少し、影が落ちた。

なのはは意識して微笑みを作り、続きを口にする。

「……おにいちゃんのところ、行ってくるの」

「……そっか。いつもの、定期診断報告？」

「うん」

アリサの問いに、なのはは頷く。

月に一度、現状とこれからの展望を担当の医師と話すことになっており、今日はその日なのだ。

なんとなく、場には沈黙が降りて。

そこに再び吹き抜ける、刺すような冷気。

「……今日の体育、種目なんだっけ？　もしかして外で短距離走かなにかだっけ？」

なのはの言葉には、フェイトが答えた。

「そう、短距離走。タイム測定だよ」

「そっかー……やだなあ。ていうかフェイトちゃん、ちゃんと体操着持ってきた？　もうやだよ、予備を貸してびろんびろんにされるの」

「持ってきたよ！　ほら、ほらー！」

ナイロンのバッグを真つ赤な顔で押し付けてくるフェイトに、皆が吹き出して。

五人はそのまま姦しく、学校へと向かっていった。

「それでね、やつぱりフェイトちゃんとすずかちゃんがぶつちぎりだったよ」

低い動作音の響く薄暗い部屋で。

「アリサちゃんは悔しがってたけど……あはは、私とはやてちゃんはもう勝ち目ないから諦め切ってたって言うか」

少し白く染まる息を吐きながら、なのはは言葉が続ける。

「で、でも、一応頑張ったんだよ？ それなりに武装隊で揉まれてるし、そこそこ速くはなつたんだよ？ ま、まあ」

白で統一された教室程度の大きさの部屋には、他の者はいない。いるのは、二人だけ。

「……おにいちゃんと比べたら、全然だけどさ」

兄と、自分だけ。

おにいちゃんのは速いとかもうそう言う事じゃないか、と、苦笑しながら最後にこぼして。

「……………」

なのはは、言葉を止めた。

そして、静かにただただ、氷解の中目を瞑り穏やかに眠り続ける兄を見つめる。

その体はもうどこも崩れても傷ついてもおらず、完全に治っているように見える。

実際、医師もそう言った。

身体強化魔法をハイレベルに使いこなしていた事と、元々の身体が非常に強靱であったことから、身体修復魔法の効果が驚くほど強く現れ治療自体はスムーズに行き、兄の身体はもうすでに完治している。

いまだ凍結魔法を解除していないのは治療や生命維持目的ではなく、ただ無為に年齢を重ねさせないために、老化を抑えるために過ぎない。

兄の意識レベルが覚醒状態まで至れば、凍結魔法は自動的に解け、あの氷解はすぐに跡形もなく融けて無くなるようになってる。

——いつ目覚めても、おかしくはありません。

長い治療が完了し、そんな風に担当医師が言ってから、しかしもう一年が経つ。

いつ目覚めてもおかしくないのに、それでも兄は眠り続ける。

その原因は局員たちにも掴めていないらしい。なにか決定的な要因があるのか、それとも時間が解決してくれるものなのか、それすらわからない、と。

今日も、今までと同じようにそう言われたただけだった。

「……………」

兄を、高町恭也を、愛しい人を。

見つめながら。

なのはは氷塊を囲む透明なケースに、手を突いた。

決して破ることの出来ない透明な隔たりに、壁に、手を突いた。

そして口を開きかけ、

「……………」

顔を俯かせ、やっぱり閉じた。

早く起きて、なんて、気が狂いそうなくらいに言いたいけれど、でも言えなくて。

今まであんなに頑張ってくれていたから、ゆっくり寝ててもいいんだよ、なんて、言わなくちやいけないのかもしれないけれど、そこそ気が狂いでもしない限りは言えそうになくて。

幸せだよ、と。

なのはは、俯いたまま声にならない声で言った。

笑えるようになって、楽しめるようになって、喜べるようになって。

高町なのはは幸せに暮らしているよ、と。貴方に護られて生きてきて、貴方に護られたから生きている、高町なのはは今、幸せに過ごしているよ、と。

そう呟く。

嘘じゃない、本当の事だ。

もちろん色んなことがあるけれど、でも、自分は幸福に包まれている。それは、真実だ。

幸せ、なのだ。本当だ。

「……………」
なののはは、伏せていた面を上げて。
目の前、透明なケースに映り込んでいたのは自分の泣きそうな顔
だった。

「……………」

その顔を再び伏せて、
「……………」
「……………」
「……………」

なののはは、搾り出すように言う。

「私、幸せだよ……っ、幸せ、だよ……！ 私、幸せに生きてるよおに
いちゃん……。ほんとだよ……？ほんとに、ほんとに、幸せに、幸
せに生きてて……………」

言葉と共に吐いた息が白く染まる、冷えた空気の中、
「幸せで、幸せで、私、ちゃんと幸せで、……………」でも、
ね」

なののはは、そして一拍置いて、

「……………」おにいちゃんが居ないよ……………」

震える声でそう言った。

「おにいちゃん、が……………」

自分にとつて、言うまでもなく兄は世界の中心で、この世の根幹で、
高町なのはが高町なのはの人生を生きるその意味で。

「おにいちゃんが、……………」居ないんだよ」

それがなくては。その人が居なくては。

どれだけこの手が幸せを掴んでも、この身が幸せに包まれても、こ
の胸には、この心には、決して埋まらない空白がある。

途方もなく大きい、致命的な虚無がある。

今、幸せに生きているのも確かに高町なのはなら。

今、枯れ果てて死んでいるのも同じく確かに高町なのはなのだ。
いつの日か高町恭也が目覚めるその時まで、高町なのはは幸せに生
きながら、満たされない想いを抱え飢えて枯れ果て決定的に死に続け
るのだ。

生きながらにして死んでいて、幸福ながらも満たされていない。

それが紛れもなく、疑いようもない、高町なのは今だった。

「……………っ、……………」
これ以上何を言えればいいのかわからなくて、そのままなのは押し黙る。

これ以上はもう何を言ってしまうかわからなくて、だからただ口を噤む。

別れ際は、いつもそうだ。

壁に掛かった時計を見れば、面会時間はもう一分も残っていない。そろそろ、行かなくては。

「……………っ」

また来るね、とも言えない。

それは、また来るまで兄がここで眠り続ける事を決定する言葉のよ
うな気がして、言えない。

「……………おにい、ちゃん」

結局。

「……………——おにいちゃん」

いつもの通り、愛おしいその人を指す呼び名だけを最後に口にし
て。

なのはは、部屋を出た。

高町なのは。

私立聖祥大学附属中学校二年生。

時空管理局本局武装隊・航空戦技教導隊所属、二等空尉。

あれから、もうじき五年の月日が経つ。

なのはは、十四歳になって。

兄、恭也は、二十歳のまま。

未だに。

——その眼を、覚まさない。

第14話 ただの女

短い、呼気を吐き出して。

『Sonic Move』

高速移動魔法を発動、フェイトは一気にその身を加速させた。

「っ！」

向かう先、宙に浮かぶ長い髪の女は辛うじて反応したのか、シールド魔法を展開し、

「はああああああああああっ！」

フェイトはそこへハーケンフォームを展開したバルディッシュの刃とは反対側、柄の先端部分石突きで速度を乗せた突撃を見舞う。

御神流 徹

「なあっ!？」

防御を抜けて通った衝撃に女の顔が驚愕と苦痛に揺れ、シールドが緩んだ。

「終わりだ！」

『Haken Slash』

そこへ、今度は魔力刃での鋭い斬りつけを浴びせる。

「——っ!？」

徹入りの打突で硬度維持の緩くなったシールドは、元々障壁へ貫通能力を持つバルディッシュの刃の前には最早なんの効力も持たず、易々と斬り裂かれ。

「っあああああああああ!!」

それを展開した女にまで刃は届き、その身を下方へ吹き飛ばした。

薄暗い路地へ一直線に落下した女は音を立てて墜落し、硬い地面の上、二、三度バウンドして、動かなくなった。

その身をバインドで嚴重に固めてから、フェイトも路地へ降り立つ。

そして女の息があること、意識がないことを確かめ。

『こちら本局執務官、テスタロッサ・ハラオウンです。目標の次元犯罪者、確保完了』

『お疲れ様でした執務官！　すぐに護送部隊を送ります！　そのまま、そこで待機をお願いしますか？』

『了解しました』

そんな風に、今回の担当事件について連携をとっていた部隊と連絡を取り合つて。

「……………ふう」

一息つく。

様々な研究所からデータを盗み出し、危険兵器を製造、売り捌いていた組織の頭が今フェイトの目の前で意識を失い拘束されているのだ。

フェイトが専属で担当している案件ではないが数ヶ月前から協力を依頼されていて、めでたく今日、このように最優先目標の確保に至つた。

これでこの事件も一応の解決を見るだろう。

『Excellent work, sir』

「ありがとう、バルディッシュもお疲れ様」

相棒とねぎらい合いながら、フェイトも自身の中で今日の戦闘を振り返り、

(……………まあまあだった、かな?)

そんな風に評価する。

特に、最後の石突きによる徹入り打突からのハーケンスラッシュは、かなりスムーズな連撃が出来たと思う。

徹入りの打撃によって相手のシールドやバリアジャケットを抜いて衝撃を通し、出来た隙に強烈な斬撃を叩き込む。今のフェイトの必勝パターンの一つだ。

「……………」

なんととはなしに、フェイトは己の手をみやる。

徹をこの手に修めてそろそろ半年ほどが経つが、近接戦闘におけるその有効性には舌を巻くばかりだった。一度、戦技教導隊の教官に見せた事があるが、近接戦技術におけるエクストラスキルだとまで言われたほどだ。

それはもちろん誇らしかったが、しかし、……未熟もいいところな自分の徹に対してそんな評価をもらってしまって、少々申し訳ないような思いもあった。

（私の徹なんか、……恭也さんや美由希さんの足元にも及ばないんだけどなあ）

あの域には、当たり前だがまだまだ遠い。改善点なんて腐るほどあるだろう。

そもそも、自分の徹は独学じみた代物なのだ。

”……うーん、いや、もう、何と言ったらいいか。……まさか、指導書には書かれてなかったはずの徹に至っちゃうなんてね”

思い出すのは、眼を丸くした美由希の顔とそんな言葉。

恭也から渡された書の中には、徹の事は書かれていなかった。あくまで記されていたのは近接戦闘全般のための身体の作り方や、得物を問わず必要となる技術の得方、鍛え方で、御神流固有の技術については何も書かれていなかったのだ。

時折師事を仰がせてもらった美由希も書の内容に沿った事については丁寧な教えをくれたが、それ以外の、それ以上の事については聞いても、恭ちゃんを書いてなかったんなら私が教えるわけにはいかないういよ、と言って首を振るだけだった。

それでもフェイトが間違いなく御神流固有の技術である徹にまで至ったのは、……美由希曰く、彼への憧れと執念の為せた業、という事らしい。

フェイトは特に、意識的に徹に手を伸ばしたわけではない。

フェイトの身体鍛錬は恭也の書に忠実に行われており、それこそ固く禁じられているオーバーワークなんてどれだけ気持ち悪がはやってしまっても決してする事はなかった。彼の教えを破ることは、信頼を裏切ることとは、フェイトにとっては何よりの禁忌とすら言えるからだ。

だから、約束通り身体鍛錬は書の通りにのみ行って。

——代わりに、頭の方を酷使した。

魔法の鍛錬や執務官の仕事にももちろん励む傍ら、休息の時間や暇

を見つけてはアースラ等に残った恭也がその技を振るう映像の数々を、食い入るように何度も何度も全体俯瞰からクローズアップ、通常速度からスーパースローまで様々な視点と見方で観ては自分なりに解析し、動きを覚え、コツを掴み。

それこそ、今や眼をつむれば自動的に再生されるくらいになって。そうすることで限られた量しか行えない身体鍛錬一つ一つの価値を跳ね上げ、密度を濃くして。

少しでも速くあの人に近づこうと。

その姿を、技を、強く強く思い返しながら鍛錬に励んで、励み続け

て。
気がついたら。

この手の中には御神の剣士が至る二つ目の境地、徹があった。

あの人に少しでも近づけたその証のような気がして嬉しかったけれど、反面、勝手にここまで至ったことをどう思われるかが少し不安で。

そして、何より。

どれだけ努力しても、向上しても、……そんな自分を見てもらえないという現実が、寂しさが辛くて――。

(……つと)

フェイトは頭を振って、止めどない思考から意識を現実に向け直す。

沈んでいては、駄目だ。

一度ならず二度までも自分の命を絶とうとしたなのは。

笑顔を浮かべながらも裏には軋みを抱えたはやて。

彼女たちを支えるために、自分がしっかりしなければいけないのだから。

彼の残した指導書という、明確に縫れるものがあつたおかげで崩れなかつた自分が、しっかりしなければいけないのだから。

それが今、自分に出来るあの人がくれた温もりへの報いであり。

独りよがりだろうとは思いますが、一人相撲だろうとは思いますが、精一杯の――あの人へ贈る愛の形。

「……………」

フェイトは無言、懐から一枚の写真を取り出して。

三秒間見つめた後、静かに口づけを落とした。

誰かに見られでもしたら少し恥ずかしい、でも仕事が一段落ついた時には欠かさず行こう、自分への褒美のような行為。

「……………」

なんて事をしているうちに、近づいてくる多数の気配。

物々しいが殺気を放っているわけではない、護送部隊の面々だろう。顔を上げ、写真を懐に仕舞い直す。

徹の他にもこんな風に気配を探るなんて事までできるようになった。……とは言え、位置はおおよそでしか測れないし人数の特定も出来ない。それに今は自分も護送部隊も共に屋外だから察知できたが物理的に壁を一枚間に挟めば途端にほとんど感じられなくなる。これも徹同様、まだまだ未熟だ。

あの人のレベルには、遠い。

要精進。努力継続。

気を引き締め直して、フェイトは部隊の到着を待った。

無事に件の犯罪者の受け渡しを終え、戻ってきた本局執務官室で事後処理の書類仕事をしていると空間モニターが浮かび上がり通信要請を告げた。

相手の名前を確認して、

「……………はい、こちらテスタロッサ・ハラOWN執務官です」

フェイトはそれに応答する。

「ご用件は何でしょうか、クロノ提督」

「……………ああ、いや、身内としての話だ、フェイト。肩肘張った呼称はいらない」

苦笑しながら言うクロノ。それじゃあとばかりに笑顔で口を開き、

「うん、わかったよ、お兄ちゃん」

「……………そ、それは勘弁してもらえるか」

義妹としての呼び名を使ったフェイトに、彼は顔を片手で覆った。

フェイトとしてはこの呼び方は結構好きなのだが、当のクロノ的には少々面映いらしい。

フェイトも苦笑し、気をとりなおして話を向ける。

「ええつと、それでどうしたのクロノ？」

「ああ、今時間は大丈夫か？」

「うん」

頷いたフェイトに、クロノは表情を引き締めて言った。

「そうか、それじゃあ……………恭也さんの事なんだがな」

「……………っ！ 何かあったのっ!？」

思わず前のめりになったフェイトに落ち着けという風に手をかざしてから、クロノは続けた。

「容態に変化があったわけじゃない。そう言う事ではなく、……………転院の話が来たんだ」

「……………転院？」

「ああ。知つての通り、……………恭也さんが目覚めない理由は未だ不明だ。それは時間の問題なのかもしれないが、しかし治療自体が完了してからもう一年も経つ。……………このまま本局の医療センターで検査し続けるよりは、もっといい施設に送るべきなんじゃないか、とな。転院先は、第十六管理世界の……………」

クロノが告げた行き先は、管理世界内でも有数の最先端医療技術研究所だった。

「既存の治療法での医療が主の管理本局医療センターよりも、もうそちらで調べてもらった方がいい結果が出る可能性は高いはずだ」

「……………それは、……………そうかもね。……………でも、そう言う事は」

「ああ、もちろんわかっている。決めるのは僕らじゃない、なのはだ」

現在、身内として彼の治療方針の決定を一任しているのは、高町家の中で最も管理局や魔法の事について知識があるのはだ。

「なのはには、この事は？」

「ついさつき、話してきた。環境を大きく変える事に少なからず迷いはあったみたいだが……………、それでも可能性が少しでも高まるなら、と言っていたよ」

「そっか……。なののがそう言うのなら……。……って、待って」

疑問が脳裏に浮かんで、フェイトはクロノに問う。

「そもそも、こう言う話ってまず真っ先になのは行くんじゃないの？ どうしてクロノに？」

「……本来ならフェイトの言うとおり、直接なのは行くはずの話だったみたいなんだがな。それより先に、僕が、まあ、その、小耳に挟んでな」

「小耳に、って……」

多少バツが悪そうなその顔に、ピンときた。

兄にはかなりの人脈がある。それこそ親しい友人の一人にはやり手と噂の査察官までいる。

おそらくそのような人脈を駆使し恭也の治療関連については様々などころに元からアンテナを張っていたのだろう。そしてその結果、狙った事ではないだろうが身内であるなのには行くより先にこの話を掴む事になった……。……と言ったところか。

恭也が眠りについた事情に対しての責任感もあつてだろうが、それ以前にそもそも一人の人間として恭也の事をそれはそれは深く慕っているクロノらしい行動だった。

「どうやらその転院の話は本局の医療センターのスタッフ達からと言うよりかは、もつと上から、……。辿ってみたところ最高評議会に近しいところからトップダウン的に出された案らしくな、かなり唐突な話だし、なのほも不安になるんじゃないかと思つて、……。少々強引にはなつたが間に入らせてもらった」

「少々強引に、って……」

またしてもバツの悪そうな顔。少々強引に、どころではないやり方で間に入ったのであろう事が簡単に伺えた。

「まあそれで、なののが恭也さんの転院にオーケーを出せば、その送り届けについては元々の案にあった部隊ではなく僕の艦で責任をもつて行かうという事になったので」

「……クロノがなののはに話を持っていった、と」

「そういう事だ」

「……アースラ、結構忙しいんじゃないの？」

「それは事実ではあるが、現状、この案件より優先すべき事項なんてない」

開き直ったように言い切るクロノ。

そんな義兄に、

「クロノ」

「なんだ？」

「Excellent work, brother」

フェイトはサムズアップで労いにして賛辞の言葉を贈った。

正直に言えば、もし自分が義兄の立場にあつたなら間違いなくほぼ同じような事をしていようからだ。

「当然の事だ」

クロノはそれに神妙な顔で頷き、そう返した。

このようなところが義母に恭也さん信者兄妹と言われる所以なのだが、義兄も自分も直す気はもちろんの事さらさらなかった。

「さて、それで今までの話を踏まえた上で本題だ、フェイト」

「え、うん、何？」

「日程調整の関係があつて急ぎの話にはなってしまうんだが、恭也さんの転院は明後日に行われる。……その日、よかつたらフェイトもアースラに乗って付き添わないか？」

「え、いいの？ もちろん行きたいけど、でも……」

フェイトの現在のランクはS+だ。クロノや当然乗る事になるであろう同じくS+のなのはの事を考えると部隊保有ランク規定に引っ掛かるのではないか、そんな疑問をにじませた声にクロノはしれつと答える。

「これは”付き添い”だからな。別に、アースラの任務手伝いなわけではないし、当たり前だが出向扱いなわけでもない。恭也さんの関係者としてその転院に付き添うというだけだから保有ランクは関係ない。なのはにしたってそうだ」

「そ、そっか……そうかな？」

「そうだ。ちなみに、この後八神家の皆にも声をかけるつもりだ」

はやて、リインフォース姉妹、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ。

クロノとなのはと自分に、その八神家七人を足して出来上がる戦力ははつきり言って連合艦隊もかくやと言わんばかりの代物になる。

通常、一つの艦にそれだけの戦力が固まる事は許されないのだが。

「……いいの？」

「いいんだ。関係者乗船の手続きはしてある、問題ない。恭也さんの、他の世界への転院なんて重大な話に君たちをその場に立ち会わせないなんて、あの件を担当した執務官としても、そして僕個人としても出来ることじゃない」

「クロノ……」

「……まあ、とにかくこちらとしては問題ないわけだ。……どうする？」

問われ、わざわざ見直さなくても頭に入っている事ではあるが一応当日の自分の執務官としての予定を手元の端末で確認し、

「……うん、問題ない。それじゃあ、行かせてもらうよ」

フェイトはそう答えた。

「そうか、では追ってフェイト側の手続き書類を送る」

「うん、お願い。あ、アルフも連れて行っていい？ それとユーノは？」

「ユーノは、どうやら仕事の関係で先方の施設の責任者と付き合いがあるらしくてな、だからアースラには乗らないで事前に施設の方へ向かってもらって、挨拶と打ち合わせをしてもらうつもりだ。アルフは、そうだな……、……折角だから、よかったらユーノの手伝いとガードをお願いしたいな。いいか？」

「そっか、わかった。頼んでおくよ、やってくれると思う」

その後、出立時間や集合場所など細かい話をして、クロノとの通信は終わった。

端末上の自分の予定表に最重要項目として明後日の事を記しつつ。気づく。

(明後日って、……そっか)

明後日、その日は、海鳴市のある地球では少々特殊な日。
12月24日、いわゆる、クリスマスイブだった。

転院当日、早朝。

ゆつくりと、注意深く、丁寧に。

恭也をその中に抱く氷解はアースラ内の一室に銀の台座と共に置かれ。

続けて、技術・医療スタッフ達が手際よく細々とした調整を行っていく。

その邪魔にならないよう少し離れたところになのはや八神家の皆と立ちながら、

「……………」

フェイトは、氷の中、眠る恭也を見つめる。

穏やかで自然な彼の寝顔は、ごく普通にあっさりと眼を開いてもおかしくないようで、同じくらいにこのまま永遠に眼を覚まさなくてもおかしくないような、そんなものだった。

(恭也、さん……………)

彼を見る自分の眼に、どうしようもなく籠るのは熱。

だって、好きだから。

だって、大好きだから。

だって、愛しているから。

でも、この熱では。この炎では。自分の中、五年前から確かに、五年前よりはつきりと、煌々と燃え続けるこの炎では。

彼を包む氷を溶かすことは出来ない。

もどかしさで、やるせなさで、無力感で、死にたくなる。

(恭也さん……………)

胸の中、もう一度愛しいその人の名を呼ぶ。

一年経っても二年経っても三年経っても四年経っても五年経っても、これから先何年経っても何があっても、この想いは揺るがず、この炎は消えない。

消えないけれど。

行き場のない熱は、フェイトの内を焦がし続ける。

愛する人に手が届かない現状に、手を差し伸べられない現実、目の前が真っ赤に染まる。

叫びまわって暴れまわってのた打ちまわりたくなる夜が、時折、訪れて。

フェイトの内を、じりじりと焦がし続ける。

気が、狂いそうではあって。

でも。

「作業、そろそろ終わるみたいだね」

フェイトは、意識して影を排した声で、周りにそう言った。

「……うん」

「せやな」

なのはとはやては頷き、フェイトは微笑んで続ける。

「転院先の施設、管理世界内でも指折りらしいし、同じような事情で転院してきた患者さんが回復した前例も沢山あるみたいだよ」

「そう、なんだってね。クロノ君がそんな資料、色々見せてくれたよ」

「なかなかええところなのは確からしいで。どんな難題でも相談持ち掛ければあの手この手で対処してくれるって評判やし、中の職員さんはみんな優秀な方々やて」

「あ、誰か施設内に知り合いでもいるの？」

「はやて」

「いや、そういうわけやないんやけど」

「私が以前、研修で伺った事があるの」

「穏やかな声でそう割って入ったのはシャマルだ。」

「私、現場で医療仕事することも多いから、その関係で」

それを示すように今日も本局制服の上に白衣を着込んだ出で立ちのシャマルは、付け足すようにそんな風に言って、

「ああ、なるほど」

フエイトは頷きつつ。

(……それだけじゃ、ないんだろうなあ)

胸の中、密かにそう思った。

シヤマルが通常の業務に励む傍ら、目覚めない恭也のために無限書庫や各地の医療施設を熱心に当たっているらしい事は、少し前に偶然知った。

どうやらそれはなには知らせていないようだが、恐らく無責任に期待を持たせないようにとの配慮なんだろう。

実に、シヤマルらしいと思う。責任感の強い、清廉で誠実な守護騎士らしいと思う。

「……第十六管理世界にはあたしも行った事あつけど、まあ、その、そんなに遠くねえよ」

不器用な口調ながら氣遣わしげになのはへそう声をかけるヴィータは、その筆頭と言えるだろう。

彼女はそれこそ、三年ほど前の任務中、驚異的な反応を見せアンノウン機の攻撃からその身を挺してなのはをかばったのだから。

普通だったら明らかに反応できなかったであろう状況で、タイミンで、しかしヴィータは飛び出し飛び込み割り込んで、その小さな体でなのはをかばい切ったのだから。

思い出すのは、後に語られた彼女の心情と信条。なのはが席を外していた病室で、任務の映像を見たシグナムにあそこでよく割って入れたと言われ、ヴィータが零した彼女の想い。

”キョーヤが、なのはが、いくらあたしらのせいじゃねえって言ってくれたってよ……”

静かな、揺るぎない、

”そんなわけ、ねえんだ。あたしらがあんな事しなきゃあ、それこそそもそもあたしがなのはを狙わなきゃあ、キョーヤがああなつちまう事はなかったんだ。……それで、それで”

深い深い悔恨と、

”キョーヤがあんな事になんなくて、今もなのはの傍に居たなら、絶対なのはに大怪我なんてさせねえ。それは、絶対だ。間違いねえ、

絶対だ。あたしらは、よくよくそれを知っている”

あの人への敬意を抱いた、

” だけど、今、なのはの傍にキョーヤは居ねえ。……あたしらが、あ
たしが、奪っちまったからだ。二人がどう言ってくれたって、それは
絶対そうなんだ”

力強く圧倒的な、

” だから、だから………あたしが、あたしがこ
の手で、この身体で、救ってもらった自分の全部で……。腕もがれ
たって足ちぎれたって腹貫かれたって……！ この身が粉微塵に
なっただって……！”

全てをねじ伏せ叩き伏せる、

” キョーヤの代わりに、キョーヤが起きるその時まで……！ ——
—あたしがなのはを守るんだ……！”

鉄槌の騎士の、それは誓い。

” あたしはそもそも最初っから、なのはを守るつもりで空を飛んで
る。なのはを守るそのために空を飛んでる。……だから、反応できた
のなんて、当たり前なんだよ”

最後にそう結んだヴィータの、強くシートを握りしめるその手が、
震えるその手が、フェイトの脳裏には鮮明に焼き付いている。

「本局からポート使えばすぐだ。ほら、ポートの転送速度も最近かな
り高速になってきたし、だから、そんなに、その……」

「……うん、ありがとヴィータちゃん」

「……いや、別に………って撫でんなっつーの！」

髪を撫で回すなのはの腕を、赤い顔でヴィータは振り払う。

「なんで？ いいじゃない」

「よくねえよ！ 子供扱いすんじゃないやねえっつーの！ 何回言やわかる!?
あたしはおめえより歳上だ！ それも遙かに！」

「うんうん、そうだねえ。あ、髪ちよつと結い直さない？ いつつも同
じじゃ味気ないよ」

「聞けよ！」

賑やかながらもどこか穏やかな、剣呑に見えて微笑ましい、そんな

会話を交わす二人の間には、分かち難い硬い硬い絆があった。

「……まるで姉妹のようだな、なのはとヴィータは」

呆れたように、しかしその実口角を吊り上げて嬉しそうに、騒ぐ二人を眺めながらシグナムが言う。

「あはは、まあ、あの二人だけが姉妹のよう、と言うよりかはむしろ……もう私たちは皆が皆、割とそんな感じじゃないですかね」

答えてフェイトは、そんな風に返す。

八神家の内はもちろんのこと、そこになのはもフェイトもクロノもユーノもアルフもエイミイも一緒くたで、大切な親友にして頼れる戦友にして、心許せる兄弟姉妹じみている。

「ふ、そうだな。……まあそうしたら、長男は恭也になるんだろうが」

「そうですね、それは確実に」

「……いや、だがそうなるとお前としては都合が悪いか？」

「……な、何が言いたいんですか？」

にやりと笑いながらのシグナムが明らかにからかう姿勢にシフトしたように見え、フェイトは警戒心を引き上げながら硬い口調で問いかけた。

果たして返ってきたのは、

「なに、ほら、お前は恭也と兄妹になりたいと言うわけじゃあなかったな、と思つてな。”大好きな人”、だものな」

やはりそんな言葉だった。

「シ、シグナム！ 貴方はそうやって事あるごとに人をからかって……！」

「いやいや、からかうもなにも、あれはお前が自分で言っていたんだろう、あんなに大声で、堂々と」

「そ、それはそうですけど！ と、と言うかですネ……！」

「ん？ なんだ？」

「じ、自分だって、貴方だって……」

あの人の事を、想う気持ちがあるんじゃないのか。

そんな問いを言外ににじませたフェイトの言葉に、シグナムは再度にやりと笑つて。

「……さあ、どうだろうな」

いつものように、はぐらかした。

「……はあ」

露骨に吐かれたフェイトのため息にも彼女はどこ吹く風だ。さすがは守護騎士を束ねる将と言ったところか、なかなか凶太かった。

(……実際のところ、どうなんだろう)

割と、長いこと抱いている疑問ではある。

恭也とシグナムが共に過ごした時間自体は短い。交わした会話も、そう多くはないだろう。

だけど。

刃を交え、互いを認め、意思をぶつけ合い、そして歩み寄ったその行程は並ならぬものがある。

シグナムの立場から見て恭也を強く意識するのは当然のことだろうし。

それこそ、……好意を抱かれてもなんら不思議ではないことを恭也はシグナムに、と言うか守護騎士全体にだが、している。

その上、真面目で、実直で、親しい人にはちよつと悪戯で、その手に握った剣を振るい大切な人を護る恭也はシグナムに、シグナムは恭也に、つまり二人はかなり似通っているようにも見える。

よく似通っていて、よくよく通じ合いそうに見える。

好き合っても、おかしくないと言うか。

「……………」

そこまで考えて、フェイトは少し目を伏せる。

こういう時、改めて感じる。

自分の卑しさを、醜さを、浅ましさを。

(気になるなら、ちゃんと聞けばいいくせに……)

結局、いつもはつきりとシグナムは答えないが、そもそもフェイト自身もはつきりと聞いていないのだ。ぼんやりと、それとなく、探るように聞くだけなのだ。

恐ろしい答えを聞きたくない、怯えながら聞いただけなのだ。

だって、自分よりも遥かにシグナムの方が恭也に似合いたと思うか

ら。

臆病で、愚かしい行為。

嫌な、女——

「つた!? な、なにするんですかつ、シグナム!」

「……まったく、私の周りにはこんな奴らばかりだな」

フェイトの頭を叩いたシグナムは、ため息を吐いた。

「揃いも揃って自罰的で自虐的だ。自滅する気か?」

「な、な……!?」

「テストタロツサ、お前とはそこそこ付き合いも長く、それなりに濃密なやり取りをしている」

「ま、まあそうですね……」

少なくともおそらくは八神家の面子の中ではシグナムが最もフェイトと理解し合っている人物と言えるだろうし、公私問わず広がったフェイトの人脈全体からしても彼女はその親交の深さにおいて最上位クラスに位置する事は確実だ。

しかし、それがどうしたと言うのだろうか。

「そ、それが……?」

困惑気に問うフェイトに、

「だから、その私から見ても、だな」

シグナムはそこで一旦言葉を切って、

『お前はいい女だよ。——恭也と釣り合うくらいにな』

「……っ!?!」

わざわざ個人間の念話で、そう続けた。

フェイトはぱつと顔を上げシグナムを見やるが、彼女は涼しい顔。まるで私は何も言っていないと言わんばかりの様だった。

どういう意味か……否、どういう意図か。

またなんとなく少し俯きがちになってそんな風に考えていると、

『まあ、……だからと言ってそれは私が恭也を想わない理由にはならないんだが』

「っ!?!」

そんな風にかき回すような台詞が飛んできて、またも勢い良くフェ

イトはシグナムへ顔を向ける。

「シ、シグナム……？」

が、見つめても、声をかけても、とぼけた顔のシグナムは、じゃれあうのはとヴィータやその隣で医療施設についての話を広げるはやてとシヤマル達を眺めているだけで、まるで取り合おうとはしなかった。

応援されているようにも、おちよくられているようにも、そしてやっぱり彼女もあの人を想っているようにも、思えて。

はあ、と、フェイトは再度のため息を付いた。

「フェイトさん？　どうかしたですか？」

そんなフェイトの様子を不思議に思ったのか、あるいは不審に思ったのか、ザフィーラの頭の上に乗ったリンツがそう声をかけてきた。

「あ、ううん、なんでもないよ」

「そうですか！　落ち込んでいるように見えたんですが、何もなければよかったです！」

「そっか、ありがとうリンツ」

「はいっ」

実に実に素直な八神家末妹の姿に、意地悪な姉にしてやられた直後のフェイトとしては目頭が熱くなり。

そう言えば八神家的にはやてが母とすると、長女はシグナムとリインフォースのどちらになるのだろうかとそんな事がふと気になって、前者には先ほどその関係で弄られたばかりなので、後者に聞いて見ようかなと。

「リ……っ」

彼女に視線を向け声を掛けかけて、しかし途中で押しとどめた。だって。

そこにあつたのは。

(リインフォース……)

「……………」

静かなようにも、荒れ狂っているようにも、穏やかなようにも、決壊しそうにも見える、あまりに複雑な横顔。

口を噤み、氷の中眠る恭也をひたすらに見つめる、そんなリインフォースの横顔。

切実な雰囲気纏った、儂く、そしてはつとするほどに美しい、女性

の姿。

あの人を見つめる、壮麗な女の姿。

(……ああ、嫌だな、ほんとに)

本当に、嫌気が差す。

リインフォースの抱える事情はもちろん知っているし、心情だつてある程度は推し量れるのに、それでもなおフェイトの胸には黒い気持ち

ちが滲み出る。

リインフォースの事は、それはいろいろあつた仲だけれど、心から好いていると言える。

優しく、綺麗で、気配りで、ちよつと天然で、でもすごくしつかりして、いつでも一生懸命な、それはそれはものすごくいい人で、誇らしい友人だ。

だけど。

だから。

危惧と、嫉妬。

そんな気持ちを彼女に抱くのが嫌で、そんな自分がものすごく嫌

で。

「……フェイト? どうかしたか?」

「……え、あ、ああ、いえー!」

物思いに沈み込んで、目の前には件の端整な顔。

いつの間にか恭也から視線を外したらしいリインフォースが、フェイトの顔を心配そうに覗き込んでいた。

(……駄目だな、ほんと)

さつきから何度同じことを繰り返しているんだろう。シグナム、リ

ンツ、リインフォースの前で立て続けに沈んでしまった。

さすがに自分に呆れる。

「え、ええつと……、そ、そういうええ結構久しぶりですね、リインフォース」

誤魔化すように言ったフェイトに、リインフォースは穏やかな笑みを浮かべて答える。

「ああ、そうだな。職域も違うし、海鳴の方でもどうにもすれ違いでなかなか会う機会がなかったな……壮健だったか？」

「ええ、それはもう」

「そうか、良きことだ。フェイトの活躍は世事に疎い私の耳にもよく入ってくるぞ、流石だな」

まるで自分の事かのようにリインフォースは心底嬉しそうにそう言ってくれて、なんだか面映ゆかった。

「い、いえいえ、ほら、リインフォースの方こそ活躍しているみたいじゃないですか。『銀の女神』様、局内じゃあ有名ですよ」

「あ、そ、それは、その……なんというか……」

恥ずかしげに頬を染めて、少しうつむくリインフォース。

ともすればその完成された美貌から少し冷たげな印象を連想されかねない彼女だが、穏やかな雰囲気や時折現れるこうした可愛らしい一面がそれを物の見事に払拭している。

よろめく男性が後を絶たないとの噂は疑いようもなく真実だろうと思う。

「お姉さま、お顔真つ赤ですー！」

「リインフォース、そんなに恥ずかしがる事ないじゃないですか」

「う、うう、いや、将にもついこの間、ちようどこのような話の流れで同じように言ってもらったんだが……どうにも慣れなくて……」

フェイトが思わず苦笑していると、

「あれ、どうしたんですか、リインフォースさん」

そこに歩み寄ってきたのは、

「顔真つ赤ですよ？ なにかあったの？」

なのはだった。

「あ、なのは。それがね、リインフォース、『銀の女神』って呼ばれるの恥ずかしいみたいで」

「あらー、まだ駄目なんだね……」

「ど、どうしても慣れないんだ……」

困り顔のリインフォースに、フェイトと同じくなのはも苦笑する。

「でもほら、この前なんか局の機関紙にも写真と一緒にその呼び名で掲載されてたじゃないですか。あれ、一般市民にも流れるから世間にももう大分浸透しちゃってますよ」

「そ、そうか……、そうなのか……」

「私だって不屈のエースオブエース、なんて大仰に呼ばれてますし、慣れですよ」

「な、なのははびったりだから……。不屈の精神もエースオブエースの称号も、なのはほど相応しい者はいない。だけど私は……。『銀の女神』だけならまだしも、いや全然まだしもじゃないんだが、それだけでも十二分に畏れ多いんだが、その……。その前に付くものも合わせる……。』」

「ああ、『祝福を運ぶ美しき銀の女神』？」

「そ、そう……。祝福の風、という称号だけでは駄目なのか……。？ 美しき銀の女神って……。ああいや、そう呼んでもらえるなら応えられるように頑張ろうとは思う、この前将に論してもらったし……。だが、どうにも身の丈に合わない気がしてならない……。そもそも美しくなどないと言うに……」

「いやいや、そんな事ないですって、ちゃんと鏡見てます？ あ、ほら、あの機関誌でやってる管理局内魅力的な女性ランキング、前回なんてかなり上位に食い込んでいたじゃないですか。この際髪型とか色々ちよつと弄ってみて次回は一位狙ってみるとか！」

「む、無理だ無理だ。いや、そもそもあれは何かの間違いだ、集計ミスだ。と言うか、それこそあと二、三年もすればあのランキングはなのはやフェイト、主はやての天下だろうに」

「えー、……。少なくとも私はこんなに胸おつきくならなそうだしなあ」

「む、胸は関係ないだろう胸は！」

「……シグナムさんと言い、一体なにをどうしたらこんな……。全くもって憎らしいと言うか肉らしいと言うか憎々しいと言うか肉々しいと言うか……。圧倒的肉感……。大艦巨砲主義……。3D……」

「め、目が怖いぞなのは……」

まあ、会話の内容はともかく。

フェイトはじやれ合う二人を見ながら、微笑みを浮かべる。

感無量、だった。

なのはと、リインフォース。

この二人が、こんな風に仲睦まじく会話を交わせるその事が、嬉しかった。

だって、ここまで至るその道筋は決して平坦なものではなかったから。

手を取り合って笑い合うにはあまりに深く複雑な事情と感情が、二人の間には渦巻いていて。誰もが、さすがに友となるには無理があるのではないかと、そう思ってしまった。

けれど。

結局、なのはは手を伸ばした。

負い目からひたすら縮こまるリインフォースに、なのははその手を伸ばした。

伸ばして、わかり合おうと、そう言った。

仲良くなれるかなんてわからない、友達になれるかなんてわからない、だって私たちはわかり合ってすらいないから。

だから、まずはわかり合おう。

その後に、好きにも、嫌いにもなろう——と、そんな風に言った。もちろん、それなりの時間はかかった。

なのは自身、少なくともあの日から半年ほどはとてもじゃないがともに人と想いを交わせる精神は持ち合わせていなかったくらいであって、自分自身を憎む以外の感情が非常に希薄になってしまっていたくらいであって。

だから、なのはがそんな風に言うまでに時間はかかった、年単位の時間がかかった。

その後だって、すぐに仲良しこよしになれたわけじゃない。

不器用に触れ合いながら、臆病にぶつかり合いながら、多分お互いに傷つけ合った。

だけど、それでもなのはは手を伸ばす事をやめなかった。

なのははどう転んだって結局はそう言う娘で、それはある意味、フェイトが一番よく知っている事。

そして結局、彼女はリインフォースと、彼女とリインフォースは。友達に、なったのだ。

「銀髪で巨乳で美人って……卑怯だ、卑怯だよりリインフォースさん……、古代ベルカはいい趣味してるよ……」

「そ、そう言われても……、ああつ、ちよつ、なのはっ!」

「うああ、なにこの弾力……迫力……これが噂に聞く女子力……?」

おっぱい魔人ならぬおっぱい魔神……、あ、『銀の女神』からそつちに呼び名変えてみたら?」

「絶対嫌だ!」

多少コミニケーションの取り方には難があるきらいがないでもないような気もするが。

(ま、まああれも一種の友情の表現方法だろうし……)

二人を少し遠巻きに見ながらそんな風に思っていると、

「なかなか賑やかだな」

苦笑と共に歩み寄ってきたのは、見慣れた男性。

「クロノ」

「あ、クロノ君」

「クロノ提督。お疲れ様です」

リインフォースがそう言っって頭を下げたタイミングで、それぞれ雑談に興じていた面々が姿勢を正し、クロノを見やった。

「……恭也さんの転院準備が整ったので、これより、第十六管理世界へ向け出航しようと思う。……が、その前に」

集まった視線の前、そう言っって掲げられるクロノの右手。

その手のひらの上には、

「彼女が、挨拶をしたいそうだ」

控えめに輝く、銀色の指輪があった。

「魅月、さん……」

なのはが、零すようにその名を呼んだ。

『お久しぶりです。ご立派になられましたね、なのは様』

「……いえ、そんなこと、ないです」

『いいえ、わかりますよ。フェイト様も、はやて様も、ずいぶん大きくなられました』

「あ、うん……」

「はい……」

フェイトははやてと共に、頷いた。

魅月はあの日からずっとあの銀の台座の中、恭也のために身体修復魔法の遠隔発動を仲介し続け、それが一年前に終わった後も彼の傍を離れたくないとそのままそこに居続けた。

だから、フェイト達が彼女に会うのはこれが実に五年ぶりになる。

「魅月さん、あのっ」

『なのは様』

遮るように、魅月は続ける。

『なのは様、フェイト様、はやて様。そして夜天の皆様方。主の眠る今の私は、語る事の出来る言葉をそう多くは持ちあわせておりません。ですので、今は、ご挨拶だけを』

「……うん」

「……っ、そう、か……」

「承知した……」

なのはと、そして何かを言いかけたらしいリインフォースとシグナムは押しとどまり、他の守護騎士達もそれにならう。

『皆様、どうか、——主をよろしくお願い致します』

今日は、ただの転院で、フェイト達はそのたんなる付添いで。

護送ですら、ないはずだけど。

それでも魅月は神妙に、真剣にそう言った。

あの時、恭也の最も近くに連れ添っていた彼女の内心は、愛する主が眠りにつく姿を最も近くで見るとなった彼女の内心は、この場にいる誰にも正確に推し量る事なんて出来ないけれど。

それでも、今の魅月の言葉がどれだけの重さを有しているかは、きつと誰もがわかった。

全員がはつきりと頷いて、魅月は礼の言葉とともにその身体を控え

めに、しかし確かに輝かせた。

「あの、クロノ、魅月はこれから……？」

「航行中にアースラ内でメンテナンス、後、恭也さんの傍へついてあちらの施設に居てもらおうことになる」

「そっか……」

そんな風に会話を交わしながら、管制室へ向かうため皆で連れ立って扉の方へと歩いて行く。

滑らかに開いたドアを抜け、リノリウムのような質感の通路に足を踏み入れて。

「……あれ」

自分の後ろ、最後尾を歩いていたはずなのはがまだ部屋から出てきていないことに気づき、フェイトは開いたままのドアから中を覗き込んだ。

「なのは、どうし……っ」

「……あ、え、あ、ごめんっ」

部屋の中、立ち止まり、眠る恭也を見つめていたなのははフェイトに掛けられた声に反応、慌ててこちらまで小走りに寄ってきた。

「あはは、そ、その………なんで、おにいちゃん起きないのかな、つて、ちよつと……」

「……なのは」

「あ、そ、それを、これから診てもらいに行くんだよね、なに言ってるんだろ私」

誤魔化すように笑ったなのはに、なんと返すべきか思い悩みしばし無言の時間が過ぎて。

「なんか、さ……」

コツコツと廊下を歩く音をバツクに、

「思っちゃったんだけど……ううん、ほんとはずっと、思ってたんだけど……」

目を伏せたなのはは、抑揚のない、しかし感情の詰まりに詰まった声でぽつりと落とすように、

「もしかしたらさ、おにいちゃん……」

そして続けた。

「――起きたく、ないのかな……」

そう、続けた。

「……っ」

何も、言えなかった。

何も言う権利なんかなくて、いや、それ以前に何か言う余裕なんてなくて。

沈黙したのはフェイトだけでなく、きつと会話が聞こえていたのだろう前を歩くクロノやはやて、守護騎士の皆もだった。こわばった肩筋から、わざわざ回り込んで見るまでもなくその表情は推し量れた。なのはの生い立ちを、内心を、その身に滾らせる想いを知っているがゆえに。

眩かれたその言葉の重みが、だってあまりにも――。

「……………あ、……………あ、ご、ごめん！」

はつとしたように顔を上げ、なのはが言った。

「ち、違うの！ 今のは、その……っ！ ほ、ほんと変な事言っちゃった、ご、ごめんね、変だね、今日の私、あはは……………は……………なんていうか、その……………」

取り繕うように明るい声を作ったなのははしかし、

「その……………、あの…………………………ごめん」

自重に耐え切れなくなったかのように、やがてうな垂れた。

ずっと、そうなのだ。

ずっと、こうなのだ。

フェイトの大切な親友は、一生懸命生きているけれど、いつだって潰れそうで、今にも崩れそうなのだ。

そして、それでも。

それでも、彼女は前を向き、歩く。

そうさせたのは他でもなく。

「……………フェイト、ちゃんっ？」

「なのは」

なのはの手をとって、強く握って、フェイトは言う。言う権利も余

裕もなくつたつて、その必要があるはずだから、言う。

「出来ることを、しよう。するべきで、そしてなのはちゃんとしていくよ」

「……私」

「なのはがどれだけ頑張ってるか、私はよく知ってる。だから、続けよう。信じて、続けよう」

あの人が起きたその時に、今度はあんな事にならないように。

今度こそ、あの人を護れるように。

死に物狂いで力をつけるなのはの姿を、フェイトは見てきたし、今も見ている。

ここで潰れて、ここで崩れて、それを無駄にさせはしない。

それこそ、三年ほど前のあの日。なのはが再び自らその命を絶とうとしたあの日。力づくで止めて、力いっぱい殴って、力の限り怒鳴り散らして、方向を、方法を間違えたなのはを無理矢理引き戻したのだから。

「だから、ね、なのは」

「……うん」

頷いてくれたなのはに微笑みながら、フェイトは自らの想いを再確認する。

この娘をちゃんと、あの人と再会させる。

あの人をちゃんと、この娘と再会させる。

二人をちゃんと、再会させて、再開させる。

させてみせる。

(どんなことがあっても……絶対に)

静かに決意を秘めたまま、フェイトはなのはと共に管制室へと向かう道を歩いていった。

「大変です！ お姉さまー！」

「どうした、リンツ」

「なんにもないです！ こんなはずがないのに！ なんにもないんで

す！」

「落ち着きなさいリンツ。認識を改めるんだ。なんにもない……なんて事はないだろう？　そこにあるものをないものとして扱ってはそれらに甚だ失礼だ。ちゃんとあるものはある。それを認識しない心こそ……」

「リイン、リイン、リインフォース、いい事を言っているんですけど、たぶん今言うべきなのはそういう事じゃないと思いますよ」

リンツへ哲学的な訓戒を与えるリインフォースに、フェイトは苦笑いを浮かべて、続けた。

「リンツは、この世界に着いたらすぐに例の研究施設が見えると思っていたんでしょう。それなのに、景色がこんなだから……」

「ああ、そういう事か」

リインフォースは得心がいったというように頷いた。そして管制室の壁際で、外の光景を映し出す投影型モニターに改めて目を向ける。

「なるほど、ならば驚くのも無理はないか……見渡す限りの荒野だものな」

リインフォースの言うとおり、アースラは現在第十六管理世界、その荒野の真っ只中にいる。

「お姉さま！　研究施設はどこにいつちやつたですか!？」

「なくなったわけではない。しばらく進めば見えてくるさ、安心しなさい」

「あ、そうなんですか？　……？　なんでわざわざ離れた場所に航行転移したんですか？　直接近くに行つちやえば早いですよ？」

航行転移とは船を使った大規模な転移魔法で、リンツの言うとおり直接目的地付近に到着させることも出来る。もつともなリンツの疑問には、クロノが答えた。

「法令で決まっただけでな、重要施設にこういった船で乗りつける場合、航行転移で到着していいのはある程度離れた場所までになるんだ。それ移行は通常航行で行かなければならない、時間はかかってもね。ああ、法だけじゃなく、対航行転移用の妨害魔法もちゃんと展開され

てるから無理矢理行くことも出来ないぞ」

「航行魔法での直接乗り入れを許可しちまったら、良からぬ輩の思わぬ大規模侵入を許しかねねーだろ。重要施設だからこそその警戒処置だよ」

「なるほど！ たしかに悪い人たちがお船でいきなり沢山やってきたら困るですー！」

「そういうこった」

クロノと、続いたヴィータの言葉に納得がいったらしく、リンツは満面の笑みを浮かべた。

「ところでちなみに、あとどれくらいで着くですか？」

「このまま何事もなければ、二時間強と言ったところね」

眼前に浮かんだ複数のモニターを見ながらそう答えたのはエイミイだ。

「ま、だからその間はゆっくりしてきてくれていいよ。今回みんなはスタッフじゃなくて、お客さんとして乗ってるんだから」

「なんだか妙な気分だね、それ」

思わずフェイトはそう零す。自分もスタッフとしてつい先日まで乗っていたこの艦に今は客として居る、というのはやはり違和感があった。

「客というにはあまりに皆戦力として強力に過ぎるが……まあ、君たちの手を借りる事態にはなるまい。エイミイの言うとおりだ、皆、休憩室あたりでくつろいでいてくれ」

「……私は、ここに残っていたいんだけど、駄目かな？」

おずおずと、しかしはつきりとそう言ったのはなのはだった。

「こつちとしてはもちろん構わないが、退屈だろうに」

「ううん、そんな事ないよ。アースラ、久しぶりだし」

「……そうか」

それ以上のことを言う事もなく、クロノは頷いた。

何も起こるはずはない、ないけれど、それでも万が一を考えてすぐにでも動けるように。

いち早く状況を察知できるこの管制室に居たい。

きつとなのはがそんな風に考えているであろうことを、察したのだらう。

結局、誰からともなく自分もここに残ると続き、誰もこの場を離れることはなかった。

(心配のし過ぎかな、とは思うけど……)

それでも、——万全は、期すべきだ。

フェイトだって、そんな風に思うのだ。

同じように思ったであろうからこそ、義兄にしたって、わざわざ強引に間に入ってまでして自分の艦で今日の件を引き受けたのだらう。

結局のところ、この場にいる者たちは皆……否、今ここにはいないユーノやアルフ、リンディ達も含めた者たち皆が皆、あの日の事を心の底から悔いているのだ。

長い間、永い間、破壊不可能とされていたロストログアをその管制プログラムも含めほぼ完全な形で保持し、事件を収束させた。その上有能な局員達も一挙に獲得したなどと言う……奇跡と呼ばれるそれは功績であり、周りからのあのときのアースラススタッフ、特に艦長のリンディや担当執務官だったクロノへの揺ぎ無い評価であるとは、言え。

当事者達からしてみればあれは痛恨のミスであり、悔恨の記憶。

受けるべきは叱責だとすら思っているのだ。

心に消えない悔いを残し、抜けない杭を打ち込んだ、そんな過去——
—過ぎ去った、変えようのない事実。

(……………)

フェイトは無意識、握り締めていた拳を解いた。

今この時、力んでいたって仕方がないのだ。

やるべきときに、やるべきことやるためには、やらないときに力を
きちんと抜いていなくては。未だ管理局員としても武芸者としても
未熟の身だが、それくらいの意識はある。

「アースラの装備、ちよつと変わったんですねえ」

「そうなのよ、システムの入れ替えをね。この子は結構振り回す事が多いから、パフォーマンスをちゃんと発揮できるようにね」

なんとなく重くなった空気がなのはとエイミイのそんな会話を皮切りに、他愛ない雑談へと変わって行き。

「アースラは結構、激務だよね」

フエイトもそれに加わって――。

そして一時間ほど経った頃の事だった。モニターに映る光景は相変わらず荒野で。

流星は、と言うべきか流星に、と言うべきか、一番早くその兆候に気がついたのは船の管制を統括するエイミイだった。

「……あ、れ」

「……どうした、エイミイ？」

「……いや、出力が少し落ちて……ちよつと待って」

問うたクロノに、エイミイが原因調べるねと続けた、その、

「――ツ!？」

直後の事だった。

何かに激突したのでは、そう思わせるほどの、それは圧倒的な減速。空を行くアースラの航行速度が一気に引き下がって行き、

「……何が起こった!？」

「……艦内全出力急激に低下! 魔力炉からのエネルギー供給値が異常に少なくなってる……!」

墜落を嫌でも思わせる現状に、フエイト達は念のためバリアジャケットと各々のデバイスを展開し身を伏せる。

「魔力炉の故障か!? メインが駄目ならサブに……」

「もう切り替えたわ! でも持ち直らない……両方いきなり同時に壊れた?」

「そんな事が……エネルギー生成が正常に行われていないのか? 暴発の危険性はないはずだが……しかし……」

「……待って! これは……!」

状態を把握せんとするクロノに、やがて詳細を掴み始めたらしいエイミイが叫ぶ。

「エネルギー生成に問題があると言うよりは、その後みたい……! エネルギーは生成されてる、だけど炉から各機器へ伝わる間……伝送

途中でもの凄い勢いで減衰してるの！」

「……っ、だとすればまさか………：周辺の魔力結合力をサーチしろ！ おそらくは………」

何かに感づいたらしいクロノが、その先を口にするよりも早く、

『うん、流石はクロノ提督だ。その察しの良さに敬意を表しわざわざサーチする手間など取らせずに、私が直々に正解をお答えしよう——そう、AMFさ』

モニターの一つに、突如その姿を現した男が、どこかおどけた様な口調でそう言った。

そして、強烈な縦揺れが艦全体を襲った。次いで轟音、外部の様子を見ずともわかる、航行力を無くしたアースラが自然の摂理に導かれ、地に激突、早い話が——。

墜落したのだ。

物理、精神の両面で衝撃を受けた全乗組員の中、真っ先に立ち上がり言葉を発したのは、

「何が………」

フェイトだった。強い眼で男を見据え、バルディツシユの穂先を向けて、フェイトは叩きつけるような声音で、問いと共に、

「何が目的だ………：ジェイル・スカリエツテイ！」

その男の名を、呼ばわった。

広域指名手配済みの技術型次元犯罪者、Dr. ジェイル・スカリエツテイ。

その身柄の確保にフェイトも執務官として協力する事になるかもしれない……そんな話がつい先日あったばかりだったため、その顔には、今モニター越しで薄笑いを浮かべているこの顔には、見覚えがあった。

「フェイトちゃん、こいつは？」

表面上は激情を感じさせない声で問うたなのはに、フェイトは答える。

「広域指名手配されている次元犯罪者だよ、……一番危険な、技術型。主な罪状は違法医学や大規模テロリズム関与。管理局がもう何年も

追っているけど、未だ逮捕歴は無し。犯罪者でさえなければ文句なしに無数の賞賛を浴びうる天才科学者、だって話」

「おやおや……フェイト・テストロツサ、私を知っているか、……うん、それは嬉しいねえ。いやあまさかこうして君と話をする事が出来るとはなんとも感慨深いねえ……Fの残滓、最初の一片」

「……………」

突然のそんな台詞に、しかし毅然とした顔を浮かべたフェイトヘスカリエツティはその笑みを濃くした、

「……………いやまあ、これはまたの機会でいいか。さて、クロノ提督」
が、頭を振って視線を移す。眼を向けられたクロノは静かに動じず睨み返した。

「我々は現在、任務中の身だ。下らない用件なら後にしてもらいたいんだが」

「そう言わないでくれ。……………この日のためにこちらは大掛かりな準備をしたんだからね。どうだい、随分立派な艦だが、……動けないだろう?」

「……………この規模の艦の稼動を、それこそ航行を不可能にする程のAMFを展開するとは一体どれだけの高位魔導師を用意した?」

AMF展開魔法はランクにしてAAA相当だ。それを大型艦船であるアースラを包めるほどの大きさで発動させるとなると、相当な質か量、もしくはその両方の魔導師が必要となる、そんな常識を下敷きにしたクロノの問いにスカリエツティは笑った。

「いやいやいや、そうじゃあないんだ。私は技術者だからねえ、無いなら造るの精神を持っている。ゆえに、造ったのさ、大規模なAMF発生装置をね」

「……………そんなつ馬鹿な!」

オペレータという職業柄、技術者に近いために今の台詞がどれだけ現在の魔法技術を逸脱したものかがわかったらしいエイミイが、悲鳴のように叫ぶ。

「日進月歩さ、お嬢さん。常識の殻は毎日毎時毎分毎秒、脱ぎ捨てていかねばならないよ」

「……っ」

からかうようなその台詞にエイミーは齒嚙みし、しかし俯かずクロノと同じくスカリエッツィを睨み付けた。

「それで、そんなご大層なものを用意して一体なんだって言うの？ 自慢がしたいのだったら別の場所をお願いしたいわ。これは大事な艦で……」

「そして、大事な『もの』を運んでいる、そうだろうか？」

その問いに、問いの形を取った確信を得ているであろうその言わば確認に、息を呑んだのは場の全員。

「ドクター、あああんまりお話が長いとウーノ姉さまに怒られてしまいますわよお？ もういいから、要件を言っちゃいませんこと？」

そんな風に妙に甘ったるい声で急かしたのは、またしても突然モニター上、スカリエッツィの隣、別の小窓に姿を現した茶髪に眼鏡の女。「ドクターはアジトにいらっしやるからいいんでしようけどお、帰りが遅くなってお小言言われるのは現場に来てる私達なんですからん」「ああ、そうだねえ、それは悪かった、すまないねクアットロ。それでは単刀直入に言おう」

スカリエッツィは、エイミーからクロノ、そしてクロノから——なのはに視線を移して言った。

「高町なのは二等空尉、お兄さんを、高町恭也を私に出来ないかい？」
「……………」

完全に無言を返したなのはへ、スカリエッツィはスイッチを切り替えたかのように興奮をその顔に声に浮かべて続ける。

「——あの映像」を見て私は鳥肌が立ったよ！ 常識を超えた強靱な肉体！ 非常に高い魔導素質！ 冗談のような技術の数々！ そして揺るがぬ固く堅く気高い精神！ それらが織り成すあの圧倒的で反則的な戦闘能力!! 古代ベルカの王達も彼には惜しみない賛辞を送るだろう!!」

欲しい、寒気を感じさせる狂気と欲を孕んだ声でスカリエッツィは言った。

「私は彼が欲しい！ 彼は、高町恭也はまさに最高の素材だ、最上の素

体だ……！ 断言しよう！ 最強の作品に仕上げてみせると!!」

両腕を広げ、熱の籠った仕草と声音で長髪白衣のその男は歌うように言葉を紡ぐ。

「私の手にかかれば間違いなく！ 歴史を塗り替える飛び抜けた存在が！ 誰も見たことの無い究極の生体兵器が誕生するだろう!! 素晴らしいとは思わないか!？」

ダアンと、響いたのは、

「……—あつたま沸いとんのかお前ええええええええええええええええええええ!!」

はやてが抑えきれぬ怒りを乗せその手で机を叩いた音だった。次いで響かせた怒号を憤怒の表情と共に彼女は続ける。

「あの人を……素材!? 素材!? あまつさえ作品に仕上げる……!? ……お前の頭がどんだけイカレとんのかは知らんが、よつぽど現世に未練がないつちゆうんはようわかったわ………ッ!」

「汚らわしい手でアイツの体に触れてみる、即座に切り落としてくれる……!」

継ぐように、愛剣——レヴァンティンを抜き放ったシグナムがその切っ先をモニター上のスカリエツティへ突きつけ、言えば。

「下衆が、分を弁えなさい。……どんな経路で知ったのかは知らないけれど、貴方が触れることなど許されない人よ、あの方は」

「我らにとっては言うまでも無く、言い尽くせぬほど大恩ある男だ。貴様なんぞにみすみす渡すわけがなからう」

普段のおっとりとした風からは想像もできないような冷淡な声音でシヤマルが凜と言い放ち、芯の通った太く揺ぎ無い声でザフィーラが続け。

「その似合わねえ白衣、せつかくだから真っ赤に染めてやろうかイカレゴミ屑」

ぶおんぶおんと、ヴィータが愛槌を振り回す。

「なあ、死にてえんだろ? そうなんだろ? アタシにやあそうとか思えねえなあ。あいつに手を出すなんて、……はは、ジョークとしちゃあ面白え、まあ笑わせてもらった後にはアイゼンの錆んなくても

らうんだけどな」

「……私に、お前を詰る資格があるのかどうかは、わからない」

怒気満ち充ちる三白眼、ねめつけたヴィータの隣で、そしてリインフォースが口を開いた。

「わからない、わからないが……それ以上にわからないものがある——お前へのこの感情の抑え方だ」

いっそ静かに、夜のようなしめやかさでリインフォースは声を響かせた。

「ああ、抑えがたい。……しかし、お前を八つ裂きにしたとしても抑えられるものかな、これは。磨り潰しても、粉みじんにしても、……駄目そうだ。この世にその痕跡一つ残さぬほどに、完全に消し飛ばしてもしない限りは収まりそうも無い。……あの騎士を、あの眩しき尊き気高き騎士を、素材だ素体だなどと、そんな不埒な不敬な思考を持つ者の存在を、発言をする者の存在を、この世に許してはおけない……」

「荒ぶるねえ、夜天の王に騎士達よ。まあ当たり前か、君たちの今があるのも、彼の犠牲のおかげだからねえ」

「……口を慎め、犯罪者」

「ああ、その怒りようじゃあやはり君は彼を中々に慕っているんだねえクロノ提督」

重い叱責の声を上げたクロノに、スカリエッティはため息を吐いた。

「まったく、余計な事をしてくれたものだ、ただの輸送任務に念を入れすぎじゃないのかい？ おかげでこちらは急遽こんな大掛かりな編成で挑まなければならなくなってしまったよ。本来の艦だったら彼の奪取なんていとも簡単にやらせてもらえたんだろうが、……この面子は少々反則じゃあないかい？ どこかと戦争でもするつもりかな？」

「……随分詳しいのね、管理局の内情に。さすがは天才科学者、ハツキングもお手の物って事かしら？」

「さあ、どうだろうね」

エイミイの問いにははぐらかしたような笑顔でスカリエツティは答え。

「……ああ、いい眼だ。うん、やはり君はフェイト・テストロッサだな、うん、いい眼だ」

突然、フェイトに向けて薄ら笑いと共にそんな言葉を向けてきたが。

「……………」

どういう意味だ、とも、今の私はフェイト・テストロッサ・ハラオウンだ、とも。

何も言えなかった。フェイトは、一言も発せなかった。

「……………」

正確に言えば、口を開けなかった。なぜなら、死ぬ気で歯を食いしばり耐えていなければ——何を言い出してしまうのか、自分でもわからないからだ。

奴は、彼に手を出すと言った。

奴は、彼に手を出すと言った。

奴は、彼に、手を、出すと、そう言ったのだ。

もう、それだけで、——フェイトの感情はどうに振り切れている。

自分が今どんな表情をしているのかすらよくわからない。自分が今どんな眼を奴に向けているのかもよくわからない。

ただ、もし視線で人が射殺せたならあの男はもう既に死んでいるだろうと言う事だけは確かだ。

そんな眼を、きつと自分はしているんじゃないかとは、思う。

だって、明確に、思うから。

「さて、それじゃあそろそろ回答を聞こうか、高町なのは二等空尉」
はつきりと、フェイトは思うのだ。

「私としては、私に預けてくれる事をお勧めするんだけどねえ、どうか
な、高町なの」

「レイジングハート、物体非破壊設定解除——生物非殺傷設定、解除」
『All right, my master』

それは今、己がデバイスを人殺しを行える状態へと迷いなく移行さ

ろう？ なにやら検査場所は移すようだが、それでも自分の傍に縛りつけて一体なんになる？ それは君のエゴなんじゃ……いや、それに知っているんじゃないのかい？ 君の傍に居れば君の大切な者は、君を守ろうとして、ね」

「……ふふ、ねえ、そしてあなたはまた、そんな人達を守れないかもしれないな」

「黙れクソヤロオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

スカリエツティとクアットロの、颯々するような声音の台詞へ吼えたのはヴィータだ。

「それより先を口にしてみるオツ!! ぶっ殺して……」

「いいよ、ヴィータちゃん」

モニターを叩き割りかねない勢いで怒りを露にしたヴィータの身の前へ、なのはがその手をかざし、彼女を止めて。

「エゴだよ。認める。でも、それがどうした」

なのは強く揺るがず決して屈さぬ、彼女の口調で言い放つ。

「弱さは、罪で。いずれ、罰が下つて。一番大切なものを、傷つける事になる」

それは今でもたまに戒めるように口にする、彼女のかつての口癖で。

「そんな事、私はよくよくわかってる、だから」

そしてなのはは続けた。その口癖に飲み込まれていた頃は言えなかった、乗り越えたからこそ言える様になった、その言葉を。

「——強くなったんだ、守れるくらいに、護れるくらいに」

「これを見ても、そんな事を言えますの？」

鼻で笑ったクアットロが慢心たつぷりに言うのと同時。すつと、まるで最初からそうであったかのように自然に、機械仕掛けらしいカプセルのような見た目のもの、航空機のようなフォルムのもの、円形の巨大なもの……幾つかのバリエーションを持つ飛行体が、地に墜ちたアースラを取り囲むように蒼空を展開する光景が広がった。

超大量、飛行体の数はそう言っていないだろう夥しいほどの規模で、その黒い機影達に囲まれた所為でアースラの外部モニターには今、ほ

とんど青空は見えない。

まさに唐突に現れた包囲網にアースラススタッフの何名かがどよめきの声を漏らした。

しかしクロノは動揺は見せず、はつきりと敵影達を見据える。

「この濃いAMF下で飛行可能とは……質量兵器か」

「試作段階のものを無理やり引っぱり出して量産してきたんだよ？」

君たち相手では必要かと思ってね」

「……こいつら」

エイミイがクロースアップした一体の、その姿を見てなのはが苦い声を上げた。

「ああ、気がついたかい？ そうさ、こいつらは”あの時”、君を庇ったその威勢のいい鉄槌の騎士を串刺しにした、あのアンノウンを参考に作られている。なかなか面白い趣向だろう？」

「下衆が……」

「……そんな関係ねえぞ、なのは。あんなん、全部ぶつ潰しちまえばいいんだ」

吐き捨てたシグナムに続いて、ヴィータが息荒く……しかし親しいものにはわかる、なのはへの気遣いを多分に含んだ声を上げた。

「……うん」

ヴィータへ向けて頷いたなのは、そしてもう一度スカリエツティとクアットロを冷徹で、それでいて確かな怒りと憎しみと殺意を孕んだ眼で見据えた。

「バルディッシュ、物体非破壊設定解除、生物非殺傷設定解除」

『Yes, sir』

口から溢れそうになる呪詛を押さええなんとかそれだけ口にしたフェイトと答えたバルディッシュの設定変更、戦闘準備を皮切りに、その場の面々達も皆同じ処理を進めていく。

物体非破壊設定解除、生物非殺傷設定解除、紡がれていくその言葉は紛うことなき殲滅の宣言。

「勇ましいねえ、では任せたまよ、クアットロ」

ブツンと、現れた時同様に突然、そんな言葉を最後にモニター上の

スカリエツティの姿は消えた。

「はあい、ドクター。んふふ、それじゃあ楽しい楽しいゲームのは……」

「それにしても、似合わないね」

突然のなのは言葉に、恐らくはゲームの始まりとでもふざけた事を言うつもりであったのであろうクアットロは怪訝な表情を浮かべた。

「似合わない？ 何がですか？」

「その眼鏡だよ。……そういうのって、清楚で真面目で純粋な女の人
の素顔には素朴で素敵によく似合うんだけど、……素質って悲しい
ね、どうにも性格の悪さが滲み出ていてなんだか滑稽だ、無理して似
合わない服着てるみたい。止めたほうがいいんじゃない？」

「……っ」

思いもよらぬ方向からの先制攻撃、否、口撃に、不意を突かれて取
り繕えなかつたのか、クアットロの顔がさっと赤く染まった。

「せやなあ……ふふ、おぼはんが無理して高校の制服着てるみたいな
ちぐはぐさや。あかんで、ちゃあんと鏡見てこなな？」

「……そんな口がいつまで叩けるか見物ですわね。まあ、精々足掻い
てくださるとわざわざこんな遠くで待ってた甲斐がありますわ」

スカリエツティと同様に、モニターからフレームと共にクアットロ
は姿を消し去った。

「……やっ」

クロノがぐるりと、場の皆を見渡す。

誰も何も言わず、しかし雄弁に語る表情で頷きを返し。

そして。

激烈な意思に強烈な決意。

熱烈な気迫に鮮烈な感情。

そして苛烈な覚悟に彩られた――。

熾烈な戦いの、幕が上がる。

第15話 やっぱりちよつと黙ってくれる？

「……ドクターも物好きだわあ」

口の端に歪な笑みを浮かべて、クアットロは言った。

評議会とスカリエツティの間でどんなやりとりが、取引が為されたのかは知らないが『高町恭也』の転院は言うまでも無く、スカリエツティへ研究素体として彼を引き渡すため最高評議会が管理本局医療センターの治療計画に横槍をいれ決行される事になったものだ。

さすがに本局の医療センターに居られたのでは無理やりな手出しもできなかったが、移送途中なら話は別。この事態にクアットロの主人であるスカリエツティは戦艦すらあくまで一時的にだが落とせるAMF発生器、既に完成済みだったカプセルのような見た目の単純単独行動型AMF自動展開戦闘機に加え、製造途中だった航空戦闘機のようなフォルムの高速飛空型AMF自動展開戦闘機を急遽量産し、さらに今だ設計段階であった円形の頑丈かつ大火力な大型AMF自動展開戦闘機まで半ば無理やりのペースで作り上げ配備した。

クアットロのシルバーカーテンで隠蔽されたAMF発生器により墜落させた輸送艦船を、同じくシルバーカーテンで隠蔽済みの戦闘機、その数優に数千を下らない軍勢で囲う。その中には、転送機を内蔵しいつでもこちらの戦力の増強を、つまり増援を送り込める母艦まで数機用意してある。

これで失敗したら嘘だろうというほどの、圧倒的な布陣だ。

元々はこの後に予定されている”ゆりかご”を幹とした大きな花火のために、参考程度に手に入れた闇の書事件のデータにあった件の高町恭也の戦闘映像から端を発した今回の事態なわけだが、あまりに大掛かりなこの準備にスカリエツティの彼への執着が伺えようと言うものである。

高町恭也。

最強の人造魔導師の素体、究極の生体兵器の素材、そして……場合によっては。

既にNo. 12まで計画が立っており、実際にNo. 6のセインま

で稼動している戦闘機人ナンバーズ——その特別チューンにして最終体、最後の一作の元にする、とまで言った。

この後の計画を思えば、それは状況を引っくり返しうる無敵のジョーカーにしてキング、『No. 13』となる。

「こんなものまで用意して……」

今、クアットロの手の中にある複雑な文様が内部に透けて見える手のひら大のキューブは瞬間強制転移装置。起動コードを入力することで触れている物体をあらかじめインプットされた座標、すなわち今現在スカリエッティの座するアジトへと転送する機器だ。

「よーっぽど欲しいんだろーよ、あのにーちゃんか」

「……ドクターの執心ぶりはかなりのものだったからな」

蒼空に浮遊するクアットロの隣、飛翔能力持たない二人の妹——青髪のセインと銀髪隻眼のチンクがそれぞれトランスポータとする飛空型戦闘機に乗り、そんな風に零した。

件のドクターは今、アースラの乗り組み員達に通信をかけている……が、下手をすれば脱線して長くなりそうな雰囲気だ。元々スカリエッティが饒舌な性質であるのはクアットロ達もわかってはいるのだが、

「ドクター、あああんまりお話が長いとウーノ姉さまに怒られてしまいますわよお？ もういいから、要件を言っちゃいませんこと？」

そう言ってクアットロは彼を急かした。艦を墜としているAMF発生装置には時間的制限がある、失敗するとは思ってはいるが何かあれば責任があるのは今回の現場指揮を任されている自分であるし、叱責を向けてくるのはなかなか頭が中々上がらない姉のウーノだ。出来ればお小言は避けたいところである。

そしてアースラの乗り組み員達との通信は進んで行き——。

あの小娘の顔が絶望に染まるのが楽しみだ、爪を噛みながらクアットロは思った。面と向かって眼鏡が似合わないなどと言われたのはもちろん初めてであり、それは思ったよりも自尊心の傷つけられる出来事だった。実際のところ、稼動年数を実年齢とするならばクアット

口は十に満たない程度であり、なのはを小娘呼ばわりは出来ないのだが自分は特殊な生まれに育ちである、そんな事は無視していいもいだろう。

重要なのは、あの小娘が生意気であり、気に食わないというその感情だ。

「……おーおー、すっげーなあ」

既に状況は開始されている。セインが心から感心したように零した声も爆音ですぐに掻き消えた。

シルバーカーテンを解き、隠蔽を払った軍勢とアースラに乗った魔導師、騎士達との戦いは最初から混戦にして乱戦にして、文句なしに激戦の様相を呈していた。

その最前線、アースラの前面で最も多数の戦闘機達を相手にするのは白いバリアジャケットに身を包んだあの小娘——高町なのはと、対照的に黒いバリアジャケットを着込んだ「フェイトお嬢様」とでも呼ぶべきFの残滓——フェイト・テスタロッサ・ハラオウンだ。

「まあ、エースオブエースに、本局のエリートなんて呼ばれるくらいの事はあるわねえ」

彼らの戦いぶりは見事と、そう言ってやっても良いものだった。この濃いAMF下で、尚且つ各自がAMFフィールドを展開できる相手に対し、

「っ!!!」

「………っ!!!」

裂帛の氣勢とともに光弾を全方位に散らせ、そして砲撃を随所に叩き込んでくるのは。無言の気迫と共に刃を走らせ、高速で飛び回る相手を確実に着実に潰していくフェイト。

シルバーカーテンの幻惑で、相手にはこちらの軍勢は実機と幻影の混成編隊、数千機の戦闘機がその数倍、万に届きうる数に見えるはずである。

それでも二人には、少しも、本当に微塵も臆した様子は無い。

無双を誇る二人の魔導師の姿に、しかしクアットロは薄ら笑いを浮かべる。

「気合を入れるのはいいけど、あんな戦い方、どうせ持たないわん」
「……まあ、それには同意だ」

「だつよなー、いくらなんでもどんだけのっけからハイペースなんだよ」

チンクとセインも頷いた。そう、二人——特に高町なのはの方は、魔力消費、拡散の大きい砲撃を使うのにまるで躊躇が無い。防御にも贅沢に魔力を使って厚い壁を作っているし、まるでわざと魔力をばら撒いているかのようだ。

A M Fの魔力結合解除、つまり魔法減衰効果があるためにそんな大出力高火力な戦いをせざるをえないのだろうか、あれではどうせ、長くはもたない。

勢いが弱まった所で、チンクのシエルコートで防御を固めつつ自分のシルバーケープ、シルバーカーテンで姿を隠し艦に接近、そしてセインのデーパーダイバーで高町恭也の部屋まで潜り、瞬間強制転移装置を取り付け、起動。それで状況は完了である。

規模は大きいが、結局、まともに戦う気のないこちらとしては楽な任務だ。

(ドゥーエ姉様のライアーズマスクがあればまた違った作戦もあったんでしようけど)

スカリエッティの傍を基本的には離れないウーノもそうだが、クアットロの尊敬するドゥーエも例の”ゆりかご”関連の任務に就いている最中なので今回の作戦には参加していない。

「……ふんっ」

だが、彼女達の手を煩わせるまでもないだろう。

クアットロは舐めきった眼で命を賭けて空を駆ける相手方の奮闘を文字通り見下した。

まずいな、そう思うものの打つ手はない。結局は、看過せざるを得ないだろう。

敵を潰し斬り裂き蹴散らしながら、フェイトは思った。

それは戦況に対して、ではない。なのはについて、だ。エクシードモードのその身からAMF対策のヴァリアブル処理を施したアクセルシューターは常に最大数の三十二発を発動させ、エクセリオンバスター、ショットバスター、ストレイトバスター、ストライクスターズと砲撃魔法も躊躇無く大盤振る舞い。

「——おおおおおおおおおおおっ!!!」

爆風の中、漏れ聞こえてくる咆哮は彼女の屈さぬ意思の体現。

(……あれ、やる気だろうか)

それを確信しながら、フェイトも眼前、円盤大型の戦闘機をハーケンスラッシュで真っ二つに切り裂いた。AMFは厄介ではあるものの、出力と速度を上げ、魔法が掻き消される前に斬り裂いてしまえばいいのであり——もし彼がこの戦線に立っていたのならなんの問題にもしていなかったろう事を思うと、自分だってと意気が上がる。そう。

(……躊躇して後悔するくらいなら)

全力で、いくべきだ。フェイトはその金色の魔力を奔らせた。

「いくよ、バルディッシュ！」

『Yes, sir!』

「サンダアアアアアアアアアアアアアアアアアフォーールツ!!」

『Thunder Fall』

天候操作で雷を発生させる、生み出された雷自体は魔法ではないのでAMFの効果対象にはならない、まさに今の状況には打ってつけの広範囲攻撃魔法だ。

降り注いだ雷光は戦闘機達を幾機も飲み込んで行った。実機と幻影の混成編隊のようで何発かは素通りするだけの結果に終わったが、戦況へはかなり影響を与えられただろう。

(……恭也さんなら実機と幻、判別できたかな)

思わずそんな事を思ってしまう。自分も、なんとなくなら戦闘を続ける中で感覚が育ってきたのかわかるようになってきたが、無生物相手というのが大きいのだろう、未だはつきりとは見分けられない。情けなく、口惜しくはあるものの、

「……そろそろ、いいかな」

今気にするべきはそこではない。響いたのはフェイトのサンダーフォールを、それによりばら撒かれた魔力を見やったなのは、そんな静かな眩き。

(なのは……)

ああ、やはりやる気だ……なんて、今さら思う事じゃない。フェイトだって合わせる様に、大きな魔法も連発して魔力を空間にばら撒いて来たのだ。

彼女がこれから始めることを、結局止められはしない。それが正しいのか、正しくないのか、わかりはしないが。

それでも、それが彼女の選択なら、自分も自分として全力を尽くさねばならない、覚悟などとうに決まっていると云わんばかりのなのは横顔に、そう思った。

「レイジングハート、——ブラスターシステム、リミット1・リリース」
『Blasterset』

凜とした声の後、なのはを薄い膜のように包んだのは彼女の魔力の色を有した煌き。それはまるで、弛まぬ闘志を表すような、そんな輝き。

一際巨大な円盤大型戦闘機が、カプセル型、航空機型を引き連れ、なのはに向かつて襲い掛かり。

「エクセリオンバスター・ブラストシュート」
『Excelsion Buster』

奔った今までとは密度と速度の違うその桜色の砲撃に為すすべも無く消し飛んだ。

ブラスターモード。エクセリオンを調整したなのはのフルドライブ、エクシードモードをさらにリミットブレイクした最後の切り札。『……ブラスターシステム、ねえ。その正体は、術者の体が耐えうる限界を遥かに超えた自己ブラスト、かしらね？ 撃てば撃つほど、守れば守るほど術者もデバイスも命を削っていく』

どこからか届いた眼鏡の女——クアットロの言葉通り、その使用者にもデバイスにも負担をかけた上で、その能力をブラストする代物

だ。

『……んふふ、優秀な前衛の後ろ、チャージタイムを十分にとって後先考えない一撃必殺が撃てる状況ならそれは恐ろしいけれど、こんな乱戦混戦の状況じゃあ、……役に立ちませんわね』

彼女は心底小馬鹿にしたようにそう呟いて。

だが、しかし。

「……その分析の速さは褒めてあげたいけど、結論を出すのは少し早計に過ぎたな」

フェイトは複雑な表情で聞こえるか聞こえないかは別として、クアットロの呟きに答えた。

そう。

今ここで発動されたブラスタモードの真髄は、高町なのはの真意は、単純な出力向上にあったわけではない。先のエクセリオンバスター・ブラストシユートにしたって、ただの前振り、試し撃ちに過ぎないのだ。

フェイトは少し後方、アースラ近辺へと下がった。このままここにいるのは、なのはの邪魔になるからだ。

命を削り、痛みに耐えて、意思を振り絞る彼女の生き様の、邪魔になっってしまうだけだからだ。

戦闘機達を斬り裂きつつ、フェイトは後退して――。

『あらあら、お仲間残して下がっちゃうんですかあ？ 薄情ですなあフェイトお嬢さ』

その台詞が最後まで紡がれることは無かった。正確に言えば、紡がれたのかもしれないが。

「――ブラスト」

閃光、轟音、それらを伴い奔った膨大な桜色の魔力にどこかから繋いでいるらしい念話は通信不可状態となったからだ。

「……うん、問題なく発射可能だね」

『Yes, my master』

『な……な……う？』

ややあつてやつと届くようになったクアットロの声は、驚愕に揺れ

ていた。それもそのはずだろう。

声がするという事は彼女がいる所へは放たれなかったという事なのだろうが、それでも。

長い溜め時間を必要とするはずの極大集束砲、スターライトブレイカーがノータイムで放たれたとなれば、驚くのも無理はない。

瞬時に奔った桜色の極光に飲まれ、餌食になった戦闘機達は百を下らない。一つの方角が丸毎空いた事になる。

『何を……何を……何をしましたの!?!』

そのクアットロの問いに答えるように、そしてなのは先ほどとは違う方角へ向け、レイジングハートを構えて。

「ブラスト」

その短い掛け声と共に、再度撃った。

『Starlight Blaster』

またしてもノータイムで奔った桜色の極大砲撃は、敵で埋まった風景に文字通り風穴を空け、青空を見せた。

(……なのは)

それはまさに圧倒的な光景で、味方の行った行為としては喜びと賞賛で迎えるべきものなのだろうが、しかしフェイトの胸中は複雑だった。

Starlight Blaster——スターライトブラスター。クイックスターライトブレイカーとでも呼ぶべき、スターライトブレイカーの溜め時間なし即射、速射という文句なしに常識外れの技。

それはつまり、

「ブラスト、ブラスト、ブラスト……!」

連射をも可能にするという事である。三連続で極大規模の集束砲が撃たれる様は、弱い魔導師なら食らわずともその余波だけで吹き飛びかねない。

「……っ」

自身も戦闘を継続しつつも、フェイトは歯噛みする。

周囲に散った魔力を利用するという、ある程度のチャージタイムを

前提にしているはずの集束砲をノータイムで放つなどと言うのは本来ほぼ不可能であるはずであり、それを可能にしたなのはあの魔法は――。

なのはが最も自らの身を省みなかった時代に生み出した忌むべき禁じられた技であり、言うまでも無く一発一発放たれる毎に彼女の身体を蝕む所業だ。

「ブラスト、ブラスト、ブラスト、ブラスト、ブラスト、ブラスト、……ブラスト！」

ほぼノータイムできちんとした集束など出来ようはずもない、あれは無理やり素早く集めた大量の魔力を指向性と体裁をなんとか保たせ砲撃の態で『暴発』させているに過ぎない、無理矢理無理繰り無茶苦茶もいとところの暴走スレスレの魔法だ。

きちんとした集束砲であるスターライトブレイカーを連射しているわけではない。スターライトブレイカーに似た暴発を繰り返しているというのが一番近いだろう。

魔力消費量も、スターライトブレイカーと比べると一発一発は格段に少ない。これは、ひとえに持続時間の短さに起因している。暴発であるがゆえに砲撃の維持は長くて0.5secが限界であり、それは本元の十分の一以下だ。持続時間が短いと言う事は、取りも直さず消費もそれだけ小さくなるという事になる。

とは言えそれでも砲撃の持つ圧力、つまり威力自体はスターライトブレイカー+とまではいかないまでも、初期のスターライトブレイカー程度は確保しているところが恐ろしいところではあり。

そして何よりも恐怖すべきは、驚嘆すべきは、なのはがあれを習得したのは弱冠十歳当時の事であり、その頃はエクシードやブラスタ―よりも無茶な仕様のエクセリオンで撃っていたという事だ。

その姿は紛れも無く狂気という他なかったが、しかし彼女は間違いなく正気で、全てを覚悟の上でやっていて。

それは、少し自らの身を省みるようになり、未来をきちんと思据えるようになった今この時も本質的には変わらない。

本局武装隊の、当時のなのはを知る者達は誰もが彼女に溢れんばか

りの賞賛と、そして紛れも無い憐憫の情を送った。あんなモノが撃てる技量には賛辞を送る他なかったが、あんなモノを撃ててしまえる精神へは——あんなモノを撃つ事を考え付き実行してしまいその上リスクをわかっているながら使用を続けてしまう弱冠十歳の少女の精神に対しては、哀れみしか湧いてこなかった。

枠からはみ出た偉業とも言うべきあの魔法は、タガが外れた異形な心が生んだ奇跡のような悲劇であるのだという事を、魔導師であれば誰でもわかってしまったからだ。

「ブラスト、ブラスト、ブラスト、ブラスト、ブラストツ、……う、く……、……ブラスト!!」

極大の閃光が幾本も幾本も、蒼空を奔っては消え、また奔る。まるでそれは散りゆく桜の花びらのような淡く儂くも美しい——覚悟に染まった煌きだった。

(冗談じゃない……っ！)

心の中で毒づきながら、クアットロはセイんとチンクを脇に抱え込んだ。

「ク、クア姉っ」

「クアットロ……」

「ちよっとくらい高みの見物させてもらおうなんて思ってたけどっ予定変更！」

あんな気の違った化け物相手にしてられるか、クアットロはシルバーケープとシルバーカーテンで自分と妹達三人の身体を隠蔽したまま最高速、アースラへと向かっていく。砲撃がこちらを向かないことを祈りながら、だ。砲撃系エクストラスキルの集束砲をノータイムショットだど？ あいつ本当に人間かと、そんな疑問が素直に思考を占めそうになり、慌ててを頭を振る。

今は考えている時ではない、動かなくては。

AMF下であり、その上チンクのシエルコートもあるとは言え、あれに吞まれれば消し炭にされかねない。

どうやら持続時間には難があるようで貫通力には欠けるようだが、それでも馬鹿みたいな威力である事には間違いないのだ。

殺し合い、そんな風にあの女は言っていたが、なるほどその言葉に嘘はないのだろう。こちらの認識が甘く、緩く、温かったのだ。こちらの位置を確認もせずに、あんな砲撃を非殺傷設定で乱れ撃つてきた。それはつまりなんの躊躇も無く殺す気であるという事に他ならない。

(さっさとあの男の所へ行つて、同時に転送で離脱！)

似合わないといわれた眼鏡の奥、忌々しげに細めた瞳に怯えの色が混ざっている事は鏡を見ずとも嫌でも自覚してしまえる。

「——っ！」

ストレスの位置を、桜色の極光が通過して言った。頬を引きつらせて両脇の妹達を見てみれば、

「……あ、が」

「なっ……あ……」

彼らは言葉も無い様子だった。

(……それでも)

しかし、それでもクアットロは自分達の作戦の成功を疑わない。結局、どれだけあの女が猛襲を、クアットロからしてみればもはや妄執にすら見える攻勢をかけてきたとしても、それに付き合わなければいけないわけではない。あの女を倒さなければいけないわけではないのだ。自分達の勝利条件はあくまで高町恭也の奪取のみ。

それさえ叶えば勝利なのだから。

(……精々頑張つてなさい、お馬鹿さん)

圧倒的な戦姿を見せ付けるのはに心の中で毒づきながら、クアットロは墜とした戦艦——アースラへと姿を隠したまま接近していく。

「……クロノ君」

「……わかつてる」

おおおおおおお!!』

通信機越し、聞こえてくるのはその身に纏う騎士甲冑と同じく真っ赤に染まったヴィータの怒号。

『てめえらがッ! てめえらなんかガッ!!』

ヴィータはギガントフォルムとなった愛鎧を振り回し、その小さな身体を廻しに舞わせて破壊の爆風を幾つも幾つも作り上げていく。

『アイツ』に触っていいわきゃねえんだよオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!』

一際大量高密度に纏まった敵集団へ突っ込み中心でグラブファイゼンを振り回す、それはまさに嵐の如き様相で。敵を鉄クズに変え次から次へと屠っていく彼女の身には反撃や弾け飛んだ敵機の鉄片が幾度も掠めそのジャケットは傷ついていくが、しかし気に留める様子など微塵も無いその顔はまさに鬼の如き形相で。

『無駄だと言うのがッ!』

シユランゲフォルムの相棒を振り回し、烈火の将の名に違わぬ裂帛の咆哮を上げながら、

『何故! わからんのだッ!!』

その場の空間全てを燃え上がらせるような勢いで豪炎を放ち敵機を消散、焼散させるシグナムは、『己が信ずる武器を手に、あらゆる害悪を貫き敵を打ち砕く』——いつか彼女が言っていたベルカの騎士の、その在り方の体現の様で。

『貴様らに! 貴様ら如きには! 我らに付け入る死角もアイツに触れる資格も! 一片たりともありはしない!』

誓いを胸に恩義を心に仲間を背中に武器をその手に。

騎士達は、空を駆ける。

「……クロノ君、アースラ背面へ人型を先頭にした敵機隊接近!」

そしてエイミィからそんな報告が入り、

「……頼んだぞ」

『身命に賭け、必ずや』

クロノの声に返る形で響いたのは、深く静かで揺ぎ無い声。

かつての悪夢から解き放たれた——祝福を運ぶ美しき銀の女神の

声だった。

出来るなど、宙に浮かび仁王立つその姿にリインフォースは敵方の力量を悟る。

身体のいたる所に生えたブレードが鋭い目つきと闘気に良く似合う、アースラの背面を守るリインフォースの前、数多くの戦闘機達を引き連れ現れたのはそんな女だった。

こんな状況でなければ、賞賛の一つでも送ってやりたいそれは戦士としては実に見事な立ち姿だったが、

「我らが主、ドクタースカリエッティからの言いつけでな、あの男を貰い受けに来た」

「そうか、死ぬといい。看取ってやろう」

言い終わるのとはほぼ同時、リインフォースはその手から紫がかった砲撃、ナイトメアを放った。

溜め時間により威力の可変する魔法だが、今のはほぼ速射に近い。狙いを違えるわけもなく、フルチャージショットに比べれば大分格は落ちるものの並みの敵ならなんなくこれで終いなのだが。

(……速いな)

敵は即座に反応、空中を高速機動し砲撃を躲し。

ライドインパルス、そう呟いたかと思うと、

「っー」

「おおおおおおおおおー」

一瞬にしてこちらとの間合いを詰め、咆哮を上げ腕に設えたブレードで切りかかって来た。

相当な速度の乗ったその一撃をリインフォースは展開したシールドで受け止め、

「……………ふっー」

お返しとばかりに唸りを上げる右ストレートを返す。シユヴァルツェ・ヴィルクング——腕で貫くよう展開した魔方陣により振るう拳の威力を跳ね上げる格闘魔法の付与付きだ。

体勢を素早く変え、女は急加速を掛けた右の蹴りでそれに迎撃をかけ。

衝突、響いた衝撃の後、お互い後方へ弾き飛ばされる。強化した自分の拳と同等の威力の蹴りを放つとは、やはり相当にハイレベルな高速近接系だなど分析を走らせつつ、

「——っ」

相手方が息を呑む音が聞こえた。

吹き飛ばされた先、衝突の段階で予めリインフォースが配置していたブラッディダガーに囲まれて、だ。

「沈め……………っ」

起動コードをリインフォースは呟いて、そして爆発が巻き起こった。

煙が風に吹き飛ばされて、改めてお互いの姿が露になったところで、相手の女が言った。

「……………危なかったな。私一人では食らわされていたよ」

その言葉通り、女の身体に目立った外傷は無い。ブラッディダガーによる爆破攻撃はクリーンヒットしなかったという事になる、寸前で避けられたのだろう。

その理由はわかつている。

「しかしさすがは銀の女神、あそこからよく避けたな」

「……………ふん」

爆破させようと意識を集中した寸前、女の引き連れてきた戦闘機達がリインフォースに一齐に射撃砲撃をかけてきたのだ。もちろんの事それいづらにも元より警戒していたため喰らうへまはしなかったものの、爆破起動を一瞬だけ遅らせてしまった。結果、女に避ける暇を与えてしまったのだからミスとしか言いようが無い。

「そんな顔をされると、心苦しくはあるんだが」

険しい表情を作ったこちらにそう言って女は苦笑した。

「悪いな、名高き銀の女神との一戦、叶うことなら一対一で戦り合いたい気持ちはあるのだが、そう言うわけにはいかなくてな」

「……………そろそろと引き連れてきて、そこまでしてあの騎士が欲しいか」

「欲しいらしいんだ、うちのドクターはな」

「そうか、ならばそんな愚かしい考えを持っている限りこの世に貴様らが安穩と生きる事の出来る場所など一所もないと知っておくとい

い」

「手厳しいな」

零して、女は構えを作った。

「お前達の大事な男を貰い受けることになるからな、一応名乗っておこう。トーレだ」

「……………」

リインフォースは無言、魔力を高めていく。

痴れ者の戯言にこれ以上付き合うつもりは無い、この——トーレと言うらしいが、この女一人相手でもギリギリの戦いではあるのだろうが、それに加えこの多数の戦闘機がいるとなると戦況はかなり厳しくなってくる。

だが、負けるわけにはいかないのだ。戦法を頭の中に組み立てていく。

あの日あの時救ってもらったこの自分が今この時、敗する事など許されようはずもない——何よりも、自分で自分を許せない。

(騎士……………騎士恭也)

早く目覚めて欲しい。欲しいけれど、しかしどうか、今この時はどうか穏やかに安らかに。

何も心配などいららない。貴方に害なさんとする愚か者は、この身が必ず滅してみせる。

だから安心して、眠っていて欲しい。

「……………」

リインフォースは無言のまま、キリキリと戦闘意識のレベルを引き上げていく。苦しい戦いになることは簡単に予想できる、それでもなお、要されるのは絶対の勝利。

銀の柔らかな髪をなびかせ、赤い瞳で敵を見据えて、リインフォースは口を開いた。

「さあ死ぬといい、痴れ者よ」

あの騎士に害なすならば、そんな者にはこの世を生きる資格も価値もないのだから。

「……行くぞ」

返ってきた苛烈な視線と声、そして自分を囲む無数の機械仕掛けの軍勢にも、リインフォースは怯まない。

片付けてみせる、胸に浮かべるのは揺るがぬ覚悟と、——笑顔が似合うと言ってくれたあの優しき騎士の笑顔。

リインフォースは、思う。

いつか必ず目覚めて欲しい。もう一度、あの愛しい顔を見せて欲しい。……でも今は、だけど今は、どうか今だけは柔らかい、穏やかなまどろみの中に居て欲しい、と。

邪魔者達は愚か者達は痴れ者達は、自分達が滅しておくから。そう。

(大丈夫だ、……騎士恭也)

——全ては安らかな、眠りの内に。

奔ったのは直感、それが戦場でどれだけ重要なものか、フェイトは理解している。

ゆえに行動は早かった。理屈ではないその感覚にしたがって、

「……はあっ！」

プラズマランサーを高速射出、向ける先は己の後方、アースラのすぐ近くだ。

あんな位置まで敵を通した覚えはない、ないはずだが、しかし己の直感は……未熟ながらも育ってきた気配を探る技、心は、それとは逆の結論を出している。

あそこに、何か居る、と。

果たして。

「……うそっ!?!」

「……なあっ!?」

「くっ!」

果たして、踊りかかった雷槍を弾きつつも声を上げその姿を現したのは、三人。一人の顔には見覚えがある、クアットロなどと名乗っていた女だ。

「——っ!」

それでもどうか勘違いであって欲しいとどこかで願っていたフェイトの顔からは血の気が引き、背に冷たい汗が流れた。

プラズマランサーを弾いた三人の位置は本当にアースラのすぐ近くで……否、

「まさかばれるなんてえん、……でも、これでチェックメイト」

もうその表面に降り立っている。それもそこは……恭也の眠る部屋の丁度真上。

「——おおおおおおお!」

AMF下に置かれ魔力防御のほぼ消失したアースラの装甲は脆い、とは言えそれを破り内部に這入り込むのには流石に多少の間隔が、時間がかかるはず。みるみる内に回転数の上がついていく頭で考えながら、フェイトは魔法を高速起動準備。バルディッシュからは二発のカートリッジが排出された。

(這入り込まれる前にトライデントスマッシュャーで吹き飛ばして……)

「……え?」

蓄えた雷の塊を射出しようとした寸前だった。フェイトの口からは自然とそんな疑問の声がこぼれた。

「……IS発動」

ニイと笑った青髪の女が見慣れぬ陣を足元に展開したかと思うと、「ディープダイバー」

トブン、と。

茶髪青髪銀髪の三人は、まるで水の中にも潜るかのよう船体へ這入り込んで行った。

茶髪の女がその右手に握っていたキューブのようなものの姿がフ

ラッシュバックのように脳裏で画像として浮かぶ。似たようなものを以前何かの任務で見た覚えがある、あれは強制転移装置だ。起動する事で触れているものをあらかじめ設定した場所へと送る代物――。

（――ごめんアースラ!!）

「スマッシュアアアアアア！」

『Trident Smasher』

フェイトは蓄えていた魔法を自らも乗っていた愛艦、アースラに向け放った。

内部に這入られた所為で三人の正確な位置は気配では読めない。ゆえに直接奴らを狙うのではなく。

そして着弾。轟音を響かせ、アースラの壁面に風穴が開き――威力や角度、着弾点を短い時間の中ながら出来うる限り調節した甲斐あつて狙い通り。

（……見えたー！）

正方形の氷の中、眠る恭也の姿が見えた。つまり、恭也の眠る部屋まで一気に道を作ったことになる。魔法の通り道にアースラの船員がいなかった事は緊急時の艦員の勤務体制を熟知しているがゆえに確信を持っていた事だ。でなければ流石にこんな手法は採れない。

後は時間との勝負。あの部屋へ、艦へ潜り込み恭也の元へたどり着いて来るであろう奴らよりも早くあそこへ飛び込めば良い。

「ソニック……」

ムーブと、続けようとしたフェイトの瞳が捉えたのは、恭也の眠る部屋、その天井からぬるりと這い出てきた青髪、茶髪、銀髪の姿。

ここから高速移動魔法であるソニックムーブを発動させ、あいつらへ飛び込めるかどうかの勝負。

フェイトの頭は己の現在位置に魔法起動速度とそれによる機動速度、そして相手方の現在位置にその移動速度を鑑み――。

そして結論を算出した。

（あ、れ……）

まに、あわない？

「……………っ!!」

身体が、頭が馬鹿みたいに軋み、悲鳴を上げるも構わない。ゼリーのような周囲の空気を切り裂くように、フェイトは色の抜けた空を金色の魔力を纏って翔け。

自らの空けた穴へと飛び込み、その勢いのままバルディッシュのフルドライブモード、ライオットブレードの刃を、

「っ!!」

寸前、まさにそう言っていていいだろう、恭也の眠る氷解へと転送装置を触れさせようとしていた茶髪女達三人へまとめて横殴るように振り当てた。

反動に身体がさらに悲鳴を上げたところで、やがて世界に色が戻つて。

「……………ぐうっ!?!」

「……………がっ!?!」

「……………っ!?!」

濃いAMFに相手の防御技能、そして自分の疲労、最後のものが一番の理由だろうが、茶髪女達三人の身体を両断してやる事は出来なかったが、雷撃とともに思い切り吹き飛ばす事は出来たようで、彼らはかなりの勢いをもってそれぞれ壁に激突。三人がようやくと驚きと苦痛の声を上げたのはそれからだった。

その隙に、

「ディフェンサー・シャープ……………!」

『Defenser#』

恭也の周囲へ四重のバリアを展開。黄金の膜に氷解が包まれた。

そしてフェイトは床へと降り立って、

「……………くっ」

そのまま膝を折り、半ば崩れ落ちる。体中が痛み、動きは鈍くひどくだるい。その上頭はぼうっとして、視界は揺れっ放しだ。

——神速。

おそらく辿り着けたのだらうその境地は、未熟なこの身には明らかに過ぎたものだった。

「……はっ、く……うう……」

強い吐き気を堪え、なんとか呼吸を整える。神速だけでなく、その中で魔法発動までしたのもどうやら効いているのだろう、とにかく身体に力は入らず、魔力もうまく制御出来ない。普通に眩体や晃刃等の魔法と共に神速を使いこなしていた彼の凄まじさが文字通り身に沁みるようだった。……もつとも、その彼にしたって魔法と奥義を併用したものに關しては、神速内で行うのは雑旋・舞だけだと言うのだから、

(本当に、無闇に使えるものじゃあないんだな……)

奥の手と、そう言っていた事の意味を強く実感した。

しかし、先ほどの状況はそれを使うべきものだったろう。

「何をしてくれたか知らないけど……相当無理したみたいですねえ、フェイトお嬢様」

ふらつきながらも立ち上がりそう言葉を放つ茶髪女の手には、まだあの強制転送装置は健在だ。

「いつつー……なんだよ……何が起きたつーんだよ……」

「元はあんな離れた場所にいたはずで、そしてシエルコート越しでもこのダメージ……おそらく凄まじい勢いで突っ込んできたのだろうが」

「自殺行為みたいなものねん、……ふらふらですわね」

「ま、そりゃあたしらもだけどな」

「だが、こちらは三人だ」

各々立ち上がる侵入者達の前、

「あらあら、だあいじょうぶですかあ？」

フェイトの手の中、バルディッシュがフルドライブを解除、ライオットブレード、ザンバーからさらにハーケンフォームへと戻る。これ以上のフルドライブ、ましてや未だ未完成のリミットブレイクはすべきでないとの、慎重な彼らしい判断だった。

『Sorry, sir』

それはその判断を自分で下した事と、神速内での魔法発動を手伝えなかった事、両方の意味合いを含んでいるのだろう。長く連れ添って

いるからこそその声の調子からそれが読み取れて。

『ううん、いいよ。……でも、まだ一緒に無茶はしてくれる?』

『Yes, sir!』

フェイトは応えてくれた相棒を信頼を籠めて握り、眼前の敵方を睨み付けながら、

「今ならまだ、許してやる」

己の身体に戦闘態勢を要求、応えてくれた鍛えてきた身に感謝しつつ、構える。

「なんて事を、私は言わない——真・ソニックフォーム」

『SHIN Sonic Form』

バルディッシュまで一緒のリミットブレイクモードは無理だが、自分だけのそれならまだ無茶の範疇。フェイトはその身を包む装甲を超高速度特化に移行させた。

「この人を、狙った事を後悔しながら死んでいけ」

「……それは執務官としてのご判決?」

その問いに、フェイトは熱烈な想いの籠った、冷酷な声で答えた。

「ただの女としての判断だ」

「勇ましいですわねえ」

「やれるもんならやってみろっつもの」

「……行くぞ」

茶髪の女が周囲にスフィアを展開し、青髪は徒手空拳、銀髪は手にダガーを構える。

その姿さえぐらりぐらりと揺れて見えている自分の現状から言つて、勝算の薄さはよくわかつていているけれど。

不思議と、そう、不思議と——負ける気は微塵もしなかった。

後ろに、あの人がいる。

背に、愛する人がいる。

それだけで、為すべき事は全て為せると、そんな風に思えた。

「ぐっ！」

腹に入ったのは拳。エネルギーブレードの方でなかったのがまだ救いか、なんて思っている間に吹き飛ばされて。

「……………」

全方位から戦闘機達に射撃砲撃の雨を食らわされる。バリアを展開、リインフォースはなんとか凌ぐ。

幸い魔力は潤沢な身だが濃いAMF下、それにも限りが見えてきた。肉体に入っているダメージもそろそろ無視できなくなってきた。いる。

劣勢、一言で言えば現状はそんなものだった。

あの短髪女——トーレと一対一であったなら勝っていた自信はあった。しかし周りの戦闘機達が厄介だ。一体一体はたいした事は無いとは言え数が数である上に、迂闊に後ろへ通すわけにもいかない。数百機は潰したがそれでもまだまだ沸いて出てくる。

不利な状況下で防戦を強いられる、まさに苦境の真っ只中。

「…………遠き地にて、闇に…………沈め！ デアポリックエミツション！」

なんとか準備を終え発動した広がる黒い闇の姿をとる広域殲滅魔法も、

「……………」

「よくやっている、讚えてやりたいがな」

周りの戦闘機達を何体も飲み込んでいくが、次第にその色を薄くしやがて淡く消え去った。まさに焼け石に水、大した効果は上げられなかったと言っただろう。

AMFの濃さと自らの魔力低下という悪条件があるとはいえ、あの魔法で状況をほとんど動かせないというのは。

(このままでは、…………詰まれる、か)

結論に、リインフォースは眉間に皺を寄せた。

事実、トーレの表情は隙こそないものの自分とは対照的に余裕そのものだ。

「そろそろ終わりにしよう、銀の女神よ。こんな戦い方は私としても本意ではないしな」

「……………」

取り合わず、リインフォースは無言、状況を打開するための戦術構成を頭をフル回転させ捻り出そうとし、

「……………」

「本当に、本意ではないんだがな」

しまったと、思ったときには既に足には円形大型戦闘機から伸びたコードが巻きついていていた。

思考に嵌るあまり、周りの状況への警戒を一瞬とは言え緩めてしまった自らの迂闊さに歯噛み、する暇もない。振り払わんとする前に次から次へと同じように幾機もの大型、カプセル型の戦闘機達はコードを伸ばし、リインフォースを絡めとっていく。

「……………なっ!?!」

そして戦闘機達はコードを力づくで引きちぎろうとしたそのリインフォースの力と動きを利用するかのようになり、引つ張られるがままにリインフォースに体当たりするように素早く寄って。

自爆でも狙っているのか、そんな予想は生ぬるかかった。

「……………しまっ」

考えれば自明な事だった。

至近距離、リインフォースの全方位を埋めるかのような戦闘機達は一体一体が個別にAMFを展開している。そいつらに囲まれると言う事は、

(……………魔力の……………結合が……………)

当たり前ながらもとより相当濃く展開されているAMFが比較にならないほどにさらに濃くなるという事であり。

疲弊した今のリインフォースでは攻撃、反撃どころか防御魔法の展開もままならなかった。

ライドインパルス、と、そんな声が風に乗って届いた気がする。

捕らわれ、まともに防御も出来ないリインフォースの身を高速を纏い突っ込んできたトーレのエネルギーブレードが容赦なく切り裂いた。

巻き添えを喰ったのであろうリインフォースを捕らえていた周り

の戦闘機達が幾体か爆散するのが遠くに見えて、ああ、吹き飛ばされたのだと妙に冷静に理解する。

魔力の消費、身体の損傷。

戦闘継続は、……まだ可能。

だが、しかし。

(……この、ままでは)

このままでは、勝てない。勝てないと言う事が意味するのは、守れないと言う事だ。

守れないと言う事が意味するのは。

(き、し……きよう、や……)

彼を、奪われると言う事だ。

「——っ！」

歯を食いしばり力を内から練り上げる。

(……うば、われて……！)

奪われて、なるものか。

だから守る、だから勝つ。どんな烈撃を幾度喰らおうがそれだけは――。

思っ

(……?)

リインフォースは、気づく。なんだろう、先ほどのトーレの一撃、エネルギーブレードによる斬撃は確かに強力だった。格闘近接技能で言うならばS＋クラスはあるはず。

文句なしに、強く鋭い一撃だったはず、だ。

なのに、……なのに。

斬られた腹部の騎士甲冑には深刻な破損、衝撃を受けた身も痛む。

しかしそれでも、思うのだ。

——軽い、と。

いくら強くともいくら鋭くとも、なぜだかあの一撃は軽かった気がする。なぜ自分がそんな事を思うのか、吹き飛ばされた姿勢のまま青い空を見上げて、

(ああ、そうだ)

リインフォースは笑った。そうだ、なんだ、簡単なことじゃないか。軽いと、そう思うはずだ。思わないはずが無い。だって、だって、あんなものよりも遥かに強く鋭くそして重い、想いを背負った一撃を、自分は過去に受けたじゃないか。

五年前、悪夢に泣いていたその最中、この身に受けたではないか――他でもない、あの騎士から。

悲しいほどに誰かを護る決意の籠ったあの斬撃。あれに比べれば、今のトーレの刃など、なんと脆く軟く軽く軽いものか。

「……、羽ばたけッ、スレイプニール……!」

リインフォースは飛ばされていた身に背の六翼で制止を掛けた。これより後ろには下がれない。これより後ろにはただの一機も否、一発も、通せない。

通さない。

「頑丈だな、そして強情だな、女神よ」

揺るがぬ視線を返しリインフォースに、トーレは続ける。

「まあ、流石にもう保たないだろう。……残念だよ、お前ときちんと戦えなかった事がな」

トーレの中では既に勝敗は決まっているようで、そしてリインフォースにはそれを覆すだけの策も力も技もない。

それでも、決して曲げぬ曲がらぬ意志だけは。

それを示すようにリインフォースが自らの魔力を迸らせ周囲に風を吹かせた、

『……インフォース!』

――その時だった。

『リインフォース、聞こえるか!』

『クロノ提督……?』

響いた念話はアースラ艦長、クロノのものだった。聞き返したリインフォースに彼が口早に続けたのは、

『用件だけ言おう!』 “そちらへ助っ人を送る”!

『………い、や』

なかなか要領を得ない言葉だった。

(……助っ人?)

なのはもフェイトも主も騎士たちもどこかに手を貸せるような状況ではないはずで、まさか艦長であるクロノが直々に来るのか、そんな事を一瞬思うも、彼の発言、”送る”という表現からすぐにその考えは却下した。

送るという事は彼以外の誰かで、しかしこの状況でここに来て助けとなってくれる者が他に——。
なんて。

「……——っ！」

自分の馬鹿さ加減に、愚かさ加減に思わず笑いそうになった。
なぜ、すぐに思い至らなかつたのか。

(そうだ、……そうだな)

転送陣が目の前に浮かんだ後、そこに現れたのは陽光に照り返されての煌き。

(そうだ、そうだな、……でも、いいのか?)

青空から降り注ぐ鮮やかな光の下、

(私に、この私に手を貸してくれるのか?)

それでもどこか控えめに輝く、

——それは、銀色の指輪。

何も言えずに一瞬が経って、響いたのは彼女の声。

『ずっと、思っていました』

凜としながらも柔らかい、穏やかながらも頼もしい、そんな彼女の声。

『ずっとずっと、思っていたんです』

「何を、だ……?」

問い返すと、彼女は微笑むようにふわりと明滅し、答えた。

『同じ光に照らされた、貴方と私は夜と月。ずっと、思っていたんです——きつと、とても気が合うと。きつと、良き友になれると』

「……——」

彼女の主の現状の、その元凶は自分であるのに。

そう言つて、くれるのか。

その想いは、問いは、口にしなかった。それは彼女への侮辱だ。ここに来てくれて、そして何より、あんな風に言ってくれた、それならもう、自分はうだうだとみつともなく負い目に眼を伏せているべきではなく。

「力を……」

何より、今はそんな時ではなく。だから、リインフォースは加害者として謝るでもなく咎人として何うでもなく。

「力を……！」

友として、彼女に請うた。

「力を貸してくれ！——魅月!!」

『喜んで!!』

そして光が瞬いて、リインフォースの腰には鞘に収まった小振りな剣が二振り。

「……ユニゾンデバイスがデバイスを使うというのもまたなんというか、妙な話だが……しかし今さらデバイス？」

怪訝そうなトーレに、スラリと両の魅月を抜き放ち、リインフォースは厳かな声で空気を揺らした。

「……態度が全くなっていないな、弁えろ、下衆。頭を垂れ、面を下げて地に伏せろ」

静かに、それでも確かに相手に届く音量を持った言葉で告げる。

「お前は今、世界で最も気高き刃の前に居る。無礼は許されんぞ」

「……気でも違ったか？」

ふ、と首を振る仕草と同時、トーレの指示を受けてだろう戦闘機達のリインフォース目掛け押しつぶすように突進してくる。

不意をうってコードを絡めることもしない、数に任せた力づくの戦法だが疲弊しついきさつき大きなダメージを受けたリインフォースには確かに有効な戦法と言えた。

リインフォースだけだったならば、有効な戦法だったと言えた。

「……………行こう、友よ」

『ええ、我が友よ』

「――berw・ltigender K・rper」

『・berw・ltigender K・rper』

噛み締めるように、詠唱を発して。

ラインフォースの体はその場から掻き消えた。

殺到してくる戦闘機達の隙間を縫うようにして力強くしかし軽やかに、総じて言つて圧倒的な速度でもって駆け抜けていく。足音と一瞬だけ生成していく足場だけが置き去りになるあまりの高速機動に、戦闘機達はラインフォースの動きはおろかその姿さえまとも認識出来ず、響き始めるのは爆発音。すれ違い様に魅月の刃に斬り裂かれた敵機達は為すすべも無く只の鉄塊に変わっていく。

『ふむ……やはり騎士恭也のようにはいかないな。斬撃の鋭さはもう言うまでもない事だが、機動速度においてもスレイプニールも併用しているというのにあまりに遠く及ばない』

『友よ、理想が高すぎるのは考えものですよ』

『む、……そうかその通りだな。うむ、そうだ。騎士恭也と自分を比べるとは我ながら畏れ多い行いだ、慎もう』

『……しかしやはり流石ですね、・berw・ltigender K・rperもGl・nzen de Klinge——彼愛用の、そして彼女の特筆すべき得意魔法、眩体と晃刃だ。』

魅月の賛辞に、ラインフォースは苦味のある、しかし俯く暗さに染まっではないない声で答える。

『……私は一度、恭也を内に取り込んでいるからな。だからこうも使えるんだ』

『それでも、ですよ。真正古代ベルカの名に恥じぬ戦姿ではありませんか』

『……っ、そう、だろうか』

『ええ』

それは、他でもない恭也の愛刀という肩書きを抜いたとしても、身が震えるほどの喜びを感じる言葉だった。なにせ、彼女魅月は、真正

古代ベルカにおいては知る人ぞ知る、ある意味で伝説的とも言われた
” Mond ”シリーズのデバイスなのだから。

与えてもらった評価に恥じぬよう、そしてなにより今為すべきこと
を為せるように、リインフォースは残り少なくなった魔力を奔らせ空
を駆ける。

四方八方、回るようにして舞いながらその実、向かう先は言うまで
もない。

「……来るかつ」

邪魔な戦闘機達は粗方片付けた、そう判断し、構えるトーレの正面
へ。

「——おおおおおおおおおおお!!」

咆哮を上げ、生成した足場を思い切り蹴り背の翼をはためかせ今出
せる最高速をリインフォースはその身にさせる。

「——っ！」

ライドインパルスという名らしい、見慣れぬ陣を足元に展開してか
ら放つ彼女の主力技なのであろう高速移動術をトーレも発動させ。

両者は真正面からぶつかり合った。

ザン、と、響いた音は四重。

リインフォースの両の手の魅月がトーレの腹部に、トーレの両腕の
エネルギーブレードがリインフォースの腹部に突き刺さった音だ。

「……相打ち、狙い、か……？……？」

掠れた声でのそんな問いに、リインフォースは口角を吊り上げ不敵
に返した。

「相打ち？ 生憎とこちらは頑丈な身でな、そんなつもりはない。

………ここからが本番だ！」

搾り出すのはなけなしの魔力。

「来よ、夜の帳……」

両者の間に生まれた黒い球体は少し膨らみ、二人を飲み込んだ。

「なん……？……？……？……？……？……？」

「ああ、魔力増幅空間だ」

「………こんな至近距離にいながら一体何を考え………なっ!？」

問うたトーレをリインフォースは涼しい顔で自らの身体ごとバインドで捕らえた。

「こんなつ、……正気か貴様?!」

「ああ、悪夢より醒ませてもらってからこの方、私はいつでも正気で本気だ」

覚悟ならとうに決めてあるとばかりに、いつそ優雅にリインフォースは微笑む。

黒き球体——魔力増幅空間、その中へバインドで固めた敵を捕らえ、そこへ魔法攻撃を放ちその増幅効果を利用して強烈なダメージを与える、というような運用をする魔法だ。

当たり前ながら、増幅され大規模高威力になった自分の魔法の巻き添えを喰わないよう、標的とは通常よりも大きく距離を取るべきであるのだが。

「こうでもしなければお前はちよこまかとその移動技で逃げ回るだろう」

『ですから、こうして捕まえた次第です』

「な、な……」

今のリインフォースとトーレはまさに零距离。ピタリとくつつき合っている。

戦慄するトーレと微笑むリインフォースの周囲、黒い空間にやがてバチリバチリと稲光が生まれ始めた。

「この魔力………デバイス諸共焼け死ぬ気かっ!」

発動準備段階からこれから放たれる魔法の威力を察したのだろう、眉間に皺を刻んだトーレに、

「……覚えておくといい、痴れ者よ。我ら真正古代ベルカの女はな」

リインフォースは穏やかにして厳かに言っつて、

『砕けぬ頑丈折れぬ強情、そして屈さぬ根性こそがその真価、なんですよ』

そして迷い無く淀みなくそう続けてくれた友のその柄を握り、

「さあ、眠るといい」

「さて、やめ………っ」

「――撃ち抜けえ!! 夜天の雷!!」

視界を埋め尽くす攻撃的な雷光が、耳をつんざく破壊的な雷鳴が、身を焼き焦がす圧倒的な雷撃が、リインフォースと魅月諸共に、なんとか逃れようと身をよじったトーレへ踊りかかった。

感じたのは、風。吹き抜けたそれにリインフォースの意識は戻った。

「……………つどうなった!?!」

『勝利ですよ、我が友よ』

答えた声は左手の小指から返って来た。待機状態に移行したらしい魅月だ。

『あなたが気絶していたのはほんの一瞬です、そして相手は…………』

言われずとも、その先はわかった。

リインフォースの視界、その遠くには焼け焦げた身を航空機型の戦闘機に乗せ去っていく短髪の女――トーレの姿。

膝立ちで荒く肩を上下させており、どうやら死にはしなかったらしいがもう戦闘を行えるような状態ではなくなったのだろう。武人のような雰囲気はあったが引き際を弁えないようなタイプには見えなかった、彼女はもう戦線から離脱したと考えていいだろう。

「…………だが、まだ引き下がらない連中はいるようだな」

『ですね』

数を減らしても増援が次から次へと沸いてくるために、戦闘機達は未だ空を埋めるような数だ。それに、トーレのような者もまだいるかもしれない。少なくとも、クアットロなどと名乗っていたあの女を始末したという報告もまだどこからも受けてはいない。

「なあ、我が友よ」

『何ですか?』

魔力も枯渇しかけ体力も切れかけのリインフォースは穏やかに微笑み、問う。

「まだ付き合ってくれるか?」

『ええ、喜んで』

少なからずダメージを受けたのだろう幾つか裂傷の見える魅月は、しかし迷いなく彼女らしい控えめながらも確かな輝きを見せ、そう答えてくれた。

”フエイトちゃんもあれなんよな、長物使うんやろ？ 斧やったか鎌やったか。んでもとにかく、せつかくやから棒術の突き、覚えてみいひん？ 石突とかで打てるし、幅広がるやろ”

ダン、と、響いた力強い自らの踏み込みの音はしかし、音よりも遙かに速い速度で飛び出したフエイトの耳には届かない。

最初から全速、トップスピードで向かうは、

「……っ」

手に持ったダガーを投擲するモーションへと入っている銀髪女だ。どんな効果があるかわからないあんなものを投げられて氷解の中眠る彼に何かあつてはいけない、そう判断しまず真つ先に潰す事にした。まっすぐに突つ込むこちらの姿を一応視認出来た、反応できたのか、銀髪女はバリアらしきものを周囲に展開して防御を固める。

”ええか？ 大事なのはたった一つだけや。……『一つになること』、その一つだけや”

みるみる内に両者の間合いは詰まっていく。フエイトの手には逆向きに、つまり鎌部分ではなく石突を先端に回したバルディッシュ。

”脚、腕、腰、手、体全体を一つに、やないで。そこに手に持った得物、武器も合わせて一つになるんや。そうすれば棒の先に籠る力は全身と武器の速さと重さと膂力と気合、自分の持つてる全部になつて……そして出来るのは必殺の一撃や。おししよの徹が出来るんなら結構えげつないのが打てるはずやで、——アホがおつたら遠慮なくかましたれ”

振り下ろした脚、伸ばす腕、回した腰、握る手、うなる己の体全てとそして相棒を、一つに。

生まれる威力のその全てを己の得物の先端へ集め、眼前の獲物を容赦なく仕留めんとするフェイトの脳裏に浮かんだのは、

”欲しいもんがあるんなら、護りたいもんがあるんなら、なんもなくさずに、幸せで居続けたいのなら……いつだって、闘って、勝たななあ。なあ、フェイトちゃん”

深い笑みを湛えたレンの、そんな言葉だった。

(はいー・レンさんー！)

胸の内、感謝と共に答えながらももらった教えに違わぬ動きで放つのは、

鳳家直伝棍術寸掌

空気を切り裂き唸りを上げ、真つ直ぐに迫る重い突き。バリアへ刺さるように届いたそれは、衝撃を内側へと貫通させる。

「……っ!？」

何が起きたのか理解できない、そんな顔で大きく仰け反る銀髪女。バリアの展開も大きく緩む。

『H a k e n S l a s h』

「……うあああっ!？」

そこへ廻したバルディッシュから追撃の鎌を叩き込めば、彼女のその小柄な身体は勢いよく壁へと吹き飛んで行った。

「……てんめええっ!？」

噛み付くような声と共に低い姿勢で素早く踏み込んで来たのは青髪の女。好戦的な瞳に怒りを湛えた彼女は握った拳を振り上げる。単純なアッパーだが、技を放った直後のフェイトは避けられはせず、バルディッシュでガードする。

「……はっ!？」

勝ち誇ったような青髪女の笑み。バルディッシュはフェイトの手から離れ宙へ、上へと舞っている。打撃の衝撃に耐えかね得物を弾かれた——彼女にはそう見えたのだろうか。

しかしそうではないことは、バルディッシュも、そして当然本人のフェイトもよくよくわかっている。弾かれたのではない、わざと離れたのだ。

”フェイトちゃんも得物無しの格闘戦、やる機会あったりするんだってな？ んじや折角だし、日本の誇る空手の技、覚えてみない？”拳を上へ振りぬいた姿勢の青髪の女の前、フェイトは捻る要領で体を回し、弓を引き絞るように力を溜める。

”まあ空手つつうか、俺のお世話になつてる館長から教わった奥義の、そのさらに自己改良版なんだけどね。俺、御神流じゃあないけど普通の直突きとかなら師匠から教わってたし、後はほら、その、あの亀ヤローの技もちよちよつと盗んだりもして、んで作つたんだ”

拳を固め、息を鋭く整える。余分な力は抜きに抜く。

”大事なのはタイミング。体を引き絞って溜めた力を当てた拳越しに一気にぶつ放す、その最適な瞬間をちゃんと捉える事だ。目と勘と、そして勇気が一番大事。もし失敗したらとか、そんな風にびびつてちやあ使えない技だ。絶対これでぶつ倒す、そんな気持ちで放つんだ”

構えを作つたこちらへ追撃をかけるように拳を振りかぶり、そして左のストレートを放つてきた青髪女の動きを真正面から眼を見開いて見切り。

相手の打撃を掠めて躲し、下がらず退かず振り返らない、前へのみ進む意思を籠め拳を突き出すフェイトの脳裏に浮かぶのは、

”できねえ、できっこねえって思ってたら、できるもんもできなくなるんだ。……どっちに進むかわかんなくても、迷う必要なんかねえ。いつだって進む方向なんて、前しかねえんだから”

輝くような笑顔を放つ晶の、そんな言葉。

(はい！ 晶さん！)

心の中、感謝と共に叫びながらももらった教えを生かして生かして放つのは、

明心館空手巻島流奥義 吼破・改

トン、と、相手の体に触れるように当たってから爆撃のような威力を放つ激しい拳。相手の内側を揺らし震わせ掻き乱す一撃だ。魔力によって強化されたフェイトの身体で振るわれるそれは、本家と比べれば粗い出来だが威力は十分。

「——ッ!?!」

声も無く、意識が一気に飛んだのか焦点の合わない瞳で青髪女は水平に飛んで勢いよく床を転がっていった。

「……お見事！でも残念！」

声に振り向けば、残忍な笑みを浮かべたクアットロが周囲へ大量のスフィアを生成済み、まさに発射寸前だった。

それを一点集中放火しバリアを破り、強制転移装置を作動させるつもりなんだろう。

しかしフェイトは焦らなかった。二人倒しても三人目にしてやられる、そんな展開が、

「……遅いよ」

この後訪れないことを確信していたから。

だって。

遅くたってぎりぎりだって。

「——なのは」

こんな時、こんな状況で、この親友が、幼馴染が、戦友が、恋敵が、間に合わないはずがないのだから。

「なっ!?!」

フェイトの空けた穴から砲撃のような勢いで突っ込んできたのは、驚愕に表情を揺らすクアットロの身をその勢いのまま一息の躊躇も微塵の減速も無し、A・C・S・展開モードのレイジングハートで容赦無く串刺しにした。

クアットロが身を貫く激痛と衝撃の後に感じたのは、浮遊感、否、上昇感だった。

上がって、昇っている？ 思う間に体はものすごい勢いで上へと向かわされる。天井にぶつかる衝撃は無かった。正面からなのはに刺される形となったクアットロの背へぶつかる前に、自分を貫き背から突き出ているのであろう半実体魔力刃の効果か威力どちらかによつ

てだろう、自分達が潜って侵入してきた艦の天井は突き破られ、吹き飛ばされて行くからだ。それは果たして幸なのか不幸なのか、あまりの状況にクアットロの頭は判断を下せなかった。

やがて上昇感が止み、クアットロの身は青空の只中であつた。見下ろせばそこにはアースラの姿。フェイトによって横腹に、なのはによつて天井に大きな穴を穿たれ中々に凄惨な状態になっている。

しかし、凄惨な状態と言うのであれば自分も同様か。

気づけば桜色のリングに堅くロックされ両手両足はもうまともに動かせない、そして腹には突撃槍が突き刺さっている。頼みの綱の強制転移装置にも封印処理がなされていた。

「……スマートじゃないわねえ、大事な艦にあんなことして。……ほんと、貴方の周りに居るものはみいんな傷ついて行くわね」

震えを押し殺して、からかうような口調で言うクアットロの真意は挑発ではもちろんない。

(この女の心には傷がある……)

兄と友、自分を守って親しい者が傷を負ったという過去をこの目の前の女は持っている。そこを突き、抉り、あわよくば動揺させてなんとかこの状況を――。

「……うぐー」

ずぱり、と腹から刃が引き抜かれた。

「悪いけど、お話聞く気はないからさ」

そう言うと、なのはは手に持ったデバイスを突撃槍状態から通常状態へと収めた。怪訝に思うクアットロの目の前、さらに彼女はそれを手放し自らの傍らに浮遊させる。

「やして、と」

「……なんのつもりですか?」

「ん、決まってるじゃない。まずはこれが、……私の分」

『Acceler Smash』

「……っー」

光を纏って真っ直ぐ奔った左拳がクアットロの顔面に突き刺さつた。はりつけのように両手を固められているために当然防御も出来

ず、まともに喰らわせられる。

「……………うぐ、けない、相手を殴りつけるなんて、いい趣味してま」

なんとか虚勢を張り言おうと顔を上げたクアットロの視界にあったのは、今度は右拳を振りかぶるなのはの姿。

「……………つちよ、まつ」

「そしてこれが、……………私の分！」

『Accel Smash』

「ぐうっ！」

先ほどのストレートのとは違い、今度は首を横に折られるかなのような勢いで右フック。視界がぐわんぐわんと揺れる。

「それからこれが、私の分ッ！」

『Accel Smash』

横を向いたクアットロの顔面を真正面から捉え直すように、今度は左拳による左フック。

「……………う、ぐ……………あ」

「そして次が、——私の分だ!!」

「……………っ」

光に煌くストレートの一撃がまた閃いて、クアットロの顔面を捉える。視界の中、何かが落下して行くのが見えた。

「ああ、なんだ、やっぱり」

目の前の女、高町なのはは、にいと笑った。

「眼鏡、無い方が似合うねえ」

落ちていったのは自分の眼鏡か、思えば一撃目でもう大分ひしゃげていたろう、今まで自分の顔にかかっていたという事の方が不思議なくらいだ。

「さて、それじゃあ素顔の貴方に出会えたところで、……………受け取ってもらわなきやね。続いてこれが……………」

「……………ひっ」

自分の口からみっともない悲鳴がこぼれた事への羞恥を感じる余裕もなかった。

「私の分！ 私の分！ 私の分ッ！ 私のツ……………分ッ!!」

フックストレートフック、最後は突き抜けるようなアップー。
途切れかけた意識にだらりと体の力が抜けかけるも、

「……………ああああああ!!」

ぐちゃ、とその音と何より痛みで目を覚まされ、たまらずまたしても身は強張り硬直する。何事かと痛みに導かれるように視線を下げ、見れば。

突撃槍で貫かれた腹の中に、今度はなのはの拳が突き刺さっていた。

「なに寝ようとしてるの？ 駄目だよ、ちゃんとわかってもらわなきゃならないんだからさあ」

「な、にを……………」

腹に拳を突き込まれたまま今度は空いている逆の手で髪を掴まれ無理やり上げられた自分の顔は、目の前の高町なのはと至近距離。

「……………う、あ」

だから、感じてしまった。

否が応でも、その瞳の中に燃える炎の激しさを。

「あ? ……あ、……………あ、……………ああ」

止められない。まるで極寒に置かれたかのように、その灼熱を見せ付けられたクアット口の体はブルブルと激しく震え出した。

「あ、……………ま、まって、わかった、も、もうわかったから……………うううう!!」

「何がわかったって?」

クアット口の腹から勢いよく腕を引き抜いて、

「……………ねえ、貴方、普通の体じゃないんだね、半分くらい機械なのかな? ……ま、でも」

赤く染まった自らの拳を一瞥したのはは、すぐにこちらへ視線を戻して。

「でも、さ。大丈夫だよな? 伝わるよねえ? だって言葉が使えるもんね? ちゃあんと心があるんだよね? ……そうでなきやおかしいよねえ? もしも心がないんなら……………」

またしても、にいと笑って。

「——泣いたりなんか、しないよねえ?」

『Acceler Smash』

クアットロの顔面に、もう何度目かの衝撃。

「……あ」

滲んだ視界と、

「……あ、……ああああ………」

その中に何かが——はつきりとは確認できないがおそらくは涙が、きらりきらりと舞っているのが見えた事で自分が泣いているという現実を認識して。

「………」——いやああああああああああああああ!!」

ついにクアットロは絶叫を上げた。

「いやああ! いやああああああああああああああああああああ
ああああ!!」

怖い。

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い
怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い
怖い怖い怖い!

「いや! いやああああああああああああ!!」

「……うるっさいなあ」

「ああああああああああああああああああああああああああ
あッ!!」

この女が、目の前の女が怖い。

そして、この女にこの後間もなく間違いない。

「……まあいいけどね、もうすぐ貴方は静かになつてくれるんだから」
殺されるであろうという事が、怖かった。

「いや! いやあああ!! いやああああああああああああああ
あああ!!」

自分でも不思議に思うくらいに、生への執着。目の前に漂う濃厚な
死の香りに、狂ったようにクアットロは泣き叫ぶ。

「いや! いやあああああ! ああああああ! ああああああああ
あああ………っ!!」

「やつぱりちよつと黙つてくれる？　ちゃんと聞いてもらわなきゃいけないこと、あるからさ」

そう言つて泣き叫んでいたクアットロの口をぎりぎりど万力のように自らの右手で塞ぎ締め付けながら、そしてなのはは告げる。

「貴方のご主人様だかお父様だか知らないけど、ジエイル・スカリエッティ、そしてもちろん貴方もだけどき、本当にわかつてない。わかつてなさ過ぎる。……いや、ほんとに世の中多いんだよね、これをわかつてくれない方々が。もうびつくりするくらい。いい？

ちやあんと、よくよく聞いてね？　いい？」

あの人は、私のだ。

籠められた感情の密度がはつきり伝わる途方も無い解像度で聞かされたのは、そんな言葉だった。

「お兄さんを、高町恭也を私に出来ないかい？　……いやあ、ほんと、馬鹿言わないでよね。こんなに殴らなきゃいけないなっちゃうからさあ。いい？　あの人は、高町恭也は……」

ぱつ、となのははクアットロの顔から手を離して、

「おにいちゃんは……」

今度は後頭部に両手を添え、

「……——私のだッ!!」

ゴツと、回避しようもなく顔へ喰らつたのは膝だった。

もはや悲鳴すら上げる余力もなくなったクアットロの前、なのはは傍らに浮いた杖を掴み、その先端をこちらへ向け、そして魔力を奔らせ始める。

クアットロに向けた杖を掴む左手と反対、右手は人差し指と中指を立てた形で構えを作り、パリパリと雷撃のようあたりへ桜色の魔力を迸らせるなのはの瞳は完全に、確かな殺意で固まっていた。

遅まきながらに、クアットロは理解した。

ああ。

手を出してはいけないものに、自分達は手を出してしまったのだと。

ぶおんと、どこかからそんな音と共に四肢をだらりと弛緩させたま

ま投擲されてきたのは、チンクとセイン。

どう見ても意識の無い妹二人は瞬く間に、自分と同じように空中へ固定された。

「ああ、色々してあげたみたいだね」

やってきた、おそらく妹達を投げたのだろう金髪の女、フェイトはクアットロを見てそう言うとなのはの隣へと並ぶ。

「当たり前前の事を言っつて、当たり前前の事をしただけだよ、そっちもでしよ？」

「うん、まあね」

「で、……私はもういつでも撃てるよ、フェイトちゃん」

「うん、じゃあこっちもすぐに準備する」

そう言うつとフェイトはなのはと丁度対称の、右手に杖を持ちこちらへ向け、左手は人差し指と中指を立てた構えを作り。

バチリバチリバチリバチリと、二人は奔る魔力を見事に同調させ、恐ろしいほどの圧力まで高めていく。

「……あ、………は、は………」

もう、笑うしかない。

死ぬ。死んだ。これは。絶対に。

周りの戦闘機達は忌々しいことに夜天の騎士達が抑えきつていし、トーレも敗して退却したという。

助かる要素はもうどこにもなかった。

『Stand by ready, charge set』

「フィールド形成、発動準備完了」

なのはの平然とした声に、

「中距離殲滅コンビネーション、空間攻撃ブラストカラミティ」

フェイトの揺れぬ言葉が続いていき。

「………全力全開!!」

「………疾風迅雷!!」

響いていた甲高い音がやがて臨界に達したかのようにふっと、一瞬だけ止まって。

「ブラスト・シュートツ!!!」

「ブラスト・シュートツ!!!」

その掛け声と同時に、暴虐の閃光が轟音と共に広がった。

(逃げた、か……)

確認した事実を、なのはは頭の中でそう呟いた。

クアットロ、そしてその仲間らしき銀髪と青髪の女。三人は結局、ブラストカラミティに身を喰らい尽くされるその寸前にあの強制転移装置を自分達に発動させて去って行った。

予定通り、だ。

ミスではない、わざと逃がしたのだ。最後の最後、故意にバインドと強制転移装置の封印処理を緩めて相手の逃げる隙を作った。本当に小さなそれをちゃんと突いて意識の無い仲間も連れて逃げていったあの眼鏡の似合わない女の事はまあ、褒めてやってもいいのかもしれないなかった。

(これで……いいん……だよ、ね……)

褒めてやってもいいと思っっているのも本心だが、殺してやってもよかったと思っっているのも本心だ。

だが、そうするよりも逃がした方がこの後の事を考えればいいはずなのだ。

あそこまで恐怖を煽り、脅威を振りかざし、狂気を見せ付けければ、わかるだろう——高町恭也に手を出す事がどれだけ愚かな行いなのか。

最初の通信の様子を見る限りどうやらあのクアットロとか言う女は多少なり、ジエイル・スカリエツティに対し意見を言える立場らしいのだから、きつと彼女は進言するはずだ、決して軽々しく、あの男を狙ってはならないと。

それに、クアットロ達を殺してしまっただけは報復の意味もかねて奴らは再度兄を狙いに来かねない。

そんな風に考えれば、ああして逃がすのが正解、そのはずなのだ。もちろん最初のスターライトブラスターの乱打で仕留められたの

なら、その程度の相手だったのなら報復も高が知れているだろうからそれはそれで構わなかったし、何より殺さず捕らえてスカリエツティの居場所を吐かせて……なんて事が出来ればそれが文句なしの最善だったろう。しかし、あんな風に激しく状況の推移する戦闘の最中、そんな選択肢を採る余裕などなく、

(フェイトちゃんも限界で、……私も、もう)

フェイトとなのは、ブラストカラミティで三人は逃したものの多数の戦闘機を屠った二人はそれまでの無茶がたたって、もう一秒だって戦闘をまともに継続出来そうにはない、あのまま身柄の確保なんて、そんな余力はなかった。

と言うよりかは、

(……あー)

意識を保つ事すら、もはや限界だ。傍らのフェイトはもう目を閉じて、なのはも指一本まともに動かせない状態、二人は共に重力に引かれるがまま、真下のアースラ、恭也の眠る部屋へと落下していく。

周りの光景がどんどん淡く薄くなっていく。体がひどくだるく重い。レイジングハートも限界だろうし、

(ちゃんと着地、ってわけには行かなそうだなあ……)

その衝撃で完全に気絶するか、その前に自然に気絶するかは微妙なところだろう。

でも、よかった。

もう、よかった。

相手方の主力を主犯を追い払い、あれだけ敵機を潰して、そして時間稼いだ。

後は、仲間達が、特に今まで我慢し力を溜めていてくれていただろうあの子が、はやてが、なんとかかしてくれるはずだ。

やりきった。

やりきれた。

そのはずだ。

……本当に？

わからない。

(まもれた、か、なあ……)

途切れていく意識の中、なのはが思うのはもうただ一つ、それだけだった。

(わた、し、こん、どは………ちゃん、と………)

大切な人を。

愛しい人を。

あの、人を。

——護りたい、人を。

(まも、れ、た、かなあ………)

天井を抜け、アースラ室内へと落ちていく。

なのはの意識は99%がもう途切れ、残りの1%に覚悟していた落下の衝撃による痛みが——。

なぜだか、訪れなかった。

(……あ)

ふわり、と、

(あー、あ、はは……)

優しく、それでいて確かな。

圧倒的な安心感を持つ温もりに、自然と緩み切った笑みが零れてしまふそんな温もりに、包まれた気がして。

そして。

疲れ切ったなのはは。

まるで、五年前のあの頃、ごく普通に享受出来ていた、自分の全てを委ね切った無防備な、優しい愛しい心地いい——。

あの人の傍にいる何より幸せなあの時のような、そんな眠りに落ちて行った。

第16話 どう見ても、天使

「……どう見ても、天使、だよな」

状況は、まったくわからない。

わからないが、わからないなりに出した結論を恭也は誰にもなく一人、呟いた。

目を覚ましてみれば自分は透明なケースの中に居て。

その事に困惑している暇もなく、頭上から落下してくるのは二人の少女。

すわ何事かと驚きつつケースを蹴破り脱出し、部屋へ落ちてきた二人の身体を受け止め、その姿を思わずまじまじと眺めて、出した結論がさっきの独り言だ。

片方は栗色の髪を二つにまとめた愛らしい容姿を白い衣装に包んでおり、もう片方は黒を貴重とした装いではあるものの、優しげな柔らかい金髪に彩られた美貌は神聖ささえ感じさせ。

(死んだ後の世界で空から降りてきた存在……なの、だから)

天使、で、いいんだろう。

……いや、わかってる。恭也は頭を振った。自分は今、大分、混乱している。大混乱していると言ってもいい。

(………親しい、ものに、似た方が迎えに来られるとか、そういうシステムでもあるのだろうか)

なんだかどうも思考のピントがズレている気がしてならないが、なんとか捻り出せたのはそんな予測だけだった。

「……なの、………っ」

言いかけて、恭也は首を振った。そんなはずがないからだ。

いくら目の前の少女達が自分のよく知る二人の女の子に似ていようが、しかし彼女達であるはずは、絶対じゃない。

少女達を見たところ十四、五歳……レンや晶達と同年代くらいに見えるが、しかしあの二人はそんな歳ではないし、そもそも――。

もう、会えることなどないのだから。

なぜなら自分は、命を落とし彼女達の元から決定的に去ったはずだ

から、だ。

「……………っ、……………」

後悔は、ない。

それは言い切れる。あの時自分がしたこと、微塵も後悔はない。

後悔は、ないのだ。

だが。

だけでも。

自分が生きた、居たあの場所を、愛する暖かいあの人達を、護った事に後悔はなく護れた事に誇りはあつても、……そこから去つてしまった事に寂しさが無いだなんて強がり、決して口には出来なかつた。

「……………っ！」

少女達を腕に抱え、呆然と立ちすくむ恭也の意識を一気に戦闘用のものへと切り替えさせたのは近づいてくる複数の気配だった。

上空を見やれば、何やら機械仕掛けらしい一団が空いた天井目掛け殺到して来ている。

どうする、高速で思考を走らせ状況を俯瞰、判断を下そうとした刹那、しかし事態は好転した。一団が天井の穴に入り込もうとした寸前、展開された薄い青の膜が彼らの進入を拒んだのだ。どうやら、バリアのようなものが張られたらしい。

「……………む」

だが、安心し切るわけにはいかなかった。残念ながらバリアが展開されたタイミングはほんの少しだけ遅く、一団のほとんどは弾けたものの、

「……………妙な形だな、……………ロボット、か？」

カプセルのような形のもの、円形で巨大なものがそれぞれ一体、計二体の機械達が部屋へと這入ってきたからだ。

キュイイインと、カプセル型は中央に一つの、円形大型は三つのオレンジ色の目玉のようなものでこちらを見据え。

「……………」

ぎゅばつと、それぞれ平べったい腕のようなものやコードのような

ものを恭也へ勢いよく放ってきた。

状況は、わからない。極端な事を言えば、この目の前のロボットは自分を保護しようとしに来たのかもしれない。

しかし。

彼らはコードを伸ばすのと同時に、恭也には向けなかったものの、恭也がそれぞれ両腕に抱いた少女達へは目玉から閃光を放った。

「悪いが」

トン、と、恭也が足音を響かせたのはカプセル型のすぐ隣。神速を使うまでもなく、コードと閃光の射線から身をそらし一息で距離を詰めた、

「鉄くずになつてもらうぞ」

言つて、右足を軸に力強く身を回転、その勢いを殺さず薙ぐように放った蹴りはカプセル型の横腹に突き刺さりその体を壁際まで一気に吹き飛ばし。

(……なるほど、表面は多少硬いが………それだけだな)

一瞬の間の後、カプセル型は蹴りに籠められた徹により内部へ通つた衝撃に耐え切れなかったのだろう、あえなく爆散した。

残るは巨大な一体。丸い身はこちらへ向き直りそのオレンジの目で恭也を、

「……………ふっー」

捉える事は叶わなかった。またしても一息で間合いを詰めた恭也は、今度は真正面、移動の勢いを殺さずに右足で踏み込み、放った突き出すような突き刺すような強烈な蹴りは円形大型の中心部を捉え。

「とっ……………」

バックステップ、機械仕掛けの巨体と距離を取る。

その判断の正しさを示すように、先ほどまで居た位置を巻き込む程度の規模で円形大型は爆散した。

「……………」

恭也は両腕に抱えたままの二人を見やり、その身に先の攻防による負傷がないか確認する。

(大丈夫、だな)

服の破損やある程度の怪我はあるがそれは元からのものだ、今の戦闘では傷一つ付いていない。

その事実には深い安堵が訪れた。

もしかしたら、先のロボット達は自分を迎えに来てくれた味方かもしれない。

だが、それでも。

なぜだかはわからないが、……その姿によくよく見知った女の子達の面影があるからというだけの理由なのかもしれないが。

この娘達に矛を向けるといふのならそれだけで十分に、十二分に、あのロボット達は自分にとっては滅すべき敵に値した。

やはり理由はわからないが、この娘達を護らねばならないと——護りたいと、恭也は極々自然に、疑問を挟む余地もなく、そう思ったのだ。

(……とは言えまあ、先のはかなりの雑魚兵だったようだがな)

戦闘というよりかは単純作業レベルだ。カプセル型と同様、円形大型も表面は硬かったものの徹を使えば何という事もなかった、所詮はおもちや同然、恭也はそんな評価を下し。

(……ああ、そうか)

神速も使わなかったがそう言えば魔法もそうだった、別にバリアジャケットや眩体無しの生身で相手をしてやる事もなかったなど、そんな事に思い至って、気づいたのは。

どうして自分が魔法を使わなかったのか、その理由。

「……………魅月」

それは左小指のその軽さ、否、……心細さだった。

一ヶ月と少し程度の付き合いだったがそれでも間違はなく、魔法を使う戦場において恭也にとって彼女の存在は途方もなく、言うまでもなく、心の底から頼れるものだった。

それがなかったからきつと、無意識に自分は魔法を使わなかったのだろう。なんとなく、この場合は魔法が使いつらい空気のようなものに包まれている事も感じ取ってはいたものの、魔法を使わなかったその主要因はそんな事ではない。

魔法を使って戦うという事態において当たり前のようにつもいながらも傍にいてくれたあの、控えめだが揺ぎ無く頼りになる相棒がいなかったから、だから生身で戦ったのだ。魔法を使って戦うならば、彼女が傍に居てくれないと……そんな風に、きつともう、自分は魅月に依存し切っていたのだろう。

「……………」

今更気づいたその事実自体は、いい。その通りだと思う、なんの抵抗もなく受け入れられる自分の真実、本音だと思う。

だけど。

受け入れ難いのは。

もう、彼女には会える事はないという事、そして。

「……………」

恭也は唇をかみ締め、眉間に皺を寄せた。

魅月との別れを痛烈に意識したことで、

(……………みんな)

心にまたしても浮かび上がってきたのは、押さえつけていた郷愁の念。

なのは、美由希、母さん、レン、晶……そんな高町家の面々に、ファイアセや忍、ノエルに那美や久遠、フィリス先生に赤星、他にも大勢の見知った顔達が浮かぶ。海鳴の、あの街の人々が浮かぶ。

それに、——フェイトやクロノ、エイミイ、ユーノにアルフ、リンデイ……アースラクルーの面々に、はやて、シグナム、ヴィータ、ザフィーラ、シャマル、そしてリインフォース、八神家。

「……………くっ……………」

もう会えることはない、愛しいあの人達への想いが、堰を切ったように胸の中で暴れ出す。恭也は思わず情けなく、嘆きの声を漏らした。

自分の選択の結果とは言え。

苦しくないだなんて、言えなくて——。

(……………っ！)

視界さえ滲み出したとき、

「……ん、んん………」

「あ……う………」

聞こえたのは自分の嘆きではなく、腕に抱えた少女達の苦しげな呻き声だった。

(……そう、だ)

深く息を吐き、恭也は意識を切り替える。

(こんなところで、立ち止まっている場合ではない)

それは逃避なのかもしれない。失ったものから目を逸らしたいがための行動なのかも知れない、……それでも。

今は、未だ目を覚ましそうにない傷ついたこの娘達のために、何か出来る事を最大限、やるべきだと思った。

(……あの辺り、だな)

恭也は周囲の気配から、最も人が集まっているような場所を探り当てて。

そこへ向かうため、細心の注意を払いつつ少女二人を抱えながらドアへとその足を向けた。

「状況はどうなってる!？」

「アイツらは無事か!? 無事だよな!？」

管制室、紫と紅の転送陣を足元に飛び込むような勢いで入ってくるなり必死の形相で問うたのは、シグナムとヴィータ。

「AMF濃度、低下してきているわ!」

「主の準備も終わっている、いけるぞ……!」

一拍遅れて、今度は翠と蒼の転送陣の上、シャマルとザフィーラが現れそう報告を上げた。

「なのはとフェイトの殲滅魔法で粗方の敵機は片付いた。艦の表面にはついさつき防護のバリアを復帰させた」

クロノは彼らに艦長として現状を簡潔に告げていく。

「なのはとフェイト、二人のバイタル反応はある。今さつき恭也さん

の部屋へ落下して……」

そこまで言つて、鳴つたのはアラーム。それは艦内に敵勢力の侵入を許した証左だ。

「エイミー！ どこだ!?!」

「あ、……あ、きよ、恭也さんの、部屋、に……」

「——つなのは達の意識レベルは!?!」

ヴィータの噛み付くような問いに、真つ青な顔でエイミーは答えた。

「……え、えと………つ、気絶、状態………」

「——つ!!」

敵機が恭也の眠る部屋へ侵入、そこへ落ちたなのは達も意識がない状態。

判明したそんな状況に対し、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ——守護騎士達の反応は劇的にして迅速だった。

「くっ!」「ふぎ………つ」「そんなのっ」「………つ」

各々甲乙付けがたい反応速度でモニターからドアの方へと向き直り、一気に駆け出し——。

「……あれ」

かけたところで、響いたのはエイミーの呆気に取られたような声だった。そこまでの音量を伴っていなかったそれが場に響いたという事実が示すのは、

「……おい、アラームは………? なんで止まったんだ?」

ヴィータがまたモニター方面へ振り向き直り、怪訝な顔で口にした通り、けたたましく鳴っていた警報音がいつの間にかピタリと止まっていたという事だ。

「侵入した敵勢力が沈黙すれば、鎮圧されれば、止まるようになってるんだ、ど……」

答えるエイミーの顔も困惑気だ。薄まってきたとは言えAMFの所為で現在艦はお世辞にもまともには動いていない。自動迎撃など言わずもがな、どころか各種状態把握機能も例外ではなく、この管制室からでは恭也の部屋の詳細はほとんど掴めないといい。侵

入警報アラームが鳴った事だけで十分御の字だと言えるくらいの有様だ。

であるのに、なぜその警報は止まったのか。

「……とにかく、何があったか知らんがそれこそ何が起きてるかわからんのだ！ ヴィータ、状況確認に行くぞ！」

「おう！」

「……頼む！」

外にはリインフォースも、準備が整ったというはやとリンツも居る。何か起きたときのためシヤマルとザフィーラにはここで待機しておいてもらうとして、シグナムとヴィータにはとにかく一刻も早く恭也の眠る部屋へと向かってもらうべきだろう。

そう判断し、短い言葉で託したクロノに二人が頷いた——その時だった。

シュツと、ドアの開く音に次いで。

「すみません！」

聞こえてきたのは誠実そうで、なおかつどこかに魅惑的な甘さが香り、

「……怪しいものでないという証明は出来ませんが、敵意はありません！」

そして何より揺るがぬ芯の通った、そんな声。

「怪我人が二人居るんです！ どなたか、治療の出来る方はいらっしやいませんか！」

よく響く声で問うた彼は、一步、また一步と部屋へ入って来て。

「……………」

クロノは、目を伏せた。振り返り、彼の姿をこの眼に写す資格が、果たして自分にあるのかどうか、わからなくて。

守護騎士達も、それぞれいかなる理由かは細かく推し量れないがとにかく、いきなりの事態にドアの方へとは身体を向けないまま、固まっ

「……………」

「……………エイミィ」

一瞬流れた沈黙の後、クロノの袖を掴んだのは、——その行為と表情で背中を押したのは、エイミイだった。

(……そうだ)

クロノは彼女へ視線を合わせ、頷いた。過去にあんなことをしてしまったとは言え。現状、こんな事になってしまっているとは言え。

それでも、いやだからこそ、現アースラ艦長、クロノ・ハラオウンは今ここで、振り向く義務がある。

必死に、俯瞰してみたらきつと自分でも苦笑いしてしまうだろうほど必死に、なんとかきびきびした、毅然とした態度を取り繕った動作でもって振り返りながら。

(……ああ)

義務、なんて表現をしながら結局、自分がこの瞬間を死ぬほど待ちわびていた事への自覚くらいは、あった。

だって、コツコツと音を鳴らしながら、二人の少女を大切そうに腕に抱えた彼の下へと歩み寄る自分の心に湧き上がるのは、途方も無い喜びだったから。

(……ああ、………ああ)

この人に、再び会え、言葉を交わせるその事が、嬉しくてたまらなかった。

クロノは願う。自分の喉に、声に請う——どうか、頼むから情けなく震えるな。彼は自分に、”弟が出来たみたいで、楽しかった”と、そう言ってくれたのだ。それならば”憧れの兄”に格好悪いところなんて、絶対に見せるわけにはいかない。

あの時から五年経ち、歳の差一つとなった自分の、あの日護つてもらったから生きている自分の、凜とした姿を見せなくてはならない。

タン、と、足を踏み鳴らし、彼の前で立ち止まり整えた姿勢は最敬礼。

「こんな事を言う資格などないことは百も承知ですが、それでも言わせて下さい」

こうしてまたお会い出来る事を、心よりお待ちしております。

なんとか揺れずに済んだ声で、クロノはそう続け。

「……すみません、あの、どこかで……?」

そして、困惑気な彼に、

「現アースラ艦長、クロノ・ハラオウンです—— 恭也さん」

万感の想い籠る声で、そう告げた。

息を呑む音と、見開かれた眼。返ってきたそんな反応から、彼の、恭也の驚きが伺える。

「……い、や……しかし、クロノ、は……そんな、こんな、歳で、は……」

「……もしかしてだけだよ、お前、なんか機械みてーのぶっ壊してこなかったか?」

動揺を見せる彼に問うたのは、振り返り顔を見せたヴィータ。

「……っヴィータ!? な、そんな、いや、……なにが……」

「どうなんだよ?」

「……まあ、二体ほど、それらしきものを潰して来たが……」

「一応、AMFつつー魔法出しづれえもんが展開されてんだけどよ」

「ん、いや、魔法は使わなかった。生身で十分だろう、あの程度なら……くっはは」

「ヴィータ……?」

「ははははははは! はははははははは!!」

しれっとした彼の答えに、ヴィータが返したのはその小さな身体を折り曲げての大爆笑だった。

「やつぱおめえはおめえだな! はは! 生身で十分で! はははははは!!」

「お、おいヴィータ?」

「はは! はははははは! ははは……! は、はは……ほんと、腹、痛えよ、は、はは……涙、まで、出てきちゃったじゃねえか」

「ヴィータ……」

俯き、眦を拭う彼女の声に乗った湿りに恭也は彼らしい気遣わしげな声と顔を見せ。

「まあ、お前はそれくらいでないと困る」

振り向きながら言ったのは、シグナム。

「そうでなくては、魔法無しのお前にあれだけ痛い目に遭わされた我らの立場がないからな」

彼女らしいニヒルな笑みを浮かべながらも、その手が細かく震えている事をクロノの眼は見逃さなかった……それはきつと、自分も同じだろうから。

「医務官の立場から言わせて頂けば、病み上がりもいいところなお身体であんまり無茶はしてほしくないんですけど」

「……お前らしいといえば、それまでではあるな」

「シグナム、シャルムさん、ザファイラ……」

振り向き正面から顔を姿を見せた彼らは、その特殊性ゆえに五年前からまったくといいほど背も顔も変わっていない。

だからこそ、恭也にとつてはクロノよりかは、彼らが彼らであると認識しやすくはあるのだろう。

「……………どういう、こと、だ……………。……………お前達も、死んでしまったの、か？」

動揺の色濃い声で、彼が発したのはそんな言葉。

「俺は、……結局、護れなかったの、か……………？ あ、……いや、しかしおかしい……………だったらそれでも、先に死んだ俺の方が少しでも早く目覚めるはずでは……………それにクロノはなぜそんな……………」

「簡潔に、ご説明いたします」

無理も無いことだが、どうやら自分が死んだものと思っっているらしい彼に、クロノは再び言葉を向ける。

「ここは、死後の世界ではありません。……現在地点は第十六管理世界、管理局次元航行部隊所属大型艦船アースラ管制室であり、現在時刻はおおよそ……………あの時より、五年後です」

「……………は？」

「おめえは死ななかつたんだよ。死にそうにはなつたが、なんとか冷凍睡眠使つてじわじわ治療したんだ。だからお前の身体は歳くつちやいねえけど、周りはその分時間が、具体的に言やあ五年間が経つたつっーわけだ」

「……冷凍、睡眠……………五年、間？」

わけがわからないと、要領を得ないような表情で彼が零した時だった。

『クロノ君っ！ そっちの準備はええか!?』

響いたのは勇ましい意気満ち充ちる声。

『こっちはもう万端やで!! いつでもいける!!』

仲間達が奮戦する様をおそらくはそれこそ血がにじむくらいに歯を食いしばって観るに留め、準備を整えていた最後の大詰め、トドメの滅撃を任された夜天の王にして——十四歳になった、あの日彼が護った女の子の内の一人。

はやての姿が、モニターに映った。

『リンツと一緒に詠唱も構築もほぼ完了や、あとは始動キーのみ！ そっちはバリア復旧済みやろ?! あんのアホ共まとめてぶつとばすとつときっ、これでようやつと喰らわした……………:る……………』

叩きつけるような勢いの声が急激に減速し、みるみるうちにその顔は戦場のそれからまるで寝起きの、ぽかんとしたものとシフトしていき。

『あ……………う……………あ……………』

そして状況を、

『……………ま……………さ……………か……………ほんま……………に?』

こちら、管制室内に彼がいる光景を、それが指し示すシンプルな事実を認識して、今度は驚きに表情を染め上げていき。

「っ、な、あ……………」

恭也も狼狽した様子で彼女を見やり、眼を数度瞬かせ。

そして一瞬の沈黙の後、

『……………——恭也さっ』

「レン!!」

『はやてやあああああああああああああああああああああああああああああああっ!!』

交わされたのは、思わずその場にいた者達皆どんな顔をしたらいい

かわからない……強いて言うなら苦笑するしかない、そんなやり取りだった。

『……で!? この状況で!? こんなタイミングで!? こういうシーンで!? そういう事言いますう!?』

「す、すまん……………いや、す、すまない」

絶叫の勢いそのままに詰問するはやては流石に涙目だったが、しかしばつの悪そうな顔の恭也の方もどうやら先の発言は別にボケたわけでもからかったわけでもない、純粋なものようだった。

(まあ、無理もない、か……)

確かにクロノの眼から見ても今現在のはやての姿は、五年前のレンとまさに瓜二つ。違うのは髪色と声くらいのものだ。混乱中の恭也が、目覚めて見れば五年経っていたなどという現実を聞いたばかりでおそらくきちんとそれを呑み込めてはいないであろう彼がそんな風に間違っても何もおかしくはなかった。

『わたしは！ はやてです！ はやてですっ！ 八神、はやてです……………っ！』

「わ、わかったわかった、すまない、そうだ、そうか、……………は、はやてなんだな、わかった、すまない……………」

「ま、まあまあはやてちゃん、ほら、今映像も音声も大分荒いですし、恭也さんもこの部屋に来て本当に簡単な説明だけ受けたばかりで混乱されていますから……………っ！」

執り成すようにシヤマルがそんな風に言った時だ、大きめの衝撃が艦を襲った。

「ミサイル数発着弾！ ……バリアの損傷は軽微！ 順調に展開維持できてるわー！」

エイミイの状況報告の音が響いて、場の空気がまた引き締まり。

『……………恭也さん』

しつかりと、はやてが恭也へとその顔を改めて向ける。表情にも瞳にも、もう揺れはなかった。

『……………聞いてもらいたい事も聞いてもらわなあかん事も、たくさ

んあります。……………せやけど、ちょう、待ってて下さい』

彼女らしい柔らかな、聞くものに安らぎを与えるイントネーションで紡がれていく言葉に、その一言一言に途方も無い密度の感情が籠められている事は傍で聴いていてもよくわかった。

彼女は決意の浮かぶ微笑を湛えながら言う。

『今この場で、わたしがやらなあかんことがあるので、それをやってきます。だから、ちょう、待ってて下さい』

「……………それは、あの機械達の相手をするということか？ 戦いだと言うのなら俺も」

『駄目です』

言いかけた恭也の言葉を有無を言わさぬ口調ではやては遮った。

『……………駄目ですよ。お願いです、そこで待ってて下さい。もし、……………もし、せつかくこうして起きてくれた恭也さんに何かあったら、高町家の皆さんに顔向けできませんし、ハラオウン家の皆さんも絶望に染まってしまいますし、八神家だって、……………八神家だって』

その続きを、はやては口にしなかった。首を振って、おそらくは浮かびかけたのだろう涙をその瞳から引かせて。

『だからお願いです、恭也さん。そこで待っていて下さい。それで……………出来ればええんですけど、もしよかったらでええんですけど』
見ていて下さい。

しっかりと、恭也を見つめるはやての口から紡がれたのはそんな願い。

『あの日、貴方が護ってくれたから生きてる私が、今出来るようになって精一杯をお見せしますから。だから、それを見ていてくれると嬉しいです』

「…………………………わかった」

戦地にあり、少女が戦うというのに自分が最前線に赴かないことに抵抗があるのか、一瞬だけ眼を瞑り逡巡したがしかし結局、恭也は頷いた。はやての声に言葉に表情に雰囲気、退かないものを感じとったのだろうか。

『おおきにです』

それを確認し、ふわりと微笑んで、はやてはモニターから姿を消した。

そしてなんとなく静寂の下りた管制室で、

「……………今のが、はやて、だと言うのなら」

「ああ、そうだよ」

ぽつりと零した恭也の言葉へ答えたのはヴィータ。

「最初に見てわかんなかったのか？ ……や、まあ、結構そいつらでかくなつたしな、無理もねえか。状況把握してねえならなおさらだろーしよ」

「……………天使だと、思ったんだ」

「は？」

いきなりの言葉に聞き返したヴィータに、どこか呆然とした口調で恭也は続ける。

「目を覚ましたその時に、空から降ってきたから、だから、天使だと、そう思ったんだ。その後あのロボットも這入って来て、それで、……………なぜだか、護らなければならぬと思った」

「……………寝起きでも、やっぱりお前はお前だな。大事なもんを護ることに関しちや揺らがねえ」

「……………」

無言の恭也に、そしてヴィータははつきりと、

「……………天使と間違えた、なんて、そいつらが聞いたら喜ぶのかどうか、それはわかんねえけどよお」

決定的に言葉にして、

「そいつらは、今お前が腕に抱いてる二人はよ……………」
ありのままに伝える。

「十四歳になった、——なのはとフェイトだよ」

これは五年越しの再会なのだと、それが今為されているのだと、そんな事実を。

吹き抜けた風を味わうように眼を閉じたのはほんの一瞬。

アースラ、その上部に浮遊しながら、はやてはしかと開いたその眼で上空を見つめる。そこには粗方片付いていた敵影がまたその姿を増やしていく様があった。

転送用の機体があるのだろう、おそらくは一番奥に配置されているのであろうそれらを潰さなければ、いくら他の機体を墜としても墜としても敵は次から次へと湧いて出てくる。

つまり、一気に根こそぎ殲滅、根絶やしにしなければこの戦況を打破する事はできないという事で。

「……さあ、いくで」

そのための準備は、仲間達が空を翔け、命を賭けて整えてくれた。ならば、応えよう。

だって、応えたい。

この空の下、仲間達は皆同じ思いを抱いて飛んだ。あの人を護る、その想いだけを抱いて飛んで。

そして、それはいつのまにか、待ち焦がれた瞬間へと続く旅路になつていたらしいと言うのなら。

「――」

もう、やるしかない。親友の言葉を借りて言うなら、全力全開で。

『はやてちゃんっ！ 来るです！』

ユニゾンはもちろん既に完了してあるため、内側から響いたリンツの声にはやては頷き、返す。

「ああ、……準備はええか？ リンツ」

『はいっ！』

空の機体達に標的と定められたのか、大勢の飛行体が向かってくる音を気配を肌でびりびりと感じる。感じるが、しかしはやてに恐れはない。

「……邪魔つくさいなあ、ほんま」

あるのはただ、実に正直なそんな感想。

だって、――五年待ったのだ。

(「……ちははよう、……会いに行きたいんや」
それを遮るといふのなら。)

消し飛ばす、跡形も無く。

ふつと息を吐き、そしてはやては、夜天の王は書を広げ、金色に輝く杖を掲げて。

「カートリッジロード!!」

『カートリッジロードッ!』

杖——シユベルトクロイツの十字部分がはやてとリンツの声の後上下に大きく稼動、バゴンバゴンと重厚な音を立て一度に二発ずつ、それを計三回繰り返し合計六発の空薬莖を吐き出した。

「彼方より来たれ宿木の枝! 銀月の槍となりて、撃ち貫けえ!!」

裂帛の詠唱と共に現れた、巨大な黒い渦に抱かれた純白の魔方阵はしかし、かつての闇の書の闇との戦いの時のように一つ、ではない。

はやての上空、数十枚という規模で多重展開されていく。

「石化の槍……………」

やがて一つ一つに光が灯り、魔力が奔っていき。

「ミストルティン・マルチレイド!!」

『ミストルティン・マルチレイド!!』

ぴたりと揃ったはやてとリンツ二人の声、それと同時に一気に、全ての陣から美しくそして無慈悲な槍撃が放たれた。空を埋める機体の数に見劣りしない数の槍達は貫いた敵を容赦なく石化させ、その動きを止めていく。

ミストルティン・マルチレイド——多重起動を行う事で単一対象向けだった強力な石化魔法ミストルティンを集団相手に満遍なく叩き込む、あの五年前からのはやての成長が眼に見えて分かると言ってもいい絶技だ。

「っカートリッジロード!!」

『カートリッジロードッ!』

休む間もなく、はやては次なる一手の準備に入る。シユベルトクロイツからまたしても大きな動作と音を伴い吐き出された六発のカートリッジが勢いよく空を舞った。

元々総魔力量に非常に優れ、夜天の書も有するはやてのアームドデバイス、シユベルトクロイツに本来ならばカートリッジシステムなど

搭載する必要は無い。

あるとすれば、膨大な魔力を保持しつつも、それでも外部からの急激な魔力供給が必要なほどに大規模な魔法の高速展開時くらいであり。

ゆえにはやてが今行っているのは、まさにそんな行為。

「来よ！ 白銀の風!!」

声と共に現れたのは、圧倒的な数で空を黒く染め上げる敵影とちようど対照的な、夥しい量の白く輝く魔方陣の群れ。

「天よりそそぐ矢羽となれ!!」

はやての身から水平方向へ広く展開されたそれらには、一人の魔導師が設置したにしては間違いなく常識外ともいえる数にも関わらず一つ残らず力強い魔力が奔っている。

すうと息を吸い、はやては吼えた。

「フレースヴェルグ・ジエノサイドシフト!!」

『フレースヴェルグ・ジエノサイドシフト!!』

動きの止まった敵影達を、まるで睨み付けるかのように光を灯した魔法陣達からそれぞれ凄まじい勢いで放たれたのは、白きスフィア。

空を駆けた純白の球体群はやがて、固まった敵影達の下へ辿り着くや否や眩い光を放って炸裂、周囲の物体を飲み込むように消し飛ばしていく。

フレースヴェルグ・ジエノサイドシフト——超高威力炸裂弾の一斉放射という荒業によって敵軍をまとめて消し去る、広域殲滅型たるはやての真骨頂のような魔法だ。

その戦術的価値は計り知れず、

「……………うぐ、はっ……………」

言うまでもなく術者への負担も並みではない。カートリッジを大量に使用してのミストルティン・マルチレイドから連続発動というのだからある意味当然と言える。

全身をびりびりとしびれるような感覚が襲い、手足の先には焼きごてを押し付けられたかのような熱が張り付く。

過負荷時の典型的な症例だ。

「……………っ！」

それでも、決して膝を折ることなくはやては空を睨んだ。そこには滅し切れなかった大型の輸送艦らしきものと、その周囲に設置されたこれもまた大型の真空管のような見た目の装置——おそらくは、AMF発生器。

まわりの雑魚どもは消し飛ばした。しかし残るあいつらを殲滅しない限り、戦況に終止符は打てない。

辺りに響く、ブオオオンと低い音。最後の抵抗だろうか、AMFがその密度を一気に濃くした。規格外の魔法を二連発、無茶をして放つたはやての身にさらなる負荷を掛ける。

「リンツ、……………——いくでえ!!」

『はい!!』

しかしそれでも、だけどそれでも、はやてが口にしたのは嘆きでもなく弱音でもなく、その身を融かし合う相方への問いですらない。

嫌だなんて言うはずがなく、痛いなんて零すわけもなく、いけるかなんて問う事はない。

やり切る意思を振り絞り、そしてはやてはその手の杖を振りかざす。敵影が減った事でようやくやく見えてきた青空から差し込んだ陽光に反射し、杖はその黄金の輝きを誇るように煌かせた。

「カートリッジ、ロードツ!!」

『カートリッジ、ロードツ!!』

重厚なコツキングは計五回。シユベルトクロイツが吐き出したのは、一度に二発、すなわち全十発のカートリッジ。その大きな動作と何より急激な魔力供給にはやての身は軋みをあげ、御し切れなかった魔力の奔流が騎士甲冑のそこかしこを吹き飛ばしていく。

しかし、はやての心は決して折れない。

夜天の王がこれしきの事で音をあげるものか——そして何より。

あの人に護られた女が。

あの人を想う女が。

こんな程度でへたばるものか。

(くたばるのは、お前らや!)

「響けえ!!」

声とともに広がったのは、地に突き刺さるように墜ち横たわっているアースラをその上部に飛ぶはやてを含めて半円状に囲む、薄い膜。一見するとよくあるラウンドシールドのようだが、しかしその実はこれは防護障壁の類ではない。

この膜は、それ自体が魔法陣であり、そして、言うなれば境界線だ。
「終焉の笛!!」

この膜より外はこれより、『何もなくなる』という、そんな宣言だ。素材だ素体だ作品だ兵器だと、あの人をそんな風に見た痴れ物の顔を脳裏に浮かべて。

(消え失せろ、ドアホ共ツ!!)

心の中で毒づき、そして。

「——ラグナロク・アラウンドバーストツ!!」

『——ラグナロク・アラウンドバーストツ!!』

広がった怒りを抱く暴虐の衝撃は、周囲を純白に染め上げた。

ラグナロク・アラウンドバースト——砲撃形態であつたラグナロクを周囲殲滅型へと変化させその威力自体も跳ね上げた、はやてが撃てる最上最強最大の魔法。

憎き敵に、悪しき者に、愚かな欲によつて引き起こされた馬鹿げた戦いに、容赦なく終わりを告げる王の一撃。自身を含めた球状の魔法陣より外側へと放たれる極大威力の滅撃。

それが去った後、そこにあつたのは綺麗な青空。

夜天の王が拓いた昼の光の満ちる空。

取り戻した、敵の影形一つない美しいそれに、

『ユニゾン・アウト』

「……リンツ」

「さ、はやく行くですよ、はやてちゃん」

見とれる余裕なんて、暇なんてはやてにはないことを、流石は相方融合騎、リンツは見抜いていたらしい。ユニゾンを解いた彼女は姉譲りの美しい顔に、背中を押す優しい風のような笑顔を乗せる。

「わたしもわたしで行かなきゃいけないところに行きますから、はや

てちゃんもそうするべきですっ！」

「……そかあ、ありがとな、リンツ」

普段は甘えん坊だがここぞと言う所で気の利く八神家末妹に礼を言っ
て。

「……………っ！」

はやては、アースラへと翔け出した。

あの人の下へと駆け出した。

高鳴る心臓は、心は、これでもかと言うくらいに早鐘を打つ。

速く、疾くとはやてを急かす。

(恭也、さん……！)

だからはやては、愛しいその人の名を、顔を、声を、姿を、全てを、
思い浮かべながら。

己が名の通り、疾風となって駆けていく。

「……………あ」

ドアの開閉音の後、小さく声をあげこちらを見やり、

「……………あ、……………ああ」

タン、タタンとふらついた少し危なっかしい足取りで部屋に入り進
んで来る彼女は、

「……………はやて」

しかししっかりと、その両の足で歩いていた。

ところどころが弾けとんだ騎士甲冑を纏ってはいるがそれ以外に
魔法を使っている様子はなく。

少なくとも恭也の眼には、彼女は紛れもなく自分の足で歩いている
ように見えた。

八神はやて。

図書館で出会い、数奇な縁の下、恭也が護った九歳の女の子。

電動の車椅子に乗って、穏やかな京言葉を繰って、家族を絆を強く
望んだ、しつかり者で、我慢強くて、それでもやっぱり寂しがり屋な、

そんな小さな女の子。

その子は今、幼さめとは言えど恭也の記憶よりも大人びた容姿と
なっている。

「……恭也、さん」

恭也の名を呼んだ。

涙交じりの湿った声は、それでもやはり恭也の記憶の中のはやての
ものと同じだった。

「……………、そ、の……………ちよお、あの……………」

ぎゅつと彼女は目を瞑り、一秒二秒と経ってから。

「……………」

深く、息を吐いて。

「お久しぶり、です。お久しぶり、なんです。……………八神はやてです」

「……………ああ」

しっかりと恭也に瞳を向けてそう言った。

「……………あの、どこまで、聞いていますか？」

「二通り、おおよその事情と現状は聞いた」

グレアムの提案による冷凍睡眠を使った治療の事。始めた時点で
は何年かかるかわからなかった事。そしてその治療自体は一年前に
無事完全に終了し、しかし自分はいさつきまでなぜか目覚めなかつ
た事。今はその原因を調べるために転院している真つ最中だった事。
そこに広域指名手配されている犯罪者が自分を兵器の素材として狙
い、襲ってきた事。なのはやフェイト、守護騎士の皆やアースラク
ルー、もちろんはやても、自分を護るために戦ってくれた事。

そしてたつた今、はやてが残る敵軍をその圧倒的な技でもって跡形
もなく吹き飛ばし、その戦いが終わったのだという事。

はやてが戦場で役目を終えここに来るまでの間に、おそらくだいぶ
噛み砕かれているのであろうが『あの時』から今現在この時までのそ
んな諸々はクロノや守護騎士の皆が話してくれた。

まだだだいぶ頭が付いてこないというか、心が追いつかないとい
うか、そんな状態ではあるのだが。

(実感が、ようやく沸いてきたな)

目の前の、自らの両の足で立ち歩み語るはやての姿に、守護騎士達のようにまったく変わらないわけではなく、クロノのように一気に成長を遂げたわけではなく、少女から女性へと変わる途中、殻を脱ぎ去るその最中のような姿に、五年間という年月が過ぎ去ったらしいという事が急激に恭也の中で現実として認知され始めた。

ふうと一つ、恭也は息を吐いた。

「……すまないな、戦いの火種になってしまった。……悪い、まさか」「なんでっ！」

こんな事になるとは思い至らなくて、そう続けようとした恭也の言葉をはやてが鋭く遮った。

「なんで恭也さんが謝るんですか……？ なんにも、……恭也さんはなんにも悪ないです！ 悪いのはあのアホ共と……——私です」

「……はやて」

「……なんて謝ったらええのかわかりませんし、償えるものとも思っ
てません。でも、でも、それでも聞いてもらわな、言わせてもらわな、
わかってもらわないけないんです——私は、私が、恭也さんの五年間
を奪ってしまった事を」

「……………」

ああやはり、と、恭也の胸に奔ったのは痛み。

自分のあの時の行いは、あの場においては最善に一番近いと思っ
たし、今でもそう思う。もう一度同じ事が起こったら、もし今度は今回
のように冷凍睡眠で助からないとしても恭也はまた同じ事をするだ
ろう。

だが、そんな事を考える余裕も憂う猶予もなかったが、少なからず
あの選択には間違いが、害が含まれていたのだ。

最善には限りなく近かったにしても、完璧とはほど遠かったのだ。

そんなことを、強く強く実感する。

「恭也さんの身体は歳を取ってません、二十歳のままです。でも、で
も、恭也さんは、恭也さんが過ぎすはずだったあの日から今日までの
五年間を失ってしまった事は確かだ、それは、それはどうしたって私
のせいなんです」

語る彼女の表情に、実感させられて。

「どころか、冷凍睡眠で助かったから今こうしておるけど、あれがなかったら恭也さんはっ、私が、私のせいで……っ」

「……はやて」

「わた……っ」

「はやて」

なのはとフェイトの二人は治療のためシャルルへ預けている。空いている手で、恭也ははやての髪に優しく触れた。

影が落ちて、傷が浮かんだその心に、どうか痕だけは残ってくれるなど願いながら。

「俺があの時あの場で行った事は、全て俺の意思と責任によって成されたものだ。君に何を背負わせるつもりはないし、……何も背負ってほしくない。……俺はただ、自分のしたいようにしただけなんだ、今さつき、クロノにも言ったばかりなんだが」

事情を説明しながらそこかしこに自身への叱責の念をにじませ、最後には思い切り頭を下げクロノが謝ってきたのはほんのついきさきほどの事だ。

執務官として、自分はその時としてはいけない失敗をしたと。協力者である貴方を犠牲にしてしまったと。

そんな風に随分と高くなったその背をしかし半分折って、男らしく大人らしくなった低く落ち着いた調子を有した声で彼は恭也に謝罪を述べた。

その時も今と同じように胸の痛みと共に思った、彼らに重いものを背負わせてしまったと。

「五年間を奪った、などというのものな、もちろんこれから俺は色々実感して、……やりきれない気分を味わう事もあるかとは思う。だが、そんなものはお互い様だろう。そういう事を言い始めたら、俺だつて君に、君達にこの五年間、罪の意識を背負わせたんだ。無邪気に生きていい子供の時期に、そんな思いをさせたんだ。俺は、君の人生にある一面では間違いなく害を」

「ちやいますっー」

まるで、噛み付くように。はやては反駁の声を上げた。

「ちやいます！ ちやいます！ そんな事ない、ちやう、ちやいます！ 恭也さんに救ってもらったおかげで、私は！ 八神はやては幸せに生きてます！」

ぎゅつと、掴まれたのは服の裾。はやては恭也の白い患者衣を掴んで至近距離、恭也の記憶のものよりも近くなった位置から必死の形相で見つめてくる。

「ほんとです！ 私は！ 私は！ ずっと、ずっと幸せで、なんにも、そんな……あんな風に救ってもらった私になにかで嫌な思いなんて、そんな資格」

「ない、なんて言ったら怒るぞ、はやて」

ぽんと、軽く叩くようにはやての頭上に手を置きなおして、恭也は言った。

「嫌な思いをする資格がない、なんて事があるわけないし、それは決して幸せとは言えないだろう。……はやて、いいんだ。嫌なことがあったら嫌で、痛い思いをしたら痛いで、それでいいんだ」

語る言葉は、恭也にとっては地続きの本音。

「そういう事をかみ締めてもなお、笑顔で生きることが、笑顔で生きられる事が、幸せだという事なんだと俺は思うし、少なくともそういう意味で俺は君に幸せになってほしいんだ。そんな風に幸せになる君の未来を護りたかったんだ」

現実としてはあれから五年もの時が経ったらしいが、恭也の主観からすればつい昨日の事のような話なのだから、気持ちの鮮度にはほとんどと言っただいほど変化はない。

「魅月に頼んだ伝言でも言った通りだ。気にするな、と言っても無理かもしれないがせめて気に病まないでくれ。いいんだよ」

「恭也、さん……」

「はやて、俺は君を護れたか？」

「も、もちろん！ そんなの、当たり前です！ それはもうものすごいご恩で」

「だったら、その恩とってくれる気持ちに付け込んで頼むが……い

や、そうだなこの際だ、恩返しをしてくれ、なんて凶々しい事を言わせてもらおう。はやて、君が俺に対し恩を感じてくれているなら、決してあの事について自分の行いを責めるな。いいか？ それによって間違っても心を歪ませてはならないし、何より君の未来を縛り付けてはいけない。ああ、はやてだけじゃない」

ぐるりと恭也はその場の人間達を見渡す。

「クロノも、エイミィも、他のアースラクルーも、守護騎士の皆もだ。もし俺へ恩を感じてくれているのなら、凶々しい恩返しは要求だ。それに免じて今言った事を守って欲しい。どうだ、出来るか？ ……どうか、頼むよ」

「おかしいやろ……」

返ってきたのは、涙交じりの苦笑という、やや複雑な声。

「なんで、なんで恭也さんが頼む展開になってんねん……なんで、もう、……恭也さんはほんま……」

恭也さんや。

少し乱暴に自らの目を拭ってはやては零す。

「恭也さんは、恭也さんやなあ……やっぱり、恭也さんや……」

「まあ、そう、だな。俺は俺だ」

「……恭也さんや」

「ああ、俺だよ、はやて」

「……恭也さん、や」

ぼすつと、恭也の胸にその顔を埋めて。

「きよーや、さん、やあ……」

くぐもった声でのその何度目かの確認に、到底全ては推し量れないがそれでも掴めた片鱗だけでもとてつもない思いが籠っているとわかるその確認に、

(待たせてしまったんだな。……待っていて、くれたんだな)

そんな風に思えて、胸にははやての体の温もりと共に内側からも熱が生まれる。暖かい思いが湧き出る。

昔よりは多少改善されたとは思うがお世辞にも人付き合いの達人なタイプではない、人当たりが良いとは思えない自分の事を、こんな

風に待っていてくれる人が出来ていたという事が、純粹に嬉しかった。

「なあ、恭也さん。……気づいとるやろ？」

顔を上げ、こちらを見つめたはやての問いに恭也は頷く。

それは、ドアのすぐ向こう側の事だ。

「……ああ。声をかけるべきか、迷ってはいたんだが」

ドアの向こう、そこにあるのは覚えのある大きめの気配と、覚えのない小さな気配。その動きからこちらの様子を伺っているのだろうという事はわかつてはいたのだが、どうするべきか判断しかねていた。

「いえ、大丈夫です」

すつと一步、恭也から離れたはやてはそう言った。

「ちゃんと連れて来てくれる子がついてますから」

その言葉が終わるか終わらないかのタイミングだった。

「ほら！ 今ですお姉さま！ リンツ達も入るですよ！」

「あ、あ、ま、待ってくれまだその、こ、心の準備が……」

銀色に輝く長い髪をなびかせた美しい女性の躊躇いの声もなんのその、天真爛漫にその手を引き開いたドアから真っ先に飛び込んできたのは小さな小さな女の子。神聖さの香る女性によく似た風貌で、まるで御伽噺に出てくる妖精のような姿をしている。

そして、結局は引きづられるように女性の方も室内に入ってきて。

「……久しぶり、なんだよな」

「……………あ」

「元気だったか、リインフォース」

「う、……………ああ」

恭也がその名を呼ぶと、女性——リインフォースはぎゅつと眼を瞑りうな垂れた。

「騎士、恭也……！ 私、私は……………」

「さっきの話は聞こえていたか？」

「す、すまない……盗み聞きなど品のない礼節に欠ける行いだとわかつてはいたんだが……どうにも、その……………」

「いいさ、そんな事は。それより、聞いていたのならわかってくれるか？」

「……………っし、かし……………主達にもちろん罪などない。しかし、私は、私だけは……………」

「リインフォース」

響いた声は、彼女の主、はやてのものだ。

「恩人の言う事は、ちゃんと聞かなあかん……………なんて、私もまだ、ちゃんと言われたとおりに思えるかどうかわからないんやけど」

はにかんで、はやては続ける。

「せっかくああ言うてもらえたんや、なら、一緒に、やっていこう。

……………一緒や、リインフォースだけなんてこと一つもない、全部、皆、一緒や。皆一緒の、八神家やる？」

「ほら、マスターの言う事は、家族の願いは、聞いてあげなければな、リインフォース」

「あ、う……………」

「……………まったく、いつまでもぐちぐちと、それでは女神の名が泣くぞ、リイン」

「っ！…しよ、将！…」

揺れるリインフォースに呆れたような顔で、そしてどこかからかう含みを持たせた声で言ったのは今まで黙っていたシグナムだった。

「なんだ、そんなに慌てて。あの呼び名の事はどこかしらからどうせ早晚、恭也には伝わるだろう、だったら今言ってしまうてもいいじゃないか。それとも、隠したかったのか？」

「い、いや……………そうじゃないが……………」

「ではいいだろう、教えてやれば。恭也、そのうじうじしている女は、リインはな、実は管理局内ではそれはそれは多くの敬意を集める、崇め奉られし存在なんだぞ。八神家の自慢だ」

「しよ、将……………っ！ 言いすぎだ！ そこまでのものではないだろう！…そ、そうやってお前は事あるごとに私をからかってー！」

「からかっても何も、別に本当の事を言っているだけだ」

反応がテストタロッサと同じだな、と、ニヒルな笑みを浮かべるシグ

「未熟で汚れたこんな手で、そんな事が出来たというのなら嬉しくないはずがないだろう。……そして、嬉しいというのならやはり、君がこうして八神家の一員として過ごしている事が俺はたまらなく嬉しいよ」

思い出すのは泣き叫んでいた彼女の姿。悲しい事ばかりで、苦しい事ばかりで、辛い事ばかりで、痛い事ばかりで、そんな世界が嫌で嫌で。

それでも涙を流して耐えるしかなかった彼女がこんな風に表情豊かに、はやて達と自然に”家族”をしているというのは、恭也にとつてあの日自分が為すべき事を為せたその証のように思える。

「本当に、よかった……よかったよ、……、おい、リインフォース？」

目を細め、間近で端正な彼女の顔を見つめてかみ締めるように言う
と、

「……………」

少しの間を空け、そして無言ながらもその表情を吹っ切れたように凜々しいものへと切り替えてから、リインフォースはその場に跪いた。すると、彼女によく似た妖精のような小さな女の子も、さらにきびきびと騎士然とした動きでシグナム、ヴィータ、ザフィーラもその隣へと移動し、恭也の正面、リインフォースと同じくすつと跪く。最後にシャマルもものは、フェイトの治療が一段落したらしく、これによし、と小声で呟いた後五人に続いた。

恭也の正面、総勢六名が厳かに頭を垂れている。

「お、おい、どうし」

「騎士、騎士恭也」

優しくも芯の通ったリインフォースの、そんな呼びかけからそれは始まった。

「お聞き下さい、親愛なる騎士恭也。我らは貴方への絶大なる感謝の念の元」

「絶対の献身をここに誓います。もし貴方に災厄降りかかりしその時は」

まず続けたのは、リインフォースのすぐ隣、彼女に似た小さな女の子。幼さの香る、しかし騎士の凛々しさを有した言葉が紡がれ。

「万難を排し」

「千里を駆けて」

「百戦錬磨の我ら守護騎士」

「十全たる意思と誇りを胸に」

そしてシグナム、ヴィータ、シヤマル、ザフィーラから各々意思籠もる声が連なり。

「一同揃って貴方の下へ」

何時でも何処でも何度でも、御身の傍へ馳せ参じます。

最後に全員でのそんな文言で締められたのは——紛れもなく宣言で、揺るぎのない宣誓だった。

「あ、いや……」

「恭也さん」

面食らう恭也の裾を引いたのは、はやて。

「これがこの子達のまつすぐな気持ちで、そしてそれは言うまでもなく私も同じです。もし恭也さんに何かあったらその時は、私達夜天の王とその騎士達が必ず、貴方の力になってみせます」

絶対です、と念を押すはやての瞳に退かない想いを垣間見て、

「……そう、か」

恭也は結局ゆるゆると頷いた。

正直に言えば、こんなに畏まって礼を言われた上にあんな風に誓ってもらう価値など自分にはないと思う。しかし、それをこの場で彼らに言っても彼らは自らの文言を翻したりはしないだろうし、何よりそうさせようとするのはあまりに無粋だ。

「絶対の献身、などとと言われると少しくすぐりたいが、……そうだな、それじゃあ何かあったら頼むよ」

ああまで言ってくれたのなら、こう返すのが流儀で礼儀としたものだろう。

「はいっー」

十台半ばの少女にはあまり似合わない、しかし組織に勤めそれなり

の立場にあるものには必ず備わるきりつとした声と表情ではやては頷いた。

「……しかしそうなると俺は怖いものなしだな。先のはやての戦い、見させてもらったが」

「あ、え、あー、そ、その、ど、どうでした?」

「どうでしたもこうでしたも……君はそこらの軍隊相手でも単身で戦り合えるんじゃないのか?」

大規模石化に炸裂弾一斉放射、極めつけは周囲完全殲滅魔法。

まさに夜天の王という名にふさわしき、それは圧倒的な姿だった。

「なんだ、魔導師ランクで言えばあれはSSSSSSくらいいくのか?」

「い、い、い、い、い…… そんな事ないです! …… そもそも魔導師ランクはS

SSが最高ですし、私は、そ、その…… 一応、SSです」

「SS……」

「きよ、恭也さんと、同じ、ですね」

えへへと、今度は少女らしい可憐な笑みではやてはそう言うが。

「ということは、管理局は俺には先のはやてと同じくらいの戦力があると思っっているという事か? ……俺には無理だぞ、あんな事は」

あんな一人一個大隊のような真似は恭也にはどうやったって出来そうもない。

「い、い、い、い! …… 私の場合はあれやるのにかなり長い準備時間が必要で単身の戦闘能力としては大した事ないんですよ! …… あくまで守ってくれる仲間がいてのもので、だから私のランクは空戦やのうて単純な魔力保持量とかに重きが置かれやすい総合でとったSSですから、単体戦闘力で言えば空戦SSの恭也さんの足元にも及びませんし、なのはちゃんやフェイトちゃんの方がずっとずっと上ですよ!」

「……そう、なのか? …… なのはとフェイトのランクは……」

「空戦S+です」

ついこの間は確かAAAだったはず……なんて考えそうだ五年経ったのだと思っ直した。五年という時間の重みと、その間にあった事が次々とリアルな重量を伴ってくる。

(AAAでも十分にエース級という話だった……)

自分が五年眠っている間に、もちろんはやてもそうだろうが相当な努力があつたのだろう。

「なのはちゃんも戦技教導官で不屈のエースオブエースなんて呼ばれてますし、フェイトちゃんも一級の本局エリート執務官として呼び声高いですよ。二人ともそれぞれ遠距離戦、近距離戦で若手最優秀だつて評価受けてて、ほんまにすごいです」

「そう、なのか……」
しかし。

それでも二人の話は、なのはとフェイトの話は未だ恭也にとってはどこか遠かった。すぐ傍に横たわる二人の少女、はやての言う限り管理局で高くその実力を認められているらしい教導官、執務官と、なのはとフェイトという九歳の小さな女の子がうまく結びつかないのだ。その九歳の小さな女の子が、背も顔も大人の女性へと変貌を遂げ始めた十四歳となっている姿を目の前にしても、だ。

「……ああ、ところではやて」

だが二人が目覚ましたら言葉を交わすうちにちゃんと実感が沸いてくるだろう、そんな風にとりあえずは意識を切り替えて恭也は別話をはやてへ振る。

「……その子は、一体？ リインフォースと随分似ているが」

さらに言うならば、いや、どちらかと言うならばフィリス先生により似ているのだがそれは誰にも通じないだろうと思つたので言わずにおき、恭也は宙に浮く長い銀髪の子へ視線を向ける。

「あ！ 申し遅れました！」

「ああせや、リンツの紹介もちやんとせなな」

「はいです！」

にこっと、その子は弾けるような笑みを浮かべる。

「八神家末妹にして古代ベルカ式ユニゾンデバイス、正式名称リインフォースⅡ——リンツとおよび下さいです、恭也様！」

「……恭也、様？」

「はいです！」

耳慣れない自分への呼称に思わず聞き返した恭也へ、リンツは大き

く迷いなく頷いた。

「その剣に斬れぬ物なく、その刃に絶てぬ悪なく、その力に敵う者ない!! 長いベルカの歴史の中でも間違いない最強の騎士であり、そして心優しく包容力に溢れそれでいて慎ましく何より清らかな、まさに聖人の如き次元世界の中でも最高の人格者だ!! お姉さまからよく聞きました!!」

ふらりと、恭也を襲ったのは眩暈。

「待て、待ってくれ。……俺の話なのか、それは本当に」

「はい! 紛れもなく貴方様のお話です恭也様!!」

「……………」

即断で返って来た言葉に目頭を押さえ、恭也は一体全体どういう事だと彼女の姉、リインフォースに目を向けると、

「す、すまない騎士恭也……………」

彼女は慌てた様子で言い募る。

「…………私なりにこう、騎士恭也の魅力を精一杯伝えようとはしたのだが……………わかつてはいるんだ、まったくもって足りていないと!

リンツへ騎士恭也の素晴らしきの全てをきちん伝え切れていないと! わかつてはいるんだ! だがしかし……………なかなかこう、すまない……………教育の経験不足……………私の未熟だ……………」

「いやいやいやいや待て待て待て待てくれ」

悔しげに唇をかみ締め自分を責め始めるリインフォースだが、恭也としてはそう止めざるを得なかった。

「逆だ、まったくもって逆だリインフォース! 俺が言っているのは俺を良く言い過ぎだと、そういう……………」

「リンツ、これが騎士恭也の美德の一つだ。見て、聞いて、どうだ感じるだろう、騎士恭也の素晴らしさを」

「はい! これが驕らぬ威張らぬ見栄張らぬ! 恭也様の美しき慎ましきですね!」

「そう、そのとおりだ」

うんうんと頷くリインフォース。

いや、待ってくれとそう言おうとした恭也に、

「今更何を言っても無駄だぞ恭也、リンツの中でお前はもう完璧超人聖人君子だ」

「リンツはお前への賛辞を子守唄にして育てられたかな、完つ全に刷り込まれてるぞ。あ、主犯はリインだかな」

そんな風に論したのはシグナムとヴィータだ。

「それはもう洗脳だろう!? なぜ止めなかったんだ……」

「ええやないですか、言い方はまあほんのちよつと美辞麗句に過ぎるかもしれないけど、内容自体は別にまちごうてはないんですから」

「主はやてがこうおっしやるんだ、我らが止めるはずもなからうに。……それにまあ、間違いではないというのは我らも思っている事だしな」

(……いやいやいや)

はやて、シグナムのそんな言葉でまたしても眩暈に襲われながら、最後の砦とばかりに恭也はヴィータへ救いを求めるような視線を送るも、

「ん、……まあ、いいんじゃないの。少なくともアタシら結構なげえこど生きてつけど、お前よか単体戦強いやつ見たことねえのは確かだしよ」

返ってきたのはそんな台詞だった。

もはや黙るしかない。

どうやら自分が眠っている間に、八神家の中では何か認識に重大な誤りが発生してしまったらしい。どう考えても美化され過ぎている。

(……俺だぞ?)

剣士としては未完成、人としても未熟者。だと言うのにここまで賛辞を受けるといふのは確実に何かの間違っているとしたら、恭也には思えなかった。

この誤解は何とかしてこれから解いていこうと、そう心の中でだけため息を付きつつ決心した時だった。

「そ、その……騎士恭也」

「ん、なんだ?」

「……ええと、その……も、もういいだろう? と言うかまず、い

の一番に君こそが再会を果たすべきだったというのに、こんなに私達の話ばかりしてはあまりに申し訳がなさ過ぎる。そろそろ……………」

そのリインフォースの言葉は、”もういいだろう”のくだりからは恭也へと向けられた言葉ではなかった。彼女が握り締めている右手、そこに向かって放たれたものだ。

そして、返ってきたのは。

『いえ、本当に私は後回しでいいのですよ』

そんな、奥ゆかしく控えめな言葉だった。

「……………」

息を呑んだ恭也の前、立ち上がったリインフォースは右手を掲げ、ゆっくりと開く。

「主従揃って謙虚の徳の塊のようだが、しかし、もう私には我慢できない。共に戦えて心から嬉しく頼もしかったが…………君を早く、騎士恭也の下へと贈りたいんだ、在るべき場所へと返したいのだ。私には、同じデバイスの私には、主の傍に居たいという想いがどれだけ切実なものか、よくわかるからな」

『…………痩せ我慢は無駄ですか?』

「ああ」

お見通しさ、我が友よ。そんな言葉ともにリインフォースから恭也へと差し出されたのは、響かせる言葉と同じくどこか控えめでありながら、しかし確かに輝く美しい銀の指輪。

古代ベルカに造られた、彼女はデバイスで。

魔法と出会ってから共に研鑽を積んだ、彼女は相棒で。

恭也の指に腕に、何より心に、傍に在り共に在れば誰より頼れる、そんな大切な存在。

「…………——魅月」

『はい、我が主。貴方の魅月です』

恭也がその名を呼べば、彼女はそんな風に返して来た。

「…………おおよその事は、聞いた。五年、経ったんだってな」

『はい、我が主』

「四年間、俺の治療をしてくれたんだってな。ありがとう、本当に、ありがとう」

『ご冗談を。御礼を言わせて頂くことこそあれ、その逆なんて必要ありません。貴方に尽くすのが私ですよ、我が主よ』

「その後、一年間……」

『貴方の傍に居させて頂きました。私の居場所が貴方のお傍以外にありえるはずがありません、だから当然です、我が主よ』

「……俺の願いの二つ目は、聞いてくれなかつたんだな」

『はい』

すると、流れるように魅月は答える。

『我が友、リインフォースと共に戦いもしましたが、しかし私の主は貴方だけ。貴方だけです、我が主よ。我が主、……愛しい主恭也』

「……俺はまだ、君の主を名乗っていいのか？」

『私は魅月ですよ？ 貴方の魅月ですよ？ ——貴方の魅月がいいんです。ですから、どうか私をまた』

その続きは、言わせなかつた。

恭也はリインフォースの手のひらの上、不安げに明滅する魅月を出来うる限り優しく柔らかく受け取って。

「永全不動八門一派」

迷いなく惑いない、

「御神真刀流小太刀二刀術師範代」

自然な動作で、恭也は居て欲しい場所へと彼女を導いた。

「高町恭也、君の主だ」

名乗りが終わったその時に、魅月が居たのは恭也の左小指。

押し付けがましきなど微塵もないのに、それでいて絶対的な安心感をもたらす、小さな重みがそこにはあった。

『……不躰で申し訳ないのですが、厚かましくて心苦しいのですが、一つ、願いを聞いてくださいますか？』

「ああ、もちろん。なんだ？」

『貴方との出会いも、貴方との一時の別れも、同じ技でした。ですから再会もまた、あの技をお願いしたいのです。あの技で私を振るって頂

きたいのです』

「……そうか、そうだな」

少し離れていてくれ、そう恭也が言うまでもなく空気を讀んでリインフォース達は既に恭也から距離を取っている。

「展開」

言葉と共に恭也を黒の衣が包み、腰には心地のいい重み。

息を一瞬で整え恭也は両の魅月を握り虚空へと”あの技”、

御神流奥義 薙旋

自身の最も得意とし信頼する奥義を放った。言われた通り確かに出会いにも別れにも放つ事となったそれを言われた通り、請われた通りにまた放った。

それは、彼女への挨拶。

『ああ』

これからもまた、よろしく頼む。

『ああ、ああ……』

待たせて、すまなかつたな。

『あああ……』

待っていてくれてありがとう。

そんな想いの籠った、彼女への挨拶。

『ああああ……！』

魅月。

恭也が贈ったそんな名を己が名にした、愛しい相棒への挨拶だ。

『主、我が主……—我が主恭也！』

「ああ、俺だよ。俺の魅月」

『はいー』

恭也は弾む声を上げた魅月を滑らかに納刀し、彼女の鞘を慈しむように優しく撫でて。

その時だった。

「……ん、んん」

揺れ動く気配と、微かなうめき声が場に響く。

「恭也、……テスタロッサが」

「ああ」

その音色は確かにシグナムの言うとおり、

(フェイト、だな)

あの冬に出会い、そして別れたはずの少女のもの。

「ん、……………」

眠りから醒めたばかりだからだろうかふわふわとした緩い声、うすらぼんやりと開けた瞳、ゆつくりと横たわっていた床から上半身を起き上がらせるその仕草。

それを見て、そんなもの達を目の当たりにして、恭也の胸に広がるのはようやくの実感。

(……………ああ、——フェイトだ)

彼女が、記憶の中のレンや晶達と同年代まで育っているこの娘が”フェイト”だと言う確信。どこか擦りガラス越しのようだった彼女への認識はみるみる内に変わっていき、もう恭也には目の前の、幼いという形容は既に抜け落ちた年頃の少女がしかし紛れもなくフェイトに見えた。

「え、と……………つ!! そうだっ! 恭也さ……………」

「そんなに急に起き上がるな、今の今まで気を失っていたんだからな」
言ってから、ついこの間にも口にした台詞だなと苦笑しかけ——そうだそれは五年前になるのかとまた思い直す。自分にとってはついこの間、一ヶ月以内程度の話だが現実が違うのだ。この感慨はもう何度目だろうか。

(まさに浦島気分だな)

思つて、フェイトの元へと歩み寄りながら結局恭也は苦笑した。

寝起き……………と言うか気絶からの意識回復だが、視界と思考はピントがもうすっかりと合つて、しかしそれでもフェイトは現状を現実でないと思断じた。

夢だと、はつきり思つた。

(あー……また、か)

だって、何度も見たから。

「フェイト、身体は大丈夫か？」

床上半身だけ起き上がった半ば横たわった状態の自分の
前まで歩み寄り、優しくそう問うてくれた彼の姿を何度も何度も夢に
見て、夢で見たから。

(夢の中だって会えるのは、……嬉しいんだけど)

しかし起きてからの喪失感には涙さえも伴って、赤い眼を寝起き
だからと誤魔化しているものきつと家族には薄々感づかれている
だろうから、この夢はフェイトにとつて素直に喜べない夢で。

それでも、やはり永遠に覚めて欲しくないくらい幸福な夢だった。

「今日は、どれくらい傍に居てくれますか？」

「……？ いや、すまない、どういう意味だ？」

要領を得ないといった反応の彼に、フェイトは微笑んで返す。

「わかってますから。恭也さん、消えちゃいますもんね。大丈夫です、
わかってますから。夢だって、ちゃんと」

「……フェイト」

「わかって、ますから。時間が経つ内にだんだん薄くなってるって、
……触ろうとしても、掴もうとしても、すーって消えちゃうって。それ
で泣いてる内に眼が覚めるんです、いつも」

「……」

「……あ、ご、ごめんさいつ、恭也さんを責めてるんじゃないよなくて
……あの、いえ……すいません」

勝手に夢に見てその中で勝手に謝って、自分でも何をしているんだ
かよくわからない。

「……」

だから、フェイトはただ黙った。黙って、ただただ見つめる。

目の前の、狂おしいほど愛おしい人を見つめるだけに留める。それ
は、触ろうとするとすぐに消えてしまうからという経験則に基づく自
制。少しでもこの時間が長く続くようにと、何度もこんな夢を見るう
ちにいつからか打つようになったフェイトの方策。

小賢しい知恵だと自分でも思うが、

(それでも……見るだけでも……)

訪れた幸福を、その後にとれだけ虚しさに襲われるかわかっているも幸福だと思えるこの瞬間を、少しでも長く続けたいという願いがフェイトをそうさせて――。

ふわり、と。

「……………っ!？」

自分の髪が撫でられているという事を認識するのにおそらく数秒はかかったろう。

ごっごっとしているけれど、それでも途方もなく優しい手がフェイトの髪の上を滑って、毛先を少し悪戯にいじり始めた。

「前にも思ったが絹のようだな、君の髪は。柔らかくて触れる手に優しく、……………似合いだ」

「……………あ、え、……………えっ？」

「髪も伸びたが、背もそうだな。顔つきも随分大人っぽくなって……高校生だと言っても通じそうだが、十四歳、だと中学二年だかそこらへんか」

「え、え、……………えっ？」

紡がれていく言葉の意味がわからなくて、流れていく目の前の現実がわからなくて、正確にはわかるが呑み込み切れなくて、フェイトはただ間抜けに声を零す。

だって、今まで夢の中で彼が自分をこうして撫でてくれる事などなく、自分があの日より大きくなった事ついて何かを言うなんてありえなかった。

「……………え、え」

無意識、だったと思う。禁じていたはずなのに、フェイトの手は自分の髪を撫でる恭世の手に伸びて。

「……………っ!？」

がし、と、確かに掴んだ。

何度夢に見たかわからない彼の姿を、しかし一度も触れることは叶わなかったその身体を、確かに掴んだ。

「……あ、え？」

ここに来てようやく辺りを見渡せば、見慣れたアースラ管制室の中、頷くはやてやクロノ、エイミィに守護騎士の皆。

「……消えないよ。消えたりしないさ」

間近で放たれた声に、吸い込まれるようにしてフェイトは視線を戻す。

目の前に居る、大好きな人の顔を見つめて。

愛おしい人の姿を認めて。

「……恭也、さん？」

「ああ」

「恭也、さん、です、か？」

「ああ」

言葉の通り薄まり消えはしないその身体を、熱を、掴んだ手を通して、繋いだ手を介して感じて。

「大きくなったな、フェイト」

呼ばれたその名は自分のもので、呼んだその人はあの人で。

我慢なんて出来なかった。はしたないとか恥ずかしいとか、そんな

考えは浮かぶ間もなく、

「………っ！」

「………っ！」

フェイトは彼の胸に飛び込んでいた。

「俺を護ってくれたんだってな、ありがとう、フェイト」

「………っ！」

ふるふると、フェイトは頭を振る。そもそもが今自分がこうしていただけるのは、あの時彼に護られたからなのだからそんな風にお礼を言われるべき事はないと思っただし、何より。

「恭也さん……っ！ 恭也さん！ ——恭也さあああんっ!!」

もしも褒美がもらえると云うのなら、もう既にもらっている。

「ああ」

堪えようと思う事すらできず、涙を流し嗚咽を上げてしまう自分の背を優しく撫でてくれる、その手の暖かさ。包み込んでくれる胸の心

地よさ、広がる懐かしい匂い。そんなもの達があることだけで、今日の苦勞なんてものはあまりに些細だった。

「うあああああつ！ あああああ……つ！」

これで三度目、彼の胸の中で泣くのはこれでもう三度目だと、そんな風に思つて。

気づいてなかった一度目、気づくきっかけとなった二度目の時よりも確かに、遥かに、この人に恋焦がれている自分がいる事をフェイトは強く自覚する。

「う、あああ……つ！ 恭也、さんんんつ……！ あ、うああああああ……つ!!」

「ああ」

フェイトの腕はぎゅつと、あらん限りの力で持つて彼の身体にしがみ付いている。

「大丈夫、消えたりしない。……ごめんな、いなくなつて。駄目な師匠だな、俺は」

「つだめじゃ、ない、で、す……！」

言葉と共にふるふると頭を振つてフェイトは恭也へ答えを返す。駄目だなんてそんな事、あるはずない。

他を圧倒する高速近接戦闘スキルを有した若手最優秀のエリート執務官、なんて評価を受けて久しい今の自分があるのは言うまでもなく、彼の教えのおかげに他ならないからだ。

驕る気持ちなど微塵もないが、それでもフェイトは自分への評価が誇らしい。それは自分が認められているからというよりも、彼の教えが、技が、力が、——彼と言う人が、どれだけ優れているか示せているからだ。

私の師匠はこんな風に強くしてくれる凄い人なんだと、確かな実力と実績で示せている事が誇らしい。

だから、お願いだから駄目な師匠だなんて、そんな風に言わないで欲しい。

「わ、たし、………しつ、む、かんに、なれ、て………つ！」

「ああ、聞いたよ。それに随分と高い評価を受けているらしいな、凄い

じゃないか」

「恭也、さん、が、教えを、くれた、から、です……っ！ 恭也さんのおかげで、私、わたし……！」

「そんな事はない、君への評価は君自身の才能と努力の結晶だろう」
違う、違うとフェイトは駄々っ子のように頭を振る。

「恭也さんが、恭也さんがあんな風にちゃんと教えてくれた、から……！ ……恭也さんを、追いかけてきた、から！ わたしは……！」
ここまで来れたんですと、フェイトの口がなんとかまともに紡ぎ出せたのはそこまでだった。

嗚咽に口はどうとうまともに言葉を発せなくなって。

自分の想いは伝わったのか、どうなのか、それはわからないけれど。

「……頑張ったな」

「……っ、…………っ！」

「頑張ったな、フェイト」

恭也が少しの沈黙の後にくれたのはそんな言葉。

馬鹿みたいに嬉しくて、嬉しくて。

学校では中学二年生になって、管理局では執務官として職務についている、少しは大人になったはずのフェイトはしかし、この涙の止め方はわからずに。

子供のよう、ただ泣き続けた。

「残るのはただけだな」

フェイトの泣き声もなく、落ち着きを取り戻した管制室でそう言ったのヴェータだった。次いでシャルマルが治療を担当した者として意見を述べる。

「治し切れない大きな怪我はないし、疲労にもある程度はヒールをかけたからもう起きてても不思議じゃないはずんだけど……」

「でも、随分無茶してたから。まだ起きないのも無理ない、よね……」
さつきまで泣きじやくっていただけに恥じらいがあり、声は小さくなってしまうがとりあえずフェイトは自分の考えを言っておいた。

スターライトブラスターの乱打に高速A・C・S突貫、最後はブラストカラミティ。これが無茶と言わずになんと言う、なのは今回の戦闘内容はあまりに負荷が高すぎた。

「……シヤマルさん、深刻な後遺症か何かは………」

「あ、それは心配ないと思います。こう言っただけなんです、なのはちゃん結構頑丈な身体をしていますし、ここ最近は大きな無茶はしていませんから、ちゃんと休めば問題なく快復しますよ」

「そうですか……」

表情の変化に乏しい彼にしては珍しく、恭也は眼に見えてわかるほどに安堵の顔を浮かべた。

なのはへの深い気遣いが透けて見えて、

(絶対、ちゃんと休ませよう)

フェイトは心の中強く意思を固める。シヤマルの言うとおりここ最近、と言うか三年ほど前のあの事件以来、確かになのはは大きな無茶はしていないがそれまでがそれまでで元の性格が元の性格だ。用心は必要だろう。

恭也が起きたからと張り切って無茶な鍛錬をし出して、なのは自身に傷ついて欲しくないのはもちろん、それで彼に心配をかけるような真似などは決してさせない。

「さっきまで泣いていたくせに、随分恐い顔をしているぞ、テストアロツサ」

「……場合によっては鉄拳制裁が必要ですから。やるなら、その役目は今度も私が引き受けますし」

「………なのはには確かに前科があるからそう思うのも無理ないが、しかしその前回お前があんな風に止めたんだ、もう大丈夫だろう」
心配性だなど、シグナムはため息と共に苦笑を零した。

「……前科？ それにシヤマルさんもさつき、”ここ最近は”大きな無茶をしていないとか」

フェイト達の会話を聞きつけ、恭也はいぶかしげな表情を浮かべた。

「フェイト、なのはに何か……?」

「あ、……えっと、その」

問うてきた彼に、しかしフェイトは歯切れの悪い反応しか返せない。隠し立てするつもりはないが、一体どう説明したものか、どこから説明したものか。

「あー……俗にN&F顔面ボコボコ事件なんて呼ばれてるもんが、……三年くらい前か？ あってだな」

「ヴィータ、人事のように言うがお前は思い切り当事者の側だぞ」

「あ、ま、そうなんだけども。でもアタシは寝てたから実際の現場は見てねえし、インパクトで言うならフェイトのやった事が一番でいいだろ？」

「……まあな」

「あれはすごかったからなあ……」

頷いたシグナムに続いたのははやての声。彼女もその時現場に居ただけにか、声には重みがあった。

「でも、必要だったから。私はあの時自分がした事は間違っていないと思ってる。……誰に恨まれても、憎まれても」

その誰に、の中には恭也も含む。人の妹なんてことを、そんな風に言われても仕方ないくらいの事をした自覚はあった。

それでもフェイトはもしまた同じ事が起きたら、同じようにするだろう。その思いは揺るがない。

恭也に恨まれ憎まれるなんて、フェイトにとっては考えうる限り人生最悪の出来事の上から三つくらいには確実に入る事柄だとしても、だ。

「いや、恭也は多分、お前を褒めると思うがな」

フェイトの声に顔に、隠せず少しだけ混じってしまった怯えの色を敏感に読み取ってだろう、シグナムがそうフォローを入れてくれた。

「……すまん、具体的な話が見えてこないから何がなんなのかさっぱりなんだが……」

「あ、……えっと、ですね……」

とにかく説明を始めようと、あの出来事を正確に伝えるため頭の中で整理し始めたときだった。

「う、……うう………」

全員が、ぼつとその声の元、すなわち横たわるなのはへと顔を向けた。

「なのは……っ」

すぐに駆け寄り膝をついて、フェイトは声をかける。

「ん、………フェイト、ちゃん？」

「うん、大丈夫？」

「え、……あ、一応、だいじよ………——おにいちゃんはっ!？」

「あ、あ、落ち着いて、あのね……っ」

「私、私今度はちゃんと……っ!」

眼を見開き、切実な声を上げたなのはしかし、
「護ってくれたさ。ありがとうな」

「………?」

言葉の続きを口にしなかった。

彼女はぼかんと、そんな表現がぴったりの表情で目の前に現れた人物を見やる。

何秒たったか、しばしの静寂その後に。

「……おにい、ちゃ、ん？」

その短い確認の声にどれだけの感情が詰め込まれているか、わからない者はこの場にはいない。

誰もが固唾を吞んで、

「ああ」

「おにい、ちゃん、……なの?」

「ああ。……俺だよ」

「おにいちゃ、ん………」

兄弟の再会を見守る。

「あ、あ、え、あ……おにい、ちゃ、ん………え、あ、え?」

見開いた眼をそのままに、混乱が一週回ったのか小さく平坦な声なののは零し。

「俺だ、俺だよ、お前の兄だ——なのは」

「……………っ!!」

名前を呼ばれて、彼女は大きく息を呑み、

「あ、なのは…………」

あまりの事態に身体の力が抜けたのか、起き上がらせかけていた上半身をふらりと揺らせ、慌てて支えたフェイトに目を向ける。

「フェイト、ちゃん、あ、の…………」

「なのは、…………恭也さんだよ」

「ほんと、に?」

「うん、…………うん、ほんとに、ほんとに」

もう一度息を呑んで、今度はなのはのバリアジャケットが解除された。維持する魔力の限界か、精神の動揺によるものか、おそらくは両方だろう。一瞬だけなのはの身体を光が包み、服装は教導隊の制服に、髪型はツインテールからいつものサイドアップへと変わった。

「…………おにい、ちゃん」

呆然としたまま呼びかける彼女に、

「髪型、変えたんだな」

恭也は微笑みと共にそんな事を言った。

「え?」

「服も、…………それは管理局の制服か? 背も伸びて、顔は母さんにますます似てきたな。……………本当に見違える、大きくなったな、なのは」

(恭也さん…………)

優しい声に、その言葉に、フェイトは恭也の複雑な感情を見た。それはそうだろう、何年も共に過ごし、家族として、妹として、娘のようなものとして、その成長を見守ってきた子がいきなり五年分も成長した姿になったとなれば、その心中に悩ましいところがないはずがない。

そしてそれでも恭也は優しい眼で、なのはを見つめる。慈しみ、愛おしさ。複雑な思いを抱いてもなお上回るそんな感情たちをその瞳に浮かばせて…………。

だから。

「…………違うのッ!!」

見えなかったのかもしれない。見なかったのかもしれない。髪型の変化を指摘されてすぐに俯き、逃げるように恭也の顔から視線を外したなのには、恭也の愛情籠る瞳が見えなかったのかもしれない。「ち、違うっ！ 違うの、こ、これは、その……………」

「な、なのは……………」

取り成そうとするフェイトの声にも取り合わず、取り乱すのはは慌てて隠すようにサイドアップの髪に手を当て、すぐに解いて。

「え、えと、……………あ、……………あ、あれ……………つ……………つ」

ポケットから予備のリボンをもう一本取り出して、ツインテールを、今はバリアジャケット展開時だけだがかつては常にしていたその髪型を必死に作ろうとし始め、

「……………う、うう」

しかし手の震えに遮られ上手く行かずに顔を焦りに染めていく。

「……………なのは？ どうしたんだ、一体……………」

びくり、と。

恭也の呼びかけに俯いたままなのはは震えた。

「……………なのは」

その反応に困惑と、そして悲しみや寂しき、切なさややり切れなさに染まった声を恭也は上げ。

「……………あ、あ、あの、ち、ちがうのおにいちちゃんその！」

その声にようやく顔を上げなのはは恭也の顔を見て、

「あ……………ああ」

当然、声と同じく悲しげな兄の表情に、彼女もその顔を真っ青に染めていく。

「……………なのは？ ……恭也さん？」

なんだ、これは。

誰も口に出しはしないが、おそらく皆、そう思っているだろう。少なくともフェイトは思う。

(なんで、こんな……………)

待ち望んでいたはずの、兄弟の再会が。

どんな形になるかは予想できなかったが、少なくとも喜びの色に染まってくれるものと思っていたのはと恭也、二人の再会が。
どうして、こんな空気になるのか。

結局。

周りのはやて達八神家や、クロノたちアースラクルーと共に必死に執り成そうとしたものの、フェイトに出来たのはなぜかなのはが突然始め、しかし上手くいかなかったツインテールへの髪型変更を手伝う事くらいで。

「……………」

「……………」

なのはと恭也の間にあるのは、悲しい感情の詰まった、虚しい無言だけ。

そんな状況は、連絡を受けた管理局本局とこの第十六管理世界駐在の局員達の応援の船が来て、ジェイル・スカリエツティによる襲撃という事態が一応の収束を見せてもなお、改善する事はなかった。

第17話 今の私はもう

朝の縁側ですすった茶は、苦く。

寝起きの目は覚めたものの、しかし頭は冴えただろうか。あまり自信はなかった。

「黄昏れちゃってまあ、じじ臭いわね」

「昔からだろう」

後ろからかかった声に、苦笑しながら答える。

「そうね。……久しぶりに見たから、忘れちゃってた」

おはよう、恭也。そう言いながら桃子は、恭也の隣に座った。

「おはよう。店の仕込みは？」

「今日はお休み。年末までもうずっと休んじやおうかなって思ってるわ。山場のクリスマスはもう過ぎたし」

今日の日付は12月26日。確かに喫茶店とは言え洋菓子屋としての色が強い翠屋としては、山は越えたとと言えるが。

店を開く事へこだわりの強い桃子にしては、珍しい判断だ。

「いいのか？」

「いいのよ。……不良息子がやっと帰ってきたんだもの」

桃子の頭が、恭也の肩に乗る。隣から預けられた重みは、しかしあまりに軽かった。

こんなに軽くて、そして小さな人に、五年間、どれだけ辛い思いをさせたろうか。

「すまない、母さん」

「それはもう、昨日散々聞いた」

「そっちの涙も、昨日沢山見てしまったから今日は勘弁してくれるか？」

「これは、……朝だから。欠伸しただけよ」

あれから、すなわちスカリエッティなる人物の襲撃があつてから。

押っ取り刀で飛んできた救援部隊と合流し、戦闘で疲弊したメンバ―達はもちろん、恭也もすぐさま管理本局の医療施設で各種チェックを受けた。丸一日近くかかったそれがようやくと終わり、恭也が高

町家へと帰ったのは12月25日の夕方。

恭也の主観としては一日二日ぶりかそこらの、しかし実際には約五年ぶりの、帰宅。

迎えたのは、涙で顔をぐしゃぐしゃにした晶とレンと、——二人以上泣きじゃくる桃子だった。

「今日は？」

「また管理本局に行つて検査がある。経過を見たいと言われているから、しばらくは通う事になりそうだ」

「そう」

笑顔が似合うこの人を、あんなに泣かせてしまった。本当に、そうある事じゃない。

今回はどうやら逃れたが、次本当にあの世に行つたら確実に父に殴られるだろう。

「せっかくだから、しばらくゆっくりして、のんびり休みなさい。今まで散々頑張ってきたんだから」

「いや、そんな事もないし、そうも言っていられない。俺ももう、ええと、二十五なんだろう？ 大学だつて退学になっているわけだし、今は絶賛ニートなわけだ」

それなりに苦労して入つた海鳴大学だが、流石に五年間の休学は無理だつたらしい。残念ながら退学処分となっている。

「翠屋で働いていればニートじゃないでしょうに。それに護衛のお仕事依頼だつていっぱい来るでしょう？」

「まあな」

「あと、歳の事だつて、たしかにこつちだと二十五だけど、あつちだと二十なんですよ？」

あつちとはすなわち管理本局やミッドチルダ、ならびに各管理世界群で、

「ああ、そうらしいな」

母の言つた事は、そのとおりだった。

魔法世界では、冷凍やそれに近い例で長期、または長々期睡眠に入る者が少なくない。その者達の年齢をそのまま、生まれてから現在

までで数えると、見た目との乖離や何やらで日常生活はもちろん各種登録などでも不具合が生じる。

ゆえに年齢は、通常の睡眠とは呼べない長い眠りの期間は省いて数える事になっている。

「狭く言えば主観年齢と言うらしいが、俺の場合は二十歳だとするの
が普通みたいだ」

「だったらいいじゃない。まだまだ何かを焦るような歳じゃないわ」
「そうかな」

「そうよ」
茶をすすする。

「そうだろうか。」
わからない。

少しの、沈黙。桃子が口を開いた。

「ねえ、恭也」

「ん？」

「なのはとは、話した？」

「これだけ密着しているのだ。身体の強張りは隠せずに伝わってしま
ったろう。正直に答える。」

「いや、まともには話せていないよ。……完全に嫌われてしまったか
な」

「本気で言ってる？」

「残念ながら。仕方ないと思うからな」

自分は結局、きちんとあの娘を守れなかった。

家族を失う痛みを辛さを寂しさを嫌というほど知っているはずな
のに、あの娘に同じような思いをさせる事になった。

いい兄でも、いい父親代わりでもなかった上に、これだ。

弁明のしようもない。

「今なのはは、十四歳だったか？ 難しい年頃だろうし、男親、男兄弟
によそよそしいのも自然だ。さつきも言ったが、仕方な」

「恭也」

頬に感觸。桃子の指だ。

導かれるように横を向けば、こちらの顔に片手を添えた桃子がまっすぐと眼を見つめてきた。

彼女ははつきりとした口調で言う。

「どうしてなのはが恭也に、あんなぎこちない態度をとるのかはわからない。だけど、これだけは覚えていて」

「……なんだ？」

「恭也が起きるのを一番待っていたのはあの娘よ。沢山の人が待ってはいたけど、きつと一番は、あの娘」

「そう、なのか？」

真剣な顔のまま、桃子は頷く。

「ねえ、恭也。あなたが眠っていた間、色んな事があったわ。色んなあの娘を見たわ。それでね、私はこう思ってる。この世で一番あなたを愛しているのは、きつとあの娘だって」

その言葉に、なんと答えたらいいものか、わからなくて。

「母さん」

「なに？」

「すまない、少しいいか」

恭也は湯のみを置いて立ち上がり、廊下を跨いで障子を開いた。

「おわあっ！」

「あだ！」

「ごろんごろんと、転がるように出てきた人影は揃って頭を床にぶつける。」

「いたたたたた…」

「やっぱばれたやないかアホオ！ おししよを隠れ見なんて望遠鏡でも使わな無理やで！」

「お前だって結局覗いてたろ！ ……五年も眠ってたから勘鈍ってるかもって思ったんだけどなあ」

「そんな温い人なわけないやろ……。あーなんでわかったのにウチは」

「二人ともな、とりあえず言う事があるだろう」

ため息をつきながら、人影——晶とレンに呆れた声で言う。

「す、すみませんでした」

「ごめんなさい…」

「まったくもう覗き見なんて、素直に入ってくればいいじゃない」
「当惑したような顔の桃子に、

「いやーだつて、あれはちよつと……」

「割つて入れへん空気つちゆうか」

二人は歯切れ悪く答える。

「桃子さん師匠の肩に頭乗つけちやつてるし」

「おししよも受け入れてるし」

「顔に手当てて見つめ合ってるし！」

「その上、よお聞こえんかったけど、あ、愛してるとか！」

なんと言つたらよいものか、恭也は天を仰いだ。

「あらあらどうしまししょう恭也、大変な勘違いされちやつてるわ」

「頭が痛くなつてきた。今日の検査でよく診てもらおうとしよう」

湯のみを手に取りやや冷えてきた茶を啜つて、またしてもため息。

「二人ともこんなに大人びた見た目になつたというのに、中身の方はあまり変わつていないのか？」

「いやーはは、なかなか師匠のようには……」

そう笑う晶はボーイッシュな面を残しながらも、しっかりと、すっかりと女性らしい姿。

そしてレンは、

「……おししよ？」

「いや、……本当にレンなんだよな？」

「その会話はもう昨日嫌つちゆうほどやりました！」

面影は残っているものの、言われなければわからないくらいに見違えた。腰まで伸びたストレートヘアに、女性らしい凹凸満ちた身体。顔つきも可愛いではなく、美人という物言いがしつくりくる。

「そ、そんなに見つめられると照れます……」

「ああ、すまんすまん」

つついっい不躰になつてしまつた視線に恥じらう姿も、大人の女性のそれだ。

「……」

(五年、か)

歳と内面に比しては幼い見た目だったレンは、もういない。過ぎ去った年月を、自らの慣れ親しんだ場所であるこの家で実感するのは少し、痛かった。

目覚めた一昨日にも何度も思ったが、成長した周りから自分だけが取り残されていた。

「そう言えば検査って聞こえましたけど、師匠、身体は大丈夫なんですか?」

「ん、ああ。今のところ特に問題はない。ずっと寝ていたから鈍っているものかと思ったらそうでもないし、むしろ調子は良くなったくらいだ」

「そうですか。それはよかったです」

答えた言葉は本当だ。流石に鍛錬はまだ本格的にはやっていないが、身体は不思議なくらいよく動く。

「酷使してたのをゆっくり治したんだもの、当然かもね」

桃子が笑って言う。その通りかもしれなかった。

「あ、あの……ところで、おししよ」

「ん?」

「……なのちゃんとは、話しました?」

おずおずと、レンが問うてくる。晶もこちらをじっと見つめている。

そうか、心配してくれていたのか。

安心させられる答えを持っていないのが不甲斐なかった。

「いや」

恭也は首を振る。

「母さんともそれを話していたんだがな」

「あの、絶対、何か理由があるはずなんです! あんなよそよそしい態度、なのちゃんの本心じゃあ……」

「そ、そうです! おししよが帰ってくるの、ほんまに待ってて!」

二人はすごい剣幕で詰め寄ってくる。

「……ありがとう」

言えるのは、それくらいだった。

「今日、なのちゃんは……？」

レンの問いには桃子が答えた。

「もう管理本局の方に行ってるみたい。書き置きがあったわ」

「そう、ですか……」

「し、師匠、本当に違うんです。本当に、何かの間違いで」

「間違つてると言うのなら、間違つていたと言うのなら、俺の方だろ

う。いい父でもいい兄でもなかった。その報いだ」

湯のみを手に、恭也は縁側を離れる。

「……おししよ？」

「俺も管理本局に行ってくる。そろそろ検査の時間だ」

時間。

そうだ、時間だ。

あの娘が、なののはが、時が経ち成長して、自分の傍にいたいことを望まなくなつたのなら、それはそれがあるべき姿だと言う事だ。

時の流れはいつだって無慈悲で、しかしだからこそ正しい。

逆らおうとは思わなかった。

「……」

時の流れは無慈悲で、そして正しい。

そんな事をそういえば、家を出る前に思っていた。

今でも同じことが言えるだろうか。

恭也は長く息を吐いて、背中を壁につけた。腰掛けている廊下に備え付けの椅子が少し軋んで音を鳴らす。

恭也のいた世界の病院と同じように、ここ管理本局の医療センターもその内装は基本的には真っ白で。

ぼうつと見てしまう。

文字通り、目の前が真っ白だ。

それでも、目を瞑る。少しでも頭に入ってくる情報を減らしたかった。

しかし、身体は視覚を閉ざした分だけ他の感覚を鋭敏にし、補おうとして。

「……？」

聞こえてきたのは足音。早いリズムの割に音量は抑えられている。軽快で無駄がない足運びだと言えるだろう。

まず素人ではないな、などとつらつら考えていると。

「恭也さんっ！」

名を呼ばれ、眼を開いて声の鳴った斜め上へと顔を向けた。

恭也の前で立ち止まっていたのは、見慣れない女性だった。

加えて言えば、とても美しい女性だった。

毛先近くで一つに縛られた金色の長い髪は、少し乱れているがそれすらアクセントとして、何かの冗談みたいに輝いて見え。

彼女の心配そうな眼差しはまっすぐにこちらへと注がれている。

ああ、そうか。

「フェイト」

「はい、あの……」

フェイト・テストロッサ、いや、フェイト・テストロッサ・ハラオウン。

彼女が彼女だと頭がきちんと認識するのに時間がかかったのは、まだこの姿を見慣れていないからか、単純に今、恭也の頭がうまく動いていないからか。月並みな言い方をすれば、多分両方だ。

「そうか、一昨日の戦闘の……。身体の具合は？」

「大丈夫です。消耗は激しかったですですが外傷があつたわけではありませんし、昨日入念に回復をかけてもらったおかげでもう大分よくなりました」

「……それはよかった、本当に」

「ご心配をおかけしました。えっと、あの、それで、恭也さんこそお身体の具合、優れないんじゃない？ なんだかとても辛そうにされて……まさか検査で何か」

おろおろと心配そうに、彼女の手は宙を泳ぐ。

反射だったと思う。

脊髄反射と言ってもいいだろう。
継るように、その手をとっていた。

「——っ！」

「……あ」

意識が追いついたのは、硬直したフェイトの顔が真っ赤に染まっただけだった。

「……すまない」

あまりに突然で不躰な行動。自分でも驚くくらいだ。まさか年頃の女の子にしている事ではない。

フェイトの右手をとった自らの左手を、慌てて離そうとする。
が、

「いえっ」

その瞬間、両手で優しく包むように握りこまれていた。

「私でよければ」

そう言いながら、フェイトは恭也の隣に座る。

「私でよければ、ですけど、何があったのかお聞かせ願えませんか？」
何かあったのか、なんてもう彼女は聞くつもりはないようだった。

こちらの顔を、眼を、まっすぐに覗き込んでくる。

「力にならせて下さい。貴方のためなら、私はなんだってします」

優しい瞳と温かい手に、逆らえるほど今の恭也の頭は回っていない。
くっつて。

促されるまま、口を開いた。

「身体の、事なんだ」

「……はい」

「なあ、フェイト。言われたんだ。俺の身体は、もう、……もう。……俺の身体は」

そこから先を口にするのは勇気が必要だった。言葉にしたら今まで全ての全てが崩れていってしまう気さえして。

怖かった。

きゅつと、手を包まれる力が強まった。

背中を押してもらった気がして。

自分でも情けないくらいに揺れに揺れた声で、恭也は言った。

「もう、——全部治ったらいい」

「……え？」

「全部、全部だ」

その意味を、きつと彼女は正確に理解した。目が見開かれていく。

「じゃ、じゃあ……」

身体のあらゆる箇所が全て正常に、健康になった。

それはつまり、もちろん。

「膝も、治ってる。後遺症だのなんなの、そんなものも何もない。完全に、完璧に、文句なく、治ってる」

壊した膝。壊れた膝。壊れている、膝。

恭也に夢を諦めさせた、脚に巻き付く絶望の鎖。それが今や、ただの健康な身体の一部にすぎないらしく。

「俺は、よくわからない」

五年間の徹底的な治療、特に最後の一年が効いたという話だった。いつ目覚めてもいいほどに回復しているのになぜか目覚めない患者。当たってくれた医療チームはとにかく出来る事を手当たり次第に全力でやってくれて、その中には当然、身体を治せるだけ治す、限りなく完全に健康な状態にする事も含まれていて。

「とにかく治ったらいいんだ。とにかく治ったらいいんだが、俺にはよくわからないんだ」

いいニュースと言えば、そうなんだろう。客観的に観たら、そのはずだ。

だけど、恭也にとっては単純に喜べる話ではない。

膝の壊れた自分こそが、夢に敗れた自分こそが、もう何年も前から高町恭也にとっては高町恭也なのだ。

寝て起きたら、自分が自分じゃなくなっていた。

今の恭也の混乱した状況をどうにか言葉で表そうとするならば、そんな言い様がふさわしい。

「俺には、よくわからない」

喜べばいいのか。

しかし喜ぶ事は、認める事だ。現実を受け入れた時にこそ、やっと喜べるのだ。

受け入れられるだろうか。

自分が自分でなくなっていた事を。

「きつと」

耳が痛くなるような静寂が過ぎて、

「きつと、私は恭也さんの悩みを、苦しみを、一割だって理解出来ていません。だから、ごめんなさい」

響いた彼女の声は、まるで暖かなランプの光のように優しく広がる。

「ごめんなさい、ごめんなさい、——だからただ、嬉しいです」

勝手にごめんなさい。そんな事を言う彼女の瞳は見る間に潤んで、「ごめんなさい、嬉しいです。世界がやつと、貴方にちよつと優しくなった事が」

時を待たずに温かい雫を零し始める。ぽたりぽたりと、朴訥なりズムだ。

どうしてだろう。

どうして、どうして自分はいつも、この子を泣かせてしまうのだろうか。

そして、どうしてだろう。

今、彼女の涙は嬉しかった。

「恭也さん」

「……なんだ?」

「私、新しい家族が出来ました。義母と義兄が、出来ました」

「ああ」

それは一昨日、当の義兄クロノから聞いた。聞いたけれども、

「私は今、愛してもらってます。家族に、この上なく」

彼女の口から直接耳にするのはやはり、感慨深かった。

あの日、愛を求めて泣いた彼女の口から、愛されると、そんな言葉が自然に出ている事は。

「とつても、とつても自惚れた事を言います。恭也さん、今、喜んでく

れていますか?」

「それはもちろんだ」

間髪入れずに答える。

喜ばないはずがない。嬉しくないはずがない。彼女に何か良い事があれば、恭也にしてもそれは吉事だ。フェイトは恭也にとって、もうそういう存在なのだ。

あの日、腕の中で愛が欲しいと彼女が泣いた日、どうか幸あれと強く願った。

そしてそれが今、叶っているという。

「自分の事のように嬉しいさ。それに、勝手な事を言わせてもらえば、俺にとっても救いに感じる」

「……」

「前にも言ったように、俺は君に自分を重ねて見ている。君が幸せになる事は、本当に勝手な話、俺の幸せでもあるんだ。だから、喜ぶのは当然だ。当然のように嬉しいさ」

「私も同じです」

目を見て真っ直ぐに、彼女の言葉は疾い。

「私も同じなんです。私も恭也さんに何か良い事があれば、自分の事のように嬉しいんです。だから」

彼女の、恭也の手を握る力が少し強まる。

「恭也さん、やっぱり私、ものすごく自惚れた事を言いますね——私が嬉しいって事はきつと、それは恭也さんにとって良い事なんです」

恭也の息と思考が思わず止まる。

馬鹿な事を言ってますよねと、引かれちやう事言ってますよねと、フェイトが苦笑混じりに零す。

彼女の言葉を飲み込んで、咀嚼して。

胸に沁み渡らせて。

恭也は頭を振った。

「馬鹿なのは、俺だ」

「え?」

「診断結果を聞いてもう、かなりの時間が経つというのに……ずっと

うじうじ現実を見ずに見れずに足踏みして、こうして君にそんな風に言ってもらって、ようやく」

長い息を吐く。吐いて、吐いて、そして言葉がするりと出てきた。「……ようやく、嬉しいって思えたよ」

「へえ、管理局の中にこんな場所があったんだな」

「は、はい、こういうお店、実は結構入ってて。基本的に激務な分、福利厚生には気を使っているみたいですよ」

フェイトが恭也を連れてきたのは、局内カフェと呼ばれている飲食施設だ。フェイトの対面、恭也はきよろきよろと意外そうな顔で店内を見回している。

「なるほどな。しかし本当に洒落ているというか、管理局と言えお堅いイメージがあったんだが」

「恭也さんがいらした事があるのって、訓練室か整備部、医療センターでしょうから、そう思いますよね」

と、そんな他愛のない会話を交わすうちに店員が注文を取りに来た。

恭也がブラックのコーヒーを頼み、フェイトもそれに倣う。

「紅茶党かと思っていたが、コーヒーも飲むんだな」

「紅茶の方が確かによく飲みますけど、今日はこっちはいいなと思いまして」

折角だから、と言う言葉は言わずに飲み込んだ。こういう時迷わず『同じものが飲みたい』なんて思うのは、五年前から続く片思いのせいだろう。

あれから気の落ち着いた恭也と二人、ずっと医療センターの片隅に居続けるのもなんなのでと移動してきたわけだが。

局内とは言え、喫茶店で差し向かい。

意識するなという方が無理だった。

不快ではもちろんないが、フェイトとしては少々ではすまないくらいに緊張しつつの沈黙の時間が過ぎ、コーヒーが届けられる。

一口味わい、微笑んで「美味しいな」とこぼした彼になんとはなしに見とれていると、

「ありがとう、フェイト」

突然そんな言葉が投げかけられた。

「こんな風に穏やかにコーヒーを飲んでいられるのは、君のおかげだ」

「い、いえ！ 私はただ……」

そう、本当に、ただ。ただただ、自分が思っている事を伝えて、それだけだ。

「お礼を言われるような事は何も……」

「そんな事はないさ。感謝している」

その声に言葉に、目線を手元のコーヒーに落とす。この水面に映った自分の顔にはきつと朱が差しているのだろう。あいにくと言うべきか幸いと言うべきか、コーヒーの水面の色ではわからないけれど。

「君のおかげで頭を整理できたし、心も決まった」

「……え？」

「今日の検査結果を聞く前から悩んではいたんだ、今後の事について」
「あ、そ、そうですよね」

所属していた大学は退学扱いになって、護衛の仕事も中断中。予定にない形で世間的にも実情的にも、彼はいまフリーだ。この先の事を思い煩うのは当然と言える。

「では、何かお決めになったんですか？」

「ああ、と言っても暫定的なものだが。とても世間様に言えるようなものでもないし。……だが、多分これが俺にとっても、なのはにとっても良い選択だろう」

「……！」

唐突に出てきたなのと言う名に、身がぴくりと硬直する。

あの後どうなったのか、あの不自然な過ぎるほどにぎこちのない関係は直ったのか、恭也があんな状態でなければ真っ先に聞こうと思っていた事だ。現状切り出しているものか迷っていたところに恭也の方から話を出されて一瞬思考が停止する。

しかし、

「フェイト、俺は——」

その後が続いた彼の言葉は、今度は一瞬どころではなくその後数秒に渡ってフェイトの頭を真っ白にするのに十分だった。

「……はあ」

「またため息、それももう何度目？」

「う、ご、ごめん」

隣り合って端末を操作し、書類仕事をしている航空戦技教導隊の隊員——すなわち同僚に指摘され、なのははバツの悪い顔を浮かべて謝った。

「らしくないわよ。何に悩んでるんだか知らないけど」

「そうだね……」

蓮っ葉な口調で容赦なく斬ってくる彼女の言う事はもつともで、

「そうだよね……」

なのはも、どうしてこんな事になってしまったのだろうと心の底から思っている。

「……」

大好きな兄が、愛している人が、帰ってきて。

あんな顔、するはずじゃなかったのに。

あんな顔、させるはずじゃなかったのに。

なのに、なのに。

「そもそも、なんで今日ここ来てるのよ、医療センターはいいの？——昨日派手にやったばかりなんですよ？」

「昨日集中的に治療してもらえたし、そもそも酷使はしたけど負傷したわけじゃないから。しばらく魔法戦闘は避けろって言われちゃったけど」

「当たり前よ、頑丈だからって無理しすぎなのよあんたは。で、なんで今日ここにいるわけ？ 書類仕事なんて残ってたっけ？」

「……うん。次の任務の報告書、今埋められるとこだけ埋めておこうと思って」

「あのね、それは残ってるとは言わないわよ。先に済ませてるってだ

けじゃない」

まったくもって正論だった。反論の余地なく、なのははだんまりを決め込んだ。

「うわ、ほんとにらしくない」

そんなこちらの様子を見て、同僚は呆れと驚き等量の声を上げ、やがて自分の作業に集中していった。

結局、先に音上げたのはなのはだった。

「私、そろそろ上がるね」

なんとなくのいたたまれなさに耐え切れず、そんな風に言っつて端末を落とし立ち上がる。

「あらそー、お疲れ。終わったの？」

「うん、まあ」

もともと、すぐに終わるような作業をわざと時間をかけてやっていったのだ。終わらないわけがなかった。

支度を整え、出入口に向かう。足は重い。気分も同じだ。

「なのは」

「ん？」

「何があつたのは聞かないけどさ、元気出しなよなんて言わないけどさ、その内ちゃんといつもみたいに笑いなさいよ。ウチの隊、それに元気づけられてんだから」

基本は激務だけれど、職場にも仲間にも恵まれている事はきつと間違いない。

それなのに今、力なく頷く事しか出来ない自分が最高に情けなかった。

廊下を歩きながらぼんやりと考える。

どこに行こうか。

正確に言うならどこでどう時間を潰そうか。

もっと正直に言うなら、どうやって家に帰る時間を引き延ばそうか。

(最低だ、ほんと)

家族は皆、それこそ兄も、妙な態度の自分の事を心配してくれている。それだと言うのに、自分のこの行動は何だ。

自然、視線は下を向き。俯きながらどこへともなく歩いているのはは、正面から声をかけられるまで気づかなかった。

「なのは」

「……え、あ」

顔を上げる。目に映るのは特徴的な長い金の髪と端正な顔立ち、黒で整えられた制服。

「フェイトちゃん……」

いつの間にか目の前にいたのは、もう長い付き合いの親友だった。

「よかった、会えて。教導隊の執務室に行こうかと思ってただけど、帰り際を捕まえられたのかな？」

「あ、う、うん」

それは間違っていないのでとりあえず頷くが。

(なんだろう)

何かがおかしい。

彼女の、フェイトの様子が、何かおかしい。

「今、少し時間大丈夫？」

「……うん」

「よかったっ」

なんだか、妙に浮ついている。

そしてそれに対して、自分の心の何処かが確かにざわついている。

これでも、勘は優れている方だと自負しているが。

何だ？

「ねえ、なのは、いつにしようか、送別会」

「え？」

唐突に投げられた単語は本当に意味がわからなかった。

送別会？ そうべつかい？

「え、って、あれ、もしかして聞いてないの？ そうなんだ。じゃあ

ひよっとしたら私が一番に知っちゃったのかな」

「ちよ、ちよっと待ってっ、聞いてないって……」

誰から。
何を。

かすれかすれでそう口にして、その自分の言葉で背中に嫌な汗が流れる。

聞いたくせに、続きを言わないで欲しくて。しかし、そんな願いは届かなかった。

「誰って恭也さんから。何って恭也さんが」

「おにいちゃん、が……？」

「修行に集中するから、一旦この街を離れるって」

その瞬間、身体が強張ったのか弛緩したのか、自分にはもうよくわからなかった。

「ど……うし」

「恭也さんねっ！ 身体、みんなみんな治ったんだって！」

フエイトが興奮気味に言う。

「壊しちゃった膝も！ だから、諦めてた御神の剣士としての完成！ 目指せるようになったんだって！」

「あ、それ、で……」

「そう！ このまま家にいて鍛えてもいいんだけど、折角だからどんな仕事にせよ再開する前に、集中した修行で一氣に力を付けて、出来るなら御神の剣士として完成したいって」

兄が過去に幾度か膝を壊した事は知っていた。そのせいで、夢を諦めた事も。

それが、また目指せるようになったというなら喜ぶべき事だ。それは本当だ。
だけど。

「家、出るんだ……おにいちゃん」

「うん。……やっぱり、寂しいよね」

そんな風に思うのは勝手だろうか……いや、フエイトはともかく、少なくとも自分は勝手だろう。

あんな態度をとっておいて、寂しいなんてどの口が。

「だけど、でも、なのはは幸せものだよね」

「え？」

知らず俯いていた顔が上がる。意味が本当にわからなかったのだ。そしてそんな自分に、フェイトは、

「フェイトちゃん……？」

「なのははさあ、幸せものだよ」

笑顔で言う。

柔らかく、でも、驚くほど冷たい笑顔で。

「恭也さんが家を出る事を決めたのって、修行に集中するっていう理由もあるけど、でも正直なところを言えば、きつとなのはのためなんだから」

「私の……？ なん」

「なんで、って、もしかして聞いたりしないよね？」

吐き捨てるような笑み。

一歩、フェイトが踏み込んできて。

一歩、なのはは後ずさる。後ろめたさがそうさせる。

「なんでも何も無いじゃない。あんな態度をとっておいてさあ。まるで『あなたが帰ってきてきて迷惑です』って言ってるような」

「そんなことっ！」

「そんなこと？」

「……っ」

そんなこと、ない。あるはずない。それは絶対だ、言い切れる。

言い切れるけど、言い張れるような行いは間違ってもしておらず、

口をつぐむ。

「少なくとも今のなのははそういう態度、とっているよね。とっていいように見えるよ。他の誰でもない、恭也さんに」

「……」

言い返す言葉もなく。

「黙ってたんじゃ何もわからないよ。ううん、違うか、もう違うよね――

――何もわからなかった、だね」

わからなかった。そう、過去形の言い方を突きつけられた。

「私には本当にわからないよ。事がいいよこうなってもわからないな

かったよ。折角また手の中に戻って来た幸せを、こうして失っちゃえる神経が」

失う。

また。

いや違う。もう、失った？

何を？

あの幸せを？

一歩、またなのは後ずさり、

「でも、私は違う」

フェイトは動かない。微笑みを浮かべたまま、ただこちらを見つめるだけ。

「私にはね、定期的に会いに来てくれるって」

「あ……」

綺麗な笑顔。嬉しそうな、本当に嬉しそうな笑顔。

「連絡も細かく入れてくれるし、私の都合がいいなら修行しているところにお邪魔しに行ってもいいって」

「……そ、そっか」

よかったね。

その一言が喉でつかえる。

「でも、なのはには会いに来ないだろうねえ」

そしてなんでもない口調で、そんな言葉が投げられた。至って普通の、日常会話のトーンで、ぼすんと。

だからすんなり、胸に落ちて。

「高町家に顔を出す事はあっても、なのはと顔を合わせるようにはしないだろうね。だってそのために家を出るんだもん」

スムーズに、想像が出来る。

「そうやって時間が経ったら、なのははさあ。なのはと恭也さんはさあ」

ああ、そうだ。

「血がつながっているだけの、ただの他人になるんだろうね」

「はー……」

遠ざかっていく足音。

走り去るなのはの背中を見送ってから、フェイトは壁に身体を預けた。

自分に出来るのは、多分ここまでだ。

「頑張ってるね、なのは」

聞こえないだろうけど、聞こえないだろうから、そんなエールを送る。

それにしても。

(嫌な女の顔してただろうな……)

自分の顔をなんとはなしにもみほぐしながら、思った。

焚きつけるためとは言え、あんな風にあんな事を。

だけど、これくらいならいくらだってしよう。

なのはと恭也、二人をちゃんと再会させて、再開させる。それは自分が立てた硬い誓いで、今何よりの願いなのだから。

それに、白状をするのなら。

「……嘘は、結局吐いてない」

自分は、醜い本音を表に出しただけなのだ。

管理局内個人用転送ポート。

幾何学模様の描かれたその装置へ飛びつくように乗り、操作パネルへ自宅の庭に設置してあるポイントへの転送コードを打ち込もうとするも。

「う、うとうう……」

指が震えて上手くいかない。なんどもエラーを吐かれながら認証と設定を終え、ようやく転送が始まる。

魔力が奔り、光りに包まれ気がつけば視界は見慣れた自宅の庭だ。

夕日が差して、寒風が吹く。だけど眩しさも冷たさも何も感じなかった。そんな余裕、なかった。

「はっ……はっ……」

管理局の廊下を全力疾走してきた勢いそのまま、転がるように玄関に飛び込み、

「わ、たっ……いたあ」

上がり框の上、靴を脱ごうとした足をもつらせ本当に転ぶ。

「ちよおちよおなんの音や騒がしいな……つてなのちゃん!」

しかしそんな事してられない、さっさと身体を起こし靴を脱いでいると、そんな声がかかった。通りかかったらしいレンだ。

「うわあ、ごっつい音しよったけど大丈夫か……?」

「う、うん、ねえレンちゃん!」

「な、なんや?」

「おにいちゃんは……?」

そう問うた瞬間、はつきりとレンの顔が固まった。

「お、おししよは……その……お部屋で」

「……荷造り、してるの?」

「つうえええなんや! なのちゃんにはまだ話してへん言うてたんやけど……あ、なのちゃん!」

もどかしい思いで靴を脱ぎ捨てて、レンの横をすり抜け廊下を駆ける。

兄の部屋、その前に着いて。

きつと一瞬でも躊躇したら永遠にこの扉は開けられない。そう本能が告げるから、ノックもなしにドアを開け放った。

「……なのは」

部屋の中、片膝をついた状態で振り返ったその人の顔は。

肩で息をする自分を見やるその人の顔は、複雑だった。

きつと色んな事を考えてくれていて。

きつと色んな事を考えさせてしまっていて。

だから今、

「おにいちゃん、それ……」

「……こんなにいらんかとも思うんだけどな。とは言え、期間がどれくらいになるかわからないから」

この人の足元の鞆には、この家を出て行くための道具達が詰められているんだろう。

「……」

「母さんから聞いたのか？」

恭也は、なのはが事情を理解している事を察しているようだった。

「それとも晶かレンか……」

「……ううん、フェイトちゃんから」

「ああ、そうか。そう言えば一番初めに話したのも、あの娘だったな」

「……っ」

その台詞に、思わずうつむく。馬鹿にみたいに嫉妬した自分が最高に嫌だった。

「……すまないな、なのは」

そんな自分の様子があるいは憤っていると見たのか、兄は言う。

「お前がそんな風に、俺に苛立ちや嫌悪を覚えるのは当たり前だと思う」
う

兄は、そんな事を言う。

「お前はいい妹だったのに、俺はいい兄貴じゃなかった」

兄に、こんな事を言わせている。

「謝って許してもらおうとは思っていない。だからせめて」

「もうやめて」

そっす。

もう嫌だった。

「なのは……？」

「もう、やめて」

兄にこんな事を言わせるのは、もう嫌だった。

今まで逃げ回っていた現実と直面する事よりも、兄があんな顔でそんな事を言う、その方が何倍も何倍も嫌だった。

「もう、やめて……っ」

「なのは……」

視界が滲み、声が震えて。

「なのは、どうし……」

兄はそんな自分に歩み寄ろうとしたのか、立ち上がりかけて、
「いや、……すまん」

しかし途中で躊躇する。

そんな壁を作ったのは他ならぬ自分で、だから壊すのも自分の仕事
なはずだ。

「……め……ざい」

「なのは……？」

「おにいちゃん……——ごめんなざい！いいい！」

「な、なのは……？」

一度、一粒。溢れ落ちればもう止まらなかった。

「おにいちゃん……おにいちゃああん……っ」

「……なのは？」

当惑する兄の腰元に飛びつくように抱きつき、否、縋りついて。

「ごめんなざいごめんなざいごめんなざいごめんなざいごめんなざい
いいい」

言いたかった言葉を。言えなかった言葉を。

ようやく口にする。

「ごめんなざい！いいい」

「……どうして、お前が謝る」

馬鹿にみたいに同じ言葉を繰り返す自分の背中を、兄の手が優しく
撫でる。

ああ、どうしよう。

この温もりは、いつだって麻薬みたいだ。

まともにものを考える頭が蕩けていく。

「わたしが、わるいのお……おにいちゃんがでていくことなんてない
のお……！」

くそう、違うんだ、そうじゃないんだ。

でも、大丈夫。今の自分は馬鹿になっている。だから、臆病に隠し
た言葉を零してしまうはずだから。

「でていっっちゃやだああ……」

そうだ。

「だが……」

「やだあ……」

縫りつく手の力を強める。

「いっっちゃやだあ……」

やっと言えた。

「ずっと待ってたのお、わたし、わたし……」

「なのは……」

「いっっちゃやだあ……もうあんなのはいやだよお……っ」

言えた。

ぎゅっと目を瞑る。もう言った。言ったんだ。そして、言うんだ。どれだけ自分が馬鹿で怖がりかという事を。

「なのは……なら、……その、なぜあんな……」

「ごめんなさいい……——怖かったのお」

「怖かった？ 一体、何が？」

「だってわたし、っ……」

言葉を区切り、呼吸を整えて。

ちゃんと伝えよう。

「わたしもう、おにいちゃんの知ってるわたしじゃないから……っ」

「……それは、どういう」

「5年、経ったのっ。その間、いっぱい、色んな事があつて……っ」

「……」

兄は黙って、自分の背中を撫でてくれている。

焦らなくてもいい、そう言われたような気がして。

深呼吸。

長く息を吐き出して、同じくらいゆっくりと息を吸う。

呼吸と声が整った。

「背、結構伸びたんだ。髪も、こんなに」

自分の、母譲りな栗色の髪へ無意識に手が伸びた。毛先を悪戯にいじる。

「運動神経もね、ちよつとはましになったよ。魔法はね、少し自慢。教導官って覚えてる？ おにいちゃんがリンディさんにならないかっ

て提案されてた、管理局のお仕事の一つなんだけど、それになれて、もう結構現場に出てるの」

それこそ修羅場だって、自分で言うのも何だがそれなりにくぐって来た。

「5年、経ったよ」

「……ああ」

「……だから、私ね、私もう、9年全部、生きてる時間全部、おにいちゃんが傍にいてくれた高町なのはじゃないの」

もちろん9歳の時までだって四六時中、兄が見ていてくれたわけじゃないけれど。

それでも、家族として共に過ごす距離にはいた。

だけど、でも。

「今の私はもう、おにいちゃんの知らない5年間を過ごしてる」

「そう、だな」

「私ね、馬鹿だから、……ほんとに、馬鹿だから」

思わず眉根にシワを寄せ。

俯きながら、かすれた声を絞り出す。

「前みたいに、——愛してもらえないんじゃないかと思った」

「……そんな」

「わかってる！」

兄の言葉を遮り言う。

「私がどんな私になっても、おにいちゃんは私を愛してくれる！ そんなの、私が一番よくわかってる！ わかってる、わかってる、……頭では、わかってる。わかってた」

声と手が、どうしたって震えてしまう。

「怖い」

そう、だって怖いんだ。

「もしも、もし、万が一、おにいちゃんが前みたいに、私に接してくれなくなったら、おにいちゃんが前みたいに、私を私として愛してくれなかったらどうしようって……思っちゃった」

「なのは……」

「髪型、変えたんだな」って、おにいちゃん、言ったよね」

それは、ジエイル・スカリエツティ一味との戦いの後、アースラ内での事だ。

「そのなんでもない一言で私、怖くなっちゃったの」

ああそつか、ああそうだ、と。

私はもう、兄の知ってる高町なのはじゃあないんだ、と。

あの一言で気づいてしまった。

「……おにいちゃんに悪いところなんて一つもない。全部全部、私が勝手に怯えて、それで」

「じゃあ、だからお前は……」

「本当の事知るよりは、曖昧なままの方がいいって……。はつきりわかつちやうよりは、違うかもしれないって、そう思えた方がまだいいって……思ったの」

兄に愛されないかもしれない。その恐怖の大きさは、上手く言葉には出来そうにない。

わけがわからないくらいに怖くて。

だから、わけがわからなくなってしまった。

「ごめん、なさい」

そして結局、一番大事な人を傷つけた。

自分が傷つきたくないと思っただけで逃げ回って、その結果、自分なんかよりもずっとずっと、絶対に傷つけない人を傷つけた。

「おにいちゃんが悪いなんてこと、一つもないよ。一つもないの。わたしにとって、おにいちゃんは、世界で一番大好きな人で、世界で一番大切な人だよ。今も、昔も、これからも、ずっと」

言い終わった後。

長い、長い息。心底安心しきったような、そんなため息が聞こえた。

その主は、なのはの髪を撫でながら言う。

「怖かったのは、俺も同じだ」

「……え？」

「俺も、お前に嫌われているんじゃないか……いや、もう嫌われたものだと思うって、それに直面するのがきつと怖くて、だから、こんな選択

をしたのかもな」

兄は自嘲気味に、床に置かれた荷物を見やった。

「お前のためを思って、なんて言いながら、怖くて逃げ出そうとしたのかもしれない」

「怖くて……?」

「ああ」

くしやりと、頭を撫で回される。

そんな小さな仕草一つで、こちらの頭は蕩けてしまいそうになっている事を、はたしてこの人はわかっているのだろうか。

「怖かった。なのはの言うとおり、俺はなのはの5年間を知らない。だから、その間にどうなのはの考えが変わったのかわからなくて。

……正面から拒まれるのが、怖かったんだ」

臆病な兄妹だな、と。

兄は笑った。

なのはも涙でぐしやぐしやの顔で笑う。

しばらく抱き合ったまま時間が過ぎて。

「ん……」

兄が、何かに気づいたように顔を上げた。

「おにいちゃん?」

「……この気配は、美由希か。美沙斗さんもいるな」

「おねえちゃん、着いたんだね」

当初の予定では、二人が香港警防隊から帰ってくるのはもう少し後のはずだったが、恭也が眼を覚ましたとの報にそんな予定は吹き飛んだ。

電話口で飛んで来るとは言っていたが、本当に速い。

玄関の扉が勢いよく開く音の後、遠く声が聞こえた。

「恭ちゃん起きたの!?! もう大丈夫なの!?!」

「お、お美由希ちゃん。……えっと、お帰りなさい。師匠は起きたけど、その、今は」

「何かあったの!?! 大丈夫なの!?! 今どこに……ん、気配あるよ! 恭ちゃんの気配だ!」

「落ち着きなさい美由希。落ち着いて、深呼吸よ、落ち着いて」

「母さんこそ呼吸浅いよ！ ねえレン、恭ちゃんは大丈夫なの!？」

「恭也は無事なの？ 命に別状は？」

「あ、あのー、その、お二人とも、お気持ちは大変わかるんやけど、待つて頂けると、その、今はちよおなのちゃんが……」

どうやらレンは気を利かせて2人を止めてくれているらしい。

ありがたいけれど、当然ながら申し訳なかった。

「おにいちゃん」

「なんだ？」

だから勇気を振り絞って。

聞く。

先延ばしにせず、逃げずに真つ直ぐ。

「修行、行くの？ 家、出るの？」

お互いの誤解は、解けた。

しかしそれとこれとはまた話は別だ。

「……」

兄は黙って眼を閉じた。

頷くのだろうか。

いやだなあ。

いやだなあ。

でも、今度はそうは言わない。

「さつきはごめんなさい。おにいちゃんがしたいようにして欲しい。我慢とか、しないで」

兄の生き方を、邪魔したくはない。

この人は、これまで散々自分を殺して家族を守ってくれたのだから。

「……」

沈黙。

自分の心臓の音がうるさい。兄に聞かれてしまっているだろうか。

そして。

やがて、恭也は口を開く——前に、首を振った。

「……おにいちゃん？」

「折角、御神流剣士が2人も帰ってきてくれたんだ」

兄はそう言いながら立ち上がる。

「修行をするなら、この家にいた方がいいだろう」

その言葉を聞いた時。

やっと自分の傍に、高町なのはの傍に、兄が帰ってきた気がした。

第18話 良い子ちゃん

カランカランと、硬い音が清廉な道場に響いた。宙を舞い、床に落ちたのは一本の木刀。中に鉄心の仕込まれた御神流特製の逸品である。

場には至近距離、見つめ合う男女。男の手には木刀が一本、女の手には二本ある。女の持つものの内、一本は男の首筋に当てられていた。

「——そこまで」

凜とした声でそう告げたのは、二人と少しの距離をとって立つ女性、御神美沙斗。

彼女の娘である男女の片割れ、高町美由希は目の前の男……自分の師であり兄である高町恭也の首筋から剣を引いた。

切っ先が、ゆっくりと下に降りていく。

「……強くなったな」

「恭、ちゃん……」

「強くなったな、美由希」

自分に打ち勝った弟子の眼を真っ直ぐに見つめて、恭也は言った。

「強く、なったな」

万感の、思いだった。

恭也が目覚めたとの報に美沙斗と美由希が飛んで帰ってきたのが昨日の事。そして今日、夜の気配さえ引きずるような早朝に恭也は美由希と、大切に育ててきた、しかし仕上がる最後の最後でその面倒を見る事の出来なかった弟子と五年ぶりの打ち合いを交わし。

齢二十二にして完成された御神真刀流の正統後継者は、二つ歳下になつていた出来損ないの師匠を、破つて見せたのだ。

剣士として、負けた事に悔しさが無いわけではない。だが、そんな気持ちは比率としては極々小さなものだった。

すると、恭也の手の中から美由希に弾き飛ばされなかった方の木刀が抜ける。意図的でなしに武器をこんな風に取り落とすなんて、恭也の人生で今までに一度もなかった事だ。

「きよ、恭ちゃん……」

空いた両手で、恭也は目の前の弟子を抱きしめた。返ってくる感触は女性らしい柔らかさを持ちながらも、鍛えられた一級品の刀のような強靱さを示している。

「どれだけ彼女がその人生を剣に捧げてきたのかが、そんな事からも伺えた。」

「美由希……すまなかった」

「どうして、恭ちゃんが謝るの？」

「御神の修行は辛かったろう、苦しかったろう、……嫌だったろう」

「ずっと、思っていたのだ。果たして妹に御神の技を伝える事が正しいのだろうか。御神の家は、分家も含めて既に潰えた。技を守っていく意味なんてない。」

「当人に請われたからとは言え、あの時自分は突っぱねるべきだったのではないか。」

「この娘に掴ませてやるべきなのは冷たく硬く黒い剣でなく、普通の女の子としての幸せだったのではないか。」

「そんな疑問は、ずっとあって。」

「健気に律儀に、自分の後を追って来たこの娘の。」

「弟子として今、師である自分を踏み超えたこの娘の。」

「味わってきた、否、味わわせてきた労苦を思えば、自分は謝らなければならぬはずだ。」

「辛かったよ、苦しかったよ。でもね」

「床に恭也と同じく、得物を落として。」

「その両手で美由希は恭也を優しく抱きしめ返した。」

「嫌だなんて、思った事ないよ。だってこれは、優しかった父さんと、ちよつと意地悪だけど憧れの兄さんの技だから」

「……そう、か」

「うん、そうだよ。これがなかったら、私じゃない」

「しばらく二人は無言のまま抱き合って、どちらともなく身体を離す。顔を合わせ、お互いの目尻に浮かんだ雫を笑い合った。」

「美沙斗さん、有難う御座いました。美由希をこんな」

「言っておくけれどね、恭也。私は最後の仕上げをちよつと手伝っただけだよ。この娘をここまでの強さに育て上げたのは君だ。……そんな事、言える立場じゃあないけれど、だからお礼を言うのは私。本当に、……本当に、ありがとう」

「……いえ」

潤んだ瞳を伏せて隠して、「歳をとると涙腺が緩い」と美沙斗は苦笑しながら溢した。

「しかし、こういう結果になったんだ、俺は美由希を師匠と呼ばなければならぬか」

「え!? い、嫌だよ! 冗談だよね恭ちゃん!」

「お前の方が強いのは事実だし、俺は未だ完成もしてないんだぞ」

「だからって私を師匠だなんて呼ぶ事ないじゃない!」

よほど嫌なのか首をぶんぶんと振る美由希。恭也は口の端に親しい者だけがわかる小さな小さな笑みを浮かべて、大真面目な声で言う。

「宜しく願います、師匠」

「うあーやだー! 絶対なんだかんだ私の方が怒られるに決まってるんだから!」

「厳しく願います、師匠」

「弟子の方が厳しいパターンじゃない! やだよ! 教え方がなっていないって怒られるのやだよ! 教わるなら私じゃなくて母さんに!」

娘からの指名に美沙斗は難しい顔を作る。

「……いや、私の手に恭也はちよつと重いよ。美由希、頼んだ」

「母さん!」

「はは、……まあ、しかしね恭也」

すつと表情と声音を真面目なものへ直して、美沙斗は言った。

「実際、君に教える事なんてほぼないよ」

「……美沙斗さん? 俺は、だつて」

「あのね、恭也」

諭すように、完成された歴戦の御神流剣士は言う。

「君は否定するかもしれないが、才能は相当のものだ。そして何より、

その原石を輝かせるための研鑽も山と積んできている。本来、とうに君は完成をみているはずなんだ」

美沙斗の視線が恭也の脚、正確には右膝を射抜く。

「それを阻害していた最大にして唯一の原因は、しかしもう解消されている。技術も精神も君は十二分だ。足りないのは一つだけ」

「それは……？」

「慣れだよ」

恭也にはピンとこなかったが美由希は違ったらしい、うんうん頷いている。

「恭ちゃんさ、気づいてた？ さっきの試合中、ずっと右膝をかばってたよ」

「……そうだったか？ いや、お前が言うからにはそうなんだろうな」
「長いこと怪我をしていたから仕方ないんだろうけど、もう健康なはずなのにたまに不自然な、つまり無駄な動きがあつて、私が勝てたのもそこを突いたからだよ」

言われ、己の膝を見る。……確かに、白状してしまえば『全開で使える健康な脚』に慣れていないのは事実だ。

どこか、おっかなびつくり動かしてしまっている。そんな隙を完成の域にある御神流剣士相手に出せば、まさか勝てるはずもないだろう。

「二日二日とは言わないが、私達相手に実戦稽古を積みばそう遠くないうちに君も完成されるだろう。ついでに折角だ、正統奥義の鳴神も教えておこう」

「有難う御座います、宜しくお願いします。すみません、お仕事もお忙しいのに……」

「可愛い甥にそれくらい世話焼かせてくれ。とは言え、しかし申し訳ないんだが、斬式奥義の極みである閃は教えられないんだ。私にも出来なくてね」

苦笑しながら美沙斗はそう言った。

「閃、か。私も出来たのは、あの時だけだなあ」

「届いただけでも相当なものだよ。流石は静馬さんの娘、と言ったと

「ころかしらね」

「母さんってさらつと惚気けてくるよね……」

「そつ、……んな、事は」

その白い頬を赤く染める美沙斗をさらにからかう美由希、母娘仲はすこぶる良好なようだ。

(……しかし、閃か)

あの時、リインフォースの世界の中で、自分は確かに。

「恭也？」

「……いえ、なんでもありません」

今はあれの事は置いておこう。恭也は頭を振り、足元の木刀を拾う。飛ばされたもう片方も取りに行かなくては。

「あ、そうそう恭ちゃん」

「なんだ？」

「あのさ、これだけは言っておかなきゃと思つて。さつき私が恭ちゃんより強いって言つてたけど、そんな事はないよ」

「……何を言っているんだ」

今しがた打ち合つて勝負がついたばかりだというのに、美由希は恭也にしてみれば不可解極まりない言葉を放ってきた。

「まさか手を抜いたとでも思っているのか？ 俺は本気だったぞ」

「わかつてる、ちゃんと本気で戦つてくれた事くらいわかつてる。でもさ」

恭也と同じく足元の木刀を拾いながら、当然の事のように美由希は言う。

「本気でも、全力じゃあなかったよね」

「何を」

「恭ちゃんの全力は、——御神流だけじゃないでしょ？」

ぴつと、拾つた木刀で美由希が指したのは恭也の左小指。

そこに嵌つた、控えめに輝く銀の指輪だった。

「恭ちゃんがえつと、魔法使い？ 魔導師？ とにかく、そういうものとしてもすごく強いって事、聞いてるよ」

「……そうか、魔法の事をお前たちは知っているんだな」

「恭ちゃんがあんな事になってたし、なのはの進路も進路だしね」
それはそうか、納得である。

「私はフェイトちゃんからよく話を聞いてただけだし、恭ちゃん本当にすごいんだってね。ビルとか真つ二つに出来るんでしょ？ さすがにちよつと勝てそうにないかな」

「臂力だけが単純な強きではない事くらい百も承知だろうが」

「もちろん、どれだけ大きな力を持っていようが使いこなせない素人なら私は負けない。だけど、私の師匠はそんな甘い剣士じゃない」

「……だったらお前もどうだ、習ってみるか？」

「あー……魅力的だけど、……——我、剣をとる者」

美由希は木刀を愛おしそうに抱きながら、覚悟の座った、しかしどこか歌うような声音で言った。

「我、生涯を剣と共にありて、剣と共に道を行く者。共に歩みしこの道を、いざ行かん、いつか命の尽きるまで……ってね」

「美由希……」

「私は御神を極めるよ。これでも正統後継者だからね」

「……そうか」

どうやら弟子は、腕前だけでなく志も、もうすっかりと立派な御神正統の剣士だった。

「でも恭ちゃんはさ、折角魔法と出会えたんだからそつちの道も考えたら？　なのはと同じような、さ」

「まあ、おいおい考える」

「うん、ゆつくり考えたらいいよ」

その言葉に頷きながら、恭也は改めて美由希を見つめる。

手塩にかけた愛弟子。大切に育ててきた、恭也の生き甲斐。彼女はもう完全に、自分の手を離れた。

(……どう生きたものかな、これから)

その問いに、今はまだはつきりとした答えは出せそうになかった。

12月30日。

高町家のリビングではソファやテレビなど場所を取るものがす

べて取り払われ、代わりに長机が設置されていた。

それなりの広さを持つその空間はしかし、今や多数の人間で埋まっている。

晶やレン、それに美沙斗も今年が入ってはいるが、それ以外は基本的に”あの時のメンバー”である。

「えーそれでは、毎年だったら私が挨拶をさせてもらっているんだけど、今日はやっぱり……さ、恭也」

桃子に促され、部屋の中心で立ち上がった恭也は周りをぐるりと見渡した。

(なんと言ったものか……)

間違つても口が上手い性質ではない。スピーチじみた事なんて、した覚えはついぞなかった。

「な、何泣いてんねんあほお、おししよが、おししよが今から話すんやぞ」

「お、お前こそ、料理にかけでもしたら、殺すぞ」

そんな恭也の視界に、レンと晶の姿が映って。

折角の美人を台無しにした、泣きじゃくる二人の姿が映って。

「ありがとう」

自然と、言葉は溢れ出て来た。

「それから、すまない。随分と待たせて、心配をかけてしまった」

「ほんとだよっ、おせえんだよ、馬鹿……」

憎まれ口を叩くヴィータは目元をぐしぐしと拭っている。

「情けない事にこれからの道筋も決まってはいないし、大それた志があるわけでもない。だけど」

無意識に、手を開閉しながら恭也は言った。

「だけど、生きている。皆にまた、こうして会えた」

しゃくりあげる声が増えた。勝手な事に、それに暖かさを感じてしまふ。

「感謝を。……すまない、本当に、これくらいしか言えな」

「おししよおおおおおおお！」

「ししよおおおおおおお！」

感極まった様子の晶とレンが飛びついてきて、そして桃子が乾杯と叫んだ。

「お兄ちゃん、はい！ あとは何が食べたい？」

「いや、とりあえずこれで十分だ。ありがとう。なのはも自分のものを」

「うん、大丈夫。食べたいのがあったら言っただけ」

「ああ」

二人の仲が正常な、本来のものに戻った事を、なのはから電話で報告された時は心から嬉しかった。これで本当に恭也が帰還したんだと、そう思えた。

その事は、もちろんいいのだ。

いいのだけど。

「べつたりすぎやろ」

「それ、ほんとにそれ」

はやての言葉に、フェイトは力強く同意と頷きを返した。

隣合って座るフェイトとはやての対面に恭也となのはが並んでいるのだが、二人の距離は誇張なしにゼロだ。

ぴつたりと、否、べつたりと。

なのはは恭也にひつついている。今日に限った事でなく、一緒にいるときは常にこんな調子だった。

「しかしなんだ、ついこの間までは……いや、もう昔か。俺がこうして取ってやっていたんだがな……」

「えへへ、私も成長したんです。料理もね、結構上達したんだよ。そのコロッケ、私が作ったの」

「そうか、……ああ、美味しい」

恭也の感想に顔を綻ばせるなのは。好意をまるで隠そうともしていないその姿勢は、ひどく吹っ切れたものに見える。

「なあフェイトちゃん、これ、なのはちゃん完全にブレーキ取っ払ってんのと違う？」

「だろーね。あれはもう止まる事なんて考えてないよ」

「……確認やけど、今更の確認やけど、血、繋がってるんよね？」

「半分ね。……だけどそれが抑えになるとはとても」

「思えへんなあ、あそこまで行くと」

ひそひそとフェイトとはやてが意見を交わす前でも、まるで新妻のような甲斐甲斐しさでなのは恭也の世話を焼いている。その顔は弾けるような幸福に満ちていた。

「あかんあかん！ 独占を、独走を許したらあかん！ ……恭也さん！ これも試してみてくださいます？ 私が作ったんです」

今日の料理もいつもと同じように基本的には晶とレンが用意してくれたが、なのはやて、そしてフェイトも各々何品かは手がけている。

自分の一番の得意だからという理由でなのはは洋食を、恭也の好みだからという理由でフェイトは和食を、では二人とは違うジャンルで攻めるとはやては中華を選んだ。

自分の全力を出すなのは、相手に合わせるフェイト、状況を見るはやて。ものの見事に性格が出たなどはクロノの弁だ。

「はやてはなんというか、……流石だな。店でも開けるんじゃないのか？」

「いやいやそんな。でも恭也さんさえ宜しければ、毎日うちに食べに来て下さってもええんですよ？」

「ご飯は貴重な家族団欒の時間だから駄目だよね、おにいちゃん」

「まあ、まさか人様の家に毎日入り浸るわけにもいかんしな」

「それは残念、でもたまには来てくださいね。ライン達も待つとるか」

容赦ないカットインで兄への誘いを横から叩き落としたのはと、予定調和的に撤退しながらしっかり布石を打ったはやての視線が空中でぶつかる。

恭也が気づいているのかどうかはわからないが、二人ともその瞬間だけは眼が笑っていないかった。

(……って、駄目だ駄目だ、このままじゃ私だけ置いてけぼりだ！)

「恭也さん、よ、よかったら私のものも……」

「ああ、もらおう。……巾着か」

「はい。卵をとじて煮てあります」

「……よく味が染みている。なんだか安心するな。美味しいよ」

「あ、ありがとうございます……！」

フェイトの視界の端、なのはが占めている方とは反対側の恭也の隣をレンと争っている晶が、ぐっと親指を立てた。笑顔で会釈を返す。これは彼女に教えてもらった料理だ。

「しかしフェイトがこんなことでこの和食を作るとは。好きなのか？」

「……はい」

まさか、貴方が好きだから貴方の好きなものも好きなんです、なんて事は言えなかった。

「そうか。しかし、随分と上手に作る。フェイトが覚えているかどうかかわからないが、以前君に料理を……オムライスだったろうか、食べてもらった事もあったが、もう君の方が上手かもしれないな」

覚えているかどうかわからないだなんて、まさか、あの日の事を忘れるはずがない。恭也との思い出の中でも、あれは特別で格別なものなのだから。

「そ、そんな事は。でも、その、恭也さんさえ宜しければ、たまに味を見……」

「いやあフェイトちゃんは執務官として忙しいからなあ。そんな暇はないんちゃう？」

「そうだよそうそう、新進気鋭のエリート執務官は仕事に邁進しないと！」

「な、ふ、二人だって捜査官と教導官でしょ！ 忙しきなんて大して変わらないよ！」

露骨な潰しにかかってきたはやとなのはは、いやいやそんな事は、執務官様に比べたらと揃って首を振る。

攻めに躊躇しないなのはと巧みな策略家のはやとを正面から敵に回した時、フェイトは己の武器のなさに途方に暮れる。その奥ゆかしさは恋愛においては不利になるよと、いつだったかエイミイにもらっ

た忠告が頭をよぎった。

「そうか、フェイトは忙しいのか。……いや、仕方のない事だが、……
そうか」

「……え、あの、恭也さん？」

「なに、また一緒に鍛錬でもと思っていたんだが、なかなか難しいか」
さあつと、顔から血の気が引いた。

そんな。

だって自分は、その日を夢見て鍛えてきたのに。

「いえ、あの、でもその、ほんとに」

言葉が上手く出てこない。

駄目だ駄目だ、このままじゃ駄目だ――。

「おにいちゃん、鍛錬ならトレーニングって事でスケジュール管理し
たらなんとかなるよ」

「そうそう、それに忙しいゆうても学校にも通えてるくらいですから。
さっきはちよつと大げさに言うただけです」

「そうなのか？」

恭也へ揃って、なのはとはやては頷く。

(……なのは、はやて)

二人の厚意に感激し、感謝しそうになって。

(――違う違う！　そもそも二人が変な事を言うから！)

危ないところで思い直し、礼は言わないぞと目で伝えると二人は不
敵な笑みを返してきた。こちらがお礼でも言おうものなら恩を売っ
たとしておくつもりだったのだろうか。

まったくもって油断のならない恋敵だ。

それでもやっぱり。

「恭也さん、よろしければまた……」

「ああ、そうだな。そうしよう」

負ける気も譲る気も、ありはしないけれど。

「恭也あ！　あんたももつと飲みさないな！　ほらほら！」

「俺は下戸だ、知っているだろう」

「えー！ 母さんのお酒が飲めないっていうのー！」

完全に出来上がっている。恭也は隣で絡みつく桃子にため息を吐いた。

自分のために開いてもらった席なので出来る限りいろいろな人に挨拶をしようと、元々居たところから移動してきてみたのだが、いきなりの絡み酒とは。

桃子がこんなになるとは正直、予想していなかった。童顔に似合わず、彼女は大酒呑みのはずなのだ。

「恭也、すまないね、……一応止めたんだが、力及ばず」

「美沙斗さんが謝る事ではないですよ」

桃子を挟んで二つ隣、言葉通りのすまさそうな顔で美沙斗が言う。戦闘時の苛烈な姿からは想像しにくいのが、普段の彼女は控えめな気性の人物である。人当たりは良くせに割りと人の意見は聞かないタイプの桃子を相手にするのは、ちよつと荷が重かったのだろう。

「桃子さん、最初つかからかなりのペースで飲んでらっしゃいましたから」

「よく飲まれる事は知っていたんですが、今年はすごいですね」

苦笑しながらそう言ったのはリンディ、クロノのハラオウン親子だ。恭也の対面に並んで座っている。

「いざとなったら私もいますから」

桃子とは反対側の隣、安心出来る声音で言ってくれたのはシャマルである。

「すみません、お願いします」

管理局で医務官をやっているらしい彼女がいるなら安心だ。

なんというか、面子的にどうやらここは保護者ゾーンのようなところらしい。

「クロノは、まだ酒は……」

「19なので、少なくともこちらでは飲まない事にしています。執務官がルールを破っては格好が付きませんから」

「なるほど」

もう随分大人びて見えるが、一応こちらの世界の基準では成人はしていないらしい。

「恭也さんはじゃあ、あまり飲まれなんでしょうね」

「ああ、苦手だな。とは言えまったく駄目なわけでもない。クロノが20になつたら一緒に飲みに行こう」

「はいっ、是非！」

「あら、いいわねえ」

頷くクロノを見て、リンディは嬉しそうだった。ここも相変わらず、母子仲は良好なようだ。

「そういえば恭也さん、今日はクロノからちよつとした報告があるんですよ」

「報告、ですか？ へえ、それはどんな」

「……母さん、今日はもう恭也さんの快気祝いの席になつたんだ。別にそんな」

「あら、駄目？」

「駄目ではないが……」

「なんだ？ 俺なら構わないぞ、快気祝いなんて、皆が好きにやりたいようにやってくればそれでいい」

烏龍茶で喉を湿しながら恭也が言うと、クロノは渋い顔で迷いを見せた。

「……ええと、ですね」

「なに、恥ずかしいの？」

「……それなりには、そうだ」

母親の言葉に素直に頷いて、しかしクロノは結局、意を決したように口火を切った。

「あのですね、……わざわざこうしてお話するような事ではないのかもしれないですが、その、エイミィとですね」

「エイミィと？」

「……あ、もしかして」

「あら、あらあらあら！」

恭也は未だ要領を得ないが、シャマルと桃子は感づいたようだ。

「……？」

美沙斗は首を傾げている。よかった、自分と同じ側の人間もいるよ
うだ。

「母さん、わかったのか？」

「わかんないわけじゃないじゃないこの朴念仁っ！」

パシンパシンと笑顔で背中を叩かれる。シヤマルはともかく、こん
な酔っぱらいにも察せられたのと思うと暗澹たる気持ちになつて
くる。

「ああ、すまん、話の腰を折つて。それで、エイミイと？」

改めて問う恭也へ、クロノは酒を飲んでるわけではないのに赤い
顔で告げた。

「エイミイと、ですね。……交際をしまして。結婚を前提に」

一拍の空白を置いて、シヤマルが黄色い歓声をあげ、桃子がおめで
とう！ と大きな声で大喝采。美沙斗が柔らかい笑顔で拍手を贈る。

「え、なにになに？ 何がおめでたいの？」

「なんかあつたん？ 宝くじでも当たつたん？」

遠くから疑問の声をあげたのはとはやて、加えてその周りの面子
へ、エイミイがクロノと同じような事を告げている声が聞こえた。

その一瞬前、二人がアイコントを交わす姿は照れくさそうで、そし
てやはり幸せそうだった。

ともあれ、ここに居るのは大半が女性陣。放り投げられたその話題
は最高の肴だったようで、場はそれはもう姦しい盛り上がりを見せ
る。

歓声の中で、恭也は当の本人に声を掛けた。

「クロノ、おめでとう」

「ありがとうございます……すみません、騒がれるような事でもない
と思つたんですが」

「何を言う。こんなにめでたい事なんだ」

人と人が結ばれるというのは、尊い事だと思ふ。

それはどうしたって、人が紡ぐ縁の中で飛び抜けて特別なものなの
だ。……かつて、今隣で騒いでいる酔いどれと、この人を置いていつ

てしまった男が縁を結んだ時も、奇蹟のように感じたものだ。

「では、もう婚約という事か？」

「はい」

「そうか、……エイミイか。これ以上ないくらいに、お似合いの二人だ」

「そ、そうですか？」

「ああ。彼女以上にクロノを理解している人物もいないだろう。俺が言う事でもないだろうが、大事にするといい。それと、……まあ、なんだ、大事にするのなら」

「……はい」

クロノは、神妙な顔で恭也の言葉の続きを口にした。

「必ず、彼女の元に帰ります。どんな任務があっても」

「……そうしてやると、良い」

恭也も、クロノも。

最愛の男を失った女性を間近で見てきた。だからこそ、同じ気持ちで領き合えるのだ。

「しかし、以前に聞いた話ではエイミイとはそういう関係じゃないと言っていたと思うんだが」

「そ、それは……心境の変化と言いますか」

「変化、か。あの時はまだ自分の気持ちに気づいていなかっただけじゃあないか？ エイミイの方がどうだったかはわからないが」

「う……ええと、それなりに昔からだと言っていました」

「ほう。なら、クロノは結構、鈍いという事か。意外な弱点だな。俺がクロノだったら流石にきつと気づいているぞ」

その言葉に、ピタリとクロノが硬直した。

「クロノ？ すまん、気を害したか」

なんとなく、クロノの事は弟のように感じている事もあって、例えばなのはにするようにこう言う事を言ってしまうがちだった。軽率だったか。

「ああいえ！ そんな事は！ ……ただ、そのですね」
「どうした？」

「失礼ながら、恭也さんだったら僕と同じように気付かなかつたのではないかなあと。その、……恭也さん、そういう機微にはあまり」

「確かに敏くはないな。だが、特段鈍くもないつもりだぞ」

何の気なしに、本当にそう思っているがゆえに普通に放った恭也の言葉だったが、クロノはどうしてか難しい顔をした。哲学者のようだ。

と、そんな会話をしていると。

「ねえ恭也あー！」

「茶を零すだろう、飛びかかるな。なんだ？」

桃子がまた絡んできた。絡みついて来たと言ってもいい。

また、というか、まだ、というか。まだまだ飲んでいられるらしい桃子は赤ら顔のへべれけ状態で、言う。

「あんたは彼女の一人でも作らないのお？」

「……俺？」

「そうよお！ 一個下のクロノ君が婚約よ婚約う！ なのにアンタは彼女もいない！ たとえばあ、いまここにはあ、美人どころか揃ってる！ わけよ！ 誰か好みの娘はいないのお？」

(モモコさんも爆弾落とすよなあ……)

テーブルの端、ヴィータは眉間に皺を寄せながらそんな事を思った。

恭也が気づいているかどうかは知らないが、場の空気は明らかに変わった。先ほどまでのバカ騒ぎから、ある種の戦場じみたそれへと、だ。

「あのなあ」

「何よお」

「そういう値踏みのような事はするべきじゃないだろう」

「お堅いわねえ、いいじゃない」

うんうん、いいいい、と。

明らかに前のめりなのは晶とレンだ。聞けば二人は恭也と随分長

い付き合いで家族同然に過ごしてきたという話だし、なるほど期待も高かろう。

「彼女？ 恋人？ 騎士恭也の？ ……恋人」

「お姉さま、どうしました？」

「い、いや……恋人」

リンツの隣でリインはそわそわと落ち着かない。その豊満な身体を悩ましげにくねらせて、無自覚だろうが無駄に色気を振りまいている。

「……恋人、か。ふむ」

澄ました顔で茶をすすするシグナムは、しかし顔だけでなく気までも妙に研ぎ澄ましている。敵と相對しているわけでもなし、何やっっているのだとヴィータは呆れ顔でため息を吐いた。

「……」

「……」

「……」

そして無論というべきか、ピリピリとした空気を最も強く放っているのはなのは、フェイト、はやての三人組だ。

大魔法の展開準備中でもあんな雰囲気はお目にかかった事はない。

どうするんだ、この空気。

「何か起きたときのために、結界の準備だけはしておくかな……」

本気の声でユーノがそう漏らしたのが聞こえてしまった。

(いいなあ、お前らは)

視界の端、部屋の隅で早々に並んで丸くなり眠りについたアルフとザフィーラに羨望の想いを向ける。今からでもそちらに混ざりたい。「恭ちゃんも、そろそろ気づけばいいのにねえ」

ヴィータの対面で、そんな風に苦笑しながら零したのは美由希。

彼女は他の面々とは違った空気を纏っていた。どう、とは一言では言えないけれど、少なくとも浮足立ってはいない。

強いて言うなら、暖かく見守るような。

そんな表情だ。

(なのはの姉ちゃん、なんだよな)

恭也を同じく兄としているのに、なのはとは随分スタンスが違う。いや、もちろん妹としては彼女の方が当たり前前に正しいのだろうけれど。

「ほらあ、恭也、これでも飲んで飲んで」

「おいこら、……酒じゃないか。しかも強い」

「酔っ払っちゃいなさい！　そして吐いちゃいなさい！」

「違うものを吐かせようとしているだろう！　もう飲まんぞ」

しかし、こう言っただけなんだから一番いちやっついて見えるのはあんな事をやっている桃子だと言えなくもない。見た目が異様に若いだけに、恭也とああしていると仲睦まじい恋人のようだ。

「桃子さーん、がんばれー……！」

「おししよに飲ましたってくださーい……！」

「……そこそつと、しかしはつきりとした口調で晶とレンがエールを送る。」

「……かーさんのお酒は、飲めないって言うのね」

「そういうわけじゃないが、そもそも俺は酒は」

「ずつと、待ってただけだなあ……」

「うわ、母さん卑怯だなあ」

呆れた風に美由希が笑う。

「恭ちゃんなんだかんだ甘いから、ああいうのに弱いんだよねえ。あれは飲まされちゃうよ」

「……そーなのか？　なんか意外だな。甘いのか、あいつ」

ヴィータの問いに、美由希は間断なく頷いた。

「うん。本人は厳格なつもりなんだろうけど、最後の最後で結局甘い。ヴィータちゃんは、恭ちゃんのそういうところ見たことない？」

「……あるかも。そうだ、そうだな」

そう、そうなのだ。

戦いの時は突き抜けた冷酷さを見せるくせに、根っここのところは甘々のお人好し。彼がそういう人間だから、自分達は今、こうしているのだ。

そして、美由希の予想は正しかった。

「……あと少しだけだぞ」

「さすが恭也！ 私の息子！ ほら、ほらほらほらあ」

なみなみとグラスへ酒を注がれ、ままよとばかりに呷る恭也。続けざまに二杯、三杯。あれはもうやけくそだろう。

「ああ、くそ、……クラクラする。やはり酒には弱いんだな……」

顔にはそこまで出ていないが、どうやらかなり回っているらしい。呟く言葉は、少しだけだが呂律が怪しい。

「しよ、将！ 将！」

「なんだ、リイン」

「なんと言うか、その、……今の騎士恭也は、その、ちよつと」

表現に困っているらしいリインフォースを、レンが頷いて助けた。

「わかりますよ、リインフォースさん。色っぽいつて言いたいんやろ」

「……そう！ えも言われぬ色香がっ」

握りこぶしを作って力強く言うリインフォースを、シグナムが呆れたように見る。

「リイン、興奮するのはいいが恩人を襲うような真似はするなよ……」

「……？ 私が騎士恭也を傷つけるような事をするはずがないだろう？」

「性的に、だ」

「……なり!? せ、せ……なにを、そんな、せ、性的に……なんて」

白い肌が一瞬で真っ赤に茹だった。あんな肉体をしているくせに、もしかしたら八神家で一番初心なのかも知れない。

そんなやり取りの向こう側、肝心の恭也はと言うと。

「……眠い」

「あ、ちよつと恭也あ！ 寝ちや駄目よお！」

どうやら許容量を超えたらしく、頭をぐらんぐらんと振っていた。今にも眠りに落ちそうさ。

「ねえほらあ、例えばさあ、なのはとフェイトちゃん、はやてちゃんだったらあ？ あんなに可愛くてしつかりした娘達なかないないわよお！ 誰が一番好みい？」

「うっわ、爆弾二発目」

思わずそう呟いてしまった。あれは、きつと桃子もやはりと言うべきだろうが、かなり回っているのだろう。

名の上がった三人はいよいよ極限まで張り詰めた空気を放ち、ピインと背筋を伸ばして恭也の返答を待っている。

しかし、恭也の答えは。

「いや、その三人は、そういう風には全く見ていない……。良い子達だが、妹のようなもので……。あと、なぜなのはを入れた……。問題外だろうに」

「あ、なのは！」

「テ、テストロッサ！」

「主はやて!? お気を確かに！」

崩れ落ちるように机に突っ伏した三人に、ヴィータ、シグナム、リインフォースは思わず悲鳴をあげた。

あんまりだろう、あの答えは。

極限まで酔って出た、おそらくは偽らざる本音。

それであんな風に否定されては、崩れ落ちるのもむべなるかな。

「もんだ、い、がい……。あ、が、……。あ」

「なのちゃん、なのちゃん！」

「あかん、軽く痙攣しとる。おししよも何てむごいことを……」

最も重い傷を負ったのは言うまでもなくなのはだろう。悪気も害意ももちろん皆無だろうが、問題外とは想い人から告げられる言葉としては痛すぎる。

「だああ、もう！ じゃあ他にはあ!? いるでしょ、ここにはいっぱい

！ 誰が好みなのお!？」

「好みい？ そう言われても……」

「まさかクロノ君？」

「そんなわけないだろう……」

桃子もいよいよ本当に酔いどれが過ぎて、とんでもない事を口走っている。

「クロノ君、なんでちよつとがっかりしてるの……?？」

「なっ、いや、がっかりなんてしていない！」

「クロノ君、まさか……」

「おい！ 変な誤解をするなエイミー！」

婚約しているカップルの間に最悪な形でヒビが入りかけていた。とんだ飛び火だ。

笑いをこらえきれずに吹き出してしまったユーノが、思い切りクロノに睨まれていた。

「じゃあ誰なのよお！ いないってこたないでしょ！」

「そう、言われても、だな……」

「付き合いたいとかそういう事じゃなくてもいいからあ、単純に好みはこういう人だってえ、言ってくればいいのよお」

「好み、好み、……好み、は」

「好みはあ!?!」

そして限界を迎えたらしい恭也はゆっくりと後ろにその背を倒し。

そして眠りに落ちる、その直前に。

「……み、さと、さん」

そんな、最後にして最大級の爆弾を置いていった。

「きよ、今日の鍛錬は、ここまでにしよう」

「え、いやしかし、まだ時間が」

「病み上がりで無理をするものでもない」

美沙斗の言葉に、しかし恭也は首を捻る。歳が明け、三が日も過ぎた1月4日。そんなに病み上がりというほどでもないつもりなのだが。

「美沙斗さん」

「な、なんだい？」

「俺、何かしましたか？ ……なんとなく、年末の食事会からよそよそしいような」

桃子に酒を飲まされたせいで途中から記憶のない、12月30日に高町家で行われた恭也の快気祝い会。

痛む頭を抑えて起きた翌朝から、どうも美沙斗の様子はおかしかつ

た。

「まさか、酔って美沙斗さんに何か変な事を」

「そ、それはない！ それはないから安心してくれ！ 大丈夫だ！」

「よかった。まあ、美沙斗さんなら酔った俺程度、どうにでもなるでしょうけど」

「それはどうかかわからないが、まあ、うん、何もなかったのは事実だ、うん。……何かあったわけでは、ないんだ」

「昼下がりの道場、美沙斗はあまり恭也の見たことのない、困ったような顔。」

「そ、それでは私はこれで。ちよつと仕事の資料をやっつけなければいけないから」

「ああ、そうだったんですか。すみません、お引き止めして」

「いや、いいんだ。それじゃあ」

「そう言うと、そそくさと美沙斗は出て行った。落ち着いた彼女にしては、やはりどこかおかしく見える。」

「……俺の気のせいか？」

「気のせいじゃないよ」

ひとりごとすると、後ろから声がかかった。美由希だ。

「美由希、お前、何か知っているのか？」

「まあね。……母さんの態度も直らないし、はっきり聞いとくかな」

「美由希？」

「ねえ恭ちゃん、これは恭ちゃんの妹としてっていうか、恭ちゃんの従姉妹として、つまり母さんの娘として聞くんだけどさ」

「そんな前置きをして、美由希は妙な質問を口にした。」

「母さんの事、好き？」

「美沙斗さんか？ それはもちろん」

「昔色々あったとはいえ、その事情もわかっている。今はただただ、尊敬と感謝を抱く人だ。間髪入れずに恭也は頷いた。

「それはさ、……その、場合によっては私のお父さんになる可能性もある方向で？」

「……お前、熱があるのならゆつくり休め」

「うわ言じゃないよ、ちゃんと聞いているの」

確かに美由希の目は真剣そのものだった、熱に浮かされているわけでもない。というか、本当に体調が悪かったなら一目でわかるし、ましてや打ち合いをしていて気付かなかったわけがない。

とは言え、それはあんまりにあんまりな問いだった。

「あのなあ、確かに美沙斗さんは魅力的な人だが、そういう目で見たことなんぞ一度もない。それに何よりあの人は、叔父さん一筋だろう」
「……そっか」

安心したように美由希は息を吐いた。なんだと言うのだ。

「ならいいけどさ。でも恭ちゃん、母さんって好みのタイプなんでしょ?」

「はあ?」

「違う?」

ずいっと、美由希は一步こちらに踏み込んでくる。なんだが、無碍にあしらうことの出来ない瞳を伴って。

「……まあ、なんというか、一緒に居て安心出来るというか波長が同じというか、そういう魅力は強く感じるから、ああいう女性とならいい関係が築けそうだなと思う。美沙斗さん本人とどうこうということとは決して無いが」

さすがにこんな事を言うのはあまりに気恥ずかしいのだが、美由希の瞳に押されて気がつけばそんな事を言ってしまった。

「……うん、そっか。ごめん、変な事聞いて」

「頼むから、これつきりにしてくれ」

ため息を吐きながらのこちらの台詞に、美由希は頷かずに笑っただけだった。

「ああ、フェイトちゃん、こんにちは」

「美沙斗さんっ。こんにちは、お邪魔しています」

高町家の敷地内、道場へ向かう途中でフェイトはどうやら母屋へ返す途中だったらしい美沙斗とぱったり会った。道着を着ているとこ

ろを見ると、どうやら汗を流していたのだろう。

「恭也に？」

「はいっ」

「そうか。あの子なら道場でまだやっているよ。しっかり見て貰うといい」

そう言つて、美沙斗は穏やかに微笑む。

(……綺麗だなあ)

フェイトの胸中に浮かんだ感想は、そんなストレートなものだった。なんというか、例えるならば椿の花のよう。ひっそりと、しかし確かに咲き誇るその美しさ。

「フェイトちゃん？ 私の顔に何か……」

「あ、す、すみませんっ、ちよつとぼーつとしちやいました！」

「……具合が悪いわけではない、のよね」

心配そうにこちらの顔を覗き込んでくる美沙斗。至近距離で見てもやっぱり文句の付け所なく美しい。二十歳を超える娘がいるはずなのに、まったくそんな風には見えない。

「はい、体調は万全です！」

「そうか、それなら良かった。わかっているだろうが、恭也の鍛錬はなかなか苛烈だからね。不調を押しては厳しいだろう」

苦笑する美沙斗。恭也の鍛錬は同じ御神流剣士である彼女から見ても重いものらしい。

「とは言え、あの子は師としても間違いない一流だ。よく学ぶと良い」

「はいっ」

「それじゃあね」

たおやかな笑顔を残し、無駄のない足運びで美沙斗は母屋の方へと向かっていった。

立ち止まったまま、その背を見つめる。

(……ああいう人が好み、なんだ)

納得では、ある。物凄く強くて見蕩れるほど綺麗で、大人で優しく心配りで、それでいてどこか儚げで。

なんとなく、彼女のような人が所謂大和撫子なのかななんて思う。

艶やかな黒髪も、そんな印象に拍車をかける。

「……はあ」

自分の髪先を摘みながら、ため息一つ。

自分とは、全然違う。

(そういう風には全く見てない、だもんね……)

それはそうだ。ああいう大人の女性がタイプなら、自分のような子供は相手にされなくて当然だろう。

……少しは成長したかな、なんて思っていたのだが。

「……いけないいけない」

頭を振って、沈んだ気分を払いにかかる。こんな事でどうする、今からその、”少しは成長した”部分の一つを見せに行くのだ。

しっかりと、鍛え続けた自分の武を見て貰うのだ。

「よし……」

気合を入れて、道場へ向かう。

「あ、フェイトちゃん」

入り口で美由希が手を振っている。会釈を返し、靴を脱いで上がらせて貰う。

「こんにちは、美由希さん」

「うん、よく来たね。そして、ついにこの日が来たね」

「……はい」

うんうんと、美由希は何度か頷いて、道場の中へ声をかけた。

「恭ちゃーん！ フェイトちゃん来たよー！」

「わかつている。よく来たな、フェイト」

美由希の声に、そして恭也が現れた。その少しだけ乱れた髪と服装に心臓が跳ねる。

(いやいや、そうじゃないそうじゃない)

ここはそういう所じゃない。色気立っている場合じゃないのだ。

「恭也さん、今日はよろしくお願いします」

「ああ、楽しみにしていた。君の5年間を見せてくれ」

「——はいっ」

こちらの返答に、恭也は小さく、しかし確かに頷いてくれた。

荷物を端へ置かせてもらい、入念な準備運動を終えてからバル
ディッシュをアサルトフォームで展開。二、三度振って身体のキレを
確認する。問題なさそうだ。

木刀を、右手左手それぞれに一本ずつ携えた恭也は既に道場中央で
待っていてくれる。

目をつむり、深呼吸一つ。

気持ちと息を改めて整え、彼の前へ。彼我の距離はおよそ3メー
トル程度。

「こうしてここで見ると、改めて大きくなったな。当たる視線の位置
が高い」

言われた通り、フェイトの側からも恭也の顔が近い。以前よりも、
ずっと。

果たして、腕前は近づけたのかどうか。

「身体の成長だけではない事を、お見せ出来たら」

「ああ、楽しみだ」

空気が引き絞られて。

お互いに、構えを作る。フェイトの世界が急激に縮まった。狭く狭
く、しかし濃密な彼との空間。

遠く、美由希が始まりを告げて。

フェイトは、躊躇をしなかった。最初から全速、トップギア。いつ
かの戦闘と全く同じ戦法。

出し惜しみする瞬間なんて、存在しなくていい。

「はあっー」

筋肉の加速、体重の移動、空気を切り裂く己の身体。

放ったのは、真つ直ぐな突き。単純ゆえに、最短距離を最速で駆け
る一撃。まだ当たってすらいないそれは、しかしすぐにわかった。こ
れは、今までで一番の一発だ。

高みも高み、今出せるフェイトの最高。

黒い閃光と化したバルディッシュの穂先が、恭也の胸元に迫る。

対し、彼は鋭い視線でしつかりそれを捕捉。二本の木刀を斜めに重
ねて、その中心点で受け止めにかかった。

彼の選択が逸らすでもなく避けるでもなかったのは、こちらの技を受け止めて力量を測ってくれるためだろう。

胸を借りよう、そして伝えよう。

私の5年間を。

バルディツシユが恭也の木刀に喰らいつき。

そして、衝撃を徹した。

「——っ!？」

視界の中、驚愕に恭也の眼が見開かれる。

見よう見真似の独学で、本家と比べたら驚くほど拙いけれど、しかし確かに御神の技で色づいた、そんな一撃は確かに彼の心を揺らしたように見えて。

「やあああっ!」

フェイトはもちろん追撃にかかり。

御神の技を覚えてしまったその代償を、やがて支払う事となった。

今日は、珍しく仕事が早く片付いた。

「ただいま、っと」

海鳴市のマンション、玄関で靴を脱ぎながらクロノ・ハラオウンは我ながらワーカホリックだと苦笑する。こうして家に帰る日が少ないというのは、しかし自分の家庭を持ったならどうなのだろうか。

「……うーん」

理解はこの上なくある相方だが、寂しい想いをさせるのは確かだ。子供が生まれたら、その子達にもそれを押し付ける事になる。

いずれきちんと話し合う必要があるなど、そんな事を考えながら廊下を進んで。

「……ん?」

普段、聞こえる事のない音色が響いている事に気づく。

「泣き声?」

しかも、それは。

認識すると同時、足は早まった。音の出処であるリビングの扉を、強張る手で開け放つ。

「う、うううう……ああ、つう、あああああ！」

そこには、声から予想していた通りの、しかし当たっていて欲しくなかった光景が広がっていた。

「フエ、フェイト……？」

机へ突っ伏して、泣きじやくっているのは義妹だった。

「うううう、うっ、ううう……ひっ、ううううううっ!!」

ボロボロボロボロと大粒の涙を零し、顔をぐしゃぐしゃに濡らし、痛々しい嗚咽を上げる。

彼女のこんな姿、見た事なんてほとんどない。悲痛な声に表情に、心臓をわし掴みにされたような感覚に陥る。

「あ、クロノ……」

「おかえり、クロノ……その、フェイトはちよつと」

両脇にはリンディとアルフ。両方共、弱り果てた顔をしている。

(どういう状況、だ?)

義妹の姿に驚き固まっていた頭が、今度は高速で動き出す。

フェイトが泣きじやくるなんて、本当によほどの事態である。一体何が起こったのか。

真っ先に考えたのは、任務で同僚に何かあったのではという事だ。MIAやKIA、もしくはそれに近い何か。

しかしそれはおかしい。そんな事態になれば自分の耳にも何かしらの情報が入っているはずだ。フェイトとは職域が近いゆえに、自分が何も知らないという事はまずありえない。

次に考えたのは、学校で何かあったのかという事。だが、これもすぐに違うだろうという結論が出る。彼女の通う私立聖祥大学付属中学校はまだ冬休みなのだ。

続けて考えたのは、なのは達の事。もしかして彼らと何かあったのか。……だが、喧嘩や何かをしたとして、こんなにまでなるとは考えにくい。

(まさか……)

そして思い立った可能性に、クロノの頭は真っ白になる。

(……不埒な男に、何かされたのか)

彼女は強い。魔法を使えばエリート執務官で、使わずともそこらの一般人では相手にならない実力者だ。

しかしそれでも、まだ十四歳の女の子で。そして十四歳の女の子ながら、飛び抜けて美しい容姿をしている。

不意を突かれた、騙された、普段覚えのない類の恐怖心から竦んでしまった、人間である限りそんな可能性はいつでももある。

クロノの考えつく限り、これが最も妥当な答えだった。

「なんて事を……フェイト、必ず僕がこの手で」

意識のあるまま氷漬けにして粉々に砕いてやる、しかも少しずつだ、楽になど死なせるものか。恐怖と絶望で身体だけでなく心まで粉微塵に砕いてやる。

そんな怒りに燃えるクロノの言葉へ、しかしフェイトは首を振った。

「ち、ちがうの……わたしが、わたしがわる、くて」

「そんな事があるものか！」

「ほんとうに、そうなのっ、だ、だから、きょうやさんは、なにも……っ」
恭也さん？

告げられた名前にクロノの頭を疑問符が駆けまわる。

フェイトが恭也さんと呼ぶ男性、高町恭也と言えばクロノの知る限り最高レベルの人格者である。そしてフェイトの事を心から大切に思ってくれている人物でもある。

彼の名が出た時点で不埒云々という可能性は消え去った。

しかし、彼がこの娘をこんなに泣かせる事なんて。

「……あ」

唐突に、先ほどとは違った答えへ行き着いた。

泣く義妹。その口からは恭也の名。そして彼女は、ずっと彼の事を想っていて。

そうか、簡単じゃないか。

そして、なんて残酷なんだろうか。

「……フェイト」

誰が悪いわけじゃない。フェイトが悪いわけでも、恭也が悪いわけでも。

ああ、だが、なんと云ったらいいのか。

長く、そして深く熱い恋に敗れた彼女に、一体何を。

「クロノ、多分貴方、誤解しているわ。今貴方が考えているような事があつたわけじゃないのよ」

「……え？」

リンデイが途方に暮れているクロノへそう声をかけてきた。

流石は母親、こちらの表情から考えを読んだか、しかしそれではどういう事なのか。

やがてリンデイは解答を口にした。

「あのね、フェイト、恭也さんにもう鍛えてもらえないんですって。これからはもう、道場に来てもしけないって」

「お前は知っていたんだろう、美由希」

夕食後、ソファアに座る自分の隣へと腰掛けた妹に、恭也は問うた。

「うん、そりゃあね」

返ってきた返答に、恭也の眉の皺はさらに深くなった。

「そもそも、教えたのはお前か？」

「まさか、私は何も。もちろん母さんもね」

「だが、だったら……どうして、あの子が御神の技へ届いている」

吐いた言葉は自分が思っているよりも刺々しい響き。

「フェイトちゃんは自分で覚えたんだよ。恭ちゃんの打ち方を真似して、ね」

「真似をして？ そんな事で」

「アースラ？ だっけ？ そこに残っていた記録映像を何度も何度も何度も何度も見て、それを目標にしてお手本にして地道に地道に鍛錬

して、それで気がついたら届いてたんだって」

にわかには信じられない話、ではある。しかし実際に彼女は徹を放っていて、美由希も美沙斗も教えていないと言うのなら可能性はそれしかない。

「……神速にすら、手を掛けたという話だぞ」

「みたいだね、それは私も今日知ったけど」

恭也とフェイトの試合。

恭也の勝利で終わりはしたものの、初っ端からフェイトが徹の籠った一撃を放つという展開でそれは始まった。

予想外もいいところ、で。

その後、ぽろりと彼女は言ったのだ。

もし神速をちゃんと使えるようになっても、恭也さんにはまだまだ敵いそうにないです、と。

使えるようになったら、ではない。ちゃんと使えるようになったら、だ。

問い返すと、先のジェイル・スカリエツティ部下襲撃の際に、不完全ではあったもののその領域に届いたという話をフェイトは語った。

彼女がまさか、そういう事で嘘を吐くとは考えられず。

恭也の顔からは大いに血の気が引いた。

話を聞く限りでは、生身で行えたのはどうも神速の知覚に入れたというだけで、その中での行動は魔法任せだったというから、本来の意味で神速が使えているわけではない。

知覚速度の超高速化は、それだけならば御神固有の技ではない。

例えば優れた野球選手の眼にボールが止まって見える事があるように、卓越したボクサーの眼に相手の拳が止まって見える事があるように、それはスポーツや普通の武術の域でも、まれに届きうるものである。

その知覚を自在にオンオフし、なおかつその中である程度自由に動き回れるという事が神速の本領だ。

だから、正確にはフェイトは神速が使えるようになった、とまでは言えない。

だが、そこに届いたというのは、適正が間違いなくあるという事の証左に他ならない。

「やっぱりあの子、才能あつたんだね。それを輝かせるだけの努力も怠らなかつた」

「だから、なんだと言うんだ」

「……恭ちゃん」

大きく大きく、恭也はため息を吐いた。

「わかつているだろう、美由希。今更言わせるなよ、美由希。俺たちの技は、あの子にはふさわしいものじゃない。黒くて汚れた卑しい技だ」

人の影で、闇で、裏で。

輝くことなく振るわれる殺人術、それが御神流だ。

技というより、それは業なのだ。

「それで、あんな事言ったの？ もう来なくていいなんて」

「……言う他、あるまい」

『俺にはもう、君に教える事は何もない。だから、君を鍛える事はこれから先、二度とないだろう。ここにももう、来なくていい』

『君にこれ以上何かを教えようとすれば、それは御神流の本域になる。だが、だから、それは出来ない』

『御神流は、黒い剣で、汚れた技で、行き場のない力だ。君には、ふさわしくない』

「嬉しかった癖に、あんなにフェイトちゃんが成長していて」

「……」

「褒めてあげればよかつたのに」

「……褒めて、やりたかつたさ」

今日の試合で彼女が見せた実力は、成長は並ならぬものがあつた。あそこまで積み上げるには相当の苦労があつたろう。しかも、そこまです力を付けていながら動きにはオーバーワークの痕もなかつた。彼女は言いつけをしつかり守り、高みへ登ってくれていたのだ。

5年間、ひたすらに。

嬉しかった。他の誰よりも恭也こそが、彼女を褒めてやりたかつ

た。よくやったと、そう言ってやりたかった。

「だが、届いた先があの手なら、彼女の努力を褒めてやるわけにはいかない。褒めてしまえば、認める事になる」

「フェイトちゃんが御神の技を振るう事を？」

「そうだ。それだけは、絶対に認めてはならない。御神の技は、ただの技じゃない。そこには犯してきた業が染み付いている。穢れているんだ」

「そう、だね。それはそうだね」

まさか、ここで領かない美由希ではない。彼女は正統後継者だ、あの意味、誰より一番御神流の穢れを理解している。

「だからこそ、俺達以外が振るってはならない。御神の業は、御神の間だけが背負えばいい」

「……」

「……こうなると、わかっていたのなら」

罪悪感で、視界が揺れる。

(すまない、フェイト……すまない)

あんなにも綺麗なあの子の手に、触れるべきでないものを触れさせてしまった。

何を調子に乗っていたのか。

あの子に自分が何かを教える資格なんて、きつと最初からなかったのだ。それなのに、何を調子に乗っていたのか。

どう償えばいいのかすら、恭也にはわからなかった。

「前の事件の資料、整理が必要なのはこれで最後。終わったら次は……」

眩いた独り言は、自分の耳にも空寒い音色。

「次、は……」

次は、何をすればいいんだろう。

何か仕事を、何か作業を、何か、何でもいいから。

なんでもいいから、頭を満たして欲しい。

自分がどうやら仕事に逃げるタイプだというのは、今回知った事実だった。知りたくはなかったが。

仕事も手に付かない、なんて方が可愛げがあったらどうか。

自分の執務室で、フェイトは作業の手を止める。

「……」

涙は出尽くして、ため息も抜けきったなら、後は虚しさだけが残って。だけど、これは慣れなければならぬ感情のはずだ。

だって、これからずっとこれと付き合っていくのだから。

「……」

自分の右手を見つめる。

この手は、きつと欲しすぎたのだ。

だから、しつぺ返しを喰らった。

自分が元々、彼から教わっていたのは御神流ではなかった。それを、その意味を、ちゃんと理解するべきだった。

不用意に、ましてや無許可に、踏み込んでいい領域ではなかったのだ。

あれから、もう3日経つ。

いい加減、心の整理を付けなくては。

行き詰まった気持ちを身体でも動かしてすっきりさせようと、トレーニングルームの使用申請をしようとして、しかしその指を止める。

これ以上鍛えて、一体何の意味があるのか。

……いや、あるはずだ。執務官として、至近戦はこなすのだから。

お手本と目標が消え去ったからと言って、立ち止まる甘えを自分に許すべきじゃない。これからは自分で自分を鍛えていかなければならないのだ。

頭では、わかっているのだけれど。

(……こんなに弱いんだ、私は)

情けなくなってくる。自分一人で歩けもしないで、どうしてあの人を支えられるなんて思ったのか。

これ以上落ちる事なんてあるものかと思っていた気分が、さらに下

へと降りていった、その時だった。

「……ん」

広げてあるコンソールの端に入室要請の文字が浮かぶ。誰か訪ねて来たらしい。

タップして詳細を確認すると、高町なのはの文字。

「なのは……？」

生体とリンカーコアで認証を取っているから本人で間違いない。

「どうしたんだろう……」

特に来るといふ連絡はなかったはずだが。空中投影のコンソールを仕舞い、とりあえず扉を開ける。

「やつほー。お仕事中心？」

姿を見せたのはやつぱりというか当然というか、サイドテールを揺らす親友だった。

「うん、まあ。でも立てこんでいるわけじゃないから。何かあったの？」

「何かあったっていうか、何やってるのかなーって思ってる」

「……どういうこと？」

部屋へ入ってきたなのは、フェイトの正面、机の上に肘をついて上半身を預ける姿勢。微笑みを湛えた顔に、右手を添えている。

「いやいやだからさ、あれからもう3日くらい経つわけだけど、いつまでうじうじやってるのかなって」

わかっているわかってる、私が言えた事じゃないんだけど。

続けてそんな風に言ったなのは、あくまで笑顔。

対して、こちらの顔は強張った。

だって、いきなり鼻っ面に叩きつけられた言葉はあまりにあんまりだろう。

「う、うじうじ……？ 何を」

「何を？ わかんないわけじゃないでしょ？」

「……それは、確かに落ち込んでるけど、その自覚くらいちゃんとするけど。私は、言われた事を、飲み込んでるだけだよ」

口をつけて出た言葉は、その音色までも刺々しい。自分の未熟さが

現れているようで、やっぱり情けない。

しかしなのはは、それでも笑った。

「あはは、やっぱり思った通り」

「思った通りって、何が？」

「フェイトちゃんはさ、お兄ちゃんに良い子だって思われていたんだ。でしょ？」

その指摘は、予想だにしない角度で襲ってきた。

だから、防ぐ事なんて出来ず。

「わ、……わたしは」

突き刺されて、動けなかった。

「凶星だ？ あはは」

ころころと、なのはが笑う。愛らしい彼女のその笑みがどうしてか、今は怖かった。

「お兄ちゃんに良い子だって思われたい。あわよくば褒めてもらいたい。いやいや別に、それが悪い事だなんて言わないけれど、言わないけれども、でも、良いの？ フェイトちゃん。良いの？」

「良いつて、何が……？」

「わかってるでしょ？ そのままいけば、このままいけば、確実にフェイトちゃんはおにいちゃんと離れていくよ？」

そんな事、そんな事は。

そんな事は、ない……なんて。

言えなかった。

「おにいちゃんに良い子だって思われ続けようとするれば自然、フェイトちゃんの進む道は、おにいちゃんの思うフェイトちゃんの幸せへと向かうことになる。でもそれは、フェイトちゃんの思うフェイトちゃんの幸せとは決定的に違うよね？」

なのはの声が、いつもは心地の良い響きのそれが、今は耐えられないくらい耳に痛い。

いや、わかっている。痛いのは音色じゃない事くらい。

「だって、おにいちゃんはフェイトちゃんが自分の傍に居続けることは、フェイトちゃんにとっていい事だなんて思わないはずだから。少

なくとも今回、御神流についてはそういう事を言われたんだよね？
黒い剣だから、汚れた技だから、行き場のない力だから、君にはふさわしくないって」

なのはがどこまで知っているのかは知らないが、彼女の言葉はその通りだ。

「おにいちゃんはフェイトちゃんをものすごく大事に思っているよ。でも、だからこそ、自分なんかの傍に長くいさせるべきじゃないなんてごくごく当たり前に考えているはずだよ。わかるでしょ？ そういう人だし、そう言う人なんだよ」

「……うん」

頷くほか、無かった。なのはは、滑らかに続ける。

フェイトの聞きたくない話を。

「だからさ、このままおにいちゃんの言う事に従っていけば、フェイトちゃんはおにいちゃんとどんどん疎遠になっていくよ」

しかし聞かなければならない話を。

「おにいちゃんの言う事に背かない良い子ちゃんのフェイトちゃんは、結果的におにいちゃんとは背を向け合って違う方向に歩いて行くことになる。ぶつかり合わない事を選べば、交わり合う事も決してないんだから。着々と、淡々と、一步一步、確実に離れていくよ。それはもう火を見るよりも明らかだ」

理解した現実には、喚起される想像に、見通した未来に、フェイトの背筋は凍っていく。

なのはの言葉は、怖いくらいに的確だった。

全部、そうだ。

その通り、なんだ。

「わ、たしは……」

震える声で、一体自分は何を言わんとするのか。

自分でも何を言い出すかわからない……否、もっと細かく言えば、どんな泣き言を漏らしたものかわからない口は、

「でもさあ」

しかし、被せるようなのはの言葉で噤まされた。

「これは結構、杞憂なんだよねえ」

「……え？」

「だってさあ、フェイトちゃん。ねえ、フェイトちゃん。私は知っているよ。ある意味、誰より知ってるかもしれない」

歌うように、なのはは言葉を紡ぐ。

「だからさ、これは図々しい助言。高町なのはのアドバイス。恭しく受け取ってよね、まさかまさかの”なのちゃんのおにいちちゃん攻略講座”だよ？」

「——っ!？」

高町なのはが高町恭也にどれくらい愛情を向けているか。

高町なのはが高町恭也にどのような愛情を向けているか。

まさか知らないフェイトではない。

それなのに。

「アド、バイス？」

「そう。こんなサービスめつたにしないっていうか、基本的には誰にも絶対しないんだけど、フェイトちゃんには一つと言わず二つくらい、大きな借りがあるからさ、それを返す意味で、一度限りの限定開講」

借り、それは。

「あの時、正面から殴ってもらったし、ついこの前、背中を押してもらったからさ。それはやっぱり、返しとかなきゃってね」

殴ったというその話は、三年ほど前とは言え忘れようのない出来事
で。

ついこの間とは、丁度それは今の自分と同じように、思い悩むのはを
焚き付けた記憶に新しい一幕。

貸しだなんて全く思っていなかったし、そのつもりもなかったのだが、
どうやらなのははの認識は違ったらしい。

彼女一流の照れ隠しなのかもしれないけれど。

そして、なのはは今日で一番耳に痛い事を言い放った。

「ねえ、フェイトちゃん。もういいかげんさ、——良い子ちゃんぶるの、止めたほうがいいと思うよ」

「……そ、そんなっ」

思わず反駁するも、

「そんな？」

「こと、は……」

どうしたって尻すぼみだ。

だって。

そんな意識がなかったと言えば、それは嘘になるのだ。

黙り込んだこちらに、なのはは目を細めて言う。

それはまるで、昔を懐かしむかのように。

「私は知ってるよ、フェイトちゃん。知っているんだよフェイトちゃん。良い子ちゃんなんかじゃないフェイトちゃんを知っている……というか、フェイトちゃんが良い子ちゃんなんかじゃないって事をよく知っている」

跳ね除けられない重みと深みのある、それは実感の籠った評価だった。

「いい？ 自覚はしているんだろうけど、でも今ここではつきり言っ
てあげるよ。フェイトちゃんはそれはそれは物覚えはもの凄く良い
子だけでも、……物分かりはもの凄く悪い子だ」

それは、なんて。

心当たりのある言葉だろうか。

「すぐに他人の意図は読み取れるけれど、その実、なかなか意見は飲み
込まない。結局は自分自身の心に清々しいくらい従順で忠実だ。め
ちやくちや頑固なんだよ、……私と同類」

「……そうかもね」

「かもじゃない、そうなの」

流石になのはほど一本槍じゃないと思っているのだが、どうなんだ
ろうか。

とは言え、それは確かにその通りだ。

「思い込んだらまっすぐで、ちよっとやさそつとじゃ曲がらない。で
しょ？ だって、だから、かつて私とフェイトちゃんはあんなに真正
面からぶつかり合ったんだ」

「そう、だね」

お互いが妥協や諦めの出来る性質であつたら、きつとあんな風に戦わなかつたし、絶対にこんな風に仲良くはなれなかつただろう。

「でも、おにいちゃんにはそんな自分を見せたくないんだよね?」

「……そう、だよ」

認めてしまえば、それはとても自然に心に嵌る想いだつた。

だつて母親に対しても、自分はずっとそうだつた。

従順で、ありたかつた。

それが自分の出来る一番の、愛情の示し方だと思つたから。

そうしていればいつか、愛情が返ってくるじゃないかと期待出来たから。

「良い子良い子して、良い子良い子されたいって、そんな姿が滑稽だとは言わないけれど、でも、それじゃ本音は上滑りしていくよ。想いは空回つて、願いは叶わない」

そうなんだろうか。

……そうなんだろうな。

そうじゃなかつたら今、自分はこうして虚しさを紛らそうと仕事の書類を必死でめくつたりなんてしていなかつたはずだ。

「わかるだろうって言われて頷いて、わかるよなって言われて従つて、わかつてくれるって言われてわかっちゃつたら、それはそれは良い子なんだろうけど、でも、それで良いの?」

いいのだろうか。

問われ、フェイトは今一度、自分の手を見やる。

彼と同じ高みへ、至宝へと伸ばしたそれを見る。

臆病風に吹かれて、引いてしまったそれを見る。

「そんなお人形さんみたいな自分で、フェイトちゃんは良いの?」

お人形。それは、耳に馴染みのある表現。その重さを、きつとなのははわかつた上で言っている。

言ってくれている。

「良いんだつたら良い子のままでいるといい。でも、もし、嫌なんだつたら」

そこですつと息を吸い、彼女は最後に言った。

「良い子でいたら、駄目だと思うよ」

「精が出ますね、師匠」

「晶……どうした？」

日の落ち切った時分、道場で一人剣を振っていた恭也の元へやってきたのは晶だった。5年前と同じくボーイッシュな見た目だが、しかし身体のラインはかなり女性的になっている。

もうまさか、男に間違えられる事なんてなさそうだ。

「いえ、ただちよつとですね」

彼女は体型と違って昔と変わらない、人好きのいい笑顔を浮かべながら、恭也の元へと歩み寄ってくる。

それでも、恭也に簡単に察せた。

「おいおい、相変わらずだな」

呆れたように言いながら、恭也は両手の剣を床に放った。

「はは、性分でして……とっ！」

にじみ出る殺気に違わない、素早く豪快で、無駄のない右からの上段蹴り。

本当に、相変わらずだ。

不意打ちが不意打ちにならないよう馬鹿正直に仕掛けてくるその素直さは、昔と何も変わらない。

首を刈るようなそれを潜って躲し、恭也は反撃に出る。晶の残った軸足を屈みながら放った突き出す蹴りで払いにかかった。

「なんのー！」

足一本で飛び上がり、それを避けてみせた晶はさらに空中で回転、先ほどの軸足で回し蹴りを放ってきた。受け止めた恭也の腕に、不安定な体勢で打ってきたとは思えないキレと重さによる衝撃が響く。

「ちいっ！」

着地した脚でそのまま床を凄まじい勢いで蹴りつけ、一息で遙か後方まで退避する晶。見事な身のこなしだ。

しかし、逃す恭也ではない。縮めていた脚をバネのごとく伸ばし、追走。ほぼタイムラグ無しに追いかけて距離を詰め、

「だっ！」

晶の頭を正面から片手で掴み、床に叩きつけた。

「……参りました」

「そうか」

降参の宣言に、彼女の頭から手を放し、立ち上がる。晶も何もなかったかのように上半身を起こした。

結構な勢いで叩きつけたはずだが、流石の頑丈さである。彼女の最たる長所かもしれない。

「で、なんだ？」

「いやあ、今だったら勝てるかなあって」

「まあ、その意気は買うが。それに確かに、大した上達ぶりだった」

刀も暗器も使わなかったとは言え、恭也にとって先ほどの晶は本気で対処せねばならない相手だった。一つでも判断を間違えていたら、一瞬でも気を抜いていたら、やられていたのはこちらだったろう。

達人と、そう称する事に何の不足も最早ない。

「強くなったな、晶。よく鍛えた」

「その言葉、フェイトちゃんには言っておきましたか？」

先の蹴りよりも、鋭く、そして重く。

彼女は言った。

「いいや」

「どうして？」

「俺は、あの子を褒めてやるわけにはいかない」

「それは、御神流に届いてしまっていたからですか」

「そうだ」

簡潔な返答。それ以外、答えようがない。

「ねえ師匠」

「なんだ？」

「今、俺が御神流をやっぱり習いたいって言ったらどうですか？」

「どうもこうもない、だったら俺を倒してみせろ。昔と同じだ」

にべもなく言い放つ恭也に、晶は苦笑する。

「それ、考えなしの前はちゃんとかわかってなかったけど、すごい無理難題ですよ。師匠、俺に習わせるつもりなんてなかったんでしょ？」
「何を言う。お前は一度、俺を倒しているだろう」

「たまたま色んな事がうまくいって、その上狙える古傷抱えた膝があつたから、ですよ。普通にやってたら無理だった。ていうか、師匠が本当の本気だったら、あの瞬間移動みたいな奴とかやってきてただろうし、どうにもならなかったはずですよ」

彼我の実力差を評する晶。そんな冷静さにも昔との実力の開きを感じる。巻島館長はどうやら、教育者としてやはり優秀らしい。

「ねえ、どうしてそんなに拒否するんですか？ 御神流を教えるの」

「おいそれと、人に教えるような代物ではないからだ」

「黒いから？」
「そうだ」

己を鍛える事を旨とする健全な武道を説くのは、話がまるで別なのだ。

殺しも視野に入れた古流などとも、まだ一線を画する。

御神のそれは徹頭徹尾、効率的な人の殺し方なのである。道と呼ぶにはおこがましく、おぞましい。

思い入れがある人間だと言っても、いや、思い入れがある人間だからこそ、教えたくはない。

「……うーん」

これだけ理解力のある今の晶なら苦もなくわかってきてくれているだろうと思っていたのだが、しかし、彼女は首を捻った。

「ねえ、師匠。ネットって使ってます？ インターネット」

そして唐突に、そんな事を言う。

「インターネット？ ああ、俺が寝ている間に随分進歩したらしいな。なのはにパソコンを借りてやってみた事があるが、便利なものだ」

基本的に機械はそんなに得意ではないが、美由希のように致命的なわけでもない。その利便性は確かなものだし、使い方を覚えようとはしているところだ。

「それが？」

「俺も聞きかじりだから詳しくは知らないんですけど、あれって元々は軍用の技術だったらしいですよ。アメリカ軍ですって」
「へえ」

まあ、軍時で生み出された技術が民生品に転用されるのはよくある話である。戦争は科学を100年進歩させる、なんて事も言われるくらいだ。

「あとはなんだったかな、電子レンジ、あれもそうだって。あとはGPSとか。今の携帯は当たり前のように使えますけど、便利ですよ。え。俺この間隣街で迷ったんですけど、おかげで助かりました」

なんとなく、晶の言わんとする事がわかってきた。

「元が何であれ、役に立つのなら良いって事か？」

「そうそう、そういう事。御神流もそうじゃないですか？」

「馬鹿を言うな」

ため息を吐き、恭也は否定する。

「人殺しの剣術体術暗器術が、他の何に役立つと言うんだ」

「人を助けてるでしょ、これをまさか、否定しないで下さいよ」

立ち上がり、晶は指折り数えていく。

「俺に鈍亀、ファイアッセさんに忍さん、那美さん。桃子さんに美由希ちゃんに美沙斗さん、なのちゃんにフェイトちゃん、はやてちゃん。クロノ君、ユーノ君にアルフさん、リンさんにシグナムさん、シャルさんにザフィーラさんヴィータちゃん、師匠に助けられた人間なんて、俺の知ってる限りでざっと挙げただけでもこんなに居ますよ」
「それは……」

「御神流なしで助けられました？ 無理だったでしょ？」

「お前が言っているのは結果論に過ぎない」

「大事なのは結果でしょ。結果として、現実としてそれだけの人間が、時には命すら助けられている。それを可能にしたのは、師匠が人殺しの技でしかないって言う御神流のはずだ」

いつになく、晶の口調は強く、そして真摯だった。

「ねえ師匠、だから師匠の技は、俺の尊敬する高町恭也の技は、穢れて

なんていない」

「……晶」

「お願いだから、そんなに自分を嫌わないで下さい。自分の技を、卑下しないで下さい。……そりゃあ、当事者である師匠からしたら、簡単に飲み込める話じゃないでしょうけど、でも、それでも、師匠がそれをちゃんとわかってくれなきゃ、貴方に憧れて、貴方に救われた、俺とかレンはどうなるんです」

「……」

救ってなんて、いない。自分はほんの少し、出来る事をしただけ。そう言ったって、きつと晶が納得しないだろう事はその瞳から見て取れた。

「何より、何より……俺やレンは、もう自分の道を見つけているけど、何より、誰より、フェイトちゃんはどうなるんです」

「……あの子も、しっかりした子だ。お前と同じように自分の道を見つけるさ」

「本気で言っているのなら、師匠はなんにもわかつちやいない」

晶の口調は強い確信を持ったそれだ。

「フェイトちゃんは確かにしっかりしてるけど、だけど驚くほど頑固ですよ。物分かりが良い風なのは表面だけだ」

晶とフェイトは結構仲良く見えたが、随分辛口の評価に聞こえる。

いや、仲が良いからこそその言い様なのかもしれない。

「あんなに曲がる事を知らない子が、よりにもよって師匠に憧れちゃって、まさか他の道に行くなんて、断言しますけど、ありえない」
「だが、あの子はわかってくれたはず……」

「だから、表面は、ですよ。フェイトちゃんの本心は、絶対納得なんてしていない。だけど師匠に迷惑掛けたくないから、わかったふりをしたんでしよう。あるいは、自分自身にも」

確かに、過去のPT事件のあらましを聞く限りでは、フェイトは相応な頑固者に思えた。だが、実際の彼女は聞き分けの良い子であったはず。その印象は、現在も変わっていなかったのだが。

「だからね、師匠。俺が今日言いに来たのが何かって言えば——諦め

「て下さいって事です」

「諦める？」

「ええ、絶対、直訴しに来ますよ、あの子は。一回や二回じゃなく、通じるまで何度でも。一日や二日じゃなく、叶えるまで何年でも」

1月のキリキリと冷える空気の中、晶の言葉はいよいよ揺るがぬ確信に満ち満ちていて。

恭也は遅まきながらに気がついた。気を抜きがちな自宅の敷地内で、さらに話に意識を取られているという状況だからといって、ここまで気が付かなかったのは恥ずべき事だ。

「……さて、まさか」

「だから、今日はその一回目です」

晶のそんな言葉と同時に、道場の扉が開いた。視線を慌ててそちらに向ければ、月明かりが眩しくて。

それを背に、月と同じ色彩を髪に湛えた少女が立っていた。

「ま、後は二人でごゆっくり」

そう言って、晶はぽんとフェイトの肩に手を置いた後、母屋へと帰っていった。

後で、ちゃんとお礼を言わなければ。

思いながらもとにかく今は、フェイトの瞳は意識は、恭也だけへと向く。

「……夜分に遅く、すみません」

「それは、構わないが……」

恭也の表情はまさに当惑と言ったもので、迷惑をかけてしまっているのは誰の眼にも明らかだった。

「しかし、あまり君のような年頃の女の子が出歩く時間じゃない」

「申し訳ありません。ですが、すぐにでもお願いしたい事があります
て」

深呼吸は、今更しない。気持ちも覚悟も、決めてきた。

「それは？」

「はい。晶さんにお聞きしたのですが、晶と恭也さんはかつて、晶さんが恭也さんを一度でも倒せば、御神流の弟子に取るといふ約束をしていらしたのですよね？」

「……ああ」

恭也は、苦い顔を浮かべた。こちらの言葉の先が予想できたのだろう。

「どうか、私ともその取り決めに交わして頂きたいのです」

「……」

恭也は大きなため息を零した。不躰な願いに呆れられてしまったろうか。失望されてしまったろうか。

震えかける脚を叱咤し、そのまま踏みとどまる。

だって私は、——良い子のお人形としてこの人の傍に居たいんじゃない。

そう願うなら、恐怖に負けてはいられない。

嫌われるかもしれないって、捨てられるかもしれないって、そんな恐怖に怯えてなんて、いられない。

「なあ、フェイト」

「はい」

「どうして、君は御神流の力を求める」

切れ長の双眸の中、恭也の瞳は嘘を許さない鋭さを携えてこちらを射抜く。

フェイトは、馬鹿みたいな正直さで答える。

「それが、貴方の力だからです」

「……俺の？」

本気で意外だと、予想もしていなかった言葉だと、恭也の返答のトーンは語っていた。

「執務官として有用だから、とか、そういう事では……」

「違います。それもあります、二の次です」

我ながら身も蓋もない言い様だった。管理世界の秩序を司る執務官として実に如何なものかと思うが、本音なんだから仕方ない。

「恭也さんの仰る、御神流の黒さも理解しています。それでも、それも

私にはどうでもいい事です」

「……フェイト？」

恭也は完全な戸惑いを顔に浮かべた。それはそうだろう、失礼千万な物言いに不快感を出されなかっただけ、ありがたいというものだ。

「恭也さん、私は貴方の持つ力が自分の仕事に有用なものでもそうでなくとも、貴方の持つ力が清廉なものでもそうでなくとも、有り体に言わせて頂けば、どうでもいいんです。本音を、本当に言わせて頂けば、どうでも」

「……この前見せてもらった実力から、君が相当の鍛錬を積んできたという事はわかつている。なのに、それが役に立たなくてもいい、誇れるものでなくていいだなんて、君は本気で言っているのか」

「はい」

間断なく頷いたこちらに、彼はますます当惑の色を濃く顔に表した。

「フェイト、君は、どうして」

「最初に言った通りです」

そう、最初に言った通りだ。

「貴方の力が貴方の力だから、私は同じものが欲しいんです」

突き詰めて言えば、ただそれだけなのだ。

自分は、フェイト・テスタロッサ・ハラオウンは、それくらいには馬鹿で単純な女なのだ。

「……わからない、言っている事はわかってきたが、言っている理由がわからない。俺の力なんて、そんなものが何だと」

「そんなもの、じゃないです。私にとってはそれだけのものなんです」

どうか伝われと願いながら、フェイトは必死に言う。

「貴方が心を砕いて磨き上げてきたその力は、人の心を奪うのに十分なものなんです。少なくとも、私は、とつくに奪われています。貴方がそうして得た、貴方の力だからこそ」

「……趣味が悪いな」

「いいえ、それだけは良いと自信を持って言えます」

笑顔でそう言い切って、フェイトは手の中のバルディッシュを握り

しめた。

「ただ、頭は少し、悪いかもしれません——Set up」

「ただ、頭は少し、悪いかもしれません——Set up」

紡いだ合図に、フェイトの足の下、四角形を基調とした魔法陣が展開された。続いて彼女の身を包んだ眩い金色の光が恭也の眼を焼く。

「何を……？ なっ」

『Set up, Impulse Form』

目の前、フェイトの服装が一変していた。

すつきりとした、それでいて固い雰囲気軍服じみたダブルのピーコートは、膝元まであるロングだが前面は大きく開いて腰から下を露わにしている。

そこから見えるのは非常に丈の短いショートパンツ。

膝上までソックスが伸びているため、露出しているのは太ももの一部だけだが、動きやすそうな印象で。

『and Pursue Mode』

しかし、恭也に衝撃を与えたのはそれではない。

「それは……」

「計画も設計もずっと前からやっていたんです。ずっとずっと、こうしようって思っていたんです」

フェイトの手に握られているのは、二本の剣。

いや、細く、薄身で片刃のその姿は、刀と呼ぶのがふさわしいのだろうか。

魔力刃でなく、黒い黒い実刃の刀。全体の長さは小太刀の背丈。

幾何学的な文様が金色を帯びて浮かぶ刀身、戦斧の頃の面影が見える鏢やエンドが太くなっている柄に普通の刀との差異が強く現れている。

鏢に嵌っているのは金色の光玉。それは間違いなく、この二刀がフェイトの相棒、寡黙な忠臣バルディッシュである証。

「こんな事をするのが、私なんです」

その姿に。

その確言に。

ようやくと、恭也も理解する。

飲み込む。

(……晶、なるほどお前の言うとおりのようだ)

”俺が今日言いに来たのが何かって言えば——諦めて下さいって事です”

晶のそんな諫言が、脳裏でリフレインする。

目の前、金色を揺らす少女が、揺れない紅い瞳でこちらを射抜きながら構えを取った。両足を軽く前後に開き、腰を落とした臨戦態勢。二刀の内、引いた片方は胸の辺りまで上げて、出した片方は腰付近まで下げている。

それはきつと見よう見真似の、しかし基本に忠実な、二刀の姿勢。

「お願いします、どうか、愚かな挑戦をお許しください——」

「握りが、違う」

「……え？」

今にも飛びかかからんとするフェイトへ、力みもなく歩み寄り、恭也は前に突出された右の刀、それを携える右手を上から握る。

「親指と人差し指にはこんなに力を入れる必要はない。柔らかく、添えるようにだ。小指薬指で支えるつもりで握れ」

「あ、え、……こ、こうです、か？」

「もう少し、小指も薬指も力を抜いていい。力みがあれば柔軟性が落ちる。柔軟性が落ちれば速度も落ちる。速度が落ちれば、わかるだろう？ 次に落ちるのは己の首だ。指の力加減一つで、自分の生死が決まると思え」

彼女の右手から手を放しながら、その眼を見据えて恭也は言った。

「君がもし、剣士たらんとするならば、の話だがな」

恭也の方からは、月明かりを背にしていた彼女の表情はなかなか見えにくかったのだが、この距離なら流石によくわかる。

形の良い大きな瞳が、見開かれていた。

「い、いいん、ですか？ 私、勝ってもいないのに……」

「諦めない人間に、そんな条件を付けても無駄だ」

あれは、諦めさせるための条件。

決して諦めない類の人間には、結局何の意味もない。時間を無駄にするだけだ。

「そして、良いかどうかはこちらが聞きたい。こんな剣が、本当に良いのか？　こんな剣で、本当に良いのか？」

恭也の中にある、御神流への意識が変わったわけではない。この剣の穢れは、否定出来ない。

これを御神や不破の人間以外に触れさせる事への忌避は、未だにある。

「はい。それが貴方の剣ならば」

だけど、この剣にどうやら輝く何かを見て取るらしい存在は、穢れと同じくらいにきちんと、認めなければならぬのだろう。

「……全く、君がこんなに馬鹿だったとは思わなかった」

「ごめんなさい。私、結構馬鹿なんです」

「そのようだ……なあ、フエイト」

「はい」

「強くなったな。……よく頑張った」

「……あ」

恭也のそんな言葉に、しばし呆然とした後、やがて目の前の少女が返した笑顔は、目端に涙の浮かんだその笑みは。

宵闇にそっと寄り添うように、たおやかでひどく美しかった。

第19話 世界で一番

「おししよ、何されてるんですか？ ……パンフレット？」

「管理局の資料だよ、入局案内だ」

恭也が居間のテーブルに広げた冊子、それはレンに告げた通り、以前リンデイにもらった管理局の入局案内だ。

「はえー、何ですか、じゃあおししよ、管理局入られるんですか？」

「いや、わからん。とりあえず選択肢の一つとしてな。早く決めなければならぬから、考えようと思って」

「早くって、なんでですか？ 将来の事なんですから慎重にゆっくり決めたらええと思いますけど」

「……そういうわけにもいかんだろう」

恭也はため息を吐く。

「母も妹達も揃ってしつかり働くか学校に行っているというのに、俺一人がいつまでもぶらぶらとしているわけにはな」

桃子は翠屋、美由希は香港警備隊、レンと晶は海鳴大学、なのはに至っては中学校に通いながら管理局で働いてもいる。

それに比べて、なんと自分の情けない事か。

「……美沙斗さんとの修行も、一応終わった事だしな」

その瞬間は実にあっけなく訪れたものだった。

『うん、やはり大して教える事はなかったね。本当に調整くらいだ。しかしともあれ、——これで君はもう文句なく、完成された御神の剣士だよ、恭也』

二週間ほどの修行を終え、そう言って美沙斗は太鼓判を押してくれた。

御神の剣士としての完成。

まさか、その日が来るとは思っていなかった。

ぼろぼろと涙をこぼし始めた美由希を見て、ようやく実感が湧いたものだ。

「おししよがおっしやる事もわかりますけど、せやけどなあ」

ううんと、レンは腕を組み難しい顔をする。

「ちよお考え方を変えてみてくださいよ、おししよはね、五年間の昏睡からやっと目覚めてまだ一ヶ月も経ってないんですよ?」

「……ん、まあ、それはそうだが」

「普通なら社会復帰なんてまだまだ先の話でしょう」

「そうか? 二週間三週間も休めば十分だろう、身体は健康そのものなんだし」

「タフ過ぎますよ、その感覚」

呆れた顔でレンは苦笑する。緑がかった艶やかな長い髪が、仕草とともに美しく揺れた。

「無理に働かんでも、なんやったらうちが養ったりしますよ」

「学生のうちからヒモを飼う気か、お前は」

「おししよなら大歓迎です」

まさか本気ではないだろうが、ころころと笑う彼女が変な男に騙されない事を祈る恭也だった。

「……ん、誰か来たな」

「おししよがおると玄関チャイムがお払い箱やなあ、うちが行きます」

恭也の言葉に3秒ほど遅れてチャイムが鳴るが、そのときには既にレンは玄関へ歩き出していた。腰を浮かせていた恭也だが、言葉に甘えて座り直す。

(……管理局、か)

パンフレットの説明に意識をまた移して、ううんと一つ唸る。

その業務内容は非常に多岐に渡っている。全体を観れば、管理世界の秩序を守るといふ文言に集約するのだろうが、国や世界間の調停、環境や生態系の保護、犯罪者の摘発から犯罪組織への対策などなど、本当に多種多様だ。

リンデイは万年人手不足と言うが、それはまあそうなるだろう。

とは言え、自分が果たして雇ってもらえるかどうかはわからないのだが。

「どうだろうなあ」

荒事には慣れているし、一応魔導師ランクも高いものを貰ってはいるが、とは言え魔法世界群に対しての知識が浅すぎる。

常識がないという事で、落とされるかもしれない。

「おししよー、お客さんですよー」

「お邪魔してますー、恭也さん」

考えこんでいると、リビングへレンと新たな人影がやってきた。

二人が並ぶと、恭也としては新旧鳳蓮飛と呼びたくなる組み合わせ、つまりやってきたのははやてだった。

「恭也さん、今、なんか変な事考えてませんでした?」

「いや」

鋭い指摘を何喰わぬ顔で躲す。レンも訝しむような目をしている。話題を逸そう。

「どうしたんだ、はやて。なのはなら今日は管理局だぞ」

「ええ、知ってます。桃子さんにお土産をと思って」

はやての両手には白い紙袋が下がっていた。そこそこかさばっているようだが、重くはないらしく、彼女は軽々と掲げてみせる。

「私、任務や何かで色んな世界に行くことがあるんですけど、そのときに名物のお菓子があつたらいつも買って来ているんです」

「そうだったのか、それは済まないな……」

「いえいえ、自分の分と一緒にですから」

それは確かに桃子の喜びそうなお土産である。はやては気が利くなど、感謝と感心しきりの恭也だったが、レンはなぜか「したたかやな……!」という感想を漏らしていた。

「というわけで、これ、よろしかったら」

「ああ、ありがとう」

「うちが仕舞つときます。お茶出すからはやてちゃん座つてな」

レンがはやてから紙袋を受け取り、台所へ。ついでに給仕もしてくれるらしい。レンのそんな気遣いぶりは、5年前となら変わっていない。

お構いなく、いえいえと日本人的なやりとりをレンと交わしながら、はやては恭也の対面に腰掛けた。

「あれ、恭也さんこれ」

「ああ、管理局の入局案内だ」

「……いやいや」

はやては、冊子を見るなり渋い顔。

「どうした？」

「いえ、これ、……ああ、もしかして5年前にもらったものですか？」

「そうだ」

「道理で。間違っているわけじゃないんですけど、いろいろ古かったのぢ」

「……古い、そうか、そうだな」

5年、それは致命的な違いが出るほどではなからうが、しかし新設や解体となった部署があってもおかしくない年月だ。

「ちよつと待つて下さいね、最新版を」

はやては端末を取り出すと、空中にスクリーンを投影し、何やら素早く操作し始めた。

「何度見てもSFやなあ、それ」

お茶を淹れてきたくれたレンが、湯のみを各々に配りながらそんな風に零す。

「すまんな、レン」

「ありがとうございます、レンさん」

「いえいえ。それ、料理するときには便利そうやなあ。スクリーン浮いてくれてたら、レシピ見やすくて」

恭也の隣に腰掛けながらの彼女の感想は、実にらしかった。

「そうそうそうなんです、結構重宝してますよ。……あつたあつた。

ローカルに落として、表示っと」

恭也達にも見やすいようにだろう、机に広がるように画面が映しだされた。時空管理局入局案内の文字が書かれた表紙が、テーブルの木目の上で存在を主張している。

「これが最新版です。あとで紙媒体のも持つてきますね」

「すまんな、助かる。やっぱり、こういった形で見るのが今は主流なのか？」

「ええ、これなら動画データも映せますしね」

「なるほど……」

確かに、それは紙媒体では無理な話である。

「折角ですから色々見てみましょ。恭也さんが入りそうな部署という
と……まずはここですね、航空武装隊」

はやてが手元のコンソールを操作し、ページをめくる。青空を駆ける
魔導師達の映像が流れ始めた。

「実戦レベルで空を飛べる魔導師は割りと少ない上に危険な任務も多
いので、少数精鋭の隊です。武装、なんて言うだけあって、任務は専
ら戦闘系ですね」

「飛べる魔導師は少ないのか?」

「ええ、少ないですよ。先天的な資質がある人間がまず少ないですし、
後天的に飛べるようにするのも大変ですから」

魔導師と言えば、恭也にとってはなのはやフェイト、クロノ達なの
で、それはかなり意外な事実だった。

「おししよは、じゃあ飛べるんですか?」

「ああ、一応な」

「まあ恭也さんは飛ぶっていうか、足場作って跳んだ方がはるかに早
いでもんね」

「脚には自信があるからな」

恭也の言葉に、「そういうレベルでは最早ないです」とはやては苦笑
を返した。

「ともあれ、結構狭き門の部隊ですけど恭也さんなら余裕でしょう。
私達の周りではシグナムとヴィータが入ってます。特にシグナムは
ここの首都航空隊っていう、航空武装隊の中で一番責任が重くて、一
番精鋭が集まるところに。そこで分隊副隊長やってます」

「流石はシグナムだ」

感心のままに一つ頷く。彼女ならば納得だ。

「私としては、結構ここは恭也さんの気質に合うんじゃないかなと思
うんですけど、ただ、戦闘スタイルを見るともしかしたらちよお微妙
かもわからないですね」

「微妙、とは?」

「ここは少数精鋭とは言え、それでもやっぱり部隊全員で連携を取っ

て一丸となって戦うようなスタイルでして、それは隊として当然なんですけど、恭也さんの最たる強みの一つって、私としては単独の戦闘能力だと思っんですね。問答無用に一人で強い、反則レベルの個性ちゆうか。それがここだとなかなか活かされないかなあと」

「……なるほど」

はやての評価はさて置くとしても、確かに御神流剣士の戦闘方針は大人数で組んで戦う事を主眼においていない。基本的には一族だけしか使わない、使えない剣術であるが故に当然の事だ。

あくまで個で護り、個で討つ。頼れるのは己のみ。

それが基本理念だ。

「そう言われれば確かに、集団相手の戦闘は得意だが、逆に集団となつての戦闘は不得手だな」

「そうですよね、そういう観点で言うとは……」

はやてがまた、手元のコンソールを操作。ページがめくられた。

遺跡へと慎重に突入する局員の映像が流れる。

「古代遺物管理部、なんていいかもれません。ロストロギア対策の部署です」

「ロストロギア、夜天の書のような」

「そうです。なのはちゃんが魔法に初めて関わる事になったPT事件のジュエルシードもそうですね。ああいった超常の力を持った古代文明の遺産、それには危険なものも少なくありません。……恭也さんに私が今更言う事ではありませんが」

言いながら、はやては目を伏せた。

「言つたぞ、気に病むなど。はやて、それでその古代遺物管理部は俺に合っているのか？」

強引に話を進めた恭也に、はやては申し訳なきように微笑んで、質問に答える。

「ええ。ここは戦闘が主任務なわけじゃないですけど、取り扱うものも取り扱うものなんで危険が多いんです。ですから、強い人間はいつでも欲しい。特級の危険物であるロストロギアに、それを狙う危険人物の相手もしなければなりませんから」

「ああ、なるほど」

ロストロギアだけでなく、それを狙う者の対処まで管轄内となると、なるほど確かにそれは戦闘能力も必要になるだろう。

「その上、大人数がまとまって事に当たる性質ではありません。現場に出て戦闘をこなせる種類の人間がどうしても武装隊と比べて圧倒的に少ないつちゆうのがまずありますし、どんな事態を引き起こすかわからず、迅速に対処しなければならぬロストロギア相手には、1の力を持った1000人よりも、1000の力を持った1人が必要とされる事が多いですから」

「事態が一人ひとりの手に負える規模から大きく逸脱してしまえば、どれだけ1の力を持つ人間の数が多くても意味はない。加えて1000人全員を事態が発生した現場へ臨戦態勢ですぐに揃えるというのがそもそもなかなか現実的じゃない、という事か」
「そういう事です」

確かに、夜天の書の事件でも武装隊は力を貸してはくれていたが、状況を左右する一瞬で力を発揮したのは、なのはやフェイト、クロノヤ、おこがましい事を言わせてもらうならば、自分だった。

「それから、ロストロギアがどんな事態を引き起こすか中々予想し切れませんので、現場では高い対応力が必要になってきます。恭也さんは使える魔法の種類こそ多彩ではありませんが、神速やSCLがありますから、突発的な事態にはめっぽうお強いです。そういった所も、ニーズと非常に合致するかと」

「なるほど……」

古代遺物管理部、確かにそこは話を聞く限り自分に合っているように思えた。有力な候補の一つ、としておきたい。

「誰か、ここに入っているものは？」

「所属は周りにはいませんね。ただ、ラインがたびたび任務を手伝っています。あの子は自身がロストロギアですから、その縁で。私とユニゾンした時こそ広域特化ですが、普段は器用なオールラウンダーで魔力量も多く、身体も強靱ですからね。活躍しているみたいですよ」
「そうか、流石だ」

ラインフォースなら確かに、多少の事態であれば顔色一つ変える事なく対処出来るだろう。適役だ。

「あとは単独での戦闘能力が重要というところ、何を置いても執務官なんですが……」

「それは無理だ」

即答の恭也にはやては苦笑。レンが首をかしげた。

「執務官って、フェイトちゃんや前にクロノ君が就いてた役職ですよ
ね？　なんでおししよあかんですか？」

「その二人から前に仕事の内容を聞いた事があるのだが、管理世界関連の法律、法令の知識が山と必要らしいんだ。そもそも執務官試験自体も、難関筆記があるみたいだしな」

「な、なるほど。司法資格みたいなもんなんですね……」

「法に則って状況を解決するのがお仕事ですから、どうしてもそう
なっちゃうんです」

恭也としては、海鳴大学の入学で一杯一杯レベルな自分がまず試験に受かるとは思えない。これは一番ありえない可能性だろう。

「他には、戦闘能力とはちよお違うんですけど、頑強さや突破力、状況把握の能力が大切になってくる特別救助隊っていうのもあります。災害地域なんか飛び込んで人命救助に当たる部隊です」

「そうか、そういう部隊もあるんだな」

「はい。これは私達の周りで誰が入ってるというわけではないですし、私も詳しくは知らないんですが……こんな感じですね」

机の上のスクリーンに、どうやら大規模な都市火災が発生したらしい現場の映像が流れる。獣のように暴れまわる炎の中を突っ切って行く局員の姿が見えた。

「おお、かっこええな！　おししよ、これ似合うんと違います？」

「救助隊という柄か？　俺が」

「柄ですって」

「いや、ううん」

唸りはするが、しかしなかなかこれもいい案な気はする。

単独での突撃や突破は、得意な分野だ。

「航空武装隊に古代遺物管理部、特別救助隊か。さて、どこを希望した
ものか」

「ああ、待って下さい、一番のお薦めがまだです」

てつきり選択肢は出揃ったものとして思索を始めた恭也に慌てて
そう言つて、はやてがコンソールをまた操作した。

スクリーンへ訓練に励む局員達の姿が映る。だがこの映像の主役
はどうやら彼らではない。

「これは、教導隊、だったか？　なのはが所属している」

彼らに指導を付けている教官達こそがメインだ。

「ええ、そうです。航空戦技教導隊、教育隊とはまた別に組織された、
掛け値なしのトップエース達、エースオブエースが集う部隊です。5
年前、リンデイさんが恭也さんへ一番にお薦めしたのもここやったん
とちやいます？」

「ああ、確かそうだったな」

「やっぱり。恭也さんにはびったりやと思いますよ」

「はやてちゃん、教導隊つて結局何してるとこなん？　教育隊とは何
が違うん？」

「新人達へ訓練を付けるのが教育隊で、第一線で戦っている隊員達を
さらに高いレベルへ引つ張り上げるのが教導隊です。ゆえに、当然な
がら非常に実践的な高い能力が必要とされます」

「ほほー、なるほど」

「だからエースオブエースの隊、なんだな」

つまり、こちらの世界でいうところのトップガンだろう。

「はい。演習での仮想敵役や局員達への技能指導の他にも、装備や戦
闘技法、戦術に戦略のテスト・研究も行っています。戦闘のスペシャ
リスト集団ですね。任務の際にはもちろん、最前線で重要な役割に
就くことが多いです。飛び抜けて優れているが故に、他の隊員と一丸
となるよりも、単独で状況を切り開く力が求められます」

「なんや、ほんまにおししよにびったりですやん。おししよ、教えるの
上手いですし、魔導師としてもアホほどお強いつちゆう話ですし」

「私もそう思います。指導力に単独での戦闘能力、その2つをあんな

レベルで揃えている人間はそうはいません。隊切つての名教導官になれると思いますよ」

「買いかぶり過ぎだとは思いますが……しかし、そうだな、気性には合っている」

美由希の師を長年やってきた事で後天的にそうなったのか、それとも先天的にそうだったのか、それはわからないが、人に教えるのは好きだ。

「……いい仕事、だな。俺にはもつたいないくらいだが。……やはり、入局の方向で考えてみるか」

「おししょー、うちのヒモになってくれるんと違うんですかあ」

「……頼むから変な男に引つかかるんじゃないぞ、レン」

「だいじよぶです、男の趣味はええですから」

悪戯に笑うレン。昔なら、恭也の感覚ではついこの間まではそんな彼女の頭を軽く小突いていたものだが、今の大人びたレンにそれをするのは憚られた。

「……いいんですか？」

お茶で喉を湿し、手続きはどこですればいいのかなどと考えていると唐突にはやてが問うてきた。

「ん、何がだ？」

「本当に、これは本当に私が言えた事ではないんですが、……魔法と関わった事で恭也さんは5年間を失う事になりました。またそんな事が起きたらって、怖くはならないんですか？」

それは真摯な瞳の問いだった。まっすぐに射抜くような、おためごかしを許さない言葉。

湯のみを置いて、彼女を見つめ返す。

「怖いさ」

「……っ」

「だが、怖い事だとわかっていればいい、覚悟が出来るからな。安全だと思つて、安心だと思つて足元が崩れるよりは、きつとよっぽどいいだろう」

「……相変わらず、お強いですね」

「凶太いのさ」

危険な仕事だと言うのは、わかっている。もちろん管理局の仕事の全てが危険なわけではないだろうが、自分の希望する場所は、そして自惚れた言い方をするなら自分を希望してくれる場所も、安全とは程遠いはずだ。

しかし言ってしまうえば、そんな生活は恭也にとってあまりに身近だ。

「それに、俺の元々の仕事場はミスを犯せば達人だろうが一撃死がありうる世界だ。そこと比べればバリアジャケットにシールド魔法、回復魔法に非殺傷設定なんてものも場合によつてはあるんだ、温いとは言わんが、悪い条件じゃない」

「……はい」

「それから、はやて。俺は5年間を失ったとは思っていない。身体は老化していないという話だし、寝ていた間に逃したものはこれから取り返せばいい」

「……」

「生きているんだ、それだけで望外さ。嫌味じゃないぞ」

「……はい」

微笑みを見せてくれた彼女の顔には、それでもやり切れない色が乗っている。

全部吹っ切れてくれなんて、やはりそれは望み過ぎなんだろう。

「それからまあ、なんだ、……俺に何かあったら、君たち八神家が助けしてくれるんだろう?」

「だけど、少しでもその罪の意識は軽くして欲しい。それくらいは、願ってもいいはずだ。」

「は、はい! それは、必ず!」

「だったら何を不安に思う事もない。頼りにしている」

「……はい!」

今度の笑顔は、さつきよりも明るかった。

「しかしあれですな、教導隊に入るとしたらおししよ、なのちゃんの同僚になるんですね。喜ぶやろうなあ」

レンが少し重くなった空気を払うように言った。

「そうだな、というか後輩か」

「なのはちゃんなら嬉しそうに手取り足取りべったりと教えてくれますよ。目に浮かぶようです」

「……べったり、か」

はやての言葉に、少し唸る。

「おししよ？ どうしました？」

「いや、そのなのはの事なんだが……やはり、寂しい思いをさせてしまっていたのだなと思ってな。べったりと言うのが適切かどうかはわからんが、昔よりもずっとスキンシップが激しくなったろう」

「あ、あー……」

「そ、そうですね……」

レンとはやて、二人から返ってきたのは微妙な反応だった。

「どうした？」

「いえ、おししよ、あれをそういう風に捉えているんだと思って」

「それ以外に何がある？」

「いえいえ、ええんですけど」

ずっと寂しくさせていた反動だろう、近頃のなのはは驚くほど距離を詰めてくる。

しかしその片鱗は思えば5年前、あの事件の渦中で見えていたと言えるだろう。

それこそ、驚きの『触れ合い』をしてきたものだ。

状況が状況だっただけに、いろいろと爆発してしまつた結果なんだろうとは思うが、しかし、大人びていると思つていた末妹が、感情が高ぶると過度なスキンシップを取る性質だというのは正直、知らない一面だった。

「しかしなのちゃん、最初こそあれでしたけど、本当におししよが帰ってきて幸せ満開ですよね。感無量ですよ」

「……やはり、寂しくしていたのか？ 俺が寝ている間」

「寂しく、っていうか……」

レンはそこで言いよどんだ。そして少しばかり考えた後、こんな事

を言い出した。

「ねえおししよ、三年くらい前にあつた話、知っています?」

「三年前? ……何かあつたのか?」

「あー、……やっぱり誰も話してないんやね」

レンのその言葉は独り言のようで、はやてに向けた言葉のようでもあつた。それを受けて、はやてが言う。

「いい機会やし、お話しておいた方がいいかもしれないね」

「……何か、あつたんだな?」

「はい。私は結局、何も出来ずに見ているだけでしたけど」

はやてが自嘲気味に零す。レンも「うちも同じです」と続いた。

「……あの、恭也さん。先にこんな事を言うのはあれですけど、どうかなのはちゃんを怒らないであげてくれますか」

「なのはを?」

「はい。それくらい、追い詰められていたんです。……追い詰めていたんです、自分自身を」

言葉から、声のトーンから、ただ事ではない何かがあつたのだと悟った恭也に、はやてはそれを告げた。

「なのはちゃんは自殺未遂をしているんです、今までに、二回」

「なのはちゃんは自殺未遂をしているんです、今までに、二回」

表情をあまり面に出さない彼の顔がはやての目の前、わかりやすいほど驚きに染まった。

慄いたと、そう表現したつていいんだろう。

「自殺、未遂……それも、二回だと?」

「はい。一回目は、恭也さんが書の闇のコアを破壊した直後、グレアムおじさん達が冷凍睡眠による治療法という選択肢を持ってきてくれる前です。恭也さんの命が絶望的だとわかって、恭也さんの遺した言葉を聴き終えて、それで」

「……」

顔色を失くして、絶句する恭也。

『私も一緒にいく』、そう言っていました。それから砲撃魔法で自分

の頭を撃ち抜こうと」

降りた長い沈黙の後、絞り出すように彼は呟く。

「……なんて、馬鹿を」

テーブルの上に置かれた手は、真っ白に握りしめられていた。

「誰か、止めてくれたんだな?」

「リンデイさんとユーノくんです。飛びついて、身体を抑えてレイジングハートをむしり取りました」

「……礼を、言いに行く。それで……それが一回目? 二回目も、あるんだな?」

「……はい」

痛みに耐えるような彼の口調に、この話はするべきでなかったかと思つて、しかしその考えはすぐに捨てた。

誰かがきつと、あの日のなのはの苦しみと選択を彼に伝えねばならず、それはせめて、リンデイやユーノ、そしてフェイトのように動けなかった自分が請け負うべき事だと思う。

「二回目は、先ほどレンさんが仰っていたように、今から三年ほど前の話になります」

恭也へあの日の事を正確に告げるために、はやては自らの記憶へ潜る。

三年前、白い廊下がその起点だった。

「ヴィータは!? ヴィータは大丈夫なん!?!」

本局の医療センター、そこへはやてが駆けつけた時にはすでに処置室でヴィータの治療は始まっていた。書の管制担当であるリインフォースと治療担当であるシャマルも中へ入り、彼女の修復へ尽力しているとの話だった。

「主はやて、我ら守護騎士は頑丈に出来ております。ご心配なく」

「主を残して一人去るような不屈き者は、我らの中にはおりません」

血の気の引いた顔で、処置室の扉の前、固まっていたはやてに声をかけて来たのはシグナムとザフィーラだった。

「……で、でもヴィータ、大怪我やったって」

「主はやて」

すつと、シグナムが床に片膝を突いてはやてと目線を合わせる。

「詳しい状況はまだ私も知りませんが、任務の最中、出現したアンノウンの機体の攻撃からヴィータはなのはを庇って負傷したようです。つまりあいつにとつて——我らにとつて、それはこの上なく本望な傷です」

家族の危機にみつともなく煮立っていた頭が、その言葉でクリアになった事を、よく覚えている。

「我らが今、こうして主に仕えていられるのは、なのはやテストアロス、当時のアースラクルーの面々、そして誰よりあの騎士が、あの日救ってくれたからです。その恩に少しでも報いる事が出来るのなら、たとえ腹に風穴が空いたとして、それが一体何でしょう。首と胴が離れても、きつと我らは後悔しません」

「シグナム……」

「ヴィータとは長く共に戦ってきました。あいつの気持ちは、私にはよくわかります。すぐに元気な顔で今の私と同じ事を言うはずですよ。ですからどうかその時まで、お待ちください、我が主よ」

「……うん」

あまりに清廉なその声音に、言葉に、はやては迷わず頷いた。

なのはを庇った。それはきつと、シグナムの言うとおりのヴィータとしては本望のはずだ。自分がその場にいても、同じ事を迷わずしていると切り切れる。ヴィータほど上手くは出来ないだろうけど。

彼女は強く、そしてシグナムの言葉を借りるならとびきり頑丈だ。夜天の書が完全な形でその機能を発揮している限り、普通の人間とは比べ物にならない頑強さを誇る。

大丈夫、大丈夫だ。

深呼吸、一つ。

震える手を足を、視界を安定させた、その時だった。

「ヴィータ、ちゃん……」

背後から、幽鬼のような声がした。

揺れて、かすれて、それでもなおはつきりと聞こえる濃さを有した、そんな音色がはやての背を粟立たせる。

「……なのはちゃん？　だ、駄目やろ、検査はどうしたん？」
よろよるところらへ歩み寄ってくるなのはは、目立った傷こそないが消耗し切っているはずなのは確かで。

どう考えても、普通はベッドで横になっっていなければならぬはずで。

そして、そんな体調云々を抜きにしたって。

「ヴィータちゃん、ヴィータ、ちゃん……」

「……なのはちゃん、落ち着いて」

安静にさせなければならぬと、彼女が浮かべている表情はそう思わせるに十分なくらい危険な色をしていた。

「ヴィータは大丈夫やから、な？」

自らの声音を出来る限り安定させて、なのはに呼びかける。対応を誤ってはならないと、はやての頭には大音声で警鐘が鳴り響いていた。

彼女の、なのはの表情は崩れそうな壊れそうな、いや。

「わ、たし、だ」

壊れ切ったようなと、そんな表現がもしかしたら適切なのかもかもしれない。

「わたし、だ。また、わたしだ」

だって、今日のこの事を抜きにしても、高町なのはは誰の目から見たって、もういつ限界を迎えてもおかしくなかったのだ。

「なんでわたし、また、また、わたしが」

自分を追い込むだけ追い込んで、自爆技のような秘技まで身につけて、彼女は彼女を磨き上げている。その研磨は、削つていると言つてもいい荒々しさであり、何が削られていたのかといえば、

「あ、あああ……」

それは取りも直さず、彼女の精神。

「あああ……あああああああっ」

「なのはちゃんっ！……くううー！」

「なのは、落ち着け！」

吹き荒れる魔力による暴風。荒ぶった感情が時折起こす事のある、

強い魔力を持つものゆえの現象。

なのはが、その場に崩れるように両膝を落とした。風をかき分けてなんとか駆け寄ろうとするはやての頭に、一つの最悪な予想が生まれる。

おそらくは持って生まれた頑強さと要領の良さでこれまで破綻せずに来てきたが、しかし。

ギリギリの所で保たれていた彼女の心のバランスを、今回の件は奈落の方向へと傾けてしまったのではないか——なんて、そんな。

「……はやく」

「なのはちゃん？」

「だめだ、やっぱりだめだ。だめなんだ。はやく、はやく」

そんな予想は、多分大当たりだった。なのはの下まであと三歩、四歩、そんな距離で。

「わたしがしない」と

なのはは左手の人差し指を自分のこめかみに向けた。その先端には桜色の光が灯っている。

宿る光、感じる魔力から察するに、それは細く小さいが砲撃魔法で。

この至近距離、バリアジャケットも展開していない人間の頭一つくらい吹き飛ばすのにはあまりにも十分。

「あかんっ！　なのはちゃん！」

到達威力が高く、その代わりに立ち上がりが最高に遅い自分の魔法適正が今、とてつもなく恨めしかった。

強引に突破しようにも魔法で妨害しようにも、自分の速度ではあの光の炸裂に間に合わない。

「なのは！　止めろッ！」

後ろのシグナムも、はやてほどではないが初速には優れないタイプ。足に魔力を纏わせて踏み込みの準備をしているが、遅きに失するであろうことは明らかだ。

「ディバイン、バスター」

二人はなのはの指先から光が放たれるのを、見ているだけしか出来なくて。

そのまま、なのはの頭が飛ぶのを見過ごす事に、

「……？」

ならなかった。

「……あ、れは」

「……テスタロッサ！」

なのはの頭と指先の間、奔った桜色を遮ったのは金色の膜。

気配もなかった所から驚くほど早く発動された魔法、そしてその魔力光の色。発動者は、シグナムの叫び通りの人物だった。

「病室から居なくなつたつていうから、探しに来て正解だった」

「……フェイトちゃん！」

はやての声の先、なのはの向こう側に居たのは、肩を上下させながらこちらへ手を翳した金髪の少女。

フェイト・テスタロッサ・ハラオウンだった。

「ここかなと思って追いかけてきたけど、やっぱりだったね」

「……フェイトちゃん？　なんで？」

振り返りながらフェイトへ向けたなのはの声は、背筋が寒くなるくらいに素朴だった。どうして邪魔をしたのか、ただただそれを問うているだけの声。彼女の凧を表すように、吹き荒れていた魔力風も止んでいる。

「なんで？　……か」

そんななのはの下へフェイトは無表情で歩み寄って。

彼女の方へ身体ごと向き直っていたなのはの顔面を、握りしめた右拳で思い切り殴り付けた。

「うわ、わわわ……」

肉が肉を、骨が骨が撃つ鈍い音。自分の口からは情けない声が漏れた。

フック気味のその一撃はなのはの身体を横の壁際へと吹き飛ばして。

「なんでは、こっちの台詞だ」

壁を背に、そのままずると座り込んだなのはへ殺気すら感じる凄みを織り込んだ声でフェイトは言った。

「今、何をした」

「……わたしがいたら、また誰かがきずつく。だから」
「へえ」

先ほど殴った方とは今度は逆サイド、またしても強烈な一撃を見舞うフェイト。

そしてそんな拳を喰らっても、

「……叩くのは、いいけど。でも、じやまをしないで」

なのはの眼はただただ虚ろだった。怒りも憤りも、何も感じていないのだろう。

「よく見ている。私は二発、君を殴った。だから」

そんな彼女に淡々とした、しかし内に激情を湛えた声でそう言うフェイトは、一つの光球を作り出した。そして、

「……え」

「……っ」

拳大のそれを高速で飛ばし、自分の顔面を殴りつけた。

「フェ、フェイトちゃん」

戸惑うなのはに構わず、もう一発。躊躇なくフェイトは自分の魔法で自分を殴る。拳大のそれには、おそらく彼女得意の電撃等は付与されていないように見えるが、それゆえに純粋な物理衝撃は相当なものだろう。

「いいか、なのは」

「フェイトちゃん、なにを……っ!？」

止めようとするなのはをバインドで拘束し、また殴り付けるフェイト。

「フェイトちゃん！ やめて!」

そしてすぐさま、自分の顔を同じように、もしくはそれ以上の威力でもって光球で殴打する。

「やめて? そんなの、聞くとと思うか」

それからは、もう数えるのも嫌になるくらい鈍い音が鳴り響いた。フェイトがなのはを殴る音、フェイトが自身を殴る音だ。

床に壁に、血が飛んで目に鮮やかな赤を散らしていく。

「こ、これ以上はあかんやろ！ 止めなっ」

「……お待ち下さい」

二人の間に割って入ろうとしたはやてを止めたのはシグナムだった。

「シグナム？」

「主はやて、どうかテストタロッサの好きにさせてやって下さい」

「で、でも、あんな事続けてたら！」

「大丈夫です、あいつらはそんなに柔な女ではありません」

はつきりと揺れない口調のシグナムは、凜とした眼で二人を見つめている。その落ち着き払った態度に、結局はやては従う事を選んだ。

「……フェイト、ちゃん」

「……くそ、こつちじゃなかったか」

フェイトの拳が目の前にいるはずのなのはの横を通り、壁を殴りつけた。

「光球が顎に当たった事で軽い脳震盪を起こしているんでしょう。おそらく、今のテストタロッサにはなのはが二、三人見えていると思います」

シグナムが冷静に、そんな解説をくれた。

「フェ、フェイトちゃん、お願いだから、もう、もうやめて」

「……」

「なんでフェイトちゃんが、フェイトちゃんを殴る必要があるの……？ 私だけなら、いくらだって殴っていいから……っ」

今度の拳は、無事と言つていいのかどうかかわからないが、なのはの頬を捉えた。

「やめるわけ、ないだろ」

「フェイトちゃん……お願い」

「うるさい」

鋭い拳が、また閃く。欠かさず続けているらしい鍛錬の成果だろう、脳が揺れていてもなお、鋭く奔っている。

「フェイト、ぢや……」

「痛いか？」

怒気満ち満ちる声で、フェイトは言う。

「痛いか？ ……友達が目の前で傷ついてるのを見るのは、痛いか」

「い、痛いよ……！」

「……そうか、痛いか」

「っ！」

もう何度目か、なのはを殴り、自身を殴るフェイト。

「理解しろ。君はさつき、その最上級をやろうとしたんだ……！」

血を吐くような口調には、マグマのような熱が籠っていた。

「ふぎけるな！ 何が、何が自分がいたら周りが傷つくだ！ それで君が自分で死んだら、それこそ！ これ以上なく私達は傷つくぞ！」

「……あ」

「なんで、なんでそんな事、なんで言われなきやわかんないんだよ！」
怒号と共に打撃が飛ぶ。「拳にも、多分そろそろヒビが入っているでしょう」とシグナムが呟いた。

「……それに！ それに！」

「う、……うう」

「それに！ そんな事、もしそんな事になったら！ ——あの人はどうなるー！」

「……っ！」

咆哮というべきその声は、びりびりと空気を震わせる。

「生命を賭けて私達を守ってくれたあの人の、あの日の事を、無駄にするつもりか!？」

「……うう、あ」

「それで、それで！」

フェイトは、大きく腕を振りかぶる。

「それであの人が起きたその時に！ どんな気持ちになると思ってるんだ！」

ブオンと音を鳴らして振るわれた拳は、空を切った。フックの軌道だったからだろう、壁にも当たらず横に抜ける。

そのままフェイトは体勢を崩した。床に膝を突く。

「……テストタロツサ、もういいだろう」

そんな彼女に、シグナムが寄り添った。肩に手をやり、優しく声をかける。

「なのほも、お前の言うことをわかったろう」

「……まだです」

顔を腫らして、眼の焦点は怪しく、膝は笑っているけれど、それでもフェイトは立ち上がった。

「テストロッサ……」

「フェ、フェイトちゃん」

シグナムとはやてには目もくれず、フェイトは再度、なののはの前へと立った。彼女の胸ぐらを掴む。

「……この、大馬鹿」

「……………う、あ」

「わかれよ……」

フェイトの肩の震えは、どうやら怒りだけではなく。

「わかれよ、わかれよ、わかれよお……！」

「う、うう……」

「それぐらい！ それぐらいわかれよお！ なんでわかんないんだ

よお！ 君が一番！ 世界で一番！」

あの人に愛されているくせに。

血を吐くように発されたその言葉は、今日で一番悲痛な色をしていった。

ぼたりと床に降りたのは、フェイトが眦から溢した雫で。

「あ、……ああああああああ」

なののはが抑えきれずに落とした感情の塊。

彼が遺したあの言葉を聞いてから、今までどんな傷を負ったって堰き止めていた禁断の雫。

「……泣きたいなら、そうやって素直に泣けばよかったんだ」

「で、でも、でも、わだし、な、ないちゃだめ、だって」

「恭也さんが言ったのは、そんな事じゃないだろ……」

顔をぼくぼくに腫らして、涙をぼろぼろと流す彼女達の姿はあまりに凄然で。

「泣くのを我慢して笑ったって、あの人は喜ばない……！ そんな笑顔、あの人が願った笑顔じゃない……！」

だからこそ、生々しい熱に満ちていて。

「笑えないなら、ちゃんと泣いて、その後に、ちゃんと笑え……。……私だって、私達だって、つなのはの笑顔が好きなんだよお」

「……っ、う、ううううう、うううううううう」

最後の言葉が堤防を壊したのだろう。

「ああああああっ、あああああああああああ！」

堰き止められ、胸の内でも勢いそのまま荒れ狂っていたはずのその激流は、ようやくと世界に溢れる事を許された。

「……行くぞ」

「……うううう、ああああああっ」

そんな彼女の手を引いて、フェイトは突然歩き出した。空いている手で端末を操作、コンソールを表示させ、音声通信回線開いた。

「こちら、本局執務官テストタロツサ・ハラオウンです。転送ポートの使用許可を」

『かしこまりました。5番をお使い下さい』

「ありがとうございます」

「フェ、フェイトちゃん！」

「テストタロツサ、どこへ行くんだ！」

はやて達を置き去りに、すたすたとフェイトはなのはを連行と言っていいだろう態で引きずっていく。

「二人とも、待って！ あ、で、でも」

「主、将。ここには俺が残ろう。行ってくるよいいい」

迷っている、今まで静かに状況を見守っていたザファイラがそう言うてくれた。一瞬の逡巡の後、シグナムと視線を合わせて頷き合っ
て、はやてはフェイト達を追って駆け出した。

「テストタロツサ、どこへ？」

「高町家です」

短く返したフェイトは言葉通り、訪れた無人の転送ポートで高町家へと繋がる座標を入力。

はやてとシグナムもポートの上へ乗り、四人はすぐさま光に包まれる。

たどり着いたのは上品で静かな庭先。夕焼けで赤い色に染まっている。

フェイトはずんずんとなのはを引きずるように進み、戸を開け放ち玄関へ入る。はやてとシグナムもそれに続いて。

「お、フェイトちゃんいらっしやあああああああああああ!?!」

玄関先の廊下の上、ちようど居たらしいレンが尻もちをついて悲鳴を上げた。

「うるっせえぞ亀！ 近所迷惑だつてわかあああああああああ!?!」

レンの声を聞いてやってきたらしい晶もほぼ同じリアクションを返す。

「救急箱！ 救急箱！ 救急箱！ 晶君救急箱！」

「ばかやろそんなもんでどうにかなる怪我じゃねえだろああこれ、ああもうこれもうこんなこれ！」

おろおろおろおると、うろたえる二人を前に、フェイトは上がり框の上へ放るようになのはを投げた。

晶が慌てて受け止める。

「フェ、フェイトちゃん？」

「私がやりました」

それは躊躇いのない、清廉な声音だった。

「フェイトちゃんが……？ これ、二人が喧嘩したって事？」

「いえ。私が一方的に……腹がたつたので一方的に」

「い、一方的について、フェイトちゃんもごっつい怪我しとるけど……」

「これも私が勝手にやりました」

事態が把握できないとばかりに、晶とレンははやてとシグナムに助けを求めるような視線を向けてきた。

はやてがご説明しますと言うよりも先に、フェイトがまた言葉を発する。

「馬鹿だから」

「え?」「え?」

「この娘が馬鹿だから殴りました」

「……フェイドぢゃ」

晶の腕の中、涙でぐしゃぐしゃな顔でなのはが呻く。

「馬鹿だから、馬鹿だから、何にもわかっていない馬鹿だから」

フェイト・T・ハラウンという少女は、はやての知る限り人を滅多に悪く言わない少女だ。使う言葉も柔らかいものを好んで選ぶ。

「馬鹿だから、……馬鹿だから」

その彼女が、まっすぐにこんな言葉を発している。唇を噛み締め、肩を震わせ涙を零し、馬鹿だからと言い続ける。

その姿に、ただならぬものを感じたのか晶とレンは神妙な顔で黙りこみ。

「とりあえず、みんなお部屋に上がってちょうだい」

そう言ったのは、いつのまにかレンと晶の後ろに立っていた桃子だった。

「はい、これでひとまずは大丈夫よ。でも、何日かは絶対に私のところへ通うようにしてもらおうからね? 綺麗な顔に痕でも残ったら大変なもの」

「……ありがとう、シャマル」

「ううん、でも、まったく。拳にあんなヒビまで入れて」

呆れたように、シャマルは優しく彼女らしい笑みを浮かべながらフェイトの手を撫でる。はやての目に、素直にされるがままのフェイトはどこか小さな子供のようにも見えた。

医療担当としてヴェータに施せる全てを終えたらしいシャマルが、管制担当として仕事の残っているリインフォースよりも先に治療室を出たのが、ちようどはやて達がフェイトとなのはを追って行った直後だったらしい。状況をザフィーラから彼女に伝えられた彼女は押っ取り刀で駆けつけてくれた。

その惨状に大いに顔を厳しくした後（悲鳴をあげなかったのは、さすが普段から怪我を見慣れているだけある）、なのはとフェイトの負

傷を全力で持つて癒やしてくれた。

「ありがとうね、シャマルさん。それから、ごめんなさい。せつかく治してもらったのに何なんだけど」

「え？」

桃子はすまなそうに言うのと、何について謝られたのか疑問を浮かべたシャマルを置いてけぼりにして。

スパアンと、それはもう音高く。

彼女はなのはの治療されたばかりの頬を張った。

「も、桃子さっ」

「ひ、ひええ」

晶はおろおろと所在なげに手を動かし、レンは桃子の発する刃物のような怒気に身を縮こませた。

「ふざけた真似をしてくれたわね、なのは」

「……ごめん、なさい」

「……っあんたねえ！」

正面、正座で俯いたなのはの胸ぐらをひつつかみ、上を向かせて桃子は吠える。はやての見たことのない、それはそれは険しい顔で。

「あんたねえっ！」

心の底から怒っているような、

「あんた、あんたねえっ、なのは！ あなたねえ！」

「おかあ、さん……」

魂全部で泣き叫んでいるような、そんな顔で。

「どうしろって言うのよお！」

「……おかあ、さん」

「どうしろって言うの!? あなたが、あなたが、——あなたまで！」

「ごめんっ、なさい……」

「あなたまで……あなたまで私を置いて行っちゃったらあ！」

桃子は崩れ落ちるように、掴んだなのはの胸に顔を埋めた。

「どうしろって言うのよお……」

震えるその背中が、あまりに小さい。

「……もうあんな想いはたくさんよ、嫌よ、勘弁してよお」

「ご、ごめん、な、さいいい！」

「許さないわ、許さないわよ……私より先に死んだりしたら許さないんだから！」

リビングの隅、飾られた遺影が目に入る。そこに映っているのは、彼女の最愛の人だ。

そしてそれによく似た人もまた、永遠に、ではないにせ、今ここにはいなくて。

「例えどんな事したって、私はあなたの味方よ……！ 例えどんな事したって、私だけはあなたを絶対抱きしめたげるわよ……！ だって、私の子供だもの！ ……だからさあ！」

くぐもった声が、静寂のリビングに響く。夕焼けの赤はそろそろ、夜の宵闇に出番を渡す頃合いだ。

「だから、だから、親より長く生きるって、私より先に逝かないって、それくらいの義務は果たしてよお！」

「ごめなごいいいいつ、おかあさん……っ！」

二人の母娘は、わんわんと。

声が枯れるまで泣き続けた。

「……おにいちゃん？ どしたの？」

「いや」

真冬の凍えるような縁側でお茶を楽しんでいる恭也の隣、妹が自身をみつめる視線に疑問の声をあげた。

「……その、な」

恭也がはやて達に五年前の事、そして三年前の事を聞いたのは昨日。

今に至るまで結局、恭也はなのはにその話を出来ないでいた。

「寒くないのか？ こんな所において」

「寒いよ、でもくっついていれば暖かいから」

その身体を恭也にべたりとつけて、なのはは柔らかい笑みを浮かべ

る。

(なのは、か)

なんて、愛おしいのだろう。

そんな事は今更確認するまでもない。

この娘は生まれた時から、否、生まれる前から、恭也にとっては自分の愛を際限なく注ぐ相手だ。

だから、感謝しかない。

今ここにある現実には、感謝しか出来ない。

「えっへへ……」

こうして幸せそうにしている今に、暖かい体温と鼓動を伴って笑っている事に、ただただ感謝をするしか、ない。

「……なあ、なのは」

「ん、なあに？」

「……昨日、聞いたんだ。五年前と、三年前の事を」

「……っ」

妹の身体の強張りは、ぴったりとくっついていてるが故にダイレクトに伝わってくる。

「今更、俺が引っ叩こうとは、思わん。フェイトと母さんがしっかりやってくれたみたいだしな」

「……はい」

「だが、なのは。覚えておけ、なのは」

なのはの眼を真正面から見据え、恭也は告げる。

「もし、今度また死にたくなったら俺に言え。俺がお前を殺してやる。そしてもし、俺に言わずに自分で死んでみる。あの世まで追いかけて、俺が手ずから殺し直してやる」

脅してではない事を示すように、今の恭也はなのはに対し、純粋な殺気を向けている。

大切な大切な存在に、純粋な命を奪う意思表示を向けている。

(……悪い、父さん)

これが、こんなものが、自分に出来る今一番の愛情表現なのだ。

もつと上手い言葉が、もつと暖かい行動が、出来る誰かも居るのだ

ろう。だが恭也には、こういう言い方しか、やり方しか、出来なかった。

「わかったな？」

受けて、なのはの浮かべた表情は。

「……………はいっ」

笑顔というには、目端が濡れて。泣き顔というには、どこか穏やかで。

それでもやはり、どうあっても結局、恭也の愛する妹で。

「……………つおにい、ちゃん？」

なのはの背中へ片手を回し、こちらへ引き寄せ胸に掻き抱く。

「なあ、なのは。お前は俺の宝なんだ。お前より大切なものなんか、お前が生まれてこの方、俺には一つだつてないんだ」

「……………本当、ですか？」

「ああ。俺の剣と、それこそ命を賭けたつていい」

気持ちを示すように、胸の中の愛しい塊を抱く力を強めると、彼女の熱がより伝わってきて。

その温度は、暖かいという範疇に収まらない。

「おにいちゃん……………嬉しくて、ごめんなさい、死んじやいそう……………」

「そうしたら、俺も追いかけてやる」

「つ、も、本当に、死んじやうからあ……………！ やめてください……………つ」

小さな手が恭也の背中へと回り、硬く握りしめてきた。

”ねえ、恭也”

なのはの熱を、感じながら。

”あなたが眠っていた間、色んな事があつたわ”

恭也の脳裏にはなんとなく、桃子の言葉が蘇る。

”色んなあの娘を見たわ。それでね、私はこう思ってる”

至極当たり前の事を言うような口調だった事を覚えていて。上に投げたものは落ちるとか、それくらい当たり前の事を言う口調だった事を、よく覚えている。

”この世で一番あなたを愛しているのは、きっとあの娘だつて”
(愛している、か)

「おにい、ちゃん……！」

「ああ、俺はここに居る」

わかっている。

いつかは、そういつかは。

この娘も誰かを好きになって、いずれは嫁に行くのだろう。この腕の中で育ったこの娘は、この胸の中からいつか巣立っていくのだ。

だけど、せめてそれまでは。

だから、せめてそれまでは。

「お前が望んでくれる内は、いつまでだつてここに居る」

出来うる限り、この娘の傍に居たかった。

第20話 五年前の俺になら

「なあ、なのは。仕事は楽しいか？」

夕食を済まし、いつもどおりリビングのソファに座ってくつろぐ恭也は、これまたいつも通り、そんな自分の隣にぴったりとくつついているなのはへそう問いかけた。

「管理局？ うん、やり甲斐あるし」

唐突だったそれに答える彼女の言葉には迷いがなく、力みもない。それは実力と実績、自信と自負を持つ者の口調だ。

「そうか。俺も入ろうかと思ってな」

「え!？」

ぽんと放ったその言葉への反応は劇的だった。なのはは輝く瞳でずいっと恭也の顔を見やる。

「ほんと!? 入るの!? どこ、どこ狙い!？」

「一応、お前のところだ」

「教導隊!?! うんうんうんうん! それがいいよ! ぴったりだよ!」

満面の笑み、見ているこちらが照れくさいくらいなの。

「おにいちゃんが教導官かあ、おにいちゃんと教導隊かあ。えへ、えへへへへへへへ」

「お前が同じ隊にいて色々教えてくれるなら、俺も安心ではある」
「そ、そう? えへへへへ……頑張る!」

こちらの腕をその胸に抱いて喜色満面の妹の顔は、兄馬鹿かもしれないがやはり比べるものがないほどに愛らしい。そんな自分の思考に苦笑しながら空いている手で頭を撫でやると、惚けたようになのはは笑う。

若手最優秀、空のエースオブエースと名高いらしい彼女だが、恭也にとっては可愛い妹だ。

「でもあれだね、てことはおにいちゃん、一旦訓練学校に通うことになるんだね」

ひとしきり喜びの声を上げた後、なのははそんな事を言った。

そうか、学校か。

「そういうのがあるのか」

「うん、私とフェイトちゃんも通ったよ。ただ、三ヶ月の短期コースだったけど。おにいちゃんも多分、それになると思う」

普通は何年通うのかは知らないが、なるほど三ヶ月というのは確かに短期だ。

「ていうか、あっちからしたら三ヶ月もおにいちゃんに何教えるんだって話になっちゃうとは思うけどね」

「何って、それは魔導師として、局員としての基礎知識と常識だろうか？」

「もちろんそういう科目もあるよ。だけどそれはメインじゃないの。二週間くらいで終わっちゃう。やっぱり訓練学校だから、実技が主なんだよ」

「そういうものか」

「うん。で、実技って、戦闘能力で空戦SSを取ってる人に何を教えるんだって話」

苦笑するなのは。

「なのはとフェイトはどうだったんだ？ お前たちだって相当のランクだったろう？」

「うん、AAA+だったよ。だから、技術とかより戦術を習ったの」

「だったら俺もそれを……」

「うーん……」

しかし、なのはは難しい顔。

「いやさあ、任務を請け負う時のプロとしての考え方、攻め方、守り方、みたいな事を習ったんだけど、散々もうプロとしてやっていってるおにいちゃんには今更じゃない？ 局員の任務よりも遥かにシビアなわけだし、おにいちゃんの護衛仕事って」

観点にもよるが、まあ確かに銃弾一発で死がありえるこの世界での任務は、確かに魔導師のそれよりもシビアかもしれない。

「それをこなしている人に今更戦術を教えるのもねえ……もちろん魔法のあるなしって違いはすごく大きいだろうけど、ただ、じゃあおに

「いちやんの戦闘スタイルが魔法を覚えたからといって大きく変わったかと言うと」

「……変わってないな」

「だよねえ。変わってないだろうし、変える必要もないだろうし。今のスタイルの強力を考えると、変えるメリットなんてあつてないよなものだよ。そういう意味でだから、つまり結局、おにいちやんの戦い方って元々のものの延長線上にしかないわけじゃない？ そうしたら扱う戦術だつて大して変わるわけじゃない。だったら、少なくとも訓練校で教わるような事つてほとんどない気がするんだよねえ……」

「……訓練校に入れてもらえないとか、そういう事は」

「ないない、それは大丈夫だよ！ ただ、校長先生がき、色々お世話になつた人でさ、困るだろうなーつて思つて。もちろんおにいちやんが悪いわけじゃないんだけど」

「訓練学校には行かなきゃいけないつて制度、考えものだよねとなのはは結んだ。」

「訓練内容に関しては俺が考えても仕方のない事か。入校の手続きなんかはどうすればいい？」

「そこら辺は私がやつておくよ、必要な書類だけ後で渡すから書いておいて。推薦者も私が。親類だけだとちよつと格好がつかないから、フェイトちゃんとはやてちゃんにもお願いしよう。クロノ君とリンデイさんにもなつてもらえると非常にスムーズ」

「そうか、後で頼みに行こう」

「現役 of 教導官と執務官と捜査官に加え、艦隊の提督と元提督の名前があれば確かに話も早かろう。」

「ただそうになると、多分もう一回やらなきゃいけないと思う、ランク測定」

「ん、そうなのか？」

「入局前一年、出来れば三ヶ月以内に測つたランクで届けなきゃいけないから。おにいちやんが以前に測つた記録は五年前のものになつちやつて……」

「そうか、そうだよな」

恭也の主観としては一月くらい前に測ったばかりだろうという感じだが、周りからすればそうではないのだ。

「しかし、そうなるか……」

「うん、また相手をするよ——私とフェイトちゃんが」

「さあて、どっちが勝つかねえ」

管理本局に設えられたかなりの広さと天井の高さを持つとある演習場、そこへ透明な特殊強化素材越しに隣り合う形で作られたモニタールームで、ヴィータは呟いた。

個人的には世紀の一戦と、そう称しても良いくらいの好カードだ。

「どうだろうな、……恭也だという気がするがな」

こちらの言葉にそう答えたシグナムは、しかし腕を組みながら難しい顔だ。どちらが勝つと簡単に言い切れるほど結果のわかる戦いではないのだ、当然と言えば当然だろう。

「シグナムは恭也派か。アタシはなのはとフェイトに賭けるぜ。そりゃあキョーヤはアホみたいに強いが、今のあの二人を同時に相手取って勝てるやつなんているもんかよ」

演習中、常に大量の魔力を流し込まれる事で魔法と物理両面で高い強度を発揮する透明な強化素材の向こう、演習場のそれぞれ東の端に恭也、西の端になのはとフェイトが臨戦態勢で佇んでいるのが見える。また、部屋の中にある各種スクリーンには様々な角度から撮られている映像が映し出されている。

「僕は、それでも恭也さんに賭けよう。なのはとフェイトの努力も実力も承知の上で、だ」

恭也の改めてのランク測定、そのための模擬戦。是が非でも見たいと、わざわざ仕事を徹夜に近い状態で終わらせて駆けつけてきたらしいクロノがそう言った。

「私はなのはちゃんとフェイトちゃんやなあ。リインフォースは？」

「……すみません、我が主。私は騎士恭也かと」

はやてはなのは・フェイト組、リインフォースは恭也にそれぞれ票を入れる。

「俺も恭也だ」

「あら、ザフィーラは恭也さん？ 私はなのはちゃん達ねえ」

ザフィーラはどうやら恭也、シャマルはなのは・フェイト組らしい。

「ユーノ、お前は？」

「僕かい？ 僕は……そうだな、なのはとフェイトに賭けよう」

「私は騎士恭也様ですー！」

クロノに問われたユーノは少し悩んで、そしてリインの肩の上に座するリインフォースⅡは即答で返す。

「私は、なのはちゃんとフェイトちゃんかな。リンデイ提督とアルフは？」

「私も二人かしらね。恭也さんの実力はわかっているけれど」

「アタシは恭也だね。恭也が負けるところが想像出来ない」

エイミイ、リンデイ、アルフがそれぞれ予想を立て、これで現在モニタールームにいる全ての人間が票を投じた事になる。

ちょうど、結果は半々だ。

「そりゃあ、もし恭也が薙旋・千舞だったか？ あれ使えばすぐに勝負は着くんだろうけど」

「まさか使われる事もないだろうけど、それは薙旋・舞とともにこの模擬戦では禁止技とさせてもらってるよ」

ヴィータの言葉に答えたのは、ルールの設定をしたエイミイだ。

「自分の身体に無茶な負荷を掛けるような技は原則禁止。つまり恭也さんなら薙旋・舞と薙旋・千舞、なのはちゃんならブラスターモードとスターライトブラスター、フェイトちゃんは神速レベルの知覚は禁止してないけど、その中で動く事や魔法を使う事は駄目」

「まさか模擬戦で身体ぶっ壊してもらわけないだけどねえ」

「模擬戦でなくとも使ってもらいたくないんだけどねえ」

シャマルがため息とともにそう溢した。医務官として、彼らの無茶は目に余るらしい。

「お互い自己犠牲系の反則技は封じられている。となればより地力で

の勝負って事だよな」

さて、どうなるか。ヴィータは透明な強化素材に額をくつつけて、眼下の光景を見逃すまいと目を見開いた。

『お強くなりましたね、お二人は』

「ああ、本当にな」

視線の先に佇むなのはとフェイトの気迫を肌で感じながら、恭也は魅月の言葉に頷いた。

「なあ、魅月」

『はい、主』

「俺は、負けるつもりはない。戦えば勝つのが御神流だ」

『ええ、鋼の芯まで存じております』

「だが、……きつと、今日のこの試合、負けたとしても俺は納得してしまっただろう」

それは、美由希のときと同じだ。

会った時から自分より強い者に負ければ、それは後悔もしよう。口惜しく思うだろう。

だが、最初は自分よりも弱かった者達が、ほんの少しとは言え自分の教えを受け、自分を追ってあそこまで成長したというのなら。

「俺は、あの娘達になら斬られてもいい」

『……主』

「幻滅したか？」

『するとお思いですか？』

「……いや」

恭也は苦笑して首を振った。

視界上方、カウントダウンの数字が現れる。値は10、開始の10秒前だ。

『ですが、主。一つ、どうか私にも言わせて下さい』
「なんだ？」

順調に数字が減っていく中、魅月は彼女らしい控えめな声で、しかし確かにこう言った。

『貴方が名付けた貴方の魅月は、いついかなる時であれ、貴方の勝利を疑いません』

「……やはり君は、最高の相棒だな」

カウントは、ゼロへ。

そして試合が始まった。

(ほう……)

静寂、それだけが場を支配している。なんの音も、ここにはない。

(前と同じく、前衛のフェイトが突っ込んでくるかと思ったが)

彼女はバルディッシュの穂先をこちらに向けたまま、なのはよりもやや前方でこちらの様子を伺っている。

いや、伺っていると言うには少々、その瞳は全力に過ぎるかもしれない。鋭い光を讃え、まっすぐにこちらを射抜き続けている。

「さて、どうするか」

『こちらから仕掛けますか?』

「……そうするとしよう」

両の魅月を抜刀、刃を見せつけるように二人へ示しても、攻撃してくる様子はない。カウンター狙い、という事だろう。

『何か策があるのでしようが、よろしいのですか?』

「ああ。受け止めてこそだろう」

『お付き合い致します』

「頼んだ」

眩目を唱え、身体の全体を強化。

地を蹴り、一気に間合いを詰める。フェイト達との距離が五メートルを切ったその時、恭也の視界はモノクロに染まった。

御神流奥義 神速

全力を尽くすのが礼儀、であればこれだ。

動きの止まったフェイトを抜き去り、なのはへ二刀を振りかぶる。同時にカートリッジもロードした。

狙うは雷徹・轟。

分厚い防護を誇るなのとはとて、これを喰らって無事では済むまい。神速が解け、恭也の世界に色が戻り。

「っ!」

ほぼほぼ間断なく、腕に脚に身体に、金色の輪が嵌められた。奥義の初動を抑えられ、技を中断せざるを得なくなる。加えて、身体には痺れ。

電撃の効果が付与されたバインド魔法。

発動主が誰かなんて考えるまでもない。

「ナイス、フェイトちゃん!」

なのはがこちらの姿を捉える。同時、恭也の背筋にすさまじい悪寒が奔るがもう遅い。

『……レストリクトロック!? しまった!』

魅月の悲鳴にも似た声が響く。

恭也の四肢に桜色のリングが嵌まり、その動きを固定した。痺れは無いが、先ほどのバインドとは比べると強度は段違い。まともに身動きが出来ない。

レストリクトロック。

なのはが魔導師としてのキャリア、その最初期に会得したバインド魔法の一つで、発動から完成までの間に指定領域内を出なかつた対象全ての動きを封じる。

その強度は歴戦の魔導師であるクロノに言わせるところ、”自分の知る限り間違いなく最高”。

おそらくは指定領域は極小、自身を中心とした至近距離に設定してあつたのだろう。そこへ恭也がまんまと飛び込んで来て、フェイトの高速発動バインドで一瞬とは言え動きを止められた。

そして満を持して発動されたそれは、見事に恭也をその場に縫い付けた。

なのはがこちらへレイジングハートの穂先を向け、桜色の光を充填する。

『主!』

「ああ!」

そもそもどうして神速の動きが読まれたのかはわからないが、今はそれは二の次だ。

この距離でなのは砲撃を礫状態で正面から喰らえば、それだけで勝負を決められかねない。恭也の体は魔法で強靱になってはいるが、なのはの砲撃はそれを呑み込む威力なのだ。

雷徹・轟を撃つつもりで得たカートリッジの膨大な魔力を使い、身体を強化する眩体の効果を増大させて右腕の膂力を跳ね上げた。

「おおおおおッー！」

全力で力任せにバインドを引きちぎる。右腕一本に絞った甲斐あり、なんとか金色と桜色のリングを破碎する事に成功。

自由になった右腕で左腕に嵌まるリング達に斬りかかる。やはり桜色の方は異常に堅い感触だったが、渾身の斬撃の甲斐あり、裂く事が出来た。

同じく両手で両足の捕獲輪を叩き斬って。

しかし、そこまでだった。

「——ダイバインバスターッー！」

至近距離、真正面。神速に入るタイミングは、ぎりぎりを取れず。

桜色の暴虐が恭也の身を捉えた。

砲撃に呑まれ、壁まで吹き飛んだ恭也へ追撃にトライデントスマッシュャーを叩き込むべきか迷ったが、フェイトはその考えを却下した。

なのはの砲撃をあゝの距離で受けて無傷であるとは思わないが、さすがに勝負は決められていないはずで、だとするなら迂闊な行動は避けるべきだ。

ここでフェイトが砲撃を放てば、なのは・フェイトがほぼ同時に砲撃後の硬直状態に陥る事になる。時間としては極短いだろうが、それは何をどう間違っても、高町恭也を相手に見せていい隙ではない。

そして、その判断は正しかった。

黒い光があるのなら、これがまさにそうなのだろう。

音を置き去りにして、漆黒の剣士はこちらへと飛び込んできた。軍服じみたバリアジャケットにはそれなりの大きさの損傷が見られるが、動きは衰えていない。

「なのはっー!」

「うん!」

なのはが素早く後方へと距離を取る。フェイトは恭也を迎撃にかかった。バルディッシュは既にパースモード、小太刀二刀の体勢だ。振るわれた右の魅月の逆袈裟斬りを、右のバルディッシュで受ける。

(……くうっ!)

激しい衝撃、突進の勢いで重さを跳ね上げられたその一撃には、本家本元の達人が放つ徹が籠められていた。たまらず、フェイトの意識が一瞬白くなる。

極小時間のそれから回復、慌てて首を後ろへ引く。逆手にもたれた左の魅月の刃が危うい所を通過していった。

反撃にこちらも右手のバルディッシュを胸元目掛けて突き入れる。身体を右に開いて躲した恭也は身体をそのまま回転、勢いを殺さずに二刀で斬りかかってくる。慌てて引いた左、まだ痺れの残る右でガードするも、跳ね上げられた。

空いたところへ容赦のない二連撃、フェイトの身体に衝撃が奔る。喰らうタイミングで後方へ跳んだ事で多少威力は殺せたが、それでも重いダメージだ。

歯を食いしばりながら、それでも恭也の動きを注視し。

だからこそ、それを防ぐ事が出来た。

背後からの一太刀。振り向いて、すんでの所で受け止めた。神速でもって背後へ回りこんでいた恭也が、感心したように「ほう……」と呟いたのが聞こえる。

「なるほど、こちらと同じタイミングで神速に入っているのか。だから動きが読める、と」

「……はい」

看破された通り、である。

種を明かせば、フェイト・テストロッサ・ハラオウンは、高町恭也が神速に入るタイミングがわかるのだ。

であれば、神速の領域で動くことが出来ない（実力的にも、そして今回の模擬戦のルールのにも）とは言え、同時に神速に入る事でその動きを知覚する事だけは出来る。神速内で攻撃を振るわれさえしなければ、神速から抜けた後に全速力で対処する事でなんとか勝負になるところまでもっていける。

魔法発動も身のこなしも素早い身である事には、感謝するしかない。

「大したもの、だっ！」

援護に放たれたなのはのアクセルシューターが斬り裂かれる。しかし光球は一発二発ではなく、大群である。その隙にフェイトは呼吸を整えた。

脳に酸素を行き渡らせ、思考の鋭敏さを保つ。

いつ恭也が神速に入っても対処出来るように、だ。

” ストーカージみたその執念にはほんと、乾杯って感じだね……いやさ、完敗かな”

そんななのはの齒に衣着せない言葉は、フェイトと今回の模擬戦に向けた作戦を練っている時に放たれたものだ。恭也が神速に入ったタイミングがわかる事とその原理を説明されての台詞である。

心外だという思いがないかと言えば嘘にはなるが、そう言われても仕方ないかもしれないかとも思う。

神速は脳の知覚速度を大幅に引き上げる事で発動される。それは極度の集中状態に入るという事であり、取りも直さず交感神経も極度の興奮状態に陥るといふ事でもある。

そうなると、生理的にどうしても隠せないのが瞳孔の拡大だ。つまり、その兆候は目を見ればわかるのである。

とは言え、フェイトがそれに気づいたのは以上のような科学的な見地からでなく、ただ単に恭也の戦闘映像を隅から隅まで何度も見ていたせいである。普段は理論先行派だが、今回に限って言えば後付けだ。

さらに言うなら、通常の状態と神速発動時に起こる特徴的な瞳孔拡大状態をフェイトが見分ける事が出来るのは、恭也のものだけである。美由希や美沙斗のものはわからない。

これは恭也が他の二人に比べて客観的にわかりやすいのではなく、観察してきた数が多いためフェイトの主観的にわかりやすいというだけだ。

以上を指して、なのははストーリーカーじみた執念と評したのである。「最初の流れも、計算ずくだったか」

感心したように言う恭也だが、斬撃は変わらず容赦がない。なのはの援護のアクセルシューターも着いた端から斬り落とされていく。

恭也が言った通り、開始直後の一連の攻撃は彼が神速を使ってきた場合を想定し、前々から練っていた策である。

こちらから仕掛けなければ恭也が狙いに来るのはなのであろうし、その方法は神速を使った接近の後の魔法併用奥義だろう事は予想が付いた。攻撃出来る機会の多い前衛と少ない後衛、狙うならどちらかと言えばどう考えても後者であろう、そしてその場合、仕掛けてくるのはシグナムにも、そしてリインフォースにも放った実績のあるやり方であろうという考えからだ。

後は、その対策である。

まず、フェイトが恭也の神速発動を読み、同時に入る。その中で動きを覚悟し続け、解けた時にすぐさま恭也へバインドをかける。

なのはは試合開始からすぐに自分の周辺、恭也の斬撃範囲を領域に設定しレストリックロックを準備、神速を解いて奥義を放たんとする恭也が自分の傍に現れた事をフェイトの魔法発動で感知、レストリックロックの発動を完了させ、ライトニングバインドで一瞬だけとは言葉動きの固まった彼を捕縛。

そして、至近距離から砲撃魔法を叩き込む。

見事に成功した策ではあったが、仕留めきれぬものとも最初から思っていない。

本命の詰めは別にある。

問題はそこまで迫り着けるか、である。

神速の発動が読めるという事は当然SCLもわかるという事であり、近接戦闘技術の向上もあって以前の模擬戦よりもまじに戦えてはいるものの、斬り合いを続けていけば厳しい事は確か。

詰めの準備は、一応終わりつつあるのだが。

『なのは、そっちはどう?』

『アクセルシューターを斬られまくってる事だし、なんとかいけそう!』

『了解、こっちもいけそう。あとはどうにか……』

どうにか、とっさの神速が不可能なくらいに体勢を崩せたら。

思う間にも、アクセルシューターは次々と斬り裂かれ、フェイトのバリアジャケツトも損傷が激しくなっていく。

恭也がフェイトの目の前、SCL。何かを放つつもりらしい、フェイトは慌てて対策にシールドを展開させようとして。

『フェイトちゃん! 硬直を狙って!』

なのはがそんな指示と共にダイバインバスターを放ってきた。

以前の模擬戦でもあった展開だ、前と同じく虎切・盾でガードさせようと言うのだろう。当時は呆気にとられて眺めているだけに終始するという醜態を晒したが、今のフェイトなら違う対応が出来る。

『了解!』

シールド魔法を中断、刃に魔力を入れて。

しかし、それは無駄に終わった。

なぜなら。

「……なのは!」

思わず叫んでしまう。

なぜなら、恭也はフェイトの目の前から足音だけ残して消え去ったからだ。向かう先は、自らに襲いかかる桜色の光。

魔力満ち満ちる魅月を正面から突き刺し、なんと斬り裂いて行く。

あれは、確か射抜・穿という技だ。斬撃強化である晃刃の効力をカートリッジで爆発的に引き上げ、突きの奥義、射抜の突破力を跳ね上げる。

だがまさか、砲撃魔法を相手に使用するなんて。それも射手はなの

はだ、並みの威力ではないはずなのに。

「ぐううっー！」

フェイトの驚愕をよそに、刃は砲撃の射手たるのはまで届く。彼女の堅いエクシードモードのバリアジャケットが損傷、さらに徹されたらしい衝撃で顔が苦痛に歪む。

だが、それで怯むような精神を不屈と称される彼女は持つていなかった。

「つかまえ、たあー！」

突き立てられた魅月の鏢を右手で掴み、恭也の動きを止める。膂力の差を思えば一瞬の効力しか持たないその行為は、しかし確かに威力を發揮した。

「——ブラストカラミティ」

「つなに!?!」

世にも珍しいと言うべきかもしれない、恭也の驚愕の音が響いた。ブラストカラミティ、中距離を殲滅する高圧魔力による広範囲攻撃。それは、本来はフェイトと二人で行うコンビネーションのはずで。

瞬間的に、かつ一人で無理矢理高められた魔力は当然、制御を易々と離れ。

(制御を離れた魔力……まさか!)

フェイトの予想は的中した。

なのはと恭也、二人の身体を呑み込むように爆発が巻き起こった。

「無茶をする……!」

思わずそう零してしまうが、考えてみればあれはある意味なのは得意技の一つだ。特異技と、そう言ったっていい代物だが。

無理矢理魔力を高速で用意し、体裁だけ整えて暴発させるというやり口は、禁じ手のスターライトブラスターと非常に似通っている。

禁止扱いされたスターライトブラスターではないとは言え、ルールギリギリの行為だし、何より自爆ダメージが大きい。

吹き飛んだなのはバリアジャケットは、より損傷の度合いを激しくしている。

「フェイトちゃん！」

しかし、吹き飛ばされたというならそれは恭也も同じだった。こちらもバリアジャケットの損傷を深くし、そして何より衝撃で後方まで大きく飛ばされている。

その背が、壁に付いた。

あれなら、今なら、神速はきつと使えない。つまり、回避されないという事。

こちらの攻撃を当てられるという事。

(今だ！)

「ライトニングレイン！」

『Lightning Rain』

斬り合いの中、練りに練っておいた魔法を放つ。

恭也の頭上五メートルほどに金色の魔法陣が作られ、幾本もの雷光が下方に奔った。

「つぐうー！」

大電流高電圧の雷撃がのべつ幕なし、間断なく降り注ぐ。魔力消費は尋常ではないが、その分威力も申し分ない。呻いて、さしもの恭也も膝を付いた。

魔力はこの際、使いきっても構わない。

勝負を決める覚悟で、フェイトは魔法を維持し続けた。

予想もしない戦法と、そうやってしまうのは甘えなんだろう。

『……なるほど、見事だ』

あそこで自爆技を放ってくるとは思わなかった。だが、なのはの高い防御力を思えばわからないでもない。

彼女自身もダメージは喰ったろうが致命的でなく、そして装甲自体は薄めの恭也はまんまとともに受けたおかげで一瞬意識が飛びかけた。

無様に吹き飛ばされ、壁に激突。

体勢を立て直そうとするその間隙を、まさかフェイトが見逃すはずもなかった。

今、恭也は激しい音を立てる光の中に囚われている。身体には上手く力が入らない。情けなく、膝は地面に付いている。

『斬り払うのは……少々、厳しいでしょうか』

『そのようだ』

身体の状態を確認、腕を十全に振れるのは現状では一度や二度が限度と判断。それ以上は痺れに勝てない。

これだけの雷撃をどうにかするなら、まとめて吹き飛ばす以外に手はなく、恭也の持つ技の中でそれが出来るのは影刃を放つ一刀の連撃”虎乱・散”と、同じく影刃を放つ二刀による連撃、”花菱・夜”だけ。

とても、それらは出せそうにない。

恭也が他に無指向性の範囲攻撃でも撃てれば話は違ったのだが、そんな持ち合わせもなく。

痺れた脚では脱出も叶わないだろう。

恭也を捕らえるに際しては、バインドやケージより遥かに効果的な手法と言える。よく考えられている。

『これだけの出力、そう保つものではありませんが』

『……しかし、相手はフェイト一人ではない』

『ええ』

そう、相手がフェイト一人だったら極論、この攻撃が止むまで耐えていけばいいだけの話だが、残念ながらそうではない。

『ああ、まあ、そうなるよな』

苦笑しながら、雷撃の小さな隙間から見える光景に目を眇める。

そこには大量の魔力を組み上げ、フィニッシュブローを準備している妹の姿が見えた。空間に舞っていた魔力が次々と彼女の下へと集っていく。

『……最上級集束砲、ですか』

『スターライトブレイカー、だったな。美しいものだ』

『主……』

『未熟ですまん、魅月。思えば最初からしてやられてばかりだった』
どうやら発動を気取れるらしいフェイトを基点に、彼らの組み立ててきた神速対策は見事だった。加えて個々の技量も五年前とは比べ物にならないもので、連携も同様。

当人がどう思っているかはわからないが、フェイトとの斬り合いもなのはの援護もあり、劣勢だったとは言われないが恭也としてもかなり余裕のないものだった。

そして上手く攻め切れない事に焦れ、無理をして突っ込んでみれば強烈なしっぺ返しを喰らったわけだ。

『未熟などと言うことはっ！……私が、もっ』

『君のせいじゃない。俺が未熟で……そして、あの子達が見事だったんだ』

震える膝に気合を入れて、恭也は立ち上がった。

『負けだな』

相棒の二刀を腰に逃えられた鞘に仕舞い。

『……はい』

『負けだ、文句なしに負けだ』

『はい』

『なあ、魅月』

——恭也は左の魅月の鞘を左手で支え、柄を右手で握った。

『……主？』

腰をやや落とし、目は瞑る。

『負け、だったな』

落下した影は二つ。床へ衝突する前にそれぞれのデバイスが衝撃緩和魔法を発動して、その身体は柔らかく着地した。

一つは、白い少女。一つは、黒い少女。

彼らの前方、黒衣の男は振り抜いた姿勢で止めていた刀を静かに鞘へと収め、少女達の下へと歩いて行った。

「……—なんっ!？」

「ごん、と鈍い音。ヴィータがモニタールームの透明な強化素材に額を打ち付けた音だ。かなり痛そうだったが、当人は介さず眼下の光景を食い入るように見つめている。

(何が、起きた?)

彼女ほどにわかりやすく面には出さないが、驚愕と困惑に囚われているのはシグナムも同じだった。

『た、高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、戦闘続行不能……。試合終了、です』

エイミイのそんなアナウンスが響く。

「何がどうなったんや!？」

はやてはそう問うが、それに答えられたものはこの場にはいなかった。

「ちよつと待ってちよつと待ってちよつと待ってて！ 今解析してるから……」

目まぐるしい勢いでエイミイは入力装置のキーを叩いている。魔力反応やエナルギーの流れを洗い出しているらしい。

「恭也さんがフェイトの魔法に囚われて、それを狙ってなのはさんがスターライトブレイカーを放とうとしていた……ところまでは、認識していたんだけど」

「私、てつきりそれで終わりだと思いましたが……恭也さんとは言え、あそこから挽回出来る手はないんじゃないかって」

リンデイと、続いたシャマルの言葉がこの場にいる者の共通見解、だったはずだ。

「流石騎士恭也様です！」

「……リンツ、お前は恭也の勝利を疑っていなかったな」

「はい、当然です！」

シグナムの問いに弾けるような笑顔を返したリインフォースIIだけは、どうやら唯一の例外であったようだが、これは理屈云々によるものでない。彼女の中では恭也は最強にして無敵の絶対であり、負ける姿がまずないのだ。

「恭也は、最後に構えを作っていたが」

「……そうだな。そこから何かをしたのは間違いない、か」

ザフィーラが冷静に言ったように、確かにシグナムの記憶でも恭也はなのはとフェイトが墜落する寸前、腰を落として仕舞った刀に手をかけていた。

「刀を振り抜いてたし、つまりせやから、斬撃を放ったって事？　でええんかな……」

「影刃を撃った？　でもおかしいだろ。見えなかったぜ、そんなもん」「めちやくちや速くて鋭いのを、とか？」

「テストロツサの雷撃は強力です。カートリッジロードをしたとしても、あの中から我々が認識できない速度の遠距離斬撃を撃つのは不可能かと思われまます」

ヴィータ、シグナムそれぞれから反論を受けたはやては腕を組んで唸りを上げた後、顔を上げて問う。

「……せや、カートリッジロードはしてるん？」

「している、みたいだな」

その問いにはエイミイとは別の端末を操作し、どうやら先程の映像を繰り返し見ていたらしいクロノが答えた。

「左右から二発ずつ、計四発の空薬莖が出ている。膨大な魔力を使って何かをしたのは間違いない。……ただ」

「ただ？」

促すはやてに、難しい顔でクロノは続ける。

「影刃を撃った、というのはやはりおかしいんだ。ヴィータ、シグナムが言った事もあるし、これを見てくれ」

雷の雨に打たれている恭也がクローズアップでモニターに映る。やがて立ち上がり、刀に手をかけ、そして文字通り目にも留まらない速度でそれを振るつたらしい事がわかる。

「フェイトの魔法に注目してほしい。もし恭也さんが影刃を撃つていたら」

「そか、前方の雷に何かしらの影響があるはず……ないな」

はやての言うとおり、シグナムの目にもフェイトのライトニングレ

インには清々しいほどに何の変化も見て取れなかった。

「……解析結果！ 出た！」

誰もが黙り込んだ時、エイミーが言った。

「恭也さんとなのはちゃん、フェイトちゃんの間を奔った魔法はないね。カートリッジロードで得た魔力は……その場で消費されてる」

「その場で？」

「うん……その場で」

エイミーに聞き返したクロノが、首をかしげた。

「それで、なのはとフェイトの方には何が起こった？」

「二人のバリアジャケット表面へ同時に魔力、それから……高密度のエネルギーが発生してるみたい」

「高密度のエネルギー？ じゃあ、それが」

「そう、みたいだね。それを当てられた衝撃で二人は意識を失ったみたい。もともと結構ダメージあったし、場所が鳩尾辺りっていうのもあって」

全員が、再度黙り込んだ。もたらされた情報がどういう意味を持つのか、それぞれが沈思黙考に入り。

「あの一、いいかな」

声を上げたのはユーノだった。

「さつき、ラインフォースとちよつと話してたんだけど、もしかしたらわかったかもしれない」

「一応、辻褄は合っていると思う」

続いたのはラインフォース。珍しい組み合わせに見えるが、ロストログア関連の頼まれ事が多いラインフォースと、その情報が数多く眠っている無限書庫の室長であるユーノは結構話す間柄だ。

「わかったん？ ユーノ君」

「ああ、多分。恭也さんがカートリッジロードして発動した魔法、あれは転移だ」

「転移？」

問い返すはやてに、ユーノは頷く。

「似たような記録を書庫の本で読んだ事があってね」

「主、私の記憶にも同じような技についての知識があります。古いベ
ルカの騎士にあのような斬撃を放てる者がいたそうです。特殊な転
移魔法を使っていたという話でした」

「特殊な転移魔法……ん、まさか」

「ええ、そうです。あれは斬撃そのものを跳ばしたのでしよう」

「負けた負けた負けたあああ！」

「うん……」

ベッドの上、身体を起こした姿勢でなのは天井を仰いだ。隣に並
んだベッドの上でフェイトもほぼ同じような姿勢、顔だけは少しだけ
うつむき加減。

「駄目、だったね」

「うん、……でも私、結構清々しい気分かも」

それは、強がりではなかった。

「悔しいよ、本当にめちやくちや悔しいけどさあ、あれだけやって負け
たなら、やり切ったって思える」

「……うん、そうだね」

フェイトは、なのはの言葉に穏やかに微笑んだ。

「負けたのなら、まだ届かないって事だよね」

「そうそう。ま、……どうやって負けたのかわかんないんだけど」

「……そうだね」

心当たりが、本当はない。勝利を確信してはいたが、油断していた
つもりもない。なのに、いつの間にか気絶していて、気がついたら医
務室だ。

「おにいちゃんに聞いて……」

「俺がどうかしたか？」

丁度、タイミング良く。

部屋に入ってきたのは恭也だった。バリアジャケットを解除した
いつもの私服、その身体に外傷は見られない。

「おにいちゃん！ 怪我はっ？」

「恭也さん、大丈夫なんですか？」

「ああ、大した事はなかった。非殺傷設定というのは便利なものだな。とは言え、なのは」

恭也はつかつかとこちらに歩み寄り、

「……っあだ!？」

「あんな自爆技を無闇に使うんじゃない。自分をもっと大事に扱え」

「無闇に使ったつもりはないけど……はい」

拳骨を脳天に落とされて、なのはは素直に頷いた。兄が想ってくれた事が伝わってきたからだ。

「……でも、うう、痛い」

「それくらいは罰だと思っておけ」

一瞬目の前が白くなるほど、本当に痛い拳だった。事ある事にこれを喰らっている姉の美由希への尊敬が深まる。

とところで、

『……あの、フェイトちゃん』

『……え、あ』

こちらをじっと見つめている瞳が羨ましそうな色を湛えているのは、勘違いだと思いたい。念話で確認を取る。

『まさかとは思うけど、本当にまさかとは思うんだけど……羨ましいの?』

『え、いや、その』

『痛いんだよ、これ』

『う、うん、……痛いんだよね、……うん』

『フェイトちゃん……!』

自宅の妹さん大丈夫なのかとクロノ辺りに相談したい気持ちになったが、まさかDMの癖をどうにかして下さいとは流星に言えない。

「あ、あー、そうだおにいちゃん!」

危ない方向に行きかねないため、別の話を恭也へ向ける。

「なんだ?」

「あのね、私達、何をされて負けたのかわからなくて。私はスターライトブレイカー撃とうとしてたはずが、気がついたらここだったんだけども」

「私も、何をされたのか認識出来ていなくて……あの、恭也さんは何を？」

「……何を、か」

こちらの疑問に、しかし恭也は難しい顔で腕を組んだ。

「なんというべきかな。やっておいて何だが、自分が何をしたのかよくわかってないんだ」

「……どういうこと？」

「出来ると思って、やったら出来た。だから説明というと、少し難しい」

「ええ……そんなめちやくちやな」

「いやいや、なのは魔法に関しては同じようなところあるからね？」

恭也さんのことは言えないからね？」

「え、そう？」

どうやら、傍から見れば似たもの兄妹という事らしい。

「……本当に、どう説明したものかな」

『主、では僭越ながら私が。あれは古いベルカで言うところの”自在斬り”に相当する技です』

困っている様子の恭也を助けたのは流石の忠臣、魅月だった。

「ほう、ベルカにも同じ技があったんだな」

『ええ。長いベルカの歴史の中でも使えた騎士は極々少数ですが。剣を極めた者のみが到達する事の出来る一つの極地だと聞いております』

語る魅月の声は、どこか誇らしげだ。敬愛する主が至高へと達した事が嬉しいのだろう。

彼女は流れるように語った。

『あれは、剣を振るう事でその場に発生するエネルギーを、転移魔法で遠く離れた物体に送りつけるのです。平たく言えば、刃ではなく斬撃そのものを転移させる技と言えるでしょう。認識出来る場所であれ』

ばどこであろうと自由自在に斬り裂ける、ゆえに”自在斬り”です」
「……………ん」と

こめかみに指をさし、なのはは言われた事を飲み込もうとする。
さらっと説明した魅月だが、何かとんでもない事を言っている気がする。

「剣を振るってというのは刃に運動エネルギーを付与するって事で、それを転移させたら……………転移先の物体の一部、刃の幅と同じだけの面積が付与されたエネルギー分だけ動く？ そうしたら結果的に言えば斬り裂かれる形になる、かな？」

フェイトが自分なりに噛み砕いたらしい説明を口にした。

「そう言われればそうなるような気もするけど……………。ていうか、エネルギーを転移って出来るの？ ……いや、そっか、物体もエネルギーも理論的には相互変換可能だし、物体が転移させられるならエネルギーも転移させられておかしくないか」

「うん、でももし一般の物体転移みたくエネルギー転移が出来るのなら相当強力だけど、話に聞いた事ってないよね」

「ないね。古代ベルカ独自の特殊な技術って事？」

『いえ、古代ベルカでもエネルギー転移魔法は決して一般的なものではありませんでしたよ。と言いますか、エネルギー転移という魔法はありませんでした。あくまで、自在斬りの一部にそういったプロセスがあるというだけです』

「そうなの？」

『はい。自在斬りが剣を極めた者だけにしか放てない理由がそこにあるのです。自分の斬撃を完全に把握し切った剣士だけが、それをまるで物体かのように認識し跳ばす事が出来るという話です。物体が跳ばせてエネルギーが跳ばせないのは、そこに在るとい認識が明確に出来るか出来ないかの問題だという説がありました』

「……………物体と同じように認識出来るほど、斬撃を深く把握する。確かに、簡単なようでとてつもなく難しいっていうか、それこそ深奥に触れてるような人でないと無理な領域だ」

眩きながら頷くフェイト。なのはにはあまりピンと来なかったが、

得物を振るう近接戦闘者にはわかる話らしかった。

「なるほど、そうなのか」

「いやいや、おにいちゃんがやったんだよ？ 他人事のように言っているけれども」

「まあ、そうなんだが。俺はただ、御神の極みを魔法を得た今の俺が放つならこうなるだろうと思っただけだからな」

「御神の極み、ですか？」

フエイトの問いに、恭也は頷いた。

「ああ。斬式奥義の極みで、閃という。神速とその中での一太刀を極限まで高め上げ、距離も間合いも武器の差も全て無視して相手を斬り伏せる技だ」

「……シンプル、だからこそ極みなんですね」

「その通りだ。小手先の技術ではどうにもならん域だからな。その代わり、強力無比でもある。俺の父は、これを極めた剣士の前では全てが零になると、そんな風に言っていたよ」

恭也が、嬉しそうに父の事を語った。気づいているのかわからないが、彼は父である士郎の事を話すとき、いつもどこか誇らしげだった。「状況も条件も全て無視して斬り伏せる、それがあの技の本質だという事を言いたかった」

んだと思う。それを魔法を絡めて示すなら、俺はああいう形になると思っただ」

太刀を振るう、ただそれだけで離れた相手に直接斬撃を届ける。飛ぶ斬撃とも違い、振った時には既に当たっている。

絶対に避けられない、それはまさに至高と言うべき一太刀だろう。

「私とフエイトちゃん、二人を同時に斬ったって事？」

「ああ、力を分散させたんだ。幾つまで同時に対象と出来るかはわからないが」

『今のところ、おそらくは十六程度でしょうか。主がああ技にもっと慣れれば増えるでしょう』

「十六でも十分だよ……」

分散されていようが、眩体で強化された身体で振るわれる達人の斬

撃だ。並みの魔術師と言わず、エース級だろうが十六人同時に仕留められかねない。

「距離を無視というのは、視認していればという事ですか？」

「いや、視認というか気配だな。心で捉えられているかどうかが重要だ。だから、今回は目をつむって斬った」

「……という事は視認範囲はもちろん、三百六十度逃げ場なしですね」
強いとか、そういう次元じゃない。

「どうやら、どうやって攻略すればいいのか全くわからない技らしかった。」

「それは負けるわけだよ……」

「うん……」

脱力し、がつくりと首を落としたのはとフェイトに、

「負け、か」

しかし恭也は微笑みを見せた。

「おにいちゃん？」

「二人とも、五年前の模擬戦は覚えているか？ 俺はついこの間の感覚だから記憶も鮮明なんだが」

「もちろん、細部まで記憶しています」

フェイトが答えたように、二人は何度も繰り返しあの映像を見てきたし、そうでなくとも強烈な記憶だ。忘れるわけもない。

「当たり前だよ。私達はあの時戦ったおにいちゃんを超えるためにはどうしたらいいか、どう力をつけたらいいのか、ずっと考えて今までやってきたんだから」

それは、隣に立って彼の力になれる自分達となるために。

彼を護れる自分達であるために。

「そうか、なら、その目標はもうクリアしているぞ」

柔らかい微笑み。

そんな、彼には珍しい表情を浮かべながら、恭也はさらりとそう言った。

「え？」

「でも……」

疑問顔のなのはとフェイトに、彼は続ける。

「最後に放った閃、あれはな、正直に言えば自由に出来るようになったのは、ついさっきなんだ」

「つい、さっき？」

聞き返したなのはに、恭也は頷く。

「ああ。ついさっき、つまり、フェイトの雷に囚えられて、なのはのとどめを喰らいそうになった、あの状況だ。あそこまで追い詰められて、ようやく掴んだ境地と言える」

だから、俺は負けていた。

恭也はそう言った。

「五年前の俺だったら、負けていた。お前達の目標とした五年前の俺になら、お前達は勝っていたんだ」

「……」

「……」

無言、なのはとフェイトは顔を見合わせる。

もちろん、とは言うものの負けは負けなのだが。

負けは負け、であるのだが。

「……どうしよう、フェイトちゃん。私結構、ううん、かなり嬉しい」

「……うんー！」

あの日の悲願のうちの一つは、どうやら叶っていたらしい。

「……もう、暖かいものだな」

陽光降り注ぐ縁側で、恭也は茶をすすっている。冬を越えて芽吹いた花達の香りが、時折風に乗って鼻先で踊る。

季節は巡り、もう春だ。

穏やかな庭先に魔法陣が浮かび上がったのは、湯のみの中が半分を切った頃だった。現れたのは長身の男性。

「お邪魔します、恭也さん！」

「クロノ、よく来てくれたな。わざわざすまない」

提督として忙しい毎日を過ごしている彼の訪問をそう言って迎えると、クロノは笑って首を振った。

「いえ、こんな大事な話ですから万難を排して来ますよ」

「そうか？ ま、座ってくれ」

隣に腰掛けたクロノへ、傍らに置いておいた急須から注いだ茶と用意しておいた菓子を出す。

「ありがとうございます。……そうだ、恭也さん、訓練学校の全過程修了、おめでとうございます」

「ああ、ありがとうございます」

なのはとフェイトとの模擬戦、すなわちランク測定の後。

恭也は無事、二人と同じように訓練学校へと入校した。

そして三ヶ月という短期コースをつい先日、終えたばかりなのだ。

「とは言え、恭也さんにお教える事が新米用の訓練校にどれだけあったのかという話ですが。と言うか、中で教官のように指導に当たっていたと聞きましたよ」

「……なんだろうな、なぜかそういう流れになってな。ちよつとした事があった、それをきっかけにというか」

少し教官達と揉め事になり、その結果周りの訓練生達に慕われてしまったのだ。

「教官の中に、何か恭也さんへ分を弁えない振る舞いをした輩がいたそうぞ」

「あれは俺が短気に過ぎたというのものもある。反省しなければ」

「そんな。聞いていますよ、魅月を悪く言われたのでしょうか？」

「……まあな。俺の事をインチキランク保有者だなんだと言うのは別に良かったんだが」

骨董品。ポンコツ。化石。

恭也への言いがかりは相棒である彼女にまで及び、そんな言葉が向けられた。

そしてそれはまさか、恭也にとって看過できるものではない。

『よくありません。私への言など、そちらこそ放っておいて下さればよかったです、主よ』

「いいわけがあるか。……さつきは短気に過ぎたなどと言ったが、正直また同じように言われたら、懲りずに食ってかかってしまうだろう」

「相変わらずいいコンビですね」

クロノが朗らかにそう二人のやり取りを称した。

「しかし、インチキランク保有者などという暴言を口にする愚か者を擁護するわけでは決してありませんが、訓練校としてもなかなか信じがたかったんでしようね。まさかSS+が入校してきたなんて」

「なぜそんなに高いランクが俺に与えられているのか、正直未だにわからんがな」

SS+、それが管理局が恭也に認定した魔導師ランクである。

一握りも一握り。クロノやリンディでさえ、初めて目にするランクだと言っていた。

「閃があまりに規格外の技でしたからね。離れた相手へ決して避ける事の出来ない一撃を叩き込める。しかも複数人へ同時に可能なながら、砲撃や爆撃のように味方を巻き込む危険もなし。威力はエース級の魔導師でさえ十二分に落とすという代物。一撃必殺級の威力で選択的な必中の範囲攻撃ですよ?」

「それはそうかもしれないが」

「元々SSの実力がある上にそれです、SS+は適切ですよ。武装大隊の援軍と恭也さんお一人の助力でしたら、僕は迷わず後者を願いますね……と言いますか」

そこでクロノは一枚の書類を縁側へ置き、恭也が読めるように向きを整えた上ですつと差し出す。

「管理局自体が、恭也さんへはどうもそういう認識をしているみたいで、それが今日のお話なんです」

「……どういふことだ? 俺へ辞令が下りたから伝えに来てくれたのではなかったのか?」

「そうなんです、そうなんです、その辞令というのがですね……」

少し、クロノは困った顔だった。その表情のまま、書類の中ほどを指さした。とりあえず、読んでみる。

「所属は本局、部隊は……ん、載っていないな」

「はい、恭也さんは部隊の所属ではありません。その代わり……」

「……なんだ、これは」

本局所属という記載の後に乗っていた肩書きは、恭也が耳にした事のないものだった。

「——特別武力制圧官？」

一応は、訓練校で受けた学科の授業で管理局の役職については粗方さらったはずだが、記憶にない。

「はい、略称は特武官……恭也さんの着任に際して設けられた新たな役職です」

「何？ 俺のため、という事か？」

「はい。なので僕も詳しい事はわからず……というか、まだ本局の方も決めきれていないのだと思います。探り探り、これから任務の難度や頻度は調整されていくかと」

「そもそも、俺は一応、教導隊に志願したはずなんだが……。第二希望で古代遺物管理部、第三希望で航空武装隊、と。希望がそのまま通るわけではないという事くらい弁えてはいるが……」

しかしどれにもかすりもしないというのは、少々意外だった。

恭也の言葉を受けて、クロノはとびきり渋い顔をしている。

「……すみません、恭也さん。はつきり言ってこれは、管理局が恭也さんを現状、扱いあぐねているという事の証左のようなものです」

「クロノに謝ってもらう事ではないが、そうなのか？」

「はい。ご希望のあった教導隊、古代遺物管理部、航空武装隊含め、様々な部署が恭也さんを欲しがったらしいのですが、結局、恭也さんの単体での戦闘力があまりに高すぎるためどこに入れても大きくバランスが崩れる事になりかねない」と

『それで新しい役職……ということとは、もしかや特別武力制圧官とは』

何処の部署も応援に呼べる使い勝手の良い戦力”という事ですか？」

「察しが良い、その通りだ……」

魅月の言葉に頷き、深い溜息をクロノは溢す。

「これから海は荒れる時期です。そういう事情も鑑みれば確かにわからないでもない辞令なんです。転送ポートは送る人数が多ければ多いほど時間も手間もかかり、長距離移動も困難になる。逆に言えば、人数が少なければ少ないほど、短時間で長距離を跳ばす事が出来る。だから、飛び抜けた単体戦闘能力保持者の運用として、それを利用してフットワーク軽く援軍としてあちこちを飛び回ってもらうというのは理に適っていると言えるでしょう」

「確かに、それはそうだな……」

「ですが……ですが、です。新任の局員をこんな明らかに危険な役職に就けるなんて、間違っても誠実な対応じゃない。はつきり言って怯えているとしか思えません」

「怯えている？」

「はい。管理局上層部の一部が、恭也さんに、です。……ここからの話は他言無用でお願いします」

頷くと、神妙な顔でクロノは続ける。

「こういった人事についてはレティ提督、母の知己が取り仕切っているのですが、彼女はこんな判断を下す人ではありません。それとなく聞いてみたら、今回は特殊だからという事でどうも上から横槍が入ったらしく……」

「……そうなのか」

「なんだか多少、きな臭い匂いがしないでもない話だ。」

「はい。……ネガティブな見方をすれば、管理外世界から突然現れた、どんな思想を持っているともわからない強力無比な単体戦闘能力保持者……そんな存在をよく思わない者が管理局には居る、という事です。彼らは牙を剥かれるのが怖いんでしょう、だから、……あわよくば危険な現場で使い潰そうとしている」

「……さすがに考え過ぎというか、穿ち過ぎじゃないか？」

「あ、す、すみません、不安にさせるような事を言って」

「いや……」

思うに、クロノがこうして心配してくれるのはやはり五年前の事が

あるからだろう。

「クロノの心配は嬉しいよ、言ってくれた事は心に留めておく。何かあったら頼ってもいいか?」

「それはもちろん!」

「なら、安心だ」

クロノも、なのはもフェイトもはやても、リンディもエイミイもユーノも八神家皆もいる。

新しい環境とは言え、相談できる人数の多さと質にはとてつもなく恵まれていると言つていいだろうと思う。ゆえに、恭也にあまり不安はなかった。

自分の付く役職が、特別武力制圧官などという物騒な響きをしていても、だ。

「それに、どんな戦場に放り込まれようが、俺には世界で一番頼りになる刃がいる」

『もつたいないお言葉です。しかし、私の全てを持ってお応えします、愛しき我が主よ』

「ああ、頼む」

ほうじ茶で喉を湿し、一息吐いて、思う。

(管理局、か)

なんだか、随分と遠くへ来てしまったものだ。

とは言え、HGSやら自動人形やら伝説の妖怪やら、そういうもの達とすったもんだもやってきたのだ。何を今更という気も、まあしないでもない。

そして結局、どんな状況だって環境だって、自分の出来る事というのは大して多くない。

剣を振るって。

護りたい人を、護りたいものを、護るだけである。

自分の根底を静かに再確認した恭也の小指、穏やかな陽光を反射して、銀の指輪が控えめに、しかし確かに輝いた。

高町恭也。

管理局入局時、登録主観年齢二十歳。

新暦71年4月、管理局本局所属の特別武力制圧官に就任。

それから三年と十ヶ月後の新暦75年2月、その実力と功績から管理局本局と聖王協会よりそれぞれ二つ、合わせて四つの勲章を同時に授与され、「四連勲章」「新暦の奇蹟」「黒衣の剣神」等々と讃えられながら、惜しまれつつもその任を降りる。

bstage

第19・5話 初心な反応

「はい、ここにエッチなDVDがあります」

「いえーい」

「……え!? 待つてなに急に!」

昼下がりの高町家、末妹の部屋。

なのはの右隣にはDVDの入ったケースを持って笑顔を浮かべたはやて、左隣には聞いていない展開に泡を食うフェイトがいる。

「今日って一緒に宿題やろうって話で集まったんじゃないの!」

「宿題をやるって言うたな、あれは嘘や」

「なんで!? いやいや、別に、まあそれはいいけど、なんで、その……」

「随分と初心な反応だね、フェイトちゃん、私達もう中学二年生だよ?」

「そろそろそういう知識もやな、つけなあかんと思わん?」

「じゅ、十八歳未満だよ! だからまだ駄目だよ!」

さすがは法を守る執務官、遵法意識はお高くいらっしやるようだ。

「ごめんごめん遅くなった、まだ観てないよね、例のやつ」

と、ドアが開いて新たな人物が顔を出す。少しくすんだ金髪が特徴的な少女、アリサ・バニングスだ。

「ちよつと道が混んでて……ごめんね」

その後ろからは紫がかった黒髪を湛えた月村すずかの姿もある。

「いらっしやい、二人とも」

「ええつてええつて、まだ観てへんし、そここのむつつりパツキンに説明始めたところや」

「むつつ……それ私の事?!」

「フェイトちゃんあのね、私は知っているよ、フェイトちゃんが鍛錬後のおにいちゃんの、汗が浮いた身体をいやらしい目で視ている事を」

肩に手を置いてそういうと、一瞬でフェイトの顔は真っ赤に染まった。

「な、や、そ、な、い、や、私はそんな!」

「……凶星なのね、フェイト」

床になのは達三人が座り込んでいたためスペースがないので、すずかとベッドに腰掛けたアリサがジトツとした眼で言った。

「ち、ちがう、そんな眼で、私は……バルディッシュの録画機能をオンにしているのも決して浅ましい目的でなく、鍛錬の記録を……」

フェイトは狼狽に眼をぐるぐるとさせ、聞いてもいない罪を自白し始めた。

フェイトを除いた四人は誰からともなく視線を交わす。素早く動いたのはすずか、生来の身体能力をフルに使って滑らかにフェイトの背後に回るとその四肢を自らの手足で抑えこむ。

「す、すずか!? あ、ちよ、なのは!」

その隙になのははフェイトの胸ポケットから金の三角片を取り出した。

「バルディッシュさん、わかるよね?」

『……Yes, ma'am』

「ば、バルディッシュ! ちよつと!」

「フェイトちゃんが録画した鍛錬中のおにちちゃんの映像の中で、最も再生回数が高いものをお願い」

「だ、駄目! バルディッシュ! バルディッシュ!」

『……Sorry, sir』

戦況を正しく認識したフェイトの相棒は、空中に映像を投影する。半裸、である。

引き締まった肉体の男性が、その古傷だらけの上半身を露わにしてる画が大写しになった。

その場の誰もが何も言わず、食い入るようにその映像を見つめている。

『……すまんフェイト。いつも見苦しい物を』

『いえいえ! 見苦しいなんてそんな! お気になさらず、どうぞ、

しつかり、ゆつくり汗を。あ、タオルです」

『ありがとう』

フェイトから薄いブルーのタオルを受け取った恭也は、それで身体を拭いていく。観ている側の問題なのかもしれないが、なんだか艶かしい仕草で。

「……………これは、その、……………その」

「言ってみい、恭也さんこれ完全に撮影に気づいていない感じで、つまるところ文句の付けようもない盗撮なわけやけど、何かしらの申し開きがあるなら言うてみい」

「た、鍛錬の映像を撮影する許可は取ってる!」

「このどっこが鍛錬の映像よ!」

アリサが枕を引つ掴み、フェイトの頭に振り下ろした。

「……………あの、すずか、ちよつと痛いんだけど、締める力、なんか上がってない?」

「……………首を締められないだけ、マシじゃないかな? あんな姿を生で見えておいて」

静かなすずかの声はそこそこドスが効いている。

「そうよ! 恭也は私の未来のお婿さんなんだから! 恭也・バニングスになるんだからね! 変な事しないでくれる!?! あと、動画データを全て寄越しなさい!」

「恭也さんはお姉ちゃんと結婚して月村恭也になるんじゃないかな。……………私でも、いいし。あと動画データは私も欲しいな」

「待て待て待てい、恭也さんは愉快な八神一家のパパになるんや、私がママでな。八神恭也、かつこええな、しつくりくる。動画は劣化なしの原データでお願いな」

「あのさ、皆して寝ぼけた事言わないでくれるかな? おにいちゃん苗字はこれから先も、未来永劫ずっと高町のまんまだよ。で、動画データは当然として、フェイトちゃん」

「な、なに?」

真正面からその紅い瞳を覗きこみつつ、なのはは問う。

誰も気づかなかつたろうが、自分だけは見逃さない。

「あのタオル、高町家（うち）のじゃないよね？」

いつも高町家で使われているのは、白かピンクのものだ。薄いブルーのタオルなんて、この家には少なくともなのはの知る限り存在しないはずである。

その問いに顔を逸らしたフェイトはその後、三十分に渡って四人から責め苦を受ける事となった。

「さ、それじゃあ今日の本題や」

「さっきの映像を観てからだと、正直どんなのが来たってインパクトに欠けるわよねえ」

パン、と手を鳴らして執り成したはやての言葉にため息混じりでアリサが零す。

「ええんやで、アリサちゃん。せやったら観なくとも」

「冗談、しっかり知識を付けて恭也との初めてに備えるのよ」

「アリサちゃんって本当おもしろいよね」

「なのはちゃん、眼が笑ってないよ」

なのはの顔を見たすずかが苦笑いでそう言った。言葉に釣られてはやてもなのはの顔を見てみて、見なければよかったと軽く後悔する。あれは人を殺せる眼だ。

誤魔化すように話題を変える。

「で、その常時発情中の淫乱パツキン女はどうするん？」

「観ます、観させて頂きます……」

ぐつたりと床に倒れたままでこちらの声に応えるフェイトは、もうどうにでもしてくれと言わんばかりの顔だ。

どんな苦痛を与えても、これからは高町家のタオルを使えという言葉には頑として首を縦に振らなかつたその姿勢は、評価してもいいのかもしれない。

「隣のクラスから回ってきたんだっけ？ そのDVD」

「そうそう、ちゆうてもアレやろ？ お嬢様お二人はともかく、なのはちゃん辺りはインターネットで正直そんな観とるやろ？」

「んーん、観てないよ。パソコンを貰う時にお母さんと約束したからね、これで年齢で禁止されているものは観ないって」

さすが高町家、実にしっかりした教育方針である。

「が、DVDデッキでそういうのを観る事までは駄目と言われている」

言いながら、なのははこちらの手から受け取ったディスクをデッキに入れ、手早く再生を開始する。

「ちよおつとちよおつとなのはちゃん早い！ まだ心の準備が！」

「いいわよそんなの、さつさと観ましょう」

「……確認だけど、今日お家の人いないんだよね、なのはちゃん」

「うん、おにいちゃんはどこかに出かけるって、お姉ちゃんとお母さんは翠屋、レンちゃんと晶ちゃんは大学、大丈夫」

そこら辺に抜かりはないとなのはが言い切ったタイミングで、テレビ画面にそれは映った。

天井から吊るされた縄に身体をギチギチに縛られ、鞭でもって男性に叩かれ嬌声を上げる全裸の女性の姿が。

「……うおおおおい!! ちよおつ、た、な!?!」

「はやて?! これは私達にはさすがに早くない!! いや早い早くないの問題じゃないかもしれないけど!」

「い、いや、あれえ? 普通のって聞いたんやけど……これが普通?」

「なわけないでしょ!」

真っ赤になったアリスが掴みかかってガクンガクンと揺すつてくる。多分、こちらの頬も同じくらいに赤く染まっているだろう。

さすがにこんな映像、刺激が強すぎる。

「……うわあ、わ、あんな」

画面から眼を逸らし、やつぱり視て、逸らして視てを繰り返すすずかは、段々と視る時間が長くなってきている。耐性があるのだろうか。

そして、なのははと言えば。

「……なのはちゃん、何その反応」

「ちよつとなのは、あんたそんなキャラじゃないでしょ」

床にうづくまり、眼を硬くつむって耳を両手で塞いでいた。はやてとアリサの言葉に、その姿勢のまま首を振る。

「わ、わかってる！ わかってるけど！ なんか駄目！」
僅かに見える耳にはこれ以上ないくらいに朱が乗っていた。

なんだろう、言っでは失礼かもしれないがかなり意外だ。この分では、たとえDVDの内容が普通のものであったとしても同じようなりアクションだったのかもしれない。

パチインと高い音が鳴り、女性の嬌声も一際大きく、そして甘く響く。

「うわあもう！ ……うううううう！」

慌てる子犬のような動きでなのははベッドに上り、布団を被って唸り始めた。どうやら本当に駄目らしい。

「なのは、あんたさすがにカマトトぶり過ぎじゃない？」

カマトトぶるとは中々古風な言い回しだが、言っている事にははやても同感だ。

「なのはちゃん、そんな駄目？」

「駄目……はやてちゃんお願い、もう止めて。止めよう、それがいいよお」

「まあ、それはそうやなあ」

さすがにこんなアブノーマルな映像を昼下がりの女子中学生の部屋で流しっぱなしにするのは、かなり問題がある気がする。

はやてにああいった趣味は今のところは少なくともないし、あれが勉強になるとも思えない。

「わ、私は別に！ もし恭也がああいうのが好きっていうなら付き合わないでもないわ！ 女は受け止める度胸と受け入れる度量よ！」

「ああそういう可能性もあるんやな……私に出来るかなああれ」

「おにいちゃんはそんな事言わない！ あんな事しない！」

くぐもった声ながら、必死の言葉が布団の中から響く。

「わからんで、なのはちゃん。男の人は昼と夜で別の顔があるらしいからな。恭也さんかて、どんな趣味かは……」

「おにいちゃんは優しいから！ 変わらず優しくしてくれる！」

「そもそもなのはとする可能性は零でしょうが。それはガチで駄目だからね」

アリサの言はもつともなのだが、なのは相手には今更な気もする。「まあまあこれ以上いじめてもあれや、とりあえず再生止めよか」

まさかこんな展開になるとは、そう思いながらリモコンに手を伸ばして。

「……んお?」

ガツ、と。力強く誰かに腕を掴まれた。

白く細く、美しい手。

その持ち主は鮮やかな金色の髪の子。

「みてるから」

「……フェ、フェイトちゃん?」

彼女は画面から一瞬も視線を外さないままで、はやての手を掴んで止めていた。

横顔は真剣そのものだ。

「みてるから」

「は、はい!」

再度放たれる言葉には、不動の意思が感じられる。その迫力に押しやれ手を引くと、彼女も手を離してくれたが掴まれていた箇所には微妙に赤く痕が付いていた。

(うん、あかんやつや)

リモコンは諦めよう。

ここで止めたら何をされるかわからない。はやての本能がそう告げている。

この近接領域はフェイトの棲家である。はやては元よりなのはさえもこの距離では相手にならない。アリサは言わずもがな。一番対抗出来そうなのははずかだが、

「あ、あんなの入るの……? うわ、わわわ!」

彼女は残念ながらフェイトの側だ。あの映像を楽しんでいらっしやる。

「は、はやてちゃん! 早く止めてよお!」

「あかんわ。あかんあかん、これ最後まで流さなあかんやつや。エロ執務官が大層盛り上がつとる」

「ええええええええ……ああ、そうだフェイトちゃんドMだもんなあ……あの映像を自分とおにいちゃんに置き換えて楽しんでるに違いない……」

「待って、なのは、フェイトってそうなの?」

「気付いてなかったの……? お姉ちゃんがデコピンされるのとか、すっごい羨ましそうに見てるんだよ、フェイトちゃん」

「きよ、恭世のデコピンってめちやくちや痛いのよ?」

「フェイトちゃん真性やんけ……」

判明した事実には慄くも、しかし確かにフェイトがそうであるというのは何となく違和感がないような気もする。

「しかしすっごい光景やな、金髪美少女がアブノーマルな映像に喰いついている昼下がりにって」

折角なので写真を撮っておく事にする。後々、何かに使えるかもしれない。

エリート執務官のスクープ写真だ。

「ねえはやてちゃん、あの映像、あとどれくらいで終わるの……?」

「さあ……一時間はあるんちゃう?」

「……もおやだあああああ」

もそりもそりと、ベッドの上、可能な限り淫猥な映像の流れるテレビから距離を取るように動いたのはは、それきり固まった。

「は、はやて、なんか場面が変わったわ。今度は椅子に縛り付けられる!」

「なんだかんだアリサちゃん観てるよなあ……うわあほんとや、それ、それもあんな姿勢でっ」

世の中というのは広いんだなあ、そんな事を思うはやてだった。

昔、吊るされて鞭で叩かれた事がある。一度や二度でなく、それは割と何度もあった。

フエイトを叩く母親の顔は苛立ちに塗れながらもひどく冷たくて、鞭が当たった肌はヒリヒリと熱く痛むのにすぐに彼女の視線と同じように冷えていった。まるで、感覚そのものが抜け落ちるかのよう

に。
大好きな人から、愛して欲しい人から与えられる痛みは、フエイト・テスタロツサにとって悲しみそのものだった。

お前なんかいらないと、刻みつけるように教えられているようで、泣き方を忘れそうになるくらいに辛かった。

それから少しの時間が経って、幾つかの大きな出会いと別れがあつて。

そしてあの人と、出会って。

彼がその手に持った木刀が、頼み込んで付けてもらった鍛錬の最中、幾度もフエイトの身体を叩いた。

加減されていたとは言え、しつかりと痛くて。

当たった箇所は熱は、全然とれなくて。

熱くて、暖かくて、そしてそうだ、——甘かった。

根本にある優しさが、どうしようもなくその痛みからは滲み出て来た。

痛いのに、嫌じゃなかった。こんな感覚がこの世にあるなんて、想像すら出来なかった。

あの優しく響く痛みに、自分はきつと救いを求めたんだと今では理解している。

かつて、この世から追いやるように自身を責め立てたものと同じ感触に、否、同じ感触だからこそ、この世に居ていいと思わせて欲しかったのだ。

身体を苛むあの響きに、想われている事の実感を得たのだ。

どれだけの救いを自分に与えてくれるのか、きつと少しも気付いていない彼はごくごくまれに、鍛錬とは別に、悪戯にこちらの額を指で弾く事もあって。

それが、たまらなく好きだった。遠慮容赦なくそれを与えられている彼の妹には、心の底から羨望の念を抱いたものだ。いや、白状すれ

ば今でも抱いている。

あの人から与えられるものなら、フェイトにとって痛みは全く苦しいものではなくて。

撫でられるよりも、もしかしたら叩かれた方が惚けそうになるなんて、絶対口には出せないけれど、どうしようもなく事実であって。

だから。

そういう行為が、関係の中で成立する事もあるのだというのはフェイトにとってあまりに魅力的な希望であって。

「で、結局最後まで観た感想をどうぞ」

一心不乱に喰いついてしまったのは、どうか見逃して欲しい。

映像再生の終わったテレビの前、アリサの言葉にフェイトは顔を両手で覆うしかなかった。

「すずかは今日、高町君の家にお邪魔してるのよね」

「ああ、なのはがそんな事を言っていたな」

「……ずっと仲良しでいてくれてるみたいだね。あの娘、私と同じで人間付き合い器用じゃないから、なのはちゃんには感謝してるのよ、本当に」

紅茶で口を湿しつつ、そんな事を言う彼女の表情は大人の女性としての包容力に満ちている。

「うちの、頼まれて友達をやっているわけでなかろう。感謝をするならお互い様だ」

「ふふ、そうっ？」

月村忍。恭也を家に招いた彼女は、元々一個下の同級生だった。月村家の上品なテーブルを挟んで向かい側、穏やかに笑っている。

「……変わってないわね、本当に前に会った時のまま。歳下になっちゃったのね、高町君」

「お前は結構変わったな、月村」

「本当？ 何処らへんが？」

「……前よりも、余計な力が抜けた」

それがたまたまなく魅力的で、信じられないくらい美人になった、と。そんな事を言えるほど、中々恭也の口は女性相手に滑らかではない。

二十四歳となった月村忍は、今まで恭也が見てきたどんな女性たちよりも、もしかしたら美しいかもしれない。

「もつとストレートに褒めてくれていいんじゃない？ 高町君が起きたって聞いて、ドイツから駆けつけてきたんだから」

「それはまあ、すまん」

「ほんとよ、……心配かけて」

「……すまん」

忍は今、日本とドイツを行ったり来たりの生活をしているらしい。親戚筋の綺堂家と何やら工学関係の研究をしているとの事だ。

「失礼します、高町様、お茶のお代わりを」

テーブル隣に控えていたメイド姿の女性が、優雅な所作で紅茶を注いでくれる。ノエル・K・エアリヒカイト。戦闘用自動人形としての正体も持つ、月村忍・すずかの従者にして家族だ。

「ありがとう。ノエルは、すずかとずっと此処に住んでいるんだっただか？」

「はい。ドイツに忍様を単身向かわせるのは不安でならないのですが、姉の見栄があるからと」

「ノエル、余計なこととは言わなくていいわよ！」

「失礼しました」

月村家は結構、遺産騒動なんかで色々あったりもしたのだが、どうやら今は穏やかに楽しくやっているようだ。

「高町君、身体は本当にもう大丈夫なの？」

「ああ、至って健康だ。むしろ、以前よりも調子がいい」

「それはよかった。すずかにもそれ、伝えてくれた？」

「ああ。随分心配をかけてしまったみたいだからな」

恭也が起きて諸々が落ち着いたタイミングで、アリサと一緒にすずかは会いに来てくれたのだが、揃ってボロボロと泣かれてしまいかなのりの罪悪感が奔ったものだ。

「……高町君が起きた時、さすが、泣きながら電話してきたんだから」「すまん……本当に悪い」

「そう思ってるなら、責任を取るつもりはある？」

忍はそう言っただけ、いたずらな笑みを浮かべた。そんな表情も魅力的だったが、しかし何を言われるかわかったものではないので悪寒もする。

「……責任、とは？」

「んー……ちよつとお願いがあつてさ。あの娘、もう十四でしょ？」

「ああ、俺からすると九歳から一瞬でそうなった感じだが」

「そうよねえ……。で、あの娘って当然、私と同じ夜の一族なわけよ。だからそろそろ、そういう時期がくるようになるのよねえ」

「……………おい、まさか」

忍達は夜の一族と呼ばれる種族で、普通の人間とは少し違っている。長命で生命力が強く、膂力や知力に優れている代わりに、繁殖力が普段はかなり低い。

しかし、それでも定期的に子供をもうけやすくなる期間があり、その時は有り体に言うとは非常に性欲が強くなる。

「私の発散には協力してくれたじゃない？」

「それはそうだが……」

月村忍と高町恭也の関係は、少し特殊だ。

兄妹か家族か友達か、恋人でもいい、好きなものを選んでくれと、かつて恭也は彼女に言われて、結局選んだのは親友といった所で、しかし普通の親友同士がおそらくやらない事を二人はやっている。

「お前は一個下だったが、すずかは幾つ下だと思ってる。俺を罪悪感で殺す気か」

「十一歳差？　でも高町君を二十歳としたら六歳差？　いけるいける、なんならあの娘発育いいし、今すぐでもいけるわよ」

「お前に常識を期待したのが馬鹿だった。というか何よりも、そういう事はすずかの意向というものが」

「ああ、それならオツケーよ多分。見てればわかるわ」

「適当な直感を根拠にわけのわからん事を言うな」

理詰めの研究者の癖をして、忍はどうも感覚的な物言いが多い気がする。

「何よお、それとも操を立てなきやいけない相手でも出来たの、高町君」

「出来ていないが」

「……ふうん。フェイトちゃんは？」

「なぜフェイトの名が出てくる？」

「なぜって、……んん、勘かな？」

「お前な……」

またしても感覚で言ったらしい忍に、恭也は盛大に呆れの溜息を吐いた。

「いやいや、まあ私もそんなにフェイトちゃんと話した事があるわけじゃないんだけど、あの娘、結構びびつと来るものがあるのよ。高町君と相性すごく良いだろうなって。本当に何も無いの？」

「あの娘は御神の弟子で、妹の親友だ。大切に思っているが、そういう相手じゃない。というか、そもそも歳も」

「すずかと同級生でしょ？　じゃあ十四歳、つまりもう立派に女じゃない」

果たしてその意見が世間一般の標準かどうかはわからないが、忍はどうやら自信満々の物言いだ。

「思うのよねえ、あの娘ならさ、……私じゃ埋められなかった高町君の寂しさを、どうにか出来るんじゃないかって。勝手な期待かもしれないんだけど」

「……月村」

「ま、ともあれ、よ」

「……っ」

カップを置いて、ペロリと唇を舌で軽く舐めた忍からは、思わず心臓が跳ねるほどの色香が発された。

「今現在、そういう相手がいないっていうのは私にとっても非常に都合だわ」

「……………ああ、なるほど」

露骨に変わった雰囲気、さすがに恭也も察する。

「この状況に、もうそろそろ我慢出来ない。私今ね、あの時期なのよ――
―恭也」

「そのようだな、忍」

普段はしない名前呼びは、一種の合図のようなもの。彼女は席を立ち、恭也の下へ歩み寄ってきた。

「さすがが帰ってくるまで結構時間あるし……、前よりも健康なのよね？」

「お前を満足させられるかはわからんがな」

「冗談、こっちは狂っちゃったりしないように必死なのよ？ あのマッサージみたいなの、本当にすごいんだから」

マッサージみたいなの、とは以前シャマル相手に使った事が恭也の記憶には新しい、不破の房中術だ。

父の遺した書物を見つけて以来、忍の発散がてら訓練しているのがなかなか彼女には好評である。普通の人間相手にこれを全力でやったら、薬なんて使わずに壊せると太鼓判を押してくれている。無論誰かを壊す気などないが、房中術としては出来が良いと言えるだろう。

「ノエルはどうする？ 混ぜる？」

「五年ぶりなのでから、今日はお二人でお楽しみ下さい」

「そ？ じゃあお言葉に甘えて。さ、お願いね恭也」

笑顔でそう言って、忍は恭也に手を差し出して来る。握ったら最後、寝室に連れ込まれ搾り取られるのは確実だ。

「……今更だが、俺の意向は聞いてくれんのか？」

「え、三人のがいい？」

「そっちじゃない。するしないの話だ」

「……駄目？」

美しい顔を少し不安げに揺らし、豊満な胸を強調するように自らの身体を抱く彼女は卑怯な程に魅惑的で。

お手上げとばかりに、恭也は彼女の手を取った。

第20．5話 それはちよつと、勘弁して欲しいんだ
けど

「とんでもない人を送り込んでくれたものね」

「やつぱり持て余しちやつてます?」

「そうなるかなあ……とは思っていたんですが」

自分の執務室でため息を吐きながら言った時空管理局第四陸士訓練校・学長フアーン・コラードに、テーブルを挟んで向かいに座るかつての教え子二人組は、苦笑しながらそう返してきた。

「いやあ、でも、訓練校には通わなきゃいけないって決まりがあることにはどうしようもない事ですし」

「そうなのよねえ……」

二人組の片割れ、高町なのはが言った通りではあるのだ。どれだけ実力を持っていても、局員としてやっていくのならば訓練校に通う事は避けられない。

「幸い、……と言っているのかどうはわからないけれど、魔法知識や次元世界群の常識にはやや疎いところがあるから座学の必要性はあったんだけど」

「二応、私やなのはが折に触れて色々お教えはしていたんですけど、それでも基本的には恭也さんは魔法の存在しない管理外世界出身者ですからね」

二人組のもう一人、フェイト・テストロッサ・ハラオウンが上げた恭也という名、それを持つ男性が今、フアーンが俎上にあげている人である。

高町なのはの実兄にして、フェイト・テストロッサ・ハラオウンの師、らしい。

「彼といい、なのはさんといい、八神特別捜査官といい、古くはグレアム元提督といい、第97管理外世界は何かあるのかしら」

「どうでしょうね……特に何かあるわけじゃないと思うんですけど、うちの世界」

なのはは首を傾げなからそう言うが、若手遠距離最優秀、空のエース・オブ・エースと名高い彼女に、強大な固有戦力に加え本人自体も歩くロストロギアと称される八神はやて、最強の使い魔コンビを従えたグレアム元提督というそうそうたる顔ぶれに続いて、彼である。色々考えてしまうのは、仕方ないとして欲しいところだ。

「さらに言うなら、貴女とお兄さんは当然としても、八神特別捜査官も同じ世界どころか同じ都市出身なんでしょう？　魔境か何かなの、貴女の出身都市」

「ううん……すつごく強い狐とかは確かに居ますけど」

「狐？」

「ああ、いや、なんでもないです」

狐。なんだろうか。彼女ほどの実力者が”すつごく強い”などと表現するからには相当のものなのだろうが。

「まあ、置いておいて彼の話よ。高町教導官、テスタロッサ・ハラオウン執務官、八神特別捜査官に、ハラオウン提督とハラオウン元提督……ああ、ややこしいわね、まあいいわ。このそうそうたるメンバーが連名で推薦者になっているのを見た時はどんな人を紹介してくるのかと面食らったものだけど、高めにつけた予想が上方へぶつちぎられるとは思ってなかったわ」

「学長先生から見ても、やっぱりそうですか？」

問うてくるフェイトに、迷い無く頷く。

『『強さの意味』』についての問題、覚えているかしら？」

「それはもちろん」

「印象的な模擬戦の後でしたし」

フェイトが彼女らしい言葉の選び方で印象的ななどと柔らかく言ったが、控え目に言ってもあれは血戦と称される類のものだった。

ランクとしてはA Aの自分だが、戦いようによってはより高位のランク保有者を制する事も出来る……高いランクを有した卒業間近の訓練生にいつもフーン本人が挑む事で実施している授業だが、この二人のペアを相手にした時はかなり骨が折れた。

骨が折れた、というか、勝利すべきところをドロで精一杯な結果

に終わったので失敗とすら言えるかもしれない。

「……あんな無茶な戦い方、今はもうしていないのでしょうか、高町教導官？」

「あ、あはは、はい、一応自制しています……」

フェイトの舌を巻くほどの近接技能も相当のものだったが、何より手を焼いたのが苦笑する彼女、高町なのはの烈火もかくやと言うべき攻めの姿勢だ。

自分がどれだけ傷を負っても相手を仕留めればそれで勝ちだと言わんばかりの思想を根底に抱いた、自身の負担を全く考えない、高い魔法制御力と膨大な魔力にものを言わせた苛烈な攻勢は、老練なフアーンと言えど凌ぎ切れるものではなかった。

しかし、褒められたものかと言うと別問題。

敗北を、それを招く弱さを己には決して許さないという意思が当時の彼女の瞳には暗く輝いており、まさに危うさの塊だった。

あんな事を続けていればその内にどうにかなってしまうと強い強い危惧を抱かされ、切々と説教をしたものだ。

(……兄の様子を聞きにつて、久しぶりに会いに来たと思ったら、あの頃と比べて随分と穏やかな顔になったものだけ)

成長したという事か、あるいは、ああなつた原因に何かいい方向の変化があつたか。

どちらにせ、当時を考えれば紛れも無い奇跡に思える。

「ああ、また話が逸れた。で、『強さの意味』の問題なんだけど、彼には出す必要がないわ」

「でしようね」

「戦えば勝つのが御神流です。よくよくわかっていらつしやいますから、恭也さんは」

自分より強い相手に勝つためには、自分の方が相手より強くないといけない。この言葉の矛盾と意味を、よく考えて答えなさい——これが毎度、フアーンが出している問題である。

”自分よりも強い相手”に勝つために、その相手よりも強い力を手に入れて勝つても、その時、既に相手は”自分よりも弱い相手”に

なっているのよ、”自分よりも強い相手”に勝った事にはならない。これが発生する矛盾であり、この問題の肝。

力を一面的なものと捉えようと、これは解けない。

言い方は色々あるだろうが、回答としては、”総合的には自分より強い相手に対して勝つには、自分が相手より優っている部分で勝負する”である。

それはパワーでもスピードでもテクニクでもタフネスでも、自分が勝機をつかめるものであれば、なんでもいい。

「バカ正直に相手の全力に付き合うのではなく、自分の土俵で叩き伏せろって言う教えなわけだけど、彼は随分弁えている。実際にこんな任務を受けたらこんな現場ではどう動く、みたいなシユミレーション問題や戦術問答なんてやらせると、驚くほどシビアで隙のない意見を返してくるわ」

一朝一夕で身につく考え方ではないし、堂に入った受け答えから見ても受け売りじゃないのは明らか。

彼はどう見ても、ああいう考え方をしなければ生きていけない世界で長い時間戦ってきた類の人間だ。力があるだけのひよつこと並べべきでない、その活かし方を十全に心得た完全なプロフェツションである。

「まあ、兄がやってきた仕事って、ある意味では私達のものよりも厳しいですから。バリアジャケットもシールド魔法も、治癒魔法もない。非殺傷設定なんてもちろんありえなくて、”どれだけ鍛えた者でも、一発の銃弾が当たればそれだけで命を落としかねない”って、昔言っていました」

「なるほどねえ……」

質量兵器だけの世界というのは、得てして防御力に対して攻撃力がどうしても大きく勝ってしまうものだ。

ゆえに、簡単に人が死ぬ。戦いを日常としているのなら、死は驚くほどに身近だろう。

そこで生きてきたというのなら、あの精神性も納得である。

「まあだから何が言いたいかと言うと、三ヶ月の短期プログラム、その

二ヶ月目で実技メインのカリキュラムに入った今、高町恭也訓練生にはやってもらう事が本当じゃない」

「学長先生、じゃあ恭也さんは最近学校で何を？」

「……訓練生としてやってもらう事がないからと言って、あれだけの力と技術と知識と経験がある人間を遊ばせておけるほど、管理局って余裕があるわけじゃないじゃない？」

「あ、読めてきました」

「仰っている事はもつともですけど……じゃあもしかして」

予想が付いたという顔なのは、苦笑のフェイトに、せいぜい図太く悪びれない顔を作ってフアーンは言う。

「近接技能の教官をやってもらってるわ」

「ああやっぱり」

「恭也さんらしいですけど……」

「私達だって最初からそうなってもらうつもりじゃなかったのよ？」

ただ、ちよつとした事件があつて、教官よりも彼に教わりたいて声が出た。元々の近接技能教官達の評判が少々よろしくないものになつちやつたつていうのもあるんだけど」

それに関しては完全にこちらの落ち度なので文句を言える筋合いではないのだが、頭が痛いのは確かである。

「事件？ 何かあつたんですか？ おにいちゃん絡みで？」

「……場合によっては貴女達二人か、もしくは八神捜査官や懇意にしているつていう彼女の一家、多忙だろうけどハラオウン提督に助けを求める事になつてたわね。彼の怒りを鎮めてくれ、つて」

「……怒りを鎮めてくれ？ え、でも」

「おにいちゃんつて、基本的に怒りませんか？ ムツとする事くらいはあるでしょうけど、明確に怒るなんてほとんどないはず……」

揃つて首を傾げる二人組。

「そうなの？ 妹や弟子の立場ならそういう経験あつたりしない？」

「滅多に……あれ、ていうか、……あれ」

こめかみに指を当ててしばらく考え込んだのは、そして大変な

事に気付いたという顔で零す。

「……私、おにいちやんに怒られた事、ない」

「実質的な父親役がお兄さんなんじゃなかったの？ だったらあるでしょう、お小言の一つや二つ」

「もちろん叱られた事はありますよ、注意されたり諭されたりも。でも、怒られたって言うとは……」

「ああ、なるほど」

叱られると怒られる、似たような意味に思えるが、理性による統制と相手の成長を慮る気持ちがあるかないかという明確な違いがある。

それを意識しているとは、さすが教導隊の所属だ。これは、教育者の思考なのだ。

「家の中でも、怒気を露わにするおにいちやんってほとんど見たことないなあ……。あ、前に盆栽をひっくり返したお姉ちゃんと、甘さ控えめって嘘ついて極甘の試作ケーキを食べさせたお母さんに関節技を掛けてた時は、確かに怒ってた」

「……恭也さんの、関節技」

ポツリと言ったフェイトの声音に羨ましそうな響きがあったのは、気のせいだろうか。

「フェイトさんもないの？」

「指導はもちろん色々して頂きますけど、怒られた事はありません」

「……二十歳なのよね？ 随分と老成しているというか」

そこまで自制の効いた精神は、ファーンの同年代ですら中々ない。

「まあ、変な悪戯してきたりとか、茶目っ気はあるんですけどね、あれで。ともあれ、だからおにいちやんが怒るって相当ですよ」

「何があっただんですか、本当に」

「……それがねえ」

ため息を吐いて、ファーンは思い返す。

あれは、彼が入ってほどなくして行われた、初めての近接実技訓練での一幕だ。

「あれが高町恭也君、ね」

訓練場の一つ、広大なグラウンドが見渡せる事務棟の屋上で一人、フアーンは呟く。

グラウンドに並ぶ通常カリキュラムの訓練生達に交じった、黒いバリアジャケットを身に羽織った男性。

それが、そうそうたるメンバーからの推薦で入ってきたSS+ホルダー、高町恭也らしい。

「……あら、いい男じゃない」

グラウンドに設置してある監視モニターへアクセス、デバイスの遠視機能と合わせて拡大映像を空中に投影して見てみると、これがなかなかの美丈夫だ。整った顔立ちに鋭い目つきがよく映える。

「……なるほど」

そして戦闘力を主な要因としてSS+を獲得したというその前情報に、どうやら偽りはないらしい。習い性で、彼と戦うならどう攻めるかなんて思考をついつい脳裏に展開してしまつて、初手に詰まつた。

余計な力が入つておらず、極めて自然体なあの立ち姿には、しかし微塵も隙がないのだ。

「これより、近接実技訓練を始める。今日は諸君らの實力を見たいので、内容は単純だ。私へ自分の放てる最強の一発を叩き込んで来い。いいな」

その場に何人か居る教官陣の中、今日の訓練でメインを務める三代半ばの男性教官がそう言うのを、監視モニターのマイクが拾つてフアーンへ届ける。

訓練生達は初々しい返答。緊張した顔で精一杯の声を張り上げる彼らの姿は、なかなか心が温まる。高町恭也はと言うとさすがにそんな可愛らしさとは無縁の、実にしれっとした顔をしているようだが。

訓練が始まり次々と若者達が教官へ拳や蹴り、ベルカ式の使い手であれば各々の武器を順番に叩き込んで行く。

「温いぞー！ こんなレベルかひよっこ共！ 今年ははずれ年のようだ

な！ この訓練で人死にが出たとしても、それは事故として処理される！ 遠慮せず来い！ それとも、もしかして全力でこれか!？」

怒号を上げる教官は訓練達の攻撃を発生させたバリアで難なく全て受け止め、評価を手元のスクリーンに記していく。顔は涼しいもので、疲労を感じさせない。

彼は局員の中でも硬く強固な防護の使い手として、それなりに有名な魔導師である。あれくらいは造作も無いだろう。

やがて、ほとんどの訓練生がテストを終えた。残ったのは、一名。

「それでは最後……ああ、君か」

「高町恭也です、宜しくお願いします」

「……ふん」

（……ん？）

顔に似合いの甘い声で返した高町恭也に、男性教官は皮肉げな表情。訓練の場に似つかわしくないその毒に、ファーンの眉が流石に少々上がる。

男性教官は、その表情のまま続けた。

「他と比べて随分年嵩だな。短期プログラムで入ってきたらしいが……、資料にはよくわからん事が書かれていたな。なんでもランクがSS+だと」

「一応、そのような評価を管理局より受けておりますが」

「……君の認識がどういうものかは知らんが、SS+というのはな、設定上は存在するがほとんど実在はしないというレベルのランクだ。それを……なあ、君、使うのはミッドか？ それとも近代ベルカか？」
聞くまでもなくそんな事は、資料にしつかりと記してあるのだが男性教官はあえてという風に高町恭也に問う。

その様子で、なぜ彼があんなに高町恭也に対して刺々しい態度なのか、ファーンには予想が付いた。

「いえ、自分は古代ベルカです」

「……あーあーあー、古代ベルカ、古代ベルカねえ。……全く、連中はいつもそうだ」

「お話が見えないのですが、教官殿」

「——お前らはいつもそうだとやっている！ 少し特殊で、他に使い手がいないからという理由で！ お前ら古代ベルカの使い手はミッド式を差し置いて不当に高いランクを獲得する！ 大方SS+というのも、特殊なスキルがあるからなんだろう！ 魔導師として優れているからでは決して無い！」

「……たまに見るけど、まさかうちの教官陣にいるとはねえ」
所謂ところの、ベルカアレルギーというやつである。

管理世界群においては、現在、魔法といえばミッド式が主流である。近代ベルカ式にしたって、あれはミッド式の上でベルカ式をエミュレートしている物なので、考えようによってはミッド式だとすら言える。

ところが、古代ベルカは違う。純粹に根っこからミッド式とは違う魔法体系で構成されている。

そして古代ベルカの使い手は現代においては非常に希少で、そして大抵が皆、特異で価値の高いスキルを有している。そのため、ミッド式主流の現代においても、古代ベルカ式の使い手はそれだけで一目置かれる存在である。

それを快く思わないものが少数ではあるが確かに、ミッド式の使い手の中には居るのだ。

「どうせ貴様もその口だろう、でなければSS+など、得られるものか！」

「仰る通り、自分は特段、魔導師として優れているわけではありませんので返す言葉もありませんが」

「……認めるか！ そうだろうそうだろう、インチキランク保有者のくせをして、物分かりはいよいよだな！」

「大人というかなんというか……枯れているのかしらね」

古代ベルカ式の使い手が不当に高い評価を得ているインチキランク保有者である、というのは完全な言いがかりで、そんなランク測定基準を管理局は設けていない。ミッド式も近代ベルカ式も古代ベルカ式も、平等な観点で評価される。

つまり男性教官の言い様は完全な言いがかりなわけだが、悪意たつ

ぷりにそんなものを向けられても柳に風、泰然としてしている様は年齢にそぐわない。

年上のはずの男性教官が、なんだか痼癩を起こした子供のようにである。

「よく恥ずかしげもなく訓練校に来れたものだな。SS+だなど大きく出ても、実体はすぐにバレる。その化けの皮、今ここで剥がそうじゃないか、高町訓練生。……ふふ、まさか、ランク評価のためのデータ収集・解析を行う観測班や技術部の女性陣をその見てくれを使ってコマしたりなんて、そんな事までしたんじゃないか」

『その無礼な口を今すぐ閉じろ、痴れ者が』

怒気を返したのは彼でなく、彼が腰に下げる二振りの剣だった。

データによれば純然たる古代ベルカ製のデバイスで、登録ネームは魅月。

『貴様のような下郎なんぞに主の何がわかる!』

「魅月、よせ」

『ですが、主!』

「……持ち主と違って威勢がいいな。ツインのショートソードか、なあ高町訓練生、それはどこのメーカー製だい？ 近代ベルカのカタログにも一応目は通してあるが、生憎と初めて見るものでね」

「彼女は古代ベルカの生まれですので、どこのメーカーだとかは」

「……はははははははははは！ こいつは傑作だ!」

高らかな笑い声を上げる男性教官の顔は、侮蔑に満ちている。そんな彼の手に嵌まったガントレット型デバイスは、ミッド式最先端のフラッグシップモデルだ。

「術式だけでなくデバイスまで古代ベルカ! ここは魔法の最前線、技術の最先端の管理局だぞ!? そんな時代遅れのみすぼらしい骨董品を持ち出してきて! 随分といい趣味をしているなあ!」

モニターに映し出された光景の中、何を言われても涼し気な表情を崩さなかった高町恭也の顔がその時、初めて固まって。

それに気づかず、男性教官は続ける。

「埃を被ってカビの生えたような化石じみた古代ベルカのデバイスなんて、いやいやどこから掘り出してきた？ そんな飾って眺めるくらいの評価しか無いだろうポンコツを大真面目な顔で腰に下げるとは驚きだ！ 笑いを取るつもりなのだとしたら中々の」

「構えて頂きたい、教官殿」

そして、場の空気がドス黒く塗り替わった。

現場から離れているファーンにも察せる、その重さと暗さと冷たさと、あまりに危険な鋭利さ。

(……つちよつと、これはまずいかしら)

老齢な元戦技教導官であるファーン・コラードの頭の中には、警告音が大音声である。

「な、お、あ……」

「全力の一撃を貴方に叩き込んでいいのでしたね？ 手早く済ませましょう」

「……な、な、舐めるなア！」

男性教官の足元に大きな四角形の魔法陣が展開、それから彼はたっぷり三十秒ほども掛けて長い詠唱を諳んじ、自分の前面に銀色のシールドを展開した。

それだけでなく、その裏に受け止めるバリアも多重起動しており、体を覆うフィールド魔法も高出力。

魔力消費は大きく発動のための時間も長く、その上維持している間は動けないため実戦で使うのはかなり難しいあの複合防護は、だがそれゆえに極めて高い性能を有する代物だ。

「こ、こ、来い！ 貴様のなまくら刀など！ 弾き返してやる！」

「実戦であれば貴方が暢気に今の魔法を構築している間に三桁は殺せましたが、まあいいでしょう。魅月、装填」

『装填』

高町恭也のデバイスの柄尻から一発、空薬莢が排出され、膨大な魔力が彼の身体に漲る。

ひしひしと伝わってくるそれはしかし、ファーンが見る限り驚くほどの精密さで、完璧に制御されていた。

(……魔力の流れに澱みが全くないのも見事だけど、何より画一的に身体全体を強化するのでなく、筋肉や関節なんかのパーツ単位で調整がされている?)

身体をただ身体という一つのものとして認識し、漫然と強化する事をオートマ操作とするなら、細かいパーツ単位へ一つずつ調整を行う彼がやっているスタイルは、ヘリや航空機なんて目じゃないくらいの複雑さを有したマニュアル操作だ。

魔力運用の技術はもちろん、身体そのものに対して深い造詣と実践的な理解がなければ、あんな事は出来ないだろう。

魔法至上主義の魔導師には、まず不可能な芸当である。

「それではやりましょうか、教官殿」

「く、う、あ、あ……」

男性教官へ歩み寄る高町恭也の足取りに、力みは全くない。あれだけの魔力を身体へ漲らせているのに、不自然さなどまるでない、驚くほどに滑らかなものである。

ある意味で、非常に背筋の寒くなる光景だった。

もう、攻撃など放たずともその異常な実力ははつきりと見て取れる。

「いきます。ああとここで、この訓練で人死にが出た場合、それは事故として処理されるのでしたね?」

「う、う、うううううおおおおおおオオオオオオオオオオ!」

高町恭也がついに、男性教官の眼前まで詰めた。男性教官は悲鳴じみた叫びを上げて展開した防護に魔力を注ぎ込む。

止めに入ろうと準備していたファーンの転移魔法が発動するよりも、高町恭也の右脚がほとんど視認できない速度で前方へ閃く方が速かった。

響いたのは、シールドが砕けバリアが突き破られる轟音、そして訓練生達の驚きの声と、他の教官達の恐怖の呻き。

防護を易易と蹴り抜かれた男性教官の身体はそのまま斜め上方へ

向かって吹き飛び、グラウンドの端も越えて宙を突き進んでいく。第一、第二室内実技館を過ぎ、やがて女子寮手前の男子寮、その4階の壁面に激突。

意識がないのは明白、人形のようなだらりとした反応で彼はそのまま地に落ちた。

バリアジャケットもある事だし、死んではないだろうが。

『主、どうして私をお使いにならなかったのです?』

「あの男に、君を抜くほどの価値などない。……さて」

前方へ突き出していた足を地面に戻し、後ろへ振り返って高町恭也は言う。その瞳は、ひどく冷たい。

「教官殿が吹き飛んでしまわれました。あれでは自分の評価はして頂けなかったかもしれません。生意気な事を言わせて頂くと、自分はまだ全力を出していませんし、ましてや愛機を振るってもいません」

「ま、まあ、その、高町君、落ち着け、な?」

執り成さんとする残った教官の内の一に、一見感情のない、その実重い怒りを有した視線を返す。

「落ち着いていますよ。自分はただ、訓練を付けて頂きたいだけです。ですので、次は他の教官殿にお願いしたいのですが、どなたが?」

「ひい!」

『あ、主……その、私の事で怒って下さっているのならこの上なく嬉しいのですが、どうか、もうそろそろ……』

「ならん。彼らは、君を貶めるあいつを諫めようとしなかった。だったらそれなりの自信も覚悟もあるんだろう、是非とも見せてもらわんと困る」

一歩、怯える教官達へ黒衣の彼は距離を詰め、その分だけ教官達は後ずさる。最も若手の教官が尻もちを付いて。

「まあ待って頂戴、高町訓練生」

そのタイミングでようやく、ファーンの魔法が発動し切った。

彼と教官陣のちょうど中間地点に転移、至近距離の正面から彼の瞳を受け止める。

(……こ、れはちよつと、本当に洒落にならないわね)

まるで景色が歪んでいるかのような錯覚に陥るほど、彼の重い怒気は周りの空間をギシギシと軋ませている。

精悍なその顔はわかりやすい怒りの表情に染まっているわけではないが、だからこそ、こちらの言など微塵も意に介さないのではないかと思わせる怜悧さだ。

「貴女は……」

「私はこの学校の学長、ファーン・コラードです。先ほどまでの諸々、見せてもらっていたわ」

現役時代に幾度か経験した決死の作戦が脳裏には絶賛フラッシュバック中だが、これでも海千山千の猛者を相手にしてきた老兵である、動揺はおくびにも出さない。

涼しい顔で挨拶すると、彼は流麗な動作で敬礼を返してきた。

「コラード学長、お話であれば、訓練の後というわけにはいきませんかでしょうか？ もうすぐ、終わりますので」

「いかないのよねえ、そうになると、何人入院するハメになるかわからないし」

「先ほどの教官殿は別でしたが、他の方々にまであするつもりはありません。少し、そうほんの少し、身体に負傷が残らない範囲で自分の力を体感して頂くとうと、それだけです」

傷は残さないが痛い目を見て貰う、つまりそういう事を言っているわけで、もちろん詳しい事はわからないが恐らくはトラウマになりかねないレベルの地獄を見せるつもりなのだと察せた。

「それはちよつと、勘弁して欲しいんだけど」

「自分の実力を見て頂く、そういう訓練内容だったと記憶しております。であれば、何か問題が？」

「……その建前であれば問題はないのだけど、本音を聞かせてもらえないかしら？」

回りくどい問答はお互いに益がないだろうと言外に含ませそう言くと、彼は瞬きというには少しだけ長く目を瞑り、返してきた。

「コラード学長、お聞きしたい事が一つ」

「なんででしょう？」

「この学校は、古代ベルカのデバイスを公然とこき下ろす事を是とされていらつしやるのでしようか？」

彼の手が、腰元に控える剣の鞘を撫でる。放つ怒気とは裏腹に、その動作はひどく優しく柔らかい。

「自分は叶うことなら一生涯、この手に握るデバイスは彼女二振りと決めております。死地においてすら寄り添ってくれる伴侶を侮蔑される場で学べるほど、恥ずかしながら自分は人間が出来ておりません」

『あ、主……』

(ああ、……そうか、だからなのね)

ここにきてようやく、理解する。

彼の行動は、愛機を貶された故の怒り……だけではなかったのだ。

彼は、わからなかったのだ。

管理外世界からの出身という事で、管理世界群や管理局について疎い。それはすなわち、判断材料が少ないという事を示している。

普通に管理世界群や管理局の世情に通じているのなら、あの男性教官の古代ベルカ嫌いの思想が間違っても主流ではない事は知っている。

だが、そうでない彼は、あの男性教官の考えがもしかしたら、少なくともこの訓練校という環境においてはスタンダードなタイプなのではないかと疑わずにはいられず、それを晴らす材料を持っていなかった。

だから、力を示したのだろう。

彼女の持ち主である自分の威を叩きつけ、恐怖さえまき散らして、愛機へ侮蔑の声がかげらないように。

「貴方、不器用なのね」

「……よく言われます」

「質問にお答えします。あのタイプは決して一般的ではないわ。特定の魔法体系が不当に貶められる事はあるべきではないという考えでこの学校も、管理局も動いています。……落ち度を作ったこちらが言うのも申し訳ないのだけど、今回の事は例外的と思ってくれると助か

るわ」

偽りのない言葉だが、納得してもらえるかどうかかわからない。

「あの教官については、それなりの然るべき処置を下します」

「……」

「これでこの場を収めてくれるわけにはいかないかしら」

筋は筋だ、それでも訓練は続けさせてもらうと言うならばファーンも力づくで止めねばならないし、いかにもそれには分が悪いので応援を呼ぶことになる。

デバイスは、いつでも彼の推薦者達へ救援のメッセージが送れるような状態だ。

とは言えやはり、それは避けたい。

祈るような気持ちのファーンの前、彼は口を開いて頭を下げた。

「お騒がせして申し訳ありませんでした。自分の沙汰は、いかようにも」

「……そこそ訓練中に起きた不幸な事故よ、特に無いわ」

大して残り多くもないだろう寿命が縮まった思いだったが、とりあえず何とかなったらしい事態に、ファーンは胸をなで下ろした。

「グラウンドを越えて男子寮壁面まで吹っ飛ばされた……手加減してもらえましたね」

「手加減、って……」

語り終えたファーンに、なのはは自然な表情でそんな事を言ってきた、思わず問い返すと、答えてくれたのはフェイトだ。

「お聞きした限りの防御構成では、恭也さんから本当に本気で蹴られていたらそれじゃ済みませんよ。身体を二つに千切られていたか、衝撃を全身に徹されて、その……ゲル状になっていたか、どちらかでしょう」

「……飛ばしてくれたのは、情けだったって事ね」

吹き飛ばすというのは、それだけ衝撃が身体から逃げているという事でもある。そういう風に蹴ってくれなければ、結果はフェイトが言っ

た通りだったというのか。

恐ろしい話である。

「ところで、おにいちちゃんと魅月さんに悪態をついたその人は、今は？」

「聞いてどうするの？」

「決まってるじゃないですかあ」

顔は似ていないが、さすが兄妹と言ったところだろうか。笑顔を浮かべた彼女の、しかし眼だけは笑っていないその表情からはあの日、彼が周囲へ発していたものと同じ種類の凄みを感じる。

「なのは、ちゃんと法律的に問題がないようにやろうね。でないと恭也さんが気に病むから……」

「お、さすがフェイトちゃん、気遣いの人」

「気を遣う方向が違うわよ」

てつきり止めてくれるものかと思っていたフェイトの言葉に、額を抑えて頭痛に目を瞑る。

勘弁して欲しい。

「件の教官はまだ入院中。傷は飛ばされた距離の割に浅くて大体治っているんだけど、彼がいる間は戻ってきたくないみたい」

「へーええええ、おにいちちゃんを避けてる！ 戻ってきて謝るでもなく！ へーえええええええ……」

「どうするのが一番自然かな……結構ランクは高いみたいだし、訓練生に敗北するような実力を鍛え直すって名目なら教導は通る、か。でもこの際、ベルカアレルギーの人達をまとめて糾弾するいい機会……いや、大事にすると恭也さんが気にしちゃうから駄目だな」

「獰猛な笑みを浮かべるなのも、冷静な顔でぶつぶつと呟くフェイトも、完全に本気の眼をしている。」

「私がきちんと話しておきました。それで勘弁なさい」

「……」

「……」

「返事をしなさい……」

大きくため息を付く。超が付くほど優秀な子達ではあるのだが、在

学中から馬鹿みたいに頑固なのが玉に瑕だ。

「……やり過ぎれば彼の悪評にも繋がるわよ。自分に歯向かったものを妹や弟子を使って肅清する恐ろしい人間だ、って」
「うっ……」

「それは……」

しかし攻める角度を変えると、どうやら効いたらしい。はっとしたように表情を曇らせる。

「自制なさい、いいわね？」

「……はい」

「わかりました……」

ようやく頷いた二人に、内心でほっと胸をなで下ろす。まったく、愚痴ったつもりがこんな事になるとは思わなかった。

「なんていうか、大切なのね、彼が」

「それはもちろん」

「そ、その、はい」

なのはははつきりと、フェイトは照れながらそう返してくる。

「でも、じゃああれよね、気が気でないんじゃないの？ あれだけモテるんだから」

「そうなんですよ！ 昔からたくさんさんの女の人を無意識に引き寄せて！ 無自覚に惹き付けて！ ……さん、待ってください」

「学長先生、あれだけってどういう事ですか？」

しまった、失言だったか。目を逸らしたこちらをじっと見つめてくる二人の視線が、実に痛い。

数秒のち、観念して語ることにする。

「ランクの噂と訓練校に来る主な年齢層よりも結構歳が上だってことで、最初は避けられてみたいけど、さっきの事件の後から、同じ訓練に出てた子達なんか懐かれたみたいでね」

自分たちが歯も立たなかった少々嫌味な教官を気持ちが良いくらいにふっ飛ばしたとなると、わかる話ではある。怒気には面食らったろうが、それを差し引いてもなお憧れるくらいの姿に映ったのだろう。

「そうしたら、ほら、結構彼つて面倒見が良いみたいじゃない？ ぱつと見、少し取っ付きづらいけど、あれで人当たりも良いし」

「まあ、そうですね……父性の塊みたいなどこありますし」

「実体験から言いますけど、特に歳下にはすごく受けが良いかと……」
「そうなのよね。まあ、どうも本人はそんなつもりじゃなかったみたいだけど。それで、その内にあの訓練に出てなかった子達も寄ってくるようになって、私達の方にも彼に教官をお願いしたいって声が来るようになって。どうも、休憩時間とかに自由時間に拝み倒されて少しほどきをしていたみたい」

今年の訓練生は妙に動きが良いのが多いという話が教官陣の間で出始めるまでに、そう時間はかからなかった。

「近接実技の教官は一人入院中だし、彼に訓練校で学ばせなきゃいけないことももうないしって事で、試しにやってもらったら異様に上手いのね、教えるの」

「私が訓練校に入った歳くらいからもう姉の師匠だったので、指導者のキャリアも結構長いですしね」

「魔導師を指導するノウウハウも、私に訓練を付けてくださっている事で溜まったのかもしれない」

「ああ、そのような事を言っていたわ、確かに」

明らかに素人ではない指導ぶりに問うてみると、なのはとフェイトが言ったような答えが返ってきた。

「ま、それで今じゃカリキュラムにまで手を加えてもらっているわ。特に今期の新人は近接と遠距離回避の動きが例年よりもかなり良いものと思つて頂戴」

「それは結構ですけど」

「学長先生、話を戻して下さい」

「……わかったわよ。だからなんていうか、いつも大抵囲まれているわ。男子にもかなり人気あるけど、やっぱり女子にはすごくくてね。積極的な子はボディタッチがもう」

「今ちようど昼休憩ですよね！」

「ちよつと失礼します！」

足早に二人は部屋を出て行く。まさか放っておくわけにもいかないので、ファーンも腰を上げてそれを追った。

ファーンの執務室は三階にある。階段を降り、一階まで下がり少し廊下を行けばそこが食堂だ。

「な、な、な……近い近い近い近い！」

「……なんであんな距離である必要が、あんな、あんなっ」

入り口で、栗色と金色の二人が固まっていた。

その視線は追うまでもない。件の人物は食堂の人だかりの中心にいるからだ。少し困ったような顔をしているのが、ファーンとしては少々可愛らしい。

「恭也さん見てください！ 私、ほら、ちよつと身体強化の制御、上手くなつたんです！ 筋肉単位って意味、ようやくわかつてきました！」

「恭也さん、回避の時って結局、余裕を持って避けるのとギリギリ必要な分だけ避けるの、どっちがいいんでしょう？」

「デバイス調整してんすけど、長さに迷つてて。恭也さん、ちよつとアドバイスを」

「……ちゃんと聞くから、順番に頼む」

タイミングが悪いというのはこういう事なんだろうか。

いつもは男子もいるし、男子だけがまとわり付いている時もある。しかし今日に限って、なぜか周りにいるのは女子ばかり。

「……いや、いや、ここでしかし出て行って追っ払うとおにいちちゃんに迷惑、が、で、も、いや、……でも、……だから近い！」

「あれはそう、訓練の、指導の一環、彼女達に、それ以外のつもりはない、はず……はず、ないよね、ないよ、ね………あんな距離が必要？」

「貴女達、すごい顔してるわよ」

前から覗けば、絶賛葛藤中の彼女らはあまりお見せできない表情をしていた。

それでもなんとか自分を抑えているようだったのだが。

「恭也さーんっ！ ああつ、今日もいい身体ですね！」

「……こちら、飛びつくなど言っているだろう」

「いやーつついっい」

「あ?」

「は?」

「ああもう……」

後ろから飛びついて彼の首筋に顔を擦り付け始めた女子訓練生を見て、なのは、フェイトの両名から明確な殺気が漏れる。

「何度も言っているだろう? 年ごろの娘が、男にあまりこういう事を」

「私と恭也さんの仲なんですからいいじゃないですか!」

「よくない……。そもそもいったい何の仲だと言うんだ、君は」

「えへへへへ」

「はい駄目、駄目です。あれは駄目です。お話が必要ですね。……あの度胸だけは買ってやる」

「風紀の乱れは正さなきやならない、訓練生の内からあれじゃ駄目だ。……何をやっているのか理解させる」

「……お願いだからほどほどに頼むわよ! 人も建物も壊さないで頂戴ね!」

フアーンの言葉に、二人はそれぞれ「配慮します」「善処します」とだけ言い残し、人だかりへと突き進んで行った。

第20．6話 苦手な事

「……うーん」

「すみません、お口にあいませんでしたか……?」

「ああいや、違うんだ。失礼だったな、すまない」

食事を口にして唸ってしまえば、当然そういう風に思われてしまうだろう。それはどう考えても無礼にすぎる。

実際、食べさせてもらった和風の色が強い弁当はどの料理も美味だ。しっかりと味がしみているのに濃すぎることはなく、偶然だろうが実に恭也の好みだった。

「とても美味しい。美味しいし、栄養もしっかり考えてくれてるメニユーだろう。素晴らしいと思う」

「ほ、ほんとうですか? ありがとうございますっ」

恭也は現在、フェイトとともに海鳴の街外れ、山の中にいる。つい先日、正式に弟子入りした彼女へ御神流の修行をつけているのだ。いつもは道場だが、今日は野外での戦い方や自然を使った足腰の鍛え方などを指導するため、木々の鬱蒼とした山中へ来ている。

「……だがなあ、こうなってくると」

今は昼休憩。フェイトが昼食を作ってきてくれたので、彼女と並んでシートを敷いた日なたに座りこみ、それを頂いているわけなのだが。

「ひとついいか、フェイト」

「は、はい」

「……君は、なにか苦手な事とかないのか?」

「え?」

金色の髪を揺らして首をひねる彼女だが、恭也としては自然な問いだった。

「学校での成績、ものすごく良いとなのはから聞く」

「……え、えと、そのなにはは理数系では勝った事ありませんし、はやてやすずかには文系科目をいつも教わっています。アリサには全部敵いそうにないですし……だから、そんな」

「だが、それで結局、総合成績は学年二位なのだろう？ アリサに負けるというのは、まあ仕方ない。あれは突き抜けた天才の類だろうからな」

なのはに理数系で負けるといいうのも、彼女は小さな頃から電気屋の空気に落ち着きを感じるくらいには工学に適正のある理系脳なので、相手が悪くはあるんだろう。

文系科目にしたって、そもそもフェイトは母国語が違うのだ。はやてやすずかに教わったとして、それで高い成績を獲るといいうのなら実に優秀だと言えるだろう。

「運動神経も優れている」

「恭也さんにそう言って頂くと大変恐縮なんですけど……」

「なに、実際大したものだと思う。御神にこれだけ適正をみせるというのはな」

五年前に鍛錬をつけ始めた時も思ったが、彼女の才は相当なものだ。集中力も高く、覚えもいい。そもそも、不完全とはいえ独学で徹に至った時点でおよそ尋常ではないだろう。

「それから、歌も上手いとか。めったに歌わないらしいが」

「そ、それは本当に大したことはないんですっ、人前では緊張してまともにも歌えませんし！」

「ううん、だがなあ、言っていたのがなのはと美由希だからなあ……」

あいつらの耳は、事情があつてかなり肥えているんだが」

現在、世界的な歌手として活動しているフィアッセ・クリステラの歌声をかつて日常的に聴いていた彼女たちが、すさまじいとまで表現したのだから、生半なものではないはずだ。

ちなみにもっとも得意なジャンルは、純洋風な見た目とは裏腹になぜか演歌らしい。謎である。

ともあれ一度、恭也も聴いてみたいと思っっているのだが、この反応では難しいだろうか。

「それでこうして料理まで出来るとなると……なにも欠点が見当たらない」

出来る事、とは少しずれるだろうが、見た目と性格の良さだって、も

はや言うまでもない。

子どもらしさを少しだけ残しつつも、もう立派な女性と云っていいだろうその美貌は現実味すら薄く、それでいて思いやりや気遣いに満ちた性格は、確かな暖かさで傍にいるものを幸せにする。

歳下の女の子を相手にこんな風に思うのも情けないのかもしれないが、実際、恭也も彼女と一緒にいると、ひどく安らかな気分になれる。安心するというか、穏やかであるというか、とにかく、心のどこかがほっとする。

フェイト・テストアロッサ・ハラウンという少女は、恭也の眼から見て、およそ最上級な女の子だった。

妙な頑固さもあつたりはするが、人間味があつて余計に彼女の魅力を引き立てている気がする。

「欠点が見当たらないなんて、私、欠点だらけの人間ですよっ」

「謙虚だな」

「本当ですよっ！」

「例えば？ さつきも聞いたが、苦手な事とかあるのか？」

なんでもそつなく……どころか優秀にこなすイメージがあるので、こちらからすればなにも思いつかない。

「た、例えば……その」

問われた彼女は、恥ずかしそうに少し顔を赤く染め、俯き加減で言った。

「……………絵が、下手っぴです」

「そうなのか？」

コクンと、フェイトは小さく頷いた。

「……………そうなのか」

意外だ。

とても意外だ。

なんとなく、水彩画あたりで繊細な柔らかい絵を描きそうな、そんなイメージすらあるのだが。

「……………謙遜ではなくて、か？ はやてあたりが上手いものだから、比べているとか」

あとは、なのはもあれで、可愛らしいイラストをパパッと描けるタイプだ。翠屋の店内メニューやポップに華を添えている。

「……………」

無言、フェイトは近くに置いてあった自身のバッグから、鍛錬の記録ノートと筆記用具を取り出した。

「……………なにか、お題をお願いします」

「じゃあ、そうだな、猫で」

フェイトがシャーペンを握ったその手をノートの上で動かし始めた。なんとなく完成まで見るのはもったいない気がして、彼女の手元から視線を外す。

(しかし、それこそ絵になるな)

木々を背景に、光の降る日なたに座り込んだ金髪の美しい少女が、真剣な顔で絵を描く姿というのは、映画のワンシーンのようだ。

こういつてはなんだが、美人や美少女が周りにやたらと多い恭也でも、思わず眼を惹かれてしまう光景だった。

なんとはなしに眺めながら、そのまま待つこと数分。

「……………出来ました」

「……………うん」

そして彼女が見せてくれたのは、イラストというよりも…………。

「なるほど」

おそらくは、前衛芸術に近い。

「……………足の数が、一っぱかり多くはないか?」

「……………おしりのそれは、尻尾です」

「ああ、尻尾か」

尻尾か。

……………尻尾か。

「うーん」

猫を描こうという意思の痕跡はそこかしこに見られるだけに、妙な味が際立ってしまったっている感がある。

コミカルなようで、写実的でもあって。渾然一体となったそれが、得も言われぬ迫力を出している。

「不甲斐ない師を許せ、フェイト。こいつに襲われたら、俺は戦わずに逃げる」

「シ、シグナムと同じような感想をつっ！」

「斬って倒せる気がしないんだ」

「あつ、それも同じこと言っていました！」

ひどいです！ と彼女は【猫？】の描かれたノートをパンパンと叩きながら抗議の声をあげた。

”お前が絵かラップで食っていくと言い出したら私は間違いなく後者を推す”とか、そんな事も……」

「っ、……く、……っ、いや、……すまんっ………っ」

「なんでユーモアのセンスがそんなにぴったりなんですか、恭也さんとシグナムって……」

思わず吹き出してしまった恭也に、フェイトはいじけたような口調と瞳だった。

「と、とにかくこれで！ わかっていただけでしたか!? 欠点のない人間なんかじゃないんです！」

「わかったわかった、そうだな、俺が間違っていたよ」

たしかに、完璧に思えたフェイトにも、どうやら間違いなく苦手な事はあるようだった。

「……恭也さんは、絵、お上手なんですよね。なのはが言っていましたけど」

「いや、まあ、普通だと思うが……ああ、悪かった悪かった。そうだな、上手いかもしれん」

顔を赤く染めながら、自分の絵をこちらへ突き出してくる彼女に負けて、言を翻す。

「恭也さんの絵、見たいですっ」

「わかったわかった」

恥ずかしい思いをしたからか、いつもは控えめで自分の要求をあまり口にしない彼女が珍しくねだってきて、なんとなくそれが嬉しく、恭也は苦笑しながら応じる事にした。

彼女からノートを受け取り、懐から筆ペンを取り出す。

「それで描かれるんですか？」

「ああ。一番描きやすいんだ」

言いながら、さらさらとノートの上に筆を滑らせる。

「え、えっ、すごいー！」

「こんなものか」

手早くしたためたのは、座り込んだ一匹の猫。ほぼほぼ一筆書きだが、なかなか凛々しく出来た。

「……一匹じゃ可哀想かもな」

「わあ……ー！」

寂しいかもしれないと思って、周りに仲間を足してやる。よく高町家の庭に遊びにくる子達をモデルに、一匹一匹、少し模様を変えておいた。

「すごいすごい！　すごいですー！」

フェイトは目を輝かせてこう言ってくれるが、その昔、忍などは、

”鳥獣戯画つ、鳥獣戯画じゃないっ、に、に、似合いすぎ……高町くんちよつとキャラ立ち過ぎでしょ……っ、ふふ、あはははははははっ”

などと笑い転げながら言ってきたもので、アイアンクローをお見舞いした記憶がある。

「これ、私の部屋に飾ってもいいですかっ？」

「そんな大層なものじゃあ……というか、そうなると君のこいつもれなく付いてくるぞ」

「ああっ」

恭也が猫を描いたのは、フェイトが猫らしき何かを描いたところと同じページだ。

「私のは切り取って……」

「そう邪魔つけにしてやるな。こいつも不思議と、ずっと見ていれば可愛く思えてこないでもない」

「……そ、そうでしょうか」

「愛嬌がある」

恭也の言葉に、フェイトはううんと唸った。悩みどころらしい。

「後で熟考して決めます……ところで恭也さん、これって練習されたんですか？」

「練習……そうだな、少しした。なのはが昔、喜んでくれて、それでな」『おにいちゃんとお絵かき』は、幼い彼女のお気に入りだった。

恭也が戯れに描いたうさぎか何かを気に入ってくれて、それからよくねだってくるようになったのだ。大して面白い事も出来ない自分が彼女の笑顔を引き出せた事が嬉しくて、こっそり部屋で練習を重ねた記憶がある。

「……私も、練習してなんとか」

「フェイト、俺もラップの方が良いと思うんだが」

「絵で食べていこうなんて思ってます！ もう、恭也さん！」

「すまんすまん」

生真面目な反応が可愛らしくて、つついからかかってしまう。彼女に限らず、親しい人間にこうしてしまう悪癖がある事は自覚しているのだが、なかなか直せない。

「そうじゃなくて、その……恭也さんがなのはのためにつて練習した事と似ているんですけど、私も子どもたちとよく遊ぶので」

「ああ、そうなんだったな」

様々な事情で保護を必要としている子に対して、彼女が自分の手が回る範囲でいろいろな援助をしているという話は、少し前に聞いた。

執務官としての権限で動かせる予算だけでなく、私費も投じているという話で、休暇を使って会いに行くこともよくあるらしい。

「……運動をする事が多いんですけど、もし一緒に絵かきしよう、なんて言われたときにこの体たらくでは」

そう呟く彼女は、少々弱ったような顔だ。

恭也はこういうとき、彼女に言いようもない眩しきを感じる。

彼女のような人間がいるから、世界というのは多少はましな色をしているんだと、なんの誇張もなく思う。

フェイト・テストロッサ・ハラオウンの半生は、ある観点においては悲惨だったと言っている。間違いなく、そう言っているはずだ。

悲しみと苦しみを何度も何度も擦り込まれ、それでも希望を捨てず

に飛び続ければ絶望を叩き込まれて地に落とされ、彼女はその身体と心にあまりに痛々しい傷を作った。

であれば。

他人の幸福を恨み、憎み、僻み、妬み、かつての自分と同じようにぐちゃぐちゃにしてやろうと、そういう気持ちを抱いてしまっても、なんら不思議ではない。

なのに。

彼女は誰かの笑顔を願う。

自分のような悲しい思いをする子が、一人でも減るように。自分のように救いをもらえる子が、一人でも増えるように。

そう願う、彼女はにこにここと笑って、しなくていいはずの苦勞を背負い込む。

今も、絵が苦手なことを子どもたちと遊べないからという理由で思い悩んでいる。

綺麗な世界だけで生きてきたわけでは決してない、痛みだらけの日々をかつて過ごした彼女が、こんなに途方もない善性を示しているというのは、ある種の救いだと思う。

こんなに美しい魂があるのだと知ることが出来るというのは、救いなのだと思う。

「……君が人気な理由が、よくわかる」

「……え？」

突然の恭也の言葉に、フェイトはきよとんとした顔だ。

「学校や局で、もう何度言い寄られているかわからんくらいに人気だと、そういう話をたびたび聞くんだが、納得だと思ってるな」

こんな彼女に惹かれるなという方が、きつと難しいだろう。

五年前、彼女のマンションに泊まらせてもらった時に、アルフに向かって、“あと五年もしないうちに、この娘をきつと、周りの男達は放っておかないだろう”と、そんな事を言ったものだが、それは当然のように的中したらしい。

「……ち、違うんですッ!!」

「ん、なにがだ？」

恭也の目の前、フェイトはなぜだか、そう、なぜだかわからないが、どこか焦ったような顔をしていた。

「ち、違うんです、私、べ、別に、そんな、人気なんて、その、その、えと、お声をかけて頂くことは、その、ありますけど！ 全然！ 全然つ、私つ、応える気なんて！ 全然ないんです！ 本当です！」

「はいッ！」

ずいぶんと、彼女は必死だった。理由がわからず首をひねりながら、恭也は再び問いを向ける。

「それは、仕事が忙しいから、とかか？ まあ、そもそも君と釣り合う男なんてそうそういないだろうが……」

「そうそういないと言うか、国に一人レベルなんじゃないだろうかという疑問すらある。」

「……いえ、仕事とか、学校とかじゃなくて、釣り合うとか、そんな事を考えているわけでもなくて、その、……あの、…………その」

一度口を閉じ、俯いたフェイトは、やがて拳をぎゅつと握って顔を上げた。

その紅の眼で、こちらをまっすぐに射抜く。

そして、言った。

「……——好きな人が、いるんです」

「……そう、なのか」

「……はい」

彼女は再び、その顔を俯かせた。耳が真っ赤だ。

「……その言い方からすると、恋人というわけではなくて、つまり「片思い、なんです……ずっと」

「…………」

恭也は思わず、片手を額に当てた。

激しい頭痛がするのだ。

この娘が、片思い？

「……すまん、少し、意味がわからない」

「ど、どういふことですか？」

「いや、だって、君が片思い？ しかも、ずつと？ ……意味がわからない。よつぽどの相手でもない限り、普通、すぐに成就するだろう。そもそも君は思われる側の人間だとも思うしな……」

「……そんな事、ないんです」

「……ううん」

二十年程度生きたくらいで、世界を理解したつもりになるのはまだまだ早いという事か。

色恋沙汰というのは単純なものではないだろうし、機微に敏いわけでもない自分がわかった風な事を言うべきではないのだろう。

「相手は、それには……」

「全然、まったく気付いていません。本当に、微塵も……」

そう言う彼女は、少しいじけたような顔だ。

「鈍いのか？」

「信じられないくらいに……。すごくすごく女性に人気があるんですけど、自覚はほんの少しもないみたいで」

「……まあ、確かに、たまに異様に鈍い奴というのはいるがな」

傍から見ている、なんで気づかないんだ馬鹿じゃないのかなどと思うくらいにはつきりとアプローチを受けても、なぜかわからない人間というのは居るようで。

あれは不思議だなと、いつも思う。自分はそんな風でもないし、そもそもそんなに想われる事などないので、気持ちはよくわからない。「ではその、はつきり想いを伝えたりは……ああいや、すまん、俺が踏み込んで聞くことじゃないな」

妹のような存在だと勝手に思っているし、弟子でもあるのだが、しかしその関係性にはこういう事を聞いていい妥当性はないはずだ。

「……告白は、まだ出来なくて」

しかしフェイトは、答えを返してくれた。

「妹みたいなものだって、思われているんです。歳の差が、それなりにあります」

「……ああ、なるほど」

同年代で想像していたが、そうか、そういう可能性があるとは思

至らなかつた。

十四歳とはなるほど、相手の年齢によつてはまだ躊躇される歳ではある。場合によつては妹扱いで、恋愛対象には入らないケースもあるだろう。

彼女がまさに、そうだと言う事か。

「……ん、妹扱い？」

「……っ」

唐突に、恭也の脳裏に閃きが奔る。

ずっと片思いの、妹扱いをしてくる相手。

そんなの。

「そうか……」

簡単にわかるじゃないか。

「……まさか」

「え、えと……」

それは。

「……………ク」

「クロノじゃないですよ！」

言いかけたところを、しかし叩き落とされてしまった。

違うのか。

「妹扱いというか実際に義兄だし、君との付き合いも長くて深い。クロノなら君と釣り合いもするだろうと思つて……」

「クロノの事は大好きですし尊敬もしてますけど！ 家族としてです

！ 男の人としては見てません！」

「……そうなのか」

絶対に正解を引き当てたと思つたのだが、どうやら本当に違うらしい。

「まあ、だが義理とは言え兄を相手にそれはないか」

「……他の兄妹がどうかはわかりませんが、ハラオウン家は、少なくともそうです。そもそも、クロノはエイミー一筋ですし」

「そうだが、それは想つてしまう事とは無関係だろう？」

誰か別の人を想う相手を好きにならないというのなら、恋愛におけ

る悲劇はこの世からかなりの割合、消え去るだろう。

「……恭也さんは」

「ん？」

「恭也さんは、そういう経験、あるんですか？」

「……ノーコメントというわけには」

「わ、私は話しました！」

流れでそう言ったとは言え、たしかにそれはその通りだ。そう言われると痛い。

「……まあ、恥ずかしい話だからあまり言いたくはないんだが」

少しの逡巡の後、観念して手短かに語る事にする。

「所謂、初恋がな。届かない相手だった。旦那さん一筋の、一途でまっすぐな女性だった」

そもそも血筋的に無理な相手でもあったのだが、相手がいるというのも歯がゆかった事の大きな一つではある。

子どもの淡い想いではあっただろうが、それでも、子どもなりに真剣だったのだ。

「……どんなところが、好きだったんですか？」

「……そうだな」

振るう剣が鋭くて、それでいて普段は優しく。楚々とした佇まいの美しい、眼を惹き付けられる女性で。

そして、何より。

「安心、したんだ」

黒髪の彼女に、胸に抱いてもらったときの記憶を思い出す。

あのじんわりと暖かい熱を思い出す。

「彼女のそばで、俺はすごく安らかになれた。そのままずっと、そこに居たいと思った。……だから、だろうかな」

母のいなかった恭也にとつて、それはもらえるはずもなく、しかし心は求めていた母親の愛を感じさせてくれるものでもあり。

それでも一応は芽生えていた男として意識が、女性の彼女を求めたのだろうと思う。

「……そう、ですか」

フエイトは真剣な顔で、そう小さく零した。こんな情けない話、そんな顔で聞かれても困るといのが恭也の正直なところである。

「今でも、好きなんですか？」

「いや、そういうわけじゃない」

その問いには、さすがに苦笑する。

「今見てももちろん、素敵な女性だとは思わがな。そういう感情があるわけじゃない」

一緒に買物に行ったりするとよく夫婦と間違えられたりもして、光栄だとは思わがなという期待などはない。

ちなみに、かなりの年齢差があるというのにそう思われるというのは、自分が老けているのか、それとも彼女が三十八歳とは決して思えない実に実に若々しい美貌を維持しているからかはわからない。

「……なんの話、だったか」

「……絵の話、でした」

さすがに少々、変な汗を掻いてしまった。そうやって話を変えようとした恭也にフエイトは乗ってくれた。

「なにか、上手くなる方法はないんでしょうか……。このままでは、ちよつと」

「子ども達に泣かれてしまうかもしれない」

「な、泣かれはしませんよ！……しないですよね？」

頷いてやれず、そつと眼をそらす。

「そ、そんなー！」

「絵、全般が駄目なのか？ イラストは描けないが模写は出来たりとか」

「模写、ですか……」

手本が目の前にあれば描けるとか、そういう感じであればかなり救いはあるだろう。

「ちよつと何か試してみたらどうだ？ そうだな、例えば俺でも……」

「いや、それはつまり」

「やりますー！」

食い気味で、フエイトががぶり寄ってそう言ってきた。その勢い

に、思わずちよつとのけぞってしまふ。

「恭也さんがモデルつ……！ やります、やらせてください！ 可能性を感じるんです！」

「そ、そうか？」

「はい！」

こんなつまらない顔を見つけて絵を描くなんて、軽く罰ゲームではないのかと思うのだが、彼女はやる気に満ちていた。

「それじゃあ、ええと、じつとしていいかい？」

「はい、お願いします！」

精々きりつとした顔を作って、彼女の方を見つめながら動きを止める。

「……フェイト？」

「……あ、す、すみませんっ」

なぜか彼女も固まって、絵を描く気配がなかったので声をかけると、今度はしっかりとノートと向き合い始めた。

そして。

「……………っ!？」

その紅の瞳が、こちらの全てを呑み込んだ。

いや、わかつている。そんなのは錯覚だ。錯覚、なのだが。

(……なんだ、この集中力は)

細胞単位で読み取っているかのような、そんな全力さが彼女の瞳には現れていて、とてもではないが身動き一つできなかった。

フェイトの手は、ノートの上で少しずつ、少しずつ、動いている。絵を描く所作には見えないが、どうなんだろうか。

順調なのかどうか判断できないが、しかしとにかく待つしかない。恭也はじつと、彼女に呑まれた感覚のまま、その時を待った。

「……………おい、フェイト!？」

そしてやがて、フェイトはがくりと崩れ落ちた。

「……………で、できました」

焦ったこちらへ、彼女はノートを突き出してきて。

思わず、恭也は目を見張った。

そこに描かれていたのは。

「……しゃ、写真か？」

「絵、です……」

「いや、いやいや、これは……」

黒鉛で描き出されたそれは、恭也が鏡で見る自分の顔とほとんど違わなかった。

シンプルに首から上だけ、背景もない。しかしその精度は、絵と言うよりもほとんど写真だ。

「すごいじゃないか……！　これなら、子どもたちもきつと喜んでくれる……！」

猫らしき新しい生物を描き出した人物が描いたものとは、とても思えない出来だ。

これはもはや特技の域に入る。わかりやすく凄まじいので、子ども受けはすこぶる良いだろう。

「……いえ」

しかし、フェイトは小さく首を振った。ぽたりと、その顎から汗が落ちる。

「やってみてわかりましたが、……これは常に出来るものではないと思います」

「そう、なのか？」

「……その、ええと」

恥ずかしそうに、彼女は言う。

「こ、こんなに描ける相手は、なかなかいないと言いますか、その……」

「……ああ、ある程度見慣れた人物でないと駄目という事か？」

「……え、えと、そうです」

それは確かに、わかる理由ではある。

「……そうか、ううん、残念ではあるな」

「消耗も、ちよつと激しいので……」

「子どもたちに心配をかけてしまうか……」

「はい……」

恭也の眼にも、フェイトはかなり疲れきって見える。あの精度を叩き出した代償だろう。

凄まじいスキルだというのに、活かすのは難しそうだった。

「だが、ここまでのものが描けたんだ。なにかこう、掴んだものはなかったか?」

「……掴んだ、もの」

「もう一度、何かイラストを描いてみてくれ。変化があるかもしれない」
センスの問題なのだと思えば、きっかけで変わる可能性はある。少なくともさっきの絵は、それを感じさせるに十分なものだった。

「わ、わかりましたっ」

「お題は、そうだな、犬でいこう」

「頑張ります!」

がばっと、フェイトは身体を起こしてノートに向かった。先ほどの瞳のような凄みはないが、真剣な眼差しだ。

「……犬、犬、……耳があつて、ここう」

子どもたちのため、誰かのため。

その真摯さは、相変わらず暖かい。

「……」

さつきまで、あんな話をしていたからか、思う。

かつて、ぽろりと言ってしまった事でもあるが、改めて思う。

この娘と結ばれる男は幸せだろう。

こんなにも暖かな彼女の想いを、愛を、一身に受けるといふのはきつと、この世における幸せの最上級の一つだろう。

どうやら鈍いらしいその相手の男はずいぶん人気があるようで、彼女としては気が気ではないだろうが、どうか叶えばいいと思う。

そして、どうか、どうか幸せになってほしい。相手の男の幸福はもう、フェイトと結ばれた時点で確定するのだから、あとはなによりもその彼女の幸せだ。

何処の誰だか知らないが、どうかまっすぐ、彼女と向き合っ欲しい。
い。

彼女を全身全霊で愛して、どうか笑顔でいさせてやって欲しい。

「……………ここが、……………こう」

この娘は、幸せになるべき娘なのだから。

「……………どうだ？」

「……………」

やがて、彼女の手が止まった。しかし声をかけても、フェイトはぴたりと固まって動かず、己のノートを見つめている。

その表情は、どこか愕然としていて。

「……………フェイト」

「きよ、恭也さん……………」

彼女と同じように、恭也もノートを覗き込んでみれば。

そこに居たのは。

「……………な、なんでしよう、この子」

「君が召喚したんじゃないのか、どこかの異界から」

「ち、違うんです……………こんなはずでは！」

「フェイト、尻尾が四本あるぞ」

「それは足です！」

フェイト・テストアロッサ・ハラウンという彼女は、こんな欠点すら魅力的だ。

しかしとは言え、やはり子どもたちにこの絵は見せられないなど思った。

第20・7話 ランキング一位

「なのは、今日の集合って六時でいいのよね？」

「うん、準備とかはもう終わってると思うから、お腹だけ減らしてきてね」

私立聖祥大学付属中学校、三年生の教室。

午前の授業を終え、今は昼休みの時間だ。いつものように机を並べて昼食を食べながら、なのははアリサに答えた。

「晶さんたちのお料理は楽しみだけど、いいのかな、私達なにもしなくて」

「とは言うても、たぶん私らが帰る時間には粗方準備は終わつとるやろうからなあ」

実際、すずかの言葉にはやてが答えた通りではある。手際の良い料理人たちが揃っているの、正直に言っ自分たちの出る幕などないのだ。

「恭也さんも料理する気満々だったけど……」

「え、うそ、そんな事言ってた？ もおおお……」

フエイトの言葉に、なのはは思わず額を手で抑えた。

「祝われる側だということをおわかってないのかなあ、おにいちゃん……」

「それはわかってはいるみたいだけど、イコール自分がゆっくりしてて良いって結論には至らないらしくて」

「おにいちゃんらしいけど……。縁側でゆっくりお茶飲んでてくれるのいいのに」

盆栽をいじったり茶を楽しんだりといったおおよそ若者とは思えない趣味を持つ兄だが、それらを楽しむのは基本的に、自分に出来る仕事がないときだけである。

なにかあればすぐに動く人なので、なかなか休ませるのが難しいのだ。

「そもそも三ヶ月しか通ってない学校の卒業を祝ってもらうのもな……とかも言ってたしなあ」

「なのは達と同じく短期プログラムなんだっけ？ 恭也って」

「そうそう。その内二ヶ月間は中で教官やってたけど」

「そ、それはどうなのかな……」

「さすがが苦笑するのももつともである。学んでいたのは正月だ。」

「とはいえ、それでも卒業は卒業。だからお祝いだ。」

恭也の訓練校卒業祝い。

本人に逆に気を使わせるから言わないけれど、大学を途中で退学させることになってしまった事を考えると、こちらとしてはなるべく盛大にやらせて欲しいのだ。

「買い出しはラインが担当するゆうてたから、一緒に行ってたりにしてな」

「……ラインフォースさんと二人で？」

「かもなあ。なのはちゃん、眉間のシワがえげつないで」

右手の親指と人差し指で眉間をぐいぐい伸ばしてみるが、なかなか力は抜けなかった。

「ラインフォースさんかあ……二人かあ……ああああああ、まだ行つてないかな？ 私早退していい？ 頭痛いから、あとお腹」

「頭痛腹痛持ちがそんなハキハキ喋るわけないでしょ」

「なんだかなのはちゃん、ラインフォースさんを随分警戒するよね」

「アリサの突っ込みに続いたすずかの言葉へ、なのはは盛大なため息を返した。」

「だつてさあ、そりやるよお、ランキング一位だもん……。ああ、もうっ、大丈夫かなあ、なにか起こつてないかなあ……」

「身体を左右にふらふらと、行儀悪いわよなのは。で、それはそれとして聞き捨てならない台詞が聞こえたんだけど」

「ランキングってなんや。まあ予想はつくけど」

「アリサとはやてただけでなく、フェイトとすずかも興味深げにじつとこちらを見てくる。」

別段隠していることでもないの、素直に答える事にする。

「なについて、おにいちゃんに寄つてくる女の危険度ランキング」

「ああやっぱり」

はやてが納得の声を上げた。他の面々も同じような反応である。

「……リインフォースが一位なんだ」

「意外？ フェイトちゃん」

「いや、納得だ。私も同じランクを付けるよ」

問い返したこちらに、フェイトは眼を伏せてそう答えた。

「なに、リインフォースさんってそんなに恭也と仲いいの？」

「仲いいっていうか……もちろんいいんだけどそれ以上の要因として、リインフォースさんはおにいちやんの好み。ドストレートに、おにいちやんの好み」

ため息を、やはりまたしても吐いてしまう。

「普段は物静かで優しく、でもなにかあれば苛烈に動く激情家でもあつて、絶対にぶれないような芯を持つてて、それでいて少し影があつて放っておけない、みたいな」

「な、なんかすごく具体的だね……」

「……まあね」

兄の初恋の相手が、そういうタイプの女性なのだ。すずかに頷きながら、なのはの脳裏には一人の黒髪の女性が浮かんでいた。

その次に恋した女性は少し毛色は違ったかもしれないが、やはり共通するところもあるように思う。

「確かにリインフォースはまさにそんな感じやな。それが本当に恭也さんのドストレートな好みなんやったら、それは一位にもなるなあ」

「リ、リインフォースさんは、恭也さんのこと、その、好きなの？」

「うーん……」

すずかの問いに、一番詳しいであろうはやては腕を組み、唸ってから答える。

「好きっちゅうか、信仰じみてる感はある。恩人やから。……だけどでも、それだけかって言うことやっぱり違うのかな。男の人として好きな気持ちも、あの中には入ってると思う」

それは、なのはの眼から見ても同じような印象だ。

「おにいちやんがどう思っているかはわからないけど、二人は相性が

いい。ああいう、絶対芯がぶれない一途さがあって、それでいて三歩下がって相手を支える女の人って、おにいちゃんとすごく相性がいい」

「まあ、わかる話やなあ。前から引つ張るタイプかてそれはそれで相性ええとも思うけど」

「私みたいなタイプね！」

「アリサちゃんは九位だよ」

「……………はっ？ はあ!？」

呆然とした後、アリサは掴みかかる勢いで腰を上げ、顔を真正面から寄せてきた。

「私が九位!? 九位!? な、わ、九位!？」

「九位」

「……………きゆう、い」

脱力、大きな音を立ててアリサは椅子の上に戻った。

「なのはちゃん、私は？」

「すずかちゃんは七位」

「私は私は？」

「はやてちゃんは八位」

「おお、八位……………てことは、フェイトちゃんが六位？」

「そ。フェイトちゃんは六位」

「……………今の私じゃ、五位以内には入っていないと思う。文句はないよ」
なのはの評価を聞いて、フェイトは実に冷静だった。今の、としっかり言うあたりが強かだが。

「四人の中でフェイトちゃんのランクが一番高い理由は、一番エロいから」

「ちよつとー!」

「あれ、この間のDVD鑑賞会では……………」

「……………なんでもないです」

すすつと、金髪の彼女は視線を逸らして撤退した。最近の彼女の弱点である。

理由に関してはまあ、冗談だが。

「しかし、私やアリサちゃんよりフェイトちゃんやすずかちゃんのが上つちゆうのは、さつき言うてた話と繋がる感じがあるな。後ろから静かに支える系のが、なのはちゃん的には危ない相手つちゆうことやな？ 私は静かではないからなあ」

「うん、そういう意味で、私はだから結構二人を警戒してる。それに、フェイトちゃんは御神流の弟子つてことで一緒にいる時間も長いし距離も近い。すずかちゃんは……ごめん、なんでもない」

「え、な、なに!?! 気になるんだけど……」

「ごめんごめん、ちよつとノーコメントで」

「ええ……? なんで……?」

彼女自身が、どうというわけではないのだ。

問題は、彼女のお姉さんにある。

すずかの姉である忍は、兄と恋人関係にあるようには思えないし、どこか不思議と、そこに発展するような気配も、今はもうしない。

しかし、それでもただの友人の距離感では明らかにない気もする。

どころか、……自分の勘が確かなら。

(……いや、やめよう)

かつて、”護衛をしていた”と月村家から朝帰りしてきた兄の身体から、微かに嗅いだ事のないような匂いがした事まで思い出して、なのはは小さく首を振る。

この事を考えると気分がどんどん滅入ってくるので、これについての思考はここで断った。

とにかく、そんな姉がいるので、すずかも油断をするべき女ではないはずというのがなのはの判断である。

「……なのは。じゃあフェイトの上は、フェイトの上は誰なのよ」

力のない声でアリサが問うてきた。かなり落ち込んでいるらしい。悪かったかなと思いつつも、嘘を吐いても彼女は怒る気がするので仕方ないのだろう。

「五位はシャマルさんだよ」

「シャマルさん……あー、なるほどね」

「可愛らしい大人の女性つて感じだよね」

アリサ、さすがが納得の領きを返す。

はつきりと大人でありながら、すずかの言葉通りシヤマルは実に可愛らしい女性だ。彼女に反感や嫌悪を抱くというのは、相当屈折した人間だけだろう。それくらい、あの癒やしが本領の湖の騎士は、ナチュラルに魅力的なのだ。

「そもそも、四人のランクが五位圏外なのって、中学生のお子様だからっていうのがすごく大きいんだよね。比べて五位以内の人達は皆、おにいちゃんと親しくて、その上で釣り合う歳の大人の女性、まともにやり合って現状、勝てるわけもない」

「そう言われると痛いなあ」

「……まだ子どもなのは、自覚してる」

はやては腹芸が得意な彼女らしく本音を読ませないあつけらかなとした物言い、フェイトは苦々しさを隠そうともしない暗い表情で呟いた。

「ランキングの続きを言うと、四位は晶ちゃん。その上、三位にレンちゃん」

「あー……納得」

「確かに……」

「お二人とも、恭也さんと付き合いですごく長いしね……」

「胃袋もがつつり掴んどる」

アリサ、すずか、フェイト、はやてがそれぞれ領いてそう返してきた。

「本来的には、距離感とか付き合いの長さとかを考えると、はつきり言って二人が一位、二位でもいいくらい。でも、……二人はもう、家族って感じだから」

恋愛対象ではなく、家族愛を向ける相手として恭也にはもう思われているような気がするのだ。

自分がこれを決して言いたくはないのだが、兄が二番目に恋をした女性などは、それが非常に強いのでランク外である。恭也と彼女がどうにかなるのならもうとつくになっているはずで、今なっていないというのは、もうこれからそうなる事もないと思えるのだ。

ただそれはあくまで自分の予想であり、実際どうなのかはわからない。恭也が彼女と話をしている姿を見るだけで、浅ましいことに胸はざわつく。

だってそうだ、自分は彼女を――。

(ああ……これも駄目だな)

この思考も、少なくとも人前でするべきものじゃない。気分がどこまで落ちて、どんな表情になるか、わかったものではない。

「二位は、予想着くよね?」

話を進めたこちらに、真っ先にはやてとフェイトが頷いた。

「ま、はつきりしとるな」

「シグナムだよね」

「そ。リインフォースさんが相性の良さでダントツなら、シグナムさんは似たもの同士って意味合いでダントツ」

「なんか、確かに似てるわよね、恭也とシグナムって。考え方とか口調とか、その下にある価値観、みたいなものが」

「剣士、っていうのも同じだね」

アリサとすずかの言った通り、だ。

まさに似たもの同士なのだ、二人は。価値観が同じであることをパートナーに求める一番の条件とするならば、彼らはお互いに非常に良い相手と言えるだろう。

「……実際、シグナムが恭也さんのことをどう思っているのかは、わからない」

言ったのは、フェイトだった。

「恩も感じてる。腕前を尊敬してもいるし、剣士としての共感もある。だけど、男性として恭也さんを見ているのかどうかだけは、いつもはつきりしない」

「シグナムはあれで、照れ屋などこあるからなあ。ああ、それも恭也さんと似とる?」

「……似てるね」

頷くフェイト。なのほも同感だった。兄は随分な照れ屋に思える。さらに、周囲を想って自分の本音を隠しがちなタイプでもある。その

くせ表面ではしれつとした顔で嘘を吐くから見破るのも難しくって、そんなところも兄とシグナムはよく似ている。

「似てると言えば、人のからかい方もそっくりよね。恭也がなのはをからかう姿とシグナムがフェイトをからかう姿って、すごく被るもの」

「あー……それね。同じ同じ、同じ匂いがする。おにいちゃんとシグナムさん、本当似てるんだよ」

「そうなんだよねえ……私も恭也さんにちよつとだけからかわれる事あるけど、言われる事がほとんどシグナムと同じだったりして。この間なんか、まさにほぼ一緒だったよ……」

「なになに、何について言われたの？」

アリサの問いに、少しだけ身を縮こませてフェイトは答えた。

「……その、絵を、見せたら」

「見せたの!? フェイトちゃんの絵を!? おにいちゃんに!? なんてそんな自爆行為を……! 悩みがあるなら言つてよ!」

「じ、自爆行為とまで言わなくてもいいじゃない! 別に悩んでたわけじゃないよ! 強いて言うなら親友の暴言に悩んでるよ!」

思わずこぼしてしまったこちらの本音に、フェイトは少し半泣きだ。しかし、とは言えあれを見せたなどと言われればこんな反応になるのも仕方ないとして欲しいところである。

「いやいやフェイト……だってあなたの絵は………絵っていうには無残すぎで」

「あ、味があるよね! 万人向けではないかもしれないけど!」

こちらよりもえげつない台詞をこぼすアリサの言をぶった切つてすずかがフォローに入る。

「……きよ、恭也さんだつて、ずっと見てれば可愛く見えてこないでもないって、愛嬌があるって言ってくれたよ」

「……フェイトちゃん、それはな」

「わかってるよおおお優しさだつてことくらいいいいいいい!」

そつと肩に手を置いたはやての言葉に、フェイトは慟哭で返した。

「本当によかったのか、騎士恭也。付き合ってもらって……」

「俺から頼んだんだ。いいに決まっている」

並んで歩きながら、まゆをハの字にしてこちらを見やる銀髪の美女に、恭也はそう返した。

「一人だけじつとしているのは、少しな」

「勤勉だ」

「皆がああも動いてなかったら、俺だってだらけているさ」

のんびりと縁側で茶でも飲んでるのが、一番性にはあっているのだ。ただ、家の皆が働いているのに自分だけというのは据わりが悪い。

だから、買い出しに行くというラインフォースに付き合わせてもらったのだ。

「騎士恭也の卒業祝いだからな、皆張り切っている」

「……三ヶ月しか通っていないなかったんだがなあ」

「何を言う。それでも立派に卒業じゃないか」

「そうかな」

「そうさ」

穏やかな春の日差しが、微笑む彼女の銀色を透かす。整い過ぎるほどに整った美貌と相まって、それは幻想的な光景だった。

「ああ、見えてきたな」

「八神家もここを使うのか？」

とは言え、その背景は海鳴の庶民的な風景である。駅前の大通り、昨今珍しくとすべきだろうか、廃れていない商店街だ。

その入口に差し掛かりながら問うた恭也に、ラインフォースは頷く。

「前はスーパーマーケットを使っていたんだが、桃子さんに教えて頂いてな。少し値は張るかもしれないが、明らかに質が良いからこちらに変えたんだ」

「そうか、まあ確かにここのはいいものが多い」

店主にこだわる人が多いので、適当な商品はあまり並ばない。それでも個人経営店としてやっていけているのだから、ニーズがあるという事なのだろう。

そんな話をしている内に八百屋に辿り着く。店はそのまでの規模ではないが、品揃え自体は豊富だ。

「……ええと、必要なのは」

じつと野菜を見つめ、時折手に取るリインフォースの顔は歴戦の主婦そのものだった。神話の女神よろしくな見た目の彼女がそうしている、有り体に言ってギャップがすさまじい。

「き、騎士恭也……そんなに見つめられると、その……」

「ああ、すまん。思わず」

君が綺麗だったから、なんて口の滑らかな男なら言えるのだろうか。恭也にはどうやっても不可能な芸当である。

「あとリインフォース、ここで騎士というのは」

「あ、ああつ、すまない、そうだった」

恭也を呼ぶ時、なぜか彼女は騎士と付ける。ちなみに少し前、理由を聞いてみたのだが「理想のベルカ騎士そのものだから」という面映い答えが返ってきた。

「で、では、……え、……と、………きよ、……恭也？」

「ああ」

「………恭也」

「うん」

家族以外の男性を名前で呼ぶ事に免疫がないのだろうか、彼女は頬を朱に染めて少し俯いた。元が健康的な範疇においてこれでもかというくらいに白いので、余計にわかってしまう。

「……そういう関係だったのか、知らなかったぜえ」

「親父さん」

パチンと、その禿頭を自分の手ではたきながら店の奥から出てきたのは、この店の主である中年の男性だった。恭也とは昔から馴染んでいる仲である。

「恭也くんは結局、リインちゃんと一緒になったのか。ううん、なるほどなあ。いやいや、お似合いの二人だよ。美男美女だ」

「どうやら何か、勘違いをされているらしい。」

「え、や、ち、違うんだ店主！ 私ときよ、恭也はそんな関係では！」「またまたあー！ いいっていいってそんなー！ いやあこの商店街じゃ昔っからな、恭也くんはどんな女と付き合うんだろうってよく話題になってたもんなんだが、リインちゃんなら納得だよ！」

「はっはっはと、八百屋の店主は豪快に笑う。」

「さっきの雰囲気を見る限り、付き合いたてだな？ 初々しいねえ！」

「親父さん、違うんです」

「恭也くんまでそんなー！ まったく照れ屋な二人だねえ。記念になんかやろう、ええつと、何がいいかな」

「店主！ 本当に違うのです！ きよ、恭也と私は！」

まあ確かに、自分なんかとそういう噂を立てられても迷惑だろう。リインフォースがそんな風に嫌がっているとは厚かましい事に思いはしないが、彼女に悪いというのは確かである。

「親父さん、本当に、照れとかごまかしではなくて」

「……え、ほんとに付き合ってるわけじゃないの？」

「はい」

「………なああああんだもおおおおおおおお！」

パチンパチンと、八百屋の店主はまたしてもその禿頭を叩いた。

「お似合いだと思うんだけどなあ！」

「俺とリインフォースですよ？ 釣り合うと本気で思いますか？」

「ばつちりじゃないか。……ええい、ちよつとこつちこつち、恭也くん！」

八百屋の店主はそういうと、店の隅へと小走りに駆けて恭也を手招いた。

「とりあえず、従って彼の下へ。」

「恭也？ 店主？」

不思議そうな顔のリインフォースをよそに、男二人、しゃがみ込んで息を潜めて話す。

「なあ恭也くん、リインちゃんを見てなんとも思わないのか？」

「なんとも、とは？」

「だから、ほら、見てみるあの……………あの尻！ あの胸！ あのくびれ！ とんでもねえぞ、ほんとー！」

「……………まあ、そうですね」

スタイルの良さで言うなら、恭也の周囲でも間違いなくダントツである。

「んで、もう、ほら、よくわからんくらい美人だろ？ 美人って表現でいいのかどうかすらわからんけども、もはや」

「……………そうですね。まったくその通りかと」

銀髪に紅い瞳、抜けるような白い肌と神秘的な要素がそろった上で、そのかんばせの精緻さは極限の域だ。

美しさと彼女と張れる女性性は、周囲で言えばシグナムと忍がいる。だが、凛々しさの強いシグナム、妖艶さの香る忍とはまた違い、リインフォースの美にはどこか神聖さがある。

情けないので気づかれなないように注意しているが、思わず息を呑んで見蕩れた事が何度あったか。

「男としてあの娘に惹かれないってのがあんのか？」

「もしそういう奴がいたとしたなら、そいつは心に決めた誰かがいるか、女性を好むタイプではないかのどちらかですね」

「だろうだろう。恭也くんはそのどっちかなのか？」

「いえ、そういうわけでは」

「じゃあもういっちゃいなよ！ 決めちゃいなよ！」

バシンバシンと背中を叩かれる。

「彼女は友人ですのよ」

「だからこれから恋人になりやいいんだよ」

「随分と俺たちが付き合う事を推しますね、親父さん」

「……………まあな。あの娘は本当にいい娘でよお、それに、この商店街は結構リインちゃんに助けられてんだ」

そこを見てみると八百屋の店主が店の一角へ指をさす。素直に視線を向けると、商店街の宣伝ポスターがあった。

「……リインフォース、ですか？」

「そうそう、よく描けてるだろ？ 若い衆にこういうのが得意なのがいてよ」

商店街の名と店舗名の数々が載せられたその中心では、三等身にデフォルメされた銀髪の女性が微笑んでいた。

「……あっ！ 恭也！ これはそのっ」

店主と恭也がポスターを見ていることに気がついたらしいリインフォースが、慌ててその前に立ちふさがって背中に隠す。

恥ずかしそうな彼女に見られながら、店主はまた声を潜めて恭也へ言う。

「リインちゃんがここに買い出しに来るようになって、すごい話題になったんだよ。あの見た目の娘が野菜やら肉やら魚やらの詰まった袋を両手に抱えて、なんなら長ネギの飛び出たバツクとか引つ提げてるんだぜ？ 話題にならねえわけねえだろ？」

それは確かに、すごい絵面だ。

「そのうち何がどう転んだのかはわかんねえけど、『買い物をしている彼女を見られたら、何か良い事が起こる』なんて、そんな噂も流れてなあ。まあ誰かが面白半分に言い出したんだろうが、なんか信憑性あるだろ？ ほんとかも、つてさ」

「……そうかもしれないね」

根拠も謂れもなにもなくてもなんとなく、そう思わされる神秘性が彼女の雰囲気には含まれている。

「それで客入りも増えてよお、この名物みたいになったんだ。だったらポスターのデザインにも採用しちまえて話になって、謙遜されまくったけど、拝み倒したらなんとか許可もくれて、こうしてここを賑わしてくれてる。……ありがたいことじゃねえか、このご時世、商店街が活気付くなんてそうある事じゃねえ」

「ええ、そうですね」

自分が長い眠りに入る前よりも、確かにこの商店街は活気付いている。人入りは多いし、店の仕入れも同様だ。

「だからあの娘には幸せになってほしいんだよ！ な、恭也くん！」

「もちろん俺もそう願っていますが」

「だったら君が幸せにしてやってくれよ！ 恭也くんなら安心だ！」

「……親父さん、あのですね」

八百屋の店主の前、恭也はため息を吐く。

「なにより、向こうの気持ちというものがあるでしょう」

「そりゃああるが……見てたけど、いい雰囲気だったぜ？ リインちゃん、君の事好きだろう？」

「生意気を言うようですが、この歳まで生きれば身の程というものを知ります。彼女にそういう意味で想われていると自惚れるほど、俺は脳天気じゃないですよ」

「うーん……そうかあ？」

「そうですよ」

「じゃあ、もし仮に！ もし仮にだ！」

ぴっ、と。店主は指を立てた。

「もし仮に、リインちゃんが君に好きだって言ってきたらどうだい？

応えるつもりはあるか？」

「……そんな宝くじが当たったらのような仮定をされても」

「いいからいいから！ どうなんだ!？」

「……リインフォースに、ですか」

問われ、己の思考に潜る。

リインフォース。

その女性を思う時、いつも、恭也の頭に浮かぶ表情がある。

”もうッ！ 嫌だああああああああああああああああああああ

ああああああああああああああああああああ!!”

穏やかな笑顔を、何度も見た。

安らかな彼女を、何度も見た。

だけど、どうしても。

”悲しいことばかりだッ！ 苦しいことばかりだッ！ 辛いことばかりだッ！ 痛いことばかりだッ！ この世は、この世はっ、ずつとそうだ!!”

そのあまりに悲痛な泣き顔が、頭から離れない。

どうしようもなく黒くって、どうしようもなく暗くって、どうしようもなく痛くって。

(……そうだ、俺は)

ああ、白状しよう。

どうしようもなく、愛おしいと思った。

あの闇を、あの影を、あの傷を、抱きしめたいと思った。愛おしい女性だと、確かにそう思ったんだ。

いや。

それは、今でも思っている。

これを恋と呼ぶ人も、きつというんだらうと思う。だけど、わからない。

恋と呼ぶ誰かはいるのでらうけど、自分がそう呼びたいと思っっているのか、自分はそう呼ぶべきなのか、それが恭也にはわからない。

恋というのは、いつもわからないものだった。

初恋も、その次も、その最中に明確に自覚をしたことは、ついぞなかった気がする。あとから振り返って、ああ、自分は恋をしていたんだと気付くような有り様だ。

だから、わからない。

ラインフォースへのこの気持ちだが、恋なのかどうかはわからない。

彼女を愛しいと想う気持ちはある。

あるけれど、遮二無二手を伸ばす熱情が自分の内にあるかといえは、はつきりとは領けなかった。

恋とはそういう、求める気持ちがあまざるものではないのだろうかと思つて、どうしても自信が持てない。

こんな中学生のような悩み方を二十を超えた男がするというのは実に情けない話だが、まともな情操教育を受けてきたような人生では決まらないから仕方ないじゃないか、なんて開き直るのは亡き父への責任転嫁だろうか。

とにかく、自分の気持ちの計り方が、少なくとも今の恭也にはよくわからないのだ。

(……それに、何より)

もしこれを恋だと断ずる事が出来たとしても、自分から彼女を求める事は出来ない。

釣り合いがとれるとも思わないし、届くとも思えないし、何より、彼女はあまりにも自分に恩を感じてくれている。

だから、どうしても思ってしまうのだ、それが彼女に応えなければならぬと思わせるのではないかと。

感じてくれている恩情を足場に関係を求めるなんて、そんな下衆なやり方で、彼女に触れていいわけがない。

だから、どうしたって自分から距離を詰めていけないのだ。

「……」

「なにをそんなに考えることがあるんだ……？ リインちゃんだぜ？

リインちゃんが好きだって言ってきた、だぜ？ そんなもん即答だろ……」

しかし、店主の質問は、リインフォースが彼女からこちらにもし好意を伝えてきたら、というものだ。

恩で強制された気持ちでなく、自然に好きだと言ってきたくれたなら。

ありえないことではあるが、もしそんな事が起こったら。

自分は。

そうだ、自分はきつと。

「俺は……」

「いつまでもサボってんじやないよあんたあ！ 恭也くん捕まえてなにしてんだい！」

問いの答えを口にしようとしたその瞬間、店内へ雷が落ちた。発生源は店の奥から現れた店主と同じ年代の女性。

言うまでもなく、店主の奥方である。

「か、かあちゃん！ 違うんだよほら、恭也くんにうちの野菜の素晴らしさを、な、な、恭也くんそうだろ！」

「ええ、ここの仕入れるものは甘みが深いのでその秘訣を伺っていました」

「……本当かい？ まあ恭也くんがそう言うならいいけど、まさか馬

鹿話で油売ってたわけじゃないだろうね？」

夫を睨む彼女の眼は、実に訝しげだ。

「ほら恭也くん、こっちの野菜はね……ほら、ここがこう……」
「なるほど……」

ここは男同士、チームワークを見せるとしたものでろう。打って変わって真面目な商品解説をスタートした店主に、恭也もさきつきからこういう話を聞いていましたよという顔で相槌を打ち始めた。

「ま、なんか阿呆な話をしていたんだろうけどね。困った亭主だよ」

苦笑しながら、奥方は軽くそう言った。店主と彼女のこんなやりとりはこの店ではありふれている。

常連と名乗っても一応は大丈夫だろうくらいにここへ通っているリインフォースは、それなりにそれを目にしてきたので今更驚かない。

「相変わらず、夫婦仲がいいようですね」

「はっは、ま、尻に敷くくらいでちょうどいいのさ、旦那なんてものはね」

奥方はそう言って、豪快に笑った。

「まあでも、リインちゃんはそういうタイプじゃないか。三步下がって支える系かな？ 恭也くんも幸せ者だ」

「……あの、それは」

「隠さなくていい隠さなくていい！ 付き合ってるんだろ、恭也くんと！ 入ってきたところをちよろつと見てただけど、いやあ良い雰囲気だったじゃないの！」

ぱしんぱしんと、彼女の手がリインフォースの背中を叩く。

「いい男捕まえたねえ！ 恭也くんは、ちよつと鈍いけど真面目で優しいし、かと思えば茶目っ気もあるし、ルックスはあの通りだ！ 詳しく知らないけど、仕事もいいところに決まってるんだろ？ 言うことないよー」

「きよ、恭也はおっしやるとおり、その、間違いなく世界一の男性です

が……」

「お、惚気けてくれるねえ」

「いえ、その、あの、違うのです！ 私達は……結ばれているわけでは、決して」

知らず俯いてしまつて、低いトーンの声が出た。

「……片想い？」

「……………私は」

何をしたつて返しきれないくらいの恩がある。だから何より彼は、自分にとつては恩人で。

そう考えるべき、なのだ。

そんな事、わかつている。

わかつて、いるのに。

店主と話すその横顔を、ちらりと見て。

(……………ああ)

あきれるくらい簡単に、リインフォースの胸は高鳴る。

胸が高鳴るといふ言葉が、修辭的な表現といふわけではない事を、彼を見る度リインフォースは思い知る。

人を護るあの生き様が、眩しくて。

弛まず己を鍛え続け、決めた道を歩き続けるその強さが、尊くて。

そして何より、泣き叫んで当たり散らしていた自分に、真正面から向かい合いあんなにも優しくしてくれた事が、致命的に心をわし掴んだ。

彼が起きて、友人として傍に居ることが出来るようになって、すぐにわかつてしまった。

女としての自分が、男性としての彼にどうしようもなく惹き付けられていた事なんて。

(……………でも)

愛を与える事とするなら、恋は求める事なのだ、なにかで読んだ。

であるなら、自分に許されているのは彼を愛する事だけのはずだ。

親愛でもつて、彼への恩に報いる事だけのはずだ。

だって、求めるなんて、何を言う。

もうこれ以上ないものを、自分は彼に貰ってしまった。生きていける命を、生きていける未来を、貰ってしまった。だったら何をこれ以上、彼から求めると言うのだ。

あまりにそれは、浅まし過ぎる。厚顔無恥もいいところだろう。そんな事、わかつているのに――。

「そんな暗い顔しないの！ 美人が台無しだろう、女の武器を曇らせるんじゃないよ！」

「……女の、武器？」

「そうさ。憂い顔だつて惹き付けられるだろうし、言うまでもなく泣いちまえば力押し出来る。だけどね、一番威力があるのはやっぱ笑顔さ」

言葉通り、力強い笑みを浮かべて奥方は言う。

「笑つたあんたに撃ち抜かれない男なんざいないよ！ ライバルが多くて不安になるのはわかるけどね、いいから頑張んな！」

「あ、え、そ、そういうわけでは……」

彼を想う女性がたくさん居るのは事実だろうけど、リインフォースの頭を巡っていたのはそれ以前の問題だ。

「胃袋を掴むつても重要だよ！ 本当に重要！ 今日がいいのが入ってるからねえ、これでガツンと決めな！」

しかし、氣遣つてくれる奥方の心配りはやはり、暖かかった。

「恭也……、やはり私も」

並んで帰路に着きながらリインフォースは隣の恭也にそう言ったが、彼は首を振る。

「大丈夫だ、このくらい重さの内には入らん」

軽く言う彼の手には大きな袋が左右合わせて四つ。八百屋に魚屋、精肉店と巡つた結果、買ったものから貰ったものまで、かなりの量になつてしまった。

それでも言葉通り、まったく苦にしていけない様子なのはさすがである。

「私も力には自信があるぞ」

「俺が持ちたいのさ。女性に重い荷物を持たせないくらいの格好は付けたい」

普段から甘い言葉を囁きまくるといふ性質では決してないが、時折さざらりとこういふ事を言うところが、きつと彼の男性として怖い部分だろう。

「か、格好など付けずとも、その、……恭也は、とても凛々しい」

「……そうか？ 気持ちは受け取っておこう」

彼は落とすように苦笑した。こちらの言葉を信じてはいないようだ。

相変わらず、自己評価が低い。その理由は、かつてリンカーコアを喰らい、書の中にすら閉じ込めたりインフォースにはよくわかっている。彼は、彼が好きではないのだ。ゆえに、なのだろう。

しかし、自分の顔立ちの端正ささえ理解していないというのはどういう事だろう。シグナムやシャマルを美人と言っているから、美醜の感覚がおかしいようにも思えない。こういう事は本人に聞くより、きつとなのはや桃子に聞いた方が早く正確だと思うので、後で尋ねてみよう。

知りたいのだ、彼の事を、もっと。

出来るなら、多くを。

叶うのなら、全てを。

それが智慧の蒐集を目的として生み出された自分だからこそその願いなのかどうかは、わからない。

「そう言えばリインフォースは今日は非番なのだったか？ 今はなに忙しい仕事を抱えているわけではない、という事か？」

「ああ。事件の後処理程度だ、穏やかなものだよ。騎士恭也はどうなるんだ？」

「それが、どういう風になるか、いまいちよくわからんらしいんだ。もうすぐ正式に就任なんだがな。とにかく基本は待機という事で、好きに鍛錬でもしてくれていいと言われている」

彼の役職は、特別武力制圧官という新設されたものであり、未だに不明な点が多い。

「どうなるものかな。まあ、なるようにしかならんだろうが」
なんでもないように、言うが。

(……恭也)

いかな強い彼とはいえ、……不安、なのだろう。

リインフォースの眼は、荷物を握ったこちらに近い彼の右手に惹き寄せられた。

季節は四月。時は夕暮れ。

暖かくはなつたけれど、まだ少し肌寒くもある。

「……………」

無言のまま、ゆっくり、ゆっくり。

そこへ、自分の手を伸ばす。

せめて、熱を伝えて。せめて、手を包んで。

平気そうだけどやっぱり荷物は重そうだから、一緒に持とうだなんて言い訳も用意して。

「ただ、勝手だが、やはりいざとなったらリインフォース達がいてくれると思うと、安心だな」

「あ、ああ！ それはもちろんだ！ 任せてくれ！」

言いながら、彼の手に自分のそれが触れるまで、あと少し。

あと、ほんの少し。

「恭也の任務は危険なロストログアを相手にする事もあるかもしれないが、それこそ私の本領だっ」

「ああ、そうか、そうだったな」

「そうさ、だって」

そう、だって。

「だって私は——……………」

だって、私は。

その言葉の続きを言おうとして。

リインフォースの左手は、恭也の右手の寸前、ピタリと止まった。

「…………リインフォース？」

「…………私は、……………ロストログアだからな」

笑顔を浮かべることが、出来てはいるんじゃないかと思うけれど。

頭と背筋と、きつと魂のどこかは、ひどく冷えていた。何を、勘違いしていたのだろう。

あまりに暖かく、人と人との間で生きさせてもらっていてまさか、自分は忘れていたのだろうか。

あまりにどうしようもなく、この人に惹かれてしまっていてまさか、自分は見ないふりをしていただけだろうか。

滑稽だ。

ひどく、滑稽だ。

「これでもロストロギア関連では、それなりに実績もあるんだ」

「ああ、話に聞く限りずいぶん活躍しているみたいじゃないか」

「大したものではないんだが、……うん、それなりにな」

どれだけ人に似てようと。

どれだけ人と近かろうと。

自分に出来るのは、許されるのは、人の傍で生きることだけ。

愛する主人に家族だと言ってもらっても、いる。自分だって、そう思わせてもらっても、いる。

だけど、それでも絶対に、——自分は人ではない。

人に似た姿で、人のごく近くで、まるで人のように過ごす自分は、しかし決して人ではない。

人間では、ない。

だから、人間である彼を求める資格なんて、本当に最初の最初から、まるきりなかったのだ。

「リインフォース先輩とお呼びするべきかな？」

「や、やめてくれ。階級で言うなら騎士恭也の方が上でもあることだし……」

「俺のはあくまで一佐相当というだけだよ、実際に一佐なわけじゃない。いきなり佐官にされても、困るなんてものじゃないしな」

「愛し合っても決して子どもは成せないし、彼と同じく老いていく事すらない。」

そんな女に……女によく似た何かに、愛されたって、何になる。

「騎士恭也が私達の直属の直属の上官であってくれればいいと、私は思うよ」

「そんな無茶ぶりは勘弁してくれ……」

尽くそう。全てを賭けたついでいい。それが主の意思でもあり、自分の願いでもある。

その背を支え、追い風を起こし、あらん限りの祝福を捧げよう。

それでいい、それだけが、自分出来る唯一なのだ。

求めたりなんて、自分はしない。

それでいい。

それでいいんだ。

……それで、いいんだ。

「騎士恭也なら、きつと沢山の人々を救う素晴らしい局員となるだろう。ああそうだ、そのうちに聖王教会にも紹介したいのだが、いいだろうか？」

「ああ、ベルカ式の総本山だったか。是非頼む」

ただ、一つだけ。

一つだけ、どうか言わせて欲しい事がある。

それは、この身の製作者達に。

言わせて欲しい事がある。

問わせて欲しい事がある。

「騎士恭也にも、ベルカの空気を気に入ってもらえたと嬉しい」

「武芸者が多いんだろう？ 気に入り過ぎて入り浸るかもしれんな」

「ああ、そうだな。そうになったら、素敵だ」

私はこんなもの、要りませんでした。

私はこんなもの、知りたくなかったのです。

「楽しみにしているよ、リインフォース」

なのに、どうして。

どうして。

どうして。

どうして！

「ああ、……騎士恭也」

恋をする機能なんて、なんにもならないこんなもの、自分に付けたのですか。

第20. 8話 ファイアツセ・クリステラ

いつか、置いて行かれる。

そんな風に、ずっとずっと怯えて生きている。

「完璧な娘だなんて、どこかで思っていたんだが……いやいやあれで存外、可愛らしい弱点があったものだな」

「本当、絵以外はかなり完璧にこなせるんだけどねえ。でも、一つくらいそういうところがあつたほうがいいものかな？」

「そうだな、そうかももしれない」

庭先で盆栽をいじりながらの兄は、穏やかな笑みをその口の端に乗せている。小さいそれは普通の人が見たら無表情の内に入るのかもしれないが、なのはにははつきりとわかる。

誰よりずっと、この人を見つめてきたのだから。

「しかし、そう考えてみるとずいぶんスペックの高い人間が多い気がするな。ハラオウン家にしたって、八神家にしたって。例えば……はやてに何か弱点はあつたろうか？」

「あー……あれで致命的な隙は見せないからなあ、はやてちゃん」

「強いて言うなら、抱え込み過ぎるところくらいだろうか。責任感が強すぎる」

「おにいちちゃんがそれを言う？」

「俺は結構、怠け癖がある」

縁側に座つたまま、なのははため息を吐いた。これを本気で言っているのだから、兄という人間は変わっている。

「怠け癖がある人間はね、自分の卒業祝い会で買い出しに走ったり料理を作ったりしないんだよ？」

「少し手伝っただけだ」

しれつと言う彼の手元は、丁寧に慎重に、しかし手際よく盆栽の枝葉を整えている。

育つていく姿を見る事と、それをなるべく綺麗に整えてやる事が好きだから。昔、どうして盆栽が好きなのかという事を聞いたときに返ってきた答えはそんなものだった。

「……おにいちゃん、今日は？」

「フェイトと鍛錬だ。もう少し経ったら出かける」

本人がどう思っているのかは知らないが、兄はやはり教育者に向いている性質なのだろう。

「そっか」

元々、なのはは御神流に関係する事は出来る限り応援して、決して邪魔はしないと決めていた。その上で、人に教える兄が生き生きとしているものだから、引き止めるなんて事が出来るわけがない。したくもない。

「フェイトちゃんはどうか？」

「筋がいい、覚えるのが早い」

「だけど、それでも。」

兄を引き止められないように、思ってしまうのも止められない。

彼がそのまま、行ってしまおうのではないかって。

どこか別のところに居場所を作って、自分の傍にはもう、帰ってこないのではないかって。

それが、耐え切れないくらいに嫌だって。

「だが、そろそろ俺も正式就任だ。だからこそ、その前になるべくじっくり教えたいところはクリアしておきたい」

「おにいちゃんもついに管理局員だ」

「そうだな。お前たちの後輩だ」

兄はずっと、本当にずっと、何より家族を優先して生きてくれた。御神流にしたって、父の代わりに家族を護るために修めているという面が大きいということくらい、高町家の誰もがわかっている。

その彼が、自分のやりたい事へ向かって進んでいる。高町家の面々がそれぞれ自分達の道を歩き始めたからこそ、彼はそうする事がようやく出来るようになったのだろう。

今までにお礼を言って、これからを祝福するべきだし、その気持ちがあることは決して嘘じゃない。

「だけど、それは家族の傍にずっと寄り添う生き方から変わり始めたという事でもある。」

そうしたら、どうなるかなんて、火を見るよりも明らかで。

「教導隊じゃないのは、残念だなあ」

「俺もそのつもりだったんだがな」

「誰が決めたんだろ、もー」

表面では軽く言いながら、しかし心はひどくざわついている。

だって、自分は知っているのだ。

(……おにいちゃんは、この家を出る)

兄が管理局入りを契機として、高町家から出て生活をしようと考えている事を。

皆伝した姉もいるし、翠屋は順調で、晶やレンも元気にやっている。そして自分だって、もう中学の三年生。仕事場では二尉の地位すらある。彼がもう大丈夫だと判断するのは、実に自然だ。

実際、皆、寂しがるだろうがやっていけるだろう——自分以外は。

「……おにいちゃん」

「なんだ？」

「……………あはは、ごめん、なんでもない」

「……まだ寝ぼけているのか？」

「ね、寝ぼけてないよ！ 今はもう寝起きも良くなったよ！」

せめて、職場でくらい会えたなら。それなら。そう思っていたのだけれど、思い切りあてが外れてしまった。

心配と心労だけは、どうかこの人に掛けたくない。今までさんざん、そうしてきてしまったから。

だからせめてと、この人の前では決してため息なんてこぼさないように気を張る事で精一杯。

「そう言われてもな、寝ぼけたまま階段を降りようとするお前を抱えて一階の洗面所まで歩いた事が、俺の人生、過去何度あったらうかな」

「だ、だから今はもう大丈夫です！」

「ほう」

「ほ、ほんとだよ？ あ、あ、疑ってる顔してる！」

「まさか。妹の言葉を信じない兄がいるものか」

「兄の言葉を疑わない妹を過去何度も騙してきた人が何か言ってる

……」

じとつとした眼で見つめても、兄は涼しい顔で取り合わない。

「憶えないな……ん、電話が鳴っている」

「あ、ほんとか。お母さん居間にいないかも」

「そういえば昔、『はい、高町です』ときちんと言えないと二十回に一回くらいの確率で受話器に吸い込まれるという話を信じた可愛らしい娘がいてな」

「もお！ もーお！ それを聞いた当時の私が何回『はい、高町です』を練習したと思ってるんですか！ 騙した人が悪いんですよ！」

「そう怒るな、怪獣」

「怪獣じゃないよ！ 電話取ってきますよ！」

昔好きだった魔法少女もののアニメに出てくる、有名な兄妹の掛け合いのような会話を交わしつつ、縁側から腰を浮かす。

「なのは！」

「な、なに？」

「ちゃんと言うんだぞ、『はい、高町です』。でないと……」

「吸い込まれないよ！」

言いながら、でも魔法が実在するのだから、もしかして……などとちらつとでも思ってしまう自分が情けない。幼心に擦り込まれた恐怖はなかなか根強いものだ。

足早に居間へ向かい、鳴り響く電話機の受話器を手に取る。

「はい、高町です」

昔練習した成果なのだろうか、滑らかにそう口は動いて。

『あ、なのは？ 私だよ、私』

「っ……」

その不意打ちに、固まった。

『あれ、こういう詐欺が日本で流行ってるんだっけ？ オレオレ詐欺、だったっけ』

「お久しぶりです、フィアッセさん。今は振り込め詐欺って呼ばれていますよ」

『そうなんだ。あ、ちゃんと私だっけわかってくれた、よかったあ』

彼女はそう言うが、この声を、まさか忘れるわけも間違えるわけもない。

美しく、透明で、誰からも愛されるこの声を。

『ごめんね、急に電話しちゃって。恭也はいるかな？ あ、携帯にかければよかったのか……』

「おにいちゃん、家の中に居る時はあんまり携帯電話を携帯しないで、こっちに掛けてきて下さった方がたぶん確実です」

『あー……そうだよ。さすがなのは、恭也のことよくわかってるね』
「妹ですから」

今更、別に。

そう、今更別に。

声が揺れたりなんて、しない。

だって自分は長いこと、この感情と付き合ってきたのだから。

『実はね、また日本に帰れそうなの。……ほんのちよっぴり、ほとんどとんぼ返りなんだけど』

「そうなんですか。ワールドツアーの途中、ですよね？」

『うん。中休みみたいのがね、少しだけもらえる事になったの』

電話先の女性、フィアッセ・クリステラは多忙だ。

世界トップクラスに有名な歌手でありながら、養成校の校長も務めている彼女はとにかく忙しい。

そんな中でも、三ヶ月と少し前、兄が起きたときには当然のように文字通りイギリスから飛んできたものだが、後から聞いた話ではかなり無茶をやったらしい。

『だから、恭也に卒業祝いを渡そうと思って』

「なるほど。おにいちゃん、喜ぶと思います。庭先にいるので呼んできますね」

『うん、ありがとう。お願いね』

受話器を耳から離して、……もしこのまま保留のボタンを押さずに受け口へ置いたならなんて、馬鹿な考えが奔ったのは一瞬だけ。

保留の文字が書かれた丸いボタンを押しこみ、受話器を戻す。

「……」

頭を一度振ってから、歩き出した。廊下を行って、縁側へ。

兄はなにやら、難しい顔で盆栽を見つめていた。こだわりが色々あるらしい。

「おにいちゃん、電話だよ」

「俺に？ 誰からだ？」

「フィアッセさん」

その名を告げると、兄は盆栽から視線を外してこちらを見た。

「フィアッセ？ ワールドツアーで忙しいだろうに、どうしたんだ」

手に持ったはさみを置いて、靴を脱ぎ、縁側へ上がってくる。

「中休みをもらえる事になったんだって。それで、おにいちゃんに卒業祝いを渡しにこっちに来るって」

「……相変わらずフットワークの軽いことだ」

そんな言葉を零す兄の顔には、しかし確かに微笑みが浮かんでいる。

「……どうした？」

廊下を歩く彼の後をついていくと、振り返って問われた。

「おにいちゃんが受話器に吸い込まれないか心配で」

「そうなたら管理局の専門家を呼んで助けてくれ」

声だけは大真面目にそう返した兄は居間に入って、受話器を手にとり耳に当てた。

「はい、高町です。……そう言われてもな、これを言わないと受話器に吸い込まれるんだ。……ああ、そうだ。よく憶えていたな。それで？」

日本に来るとか、そのなのはに聞いたが——」

話し始めた兄の姿を。その表情を、目に焼き付けて。

なのはは居間を後にした。

階段を登り二階に上がって、自室へと入る。

ベッドの上にごろりと寝転んで、思う。

「……フィアッセ、さん」

その女性の事を、思う。

好きか嫌いかで言えば好きだ。

好きか大好きかで言っても、迷いなく間違いなく、大好きだと言え

る。

小さかった自分をたくさん暖かさと優しさと安心と、その他言葉に出来ない色々でくるんでくれた、綺麗で白くて純粹な、大好きなお姉さんだ。

大好きでは、あるんだ。嘘じゃない。

「……………ファイアツセ・クリステラ」

嘘じゃ、ないけれど。

同時に、その人でもあるのは確かなのだ。

(私は……………)

幼い自分に人を憎む事を教えてくれたのは、その人であったのも、確かなのだ。

父の死に、その人が関わっていたと聞いたとき、自分の内で、自分の中の一部分が言った。

もし、彼女がいなければ。

大好きな母が、時折すごく寂しい瞳で父の写真を見る事もなかったのだろうか。

大好きな兄が、あれだけ無理をして、身体を壊して夢を諦める事もなかったのだろうか。

その兄と大好きな姉が、歩む道の先、目標を失う事もなかったのだろうか。

そして自分も、両親揃った友人を前にした時の、あの不思議な気持ちを味わう事はなかったのだろうか。

そんな風に、なのはの内で声がした。

それなりに成長の早い子どもではあったからか、だけど理性ではきちんと理解はしていた。彼女には非なんてなくて、不幸の渦に巻き込まれた被害者であるという事くらい。

理解は、していたのだ。

だけど、ねじ伏せられない心の一部分があったのは、否定出来ない現実だった。

しかしそれでも、それで彼女の事を決定的に憎む事はなかった。

実際、両親が揃っていないという事実には足を取られる事はあつて

も、父がいない寂しさに襲われた事は、高町なのはの人生にはあまりない。そこにはいつも兄がいてくれて、誰より確かに護ってくれたからだ。

父に会えたならという気持ちはもちろんあるけれど、耐え切れない辛さを味わった事はない。それこそ、寂しい時に彼女がいてくれた事だつてある。

だから、その感情は鍵を掛けた箱の中へしまっておく事が出来た。自分自身でも、見ないように出来た。

出来た、のに。

” 恭也、ほら、一緒に行こう ”

” ああ ”

手を繋いで、二人が歩く。隣の彼女を見る兄の顔には、微笑みがあつて。

周りの皆が、それに気付いていたのかどうかは、わからない。

だけど、自分にはわかった。身を斬るような痛みと、呼吸の苦しくなるような胸の引き攣りと、視界が暗くなるような重みを伴って、すぐにわかった。

兄が、彼女に恋をしていた事なんて。

あるいはきつと、兄自身に自覚はなかったのだろうかと思う。その兄の気持ちに、彼女が気付いていたのかどうか、それはわからない。けどとにかく、彼女が兄を好いていた事と同じく、兄が彼女を好いていた事は間違いなく事実で。

バキン、と。

錠の壊れる音がした。

鍵は、開けてない。だけど錠前そのものが、中からの圧力で弾け飛んでしまった。

そして、箱の中から這い出て来たのは。

「……」

なのはは静かにまぶたを閉じて、天井を映していた瞳を闇で包む。これと同じ色のものがかつて、自分の内側から這い出てきたのだ。全部、奪われると思った。自分の周りから大切な男性を根こそぎ、

彼女が奪っていくと思った。

父も、父代わりの兄も、兄としての兄も、そして、最愛の男性としての兄だって、奪っていくと恐れた。

「……」

ベッドの上から降り、立ち上がった窓際に寄る。

「……あれは、結局夢だったのかな」

独りごちながら見下ろす光景は、穏やかな庭。緑の映える、高町家の庭。

もう何年前になるだろう、そこでなのはがそれを見たのは、今とは正反対の真夜中だった。

その日、なんとなく庭先からなにかを感じた気がして、眠っていた自分は眼を覚まして。時間がどれくらいだったかも、正確に確認はしなかった。ただ、真夜中だったのはきつと確実だ。

感覚に手を引かれ、今と同じようにベッドから降り窓に寄って、カーテンをほんの少しだけ開けて眼下を見た。月明かりの差し込む夜で、黄金の光が宵闇の中の光景をなのはの瞳に映させた。

”……あ、……え、………あ”

固まって、血の気が引いて。

”………ひっ”

怯えた声が自分の口から漏れ出た時には、尻もちを付いていた。胸上の高さを持つ窓はもちろん視界から外れて、その光景は目の前からなくなったけれど、しかし、脳裏にはこびり付いたままだった。

フィアツセ・クリステラ。

美しく、長く柔らかな金髪を少しだけ風にそよがせて、どこか悲しげに顔を伏せた彼女が、庭に一人、立っていて。

”あ、あ、………あ”

その背には、六つの黒翼がはためいていた。

”あ、……あく、ま?”

零れた自分の言葉に、ひどく背が凍ったのをよく憶えている。
悪魔。

そう、悪魔。

綺麗で白くて純粹な、誰より美しく見えた天使のようなあの人が、高町なのはには確かに、悪魔に見えた。

ガタガタと震える身体は、まともに動かなくて。まさかもう一度、窓から下の光景を確かめる度胸なんてなくて。

どれくらいの間かもわからないけれど、なのはは自室の床の上、一人で震え続け。

しばらくして、ようやくまともに動いたのは首から上。窓の方へ向いていたくなくて、ベッド側へと視線を移し、なのはの眼に、うさぎのぬいぐるみが映った。

それは、何年か前の誕生日、兄にもらったお気に入りのもので。

その瞬間、なのはの身体は金縛りから逃れた。

ぬいぐるみに飛びついてぎゅっと抱え、幻でもいい、兄の気配を胸に抱きしめ、それに護られていると思える内に、彼の所へ行こうと思った。

震える時に、誰よりも頭に浮かぶのはいつだってその人だったから。

転がるようにしてぬいぐるみを抱いたまま自室を出て、廊下を走って彼の部屋の前へ。いつもだったら立ち止まって彼が気配で気付いてくれるのを待つが、その日はかりは無理だった。

鍵のかかっていないドアを飛びつくように開けて、その部屋へ飛び入る。

”……どうした?”

兄は、もう起きていた。布団の中、上半身を起こしてこちらを見ている。

多分、自分がドタドタと廊下を走った時にはすでに、眼を覚ましていたのだろう。兄はそういう人だった。

”怖い夢でも、見てしまったか?”

”う、う、……っ”

迷いなく、兄の胸へ飛び込むと、彼の方からも抱きしめてくれた。世界で一番安心の出来るぬくもりと匂いが、身体と心をくるんでくれ

る。

” ……おにい、ちゃんっ、おにいちゃんっ ”

” ああ ”

未だ残る恐怖に震えながら彼を呼べば、硬いけれど最高に優しい手のひらがこちらの頭をゆつくり撫でて、もう一方の手が柔らかく背中を叩く。

” なのは、俺はここにいます ”

” う、うん ……っ、うんっ ”

自分の身体に心に、少しずつ落ち着きが戻ってくるのがわかった。

” 俺が、ここにいます。だから、お前は大丈夫だ ”

” うん ……!”

そもそも、ここにこうして来た時点で、決定的なところでは既にもう大丈夫だなんて思えてもいた。

それくらい、兄の傍は安心出来た。

彼の匂いで胸を満たすように、深く深く呼吸をして。

やがて、震えは止まった。

兄は何も聞かないでくれて、ただただ頭を撫でて、背中を心臓の鼓動と同じリズムで叩いてくれる。

” お、おにいちゃん …… ”

” ああ、なんだ? ”

” あ、あ、あのね ……あ、あくまが、あくまが、に、にわに ”

そこまで言っつて、気付く。

自分の恐れた悪魔は、彼の恋する女性だ。

彼にそんな事を言っつて、果たしてそれはいいのだろうか。

そもそも彼女が、本当に悪魔?

彼女がどんな人かなんて、自分はよくよく知っている。 ……本当にあれは、彼女だったのだろうか。

そう思うけれど、しかし彼女以外の誰にも見えなかったのも事実で。

何より、途方もなく恐ろしかったのは、とにかく確かだ。

どうするべきなのだろうか、どう言うべきなのだろうか。グチャグ

チヤな頭は上手く働かず、口もいつもどおりのようには動かない。

”あ、あくまが、で、でも、その、そのあくまは”

”なのは”

要領を得ない事を繰り返すだけの自分が嫌になって、泣けてきそうになったとき、兄の両手が自分の頬を挟んだ。

”なのは、お前がどんな悪魔を見たのかはわからん。わからんがな”

至近距離、見つめられる。電気の消えた部屋の中でも、兄の顔ははつきり見えた。

”その悪魔から、俺がお前を護らないと思うか？ 俺がお前を護れないと思うか？”

”……そ、れは”

”お前の兄は、お前を護る時に限れば、何処の誰にも決して負けん。お前が後ろにいるのなら、俺の前に立った相手に、俺が斬れない奴はいない”

でもその人はあなたが好きな人で、とても優しくて、自分も大好きで、でもどうしようもないくらいに憎くもあって……なんて、グチャグチャに暴れ回る思考が、一気に落ち着いた。

そっだ。

何を、恐れる事がある？

この人の胸の中で、腕の中で、何を恐れる事がある？

”……おにいちゃん、は”

”……”

”わたしを、まもって、くれる”

”ああ”

お前が生まれた時からずっと、俺はそうして生きると決めている。

そう、彼は優しく自分に言っつて微笑んだ。

胸の高鳴りが、怯えていた心を揺らし、ほぐして正常なものに戻していくのがわかった。

ぎゅっと彼に抱かれ、自分からもしがみついて、しばらくの時間が経ち。

”なのは、今日はここで一緒に寝るか?”

”……っうん”

コクンと頷いた自分を抱いたまま、兄は布団を被って横になる。布団の暖かさと彼のぬくもりに包まれて、ひどく穏やかな世界が出来上がった。

”そいつも、一緒に来たんだな”

なのはが腕の中に抱いたぬいぐるみを見て、兄がそう言った。

”う、うん……こわくて、でも、この子がいれば大丈夫だってちよつと思えて、それで”

”そうか”

兄は、満足気な顔をして、ぬいぐるみの頭を二、三回親しげに叩く。

”おにいちゃん?”

”ん、なに、そいつには、お前の傍でお前を護るように言っておいたんだ。ちゃんと役目を果たしたようだな”

”そ、そうだったの?”

”ああ”

微笑む兄が、本当の事を言っているのかどうかはわからない。すぐに嘘を吐くし、それを悟らせない鉄面皮まである。

だけど、その言葉はやっぱり嬉しくて、なのははぬいぐるみを抱く力を強めた。

護ってくれてありがとう、そう思いながら。

しばらくそうしてぬいぐるみを抱きながら、兄に抱かれ続けて。

穏やかな眠気が、なのはを包み始め。

”……あれは、なんだったの、かな”

”周囲の気配は探っておいたが、少なくともお前が俺のところに来た時点では特に、おかしいものは見つからなかったな”

”……さすが、おにい、ちゃん”

兄がそういうなら、そうなのだろう。残る可能性としては、自分が自室で震えている間にいなくなったか、……もしくは。

”やっぱり、……へんな、へんな夢、だったのかな”

”寝ぼすけなお前には、あるかもしれんな”

”ねぼすけじゃ、ないよお……”

目をつむったまま、彼のぬくもりと匂いに甘えたまま。その日はそのまま、眠りについた。

「……………あれは、でも、やっぱりそうだよね」

意識を今に引き戻しながら、なのはは思い出す。

あの後、自分を襲った猛烈な自己嫌悪を思い出す。

だって、あれはきつと夢で。

つまり、あれはきつと自分が自分に見せた夢で。

「私が、ファイアツセさんを……そういう風に、見ていたから」

彼女に対して普段からきつとああいふ風に思っていたから、だから自分は自分にあんなものを見せたのだろう。

いや。

『見ていた』も、『思っていた』も、たぶん正確じゃない。

「…………」

今だって自分は、どこかでそんな風に思っているはずだ。

彼女の事が、大好きなのに。

それは、絶対に嘘じゃないのに。

だから当然のように、そんな自分の一部分は最高に嫌だった。なんでもっと綺麗であれないのかと、ずつと思っている。

「…………おにいちゃんは、会いに行くんだろうな」

そう思うのにやっぱり、彼が彼女と会う事を考えると胸がざわつく。

たとえば、もし彼が彼女とイギリスに行ってしまったらどうしよう。そのまま、そこを居場所としてしまったらどうしよう。

そんな風に怯える事を止められない。

自分の傍から彼がいなくなるかもしれない事を思うと、どうしても視界は暗くなって、世界から色彩は抜け落ちていく。

あの人の傍で生きられないなら、そんな人生、少なくとものはにとっては意味がない。生きている意味が、何もない。

だけど、かつての馬鹿な自分のような、生を手放すなんて選択肢、採

るつもりはもう絶対になく。

だから、もし兄が自分以外の誰かと結ばれ、その人と生きていく事を決めた時、自分にはその先何十年と続くだろう空虚な日々が約束される。

暗くて寒くて色褪せて、何も心を動かさない、そんな世界がなののを待つ。

その癖、自分の内側で燃え盛る炎はずっと消えないだろう事も簡単に予想が出来るし、馬鹿らしいくらいにはつきりと言い切れる。

おおげさな、なんて、しかし思えない。

自分は、どうしてもそういう人間で。自分の愛は、どうしてもそういう類のもので。

誰に言われなくたって、自覚はある。

これが病的に依存じみた、異常なものだという事くらい。

もとより相手が相手でもともな恋でも愛でもないのに、それに加えて想いの向け方までおかしい。

まっとうな人間から見ても、狂っているかいないかといえば、多分、きつと前者なのだろう。

もう手加減も、火加減もしない。全力全開で、自分の愛を伝え続ける。かつて、そう誓った。

その想いは、今も変わっていない。

だけどそれは、心が軋まない事を、決して意味しない。燃え盛り続ける炎は強すぎるその熱でもって、なのはの内側を常に炙り続け、ひりつく痛みを与え続けているのだ。

高町なのははもう、そういう風に出来ているし、そういう風にしか生きられない。

「……だけ、ど」

そう、だけど。

だけどせめて、自分のあまりに身勝手な欲望で、最愛の人を縛り付ける事だけはしたくなかった。

誰よりあの人には、笑顔でいて欲しいから。

行って欲しくないと思いながら、立ち止まって欲しくない願う。暴れ回る炎と、相反する想い。そんなものを抱えて、せめて平気な顔で、何でもない顔で、なのは日常を生きている。

「恭也！　ここだよー！」

「……また無防備な」

指定された喫茶店に入ると、窓際の席にその姿はあった。金髪を春風に揺らす彼女の、伊達眼鏡ごしの瞳はまっすぐこちらを見ている。

店員に一言告げてから、恭也は彼女、ファイアッセ・クリステラの対面に座った。

「いくら変装していても、そう堂々と声をあげたら場合によっては簡単にバレるぞ」

「えー、歌声ならともかく、普段の声なんてそんなに覚えられてないよ。私はあくまで歌手だからね」

「わからんでもないが、そこには世界的なという枕言葉も付くだろう。ああ、コーヒーをお願いします。ブラックで」

注文を取りに来てくれた店員に答えつつ、ファイアッセにため息をつく。

「もう少し、警戒心を持ってくれ」

「恭也は心配症だ」

「職業柄な」

「そっか、そうだよね」

護衛業というのは、とびきり心配症くらいでちょうどいいものだ。

「あれ、だけでもう護衛はやめるんだよね？」

「少なくとも、フリーのそれではなくなるな。組織に入るから」

「……CSSとしては、いざというとき一番頼れる人にもう頼めなくなるのは残念だけど……でも、うん、恭也ならきつと、そっちでもたくさんの人を護るんだよね」

「頑張ってみようとは思う」

仕事の内容は未だに不透明で、微妙に不安もあるのだが、やれるだけの事はやろうという気概くらいは持っていたい。

「だが、なにかあれば遠慮なくすぐに呼べ。跳んでいくし、飛んでいく」

「え、いいの？ 副業になっちゃおうよ？ 恭也のなる管理局員さんって公務員みたいなものなんでしょ……？ 駄目なんじゃ……」

「あー……どうだったかな。まあ、お咎めを食らうならその時はその時だ」

無償で受ければ副業うんぬんは特に問題はないのだろうが、それはそれで、きちんとした営利団体であるCSS側としてはボランティアで護衛をしてもらおうわけにはいかない事情が色々あるのだ。

「真面目なくせに、相変わらず変なところでいい加減なんだから」
「姉に似たんだ」

「も、もう！ 人のせいにはしないの！」
怒ったような口調でも、なかなか迫力が出ないのは相変わらずのようだった。

ステージの上では天使のような彼女だが、そこを降りれば割と庶民的で親しみやすいという事実は、いったいどれくらいの間が知っているのだろうか。

「あ、そうさそうさ。それはそれとして今日の本題！ はい、恭也」
「ああ、ありがとう。……本当にすまないな。わざわざ」

「私が直接会いたかったんだよ。会って手渡したかったの」

紙袋を恭也へ差し出しながらのフィアッセは、そう言って穏やかに笑う。

「開けても？」

「うん、もちろん」

「じゃあ……」

断ってから紙袋の中、さらに包んでいたもう一枚の梱包用紙を出来る限り丁寧に取り去ると、出てきたのは品のいい黒のテイラージャケットだった。カジュアルな私服としても、多少フォーマルな場面の

上着としても使えそうなデザインだ。

選んだ人間のセンスの良さと、自分の趣味への理解の深さがよくわかる一品だった。

「うん。ありがとう、大事に着させてもらおう。ストレートに俺の趣味だ」

「ふふ、伊達に長くお姉さんやってないよ」

こちらが一目見て気に入るということくらいわかっていたのだろうが、それでも彼女は嬉しそうに笑ってくれた。

「恭也が女の子のデートする時になって、着ていく服に困ったら大変だと思ってね」

「ありがたい心配りだ」

いたずらなそんなセリフには、苦笑を返すしかない。

昔、確かに女性として好きだった人に贈られるものとしては、言われる言葉としては客観的に見れば痛いのもかもしれないが、主観的には心が波立つことはない。

それは、この恋が穏やかに終わったからだろうか。

「だが残念ながら、そんな機会は相変わらずありそうにない。そつちと違ってモテないんだ」

「……うーん、恭也のそれってもう治らないのかなあ」

「……異性に人気がないことを病気のように言われると、さすがに俺も多少傷つくぞ、姉よ」

「違うよ、そうじゃなくて……ねえ恭也、本当に誰か相手、出来そうにないの？」

「逆に聞くが、出来そうに見えるか？」

恭也の問いに、彼女はこくりとはつきり頷いた。

「私にはずうつと、そう見えているよ」

「案外と、ふしあなだ」

人間関係の機微には敏いはずの姉だが、ずいぶんと的はずれな見解である。

「恭也さえその気になればすぐに……いや、でも「フィアッセ？」」

「そうならない方が、いいのかな……だって」

真剣な顔、何かを考えこんでいるらしい。察するのは無理そうだなと思いつつ眺めていると、コーヒーが届けられた。

いつもどおり、砂糖もミルクも入れずに味わう事にする。

「……そう言えば紅茶じゃないんだね、恭也」

「ああ。家の味に慣れてしまっていると、あまり外で飲む気になれないんだ」

「恭也も桃子も、淹れるの上手いもんね。それじゃあそうなるか」

うんうんと納得したように頷くフィアツセに、しかし恭也は首を振る。

「いや、最近はなのはがよく淹れてくれる。俺が寝ている五年の内にずいぶん上達したらしくてな、我が妹ながらあれはなかなかの腕だ」
「あ、そうなんだ。へえ、なのはが……」

自分が淹れる紅茶を嬉しそうに飲んでくれる姿が印象的だったものだが、長い眠りから目覚めてみれば、淹れる側としてずいぶん一端になっていて驚いたものだ。

「ねえ恭也、前に会った時も少しこんな話はしたけど、驚いたでしょ。なのは、すつごく……」

「ああ、随分と大きくなって」

「うん、大きくなって、それですつごく、——綺麗になった」

フィアツセは、自分の手元のカップの中を覗き込みながら、そう言った。

「……綺麗に？」

「うん、綺麗に」

「……それは、……どうなんだろうな」

首を捻る。

照れくさいからもちろん言うことはないが、あの妹のことは抜群にと言っているくらいに器量良しだと思っている。

そう思っている、いるが。

「あいつは、その、いわゆる……まあ、なんだ。綺麗というよりは、だから、あー、……可愛らしいとか、そういう方向性に見えるんだが」

「そんなに照れながら言わなくても」

「……柄じゃないんだ」

少しいじけたような口調になってしまったのも恥ずかしくて、コーヒーを飲んでごまかす。

「確かになのは桃子にそっくりで可愛いらしいけど、でも、やっぱりすごく綺麗になったよ」

「……そうか?」

なのはの顔を思い出す。それは愛らしい笑みの咲いたもので。

(……綺麗、か)

その形容に首を振ることはないが、捻るくらいはしてしまおう。どうしても、そういう風にはなかなか認識されない。

「わからない?」

「すまん、どうもピンとこない」

「そっか」

少しだけまゆをハの字にして、ファイアツセは頷いた。

「高町家で一番綺麗になったと言うと、俺としてはレンなのではないかと思うんだが」

「あーっ、レンね! すごいでしょ! 文句なしの美人さんになったよねえ。スタイルもいいし」

「俺はまだ疑っているからな、あれは別人なのではないかと」

「怒られるよ?」

「言う度、突っ込みを入れられている」

その鋭さから確かに、間違いなく彼女だとは思う。

「晶もずいぶんと女性らしくなったし、まあ、……馬鹿弟子も、美沙斗さんの娘という感じだ」

「皆、大人になったでしょう?」

「ああ、まったくな」

自分がこの家を、この家族たちを支えてやらなければならない。

ずっと持っていたそんなふうな気概が自然と消え去っていったくらいには、彼女たちはもう立派に成長し、自分の道を歩いていた。

「……もう、大丈夫なんだろうと思う」

「恭也？」

「五年前ですら思っていた事なんだが……高町家は、大丈夫なんだろう。俺がいなくとも、もう大丈夫だ」

「……うん、そうかもね」

寂しさがなくなっていて、決して言えない。家族を護る事は、恭也の人生の中であまりに大きなウェイトを占め続けてきたのだから。

けどやはり、大切な人達がしつかりと自分の道を自分の足で歩き始める姿は、何よりの宝物に思えた。

「……恭也は、これからどうするの？」

「予想は付いているんだろう？」

「まあね、だから確認」

この姉は、自分の事や家族の事については、実に鋭い。やはり言うべきだろうか、恭也の問いにファイアツセは頷いてきた。

「家を出る。あっちで一人、部屋を借りて暮らすつもりだ」

「そっか……」

いい機会、なんだろうと思う。

結局自分は、家族にきつと依存して生きてきた。今までは彼らが自分の力を必要とするくらいには不安定であったから、それはそれでよかったのだろうが、つまり今となっては少々、断つべきものと思えてしまう。

「うん、そっか……でも、ちよつと心配」

「成人している男の一人暮らしだ。何も心配する事なんてなかろう」

「恭也が一人であれが出来ないこれが出来ないって困るようには見えないよ。見えないけどさ、……うーん、でも、それでも一人は寂しいでしょ？」

「あのな……」

あんまりなその言葉に思わず頭を抑える。

「俺を何歳だと思ってるんだ」

「何歳でも、だよ。いくつになつたって、寂しいって感情は変わらないでしょ？ 特に恭也はすつごく寂しがりやなんだから」

「……」

そう面と向かつてはつきりと言われると、中々に情けないものがある。あるがしかし、たしかにそれは事実と言えば事実だろう。

人を斬り、人を護つて生きる自分は、どうしようもなく人が恋しい。それを、ファイアツセはわかっているのだ。

「……寂しいからといって、死ぬわけでもない」

「だからって、ちゃんと生きていけるわけでもないよ」

「……そうかもしれないがな」

なかなか、耳に痛い言葉だ。苦笑を零したこちらに、そして彼女は言った。

「だからさ、提案があるんだ」

「提案？」

「うん、提案。恭也は、自分はこの家を出るべきだと考えてる。だけど、一人で住むのは本当は寂しい。だったら、さ——」

「お帰り、おにいちゃん」

「ああ、ただいま。……他の皆の気配がないが」

「お母さんはいつもどおりお店。お姉ちゃんは買い物で、レンちゃんとお晶ちゃんは課題提出が近いからって図書館に行っているよ。……ていうか、そっちこそファイアツセさんは？」

夕暮れ時に帰ってきた兄を玄関先で出迎えつつ、なのはは彼が一人である事に問いを向けた。てつきり、当たり前のように二人で来ると思っていたのだが、どういう事だろう。

「驚け、なのは。ファイアツセはもう帰った」

「……え？」

「もらった中休みとやらは、一と半日だけだったらしい」

「そ、え、……イギリス、から来たんだよね？ ツアー中だけど、直前のライブは確かロンドン……」

「そうだ」

靴を脱ぎ、玄関へ上がった彼とともにリビングへ向かいつつ、なの

はは驚きのまま、言う。

「イギリスからここまで飛行機で12時間かかるのに……」

「それにもろもろの時間を加えれば、行って帰ってで丸一日以上かかるな。だから、こっちに居られるのはもとから数時間だったらしい」

「……おにいちゃんに、それを手渡すためだけに？」

「まったくな。ああそうだ、これは部屋にしまってこよう」

「え、あ、待って待って」

リビングに着くなり、踵を返して出て行こうとする兄を引き止める。

「なんだ？」

「……その、何、もらったのかなって」

「見るか？」

それに頷くと、兄は紙袋から黒いジャケットを取り出し、広げて見せてくれる。

「あ、かっこいいっ」

思わず言ってしまうくらい、センスの良い品だった。装飾やなにかで無闇に飾っているわけではない、作りの上品さで勝負しているらしいそのジャケットは、着た姿を見ずとも兄に似合うだろうことがすぐにわかった。

「そうか？ うん、俺も気に入っているんだ。さすがはファイアッセだ」

兄も、満足気に頷いている。

”さすがなのは、恭世のことよくわかってるね”……電話越しに彼女は自分にそう言ったが、それはそっくりそのまま、返すべきセリフなんだろう。

なにせ彼女は、兄とは自分が生まれる前からの付き合いだ。

「まあだが、……ファイアッセが来てくれたのは、これを渡すためだけというわけじゃあなかったみたいなんだがな」

「えっ？」

「……なのは、これを置いてきたら、これからの事について少し大事な話をしたい。いいか？」

「え、………うん」

「ありがとう。ちよつと待っていてくれ」

兄はそう言い残して、紙袋とジャケットを手に自分の部屋へと向かって行った。

「……………」

(……………大事な、話?)

その後ろ姿を見るのはは、自分の頭が少しずつ、しかし確かに煮立っていくのを自覚している。

フィアツセに、会いに行つて。

そして帰つてきた彼が、これからの事について大事な話をしたいと言う。

それは、嫌な予想を育ててしまうに、あまりに十分だった。

(……………この家を、出て。それで、それで……………もしかして)

手先が冷たくなっていく。

(フィアツセさん、と、……………一緒に、住む、んじゃ)

新しい仕事に就く事を契機に、兄は家を出ようと考えている。その先はつきりミッドチルダだと思つていたが、実際の所、固定の転移ポートを作つてしまえばこちらから通うにしたつてそう大変な事じゃない。現にそれは今、なのはがやつている。

仕事としてはもう、護れなくなつたから。

だから、プライベートを共にして、護る。

それは家族として——あるいは、一人の男性として?

「……………」

落ち着けと頭を振つてから、何か手慣れた動作をしようと思ひ立ち、紅茶を淹れる事にする。

台所へ立ち、お湯を沸かす。小さめの容器なので、すぐにボコボコと沸騰を始めた。

一旦、そのお湯をティーポットと二人分のティーカップに注ぎ、温める。こうする事でいざ本番のためにお湯を淹れた時、その温度が下がる事を防ぐのだ。

何度のお湯で何分蒸らすか。その組み合わせが紅茶を淹れる時には一番大切。だから温度管理は慎重に、緻密に、丁寧な。そう教えて

くれたのは、あの優しく穏やかで、天使のようなイギリス生まれの金髪の女性。

「……………っ」

落ち着け、落ち着け。

兄と向かい合うその時は、なんでもない顔をしなければならないのだから。

心配させてはいけない。それで彼を思いとどまらせるなんて、絶対に駄目だ。

ティーポットのお湯を捨てて、茶葉をスプーンで二杯。そこへ、改めて沸騰したお湯を高いところから注ぎ込む。

「……………あ」

少し、こぼしてしまった。こんなミス、普段は絶対しないのに。

注ぎ終えてから、こぼれた分のお湯を拭き取る。ため息すら、出なかった。

「なのは？ ああ、茶を淹れてくれているのか？」

「うん、ちよつと待っててね」

リビングに戻ってきた彼にそう答えた自分の声が震えていなかったのは、さすがにこの手の不安を日々抱えて生きていないからだろうか。

表面を取り繕う事だけは、得意なのだ。

ティーポットとソーサー付きのカップを一緒にトレイに乗せて、テーブルの席に着いた兄のところへ。

「お待たせしました」

ウェイトレスよろしくそう言って、ちょうど頃合いだ。二つのカップにティーポットからお茶を最後の一滴まできちんと注いで、ソーサーごと一つを兄の前へ。

もう一つをその対面に置いて、なのはも席に着いた。

「悪いな、それにしても見事な手際だ」

「喫茶店の娘ですから」

「茶を淹れる事だけならもう、母さんや俺よりも上かもな。……………うん、美味しい」

自身、しっかりと紅茶を淹れる事が出来、舌も肥えている兄がそう
言ってくれるのはやはり誇らしく。

だけどなにより、この人に喜んでもらえるという、その事がただ嬉
しい。微笑む顔を見たい。

なのはは、それだけのために紅茶の淹れ方を覚えたのだ。

自分でも口を付けてみて、八十点くらいだろうかかと自己採点。百
点は、……フィアッセ・クリステラの淹れるもの。

「それで、話なんだから」

「うん」

暴れ回る心臓と裏腹に、なのはの顔はにこりと笑った。

「俺は、そのうちにこの家を出ようと思っっているんだが……それは、も
しかしてわかっていたか？」

「……うん、薄々」

はつきりと言われたわけではないが、それをニュアンスとして含む
事を何度か兄は言っていたし、もともと綺麗に整理されていた部屋
も、より整頓が進んでいる。なのはにしてみれば、気付かないわけの
ない事だった。

「そうか。それでな、実は」

カン、と。

なのはの手元で音がなった。

「あ、ご、ごめんね」

震えた手が、柔らかくカップをソーサーの上へ落とせず、ぶつ
かって甲高い音を鳴らしたらしい。

「大丈夫か？」

「うん。割れてないし、こぼれてもいないし」

「……茶はそうだが、………顔色が悪い」

「……そ、うかな？」

こちらを見る兄の顔は、気遣わしげな色に満ちていた。

(……やっちゃった)

こういう顔を、させたくなかったのに。

「なんだろう、寝不足かなあ」

「……無理はするなよ」

「うん、わかってる」

「……」

兄の顔は、まだ気遣わしげだ。それは小さな表情だが、なのはにははつきりわかる。

「おにいちゃん、お話の続きは？」

だから、促す。

聞きたくない話を、それでも。

「……ああ。それでな、フィアツセに言われて、色々考えたんだが」
なのはの顔を見つめ、その後すすこしだけ長く眼を瞑ってから、兄は続ける。

「いい案だなと、……まあ、俺としては思ったというかな」

「へえ、そうなんだ。随分素敵なアイディアなんだね」

取り繕うなのはの視界は、嫌な揺れを見せている。

「なあ、なのは」

「言わないで。」

「うん、なあに？」

聞きたくない。知りたくない。

嫌だ。嫌だ、絶対に、嫌だ。

なのはは、言葉を飲み込む。

ずっと、傍にいさせて。

そんな想いを、こぼさないように飲み込んで。

そして、兄は言った。

「二人で、暮らさないか？」

「……え？」

「今すぐに、というわけじゃないんだが……おい、なのは」

「……」

「茶をこぼしているぞ」

「……え、あ!？」

手元、カップが自分の側へ傾いてはいけな角度で傾いていて。盛大にその中身をテーブルの上にこぼしていた。

「あ、ふ、ふかなきや……」

「じつとしてろ」

言うが早いのか、兄は素早く立ち上がり、台所から布巾をもってきてくれた。

「身体や服にはかかってないか？ 火傷は？」

「だ、大丈夫」

「そうか」

手際よく、零れた紅茶が拭き取られていく。あつという間に、テーブルの上は平穏な状態に戻った。

「……そんなに驚かなくともよくはないか」

言いながら、兄は汚れた布巾を台所へ持って行き、水で流し始めた。

「……だ、つて」

自分のつぶやきは、彼の耳には小さ過ぎて届いてはいないだろう。

「二人で、……二人で」

呟いて。

自分の愚かさを思い知る。既に嫌というほどわかっていたつもりだが、それでも驚く。

こんなに、自分は馬鹿なのか。

冷えていた身体がその指先まで、今は熱い。

どくどくと脈打つ心臓は、浮かれている音色。

意識がちゃんと言われた事を理解するより先に、身体がもう、喜んでる。

二人で、暮らす？

自分が、……兄と？

「……でも、なん、で？」

しかし頭は未だ、言われた事を上手く飲み込んでいない。

なぜそんな、とてつもない幸福が予想もしない形とタイミングで降ってくるのかが、わからない。

「……嫌か？ すまん、無理強いは決してしないから」

リビングに帰ってきた兄が、テーブルの席に着くなりそう言った。

「ち、違う！ 違います！ 嫌なんかじゃ、絶対なくって！ ……で、

でも、その、なんでいきなりっ」

「まあ、なんとかな……。お前は、こつちで高校に通うつもりはないんだろう?」

その問いに、なのはは正直に頷く。

「中等部を卒業したら、管理局の仕事に専念しようと思ってるけど……」

「そうしたら、ミッドチルダに移住する事も選択肢としてはあるだろう」

「う、うん」

兄がこの家にいる限りそのつもりは微塵もないのだが、そうでないのなら確かに、やはり利便性などを考えればミッドチルダに住んでしまった方がいい事はいい。

それに、慣れ親しんだこの家を離れるのは寂しいけれど、だからこそ大人になるための通過儀礼としてそれは済まさなければならぬ事の一つだと思うというのも、少しある。

「それなら、二人でミッドチルダに部屋を借りて一緒に住まないかという、そういう相談だ。あくまで相談、提案だぞ」

「お、にいちゃんは、えと、でも、すぐにここを出るつもりだったんじゃない」

「まあ、そうだな。確かにもともとは、正式に就任したらもう出ようと思っていたんだが……」

紅茶で一旦口を湿してから、彼は続ける。

「お前がもし、この提案を受け入れてくれるようならそれを少し、具体的に一年ほど待って、お前とタイミングを合わせてこの家を出る事にしようかと思う」

「……………え、と」

理解が、ようやく理性まで届いて。

「ええ、と」

混乱で、少しクラクラします。

だって、こんなの……——あまりに自分にとって都合の良い話だ。

だからこそ、飛びつくのを躊躇ってしまつて。

「……悪いな、いきなりこんな話を。それから、これを」

「……？　なに、これ？」

「手紙らしい。ファイアツセからだ」

「……え？」

そして兄が手渡してきたのは、一通の封筒。告げられた送り主の名前に呆然としながら、手は封を切っていた。

「もちろん、俺は中を一切知らん。……なのはにだけ伝えたい事があるというのは変な話でもなんでもないにせ、何も手紙でなんて渡さなくともメールがあるだろうとは言ったんだが、今、こうしてこの話をしたタイミングで読んで欲しいからとかなんとか言っていてな」

よくわからん。

兄はそう結んで、また紅茶に口を付けた。

なのはの手は彼の前、封筒から出てきた便箋を自分にだけ見える角度で、少し震えながら広げて。

『驚いた？　いきなりの話でびっくりしてるよね』

それは、そんな書き出しから始まっていた。

『あのね、今日、恭也が向こうに一人で住むつもりだつて話を聞いたの。それで私、それは駄目だなーつて思つて。だつて恭也、すつごく寂しがり屋じゃない？　器用だから一人で大抵の事はできちゃうけど、それでも誰かの傍にいないと、誰かが傍にいないと駄目な子なんだ』

まるで、彼女そのもののような、綺麗な字。

『じゃあ誰が傍にいるべきかつて考えて、私にはやっぱり、たった一人しか思い浮かばなかった。だつてそうだよ、恭也が誰と居て一番幸せそうかなんて、高町家は皆、わかつてる』

丁寧な口調で、彼女らしい筆跡で、それは語りかけてくる。

『だから、なのは。恭也をよろしくね——なんて、そんな言い方は失礼だね』

「……っ」

なのはが今まで聞いた事のない、しかし確かに、ファイアツセ・クリ

ステラのものであるらしい気持ちを。

『だってこれじゃあまるで、恭也が私のものみたい。だってこれじゃあまるで、私かなのはよりも恭也に近いみたい。それは、違うと思う』
『違うの、だろうか。それこそ違うと、自分はずっと思ってきたのに。』
『だから、願ってるって、祈ってるって、そんな言い方をしたいと思う。お互いを必要とし合う二人が、二人一緒に幸せになることを』

いいの、だろうか。こんな幸せを、自分は掴んでしまつて。
なにより、それをあなたに願って、祈ってもらつて。

『もし迷っているのなら、なのは。ちよつとだけ私の、私についての話を聞いて。ほんのちよつとだから、読んでくれると嬉しい』
しかしそんななのはの迷いを見透かすように、文は続いて。

それは、書かれていた。

『私は、恭也が好きだった』

その想いは、記されていた。

『男の子として、私は確かに、フィアッセ・クリステラは確かに、高町恭也が好きだった』

少しだけ、ほんの少しだけ文字は揺れているけれど、それでも誤魔化さない言い方で、それは綴られていた。

『でもね、なのは。私は家族になった。私の「好き」は、家族としての「好き」になった。女の子として出会った私の、女の子としての「好き」って気持ちは、家族としてのものに落ち着いたよ』

彼女の声が、聞こえるようだった。

『それは、全然悲しくなくて。それは、ちよつとだけ悔しくて。それは、今もどこか寂しい』

あの美しい声が、柔らかく、でも少し切ないあの音色が鳴っているようだった。

『だけど、納得をしている。私達は、こうなんだって。私の「好き」は、私達の「好き」は、こうなんだって』

非現実的なまでに魅惑的な歌声と違って、それはあまりに等身大。

『私の話は、これでおしまい』

なのはが身近で感じてきた、フィアッセ・クリステラのままの言葉。

『だけど、だから。ねえ、なのは』

そんな彼女は、最後に問う。

『あなたは、あなたの「好き」を、どうするの?』

「――あ」

手紙の本文は、そんな最後で終わっていた。

(ファイアッセ、さん……)

知って、いたのだ。

つまり彼女は、知っていたのだ。

きつと、昔からずっと。

「……なのは?」

兄が、声を漏らしたこちらを見る。

その顔を、見返して思う。

この「好き」を、どうするのか。

どう、したいのか。

「……おにいちゃん」

そんなの、決まってる。

「私、おにいちゃんと一緒にいいよ」

「……それは」

「私も、二人で一緒に暮らしたい。だってね、私……」

すうっと息を吸い、まっすぐに彼の瞳を射抜いて、言った。

「あなたと、離れたくない」

兄が彼にしては珍しくはつきりと、その眼を瞠った。

それはそうだ、だってこんな呼び方を、言い方を、したことなんて

今までなかった。

「駄目かな?」

「……俺から言い出したことだぞ? 駄目なわけがあるか」

「……嬉しい」

気持ちのままに笑みを浮かべ、口に出して伝える。

こうしていたらいつか、告げられるときが来るだろうか。

自分の、この「好き」を。

問題なんて山ほどあって、望みなんて限りなく薄いけど。

それでもどうしようもなく、自分の人生を貫いている、この「好き」を。

「……………なるほど」

「え、なに？」

「いや、…………フィアツセの言っていた事が、ようやく少しわかった気がする」

「どういう事？」

自分の問いに、しかし兄は微笑みながら首を振った。

なんだろうか。気になるけれど、兄は言わないと決めたら言わない人なので、追求するのはやめておこう。

「…………ねえおにいちゃん、フィアツセさんが飛行機降りるのってこっちでいうと何時くらいかな」

「そうだな…………一時間ほど前、五時くらいに乗ったから十二時間後の朝の五時だな」

「朝の五時かあ、起きられるかなあ」

時差は九時間なので、あちらは夜の八時。一応、迷惑な時間帯ではないだろう。

「なんだ、フィアツセに電話でもするのか？」

「うん。…………おにいちゃんは答えてくれなさそうだから、フィアツセさんにとっても思ってる」

「お前の部屋の目覚ましは今日から飛針の的だ」
「ちよつとー」

なんとも物騒な事を言い出した兄に抗議をしながら。

なのは瞳はちらりと、手に持った彼女からの手紙、その一番下を見る。

本文の後、追伸として書かれたその一文を見て、思う。

(…………いろいろ、聞いてみよう)

高町なのはは、フィアツセ・クリステラときつと、もしかしたら初めて、腹を割って話せるのかもしれない。

『P.S.』

『あのとき、怖がらせちゃってごめんね』

魔法青年リリカル恭也 Heart 第21話 それも甘えか

眼下の光景は、ひどいものだった。

浜辺から上がってくる、人型で三メートルほどの赤茶けたゴーレムが辺りを手当たり次第に壊し回っており、海沿いの街は崩壊状態。

現地の住人達を守って管理局の武装局員達があちらこちらで奮戦しているようだが、戦況はいかにもよろしくない。

到着早々、惨憺たる状況を目の当たりにさせられたわけだが、だからこそ自分が呼ばれたのだということとは理解している。

文句も泣き言も、零すつもりはなかった。

『こちら本局所属、特別武力制圧官の高町です。要請に従い支援に来ました。これより状況へ参加します』

念話のチャンネルを管理局員汎用のものへ合わせ、そう宣言。

上空、頑丈に作った足場に乗りながら、鋭く息を吸って恭也は相棒へと指示を出す。

「魅月、装填」

『装填』

腰に下げた魅月の両の柄尻から空薬莖がそれぞれ二個ずつ、計四つ排出され、恭也の身体に魔力が漲る。

右刀の鞘に左手を置き、右手を柄に。

意識は下で暴れまわるゴーレム達に合わせる。気配を探ると、その数は九十四。左右合わせて全十二発のカートリッジを、全て空にしてぎりぎりの数だ。

覚えたてと比べて倍に増えた現在の最大数である三十二体へ、その全てに照準を合わせ、抜刀。

刀に籠められたエネルギーが、斬撃が、同時に標的達の下へと跳んだ。

御神流斬式奥義之極 閃

暴虐と言うには、あまりに清廉で鋭すぎる衝撃が場のあちらこちら

でその威を振るう。

その結果を見届けながらも、恭也は抜いた刀をもう一度納刀。魅月からは先ほどと同じように計四発の空葉莢が排出される。

刀を振るえば、眼下、今度は先ほどまでとは別の三十二体へ斬撃が跳ぶ。

「……………」

『主、ご無理は』

「いや、いける。やらねばならん」

神速内で無茶をした時とはまた別の種類、内側から焼かれるような頭痛が恭也を襲うが、頭を振ってまたしても刀を納めた。

「魅月」

『……………了解しました。装填』

ロード、魔力供給、そして意識の中で残るゴーレム三十体へ照準を合わせる。

息を鋭く吐き、抜刀。

硬い物体を斬り裂く澄んだ音が、多重奏となって響き渡り。

眼下からは驚愕の声を残し、怒号と悲鳴と戦闘音が消えてなくなつた。

「……………仕留め損なつたのは、いないようだな」

『ええ、そのようです』

一度で最大三十二の標的を斬る閃、その三連続で三桁に迫る数のゴーレムの大群は、一体残らず両断されて物言わぬ瓦礫と化していった。

「とは言え、まだ海から上がってくるだろうが……………」

『他の局員達でも相手が出来るでしょう。それよりも』

「ああ、あいつだな」

水平線の向こう、恭也が視線をやった先には、形としては先程まで街で蠢いていたものと同じ、しかし大きさが百倍以上の姿がある。

あれが親玉、なのだろう。

「と、特武官殿でありますか！」

空のマガジンを捨て、新しいものを両の魅月へ装填していると、近

づいてくる気配と声。街の方角から一つの影がこちらへ向かっていった。

恭也の傍まで飛翔魔法で飛んできたのは、彫りの深い壮年の男性局員だった。

「自分はっ……」

彼はびしつと敬礼をした後、名前と所属を名乗る。どうやら、この局員達の総まとめらしかった。階級は三等陸尉。

自身も前線で戦っていたようで、バリアジャケットにはいくつも損傷が入っている。

「本局所属、特別武力制圧官の高町です。要請に従い、支援に来ました」

「ご武名はかねがね！ まさか来て頂けるとは……！ 先ほどの攻撃は特武官殿が？」

「はい。すみません、許可も得ずに」

特武官は派遣された時点で現場の最高指揮官から自己の判断に基づいた自由な行動を許可されるという事になっているので、これは厳密には間違った発言ではあるのだが、礼儀として恭也はそう言った。

三尉は首を振る。

「いえ、助かりました、本当に。もう私も部下たちも限界でしたから……」

海中の遺跡にあつたらしいロストログアが暴走、多数の小ゴーレムが海から上がり周辺の街で破壊活動を開始。

倒しても倒しても増援が出現。

大本の遺跡をなんとかしようにも、巨大ゴーレムが門番として立ちはだかっている。

被害にあつた海沿いの街は崩壊状態、住人の避難もまともに完了せず、急行した現地の武装隊も限界。

恭也が事前に与えられた情報はおおよそこのようなものであり、口頭で確認してみると三尉は苦しげな顔で頷いた。

「ここを抜かれれば、次は内陸の街です。どれだけの被害が出るかわかりません。かと言って我々ではもうどうにもならず……駄目元で、

と言つては失礼ですが、特武官のお噂を思い出し救援を要請させて頂いた次第です。どうか、お力を……」

「了解しました。全力を尽くします」

頷いて、恭也はまた巨大ゴーレムを見据える。空戦が出来る魔導師が何人か攻撃を仕掛けていているようだが、効果は上がっていないようだ。

「彼らを下げて街の防衛と怪我人の救助へ回して下さい。あいつは俺が片付けます」

「お、お一人でですか？」

「十分です」

「わ、わかりました！」

言い切つた恭也へ再度の敬礼をし、三尉はすぐに念話で指示を出したようで、空戦魔導師達が巨大ゴーレムから離れ、こちらへ戻ってくる。

「戦闘の煽りを受けないよう、終わるまで近づかないで頂けますか？」

「了解しました！」

「それでは」

足場を蹴り、作つて、また蹴つて。

一瞬とすら言えるような速さで恭也は巨大ゴーレムへと突撃する。

図体に似合わず素早い反応速度を誇るようで、巨大ゴーレムはその右拳を突つ込んでくる恭也へと振り抜いた。

「まあまあ速いしそこそこ硬い、か」

『そのようですね』

澄んだ音と共に拳の外側、向かつて左半分が恭也の振るつた刃に切り取られ海へと落ちる。

「ッー」

こちらを脅威と認識したのか、巨大ゴーレムはここへ来て咆哮をあげる。そしてその背中から合計八本もの腕を生やした。

それを猛然と振るい、恭也を仕留めにかかつて来る。時には身体ごと腕を振り回す姿は、まるで竜巻のようだ。

『主、やはりコアがあるようですね。魔力の流れからすると、胸部中央

です』

躲しながら一本一本、腕を斬り落としていく恭也へ魅月の分析が届く。

「そうか」

言われ、すぐさま恭也は巨大ゴーレムの胸元へ飛び込んだ。中央目掛けて斬りつけようとして、

「……!?!」

「ッ！」

巨大ゴーレムがまた咆哮を上げた。しかも今度のそれは、物理的、魔力的両方の意味で衝撃を伴っている。

コアを狙われた際の防御技らしい。

顔の部分からだけでなく斬り落とされてない腕まで含め、身体中の全ての箇所から不可視の衝撃が響き、全方位から恭也を叩いてその動きを一瞬とは言え止める。

そして、巨大ゴーレムの腕が右腕一本を残し、全てボロボロと崩れ去り。

残された一本が黒く染め上げられる。大量の魔力が籠められていた。

『主！』

音速を超えた巨大な拳はソニックブームを発生させて海面に大きな波を発生させながら、動きの止まった恭也の身体を捉える。

ボキボキと、身体の各所で音がした。

そのまま水面に叩きつけられ、海中に没する。

(なるほど、一撃に全力を籠めたわけか。強烈だ)

だが、それでこちらを仕留め切れなかったのは失敗だなと、恭也は胸中で呟く。

「魅月」

『装填！』

魅月が三発のカートリッジを水中でロードする。

その内二発分の魔力を使い、恭也は身体全体へ特殊な強化の魔法を発動させる。それは通常のものとは違い、傷ついた組織を修復する機

能の強化を主眼においたものであり。

そのレベルはもはや、再生と言つて良い。

眩体・修。

効果が発動するのは精々二秒程度、しかしそれで十分。その短い間で、発動したその魔法は恭也の身体を完全に治し切った。

元々あつた高い身体能力と身体強化魔法適正。それに加えて、特武官として常人では考えられないほどの数と濃度で命がけの戦いをごく短いスパンで繰り返し返した事により習得した、それは不死身に近い性能を恭也に与える魔法。

一撃で頭を潰すかリンカーコアを破壊しない限り、カートリッジが残っている状態の恭也を殺すことはほぼ不可能だ。鋭い閃光を横薙ぎに喰らい頭と胴が一瞬離れた時さえも、咄嗟にこれを発動し繋ぎ直して、何もなかったかのように戦闘を継続出来た。

この魔法の習得によつて、恭也は一年ほど前に魔導師ランクを最高のSSSへと到達させている。

一発分のカートリッジの魔力で、今度は通常の眩体を強化する。水中に作った足場を力強く蹴り、海面から視認できないほどの勢いで飛び出して、巨大ゴーレムの胸元に刃を突き立てた。

「ッ!?!」

手応え、あり。魔力反応の強い所を狙つたが、ここで合っているらしい。

衝撃を伴つたあの咆哮を上げる暇は与えない。

刺した刀を引き抜き、SCL。

得た魔力で晃刃を強化。超速の抜刀術を放つ。

御神流奥義 虎切・絶

巨大ゴーレムの身体が、真つ二つに断たれた。太刀筋に斜めへ角度が付いている事で上半分がずるりとズレていき、海へ落ちる。

断面には綺麗に斜め半分が無くなった深い藍色のコアがあつた。

『主、離れてトヤッコー!』

「わかつた」

進言に従い距離を取ると、巨大ゴーレムはコアから爆散した。大き

な水柱が天に向かって伸びる。

「助かった、魅月」

『いえ。……主、海中の反応も収まったようです。これで事態は解決でしょうか』

「みたいだな。このでかいのは小兵生産施設の門番で、ロストログア全体のコアでもあったわけか」

街の方へ視線を向ければ、恭也が巨大ゴーレムと戦っている間に出て来たらしい小型のゴーレムが、糸が切れたように動作を停止しているのが見える。これ以上、海中の遺跡からゴーレムが出て来る事もないだろう。

ほどなくして、先ほどの男性局員が念話で状況終了と告げるのが聞こえた。息を吐き、恭也は魅月を鞘へと収めた。

街へ降り立ってみると、遠目で見た感想の通りひどいものだった。あちらこちらから血の匂いがする。

一体何人、死んだのだろう。

「……」

『主は、最善を尽くされました』

「……ありがとう、魅月」

救助を待っている人間がいなか、建物が崩れている場所などの気配を探りながらしばらく練り歩き、やがて即席の避難所のような場所に着いた。

半屋外、ドームのような建物だ。魔法がかけられているのか、風や寒さを感じない。

中には一般人、局員合わせて沢山の人間たちの姿があった。怪我人は、かなりの割合にのぼっている。

ついさつき知り合ったばかり、とは言え一応は見知った顔を見つける。彼もこちらに気づき、敬礼を向けてきた。

「特武官殿ー」

彫りの深い男性局員、この場の総まとめの三尉だ。

ちなみに階級の事を言えば、現場での独立行動で困る事がないようにと、特武官には一佐相当の権限が与えられているため、恭也の方が

上ではある。

通過出来るわけもない難関筆記のある上級キャリア試験を受けてもない自分が、そんな立場にいるというのはどうにも収まりが悪い気がするのだが、確かに訪れた現場で指揮を執る局員に対し意見を通す際、それが役に立つ事も多々あるので、文句は言うべきではないのだろう。

敬礼を作る彼の姿を見て、慌てて周りの部下らしい局員達もそれに倣う。

「楽にして下さい。手を止める必要もありません」

敬礼を返しながらそう告げると、彼らは一瞬逡巡した後、治療や何やらの作業に戻った。

「特武官殿、ありがとうございます……！　まさか本当にあの化け物をお一人で……しかもあんなにお早く。おかげで多くの者が助かりました」

「……いえ」

「特武官殿？」

「三尉、……何人、犠牲になりましたか」

恭也の問いに、三尉は目を伏せた後、答える。

「うちの隊では、八人です。民間人は……まだ全てを把握出来たわけではありませんが、我々が駆けつけた後では十五人。駆けつける前の事はまだ確認が取れていませんが、おそらく、三桁に登る数が」

「そう、ですか」

街の惨状を見るに、それは予想出来た事だが。

（また、か……）

鉛を飲み込んだような、重い気持ちが身体に溜まる。

「特武官殿、この規模の災害で全員を救う事は……いえ、これは私などがわざわざ言う事ではありませんか。特武官殿は、このような過酷な戦場を数多く渡り歩いていると聞き及んでおります」

三尉の言うとおりで。

恭也は特武官として数限りないほど戦場を歩いてきた。恭也が呼ばれるのはその場の人員や通常の戦力だけではもうどうしようもな

くなつた状況であり、必然、そこは例外なく悲惨な色に染まっている。だから、わかっている。

こういった現場で人死に出ないわけがないと。

わかっている、それはどうしたって仕方のない事だ。わかっている。

ましてや、自分が送られるのは阿鼻叫喚と言つていい状況になつてからのだから、それ以前に起こつた事は本当にどうしようもない。わかつて、いるのだ。だが。

何年か前の自分なら、割り切れていたはずだ。良い悪いは別として、そういう命の奪い合いの現場に出るものとして持つべきではある資質を、きちんと有していたはずであつた。

なのに、今はどうだ。

情けなく、息を吐く。

「……すみません、三尉達の方こそお辛いでしように、無神経な事を聞きました」

「いえ。……特武官殿、あちらで少しお休み下さい。顔色がよくありません」

心配そうに顔を歪め、三尉はそう言つて救護スペースへ恭也を連れて行くこうとして。

その途中だつた。

「……お、おい！」

髪をぼさぼさに乱した中年の男が、恭也達へ……否、恭也へと声を向けてきた。

「きよ、きよ、局員に、き、聞いたぞ。あんたが、あんたがああの化け物を倒したつてほんとか？ 小さいのを一斉に真つ二つにして、でかいのまであつという間に仕留めたつて……」

その声は、何かを抑えるように細かく震えていた。

「はい、自分です」

何を抑えていたのかは、すぐに明らかになつた。

「——てんめえええええええええええええええええッ！」

近くに落ちていた瓦礫を手にして、男はそれを恭也へ投げつけた。

こちらを見据える眼は、赤黒い怒りで染まっている。

「何をするか！」

三尉が杖型のデバイスを素早く展開させ、魔法を使うまでもなく瓦礫を叩き落とした。

「うあああああああアツ！」

男はこちらへ殴りかかろうとして、騒ぎに飛んできた周りの局員達に数人掛かりで抑え付けられた。

「この、は、離せ！ 離せえええええ！ お、俺はそいつを、そいつを！ ぶん殴つてやるんだアアツ！」

涙を流し、咆哮を上げ、男は恭也へ憎しみの籠もった視線をぶつけ続ける。

「特武官殿？」

「三尉、……いいんです」

庇ってくれていた三尉の背後から前に出て、彼の目の前へ。

「お前、お前えええええ！」

正面から、その言葉を受ける。

「お前、なんで、なんで、——なんでもっと早く来なかったツ！」

「……すみません」

「あんなに強いんだろう!? 一瞬であんなに沢山の岩人形を倒して！」

あのでかいのだったものの数分だったって話じゃないか！ お前

が、お前が！

「……」

「お前がもっと早く来てりやあなあ！ 来てれば、来てれば！ ……」

来て、くれればあ」

男は、ずるりと地面へ崩れ落ちた。そして掠れる声で、全てを呪うように言う。

「俺の妻は、息子は、娘は、死なないですんだんじやねえかよおおお……！」

それからは、まともな言葉は投げつけられなかった。それよりも何倍も痛い、悲痛な泣き声だけが耳に届く。

「向こうで鎮静の魔法を掛けてやれ」

「は、はい」

三尉の指示に、抱えるように局員達が男を連れて行った。

「三尉、庇って下さってありがとうございます。それから、先ほどの事は不問としておいて下さいますか」

「……張本人の特武官殿が、そう仰られるなら」

局員を狙った暴行未遂。場合によっては重い罪になってしまう。今のケースでは叙情酌量の余地がかなりあるためにそう厳しい処置にはならないだろうが、罪は罪だ。

「やはり少し、お休み下さい。いかにお強いとは言え、疲れはないはずがないのですから」

三尉がそう言った時、またしても邪魔が入った。

恭也が腕に巻いた連絡用端末の鳴らすアラートだ。危機感を否応なく煽る、それは特武官呼び出しのコール。

画面を叩いて応答する。若い女性の声が流れて来た。

『高町特武官、緊急要請を受けました。そちらの案件は？』

「戦闘状況は終了した」

『では、次の現場へ向かって下さい。こちらの転送ポートに栄養剤とカートリッジを準備しておきます。説明はそこで』

「了解」

通話が切れる。恭也はすぐさま、バリアジャケットの裏に仕込んである小型の管理本局直通一人用転送装置をスタンバイモードに。

「三尉、すみません。ここはもうお任せしてもよろしいでしょうか？

自分は、次の現場に行かねばならないので」

「……な」

目を見開いて、一拍を置いて三尉は怒鳴り声を上げた。

「何を考えておられるんですか!? 貴方はたった今! ロストログアの生み出したクリーチャーと戦ったばかりなんですよ!?! それも、第一級危険指定の!」

それは、上げてくれたと言うべき怒声だ。

「はい」

「はい、ではありません! 傷は負っていないようですが……そうい

う問題じゃない！ 肉体の疲労だけでなく精神の摩耗がある！ 魔導師ならばそれがどれだけ致命的かわかりでしょう!？」

「大丈夫です、生半な事では死なない魔法を、自分は使えますから」
微笑みを、浮かべる事が出来てはいると思う。

「そういう問題ではっ！ 特武官殿!？」

「すみません」

装置に魔力を籠めて、転送を開始する。足元に魔法陣が描き出され、恭也の身が光に包まれた。

優しい三尉は、こちらを引き留めようと手を伸ばして。

転送が終わる方が、彼の手が恭也に触れるよりも早かった。

『主……』

「なんだ？」

本局の特武官専用転送ポートへ戻って来て早々、魅月が声を掛けてきた。

『やはり、お休みになられては……』

「大丈夫だ、俺は頑丈に出来ている。知っているだろう?」

答えながら、ポート脇の机の上へ用意されているカートリッジを彼女へ素早く装填していると、何人かの局員達がぞろぞろとやって来る。

彼らは医療班だ。その面子はどうもめまぐるしく変わるらしく、あまり同じ顔は見かけない。

医療班と言っても、怪我を自分の魔法で治せる恭也に治療はあまり縁がない。担当してくれるのはもっぱら体調管理と栄養補給である。

恭也とて、自分の身体にエネルギー源が供給されなければさすがに動く事は出来ない。

「特武官、失礼します」

肩口に針のない注射器のような物が押し付けられる。少しの衝撃の後、身体に何かが染みこんでくる感覚。

注入型の栄養剤だ。吸収効率がとてつもなく優れている。

そう言えば、最後に普通の食事を摂ったのはいつだったろうか。

『主がいかに頑強とはいえ、何か不測の事態が起きないとも限りません』

『不測の事態なら、今現場で起きている。そのために行くんだ』

『主……』

「大丈夫さ。わかってくれるだろう、コールを受けて何もしない方が辛い」

『……はい』

『特武官、よろしいでしょうか』

目の前に投影型のスクリーンが展開された。映っているのは、恭也担当のオペレーター。青を基調にした髪を肩口で切りそろえた、どこか無機質な印象のある女性だ。

先程通信した相手である。

「ああ、頼む」

『では。本日一八三三、第四十五管理外世界において——』

彼女は要点を絞って、恭也へ次の現場の状況を説明する。わかりやすく丁寧で簡潔だ。実に優秀なオペレーターだと恭也は思っている。付き合いは一年ほどになるだろうか。……そういえば、実際に会った事はない。いつも画面越しだ。

それで特に何の問題があるわけでもないから構わないのだが。

説明を聞き終え、その間に恭也の身体データを取っていた医療班の方を向くと、オーケーサインが出た。出撃しても問題ないようだ。

さつき出たポートにまた足を踏み入れ、転送を待つ。一気に世界間を跳んでいく事になるため、開始までにはさすがに少し時間がかかる。

魅月と話でもして待とう、そう思って口を開く。

「今度は巨大ワームだそうさ、魅月」

『ええ、プレスも吐いてくるそうです。警戒しましょう、範囲攻撃は主の苦手の一つです』

「ああ、そうだな。気をつけよう」

とは言え、一発で死ななければどれだけ焼かれても構わない。

予め眩体・修の準備をして突っ込んでしまうのもありだろう。口のなかに飛び込めれば仕留めやすい。

こんな事、魅月にはもちろん言わないが。

(回復という一つの技に頼り過ぎるのは、良くないのだが)

思いはするものの、どうしても現場の緊急度が緊急度なため、結局は頼ってしまう。早く勝負を決めるには、防御を捨てて攻撃に専念するのが一番手っ取り早いからだ。

恭也が呼ばれるような現場は、常に一刻を争う。時間を掛けて戦えばいいのだが、そういうわけにはいかないのだ。

「さっきのどでかい虎のように、素早さを一番の武器とする奴が俺としてはやりやすいんだがな」

『どれだけ速くとも、主よりは遅いですからね。……それはそれとして、主』

「なんだ？」

『先ほど戦ったのは、虎ではなく人型のゴーレムですよ』

「そうだったか？ ……ああ、そうだ。そうだ、そうだな」

『……』

さつきは巨大ゴーレム。虎というのは……。

虎というのは。

……いつだったか。昨日か？ 一昨日？ それとも、三日くらい前だったろうか。

わからない。

『主の仰っている虎は、おそらく二年ほど前の相手です』

「そうか、二年前か……。二年前……その頃戦った相手でめぼしいものと言うと、ええと、そうだ、イカ。クラーケンのような奴が船型の都市を襲って」

『それは一昨日の事ですよ、主』

「そうか？ そうなのか」

一昨日、か。クラーケンが一昨日で、虎が二年前。

頭の中、時系列を組み直して、——すぐに崩れた。連続性が保てない。ぶつ切りのばらばらだ。

(……戦闘に支障はないから構わんだろう)

『ところで主、三日後に妹様達とお食事の予定がありますよ。覚えてらっしゃいますか?』

「三日後、だったか。ありがとう、覚えてはいたが日にちはわかっていなかった」

三日後か。

そもそも今日はいつだ? 思い出せない。

三日後、三日後、……三日後。明日、いつから数えて三日後だったか覚えていたのだろうか。自信がなかった。

「魅月、忘れてしまっていたら教えてくれるか?」

『ええ、必ず』

「呼び出しがかからなければいいんだがな」

『来ないよう、祈っておきます』

「祈るって、大げさだな」

まあ、自分に呼び出しがかからないというのはこの広い次元世界群のどこでも緊急事態が起きていないという事を意味しており、確かにそれは祈るに値するか。

次元世界群、クロノなどは海と呼ぶそこはいつでも荒れている。だが、一応は周期というものが存在し、ひどい時とマシな時がある。

今はどうも、すこぶるひどい時らしい。

つまり、中々恭也の仕事は切れない。

(なのは達には悪いが、食事はまた後にして貰った方がいい気もするな)

土壇場で不意にしてしまう可能性の高さを思えば、事前に言うってお方が迷惑はかからない。

それに今の自分の状態、記憶力が怪しいところの所為でもしかしたら少し、心配をかけてしまうかもしれない。

『楽しみにしておられましたよ、妹様達は。久しぶりですからね』

「……そうか」

断りの連絡を入れた方がいいかと口にしようとした矢先、そんな風に言われて、言葉を飲み込む。

久しぶり、そうか、久しぶりなのか。

「どれぐらいぶりだったか」

『三ヶ月です』

「そんなになるか」

毎日顔を合わせるといふ事はなかったが、何かと頻繁にフエイト、はやて達とは会っていた。なのはに至っては、一年ほど前までは同じ部屋に住んでいたくらいだ。

なのに、三ヶ月か。それは確かに久しぶりだ。

「……俺の味覚が機能してない事は、まだ話していなかったか？」

『そうですね、でなければ妹様達もお食事をお誘いにはならないでしょう』

「そうだよな」

恭也の舌は、今や甘いも辛いもさっぱりわからない。なにを食べてもなんの味もしないのだ。嗅覚は生きているから、辛い香りが強いものであれば少しは楽しめないでもないのだが。

舌の生理的な問題でなく、精神的なものが原因だろうという診断がされている。

五感の中で唯一、戦闘に関係のない感覚だから削れたんだろうなと自分では思っている。

(……誤魔化すか、余計な心配を掛ける事もない)

見た目と香りでコメントすればそう外れる事もないだろう。

そんな事を思っていると、身体が光に包まれた。転送が始まる。

これで何度目の出撃なのかなんて、恭也にはもうわからなかった。

「すごかったぜ！ いやほんとに！ まじで！ 噂通り、いやいやいや、それ以上だった！ 強いなんてもんじゃなかった！」

「いいよなあ、本物を見られたなんて。……ま、聞く限り相当やばい現場だったろうから、代わりたかったとは言わねえけど」

「まあなあ、やばかったのはまじでやばかったぜ、正直死んだと思ったね。特級危険指定の超大型ワームがよー、三体！　こりや終わったなって、武装隊なんて入るんじゃないかってな」

「でも、全部倒しちゃったんだろ？」

「ああ、信じらんねえ光景だった。つい一昨日の事だけど、なんだか夢みたいだ。俺ら全員下がらせてさ、一人で三体同時に相手したんだぜ？　正直動きは速すぎて全然追えなかったんだけど、もう輪切りだ輪切り。すぱんすぱんと芋虫ヤローどもの体が叩っ斬られてよ。何やっても全然効きやしねえ硬い鱗に覆われてたはずなのに、なんで斬れるのかね」

「ワームの攻撃は喰らわなかったのか？　えげつねえブレス撃つてくる種もいるだろ、確か」

「まさにそいつだよ。一回、喰らってたはずなんだけど、問題なく継戦してたな……火傷の一つもしてねえみたいで、防御力が高いのか？」
「どうなんだろうな……いや、なんかでも、すげえ回復魔法を使えるって話も聞いた事あるな……。即死しなきゃ大丈夫ってレベルだっつー噂もある」

「さすがに眉唾……とは言えねえな……」

「しかし、管理局で最高の単体戦闘能力保持者って評判、嘘じゃねえんだな。空戦SSSなんてランクが実際いるなんてなあ。——無敵の特武官、か」

「とにかく助かったよ……。礼でも言いたいところだったんだけど、すぐにいなくなっちゃまって。なんでも、次の現場に備えるって」

「勤勉過ぎるだろ。いや、なんつうかもう、そこまでいくと化け物だな」

「ははっ、違いねえ！　怖いとか痛いとか、もうあのレベルになると感じねえんだろうなあ」

「……」

なのはは、座るテーブル席に備え付けの遮音フィールド発生装置を作動させた。自分たちがこれからする話を周りに聞かれたくないというのもあったが、これ以上彼らの話を聞いていたくなかった。

「恭也さん、相変わらずかなり噂になってるね」

対面、フェイトが呟いた言葉に頷く。

「うん。感謝か畏怖、基本はどっちか、あるいは両方。それで大抵、今みたいに化け物みたいな人がいるものだって話になるみたい」

「……その化け物みたいな人が、それでも自分たちと同じ人間だって、わかってるのかな」

「少なくとも、……上はわかっていない。いや、わかっててやってるのかな」

なのはが口にした上とは、時空管理局の上層部、すなわち本局所属特別武力制圧官である高町恭也へ指令を下している者達を指している。

どうしてこうなったのか、なのはは眉間に皺を寄せ、拳を握りしめた。

特別武力制圧官。発生した事態に対し、その場の通常戦力ではどうしようもないと判断された現場へ、単独ゆえに可能な高速の長距離転移で赴き、その戦闘能力でもって状況を終了させる管理局の誇る最高戦力の一つ。

四年近く前に作られてから現在に至るまで、その役職にはたった一人しか就任していない。

高町恭也、なのはの兄でフェイトの師であるその人だけである。

「なのは、恭也さんとは最近……」

「話せてない。繋がらないの、いつかけても。フェイトちゃんは？」

「私も同じ。お部屋に会いに行っても、居たことは一度もない」

恭也が特武官に就任した当初は、こんな状況ではなかった。ミッドチルダ臨海空港での大規模火災を初陣とした彼の出撃は、その後しばらくは月に一、二回程度。それも、最初は空港火災の時と同じような救助任務が主だった。

しかし、そのあまりに突出した戦闘能力が発揮されるにつれ、そんな状況は徐々に変わり始めた。

次元世界が荒れている時期だというのもあって救援要請はどんどん増えていき、彼はその度に力を示し続け、気づけばその役職と共に

広く知られるようになっていった。

恭也は、万能ではない。どんな状況でも絶対に何とか出来るわけでは決してない。そんな能力を有した存在ではない。

しかし、事を単一戦闘に限るのであれば、その評価は絶対というものに限りなく近くなる。少なくとも、傍から見ればそういう印象をきつと、多くの人間が抱くだろう。

防御を抜いて衝撃を通す、バリアジャケットを着込んだ魔導師にとって天敵とすら言える技術をも擁した飛び抜けた接近戦技術。

強化魔法も相まって別格とすべき域に達している身体能力。

足場生成を利用した、場所を選ばない超高速の機動力。
隙を消し去る気配察知。

一方的な行動領域へ移行する特殊技能、それを利用した高度なカードリッジロード。

必中の他目標同時攻撃。

それらに加え、一年ほど前、およそ尋常では無い回復効果を発揮する技まで会得して。

即死の攻撃さえ受けない限り死なないとすら言える回復能力を得た事で、いよいよ彼の総合的な戦闘能力は突き抜けた。

決して使える魔法の種類は多彩ではない魔導師の高町恭也に、規定の課題行動を達成する能力で決定される魔導師ランクにおいて、管理局は空戦SSSの評価を下して。

より多くの戦場が彼を求めようになり、阿鼻叫喚の悲惨な現場の中で恭也は期待に応え続けた。

一年目は月に一、二回、二年目では週に一回程度だった出撃が、三年目の終わりにSSSを取得してからは週に三、四回となり。

そして、四年目の最後の季節に差し掛かった今現在では、さらに悪化している可能性があつて。

「上層部は、頭がおかしい」

「……はやてちゃん」

それは、遮音フィールド内へ入ってくるなりいら立ち混じりの声で言った彼女、八神はやてが調べてくれている事だった。

その名を轟かす腕利きとは言え、なのはもフェイトも、管理局の内側に向けたアンテナは高くない。対し、そこでのし上がる事を決めたはやてはある意味その道のプロだ。

「……管理世界群は広大や、ましてや海が荒れとるこの時期、管理外世界も合わせたらいつでもどつかしらの世界で、何かしらのやばい事態は起きると言うてもええ」

フェイトの隣に腰掛けながら、不機嫌さを隠そうともせず彼女は続ける。

「せやけど、せやけどその尻拭いをたった一人に押し付け続けて何が管理局や……！」

ダン、と。はやてが机を叩いた音は、周りに広がらず展開されたフィールドに吸収されて消えた。

「はやてちゃん……？」

「……なのはちゃん、フェイトちゃん。よう聞いてな」

なのはの言葉を遮るはやての声は先ほどまでとは打って変わって暗く、硬いもので。

「状況は、思っとなよりすこぶる悪い」

「……それは、どれくらい」

なのはの恐る恐るの問いに、はやては取り出した端末を操作、こちらのデバイスに資料を送る事で返してきた。

「閲覧制限かけて見てや」

言われた通り、なのはとフェイトは持ち主以外には見えないようにプロテクトを掛け、資料を表示して。

「これが、洗い出せるだけ洗い出せた過去三ヶ月の恭也さんの出撃内容の詳細や」

はやてのそんな言葉が、どこか遠かった。

「……なに、これ」

画面をスクロールする指が震える。震えるけれど、見なければならぬという焦燥感に突き動かされ、止まらない。

「……………これが、これで、過去、三ヶ月？」

引いた血の気に、視界が白く染まりつつあるなのはの隣、聞き返す

フエイトの声も慄きに揺れていた。彼女は愕然とした声のまま続ける。

「こんなの……、大規模なチームが交代交代、通常は年単位で、いや……間違いなく……十年単位でこなす量のはず……。……だつて、こんな高負荷な任務を、こんなペースで受けたら」

高負荷な任務とは、危険度や現場環境の劣悪さ、そこで目にする事になる光景の悲惨さなどによる、心身にかかる負担が重いもの言う。

高負荷な任務を受けた場合、その後はその重さに応じて身体や心を休める期間が通常は設けられている。

それは、局員が潰されないようにという配慮であり、それがなされていないのであれば。

「シャマル曰く、普通やったら一月保たないそうや。身体もそうやけど、何より心が」

くしやりと、己の前髪を掴みながらのはやての言葉は、まるで吐き出すようだった。

SSSを取った恭也に、荒れている次元世界のための依頼が殺到するのはわからない話ではない。恭也の能力が広域殲滅系のような状況を選ぶタイプであったのならそうもならなかったのだろうが、閃による選択的範囲攻撃も可能ながら、彼の本領は機動力・突破力の非常に高い単一戦闘である。活躍出来る機会は非常に多い。

その上、どれだけ傷を負っても即死でなければ大丈夫というタフさまで兼ね備えているため、温存も極めてされにくい。

だから一年近く前、恭也がSSSを取得した途端に一気に忙しくなったのは仕方のない事と思っていた。

本局の特武官室に寝泊まりする環境を構えるからと、一年と半年の間二人で住んだミッドチルダの部屋から彼が出て行く時も、本音を言えば死ぬほど嫌だったけれど、それが兄の生き方なのだからと引き止めなかった。

兄の生き方をよくわかっている自分だからこそ、引き止められなかったと言った方が正確だろうか。

しかし、休日なんてないかのようには絶えず戦場に出続けているという話を聞いて、さすがにそれはと疑念を抱き始めて。

決定的だったのは、さらに半年近く立ったある日、久しぶりに会えた兄の様子がおかしかった事だった。

どこが、と言われても少し困る。強いて言うのならば瞳、だろうか。眼の前にいてこちらを向いてはいても、どこか違うところを見ているような。それでいて、どこも見えないような。

きつと任務で何かあったのだろうと思っただけれど、だからこそ踏み込んで聞けずに。

しかしピリピリと奔る嫌な感覚に言い様のない不安を覚えていると、はやてが調査を買って出てくれた。六課の設立も大詰めで忙しい時期であるはずなのに、ラインがいるから大丈夫やと、彼女は出来る限りで調べてくれていて。

「担当医療チームのメンバーはころころ変えられとった。固定したら、その内誰かがなんぼなんでもあかんと恭也さんに進言するかもしれへんからやろうな。……ごめん、せやからこんな状況を、掴むのがこんなに遅れた。半年も前から調べとったのに」

「……ううん、ありがとうはやてちゃん」

なのはは礼を言つて、はやてに微笑む。

「なのははちゃん……」

「ここからは、私の役割」

腹は、もう決まっている。

「明日、おにいちゃんとかちゃんと話す、場合によっては上にも殴り込みに行く」

なのははとフェイトとはやて、三人は明日、三ヶ月ぶりに恭也と会って食事をする約束をしている。その席で状況をきちんとして聞いて、兄に自分がどれだけおかしい環境に居るのかわかってもらって。

そして言った通り場合によっては、上層部に弓を引く。

「どうにもならなかったらお母さんに頭下げて、翠屋を継がせてもらうよ。その時は、おにいちゃんも一緒」

「……なのははちゃん」

管理局の仕事は、天職だと思っている。やりがいも充実感も、言うなら自信だつてある。

「だけど、それでも。」

その全てを足したつて、兄への思いには届かない。

世界の平和より、高町なのはは、自分の大切な人を取りたかつた。

「ねえなのは、翠屋、ウェイトレスとか募集してない？」

「あ、してないですー」

「……そ、そこを何とか」

「次期マスターのおにいちちゃんに色目を使うような人はちよつと店内風紀を乱す恐れがあるので」

「じゃあまず真つ先になのはが駄目じゃない！」

「……私は妹なので」

「つ、都合が良い時だけ！ そうやつて！」

不満気にパンパンと机を叩くフェイトが言いたい事はわかつていゑる。彼女もまた、最悪の場合には築き上げた今の地位を捨てる覚悟があると言うことだ。

「……なのはちゃん、フェイトちゃん、私は」

「わかつてる」

「はやてには、はやての道があるから。何も間違つてないよ」

「……ごめん」

なのはとフェイトが管理局を辞めるといふのはあくまで覚悟の話であつて、実際にそこまで現実味があるわけではない。抗議をする事の上にならぬ煙たがられるようにはなるだろうが、大して痛くはない。

しかし、顔を伏せる彼女、はやては違う。

八神はやては春から新設部隊の稼働を控えている身だ。味方も多くいるが、それと同じくらいにレアスキル持ちの十代佐官という事で元々やつかみも多く受けているため、ここで騒動を起こせばその新設部隊の話は最悪、土壇場で飛びかねない。

上層部に喧嘩を売るには、なのはやフェイトとは比べ物にならないくらいと言つてもいいほど、リスクが高い。

「おにいちゃんのためにも、って作ろうとしてくれている六課だもん、それは、私もやり遂げて欲しいって思う」

「……絶対、ええ部隊にする。例えば、なのはちゃん達がおらんくても」特別捜査官として働いてきたはやては元々、大きい組織であるがゆえにフットワークの重い管理局のあり方に疑問を抱いていたらしい。

そんな折、恭也が特別武力制圧官に就任し、実際に小回りの効く少数精鋭の高密度戦力がどれだけ重宝されるかというのを身をもって示す姿を見て、その思いを強め。

そしてだからこそ、彼一人に負荷が集中しないよう、彼と同じように素早く事態に対応できる部隊を作ろうしている。

他にもどうやら秘密の目的があるらしいが、とにかく理由の大きな一つに、恭也の現状があることは確かだ。

「……もつと早く作れていれば、そもそもこんな事にはなつてなかったんやけど」

「でも、意味が無いなんて事は絶対じゃないよ。もし恭也さんが本当に管理局を辞める事態になったら、それこそはやての部隊は必要になるし、後任が出来る人達がいる、って事は恭也さんを説得する上でものすごく大きい」

「……うん」

フエイトの言葉に、面を上げたはやては頷いて言う。

「とにかく、明日やな。明日、恭也さんを説得出来るかどうかや」

「我が兄ながら頑固だから難しいだろうけど、絶対わかってもらうよ」「我が兄ながらっていうか、だからこそ当然ながらって感じだけど……うん、絶対わかってもらう。今のペースで戦うのはもう止めてもらう事、管理局を辞める事も選択肢に入れてもらう事」

明日、とにかく明日だ。

なんて。

どうしてそんなに悠長にしていられたのか。

後に、なのははこの時すぐにでも兄の下へ向かわなかった事を、悔やむ事となる。

古代ベルカに作られたデバイス、魅月。彼女の主人は強く優しく清らかで、そして今、壊れている。

「次の任務は浮遊城の破壊か」

『はい。近くにいる者の精神を汚染する魔法を振りまいているとの事でしたね。突入して核を破壊しようにも、それより先に入ったものの心が碎ける目算が高いと』

「えげつないな。とにかく素早く入って手早く沈めるしかないか」

『……主、失礼ながらこの任務、降りられるわけにはいかないでしょうか？』

魅月の問いに、特武官専用ポートの上で転送を待っている恭也は怪訝な顔をした。

「どれだけ危険なものかわかっているだろう、魅月。早くなんとかしなくてはならん」

『どれだけ危険なものかわかっているからです、主。これは、主でなくてはなりませんか？ 突入せねばならないのはどうしても主ですか？』

「俺でなくてはならない、というわけではなからうが……例えば、武装局員を千人単位で、もしくはなのはレベルの砲撃魔法の使い手を何人か集める事が出来れば、外から撃ち続けて核を破壊する事も出来るだろう。だが、刻一刻と汚染領域は広がっているらしい。であれば、それはどちらも現実的じゃない」

『それは、……そうですが』

「だろう、だったら次善の策だ。素早く突破力のある人間が全速力で城の内部へ突入、精神汚染を喰らう時間を最小限に抑えつつ、破壊。これしかない」

『……はい』

「現場に急行できる人間の内、俺よりも速く事が成せる者は、まあ多分いないだろう。だから、俺がやるべきだ」

『……』

もし居たとしても、貴方は何だかんだと理由を付けて自分が危険を請け負うでしょうに。そんな言葉を、しかし魅月は飲み込んだ。言っても仕方がないからだ。彼はそれを認めはしないだろうし、かといって実際そうする事を止めようともしないだろう。

魅月の誰よりも大切な主は、そんな人間だった。

魅月は、別の言葉を口にする。

『主、覚えてらっしゃいますか？ 妹様達との会食の約束を』

「ああ、覚えている。三日後だろう？」

『ええ、三日後です。前にお話した二日前では、三日後でしたね。つまり、明日です』

「……そうか、そうだったか」

言い切っておいて恥ずかしいなど、恭也は苦笑する。

笑えるものか。

たった二日前の会話が、いつのものだったかも覚えていられないほどに壊れてしまっている心を見せられて。

どうしてこんな事になってしまったのか、なんて言う資格はない。自分は、ずっと見てきた。

度重なる悲惨な戦場での戦いに、どんどんと主の心がすり減っていく様を。

そして半年ほど前、決定的に砕かれる様を。

自分は結局、主を止められない。彼のためならどんな過酷な戦場だって共にしよう。だけど、戦場に赴くことそれ自体を止める役割は、魅月に与えられてはいなかった。

だから、継る。

(……お願い致します、なのは様、フェイト様、はやて様)

彼女たちがどうか現状を把握し、主を止めてくれる事を魅月は祈り続けている。

どうか、どうか。

魅月は願う。

沢山の人を護って、それゆえに壊れてしまった誰より優しいこの人

を。

どうか、救って欲しい。

「転送が始まるな。魅月、準備はいいか？」

『……はい』

そして、また魅月の主は戦場へと赴き。

それが管理局に伝説を作り続けた特武官の、最後の出撃となった。

「お迎え、お迎え、お迎えと」

愛らしい容姿ながら仕事に際してはいつも凛としているのだが、私事になるとやはり生来の可愛らしさが表に出る。フェイトの隣、彼女は鼻歌交じりだ。

とは言え、今のこの一見気軽そうな様子は、自らの気負いを誤魔化しているという感じだろうけど。

もしくは、彼の状況が状況だからこそ、少しでも明るい自分で会おうとする、彼女らしい気遣いかもしれない。

「はやては、後から合流だったね」

「うん、……忙しいのに、説得のための資料をまとめてくれているみたい。八神家の皆も協力してくれてるって」

なのはは言うまでもなく、自分や義兄も人の事は言えないが、やはり八神家の恭也への親愛は並ならぬものがある。ウィータやシグナムはあまり言葉や態度に出さないが、その実、かなり熱烈であるし、穏やかなシャマルやザフィーラもそれは同様。そしてリインフォースのアインスとツヴァイは、控えめに表現しても親愛どころか信仰を捧げていると言ってもいい有り様だ。

主の立場を思えば無茶は出来ないだろうが、最近の恭也の扱いには憤懣やるかたない事だろう。

「これだけはやて達が頑張ってくれてるんだ、あとは、私達だね」

「……うん」

揺れない瞳で頷いたのはと、管理本局内の廊下を歩く。特武官の執務室は、かなり奥まった位置にある。

「本当に、人がいないね」

「この棟のこの階、おにいちゃんくらいしか部屋を作っていないんだっけ」

中枢部と遠いこの配置に、恭也への忌避を見て取るのは穿ち過ぎか。

なんて考えながら道を進んで、最後の曲がり角が見えてきた。あそこを過ぎれば、特武官執務室のプレートも見えてくる。

隣のなのはと揃って、少し速まったその足が。

『——ちついて下さい！ どう……か、主！』

「今の……」

「魅月、さん？」

一瞬だけ止まり、なのはと顔を見合わせて。

『主！ 主！ どうか！』

機械たる彼女が絞りだす、そのあまりに切羽詰まった声音に二人は全速で駆け出した。

「なにがっ!？」

「わからない！ でも魅月のあんな声、普通じゃない！」

どうあつてもやはりフェイトが速い、先に曲がり角を辿り着き、特武官室前の直線廊下の光景を目に映す。

「が、ああああああああああアアアアアアア！」

「……………恭也さんッ!？」

そこには血走らせた眼を見開き、膨大な魔力を発して今にも身体を内側から破裂させんとする、十年近く前の光景を思い出させる恭也の姿があった。

時は、少し遡り。

『主、いかがされましたか？』

「……いや、少し目眩が、大丈夫だ」

恭也は現在、浮遊城相手の任務を終え、特武官執務室の奥に作られた自室へ戻ってきた所。自身の視界を襲った揺れに、少しだけ顔をしかめる。

『目眩……大丈夫、ではありません！ 短時間とは言え、精神汚染レベルAの場所に居たのですよ……！ きちんと信頼に足る医務官……出来れば、湖の騎士にっ』

「わざわざシヤマルさんの手を煩わせる事はない。俺に付いてくれている医療チームに診てもらっただろう。問題ないさ」

『大有りです！ 彼らのあれは戦闘能力に瑕疵が出るような不調がなにかどうかだけをチェックしているものです。決して、健康を保証してはいません。どうか、一度診断の申請を、我が主』

「大げさだ」

心配症な相棒の身体を一撫で、小指から外して専用スタンドの上へと丁寧に置く。

『主……』

「魅月、少し眠る」

『それならば、その装置はお使いにならないで下さい。常用する物ではないでしょう』

「そうなんだろうがな、これなら寝溜めが出来るだろう？ 急な呼び出しがあるかもしれない事を考えると、これがベストだ」

言いながら、恭也は流線型フォルムでどこどころにステータスランプが設えられたヘルメットののような機械を装着する。継続睡眠装置と呼ばれる、深く特殊な眠りを装着者に与える代物だ。

基本的には常用することは推奨されていない。だが、言った通り寝溜めが出来るという利点があるし、そもそも今の恭也はこれなしではまともに眠れないのだ。

ヘルメットの中、目を閉じれば全身から力が抜けていく感覚。恭也を眠りが誘う。

数分もしない内に、意識は闇に落ちた。

足には、そこそこの自信がある。なのに、走っても走っても、距離は縮まらなかった。

目線の先、赤い大きな鳥かごのような容れ物に囚われた女の子達が、柵の間から必死にこちらへ手を伸ばす。

その顔は、救いが来た事に対する希望に満ち溢れていて――。

「……………」

彼女たちはその顔のまま、内側から破裂してミンチになった。

「……………あ、あ」

そうすると、今まであれほど詰められなかった距離は簡単に零になって。

鳥かごへ駆け寄った恭也の目の前にあるのは、血と肉片と、赤く染まった、元は真っ白なワンピースだけ。

「……………」

静かに上半身を起き上がらせて、恭也は継続睡眠装置を外す。

時計を見れば、眠りに入る前から14時間ほど経っていた。

『主、おはようございます』

「ああ、おはよう』

時間的にはもう夕方の方のようだったが、ぐちゃぐちゃな時を生きている恭也にとっては時間帯はあまり意味のない概念だ。

「……………」

ベッドから降り、立ち上がると目眩いに視界を揺らされる。寝起きの立ちくらみだろうか、あまりそうだったものとは縁がなかったのだが。

どうやら、腑抜けた身には喝を入れなければならないか。

「魅月、呼び出しがかかるまでトレーニングルームを使いたい。申請を頼む」

『いえ、主。妹様達との会食のご準備をお願いします』

「ああ、三日後は今日なのか」

『はい』

そうか、それなら仕方ない。フェイトは自制をするタイプだが、妹やはやては無茶をしがちな性格だ。会えるならば会って、体調でも崩していないか確認しておきたい。

「シャワーを浴びる時間はあるか？」

『ごぞいます。どうぞごゆっくり』

「ありがとうございます」

部屋には備え付けのバスルームがある。脱衣所で服を脱ぎ、真っ白なそこへ入ってシャワーを頭から浴びる。

温度はかなり高めに設定してあるはずだが、身体の芯はどこか冷えたままだ。こんな感覚も、もういつからだろうか。

水の流れる音を聞きながら、何とはなしに自らの身体を眺める。

傷痕だらけである。傷痕だらけ、ではあるが。

それらの多くは十年以上前にこしらえたものだ。特武官になってから作ったものもそれなりにはあるが、しかし一年ほど前に眩体・修を会得してからのものは一つもない。

どれだけ身体を振り回し無茶を通して、今や、その証は恭也の身体には残らない。

傷跡が残らない方が痛いのだと言う事は、知らなかった。

「……それも甘えか」

傷を受けた痕を寄りかかる足場としようなんて、唾棄すべき懦弱だろう。この虚しさは受け止めるべき苦しみのはずだ。

目眩なんてものを許す身体に、こんな弱さを零す精神。

どうも自分はたるんでいるようだ。もつともつと、心身共に引き締めなければ。

「……？」

思った傍から、また目眩。不甲斐なさにため息を吐く。

髪と身体を洗うのもそこそこに浴室を出た。タオルで水気を取りインナーを身につけ、髭を剃って髪を整える。シャツを羽織って黒地に赤のラインが設えられた特武官服を纏えば、いつもの格好の出来上がりだ。

寝室に戻れば、スタンドの上で魅月が少々不満気に明滅した。

『その格好で行かれるのですか？ 局内ではなく、市内のお店ですよ？』

「いつ呼び出しがかかるかわからんからな、この方が都合がいいだろう」

『しかし、たまには格好から休暇の気分を作るべきです。それでは休まるものも休まりません』

「わかる話だがなあ……っと」

(魅月の気遣いは嬉しいが、現実には厳しいものだな)

苦笑して、恭也は足早に魅月の下へ。彼女を自らの左手小指に嵌める。

「魅月、残念ながら呼び出しだ。言ってる傍からこれだ」

『……主？』

恭也の耳には、けたたましいコール音が聞こえている。それは腕輪型の端末が告げる、特武官の出撃要請。

「行くぞ、魅月」

言うが早いか寝室を後にして、繋がっている執務室を通り廊下へ出る。相変わらず自分以外に人の気配はまるでなかった。

転送ポートへ向けて、歩き出す。

「なのは達に連絡をしておかねばならんか」

『あ、主！ 主、お待ちください！』

魅月の口調は、なぜか妙に焦って聞こえた。たおやかな彼女には珍しいその様子に、思わず足が止まる。

「なんだ？ なのは達に連絡をして何かまずいことでもあったか？」

『いえ、そうではなく……主、貴方は何を仰っているのですか？』

「なにをって、聞こえているだろうこのコール音……ああ、うるさいからとりあえず切るか……む」

腕に巻きついた端末の細い画面をタップすれば、呼び出し音はひとまず止まる……はずなのだが。

「なんだ？ なぜ止まらない？」

押ししても押ししても、どうしてだろう、音は恭也の耳朵を叩き続けた。

「……なぜ」

『なぜも何も、主、貴方は何を……——コール音なんてもの、私には聞こえません!』

「……は?」

何を、言っている?

こんなけたたましい音が、聞こえない?

『それに、通信端末と私はリンクをしています! そちらにコールが本当にあれば私にも信号が来ています! ご存知でしょう!』

「あ、ああ……だが、現にこうしてコールが」

『ですから、そんなものは来ていません……!』

魅月は、何を言っているんだろう。

自分を戦場へと駆り立てる、無機質な呼び声。それはこんなにもはつきりと聞こえているのに。

『端末のスクリーンをよくご確認下さい! 通信が本当に来ていますか?』

「……どうなって」

投影型のスクリーンを起動してみると、そこには平常状態を表す表示が中央に踊っていた。

そんな馬鹿な、では故障だろうか?

思った瞬間だった。恭也の視界の中、スクリーンの表示が切り替わった。現れた赤を基調にしたそれは、出動要請を表しているものだ。

「……ああ、そう、だよな。やはりそうだ。見ろ、魅月。こうして画面にも」

『本当に、主、貴方は何を……その青い画面のどこが出動要請だということですか!』

青い? そんなはずはない。

画面はこんなに真っ赤で、それはまるで血のような。

『……主、どうか医務室……いえ、そのまま部屋へお帰りを。動かずに、安静に。そして妹様達をお待ちください』

「何を言って」

『間違いありません、やはり精神汚染の影響が……』

「いや、そんな。精神汚染なんて……ん？」

ザザ、つと。まるで掠れるように、恭也の視界全体が切り替わった。切り替わった？

いや、違う。

これはもともところだったはず。

「……俺は、何を」

『主……う？』

「魅月、展開だ！」

叫んだキーワードに反応、バリアジャケットが翻り、魅月も小太刀二刀の戦闘状態へと移行する。

『主ッ!?!』

「どうして、どうしてこんな戦場の只中で、刀も佩かずに突っ立っていたんだ、俺は……」

鞘に収まった魅月の柄に手を添えつつ、周囲を警戒。

禍々しい紫の装飾に彩られた廊下、ちらついた灯りと壁や床に入ったヒビが崩壊を予感させている。

「……目標は？ 俺は、何と戦えばいいんだ？」

慎重に廊下を歩きながら、現状を把握しようとするがどうも頭がうまく働かない。

『主、どうされたのです、主！』

「俺は、誰を護ればいいんだ……う？」

眩いた時だった。

眼の前に、唐突に赤い巨大な鳥かごが現れた。

中には、白いワンピースを来た女の子達。皆、悲痛な顔をしていて。っあ！ と。恭也を見てその顔を輝かせた。

助けに、来てくれたんですか？ 最も恭也の近くにいた女の子がそう聞いてきて。

（そう、だ。俺は）

頷いた恭也に、彼女は柵の隙間から手を伸ばす。導かれるように、恭也は彼女の指に触れようとして。

瞬間。

ぶちゅ、つと。生々しい音と匂いを振りまいて、女の子達は内側から破裂。

ぐちゃぐちゃの肉片に変わった。

「な、……あ」

呆然とする恭也の視界の中、顔の下半分と辛うじて認識できる肉片が、口だけ動かして言った。

護ってくれるんじゃない、なかったの？

「あ、……あ」

希望だけ、持たせて。

「……俺、が」

貴方が、弱いから。

「——っ!!」

両膝を地面に突いて上げたのは、声なき咆哮。

そうか、俺が。

俺が、弱いから。

「あ、あ……あ」

だから人は死んでいく。どこへ行っても、死んでいく。

どれだけ刀を振るっても、相手の命を散らすだけで、誰のことも護れやしない。

足りないんだ、力が。

俺は弱くて、だから。

もっと強くならなくては。

もつと、もつともつともつともつともつともつともつと。

『主！ お止め下さい！』

「が、ああああああああああああああああああッ！」

全力の眩体を自身の身体に掛ける。何度も何度も重ねがけをして、これでもまだ足りない。

「……まだ、まだだ！」

『主、いけません！』

鞘に収まったままの魅月から空薬莢が一発排出されて、恭也の身体に膨大な魔力が漲る。

『主！ 主ッ！』

「もつと、もつともつと……！」

二発、三発とロードが続いて、恭也はその魔力を身体に注ぎ込む。
「……………もつとだー！」

さらにロードは続く。四発、五発の魔力を取り入れた恭也の身体は急激な出力上昇に耐え切れず、ついに血の花を咲かせ始める。

『……………主、いけ、ま、せん！』

「もつと、もつともつと力を……………俺は、もつと、強くなければ……………」
『ぐうううう……………！』

六発目のロードは、しかし途中で止まった。

『……………もう、あの、ときの、ような、こと、は！』

それだけでなく、少しずつではあるが恭也の身の内で暴れ回る強すぎる身体強化魔法が徐々に減衰していく。

『主、どうか……………落ちついて、ください』

「う、あああ、ああああ……………おおおおおお！」

『ぐっ！』

魅月の抵抗を超え、六発目がロードされる。一際大きく血が舞った。

「強く強く強く強く強く！ もつと、もつとだああアアアアア！」

『落ちついて下さい！ どう……………か、主！』

「フェイトちゃん！」

追いつき、こちらの名を叫んだなのはの判断は苛烈で素早かった。
フープバインドで恭也の四肢を縛り、動きを封じる。

身を振り、拘束を引きちぎろうとする恭也を視界に収めながら、
フェイトは脳の回転数を一気に引き上げた。

御神流 神速

世界がモノクロに染まり、その動きを止める。ゼリーののように重い
空気を割いて、フェイトは恭也の下へとひた走る。

未だ、神速の領域内で動く事は緊急事態以外は師から許されていない。しかし、今はその師の緊急事態なのだ。この時に動かずに、いつ動く。

(……どういう、こと?)

走りながら、恭也の無事を願う頭とは別に並列思考で違う考えが、疑念が廻る。

(あれだけの魔力で身体強化を発生させたら、いくらなのはのバインドと言えど引きちぎれるはず。ましてや、レストリクトロックじやなくてフープバインドなんだから)

あの量の魔力できちんと眩体が発動していれば、なのはが全力で抑えにかかっても動きを止めるのは不可能。であるはずなのに、確かになのはのフープバインドは恭也を止めている。

疑念の答えは出ないまま、フェイトは恭也の背後へと回った。神速が解ける。

(ごめんなさい、恭也さん!)

容赦無い電撃魔法をゼロ距離から放った。これは暴れる犯人を確保するための、ダメージを与えるのではなくとかくに意識を奪う事を主眼に作られた魔法だ。

とは言え、身体強化のきちんとなされた恭也相手には、ほぼ効かないと言っていいはずなのだが。ぐらりと。

フェイトの目の前、恭也の身体は自身を固めるバインドに吊るされる形で脱力した。

「おにいちゃん!」

廊下の端からなのはが駆けてくる。フェイトもすぐさま恭也の正面へ回り、跪いて状態を確認する。

皮膚、筋肉の断裂、それに伴う出血はあるが。

「……前のような事には、なっていない」

軽症とは言わないがそこまで重症とも言えない。丁寧に回復すれば問題ない程度の傷だ。

ひとまず安堵の溜め息を吐くものの、すぐにあの叫び声を上げてい

た姿が脳裏に蘇る。

一体、何があつたというか。少なくとも穏やかな事態じゃない。

「恭也さん……」

『お、でし、さま……』

恭也の名を呟いたフェイトの耳に、かすれかすれのそんな声が聴こえて。

「……魅月!？」

目を向ければ、そこにいたのは。

恭也の腰元にあつたのは。

柄に鍔に鞘に、沢山のヒビを入れた魅月の姿。鞘に入った状態なので見えないが、恐らくは刀身も同じ有り様であろうことは簡単に察せられた。

「魅月、こんな、どうし……あ、も、もしかして……」

『わ、たし、には、この、……よう、な、こと、し、か』

ポロリポロリと、まるで涙をこぼすように魅月の身体からその欠片が崩れ落ちていく。

「あ、あ、み、魅月……」

フェイトは、理解した。

彼女が、その身を挺して主を護つたのだという事を。

どうして恭也の身体強化魔法が正常に作動していなかったのか、その理由を。

『どう、か……』

魅月というデバイスは基本的に、恭也の発動する特定の魔法の増幅を行う事に特化した存在である。

そして増幅は、マイナスの方向で行えばマイナスの増幅を、すなわち減衰をさせる事が出来る。

彼女は主の発動させた身体強化魔法にマイナス増幅を掛け、彼の身体が壊れないよう必死に護つたのだ。

『あ、るじ、を……どう、か』

しかし、その代償は大きい。

マイナス増幅なんて、それは出来ると言っても理論的にはと言った

程度のものなのだ。そんな目的でデバイスは作られていないのだから。

それをあんな大量の魔力で発動された魔法相手に行うというのは、例えるなら大量の水流に対して水車を無理やり逆回転させ、堰き止め押し戻すようなもので。

当然と言つていいだろう、受ける事になるととてもない負荷により回路は焼き切れ身体は壊れる。

「おにいちゃん！……魅月さん!？」

『いも、うと、さま……おでし、さま……どう、か』

駆け寄ってきたのはと、見ているだけしか出来ないフェイトの前で、

『あるじを、わが、いと、しい、あ、るじを……』

おすくいください、と。

そんな言葉を残して、ついに魅月の身体は砕け散った。

「……くそがつ!!」

投影型のスクリーンを叩き潰すように振り下ろした右手が、当然ながら空を切り特別捜査官執務室の机を叩いた。

「こんな、こんな……なんでこんな……」

怨嗟の声を絞り出しながら、はやてはスクリーンに映しだされた情報を見つめる。

そこに書いてあるのは、特別武力制圧官専任オペレーターについて、である。恭也の心が壊れるまで、否、壊れてもなお素知らぬ顔で任務を伝え続けた人物。

正確に言えば、それは人物ではなかった。

「私達のような存在、という事でしようか」

「……リイン達みたいに実体が存在するわけやないし、何よりおそらく自我もない。同じもんとは言いたかないな」

「ありがとうございます。ですが、造られた存在という点ではやはり

同じかと」

「それは、……そやな」

「実体がないというのは残念でなりませんね。この手で殺してやる事が出来ません」

「それも、そやな」

医療センターに担ぎ込まれ、意識を失ったまま。恭也がそんな状態になったことで、幸いになどと言いたくはないが状況は大きく動いた。今まで秘匿され続けてきた彼についての情報が、どうやら隠しきれなくなってきたようなのだ。

特に、親類であるなのはの委任さえあればかなりの所まで触れられるようになった。

とっかかりがあれば、あとは深く掘っていくだけだ。狸なんて呼ばれる腹芸も探りに役立つのなら使い倒す精神で調査を進め、なかなか掴むことの出来なかった情報達を得る事が出来ている。

その結果の一つが、今日の前にある特武官専任オペレーターの素性である。

人間と同じように人間と会話をするプログラム、それが彼女の正体だった。

「どうしてこんなものを、などと言うのは愚問なのでしようね」

「せや、な。恭也さんの任務状況はどう考えても常軌を逸しとる。普通のオペレーターに任せたら、どっかで情が芽生えて何かされるかもわからんからな」

言葉を区切り、一段と声を低くしてはやては言う。

「都合が悪いんやろ、上にとつては」

「……管理局上層部、ですか」

「わからんがな、どこが糸を引いとるんかは。……あるいは一番上、最高評議会かもしれん」

「それは、殴り甲斐のある相手でしようか」

「そやなあ、年単位、十年単位で時間がかかるやろうな。攻略のし甲斐は、あるな」

はやての言葉に、ラインフォースは薄く笑った。

「主はやて」

「わかっとする、付き合ってくれるな？　ライン」

「全力で以って」

管理局が憎いわけじゃない。むしろ当然と言うべきだろうが、保護してもらった事にも、罪を償う機会を与えてくれた事にも、恩を感じている。

だが、管理局の一部にはどうやら、それでもどうしたって許せそうにない思想の者達がいるようだ。

「……なありイン、四年ほど前にジェイル・スカリエツテイとかいう阿呆、あいつが結局どうやって恭也さんの情報を掴んだのかって未だにわからないんやったな」

「ええ。……ああ、なるほど」

「いやいや、考え過ぎとは思うけど……ただ」

立ち上がりつつ、怒気を吐きながら言う。

「この落とし前は、いずれきっちりつけさせたる。何年かかろうが、絶対に」

時計の音が、耳に痛い。起きないこの人をこうして眺めるのは、実に四年ぶりの事で。

もう二度と、そんな風には、こんな風にはさせないと誓ったはずなのに。

「……起きるよ、こいつはちゃんと。お前が待ってんだ、ちゃんと起きる」

「……う、ん」

ヴィータの言葉に頷くと、溜まった涙が情けなく零れた。

医療センターの一室、真っ白なそこに設えられたベッドの上で眠る兄を、椅子に座って眺め続けてもうどれくらいになるだろう。

なのはの隣にはヴィータが、向かいにはフェイトとシグナムが並んでいる。フェイトの顔は真っ白で、きつと自分もああなんだろうなん

て思った。

パシユツと、小さな音を立ててドアが開いた。現れたのはザフィーラと、その頭上に座したリンツだ。

「……ザフィーラ、リンツ、どうだった？」

「芳しくは、ないな」

「基礎フレームにまで損傷が届いてしまっていて……。メインコアのデータは無事みたいなのですが、正直、稼動させられるくらいに復旧出来るかというところ……」

シグナムの問いに、深く低い声でザフィーラが答え、泣きそうに揺れる声でリンツが続く。

「管理局の技術部や整備部は、ミッドか近代ベルカの者達がほとんどだ。チューンならまだしも、純粹な古代ベルカの魅月をあそこまでの状態から元に戻すととなると、少々荷が勝つらしい……。将？」

「……だったら、するべきは一つだ」

ザフィーラの言葉に、おもむろに立ち上がったシグナムはフェイトの肩に手を置いた。

「テストタロツサ、私は私に出来る事しか出来ん。だから、精々出来る事をしよう。お前がきつと、そうするように」

「……シグナム？」

「聖王教会へ行ってくる。魅月を直せる人物がいなか探してこよう。なに、劍神と讚える男の愛機が砕けたと聞けば、一も二もなく手を貸してくれるはずだ」

「将、俺も行こう」

「助かる。リンツ、お前は引き続きシャーリーに付いて出来る範囲で修復に当たれ」

「はいですッー！」

シグナムの命に、彼女なりの意気の籠もった声でリンツは答えた。

シャーリーというのは、シャリオ・フィニーノという女性の愛称であり、彼女はフェイトの補佐官である。本業は有するデバイスマイスターの資格が示す通り、デバイスの作製・改造・修復だ。

「つと、シグナム、ザフィーラ？」

シグナム達が出ようとしたそのタイミングで、ドアから白衣の人物が入ってくる。

「シャマル！ ど、どうなんだ！」

がたりと椅子を蹴るように立ち上がって聞いたヴィータに、シャマルは難しい顔をした。

「……そう、ね。なのはちゃん、皆にも一緒に説明してもいいかしら」
「はい、もちろん」

そんなのは聞かれるまでもない事だが、医者倫理観から問うてくれたのだと言うこともわかる。頷いて、言葉を待つ。

「まず、身体の事。こっちはそこまで深刻ではないわ。許容量をオーバーする膨大な魔力で身体強化魔法を行使したみたいだけど、魅月の尽力もあって致命的なレベルには達していない。回復魔法もかけてあるからじきに、いえ、そもそも恭也さんが起きて自分で……眩休・修だったわね、あれを使えばすぐにでも治るわ」

そこで言葉を止めて、シャマルは眉間に皺を寄せる。鋭くなった目つきは、なのはが初めて見る剣呑さを有していた。

「……こっちはそこまで深刻じゃない、って、じゃあ……お、おいシャマル」

慄いたヴィータに頷いて、シャマルは続けた。

「メンタルスキャン……リンカーコアの反応や脳波なんかを読み取って行う精神の健康診断みたいなもので、その結果が」

シャマルの声音から表情から、続く言葉が凄惨なものであろう事は簡単に予想がついてしまつて。

「……う、あ」

心臓が凍ったかのような感覚の中、聞こえたのは小さなうめき声だった。

全員が弾かれたように声の発生源であるベッドの上へ、すなわち恭也へと視線を向けた。

「……………は」

「おにいちゃんッ！」

「恭也さんッ！」

なのはとフエイトは両側からすぐさま彼に縋って。

「……？」

二人に肩を腕を掴まれながら、恭也は目を開いて上半身を起き上がらせた。

「おにいちゃん大丈夫?!? おにいちゃん!」

「恭也さん、恭也さん!」

「キョーヤ、起きたんだな!? 生きてるよな!」

ベッドサイドに座った三人を筆頭に、場のほぼ全員がそれぞれ声を上げ、言葉を掛けて。

「……皆、落ち着いて。少し、静かにして!」

唯一、口を噤んでいたシヤマルが、やがて発したひどく低い声は、病室に重く響いた。

「……シヤマルさん?」

「ごめんなさい、お願いなのはちゃん、少しだけ私に時間を頂戴」

「わ、わかりました……」

彼女の常ならぬその圧に、なのはは頷いた。礼を返したシヤマルは、柔らかくゆつくりとした口調で始める。

「……恭也さん、高町恭也さん。ここがどこかわかりますか?」

恭也はその問いに、普通のテンポから一拍遅れる反応で答えた。

「……ああ、自分、ですか? どこ、……すみません、わかりません」

(……、?)

なん、だろう。

彼のそんな返答には、声音には、口調には、どこかすさまじいまでの違和感があった。

「では、今がいつかはわかりますか?」

「……すみません、それも」

確かに高町恭也のはずなのに、どうしてか。

まるで、別人のような。

そしてその答えは、すぐに判明する事となった。

「それでは、——自分が誰か、わかりますか?」

普通ならば聞くまでもないそんな質問に、

「……………いえ」

兄は、首を振った。

そして、ぼうつとした瞳を湛えた顔を片手で覆う。

「……わかり、ません」

ずるり、と。兄の肩を掴んでいたなのは手が下に落ちた。

「ここは、どこですか？」

殴られたように、視界が揺れる。

「いまは、いつですか？」

カチリカチリと、やはり時計の音はうるさくて。

「おれは、だれですか？」

愛する人の愛しい声が、たまらなく、胸をかき乱す。

第22話 刃を研ぐ

「ううん、記憶が飛んだか……なるほどねえ」

宙に浮かぶ大量のスクリーンの前、白衣の男は難しい顔で呟いた。スクリーンの一つには、スポンサーから送られてきた報告書が表示されている。

「ドクター、これは成功ですか？ 失敗ですか？」

問うてきたのは、ドゥーエと呼ばれる彼の造りだした姉妹の上から二番目の娘だった。

「……ううん、どうかねえ」

薄笑いを浮かべながら、ドクターと呼ばれた男、ジェイル・スカリエツティは煮え切らない答えを返す。

「そもそも私は、大して手を貸していないからねえ」

「精神汚染のロストログアに細工をして、暴走させて出力を跳ね上げたでしょう。トドメを刺したのは、間違いなくドクターかと」

「まあ、それはそうなんだけどね。だけど、特武官を無力化したいと願って、それまで色々手をつくしてきたのは、私ではなく管理局のお歴々だ」

四年ほど前に管理局へ入った高町恭也。こと戦闘においては圧倒的な力を有していた彼は多忙にして危険な任務を多数こなさなければならぬ管理局において、概ね好意的に迎え入れられた。

しかし、そうではないものも少ないが確実におり。

それが事もあろうに時空管理局のトップもトップ、中枢も中枢、最高評議会であったのは間違いなく彼の不幸だろう。

「そんなに脅威ですか、高町恭也は。ただ強いというだけで、そんなに怖いものでしょうか。例えば犯罪者ならば、一番厄介なのは技術型とされていますわ、ドクターのように」

ドゥーエの言うとおり、単純に戦闘力が高いよりも、優れすぎた技術を持つている方が犯罪者としては警戒される。それは、社会に対する影響力が大きいからだ。

「そうなんだがね、高町恭也の強さは異質だから、それが問題なのさ」

「異質？」

「ああ。例えばもちろん、もし管理局全体を敵に回せば彼とて勝ち目はないだろう。しかし、彼の持つ強さの恐ろしさは、そういう計り方をすべきではないんだ」

「では、それは？」

「簡単に言えば、一点突破さ。彼はその気になればどんな権力をもつた人間でも、おそらくは殺しにいける」

後ろめたい事のある権力者としては、実に嫌なタイプだろうと思う。

「管理局全体は無理だろうが、それでもかなりの規模・練度の軍勢を相手にしたって、それが殲滅ではなく突破なら彼に大いに分がある。そして要人警護側の敗北条件は、自分たちの全滅ではなく防衛線を突破される事だ」

スカリエツティをして、彼の襲撃を防ぎきる防衛ラインの構築というのは無理難題だ。

「それに警護なんてものは、どれだけ嚴重にしようと限界がある。常に最高の警戒態勢をとり続けるのは現実的には不可能だからねえ。攻める側の方が有利なんだ。君はよく知っているだろう？」

「ええ、それはその通りだと思いますわ」

ドゥーエは潜入任務がその本領だ。

得心した顔で頷いた彼女に続ける。

「機動力と突破力にこの上なくらい優れ、なおかつ魔導師対策として絶対の優位性を保つはずのAMFも、彼にはさしたる効果を上げられない。そんな特性を持った上で、地はあれほどの力量だ。どうやって止めるんだという話だ」

「なるほど……確かに、異質ですね」

例えば最高評議会の者達が座する一室までの道は超高濃度のAMFで満たされており、その中は禁忌となっているはずの質量兵器で武装されている。

しかし、高町恭也はそれをものともしないだろう。おそらく、場所さえわかかってしまえば二、三時間で制圧は終わる。

そもそも、AMFの効きが彼には悪い。AMFは空間の魔力結合を阻害するもので、当然対象魔法の空間を占める割合が多ければ多いほどその効力を高く発揮する。すなわち、魔法が発動している時間と、及ぼす物理的な範囲の広さに効力が比例するのだ。長く、広く効果を発揮するものほど強く減衰されると言っている。

高町恭也の使う魔法は、しかしながらその真逆を行っている。彼の得意とする魔法は基本的に、自分の身体と刀というごく限られた範囲内にだけ効力を発揮する。その上、さらに悪いことに魔導師の体内とデバイスの内部は、それぞれAMFの効きが悪い。

しかも、常に発動させている身体強化はともかく、斬撃強化はまさしく一瞬だけのものだ。減衰が始まるより先に、効果を終えて消え去っている。

これでは、AMFは本当に大して意味が無い。

そもそも、もし仮に彼の魔法を全て完全に封じるほどのAMFを展開できたとしても、それでもなお戦闘能力は陸戦AA―程度はある。質量兵器で武装した特殊部隊100人で襲いかかっても、仕留める事はまず不可能だろう。

高町恭也という戦力は、魔導師の常識では抑える事が出来ないのだ。

「怖いんだろうねえ、彼らは。いざとなれば自分たちの喉元を簡単に食い敗れる獣が。なにより、飼い慣らすのが難しい。彼は金や名誉に執着しない類の人種だ。従うのは自分の信念のみ、扱いは辛い事の上ない。管理外世界出身という事で、思想や信条、信仰なんかがある。それも測りづらいしね」

「……ああ、それで疑心暗鬼になっているのですね。自分たちの何かがあるとしたら、彼に反乱を考えさせるかもしれないと」

「かなり後ろ暗い事をしている彼らだ、何か、になるかもしれない事の心当たりならそれなりにあるからね。私達なんて存在でもってそれを証明してしまっている」

無限の欲望というコードネームでスカリエツティを開発したのは、誰ということもない、こちらを犯罪者として追ってきているはずの管

理局である。正確には、その上層部のさらに一部、最高評議会だ。

「とまあ、彼らとしてはだからなんとか無力化出来ないものかと躍起になっていたみたいで。……ふふ」

「ドクター？」

「たまらず笑いを零したこちらに、ドウエが不思議そうな顔をす
る。

「いや、なに、伊達に長く巨大組織の裏側で人を操り続けていないなあ
と思ってるね。実に芸術的だったよ、彼らのやり方は」

「どういう事ですか？」

「ドウエ、君は高町恭也のこれまでの出撃データを見たかい？」

「もちろん。全てに目を通しましたわ」

「では聞くが、人があんなに自己犠牲的に動くものと思うかい？ 自
分が壊れるまで、否、壊れてもなお、誰とも知らぬ人間のために戦い
続けると思うかい？」

「愚かしい人間たちの考えはよくわかりませんが、ない事かと」

その答えに、スカリエツティは頷く。

「そう、普通はありえない。高町恭也とて、それは例外ではなかった。
元々自己犠牲的な側面はあったし、弱者を護ろうという志も持ってい
るようだったが、それでも彼だって、さすがにあそこまでの人間では
なかった」

「ですが、現にあの男は……」

「そう、ところが彼は誰も知らない人間達のために剣を振るい続け
た。そこなんだよ、ドウエ。最高評議会のお歴々の素晴らしい手腕
が輝いたのは。……ふふ、ふふふ」

思い出しながら、また笑みを浮かべる。

「自分も、自分の頭脳と技術にはこの上ない自信を有しているが、あ
れは真似出来ない。」

「彼はたくさんの人間を救った。一回の出撃でそれこそ万、十万、場合
によってはそれ以上の人間を結果的には救った事もある。しかしそ
れは裏を返せば、例えばその中の1%の命だけは救えなかった時に、
100人、1000人の死がのしかかるという事でもある」

「まあそうですが、それは仕方がないのでは？ その人間の責任とは言い切れないでしょうし」

「そうだね。そう思って割り切れる者もいるのだろうし、民間人は別として覚悟のある局員がその任に殉じたのなら割り切るべきだと考える者もいるだろう。高町恭也もそうだったかもしれない」

そうだった。

つまり、過去形だ。

「しかしね、その戦闘終わりに、例えばデータをまとめている人間が、任務状況を振り返りながらこう言ったらどうだい？」あの時の判断は、もしかしたら他に最善があったかもしれない。もしあそこでこうしていたなら、犠牲者はさらに少なくてすんだかもしれない、なんてね」

「……それは」

「その少なくてすんだかもしれない人数というのが、戦場によってはさきほども言った通り、1%でも100人、1000人だ」

「重いと、感じるものなのでしようか、人間はそれを」

「一回や二回なら、それでも割り切れる者なら割り切るのかもしれない。だが、それが三回四回どころか、三桁の数で延々と続いたのならどうだい？ 延々と、延々と、あそこはああしていた方が、あそこでああしていたのなら、そうすればもつと人は死ななかつたと、そう言われ続けたのならどうだい？ ……果たして変わらずにいられるかな？」

人間は、良くも悪くも変わる生き物だ。そして高町恭也とて、どれだけ人間離れしているように……。

結局、人間なのだ。

「人を救えば救うほど、自分の一太刀の重さを思い知らされる。あんなに強い貴方の太刀があそこでああいう風に振るわれていたのなら、そんな言葉を浴びせられ続ける。穏やかに、緩やかに、だからこそ消せない確かさで降り積もっていく、それは澱のようなものだ。やがて彼の心の奥底に溜まり、泥沼を作り出す」

「……それを狙ったと？ しかし、そう上手くいくものですか？」

「上手くいくよう、彼へ治療や栄養補給を行う際に、思い込みやマイナス思考を強くするような薬剤を少しずつ混入させて投与させるなんてことを、手駒を使ってしていたという話だ」

針なしの注射による栄養補給は、吸収効率が優れており、早くすむという名目で提案したらしいが、本当の狙いは食事に薬を混ぜ込ませたら不審な顔をされたからだという。

今は失っているようだが、高町恭也は味覚も鋭かったらしい。

「それから、彼が寝る際に使用している継続睡眠装置なんて代物にも、薬剤と同じく思い込み、マイナス思考を強める催眠効果を生産させるよう改造を施してあるとも聞いたね」

そんな面白いものなら作らせてくれてもよかったのにと若干の不満はあるが、局内の支給品に改造を施すという手順に自分のような外部にいるものを囓ませることは、少々難しかったのだろうと理解もしている。

「うーん、何だかまわりくどいですわね。いつそのこと検査や治療と称して、一気に思い切り洗脳かなにか……は、難しいのでしたか」

「任意の人格への塗替えというのは、色々条件があるからね。少なくとも、精神の核であるリンカーコアが正常に動いている間はほぼ不可能に近い。それに、一気に造り替えた人格というのは、何かの拍子にまた元のものへと戻ってしまうことがある。安定性に欠けるんだよ。それはお歴々の好みじゃない」

「なるほど……。しかし、責任を感じさせるような言葉を囁く者達を、あの男の周りに何度も何度も配置したというのはさすがにお歴々とはいえ、厳しかったのでは？」

「違う違う、これが上手いところなんだよ、ドゥーエ」

ひらりひらりと、スカリエツティは薄笑いを浮かべながら手を振った。

そう、そんな単純な力押し、美しくないやり方ではなかったのだ。「君の言う通り、いかな高い影響力を持つお歴々とはいえそんな事をこなすのはなかなか厳しいだろうし、何よりどうやっても不自然さというのが出てしまう。それでは駄目なんだ。自然に、普通に、なんの

は、世界のためを、そして言うなれば彼のためを思って行動しただけなのだ。

「では、ふふっ、ドクター。彼らはそれだけを地道にやっていったのですか？」

「基本的にはそうさ。異様に長生きだからかね、根気がある。少しずつ少しずつ、年単位の時間をかけた。その目的に適う数と質の戦場に彼を送り出してね」

高町恭也が特武官などという役職に着いたのは、彼らの思惑あつてこそだ。もつとも、就任させた時にはまだ飼い慣らすことも考えていたようだが。

彼の素行や素性を観察した結果、ほどなくしてそれは不可能だと判断したらしい。

そしてその時には同時に、手を噛まれたらどうなるかというのも、その実力を目の当たりにして理解したのだろう。

「この出撃頻度はさすがにおかしいな。長い休暇をもらうか、場合によつては管理局を辞める事も考えるか……などと思う頃にはもう遅い」

「あそこで自分がああしていたら、そんな思考を人が死んだ数と共に、薬で偏った頭で幾度となく巡らせ続けたら、まあ、もう無理でしょうねえ」

「そう、無理も無理さ。逃げられない。自分がもし管理局を辞めたりしたら、悲劇の現場に居合わせた1%どころか100%の人間が死ぬかもしれない。全く知らない人間達だが、しかし……なんて考えに、心の中の泥沼に、足をとられるようになっていようだろう」

「自分がそういう風に変えられたとも気付かずに、ですか。いえ、薄々感づいてはいても、というところでしょうかね」

「そう、嵌った時点で逃げ場はない。そしてまたずぶずぶと戦場へ沈み、その度に善意で囁かれ、人格を変質させられ続ける。そんな事が三年半も続けば、実に憐れなタガの外れた自己犠牲人間の出来上がりだ」

「なるほど……勉強になりますわ」

うんうんと、ドゥーエは満足気な顔で頷いている。

「人間というのはやはり愚かだね、彼がそうして苦しみを抱えているという事を、周りの者達のほとんどはしかし、想像できない。なぜなら、彼があまりにも常軌を逸した実力と功績を示し続けるからだ。自分達とは『違う』人間だから大丈夫なんだろう、ってね。彼が痛みや恐怖を感じる事さえ、もはや想像出来ないのだろう」

だから、わからない。” 貴方ならこんなやり方もあったと思いません、そうすれば次はもっと犠牲は抑えられるかもしれない”なんて、そんな自分達の悪気ない、否、彼がより多くの人を救えるようにと願う善意ですらある言葉が、特武官の心を軋ませている事に気づくことができない。

自分たちと同じ人間とはとても思えないから。そんなある意味で仕方のないだろう意識が、彼らをそうさせる。

あくまで、世界のための刃を研いでいるだけのつもりなのに、その刀身を削っているという自覚はないのだ。

「しかし、とはいえ壊すのはもつたいないと思わないのでしょうか？ 自分達の完全なコントロール下には置けないとは言え、あれだけの実力ですよ？」

「なにを言うのかね、もつたいないからこそじゃないか。身体は傷なく、心だけが上手いこと壊れてくれれば、それは素体の状態としては最高だ。つまり彼らの最終的な狙いは、あの実力を持ちながら自分達に忠実な人造魔導師を作り出すことさ」

ちなみに表向きには彼は殉職した事にして、管理局に批判が向かないよう情報を統制した上で”その命を平和に捧げた英雄”というシナリオで世間に対し美談として公開する準備まで出来ているというのだから、本当に用意周到である。

「……貪欲ですわねえ」

「だからこそあの地位に収まり続けているのさ」

欲望がどれだけ優秀なエンジンかというのは、それこそスカリエツティはよくよく知っている。

「まあだけど、そんな最高評議会のお歴々は決して悠長に構えていた

わけではなかったようだけどね。特に異様な回復力を持つ魔法を習得したときには、大いに肝を冷やしたらしい」

あの戦闘力にそんな回復力まで付いてしまつてはもう、本当にどうしようもない。もし反乱を企てられたら間違いなく身が危ない。それこそ、自分たちのこの計画をもし知られたりしたら、終わりだ。

そう判断を出した彼らだが、しかし結局はより出撃頻度と難度を高めるといふ、今までの策を強化する方針しか採れなかったのだから、いかに手を焼いていたかわかろうというものだ。

手勢の戦力で闇に始末することは、どう計算しても不可能だったのである。

「それで、半年ほど前のある事件で、なんとかそれまですり減りながらも耐えていた心をぼつきり折る事が叶ったみたいだが」

「【とりかご事件】でしたか」

「そう、それだね」

今までそれでも途方もなく強い精神力で耐えてきた高町恭也は、しかし、そこでついに折れた。

「だが、最高評議会にとって誤算だったのは、高町恭也がそれでなお、動き続けた、働き続けたという事だ。まさか折れてなお、まだ戦い続けるとはね」

「そこでドクターにお声がかかった、と」

「そう、完膚なきまでに砕け、とね」

そこで先日、元々暴走寸前だったロストログアに細工をして、その出力を跳ね上げる仕事をしたのだ。精神汚染系のそれは、見事に役目を果たしてくれたらしい。

「廃人になると見越していたんだがねえ、記憶を飛ばすことで防御するとは、いやはやあっぱれだ」

「それで、どうされるのですか?」

「どうされるものにも、お歴々がここまでお膳立てしてくれたんだ。わかるだろう?」

「確保、ですか」

「にいいい、と。今までとは明らかに熱量の違う笑みを浮かべて、ス

カリエツティは言った。

「アレ以上の素体が、素材が、果たして広大な次元世界とてあるものか。たとえ聖王が遺伝子だけでなく、肉体としてそこにあったとて及ばない。あれは、そういうものだよ」

「キョーヤ！ もっかい！ もう一回！」

「わかったわかった、そら！」

緑に光る芝生の上を、ピンク色の円盤が走って行く。それを追うのは犬耳の女の子、人型モードを10歳で固定したアルフだ。

跳躍した彼女は空中でフリスビーをキャッチ、シツポをブンブン振りながらそれを投げた男性——恭也の下へと戻った。

「……身体は、もう随分ええみたいやな」

三階に位置する恭也の病室から眼下の中庭の光景を見ながら、はやてはそう呟いた。

「シヤマルも太鼓判を押してたね、後遺症もない、大丈夫だって」

同じく窓の下を眺めるフェイトが言うとおりに、シヤマルの診断でもう身体は問題ない。

身体の方は、問題ないのだ。

「けど、心の方は問題大あり。……記憶喪失、か。お話ではよう聞くけど、身近に起こると……堪えるなあ」

大好きな人の大好きな声で、知らない人間と話す口調をされるとこんなにも痛いんだと知った。

あれから一週間が経って。目を覚まし、身体も癒やした恭也はしかし、記憶は飛んだままだった。

病名で言うならば、全生活史健忘というものになるらしい。日常生

活で使うような一般的な知識は保持したまま、半生の中で積み重ねた体験等のエピソードを思い出せなくなっている状態だ。

恭也の場合は、自分の素性、人間関係、過去の思い出等が軒並み真っ白である。

「……戦闘能力は、かなり落ちてるはずなんやな？」

「間違いなく。日常生活の知識があるなら、反復練習で得た技術である剣術や魔法は忘れていない可能性が高い。身体に染み付いても、いるだろうし」

フリスビーを投げる恭也の動作は実に流麗だ。そのキレは、確かに高町恭也のものである。

「だけど、体験の記憶がないっていうのは、技術を使ってもそれで何が出来るのかわかっていない事になる。……実戦では、危なすぎる」

「戦闘が出来る力は出せても、戦術も戦略も使えんちゆう感じか……」
「うん。もちろんそれでも一般人と比べればはるかに強い事は強いけど、今の恭也さんなら、戦い慣れてる陸・空戦A Aランク以上の魔導師であれば取り押さえられるレベルだと思う」

A A以上のランクを有した魔導師は、決して多くはないがひどく珍しいというほどでもない。

人材として、集める事が困難とは言えない。

現状を好機と捉え、何かしでかしてくるものがないとは残念ながら言い切れない。その前例を作ったスカリエッティも、未だ捕まっていないのだ。

「恭也、そろそろ休んだらどうだ？ アルフも、菓子を用意してあるぞ」

「本当かい!? キョーヤ、休もう!」

「ああ、そうだな。すみません、シグナムさん」

だから、恭也の傍には常に護衛が付いている。今ならばバスケットを手に声を上げた彼女、シグナムと、

「すみませんなどと、我らにそんな言葉は不要だ、騎士恭也。ほら、汗を拭こう」

タオルを手に柔らかな笑顔を浮かべるリインフォースだ。

「い、いえ、リインフォースさん、自分で出来ますから」

「すまん、恭也。そいつはお前の世話がしたくて仕方がないんだ。付き合ってやってくれ」

「将の言うとおりで、ほら、こっちへ」

「シグナムさんまでそんな……いえ、ですから本当に……」

「おうおう、ええなあ」

「リインフォース、嬉しそうだね」

「ま、恭也さんのお世話が出来て嬉しいっちは確かやろうなあ」

だが、穏やかな表情とは裏腹にリインフォースは一瞬たりとも気を抜いていない。シグナムも同じだ。

もし恭也に襲いかかる者があれば、彼らは間断なく応戦に入り、容赦なく挽き肉にするだろう。

魅月の修復にあたっており、直接の戦闘能力の（あくまでヴォルケ
ンリッターズの中では）低いリンツを除いた五名の内、常に最低二人
が警護に付くようなローテーションが組まれている。

これに加え、大抵はなのは、フェイト、はやての三名の内の誰かは
傍にいる。

過剰戦力もいいところと言われそうな布陣だが、スカリエツテイの
前例がある以上、そんな暢気な事を言うつもりはない。

「……シヤマルさんがさ、言ってたんだ」

「……なのはちゃん」

感情を押し殺した抑揚のない声で呟いたのは、自分やフェイトと同
じ窓際ではなく、ベッド近くの椅子に座ったままなのはだった。

「もしかしたら、本当にもしかしたら、……どこかの戦場に連れて行け
ば、おにいちゃんなら記憶を取り戻すかもしれないって」

「なのは！ そんなっ……」

「もちろん、そんなつもりはないよ。シヤマルさんも自分の目が黒い
内はさせるつもりはないって言ってたし。ていうか、……さ」

立ち上がり、彼女も窓際へ来る。日が差しても、その顔には影があ
るままだった。

「楽しそうだよ、おにいちゃん」

「のんびりは、出来るとは思うけど」

「うん、だからさ。だから、……思い出さない方が良いのかもね。今のまま、このまま」

「……なにを、なのはちゃん」

「……ねえ、はやて」

「なんや、ちよおフェイトちゃんからも言っちゃって」

「……何も、しなければ。何もしなければ恭也さんって、今のまま、記憶を失くしたままでいられるのかな」

「……待った待った、二人とも何言うてるんかわかつとる?」

はやての言葉に、なのはとフェイトはどこか虚ろな目で頷く。

「……大切な思い出は……絶対、たくさんたくさんある。だけど、でもさ、はやてちゃん。それでもその上に、あんな記憶が乗っちゃってたら、……全部、潰れちゃう。……おにいちゃんごと、潰れちゃう」

はやてだって、中庭の上に広がる穏やかな光景を見ながら言ったなのはの言葉を、理解出来ないわけじゃない。

「あんな記憶を背負わされて、それで生きていくよりも、いつそ綺麗に真っ白、ならしたままでこれからを生きの方が、いいんじゃないかな……」

わからない、わけじゃないけれど。

「それを、なのはちゃんが言うんか……?」

「……私、だからだよ」

恭也から思い出が消えて、それで一番傷つくのはこの中では少なくとも間違いないのはだ。長く恭也と過ごしてきた彼女は、それだけ多くの思い出を抱えているのだから。

「フェイトちゃんも、同じ意見なんやな?」

「……うん」

フェイト・テスタロッサ・ハラウンという少女は、驚くほど濃密な時間を高町恭也と過ごしている。そしてその記憶を自分の人生における拠り所としている事は、彼女を深く知る人間ならば誰もが察している。

なのと同じく、恭也から思い出が消えれば彼女は身を裂かれるよ

りもなお、きつと辛いはずだ。

「……くおの、馬鹿共が！」

「ったー！」

「わ……！」

二人に思い切り頭突きを喰らわせて、はやては吠えた。

「そりやあ確かに！ 確かに恭也さんは悲しい思いも！ 苦しい思いも！ 辛い思いも！ 痛い思いも！ 嫌っちゆうほどさせられた！

少なくともここ半年に限ったら本当に、地獄みたいな日々を送ったはずや！ せやけどー！」

噛み付くように、揃って不景気な顔を並べた親友二人に言葉をぶつける。

「せやけどー！ それでもあの人は逃げなかったんやろ！ それを、自分に許さなかったんやろ！」

「……そ、れは」

「……」

「記憶が消えたのは、逃げたからやない。最後の最後まで踏ん張ろ思ったから、根本からぼつきり折れて砕けてもうたんやろうが。せやのに、このままでええなんて事にしたら、あの人の意思に関係なく、その時本当にあの人は逃げた事になる」

それで良いのか、それが良いのか、あんたらは。

睨んで問うと、

「……………ごめん、馬鹿な事、言った。……………逃げたかったのは、私だ。……………辛そうな、おにいちやんを、見たく、なくてっ」

ずるり、なのは窓際に背を預けるように崩れ落ちた。

「幸せに……」

掠れるような、しかし確かな声を零したのはフェイト。

「幸せに、なって欲しいんだ、あの人に……逃げたって事にしたって、それで良いなら、そうしてあげたい」

「……………うん。それで、ええならな」

「……駄目なんだよね、そういう人じゃ、ないんだもんね。そんなの、よくよく知ってるのに、ね」

窓の外、アルフと戯れる恭也を見つめるフェイトの背中、少し震えている。

「ごめん、はやて。甘えた事言っ、ごめん」

「……正直、言うとな」

力を抜いて、はやては肩を落とした。

「正直、二人がそう言い出さなかったら、多分私が同じ事言っただ。このままでええんちゃうか、って」

そうしたらきつと、自分と同じような事を二人は言っただろう。

今回は自分が偉そうに吠えたものの結局、誰が言うかの問題だったのだ。

「キョウヤ、今日の飯は上手い魚が出るらしいよー」

「そうか、楽しみだ。……いいのだろうか、一応入院患者だと言うのに、食堂で自由に食べて」

「シヤマルが良いって言っただ、いいんだよ」

「まあ、ありがたいがな。なんだか何を食べても新鮮に思えるんだ。一日の楽しみだよ、食事は」

夕暮れが差し、フリスビー遊びを切り上げたアルフと恭也は仲良く手を繋いで食堂に向かっている。

その後ろにつきながら、シグナムは小声で隣に話しかけた。

「……味覚は、戻っているようだな」

「ああ。……そもそも我らは、それを失っていた事にも気づいていなかったのだから」

リインフォースは苦々しげにそう返してきた。

記憶を失う前の恭也が半年ほど前から味覚を失くしていたというのは、シヤマルが調べ上げた情報である。

記憶を失った今、味覚が戻っている事を見るに心因的なものだったのだろう。

「記憶を失う前の本人は、戦闘に関係のない感覚だから削れたのだらうと話していたらしいが……どう思う」

「恐らくは、間違いだ」

リインフォースの答えには、シグナムも同意だった。

「基本的には禁欲的である騎士恭也が、珍しく自らを楽しませるのが食事だった。それを考えれば」

「無意識だろうが、自罰のためか」

「……その高潔さが、私はたまらなく悲しい」

リインフォースは高潔さなどと表現するが、シグナムはストレートに愚かしさと言ってしまったかった。他人に差し伸べる優しさの、どうして千分の一でも自分に与える事が出来ないのか、あの男は。

そしてそんな男を取り巻いていた状況の劣悪さには、どう控え目に言っても吐き気がする。

特武官、高町恭也。

彼がどうやって心を壊され、記憶を失う事になったのか、全てではないだろうがおおよそは、はやとシヤマル、そして事情を調べ回る事に最適とも言える立場と特殊能力を持つ協力者、ヴェロツサ・アコースの尽力により判明している。

それを自分達、そしてなのはやフェイト達に説明をした時の湖の騎士の表情を、決して忘れる事はないだろう。はやという主を得た事で、誰より穏やかな気質となった彼女が浮かべた、往年のものよりも苛烈な、怒りの表情は。

『原因は、主に三つあるわ』

刃物のような声音で、彼女は説明を始めた。

『一つは当然ながら、ひどく凄惨な戦場へのあまりに濃い出撃密度。それは時間をかけてゆっくりと、あの人の心を蝕んでいった』

次元世界は広大だ。管理外のものも含めれば、相当数の世界が確認されている。悲劇はいつでもどこかしらで、いくつも起きていっていると言っている。管理局は恭也に対し、特に一年ほど前からは遠慮容赦なく、そんな凄惨な現場を確認した傍から出撃命令を下し続けた。

『……元々責任感が強かった恭也さんだけど、あそこまでの任務を受

け続けたのは明らかにおかしい。自分の一つのミスがたくさんの人の死に繋がる戦場に出続けて、たぶん、心を変質させてしまったんだと思う』

責任感が肥大していった結果、異様な自己犠牲に育つというのは、道筋としてはわからないでもない。

わからないでもない、が。

『だけど、……どこかおかしくもある』

きな臭いものを感じるのも確かだ。

シャマルも、何かあるかもしれないと零した。

『二つ目は、そんな中、半年ほど前に起きた事件。……【とりかご】事件と、そう呼ばれているわ』

とりかご。

そう呼ばれるロストログアがあった。見た目は赤く大きなまさしくとりかごといった物で、しかし中に入れるのは鳥ではない。

10代の少女が、もつとも材料として優れていたらしい。

このロストログアは、中に囚えた少女達をグチャグチャに破裂させ、生命エネルギーを吸収して力を蓄えるという性質を持っていた。その吸収効率は凄まじく、蓄えたエネルギーも他の用途へ簡単に転用できるとして、かつて悪魔の兵器として使われていたものだが、それがとある世界の犯罪組織の手に渡った。

当然と言うべきだろう流れで、彼らはその世界の近隣諸国から少女達をさらい、とりかごの『餌』にしてエネルギーを蓄えた。それを魔導砲台や魔石爆弾へ転用し、暴虐の限りを尽くして悪名を轟かせ、結局管理局と敵対、多くの者が縄に付いたが。

『組織の長が、捕まるくらいならってとりかごに蓄えられたエネルギーを使って自爆を試みたらしいの。予想された被害は、その世界の壊滅』

何百人もの少女たちからとりかごが蓄えたエネルギーを暴走させ、増幅用の魔石に籠めて爆発させれば、比較的小さめだったその世界を呑み込むだろう規模になるといのが解析班の予想で。

組織のアジトに突入して止めようにも、膨大なエネルギーに物を言

わせた防衛機構が働いており、その場に居る局員達ではもう間に合いそうになかった。

そんな状況で、特武官として高町恭也が呼ばれた。

任務はアジトへ突入し、エネルギーが蓄えられた魔石に転移装置をセツト、被害を受けるものが何も無い空間へ送って爆発させるというもの。

臆することなく恭也は単身、アジトへ突入。猛烈な勢いで進み、魔石を目指すもタイミングとしては呼ばれた時点で本当にギリギリで。アジト内、東西に伸びる分かれ道で恭也は選択を迫られた。

『とりかごの中にはまだ捕らえられた女の子達がいて、でもそのとりかごと爆発用の魔石は、アジトのそれぞれ両端にあった』

とりかごがまた作動して少女たちを肉片に変えてしまうまでに、救出する事は恐らく出来た。退避させる事も、出来たかもしれない。

しかしそうになると、魔石の起爆に間に合わない。その逆も、しかし。少女たちを取るか、世界を取るか。

特武官が下した決断は、後者だった。

『だって、それは、そうじゃない。……数人の女の子達と世界一つが天秤にかけられたなら、それはやっぱり、世界をとらなきゃいけないじゃない』

女の子と世界、お話でよく天秤にかけられて、しばしば女の子がとられたりもするが。

実際にその二択であれば、世界を取らなければならないのだ。

『目の前、あと一歩だったらしいわ。魔石を転送し終えて、急いで反対側のとりかごが設置された部屋へ走って、入れられた女の子達を見つけて助け出そうとした、その瞬間だったみたい』

助けが来た事に、絶望に染まっていた顔へ笑みを咲かせたその時、彼女たちは肉片と化し。

さらにその後待ち構えていた現実が、恭也の心にとどめを刺した。

『……誰も、悲しまなかったらしいの。女の子達が死んでしまった事に、誰も悲しまなかったって。間に合わなかった恭也さんを責める事

もなく』

彼女達は近くの国の孤児院から攫われてきた娘で、その時に孤児院の大人達は皆殺された。だから、彼女達の死を知らされて悲しむ人は一人もいなかった。

それは人間として、その悲劇に常なら心を痛める事もあるが、当時その世界、特にアジト近辺の、状況を知らされ避難勧告が出されていた国々はお祭り騒ぎだったらしい。

世界の危機が去ったのだ、幾人かの子供が死んでしまったなんてニュースは、大きな大きな吉報に隠れ意識さえされなかった。

目の前で起こった悲惨過ぎるはずの死は、悲劇としてさえ認識されず。

誰も悼まない女の子達の命を救えなかった事が、何より恭也の心を苛み。

肥大した責任感は、最後の最後、誰にも責められないという圧力でもって破裂して。

砕けかけた彼の精神を、その時、完全に壊した。

『味覚障害に記憶障害、そんなものを抱えながら、恭也さんはそれでもその後も働き続けて、戦い続けて、そして、原因の三つ目に当たってしまった』

暴走した精神汚染系のロストログニア。その鎮圧に駆り出されて。

事態を收拾する事には成功したものの、代償に、ついに彼は限界を迎えた。

『……断言するけど、これは恣意的なものよ。管理局のメンタルケア制度は、こんな高負荷任務へこれほどまでの頻度で出す事を許していないはずなの。それなのにこうなったというのは、現状を願った誰かが、確実にいるという事』

それも恐らくは、管理局の極めて上層部に、と。

そう彼女が結んだからこそ、シグナムとリインフォースはこうして局内の医療施設の中だというのに、恭也にぴたりと張り付いているのだ。

特別な娘、なんだと思う。

「おにいちゃん、はい、サラダ」

「ありがとうございます」

「……また敬語っ」

「あ、すみませ……すまん」

言い直したこちらに、彼女、高町なのははよろしいと笑顔を見せて、取り分けてくれたサラダを置いた。

この栗色の髪の毛の可愛らしい女の子が自分の妹なのだという事は、聞いている。鏡で見た自分の顔とは随分似ていなくて、見た目だけでは正直血の繋がりがあるのかどうかは判然としない。

「後はお魚のてんぷら……これとこれと、あとこれも。おにいちゃん、もつと食べる？」

「それくらいで大丈夫で……大丈夫だ」

だが、とにかくこの娘が自分、高町恭也にとってひどく特別な女の子なのだという事は、よくよくわかる。

「今のはセーフとしておいてあげます。妹の寛大さに感謝してね？」

……わっ、おにいちゃん！

無意識、得意気に笑う彼女の頭を悪戯にぐりぐりと片手でかき回す。なんとなく、そんな行動が自分にとってとても自然で。

「もうー！」

「すまんすまん」

どんな表情でも、それこそ今のようにむくれた顔だって、彼女はひどく愛らしく、愛おしい。仕草の一つ一つ、言葉の一つ一つがたまたまなくこちらの琴線に触れる。

この娘を傍に感じていると、それだけで満たされた気持ちになる。じんわりと暖かい熱が身体の奥に湧いてきて、生きているんだという気持ちになる。

きつとこの娘が望むなら、自分はどんな事でもするんだろうと思っ
てしまう。

これが一般的な妹に対する感覚なのかはわからないが、とにかく、
高町なのはという女の子が自分にとって特別なのは疑いようもなく
て。

「……恭也さん、お茶です」

特別というなら、この娘も、なのかもしれない。

ひとしきりなのはとじやれた後のこちらに、備え付けの水差しから
暖かい室温に合わせて冷えたお茶を注いでくれたのは、なのとは反
対の隣に座る金髪の女性。

「ありがとうございます、フェイトさ」

「……………」

「……ありがとうございます、フェイト」

「はいっ」

こちらが敬語で話しかけようものなら途端に泣きそうな顔をする
ので、罪悪感がひしひしと刺激される。

妹は女の子という形容がまだ嵌るが、対して同い年らしい彼女はも
う女性と言うのが自然な雰囲気だ。

そして女性とただ言い表すだけではどうしたって不足だと言える
ほど、完璧と称したっていくらに美しい。

しかし、彼女が自分にとって特別だと感じるのは、その規格外なま
での美しさ故ではない。

「恭也さん、お身体の具合はいかがですか？」

「もう、かなり良くなった。今日はアルフとfrisbeeをして遊んだ
んだが、不調は感じない」

「そうですね、それは良かったです」

完全に馬鹿な妄想だというのは、わかっている。

わかっているのだが、なぜだか彼女は自分の全てを受け入れてくれ
るような、そんな気がするのだ。

纏うその雰囲気は、作り出す空気は、優しく甘くまるでこちらを包
むように。

「食欲もあるようで、何よりです」

「……こんなに俺は健啖家な人間だったのか？ 少々食べ過ぎなような気も」

「いつも、よく食べていらっしやいましたよ。見ていて気持ちが良いくらい」

彼女がその柔らかな笑顔を向けてくれる度に、余計な力が抜ける気がする。

とにかく、安らかだ。彼女が傍にいと、どうしてこんなに安心してのだろう。生きているんだと感じさせてくれるのはに対して、彼女は、生きていていいんだと思わせてくれる。

聞けば、彼女は弟子だという。自分はこんなに優しくされるほどにいい師だったのだろうか。いまいち、信じられない。

「キョーヤは本当にいい食いつぷりで、釣られてアタシも食べ過ぎるんだ」

アルフが、そう言って朗らかに笑う。

良くしてくれるのは、なのはやフェイトだけではない。

今、対面に座るアルフも自分のリハビリに付き合ってくれるし、リインフォース、シグナム、ここにはいないがヴィータ、シャマル、ザフィーラの誰かしらはいつもそばに居て何かと世話を焼いてくれる……だけでなく、少しピリピリとした空気を放っているので、きつと護衛もしてくれているのだろう。自分が狙われるような人間なのかどうかは、よくわからないが。

たまに遊びにくるリインフォースの妹だというリインフォースII という小さな女の子も、驚くほどに暖かい。

「なあフェイト、はやては来ないのかい？」

「はやては技術部と話があるとかで、来れないって」

アルフの問いにフェイトが答える。ヴォルケンリッターというらしい彼らの主、八神はやては、少し話ただけでその利発さがよくわかる少女だった。

話すテンポが速いわけでは決して無いが、その実頭の回転が異様に速く、それでいてそれを感じさせないおっとりとした雰囲気を持って

いて。

彼女が部隊指揮などを取る立場にある人間だと聞いた時は、その若い年齢と可愛らしい見た目があってもなお、とてつもなく納得させられたものだ。

どうやらなかなか多忙な身らしくいつも仕事を抱えている風なのだが、それでも恭也の下へ頻繁に会いに来てくれて、さりげなく、しかししっかりとこちらの調子をチェックしてくれている。

歳下の女の子にこう思うのも情けないが、とても頼りになる人物だ。

「騎士恭也、箸が止まっているが……なにか嫌いなものでも？」

「ああ、いえ、そういうわけでは」

「そうか。だが、食事はしっかりとらなくては。私で良ければ手になろう。ほら、ええと、……あ、あーんと言うのだろうか？　こういう時は」

リインフォースがその白い肌にひと刷毛の朱を乗せながら、芋の料理をフォークで取り、こちらの口元へ寄せてくる。現実感がないほどの美人にそんな事をされると、さすがに少々気恥ずかしいものがあった。

「ストップストップ、ストップだよ、リインフォースさん。そういう役割はね、私がいるから」

「む、そうか？　だが、何もなのはだけしかしてはならないという決まりがあるわけではないだろう？　私も騎士恭也のお世話がしたいのだ」

「ほら恭也、食え」

いやいや、いやいやいやと、なのはとリインフォースがやり合っている間にシグナムが芋をスプーンで掬って前に差し出してくる。あまりに自然なその仕草に、思わず普通に口にしてしまう。

「あ、あ、ああ！　シグナムさん!？」

「騎士は果敢速攻が信条だ、覚えておくといい」

「シグナム、貴女は本当に事あるごと、しれっと美味しい所を持って行って……」

「やる勇氣さえ出せなかつた臆病者には、少なくとも文句を言われる筋合いはないな」

「う……」

シグナムにやつつけられたフェイトが縮こまる。

「……なあ将、主はやてに仕える我らヴォルケンリッターズ、誰がその中核にして序列一位か、はつきりさせる必要があるようだな」

「ほう、構わんぞ」

柔らかな物腰に優しい雰囲気の印象的なリインフォースだが、ここぞと言う時の迫力は、その整った容姿も相まつて強烈極まりない。生半な者では誇張なく、本当に腰を抜かすだろう。

対してシグナムもさるもので、柳のようにそれを流しながらも叩き返す瞳は鋭い。

「はい、おにいちゃん」

「ん、むぐ」

声になのはの方へ向くと、丁寧ながらも手早く口に魚の煮物をつつままれる。それは今日の献立の中で一番恭也の好みだったものであり、さすが家族ゆえの洞察力と言ふべきか。

「あつ、なのは！ ずるいぞ！」

「シグナムさんと喧嘩するんでしょ？ やつてきてやつてきて、ここじゃないどこかで好きにやつてきて。そしておにいちゃんと私の時間を邪魔しないで。あ、おにいちゃん、口元にソースが」

「付いてない！ 付いてないでしょ！」

恭也へ顔を近づけて来たなのはを、反対隣のフェイトが身を乗り出して慌てて抑える。

「フェイトちゃんの側からじゃ見えない位置にあるんだよ！」

「嘘だ！ 私が隣で見えていた限り、口元が汚れるような動作はなかった！」

「……ストーリーカー女はこれだから」

「ス、ストーリーカーじゃない！ ちょっとよく見てるだけだよ！」

彼女達の傍は、姦しくも春の日向のような穏やかさと暖かさがあつて。

過ぎていくのは、どこまでも安らかな時間で。

「……いいんだろうか」

ぽつり、自分の口からまろび出たのはいやに空虚な声だった。

「キョウヤ……？」

「………こんなに幸せで、いいんだろうか」

ここじゃない、そんな気がするのだ。

自分は、穏やかで暖かで幸せな、こんな場所に居るべきではなくて。もつと他に、行くべきどこかがあるような。

「やるべき何かがあるような、そんな気がするんだ……。何か、しなければならぬ事が、俺には」

「ないよ、そんなの」

「………なの？」

柔らかいけれど、芯の強い口調で言った栗色の髪の子は、恭也の手の上に自らのそれを重ねた。

「それがもしあったのだとしても、おにいちゃんはもう十分頑張った。十二分に頑張った。だからこれ以上、あれ以上、やらなきゃいけない事なんて、ない」

「………そう、なの？」

「うん、そうだよ」

そう、なのだろうか。

ずっと背を焦がすこの気持ちは、何処かへ駆り立てるようなこの衝動は、忘れてしまっただけのものなのだろうか。

(俺は……)

恭也はしかしどうしても、そうする事は出来ないような気がした。

「はやてさん、よろしいのですか？ 本当にもものすごい負荷がかかりますよ？」

「構いません、現実性と安全性さえ保てていれば。それは大丈夫なん

「ですよ?」

「は、はい。誓って、一度だけなら、万全に。……ですが、二度は無理ですよ? 一回やったら即メンテコースです」

「一回出来れば十分です。……そう、信じています」

言葉の後半は小さくて、目の前の白衣の女性——管理局第四技術部主任、マリエル・アテンザ技術官には届かなかつたろう。

シュベルトクロイツの製作者であり、リインフォースⅡの創造にも多大な協力をしてくれた彼女の下へはやてが訪れたのは、やはりデバイス絡みの事だった。

白を基調とした彼女の研究室の中、作業台の上へはやての書が置かれている。

「……既存機能の拡張とは言え、古代ベルカのデバイスの改造なんて面倒な仕事、急に頼んでしまつて、本当にすみません」

「いえいえ、やりがいのある仕事は好きですから。でなきやこんな所に勤めてませんよ。それに……特武官のためなんでしょう?」

「……はい」

「彼には、私も友人が命を救われています。いつか恩を返せたらと思っていましたから。……彼は、今は?」

「うちの子達や妹さんとお弟子さん、その家族と、仲良くご飯を食べるはずですよ」

「はやてさんはそちらに行かずによろしいんですか?」

その質問に、はやては苦笑を浮かべて答える。

「狸女には狸女なりの、愛情の示し方つてもんがあるんです」

帰ってくる場所そのものになったり、傍にいて支え、癒やしたり。そういう存在になりたくないと言えどもちろんどうしたって嘘にはなる。

なるがしかし、わかっているのだ。それにははやてよりもずっとずっと、相応しい人がいる。

だから。

せめて自分は、影から護ろうと思う。

回せるだけの手を回して、動かせるだけの足を動かして。

彼が生きていける環境を作る事に、心を尽くそう。

「お、大人な発言ですね……！」

「いえいえ、狸ゆうてもまだまだ仔狸ですよ」

そんな覚悟を決めているくせに、やっぱり正面から愛してもらえる可能性も捨て切れなくらいには、子供なのだ。

「まあ、それはいいとして。……マリーさん、シャーリーと一緒に頼みしてるもう一方はどうです？」

「……そちらは」

途端、マリエルはその童顔に険しい表情を浮かべた。

「目処すら、立っていません。申し訳ありません」

「マリーさんが謝られる事ではありませんが、……やっぱり、難しいですか」

「はい……。どうしても馴染みの薄い古代ベルカ製という事もありま
すし、そもそもその中でも、彼女は奇跡的なバランスの上に成り立っ
ている機体のようです……」

基礎フレームから大破した古代ベルカ製デバイス・魅月の修復。そ
れは一級のマイスター達にも難しい注文らしかった。

「一切無駄のない実用一辺倒な、そしてだからこそひどく芸術的な、あ
のあまりに高い完成度を取り戻すのは、……なかなか並大抵の事では
なくて」

「……Mondシリーズ、なんてリインフォースなんかは言うてまし
たけど」

「私も協力を頂いている教会の方にお聞きして初めてその名を耳にし
たんですが、凄まじいものがありますね」

Entzuckend Mond。それは魅月の元々の名だが、同
じようにMondを冠するデバイスが他にも幾つかあったらしい。

あつたらしい、というのは現在管理局や聖王協会が把握している限
り、現存はしていないからだ。

Mondシリーズと呼ばれたらしい彼ら、Mondの名を冠した
アームデバイス達。

使用者の武技の腕前に強く依存するコンセプトを非常に高い技術

で貰いた、それでいて変形機構も持たない実に玄人好みの仕様は派手に語られる事こそないものの、かつて彼らを十全に振るつた騎士達は例外なく比類なき実力を誇ったという事もあり、知る人ぞ知る伝説のデバイスシリーズ、らしい。

魅月はどうも、その最後発の二振りだと言う話だ。

「幸いなのは、彼女の人格というべきデータを格納しているメインコアの中枢部には傷がなかった事です。とにかく引き続き、手を尽くしてみます」

「お願いします、どうか」

恭也がこれから先、戦場へまた赴くことがあるかないか。

そういう事と、もはやそれは関係がないのだ。

魅月という愛機は彼にとって、なくてはならない存在のはずだから。

「どうされました？ 恭也さん」

食事を終えて戻ってきた病室のベッドの上、自分の左手をじっと見つめる恭也へ、シグナム・リインフォースと護衛当番を交代したシャルは問いかける。

我ながら、白々しいなと思いつつながら。

「……いえ、なんと言いますか、なにか物足りない気がして」

「物足りない、ですか」

「ええ。小指が……その、寂しいというか。……指輪の痕が、よく見たらあって」

彼は右手で左手の小指、その付け根あたりをそつとなぞる。

「男が指輪を日常的に付けていて違和感のない指と言うと、俺の価値観ではこの隣くらいしかないはずなんですが……いや、記憶がないの

に価値観なんておかしいでしようか」

「そんな事は。……恭也さん、ちなみに、寂しいだけですか？ 何か、他の感情が湧いてきたりはしませんか？」

「……そうですね、普段から感じている焦燥感が、この指を見ていると少し強くなります」

「そう、ですか」

（魅月には申し訳ないけれど、今はまだ時期が悪いわね……）

今の恭也の精神は、記憶を失った事で奇跡的にバランスが取れ、なんとか安定している。だからと言ってこのままでいいわけでは決してないだろうが、無闇に突くのは危険が大きい。

魅月は間違いなく恭也にとって替えの効かない無二の相棒だろうが、その役割が役割だけに戦場の記憶を想起してしまう可能性が非常に高い。

そこまで踏み込むのは、もっと時間をかけなければならぬだろう。

「……恭也、そろそろ消灯だ。寝るといい」

「ああ、もうそんな時間ですか。わかりました」

人型モードのザフィーラが、彼らしい無骨な言い方で話を変えた。素直に領いた恭也に訝しんでいる様子はない。主人であるはやとと共に腹芸を使う事の多い自分が、なんだか少し虚しくなった。

「それでは恭也さん、また明日」

「隣に詰めている、何かあったらすぐに呼ぶといい」

かけていた椅子から立ち上がり、壁によりかかって立っていたザフィーラと共に出口へ向かう。

「はい、ありがとうございます」

やはりどこか他人行儀が抜けない彼だが、それでこちらが硬くなっているはどうしようもない。柔らかく笑みを返し、部屋の灯りを消してシャマルはザフィーラと共に廊下へ出る。

「シャマル、恭也はどうだ」

ドアを閉めると、ザフィーラが小さな声で問うてきた。

「……そうね、魅月について言っていた時もそうだけど、時折記憶を呼

び覚ましそうな気配を見せる事はあるわ。記憶喪失という症状の事だけを問題にするのなら、治るのはそう遠くないでしょうね」

「それ以外の、それ以前の事については、どうだ」

「根は、深いわ。今の状態に陥った原因が連続した辛い戦いだっというのとはそうなんだけど、さらにその原因っていうのが存在しているの」

落とすように言いながら歩く廊下は、暗く静かだ。この階に入っているのは恭也だけである。警護をしやすいように多少無理を言っ、そういうところを使わせてもらっている。

「恭也さんは、そもそも自分を愛する事がきつと致命的に苦手。慈愛に溢れた人だけど、自愛する事だけはうまく出来ないみたい。それでもあそこまでの自己犠牲は持ちあわせていなかったけれど、それが問題の根っこにあるのは間違いないと思う。それを解決とまでは言わなくとも、改善出来なければ、もし記憶が戻って精神を持ち直したとしても、同じ事をまた繰り返してしまう可能性すら、ある」

「……何か、俺達にしてやれる事はないのか」

「根本的な解決は、……私達には無理、かしらね。……それが出来るのはきつと、彼の心の奥底に触る事が出来る人だけ」

それは、誰だろうか。

そんな考えを巡らせた、その時だった。

「……つなは!?」

「爆発音……、む、火の手も上がっているか」

窓の向こうから広がった轟音に、慌ててその方向を見てみれば暗い夜の帳の中に赤い炎が踊っていた。

こことはそれなりに距離があるため、今すぐにどうこうという事はないだろうが、だからと言っのんびりとしていられる精神をシャマルもザファイラも持っていない。

歩いてきた廊下を全速力でとって返し、恭也の病室のドアを開け放とうとすると、それは向こうから開いた。引き戸なので激突はしないものの、それなりに驚く。

「恭也さん! 無事ですか!?!」

「俺は何とも。それより、さっきのは……」

「事件か事故かはわかりませんが、多少は物騒な事態が起きたみたいです。それなりに遠くとは言え何かがあるかわかりません。危険ですので、一緒に避難を……恭也さん？」

眼の前に居る彼の瞳は、しかしこちらを見ていなかった。

視線を追えば、その先には闇の中に灯った赤い光。

背中が粟立ち、まずいと思ったものの間に合わなかった。

「……行か、なければ」

「な、何を言って」

「俺は、行かなくては……そうだ、俺は、——助けなければ」

「だ、駄目です！」

「……恭也、落ち着け！」

廊下へ出ようとする彼をザフィーラと共に必死で押しとどめる。

彼が魔法を使っていない事もあって、なんとか力比べではこちらに分があるようだった。

とは言え、それはただの対症療法に過ぎない。

「俺は、助けなければ。人を、助けなければ。この手で、護らなければ。

俺は、俺は……」

「駄目ですよ！ 落ち着いて下さい！ 貴方は少なくとも今！ 避難

をしなければならぬ人なんです！」

「違う、ちがう、おれは」

「恭也！ 聞け！」

恭也の肩をその大きな手で掴み、ザフィーラが吠える。

「お前は病み上がりで、今現在、的確な判断が出来るほどの記憶を持ちあわせてもいない。そんな人間が現場に行った所で悪戯に事態をかき回すだけだ」

「……っ」

揺るがない芯を有するどっしりとしたその声音と、シヤマルからすれば少々聞かせたくのない危うい言葉も混じっているものの理路整然とした論に、恭也の瞳に少しだけ理性が戻る。

「……そう、かもしれない。だが」

「俺が行く、それで納得してくれ」

ちらりと、ザフィーラがこちらを見てくる。護衛の二人体制が崩れる事にはなるが、この状況では仕方ないだろう。シャルが頷くと、彼は続けた。

「これでも腕には覚えがある。任せておけ」

「ザフィーラは私達ヴォルケンリッターの中でも、護りの役割を担っています。彼が行けば大丈夫ですよ」

現場の状況などわからない今、それは何の根拠もない言葉だが、だからこそ自信満々にシャルは言う。

「ザフィーラさんが……」

「任せろ。お前は今、避難するのが最善だ」

「……俺は」

現場に行つてまともに役に立つのか、記憶を失っている彼はそこに自信は持てないらしい。ザフィーラの言葉に、なんとか納得を見せたような表情で。

二度目の爆発音が響いたのは、そんなタイミングだった。

「……一度目より、大きいか」

「みたいね……一体何が——恭也さん!？」

ザフィーラとシャルの身体をすり抜けて、恭也が窓に向かって走る。記憶はなくなるともさすがの身のこなし、抜かれてからようやく気付くような有り様だ。

だが、行かせるわけにはいかない。

「待つてくださいいー!」

窓や廊下にシールドを張って、すんでのところで行く手を遮る。

「……通して、ください。おれは!」

こちらを見やった彼の瞳は、わかりやすいほどに危うい。間違つても炎燃え盛る現場へ連れて行つていいものではない。

(……どうする、いっそ気絶させて。……いえ、どういう形であれ攻撃を加えるのは避けたい、刺激としては不用意に過ぎる)

高速に回転するシャルの頭が、最適解を出さんと唸るそんな時、状況はまたしても変化した。

「高町さん！ シヤマルさん、ザフィーラさんも！」

廊下の向こうから、ナース姿の女性が駆けてくる。

この医療センターで働いている局員の一人で、同じ医療に携わるものとして前々からシヤマルと親交の深かった彼女は、恭也の担当の一人でもある。ここに恭也を預けた理由の何割かには、彼女が居てくれるからというのもあった。

「無事ですか！ 迎えに……ど、どうされたんですか？」

ほどなくしてこちらに辿り着いた彼女は、シールドで行く手を阻まれている恭也の姿に目を丸くする。

「……迎えというのは？」

「警護隊が守っている即席の避難所に。そこなら安全ですので」

シヤマルの問いに、彼女は間断なくそう答えた。

はやてとシヤマルが念入りに恭也の入院先にと選定しただけあつて、この施設はかなり警護がしっかりしている。配置されている人員は手練揃いであり、彼らが守っているのであればその避難所というのはおいそれと手出しはされないだろう。

今迎えに来ている本職は看護師の彼女も、いざとなればかなり戦える人物である。何年も戦場の前線に身をおいてきた歴戦の局員だ。

(……なら、こうするしかない)

何より今、逼迫しているのは彼の精神状況。それこそが一番カバーせねばならない点のはずだ。

胸の中、最善と信じる決断を下した後は早かった。

「恭也さん、現場には私も行きます」

「……シヤマルさん？」

「揃えば無敵と呼ばれる私達ヴォルケンリッター、全員とは言いませんがその内二人でも駆けつけければ大抵の事態は何とでもなります。私は知つての通り、医療魔法も使えますので怪我人が居てもすぐに治せます」

意識して揺れない声を作り、何とか納得してくれと願いながら言葉を向ける。

「最大限の努力をする事をお約束します。……ですが、もしその場に

恭也さんがいらっしやいますと、私達は貴方の警護にどうしても氣を取られてしまう。ですので、どうか彼女と一緒に安全なところへ避難して頂きたいのです」

ザフィーラと看護師の女性に目配せすると、彼らは頷きを返してきた。

「恭也、それが今この場における最善手だ。被害を最も少なくする方法と言ってもいい」

「ザフィーラさんは強い防御魔法を使えますし、シヤマルさんは医療魔法も、何だつたら現場指揮も執れます。お二人に十全にその力を振るって頂くためにも、どうか私と一緒に」

記憶を失った上に精神の安定を欠き、混乱してはいるものの、基本的に高町恭也という人間は理性的である。特に非常事態であればあるほど熱願冷諦、最善を尽くそう熱く願い、それゆえに冷静に物事を観るタイプだ。

その本質に賭けたシヤマルの策は、功を奏した。

「……わかりました」

項垂れるように頷いた彼を、くれぐれも頼むと言って預けると看護師の女性は意思の強い瞳でこちらを見返し、しっかりと返答してきた。

彼女が来てくれて、本当に良かったと思う。

もし迎えに来たのが名前も顔も知らない人間であったなら、いかに実力があつたとしてもこんな手は取れなかった。

それなりに付き合いの長い、信頼の出来る人間が来てくれた事に感謝の念を浮かべつつ、シヤマルはザフィーラと共に炎の踊る現場へと向かった。

「こちらです、高町さん」

「……はい」

頼りない足取りで後ろを付いてくる彼の、その手を時折引きながら辿り着いたのは一階に位置する中庭に面した部屋。リハビリに使われるそこは、それなりの広さを誇っている。

「……避難所、なんですよね？ 誰もいませんが」

「いえ、そんな事はありませんよ」

ガランとした室内の様子に首を傾げる彼に微笑んで、指を鳴らす。

「ほら、あそこに実は二人居ます」

すると、部屋のそれぞれ向かって右の隅と左の隅が陽炎が起きたかのように揺らめき、そこへ二つの人影が現れた。

「……どういう」

「最初に言った通りですわ、高町恭也様」

言いながら顔に手を当て、そして仮面を解除する。露わになる本当の顔は、先ほどまでとは明らかに別のものだ。

それに、変化したのはそこだけではない。髪や体の骨格、声まで変わりきって、今や、服装以外は完全に別人である。

「改めて自己紹介を。お初にお目にかかります、Dr. スカリエツティが次女、ドウエと申します。ああ、向かって右が妹のトーレ、左が同じく妹のクアットロですわ」

ドウエの紹介に、トーレは腕を組んだ姿勢で泰然としており、クアットロは神経質そうに親指を噛んで時折辺りを見回している。

「貴方をお迎えに参りました」

「……貴女方がどなたかは存じ上げませんが、身を預けるには不適切に思えますね」

「あら、連れないことを。大丈夫です、ドクターは優しくして下さいますよ」

優しく、素体として弄り回して貰えるだろう。そうしたら晴れて自分達のお仲間だ。

この状況は、言うまでもなくスカリエツティが企図したものである。美しくないという理由で人死にこそ出していないが、爆発騒ぎもナンバーズの姉妹たちが起こしているものだ。

チンクをリーダーにした彼らが恭也の護衛に付いているヴォルケ
ンリッターを引き離し、眠らせた看護師と入れ替わったドゥーエが手
引きをして高町恭也を連れ去る、そんな作戦は今のところ順調であ
る。

「逃げさせては、くれませんか」

「ご自身がそれを許されないくらい魅力的な男性であったことを、後
悔なさって下さいな」

あとは、目の前の高町恭也の意識を奪い、確保して強制転移装置を
発動させれば任務は完了だ。

ナンバーズなど登録済みの者は別だが、リンカーコアが活動してい
ると干渉を起こすため、それが無い人間かあっても代わりに意識がな
い人間にしか効力を発揮しないあの装置は、とは言えやはり便利は便
利だ。

「トーレ、クアットロ。私がこのまま意識を落としてしまうわ」

「……おい、予定と違うぞ」

右手に固有武装であるピアニッシングネイルを起動させ、戦闘態勢
を取ったドゥーエに、トーレから苦言が飛ぶ。

「見る限り大丈夫そうじゃない？ 予定は予定、他に素早く事を成せ
る手段があるのならそちらを取るべきよ」

「……おい待っ」

「お休みなさい特武官殿！」

スタンの電流を右手の爪に生じさせ、一息で踏み込み、胸もとにそ
れを打ち込まんと腕を伸ばして。

「……っ!？」

刺突が空を切ったと認識したその時には、脇腹を強烈な衝撃が襲っ
ていた。そのまま吹き飛ばされ、壁に叩きつけられる。

「馬鹿姉が！」

彼に蹴られたのだという事を理解した時には、目の前には立ち塞が
るように構えを取ったトーレがいた。

「……—身体が、動く。俺は、やはり、そのための生き物なのか」
その向こう、どこか熱に浮かされたような口調の高町恭也が見え、

ドゥーエの背は今更ながらに粟立った。

「敵というなら、排除させてもらおう。……そんな事しか、俺は出来ない」

黒く、濃く、重く冷たい、空間すら歪んで見えるほどの殺気。彼を誘き出したはずのこの部屋がまるで、自分たちが狩られるための檻にも思えるほどの。

戦闘圏内を300mに限るのであれば、間違いなく次元世界群で現在、最強と言っている。

そんな風に評していた自分たちの主の言葉を、疑っていたわけではない。わけではないが、記憶を失っている事でその戦闘能力は格段に落ちているはずだという論を重視していたし、実際会話を交わしてみてもこれならいけると踏んだのだが。

「記憶が戻ればその戦闘能力は上がる……あの爆発を見て触発でもされたんだろう、事前調査の結果よりも危険だ」

「そのようね……助かったわ、トーレ」

「次はないぞ」

「わかってるわ」

「お、お姉さまだったら、ら、ゆ、油断したら、だ、だめですよ、だ、だってこいつは、あ、あいつの、あれの、兄なん、なん、ですから」

クアットロの口調は非常に怪しいが、これはもう数年も前からこうなってしまうので今更どうこうというものじゃない。

情緒不安定な彼女をこの場に連れてくるのは不安があったが、それでもここまで侵入りこむためにはその隠蔽能力と電子戦技術がどうしても必要だったのだから仕方ない。

「し、慎重に、い、いきましよう」

「……そうね」

身体を起こし、腕に巻きつけた装置のスイッチを入れる。

「トーレ、クアットロ！ 予定通りに！」

「……なにを、っ！」

困うように展開したこちらに警戒の眼を向けてきた彼が、その瞳を揺らす。

「……………っ!?!」

ふらりふらりと身体を大きく振って、頭を両手で抑え始めた。ほどなくして床に膝を突き、荒い呼吸で肩を上下させる。

「効いているわね……………」

ドゥーエ、だけでなくトーレとクアットロも合わせ、三人が起動させて今、高町恭也へ向けているのは精神汚染波の発生装置だ。

件の精神汚染系ロストログアを弄った際に得た知見を元に、スカリエッテイが開発したものである。健全な精神を持つものには大して効果は上げられないが、心に傷を持つものにはそれなりにえげつない影響を与える。

常ならこうはいかなくなつたろうが、今の特武官には効果抜群。

「あ、が、あ……………ぐッ!」

まともには戦わずに、これで苦しめて意識を奪えというのがスカリエッテイの指示だ。

「が、あ、あ、ぐううううう……………! ああああああああ!」

「いい悲鳴ですわ! さあ、眠つて楽になりなさい!」

「うううううう……………」

瞳孔を開き、苦悶の声を絞り出す高町恭也はいかにも限界に見えるが、しかしなかなか意識を落としそうで落とさない。

さすがと言うべきだろう、壊れていてもなお強靱な精神だ。

「仕方ない、出力を上げるわよ」

「いいのか? 本当に廃人になるぞ」

「何か問題が? ドクターは元からそのつもりだったのだし」

「……………了解した」

武人気質というべきなのか、トーレは手段を選ぶ事がある。ドゥーエに言わせてしまえば、甘っちょろいのだ。

妹達に悪影響を及ぼさなければいいのだけど、そんな事を思いながら装置の出力レベルを最大まで上げる。

「……………ッ!!」

身体を強張らせ、声の出ない悲鳴を上げて苦しみに染まりきった表情の高町恭也は、どう見てもそろそろ終わりが近い。

「……憐れなものねえ」

ため息を吐いて、ドゥーエは零す。

「報われて幸せになるべき人間なんでしょうけど、それがこんな最後ですものね」

「あ、ぐ、がああああああああああッ！」

やっている自分たちが言うべき台詞ではないのだろうか、なんとも不憫な男である。

人をさんざ救っておきながら、自分はこんな闇の中、絶望にすり潰されて終わるなんて。

「優しい事も強い事も、人間的にはプラスの部分なんでしょうけど、それが過ぎるとこんな結末を迎えるものなのね。やっぱり、人間というのはアレな生き物ね」

「ドゥーエ、少し黙れ」

「あらトーレ、なにか気に障った？」

「いらん侮辱を浴びせる必要はないだろう。こいつはこれから、私達の仲間になるんだ」

「戦闘に使えるような記憶以外は全部消しちゃうんだから関係ないわ」
「……」

ドゥーエの言葉に、不機嫌そうにトーレは押し黙った。全くもって度し難い妹である。同じ主に生み出されてどうしてここまで違うのか。

いや、違うからこそ生み出された事に価値があるのだろうか。主は、そんな考え方をする男だ。

「……………た、す……………」

「……………あら。ふふ、あらあら！」

高町恭也の口から零れた言葉に、ドゥーエは思わず顔を綻ばせた。「助けを求めるなんて！ 貴方にもそんな感情があったのね！ ふふ、でもぎあんねん！」

絶望を念入りに擦り込むように、はつきりと言ってやる事にする。

「来ないわよ！ 助けなんて！ 貴方の妹も弟子も、こことは離れた場所に居る事が確認されているわ！ 記憶関係で腕利きの医師にご

相談に行っているの、貴方のためにね！ 夜天の王は騎士達と一緒に
聖王協会！ お友達の艦隊提督と書庫長は無敵書庫で健気に資料を
お探し中らしいわよ！ ついでに言うならワンちゃんも弟子の所に
帰っている！ そして警護についていた二人は、私の妹達と交戦中
！」

タイミングとしては、完全に狙ったものだ。彼を囲む戦力は異様に
高い。まともに相手をするのはナンバースと言えどいかにも避けた
く、こんな状況になるのを待っていたのだ。

はつきり言っただけの好条件が揃ったのは、千載一遇といつて
いくらいの幸運だろうが。

「た、……………す……………け」

「あつははははは！ 来ない来ない！ 助けなんて——」

「た、すけ、……………な、けれ……………ば」

「……………は？」

哄笑を途中で思わず止めて、耳を澄ましたドゥーエはもう一度、そ
れを聞いた。

「たす、け、な、ければ……………おれ、は……………まもら、な、け、れば」
ぎ、と。

下がったのは自分の足だった。一步、確かに下がらされた。

精神を擦り潰されんとするあの男が、まさかこちらに戦意や殺気を
向けたのではない。ドゥーエに警戒や恐怖はなく、ただ単純に、慄い
たのである。

「……………よくもまあ、……………ここまで人間が出来上がるものだわ。お歴々の
手腕を讃えるべきか……………大元の素質が大きいと見るべきか。どうに
せ、貴方、本当に不憫な男ね」

「ま、も、ら、……………な、けれ、ば」

「面白いけれど、あんまりグズグズもしてられないの。……………さつさ
と眠りなさい！」

装置にエネルギーを大量に叩き込み、限界以上を出力する。

「あ、あ、……………あ」

「お休みなさい、次に目覚めたら新しい自分が待って……………」

高町恭也がその意識を遂に闇へ落とさんとして、この任務も無事終わりだなと思いかけ。

甲高い音を立てて盛大に窓が割れ、横殴りに襲った衝撃にドゥーエの身体が高町恭也に蹴られた時のように吹き飛んだ。

「何だっ!?! 何者だ!?!」

「だ、だ、誰?！」

臨戦態勢を取ったトーレとクアットロの誰何に、窓から押し入った身を鮮やかな体捌きで着地させた彼らは、鈴を慣らすような声で応じた。

「あんたらに名乗る名はないよ、ただね」

「彼には私達、ちよつとじゃ済まないほどの負い目があるの」

ショートカットの方が素早くトーレの前に立ち塞がり、ロングヘアの方が魔法を行使、煌めく結界で高町恭也の身体を覆った。

「く……やってくれるじゃない!」

先ほど、こちらの身体を襲った衝撃波はロングヘアの放った魔法だろう。ドゥーエは吐き捨てるように悪態を吐く。

「……猫ちゃんが、随分と勇ましい!」

「猫ちゃん扱いとは、そんな事を言われたのは何年ぶりかね」

不敵に笑うショートカット。その後ろのロングヘアは対照的に表情一つ変えない。

人によっては愛らしいなど言うだろう猫耳なんぞを持つ彼らだが、その身のこなしにも奔る魔力にも尋常ではない力量が伺える。

「ほう……これはまた大物が出てきたものだな」

「なあに、ロートルだよ。ただ、若いもんにはまだまだ負けるつもりはないけどね」

「トーレ、ハッいつらは……」

ドゥーエの問いに、トーレはどこか嬉しそうに答える。

「かつて管理局に所属する中で最強の一角を担っていた使い魔姉妹と聞いている。主人はグレラム元提督だ」

「……あの闇の書事件の」

仮面の男として暗躍していた、あの二人組み。

名は確か、シヨートカットがリーゼロッテ、ロングヘアがリーゼアリア。

「爆発騒ぎの状況を確認して、ヴォルケンリッターが来たから大丈夫かと戻ってくればこれだ。まったく、悪党つてのはどうしてこう抜け目のない」

「貴女方こそ、主人の出身世界で穏やかに余生を過ごしていたはずでは？」

「だったんだが、可愛い弟子に頼まれてね。それに、彼のためと言えば私達にも否やはない」

つまり、元から護衛についていたと言う事だろう。それもおそろく、他の人間には知らせず気付かれず。

絵を描いたのは可愛い弟子こと、クロノ・ハラオウンか。義妹と共に高町恭也に並ならぬ執着を見せると聞くが、なるほど納得である。

「それで、私達の相手をして下さるわけか。光栄だ」

「トーレ、やる気？」

「高町恭也を奪取するためには必要だろうか？」

トーレの言はもつともではあるが、この二人はまともに相手取って良さそうな敵ではないように思える。

ナンバーズの中でトップの近接戦闘能力を誇るトーレはいいだろうが、ドゥーエはそこまで戦いに特化したタイプではない。自分の身を守るくらいの事は出来るが、暗殺と潜入こそが本領だ。クアットロなどは幻惑使いの支援系であり、直接戦闘にそもそも、あまり向かない。

「……そう、ね」

しかし、数の上では一応は三対二。そして何より、奴らは高町恭也を防衛しながら戦わなければならない。

張られた結界のせいで汚染波は届いていないようだが、どうやら高町恭也の意識はもう落ちている。あれを突破して装置を起動させればこちらの目的は叶う。

そこまで分が悪い戦いではない、か。

「何か勘違いしているみたいだけどね」

改めて戦闘態勢を取ったこちらへ、リーゼロッテが肩をすくめながら言った。

「三対二だと思ってるならお気楽だとしかないよがない」

「私が準備をしていた事に気が付かなかったのかしら？」

リーゼロッテが続いて、押し黙っていたリーゼアリアがそう言うのと、地面に青色の紋様が浮かび上がった。

四角形を基調としたミッド式の魔法陣、反応からして、それは。

「……転送陣、いや、召喚陣か！」

トーレが言ったのと同じ、そして人影が光と共に現れる。

「——法の裁きは、受けてもらう。が、その前に」

発動された陣で跳んで来たその男は、身を纏うバリアジャケットにも負けないドス黒い殺気を放っていた。

「四肢か、悪ければ首をもがれるくらいの事は、覚悟しているんだろうな……ッ!!」

「……クロノ・ハラオウン！」

現れたのは管理局の現艦隊提督にして、二元執務官。

「アリア、ロッテ、ありがとう……。この礼は必ず」

「いえ……もつと早く助けに入れば。ごめんなさいね」

「責めるべきは目の前の犯罪者共だ」

「……クロ助、突っ走らないようにな」

マグマジミタ憤怒を感じさせる声音にリーゼロッテが心配そうに言う。

「大丈夫さ、師匠が厳しかったものでね。心が熱くとも行動は冷静に、それくらいは弁えている」

「……ちっ」

思わず舌打ちを零す。言葉の通り、彼の一拳手一投足には隙がない。感情に吞まれず自分の行動をきちんと制御しているその様が、逆に深い怒りを感じさせた。

クロノ・ハラオウン。歳の若さに反して歴戦の勇士であり、エース・オブ・エースと名高い高町なのはや特武官の直弟子と知られるフェイト・テスタロッサ・ハラオウンに勝るとも劣らない、若手局員きつて

面食らっているのはリーゼアリアもクロノ・ハラオウンも同様らしく。

「ひいいいいいー！ あ、あ……いい、いいやあああああああああああああああー！」

それが怒号や氣勢の類であつたなら、彼らが気を取られる事などなかつたろう。

だが、限界まで追い詰められたかのような悲鳴に籠められた、嫌になるくらいの狂気が彼らに警戒と、そして僅かな動揺を生んだ。

「く、クアットロ？ なんなのよ？」

動揺したといえ、それはドウエも、声は漏らさなかつたようだが怪訝な顔のトーレも同じなのだが。

「来るの!? 来るの!? あいつが！ あいつが!? だ、だ、だから、だからやめようつで言ったのに!! あいつがッ！ あいつが来るから！ やめようつで言った！ 言ったのに！ やだ！ いやだ！ いやだあああッ！」

「クアットロ！ 落ち着、……ちよ!?」

スマートさの欠片もないドタバタとした動きで、こちらの腰元に飛びついてくるクアットロ。

「待っ、なに!?!」

「クアットロ、お前どうし……ぐおっ!?!」

さらに彼女は細身ではあるドウエを火事場の馬鹿力とでも言うべき膂力で抱え、そのままトーレへ突撃を敢行。

「お、お前らが！ お前らがこんな任務受けるがら!! 受けるがらああああアアア！」

クアットロの怒りというべき感情の籠められた叫びが、暗い室内に響く。

「仲間割れか……?」

「どうかしら……でも、あの悲鳴にあの表情、尋常じゃないのは確かよ」

「……ああいう奴は何してくるかわかんねえ。クロ助、アリア、高町恭也の防護を固めろ」

この人は、こんな仕打ちを受けるはずの人じゃない。

誰かをひたすら救って、助けて、護って。そんな人に訪れる結末がこれじゃあ、本当に、この世に生きる価値なんてなくなってしてしまう。

「くそ、くそ、……………くそッ！」

「……………ごめんな、クロ助」

「本当に、ごめんなさい。私達が離れなければ」

「……………二人の判断は、間違っていない。僕が、最初からちゃんと知らせていれば」

状況はリーゼアリアから聞いたが、二人は爆発が起こり、シヤマルとザフィーラが恭也の下へ戻ってきた事を確認し、現場へ様子を見に行ったらしい。

その後にはシヤマル達も現場へ向かってしまったわけだが、彼らがリーゼ達と最初から連絡を取り合っていたら、防げた事態ではあった。

「なんで、本当に、どうして……………どうしてこうなるんだ」

どんな角度から敵が襲ってくるとも限らず、どこから情報が漏れるともわからない。だからクロノは、誰にも知らせずロツテとアリアに護衛を頼んだ。

敵を欺くにはまず味方から、というわけではないが、万全を期したかったのだ。

しかし見事に裏目に出て、割りを食ったのは自分ではなく。

「……………くそオ!!」

自分の不明が死ぬほど恨めしくて、唇を噛み締め床を叩き。

「……………クロ、ノ？」

その言葉は、聞こえてきた。

「……………え？」

「……………クロノ、おれ、は」

ゆっくりと上半身を起き上がらせる彼は、どこかぼうつとした瞳でこちらを見ていた。

「きよ、恭也さん……………？ 恭也さん！」

「クロノ、……………教えて、くれ」

彼の意識が戻った事に狂喜乱舞する心とは別に、冷静さを失っていない部分が違和感を覚る。

「俺は、俺は……クロノ、俺は」

否、正確に言えば、覚ったのは違和感の無さだ。

「恭也さん……もしかして」

クロノと、彼は自分をそう呼んだ。記憶を失ってからは、クロノさ
んと呼んでいたのに。

(……記憶が、戻っている?)

「魅月が、いない。どうしてだ……? いや、だが、それでも俺は」
間違いない、戻っている。

記憶を失った状態の彼に、魅月の事は誰も何も教えていないはずだ。それなのに彼女の名を口にするというのは、明確な回復の証だ。
それが現状、手放して喜べるものじゃないという事は百も承知だが、それでも、心はやはり湧いてしまう。

「恭也さんっ、恭也さん」

「クロノ」

意識と記憶、二つが戻った事にどうしたって舞い上がるこちらの肩
を、彼は掴んで。

「俺は、次は、どこで戦えばいい……?」

「……え?」

「俺は、次は、誰を、まも、れ、ば、いいん、だ……」

呆気にとられるクロノの前、恭也はそう言った後、糸が切れたよう
に崩れ落ちる。

慌てて抱えた腕の中、彼の意識はまた闇に溶けていた。

第23話 認めてあげて ― 許してあげて (前編)

「ごめんなさい！ 本当に、本当にごめんなさい！ 私が、私が……っ、離れたりなんて……っ、本当に、ごめんなさいっ！」

「事が終わればこの腹、かっさばいて詫びさせてくれ」

「いえ、お二人の判断は間違っていないかっと思ひます。多分、私がその場においても同じ事をしていました」

床へへばり付くように頭を下げる二人に、なのははそう返す。

「おにいちゃんの事を思つて、精一杯をしてくださつたつてわかつていますから。ありがとうございませす、シャマルさん、ザフィーラさん」

「……なのはちゃん」

「……すまん」

顔を上げたシャマルとザフィーラに微笑んで、なのははベッドに眠る兄に目を移した。彼の手を握つたまま、クロノに問う。

「おにいちゃんの、記憶は……」

「僕が確認した限り、確かに戻つていた。ロットとアリアの話によると、彼らが魔法を放つより前に、敵方の一人には誰かしらから攻撃を喰らつた痕があつたらしい。状況から考えてそれは恭也さんしかないだろう。つまりおそらく、奴らと交戦して、それをきつかけに。

……あとは、受けたという精神汚染波が過去の記憶を刺激したか」

「……もともと、記憶を取り戻しそうな気配はあつたし、それ自体は時間の問題でもあつたと思うわ」

気遣わしげにそう言つたシャマルの言葉通り、確かになのははの感覚でも、時折兄の声に表情に、変化の兆しはあつた。

だが、どう間違つてもこんな形で戻つてなんて、欲しくなかつた。「殺す、ぜつてえ殺す……。次に奴らを見たら、全員殺す……。やり過ぎてムシヨにぶち込まれても構うもんか……」

恭也の傍で顔を伏せているヴィータから、低い怒声が聞こえてきた。

恭也が襲撃を受けたという連絡は、昨日の夜、クロノからもたらされた。現場に急行してみれば、事態は一応の収束を見せていて。

リーゼロッテとリーゼアリア、闇の書事件の際に一時、敵に回っていた二人がクロノの要請で秘密裏に恭也を警護をしてくれていたおかげで、最悪の事態だけは防げた。

シャマル達の方はかなり多勢に無勢だったようで、防戦が精一杯でこちらも賊を捕らえる事は出来なかったらしい。激戦だったようで、書の騎士という特殊性がなければ間違いなく病院送りになっていただろうくらいの傷が、手練の二人にはあった。

「一番警戒すべきは姿を変えるらしい敵か。厄介ではあるな」

シグナムが低く言う通り、どうやら敵方には自在にその見た目を変化させる事の出来る者がいるらしい。

シャマル・ザファイラから恭也を任せられたはずの女性は、眠らされた状態で医療センターの清掃用具入れの中から発見された。目覚めた彼女に話を聞いてみれば、昨日の夕方ごろ、何者かに襲われたらしい。

眠らされていた彼女がシャマル達の前に現れるはずがない。だとすればそれは、彼女の姿をした別人。

そしてそいつは、入れ替わったらしい夕方以降に会った彼女の同僚たちにも、そしてシャマルにも、全く不審感を抱かせなかったという。さらに、あの医療センターの中には本当の職員かどうか、生体反応でチェックする認証装置が幾つも設えられているというのに、それらも問題なくスルーしている。

相当に高度な変身技能と言っている。

「この場にいる人間は、少なくとも本物のはずだよな？」

「だな、あれだけの腕前は本人だけだ」

ヴィータの言葉にシグナムが頷いた。

変身技能を持つ相手方の対策になのは達が行ったのは、人格と知識によるチェックに加え、戦闘能力の確認だった。

いくら変身が出来ようと、能力やスキルまでコピーされるとは極めて考えにくい。ましてや動きのクセは、たとえ完全に身体をコピーし

たとしても写されるものではない。

模擬戦と言うには短時間だが全員がいくつかの異なる組み合わせで戦闘を行い、間違いなく本人だと確認し合っている。

なお、その模擬戦の最中は、クロノとリーゼ姉妹が誰一人として恭也の傍には近づかせなかった。

「後は、この場所の警備だけ……」

「出来る限りの厳戒態勢を取らせて頂いております。聖王教会の威信にかけて、卑劣な篡奪者など決して通しません」

なのはの言葉に答えたのは、上品な作りのドアを開けて入ってきた、長い金髪と聖王教会の特徴的な服装が印象的な女性。

「貴女は……」

「聖王教会騎士、カリム・グラシアと申します。一応、管理局にも籍を置かせて頂いておりますわ」

「私がようようお世話になつとる、お姉ちゃんみたいな人や。恭也さんとも面識あるし、間違いなく信頼出来る」

後ろから現れたはやての言葉に、なのははあからさまにはないが作ってしまったいた警戒を解き、席を立てて敬礼。

「管理局教導隊所属一等空尉、高町なのはであります」

「ご武名はかねがね。どうか、楽になさって下さい」

言葉に従い敬礼を解くと、彼女は穏やかな顔で微笑んだ後、恭也へと視線を向けた。

「ご存知かどうかはわかりませんが、ここ聖王教会、ひいてはベルカ自治領においてお兄さん、高町恭也さんの名前というのは非常に特別な意味を持ちます」

それは、いつかはやてやリインフォースから聞いた事のある話だった。

「結構な人気、というお話は耳にした事があります」

「結構、では済まないかもしれません。拝み倒して一度だけ講演会に出て頂いた時には、パニックになって四時間ほど開始が遅れましたわ」

「こと戦いとなれば苛烈だが、基本的には穏やかな気質のベルカの民

達が、そんな風になるのはひどく珍しいだろう。確かにそれは、結構では済まない人気だ。

高町恭也がベルカ自治領や聖王教会においてそれだけの人気を博しているという要因は、なのはの知るかぎり三つある。

まず一つは、彼が古代ベルカ式の術者である事。古代ベルカの魔法を使える者は次元世界群においても自治領においても少なく、使えるというだけで聖王教会においては基本的にV. I. P. の扱いを受ける。同じように古代ベルカ式の使い手であるはやても、聖王教会では結構な顔だ。

二つ目は、ミッド式が天下を取っている現代、その膝元であるミッドチルダ本国に地上本部を構える管理局において、古代ベルカ式の彼が最高のSSSランクと共に最強の単体戦闘能力保持者の評価を受けている事だ。

最高ランクに見合う実力を数限りない戦場で披露してきた特武官は、少なくとも肉眼での目視距離内において一対一でやり合ったなら誰も勝てない強さであるというのが局員の中で定説として根付いており。

ミッド式が天下を取って久しい昨今、近代ベルカという形で蘇りはしたもののどこか寂しい思いを抱いていたベルカの民達は、それを聞いて大いに励まされたらしい。

また、それだけ強いという事自体も、高い実力を持つものには深い敬意を表するベルカの民達にとって、とてつもなく眩しいものに映ったという。

そして三つ目は、ベルカ自治領で発生した緊急事態において、彼が非常に大きな功績を打ち立てた事だ。

一年半ほど前、ミッドチルダ北部に属するベルカ自治領のさらに北、最北端の山の麓にて大混乱が発生した。

竜族のごく一部、特に巨大で強大な力を持つものを真竜と呼ぶが、その内の一頭、真っ赤な鱗の轟炎を操る竜が人間にその威を振るったのである。

原因は密猟者による保護生物、植物の違法乱獲。聖域と呼ばれ、ベ

ルカの民達が決して無闇に足を踏み入れなかった領域へ愚かにも踏み入った彼らは、当然のようにその主たる真竜の怒りを買った。

常であればそれでも、竜が攻撃の対象とするのは密猟者達だけであつたのだが、問題はその一団の中に、彼らを手引きしたベルカの民の者が何人かいた事だつた。

清廉なベルカの民と言えど、全員が全員、決して蛇の道をいかないわけではない。ないがしかし、お互いに敬意を払い合い、決して敵対行動は取らないと大昔に硬い約定を誓い合つた真竜への背徳はいかにもまず過ぎた。

特に深い知と理を持つ真竜は、何より誠実さと誇りをこそ大事にするものだが、その一件は両方へと爪を立て、結果、ベルカの民という民族そのものへ竜は攻撃を開始。

こと戦闘においては真竜の中でも恐らく最上位、桁外れの力を持つと恐れられていた獄炎王と呼ばれるその竜は、伝承の通り、途方も無い力でベルカ自治領を北から破壊していった。

聖王教会の騎士団や、近くに駐在していた管理局の局員達が応戦するも、防戦が精々。

戦線は見る間に下がり、多くの人びとが暮らし歴史ある建物も数多くある、大きな市街区にあと少しまで迫つた頃、管理局は他の任務から上がってきた特武官に出撃を要請。

現場に転送で到着した恭也は、騎士団員や局員たちに一般人の救助と治療を頼み、挑発して人のいない荒野まで引き付けた上で、単身で獄炎王と戦闘を開始。

援軍は竜の撒き散らす灼熱の炎と衝撃波で立ち入れず、また、恭也が一对一の方が良いとそれを断つたため、結局入る事はなく。

曲の観測班や多くのベルカの民達がサーチャーの遠隔映像越しに見守る中、繰り広げられた死闘はおよそ二日間を渡つた。

眩体により自己修復力を上げる事は可能だったが、この時はまだ完全に近い再生力を発揮する眩体・修を会得していなかった恭也はそれなりに満身創痍、その身にいくつも斬り傷を刻まれ吐き出す炎も勢いのなくなつてきた獄炎王も同じく、いつ倒れてもおかしくない有り様

で。

結局、一人と一頭は、お互いに引き分けを提案。

自分と引き分けた恭也の事を気に入ったらしく、時折彼が顔を見せに来る事を条件に、今回ベルカの民が犯した背信行為を許し、獄炎王は山へと帰っていった。

ベルカの民の間ではこの話は現代の英雄譚として語られており、なのはもリインフォースに見せてもらったのだが、既に絵本が出来ていた。

「真竜を相手取り、武を以って和を成した黒衣の剣神。私達ベルカの民は彼に深い感謝と尊敬を抱いていますわ。故に、協力は微塵も惜しみません。むしろ、こうして私達を頼って下さった事に感謝をしたいくらいです」

現在、恭也が身を預けているのは管理局の医療センターではない。ベルカ自治領に立てられた聖王教会の附属医療施設、聖王医療院だ。

入院していた管理局の医療センターは、爆発騒ぎが昨日の今日であるために今だ騒がしく、また、一度賊の侵入を許しているという点において少々信用が出来ず。

ではどうするか、いつそクロノのアースラなどと迷っていた時、以前から恭也の状況をはやてから聞き是非来て欲しいと話をくれていた聖王教会が、今度こそうちにと大きく声をあげてくれたので、厄介になる事にしたのだ。

「現在、リインフォースさんやフェイトさんと共に周囲の警戒にあたっている者達も、そしてこの医療院で恭也さんに関わる事を許された者達も、身体だけでなく人格や知識、技能で本人だと念入りに確認を取ってあります。チェックは日に三回、交代制で万全に。これで当面は大丈夫でしょうか、なのはさん」

「はい、ありがとうございます」

厳戒態勢に加えそこまで徹底した管理がなされていれば、いかな姿を変える手合いと言えど潜入は非常に難しいはずだ。

「もし至らぬ点にお気づきになれば仰って下さい、すぐに対応させていただきます。それから、皆様方。もし私達の中に怪しい動きを見せるも

のがあれば、躊躇わずにお斬り下さい。警護と看護に参加している全員が、誤解で素っ首刎ねられたとしても文句はないと誓約書にサインをしております。もちろん、この私も」

「わかりました。ではその時は遠慮無く、斬らせて頂きます」

苛烈なカリムの言葉にシグナムが間断なく応じた。どこか、ベルカの人達は兄と似ているような気がする。

「本当に、ありがとうございます。そこまでして頂いて……」

なのはの言葉に、カリムは憂いのある顔で首を振った。

「……いえ、受けた恩に比べれば本当に、なんという事も。むしろ、大してお力になれず、申し訳ないくらいです」

「そんな事は」

カリムが口にしたチェック体勢は、すさまじい労力とひどく重い覚悟の上に成り立っている。彼らの誠意は、痛いくらいに伝わってくる。

「いいえ、こんなもの、本当に……。恭也さんは謙虚な方で、以前の真竜騒ぎの時もなにも受け取って頂けなくて……。なんでも一つ、聖王教会がその力の及ぶ範囲でなら願いを叶えるとも誓わせて頂いたんですが、それも一向に使って頂ける気配はなくて……。だから、いつも私達は恩を返す機会を伺っているんです」

困ったように、そう言ってカリムは苦笑をした。

「謙虚、ですか」

「はい、あれほど控えめな方はそれを美德とするベルカにもなかなかおりませんわ」

「……兄はベルカでも、沢山の人を救ったんですよね」

「え？ ええ、それはもう」

「………他の仕事でも、たくさん。他の世界でも、たくさん、たくさん。兄は、命を救ってきたんです。人を助けてきたんです。誰かを、護ってきたんです」

兄の顔を見ながら、なのはの口はどこか、堰を切ったように動き始める。

「剣を振るって身を盾にして、そんな風に、生きてきたんです」

なのはが物心ついたときにはもうとうに、兄の恭也はそういう人間だった。

そんな兄が、誇らしくって。

そんな姿が、愛おしくって。

だけど、すぐにわかった。

「でも、どれだけ救っても、どれだけ助けても、どれだけ護っても、兄は、気づけないんです。それだけの事をして、それだけの事をして、自分は自分を誇つていい人間なんだって、そんな事に、この人はずつとずつと、気づけないままなんです」

「なのはさん……」

「わかってるんです、ずっと前からわかっていたんです、この人は、この人は、……もうはるか昔に、この人を諦めちやっただって事を」
高町恭也が唯一この世で決して護らない人間がいるとしたなら、それは、高町恭也自身だろう。

「カリムさん、だから、少し、違うんです。兄は、謙虚ではあるんですけど、でも、……それより何よりこの人は、自分の事が好きになれなくて、自分の幸せを願うことが出来なくて、だから何も貰おうとしません。出来ないんです」

一番近くで見えてきたなのはだから、はつきりと言える。

彼の幸せの勘定に、彼自身は一度だつて入った事がない。

誰かを護る彼の剣は、彼自身を護るためには決して振るわれてこなかった。

「ちゃんと、伝えなきゃいけないかった。もっと、伝えなきゃいけないかった。この人がどうか、この人を好きになれるように。この人がどうか、この人を愛せるように。この人に護られた私が、きつと、絶対、世界で一番この人に護ってもらってきた私が、誰より伝えなきゃいけないかった……」

自分が生まれてきた、その意味を。

わかっているつもりだったのに。

「……なのはさん、でも、私がありますよ」

「……カリムさん？」

美しいその美貌に似合いの澄んだ声で言ったカリムに聞き返すと、彼女は微笑んで続けた。

「仰るように、恭也さんはとても……正直に言えば確かに、危ういくらいに自分を顧みない方ですが、でも、彼が誇らしそうにしている姿を、私は見た事があります」

「……え？」

「器量も良ければ気立ても良くて、職場では誰もが認める空のエース・オブ・エース。プライベートでは少し寝起きが悪いけれど、誰よりも可愛らしいって」

「……それ」

交わした言葉を思い出すような、少し眇めた眼のカリムはなのはに頷いた。

「出来た妹だって、なにより自慢だって、そんな風に言っていました。ベルカでは聞かない名前の響きが可愛らしくって、由来を聞いたら、花なんだって教えてくれました。小さくて、でも色鮮やかで、明るい気持ちにさせてくれる花だって」

「……っ」

「なのはさんの仰った事は、きっと間違っています。それは、貴女の役割なんだと思います。大して貴女がたの事を知らない私ですが、そんな私だから勝手な事を言わせてもらおうと、きっと」

「……」

浮いた涙を強く拭って、息を一つ吐き一つ吸う。

『Master, Does your flame still blaze?』

「ちよつと、情けなく揺れてたかも。でも、消えたりなんてしてないし、しない」

問うてきた愛機に答えた通り、だ。

例えこの身の全てが一片残らず焼け落ちたとしても、だったら炎そのものになってやる。

「……次に兄が起きて、私の名前を呼んでくれた、その時は」

なのはは、強く言葉にして誓いを立てた。

「持っている限りの光と熱で、この人を照らします。私の、全部を懸けて」

ベルカの空は、高い。

清廉な大気が空の青を鮮やかに、それでいて深く見せているのだろう。冬に差し掛かったこの季節、寒くはあるがそれだけに、身の引き締まる気持ちよさがある。

(こういう空は、好きだろうな)

聖王医療院、その中心に建てられた入院棟の正面入口を固めながら、そんな事を思う。

フェイトの愛するその人は、時折空を見上げる癖があった。晴れでも雨でも曇りでも、たまにぼんやりと視線を高空へと投げる。

だけどやはり、よく晴れた日の空が一番、彼の視線を長く惹き付けるように思う。

そんな横顔を見るのが、フェイトは好きだった。

常に凜としている彼が、その時ばかりは少しだけ油断しているように――可愛くて。

一体、いつ頃からだったろうか。

優しく、頼りになって、誠実で、大人で、格好良くて。

そんな彼が、しかしたまらなく可愛く見えるようになったのは。年上の男性で、自分の剣の師匠で、なのにそれでもやっばり、胸にぎゅっと抱きしめて、あらん限りで包んであげたい気持ちが溢れてくる、フェイト・テスタロッサ・ハラオウンにとって高町恭也はそんな人にもなっていた。

だって、時折見せる顔が、たまらないのだ。

うちに抱え込んだ不安や寂しさを、仕方ないものと割り切つて飲み込んで、それを誰にも気づかれていないと信じ切っている顔で、何で

もないように自分自身を突き放し続けるその姿が、たまらない。たまらなく、温もりを伝えたくなる。

この世界に確かに存在する暖かさを、その受け取り方がわからないまま途方もなく強くなってしまうあの人に、届けてあげたい。

きつと誰よりもあの人の強さを知っている自分だから、あの人の誰にも見せたがらない弱さを、そのままで良いと言ってあげたい。

”君はちゃんと、人に甘えることを覚えるべきだ”

それはかつて、彼から言われた言葉。

自分はもうこんな自分を変えられないけれど、君はこうなつたらいけないと。これから君は、人に甘えられる君になるんだと。

そんな風に、彼は言ってくれた。

あの時の自分は小さな子どもで、引きずっていた影を看破されて、その上でそれを払ってもらって、優しく抱きとめてもらったその事で、頭と心がいっぱい。

言われた事を、もらった熱を、馬鹿みたいに抱きしめるだけしか出来なかったけれど。

今は、もう違う。

貴方だつてと、そう言える。

言われた事をそっくりそのまま、あの人に返す事が出来る。

そうしたら、世界中の誰よりも自分が彼を甘やかすんだ。辛かったねって手を握り、頑張ったねって頭を撫でて、泣いてもいいよと胸に抱くんだ。

もう、躊躇わない。いままでずっとまごまごとやってきた事の結果が今なら、もう一瞬だつて躊躇うものか。

「……ん」

滾る精神が、どうやら気配察知の調子を良くしている。ここからは見えない、聖王医療院全体の正面入口付近で何やらやっていた人物が、作業を終えてこちらへ来るのがわかった。

「……万全は、期さなきやね」

その人物は気配察知範囲から外れた事もあったので、フェイトにしてみれば入れ替わった可能性がないとは言えない。

『リインフォース』

『本人だ、入れ替わるタイミングはなかった』

上空にて待機し、俯瞰で観察してるリインフォースに念話で確認を取ると、すぐにそんな返答。

息を吐いて、引き上げていた警戒のレベルを元に戻した。

そのまま待っていると、その人物はすぐにこちらへやってくる。

「フェイト、お疲れ様」

「ユーノも」

色素の薄い長い髪を後ろで縛った眼鏡の男性、ユーノ・スクライアはフェイトの眼前三メートルほどで一旦足を止める。

「確認は？」

「ずっと見ていたリインフォースに聞いたから、大丈夫」

「そっか」

微笑んで、彼はもう少し傍まで来た。

「それで、報告だけど、登録されていないリンカーコアもしくは生体反応を持つものが触れた時に、その侵入を妨害する結界を作っておいた。皆へ警告の連絡を付けるシステムを組み込んだから、その時はフェイトにもバルディッシュに向けてアラートが行くよ。侵入妨害結界は魔力専用層、物理専用層の後ろに複合層、さらにその裏に転移妨害の層も付けた。転移妨害層はキーさえ知っていれば素通り出来るようにもしてある、それは僕達の中の転移を使える人間だけに教える事にするよ。それから、第一の結界が破られた際には自動で、残るありったけの魔力を使ってこの入院棟を囲むように第二の結界が構築されるようにもしてある。ああ、結界への魔力供給だけど、これはユニバーサル規格にしてあるから登録済みの人間であれば誰でも出来る。その方が常に潤沢な防護が維持できるからね。攻撃を受けたら適宜魔力を注ぎ込んでさらに硬くも出来る。陣の構造はフェイトを含む主要メンバーに送っておいたから後で確認しておいてくれ……あ、ごめん、一気にしゃべり過ぎたかな」

「……いや、そうじゃなくて」

それがないかと言えば嘘にはなるかもしれないが、フェイトがあつ

けに取られているのはそこではない。

「そこまで多機能な結界システムをもう組んだの……？ 効果範囲だってこんな広いのに、昨日の今日で……」

「なのはやフェイト、はやて達みたいなの攻撃の力はないけれど、結界は数少ない得意分野の一つだから、これくらいはね」

苦笑しながらユーノはそんな風に言うが、彼がこなししたのはこれくらいなどという表現で収まる仕事の量でも質でもない。

「さすが、なのはの先生」

「や、やめてくれよ……それは、ほんの一時のことだ。なのははすぐに自分の力で飛び始めたよ」

少し懐かしそうな顔をして、ユーノはそう言った後、表情を曇らせる。

「それに、僕のこの結界は結局、例の姿を偽る敵には最悪、スルーされる可能性がある。完璧とは、とてもじゃないけど」

「それでも、そいつ以外は足止め出来る。ありがとう、ユーノ」

「……いや」

暗い表情のまま、彼は首を振った。そして、表情に似合いの、影を引きずる声音で落とす。

「ずっと、……ずっと、いつか謝らなきゃいけないって、思っていたんだ」

「……ユーノ？」

「あの日、僕が助けを呼んだから、なのはは普通の女の子じゃなくなつた。それを追うようにして、恭也さんも」

彼の視線は、恭也が眠る一室の方角を向いている。

「僕がああしていなければ今頃どうなっていたかなんて、そんな事はわからないけれど、少なくとも、こんな事にはなっていなかったはずなんだ。……馬鹿な事言ってる、詮のない事を言ってる、わかって、いるんだけど」

自嘲気味に呟いて、彼は頭を振った。

言っている事も、その気持ちも、フェイトにはよくわかる。

わかる、けれど。

「……ごめんね、ユーノ。勝手な事を言うけど、私はすごくユーノには感謝しているんだ」

「……フェイト」

「だって、そうだよ。だって私、あの時なのはがいなければ、今こうしていない……っていうか、多分、ううん、絶対、死んじやっているはずだから」

どのタイミングで、かはわからないけれど。どこかのタイミングで、確実にそうなっていただろう。

なのはと出会えなかった自分だったらもうとつくの昔に間違いなく、生を手放していたはずだ。

「私はきつとその筆頭なんだけど、この場に集まってる皆って、なのはと恭也さんがいなければ、今こうしていない人間ばかり。皆、信じられないくらいおせっかいなあの人に、救われてきた」

「そう、だね。うん、……その通りだ」

パン、と。ユーノは自らの顔をその両手で挟むように叩いた。

「あの時こうしていれば、いなければじゃないよね。過去を振り返るのは僕の専門だけで十分だ。重要なのは、これからどうするか、そのはずだ」

「……うん」

もちろん、今と未来で努力する事で過去の全てが許されるわけじゃないけれど。

それでもそれが、救われてきた自分たちが示すべき誠意のはずだ。

「ごめんフェイト、馬鹿な話に付き合わせて。……ああ、そうだ、有益な話題があるんだった」

ユーノはそう言うとお上のポケットをこそごと探って、やがて小型の記憶媒体を取り出した。

「それは？」

「有益と言うか、いいニュースと言うか。クロノと一緒になって無限書庫を漁りに漁った成果が出た。魅月の開発データだ」

「——本当ッ!？」

思わず前のめりになったこちらへ、ユーノはしっかりと頷いた。

「ああ、間違いない。設計図まで残ってた。これさえあれば、時間をかければ彼女の身体を復元する事が可能なはずだ」

「……よか、……った！」

脚がへなへなとへたり込みそうになる。安堵の息が、大きく漏れた。

「恭也さんの顔を見て、なのは達にさっきの結界の説明をしたら、管理局へ行ってシャーリーとマリエル技師に渡してくる。……無限書庫からの生データでね、色々整理してないから通信だと不安があるんだ」

「うん、わかった。どうかお願いって伝えておいて」

「間違いなく」

頷いた彼を見ながら。

やはりつくづく、ユーノ・スクライアという人物は頼りになるなどわかりきっていた事を、改めて実感した。

「……申し訳、ありませんでした、ドクター」

「元の任務にお戻り。駄目だったものは仕方ない」

「……はい。失礼します」

造り出した娘たちの上から二番目、高町恭也奪取の任を与えていた内の一人、ドゥーエは頭を下げてからスカリエッティの研究室から出て行った。

「……あー」

眼を瞑り、ガリガリと頭を搔く。数秒の後、スカリエッティの手は目の前のコンソールを苛立ちそのままに引つ叩いていた。

「つ……あと少しで！ あれが手に入るはずだった！」

「ドクター……」

娘たちの一番上、秘書役をやらせているウーノが気遣わしげに声を掛けてくるが、スカリエッティの苛立ちは晴れないままだ。

「……感情をそこまで露わにされるのは、あまりらしくありません、ド

クター」

「らしくない？ 私はね、【無限の欲望】なんて開発コードで造られたんだよ？ 欲しいものが手に入らないというのは、身を裂かれるよりなお辛い。それが極上となれば、筆舌に尽くしがたいものがある」

「……最強の生物兵器の素材、そう仰られていましたね」

「ああ。私の持つ全ての技術を使つて、最強のNo. 13を造るはずだった」

もう随分と前から目をつけているが、あれほどの素材は、本当にいない。

「手に入っていたら、花火の上げ方も随分違つてきたんだが……」

ベルカ王朝時代に造られたロストロギアであるゆりかごを軸にした、大きな大きな花火。

その打ち上げは、もうそろそろなのだ。

「とは言え、もう狙うタイミングはさすがにないかと。……調べた限り、現在の入院先の防護は人員による徹底的な警護体制、そして組まれた異様に念入りな結界合わせて、強固という言葉ではとても足りないくらいのもんです。攻めるには、こちらにも本当に本腰を入れる必要があるかと」

「……………」

「今回にしても危ない橋だったので、そんな事をしてもしもの事があれば、最悪、打ち上げ前にここを抑えられる可能性すらあります」

「……だろうね、潮時か」

無限の欲望を持つ自分だからこそ、一番の願いを見誤つてはいけない。

「仕方ない。完成度は落ちるが、違うアプローチでいこう」

溜息を吐いて、スカリエッティは頭の中に展開してあったプランの舵を切り替えた。

「……うー」

「主はやて、少々、無理が過ぎるのでは？」

「せやなあ……わかつとるんやけど、今が踏ん張りどきな氣いしてな。
……ふわあ」

リインフォースに答えながらも、はやての口からはあくびが漏れた。

恭也が聖王医療院に運ばれてきてから、今日で三日目。

抱えている案件が多すぎて、そして一つひとつが重すぎて、結果、はやての生活において何が削られているかと言えば睡眠時間だ。

「とは言え、これで一つはなんとかなった。マリーさんにはほんまに感謝や」

「こんな急なチューンを、本当によくやって頂きました。……主の負担は、やはり大きいですが」

「それを言うたらリインもやろ？ お互い様や」

二人揃って少々ふらふらとしながら、聖王医療院の中庭を歩いて行く。時刻は真夜中だが、そこかしこに人の氣配が感じられる。

警戒態勢は、しっかりと機能しているようだ。

「カリムを通して教会のお偉いさん方との話も詰めていけとるし、
……ほんまに、上手く行けばええんやけど」

「……ですね。あとはタイミングでしようか」

「せやな。とりあえず、あれの事を二人に説明して、それで相談や。
……まあ、ちゆうても、恭也さんの状態がほんまにわからへんから、
中々難しいんやけど」

「……」

ピタリと、隣を歩くリインフォースの脚が止まった。はやても止まり、振り返って顔を見れば、美人が泣きそうな顔をしている。

「リイン？」

「主はやて。騎士恭也がああなってしまう事を……私は、ずっと前からわかっていた氣がするのです」

「……それは」

「かつて、彼のリンカーコアを喰らったその時に、彼の心身をこの身の内に収めたその時に、私は、理解しました。そのすさまじいまでに硬く強い信念で輝く心の光が、しかし彼自身を、彼の行く道を決して照らしていない事を」

歪で、危うくて、そして何より寂しい心だったと。

項垂れて、リインフォースはそう零す。

「労りも、慈しみも、愛しい想いも、その全てが外側に向いた輝き方は、取りも直さず、内側は一片の光もない虚無の闇である事を示します。私の眼には確かに、彼の心は真つ暗に見えました。それは、わかつていたんです。……でも」

リインフォースは、揺れる声で続ける。

「それでも彼は、そんな自分を理解してなお、そのままであり続ける事を選択した。護りたいものたちさえ照らされていけば、それでいいんだと言い切った。……私はそこに、美しさと尊さ、気高さを感じました。だから、彼はきつとこれでいいのだと、そう思っていたのです……愚かにも」

「……それは、私も同罪や」

惜しみなく周りに想いを注いで、その手で護り続けるその姿は、言ってしまうえば八神はやてにとつて目標だった。

「私も、あれは素晴らしいもんなんやつて、そんな風に阿呆みたいに何も考えんと憧れとつた」

性別も性格も、戦い方や適正だって何もかもが違うけれど、自分もいつかああなりたいと、ああならねばならないと、そんな風にすら思っていた。

そこには何の疑いもなく、こんな事になって初めてその在り方の問題をようやく、本当の意味で理解した。

「駄目なんや、それじゃあ、あかんねん……。護って護って護り続けて、それでああなつたら、それは結局、悲劇が一箇所にまとまったに過ぎん。護った側も救われて初めて、世界の針はプラスの方向に振れるんや」

どうにもならない悲しみの這いずり回るこの世界を、少しでも優し

くしていきたいと願って、はやては管理局に身を置いていた。

であれば、負担の全てを身に引き取って最後に崩れるあのやり方は、懂れてはいけなかったのだ。

自分だって、自分の護りたい世界の一部であるのだから。

「気付くのが、遅いよなあ」

「……はい」

「せやけど、……落ち込んでいつまでも立ち止まったらあかんねん。ずっと泣いてたらあかんように、な」

「……そう、でしたね」

息を吐いて、リインフォースは不器用に、しかし確かに微笑みを浮かべる。

地面に縫い付けていた足を動かし始めた彼女が隣に追いつくまで待つて、はやても歩みを再開する。

上品な庭を過ぎて入院棟正面入口へ入る寸前、空を見上げればそこには桜色と金色の光が見えた。

「今日の外警備はあの二人やったな、万全や」

「あそこを突破できる人間など、それこそ騎士恭也くらいのものでしよう」

そんな会話を躲しながら入院棟の中へ。魔法の適正があるからかどうかはわからないが、はやてはベルカの文化が好きだ。上品な調度と落ち着いた色合いが、心を穏やかにしてくれる気がする。

歩ける程度に、足元にだけほんの少し灯りの付いた廊下を、リインフォースと二人、行く。

「恭也さんの顔だけ、とりあえず見てこ」

「……穏やかに眠っていれば、いいのですけれど」

「……たまにうなされてるもんな」

眠る彼から時折漏れる言葉は大抵が謝罪と自己否定で、どんな夢をみているかなんて簡単に察せる。

「早く起きて欲しい、……けど、ほんまに勝手な事を言えばまだタイミングが早くもある」

「ですね……」

「この後ほんのちよつと寝たら明日、眠気のとれた頭で動作チェックを万全に行つて、問題なければその後二人にちゃんと説明や。それで準備を整えてもらつて、……それからがベストはベストや」

なかなかこの世界とは大抵、そう万全な構えでは事にあたらせてくれないというのがはやてのこれまでの経験則ではあるのだが、願う願わないはそれでも別だ。

「……なんや今日は、あれやな、月明かりが目を惹くなあ」

「暗い室内に入ると、途端にそう感じますね」

外を歩いていた時は大して意識しなかったのだが、リインフォースの言う通り室内にいと、窓から差し込んでくる光の存在感に気付く。

押し付けがましくはないが、しかし確かに輝く銀色の月は、どこか魅惑的で。

主想いの彼女を、思い出させる。

「……はよう直つてくれるとええな」

「我が友は、タフな女です。必ずや自分の主の元へと帰ります」

リインフォースの確信に満ちた言葉が頼もしい。

とは言え、ユーノとクロノが設計データを見つけ出してくれたおかげで目処は立ったが、魅月の修復にはまだまだ時間がかかる。年単位とは言わないが、半年は見る必要があるかもしれない。

それほどまでに、彼女の傷は深かった。逆を言えば、彼女がそうまでしなければ、本当に最悪の結果になっていた可能性があったという事だ。

現状は綱渡りだが、彼女のおかげでそれでも出来る事があり、求められる望みがある。

(だから、精一杯をせな、な)

そんな、はやての改めての決意は。

「……はやてか。すまんが、聞きたい事がある」

角を曲がり、恭也の眠る病室の前へ差し掛かつて、すぐに試される事となった。

「……こんばんわ、ええ夜やね」

「そうだな。良い月だ」

「ほんまになあ、綺麗なもんや」

自分でも呆れるくらいに、平然とした声が出ている。

こういう時に、自分の腹芸への適正を感じるものだ。たまに嫌になる事もあるそれに、しかし今は感謝したい。

「き、騎士、きよ……っ」

突然の事態に慄くりインフォースを、目線で落ち着かせ、黙っていてもらう事にする。

今は、不用意な発言の一つも許されない。

「……なあ、いないんだ、魅月が」

自らの病室の前、暗い廊下の窓際に立って月を見上げる彼、高町恭也はどうも、クロノの言う通り記憶を取り戻しているようで。

「本局との連絡端末もない。これでは、俺は、護りに行けない」

「こんな穏やかな夜や。お部屋でゆっくりしててええんやで、恭也さん」

「ここは穏やかでも、どこかは戦火に包まれて、きっと誰かが泣いている。俺は、行かなくてはいけないんだ」

こちらを見やった彼の瞳には、しかし正気の影はない。

どこかぼうつと虚ろな、それでいて強い想いを湛えた、狂気と言っている色がそこには鎮座ましましています。

(最初に気付いたんが私らだったって言うのは、……幸運か)

彼の意識が戻れば看護師が駆けつけてくるようにはなっているし、すぐ近くに警護の人員もいる。

彼らが気付いてここに来るまでの間に空いた僅かなタイミングに、自分達が来たという事だろう。

懸命にやってくれている彼らにはもちろん心から感謝しているが、自分たちよりもうまく対処出来るとは流石に思えない。

「そう、そうなんだ。行かなくては、俺は、俺は、それしか、出来ないんだ……」

ゆらりと、彼がその身を窓際から離し、こちらへ一歩踏み出してくる。

「行かなくては、行かなくては、俺は、俺は……俺は」

月明かりを反射して、彼の瞳は乾いたまま、しかしどこか決定的に泣いているように見えた。

流せない涙がきつと、内側に溜まり彼を溺れさせんとしていて。

輝く月が切ない光で、それをはやてに教えてくれていて。

だから、覚悟なんて当たり前に決まった。

『リイン、やるで』

『……はい！』

彼と彼女たちの安全性は幾重にもチェックしてある。確認しなければならなかったのは主に自分の負担だったが、この際、無茶は仕方ない。

こういう思考を改めなければならぬと話したばかりに何だが、それでもそうしなければならぬ瞬間というのはどうしてもあるんだろう。

あるいは、これまでそういう風に生きてきた事の報いだろうか。

『ユニゾン・イン！』

『ユニゾン・イン！』

心の中、はやてとリインフォースの声が重なり、そして眩い光とともにその身体もまた一つになる。

「恭也さん、すみませんが、行かせるわけにはいかないんです」

「……どいてくれ」

銀色となったショートボブの髪を揺らして杖を構えたはやてを向こうに、しかし恭也には全く動じた様子はない。

得意は遠距離の広域系ではあるが、リインフォースとユニゾンした今、魔力の圧力で言ったら相当なもののだが、さすがは歴戦の特武官か。

真正面からこの距離でやり合つて、魅月がないとは言え、はやてはどうやっても恭也には敵わない。

「俺はっ」

それどころか、相手にまともに戦う気はない。こちらが塞いでいる道を突破する、彼の目的はそれだけであり、それは普通に戦つて勝利

するよりも簡単だ。

彼は当然のようにこちらの側面を抜けるコースで駆け出す。

通常であれば、はやてには彼を止める事はまず不可能で。

「……悪いなあ、恭也さん」

「っ!？」

そう、通常であれば。

恭也の身が途中で阻まれ、弾かれた。

「な、に……」

「恭也さんがいつもどおり、まともな判断力を持っていたら、こんな手は喰うてくれへんかったんやろうけど」

「……こ、れ、………は」

「かつて、一度喰らったこんな手に、引つかかってなんてくれなかったんやろうけど。せやけど、こつちとしたら期待通り、かな」

そう言葉をこぼすはやての視線の先、恭也の身体は眩い光りに包まれて。

「な、……あ、……」

すうっと、その姿は薄くなっていく。彼の前には、ルートを読んで仕掛けておいた罠が浮いている。

それは書という名の、彼を捕らえて囚える夜天の箱庭への入り口。

「……おやすみな、恭也さん」

「あ、……あ、あ」

「——全ては安らかな、眠りの内に」

その言葉が最後の合図、書は恭也の身を光に溶かし、己の中へと収めた。

「はやてちゃん!」

「はやて!」

「おお、よう来たなあ二人とも。流石に早い」

緊急事態との報を受け、空の警備を他の者へ任せてフェイトと共に

飛び込むようにして恭也の病室前へと駆け付けたのはを、連絡をくれた張本人であるはやては、穏やかな口調でそう迎えた。

「はやてちゃん……それ」

彼女のその身はユニゾン状態、しかも、何らかの魔法を展開中と思しき魔力の流れまで感じる。

「ああ、うん。ちよつと緊急でなあ、土壇場になってもうた。今な、書の中に恭也さんがおる」

「っ……どういう、そもそも、恭也さんは眠ってたはずじゃ」

「……私が言うのと胡散臭いんやけど、ほんまに偶然でな。リインフォースと一緒に顔だけ見よ思うて来たら、起きてて、そんで」

「……行こうと、したんだね」

「せや、どこに行けばええかなんてわかっていなかったろうに、でも、どこかに行かなあかんって。記憶は戻ってた。でも、だから、心は砕けたまんまや」

悲惨な事実を、淡々と口にする彼女の口調にはどこか揺るぎないものを感じる。それは、腹を決めた人間に特有のものだ。

「本当ならちゃんと説明して相談して、それからにしよう思ってたんやけど、そうもいかなかった。だから、勝手にさせてもらった」

「はやて、……何を、するつもりなの？」

「するのは、私やない。出来るのも、私やない。多分世界では、二人だけなんちやうかなって、私としては思うところ」

そう言って、彼女はなのはとフェイトの前へ、金色に輝く書を広げた。

膨大な魔力の注ぎ込まれたそれを見て、直感で悟る。

「……入り口が」

「そう、まだ開いとる。入れる余裕は、あと二人ほど」

なのはの言葉に頷いて、はやてはそう告げた。

「私達を、ってこと……？ ま、待って、でも、恭也さんになのはと私なんて……いくらなんでも同時に入れたら、だって、許容魔力量が……」

リインフォースが昔言っていた事だが、夜天の書に収めるあの魔法

における負荷は、収める相手の総魔力量に比例するらしい。

恭也だけでもかなりのものはずで、それから自分とフェイトを入れば、いかなはやてと言えど厳しすぎるようになるのにも思えた。

「マリーさんに頼んでな、特別にチューンしてもらっとる。この魔法に特化させて徹底的に最適化、おかげで理論的には三人収めてもなんとかなるくらいにはなった」

「……はやてちゃん、そんなのいつの間に」

「裏でこそそれは私の癖や、知つとるやろ？ ……ちゃんと仕上がるかどうかもわからんかったから、出来上がってから説明しよ思つて、ごめんな」

悪戯がばれたかのような顔ではやては笑って軽く言うが、彼女が他に抱えているはずのタスクの重さを考えると、それは尋常なものではない。

「さ、時間がもったいない。二人とも、……もちろん強制なんてせえへん、でも、もし私を信じてくれるのなら、そして、自分を信じているのなら、入つて欲しい」

はやての足下から白い魔法陣が、なのはとフェイトの下まで広がる。

「理想の世界は、今のこの書は作つてない。広がってるんは、ただただ恭也さんの心が浮き彫りになるような、そんな世界。せやから本当に、折れて砕けて壊れたあの人の心は今、剥き出しと言うてええ。傷だらけのそれに触れて、引き戻して引き上げる自信があるんなら、私が責任をもつて二人を恭也さんのところへ送る。——さあ、どうする？」

問うてくる彼女の視線は、穏やかで温和で、どこか飄々としている常のものとはまるで違った色をしている。

まっすぐ、射抜くような容赦のない瞳。

躊躇いも誤魔化しも虚栄も、彼女は決して許さないだろう。

「この世に生まれたその意味を、今日まで生きたその価値を、私は、私の全部で示してみせる」

だから、なのははそう返して。

「もらった暖かさを、返さなきゃじゃなくて、返したいって思う。あの人を想う事のなら、私は私を誰よりも信じてる」

フェイトも迷いの見えない口調で言い切り。

二人は揃って前へ進んで、同時、輝く書へ触れる。

その人の待つ箱庭の入り口に、手を掛ける。

「……いつてらっしやい、二人とも」

身体は光に包まれて、意識はこの世界から遠くなっていく。

「帰って来るときは、三人でな」

その言葉へ頷いたのが最後、なのははフェイトと共に、書の中へと入っていった。

「ぐ、が、……きつついなあ」

額に脂汗が浮いているのが、自分でもわかる。眉間にしわを寄せ、はやては呻いた。

『主……』

「大丈夫、大丈夫。なんとかいける。三人が帰ってくるまで、これなら保つやろ」

手足の先どころか全身の至る所を焼きごてで熱されているような感覚だが、魔法の制御を解く気はさらさらしない。

「ええんや、これで。これで、ええ」

これが、自分の役割だ。

『……よろしかったのですか?』

「何がや?」

『主はやてだって、騎士恭也を強く深く、想っております。であれば……』

「それは、リインかて同じやろ?」

『……騎士恭也の傍にいるべきなのは、私ではないと、そう思ってしまういます』

「似たものコンビやなあうちら。息ぴったりと言うべきかな」

ラインフォースの零した言葉は、はやての心情そのものだ。

「せやから、これでええんや。こういう裏で影で縁の下で、さり気なく支えるのがきつと、私らの示せる愛情なんかなあつて、思うから」

だから、そう、これでいいのだ。

頬に生温い感覚があるのはきつと、魔力過負荷で全身に奔る痛みの所為のはずだから。

第24話 認めてあげて ― 許してあげて (後編)

「……花」

恭也の眼の前に広がっていたのは、鮮やかで可愛らしい、黄色い花の咲き誇る光景だった。

「菜の花、だな」

自分がこれを間違えるはずがない。父が死ぬ前、身籠っていた義母へ告げた娘の名前の由来なのだから。

妹の、名前の由来なのだから。

「……俺は、なにをして」

上手く、思い出せない。思考が働かないわけではないのだが、状況が判然としない。

気がつけば突然花畑の中だ。

頭上にはさんさんと輝く太陽に、抜けるような青い空。雲一つないそれは、心地の良い清々しさを感じさせてくれる。

「……」

花を踏まないように気をつけながら、とりあえず進んでみる。生気に溢れた匂いが時折鼻孔をくすぐった。

どれくらい歩いたろうか、一分か十分か、一時間か。よくわからない感覚の中、やがて視線の先に人影が見えてきた。

それは、小さな影だった。

陽光に少しだけ目を眇めながら近づくと、幼い少女である事がわかる。

彼女は、恭也のとてもよく知っている娘だった。

「……なのは？」

「うん、おにいちゃん」

いつの間にか、眼の前。

そこに立っていたのは、妹だった。髪を二つに結わえて、似合いの淡い色合いをした服に身を包んでいる。

自分と随分と差のあるその幼い姿に、こちらの腰元までしかないその低い背丈に、一瞬だけ違和感が奔ったが、すぐに気にならなくなった。

「何をしているんだ？」

「おにいちゃんに、会いに来たんだよ」

「俺に？」

うん、と。その愛らしい顔に陽光そのもののような優しく明るい笑みを浮かべて、なのはは頷く。

「ねえ、おにいちゃん、座ろう」

「ああ」

手を引かれ、なのはと共にその場に腰を下ろす。草花の香りが、より近くなった。

恭也の右隣に座る妹は、お互いの距離を零にし、ぴったりとくっついて。猫のようにこちらの肩口に顔を擦り付け、幸せそうな笑顔を浮かべている。

愛しいという概念の、その塊のようだと、恭也はいつも思っている。

「おにいちゃん、この花、好き？」

「ああ。……まあ、なんだ。一番好きな花かもしれない」

理由なんて、照れくさくて言わないけれど、言うまでもないことだ。

「本当っ？」

頷きながら、眼の前に咲く小さな花をぼんやりと見つっ、なのはの頭を撫でる。

「私もね、この花が一番好き。それから、自分の名前も大好き」

「……そうか」

それは、父が聞いたら喜ぶだろう。いつかあの世へ行った時、土産話にしよう。

「なのは、なのは……お父さんは、最初、漢字で考えたんだよね？」

「ああ。それを母さんが、”堅い感じがするから”とひらがなに変えた。だからお前の名は、父さんが考えて、母さんが柔らかくした、二人に愛された名だ」

「そっか……」

なのはという名前は、父が妹に遺してつけたものの内、きっと大きな大きな一つ。それを大切に、好ましく思ってくれているのはやはり、嬉しかった。

「おにいちゃんは？」

「なんだ？」

「おにいちゃんは、自分の名前、好き？ 恭也っていう、自分の名前」

「……俺は」

問われ、考え、

（恭也、恭也、か。……俺は）

いつもだつたらごまかしたりはぐらかしたり、そういう事が出来たのだからけれど、なぜか今、恭也の頭にそんな選択肢は浮かばず。

「……いや」

自然、首を振っていた。

「俺は、そうだな、あまり好きじゃないかもしれない」

「……どうして？」

どうしてか。己の考えに、感情に潜って答えを探す。

案外と、それはすぐに見つかった。

「……呪いだ、思っている」

「呪い？」

「名前は、人が生まれて最初に掛けられる呪いだと言う、そんな話がある。お前のそれは、愛で編まれた祝福の呪いだ。のろいと読むより、まじないと呼ぶべきか」

その名がこの子を、幸せにしてくれるように。

その名のこの子が、幸せに生きてくれるように。

それが、愛されて生まれる、普通のこどもに付けられる名前という名のまじないだ。

だが、自分のものは違うと思う。

「俺の母は、産みの母は、産んですぐに俺を捨てた。父さんを愛していたのかどうかすら、そもそも定かじゃない。そんな彼女が、俺と一緒に残していった書き置きの中に、この名は記されていたらしい」

「……」

なのはは無言、じつと恭也の話を聞いていた。その眼はまっすぐ、恭也を見ている。

「どういうつもりで、その人は俺にこの名をつけたのか。どういう思いで、その人は俺にこの名を授けたのか。それはわからないが、……俺が彼女に愛されなかった事は、きつと事実で、つまり、俺の名は愛されてつけられたものじゃない」

「……だから、呪い？」

「ああ。愛せなかった子供に残した、愛さなかった証。それが、恭也という名だと、俺は思っている」

こんな話を誰かにしたのは、これが初めてだった。自分自身の中でも、気持ちをこんなにはつきり言葉にした事はない。

だけど今は、そうする事になぜか、抵抗があまりなかった。自然と、想いを零してしまう。

「……おにいちゃん、私ね、昔、調べた事があるんだ」

「何をだ？」

「恭也、っていう名前の意味」

「……ああ、字面だけだとわかりにくいか」

あまり日常的に目にする漢字ではないかもしれない。恭しいというのも、言葉では使うが漢字で表記される事はあるにないだろう。

「也は前の言葉を強調する役割。恭は礼儀正しく丁寧とか、慎み深くて謙虚、とか、そういう意味だつて、辞書には載ってた。それを見て私、すぐくびったりだなって思った」

「……そうか？」

「びつくりするくらいぴったりだよ？ おにいちゃんを知ってる人なら、誰に聞いてもきつとそう答えると思う」

「……そうだろうか」

人から見ると、自分はそう映るのか。わからないものだ。

「……でも、ぴったりはぴったりなんだけど、でも」

なのはは、優しく柔らかく恭也に寄り添ったまま、言う。

「それだけじゃあ、ないんだとも思う。ねえ、おにいちゃん」

「……なんだ？」

「おにいちゃんは、おにいちゃんの事、好き？」

その問は、頭に心に、すつと自然に入ってきた。
だから答えも、力みなく溢れる。

「……好きでは、ないな」

苦笑交じりそう答えて、しかしなのはは驚かなかった。

「うん、……だよね」

「知っていたのか？」

「私は生まれてからずっと、おにいちゃんの事を見て、おにいちゃんの事を想ってきた。だから、それくらいはわかるよ」

「……そうか」

こちらを見る妹の瞳は、芯が通ったようにブレない。

どうしてこの娘は、こんなに自分をまっすぐ見てくれるんだろう。

そんな風に見つめてもらえるほど、自分は見るべきところのある人間ではないのに。

「どうして、おにいちゃんはおにいちゃんが、好きじゃないの？」

「……そう、だな。………価値がないからだな。愛するだけの価値が、俺にはない」

「どうして、そう思うの？」

言葉だけでなく、声までもなのはは揺らさず。彼女がそうしてくれるから、恭也はふらふらと言葉を、本音を零す。

「……物心ついた時には、父さんに連れられて二人で修行の旅に出ていた。あの人ははつきり伝えるタイプだったから、どうして母さんがいないのかも教えてくれた。だから俺は、父さんに、……ずっと、ずっと、申し訳がなかった」

産みの母を恨んでいるわけではない。

ただ、一つだけ文句を言わせてもらえるのなら、父を巻き込んで欲しくなかった。

「父さんは、自由な人だった。明るくて、大らかで、……とても、愛し合ったわけではない女との子供なんかは、人生を縛られていい人じゃなかった」

だから、自分を捨てるのなら、誰もいないどこかにでも捨てて欲し

かったと思う。

「それに、父さんは、不世出の天才と言っていていくらの剣士だった。俺を押し付けられた当時の年齢なんて、言わば全盛期だったろう。どう考えたって、子供の世話に時間を取られるべき人じゃなかった」

周りの親戚たちの力も借りてはいたが、それでも男手一つで育ててくれた。剣を握れば断てぬものなしと賞賛されるその手で、自分の世話を焼いてくれた。

「父さんは、俺を心から愛してくれた。俺も、あの人が大好きだった。愛していた。だから、申し訳が、なかった。彼に望まれて生まれてきたわけではない自分が、あの人を縛ってしまふ足枷になっている事が、申し訳なかった」

もし望まれて生まれたのであつたなら、こんなふうには思わなかったのかもしれないが、生憎と、そうではなかった。

「……それに、俺には父さんのような才能もなかった。あんな剣士になれるような才能は、持って生まれてこなかった。天才剣士の息子として生を受け、その天才にずっと教えてもらって、鍛えてもらって、導いてもらってきたくせに、俺に大成の気配なんてものは、お世辞にもなかった」

親戚たちは幼い恭也の剣を褒めてくれていたが、誰一人として、士郎のようになれるだろうとは、決して言わなかった。

「価値がない。少なくとも、不破士郎の人生を縛っていいほどの価値が、俺にはなかった。それを理解した時には、もう、俺は俺が好きじゃなかった」

自分の声音は、聞いていていやになるくらい空虚で、だからこそ、なんの虚飾もなくて。

素直で正直な、高町恭也の本音だ。

「大好きな人に迷惑を掛けるだけの俺を、……俺は、憎いと思うようにすら、なった」

あるいは、いつか口に出される事を待っていたかのように、それらは止まる事なく恭也から溢れていく。

「……すまない、なのは」

「どうして、謝るの？」

「父さんが逝った後も、お前が生まれてからも……俺は、どうしようもないままだった」

言い訳なんて出来ないくらい明確に、大切な人達に迷惑と面倒を掛け続けた。

「家の外側にある全てから、家族を護りたくて。それで、中にいるお前達をないがしろにしたあげくに泣かせた」

無茶な特訓で二度も身体を壊し、家族の心を苛んだ。護るだなんて父の墓前で誓っておいて、出来たのは真逆の事だけだ。

「そして、そんな事をしたくせに、お前達を護れるだけの力も、……父さんの代わりになれるだけの力も、結局手に入れられなかった」

残ったのは、高みを目指せなくなった身体。

憧れていた姿に届かない、本当にどうしようもない欠陥剣士。

その時、そうだ、その時だ。

自分は自分に、もう何も期待をしなくなった。自分や周りを裏切り続けてきた自分を、見限ったのだ。

「……どうして、俺はこうなんだろう」

それでも時折、考える事はある。

何が悪かったのだろうか。

「どうして、こうでしかない俺は……」

そして、至る結論はいつも同じ。

そもそもが、間違いだったのだ。

「どうして、生まれてきてしまったのだろうか」

視界のじみに気付いた時は、もうそれは落ちていた。

ぼろり、ぼろりと。

静かに、雫は零れる。

「……俺は、こいつが、大嫌いだ」

それでも自分の声は言葉は、淡々として。

「俺が護るべきものを、護りたいものを、抱えきれないこいつが、大嫌いだ」

それが自分の空虚さを示すようで、お似合いだと思った。

「この手はこんなに弱々しくて、家族を、ちゃんと護れやしない」
広げた手のひらを見つめながら、これが父だったらなんて馬鹿な事を考える。

あの日逝ったのが自分だったなら、どんなにか、よかつたろう。

「望まれて生まれたわけじゃない俺が、願った自分にすらなれなかつたら、もう本当に、誰にとつても、要らない人間でしか、ない」

知らず、恭也の瞳は瞑られていて。闇の中、自分のそんな言葉が耳に届く。

要らない人間。

そうだ、そうなんだ。

他の誰でもない自分がずっと、自分をずっと、そんな風は無価値と蔑んで生きてきたのだ。

「……すまない、なのは。すまない、……すまない。お前の兄は、お前の兄なのに、こんな、そんな奴なんだ」

お前はこいつではない、立派な男に、愛されて育つはずだったのに――。

「……？」

(……あ、つい?)

そんな言葉を零した恭也に触れたのは、猛烈な熱だった。

目を開いて見てみれば、恭也の左手を、同じ形をした小さなものが、小さいなりに包んでいて。

「ねえ、おにいちゃん」

そこから伝わる途方も無い熱が、恭也の身体の内に、心の裡に、入り込んでくる。

「私の手は、あつたかい?」

小さな手の持ち主である彼女の問いに、恭也は正直に頷いた。

「……ああ」

「じゃあ、さ」

そう言つて、なのはは恭也の手を引いて。

彼女の、小さな胸の上へと置いた。

「私の胸は、どきどきしてる。」

「……ああ」

言葉どおり、手のひらには命の証が伝わってくる。それは大きく、強く、疑いようもない確かさで。

「おにいちゃんが言ったこと、全部を違うだなんて、私には言えない。わからないこと、知らないことが、いっぱいあるから。でもね」
トクン、トクンと。

小さな妹の小さな胸の、その中で生まれる小さな音は、波は、しかし恭也を決して離さない。

「わかる事が、あるよ。知っている事が、あるよ。私には、世界の誰より確かに、証明出来る事が、ある」

恭也の手を胸に押し付けるなのはのそれは、相変わらずの熱量で。

彼女は、まっすぐにこちらを見つめて、言う。

「私は、生きてる。熱を持って、鼓動を持って、今、こうして生きてる。おにいちゃんに生まれた時から……ううん、きっと生まれる前から愛されて、想われて、護られて、だから、私はこうして生きてる」

「……お前は、俺がいなくなったって」

「おにいちゃんが、いなかったって?」

「……っ」

なのはは、薄く笑った。

危うささえ感じる、そのひどく澄み切った笑顔が、恭也の意識を鷲掴みにする。

「ねえ、おにいちゃん。どうか、歪めないで。すごく単純な、はつきりとした事実を、歪めないで。ねえ、おにいちゃん。私が、高町なのはが、おにいちゃんがいなくて、高町恭也がいなくて、それで生きてこれたと本当に思うの? 私私として、生きてこれたと本当に思うの?」

「……それ、は」

「私以外の誰かとしては、生きてこれたと思うよ。でも、それは私じゃない……」

優しく、なのはは細い指で恭也の手を撫でる。

その柔らかい仕草はしかし、恭也の心に強く深く突き刺さり、そこ

からクラクラとする何かを叩き込んでくる。

「価値がない？ どうしようもない？ 誰にとつても要らない人間でしかない？ それを本気で言ったのなら、おにいちゃんは、私を全然わかってない」

「……あ、あ」

怒りなどとは比べ物にならないだろう彼女のそんな灼熱が、恭也の全てを焦がしにくる。

「ねえ、おにいちゃん、わかって、お願い。——好きなんだ、大好きなんだ。愛してる」

手にかかる、彼女の吐息はそれすら熱い。

「私はおにいちゃんが、もう、どんな言葉にも収まらないくらい、何をしたって伝えきれないくらい、好きで、大好きで、愛してる」

熱くて、甘くて、頭を溶かすようで、あつという間に全身へ回り、籠もった想いで包んでくる。

「おにいちゃんにもらった愛と、おにいちゃんに向ける愛だけ。それだけだよ。私は、それだけで出来てる。そのために生きてる。だから」

なののは、今度は恭也の右手を取った。彼女はそれを、自らの頬に当てる。

恭也の手のひらに、すべすべとした柔らかい、言いようのない愛しい感覚が広がって。

「おにいちゃんに価値がないだなんて、そんなことがあるもんか」

これから上がるなんて想像も出来なかった超高温の彼女の熱が、しかしまたしてもその勢いを猛烈に増す。

「価値なら、ここにあるよ。少なくとも一つ、ここにあるよ。おにいちゃんが、嫌いながら、憎みながら、それでも必死におにいちゃんを生きてきた、その意味は、その価値は、少なくともここに一つ、あるんだよ」

彼女の言葉、その一つひとつが恭也の心を強く叩く。

「だが、……俺は、………おれは」

「名前を、呼んで。私の名前を」

それはまるで、作ってしまった強固な殻を砕き壊してくるかのよう。

「あなたがずっと護り続けてくれた、だから生きてる私の名前を」

「……っ」

導かれるようにして。

口から、喉から、胸から、腹から、何より、心の奥底から。

彼女の名前を、その熱を、求めて、だから溢れた。

「——なのは」

「——うんっ」

その名を、呼んで。

その名の彼女が、微笑んで。

「……………あ、あ……………あ」

決定的と、言っていいような気さえした。

「あ、ああ……………」

炎があつた。冷え冷えと、どうしようもなく寒かった恭也の内に、煌々と燃える炎があつた。

愛しく燃える、愛しさで燃える、そんな炎があつて。

それは、光を放って示してくれる——世界はこんなに明るいと。

それは、熱を伝えて教えてくれる——世界はこんなに暖かいと。

わからない、わけがない。

「……………これは」

「……………おにいちゃんも、あつたかいよ」

彼女の炎だ。

「……………ち、がう。おれは、ちがうんだ、なのは……………！　こんな、こんな、こんなものを、もらっていいやつじゃ、ないんだっ」

ちよつとした同情や、憐れみの気持ちでは、これはありえないように思えた。

なのはの内から恭也の中へと燃え移ったその炎は、きつと間違いない、彼女全霊の想い。

彼女そのものと、そう言ったっていいくらいの。

「おれが、おれは、こんな、こんな……………おれに、こんな……………」

「私を誰にあげるかは、私が決める事だよ」

「……っ」

至近距離、彼女の瞳を覗き込まされ、理解してしまう。
理解を、させられてしまう。

「なの、は……」

「うん、おにいちゃん」

彼女の炎から、逃れるすべなどないのだと。

ましてやすでに燃え移っている、何をどうしたって、それはもう手遅れなのだ。

「……………お、れは」

だから、受け入れるしかない。この炎を、もう受け入れるしかない……なんて言い方は、きつと卑怯だろう。

「……………あ、あ」

「あなたのおかげで、私は生きてる。あなたのために、私は生きてる。あなたが護ってくれた私は、あなたの事を身体全部で、心全部で、魂全部で愛してる」

「っなの、は……」

この炎に炙られ焼かれ焦がされる事が、だってこんなに——心地が良い。

熱くて甘くて、暖かくて。

「……………なの、なのは、……………なの、なのは」

「うん、ここにいろよ。ずっと、ここにいろよ」

「……………っ！」

これが生きていくという事なんだと、そう思った。

「おにいちゃん、私の事を愛してくれている？」

「ああ、ああ……っ」

「私が今こうして、熱を持って、鼓動を刻んで、生きてる事を、喜んでくれている？」

「ああ、おれは、……………おれは、それが、なにより、なにより……」

妹が出来たと聞かされた時を、思い出す。

そして、この世に生まれてきた彼女を、初めてこの手に抱いたあの

日の事を、思い出す。

「……なのは、おれは、おれは、おまえが、なによりおまえがつ」

「……うん。わかっていることを聞いちゃった。でも、やっぱり、すつごくすつごくすつごく、嬉しい」

あの日、自分は確かに誓った。

この娘を護ると、そう誓った。

全身でもって、全霊でもって、高町恭也の全てを賭けて。

腕に抱いたこの愛しさの塊を護ろうと——護りたいと、そう思った。

(……ああ、そうだ。そうなんだ)

胸の内、彼女がくれた燃え盛る炎が、闇を払ってそれを見つけ出す。(なんで、わすれていたんだ。どうしてうまれてきたんだなんて、そんなこと、なんで、おもったりしたんだ)

高町恭也の根幹にあつて、だからこそ、見えなくなってしまうていた、それは。

あの日、彼女が教えてくれたことは。

「おれは、なのは……おまえを……」

ひどく単純で明快な、その事實は。

「おまえをまもるために、おまえをまもりたくて、だから、だから、だからうまれてきたんだ……。おれは、おれは……。——俺は、いずれ生まれてくるお前を、この手で護りたくて……。だから、先にこの世界に生まれてきたんだ……。っ」

「……似たもの兄妹だね。私も、おにいちゃんを愛したくって、おにいちゃんに愛されたくって、だから、生まれてきたんだよ」

傍から見たら、愚かで卑賤な関係に映るのかもしれない。

兄妹同士でお互いに依存した、危うく浅ましい間柄に見えるかもしれない。

「なのは、なのはっ、……。なのは」

だが、だからなんだ。

「うん、うんっ、おにいちゃん」

これが、自分の生まれた意味なんだ。このために生まれて、このた

めに生きているんだ。

「……忘れないで、どうか、忘れないで、おにいちゃん。私、転んだりもするよ、迷ったりもするよ、だけどね、おにいちゃん。それでも私は、あなたがいてくれるから、だから笑顔でいるんだよ」

まっすぐに、なのははその光を湛える瞳でこちらを射抜き続ける。

「雨の日だって、眠れない夜明けだって、あなたがいてくれたから、だから、だから私はね、とびきり笑顔でいたの」

こんな、風に。

そう言つて彼女が浮かべた笑みは、蕩けるような極上に柔らかく愛しいその笑みは、恭也の中の何かを吹き飛ばした。

黒い靄のような、まるで泥のような、自分の心を底の見えない闇の内へと引き込んでいたその何かは、彼女の笑顔の前ではあきれるくらいに無力だった。

「……私ね、おにいちゃんその顔が一番好き」

「……俺は、どんな顔をしている？」

彼女は、その名そのもののような微笑みを浮かべたまま、教えてくれる。

「優しい顔を、してる。わかりやすくはないけど、でも、私にははつきりわかる。笑っているよ」

「……そうか？」

「うん。笑ってる。笑顔になってる」

目の前のこの娘の瞳に映る自分を覗きこんでみたが、さすがによくわからない。

「……ただ、この娘が言うならそうなんだろう。」

「……この娘が居るなら、そうなんだろう。」

「……この娘が居るから、そうなんだ。」

「お前と、同じだな」

「うんっ」

「……そうだ、同じだ。同じなんだ。」

「……俺は、お前が居るから、笑顔になれる。……この世界の愛しさに、気付くことが出来る。なのは、お前がいるからだ」

「うん、嬉しい。でもね、私が居るのは、こうしているのは、生きているのは、ずっと護ってくれた人がいるからだよ」

「……そう、なのか」

「うん、そうなの」

恭也は、頷いた愛しいその女の子を両腕で掻き抱き、胸に収める。

「なのは、……なあ、なのは」

「うん、なあに？」

「俺は、俺は……——」

思う。

すつきりとした頭と心で、思う。

腕の中にある、胸の中にあるこの清々しい熱を、この心地いい柔らかさを、この甘い匂いを、この途方も無い愛しさを。

護れたというのならば。

「俺は、俺を……俺を、少しは、認めてやっても、いいのだろうか」

恭也は、その結論にたどり着いた。

随分と長く歩いた気がするけれど、それでも。

「うん、……うんっ」

「良くやったと、……お前なりに、頑張ったなど、そう、言っても、やっても、いい、の、だろうか……」

「うん、うん、そうだよ、いいんだよっ」

こちらに包まれたままのなのはが、大きく大きく頷いてくれる。

「認めてあげて、言っておいて、褒めてあげてっ。その人は、ずっと、ずっと、本当に、頑張ってきた人だから」

「そう、か……いいのか」

「いいの、いいの、いいんだよ。ずっとずっと、自分じゃない誰かのために、って、その人は頑張ってくれたの。だから、ね」

彼女の言葉は、まるで優しく手を引くよう。

「その人を、誰でもない、あなたがちゃんと、褒めてあげて」

「……ああ、そうしてやろうと、思う」

導かれて、前に進めた気がした。ほんの小さな一歩でも、先に進めた気がした。

真つ暗だった恭也の道は、今はやさしく照らされている。

歩いて行こうと、思った。

歩いて行けると、思った。

歩いて行きたいと、そう思った。

この先どれだけ迷っても、行く方向だけは見失わない自信があった。

「……………っありがとう、なのは、ありがとう」

「お礼なんて、いらぬよ。…………だから、代わりに」

彼女の言葉を聞きながら、恭也の意識は薄くなつていく。

「自分のことを嫌いになりそうなとき、憎んでしまいそうなとき、そんなときは、必ず私を思い出して」

暖かい光に包まれるように、視界が白に染まっていく。

「あなたが愛してくれている、私のことを思い出して。そして、あなたはそんな私を誰よりも確かに護ってくれているんだってことを、思い出して」

ここでもらった胸の中に燃える炎は、きつと永遠に消えないだろう。

「ゆっくりでいい。あなたの強さを認めてあげて、おにいちゃん」

「——ああ」

頷いて、恭也の意識は光に溶けた。

柔らかく輝く黄金の月が、宵闇を薄める夜だった。

視界には不十分せず、周りの光景はよくわかる。

「……………こは」

穏やかな海に、こちらの足をとる砂浜。覚えのある場所だ。

ひたすらに、がむしやらに、強くなろうと一番もがき続けていた頃に、何度も走りこみに来た。御神流剣士になくはならない足腰をこ

ここで鍛えようと一人、走って走って走り続けた。

そして結局、得たものは。

「……っっ」

がくんと、恭也の身体は崩れた。たまらず、砂浜に膝を突いて。

そう、膝だ。

「い、たい……」

右膝が、ひどく痛い。立っていられないくらいに痛くって、走れやしないくらいに重くって。

「…………」

だけど、座ってなんていられなくて。

無理やり立ち上がって、恭也は足を引き摺りながら前へ進む。

「俺は、……強く、ならなくては」

頭がうまく働かない。自分が何をしていたのかも、よく思い出せない。だから、その強い想いに従って、身体を動かす。

そうだ。

身体を動かし、使い、鍛え、辿り着かなければならない場所があるはずなのだ。

どれくらい歩いただろう、いつの間にか足元には水面があった。水際に湾曲しているからか、それとも自分がまっすぐ歩いていなかったのか、わからない。

シンと冷たい水の感触が、意識の上を滑っていく。

「……あ」

動きの悪い右足が、水とそれを吸って重くなった砂にとられ、身体を無様に前方へ転ばせた。

とつさに手を突き出して、顔を打つことは避ける。

「……っっ」

が、重い失望感のはしかかってくる。

こんな事で、自分は果たせるのだろうか。

自分の責務を、果たさねばならない役目を、果たせるのだろうか。

「……」

水面に映る顔は、幼いと言っているいい程度に入るかもしれない、十や

そこらの少年のものだった。少しだけ違和感が奔るが、すぐにぼやけてなくなっていくた。

面構えからわかる未熟さに吐き気がして、水面とは言え殴ってやろうかと思っただがやめておいた。

そんな事より、前へ進まなくては。

そうではなくては、自分はいけない。

身体を起こし、顔を上げ、立ち上がるうとした時だった。

「そのままでも、いいんですよ」

背後から、声が聞こえてきた。それは海のように深く、月のように優しい音色で。

引き寄せられるように身体ごと振り返って、恭也は彼女の姿を眼に映した。

「……………」

腰元まで伸びた、黄金の色彩を湛える長い髪。引き締まった体軀は、それでいて女性らしい起伏に満ちている。白いかんばせには紅の双眸がよく映えて、大人びたその顔つきは現実味がないくらいに整っていて。

年の頃は、自分よりも十ほど上だろうか。

月明かりの下、同じ色髪を宿す彼女は、恭也と同じ水面上、まるで女神のようだった。

「そのまま休んでいたっていいんですよ、恭也さん」

「……………フェイト」

「はい」

穏やかに微笑んだ彼女は、こちらへ歩み寄ってくる。水の跳ねる音さえ優しい気がするの、その笑顔の魔力だろうか。

長いスカートが濡れることにまったく躊躇せず、彼女は揃えた膝を水の中へと突いて、恭也と視線を合わせた。

「膝が、痛むのでしょうか？」

「……………ああ」

「それなのに、どうして？」

「……………辿り着かなくては、いけないところがあるんだ。そうして、やら

なければならぬ事があるんだ」

先へ進んで、届かねばならない——父の座したあの高みへと。

強くなつて、護らねばならない——父の遺した家族と流派を。

「それは、そんなに無理をして、あなたがやらなければならぬんですか？」

「……………俺しか、もういないんだ」

知らず、恭也の顔は俯いて。

水面に映つた未熟者の顔を見ながら、言葉を零す。

「父さんは、もういない……………。義母さんと妹二人を残して、逝つてしまった。あの人が護るはずだったものを、俺は、護らなければならぬ……………護りたいんだ」

だから、父のようになりたいと、ならねばならないと、そう思った。自分の不甲斐なさに諦めかけていたけれど、そんな事はもう言つていられないと思つた。

御神の一族にも、そして新しい家族にも、男は自分一人しか残つておらず。

弱さはもう、許されないと思つた。

なにより自分が、許したくないと思つた。

「護るんだ、俺が、護るんだ。だから、だから……………」

「あなたは、入らないんですか？」

優しい顔で問われた事が理解できず、瞳を見返すと彼女は穏やかに言い直す。

「あなたが護るものの中に、あなたは入らないんですか？」

「……………俺は、いいんだ」

恭也は、首を振る。

全部を抱えられるのなら、それがいいのだろうけれど、自分にそんな力はない。

だから、何かを切り捨てるしかなくて、義母や義妹も腹違いの妹もまさか捨てるつもりなど毛頭ない。先祖代々必死に磨き上げてきた流派も同じく。

そうしたら、切り捨てるものなんて、切り詰められるものなんて、恭

也には、一つしかなかった。

「俺は、俺の事は、いいんだ。他に比べられないほど、大事なものがあ
る」

「……他のものがどれだけ大切だって、どれほど愛しくたって、それで
も自分自身をないがしろにしてしまったら、そんな生き方で生きてし
まったら、寂しくはないですか？ 辛くはないですか？」

まつすぐこちらを見てくる瞳を、恭也もせいぜいまつすぐ見返して
答える。

「寂しくなんて、ない。辛くなんて、ない。俺は、これでいいんだ」
言い切った、言い切れた。そうだ、自分は、それでいいんだ。

「……ねえ、恭也さん」

目の前、金色を従える彼女がゆつくりと柔らかく、恭也の頬に片手
を伸ばした。それはひんやりとして気持ちのいい、優しい手だった。
だから、気を抜いてしまつて。

「——駄目ですよ、恭也さん」

「……っ!？」

彼女の浮かべた美しい笑顔に恭也の心は警鐘を鳴らすが、……も
う、遅い気がした。

逃げられない。なぜかそう思った。

「フェイ、ト?」

「はい、……ふふ」

恭也の頬を、彼女の指が優しく撫でる。

「恭也さん、覚えておいてくださいね。……私に、あなたの嘘は通じま
せん」

「……なにを。俺は」

「そもそも嘘なんて。」

そう続けようとしたが、出来なかった。目の前、その女性の紅い瞳
があまりにも、こちらの全てを掴んでいたから。

「恭也さんは、結構嘘つきな方です。色んな事を周りに偽って、あるい
は、自分に対しても。でもね、恭也さん。私にそれは通じない」
「……う、あ」

「あなたの瞳が、あなたの声が、あなたの表情が、あなたの息継ぎが、あなたの指先が、……いろんなところのいろんな動きが、私に全部教えてくれる。少なくとも私にとって、あなたの身体はすごく正直」
こちらの頬を撫でる白い指すら、まるで見透かすような感触を示してくる。

「だから、いいんです。私には、私の前では、そんな風に無理をしなくて」

「無理なんて、していな……っ」

言いかけた言葉を途中で飲み込む。

目の前の彼女が、眼で変わらずこちらを掴んだまま、その形のいい唇だけで笑みを作ったからだ。

無駄だ、と。

そう言われているような気がした。

「……俺は、おれは」

理解を、させられる。彼女の前では、意味がないのだ。

「はい、恭也さん」

「……おれは」

どれだけ力を籠めて張った虚勢も、きつと砂上の楼閣に等しく。

「………仕方がないじゃないか」

零してしまったその言葉を、捕まえようにももう遅かった。

「………どれだけ、痛くても、……辛くても、寂しくても、それでも」

言いたくない。こんな事を、言いたくない。そんな自分を許せない。
い。

なのに。

「………」

無言、暖かい空気で優しく包んでくる彼女の存在が、鍵を開けさせる。

恭也が必死で押し込めて、誰にも、自分にも、見せないように封じ込めていた弱さを、その詰まった容れ物の鍵を、手を取り優しく開けさせてくる。

「……俺しかないんだ。俺しか、もういない、それで、それで」

カチリと、そんな音がした気がした。

開けてしまったと、そう思ってた。

「俺には、もう、………いないんだ。俺には、誰も、いないんだ……」

こぼれたのは、そんな言葉で、想いだった。

ずっと、誰にも絶対に、言わなかった想いだ。

「……母さんは、笑っている。いつも明るく、笑っている。俺たちのために、父さんとの約束のために、そうあろうとしてくれて……だから、わかるんだ。あの人はどこかで、俺たちの見ていないところで、それでもやっぱり震えているって」

義母となったその女性は、とても強い人だった。辛い過去があっても、未来を皆で愛するために、今で笑える人だった。

とてもとても、強い人で。

涙すら、笑顔に換えて流さない人で。

「だから、あの心強くて小さな背中に、もうこれ以上負担を掛けたらいけないんだ。きつと自分が潰れても、あの人はずっと笑うから……だから、絶対駄目なんだ」

独白は、続く。

もう、止められそうになかった。

「美由希は、産みの母親に、美沙斗さんに捨てられたと伝えられていて、だから、すぐくすぐく、父さんに懐いていた。父さんの剣にも、憧れていた。なのに、直接教わる事が、ついぞ、叶わなかった」

父が帰ってこないことを義母から教えられたときの彼女を、忘れる事は生涯、ないだろう。

「どれだけ、無念だったろうかと、思う。だから、あいつにはもう少しでも、寂しい思いをして欲しくなかった」

あの覚えるのが遅い弟子は、しかし一度覚えた事は絶対に忘れない。父へのあの憧れも、彼がいなくなった事への寂しさも、色褪せないままきつと、ずっと彼女の中にある。

だから、少しでも自分が、その代わりを果たしてやりたかった。

「……なのは、触れる事すら出来なかった。父に、世界で一番、確かに護ってくれる男に、その愛に、直接、触れる事すら出来なかった。

……あんなに愛しいあの娘に、どうしてそんな寂しい思いをさせなければならぬのか、俺にはわからなかった」

やるせなかった。この娘はもつと、幸せになるべきなのにと思っ
た。

「せめて、怖い思いや痛い思いに、怯える事だけはして欲しくないと思っ
た。そんな時にすがりつく腕を、安心を与えてやれる胸を、あの娘にあげたかった」

明るく笑わせてなんてやれないから、せめて、木陰を作る葉を抱え、
寄りかかる事のできる幹を持った、彼女のための木であろうと思っ
た。

それが器用でない自分に来る、愛情表現の精一杯だった。

「姉のような人も、妹のような娘達も、出来た。だけど、彼女たちだつ
て、たくさんの辛さを抱えていて……少しでも、その背を支えてやり
たいと思っ
た」

恭也は、家族が大好きだった。

一般的ではないその内訳だが、それでも、誰にだって誇れる家族だ
と思っ
ている。

「……俺は、俺は、だから、彼女たちを護りたくて。光の満ちる世界で、
生きて欲しくて」

弱ければ、護ってもらえる。怯えていけば、かばってもらえる。震
えていけば、抱き締めてもらえる。

大好きな家族には、あの人の遺した彼女達には、そんな世界で生き
て欲しかった。

だから、自分がなろうと思っ
た。

弱いものを、護る側に。怯えるものを、かばう側に。震えるものを、
抱き締める側に。

なろうと、思っ
て。

思っ
て、願っ
て、もが
いて。

だから、絶対に誰にも、言えなかった事があっ
て。

それは。

「護りたくて、護りたくて、護りたくて……でも、おれは、だから、お

れには……っ」

息が乱れていく。これを言っではいけないと、身体が心が叫んでい
る。

これだけは零してはならないと、禁じてくる。

「……いいんです、言っってください」

だけど目の前、優しい声が囁く。

「大丈夫、大丈夫だから、ね。言っってください」

「あ、あ……」

「私に見せて、弱いあなたを。あなたの暗くて脆くて弱いところ全部、
私に見せて」

その甘い囁きは、まるで麻薬のようだった。

必死に力んでいた身体と心が、だらりと弛緩していく。

「お、れは……」

「はい、恭也さん」

「おれ……は……」

押し込めていた箱の奥から、それは最後に現れた。

「……………おれも、誰かに、——護って、
ほしかった」

それこそ、父のところへ向かうその時まで、誰にも言わずにおこう
と思っただけ。

「でも、誰も、いないんだ……。護ってほしいと、願っていい人なんて、
ねだっていい人、なんて、……いないんだ」

義母も、義妹も妹も、他の家族たちだって。

「みんな、護るべき、人達で……。だから……。だから、駄目なんだ……」
護るべき人達に、護ってほしいなんて、言えるものか。

「おれは……」

言えなくて。

言えなくて。

だから、もつと歩こうと思った。痛みを訴える膝を抱えても、それ
でも。

寒くて寒くて、だけど誰にも縋り付けなかったから、せめて、歩こ

わけが、わからない。

どうしてこんなに優しい声で、こんなに暖かい言葉が降ってくるのか、わからない。

「はい、運命です。……恭也さん、私は、どうか、私は……あなたのための、運命でありたい。あなたのために運ばれてきた、そんな一片の命でありたい」

「……………あ」

自分の心臓が高く高く、鳴り響いたのがわかった。

彼女の言葉に、その気持ちに、どうしようもなく反応した自分がいた。

「おれの、ため……きみ、が？」

「はい」

「……………だ、めだ。だめだ、そんなのはっ」

そんなのは、そんなのは。

そんなに。

「そんなにつ、……………やさしく、しないでくれっ」

「……………あなたのためなら、何でもします。だから、それだけは聞けません」

「……………や、めて、くれ」

怖い。

「聞いてください、恭也さん」

だってこのままでは、絶対に、……………溺れてしまうとわかるんだ。

「……………や、め」

すうと、少しの息を吐く音の後。

「あなたの道は、私が拓きます」

「う、あ……………」

恭也の制止もむなしく、彼女の言葉は紡がれていく。

「あなたの敵は、私が屠ります」

「あ、……………あ」

それは宣誓のような誠実さと、単なる事実の確認のような自然さが同居する、不思議な声。

「あなたの願いは、私が叶えます」

「……あ、ああ、っ」

そのまま、そして彼女は続けた。

「あなたの全てを、私が護ります」

「フエイ、ト、やめて、くれっ」

「やめません、絶対、やめません」

「……う、あっ!」

彼女の声が、恭也の身体に、心に、纏わっていく。

たまらず、せめて身体だけは逃れようと彼女の胸の中で身をよじつて、しかしそこに抵抗はない。動けるだけ動ける、……動ける、のだが。

「……ここにいていいんですよ。ここで、ゆっくりゆっくり休んで、いいんですよ」

「……っ」

動いた先で、また捕まえられる。動きを読まれ、間断なく包まれる。

彼女との距離は、零のまま。

どれだけがいたって無駄だというのをわからされ、身体から力が抜ける。

「安心を、してはくれませんか？ この胸の中でどうか、安らいでもらえませんか？」

「……だから、だから駄目なんだ!」

構えも鎧も何もかも、捨て去って眠りたくなるこの安らかさは、高町恭也にとつてなによりも危険な劇薬だ。

決して手にしてはいけないと、口に含んで飲み干してはならないと、積み上げてきた自分の全てが警告している。

「よかった。それならいいんですよ」

「よくなど、ない! 俺は、ここにいたら、こんな風にされたら……」
彼女にこんな風にされ続けたら、結果なんて目に見えている。

「俺は、俺は………弱く、なってしまう」

ただでさえ大して強いわけでもない自分が、これでは本当に墮落してしまう。

「弱くちや、駄目なんだ……。弱い俺じゃ、弱い俺は……。駄目なんだ……！」

「……わかってください、恭也さん。ずっと強い必要なんか、ないんです。強くありたいときにだけ、人は強くあればいいんです。そしてそのために、弱くあるときも必要なんです。弱くつたつて、いいんです」

「……っただけど、だけど」

「大丈夫、いいんです。大丈夫だから、力を抜いて、構えを解いて。大丈夫、大丈夫です。私が、います」

ぎゅつと、また身体を抱かれ。

身を感じる柔らかい感触の奥、聞こえてきたのは愛おしいリズム。「護ります、あなたの弱さもあなた丸ごと、私が護ります……。どうか、護らせて」

とくんとくんと、鳴っている。彼女の命が、鳴っている。まるで恭也の側でそうすることが当たり前だったかのように、彼女の命は、その音色を響かせる。

「あなたに昔、言ってもらった事があります。教えてもらった事があります。約束を、してもらった事があります。だから今、それを今、あなたにも、お返しします」

彼女の声は、月光のように優しく降り注ぐ。

「辛いとき、切ないとき、寂しいとき。そんなときは、どうするのか。あなたが下手つぴで、不器用で、やり方を知らなくて、でも、やらなきゃいけない事があるんです」

やらなくては、いけない事。

ずっとずっと、諦めていた事。

「……フエイ、ト」

知らず、その名を呼んで。

「はい。そばにいます、ずっといます。あなたのフエイトが、ここにいます。ね、だから」

そして、彼女は言った。

「——私に甘えて」

「……………っ」

耳元で囁かれたそれは、多分、一番聞いてはいけない言葉だったの
だろう。

背筋に、なにかが奔って。

とても優しい、だけど抗えない、電流のようななにかが、奔って。
ずるり、と。

完全に身体から力が抜け切り、ゆっくりと瞼は帳を下ろす。

「……フエイ、ト」

「はい、なんですか？」

「……聞いて、くれない、か」

「はい、話してください。聞かせてください」

恭也は、彼女に委ねる事にした。

「……おれは、とーさんの死に方を、誇りにおもっている」

自分のなにもかもを、心の一番柔らかくって臆病な部分を、委ねて
しまおうと思った。

「……ひとりの護衛者として、ひとりの御神を修めた剣士として、立派
な死にざまだったと、おもっている」

心臓の鼓動と同じリズムで背中を叩き、時折髪をなでてくれる彼女
の手があんまりに優しく、胸が暖かで、熱が心地良いから、恭也は
続ける。

「……でも、だけど」

はじめてと言っていいくらい、それは新鮮な感覚。

「やっぱり、ずっと傍にいて欲しかった……」

痛い言葉を吐いているのに、ひどく心地が良かった。

「……俺に道を、あの剣を、示し続けて欲しかった」

これを知った自分は、もう、戻れないなと思った。

「それで、それで、……未熟な俺を！ 弱い俺を！ とーさんに届くそ
のときまで、……護っていて、欲しかった！」

言えなかったままの事。

癒えなかったままの傷。

「おれは、おれは……だから、おれは……っ」

自分の、みつともない、誰にも見せたくなかった弱さを晒す。

「……ひとりでこの道があるくのが、ずっと、こわくてしかたなかったんだ」

言葉にして、はつきりと口に出して、ああそうだったんだと知る。ずっと、見ないようしてきたけれど。

自分のなかに、そんな風に思う自分が、確かにいたんだ。

「う、あ、うう……っ」

認めるのも、怖くて。ずっとずっと、避けてきて。

「……恭也さん」

「フェイト、ト……フェイト」

なのに今、心はどこか決定的に、安らかだった。

「はい、恭也さん」

「あ、う、あああ……っ！」

ようやく、わかる。実感として、わかる。

これが、誰かに甘えるという事なんだ。

「……頑張り、ましたね」

「……？」

間抜けに見返すこちらに、彼女は微笑んで言う。

「それでも、怖くても、その人が遺していったもののために、あなたはずっと、怖くつたつて、頑張ってきたんでしょう？」

「……お、れは」

戸惑う恭也へ、フェイトは駄目押しのようにもう一度、認めていいんだというようにもう一度、告げる。

「頑張りましたね、恭也さん」

「……あ、……う、あ」

耐えられない。もう、耐えられそうになかった。

「恭也さんは、頑張り屋さんで優しくして誠実で……ね、だから、泣き虫だっがいいんですよ」

「あ、あ……！」

「いいんです。……には、私しかないから。だから、いいんですよ」

「うう、あ、ううううああ……！」

ボロボロボロボと、情けなくあふれていく涙を、しかし拭う気は

今度は起きない。

「……泣いて、泣いて、ね」

「ああ……う、ああああああ……！」

そのままでもいいと、彼女が背を叩き胸に抱いて熱をくれる。

「——っ、——っ！」

泣いて、泣いて、むせび泣いて。

「……泣きたいときにはそうやって、誰かのところで泣いていいんです。もうこれからは、我慢しないで。お願いだから、ひとりにならないで」

何かが、返ってきたような気がした。

「人に甘えて、人に頼って、人に縋って、——それが、人と手を繋ぐことなんだって、教えてくれたのはあなたです」

外れてしまっていた、人としての大切な何かが、返ってきたような気がした。

「だから、甘えたいとき、頼りたいとき、縋りたいとき、……手を、伸ばして」

彼女が見つけ出して、優しく手渡してくれた気がした。

「私がいつでも、それを掴みます。私の全部で、それを包みます。だから、手を伸ばして」

「……フェイト、フェイ、ト。す、あ……な………あり、…が……っ」
ぐちゃぐちゃになった心が、だからこそ安らかな心が、彼女に伝えようとする。

すまないと、ありがとうと、そう伝えようとする。

「……お礼なんて、ありません。謝罪なら、もっと」

まともに聞き取れない恭也の言葉を、しかし正確に理解して、彼女は優しくそう返す。

「だから、その代わりに」

彼女の言葉を聞きながら、恭也の意識は薄くなっていく。

「行く道が怖いとき、歩くその足が震えるとき、そんなときは、どうか私を求めてください」

意識が、閉じたまぶたの内側、安らかな黒に落ちていく。

「あなたを全部で想っている、私のことを求めてください。そうしたらこの胸の中で、どうか全部を護られてください」

ここで覚えたぬくもりが、恭也の心から離れる事はもうないだろう。

「ちよつとずつでいい。弱いあなたを許してあげて、恭也さん」

「……っああ」

頷いて、恭也の意識は柔らかく落ちた。

「……………」

見上げた天井は、優しい白。それに何秒か見とれてから、恭也は身体を起こした。

ベッドの上、どうやら自分は眠り込んでいたらしい。

「……………」

腰元あたりに、ベッド脇の椅子に座った二人の女性が突つ伏して眠っていた。左側に栗色の髪が踊り、右側に金色の髪が広がっている。

彼女たちの手はそれぞれ、恭也の手を握っていて。

なんと言えはいいのかわからない。

この暖かくて優しくて穏やかで、幸福に満ち満ちたこの気持ちを、なんと言って言葉にすればいいのかわからない。

なんと言って、彼女たちに伝えたらいいのかわからない。

だけど。

「……………それでも」

それでも、伝えたい。不器用だっていい、自分の精一杯で、彼女たちに伝えたい。

この気持ちを、自分の今を、伝えたい。

だけど起こすのは忍びないから、見つめて待とうと思った。それだけだって、なんて幸福だろう。

こうしていられる事が、どうしようもなく幸せで、幸せで、しかた

がなかった。

どれくらいの間が経ったか、二人は穏やかに眠ったままで。

「……………あら、おはようございます」

病室らしいこの部屋のドアを静かに開いて、入ってきたのは茶色のショートボブを揺らす女性だった。

「よう眠ったよ、恭也さん」

はやてはそう言いながら、彼女らしい柔らかい笑顔を浮かべた。

「ああ、良く眠れた。本当に、すごく。……………ところで、君はなんだか絵になる姿をしているな」

「そう？　なんや、照れるなあ」

彼女はその手に、一つひとつは小さな花弁だがたくさんのが集まって眼を惹く、魅力的な花束を抱えていた。特段詳しくないので何とは言えないが、可愛い花だ。それを携える彼女も、当然のように。

「でも恭也さんこそ、ずいぶん絵になる格好やで。別嬪さん二人に挟まれて」

「……………そうだな。それは、そうかもしれん」

自分の主観ではあるが、なのは比べるものなどそもそもいなくらいに可愛いと思うているし、意識を惹き込まれるような美しさにおいてフェイトを超える女性が居るとも、今の恭也には思えない。

別嬪と言えば確かに、この上ないだろう。

「なあ、恭也さん。お加減はどう？」

こちらのベッド脇まで歩み寄るはやてに、そう問われ。

身体の事、記憶の事。色々、答えるべきであろう事が頭の中をぐるぐると回って。

「……………俺は、知らなかったんだ」

結局、恭也の口から出てきたのは、そんな言葉。

「こんなに、視界が明るかった事を。こんなに、世界が眩しかった事を」

「……………恭也さん」

本当に、知らなかったのだ。

今、自分の瞳に映る景色はひどくクリアで、光に満ちている。

そして自分の心の中にもはつきり、それは差し込み優しく照らしてくれている。

こうして生きている今が、ひどく嬉しかった。

「……………最近の俺、どころでは、きつとないんだが」

言葉をきって、思わず苦笑を落とす。そんなこちらを、はやては優しく見つめてくれている。恭也は彼女の前、素直に喋る口をそのまま動かす。

「五年前も、十年前も、たぶん、二十年前だって、その前だって、こんな明るさも眩しさも知らなかった。俺は、見ようとしてこなかった」
自分自身に自分自身が落とす影の中で、きつと、ずっと生きてきた。それでいいんだと、これが自分だと、自分の生き方だと、そう思っ歩いてきた。

護りたい人を護れていれば、自分の幸せなんて、どうでもよかった。本気で、そう思っ生きてきた。

「だけど、今は違うんだ。俺は、俺も、光が愛しい」

降った光の暖かさに、その輝きに、思う。

やっぱり自分も、これが欲しかったんだ。

幸せに、なりたかったんだ。

それが、やっとわかったんだ。

「なあ、はやて。…………俺は、生きていてよかったよ。そして、これからも生きていたいと思う。俺の人生を、生きていきたいと思う」

「…………うん、せやな。それはすごく、大切な気持ちや」

「ああ。…………本当に、初めて知った。知れた。……………教えて、もらった」

隣で眠る二人に、視線を向ける。

なのはが、自分の強さを認める事を教えてくれた。
フェイトが、自分の弱さを許す事を教えてくれた。

二人が、こんな風に生きていける気持ちをくれた。

「…………ありがとう、はやて。なんて言葉じゃあ、やはり足りないんだろうが、言わせてほしい。あの世界は、君が用意してくれたんだろう？」

おかげで、俺は」

「ありがとうを言い合ったら、私、最後まで負けませんよ？　そもそも私が今こうしているのも、恭也さんのおかげなんやから」
「だが……」

「……せやったら、一つ。一つ、お願いを聞いてくれますか？」

彼女は、少しいたずらな笑みを浮かべてそう言ってきた。

「ああ、もちろん。俺の叶えられる範囲なら、なんでも」

「では、なんでもつたいたいぶってなんなんです、まあ質問に答えて欲しいだけなんです」

まっすぐにこちらの瞳を見つめながら、そして彼女は続けた。

「ねえ、恭也さん。私って、いい女ですか？」

「……ずいぶんな事を聞くな」

「アホな質問やっちゅう事くらいわかってますっ、でも、どうですか？」

ずいっと、その可愛らしい童顔をこちらに寄せて問う彼女に、恭也ははつきりと答える。

「君は、文句なしにいい女だよ。とびきりの、いい女だ」

「……そうですか」

ふっ、と。

彼女が浮かべたのは、今までのものとはどこか違う、優しいような、それでいて複雑な色をした、不思議な微笑みだった。

「……はやて？」

「恭也さん、知ってます？」

言いながら彼女は窓際に寄って、手に持ったその花を置いてあつた花瓶へと丁寧に差す。

「なにをだ？」

「いい女ってね、場合によっては損を引くんですよ」

はやては花を生けたその花瓶を持って、すぐ隣りに設えられた水場へ移り、蛇口を捻る。出てきた水を入れながらの彼女の顔は、やはりどこか読めない色をしている。

「そう、なのか？」

「はい。でもね、それでいいんです」

蛇口を締め、水の入った花瓶を改めて、はやては窓際に置いた。

「損を引いても、それでいい。それでいいから、いい女なんです」

「……どういう」

「恭也さん、どうですか？ この花」

「ん、ああ、綺麗だ。ありがとう」

「いえいえ、どういたしまして」

はやての顔にはもう、いつもどおりの人好きのいい笑顔が浮かんでいた。あの表情は、嘘だったかのように名残すら無い。

言及する事を躊躇わせる、それは鮮やかな引き際だった。だから恭也は、彼女の作った話題に乗る事にした。

「これは、すまない、疎くてな。なんとという花なんだ？」

「スターチス、です。私達の世界じゃあ季節外れなんですけど、こつちだと今くらいに咲くらしくて。気候は同じ感じやから、土壌の違いでしようかね……さて、と」

なんとなく、はやてのイメージに合っている気もするな、などと思いながらその花を眺める恭也へ、彼女は言う。

「それじゃあ私はそろそろ退散します。そのうち、二人も起きるでしょう。あとは三人でごゆっくり」

「ん、もうか？ もつとゆっくり……ああ、いやすまない、忙しいのか？」

「まあ、そんなところですよ」

にこりと笑って、彼女はドアへと歩み寄り、そこに手を掛け。

「あ、恭也さん、最後にこれだけちよつと言わせてもらってもいいですか？」

顔だけこちらに向けて、そんな風に言ってきて。

「ああ、なんだ？」

ごく自然なトーンで、彼女は告げた。

「幸せに、なってくださいね」

「……俺には、結婚の予定はないんだが」

「ふふ。……それじゃ」

彼女はいたずらな笑みを残して、そして部屋から去っていった。

青い青い、真冬の空はひどく高く。

ピンと張り詰めた冷たい空気は、清廉な表情を保ち続ける。

ミッドチルダ中央区、野外式典会場は現在、限界の限界まで人入りのキャパシティを広げられており、そのそこかしこには中心で今まきに行われている式典の様子を映す巨大スクリーンが浮いている。

十万人というのが、この広大な式典会場に詰めかけた人数のおおよそである。局員はその三割程度、七割が外部の人間だ。

観覧を募集したところ応募が殺到し、十万という上限の高さながら局員枠も一般枠も当選倍率は目眩がするほど高かったという話だ。

好奇心で申し込んだような応募はまず蹴られており、ここに来ているのは基本的に、局員であれば任務の中で、外部の人間であればその窮地にあつて、特別武力制圧官・高町恭也に命を救われた者達だ。

高い抽選倍率をくぐり抜けてここに来る事の出来た、特武官に救われた内のほんの一握りである彼ら、特に外部の者達はその多くが、遠くの世界からわざわざこのために何日もかけてミッドチルダまで訪れたのだらうと簡単に察せるくらい、その人種や身につけている衣服、纏う雰囲気などが様々だった。

そんな彼らはしかし、皆同じように真剣な表情で、静かに式典の舞台、あるいはそれを映すスクリーンに意識を向けている。

そこにいる男性、管理局、聖王教会それぞれから勲章を戴いている彼、本局所属元特武官・高町恭也をじつと見つめている。

(……………うん、安定してる)

最前列、関係者席に座するなのはの眼に、兄はかなり落ち着いて見えた。

新暦75年2月。

あれから、およそ三ヶ月の時が経った。

兄は、完治したわけではない。今もフラッシュバックには悩んでいるし、味覚も戻らないまま。記憶障害だって、ほんの少しとはいえず残っている。

変質してしまっていた痕も、精神から完全になくなったわけではない。今もなお、時折襲い来る過剰な自責の念に彼は苦しんでいる。

だけど、それでも。

どこか折れない芯が、確かにあった。

決定的なところで『向こう側』に落ちる事はないと思える確かさが、今の彼にはあった。

やがて、兄に四つ目の勲章が授与される。この時空管理局・聖王教会合同叙勲式において、それは最後の一つだ。

静寂に包まれていた会場が、そして万雷の拍手で湧き上がった。十万という数の人間が起こすそれは、空気を断続的とは言えないレベルで揺らし続け、空間を独特な色で染め上げる。

局員も一般人も皆真摯な表情で、偉業を為し続けたその男性に、心からの賛辞と祝福を送っている。

局員達へ複雑な思いがないと言え、それは嘘になる。

お前達が。そんな黒い感情が心にあることを、なのはは自覚している。彼らにそのつもりはなかったのだろうかという事はわかってはいても、だ。

だけど。そう、だけど。

”なあ、なのは。……捨てたもんじゃ、なかったんだな”

そう言った彼の顔を、思い出す。

”お前が、教えてくれた通り、だな。俺も、俺の出来た事も、捨てたもんじゃあ、なかったんだな”

端末のディスプレイ上に目を走らせながら、照れたような、でも、嬉しそうな、誇らしげな。

そんなあの人の微笑みを思い出す。

すると、少なくともこの想いの籠もった拍手だけは、斜めから見ようとは思わなかった。

沢山の、本当に膨大な量の、手紙があった。

『手違い』でずっと特武官本人へと届けられる事なかった、様々な世界の人達が送った感謝のもの。

そして、恭也が心身を崩して倒れたという報が局内に出回ってから、沢山の局員達が送ってきた感謝と、そして謝罪のしたためられたもの。

恭也が倒れてからようやく、彼らはその人が人間であった事を本当の意味で認識したらしい。

今更なにをと思う気持ちは、兄の顔を見て、言葉を聞いて、引つ込める事になっている。ちなみにもちろん、手紙はしつかりと事前にシャルがチェックして、問題のないものから順番に彼へ見せるようにしている。

会場の拍手は鳴り止まず、多くの報道陣がシャッターを切ってその様子を、そして何より壇上の彼の姿を収めている。

厳粛さを求めるのならば、報道陣には控えてもらうという場合もあるのだろうが、この式はそういった事よりもとにかく、広く大きくその様子を伝える事を優先している。

その理由は、この式典が行われた目的にある。

なのははちらりと、壇上の脇に佇む、この式典最大の立役者の一人に目を向けた。

リンデイ・ハラオウン。

かつて一番最初に兄を管理局へ誘ったその人は、恭也のために戦っていた女性だった。それをなのはが、どころか彼女の息子や娘達が知ったのさえ、つい最近である。

恭也が管理局から授与された勲章は、次元世界群の平和に他に類を見ないほどの多大な貢献をした人物に与えられるものと、危険な戦場において多数の局員達を救った英雄的人物に与えられるものの二つ。管理局に制定されている勲章の中では、両方共にそれ以上が存在しない最高位のものである。

どう考えても、これはおかしいというのが世間の評価の一つだった。

後者はまだしも、前者を入局四年にも満たない局員が得るというの

は異様とすら言える事であり。

しかし、高町恭也に疑念の眼が向けられる事は、結局ほとんどなかった。公表された戦歴がそれを得るにふさわしいと十分過ぎるほどに示しており、ジャーナリスト達が各地で裏を取ればその出撃が嘘ではない事は簡単に確認されたからである

となれば世間が何におかしさを感じたかと言えば、当然の帰結として、こんな短いキャリアにそんな異様な出撃を詰め込んだ管理局自体に、である。

次元世界群が荒れている時期であり、高町恭也がその状況に大きく貢献出来る能力を持っていたがゆえにこのような事になったという説明がされているが、批判の声は強い。

管理局側としても、あんな勲章を授与すればこうなるのはわかりきっていた事であり、ゆえに今まで危険手当等の名目で出していた分とは別に、内々に改めて報酬を与えて終わりにしようという声も大きかった。

それがこうして、最高位の勲章が与えられ、大々的に叙勲式も行われる次第となったのは、それを強行した人物がいたからである。

それがリンディ・ハラオウンであり、彼女は捨て身だった。

高い実力と実績と地位と、様々な人脈を得ていた彼女だが、それでもこれを為すのは尋常な事ではなく、ゆえに彼女は捨て身だった。

そして実際、こうして現在の状況を作り上げた彼女は肩書こそなくしていないが、それ以外の実質的な権限などは、ほぼ全てを失っていると云っていい。

自分の公人としての資産や権限を切り崩して材料とし、様々な交渉を行って、最後には来るであろう管理局への批判も『高町特武官を管理局に勧誘した人間』である自分の責任として引き受けると言っただけの人間たちを納得させ、今回の叙勲式を成立させたのだ。

さすがに勧誘した人間だからといって彼女が全て悪いという論調が幅を利かせることはなく、そもそも彼を管理局に招き入れた判断自体は決して間違った事とも言われず、それまでの功績もあって、リンディ・ハラオウンの名が世間で悪名となることはなかったが、それで

も今回の件の責任者は彼女という事になっている。

現在の権利体制が維持される限りにおいて、完全な閑職に追い込まれた彼女の局員としての未来はもはや完璧に閉ざされていると言っても、それは全く過言ではない。

そこまでして彼女が今回の叙勲と叙勲式を成立させた理由は、一つ。

高町恭也を、他にもない管理局から護るためである。

恭也は、少なくともすぐには管理局を辞める事が出来ない。これは、シヤマルが医務官として下した判断である。

今まで彼は、数多くの戦場を渡り歩いて生きてきた。そこからいきなり抜け出して生きるとなると、逆に環境が変化しすぎて、ヘタをするとかなり重篤な反動に見舞われる可能性がある。戦場に出すのと同じくらい、今の彼を日常に押し込めるのはリスクが高い……シヤマルは、苦悩の末に下したのだらうそんな診断をなのは達に伝えてくれた。

だが、このまま今まで通り働かせるとなると、また同じような奸計が彼を襲う可能性がある。

だからこそその、リンデイの案だった。

その功績に足る勲章を授与させ、それを世間に大々的に公表する事で、彼を広く知られた英雄とする。

そうして、管理局の使い潰しから護る。

それが彼女の狙いであり、局員としての全てを捨てて叶えた願いである。

” 何の償いにも、ならないってわかっているけど”

そう言っつて、やつれた面を伏せた彼女を、なのははもちろん、そして兄もだろう、恨んでなどいない。本人は未練はないと言い切っているが、なのははフェイトやはやて、クロノ達とどうにかして、彼女の名誉と権限を回復させられないかと話し合っている。

やり方は、色々あると思うのだ。

「剣聖ッ！ 剣聖ッ！ 剣聖イツ!!」「おめでとうございますう!!

剣聖いいイイ!!」「高町剣聖いいいい!!」

たとえば今、一際熱を入れて声を上げている彼ら、聖王教会やベルカ自治領区の人々を頼る、などである。清廉で普段は穏やかな彼らだが、感極まったのか空気と地面を揺らしに揺らして歓喜と祝福を叫んでいる。

彼らは、リンデイに次ぐ今回の式典の立役者と言える。

というか、元々、はやてやカリムはほぼほぼリンデイと同じように、次元世界群において最大規模の宗教組織である聖王教会から勲章を与える事で恭也を広く知られた英雄とし、護ろうと考えていたらしい。そこにリンデイの計画を知って、それに乗る形を取ったのだ。

はやてやカリムが無理をして推す必要もなく、恭也が出撃に次ぐ出撃で取り合わなかったために中々叶わなかっただけで聖王教会自体は、彼に機を見ていつか勲章を授ける気でいたようで、話はスムーズに進んだらしい。

聖王教会が恭也へと贈った勲章は管理局と同じく二つ。ベルカの民や文化を護った英雄に対して与えられるものと、そして長いベルカの歴史の中でも特別に語られるべき力と心を持つ騎士に対して与えられるもの。

前者ももちろんだが、特に後者は非常に重要な意味を持つ勲章であり、平たく言えばこれを贈られた時点でその人物は、聖王教会が信仰対象としている聖王、その血族、傍に控えた騎士達に次ぐ者として聖王教の人間には認識される事となる。

この通達に焦ったのは管理局の、リンデイの案に対し渋っていた面々である。

何がまずいかと言えば、このままでは順当な流れとして恭也が管理局から聖王教会へとその軸足を移す事になる蓋然性があまりに高いという事である。

軸足を移すどころか、完全に聖王教会だけの所属となる可能性すら大いにあると見て自然だろう。

緊密な仲である管理局と聖王教会とは言え別組織である事に変わりはなく、そこに局内の最高戦力の一つが移るといのはいかにもよろしくない。

さらに言えば、特にベルカの民たちに黒衣の剣神と讃えられる高町恭也だが、勲章の授与と同時に聖王教会において正式には【剣聖】と認定されている。

ただ剣の腕前を認められたというだけでなく、聖王教ではこれはすなわち、聖人と見做されたという事である。

こちらが聖人と認める男に、その功績に相応しい名誉も与えず内々の報酬だけですまそうというのは誠に遺憾だと、そんな事を聖王教会から言われたならば何の弁明も出来ず、最悪、信者達を向こうに回す事になる。そもそも、管理局内にも聖王教の人間は大勢いるため、内部分裂も必至だろう。

次元世界群最大の宗教組織を敵に回すのは、どう考えても賢い選択でない事は明らかで。

結局管理局は、批判覚悟で高町恭也の叙勲とその根拠の開示に踏み切った。

以上が、なのはが知っている限りのこの叙勲式の内幕である。

(……手段では、あるけど) 思う。

兄を護るという目的を果たすための、手段ではあるのだけれど。それがまず何よりの事ではあるのだけれど。

拍手を浴び、光を浴び。

舞台の上、中継放送も合わせれば本当に多くの人達に世界に対するその尽力を認められた兄の姿を見る。

手段とはわかつているのだけれど、やはりそれでも。

視界がにじむ。

だって、やっとなじやないか。

この世で一番強くて、一番優しく、一番誠実な、誰より頑張ってきた世界一の兄が、誰しにも認められる時が来た。

そんな世界がやっとなじ。

たくさんの人に光を届けたあの人が、ようやく光に包まれた。

頑張つて、頑張つて、頑張つて、頑張つてきたあの人が、皆にそれを認められて、讃えられた。

「——おめでとう、おにいちゃん」

ぼろぼろと雫がこぼれていく、にじみににじんだ視界の中で。舞台の上、光を受ける兄の頬を、こちらとは対照的にただ一筋だけの涙が撫でていく。

それに気付いているのかいないのか、彼は拭う事もなく。色んな感情がきつとないまぜになった微笑みを一つ、ふっと咲かせた。

「おにいちゃん、しばらく解放されないかな？」

「うん、さすがにね」

「まあ、しゃあないなあ」

無事に終わった式典だが、いまだ詰めかけた人々は盛り上がったままで、報道陣もその熱気を伝え続けており実質的な締めはまだまだ遠そうだった。

舞台脇で兄を待っているのはだが、その姿はなかなか現れないだろうという予想が立っている。

兄は今、名だたる人々の直接の賛辞、祝福や報道陣の取材にもみくちゃにされているのだ。

「厳粛な式にしたらこうはならんかったんやろうけどなあ、ま、盛り上げ重視ということだ」

「……うん」

はやての言葉どおりではあるので仕方ないのだろうし、とても良いことではあるのだが、ここにきて我ながらかなり身勝手な感情が湧き上がる。

「なのは？ どうしたの？」

フエイトがこちらの顔を覗き込んでくる。

「いや、その……遠い人になっちゃったかなあつて。いやいや、そんな事ないってわかってるんだけど！」

「……皆の恭也さんになっちゃった気がして寂しい、とか？」

「……………」

フエイトのストレートな問いには、恥ずかしさから眼を逸らした。

「なのは、お前、恭也に関してはマジでどうしようもないよな」

「……ヴィータちゃん、あとで模擬戦しようね」

「ア、アタシがビビるとでも思ったのか？ ぼこぼこにしてやるよ！」
「へえ……」

「そ、その笑い方やめろよ……ニタアってやつ……」

ヴィータがこちらの顔を見て何歩か後ずさった。失礼な事である。

「安心しろ、なのは。テスタロッサなど、”これで有名になった恭也さんにストーリーとかが付いてしまわないでしょうか”などとほざいていたぞ」

「シ、シグナム！」

「うわあ……」

思わず唖ってしまったのはだが、周りのはやてやりインフォース姉妹、ヴィータもシャマルもザファイラも程度の差こそあれ同じような顔をしていた。

「まだ二月だというのに、新暦75年お前がそれを言うのかグランプリ大賞候補がもう飛び出てくるとは思わなかった」

「……シ、シグナムだって！」 あいつが慕われるのは結構だが、最も親しいのは我らだという事は知らしめておかねばならないだろうな”とか言ってたじゃないですか！」

「な、そ、……事実無根だ！」

珍しく反撃に出たフェイトの言葉で、シグナムの顔が少し朱に染まった。

「言っていました！ レヴァンティンの手入れをしながら言っていました！ 鋭い目つきで！ そういうのをヤンデレ？ っていうんだってものの本に書いてありましたよ！」

「よ、よくは知らんがお前にだけは！ お前にだけはそれを絶対に言われたくない！ 早くもグランプリ大賞候補更新だ！」

喧嘩するのはいいが、ランクがSを超えている近接戦闘系の二人を止めるのは大変なので、本気ではやり合わないで欲しい。

「まあしかしあれやな、ベルカ自治領区とか聖王教会内なんかじゃもう本当に洒落にならん人気ではあるよなあ」

「主はやて、結局、あの親衛隊の話はどうなったのですか？」

「恭也様の親衛隊ならリンツも入りたいです！」

リンフオース姉妹に、はやてはううんと唸って腕を組み、答える。「四六時中お世話する、うちゆう話は叩き潰しておいたけど、教会騎士団内に恭也さんを絶対として動く集団が出来上がるのはもうしやあないみたいやね。ま、止める事でもないしなあ。あとリンツ、私らは親衛隊よりもずっと近い関係なんやから、わざわざ入る必要はないんやで」

「なるほどー！」

リンツが嬉しそうに宙で一回転する。

「おにいちゃんの微妙な顔が忘れられないよ」

「してたなあ。親衛隊って……、みたいな」

自分の親衛隊が大真面目に出来上がるらしいと聞かされて、喜ぶ人間もそれはいるのだろうが兄はそういうタイプではなかった。というか、はつきりとやめてくれと言っていたのだが、シスター・シャツハなどの猛攻を拒みきれなかったようだった。

少し迷いはしたものの、兄が大切にされるのは良いことだし、過保護に困うくらいであの人はちようどいいと思うので、なのも止めはしなかった。

「聖王教会内って、害はないけどはつきり言って恭也さんに対しては軽めの狂信者みたいなレベルの人達もおるからな。対応に困る気持ちはわからんでもないんやけども」

「いやいや、狂信者ならそこに二人いるでしょ」

「……？」

「……？」

指をさしたなのはに、リンフオース姉妹は後ろを振り向くというベタベタな反応を返してきた。

「……ん、もしかして私たちか？」

「他に誰がいるんですか？」

「フェイトは？」

「あれはちよつと方向性が違いますから。狂信者スタイル筆頭は二人

だよ」

「そうだろうか？」

「リンツ、そんなおかしな人じゃないです！」

リンは首を捻り、リンツは不満気に頬をふくらませる。見た目だけを言うならば百点満点の美麗さと可憐さなのだが、残念ながらそう簡単に評価していい二人ではない。

「おにいちゃんを怒鳴りつける人がいたら？」

「口に手を突っ込んで舌を潰す」

「お口の中に冷気を流して喉を塞ぎます！」

「うーん」

うーん、である。

「もちろん程度によるぞ？ なんでもかんでも駄目とは言わんさ」

「その程度の閾値が低いんですよねえ……」

自分も兄への侮辱には結構腹を立ててしまう性質だが、加速性能とブレーキの無さにおいては二人に勝てないと思う。

「ベルカ女というのは、こうと決めたら揺らが無い事が美德なんだ。砕けぬ頑丈、折れぬ強情、そして屈さぬ根性こそが我らの信条だ。どんな状況でも自分の信念は曲げぬもの」

「それはいいことだろうけど、信念を曲げない結果がそれかあ」

「なのはも結構、そういう意味ではベルカ女に近いぞ。不屈のエース・オブ・エース」

「喜んでいいのかなあ」

「……騎士恭也の傍にいる女は、そういう人間が相応しいと思う」

リンフォースが、ぽつりとそう落とした。その声はどこか、影を引きずっているようにも聞こえて。

「……リンフォ」

「ほら、魅月もそういうタイプだろう？ やっぱり、相性がいいんだ」
しかし彼女はすぐに話を変えた。……触れるべき、ではないのかもしれない。

「あ、うん。そうですね、魅月さんもそういうタイプだ」

「そうだろうそうだろう。我が友は、実にベルカな女だ」

彼女がそうだったからこそ、今、兄は生きていると言っても過言ではないのだ。

「修復、順調なんだよね？」

「ああ、みたいやな。クロノ君とユーノ君が探し出してくれたデータを元に、シャリーとマリーさんが頑張ってくれとる」

はやてがそう言った通り、本当に二人は頑張ってくれている。だから急かすことなんて出来ないのだけど、それでもやっぱり願ってしまった。

「……おにいちゃんのデバイスは、魅月さん以外にはありえないだろうから。早く、帰ってきてほしい」

「帰ってくるさ、我が友は約束を違える女ではない」

「せやな……」

こうして話をすると、思い出す。

それは、兄が折れない芯を得てから、少し経つての事だった。

「……み、つき」

兄が、その手を伸ばす。彼の背中が、震えていた。

マリエル・アテンザ技師の研究室、その中心に置かれた修繕用特殊液で満たされた透明なカプセルの中、砕けた鞘、鏢、柄、そして刀身を浮かせる彼女は、穏やかに言葉を返す。

『ああ、良かった』

カプセル越しに手を触れた自身の主へ、魅月は言う。

『泣けるようになったのですね、我が主』

「……な、にを」

『貴方は、ずっと泣かなかったから。貴方は、ずっと泣けなかったから。だから、心配だったんです』

「……しん、ぱい？」

『はい。流せなかった自分の涙で、溺れてしまわないだろうか』

「……どうして、君は、そうなんだ」

涙に揺れる声で、なのはの視線の先、兄は愛機に疑問を投げる。

「どうして、君は、そんな、そんな風になってまで、そんな風になった

のに、どうして、どうしていつも俺のことばかりなんだ……」

『私を何とお思いですか？ 世界でたった一つの二振り、貴方の魅月ですよ』

魅月の声には言葉には、その砕けた身体とは裏腹に、微塵のヒビもない確かさがあつた。

あまりに揺れない信念があつた。

「……君を、壊したのは俺なんだ。俺が、君を壊したんだ。どうしたつて、それは事実なんだ。なのに、それで、それでいいのか」

『勘違いを、なさらないようお願いします』

それは彼女らしい、控えめながらも確かな声だった。

「魅月……？」

『私は、私が誇らしいのです、主』

痛ましい身体から発される彼女の想いは、ただただまっすぐだった。

『私は貴方に振るわれて、貴方と共にたくさんの人々を護ってきました』

凜としたその声は、揺れないままに続く。

『だけど一人だけ、ずっとずっと、護れなかった。私は、それが何より悔しかった』

「……それは」

『私は、貴方の事だけではどうしても、護れなかった。皆を護る貴方の事だけは、ずっと』

「そんなことはない！ ずっと君はっ！」

『主、でも、主』

珍しく、本当に滅多にない事に、恭也の言葉を遮って魅月は言う。

『やっと、護れた。あの時、私はやっと』

それは、誇りに満ちた声だった。

『私はそれが、誇らしくて仕方がないのです。だってあの時、私は誰より、貴方のための刃であった』

「……っ、っ、……っ魅月」

『壊したなんて言わないで。この身は愛しい貴方のために、ならばこ

の傷残らず全て、私にとっては誇りの痕です』

兄が、崩れるようにその両膝を床に付いた。

『……貴方が泣けるようになって、泣いてくれて、嬉しいけれど。ただ主、……ごめんなさい、やっぱり、どうか泣き止んで』

「……っ、ああっ、すぐに、すぐに」

『我が儘な魅月を、許して下さい。私は、貴方の笑顔が好きなのです』
「ああ……っ、ああっ」

兄は必死に頷いて、そしてやがて、透明なカプセルにこつんと額を合わせて言う。

「……っなあ、魅月。……俺は、魅月、君以外、いないよ」

『主……っ？』

「俺は、君以外の相棒なんて、いらぬ。君がいい。君を待つ。待たせてくれ、魅月」

『……長い、時間がかかると聞きました。貴方のためならきつと、たくさんのおれたデバイスが用意されるはずです』

「そんなものが、なんだ。俺は、君がいい。君以外なんて、いるものか」
それは不転の、硬い固い意思を感じる、実に兄らしい言葉で。

『……主、……主恭也、愛しい貴方——必ず、戻ります』

それも同様に、彼女らしい、控えめだけど揺れない言葉。

『必ず、貴方の傍に戻ります。だから、待っていて下さいますか？』

「ああ、いつまでも。いつでも、いつまでも、君を待とう。待っているよ、待たせてくれ。……帰ってきてくれ、俺の傍に。……俺の、俺の

魅月」

誓い合う彼らは間にはきつと、誰も入れないのだろうと、そんな事を思った。

「三ヶ月、とはいかへんけど、半年以内には直る見込みつちゆう話や」
「うん、らしいね」

普通、一つのデバイスの修復にそこまでの時間がかかるのはありえないのだが、彼女はあまりに特別製だ。突き抜けた芸術的な完成度に加え、その動作仕様の特殊性はミッドや近代ベルカのデバイス相手に

使える開発、修復ツールのほとんどを受け付けない。

ゆえに、少し直してはその動作と、直した箇所が他の直ったはずの箇所になにか影響を与えて不具合を起こしていないかもチェックするという気の遠くなる作業を、細かく手動で行わなければならず、とにかく時間がかかるのだ。

「最初はそれどころか直る目処すら立ってなかったんだから、シャーリーとマリーさんにはもちろん、クロノ君とユーノ君には本当に感謝しなくちゃ」

「ああ。あの広大な書庫の中から、よく見つけ出してくれたものだ」

「本当に、古代ベルカのデバイス、しかもその開発データなんてよう引っ張りだしたもんや」

「リンツ、あんなにいっぱいの中から目当ての本を探すのは絶対無理です……」

うなだれたリンツを、微笑みながらはやとリインフォースがつつく。相変わらず仲のいい一家だ。

何度も何度も、ありがたうを伝えて。

もういいって怒られるくらい言ったから、今更言わないけれど、それでもやっぱり、なのは彼女たちに深く深く感謝している。

兄を助けてくれた皆に、心から感謝している。

(……だから、本当に身勝手なんだよね)

彼らが力を貸してくれたからこそ、兄をここまで引っ張り上げる事が出来たのに。

なのに、引っ張り上げたら上げたで、飛び越えるようにさらに上がっていった兄が自分から遠くなったようで寂しいなんて、そんなのはあまりに身勝手なのだ。

身勝手なんだって、わかってはいるのだ。

いるの、だけど。

「……」

いまだ興奮冷めやらぬ大勢の人達を、眺める。

兄はもう、誰しもに知られた英雄となった。

独り占めしたいなんてそんな想いは、封じ込めるべきなんだろう

……それが出来たら、苦勞しないのだけど。

誰にも見られないように小さくため息を吐いた、その時だった。

「なのは」

その声が、聞こえてきたのは。

「……………」

あまりにまつすぐ、自分に届いたそれは、絶対に聞き違えるはずのない音色。だけどまだまだ来るはずないと思っていたから、かなりの間抜けな顔でその方向を見返して。

「……………どうした、変な顔をして」

「おにい、ちゃん？」

「ああ」

こちらに歩み寄ってくるのは、今まで思い浮かべていたその人だった。

次元世界の英雄。

大好きな兄。

愛しい人。

高町恭也。

周りの人達の会話がどんどん聞こえなくなっていく。唐突に現れた今日の主役の姿に静かになったのか、それとも自分の意識が勝手に弾いていつているのか。多分、両方だろうけど。

「お、おにいちゃん、なんで？」

「お前のところに来てはおかしいか？」

「え、あ、そ、そういう事じゃなくて！　だつてまだ偉い人のお話とか取材とか！」

「あつたんだが、少し抜けさせてもらった。ああいうのは、柄じゃないんだ」

「それは知ってるけど……………」

だからと言って本当に抜けるとは、変なところで大胆な兄である。

「駄目だよ？　高町恭也はもう英雄なんだから、そんな軽率な行動は！」

「ずいぶん担がれたものだなと思う。…………狙いはわかっているから、

感謝しているけどな」

悪戯に言ったこちらへ同じく悪戯に微笑んで、兄はそう返してきた。

「……おめでとう、おにいちゃん」

「……なのは？」

「なんかさ、本当に、……すごい人になっちゃったなって」

兄の制服、その肩や胸元にはきらびやかでありながら厳かな輝きがあり、上品な大綬もかかっている。

すさまじい、一つだけでも間違いなく歴史に名を残す勲章が、全部で四つ。

「あはは、あんまりあれかな。私とかも、そんなに気軽に声とかかけない方がいいのかな？　こういうところじゃ特にそ」

「なのは」

せいぜい明るくおどけて、暗い本音を隠したなのはの言葉を遮って、恭也は言う。

「身に余るなんてもんじゃない勲章を、俺は四つも貰ってしまった。そのことは光栄に思っている。……思っているがな」

「……っ!？」

そして彼は躊躇なく、なのはの腰元と頭の後ろに前から手を伸ばし、痛くないくらいの強さで、しかし温もりを感じる確かさで抱きしめてきた。

そして、耳元ではつきりと言う。

「お前が傍にいてくれる事が、傍で幸せそうに笑ってくれる事が、俺の一番だ。どんな勲章だろうが、お前の前では霞む。だから、そんな事を言わないでくれ」

身体に脳に、心に奔る甘い衝撃に、崩折れずに済んだのは彼に支えられているからだろう。

「……ほ、本当に？」

「……馬鹿な事に、本当に馬鹿な事に、俺はそれをここ何年か忘れていたらしい。……だから、信じてくれなんて言う資格はないんだが」

「し、信じる！　信じるよー」

「……そうか。……っありがとう」

ほつとしたように、彼はこちらを抱く力を強めた。心臓の鼓動さえ伝わってくる距離で、その匂いまでがなのはを満たす。

あ、私死ぬのかな？ と素朴に思っ、しかし高鳴って暴れて仕方ない自分の心臓がそんな事はないと教えてくれた。

「お、おにいちゃん、その、皆が見てると思うんですが……」

「……すまん、嫌だっ」

「このままがいいです！ このままが！」

彼が身体を離そうとする気配を感じ取ったので、慌てて胸元にしがみつく。

「……そうか？」

「うんっ！」

「……そうか」

一度力を抜いたその腕は、またぎゅっとなのはを抱きしめてくれて。

暖かくて、愛おしくて。

思う。

今更で、当たり前前事を思う。

死んでも、渡すものか。

「なのは？」

「……私から、抱きしめちゃだめ？」

「いいさ、もちろん」

腕を恭也の背中に回して、自分から身を押し付けたこちらに、彼はふつと微笑む。

ああ、なんて。

なんて、愛おしいんだろう。

好きだ。

大好きだ。

愛してる。

だから——かかってこい。

誰だろうが、かかってこい。ひとり残らず完膚なきまでに叩きのめ

して返り討ちにしてやる。

彼を想う女性なんてそれこそ大量に増えもするんだろうが、元からの分も含めて、まとめて吹き飛ばしてやる。

「恭也さん、お加減はいかがですか？」

思った矢先、堂々と話に割り入ってきたのは金髪の女だった。

（へえ、さすがにいい度胸だ……）

抱き合うこちらに構うことなく斬り込んできた彼女は、しかし穏やかに、そして心配そうに微笑む。

「あんなに大きな舞台上に立たれて、すごい重圧だったかと思うんですが」

数年前とは違い、今や堂々、危険度ランキング第一位に君臨する、その女の名はフェイト・テスタロッサ・ハラオウン。

「ああ、……そうだな」

彼女の言葉を受けて、兄は素朴に返す。

「……怖かった。あんな数の前に、しかも……あの中には大勢、俺の救えなかった人達の遺族も友人もいるだろうから」

それは、剥き出しの本音に聞こえた。不用意に触れたら壊してしまいうような、そんな弱音に聞こえた。

今、腕に抱かれているのは自分だ。

彼が一番に名前を呼んだのは、自分だ。

だけど。

「本当に、情けないくらいに怖かった。……だが、不思議と平気だった。君が見てくれていると思ったら」

「……はい。ずっと、見ていましたよ」

彼が、弱音を一番に、迷いなく晒したのは、彼女だ。

「……ありがとう、フェイト。俺が怖がっているのを、君が知ってくれているはずと思ったら、本当に平気だったんだ。……君には甘えてばかりだな」

「いいえ、そんな事は。それにその……私はすごく嬉しいです、恭也さん」

暖かいランプのように、それでいて豪華な花の咲き誇るように、微

笑む彼女がどれだけ魅力的かなんて、よくよく知っている。

知っているけれど。

「……ところで恭也さん、そろそろさすがに戻られた方がいいかもしれません。ほら、あそこの局員が少し泣きそうです。介添えの方では？」

「ああ、……本当だ。悪いことをした。……なのは、またな」

「え？ あ、うん……」

あつさりと、なのはを包んでいた温もりは離れて。

きびきびと歩き出した兄の背中を見る間に遠くなっていく。

高町なのはの楽園が、去っていく。

「……いい度胸。本当に、いい度胸だ。ねえ、フェイトちゃん」

「……長いんだよ、なのは」

あらん限りの怒りを籠めて、思い切り睨めつけてやってもその女は堂々とこちらに視線を叩き返してきた。

「あんなにべつたり、ああ、もう……」

兄に見せた顔とは打って変わって、その眼は常人なら寒気で震え上がるだろう鋭さだ……もちろん自分には、毛ほども効かないが。

「場所と状況を考えてよね、いつまでやってる気だったの？」

「いつまでもだよ。そもそも、おにいちゃんから抱きしめてきたんだけど？ いい？ おにいちゃんが、自分から、私を、抱きしめてきたの。そして、私が一番だって、そう言ったの。……外野に何か文句を

言われる筋合い、ある？」

「うちの流派の師匠に、立派に今日の日を務めて欲しいんだよ。何か間違ったことをしていたら、諫めるのも弟子の役目だ」

「はっ！ 流派の師匠！ 弟子！ 便利な言い訳だ！」

歩み寄って、こちらより少し背の高い彼女の瞳を下からかち上げるように射抜く。

「ただのお弟子さんに、こんなところまで口を出されたくないんだけど。引っ込んでくれる？」

「……恭也さんは、私の未来の旦那様だ。悪い？」

上から斬って落とすような鋭さの極まった視線が返ってくる。

「はあ？ あっはは、おもしろーい！ 悪いとしたら頭じゃない？
ていうか寝てるの？ ずいぶん幸せな寝言だね？ 手もまともに繋
いだことないくせに、ずいぶん夢見ちゃってるね？」

「……恭也さんと私は男と女だから、男女の機微つてもものがあるんだ
よ。大好きなお兄ちゃんとおおて繋いで幸せいっぱいな妹さんには
わからない？ ていうか、ねえ、そろそろ離したら？ 恭也さんにし
がみついているその手を離して、兄離れをしたらどう？」

「……私とおにいちゃんは、お互いがお互いの一番だ。一緒にいて何
が悪い」

「悪くはないよ？ でもわかるでしょ？ なのはと恭也さんは兄妹
だ。ずっと一番同士じゃいられないし、ずっと一緒じゃいられない。
だからそろそろ本当に、——そっちこそ、引っ込んでくれる？」
普段は綺麗で優しい声だが、ここぞという時にはこの親友は、とて
つもなく冷たい音色で斬りつける。

しかし、それは多分、こつちも同じだ。可愛らしさなんて、今はい
らない。叩き潰す圧力こそが、今、自分の声に言葉に籠めるべきもの
だ。

「偉そうに、賢しらに、何様のつもり？」

「なにか間違ったこと言ってる？」

「DMストーリーカー女が人に正しさを説く気？」

「万年暴走背徳女には、必要でしょ？」

「……………」

「……………」

「いよいよ、なのはとフェイトの視線は苛烈さを引き上げきつて——
」。

「まてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまて!!」

「お前らっ、つい昨日など”ありがとう”だの”よかったね”だの！

お互いに泣きながら言い合っていただろうが！ それは何を殺し
合い一歩手前のような雰囲気叩き出している!？」

なのはの腰元にヴィータが飛びつき、フェイトを後ろからシグナム
が羽交い締めにしてそれぞれ後方に引いてきた。

「どいて、ヴィータちゃん。ちよつと教えてあげなきゃいけない事があるからさ」

「離してください、シグナム。現実というものを突きつけてあげなきゃならないんです」

「どくか馬鹿!」

「離すか阿呆!」

小柄なヴィータだが必死の抵抗で、なかなか前に進ませてくれない。同じ体格のシグナムに抑えられているフェイトはなおさらだろう。

「おーおー、スターズ分隊、ライトニング分隊、それぞれ隊長副隊長の息はぴったりやんな。私の人選は間違っていないかった。六課の始動まであと少し、幸先いいなあ」

「あれはぴったりなのでしようか? 主はやて」

「ぴったりぴったり。片方が暴走したら片方が抑える。理想の関係や」

「なるほど」

どこか遠く、はやてとリインフォースの会話が聞こえる。

「スターズ分隊とライトニング分隊の隊長間は、しかしあれでよいので?」

「普段は仲ええし、ま、肝心なときも息ぴったりやから。知つとるやろ?」

「……ええ、そうでしたね」

視界の端、リインフォースが大きく頷いたのが見えた。

息ぴったりかどうかは、知らないが。

しかし、自分が目の前の女の事を、どうしようもなく認めているのは確かだ。感謝しているのも本当だ。

でも、だから。だからこそ、駄目だ!

「……やっぱ恭也さん、私とかリインとかとくつついたほうがええんちやう? あんなおっかない女、ちよおあかんのちやう?」

「主はやて、二人がすさまじい顔で睨んでおりますが」

「おお、ほんまや。あつはは、えげつなあ」

はやてが飄々と笑う。彼女も肝の座り方で言うなら相当だ。傍に控えるリインフォースも、まったくもって臆していない。

どうして兄の近くに寄ってくるのは、こんな一筋縄ではいかない女ばかりなのだろう。

自分が言えることではないというのはわかってはいるが、そう思わずにはいられなかった。

新暦75年2月。

数々の伝説を作り続けた特別武力制圧官は、管理局から二つ、聖王教会から二つ、計四つの勲章を手にしながら、その任を降りる。

特別教導官という新たな肩書を手に、古代遺物管理部機動六課へその腰を下ろすまで、あと、少し。

魔法青年リリカル恭也Stingers 第25話 どんな人、なのかしらね

「ついに明後日！ 明後日だねえティア！」

「そうねえ……」

寝るんじやなかったのか。

電気の消えた二人部屋、二段ベッドの上段から降ってきた言葉に、しかしティアナはそんな突っ込みは入れずにおいた。ある程度話に付き合ってやらないと可哀相かなと思うのが半分、付き合ってやらないといつまでも寝ないだろうという諦めが半分だ。

「いまだに、ちよつと信じられないけど」

「ね、すごいよねー」

二段ベッドの下段に寝転がったまま言ったこちらの言葉に、友人兼同僚からは力強い同意が返ってきた。

聞こえないように、ティアナはため息を吐く。

(……ますます凡人には居心地の悪い場所になるのね、うちは)

機動六課。

それがティアナ・ランスターの現在の職場である。さらに細かい事を言うと、ティアナはその中の分隊、スターズの内の一人だ。

上で寝転がる元気娘、スバル・ナカジマも同じくスターズである。訓練校からの付き合いで、欠点や悪癖は嫌というほど知っている。知っているが、しかしティアナの目から見て彼女は可能性の塊だ。圧倒的な耐久力に持久力を兼ね備えた上で、荒削りとは言えかなりの爆発力を秘めた突破力。

魔導師ランクこそ自分と同じBに甘んじてはいるものの、伸びしろはかなりのものだと思う。

分隊には自分たちスターズの他にもライトニングという隊があり、そちらには幼いと言っていい年齢の子ども二人がいる。

その内の一人、エリオ・モンディエルは十歳という歳ながら、もう魔導師ランクはティアナと同じBをマークしている。その才覚は実

に鋭く、メキメキと実力を向上させていつているのが目に見えていて、こちらと同じ年齢になる頃には確実にエース級の魔導師となっているだろう。

もう一人、キャロ・ル・ルシエは大人しいタイプの女の子だが、こちらもちらで資質としては生半ではないものを有している。いわゆるところのレアスキルホルダーであり、それも戦闘で実に具体的に力を発揮するタイプだ。

自分にスバル、エリオ、キャロの四人は合わせてフォワードメンバーと呼ばれているが、つまりその中で凡人は自分だけである。

「直接六課の戦列に加わるわけじゃないらしいけどね。でもまあ、そもそもうちは隊長陣だけで無敵すぎるからしょうがないか」

「……無敵すぎる、ってどうか」

はつきり言つて異常だ。

ティアナ達スターズ分隊には、副隊長にヴィータ、隊長に高町なのはが就いている。

古代ベルカの使い手、頑強で豪腕な小さな鉄人ヴィータは、見かけこそ可愛らしいけれど、戦闘のやり口はどんな障壁も粉碎すると言わんばかりのストロングスタイル。苛烈そのものであり、魔導師ランクは空戦A A A +。間違いなく空のトップエースの一人だ。敵に回したのなら、自分の勝利ではなく生存を再優先に考えなければならない相手である。

そして隊長、高町なのは。教導隊所属の一等空尉である彼女は、19歳という年齢ながら若手という枠に限らず、全局員の中で見ても遠距離最優秀魔導師と称する声も多い、高空の女王である。

魔導師ランクは脅威のSS、そのスペックは誰がどう見ても規格外であり、その上でそれに振り回されることのない、逆に振るい切る豊富な知識と高い思考力も有している。単独で戦える砲撃型空戦魔導師の戦闘スタイルを確立した彼女は、管理局に所属し、前線で戦つてもう10年になる歴戦の勇士でもあり、管理局員に彼女の名を知らない者はまず、いないだろう。

エースの集う教導隊に君臨する無敵のエース、誰もが認めるエー

ス・オブ・エースとして、局外ですら知名度は抜群だ。

スバルはかつて彼女に災害現場で救助された事があり、最近こそ部下や同じ隊の仲間という意識を持つようにしているようだが、やはり熱心なファンでもある。

さらにエリオ達ライトニング分隊の隊長陣も、副隊長にシグナム、隊長にはフェイト・T・ハラオウンという、スターズに負けず劣らずの化け物二人。

シグナムは安定した実力でどっしりと構える、隙のないSーランクのハイレベルなベルカ騎士だ。剣の騎士というストリートな二つ名で有名であり、その剣技や近接戦闘技術のレベルの高さは、管理局内でもトップクラスだろう。それでありながら優れた遠距離攻撃技も、指揮官としての資格も資質も有する、ただの近接戦闘一辺倒でない底の深さまである。

隊長、フェイト・T・ハラオウンは本局の執務官である。執務官は難関試験も存在するエリートの付く役職だが、彼女はその中でも屈指の高名な実力者である。屈指どころか現役の中では頂点であると賞賛する人間も多い。

彼女の堅実かつ気鋭な働きぶりを知っている者たちからは絶対と言っていい信頼を得ているらしく、直接の依頼や協力要請は絶えないという話だ。執務官かくあれかしと、手本として挙げられる事も多い。

魔導師ランクは高町なのと同じくSSという規格外の域。中・遠距離、広範囲系技能も高いレベルで有しながら、彼女を語るときに欠かせないのはその常識外れな超高速近接戦闘能力だろう。近接系武装局員の間では、フェイト・T・ハラオウンを相手に、斬り合えてエース級、ガードの上から斬られて上級、斬られたことに気づけて中級、そもそも斬られたことに気づけない初級という冗談一割、本気九割の話が飛び交っているらしい。

以上がスターズ、ライトニングの隊長陣であり、どこへ出しても恥ずかしく無い人外魔境の住人である事がわかるが、しかし六課の隊長陣と言うと恐ろしい事にあと二人、同じ域の猛者がいる。

一人は、所謂ところの後詰要員の取りまとめ、交代部隊隊長リインフォース。銀の女神という呼び名で多くの者たちから尊敬と感謝の念を向けられている、有名局員の一人である。

魔導師ランクSを堂々マークしている彼女は苦手距離・魔法の存在しないオールラウンダー魔導騎士であり、その頑強さと保有魔法量の膨大さ、扱える魔法の多彩さから、状況への対応力がすごく高い。突撃突破、捕獲に包囲、破壊に殲滅、支援に回復となんでもござれの万能ぶりながら、彼女を器用貧乏と称する声は一つも聞こえてこないのが恐ろしい。

局内での人望は厚く、六課設立前より緊密な仲であるらしい一から五課の遺失物管理部の局員たちなどは「俺たちの女神」と呼ぶのを憚らないほどだ。

そして六課隊長陣最後の一人、機動六課の長、部隊長八神はやて。そもそもヴァイター達ヴォルケンリッターを個人の保有戦力として従えている時点で相当のもののだが、彼女単体の実力も折り紙つきどころの騒ぎではない。

歩くロストロギア、人型広域殲滅兵器、一人火薬庫などなど、その実力を知るものからはごろごろと物騒なワードが飛び出るものだが、それも納得の圧倒的な火力を誇る、彼女は管理局きつての攻性後方支援能力者、広域殲滅系魔導騎士である。総合と空戦の違いはあるとは言え、ランクは高町なのは、フェイト・T・ハラウンと同じくSSをマークしている。

戦闘能力だけでなく、19歳にして新部隊を設立、そのトップに立つという並ではない才媛ぶりまで兼ね備え、さらにレアスキルである古代ベルカを受け継ぐ人間という事で聖王教会ではV・I・P.として扱われているという、どこにも隙の見当たらないガチガチのハイスペックさだ。

(……本当に、どうかしてるわよこの部隊)

これが六課の隊長陣であり、はつきり言って、どうかしている。それがティアナの率直な感想である。

脇を固めるオペレーター陣やメカニック、支援スタッフ達も若手な

がら有望株揃いであり、まさに機動六課は才能と実力の溢るる人間たちの集まりと言つていいだろう——自分を除いて。

なぜ、自分が引き抜かれたのか。未だにティアナはそれがわからずにいる。

(……でも、そんなの関係ない)

目を瞑り、自分に言い聞かせるように念じる。

そう、そうだ。

周りがどれだけ才気に溢れ、自分がどれだけ平々凡々でも、そんな事は関係ないのだ。

ランスターの弾丸は、どんな敵でも撃ち抜ける。

自分は、それを証明し続けなければならないのだ。誰でもない自分が、それを証明し続けるのだ。

「———イア？」

もう居ない、兄に代わって。

絶対に。

「ティアってば！」

「ん、あ、あーごめん、なに？」

物思いに沈みすぎたらしい。声に気付かなかった。

「あ、こっちこそごめん、眠いよね……」

「まあ、眠いは眠いけど、毎度ながら訓練キツイし。個別スキルに移行してからは特に」

ティアナ達機動六課のフォワード陣はつい先日、初出動を経験した。ガジエツトと呼ばれる自律機動機械による列車ジャック事件、レリックという名のロストログアを狙って起こされたそれは、スターズ、ライトニングの隊長二人が空を抑えていたおかげもあり、なんとか解決する事が出来た。

以降、どうやらステージを上がったと判断されたらしく、今までチーム戦一辺倒だった訓練は個別にそのスキルを向上させるものへと変化しており、元からハードだったがさらにきつくなっている。

ゆえに、眠くないわけではない。

「けどなんだが、ちよつと眼は冴えちやってるかも」

眠くないわけはないのだが、置かれた環境に改めて意気込んだからか、身体は少し興奮しているようだ。

だが、スバルはそんなこちらの言葉を少々違った意味で捉えたらしい。

「あれ、ティアそんなに楽しみ？　特武官に会えるの。ファンだったんだっけ？」

「違うわよ、ファンなのはあんたのお姉さんでしょ」

「あはは、そうだね。めちやくちや羨ましがられたよ」

スバルは楽しそうに、少しだけ困った風に笑った。

「私がないのはさんに助けられたのと同じように、ギン姉は特武官に助けられて、以来王子様らしいから」

「耳タコよ。ギンガさん携帯端末の待ち受けとかその王子様一色じゃない」

スバルの姉、ギンガとはティアナもそれなりの仲であるが、彼女の情熱はなかなかの温度であり、うかつに聞くと長いトークが始まるので気をつけている。

「ああいや、ていうか、違うわよスバル、間違えないようにしてよね。特武官じゃないわ」

「あ、そうだった。特導官、だよね？」

「そう」

見えないだろうが、スバルの確認に頷く。自分も間違えないようにしなければ。

なにせ、あまりに特武官という役職でのイメージが強い。ふとした時に口を出そうだ。役職を言い間違えるなんて失礼、地位的にも雲の上にある人に対してしていい事ではない。

「明後日、かあ。ギン姉じゃないけど、明後日、本物が見られるのかあ……」

「そうねえ……」

なんだか本当に、現実味のない話である。

明後日、新暦75年5月17日。

古代遺失物管理部機動六課に、特別顧問として正式に管理局本局特

別教導官が就任することになっている。

機動六課自体は四月頭に部隊発足、稼働し始めたので一ヶ月半遅れの就任となるわけだが、どうも上層部とゴタゴタあったことがその理由らしい。そこら辺は、正直自分達下っ端にはよくわからない領分だ。

「……高町、恭也」

特別教導官、略称特導官にはたった一人の人間しか就任していないので、その役職の者が来るというのは、つまりその人が来るという事を意味している。

「高町恭也……」

その名を、もう一度なんとはなしに呟いてみて。

それはやっぱり、遠い響きだった。

高町恭也。

その名を、その人を知らない人間が、果たして管理世界群においてどれくらい居るだろうか。管理外世界群ですらおそらくかなりの知名度を誇るはずで、管理世界ともなればそれは現在、常識に等しい。管理局内にはほぼほぼ絶対に、その人を知らないなんて者はいないだろう。

知名度もすごいが、人気もすごい。大々的に勲章を授与されてからもう三ヶ月ほど経ち、時の人というには少々旬は過ぎたかもしれないが、向けられる黄色い声にも野太い声にも衰えは見えない。非公式のファンクラブは会員数が大変な事になっているという話だ。

(……ええつと、確か)

もちろんティアナはファンクラブになど入ってはいないが、昔からの、言ってしまうえば特武官の初陣で救われて以来のファンであるため古参も古参、最古参なギンガの所為で端的なプロフィールは頭に入ってしまったている。

歳は25。出身世界は第97管理外世界・地球。さらに言えばその極東地区日本の、海鳴という都市が出身地。

所属は本局。訓練校を卒業し、新暦71年4月に正式入局、特別武力制圧官に就任。以降、三年十ヶ月その役職に就き続け、75年2月

に降りる。同時、特別教導官に就任。

ランクは空戦SSS。入局時点で既にSS+をマークしており、73年11月にSSSを取得。

魔法術式は真正古代ベルカ、扱うデバイスも真正古代ベルカ製。

高速・近接戦を得意とする戦闘スタイルで、御神流という剣術がその下地。

(……なんだかねえ、でもどれだけ情報を把握しても、いや、把握すればするほど、凄すぎてよくわかんなくなってくるのよねえ)

手元、情報端末を手繰り寄せて、空中にスクリーンを投影。

高町恭也で検索すると、様々なワードが踊る。

”四連勲章”、”新暦の奇蹟”、”黒衣の剣神”。

”次元世界の英雄”。

他にも、”管理局最高戦力”、”剣士の極み”、”近接戦闘者の到達点”、”絶対の一”……エトセトラエトセトラ。

彼を語る文や言葉において、やはり一番顕著に語られるのはその強さだろう。

最強という言葉では軽く、無敵という評価でも浅い、彼のそれは、絶対。

絶対に勝てない、勝ちようがない。少なくとも目視範囲内の一対一という条件下では、高町恭也を凌ぐものも、高町恭也に並ぶものもないというのが、誰もが認める事実である。

記録映像でティアナも彼の戦闘を見たことがあるが、複数体の特級危険指定生物を向こうに圧倒する様は、そもそも自分が敵うか敵わないかなどと考える範疇に存在ではないとごく自然に思わされるものだった。

最強の生物の一種である竜の、さらに最高位に居並ぶ真竜という存在の中でも、おそらく戦闘能力で言うのなら頂点に君臨するだろう獄炎王という、どう考えても本来的には人間が一对一でやり合っただけいけない生命体を相手に、単身で引き分けたという意味不明なエピソードも有名だ。しかもそれは恐るべき事にSSS到達前らしく、つまりその時の強さから現在さらにはさらに一段階引き上がっているわけで、

単純に「だからもう獄炎王よりも強い」などと言うつもりはないが、目眩のしてくる事実ではある。

そして、その絶対の単体戦闘能力でもって彼、高町恭也はたくさんの世界を、人を救ってきた。

それは本当にたくさんの世界、たくさんの人々だ。およそ尋常な数ではない。

結果、管理局と聖王教会から最高位に値する勲章をそれぞれ二つずつ、計四つ同時に授与されるという偉業を成し遂げている。四連勲章の高町恭也と呼ばれる所以だが、これは前人未到の快挙である。

まさにまさしく偉人も偉人、生きた伝説だ。

無数の人々から凄まじいという言葉では足りないくらいの熱意でもって賞賛を贈られているわけだが、それはあまりに妥当な評価なのだろうと思う。

(……でも、降りちゃったのよね、特武官)

高町恭也は勲章を授与されるのと同様、特武官の任を降りている。公開されている彼が特武官という役職を降りた理由は、二つ。

一つは、自分だけで世界を護っていくのではなく、皆でそうしていった方がいいという考えから、前線にだけ居続けるのはやめ、後進の教育にも力を注ぐ事にしたから。

そして二つ目は、心身を持ち崩したから。

無理もない事とは思ふ。あれだけ高負荷な任務をあんな頻度で受け続けたのだ、そうなるのは何も不思議な事ではない。あんなに強い人も人間なんだなんて感じたものである

しかし、無理もない事と思うのと同様、惜しいなあと思う気持ちも、正直ある。

あれだけ強い人がその力を存分に振るえる役目から降りるというのは、なんとなく惜しい……などというのは外側からの勝手な意見だろうか。

「どんな人、なのかしらね」

「うーん、……かっこいいよね!」

「外見じゃなくて内面の話よ」

とは言え、格好良いというのは確かにそうだ。情報端末の映し出すスクリーン上、その写真が載っているがこれが見事なものである。鋭い目つきがよく映える精悍な顔つきで、至近距離でもし見つめられようものなら平然としていられる自信は、ティアナにもない。

「内面のかっこよさの話！ 自分を持ち崩すまでひたすら誰かを救い続けるって、すごいよね……！」

スバルの声は、憧れに満ちていた。人命救助のスペシャリスト集団、特別救助隊入りを目指している彼女からすると、なるほどそれは眩しいだろう。

「……まあ、ね」

しかし、そう答えたものの正直、ティアナは素直には領けない。どうして自分をそこまですり減らしてまで赤の他人のために尽くし続けたのか、理解できないからだ。

一回や二回なら自分を犠牲にすることもあろう。誰かのためにという志を原動力に動く気持ちも理解出来るし、くすぐったいが共感も出来るつもりだ。

だが、あそこまで言うとは話は別だろう。自分の心身を崩すことのないように、調整したりは出来なかったのだろうか。

”献身の救世主”と、彼はそう呼ばれることもある。

だがもつと忌憚なく語る人たちは”使い潰されかけた善人”と称している。

本当のところは、どうなんだろうか。

ネット上の写真をめくって行って、とある一枚で手が止まる。

それは、授与式の壇上、複雑な微笑みを浮かべる高町恭也を映している。その頬には、涙が一筋伝っていて。

(……他人として傍から見る分には、綺麗な画だけ)

これは、どういう涙なんだろうか。

そんな事がなんだか、妙に気になった。

「わかってるんだよね、なのは」

「わかってるよ、フェイトちゃん」

入れない。それはスバル・ナカジマの情けなくも素直な気持ちで、食堂の入り口付近、同じく中に一步踏み出す事が出来ずに固まっている周りの、十数人の同僚たちもきつと思いは違わないはずだ。

「……その浮かれた顔を見ると、本当にわかってるのかどうか甚だ疑問なんだけど」

「ひ、ひえええ……」

「フェ、フェイト、さん、だよね……エリオくん、あれはフェイトさんなんだよね……？」

「そ、そのはず……あ、あんな顔も声も、は、はじめてだけど……」

ガタガタとスバルの隣、ちびっ子二人組が震えている。

その気持ちは、よくよく、スバルにもわかる。

「いい？ 隊舎なんだからね？ そこをきちんとわきまえてね？」

「テイ、ティア、ティアはあんなフェイトさん、見たことある？」

「あ、あるわけではないでしょ……」

「だ、だよー」

スバルの知る限り、フェイト・T・ハラオウンという上司は優しく温和で思いやりがあつて気遣いな、穏やかな陽光のような、静かな月光のような、そんな人だったはずだ。

その印象が覆ったわけではないが、まさかあんな拔身の刀よろしくな一面を持っているとは思わなかった。

「いやだなあ、わかってるって。私は私の役割をちゃんと果たすよ」

「……………役割、ね」

「そう、私の役割」

「……勘違い、しないでね。なのはが選ばれたわけじゃない。ただ、一番自然だったってだけの話だ」

「そうだねえ。ま、大事なのは結果で、そしてこれからだけど」

「……………ちッ」

「し、舌打ち……………」

思わずこぼしてしまいうくらい、それは鮮烈で苛立ちの籠った音だっ

た。

「ていうか、な、なのはさんもすごいわよね……」

「う、うん……」

ティアナの言う通り、である。あれだけ鋭い、言わば殺人的ですらある瞳と声音と舌打ちを真正面から浴びながら、高町なのはは余裕の笑みを崩さない。

さすがは無敵のエースオブエース、堂々たる振る舞いである。

5月16日、朝練後の機動六課食堂。

その中央付近のテーブルで、それぞれ対面に腰掛けて、分隊の隊長二人が殺し合いのような雰囲気まき散らしながら何やらもめていて。

フォワード陣四名を含む六課のペーパーたちは、とてもじゃないが同じ空間に入れる気なんてせず、ましてや食事が喉を通る未来なんて思い描けず、なすすべもなくただただ入り口近くで中の絶対零度の領域を伺っている。

とても仲が良く、コンビネーションも抜群に思えた二人が一体どうしたというのか。

ぐううと、スバルの胃腸が鳴った。ハードな朝練を終えたばかりだ、お腹は文句なしにペコペコである。

(……ううう、だ、だれか、だれかこの中に切り込める勇者は)

フォーメーション的にはフロントフォワードの自分がその役目を仰せつかるべきなんだろうが、バリアジャケットが何の意味もなさなようなあの空間に飛び込むのは、少々どころではなく辛いものがある。

(だれか、だれか……！)

情けなく他力本願、祈るスバルの耳に、そしてその声は聞こえてきた。

「なんや皆して、こんなところで固まって。もうご飯は食べたん？」

《……八神部隊長!!!》

多数の人間の声が綺麗にハモった。それくらい、それは救いの声だった。

茶色のショートボブを揺らして廊下の先から現れた童顔のその人、八神はやてはこの機動六課のトップ。要するに一番偉い人だ。

それに、あそこでやり合う二人とは長い付き合いの幼馴染みという話だし、この人なら、この人ならきつとなんとかしてくれる、そんな希望が胸に灯る。

「八神部隊長！ お、お願いします！ あれをどうか、どうか鎮めてください！」

「ちよおちよおなんやスバル、そんな情けない顔して」

規律の厳しいところならビシツと敬礼で迎えるべきなんだろうが、この機動六課はそこら辺はかなり緩い。上司部下という縦方向の関係性より、同じ隊の仲間という横方向の繋がりを重視しているのだろう。

そこに甘えさせていただき、スバルはやてにすがりついた。周りの面々も同じようなありさまだ。

「なんやなんや、いったいなになが……ああ」

部下たちにまとわりつかれ、困ったような顔のはやてはひよいつと食堂の中を覗きこんで、ため息ひとつ吐いた。

「まったく、やり合うのはええけど、場所と時間を選んでやもう……」
「お、おとお……！ さ、さすが部隊長！」
「あの中に斬り込んだ！」
「力みがない、圧倒のSSランク！ 俺たちのボス！」
「管理局の火薬庫！」

メカニックや通信スタッフたちが上げる歓声を背中に、スタスタとはやてはあつさり魔境と化した食堂に入って、

「った」「っわ」

「なにやってんねんばかたれ」

右手でフェイトの、左手でなのはの頭を思い切り張った。

そのあまりに豪胆な行動に、見ているスバルの胃がキユウつと怯える。

「こんな朝っぱらからこんなところで！ 見てみいあそこ！ 二人に怯えて可哀想に、皆ご飯が食べられへん！」

「え、あ、ほんとだ！ っ、ごめーん！」

「え、わ、気付かなかった……！　ごめんねみんな！　入って入って！」

はやてに叩かれ促され、こちらを見やったなのはとフェイトからは、先ほどの空気が嘘のように消え去った。

二人は申し訳なさそうに、ごめんごめんとこちらに頭を下げている。

「皆も入り、時間もつたいないで。まさか朝ごはん食べんとお昼まで持たんやろ」

「は、はい！」

勢い良く返事をして、スバルは皆と共に無事、食堂へと入った。

「なんでも、特導官関係だったらしいよ、今朝のあれ」

「……そうなの？」

自販機もある休憩スペース、椅子に座りながら言ったスバルの言葉に、隣に腰掛けたティアナは興味を引かれたらしい。

お澄まし顔が印象的だが、実はそれなりにミーハーなどところがあるのは、多分スバルしか知らないティアナの一面だ。

時刻は午前十時半、少し長めの休憩時間である。

「うん、さつき八神部隊長とリイン隊長が話してるのを聞いちゃった」
「盗み聞きってあんたね……」

「違うよ！　たまたま！」

本当にたまたま、二人が話しているところに通りがかかってしまったのだ。まあ、意識的に耳を澄ましたところはもちろんあるのだが。

「なんでも、高町特導官って、なのはさんと同じ部屋に住むんだって」
「え、そうなの？　あー、まあでも、ご家族だからそんなに不思議でもない、のかしら」

「うーん……まあ、そうかな？　なのはさんたちの出身世界だと普通なのかもね」

同性ならともかく、それなりの歳である異性の兄妹がわざわざ一緒

の部屋に住むというのは、スバルたちの常識からすると少し奇妙に映る。

だが、世界世界で常識は異なるし、それは尊重してやっていくべきというのが管理世界のやり方だ。

「……ていうか、そしたらますます勘違いする人増えるんじゃない？

わかんないけど、六課にも結構いそうだし」

「あー、かもねえ」

ティアナの言った「勘違い」とは、高町恭也と高町なのはの関係性についてだ。

もちろん親しい者やきちんとプロフィールを洗った人間は当然のように、二人が兄妹だとわかっている。

しかし、そうではない多くの人間たちの内、結構な割合が二人の関係を兄妹とは別のものと勘違いしているのだ。

それは、なんと夫婦である。

本当に結構な割合の人間がごく自然にしている思い違いであり、スバルも何人も見てきた。本当のことを教えるとすこぶる驚かれるくらいだ。

要因は、いくつもある。

まず一つ、二人が各々独立してあまりにも有名人であること。恭也は少なくとも局内では勲章を授与される前から様々なところでその実力と功績が噂になっていた人物であり、なのはは入局当時から超有望株として有名で、今では堂々、無敵のエースオブエースだ。

すると、恭也を知って、それから同じ名字という事でなのはを知るでもなく、なのはを知って、それから同じ名字という事で恭也を知るでもなく、普通、「絶対の特武官」と「無敵の教導官」として、各々を完全に別のタイミングや状況で知ることになる。

そうなれば、その二人が兄妹であるという考えにはなかなか自然には至らないだろう。

二つ目の要因は、二人の魔法適性や戦闘スタイルがあまりに違う事だ。片や古代ベルカの高速近接系、片や現代ミッドの重装甲砲撃系、見事に正反対である。通常、血縁者というのはスバルと姉のように適

性やスタイルは似る事が多いのだが、あの二人はそうではない。その点の一つ目の要因とも絡み合って、二人を兄妹だと思わせ難くしている。

三つ目は、見た目だ。二つ目と同じように、二人はまったく似ていないのである。写真で見ると限り恭也は漆黒の髪色をしているが、なのは栗色。顔つきも、二人共端正だが驚くほど似ていない。鋭さの印象的な兄に対して、妹は可愛らしいタイプだ。

四つ目は、醸し出す雰囲気。まれに二人が一緒になつて昼食や夕食を食べる姿が六課始動前の本局では見られたらしく、その時の雰囲気は完全に新婚のそれだったという話がまことしやかに流れている。特に、普段は可愛らしい外見とは裏腹に実に凛々しい勤務態度の印象的なのはが、別人かと思うくらいに蕩け切っていたらしい。

以上四つがある上で、五つ目、名字、ファミリーネームだ。一から四の要因があると、今度は同じ名字というのが自然と違う印象を与えるようになる。つまり、お互い釣り合うくらいの実力者で、適性やスタイルも違い、見た目は似ておらず、一緒にいるときの雰囲気はピンク色……それで名字が同じとなれば、導き出される結論は当たり前のように、夫婦という事になる。恭也となのはの年齢は、社会に出るのが早いミッドチルダでは結婚していてもなんらおかしくないものである。

最初から兄妹だと知っていなければ、この要因たちにずらりと並べるとそれは確かに勘違いもしよう。

ちなみに最近は大メ押しの六つ目まで存在しており、それはとある写真である。

勲章授与式直後に撮られたというその一枚には、熱く抱き合う二人の姿が映されている。それはとても感動的で、言ってしまうと深い愛情を感じさせる光景。

なんでもこの時の元特武官は、本来ならば偉い人たちの直接の賛辞や報道陣の取材を受けているはずだったらしいが、「大事な人に逢いたい」と言つて、それを無理やり抜けてきたらしい。

あそこまでの要因が揃った上でそんなエピソード付きでこんな写

真が転がると、むしろどうやって兄妹だと感づけというのだ。

もちろんちゃんと調べれば簡単に誤解は解けるのだが、疑う余地のないように見える事実についてわざわざ調べ直す人間などいないだろう。

このようにして、二人の関係性というのは割合、勘違いされているものである。

それが今度は同じ隊舎で同じ部屋に住もうともなれば、さらにその度合は増すだろう。

「ていうか、特導官ってじゃああの幹部棟に住むってこと？ 実質女子寮みたいなものだけど、大丈夫なのかしら」

幹部棟とは隊舎の独立した一区画で、主に隊長陣の部屋がある。なのはと一緒に住むというのなら、確かにそうなるだろう。

六課の隊長陣と言えば女性揃いなので、男性は恭也一人になってしまふ。

「お風呂とかは幹部寮は部屋ごとに付いてるし、それにほら、元々隊長陣と特導官って古くからの付き合いらしいし、大丈夫なんじゃない？」

「あー、そうねえ」

そこらへんは、自分たちが気をもんでも本当にどうしようもない事である。

「……話戻すけど、なのはさんとフェイトさん、それであんな風に揉めてたっていうのは、でもどういうことなのかしらね」

「フェイトさんも特導官と一緒に住みたかった！ とか？」

「……私もそれしか思い浮かばないわ。でもそれって、そういう事よね？」

ティアナが気持ち、声を潜める。合わせてスバルもトーンを抑えた。

「……フェイトさんが、特導官のこと好きだったってこと？」

「そもそもあれかもよ、もしかしたらもう付き合ってたりにして」

「うわー、そうなのかな！ でも絶対お似合いだよ、並ぶとすぐく絵になると思うー！」

「美男美女よねえ」

凛々しい黒髪の男性と、美麗な金髪の女性。何かの映画のようだ。

「師弟関係だつていうのは、有名だよね」

「そうねえ」

フェイト・T・ハラオウンは個人でも当然のように実力者で有名だが、現特導官、かの元特武官の直弟子という見方でもよく知られている。

「うーん、でもまさか、どうなんですかってフェイトさんに直接聞くわけにもいかないし……」

「フェイトさんがどうかしたんですか？」

「お二人もここにいらしたんですね」

ひよいっと、赤とピンクの色彩が視界に入ってきた。

「エリオ、キャロ！ いいところに！」

ベストタイミングでやってきたのは、フェイトを親代わりとしているエリオとキャロの二人だった。思わずスバルは幸運に叫んだ。

「いいところ、つてなにがですか？」

「いやあ、ねえティア、二人に聞いてみていいよね？」

「まあ、いいんじゃないかしら」

エリオとキャロはちようど、話題のフェイトに付いて捜査任務の手伝いをしていたためにスバル・ティアナとは別行動だったのだが、本当にタイミングが良い。

また少し、声を抑えてスバルは問うた。

「ねえエリオ、キャロ、……フェイトさんって、特導官と付き合ってるの？」

「え？」

「ええ、と……」

二人はお互いに顔を見合わせ、

「はい、多分」

「お付き合いされていると思います」

さざりと、そんな答えを口にした。

「ほ、ほんと！ やっぱりそうなのね！」

聞いた自分よりも食い付きの良い友人に苦笑。大人びているけれど、こういうところは自分と同じ歳相応の女子だ。

「え、ええと、その、でも、フェイトさんから恭也さんからもはつきりと聞いたわけじゃないんで！」

「もしかしたら違うかもしれないんですけど、その、そうなんだろうなあって思える事がありました……！」

ティアナの大きな反応に、軽々しい発言だったかと思っただのか二人からは追加の情報があった。

そしてその言葉の中に、少々気になるものがあった。

「そうなんだ……ていうかごめん、ちよつといい？ 恭也さんって、……なんかすごい親しげな呼び方だけど、もしかして二人って特導官と面識あるの？」

「あ、はいっ、じ、実は……」

「わたしもエリオくんも、何回か直にお会いして、遊んでもらったことが……」

テレテレと顔を赤く染めて、二人は実に嬉しそうだ。

「そ、そうなんだ……すごいわね……」

ティアナが眼を丸くするのもむべなるかな、特導官と直に会った事が、しかも遊んでもらった事があるだなんて、羨ましがる人間は多分管理局・管理世界に大量にいる。

「どんな人なの、特導官って」

「かっこいいです！ すごく……」

続けて聞いたスバルに、エリオは勢いよく答えた。

「優しくって、強くって、頼りになって、かっこいいんです！ 僕、いつか恭也さんみたいな男になるのが夢なんです！」

その瞳はキラキラと輝いていて、いつも真面目で聞き分けが良くて、優等生な彼には珍しい、それは子供らしい表情だった。

「わ、わたしは、その……本当にごめんなさいなんですけど、最初、ちよつと怖くって……」

手をもじもじと遊ばせながら言うキャラは、しかしどこかこちらも高揚した顔。

「でも、少し一緒にいたら、すごく優しくって、暖かい人なんだってわかって……。頭を撫でてもらったら、とつても安心できて……。だから、なんていうか、フェイトさんと同じくらい、優しい人だと思います」

「ほほお、そうなんだ」

今朝あんな様子だったものの、スバルの眼から見てもフェイトはとても優しい女性だ。あの人と並べて称されるというのはなるほど、随分なものなのだろう。

『あの伝説からすると、ちよつと意外かもね』

『そうねえ、でも、当時の訓練生には慕われまくってたって話だし、そうでもないのかも』

念話でティアナと交わした中の”あの伝説”とは、特導官が訓練生時代に残したものである。ティアナとスバルは彼と同じ訓練校出身であり、彼が卒業した約一年後に入校した世代なので生な話としてよく聞いたのだ。

曰く、自分のデバイスについて難癖を付けてきた訓練教官を蹴り一発でグラウンド端から遠く離れた男子寮壁面まで吹き飛ばしたというのである。教官は高度な防護魔法の遣い手であり、おそらく使用できる最高硬度の魔法でもってガードしていたらしいが、まるで濡れた紙を突くが如く簡単に破られたとの事だ。

その後、教官たちには恐れられ、訓練生たちには大いに懐かれた特導官は種々の有用な訓練メニューを残して去っていったらしい。スバルは特に近接のベルカ式ということとでそれに触れる機会が多かったのだが、現在主流な魔法運用とはかけ離れていたもののやってみれば非常に有用で驚かされた。

ちなみに、吹き飛ばされたらしい教官とはスバルも当たったことはあるが、ぼそぼそと随分覇気のないしゃべり方で、正直あまり印象には残っていない。蹴り飛ばされる前は威勢のいい、訓練生に当たりのきつい人であつたらしいが、全然信じられない有り様だった。

よほど、特導官の一件がトラウマだったと見える。

(苛烈な人だつて予想してたんだけどなあ、違うのかな)

懐かれていたのは強さゆえのカリスマで、本人の性格はきつとビシ
リと厳しい人なのかなと件のエピソードから予想していたのだが、エ
リオ・キヤロの話を聞く限りどうも違うらしい。

特導官の人柄については、あまり知られていないしスバルも知らな
い。高町恭也マニアと化しているギンガでさえ、よくは把握していな
いだろう。

戦いの実績やその戦闘力は非常に有名だが、ゆっくり話した事のあ
る人間が少ないため、どうしてもそうなってしまうのだ。

『ねえティアナ、こうなったらさ、他の人達にも色々聞いてみようよ』
『……まあ、付き合わないでもないわよ。あ、でも、なのはさんとフェ
イトさんは勘弁してよね、下手に突っついてあの空気を出されるのは
死んでも嫌よ』

『そ、そうだね……』

それはスバルも絶対に御免被りたいところである。

「あ、それで、エリオ、キヤロ。なんで二人は特導官とフェイトさんが
付き合ってるって思うの？」

話を戻したこちらに、二人はまたしても少し照れくさそうな顔で答
えた。

「ええっと、僕達、その、……恭也さんにプライベートアドレス、頂い
てまして」

「その時に、ですね……」フェイトの子どもだというのなら、俺にとつ
ても子どものようなものだ。なにかあったら遠慮せず、頼ってほしい
”って、言って頂いて……」

「な、なるほどそれは確かに……」

なかなか、二人のそう言った意味での親しさを予想させる台詞では
ある。少なくともただの友人関係にあるだけならば、そんな言葉は出
てこないだろう。

「お二人の雰囲気も、こう、すごく落ち着いててぴったりハマってるっ
ていうか」

「息があってて、お互いのことをすごく自然に気遣いあって、だから
そういう関係なんだなあって」

「ふんふん、なるほどなるほど」

これは確定だろうか。特導官とフェイト・T・ハラオウン、二人はそういう仲である、と。

「……でも、はつきり聞いたわけじゃあないのよね。決めつけるのは早いんじゃない？ フェイトさんはお弟子さんなわけだし、弟子の子どもなら同じく弟子みたいなものとかさそういう……ああごめんっ、エリオとキャロを父親みたいな気持ちで大切にしているってのはそうだと思うけど！」

自身の失言を慌ててフォローするティアナに、エリオとキャロはそろって落ち着いて返す。

「いえいえー！ 恭也さんに気にかけて頂いているのはちゃんとわかってますから」

「フェイトさんとの関係がその、お付き合いされているものでもそうでなくとも、わたしたち、すごく良くして頂いています」

つくづく、出来た子たちだなあとと思う。自分が彼らの年齢の頃なんて、すぐに泣きべそをかいてピーピー言っていたというのに。

「それにしてもあれだね、二人とも本当にすごいね、特導官のプライベートアドレス持つてるって」

話を変えたスバルに二人はすぐに乗ってくれた。

「昔から管理局内では噂の特武官ではありませんけど、今じゃもう次元世界の英雄ですから、ちよつと、いいのかなって思っちゃいますね」

「……最近はお忙しかつたみたいでしばらくお会いできていませんし、だから今更連絡先を知っていることに緊張なんかしちゃって……」

「あはは、だよねえ」

なにせ四連勲章の高町恭也だ、並の人物ではない。

「でも、この六課って、フェイトさんやご兄妹のなのはさんはもちろんですけど、他にも僕達なんかよりずっとずっと恭也さんと親しい方が結構いらっしゃるんですよ」

「あー、八神部隊長やヴォルケンリッターの皆さんは昔馴染みなんだって聞くわね」

エリオにティアナが答えた通り、六課の隊長陣はどうも皆、高町恭也と親しい仲であるというのはそれなりに知られた話だ。

「もしかしたらフェイトさんじゃなくて、その中にお相手がいたりして」

「ど、どうなんでしょう……、僕たちとしてはフェイトさんとそうであって欲しいんですけど……うう、ど、どうなんでしょう……」

「ち、違うんでしょうか、自信がなくなってきました……。八神部隊長たちもすごく素敵ですし、もしかしたら本当に……。ちよ、直接フェイトさんに聞くのもちよつとアレですし……」

眼をぐるぐるとさせて、二人は不安げな声を零している。

「ちよつとスバル」

「ご、ごめんごめん、でも、任せておいて二人とも！」

二人の肩に手を置いて、せいぜい頼りがいを感じてくれそうな表情を意識し、スバルは言う。

「私とティアナで色んな人達に聞いてみるから！ はつきりわかったら教えるね！」

「は、はい！」

「お願いしますー！」

そうと決まれば、行動は早い方がいい。スバルは次の昼休み、早速聞きまわってみることに決めた。

「剣筋に清廉さがあるというのならまさにあれがそうなのだろう！」

その一太刀はただ鋭く、強く、速いだけではないのだ！ 美しいまでに凝縮され洗練された技量が、それを輝かせる孤高な高潔さが宿っている！ 品位というのは自然とその武芸に現れるのだろう、騎士恭也を見て私は心からそう思う……！ 二人もきつと、目の当たりにすればその美しさに見惚れることは間違いないだろうっ、今から楽しみにしておくといい！」

「は、はい……」

「た、楽しみに、しておきます……」

「うんうん！ それでなっ」

聞く人を間違った。

それがスバルの正直な感想であり、隣に立つティアナもきつと同じように思っているだろう。

「人柄に関して言えば、何よりも挙げるべきは誠実さだろうなあ……！ 自分の言葉を裏切らず、建てた信念に決して背くことのないあの生き様は、あれぞ騎士あれかしと、まさにそういったもので」

いや、多分大正解ではあるのだろう。ただ、それでも選んではいけなかった選択肢であったというだけで。

昼休み、食堂でちょうど良く近くの席に座ったその人、交代部隊隊長リインフォースに「特導官はどのような人なのか」という事を聞いてみたところ、途切れることのないマシンガントークが炸裂した次第である。

『い、いつまで続くんだろう、これ……』

『終わりは見えないわね……』

特導官の情報を色々開示してもらえるのは素直にありがたいし、自分たちの質問に熱心に答えてくれるのも嬉しいことだが、それでも凄まじいと言えない熱量で至近距離、エキサイトされ続けると少々厳しいものがあるというのが、申し訳ないが本音だった。

「時折、なかなかお茶目というか、悪戯なところもあってな！ そこもまた魅力的なんだ！ 真面目な、あの精悍な顔で冗談を言ってくるものだから私はいつも騙されてしまって、ふふ、でもそんな騎士恭也はどこか可愛らしくてなあ……！」

『ていうかりインフォース隊長って、こんな一面があつたのね……』

『ね……』

ティアナの念話での言葉に、返答とともに胸中、深く頷く。リインフォース隊長と言えば言葉遣いこそどこか男性的なところもあるが、穏やかで物静か、上品でたおやかな楚々とした女性であり、口数が多いという印象もなかったものだから今の目の前で披露されている顔は実に意外だ。

「それでな、それで——」

『ああ、終わらないんだね、本当……』

『私たちが聞いたんだから、最後まで付き合いましたよ……』

その最後がいつかはわからないが、少なくともそれが礼儀としたものだろう。ティアナと共に覚悟を決めたスバルだったが、そこに救いの手が差し伸べられた。

「リイン、ここにいたか。なのはが呼んでいたぞ」

「部隊編成について、ちよつと確認があるって」

昼食を乗せたトレーをテーブルに置きながら言ったのは、ライトニング副隊長シグナムと、六課主任医務官のシヤマルだった。

「将、シヤマル。……そうか、うん、わかった」

昼食自体はもう摂り終えていたリインフォースは、そう言つて腰を上げた。

「すまん、スバル、ティアナ、仕事が入ってしまった……。ほんの少ししか語る事が出来なかったな……」

「い、いえいえいえいえ！」

「とてもよくわかりました！　ありがとうございます！」

バツの悪そうなりインフォースに、スバルはティアナと揃つて千切れんばかりに首を振る。

「そうか？　また聞きたかつたらいつでも来るといい。私のこの拙い言葉でよければ、全霊でもって、騎士恭也の魅力を伝えよう」

ではな、と自分のトレーを持ってリインフォースは去っていった。後ろ姿も抜群に美しく、ついつい目で追ってしまう。

いや、いい人なのだ、本当に。ただ、あのレベルで特導官に対し熱量を抱えているとはちよつと予想できなかつたのだ。

「まったく、お前たちは一体何をしているんだ」

「リインの様子を見た限り、恭也さんについてあの子に聞いたんでしよう？　駄目よ、うかつにそんな事をしちゃ」

席に着きながら、シグナムは呆れたように、シヤマルは苦笑しながらそう言った。

「あ、あの……ありがとうございます……」

「……まあ、お前たちが気になるのも仕方ないだろうからな。ただ、次からは人は選べ。ラインフォースは駄目だ」

やはり、シグナム達はこちらを助けてくれたらしい。頭を下げたスバルとティアナに、シグナムは気にするなという風に手を振った。

「でもラインフォース隊長って、どうして、その、あんなに……」

「はやてちゃんを含めて私たちはみんなね、昔、恭也さんに助けてもらったの」

思い出すように少しだけ目を伏せて、スバルの問いにシャマルが答える。

「それは、命を。それは、生き方を。それは、未来を。全部、助けて、救って、護ってもらった。だから、私たちはみんな恭也さんにすごく感謝をしていて、それ以上に、そういう事をしてくれたっていう事そのものがものすごく嬉しくて、そういうあの人が大好き」

丁寧な口調のシャマルは、気持ちの籠った声でそう言った。

「無愛想だけど、シグナムもね」

「……感謝しているし、それなりに気が合うというのは、確かだ」

ムスっとしたようなシグナムだが、もしかしたらこれは照れているのかもしれない。

「ラインはあれですごくまっすぐな子だから、感じている気持ちをああいう風に表現しちゃうのよ。ちょっと信仰じみてるっていうか」「軽めの狂信者みたいなものだ」

身内ゆえだろう、シグナムの口調には実に遠慮がなかった。

「あいつは普段は穏やかな性質だが、こと恭也の事となると一切の容赦をしない。あいつの前でうかつに恭也の事を聞けばどうなるかわかったと思うが、もし貶そうものなら身の安全は本当に保証できんぞ」

「き、肝に銘じておきます……」

引きつった顔で言ったティアナと共に、スバルはこくこくと頷いた。

「ちなみに、リンツはラインに恭也さんへの賛辞を子守唄にして育てられたから、ほとんど同じ感じよ」

「それはまた……」

「すごい育ち方ですね……」

リンツ、ラインフォース・ツヴァイは機動六課の部隊長・副隊長補佐と前線管制を担当する妖精のような見た目の局員だ。上司ながらも可愛らしくて、見ているとついつい頬の緩んでしまう女の子だが、そんな一面があるとはやはり知らなかった。

「リンツにも、恭也のことを聞くのはやめておいた方が賢明だな」

「まあ、少なくとも私とかシグナムに聞く分には大丈夫だけどね。聞きたい？」

「あ、はい！」

「ふふ、えっと、そうねえ恭也さんは……」

答えたスバルにシヤマルが答えようとして、

「あいつは不器用な男だ」

すぱつと言ったのはシグナムだった。

「私は、あいつほどの不器用ものを他に知らん」

「ええっと、それは手先とかじゃなくて、ですよね？」

「ああ、手先は器用だぞ。料理は上手いし、女の髪を結わせるのも上手い」

ティアナの確認に、さらりとシグナムはそう返してきた。

「シグナムもたまに結んでもらってるものね」

「……本当にたまにだぞ」

ぶつきらぼうな口調のシグナムだが、不快そうな表情ではない。

『……ねえティア、もしかしてシグナム副隊長が？』

『いやいや、さすがにその判断は軽率過ぎるでしょ』

『うーん、まあそっか』

シグナムとは関わる機会があまり多くなく、大してその性格や性質を理解しているわけではないのだが、なんとなく彼女が軽々に男性に自分の髪をいじらせるようには見えない。ゆえに、そこには特別な関係があるのではなどと考えてしまったのだが、ティアナからしてみればさすがに少々跳びすぎた思考らしい。

「でも、私も同じ意見かなあ。すごく不器用だから、恭也さん」

「それは、その、人間性が、的なことですか？」

スバルの問いに、シャマルは頷く。

「そう。生き方とも言えるかしらね、それがすごく不器用。もつといい思いも、楽な思いもしようとすれば簡単に出来るはずなのに、あの人はしないの。出来ないのかな。最近は昔よりもちよつとその傾向は薄れたんだけどね」

「それでも、一般的な人間と比べたら、やはりあいつは不器用ものだ」「シグナムだって人の事はあんまり言えないわよ」

「私はあいつほどじゃない」

言いながら、シグナムは昼食の Pasta に手を付ける。「まあ、そうかしらね」と笑って、シャマルも同じくサラダにフォークを伸ばした。

『不器用、だつてさティア』

『あれかしらね、無骨なタイプなのかも。戦い一筋の』

『ああー、あれだけ強ければねえ』

そんな念話を交わしつつ、スバルとティアナも食事の残りを片付けにかかる。

結局、リインフォース、それにシグナムやシャマルが特導官とそういった関係なのかどうかはわからなかった。

「失礼します、スバル・ナカジマ二等陸士、入ります！」

「同じく、ティアナ・ランスター二等陸士、入ります！」

「すまんなあ、呼びつけてもうて」

ティアナと共に部隊長室に足を踏み入れたスバルを、六課部隊長のはやてがそう言つて迎えた。

普段、そこまで鯨張つて話さなくてもいい空気を作ってもらつているとはいえ、こうして部隊長室に呼び出されたときにそれを引き摺るほどスバルも常識なしではない。びしつと敬礼をして、椅子に座る彼女の前で背筋を伸ばす。

「ああ、楽にしたつて。お固い話でもないから」

しかしはやてはそう言って、くだけた笑いを見せた。

「で、では……」

「ええと、失礼します」

ティアナと揃ってとりあえず敬礼を解くと、はやては満足気に微笑んだ。

「すまんなあ、もう就業時間終わったつちゆうのに。はよご飯食べた
いやる」

はやての言葉通り、現在はもう本日の訓練が終わった時刻。あとは
夕飯を摂って寮へ帰るのみだ。

その寸前、放送で呼び出され、こうして部隊長室を訪れた次第であ
る。

「いえっ」

「大丈夫です」

「そうか？ 悪いなあ。ちよつとな、話があつて。バックヤードやメ
カニック、オペレーターの子たちにも言って回ったんやけど、二人が
最後になつてもうた」

「お話、ですか？」

聞き返したスバルに、はやては頷く。

「そ。明日から来る人について、少しな。何やら二人はリインたちに
聞いてたみたいやけど」

「あ、あはは……すみません……」

「その、気になります……好奇心といいますか……」

なんとなくのバツの悪さにスバルとティアナはそう言うが、はやて
は笑った。

「ええってええって、なんも悪いことない。むしろ、私としては嬉しい
かな」

「ええと、どういう？」

スバルが問うと、はやては優しく、そしてどこか深い笑みを見せた。

「あのな、……難しい事やとは思う。階級もかなり上やし、有名人や
し、言わば生きた伝説みたいにも語られとるから、力まず話せ、ゆう
ても厳しいとは思うんよ。ただ、ごめんな、だから無理を言うお願い

なんやけど」

なんとなく。

本当になんとなく、なのだが。

とてもしつかりしていて頼れる上司ではあるところの八神はやては、とは言え見た目は童顔の少女と言ってもいいような人だ。

「恭也さんを、どうか敬遠しないで欲しい」

しかしなぜだか今、目の前にいるその人は、とても大人に見えた。

大人の、女性に見えた。

「気軽に話せ、とはなかなか言えんけど、あんまり固くならないで、……出来れば、一人の人間として接して欲しい」

あまりに真剣な声音に、スバルも隣のティアナも、軽々な返答が来ず思わず固まる。

「恭也さんってな、結構あれよ、お茶目なお兄さんでな」

そんなこちらの様子にか、はやては口調を砕けたものへと変えた。

「ぱつと見はちよう怖いかな？ って思うかもしれないし、どっしりとした雰囲気もあるからなかなか話しかけ難いかもわからんけど、あれで面倒見もめっちゃ良くてな、色々聞いたら教えてくれるし」

「そうなんですか」

「そうなんよ」

相槌を打ったスバルに、はやては軽い声音で返す。

「少なくとも」上官に対して無礼な」みたいに怒る人ではない。もちろんだからといって無礼講でええわけやないけど、必要以上に畏まることもない。ちゆうか、私もなかなか付き合い長いけど、あの人が怒るとるのって見たことないかもしれん。叱ったり窘めたりはあるけど」

「……あの、部隊長、私たち実は訓練校で特導官の伝説を聞いた事がありました」

「ああー、そうやな、二人は同じとこ出身やもんな。一年後に入ったんやっけ、そうかそうか」

ティアナの言葉に、しかしはやては顔の前で手を振った。

「あれはもう例外中の例外なんやろな。なのはちゃんですら「そんなおにいちゃんは見たことない」って言うてたくらいやから。恭也さ

ん、自分が何言われても怒らんけど、その代わり自分が大切に想つてる人の事言われると火が着くみたいなんよ。あの場合は人っちゅうか愛機やけど」

「なるほど……」

件のエピソードから連想される苛烈な人物像と、特にキャロから聞いたイメージが合致しなかったものだが、はやての言葉を合わせるとそれなりの合一を見せた。

「……今日のこの話はな、命令やない。仕事に関係ない意味合いで仲良うして欲しいとか、そんな事を命ずる権限、もちろん私にはないし、あってもするつもりはない」

軽かった声音をまた少し真剣なものへ戻して、はやては言う。

「だから、お願い。命令やのうて、お願い。六課の部隊長として、特導官の高町恭也に対する心構えを命じてるんやなくて、八神はやてとして、新しく仲間になる高町恭也さんっちゅうお兄さんについてのお願いや」

「八神部隊長……わ、わかりました！」

「出来る限り、やってみますっ」

ティアナと力を籠めてそう返す。おおらかな上官が自分たち下っ端にこうして乞うてくれているのだ、応えないのは嘘だろう。

「そうか？　ありがとうなあ、二人共。……ちなみに実はこれ、私だけやのうてなのはちゃんとフェイトちゃんからのお願いでもあるんやけど、あの二人はちよつとこの話をするのに適切でない振る舞いを今朝していたので、おとなしくしててもらいました」

「あ、あはは……」

思わず苦笑。確かにあれを見てまだ一日も経っていないわけで、あの二人に揃って呼び出されでもしたら正直、少々身構えてしまうだろう。

「そんなら、お話はこれでお終い。すまん、ご飯食べてきてな」

「わかりました、八神部隊長は？」

「私はまだちよう仕事あるから、後から行くよ」

さすが、部隊の長ともなると働き者だった。

ティアナと二人、はやてへ礼をして部屋を辞する。

「……ねえ、ティア。八神部隊長って」

「……うーん、いや、どうなのかしら。恋人というより、奥さんみたいな構え方よね」

ティアナの言にはスバルも同意だ。見えない所からしつかり支える、そのやり方はもう夫婦のようですらある気がする。

それに、やはりあの表情だ。高町恭也という人について自分たちに頼んできた時の、あの深い表情。

ただの友人や恩人に対するそれには、どうしても見えなかった。

『来たな、スバル、ティアナ。わりいけど食い終わったら、第二会議室に集合だ』

『え、ヴィ、ヴィータ副隊長？』

『突然どうされたんですか？』

食堂に入って配膳の列に並ぶと、中央あたりの席に座ってシグナムと食事を摂っているヴィータがいきなり念話を飛ばしてきた。ティアナと一緒に、スバルは当然、少し当惑した反応を返してしまう。

『あたしとティアナ、二人ですか？』

『そうだ、お前たちだけじゃないけどな。それからこの事は秘密にして。誰にも言わず、静かに来いよ』

ヴィータの口調は実に有無をいわさない強さがあって、とりあえず了解と返答。

「……？」「……？」

もちろん何があるのかわからず、ティアナと顔を見合わせて首をひねった。

「集まったな……」

深夜というにはまだ浅いが、それなりに夜も更けた時間。壇上に立ち、言ったヴィータの言葉通り第二会議室にはそれなりの数の人間が居た。

スバルももちろんその一人である。隣には当然のようにティアナもいる。

「ねえティア、これ、なんの集まりなの？」

「私を知るわけないでしょ……女性スタッフばかりだけど」

ティアナが言ったように、ここ第二会議室には現在、六課に在籍する女性スタッフのほとんどが顔を揃えている。いないのはヴィータを除いた隊長陣とシャマル、そしてキャロくらいのものだろうか。

「あれ、シャーリーさんはあっち側なんだ」

ティアナが言ったように、通信主任兼メカニックのシャリオ・フィニーノはヴィータの隣に控えていた。

「わりいなー！ 夜遅く、よく集まってくれた！ 今日、どうしてもお前らに言っただけ置きなさいやあならない事があつてな！ こうして来てもらった次第だ！」

ヴィータがその多少舌足らずな声を張る。可愛らしい音色だが、腹から叩き出されるそれはいつもながら迫力がある。

彼女は一旦言葉を切り、集まったスタッフ達の顔をぐるりと見渡す。

「……アタシは、お前らの事は、本当に良い仲間だと思ってる」

それは、苛烈な彼女には珍しい言葉に聞こえた。

「はやての作ったこの六課は、人に恵まれた。手前味噌なのかもしれないけど、ここまでの人材が揃ったチームなんてそうそうねーと思ってる。前線メンバー、バックヤードスタッフ、通信オペレーター、メカニック、どれも全部だ。アタシははやての声に応えてくれたお前らに、感謝をしている」

いきなり始まった空のトップエースによる謝辞に、スタッフ達は鎮まり返った。あつけにとられ、そして言葉が脳に染み渡って、やはり胸には誇りが灯る。

(ヴィータ副隊長……)

スバルは、個人訓練でよくよく彼女にはお世話になっている。隊長陣と比べたら見劣りするなんてものではない自分が、そんな風に思ってもらえていたというのはやはり、嬉しかった。

自分たちこそ、自分たちこそ感謝している。スバルの口はそう言いかけて。

「だが！ だから！ だからこそオ!! お前らには言っておかなきやアならねえことがある!!」

ヴィータのその大音声に黙らされた。

ビリビリと空気が震え、その迫力に一人残らず気圧される。

「いいか、いいか、……明日、特導官がこの六課にやってくる。だからな、お前ら。いいか、お前ら。絶対に、絶対に!!」

バン、と。机を壊すような勢いで叩いて、そして小さな鉄人は言った。

「キョーヤに色目を使うんじやねえぞツ!!」

「ええつと……」

誰もが言葉を失って、とりあえずとスバルは代表のように口を開いた。

「つ、使いませんよヴィータ副隊長……。だって、あの”高町恭也”さんですよ……。もうなんか、そういう事を考えるレベルじゃないつていうか……」

ついさつき、敬遠せずに接して欲しいとはやてに言われたばかりだが、あれは人間としての話だ。男性として見るというのは、また別問題である。

「ハッ！ 果たしてどうだろうな！ お前が実物見てもそんな事が言えるか、アタシは疑問だ！ 二十も半ばでいよいよ色気の塊みたいになっちまったアイツを見ても！ 果たして同じことが言えるもんかよ！」

「そ、そうなんですか？ 色気の塊……でも、いやあ」

少なくとも自分はそんなに身の程知らずなつもりではない。

「……なんだ、お前、アイツになんか不満でもあるつてののか？ お前のお眼鏡にや適わねえと？ おいおい、まさかまさかそんな事を言うつもりじゃねえだろうな？ なあスバル？」

「い、いえ、そういうわけじゃ！ はいっ、とても格好良いと思います！」

「ほう……んじやあやつぱり色目を使う気はあるわけだな？」

「ええ……ど、どうしろと……」

無茶苦茶である。しかしあの迫力満ち満ちた三白眼で睨めつけられるとなかなか反論もできない。

「ヴィータさん、さすがにスバルが可哀想です」

「……ま、とにかくだ」

シャーリーに言われずとも理不尽を零したという自覚はあったのか、ヴィータは頭を振って話を戻した。

「いいか、お前らがアイツに惹かれちまうとしても、それは仕方がない。女として、それは仕方がない事ではあんだらうよ。が！ が、だ！ それでも絶対に、何か行動を起こそうだなんてするんじやねえぞ！ 想うだけに留めておけ！」

彼女の声色は、ひどく真剣だ。

「アタシは、お前らが大切なんだ。同じ隊の仲間で、はやての声に応えてくれたやつらで、だから、だから……」

それはまるで、何かに怯えているようにすら聞こえる硬さで。

「あ、あの……ヴィータ副隊長」

「……なんだ、ティアナ」

「あの、なんていうか……なにかあったんですか？」

ティアナの問いに、ヴィータは深い溜息を吐いて、一拍、二拍、三拍置いて、ようやく口を開いた。

「……詳しくは、ここでは言わねえが。一ヶ月ほど前の話だ。アイツを嵌めようとした女がいやがった」

「嵌めようど？」

スバルの問い返しに、ヴィータは重々しく頷いた。

「……アイツは、キョーヤは、昔よりマシにはなったがそれでも、いまいち自分の人気とか魅力とか、そういうのを正確に把握してねえんだ。だからはつきり言って、……女に対して、そういう意味では死ぬほど無防備だ。自分が狙われるような男だっかわかってねえんだよ」

「あんなに人気なのにですか!? 嘘でしょう!？」

驚きの声を上げたのは整備員兼通信スタッフのアルト・クラエツ

夕。明るく社交的な性格で、スバルとは仲が良い。

「それがマジなんだ……。なあ、あいつ、いろんなメディアで連日騒がれてたろ」

「そ、そうですね、よく見ました。というか、今も見ますが……」

経理事務兼通信スタッフのルキノ・リリエが言った通り、テレビや雑誌で、元特武官現特導官の特集はよく組まれる。実際に彼が出演したりインタビューに答えたりしたことはないようだったが、それでも連日毎号のように画面や紙面を賑わして、それは今でもそこまで収まっではない。

「なんなら、抱かれない男ランキング一位にもなってたろ？　なのに、なんて言ったと思う？　アタシはよくよく覚えてんだが……」

「な、なんと言われたんですか……？」

ルキノの問い返しに、ヴィータは沈痛な顔で答えた。

「まあ、立派な勲章とそれなりに派手な戦歴だからな、期待するのも無理はないと思うが……。だがそれでも結局、見てくれが良い訳ではないし、性格だつて好かれるタイプじゃない。こんな評価はすぐに間違いだど気付くだろう」つて……」

ヴィータが、その小さな手で顔を覆った。

「見てくれがよくねえとか生まれてこの方お前鏡見た事ねえのかよお
おおお……。あといいい加減何人にも惚れられてんの気づけよお
おおお……！」

慟哭を上げるヴィータは、なにやら苦勞をしてそうな気がする。

「……話を戻すが、アイツはだからそんな奴でな。自分の執務室、密室だ、そこに手伝いに来たとかいう女を何の警戒もなしに入れちまったんだよ。考えられるか？　どう見ても下心全開に決まってるじゃねえかそんなの」

「ま、まあそうですね……」

普通なら自意識過剰とするべきかもしれないが、なにせ高町恭也の人気は並ではない。頷いたスバルの前、ヴィータは深い溜息を吐いた。

「それで案の定、泣き落としに転んだふり、誤解を受けそうな角度から

写真を撮るのコンボも序の口、あの手この手で脅しやがって、最悪な事にキョーヤの弱みまで突つきまくった、……くそ、腹立ってきた」

ヴィータの眉根には盛大に皺が寄っている。

「それで、どうなったんですか？」

ティアナが問うと、ヴィータは少し遠い目をした。

「それでな、本当にあと一步、マジで危ねえってところでは、フェイト、はやての三人が入った」

「……う」

思わず呻いてしまったスバルだが、今朝の食堂の様子を見ていた他のスタッフ達も同じような様子だった。

それはもしかして、その女はもう。

誰もがその続きを口に出さずに押し黙る。

「結論から言やあ、その女は一応生きちゃいる。生きちゃいるが、記憶は無くしてる。封印処理をされた」

「え、でも、記憶の封印処理なんてよっぽどの重罪人にしか……ひどい事をしたとは思いますが、さすがにあれをされるほどかと言うと」

アルトの問いに、ヴィータは首を振った。

「そうだな、これがアイツを聖人扱いしているベルカ自治領区でやらかした事なら本当に死刑すらありうるが、管理局内なら高官とは言え、結局一局員への犯罪行為だ。刑罰として封印処理がされるほどじゃねえ。……つまりあの女は、自分で申請したんだよ」

「え？　じ、自分で？　でも封印処理って……」

目を丸くしているアルトの言葉をヴィータは継いだ。

「ああ、そうだ。あれはそんな便利なもんじゃねえ。何月何日の記憶だけ、なんてなあ出来ない。管理局内で起きた出来事の記憶を封印しようとするや、管理局そのもの、局員だったら働いていた時の記憶全部丸ごと封印する事になる」

「……なのに、したんですか？」

やや震える声で問うたティアナに、ヴィータは頷いた。

「若いがそれなりの年数働いていた奴だったみたいなんだがな、それでも封印処理を選んだ。いいか、——そいつはそうしなきゃならん

ほどの目に遭ったんだ」

ようやくと、スバルはどうしてヴィータがこの話をしたのか、そしてどうして自分たちをこうして集めたのかを理解した。

「お前らがあの女と同じような事をするとは思わねえよ。それを疑っているわけじゃねえ。だが、わかつてほしいんだ。ちよつとした出来心で粉掛けるには、キョーヤはあまりにリスクが高え。リターンもちろんでけえが、おすすめは出来ねえ。お前らがもし、まあリントはちよつと違うしキャロはもちろんだが、それ以外のここにいない女どもと真正面からやり合う覚悟があるんなら、アタシは止めないがな」

リントとキャロを除いたここにいない女、と言うとそれは。

高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、八神はやて、リインフォー、シグナム、シヤマル。

「ちなみにリインとシグナムはな、後から話を聞いて速攻でその女を挽き肉にしに行こうとしやがった。アタシとザフィーラが死ぬ気で止めなきやあ、ミッドチルダの人口が一人減ってた可能性は十分にあつた」

「ひえ……」

その光景を想像してしまったのか、ルキノの口から悲鳴が漏れていた。

「シヤ、シヤマル先生は！ シヤマル先生はでも、そんな……」

さすがのようなアルトを、ヴィータは無慈悲に切り捨てる。

「ハッ、シヤマル？ アタシは一番アイツが性質悪いと思うね」

「と、と言いますと……？」

「……その女性局員ね、今は管理局を辞めただけじゃなく遠く離れた出身世界に帰ってるんだけど、そこまで追い詰めたのはシヤマル先生なのよ」

聞き返したルキノに答えたのはシャーリーだった。

「シヤマル先生、社交的だし、直接診てもらった人も多いしで、結構局内に強いネットワークを持ってるんだけど、それをフル活用して嘘にならない範囲でその女性局員の所業を流しまくって、とてもじゃないけど居られないくらいの空気を意図的に……」

「なのはとフェイト、はやては精神的に潰しにかかったし、シグナムとリインは物理的に壊しに行こうとしたが、アイツは社会的に殺しにいきやがった。ニコニコした顔で言ってたよ、”管理局関連に再就職しようとしても無駄よ、たどえ貴女が記憶を失っていても周りは覚えてるもの。管理局お膝元のミッドチルダには、もう貴女の居場所はないものと思いなさい”、って」

「う、うわ……」

エグい。なんて苛烈なやり口だろうか。容赦というものが全く感じられない。

「キョーヤは、まあ、うん、その、いい男だ。す、少なくともアタシはアイツ以上の男は知らねえ。あ、言うなよこんなこと！」

少し赤い顔で言ったヴィータに、全員揃って首を振る。グラーフアイゼンの錆にはなりたくない。

「キョーヤがどうしても欲しいってんなら、あの女どもと矛を交える気骨があるんなら、いいよもう、存分に攻めろ。だけど、さっきも言ったがちよつとした出来心ってんならやめろ。あの魔人どもと向こうを張るのはそれなりに危ねえ。肝に銘じろよ、くれぐれもだ。……以上、解散！」

そう言つて、ヴィータはさっさと部屋を出て行ってしまった。苦笑しながらシャーリーが、「部屋を閉めるから皆出てくださーい」と声を張る。

「……なんか、すごい話だったねティア」

「そうね……。まあ一つわかったのは、多分特導官って誰か特定の相手がいるわけじゃないって事ね」

「あ、そっか……」

ティアナに言われて気付く。確かに誰か特定の相手がいるのなら、ヴィータの言い様はおかしい。覚悟があろうがなかろうが、それなら存分に攻めろなんて言わないはずだ。

(エリオとキャロにはちよつと残念な報告だなあ)

どうやって伝えようかと考えながら、スバルは廊下に行く。

何はともあれ、明日である。

明日、特導官がやってくるのだ。
高町恭也がやってくるのだ。

第26話 どうか気楽に構えて頂けると助かります

「皆さんおはようございます。今日も1日、頑張っていきましょう。……って、いつもやったらこれくらいで終わらせるんやけど、今日はちよつと事情がちやいます。ま、みなさまご承知やろうから今更もつたいぶる事でもないけども」

朝礼の場、集まった隊員たちの前ではやては少しおどけたようにそう言った。しかし、前に居並ぶ面々の表情は硬い。

(緊張しとるなー)

どうかこの空気はなるべく早めが変わってほしいとは思うが、仕方のないことかとも思う。

今、朝礼台の上で自分の隣に並んでいる人は自分たちからすれば昔馴染みの男性だが、一般的には生きる伝説なのだ。

「さて、以前よりお話してきました通り、本日5月17日をもって正式に、高町恭也特別教導官がこの機動六課へ戦技顧問として就任されます。私がこれ以上話しててもしやーないんで、それでは高町特導官、よろしくお願いします」

礼をしてから斜め後ろへ下がり、はやては場所を空けた。

そこへ立つのは、黒地に青のラインがあしらえられた、管理局では一人しか着るもののない制服を身に纏った男性。

「ご紹介にあずかりました、この度この古代遺物管理部機動六課へ戦技顧問として就任させて頂きます、特別教導官の高町です」

いつ聞いても凜々しくて甘い声が、ピンと張り詰めた部屋に響く。

「……それなりに派手な前歴と、不当に高い地位を頂いているので難しいかもしれませんが、どうか気楽に構えて頂けると助かります」

少しだけまゆをハの字にして恭也はそんな事を言うが、やはり隊員達の表情は硬い。

管理局の最高戦力の一つ、最強の単体戦闘能力保持者の前で初めから気を抜いて構える阿呆など、少なくともはやての集めたメンバーの中にはいない。

苦笑を一つ落としてから、恭也は続けた。

「自分の立ち位置というのは少々特殊でして、残念ながら皆さんと一緒に任務を果たすということは基本的には出来ません。自分に許されているのは、前線に立つメンバー達に教導を行う事だけです」

恭也の言葉に驚きを示すものはいない。この話は既に、はやてがしてある事ではあるのだ。

それは、恭也が前線に出てその剣を振るってくれるなら、事態解決には一番早い。言ってしまうえばこの前の列車ジャック事件など、誇張でも何でも無く恭也があの場合に入っていたなら、事態は計三秒未満で解決していただろう。

だが、それでは駄目なのだ。

結局、恭也の肩に重みを載せ続ける事になる。その結果が何を招くかは半年ほど前、これ以上ないくらい痛みとともに思い知った。

ゆえに、恭也の仕事はその力を他の局員に伝える教導がメインである。特別武力制圧官であった頃とは、もう違う。

ただし、六課の仕事で前線に立つ事はほぼほぼないだろうが、前線に立つ事自体が完全に零になるわけではない。今までとは桁違いに頻度は減るが、それでも次元世界の各地から呼び出しを受け、緊急事態の起こった現場に入る事は彼の職務に含まれている。

魅月の修繕が完全に終われば、いつ呼び出しがかかってもおかしくない状態にはなる。

これは本人の希望でもあり、それなりに精神が回復してきた状態で戦場へ赴く回数が完全に零であり続けるのは、変化が大きすぎてそれはそれで好ましくないというシヤマルの苦い顔での診断でもあり、特武官に今まで大きく頼っていた管理本局からの要請……懇願でもある。

戦技顧問として就いた部隊に対し教導隊のものとは違った特別な教導を行いつつ、次元世界各地からの呼び出しにも備える。

それが、特別教導官の現在の職務である。

「特別教導官の教導は通常とは少し毛色が異なり、教導を行う側にある実力を持つ局員に対して教導を行う事も含みます。つまり、この機動六課に就任している百戦錬磨の隊長陣に、恐れ多くも指導を付けさ

せて頂くという事です」

(しゃべり口が朴訥なだけで、こういうことさらつと言えるんやから恭也さんて別にスピーチ苦手なわけやないよなあ)

本人は自信がないらしいが、偉そうな上から目線で言えば十分に及第点である。

「手空きの時には皆さん、様子を見に来て頂けると隊長陣の勇ましい姿が見られますのでよろしいかと思えます」

(あと、怖いから確認してないんやけど、それ私もやらなあかんのかな……)

その昔、何度か今の隊長陣にクロノやユーノを足した面子で模擬戦をした事があるが、恭也を向こうにしたときの恐怖は未だに心に刻まれている。攻性とは言え自分はやはり後方支援者で、前でバチバチやるには向いていないのだと思ひ知らされたものだ。

フェイトやシグナムなどは恭也に教導をつけてもらうことにウキウキしているが、はやてとしては怖いからもう嫌だというのが正直なところではある。

「自分と訓練を行う際に限り、隊長陣のリミッターは無制限に解除されます。なかなかの迫力で、見応えはあるかと」

教導時に限った被教導者の無制限リミッター解除は恭也が強く要望を出したもので、元特武官が抑止力として居るのならこれを認めないとは言えないと、本局からはオーケーが出た。

しかし隊長陣のランクを知っている隊員達はさすがにと言うべきか、少々ざわつく。六課の敷地は大丈夫なのか、クレーターが出来るんじゃないのか、そんな思いが顔に出ている。

そのためにいくら壊しても再生可能なあの陸戦用空間シユミレータは作つてあるようなところもあるので大丈夫だとは思うが、なのはあたりが本気でやらかしたら正直おじやんにはなるわけで、くれぐれも気をつけてくれとは言つてある。

無論はやてが全力を出せば同じ事にはなるので、もし自分が教導を付けられることになったらやはり気をつけなければならない。

部隊ランク制限については、なかなか本当に頭が痛い話ではある。

なのは、フェイト、はやてがSS、リインフォースがS、シグナムがS、ヴィータがAAA+、ロングアーチ所属とは言えシヤマルもAA+を保持し、リンツもA+で一般的にはエースランクだ。ザフィーラは部隊所属ではなくはやての固有戦力という事で積算されていないが、焼け石に水といえれば焼け石に水。

もう完全に部隊ランク保有規定はぶっちぎっているわけで、リミッター制限を掛けているとは言えこれはどうなんだと言われたら「いやあ……はい……」としか言えない。ただ、恭也を擁している事で聖王教会の後ろ盾がもはや半端ではないレベルで構えられているので、正面切つて文句をつけられる心配はあまりないと言えはなのだが。

ちなみに恭也のSSSランクだが、こちらは直接六課の任務には従事しないという事で勘定からは外されている。

「それから、自分が教導をつけるのは何も隊長陣だけと限定しているわけではありません。状況を見て、フォワード陣にも出来たらと考えています」

どうやらそれは知らされていなかったのか、フォワード四人の顔が驚愕に揺れた。まあ、それはそうだろうと思う。

「その辺りは高町教導官……身内が同じ隊にいると少しややこしいですね、なのはの事です。彼女と相談しつつ、決めていきたいと思っています。あまり長々と話す上官は嫌われると、八神部隊長からありがたい訓示を頂いておりますのでこの辺で。これから、どうかよろしくお願致します」

それは相当階級に比してあまりに腰の低い締め方だったが、彼の性格を思えば仕方ないのだろう。頭を下げた恭也へ、隊員たちがピシッと背を伸ばしたまま大きな拍手を贈る。

色々あるがとにかくまずはどうか、隊員たちが恭也に慣れ、この六課が彼にとって居心地のいい場所となって欲しい。隊員たちと同じく手を叩きながら、はやてはそんな風に祈った。

「あち、あちらに見えますのがですね、その、ええと、第二！ 第二整備場でして」

「ほう。では、このヘリが置いてあったところが第一整備場？」

「は、はい！ 第二は基本的にもっと細々した機械の整備をするところですよ！」

「なるほど」

（ああああああ胃が痛え……！ こんな任務を受けるなんて聞いてねえっすよシグナム姐さん！）

今まで生きてきた中で三指に入る緊張感に、機動六課ヘリパイロット、ヴァイス・グランセニツク陸曹の胃はギリギリと悲鳴を上げている。その内うまいもん食わせてやるから勘弁してくれと自分の内臓をなだめながら、なんとか操縦桿を握り続ける。

今、コクピットシートに座るヴァイスの後ろにはあの元特武官が立っていて、眼下の景色やこちらの手元の操縦桿などを眺めている。

部隊長じきじきご指名の、ヘリを使った六課施設のご説明。六課の敷地上を飛ぶ機体の中には自分と生きた伝説だけである。

”高町恭也”と二人きりで空の旅。

それは羨ましいと言う奴なんて山ほど、掃いて捨てるほどいるだろう。だが、ヴァイスとしては勘弁してくれという感じであった。

（管理局最高戦力だぞ……？ そんな人載せて運ぶ上等なパイロットじゃねえっつんだよ！）

ヘリの操縦にはそれなりの自信を持つてはいるし、そこら辺のやつに負けるつもりもないがしかし、今乗せている人物の重要性と自分の腕が釣り合っているとはさすがに微塵も思わない。

こういう重要人物を運ぶというのは、局員の中でもエリート中のエリートパイロットが担当するべき仕事である。

分不相応だという思いが肩に乗り、緊張が回りすぎて、逆にヴァイスの操縦は滑らかだった。

「ん、あれはクラナガンか？ 方角的に」

「え、ええ、これくらいの高さまで上がると背のあるビルなんかは見えますね」

「そんなに遠くないんだな。ここらへんはそれなりに長閑だから、少し意外だ」

「田舎と都会の中間くらいでしょうか、住み良いところだと思います」
機動六課の隊舎は、首都クラナガンと同じくミッドチルダ中央区画にある。近郊とは言えそこまで近いわけではないが、ある程度まで高く飛ばせば見えてはくるし、なんだったらオフシフトであれば遊びに行けるくらいの距離ではある。

「そうだな。海も近いし、いい場所だ。こんなところを抑えるとは、はやてはやり手だな」

管理局二等陸佐、ヴァイスから見ればずいぶんなお偉いさんであるところの八神部隊長を名前で自然に呼び捨てである。

「どうやら昔馴染みという話はやはり本当らしい。」

（というか、この人って八神部隊長よりも余裕でお偉いさんなんだよな……）

意味がわからんくらいに、というのがヴァイスから見た彼の地位である。

少将相当。

それが特別教導官、高町恭也の地位だ。

もともと特別武力制圧官であった頃から既に一佐相当の権限を有しており、そこからさらに二階級上がっているわけだが、これは勲章の副賞のようなものらしい。

管理局では勲章を授与されると一階級、二階級、例は非常に少ないが三階級の特進が得られる場合があるが、彼に与えられた勲章は最高位のものが二つである。

ニュースや噂で聞いたが、元特武官にして次に特導官に就くその人物の相当階級をどうしようかというのは結構揉めた話らしい。

最高位の勲章、それも二つを同時授与なのだから当然これはもう三階級特進だろうという声もそれなりにあったらしいが、そうなるは一佐相当だった元々から三つ上がれば准将、少将を超えて中将相当である。

いきなり中将相当というのはさすがに無茶だ、地上本部における事

実上のトップであるレジアス・ゲイズとすら並んでしまう。

一階級というのと、しかしそれはそれで明らかに不足している。最高位の勲章を二つ同時に得て特進一つだけというのは、いかにも恩賞の前例としてはよろしくなさすぎる。

というわけで、協議の結果、高町恭也の権限は二つ上がって少将相当に落ち着いたらしい。

これはあくまで相当であって、正式な少将と同質の権限や責任、義務を有しているわけではない。正式に少将であったのなら現場で直々に教導をつけたり、あまつさえ単独で極限状態の現場へ飛び込むなどという職務に任ずることはまずありえない。

彼のそれは命令系統における高さの話だ。つまり、管理局内で彼に命令を下せる者は以前にもまして、いよいよ非常に限られるというわけである。

(しかし少将相当って……つまり将官相当……)

将官なんて、ヴァイスのような下士官が直接話す機会などほとんどないはずの存在である。

「グランセニック陸曹も、オフではクラナガンに出かけたりするのかわ？」

「いえ、自分は一応メインのヘリパイなのでなかなかまとまった休みは取れなくて……六課も稼働したばかりでありますし。ですがそろそろそのうち、バイクでも飛ばしていければと思っております」

であるのになぜか今、普通に世間話を交わしている。

「バイクに乗るのか、いいな」

「……特導官も、お乗りに？」

「ああ。出身世界のメーカー製のものをこちら仕様で改造してもらってな、仕事が忙しくなってきたからはあまり乗れてはいなかったんだが、最近また少し跨ってやれるようになったんだ」

「出身世界のチューンもの！ いいですねえ！」

「持ってきてあるぞ、乗ってみるか？」

「いいんですか!? いやーたのし……ああすみません！」

軽快な会話の途中、我に返って運転に支障のない範囲で頭を下げ

る。

(思わず乗っちゃったがこんな軽々しく会話していい人じゃなかった！)

相手は管理局最強の男、将官相当のお偉いさん、刻むように胸中で繰り返す。昨日、部隊長のはやてには敬遠しないでほしいと頼まれはしたものの、それでもやはりその言葉通りに振る舞うのは難しい。

寛容な人だとは聞いているが、ヴァイスとしてはまだ会ったばかり。よく知らない、そして物理的にも社会的にも自分の首を簡単に飛ばせる相手に対して自然体で居続けるほどの豪胆さはない。

そんなこちらに、当の恭也は苦笑を落とした。

「そんなに堅くならないでくれ。……というか、普通に話してくれると嬉しい。気軽に話せる同性がいるかいないかというのは結構死活問題だろうか？」

「そ、それはそうですね」

「ザフィーラ以外、六課にいる俺の親しい人間は皆、女性でな」

妹である高町なのはに、弟子のフェイト・テスタロッサ・ハラオウン、そしてザフィーラを除いた八神一家。確かに女性揃いだ。さらに言うなら美女揃いである。

羨ましいといえれば羨ましいが、確かに親しい男がいないというのはなかなか厳しいだろう。

「ええと、では、その、じ、自分で良ければその、善処してみます！」

「ありがとう。それではさっそく、ちよつと頼みがあるんだが」

「え？ は、はい、なんででしょう」

ちらりと振り返ったヴァイスの視界、恭也はじいっとこちらの操縦桿を見ていた。

「これ、操縦させてもらえないか？」

「……え、ええと」

まさかの申し出に、ヴァイスは思わず固まる。冗談、ではないのだろうか。

「一応、ライセンスは持っている。C級だが」

「え、お持ちなんですか？」

「ああ、管理局に入りたての頃に取ったんだ。ついでに言うと、一応このシリーズのヘリなら任務中に運転したこともある。型はこれより古いだろうが」

ヴァイスが今操っているこの機体は六課の虎の子、最新鋭の輸送ヘリなのでまだあまり出回ってはいないだろうが、定番シリーズではあるのでこの一つ二つ前の型のものなら管理世界のそこら中で見かける。ライセンス持ちの局員が任務で乗るというのも珍しい話ではない。

「へええ、でもこのクラスですとC級ライセンスでは飛べるところはかなり限られているのでは？」

「それがなんというか、俺がこういうものに乗るときは航空法もへったくれもない場所と状況が常でな。前に乗ったのは確か……そうだな、山岳地帯に現れて街を襲っていた特級危険種を討伐した後だったな。大量の魔石が危険種の影響で活性化して有毒ガスを発生しかけていて、処理できるところまで運ばなくてはならなかったんだが近場の基地は全壊しているし動けるものも他にいないしで、仕方ないからそこら辺に転がっていたハードランディングして半分壊れかけたようなヘリに魔石を詰めて乗り込んで飛ばしたんだ」

「……そ、それはなんというか」

さすがと言うべきだろうか、さらりと意味のわからないエピソードがまろび出てきた。

「施設まで飛べることは飛べたんだが着陸が出来なさそうでな、結局最後はヘリから飛び降りて機体を受け止める事になった」

「ワイルド過ぎますって」

思わず素で突っ込んでしまった。機体を受け止めるってなんだ。

「そんなわけで、一応経験はある。久しぶりにやってみたいんだが、駄目か？」

「ええと、管理局の施設上空でしたらこのクラスでもC級ライセンスで飛ばすことは出来ますので、じゃあ……ストームレイダー、一旦オートモードだ」

『all right』

へりを運転したい気持ちはヴァイスにもよくわかる。へりの管制を任せているデバイスのストームレイダーに指示、一旦操縦を全自動に変えてもらい、その間に恭也と位置を入れ替えた。

「よし、と。ストームレイダー」

『Ok』

一声で長い付き合いの相棒はわかってくれる。ヴァイスの意図した通り、機体はまたマニュアルモードに戻った。

「うん、やはり操縦自体はあまり変わらないな」

恭也はそう言つて操縦桿をさばき、危なげなくへりを制御していく。操縦の腕は本当に、なんも問題もなさそうだった。

「しかしレスポンスがいいな……キビキビ動く」

「この図体でこの動きは破格ですよねえ」

「だな。これはいい」

ブオンブオンと左右に大胆に機体が振れる。恭也の言う通り、その動きは実に機敏だ。さすが、お高いだけはあるモデルである。

「そう言えば、どこも壊れていない機体を操縦するのはもしかしたら教習以来かもしれん」

「……ええと、特武官の任務つて、本当にハードだったんですね」

「それなりにな」

恭也は穏やかに笑つて、そう言う。

それは、どこか深さを感じさせる笑みだった。

(特武官としての任務の連続で心身を持ち崩したつて話だし、あんまこつちから触れちゃいけねえか……)

無神経だったかと、ヴァイスは話を変える事にした。

「特導官は、やはりなのはさんと同じく機械にもお詳しいんですか？」

こうしてへりも運転出来ますし」

「いや、全然だ。こういう身体を使った、いわゆる『操縦』だったらそれなりに得意なんだが……なんというか、情報端末やら、そつち方面になるとこれがからきしでな」

「そうなんですか」

「これからああいうものを操作して書類仕事をしていかねばならない

かと思うと、最高に気分が重い」

「あー……自分もわかります」

「ご多分にもれず、ヴァイスもデスクワークをするよりも手を動かしていたいクチである。」

「わかつてくれるか。書類を十枚仕上げられるくらいなら真竜と喧嘩をしていた方が気楽だとはやてには言ったんだが、聞き入れてもらえなかった」

残念ながらそれには全く共感出来ない。やはり元特武官、価値観は完全に常人の枠から飛び出ている。

「……ん、あれはなのはか」

「え、ああ、ですね」

海上に拡張する形で作られた陸戦用空間シミュレータ、その端末を海沿いのポートに立って何やらいじる高町なのは教導官の姿が下方に見えた。

「よし」

「……いやいやいや特導官、ちよつとつ」

へりは一気に急降下、地面スレスレとは言わないものかなり余裕のない高度でもって飛行、

「特導官！ からかうにしてはやり方が少々ワイルドで！ そして相手が悪いかと！」

「そうか？」

なんと、なのはの周りをグルグルと回り始めた。

「なあに、妹をからかうのは兄の義務なんだ」

大真面目な顔で恭也はそう言うものの、相手はあの無敵のエアーストブエースだ。間違ってもヴァイスには出来ない。

無闇矢鱈に厳しい人ではないが、決して甘くはない。締めるべきところはきつちり締める。それがヴァイスの見る限りの高町なのはある。

『……ちよつとヴァイス君！ ヴァイス陸曹！ 何を考えているの！
こんな危険な飛行っ、大事な機体で！』

案の定、可愛らしいが凜々しい声音でお叱りの音声通信が入ってき

た。

「あ、いえ、その……」

「まったく苛烈な上官だな、妹よ。可哀想に、グランセニック陸曹が怯えている。もう少し優しく言えんのか」

しかしさすがは特導官、恭也はしれつとした顔と声でそんな風に返す。

『……おにいちゃん!? あ、そっかヴァイス君に六課施設の案内を……てことはまさかこれっ、おにいちゃんが操縦してるの!?!』

「違う違う、風でヘリが勝手に」

『そんなわけないでしょこんな機動! はやてちゃんとかリインフォースさんがちよつと風起こしてるんならともかく!』

この最新鋭のそれなりに大きなクラスのヘリがこんなグルグル振り回されるくらいの風を、どうやらはやてやリインフォースは”ちよつと”で起こせるらしい。ヘリパイロットとしては恐ろしい話だった。

『もうっ、おにいちゃんこら! やめなさい! もし墜落したらおにいちゃんのポケットマネーで新しいの買ってもらうからね!』

「いいぞ、十台くらいでいいか?」

『言ったね!? ヴァイス君も聞いたね!? それ高いんだよ!』

「かまわん、墜落したらな。グランセニック陸曹、ちなみに幾らくらいだ?」

「ええと……」

カタログを見た時に覚えていた値段を告げると、恭也は「ああ、大丈夫だな」と軽く言った。

(あ、そうかあれだけ危険な任務を受け続けたら手当はえらい事になるのか……この人幾ら持つてんだろう……)

管理局の任務では、危険や負担の大きさに応じて特別手当が支給される。大きくなればなるほど額は跳ね上がっていくと言っている。特武官の受けていた数々はその極地と言えるだろうものばかりだったろうから、相当のものになったはずだ。

それをあんな数受けていれば、なるほどおそらく洒落にならないく

らしい貯蓄があるのだろう。

「ううん、欲しくなってきたな。一台プライベート用に買うか」

『プライベートに軍用輸送ヘリを使うタイミングがどこであるの……』

「お前の送り迎えに最適じゃないか。機体に”特級危険物を載せています”と描けば煽られることもない」

『妹を特級危険物扱いなんてどういう了見!?!』

びよいんぴよいんとなのはが跳ねながら、恭也へ抗議を叫ぶ。

(……つか、あんなのはさん初めて見るな)

いつも凜々しくどこか泰然としている無敵のエースオブエースが、しかし今はからかわれてむくれ、歳相応の女の子に見える。

からかう恭也は大真面目な顔に、よくよく見ればほんの少しの笑みを載せていて。

(……仲いいんだなあ)

そんな光景はヴァイスにとって、……妹と距離をとってしまっている兄にとって、羨ましく映る。

「それじゃあな、仕事に励めよ教導官」

『特導官こそ！ 真面目に職務を全うされてください!』

「善処しよう」

そう言つて、恭也はおちよくなるような旋回をやめて機体の高度を上げた。なのはとの通信も切れる。

「……ご兄妹、仲がいいようで羨ましいです」

「すまん、付き合わせて。あいつをからかうのは俺の数少ない趣味の一つでな。人生の楽しみと言ってもいい」

恭也はどこか、自分自身に呆れたように苦笑しながらそう零す。

「いえ、わかります」

「もしかして、グランセニック陸曹にも兄妹が?」

「ええ、妹がおります。……ついついからかいたくなるお気持ちは、正直よくよくわかります」

兄というのはどうしてだろう、そういう生き物なのだ。

「そうか、うん、やはりそうだよなあ」

頷くその人、生きる伝説の顔を見て思う。

自分と同じ、どうしようもなく妹が可愛いらしいその人の顔を見て思う。

（俺、多分この人と結構仲良くなれる気がする）

緊張に悲鳴を上げていたはずのヴァイスの胃は、今はもう穏やかだった。

「任務開始時のサンプルデータは揃ってるな？ 非常事態発生時のコード一覧は……うん、あるな。……すまない、ロングアーチの基本機能紹介用の資料をもう一度表示してもらっていいか、……噛まないようにしないと」

「……グリフィスくん、そんなに緊張しなくても」

機動六課作戦司令室ロングアーチ。

通信スタッフが勢揃いしたその場所で、モニター前を落ち着かない様子でウロウロとする指揮官補佐のグリフィス・ロウラン准尉に、通信主任のシャーリーはそう言って苦笑を向けた。

砕けた口調は、幼馴染みという気安さ故だ。

「う、す、すまない……頼りない上官で……」

「そんな事はないけどさ」

実際、幼馴染みの鼻根目を抜いてもグリフィスは年若いが実に優秀な局員だ。内勤キャリアとして異例の昇進スピードで駆け上がったいるが、母親であるレティ・ロウラン提督の鼻根だなどと揶揄する方が馬鹿を見るくらいには、彼は高い実力を備えている。

「……ううん、浮ついていると自覚はあるんだが、どうにも」

ただ、今は言葉通り少し浮足立ってしまったっているようだ。

シャーリーの隣、彼と仲の良いルキノ・リリエが穏やかに微笑む。

「グリフィス准尉、特導官のファンですからね」

「ルキノ、……それは特導官にはお伝えしないでくれよ」

グリフィスは恥ずかし気に顔を片手で覆った。

「恭也さんって、女性人気もすごいですけど男の人の支持も厚いよね。厚いというか熱いというか。グリフィスくんもご多分にもれず、なんだね」

「ま、まあな……。内勤の僕が言うのも変かもしれないが、やはりあの強さには男として憧れるものがある」

シャーリーの問いに、グリフィスからはそんな答えが返ってくる。「まさか同じ隊で働ける日が来るとは思っていなかった……。ところで、シャーリーは面識があるんだよね？ 恭也さんとお呼びしているくらいだし」

「うん。私は元々フェイトさんの副官だから、その繋がりで。恭也さんのデバイスの修復もお手伝いさせて頂いてるし」

恭也のデバイス、魅月の修復をメインで担当しているのは本局第四技術部主任のマリエル・アテンザ技官だが、シャーリーもそれなりに手伝わせてもらっている。

「なんというかその、シャーリーの眼から見て人柄的にはどういう方なんだ？ そういう話は全然流れてこないものだから……」

「あー、実際まともに話した事がある人って結構限られてるもんねえ」なにせ特武官は常に一人で任務を受け続けていたわけで、隊に所属していた事は一度もない。加えてランクがランクなので気軽に話しかけられる存在でもない。

よって、高町恭也の人柄、という誰もが気になるだろう情報は色々なメディアが血眼になって求めているものですらある。

「とても穏やかで頼れる方だよ。傍にいと無条件でなんか安心してちゃうというか」

「朝礼で拝見した限りでは、すごく風格がありましたよね。達人、って感じの」

通信スタッフの一人、アルト・クラエツタがそんな風に評する通り、いかにも武道のマスターらしい隙の無さと芯の強靭さが彼には漂う。「でも威圧感はなく……正直、戦歴やランクからすると意外でした。失礼ながら、もっとこう、ピリつとされた方がと」

続いたルキノの言葉と同じような感想は、隊のあちらこちらで聞い

たものだ。無理もないことなんだろう。

「全然。怒鳴り散らしたりとか、そういうのとは対極におられる方だよ。穏やかで真面目で誠実で、ちよっとお茶目かな」

「そ、そうなのか？ 八神部隊長もそのような事をおっしゃっていたが……」

「そうそう」

笑いながら、シャーリーはグリフィスに頷く。

「フェイトさんなんか、結構いじられているというか」

あれはなんというか、傍目で見ている実に幸せそうな光景だ。特にフェイトの方は彼に構ってもらえるのが本当に嬉しそうで、ああそういうことかとすぐに彼女の気持ちは察せたものだ。

聞いてみれば小さな頃から片想いしているそうで、それは見るからに今もなお続いている。

(……勝算は十分にあると思うんだけどなあ)

周りに手強いライバルは確かにたくさんいるだろうが、並ぶものとはかく、恭也との相性においてフェイトを凌ぐほどの女性がいるとはシャーリーには思えない。

恭也の方は常軌を逸するレベルで鈍いようなので、あとはもうフェイトが最後の一步を踏み込むかどうかの話な気もする。

(でもフェイトさん、そこら辺はちよつと臆病みたいだから……あれだけ惚れちゃつてると無理もないのかもしれないけど)

もし、この想いが叶わなかったら。

恋愛の常であるそんな怯えがフェイトの足を縛っているわけだろうが、おそらく一般的なものよりも彼女のそれは硬く重い。

一番親しいなどとはもちろん言わないが、それでも副官としてそれなりの付き合いをさせてもらっているシャーリーの眼から見ても、フェイトの恭也への想いというのは、もう明らかに尋常ではない。

元から彼女がそういう性質を有していたからか、それともそうさせるくらいの魅力が彼にあったからか、それはどちらなのかはわからない、あるいは両方なのかもしれないが、とにかくあの愛情は尋常ではないのだ。

その深さも熱さも大きさも限りがないのではと思わされるくらいのものであり、つまり逆に言えばそれを失った時、彼女がどうなってしまうのかシャーリーには正直予想が着かない。

予想が着かないというか、正確には考えたくない。

行き着くところまで行き着いてしまう可能性すら、あるような気さえる。

(……本当に、上手く行ってほしいなあ。恭也さんの好みってどうなんだろう。同性の眼からしたってフェイトさんってすごく女として魅力的だと思うんだけど。……ちよつとアレなところあるけど)アレなところは、あの半端じゃなく痛そうなデコピンをさされていつも嬉しそうにしている被虐趣味感溢るところ、そして少々ストーリーちつくなどころだ。

超大量の写真・動画コレクションの一端を見せられた時は正直ちよつと引いてしまったし、服の匂いを嗅ぐだけでその日どこで何をしていたのか大体わかるという対恭也限定の恐ろしい特技を一般的な恋愛あるあるみたいなノリで話し出した姿には比喩でなく背筋がゾクリとはした。

弟子でなかったらただのストーカー迷惑法違反者だというのが、彼女の親友であるところのシグナムの言だ。残念ながらシャーリーも、それには首を縦に振ってしまう。

一緒に鍛錬をしたときに恭也が身体を拭くのに使ったタオルを回収した後、彼女がそれをどうしているかというのはなかなか公にできない情報だし、それを聞いたときに”この人が法を護る執務官でいいのだろうか”と思ってしまうのは、悲しいかな事実だった。

しかしながらそれを差し引いても、なおフェイトは抜群に魅力的な女性だ。優しくして気配りで気遣いで思いやりがあつて献身的で包容力が凄まじくて、何より一途で。

あの”高町恭也”とだって、文句なしに釣り合うはずだ。

「やっぱりフェイトさんと仲いいんだ?」

「うん、すつごく。息がぴったりで、長年連れ添った老夫婦みたいだよ」

アルトの間に頷いて答える。まあ老夫婦というには、フェイトの反応が初々し過ぎるかもしれないが。

「……私、本当のことを言うと六課にこうして配属されるまで、高町特導官ってなのはさんとご結婚されてるものだと思ってた」

「あ、ルキノって勘違いしてたクチなんだ」

「うん……だ、だって戦闘スタイルがあれだけ違って顔も似てないし髪色も別々で、それで名字同じだったら普通、夫婦だと思っじやない」
シャーリーにルキノは少しいじけたように言った。それは確かに、仕方のない勘違いなんだろう。

「なのはさんと恭也さん、すっごく仲いいしねえ。フェイトさんと恭也さんが円熟した老夫婦なら、あっちは万年新婚夫婦って感じ」

「たしか同じ部屋に住むんだったな？ 異性の兄妹が同じ部屋に住むというのは、なのはさんたちの出身世界では普通のことなのか？」

「うーん、そんな感じかな」

グリフィスにそう曖昧に答えたものの、実際は違う。

あの二人が同じ部屋に住むことにはひどく重い、そうしなければならぬ理由が恭也の側にあるのだ。

半年ほど前の彼の状態を思えば、それは当然とすべきなのだろう。

「やっぱり女性関係、ちよつと気になっちゃうなあ。八神部隊長とも仲いい感じだし、ラインフォースさんなんか昨日すごかったよね、スバルたちに語ってる姿」

「ああー……あれはね」

アルトの言葉に苦笑。ラインフォースの熱心ぶりは、これは結構なものなのだ。

はやてにしたってどうやら脇から後ろから彼を支えているようだし、いろいろと邪推してしまう雰囲気がある。

「でもやっぱり私はシグナム副隊長が怪しいと思う！ なんか雰囲気かいて……」

「ほう、誰が怪しいと？」

アルトが声高くそう言ったときだった。ドアを開いて入ってきた

のはそのシグナム副隊長と、

「なかなか賑やかだな、チームワークは良さそうだ」

件の人、高町恭也特導官だった。

「しよ、職務中に失礼致しました!」

そう言いながらアルトは飛び上がり、ほぼほぼ同時にロングアーチ総員、すぐに立ち上がって敬礼を向ける。

「いやいや、いいんだ。力を抜く時に抜けるのは、それも立派な能力の一つだ」

さすがに張り詰めた空気に、しかし恭也は小さく笑ってそう言った。

「特導官は少し、規律に甘いところがあるかと」

「そうか? シグナム副隊長」

「ええ、締める所は締めねばなりません」

「ひえっ……」

シグナムの鋭い視線にアルトが震え上がる。

(シグナムさんはまた……)

シャーリーは思わず苦笑を零す。実際、シグナムはあれでかなり大らかな性質なのだ。だから、今の台詞はからかっているだけである。

「失礼しました! 雑談を許可しておりましたのは自分ですので、叱責は自分において致します!」

「……レティ提督から聞いていた通り生真面目だ。少しくロノに似ているかもな」

エスコート役のシグナムを後ろに下がらせて、恭也はグリフィスの前に立った。

「本日付で機動六課に戦技顧問として配属になった高町恭也だ。君がロウラン准尉だな?」

「はいっ! 管理局准陸尉、機動六課交替部隊責任者及び部隊長補佐のグリフィス・ロウランでありますっ!」

「うん、よろしく頼む。はやてを支えてやってくれ、あの子は上手に無理をするから心配なんだ」

そう言っつて、恭也はグリフィスに右手を差し出した。

「は、はいっ！」

それを両手で握り返すグリフィスの仕草は、実に緊張でガチガチだった。いつも優秀にそつなく仕事をこなす幼馴染みの珍しい姿に、なんだか微笑ましい気持ちになる。

グリフィスと手を離れた恭也から促され、ロングアーチ総員、敬礼を解いて席に座り直す。

「さて、早速だが特導官にロングアーチの説明を頼む。シャーリー、準備は出来ているな？」

「はい、もちろん」

シグナムに返しつつ、端末を操作。まずは六課内での位置づけからだ。資料を表示しようとして、

「くれぐれも機械を壊すなよ、美由希」

「シャーリーですって！」

上から降ってきた恭也の言葉に思わず脱力してしまった。

「いやいや、……いやいや。どう見てもうちのバカ弟子にしか見えん」「特導官！ このやりとりは過去にもう何度も！」

「そうだったか？ いやあすまん、あんまり似ているものだから会う度にきちんと確認せねばならないと思ってしまっただけ」

仰ぎ見る恭也の顔は大真面目だが、あれは確実にこちらをからかっている顔だ。こんなところは本当にシグナムとそっくりである。

「え、ええと、高町特導官、シャーリー……失礼しました、シャリオ一等陸士が何か……？」

「いや、すまんすまん。うちの妹とよく似ているんだ、遠目だと見分けがつかんくらいにな」

グリフィスに少し笑って、恭也はそう答える。

「妹さん、ですか。確かなのはさんの他にもう一人……」

「そうだ。なのはの姉で、フェイトの姉弟子だ。まあ弟子と言っても、もう皆伝をして今では立派に正統流派の頭首だが」

「特導官と同じく、恐ろしく剣の腕の立つ方だ。魔導師ではないが戦闘能力で言えば生身で陸戦AAくらいはあるだろうな。うちのフォワードのひよっこどもでは、四人でかかってもまず相手にならない

だろう猛者だ」

「そ、それは、なんとというか……」

恭也に続けたシグナムの言葉に、思わずと言ったようにグリフィスが固まった。しかしこれは冗談や誇張ではなくまぎれもない事実であるという事を、シャーリーはフェイトから聞いてよくよく知っている。

「あいつは機械の扱いが致命的に下手でな、だからシャーリーがああして達者に端末やらを操っているのを見ると少々めまいがする」

「そろそろ慣れて頂けると……」

「頑張ってみよう」

苦笑のシャーリーに、恭也はやはり大真面目な顔で言った。

「……ね、案外お茶目な人でしょ」

改めて資料の準備をしながら、シャーリーは隣のアルトとルキノに小声で話しかける。

「う、うん、びっくりした」

「なんか、結構フランクっていうか……」

「そうそう、だから二人とも、固くならないで話しかけてみるといいと思うよ」

特にお調子者のアルトが慣れれば、他の隊員もおそらく後に続くだろう。そうなればいいと思う。

シャーリーも隊長陣と同様、恭也がこの六課で気楽に過ごせる事を願っているのだ。

「で、ではご説明させて頂きます！」

「ああ、頼む」

(一番固くなってるのはグリフィスくんかなあ……)

同性であることだし、どうにか慣れてほしいなと思うばかりである。

「みんな、ウォーミングアップ終わったね。それじゃあちよつと整列

！」

「「「はいっ！」」」

教導官であるなのはの言葉に、ティアナ達フォワードメンバー四人はすぐさま従った。森林訓練場内の開けた空間、彼女の前に揃って並ぶ。

「うん。それでね、今日はちよつと特別メニユーにしたいと思います」

「と、特別メニユーですか……」

「あんだスバル、嫌そうだな？」

「い、いえー！」

特別メニユーという恐ろしげな言葉に呻いたスバルへ、ヴィータの三白眼が飛ぶ。相変わらず苛烈な教官だ。うかつな事を言わなくてよかつたとティアナは内息を吐く。

「特別メニユーですから、いつものように私やヴィータ教官が教えるというわけではありません。はい、そろそろ予想は着いたかな？」

笑顔のなのはの言葉通り、ティアナの脳にはもしかしたらこれかもしれないという考えがちらついている。

「……その、まさか、ええと、………特導官がいらつしやる、とか？」

「正解ー！」

問うてみると、可愛らしい笑みでそんな答えが返ってきてしまい、崩れ落ちるのをなんとか堪えた。

嘘だろう。

「ほら、もうあそこ」

なのはが指を指す先、こちらへと続く道の向こうに人影が二つ見える。目を凝らしてみるとそれは、世にもお似合いな金髪の美女と黒髪の美男。

ライトニング分隊長のフェイトと、六課戦技顧問・高町恭也特導官だ。

「今日は高町特導官に、直接みんなの実力をみてもらいます。一人ずつ模擬戦ね」

一瞬で視界がぐらりと揺れる。貧血で倒れるかと思った。

告げられたまさかのメニユーを脳が理解して、顔に血の気は残って

いない。

「う、うわあ……も、模擬戦だつて！ とくぶ……特導官と模擬戦だつて！ ティ、ティア、どうしよう……！」

「ど……どうしようもこうしようも、ないわよ。……やるならやるしかないわ」

精々、ティアナはそう言い切る。

なにをわめこうが、結局自分たちに拒否権など無い。ペーパーの陸士の身で次元世界の英雄と直接やり合うなんて本当に意味がわからないが、とにかく決まっていることらしいので仕方ない。

「恭也さんと、模擬戦……！」

「がんばらなきや……！」

エリオとキャロのちびっ子二人組みはしつかり覚悟を決めたらしい。本当に大したものだと思う。

そして、やがてフェイトを伴ってその人がやってきた。

(ほ、本物だ……)

朝礼のときももちろん見たが、あの時よりもはるかに距離が近い。まさに目の前である。

鋭い目つきのよく映える端正な顔つき、神秘的な黒の髪と瞳、すらりとしたスタイルのいい体つきは引き締まって洗練されているのがよくわかる。

立ち姿に、付け入れそうな隙は微塵もない。

ティアナの眼前に今、次元世界の英雄、四連勲章の高町恭也がいた。特別教導官の黒地に青ラインの制服が、吹いた風に少し揺れている。

その眼がこちらを射抜いた気がして、心臓がどきりと跳ねた。

(……色気の塊って、誇張じゃなかったのね)

説明は出来ないが、とにかくすごい。

これが上官でなかったら、今が訓練中でなかったら。

あの瞳に馬鹿みたいに惹きこまれていただろうというのが、ティアナの素直な気持ちだった。思わず生唾を飲みこみかける。

(い、色気づいてる場合じゃないわ！ しつかり挨拶しないと！)

フォワードメンバー全員、背筋を伸ばして敬礼で迎える。

「待たせてすまない」

(うう……朝礼のときも思ったけど声が甘い！)

至近距離では喰らわないように注意しようと心に決めた。これで女に対して無防備だということだから、それはヴィータも顔を覆おうというものだ。

あらゆる意味で危なすぎる。

「本日付で機動六課に戦技顧問として配属になった高町恭也だ、よろしく頼む」

「二「よろしくお願い致しますー!」」

揃って返すと、恭也はその端正な顔をなのはへ向けた。

「……局員というのは皆、しっかりしているんだな。こんなにびしつと挨拶をして」

「特導官、特導官ももう局員五年目なんですからいい加減に慣れてください」

「ううん、そのキャリアのほとんどもを隊に所属せず過ごしてきたからなあ」

なんだかずいぶんとフランクな口調で、特導官はなのはに言う。

「お前に畏まった口調で特導官と呼ばれるのも死ぬほど違和感がある。いつもどおり気軽に兄上でいいんだぞ」

「兄上なんて呼んだこと私の人生で一度もないよ! つあ、うう……しまった乗せられた……調子が狂う……」

悔しそうな顔でなのはが呻いた。あの無敵のエースオブエースが、である。

新鮮どころではない光景だった。

「特導官、フォワードメンバーが置いてけぼりなので、そのへんで」「ああ、そうだったな。すまん」

苦笑のフェイトに促され、改めてと言った風に恭也がこちらを向いた。

「顔と名前は一致させてきたつもりだが、一応、自己紹介を頼めるか?」

「二「は、はいー!」」

揃って返事、順番は考える必要はないだろう。普通に並び順だ。

「フロントフォワード、スバル・ナカジマ二等陸士であります！」

「……なるほど」

「……え、ええと、特導官？」

びしっと挨拶をしたスバルを、しかしなぜか恭也はじいっと見つめていて。

「なるほどなあ……」

「特導官、特導官、違うんです。……おにいちゃん、違うの」

「違うんです、本当に違うんです、恭也さん」

「いやいや、お前らこれは……」

そう言って恭也は呆れたような表情でなのは、フェイトの方を一旦振り返り、またスバルへ視線を向ける。

そして、スバルの肩にぽんと手を置いて言った。

「巻島館長はお元気が、晶」

「……ど、どなたでしようか？」

あつけにとられたような表情を見る限りスバルの頭上にも、そしてティアナの頭上にもハテナマークが盛大に踊る。

「おにいちゃん違うんだって！ 私も改めて見たときは驚いたけど！」

「恭也さん！ 本当に別人なんです！ どうみても晶さんなんですけどー！」

「いやいや、いやいやいや……お前らな、美由りーもそうだがなんなんだ、六課には高町家枠があるのか？」

「偶然なんだよ！ はやてちゃんを含めて偶然！」

「あと恭也さん！ 美由希さんとシャーリーが混ざってます！」

わちやわちやと盛り上がる上官陣の様子に、ティアナはスバルと顔を見合わせる。お互い、どうやらまったく状況を把握していない。

「エリオ、これなんの話かわかる？」

「ええと、恭也さんとなのはさんのご家族にスバルさんとすごく似た方がいらっしやるらしくて、たぶんその事かと……」

「ああ、そういう……」

隣のエリオに聞いてみると、苦笑しながらの答えが返ってきた。

「晶さんっていう方でフェイトさんとも仲がいいみたいで、写真を見せてもらったことがあるんですけど、確かに言われてみればスバルさんにそっくりだった気が」

「ええ、ちよつと気になる……」

当のスバルが当惑した顔でそう言った。まあ、それはそうだろう。

「なのは、お前がかーさんとお前の一人二役をやれば六課で擬似高町家が完成してしまうんだぞ」

「た、たしかに……つてもう！ おにいちゃん、話が進まないから！」

「わかったわかった。すまなかつたなナカジマ二等陸士」

「……い、いえ！」

表情を改めた恭也に恐らく一瞬見惚れた後、スバルは返事をした。

「君の頑丈さはヴィータ副隊長からよく聞いている。フロントが維持する戦線は、戦いにおいては生命線と等しい。励んでくれ」

「はい！」

スバルの返事に頷いて、恭也は今度はティアナの方を向いた。

(う、……いやいやちゃんと挨拶！)

馬鹿になりそうになる頭に喝を入れ、ティアナは背筋を伸ばした。

「センサーガード、ティアナ・ランスター二等陸士であります！」

「ランスター二等陸士、君は確か射撃手だったな」

「はい、前の部隊でもシューターを担当しておりました」

「そうか……なにか適当なものはないだろうか、………ああ、これでいいか」

(ご)そご)そと懐を探って、やがて恭也は何かしらのコインを一枚出した。

「よく見ている」

「は、はい……っ!?!」

(……は、はあ?! 魔法使っていないのよね?!)

右左、右左。右左右左右左右左右左右左右左右左右左右。

恭也の手から手へと超高速でコインが往復している。受け止める手の位置や角度はその都度違って、およそ常人に出来る手さばきでは

ない。

魔力反応はみじんもない。ということは、驚異的なことにこれは生身の芸当だ。

「め、目が回るー……！」

「だ、駄目です、もうなにがなんだか……」

スバルとキャラコが早々にリタイア、ふらふらとしている。

「……つと」

ピタ、と。乱舞していた手が止まった。右手も左手も握りしめられている。

「コインはどっちだ？ ランスター二等陸士」

「え、ええと……」

目に焼き付けた光景を手繰っていく。エリオは見えたろうかと隣を伺うと、彼は小声で「最後で見失った……」と悔しそうにこぼしていた。

(……シューターは眼が命。よし、……ここは自分を信じましょう)

結局、自分の中の結論は妙なものだだったが、そう見えたのだから仕方がない。ティアナは正直に口を開いた。

「……右手です、フェイトさんの」

驚いたような顔で他のフォワードメンバー三人がこちらを見てくるが、とにかくティアナには最後、恭也の後ろへと控えるフェイトの方へ冗談みたいに滑らかに飛んで、その手に収まった銀色の塊が見えたような気がしたのだ。

「……正解だ、引つ掛からなかったな」

恭也は少し、いたずらに笑って言った。その後ろでフェイトが彼女らしい優しい微笑みを浮かべながら右手を開く。

その中には確かに、件のコインが輝いていた。

恭也はどっちだとは聞いたが、”自分の手の”どっちだとは明言しなかった。なかなか意地悪な引つ掛けではある。

「今の、昔漫画で読んだ事が……あ、その後おにいちゃんに頼んだんだっけ」

「そうだ。お前がこれをやってと俺と美由希にねだってきたんだ。昔

から漫画を読んでは技をねだる無茶ぶりな妹だった」

「う、ご、ごめんなさい……だって大体やつてくれるからついつい……龍巻閃とかすごかった」

「あれは結構有用な技だな」

フェイトが兄妹の会話に苦笑しながら「恭也さん、飛天御剣流の技、大体出来ますもんね」とティアナたちにはよくわからない事を言った。

「話が逸れたな。いい眼をしている、ランスター二等陸士。君がフォードリーダーだったな？」

「は、はい。一応はそのような……」

「そうか、なら安心だ」

安心、とは一体どういう意味なんだろう。把握しきれていないティアナの肩をぽんと叩いて、恭也は隣のエリオへと視線を向けた。

それを受けて、精一杯だろう背筋を伸ばしてエリオは名乗る。

「ガードウイング、エリオ・モンディアル三等陸士であります！」

「ああ、……久しぶりだな、エリオ」

「はっ、はい！」

恭也は片膝を折ってエリオと目線を合わせた。

「すまなかつたな、あまり会いに行けないで。……忙しかった、というのは言い訳としては最低だ」

「いえっ、そんな！ 本当にお忙しかったんだってフェイトさんからもお聞きしましたし、勲章の時に公開された戦歴とかを見ると……あの……」

エリオは表情を曇らせて言う。

「恭也さん、お身体は……」

「大丈夫だ、前にくれた通信越しにも言ったろう。俺は結構頑丈なんだ」

恭也はそう返し、エリオの頭を少し乱暴に撫でる。それはまるで、本当の父親のような仕草に見えた。

「ところで、エリオのバリアジャケット姿を見るのはこれが初めてだな。なかなか似合っているじゃないか」

「あ、ありがとうございます！ フェイトさんと少し、お揃いなんです！」

「そのようだな。うん、様になっている」

「本当ですか！」

「ああ」

頷いた恭也に、エリオは彼には珍しい子供らしい笑みを見せた。心から慕っているのだからとわかる、自然な表情だった。

「エリオの適性やら戦闘スタイルは、フェイトやなのはに聞いてはいるがやはり実際に見てみないと」

「……全力を尽くします！」

「ああ、期待している……さて、こっちも久しぶりだ」

恭也は膝を折ったまま少し身体の向きを変え、視線を隣に移した。

「エリオと同じになるが、ちゃんと会いに行けなくて悪かったな。すまん、キャラ」

「いえ！ お忙しいのわかっていましたし、大丈夫です！ ……それに、その」

「うん、なんだ？」

「今日からは、た、……たくさん、会えるんですよね？」

「ああ」

キャラの淡い色合いの髪を、恭也の大きな手が撫でる。傷痕も多く硬そうなそれは、しかしキャラの表情を見る限り優しいらしい。

「あ、あ、すみません、フルバック！ キャロ・ル・ルシエ三等陸士であります！ こっちはフリードリヒです！」

今更というようにキャラがそんな名乗りを上げる。傍に控えていた白竜のフリードも小さく嘶いた。

「ああ。サポートが専門のようだが、キャラとも今日はやってみようと思う、いいな？」

「はい！」

「フリードも、よろしく頼む」

今は小さい姿なのでどこかコミカルに、フリードが頭を振って恭也の言葉に応えた。

「……あ、そ、そうでした！ あの、恭也さん！」
「どうした？」

立ち上がりかけた恭也が、キャラロの言葉で動きを止めた。キャラロは申し訳なきようにそのまゆをハの字にして、彼を見つめている。

「あ、あの……私、恭也さんに謝らなければならぬことがありまして！」

「俺に、キャラロが？ 心当たりがないんだが……なんだ？」

「えと、恭也さんにだけじゃなくて、フェイトさんにもなんですけど、その、わ、私……」

なんだなんだ、何を言うつもりなんだとなんとなく注目してしまつて。

そして、その言葉は飛び出た。

「私！ 恭也さんとフェイトさんはてっきりお付き合いをされているんだと勘違いしてました！」

「キャ、キャラロ!？」

悲鳴にも近い叫びを上げたのは、もちろんフェイトだった。

「ご、ごめんなさい。本当に私、勘違いしていて……。それがどうも、そういうわけではないらしいという事をお聞きしまして……」

「あ、あの！ キャロだけじゃなくて！ その、僕も同じ勘違いをしてみました！ すみません！」

「それはまた随分な思い違いだ……」

恐縮しきりといった様子のキャラロとエリオに、恭也は困ったような表情だった。

「エ、エリオ、キャラロ、あ、あの、あの……」

狼狽しきりのフェイトは、手をわたわたと意味もなく宙で踊らせている。

「俺からすれば謝ってもらう事でもなんでもないんだが、エリオ、キャラロ、それが誤解だと今はわかっているんだよな？」

「は、はいー」

「ならいいんだ。それはちよつと、フェイトがあまりに哀れに過ぎる」「そんなことないです!!」

朱の差した顔でフェイトが叫んだ。それなりに混乱していそうだが、それでもそれは凄まじくはつきりとした言葉だった。

「そんな事、哀れだなんてそんな事絶対ないです！ 私ほつ、そんなつ……その……ええと……その……」

しかし彼女はそこから言い淀んでしまつて、そんな様子に恭也は苦笑する。

それを見て、ティアナにはピンと来てしまつた。

(……フェイトさんが言い淀んだ理由、勘違いしてるわよね、これ) どう見ても恥ずかしくて言葉に詰まつた様子だが、恭也は浮かべているその表情を見る限りそういう風にはおそらく、取っていないだろう。

「……ま、このように心優しい弟子なんだがな。それはエリオもキャラも知っているだろうが」

言いながら、彼は立ち上がった。

「もし他に同じような勘違いをしている人がいたら説明してやってくれ。俺たちはそれなりに古くからの友人で、師弟だ。これ以上なく大切に想つてはいるが、男女の仲では決してない」

「……——っ」

(うわあ……)

フェイトの表情に、ティアナは思わず胸中で呻いてしまう。声なき悲鳴とは、きつとああいうものを言うのだろう。彼女の顔はあまりに悲痛に染まっていた。

「でも、フェイトさん素敵です！ それでも駄目なんですか……?」

「キャラ、さつきも言つた通り、知つているとは思うが俺はフェイトとはそれなりに古い仲だ。彼女がどれくらい素敵な女性かなんてよくよくわかつている。……俺が今こうして生きているのは彼女の優しさのおかげと言つたつて、それは何も間違いじゃない」

ひどく真摯な語り口、その言葉はきつと彼の偽らざる本音なのだろう。

「キャラ、フェイトが駄目なんじゃないんだ。俺が駄目なんだよ。俺じゃ駄目なんだ。フェイトの相手が、俺で良いわけはないんだよ」

「お似合いだと思います、お二人はすごく！ 恭也さんすごく格好良くてつ、フェイトさんすごく綺麗でつ、お二人ともすごくすごく優しくてー！」

エリオの言葉に、やはり恭也の笑みは苦い。

「……最近、広い世の中には一人くらい、俺でいいと言ってくれる特別な女性がもしかしたらいるんじゃないかと思ったりもするんだがな、それでもそれがフェイトだと思うほどに俺は脳天気な夢想家じゃないぞ」

そう言いながら、恭也は改めて立ち上がった。

その後ろ、フェイトの顔は青くなったり赤くなったり非常に忙しい。

(ど、……どうなのかしら、これ)

フェイトの気持ちは、正直もうはつきり察せる。これで察せないというのは常軌を逸した鈍感人間だけだろう。

しかし、ここでフェイトが恭也にそんな事はないと、私は貴方が好きなんですと、面と向かって言えばいいのかというと、それはひどく微妙な話に思える。

脈が全然なさそうで、これ以上なくありそうというか。これ以上なくありそうで、しかし全然なさそうというか。

本当に俺でいいんだな？ といった風に受け入れられる可能性は大いにあるが同時に、君にはもっとふさわしい人がいるとあっさり首を横に振られる光景も自然に思い浮かべる事が出来てしまう。

微妙だ、ひどくこれは微妙だ。

「あのね、エリオ、キャロ」

と、そこへ口を挟んだのは今まで黙って状況を見ていたのはだった。

「おにいちゃんとフェイトちゃんはね、私から見てもすごく相性がいいよ。仲が良くて、お互いを気遣い合っていて、息はぴったり」

(お………？ ……これは)

部屋割りの事で何やらえげつない空気ですらで丁々発止のやりとりをしていた事が記憶に新しいが、しかしやはりそれでも幼馴染み、親友同

「な、なるほど……」

「そう、ですね……」

「ね、男女の仲っていうのはやっぱりちよつと難しいよね」
項垂れる二人に、頷くのは。

彼女のやり口は、静かで穏やかで自然に見えて、その実あまりに辛辣で、ひどく激甚だ。

表面の声音も言葉も柔らかだからこそ、その本気が伝わってくる。

「そういうことだよ、おにいちゃん」

「ううん、まあ、そういう事だろうかな」

恭也にもすっかり言葉にさせるその血も涙もない徹底ぶりにだろ
う、小さくスバルの口から「ひえ……」と悲鳴が漏れた。

芽生えそうな関係性を根本からむしり取るどころか、土壌ごと焦土
に変えんと言わんばかりの戦法にティアナも心の震えが止まらない。
(ブ、ブラコンなんだ……いや、ブラコンっていう範疇にはもうこれ
……)

心胆寒からしめるほどの激切さに、ブラコンという言葉はその語感
があまりに軽いような気もする。

『ティ、ティア……フェ、フェイトさんが、フェイトさんが……!』

『え? うひいっ!』

いつの間にか伏せていた顔をゆつくりと上げるフェイト・T・ハラ
オウンの瞳は、鮮烈に紅い色彩ながら致命的に闇の色をしていた。

まるで、どす黒い怒りに満ちた血で染め上げられているかのよう。

「……あははっ」

まさに笑面夜叉、彼女は表面上は明るく笑う。

怖い。

本能がこの場から逃げろと言っているが、身体は言うことを聞か
なかった。

「なんかやっぱりなのはすごく、恭也さんの事をわかってる感じだ
よね。うん、恭也さんの周りにいる人のなかでは、当たり前みたい
なのはが一番なのかなあ」

星のない夜を塗りこめたような瞳を笑みに隠して、彼女は歌うよう

に言葉を紡ぐ。

「さすがは『妹』だよ。うん、すごいなあ『妹』って。血の繋がりでやっぱ強いんだね、うんうん、『妹』はすごいよ。私も義妹で義兄がいるけどそこまでの域には達せていないなあ。実の兄妹はすごいねえ、『妹』さんは特別だ、『妹』ってすごい！」

(き、切り替えた……切り替えて、切り返した……！)

言葉の裏にある想いはあまりに明白。

”妹なんて論外の存在が、賢しらに口を出すな”

彼女は、そう言っているのだ。

「なんかたまに思うんだけどさ、もしなのはが恭也さんのお嫁さんになってもなったらそれこそびったりだよ………あつ、ごめん！ 変なこと言っちゃったねっ！」

浮かべられた本当に美しいその笑みは、しかしあまりに危険な色をしている。

「なのはが恭也さんのお嫁さんなんて、そんな事、絶対にありえないのにね！」

壮麗だからこそその劇毒を内に秘める、それは金色に彩られた美麗で刺だらけの花だ。

「いやあごめんごめん、本当に変な事を言っちゃった。妹がお嫁さんとか、そんなの絶対ながあつてもありえないですよ、恭也さん」
「それはさすがにな。当然だ、ありえん。……まあ、なんだ、よくよく出来た妹だからボンクラな兄貴としては助かるんだが、こいつもそのうち嫁に行く」

「……………」

静かに。

怯えも揺れもせず、フェイトに視線を向けるなのはの姿は煌々と煮立つマグマを連想させた。

二大怪獣大激突 in ミッドチルダ中央区である。

頼むからもつと人里離れた場所でやって欲しかった。

『な、だから言ったろ、うかつにキョーヤに手を出すなって』

『ヴィ、ヴィータ副隊長……！ ぐ、ご忠告ありがとうございます』

！』

『本当にツ、本当にありがとうございましたッ！』

達観したような顔で念話を飛ばしてきたヴィータへ、スバルに続けてティアナは深い感謝を返した。

なんて優しい人なんだろうか、苛烈だなんて思っていたのが恥ずかしい。この人は本当に自分たちの身を案じてくれていたのだ。

これからは六課に舞い降りた小さな大天使とお呼びしたい。

「特導官、なのは隊長、フェイト隊長、そろそろ訓練を始めた方がよろしいかと」

赤髪の天使がそう言うと、なのはとフェイトは恭也の後ろでぶっけあっていた視線をお互いに外す。

すぱっと戦いを鎮めた、さすがは天の御遣いである。卑賤な人の身には成し得ない事をいとも簡単に。

思わず膝を突いて崇めそうになった。

「おっと、そうだな」

おそらくそんなこんなになんて気づいていないらしい恭也は、ヴィータに頷く。

「うん、それでは始めるとするか」

「……はい！……」

その問いにフォワードメンバー全員、揃って返す。

色々あったが何にせ、これから今日の訓練本番である。精神的には既に大分摩擦してしまった感もあるが、気を引き締めなければならぬ。

なにせ、特導官と一对一の模擬戦だ。

あの、”高町恭也”と一对一である。

(……やってやるわよ)

よし、よし、よしやるぞと。思い出した緊張で竦みそうになる心を叱咤する。

怯えている暇なんてない、自分は、証明するのだ。

兄の遺した、ランスターの弾丸の価値を。

「皆、準備はいいか？」

その問いにティアナ達四人が頷くと、それから恭也はなんとも不可思議な事を言った。

「そうか、俺もオーケーだ」

それは、本当に不思議で。

思わず呆気にとられてしまつて。

「え、あの、特導官？」

言葉が、口をつく。しまったと思うものの、途中で止めるのも気持ちが悪く、ついつい続けてしまう。

「……その、特導官はデバイスもバリアジャケットもないように見受けられるんですが」

デバイスはなくとも魔法は発動できるとはいえ、バリアジャケットもないというのは少々どころではなく問題ではないだろうか。

バリアジャケットなしの生身の身体というのは魔導師と相対したとき、あまりに脆弱だ。魔導師側にある程度以上の実力があれば基本的に、両者の間には戦闘と呼べる対等なものは発生し得ない。一方的な作業に終わってしまう。

一応、ひよつこの自分たちだつてそのある程度以上の実力くらいは兼ね備えているという自負はあつて。

「それに、武器もないようで……素手の生身というのは、その……」
「ん、ああ」

だから、”悪い、そうだったな”と、そんな言葉が返ってくるものとティアナは当たり前に信じていて。

「これでいいかと思うんだが。デバイスもまあ、魔法は使わんからな」
それはあまりに。

あまりにその彼の口調が自然だったからか。

「……っ」

そして、自分がやつぱりあまりに馬鹿みたいに子どもだからか。

「ティ、ティア？」

「……失礼ながら」

ついさつきまでなのはやフェイトの雰囲気には怯えていたくせに、ティアナの頭はもう煮立っていた。スバルの声を振りきつて言う。

「失礼ながら、……特導官からしてみれば自分たちなど問題にもならない戦力かもしれませんが……虫けらのような存在かもしれないが」

コンプレックスで卑屈になっている自覚はある。あるけれど、なかなかこれが、止められるものでもなく。

「さすがに、得物もバリアジャケットも、あまつさえ魔法もなしに相手をされるほど問題外ではないつもりです！ 虫けらにだって、それくらい力はあります！ お強い特導官には私たちみたいな人間のことなんておわかりにならないかもしれないですがっ」

そこまで言つて、ようやくティアナはその人の表情に気がついた。

「……………そうだな」

「あ、…………その」

一見、なんでもなさそうなその顔の中、瞳がたしかに揺れている。驚くほどに、はつきりと。

「すまなかった」

清廉な口調の、それは謝罪。彼はそれから、小さく深呼吸をしたように見えた。まるで、乱れた息を整えるように。

いや、それはもしかすると、”まるで”ではなくて。

こんな自分なんかの言葉で彼みたいな人物が揺れるだなんて、ありえないはずなのに。

「すまん、…………そうだな、君たちからすれば侮辱に感じるだろう。悪かった。俺が悪いな、すまん」

「あ、や、その…………」

「…………我が儘なんだ、ただの」

自嘲の色で染まった顔で、彼は言う。

「デバイスは今、修復中だな。彼女以外を振るうつもりはないし、そもそも彼女がいなくてきに魔法を使うというのはどうもしつくりこなくてな、使えないわけではもちろんないんだが、それでも…………いや、我が儘だな」

浮かべた表情は笑みというべきものなのだろうが、格別に苦い。声もまた、暗く低く。

どうしよう。

そんな想いがティアナの頭をめぐる。

こんな顔をさせるつもりでも、こんな言葉をこんな声で言わせるつもりでもなかったのだ。

だったらどんなつもりだったのかと聞かれて、胸を張って口に出せる答えがあるわけではないのが始末に負えない。

ただ、思わずカツとなって、それで噛み付いてしまっただけで。

「魔法は必要と判断すればきちんと使おう。あとは……少なくとも、バリアジャケットは着ていないと君たちが思い切り攻撃も出来ないか。……すまない、少し待っていてくれ、構築するから。……これも魅月がないとどうにもな、遅いんだ」

「あ、あの、特導官、その……」

「恭也さん、そのまま動かないでください」

ティアナの言葉を遮り、そう言って恭也の傍に寄ったのはフェイトだった。言葉通り動きを止めた恭也に触れて、彼女は足元に陣を展開する。

「——set up」

四角いミッド式の魔法陣が一際強く輝いて、恭也の身を金色の輝きが覆う。

「む、……おお」

一瞬後にそれが消え去った時には、恭也が着込んでいたのは特導官制服ではなく、ティアナも映像で見たことのある漆黒に染まった彼のバリアジャケットだった。

少なくとも、外見はまったく同じに見える。

「なっ、え!?! た、他人のバリアジャケットを、展開って……」

スバルが驚愕の声を上げている。ティアナも声には出していないが同じような心境だ。

なんだ、今のは。

「もちろん私の魔力を使って私が作ったものだから、干渉とかの兼ね合いで元のものとは比べ物にならないくらい劣化した性能ではあるよ? さすがに、完璧に同じものは作れない」

「それでもフェイトさん、やっぱりすごいです……!」

「そんな事も出来るんですね……!」

スバルに説明を返したフェイトにエリオとキャロは関心しきりだが、ことは明らかにそんな単純なものではない。

他人にバリアジャケットを展開するという事自体は、原理的には不可能ではない。人を覆ってバリアやシールド、フィールドを張ることで、特に何か違いがあるわけではないからだ。

しかし実際やろうとすると、これはひどく難しい。

なにせバリアジャケットは身に纏え、そのままスムーズに動けるものでなければならぬ。覆う人間の体格、骨格、身体の可動域、肉の付き方諸々をかなり精度で把握していないといけないという事になる。

これが自分のものであるならほとんどの部分を無意識に頼ることができるし、なんなら少し違和感があつたらその都度それに従って修正することが出来る。ゆえに、そう大変ではない。

が、これが他人となれば話は全く別だ。無意識なんて頼れないし、自分で違和感を覚る事も出来ないから修正も難しい。

それなのに。

「いかがですか、何か気になる場所は？」

「いや、なにもない。うん、いい着心地だ。ありがとう、助かった」

恭也の言葉が完全に本音かどうかはわからないが、それでも身体を動かすその姿に違和感は覚えている様子はまるでない。

そんな、馬鹿な。そんなの、完全に異常だ。

自分以外の人間の肉体を文字通り、頭のとっぺんからつまさきまで把握し切っていないといけないわけであり、それはどう考えても普通ではない。

「悪いなフェイト、面倒をかけて」

「いえいえ、私としてはむしろありがとうございますと言いますか……」

恭也の礼に、フェイトはそんな事を言った。傍から見ているティアナ同様後半の意味がわからなかったようで、恭也はやや首を捻る。

「なぜ君の方が礼を……」

「い、いえ、なんでもないんです！」

「そうか？　しかしエリオやキャロじゃないが、フェイトはこんな事も出来るんだな。人のバリアジャケツトを展開なんて……わりと一般的な技術なのか？　得意魔法以外の事はよく知らなくて恥ずかしいんだが」

「ええと……ちよつと他の人はあまりやろうとしないかもしれないですね。私も、その……恭也さん以外には出来ません」

フェイトははにかんでそう返す。可愛らしいと言わなければならないが、正直に言っただけ怖い。

「そうなのか？　相性でもあるのか？」

「……そのようなものです」

「そうか。まあなんにせ、とにかく助かった。ありがたく使わせてもらおうよ」

「はいっ………とここで」

恭也へ笑顔を見せていたフェイトが、身体ごとティアナの方を向いた。

その表情は、一見笑顔のままのようであり。

「ねえティアナ、なんだか元気のいいことを言ってたね」

「え、あ……」

しかし明らかに、眼だけは笑っていない。

「あ、え、えと、あ、あの……し、失礼しました！」

立場的に雲の上、将官相当の上官に対して、先ほどのティアナの言動はまさか許されるものではない。

「うん、そうだよね、ちよつと失礼だったよね」

だから、この叱責は受けてももちろん当然なのだ。背筋を伸ばす。

「フェイト、いいんだ。あれは俺が」

「いえ、ほんのちよつとですから」

恭也の言葉を笑顔で制して、フェイトはまたティアナを見る。

「恭也さんはこんな方だし、なにも畏まって話せなんて言わないよ。むしろ、恭也さんも気楽に話してくれると喜ぶとは思うの。勝手だけ

ど私も、そうしていつて欲しいと願ってる。でもね、それでも守らなきゃいけない部分、言うべきじゃない言葉っていうのはあるよね？」

「は、はい……！」

「うん、気をつけてね——」

『次はないよ』

「……っ！」

最後のその一言だけは、個人間の念話で飛んできた。

暗い湖の底の底から這い出たように冷たくて、丹念に磨き上げられ鈍い輝きを月夜に誇る刃のように鋭い。

そんな、声音だった。

『……は、いー！』

なんとか返しながら、ティアナの右手は思わず自分の左胸に伸びていた。手を当てて、奥の鼓動を確認する。

バクバクと、普段よりも強くそれは感じられて。

次いで、身体を見回す。どこにも異常はない。

胸の上に当てていた手を動かして、首周りをなぞる。大丈夫、繋がってる。

斬り落とされては、いない。

ああ、……生きている。その事実にかが抜けそうになる。

だって、馬鹿みたいな心配だなんてわかってはいるけれど、死んだんじゃないかと思ったのだ。

血が凍るとは、きつとああいう事を言うのだろうか。

「ランスター二等陸士、顔色が……」

「い、いえ、大丈夫です！」

「……すまん。模擬戦は平気そうか？」

「はい、問題ありません！」

ティアナがそう返すと恭也は「……そうか」と頷き、森林の中に拓かれたそれなりに広い空間の、その中心に歩いて行った。

「それでは始めよう、誰からでもいいぞ」

彼のその言葉に、ティアナたちフォワードメンバーは顔を見合わせる。

さあ、誰から行くか。

「……さっきのティアじゃないけどさ、魔法はまず絶対使わせたいよね。だってそこからがようやくスタートでしょ！」

スバルが闘志を籠めた瞳でそう意気込む。

「そう、ですね！」

「そこからですよね！」

エリオとキャロも大きく頷いて、ティアナもそれに乗ろうと口を開き。

「お前ら、一つだけ教えといてやる」

そのタイミングで声を発したのはヴィータだった。

「お前らがあいつに魔法を使わせるつつーのをクリア大前提の小目標に据えてるみてえだからよ、参考までにその難易度を言っとくぞ」

「あ、はい」

代表のように返したティアナの瞳を見ながら、ヴィータはさらりと言った。

「アタシは昔、魔法を知らなかったあいつと戦って、見事にボコボコにされてる」

「「……は？」」

四人揃ってのその声に、ヴィータは構わず続ける。

「魔法を知らなかった、つつーのはこの場合、二つの意味合いがある。一つは、当然ながらあいつ自身が一切魔法を使わなかったという事。もう一つは、アタシの使う魔法についての知識が、対するあいつにはまるでなかったという事。バリアジャケット、アタシのだから騎士甲冑だが、その存在すらあいつは知らなかった」

ヴィータが言っている意味が、ティアナにはわからなかった。

多分、それはスバルもエリオもキャロも、つまりフォワードメンバー全員同じだろうと思う。

「そんな条件下でありながら、アタシは負けた。無様に意識を刈り取られた。……後から本人に聞いたところじゃあ、ぎりぎり綱渡りの勝負で圧勝だという意識は全くないか言ってたが、アタシの側からしてみれば惨敗以外の何物でもねえ。ちなみに当時、魔導師ランクなん

て測ってなかったからにはつきりとは言えねえが、まああの時のアタシと今のアタシに大して実力差はねえだろうよ」

「そ、……それは、つまり、生身で、ヴィータ副隊長とまともにやりあつて、だから、AAA+相当を、撃破したってことですか？」

「そうだ」

ティアナのつつかえつつかえの確認に、ヴィータは軽く頷く。

「さらに言っとくぞ、その後には今度はシグナムがあいつとやった。アタシとの連戦だな、どうなったと思う？」

「……うそ、ですよ？ まさか」

上ずった声でのスバルの問いに、ヴィータはいたって平然とした顔で答える。

「キョーヤ曰く、決着はつかなかった。シグナム曰く、あれが敗北以外の何だと言う、だよ。アタシは気絶してたから直接は見てねえがな」

「いやいや、え、いや、それは、近接戦、ですよ、つまり」

「そうだよ。キョーヤの領域でもあるが同時に、アタシらベルカ騎士の棲み家でもある近接での戦いだ」

問うたティアナに返したヴィータは、さらに続ける。

「あとな、魔法ありなら当然だが、同じ魔法なしで比べてもそのときのあいつよりも今のあいつは多分、何段か強くなってるはずだぞ。抱えてた身体の故障が直って、んで特武官としてアホみたいに実戦経験稼いだからな」

なんとすべき、なんだろうか。

本当なのだとしたらそれは、どう聞いても絶望的な情報だった。

(ていうか、じゃあさつき私が切った啖呵って馬鹿丸出しじゃない……)

言い訳をさせてもらえば、だつて普通思わないだろう、生身でそんなに強いだなんて。

本当に意味がわからない、なんなんだ、高町恭也つて。ティアナの頭はそんな想いで一杯だった。

「まー丸腰だから差し引きどうなるのかはわかんねえけど。さ、これ

を聞いた上で目標のおさらいをするしないっつーのは、お前らの勝手だ。頑張れよ」

ヴィータはここでにやりと笑って、そんな風に言った。

「……いい、ちげきー！ 一撃！ なんとか一撃入れよう！」

スバルが素早く切り替えて言った。ティアナもガクンガクンと頷く。

「そ、そうね一撃！ とにかくそれを目標にしましょう！」

「一撃だけならなんとかなるかもしれないし！」

「が、頑張りましたよう！」

エリオとキヤロもティアナに続いて、衝撃に揺れたままの顔で意気を上げる。

「ほほー、あたしは一撃も入れらんなかったぞ。ま、入ってたら今ここにキョーヤはいなかったかもしれない。しかしあれに一撃ねえ、頑張れ頑張れ」

すかさず飛んできたそんなヴィータの発言にまた萎縮しそうになるが、しかしまごまごとしていたって何にもならない。

やるならやらねばならないのだ。

「……馬鹿な啖呵を切っちゃった責任を取るわ。私から」

「ティア、私が行く」

ティアナを制して言ったのは、やはりと言うべきかスバルだった。

「一番に突っ込むのは、フロントフォワードの私の役割だよ。皆には、特にティアにはよく見て欲しいんだ。……せめて四人で誰か一人、一発入れるために」

「……スバル、でも」

「お願い、ティア。戦うのは一人ひとりだけど、私はチーム戦のつもりだよ。だから、お願い」

彼女の言い様は、理に適っている。未知極まりない敵と戦うにおいて、先陣を切るべき者に必要なのは何よりタフネスで、それを一番持っているのが誰かと言えば、そんなことは言うまでもない。

フォワードチーム全員で、誰かが一撃入れる事を目標とする。

ならば、行くべきはスバルの言う通り、彼女だろう。

(落ち着け、……スバルが正しいわ)

優先すべきは自分の意地かチームの合理か、それくらいの判断は間違えたくなかった。

「……………わかったわ、ごめん、お願い」

「任せて！」

パシンとこちらの肩を叩くスバルの顔は既に思い切っている。こうと決めたら脇目もふらず一直線、彼女はそういう女なのだ。

「頑張ってください、スバルさん！」

「私達もちゃんと、よく見てます！」

ティアナ、エリオ、キヤロに力強く笑みと頷きを残し、そしてスバルは恭也の待つ広場中央までマツハキヤリバーで駆けて行く。

対『伝説の元特武官』戦、フォワード陣にとってこの上ない試練が今、始まりを告げる。

第27話 ああいう人種がいるかいな

森林モードとなった六課陸戦シュミレーター内、拓けた空間で向かい合うのはスバル・ナカジマ二等陸士と高町恭也特導官。

脇で観戦するティアナの拳にも、どうしようもなく力が入る。

「お願いします！」

「一番手はナカジマ二等陸士か、うん、それじゃあ始めるぞ、いいか？」

「はいっ！」

「高町教導官、カウントを頼む」

二十メートルほど距離を置いたスバルを見つめながらの恭也の言葉に、ティアナたちとは少し離れた場所に立っているのがレイジングハートに指示を出す。

「了解しました。レイジングハート、お願い」

『all right. Count start, ……3, ……2』

空中にも数字を浮かべながらのレイジングハートのカウントが減っていく。スバルは腰を落として膝を曲げ、見るからに力を溜めている。

対する恭也は、一見ごく自然な、その実微塵の隙もない姿勢で立っている。

『……1, ……0. Battle start!』

そして、カウントダウンは終わり告げ、状況が始まる。

「うっおりゃああああああー！」

スバルは迷いなく飛び出した。

その方向はまっすぐ恭也へ向かうものでなく、斜めへの突進。ある程度まで行ったところで、今度は方向を転換する。

「ほう」

呟いて焦りもせず様子を眺める恭也の周りを、彼女はグルグルと円を描いて回り始めた。

円の半径はなめらかに、しかし着実にどんどん狭くなっていく。遠心力に逆らって加速していくスバルの身体には、高い運動エネルギーが宿る。

「だあああああああああああああッ！」

カートリッジが一発ロードされ、リボルバーナックルが空気を巻き込む高速回転を始めた。

恭也の右斜め後ろ、彼女が攻撃をしかけたのはその位置からだった。

左足の力強い踏み込みでスバルの身体はやや宙に浮く。のけぞるような姿勢から、肩の後ろへ回していた右拳を解き放ち相手を巻き込むような右フック。

エネルギーのノリの乗ったその一撃、まともに喰らえば装甲車だって無事では済むまい。

細かい制御に難があるだけで、パワーや突破力に関してなら彼女は本来Bランクになど甘んじている魔導師ではないだ。

殺人的な風切り音が響いて、

「……………え!？」

「スバルさん!？」

エリオとキャロから漏れたのは、悲鳴のような声だった。

「スバル!」

思わず、ティアナも叫んでしまう。

だって、どうしてこんな光景が広がっている？

ティアナ達の視線の先には、地面を猛烈な勢いで転がる人影。

「……………がっ! ぐ……………う」

「ス、スバル……………」

端の木に当たりようやく止まった彼女は、攻撃を仕掛けた側であるはずの、自分たちのチームメンバーだ。

「思い切りはよかったな」

平然と声を掛ける、黒衣に身を包んだその人、高町恭也は先ほどまでとほぼほぼ同じ位置に立っていて。

「……………あ、れ、……………あれ、あれ?」

「スバル、しっかりしなさい! スバル!」

ティアナは必死に遠間から声をかけるが、上半身を背中の樹木に預け地面に尻をついているスバルの眼の焦点は、明らかに合っていない

い。

「く、そ、あ、……れ？」

彼女はなんとかという風に立ち上がって、しかし、やはり転ぶ。

「あ、あの頑丈なスバルさんが……そんな……」

「エ、エリオくん、何があつたか見えた？ 私全然……」

キャラの問いに、苦い顔でエリオは首を振る。

「突っ込んだスバルさんの拳を、恭也さんが身体を逸らしながら半身になって躲したのまでは見えたんだけど……なんでスバルさんがあんな……」

「……信じたく、ないんだけど」

答えるように言うティアナに、二人の視線が集まる。

「……信じたくないんだけど、見たままを言うなら、………デコピンよ」

「「え？」」

「見なさい、スバルの額。赤いでしょ？」

「え、あ!？」

「ほ、本当です……!」

ようやく眼の焦点のあつてきたスバルの額には、不自然に赤みが付いている。

ティアナの眼に見えたのは、スバルの攻撃を躲しぎま、恭也が左手を雷光のような速度で伸ばし、その中指でもって彼女の額を叩く光景だった。

「でも、デコピン、つて……だつてスバルさん、バリアジャケットを着てるのに……」

「顔とか手とか、露出したところにも防護は発生するはず、なのになんでスバルさんは……」

エリオとキャラが不可解極まりないと言った顔で呟いて。

「……スバルのお姉さんが、聞いた噂として言っていた事なんだけどね」

ティアナは己の記憶の奥を漁って、それに答えた。

「御神流を向こうに回せば、防護の硬さに意味はない」……つて。

それなりに流れている話らしくて、でも正直私は都市伝説、みたいなものだと思ってただけだ」

しかし、もしかしたらそれは都市伝説などではなくて。

「何をどうやっているのか知らないけど、あの人を相手に防御は……少なくともバリアジャケットは本当に意味がないってこと……なのかもしれない。……意味がまったくわからないんだけど、もしかしたら」

「そ、そんな……」

「ま、魔法も使っていないのに……？ そんな事が……」

呆然とするエリオ、キャロだが気持ちはもちろんティアナも一緒だ。

「二人はフェイトさんから御神流のこと、なにか聞いてないの？」

「フェイトさん、僕たちがこういう戦いの分野に進むことをもともと勧めていなかったの……」

「なるほど……っ立ったわ、スバル」

身体の制御をなんとか取り戻したようで、スバルはその再び構えを作っている。

（ていうか、仮にバリアジャケットを無視できたとしてもただのデコピンでスバルがああなるのもおかしいわよね……？ いくらなんでも、だってデコピンよ……？ あんな脳が揺らされたみたいな有様になるなんて……）

スバル・ナカジマの身体は文字通り特別製であり、極めてタフだ。彼女がああなるなんて、ティアナの記憶にもなかなかない姿である。

「続けるか？」

追撃をかけるでもなく、立ち上がるスバルを眺めていた恭也はそう問うて、スバルは力強く返す。

「はい！ お願いしますー！」

彼女は大きく息を吸い、魔力を練り上げた。拳を地面に叩きつけながら、叫ぶ。

「ウイングロードー！」

叩かれた地面から、青い帯が空へと伸びる。スバルの先天的会得魔

法である、進行方向の空中へ道を造るウイングロードだ。

「おおおおおおおおおおおっ！」

マツハキヤリバーを唸らせ、造っていく帯の上を疾走。今度のスバルは恭也の周りを円ではなく半球を描くように走って行く。

相変わらず恭也は超然と構えているが、傍目で見ている限り先程の円状の加速よりもスバルの身体にはより力が乗っている感はある。受けたダメージよりも、入れ直した気合の方が優っているという事だろう。それはあるいは、不屈のエースオブエースに憧れる、タフネス娘の面目躍如か。

そして、円ではなく半球であるということはもう一つ、大きな利点がある。

「スバルさん、いった！」

「真上から！」

エリオに続けてキャロが言った通り、背後と並んで人間の死角である真上からの攻撃が可能だという事である。恭也の真後ろから加速した身体を急転直下させ、彼女は真下へと飛び込んでいく。

「おあああああああああああああああああッ！」

拳を肩の後ろへ大きく引いて、その咆哮は獣のよう。体全体が重く鋭く激しく熱い、今の彼女は一つの弾丸だ。

まさか魔法も何も使っていない生身の人間が、これを捌けるものか。

はたして恭也は、まともに上を見上げることすらしなかった。

(……………っ！)

全力で集中するティアナの目に、それはいくつかの写真のように写る。

上から迫るスバルに対し、拳の落下位置から逃れるように恭也は一步だけ横に身体を動かす。滑らかで、いつそゆったりとしたその動作は早すぎも遅すぎもしない絶妙なタイミング。

そして、彼の動きはそれで終わりではなかった。スバルが振りかぶった拳をいよいよ放とうとする、おそらくはその寸前だ。

閃いたのは、左の手。

ブレてしか見えないスピードで、それはスバルの顎を横から叩いた。

「……スバルさん!？」

「なんで!？」

その次の瞬間には、スバルは着地体勢をとることなく顔面から地面に突っ込み、何度かバウンドした後には動かなくなった。おそらく恭也の動きが見えなかったのだらうエリオとキャロの悲鳴は、落下の轟音の残響を切り裂くように上がった。

「ぐ、う……」

呻きを最後にスバルは完全に動きを停止、地面へ転がったまま起き上がらない。

バリアジャケットがあるから骨などは損傷していないだろうが、それでも意識は保てなかったようだ。

「なるほどな、うん」

恭也は相変わらずの平然とした顔のまま、一つ頷く。

魔法も使わずに魔導師を圧倒したその男の顔には、少しの揺れもない。当たり前前の事を当たり前前に為しただけ、そんな表情だ。

「……悪い夢、見てるみたい」

唾を飲み込んで、思わずティアナは呟いた。

六課フオワードの誇る突進力とタフネスの塊、スバル・ナカジマが本当に、魔法なしで簡単に制圧されるという現実が目前にあった。まさしく、こんなのは魔導師からしてみれば悪夢そのものだった。

「教官、頼む」

「はっ」

スバルの身体がふわりと宙に浮く。彼女の身体は淡くピンク色に輝いていて、その魔力光はなのものはものもの。

スバルはそのまま吸い寄せられるようになるのはの下へと移動し、丁寧に地面に横たえられた。

「さ、次は誰だ?」

恭也がこちらを眼で射抜きながら、そんな言葉を掛けてくる。

正直、現実としてその異常さを見せつけられた後のため、ティアナ

の身体はスバルが行く前よりも萎縮してしまっていたが、そうも言っていないだろう。

次が誰かなんてそんなの、考えるまでもないことなのだ。

スターズのスバルが行ったのだ。だったら、次は自分だろう。

(……なんとか、一矢報いるくらいはしてみせる！)

「……わたしがっ」

「僕が行きますー！」

ティアナの声を遮ったのは、それよりも大きな音量で張られたエリオの言葉だった。

「エリオ……？」

「すみません、ティアナさん。僕に行かせてください、……ティアナさんには、スバルさんも言っていましたでしたが、よく見ていて欲しいんです」
下からのまつすぐ伸びてくるエリオの視線は、強い。

「僕がどう戦ったのか、……僕がどうやられたのか。それを見ていて欲しいんです。チームが誰か一人でも、一発を入れるために」

「エリオ、あんた、でも、特導官にいいところ見せたいんじゃないの……？」

後からの方がもちろん戦いやすい。その権利を彼はこちらに譲ると言っているわけで、言葉を選ばずに言えばそれは捨て駒だ。

しかし、エリオは笑って首を横に降った。

「いいところは出来れば見せたいですけど……でも、僕が一番見てもらいたいののは、僕の全力なんです。だから、いいんです」

「……あんたは、本当に」

なんとも、出来たお子様だ。

「あのー！ ならエリオくんの次は私が行きますー！」

その小さな身体を精いっぱい右手と共に伸ばし、キャロは力の籠った顔で主張してくる。

「キャロ、あんたまで……」

「私が最後に残っても、フリードがいるとは言えあの距離で差し向かいじゃあどうしたって難しいです。だから、ティアナさんにお願いたいんです。私も、やれるだけやってなんとか役に立つ情報が得られ

るようにあがきますから！」

主に同意するように、フリードも「キュイイツ」と勇ましい鳴き声を上げた。

(……お子様のくせに、……ううん、私なんかよりしっかりしてるわ、やっぱり)

ここまで言われて突っぱねるのは、少なくともティアナには出来そうもなく、やりたくもない。

「……つもう！ わかったわよ！」

二人の頭を乱暴にぐしゃぐしゃとかき混ぜ、言う。

「しっかり見るわ、二人の頑張りに期待する。……任せときなさい。一発入れる役目はちゃんと私が果たすわ、だから」

資質に溢れる二人の前で、精々格好を付ける。凡人でも一応年上だ、それくらいの権利はあるはずだ。

「やりたいように思いつきりぶつけてきなさいな。憧れの人に、あんなたちの全力」

「……はい！」

二人の笑顔は眩しくて、ティアナにはどうにもまつすぐ見られなかった。

「特導官！ 次は自分が行きます！」

勇ましく言ってエリオは広場中央へ。駆け出すその身に纏ったコートがはためき、右手に携えたストラダーダは陽光に煌めく。

「お願いします！」

「ああ、じゃあ始めよう」

二人はスバルの時と同様、二十メートルほどの距離を置いて差し向かい、そこへレイジングハートのカウントがまた響く。

やはり3から始まったそれは、やがて0を告げる。

「……っ！」

エリオは、鋭く呼気を吐き出して飛び出した。まさに疾風のようなスピードだ。

その軌道は一直線である。円軌道で力を溜めたスバルと対照的、彼は最短距離を最速で駆け、槍の切っ先を恭也へと届かせんとする。

パワーで挑戦したスバルに対し、彼はスピードを最前面に押し出す事を選択したのだろう。

「ぜあッー！」

恭也の至近、足を踏み込んで腰を素早く回し、放たれたストラダーの突きは雷のように閃いて。

「……昔のフェイトとそっくりだな」

「な、えっ!？」

驚愕の声を漏らすエリオは、ストラダーを突き出した姿勢のまま固まっている。

「もう、なんていうかも……」

「あれを、避けて、あんな……」

ティアナとキャロも当然のように啞然としている。するしかない、だってこんなの意味がわからない。

エリオの放った高速の突きを鮮やかに、かつ無駄なく跳んで回避した恭也は、なんとその穂先の上に立っていた。

強化魔法も何も使っていないはずなのに、あれを見切つてあまつさえそんな。

本当に意味がわからず、ティアナは無意識、首を振っていた。

「ほら、ぼろっとするな」

「つぐ!？」

恭也のつま先が容赦なく、エリオの額へ襲いかかった。エリオはたまらずノックバツク、二、三歩たたらを踏む。

その瞳の焦点はスバル同様、少々怪しい。デコピンを喰らったスバルと同様の様子だ。

悠々と着地する特武官は、突き放すようではないが決して甘くもない、鋭い声音で問う。

「どうする、続けるか?」

「……はいー」

歯を食いしばったエリオは瞳の温度を下げず、その身に滾らせる身体強化魔法の出力を上げた。

「っー」

恭也へ踏み込み、突きを一発。あえなく躲されるが今度のそれはコンパクト、突き出された穂先は素早く引き戻される。

「りゃああああああああ!!」

そこから始まったのは連打に次ぐ連打。一撃の速度に賭けた先ほどと違い、今度は一発を打つ時間を短くする意味でスピードを活かしている。

「……ば、けもの」

しかし恭也の身体に、それらはかすりもしなかった。傍で眺めるティアナは思わずそう落とす。

身体をずらし、時折手で捌きながら、完全に躲しきっているその様に、危うさは微塵もない。

「……だあつ!」

さすがに焦ったのか、エリオのその一突きは速くはあったが振りが少々大きく。

「甘い」

「……あ」

狙われたのは腕が完全に伸ばされた瞬間だ。予知していたかのように槍を躲した恭也は、エリオの槍と腕が一瞬だけ硬直する肘の伸びきった時を狙い打ち、払うように下から拳をストラダーに当てる。

エリオの相棒が、持ち主の手を離れ宙を舞った。

「どこを見ている?」

「……うあああツ!」

ストラダーに意識を取られたエリオの身体を、恭也は容赦なく蹴り飛ばした。小柄な少年の肉体は後方へ大きく吹き飛ぶ。

「う……く……」

「……さて」

転がって呻くエリオを見下ろしながら、恭也は宙にあったストラダーを掴みとった。

「槍ではないが、うちに棒術の達人がいてな。俺も少しばかり教えてもらった事がある」

キュオンキュオンと、異様になめらかに振り回され、槍は鋭い唸り

を上げる。あれのどこが少しばかりだと、ティアナは心中で思わず突っ込みを入れた。

エリオが立ち上がるのを待って、踊らせていたストラードを鮮やかに止め、両手で握って穂先を前に、少し腰を落とした基本の構えを作る恭也。

「……つく」

エリオはそれに対し、身に滾らせる身体強化魔法の出力を上げ、見切らんとして。

「……え？」

ティアナは、思わずそう声を漏らした。

当のエリオは声さえ発せそうにない、呆気にとられにとられた顔をしている。

「これが速さだ、エリオ」

いつの間にか。本当に、それはいつの間にか。

エリオとの距離を詰め切っていた恭也は、少年の喉元に槍の穂先を突き付けていて。

「……ここで当ててしまうと、相棒との約束を破ることになってしま
うな」

言いながら、ゆっくりとそれを引く。

「……な、にが」

「ほれ」

ようやくとという風に呟いたエリオに、恭也はストラードを投げ返
し。

「……え、っだ!?!」

両手で掴んだエリオの、無防備になった額に超高速のデコピンを叩
き込んだ。

「終わりだとは、まだ言っていなかったぞ」

「……う、あ」

焦点を怪しくしたエリオは、耐え切れなかったようでそのまま地面
に崩れ落ちた。

「エ、エリオくん……! エリオくん! ティ、ティアナさん……さ、

さっきの、恭也さんの動き……」

「見えないスピードじゃ……なかったわ」

キャロへ答えた言葉は、嘘ではない。単純な速度で言うならおそらく、エリオの方が速いくらいのものだ。

「だけど、動き始めが全然読めなかった……」

いつの間にか走っていて、いつの間にか距離を詰め切っていて。

ティアナが認識できたのは、眼で捉えていた残像のようなものだ。恭也がエリオの喉元にストラダーダを突き付ける、その光景を見てから脳がそれまでに受け取っていた映像を巻き戻して示してきたような、そんな代物。

眼で追えない速度ではなかったはずなのに、リアルタイムではぼけつと見過ごしたに近い。動きの最初が掴めないと、こんなに意識から外れるものなのか。

それこそまるで、魔法のようだった。

「ぎ、次だ」

こちらが呆然としているうちに、エリオの身体はスバルと同じくなのはの下へと運ばれていたらしい。スバルと並んで横たわり、ピクリとも動かない。

スピード型の天才、エリオ・モンディアルは、結局一撃を掠らせることさえ許されなかった。

恭也は連戦の疲れなどまるでないような顔で、こちらを見ている。

「……ティアナさん、行ってきますー！」

「……本当にいいのね？ 先で」

「はい！ 行こうフリード！」

キャロが声をかければ、彼女の相方の白竜は鋭く嘶いた。

「……しっかり見てるわ！ 頑張ってー！」

「はいー！」

キャロが広場中央へ駆けていく。その小さな背中にはやはり怯えの色も見えたが、それ以上にやる気も感じられる。

「キャロ、フリードを元の姿へ。君の一番の戦闘態勢をとってくれ。その状態から始めよう」

「わかりました！」

恭也の言葉にうなずいて、キャラは詠唱を始める。陣が足元から広がって、やがてピンク色の魔力光が彼女と愛竜を包む。

それが弾けた時には、フリードは本来の雄々しい姿を取り戻していた。キャラは手慣れた水草でその背に飛び乗る。

（魔道士と竜のコンビに、バリアジャケット着ているとはいえ強化魔法もなしの、生身の素手で相対してるってすごい光景……）

だが、それでももう彼が負ける姿は想像できない。キャラとフリードの才能も実力も頑張りも、知ってはいても。

やはり二十メートルほど離れて、レイジングハートがカウント。

三度目のそれが0になった時、さきに仕掛けたのはキャラだった。

「フリード！」

主の声を受けたフリードは大きく跳躍、ただでなく翼をはためかせ一気に地上と距離をとりに行く。同時、さらに顔を大きく仰げ反らせ、口の中にはオレンジの炎。

（いい手だわ……！）

いかな高町恭也といえど、魔法もなしでは空戦は不可能。まずは相手の攻撃可能域から抜ける。

さらに、フリードが撃とうとしているのはブラストフレアという炎系の範囲攻撃だ。素早く動く敵に対しては実に手堅く定石な、つまり効果的な手法。

接近戦を挑んだ前の二人とは違い、遠距離戦を展開しようというキャラの考えは功を奏しそうに見えて。

「……う、わ」

しかし、やはり相手は意味不明がそのまま人の形で動いているような存在だった。

人って、生身であんなに跳ぶのか。

それがまず抱く感想だ。

空へ逃れんとするキャラ達に対し、恭也は疾駆してあつという間に距離を詰め、その勢いを殺さずそのまま跳躍、片手でフリードの脚を掴みにいつていた。

「よつと」

軽い声をこぼしながら、本当にフリードの脚に手が届く。驚きにだろう、白竜から「グギャツ!」っと悲鳴が漏れる。同時、口に貯めこんでいた炎が散っていくが、どの道この状況ではそれは使いみちがなかったろう。

そしてここからの光景は、より意味がわからなかった。

フリードの脚を片手で掴んだ恭也は、自分の身体を上へと思い切り引き上げ、こともなげに竜の背に足を掛ける。鮮やかにして滑らか、その動作は見事に一繋ぎであり、一瞬で完了している。

「あ、わ、わ……」

固まるキャロをスルーして跳ぶように踏み込み、向かう先はフリードの頭。乗られた感触にだろう、ちょうど自分の背の方を振り向いた竜の顔を、彼は真正面から蹴り抜いた。

竜の顔を、生身の人間が、である。

「フリード!? フリードオオオオオオオ!?」

結果がどうなったかと言うと、キャロの悲鳴が物語っている。

凄まじい勢いで頭部を弾かれ、一発であえなく気を失ったらしいフリードは、そのまま地面に墜落した。

「きゃあつー!」

衝撃に、その背中からキャロが投げ出される。恭也の方はと言うと、脚を振り抜いた段階でフリードからは離れており、悠々と地面に降り立っている。

「……あ、え、えと」

数メートル離れて自分を見下ろす恭也の姿に、慌ててキャロは立ち上がり。

「……っ」

焦った顔で彼女は魔力を走らせ、恭也の足元に陣を展開。おそらくは鉄鎖を呼び出す召喚魔法を唱えんとして。

「君の課題は、はつきりしているな」

「……あ」

しかし相手は高町恭也だ、やはり間に合うものではなかった。

キャラが陣を展開しようとしたあたりで恭也はもう動いており、悠々と彼女との距離を詰め、その首筋に手刀を叩き込んでいた。

「……………」

キャラはそのまま前のめりに崩れ落ち、恭也の腕の中に収まった。ふわりと浮いたキャラの身体が、恭也から離れてなのはの下へ移動。スバル、エリオと同じように横たえられる。

竜を従えるなどという戦闘能力の権化のような希少能力保持者、キャラ・ル・ルシエは、しかしやはりというべきなのだろう、あつさりと無力化された。

(……本当に三人、魔法なしでやられた)

フオワードメンバー、これでもう残りにはティアナ一人である。

しかも相手は、おそらくまったく全力ではない。いまさらながら本当に、自分が切った啖呵はなんと愚かだったのか。

「最後はランスター二等陸士だな」

「……はいー」

恭也の待つ広場中央へ歩くティアナの頭は、しかし湧いても煮立つてもいなかった。

ここまできたら、そしてチームメンバーがいいようにあしらわれたとは言え、頑張りを見せてくれたのなら。

為すべきことも、そしてその方法も、もう自分の中にはある。

「いくわよ、クロスミラージュ……！」

『Yes, master』

声を返してきた相方をぎゅつと握る。クロスミラージュはワンハンドモード、それがティアナの信じる今の最善だ。

「準備はいいな？」

「はいー」

差し向かう位置にたどり着いたこちらに問う彼の瞳は、相変わらず鋭い。こうして向かい合うと、まるで彼そのものが一振りの刀のようだ。

『Count, 3……2……』

息を整え、一回ぎゅつと眼を瞑って頭を完全に切り替えた。

あとはもう、やるだけだ。

『I……O, battle start!』

「……ふっ！」

ティアナの口から自然に鋭く呼気が漏れ、身体は構えを素早く作っていた。一丁を両手でまつすぐ握るアソセレススタンス、一番基本の形。

動くでもなくこちらを見ている恭也の、まずはその腹部めがけ一発。威力を抑えて、代わりに速度を引き上げる。

(……当たらないわよね)

身体を半身にする形で無駄なく射撃を躲した恭也は、その動きのままにこちらへ歩を進め始める。

(次、膝！)

歩行の最中、体重が乗った瞬間の脚は一瞬とは言え動きが固まる。その要である膝は一番顕著だ。

相棒に魔力を注いで弾丸を生成、狙い撃つ。

冷静に、丁寧。

パワーで勝負に行っても捌かれる。かといって、スピードを上げてもラッシュで攻めても見切られる。遠距離から広い攻撃に出ようとしても、その時間は与えられない。

スバル、エリオ、キャロの戦いが教えてくれたそんな情報から、ティアナが選んだ戦法の一つ目は、相手の観察 だった。

ティアナが思う他のフォワードメンバーたちの敗戦の理由は、自分の戦いをしようとするあまり恭也の動きに合わせにいかなかった事だ。

それは、そんな戦い方が最善となるほどに突出した才能に恵まれている証拠なんだろうが、状況に対する最適解とは限らないはず。

少なくとも大した技も武器も持ち合わせていない自分が今やるべきなのは、だからこそ撃つべき位置を、撃つべきタイミングを、撃つべき弾を間違わない事だと信じる。

(ま、それで当たれば苦労はないんだけど！)

ティアナの放つ、膝を狙った自分としてはそれなりに鋭いはずの弾

ははしかし、あっさりと躲された。

魔力弾が射出された時にはもう、彼の身体は射線からずれていたのだ。

(引き金を引くときには既にもう、その先にはいない。まず、弾を見て避けてるわけじゃないわよね。じゃあ銃口の動きか?)

近づいてくる恭也の膝や体幹に大きく派手な弾を撃ち込みながら、
(これならどうかしら……!)

自分の身体から三メートルほど左あたりに、小さく、目立たない弾を素早く練り上げる。銃口に生成する場合と比べ、自分の意識の上でもやりにくいし、デバイスの補助も受けづらくなる。だがそれでも、今は威力や規模なんてものは大していらぬのだ。

とにかく、一発当てる。

それが目標であり、達するためなら格好悪くても泥臭くても、卑怯でも何でも構うものか。

遠くに作った弾を撃ち込むタイミングで、先に銃口から放っておいた炸裂弾が恭也の下で弾ける。

範囲は広めだが弾速は遅いあれが、当たるだなんて思っていないが意識は引けるはず。

密かに放った三メートル左方からの弾が、飛びのいて炸裂弾の爆発を避けた恭也へ、速く静かに迫り。

「……………」

そしてそれはそのまま、何にも当たらず後方へ抜けた。思わず呻いて歯噛みしてしまうほど、相手方の体捌きは見透かしたようだった。

(駄目、か……掠りもしないなんてね)

彼はまるで弾丸に視線なんて向けなかった。しかし、それでも確実に身体を捻って回避してみせた。

(銃口から外した位置に弾を作っても完璧に読まれた。だったら、他に取るべき手は……ッ!?)

頭の回転を緩めず、手を尽くそうとあがくティアナの背中に、何か
が奔った。

一瞬で筋肉が硬直して、引き金を引く指が固まる。

「…………うん、いいな」

「…………」

視界が狭まる感覚、呼吸が荒くなっていく。

(…………なに!? なんなの!?)

「いい判断だ、鋭く早く、なにより強かだ」

「…………う、く」

言いながら、こちらを射抜く彼の瞳。普段は吸い込まれそうだななんて思った精悍なそれが、今は何より真正面から見たくない光を放っているように思えてしかたない。

(こ、れは…………!)

殺気、とでも言うのだろうか。

濃密な空気がティアナの身体を覆っていた。まるでいきなり違う場所に転移させられたかのような。

恭也の目は、こちらを射抜き続けている。

それはまるで、試すように。

(…………じよ、……………上等よッ!)

ここで退いてなるものか。

怯えて竦んでなるものか。

「…………ふッ」

心の強張りを追い出すように息を吐きながら、十メートルほどの位置まで来た恭也へ続けざまに三発浴びせかける。普通に撃つただけのそれらが当たるとは思わないが、ほんのすこしの時間は出来る。

やはり外れた弾丸を視界の隅で捉えながら、稼いだ時間でティアナは呼吸を整えた。

ビビるな、考えて実行しろ、そう自分に言い聞かせながら。

(発射位置でのフェイントも駄目だった、なら…………視線か? 私の目から狙いを読んでは?)

ならばそれでフェイントだ。相手の踏み出した左脚を見ながら、撃つのは右肩。もう一発、脇腹に向かって放ちながら、その実、曲弾として顔面を狙う。

しかしそんなあがきも、そして開始当初と比べて近くなった距離も

ものともせず、やはりと言うべきなのだろうか、恭也は軽く躲してきた。

それでもティアナは引き金を引き続ける。精神で敗北を喫したのなら、その時、本当に自分には何もなくなつてしまう。それだけは、絶対に嫌だった。

頬を伝った汗が、顎から滴るのがわかる。

(……いいわ、それで)

ティアナは、自分の身体に願った。

(せいぜい、怯えて焦る無様な様子をあの人に見せてよね。……都合がいい)

勇ましいなんて、思ってもらわなくて構わない。

追い詰められた表情を、姿を、見せつけるのが今のティアナ・ランスターの最善だ。

弾種にタイミング、位置に目線。使えるものは全てを使って多彩な攻めを掛け続け、しかし一発も当たらずに、恭也の身体がこちらと五メートルの位置を切る。

さらに濃くなった黒い雰囲気に、ティアナの呼吸は荒くなっていく。

(落ち着け、落ち着け、これでいい……)

整えるより、このままの方がもうきつといい。

だって、より無様に見えるはずから。

右に寄っていく曲弾が外れ、残りは四メートル。決着の時が近づく。

速度を限界まで上げた直進弾があえなく後方へ抜け、残りは三メートル。汗で額に髪が張り付いているのがわかる。

タタタンと、小刻みな三連射を恭也が躲し、踏み込んで。

残りは二メートル。ほぼ、捕まったも同然の距離。

(……——この瞬間を待ってたわッ！)

絶体絶命の状況。

だからこそティアナは、今まで射撃の裏で練り続けてきた魔力を解放した。

ティアナが組んだ戦術は二つ。一つ目は相手の動きを観察し、それに合わせる事。そして二つ目は、こちらの動きに合わせてくる相手を惑わす事だ。

恭也と至近距離、発動した魔法は幻影を作り出すミッドチルダ式幻術魔法、フェイク・シルエツト。

まさか誇れるなどとは言えないが、それでも自分が頼るカードの一枚。

作った幻影は自分と同じ姿かたちのもものが四体。つまり自分本体と合わせて計五体。

真ん中に一人突っ立ったまま、残りがその身体から分離するように大きく、身体を投げ出す姿勢で横っ飛びを切る。

右に二人、左に二人、真ん中に一人。恭也に大してやや扇型に広がった五人全員、銃口は彼に向けている。

(これならどうかしら!?)

その全員から、弾丸が放たれた。

この距離で広角から同時に放たれる五発の弾丸が、全て避けられるものとも思えない。だとすれば、本体がどれか賭けをして動くしかないはずだ。

そしていかな高町恭也といえど、身体は一つだ。そして魔法を使わず道具もなしというのならば、潰せるのはせいぜい一度に一人か二人だけだろう。

(正解を当てられる可能性は20から40パーセント!)

つまりこの賭けは、確率的には自分に分がいい。

後は運試し、絶対に勝てる状況を作るなんて贅沢を、この相手を向こうにして言うつもりは最初から毛頭なかった。

追い詰められた顔をして、もう手がないようなフリをして。

最後の最後、互角以上を作り、そこに勝負を賭ける。

結局、ティアナの本命は最初からこれ一つである。これまでの射撃だなんだは当たれば儲けもの程度にしか考えていない、言ってしまうばそれだけしかカードがないようなフリをするための道具でしかない。

幻影ではないティアナ本体が跳んだのは一番右奥。一応、今までの射撃は恭也の向かって左半身狙いをやや多めに撃つてある。微々たる小細工だろうが、やらないよりはマシだろう。

(これで、勝ってみせ……………)

集中した頭が見せるいつもよりどこか遅い景色の中、そしてティアナはそれを見る。

まっすぐ、幻影などには目もくれず、こちらをその鋭い瞳で見やる高町恭也の姿を。

「……………なん」

本体である自分が撃つた本物の弾を躲し、彼がこちらへその左手を伸ばす。

なんで、迷いもしないの？

言いかげながら、ティアナの意識はそこで途切れた。

「……………っ！」

「あ、ティアア起きた！」

五割ほどに青空、残り五割に同室に住む同僚の顔。ティアナの視界はそんな割合だった。

「……………えっと」

「大丈夫、ティアア？」

「え、ええ……………」

寝そべっていたらしい体の上半身を起こしながら、そもそもこの状況はなんだと記憶を探り、森林の緑の中、こちらを見やる教官陣にフワードメンバー、そして、

「最後の一人が起きたな」

特導官の姿を認め、ティアナは事態を掴んだ。

「スバル、エリオ、キャロ……………ごめん、私」

自然、顔が俯いていく。

「結局、全然駄目だった……………」

一発入れるという彼らからの期待に、応えることが、まるで出来なかった。

口の中は、馬鹿みたいに苦い。

「ううん！　すぐかったよティア！」

「そうですよ！　僕たち、ちよつと先に起きたのでさつきまで模擬戦の映像を見ていたんですけど、ティアナさんすごかったです！」

「あの恭也さんを相手に、あんなに冷静に……私、あんなの出来ないです……！」

三人は口々にそう言ってくれるが、胸がズシンと重い。

こういった無力感との付き合いは長いが、いつ味わっても嫌なものだった。

「ランスター二等陸士、大丈夫そうなら全員分の講評を始めたいと思うのだが」

「あ、は、はい！　お願いします」

恭也の言葉にティアナが立ち上がると、スバルたちも少々心配そうな顔ながら隣に並んでいく。

その前に立った恭也が、全員を見渡した後、まずはスバルに視線を固定した。

「ではまず、ナカジマ二等陸士から」

「はい！　お願いします！」

「君はな、もう少しものを考えろ」

「は、はい……」

大真面目な顔で投げられた言葉に、目に見えてスバルの意気が沈む。

「当たった後の事について、君はきつと才覚にも恵まれているし努力も怠らなかつたのだろう。しかし、当てるという事そのものについてあまりに意識が薄すぎる」

「はい……」

「当てない空振りにも、戦術的にはもちろん意味がある。だが、それを活かして最終的に当てていかなければダメージレースには無価値でしかない。当てるための努力は色々やろうとすれば出来る。バイ

ンドやらで相手の動きを止める、フェイントを混ぜる、軌道を変える、攻撃を隠して不意を打つ、まだまだ色々あるだろう。単純に、細かく速く小さく打っていったっていい。怯んだ相手にその後、改めて大振りを叩き込めばいいんだ」

普通に言われても、なかなかスバルのスタイル的に取り入れづらい文言だろうが、さすがに魔法なしであれだけ鮮やかに無駄なく捌かれた後だと響きそうな言葉だ。

ちらりとティアナが隣を伺うと、スバルは実に真剣な顔で聞いていた。

「いいか、ナカジマ二等陸士。力を貯めて爆発させる技術も、迷わず恐れず向かっていくハートも、君は飛び抜けたものを持っている。問題は、まっすぐ過ぎることだ」

「まっすぐ、過ぎる……」

噛みしめるように復唱したスバルに、恭也は頷いて続ける。

「そうだ、まっすぐ過ぎる。それは今日、俺がやったように捌き方を心得たものには簡単に振り回されてしまう危うさがある。だから、そのまっすぐな拳を叩き込むための、前段階としての絡め手を覚えろ。それは技としてもそうだし、心構えとしてもだ」

「はいー」

「うん、えげつなさを身につけてくれ。そうすれば、大概の敵ならば挽き肉に出来るだろう」

なかなかそれこそえげつない表現だが、確かにスバルの破壊力に巧さが加われれば脅威である。

「上達を期待している。なのはやヴィータと相談しつつ、身につけていってくれ」

「はい、ありがとうございますー」

「君の上達具合によつては、俺が指導させてもらう事も考えている。その時を楽しみにしている」

「は、はい！ 頑張りますー」

スバルはびしっと敬礼をして、恭也の言葉に答えた。そんな彼女に一つ頷いて、恭也は今度はエリオの方を見やる。

「さて、次はエリオだ」

「はい！」

「エリオ、やっている最中にも言ったが、お前は昔のフェイトとそっくりだ」

ティアナがちらりと伺うと、名を挙げられたフェイトは苦笑を零していた。

「お前は速い。動作は機敏で思考も鋭敏だ。だからこそ、やはり惜しいんだ。エリオ、俺の突き、お前のそれと比べて速度で言えばどうだった？」

「……恭也さんの突きの方が、遅かったと思います」

「そうだろう、その通りだ。だがどうだ、反応出来たか？」

「いいえ……いつの間にか、喉元に穂先を突きつけられていました」

それは外から見ていたティアナの眼からしても、奇妙な光景ではあった。それこそ魔法のようだとすら思ったものだ。

「覚えておけ、戦闘における速さとは、単純な速度と決してイコールではない。お前のように速度に秀でていると、逆にそこには気づきづらいんだがな。だが、ずっと気づかないままでは上達は見込めん」

「はいっ」

「俺のあの突きで言えば、あれは出鼻を隠したがゆえにお前が認識できない速さを有するに至った。『これから打つぞ』というモーションを伏せて、逆に『まだ打たない』という騙しまで乗せて、その上で放った。すると、速度としてはそこまでのものでなくとも、ああいう認識されない速さを持てる」

気構えの隙を突く、ようなものなのだろうか。いや、意図的に隙を作っていると言ったほうが正しいのかもしれない。

ティアナは専門ではないから詳しくは言えないが、そういった武術的駆け引きは、魔法による身体強化やエネルギー付与をどう高出力で行うかを第一に考える現代近接魔法戦闘では、正直あまり重視されならしい。

しかしその近接戦闘分野において間違いなく頂点に君臨している人間が、それとは完全に逆行した論理を持っているというのは、なか

なか興味深い事実なのかもしれない。

「全ての動作は繋がっている。前の動作を利用して、次の動作を速度という意味の上でなく加速するというのは、スピードを武器とする俺たちのような人間にとってはひどく重要なスキルだ。エリオにはこれから、それをよく学んでいって欲しい。体も頭も思い切り使うことになるが、覚悟はいいか？」

「はいっ！」

「うん、良い返事だ。それもフェイトと同じだな」

言いながら、恭也はワシヤワシヤとエリオの髪を撫で回す。

「基本的にはそのフェイトから教わってもらおうが、スバル同様、上達具合によっては俺が教える事もある」

「絶対、強くなります！」

「ああ、期待している」

頷きながらエリオの頭から手を離れた恭也が向いたのは、今度はキャロの方である。

「キャロ、エリオに単純な速度が重要なのではないというような話をした矢先になんだが、君の場合、それを身につける事が必要だ」

「も、もっと速く動かなきゃって事でしょうか？」

拳をぎゅつと握って意気込むキャロに、しかし恭也は首を振る。

「少し違う。君自身が速く動く必要というのは、あまりない。少なくとも訓練をする優先度は低いだろう。問題は攻撃の出足だ。素早く撃てる攻撃が君には必要なんだ」

「素早く撃てる、攻撃……」

「君の技の数々は強力で大規模なものが多いだろうがその分、出が鈍い。技を出す前に首を掻き切られては遅いんだ」

「っは、はいー！」

容赦のない物言いに一瞬怯んだキャロだが、しかし気丈に恭也と眼を合わせ続ける。

「二つでもいい、とにかく素早く撃てて相手の足を止められる何かを持てば、戦闘は一気に多角的になる。サポートにおいてもそうだ。即座に届く援護というのは、これがなかなか心強いものだぞ」

「な、なるほど！ わかりました！」

確かにティアナから見ても、キャロの技は出足の速度に優れない。召喚魔法やフリードの範囲攻撃は、遅めのテンポで撃たれるものだ。それはフルバックという役割としては特に問題ないものと思っていたが、恭也の眼からすると少々物足りないという事だろうか。

「キャロに俺が教える、ということとはなかなかスタイル的にならないだろうから、やはりなのはとフェイトに師事してくれ。あるいは、多彩さという点においてはリインフォースも頼りになるだろう」

「はい！」

「フリードも、しっかりキャロと動きを合わせてカバーし合うんだ、出来るな？」

ティアナが意識を失っている間に小竜モードに戻っていたらしいフリードが、威勢よく恭也の言葉に嘶きを返した。

「よし。さて、それじゃあ最後だ。ランスター二等陸士」

「……はい、お願いします！」

こちらへ向き直った端正な顔に、せいぜい背筋を伸ばして答える。どんな辛辣な事を言われるかわかったものではないが、受け止めて糧にしなくてはならない。自分はチームメンバーの天才たちとは違うのだから、より食欲でなくてはいけないのだ。

ティアナの瞳をまっすぐに射抜きながら、そして恭也は言った。

「君は、自分に足りないものが何か、理解しているか？」

「……それは」

問われ、考える。自分に足りないもの。

状況を決めうる攻撃力、主導権を離さない速さ、特別な役割を持つスキル。

その他、数え切れないほど浮かんで。

正直、たくさんあり過ぎてどれを口にしたらいいのかもわからなかった。

「……え、と」

「思い浮かび過ぎるか？」

「……はい」

見透かされ、情けなさに齒噛みして。

「ランスター二等陸士、君に一番足りないのはつまり、そういうところに現れている」

「……ええと」

意味を掴みかねたティアナに、恭也は真剣な顔のまま告げた。

「君に一番足りないのは、自信だ」

「………いえ、そんな」

言われたことの意味がいよいよ本当にわからず、呟くように返したティアナに、恭也は続ける。

「今日、間違いなく俺をもっとも追い詰めたのは君だ。その事実を、まづはわかってくれ」

「……え、や、で、ですが、それはだって、私は一番最後で、特導官の動きをそれまで見ていましたから」

「そういう要素を差し引いてもだ。そもそも人の戦いを横で観察し、それをいざ自分の番がきたときの糧に出来るというのも、そんなに簡単なことじゃない。少なくとも、誰にでも自在に出来るスキルではない、君の誇るべき能力の内だ。観察できるほどの眼の良さと、それを活かす頭がなくてはああはいかん」

これはもしかして、褒められているのだろうか。

まさかもしかして、評価されているのだろうか。

ティアナにはなんだか、よくわからない。

「君の戦い方は見事だった。その場の最善を常に探り、一手一手考え抜いて撃つてきていたな。俺の動きを誘導して、状況を自分の有利に整えようという意思もあった。魔導師というのはどうも、その有り余る力頼みになりがちなんだが、君にはその甘えがない。これは得難い宝と知っておくといい」

（……得難い、宝？）

次元世界の英雄は飾り気のない口調で、なんにも持っていないはずの凡人の自分が宝なんてものを持っていると言う。

ティアナは、自分の頭がどこかふわふわしている気がしてならなかった。

「それから、君には特に途中からそれなりの殺気を当てたんだがそれでも折れず、奮い立ってきただろう。あれもいい。身を削り合い、命を奪い合う戦場において、結局一番最後に俺たちを護ってくれるのは、そういう心の強さだ」

だつてこんなの、決して自分が自分に付けてこなかった評価だ。

「あの、でも、私は、そんな……」

「自信を持って、己を誇れ、胸を張れ、ランスター二等陸士。少なくともこのフォワードメンバーの中で、俺が一番やり合いたくないのは間違いない君だ」

「え、と……」

「最後、というか最初からあれが君の狙いだったんだろうが、あの戦法なんか特によかったぞ。渋いな」

大真面目な顔をしていた恭也は、そこでふつと表情を緩めた。

「自分を褒めてやれ。君の成長は、まずはそこからだ」

「……………は、……………はい」

「うん、よし」

恭也は一つ頷いて、ティアナから視線を外した。

彼の言葉を飲み込み切れず、ティアナの頭は未だ、微妙にぼうっとしたままだ。

(自分を、……………褒める、つて)

こんな環境で自分を褒められるような要素なんて、ないはずで。だけど特導官に言わせれば、それはどうやらあるようだ。

(わかんない、わよ、そんなの……)

あまりに予期しなかった展開に、途方に暮れる。

叱られた方がきつと、何倍もすんなり飲み込めただろう。

「場合によつては俺も教えようかとは思うが、まずは何よりなのはだな。彼女からしつかり教えを受けてくれ。……………さて、フォワード陣。それではこれからも、君たちが訓練に励んでくれることを期待している」

そう言つてまとめた恭也に、スバル達と共に返答しながら、それでもティアナの胸はやはり、戸惑い一色で染まっていた。

「ずいぶんな拾いものをしたな」

「テイアナですか？」

「ああ。まあ彼女に限らず全員、才能豊かだとは思うがな」

隣を歩くフェイトに言った恭也の言葉は、丸ごと本音だ。

なのは、ヴィータと共に通常の訓練に戻ったフォワード陣と別れ、隊舎に戻る途中の道をフェイトと行きながら、しみじみと言う。

「ナカジマ二等陸士なんかはわかりやすく強力な能力があるから、そんなに見出すのは難しくないだろうが、ランスター二等陸士を引張ってこれたというのは、これはなかなか尋常じゃない」

「それら辺は、さすがはなのは、ですね」

「そうだな、いい眼をしている」

砲撃手として、とはまた別のところでも、どうやらあの妹は優れた眼を持っているらしい。

「……多分、ああいう人種がいるかいなかだ」

落とすように、言いながら。

思い返すのは特武官としての記憶。

「限界状態の現場において、自分の力を抛り所にしてきた人間というのは、それが及ばなかったとき、どうしても折れてしまう。折れて、終わってしまう」

「……はい」

「だが、精神をこそ柱とするものは、そこで抗う。抗うことが出来る。そして、そういう人間が一人でもいてくれると、周りのものも諦めなめなという事を思いつけるようになる。……俺が呼ばれて行った時に、完全に崩れた現場になっているか、それともギリギリで持ちこたえている戦場であるかの違いは、おそらくその一点だったように思う」

もちろん様々な要因はあったろうが、結局そこに集約するような気がする。少なくとも、それが恭也の視点から見た時の結論だった。

「ランスター二等陸士は本質的に、後者の人間だ。力で及ばない事が、

精神で屈する事と決してイコールにならない、そんなタイプだ。人材としてはこの上なく、貴重だろう」

殺気を当てられ追いつめられてなお、彼女の瞳は力を失わなかった。どころか、彼女は自分が追いつめられる状況を待つてすらいただ。

それは、誰もが持っているというわけでは決してない、ティアナ・ランスターのギフトだ。

「とはいえ、難しい娘ではあると思うがな。どうも卑屈に過ぎる気がする」

「ですね。……ちよつと意固地になってしまふところもあるので、余計にでしようか」

「だな」

そこも併せて、なのはが導いてくれればと思っている。

だが、教導官としてはそれなりのキャリアを持つ彼女は、しかし長期間見る事になる教え子を持ったのは今回が初めてだ。教導官の教導は短期間の特別訓練という形が基本だからである。

そういった意味で、少々不安に思ってしまうのは妹に対して過保護が過ぎるだろうか。

「俺も気をつけて見ていようとは思うが、まあ、あまり俺たちが気を揉んでいても仕方ないか」

「はい……私たちは、私たちに出来ることをしましょう」

「ああ」

陸戦用空間シミュレーターの作った森を抜けると、景色は一変する。それなりに規模の大きい隊舎等々が視界で大きな割合を占めた。

舗装された道を歩きながら、恭也はフェイトに問いかける。

「しかし、大丈夫なのか？ ……君はずいぶん、本当に忙しいだろうに、俺の方を手伝ってくれて」

「もちろんですつ。私は恭也さんの弟子ですから。それに、シグナムやリインフォースと仕事を分担し合っていますので」

「すまん、……正直、かなり助かっている。俺一人では到底無理だ」
特導官に任官されてからこれまで、恭也にはずつと、フェイトと共

に取り組んできた仕事がある。

「いえ、私もこんなお仕事に関われて光栄です。仕上げていきましよう、御神式」

「ああ」

金色を揺らす彼女の、整いに整ったかんばせを見返しながら恭也は頷いた。

御神式。

それが恭也がフェイトと共に今、創り上げようと力を注いでいるものの名である。

御神式は言わば、汎用化し、簡易化された御神流だ。

特導官として局員たちに教導を行うと決めたときに、それは創り出すべきとして自然と行き着いたものではあった。

しかし、当然問題はあった。

御神流の技術は、そのどれもが長く過酷な修行の果てに得られる非常に高練度まで鍛え上げられた肉体で振るう事を前提としている。

そうでなければ、使いようがない技ばかりなのだ。

よって、まさか長期に大人数の弟子を取るわけにもいかないため、局員たちには授けることが、そのままでは出来ないのである。

そこで眼をつけたのは、当然のように魔法だった。

魔法によって補助する事で本来の御神流剣士レベルまでの身体でなくとも、コツを掴めば御神の技術がある程度まで扱う事が出来るのではないかという考えに基いて、御神式は練り上げられつつある。

とは言え、御神流でより重要なのはむしろ単なる肉体の練度ではなく、その練度まで持つていく過程で得た、肉体及びそれを動かすという事についての深く実践的な理解であるため、単に魔法で補助をしても、技を扱うのはなかなか難しい。

よって御神式では欲張らず、当人に最も適性のあるだろう技術一つに狙いを定め、その習得だけを目指して鍛錬を行わせる事を基本としてる。

流と言えるほどに包括的で体系的な技術でなく、予め定められた技のみを振るう事が出来るようになるという代物であるので、御神流で

はなく御神式という名称としている。

「というか、正直なところ御神式に関しては君の方が間違いなく俺よりも功績が大きいな」

「いえ、そんなことは」

「いやいや、本当だ」

恭也は、自分の使用する眩体や晃刃についての感覚的な理解と運用には自信があるものの、基本的には魔法に対して知識が乏しく、また扱う術式も真正ベルカという使用者の極めて少ないものである。

よつて、理論と汎用性の重要な御神式の構築においては、少なくとも恭也からすれば圧倒的にフェイトの功績こそが大きく思える。

「御神式というか、御神・テスタロッサ・ハラオウン式とでも呼ぶべきじゃあないかと思うんだが」

これは冗談ではなく、本当に考えている事である。もしも御神式が後々まで残ってくれるものとなった時、そこに彼女の名が入っていないというのはどうなのかと思うのだ。

「い、いえ……………その、えと、……………で、でしたらですね」

「うん、なんだ？」

「でしたら、私としては、御神高町式という方が、いいかなあと……………」

「……………謙虚だな、相変わらず」

師匠を立てる、実に出来た弟子だった。

「まあ名称のことは置いておいて……………重ねて言うようだが、すまん、フェイト」

「え、何がですか？」

「いや……………なんというかな、以前、君に御神流を教える事をあれだけ渋った癖をして、今こうして御神式なんてものを局員向けに創り始めているというのは、本当に申し訳ない」

「……………恭也さん」

恭也の言葉にフェイトは柔らかく、本当に柔らかく、抱きとめるように優しい笑顔を浮かべて言った。

「私は、嬉しいですよ。とっても、嬉しいんです。貴方が、貴方の事や貴方の力をちゃんと褒めてあげられるようになった今が」

「……手のかかる師匠ですまん、本当に」

自分の事を、認めてやれるようになって。

恭也の中では色々なものが変化を遂げたが、その内の一つには御神流への認識があった。

大元が穢れに染まった代物だという想いは未だにあるし、それが変わることはこれからもないと思うが、それでも使い方次第だとも考えられるようになった。

救えた人たちがたくさんいたし、きつと、たくさんいる。

だったら、少し形を変えたそれならば、御神や不破でない人間に授けるのも悪くないんじゃないかと、今は思えるのだ。

「まさか。それなら私だって手のかかる弟子ですよ」

「君が手のかかる弟子だったら、君の姉弟子の立場はないも同然になっちゃおう。やめてやってくれ」

「そ、そんな事ないですよ！ 立派に恭也さんと並んで流派の御頭首じゃないですか」

「そうなんだがな。……まあ、あいつが御神正統の頭首だというのは微塵の文句もない。ただ」

恭也は頭を掻きつつ、言う。

「俺が美沙斗さんを差し置いて、不破の師範というのはどうなんだろうな」

「私はとても良い事かと思いません。美沙斗さんも、そこは譲りませんでしたし」

フェイトの言う通り、控えめな気性の美沙斗はしかし、御神不破の師範を正式に恭也とする事に関しては頑と譲らなかつた。

結局今は、表である正統の頭首が美由希、裏である不破の頭首が恭也となっている。

「美沙斗さんも、ああいうところはなかなか意思が硬い」

「恭也さんと言ひ、美沙斗さんと言ひ、美由希さんと言ひ、なのはと言ひ、不破の血筋の方は皆、頑固揃いです。……ま、まあ私もそれなりなので、なかなか言いつらいんですが」

「かもしれんな」

瞼を開くと、薄暗い室内。カーテンの隙間から僅かな星明かりが漏れている。

ベッドの上、ゆっくりと身体を起こしながら壁にかかった時計を見れば、真夜中を少し回ったところ。

三時間くらいは、寝られたろうか。

起こした上半身を立てた膝に預けながら深呼吸、恭也は乱れていた息を落ち着かせた。

これでも一応、少しはマシになったのだ。

継続睡眠装置なしでは寝つけずらしなかつた頃と比べれば、良くなつてはいるのだ。

「……………」

一際深く吸った息を、吐き出す。嫌な汗を掻いていた背が、少し冷たい。

(…………虫けら。ああ、そうか、あの娘の言葉か)

”失礼ながら、…………特導官からしてみれば自分たちなど問題にもならない戦力かもしれないませんが…………虫けらのような存在かもしれませんが”

”虫けらにだって、それくらいの力があります！ お強い特導官には私達のことなんておわかりにならないかもしれないですが”

それは今日、鮮やかなオレンジの髪の女の子に投げられた言葉で。そんなつもりでは、決してなかったのだ。なかったの、だけれど。そして彼女にもきつと、こちらをそこまで突き刺すつもりはなかったのだらうけれど。

それでもやはり、彼女のような立ち位置の人間から投げられると、ひどく刺さる声だった。

わかつてはいる。

自分が勝手に作り出した幻想に、自分で追い込まれているという事くらい。

自分で自分を責め立てたって、勝手な自虐で俯いたって、なんにもならない事くらい。

わかつては、いる。

だから、普段はもう、それなりに普通に過ごせるようになった。だけど、夢の中だけはうまくいかない。

目を開いて感じる暗闇は、御神不破である自分にとっては一番の棲家だ。

しかし今、目を閉じて包まれる暗闇が怖い。覗く自分の内側から響く声が恐ろしい。

笑ってしまうくらいに、情けない話で。

それでも、どうしようもなく自分の抱える現実だった。

また少し、息が乱れて。

なんとか、整えようとした時だった。

「おにいちゃん」

シーツの上、無造作に置いておいた左手に熱が触れる。

これもまた、情けない話なのかもしれないが。

「……すまん、起こしたか」

「なんで謝るの」

感じる暖かさと、その蕩けるような笑顔は、恭也の中にわだかまる怯えを圧倒的な火力でもって、いとも簡単に蹴散らしていく。

まるで眩い星のよう。

彼女の光はいつも、恭也にとっては救い以外の何でもない。

「昔、私は何回こうしてもらったと思ってるの？」

「……」

同じベッドの上、するりと身体をこちらへ寄せた彼女の胸に、気がつけば頭を抱かれている。

その暖かさと柔らかさが、脳に染みこんでいく。

果たして。

「……悪い、情けない兄貴だ」

「ううん」

果たして、この光の中、生き残れる闇の一片だってあるものか。

「なんか……可愛くっていいと思うよ」

「……」

忸怩たる思いはもちろんあるが、しかしこんな格好で言い返す言葉

なんてまさか、持っていない。

「……情けなくなつて、いいよ」

彼女の声が吐息ごと、優しさを熱に換えて降ってくる。

「ずっと格好いい、いつも隙のない、誰にも頼られるおにいちゃんじゃなくて、いい」

「……すまん」

「もう、謝るの禁止するよ」

ぎゅっと、彼女の腕の力が強まって。

甘い匂いが、心まで満たす。

「おにいちゃん、髪伸びたよね」

「……そうだな、そろそろ切らなくては」

正直な、事を言えば。

「私が切つたげよつか？」

「丸坊主にする度胸はないぞ」

「失礼な！ 手先は器用なつもりです！」

恭也は、思い出せない。

「そう言えば、昔はかーさんに切ってもらっていたな」

「じゃあ今度はなのはに任せましょう、そうしましょう」

「どうするかな」

「ええー、大丈夫だよ？ ほんとだよ？」

この娘に、こうして。

こうしてもたれかかってしまう幸福を知らずにいた頃、どうやって生きていたのか、よく思い出せない。

ずっとそうして生きてきたはずなのに、不思議なくらい思い出せない。

「まあ髪の毛は置いておいて、諦めないけど置いておいて……おにいちゃん、寝られそう？」

「……ああ」

「そっか、じゃ、寝ちやおう」

ほすんど。

彼女はこちらの頭を抱えたまま、起こしていた上半身をベッドに投

げ出す。

「なのは、……もうそんなに抱いていてくれなくても平気だ」

「なのははすでに眠ってしまっていますので聴こえません……おやすみなさい……」

「眠ってしまったているならおやすみなさいはおかしいだろう」

がつつちりと、彼女の細い腕は恭也を離しそうにない。

「さっきのもこれも寢言です……ぐう……」

「腹が鳴ってる」

「寢息！ お腹じゃないよ！」

彼女の愛らしい抗議を受け流しながら。

包んでくれる熱の中、閉じた瞼の内の闇が、今は少しも恐ろしくない。

元は十と一つも歳の離れていた妹に、高町なのはというその女性に、もたれてしまうのが高町恭也の今であり。

やっぱり情けないと思いつながら、どうしても。

抜け出せる気がしないというのも、嘘偽りのない現実だった。

第28話　じゃあ、だめなんですか？

「……どうしよう、かなあ」

呟いた自分の声が、春先の少しぬるい夜の空気に溶けていった。手に持った愛銃には、自主練メニューであるターゲットトレーニングのプログラムをインストールしてある。

始めるのなら、いつでも始められる状態だ。

「……うー」

呻いて、ティアナは顔を伏せる。

力が足りない。

この機動六課にきてからこっち、ティアナの心にはそんな焦りが棲みついていて、今日はそれに大きく躓いてしまった。

躓いて、そのまま身を投げ出して、大馬鹿をやってしまった。

オークションの行われる施設を警備、それが今日の任務だった。会場であるホテル・アグスタという建物の中には内警護としてスターズ、ライトニング、そして機動六課の総隊長が入り、副隊長陣とフォワードメンバーであるティアナたちは外警護に就いた。

結局、悪い方の予想通りと言うべきか、事は戦闘に発展。

以前の暴走列車鎮圧任務の時にも現れたガジェットと呼ばれる自律戦闘機械が骨董品をレリックと誤認して奪いに来た。

次々と、易易と、リミッターの掛かった身で敵をすり潰し斬り裂いていく副隊長陣の姿に、思ったのだ。

私だって、と。

だけどそれは、驕りでは決してなかった。あれはもっと無様な、きつとただの焦りだ。

焦って焦って、自分も価値を示さなくてはと、自分の価値を示さなくてはと、その一心だけで引き金を引いて。

”ティアナ！　この馬鹿ッ！”

結局、その弾が向かったのは。

”無茶やった上に味方撃ってどうすんだッ!!”

”……あ”

敵でもなく自分の行く道を塞ぐ劣等感でもなく、共に戦う仲間だった。

”あの、ヴィータ副隊長、今のも、その……コンビネーションの内
でっ”

自分に撃たれかけた彼女は、そう言っただけをかばってくれたけど、

”ふざけるタコ……直撃コースだよ今のは!”

激昂するその人、スターズ副隊長ヴィータが間に入ってくれなければ、頑丈とはいえない人の身である友人を、傷つけていた事は確実だ。

無茶をした。無茶苦茶をやった。

制御もできないくせに四発もカートリッジをロードして、とにかくと撃ちまくった。自分では、きつとそれなりにコントロール出来ると思っていたんだから救いようがない。

スバルは、怒らなかつた。ただただ、こちらを心配してくれた。

それが、泣きたくなるくらいに情けなくって、彼女にさえ辛く当たった。

何をしているんだろうと思った。

どうしてこうなったんだろうと思った。

そして、行き着いた答えはやっぱり、当たり前のように、”力が足りない”というものだった。

特導官にはこの前、自信を持ってなんて言われたけれど、事実として、やはり自分は脆弱なのだ。

だから、現場で事後処理にあたりながら、沈む頭で思った。

朝から晩まで頭も身体もくたくたになるくらいの猛練習を毎日積んでいけるけれど、それだけでは足りない。

自己鍛錬が必要だ。

天才と違つて凡人は、綺麗に技を磨いている余裕なんてない。身を削る勢いで、自分の形と価値を作っていかなければならないのだ。

なんて、思っていたのに。

”ごめんね、ティアナ”

その人は、そう言った。

こちらをまつすぐに見ながら、その人はそう言った。

”……不安、なんだよね。焦っちゃってるんだよね。ごめんね、私のメニューって、わかりづらいよね”

”……いえ、そんな”

”ううん、私も、そうだと思うもの。基礎と基本の繰り返しで、目新しい技が増えるわけでもなくって、辛さの割に、実感が見えてこない。割に合わないって言われても、仕方ないとすら思う”

検証の進められる現場の隅、エースオブエースはやっぱりまた、ごめんねと言った。

高町なのはは、ティアナ・ランスターに謝るのだ。

”色々、考えてはいるんだ。これからティアナが、六課の任務の事だけじゃなくって、その先も堂々と歩いていけるように。色々、教えようとは思ってるんだ。でもね”

誠実な、ただただ真摯なその口調は、ひどく耳に痛かった。

”……でも、どこまで歩けるかよりも先に、それよりも、何よりも先に、ちゃんと帰ってこられるようになって欲しいんだ”

”……帰って、こられるように”

”うん。だって、だってさ”

人なんて、簡単に死んじゃう。

その言葉が、突き刺さった事をよく覚えている。

いつものように帰ってくると疑うことすらしなかった兄が、しかしあっさりと帰ってこなかった事を、だって思い出させられたから。

”っ”

どうしようもなく柔らかいところを、一番触れられたくないところを無遠慮に触れたような気さえして、伏せ気味にしていた顔を上げ。

”ごめんね、こんな言い方をして”

”……いい、え”

なんて顔、してんのよ。

それが、正直なティアナの感想だった。

気丈で凛々しく、いつも背筋と理念に一筋芯の通った高町なのはの

顔に、今まで一度だってティアナが認めたことのない色が浮かぶ。

それは怯えのような、恐れのような、剥き出しで傷だらけの、生きた人間の痛みに溢れた顔だった。

”あの……”

”うん、なに?”

”……ええと”

その愛らしい面に浮かんでいた、あまりに痛々しい表情はしかし、嘘だったかのように消え失せていて、それについて聞くことはどうしても憚られて。

代わりに、問う。

”なのはさんは、……私を叱らないんですか?”

”その必要があればね。もうヴェータ副隊長がきつく言ってくれたみたいだし、そもそも自分自身に思い切りそうしている人を、また周りからつついたって仕方ないよ”

甘いのか、徹底しているのか、この人はよくわからない。

”だから、その代わりにお願い”

”お願い……ですか?”

命令ではなくて? なんて毒を刺すのは、さすがに人間としてしたくなかった。

”うん、お願い。あのね、ティアナ。もうちよつとだけ、信じてくれないかな”

”それは……”

”自分自身の事を。それから、チームメイトの事を。そして、ごめんね、私の事を”

その声は柔らかく、優しく、呆れるくらいに嫌味がなかった。

”ちゃんと、育ててみせるから。ティアナをティアナの夢に届くような立派な魔導師に、ちゃんと育ててみせるから。不安だろうと思う、焦るだろうと思う。地味で地道な私の今の訓練は、やりがいも達成感も薄い”

厳しいところや怖いところもあるけれど、きっとこの人はそもそもその根っこが、どうしようもない善人なんだと、そう思わされる音色。

” だけど、必要なんだ、必要な助走なの。これから、遠く、高く飛ぶために。だから、お願い。どうか、信じて”

”……はい”

上げていた顔を、俯くように頷かせて、彼女の言葉に答えた。だって、そうだ。

その人の顔をもうまっすぐ、ティアナは見ている事が出来なかったから。

「……最悪、よね」

意識を今に引き戻しながら、小さく、しかしはつきりと呟く。

嬉しかった気持ちもある。わかってもらえた喜びが、そこになかったかと言えば、それは嘘になる。

感謝もしている、尊敬もしている。こんな事言えたザマではないかもしれないが、信頼だってしている。

だけど、だけど。

ティアナは、ティアナ・ランスターが一番強く、高町なのはに対して抱いている感情が何かという事を、悲しいかな自覚してしまっている。

「……なんで」

それは、いかにも情けなく、だからこそ根源的で拭えない代物。

「なんで、……なんであんな事言えるのよ」

嫉妬と言う名の、醜い泥沼。

だって、おかしいだろう。

幼い頃から天才で、しかし驕らず努力も怠らず、現在のランクは空戦SS。実績は申し分なく、隊内での信頼も隊外での名声も確固たるものを得ている。

そんな管理局きつての実力者、教導隊の誇るエースオブエースが、どうしてペーパーで凡庸な、その上隊に迷惑も掛けた愚か者に、あんなにまっすぐ謝れる？

あんなに暖かい声音で、理解し合おうとしてくれる？

どこまで人間が出来ていれば、そんな風になれるのだろう。

彼女の言葉が、力持つものとしての傲慢でも、力なきものへの欺瞞

でもないことくらいは、ちゃんとわかる。
わかるから、わからない。

どうしてそうあれるのか、わからない。
こっちは、弱つちい自分自身に振り回されて無様に踊っているとい
うのに。

あの人が綺麗な気持ちを向けてくれるから、浮き彫りになる醜い自
分が嫌になる。

そして、そんな勝手な自分もまた、最高に無様で疎ましい。
足搔けば足搔くほど、その泥沼に嵌っていくように。

(……だから、私は)

青い反発だつてわかっている。

わかっているけど、だからこそ、引き摺られて仕方ない。

全てがあの人への優しさの通りになったら、それはあんまりに情けな
い気がして、だからやっぱり、自分で自分を鍛えてしまいたかった。
でないとは結局、なんにも得られない。そんな思いが、ティアナの身
体に心に纏わって仕方ないのだ。

でも、あのあまりに暖かい声を、気持ちを裏切るのは、それもとて
つもなく嫌な気がして、思い切る事が出来ない。

ぐるぐると堂々巡りで迷ったまま、ティアナはこの整備場裏手に広
がる林の中、ずっと立ち尽くしている。

曇り空、輝く星も見えなくて。

どうするべきなのか、本当に決心がつかなくて、何度目かのため息
を落としかけた時だった。

「……いつまでそうしているつもりだ？」

「……え？」

その声に、振り返る。

誰だ？　なんて思う事はない。まだ何度も聴いたわけではないが、
その人のそれはあまりに特徴的な甘さがある。

「と、……………特導官？」

惑う事も間違える事もない、響いたのは高町恭也の声だった。

「随分と長いこと迷っているみたいだが、いい加減にしないと明日に

響くぞ」

まるで樹木の影から這い出てきたかのように、いつの間にか近くの木の幹に身体を預けるような姿勢で佇んでいたその人は、その切れ長の瞳でこちらを見ていた。

「い、いつの間に……」

全然、まったく気が付かなかった。

これでも周囲の変化には敏感な方であるという自負はあったのだが、撤回しなければならぬだろうか。

「あ、い、いえ、その、どうしてこちらに……」

「日課というか癖というか、周りの気配を時折、広範に読むんだ。そうしたら、こんな夜中のこんな所に人がいるようで、しかもじいっと動かないときた。さすがに少々気になって、見に来たんだ」

「そ、そうでしたか。それは、その、ご心配をお掛けしまして……」

（気配？ 探知魔法でも打ったってこと？ でも、そんなの感じなかったけど……）

探知魔法は基本的にアクティブソナーのようなもので、自分を中心に広がる波を打ち、返ってくる反応で周囲の状況を探る。ゆえに、探知魔法を打つ行動は範囲内の人間には気づかれてしまう事が多い。

よほどの名手であれば相手に悟らせない類のものを打つ事も出来るが、それは援護や支援系のスキルであり、ガチガチの近接戦闘系である高町恭也がその能力に優れているというのはなかなか違和感があるような気もする。

「今日の出撃」

「……っ」

「まあ、若者らしいと言うべきかな」

責めるでもからかうでもない口調には、しかし重さがある。

ずしりと、胸にのっかる重みがある。

「……………私は」

項垂れて、なんと言葉を連ねるべきなのかすらわからない。

私は、何がしたかったのだろう。

やりたい事に、なりたい自分に、どんどん遠ざかっていくばかり。

情けなくて情けなくて、だから、涙だけはせめて、見せたくなかった。

その姿には、見覚えがある。もう少し言えば、身に覚えもある。
(俺や美由希のような馬鹿が通る道だと思っていたが、存外賢い子も嵌るものだな)

恭也の内心に呆れはない。そんな感情を抱く資格はない。
劣等感、無力感、焦燥感。

そんなもの達に取り憑かれ、足を取られて暴れ回り、結局傷つけるのは自分自身。

自分も通つて馬鹿を盛大にやらかして、弟子もそれなりに危ないところまで行つた。

ゆえに、なんとか自分で踏みとどまろうとしているこの子に上から目線で説教できる身でない事は、誰に言われずとも弁えている。

「ランスター二等陸士」

「は、はい……」

だが、それでも、一応は先達だ。

そちらの道は行き止まりだと、教えるくらいは許して欲しい。

「自己鍛錬でも始めるのかと思つていたのだが、違うのか？」

「……それは」

「そうだとしたら、普段それなりのメニューをこなしている身で、加えて休息を取るべき夜中にそんな事をすればどうなるのか、わからないようなタイプでもないように思つていたんだが、見当違いか？」

恭也の言葉に、ティアナは拳をぎゅつと握りしめる。

「……馬鹿で、いいです」

「もつたいのない事を言う」

「私は！ 馬鹿でも！ 馬鹿でも良いから強くなりたいんです！ ならないやいけないんです！」

張られた声には、声量の割に空気を揺らす力強さは宿っていない。

それを切り裂く痛々しさが、どうしても勝る。

「そう思っているのなら、なぜ鍛錬を始めなかった？」

「……」

「教導官に言われた事を、飲み込むべきだと思っているから、ではないのか？」

「……う」

恭也はあの出撃の様子を司令室で見たいし、その後の顛末まで含めて隊長陣から報告を受けている。だから、大体の事情はやはり察せる。

「しかし、べきだとは思っているが、そうしたくない気持ちもある。だから、どっちつかずで立ち尽くす」

多分、この娘は元々素直で一途な子なのだろう。だからこそ、ねじ曲がり方もわかりやすい。

「頭ではこれはいけないとわかっている部分もある。だけど、感情はどうしても言うことを聞かない。それに従って結果さえ出せば、自分の理性が下した判断だって叩きのめせるとも思う……まあ、甘い誘惑ではある」

「……っ」

キツと、ティアナがこちらをその意思の強さを感じさせる瞳で睨みつけてくる。

説教出来る立場でないと思っている癖に結局言ってしまったているのだから、その鋭さは甘んじて受け止めるべきだろう。

「ランスター二等陸士、だがな、その誘惑はやはり、乗れば道を逸れる事になるだけだ」

「……さつきから！」

瑞々しい、そう言つてはからかっているようだが、恭也からはやはりそう見えてしまう彼女の激高は速く熱い。

「さつきから、わかった風な事を仰られていますけど！　こんなお決まりな台詞、言いたくはないですけど！　……貴方に私の何がわかるんですか！」

「劣等感の苦味、無力感の熱、焦燥感のやるせなさ、あたりだろうか」

「……馬鹿にするのもいい加減にしてください。貴方に、そんな事わかるわけないでしょう」

ティアナ・ランスターの釣り気味の瞳が、闇の中で光る。

「SSSの規格外に、再試験でやっとBランクを取れた凡才の、一体何がわかるんですか？」

「俺は元々、魔導師じゃない。今もあまり、そういうつもりはない」
「……どういう」

体感で言えば、恭也は魔法を覚えてまだ五年である。剣一筋だった年月は、優にその三倍以上はある。

今にしたって、御神流の中に魔法という要素を組み込んでいるという意識の方が強い。

高町恭也の本質は、やはり御神流の剣士なのだ。

「俺は元々、御神流という流派の剣士だ。その道こそが、俺の本領で本域だ」

「……ツインのショートソードを使う剣術が戦闘スタイルの大元にあるという話は、聞き及んではいますけど」

「君にとっての魔法が、俺にとってのその御神流剣術だと思ってくれ。俺が自分の価値を一番示したいのは、示さなきゃならんのは、御神流の中だ」

黙ってこちらの言葉の続きを待つティアナは、怪訝な顔だ。

「俺には、父がいた。俺に剣を教えてくれた、目指すべき背中である男がいた」

「……いた、というの、じゃあ」

「そうだ。護衛の仕事をしていたんだがな、その中で逝った。君のお兄さんと同じように」

「……っ」

ティード・ランスター。

ティアナの実兄であり、両親を亡くしていた彼女にとって最後の身内だった人物。首都航空隊に所属していたエリート魔導師。

執務官を目指す道半ば、犯罪者追跡任務でKIA。享年、21歳。

恭也は書類上でしか知らないが、彼の死がティアナに異様な向上心

と劣等感を植え付けたのは間違いない。

「そう言い切れるのは、それらがかつて恭也も慣れ親しんだ感情だからだ。」

「なぜ俺に君の気持ちができるかと聞いたな？　簡単な話、同じ穴の貉だからだ」

「……私と、特導官が、ですか？」

頷いて、恭也は続ける。

「父は、天才だった。その才に胡座を決してかかないという事まで含めて、紛うことなき天才剣士だった。今の魔法を使う高町恭也がどうあれ、純粋な剣士としては俺とは明らかに格の違う人だった」

「……」

「死んだ彼には、遺したものがあつた。護つてきたものがあつた。だから俺は、その技を、道を、剣を受け継ぐ俺は、代わりを果たさねばならないと思った。他の誰もいやしない、だから俺がやらねばならんと思った。……代わりが来ると、示さなきゃならなかった。同じ高さに届きやしない未熟な腕で」

「……あ」

ティアナが小さく声を漏らす。

「こちらの言わんとする事を、多少なり察してくれたようだった。」

「それからの日々は、……まあ、惨めなものだったよ。どうしてもあの人に届かない劣等感で口の中はいつも苦くて、代わりの役目を上手く果たせない無力感で内臓は焼かれるように熱くて、だからだろうかな、目の前が暗くなるくらいの焦燥感に、馬鹿みたいに衝き動かされてしまった」

恭也が彼女に語るこれは、経験談にして当然ながら失敗談。

「鍛錬をした。限界なんて完全に振りきって、鍛錬を重ねた。それしかなかったし、それが間違っていると疑う事すらなかった。才能も実力もない俺に継げたのは、努力だけだったんだ」

「……それで」

「なんだか随分いたたまれないような顔をして、身につまされているような顔をして、ティアナが問うてくる。」

「それで、どうなったんですか……？」

「俺は、俺を殺してしまった。今でも、深く後悔している」

「え……」

複雑な事情と展開が折り重なって結果的に、かつ奇跡的に完全な回復を遂げた右膝が、少し疼いた。

「ころ、した？」

「ああ。剣士としての、御神流剣士としての俺は、間違いなく誰でもない俺自身がその時、首を掻き切って殺したんだ」

言いながら、恭也は少ししやがんでズボンの右裾を膝上まで一気にまくり上げた。

「……っ」

「なあ、ランスター二等陸士。——君もこうなるぞ」

露わになった右膝には、大きく深く抉れた痕が踊る。機能は回復したものの、古傷としての見かけ上の欠損は残っているのだ。

「無茶をやって、俺は膝を壊した。膝は剣士の命だ。特に、御神流は脚の速さが生命線だからな、それをやっては生きていけない。少なくとも、もう一人前には届かない」

「……じゃあ」

「そうだ。父を目指し、自分の出来る全てをしようとして足掻いた結果、決して届かない自分になった。自分を既に殺しておいて、さらに死にたくなる気分だったよ」

君も、こうなるぞ。

裾を戻しつつもう一度言った恭也に、ティアナは唇を噛んで俯く。

「今のように無茶をやり続ければ、遠からず君は俺の後輩になるかもしれない。最悪、致命的に、決定的に、お兄さんの後を追う事は出来なくなる」

「……」

「俺の膝は、決して良い事ばかりではない色々な偶然が重なって、壊してから十年も経った後に奇跡的に治りはしたがな。だが、壊した事実、のたうち回った過去は消えんし、時間も決して戻らない。……この後悔の味は出来るならば生涯、知らない方が良い」

今は治ったとは言え、もし自分が膝を壊していなかったら……とい
う詮のない妄想に取り憑かれる夜は、それでもそれなりにある。

そんなもの、自分よりも若い人間に味わって欲しくないと思うの
は、それなりの歳になった証拠だろうか。

「……………でも」

彼女は、俯いたまま、拳をぎゅっと握りしめて、揺れる声で言った。
「……………じゃあ、だめなんですか？」

訓練中は負けん気と勝ち気に彩られていた彼女の瞳から、ぽつりと
一粒、不安の証が落ちる。

「だって、だって、さ、才能が、ないんですよ。それで、ど、努力もつ、
し、しちやいけなかったら、だって、それじゃあ」

ところどころをつつかえながら、彼女は続ける。ぐつと唇に力を入
れた顔で目元を拭うその仕草は、ひどく痛々しく。

「な、なんにも、できないじゃないですか……っ、なんにも、なつ、な
らないじゃないですか……！ わたし、わたし、兄さんに、な、なに
も、なんにも……っ！」

それでも、恭也は思う。

「そんなの、やだ……！ ランスターの弾丸が、兄さんの魔法が、ばか
にされたままなんてやだ……っ！」

彼女の立ち姿を、ひどく愛おしいと思う。

「ランスターの弾丸は、ちゃんと敵を撃ち抜ける……！」

涙に濡れて揺れながら、それでもティアナの言葉には力がある。

「兄さんの魔法は、ちゃんと誰かを護れる……！」

訓練の中で見せた以上の、折れない引かない確かさがある。

「兄さんは、にいさんは……おにーちゃんはッ！ やくたたずなんか
じゃないッ！」

魂から発したような熱が、血を吐くようなその声には宿っていた。

「だから、だから、だから、わたしは！」

「……………そうだな」

一步、恭也は踏み込んで、その女の子の手を握る。硬く握りしめら
れて、青白く染まったその手を包む。

「……とくどうかん？」

「才能がなくなつたつて、努力すら出来なくなつて」

フェイト以来だ、そう思った。

「だからと言って誓いまで、捨てなきゃならん道理なんてない」

「……え？」

こんなにも自分に似ている人間と出会うのは、フェイト以来だと思つた。

彼女とはまた違った所で、しかし同じくらい、ティアナは自分とよく似ている。

自身の未熟を憎む惨めさが、立てた誓いを腕がちぎれても放せないだろう強情さが、そんなどうしようもない人間性が、どうしようもなくよく似ている。

今日の前で泣く女の子は、父の墓の前で刀を握りしめた、きつとあの日の自分なのだ。

「ランスター二等陸士、君がこの手に握つたものを、手放す必要はない」

「……で、でもっ」

「俺達がいる」

口について出た言葉は思いの外、口幅つたいもので、しかし本音だ。「なのはの訓練は確実に君の足場を固めている。それが強固であればあるほど、君は迷いなく遠く、高く飛べる。そして」

闇夜の中、恭也は彼女の手を握つたまま、告げる。

「もし、君にその気があるのなら、一つ提案がある」

「……てい、あん？」

「ああ。……汚れた技だ、穢れた力だ、決して綺麗なものじゃない。だが、それでも、斬るべき敵を両断するに、不足はないと俺は信じている」

なのはにも、フェイトにも、自分の一存で決めていいと、これは了解の取つてある話だ。

「ランスター二等陸士、君さえよければ」

だから、あとは委ねよう。

泣きながら、それでも護るべきもののためにその両足で立つ事を止めない、この娘の選択に委ねよう。

「御神の門を、叩いてみないか」

「すまないな、忙しいというのに」

「ううん、大丈夫。……実はね、ちよつと前にヴィータちゃんやシグナムさんも来たんですよ」

「そうだったのか」

守護騎士、考えることは同じということか。

分隊のそれぞれ副隊長を勤めている家族二人の顔を思い浮かべながら、リインフォースはそんな風に思った。

「リインフォースさんこそ、いろいろ調整で飛び回ってるみたいですけど」

「なに、役割分担というものだ。今日などは、現場に出なかつたしな」交代部隊隊長であるリインフォースの仕事は、メインの隊が出撃に出た時の後詰めやらが主だが、他にも教会や他の遺物管理部との調整も多い。これは、ベルカと縁深いことや、もともと一から五課の管理部と仲が良い事によるものだ。

今日も、ついさっきまでベルカ自治領区に出ていた。

「今日の顛末については移動中に確認をした。それで、少しな」

「うん……」

リインフォースの言葉に、なのはは少し苦味のある顔で頷いた。

ホテル・アグスタの件の後処理も一段落がつき、事務業務も切り上げ時の機動六課隊舎。

リインフォースは寮の部屋へと帰りしなの彼女を捕まえて、面談室と呼ばれる個室に二人で入っていた。

「それで、話ってやっぱり」

「ああ、ティアナのことだ」

テーブルを挟み、向い合つて座りつつ、なのはに問う。

「若い魔導師が力にこだわるといいうのは珍しくもなんともない話だが、今日の様子を見る限り、あの娘のあれは少しばかり度を越して見える。余裕がなさすぎる、というべきだろうか」

無茶なカートリッジロードを行い、制御の完全でない攻撃を敢行、仲間を誤射しかける。下手をすれば命にかかわる現場で、少しばかりの功名心でやってしまうには、少々重い行為に思えるのだ。

「あの娘は、なにを抱えているんだ？」

「……うん」

なのはは、ティアナをスカウトする際にスターズの隊長として、そして教導官として他の隊員よりも多くの事を知っている。だからリインフォースは、今までは彼女がわかっているならば良いかと詳しいことを問うてこなかったのだが、さすがに今日の出撃の様子を見てみるとそういうわけにもいかなかった。

「……ティアナにはね、お兄さんがいたんです。十一歳上で、両親のいなかったあの子にとって、お父さんお母さん代わりでもあった。ティエダ・ランスター一等空尉、首都航空隊所属の執務官志望」

抑えているがゆえにだろう、妙にのつぺりとした口調で、なのはは始めた。

「二等空尉で首都航空隊か、なかなかのエリートだ」

一等空尉まで登り、さらに所属が精鋭揃いの首都航空隊というのは文句なしに管理局の中でも一握りの存在である。

執務官ではなく志望というのも、特にマイナス要素ではない。本気で目指しているというだけで、優秀な証明ですらある。執務官というのはそれほどの難関だ。

十台の前半も前半に執務官資格を獲得したフェイトやクロノを見ていると常識が崩れそうになるが、彼らは一握りというか完全にイレギュラーであり、一般的な例では決していないのだ。

ティエダ・ランスターは間違いなく、優秀な魔導師、

「犯罪魔導師追跡任務中、その対象と交戦してK I A。享年は21歳」
だったのだろう。

「……」

「エリートだった。……だったんだけど、だからこそ、なのかな。テイアナの心に影を落としたのは、その葬儀の中だった。上官の一人がね、言ったらしいんです。”死ぬならせめて、相討ちくらいに持っていけばいいものを”、”首都航空隊の名折れだ”、”役立たず”、……みたいなことを」

「……よりもよって肉親がいる前ですか？ いるところにはいるものだな、そんな下衆が」

なかなか、胸糞の悪い話だ。隊の誇りがあるのだろうか、胸を張って見せる向きを完全に間違えている。

戦いで散った死者に対して無礼な口を叩くなどというのは、ベルカ騎士のラインフォースからすれば完全に気の違った行為であるし、そうでなくとも唯一の家族である兄を失ったばかりの少女の前で、そんな台詞が吐けるといっては尋常な神経ではない。もちろん、悪い方向に振り切れて。

「代わりに自分が執務官になって、大好きなお兄さんの魔法が、お兄さん自身が、役立たずなんかじゃない事を証明するんだって、あの子はそれを一番の目的にしているんです。直接本人に私が聞いたわけじゃなくて、前の部隊の隊員さんなんか教えてくれた事ですけど」

「……なるほど」

大きな納得に、ラインフォースは深く息を吐いた。

「それで、ああなったわけか。……全面的に理解した。納得だ」

ラインフォースの眼から見て、テイアナの身の上は上昇志向をこじらせる要因が十二分に揃っていると見える。

「親しいものの穢された名誉のためというのは、抗いがたい強い強い感情だ。……それに、加えて言うなら」

「……うん。単純な魔導師の資質としては、多分、お兄さんの方が優れていたんだと思います。それについての劣等感……というか、焦りみたいなものも、きっとあるんでしょう」

兄の汚名をなんとかしても雪がねばならないというのに、自分は兄よりも資質の時点で劣っている……などとなれば、それは焦りもしよう。

このままでは駄目だ。

そんな思いに絡め取られて視野が狭くなるのは、仕方がない。

今日の任務で彼女がしでかしたあの行動まで仕方ないと言って許してやるわけには決していかないが、それでも、その背景には大いに納得が出来る。

「……特別私が何をしてやれるというわけでもないだろうが、うん、聞いておいてよかった。色々わかったよ。……ティアナについてだけじゃなく」

そう言つてその瞳を見ると、なのはは複雑な顔で、恐らくは笑つた。

この話でわかつたのは、言つた通りティアナの事だけではない。

「なのはがなぜあんなにあの娘に対して微妙な態度なのか、ようやくわかつた」

「……微妙、ですか、やつぱり」

「ああ。甘いといふかなんというか、訓練で甘くしてるわけでは決してない。そうではなく、そこまでののはが考えて面倒を見る義務があるのか、くらしいの事まで考慮に入れて綿密に指導案を作っているだろう、そういうところがだ」

リインフォースの見る限りなのはの教導は、この六課にいる間のためだけの、当面のレベルアップだけを考えたものではない。

執務官志望の彼女の、将来の任務まで考えて、なるべく多くの可能性に高い確度で手が届くよう、最大限配慮されているのだ。

「それであの子を焦らせてるんだから、結局上手く出来ていないんですけどね」

「そういう見方も、間違つてはいないだろうな」

ティアナの焦りは、だからこそその部分もあるのだろう。

なのはの教導は将来の可能性のため、特に基礎固めに注力している。それなりに歴戦のベルカ騎士として言わせてもらえば、それは結局、後々に俯瞰で見れば強くなるための最短ルートであり間違いなく王道なのだが、しかしわかりやすい力を求める若者受けは悪いだろう。

ティアナはまさに、過去の出来事による視野狭窄でわかりやすい力

を求めてしまっている典型であり、相性はある意味で最悪だったのだ。

「だが、なのはが間違ってるという話でもないはずだ。なのはは教導官として最善を尽くしている」

「……リインフォースさんこそ、なんだかんだで私に甘いですよ」

「なのはが素直に甘やかされてくれないからだ」

間髪入れずにそう返すと、彼女は困ったように笑った。

それは、笑っただけの暗い顔だ。

「ずっと、妙だと思っていた。あんなに熱心に、本来の職責は優に超えるレベルで親身に考えているくせをして、あの娘に不自然なほど踏み込んでいかなないことを」

「……そう、見えますか？」

「事実だろう。例えば、前にヴィータから顛末を聞いたが、騎士恭也に向かってあの娘が生意気を言った事があったのだろうか？　もし自分がその場にいたのなら、私は何も言わずにいる自信は少しもないが、なのはは黙っていたそうじゃないか」

半年ほど前の事は言わずもがな、さらに最終的に記憶を無くして管理局から去る事になった馬鹿女の一件もありで、なのははかなり恭也の周りに対して神経を張り巡らせている。

そこにきて話聞く限り、管理局所属の局員としても、教えを受ける者としてもその時のティアナの態度は問題があり過ぎ、そして知らなかったとはいえ無神経に、恭也の内面をかき回し過ぎた。

ヴィータなどはあの時のティアナに対しては正直、手榴弾を体中に括りつけた状態で地雷原に飛び込んでいったという認識で、爆発が大きすぎるようならむしろ護ってやらなければならぬと構えたものらしいが、予想に反してなのはの方は不発に終わったものだから、かなり不可解に思ったと話していた。

代わりに、事が恭也についてとあらば、危険度においてなのはと完全に伍するもう一つの地雷原の方が爆発したようだが。

「なぜそんなにアンバランスなのだろうかなと思っただけ……」

「……うん」

ゆるゆると、ある種観念したような緩やかさで、なのはは頷いて言った。

「私、あの子を自分と重ねてる」

「……私は、それについてどうこう言える立場では決してないが」

親代わりの兄。

歳の差は、十と一つ。

そして、十歳あたりの幼い時に、傍から離れて行った。

聞けば聞くほどそれは、自分たちが発端となり起こしてしまった事件の被害者達に、結末に、よく似通っていた。

だからこそ、決定的に違うのは。

「それでも、おにいちゃんは、帰ってきた。私はおにいちゃんに、帰ってきてもらえた」

「……」

「馬鹿だつてわかってる、勝手に萎縮するのは」

ティアナとなのは。

確かに、なのはは兄を喪わなかった。その点で、ティアナより恵まれていると言うのなら、恵まれてはいるのだろう。

だが、そんな事を言い出したら人なんて、何かでは誰かより恵まれて、何かでは誰かより不遇なのだ。

そこに足をとられたら、何も出来なくなってしまう。

「そうだな、馬鹿だ」

そもそも、確かになのはは兄を喪わなかったが、その代わり、目の前で兄が崩れる姿を見る事になった。しかも言わば、自分にもしもつと力があればという思いにとらわれるくらいの距離と立場にも居ただの。

当事者として、自らを責めてしまう位置に居たのだ。

比べるものではないが、心身に受けるダメージは、こちらだつて並大抵のものでは絶対になかった。それは十年前の事件の後、しばらくその愛らしい瞳に暗い光だけを湛え続けた彼女の姿が、何よりも確かに証明していたはずだ。

「なのはが後ろめたさを感じる理由なんてない」

「……うん」

それでも、状況が、身の上が似通っているから、彼女はそれを無視出来ないのだろう。

馬鹿な娘だと、本当に思う。

不器用な人間だと、心から思う。

「でもね、私はね、ラインフォースさん、私、今日、ティアナに、ひどい事言ったよ」

テーブルの上をじいっと見つめるように下を向いて、なのはは落とす。

「きつとあの子に一番響いてくれる言葉だと思って、言ったんだ……」

”人なんて、簡単に死んじゃう”って。本当にお兄さんを喪ったティアナに、喪わなかった私が」

ああ。

常々思うが、どうしてこの娘は、自分を護る事がこんなに下手くそなのだろう。

「嫌われたっていい、憎まれたっていい、それはいい、本当にいいの。だけど、あの子が帰ってこれないのだけは、それだけは……それだけは、私は絶対防がなきゃならない。何をしたって」

これが自己陶醉だったなら、むしろどんなにか良かったらうか。

誰かのためにこんなに頑張っている自分、だけど傷つく可哀想な自分、そんなものに酔っ払うためにやっているのなら、多分まだ救いやすい。

だけど、違うのだ。当たり前のように言い切れる。

「強くなつてほしい、ちゃんと帰ってこられるように。何だつてする。……それはきつと、しないという選択も含めて」

この娘は、これを剥き身の心でやっている。虚飾のない、だからこそ直接痛みに触れる形で。

本当に、大馬鹿だ。

「それは、騎士恭也が今、ティアナのところに行っているらしい事を言っているのか？」

ヴィータの問いに、なのはははっきりと頷いた。

「うん。……知ってたんだ」

「たまたまだがな」

警備の意味合いでの外回りの最中、整備場裏手の林方面に行くところを、残業をしていたらしいヴァイスに止められたのだ。

曰く、ちよつと取り込み中らしいんで、と。口の軽いお調子者ではあるがその実、彼は中々目端の利く男だ。

「いいのか？ あんなに必死に考えて、自分で立派に育てあげようとしていたじゃないか」

「こつちの事情なんて、ティアナには関係ないですよ。あの子にとって必要なのは、あの子のための最善手です」

君の打つ最善手は、結局いつもそうだなという言葉を、リインフォースは飲み込んだ。言ったって、効き目のない事はそれなりの付き合いだ、学んでいる。

高町なのはの打つ最善手は、自分の痛みは自分が我慢すれば良いからと言わんばかりに度外視しがちだ。

「……はあ、なんというかな」

「そんなにため息を吐かなくても」

「吐きたくもなる」

だって、兄妹、よく似ている。

極まって本当に死にかけた兄ほどじゃあないけれど、やっぱり兄妹よく似てる。

恭也も、なのはも、一番危うかった時期からすると大分マシンにはなった。だけどそれは彼らの根底なのだろう、程度の問題であって、性質自体は変わらない。

自身の痛みに、彼らは非情なのだ。

「もちろんですけど、私の教導もしっかり続けますよ？ 私は私がするべき範囲で、最大限、あの子を育てる。だけど、私だけでって固執はしない。……それで良いんだと思います」

「正直言えばだ、あの手の危うい子の対処は、間違いなく誰より騎士恭也が適任だ。その判断は正解だと私も思う」

あれはもう、理屈どうこうの域を堂々と超えている。

断言するが、高町恭也の持つ包容力というか安心感というか、心の尖った人間に寄り添って、削るでもなく抑えるでもなく、自然と柔らかくして丸くする能力は、その身に宿した戦闘力と同じくらい異常だ。

我が息子ながら父性の化け物と、桃子が零した言葉をリインフォースは聞いた事がある。

「騎士恭也に無理が掛からないかは心配だが……結局、あの人はテイアナのような子を放っておける性質じゃない」

無理に放っておかせる事の方が、多分結果的には負荷を掛けてしまう事になるだろう。

高町恭也という人間は、箱の中に大切に仕舞い込まれて、それで回復出来るような人でもないし、そもそもそこで生きているようなタイプでもないのだ。

「君がそれで納得してるというのなら結局、私が言える事はないんだが」

一旦そこで言葉を切って、改めてリインフォースはなのはと眼を合わせた。

「ただ、これだけは頼む。なのは、もし痛いと思う事があったならせめて、痛いと言ってくれ」

「私は……」

「ああ、いや、恭也同様、君にも難しい注文かもしれない。だから、そうだな、ではせめて、痛いという顔くらいしてくれ。澄ました顔で取り繕わないでくれ」

「わ、……私って、そんなにやせ我慢に見えますか？」

ちよつといじけたような顔で、なのはが返してくる。童顔の彼女がそうすると、仕事中の凛々しきから一転して、とても少女らしい可愛らしさが表に出る。

「見える、ではなく、そうなんだ」

「う、く、……お、おにいちちゃんほどでは」

「恭也の域までは行っていない。が、それが何か大丈夫である事の証明になるか？」

「……なんにもならないですけど」

視線を下に逃がしながら、なのははそう零す。

愛らしい顔つき、小さな肩、細い体。

器用なものだからなかなか人に悟らせないけれど、この娘はその小さな身に色々なものを背負い込み過ぎている。

「恭也に、”もつと人を頼れ”だの”弱音を隠すな”だの説教をするのなら、まずは自分がそうしなければならぬのではないか？」

「……撤回します、リインフォースさん、私に全然甘くないです」

「甘かろうが渋かろうがどちらでも構わん。ああそうだ、なのははに改善が見られないのなら役割に不適合として、やはり部屋割りを変えるべきだと主はやてに進言しよう」

「や、やだ！ 絶対やです！」

強く支えるもの。幸運の追い風、祝福のエール。

それが自分、リインフォースだ。

「その場合、騎士恭也の相部屋は誰になるだろうか。フェイトか、主はやてか、いやシグナムもありそうだ、シヤマルというのも当然あるな」

「うああああああ誰になってもおにいちやんの貞操は保証されない気がするッ！ はやてちゃんはさり気なく外堀を埋めそうだし！

シグナムさんは筋肉が見たいとか言って色々触りそうだし！

シヤマルさんも診察っていいながらなんだかんだ、なんだかんだをしそう！ フェイトちゃんになんかあった日には毎日が事件日だよ！」

護ろうと思う。

自分の主は八神はやてだ。だが、彼女しか護ってはいけないわけではない。主も、それは望んでいない。

だから、護ろう。護りたい。

護るのだ。

「いや、フェイトは騎士恭也を無理に襲うことなど」

「襲わないだろうけど！ 盗撮！ おにいちやんのいよいよ撮っては

いけないところの映像を手中に収めますよあの淫乱パツキンは！」

「うーん……いや、さすがに一線は超えないはず……」

「本当にそう思う……？ おにいちゃんの全部が映った映像をゲット出来るチャンスを、フェイト・テスタロッサ・ハラオウンの中に潜む煩惱の獣が、逃すと思う？ 最悪、無意識下でやるはず」

「……ひ、否定出来ない」

空に揺蕩う風に誓おう。

出来る限りを果たす。

持てる限りで果たす。

「で、では、……不詳、このリインフォースが騎士恭也と、その、あ、相部屋になろう」

「そんな官能ボディの持ち主とおにいちゃんを同じ屋根の下二人つきりで過ごさせるなんて、私の眼の黒い内には絶対させない」

「か、官能ボディって……」

自分は、高町恭也と高町なのは、この他人に優しく自分に厳しいをどうしようもないレベルで地で行ってしまう不器用な二人を、彼ら自身に代わって包むのだ。

それがきつとあの日あの時、この世に残る事を許された理由の、大きな大きな一つのはずだ。

「……じゃあ、聞くけれど」

「な、なんだ？」

だが、とは言え。

「リインフォースさんは、おにいちゃんに対していやらしい思いは一切抱かない？」

「……………」

その資格はないからと諦めたはずの、胸の疼きも未だにあつて。

「アアアウトオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！ 相部屋なんて絶対駄

目です！」

「ア、アウトというなら！ なのはこそアウトだろう！ きよ、兄妹で、その、お、同じベッドに寝ているんだろう!? 何もしていないだろうな!?!」

「そんな度胸があつたらとつくの昔にやってるよッ！」

「た、たしかに……！」

「後ろめたい下心を捨てきれないわけで、ゆえになかなか胸も張れないというのが情けのない事実だった。」

「じゃあスバル、行ってくるわね」

「うん、……いいなあ、ティア」

「ま、まあ、恵まれているってのは否定しないわよ。特導官直々の指導なんてね」

部屋のドアを開けつつ、振り向きながらティアナはスバルにそう返した。

言ったとおり、今の自分は随分恵まれていると思う。

「いやいや、それももちろんあるけどさ、ほら、こんな夜中にあの『高町恭也』さんと二人つきりって、その状況が」

「……アンタねえ、お姉さんに毒されすぎよ」

「あはは、冗談冗談。……そもそも、ヴィータ副隊長の忠告を振り切る度胸がないよ」

「う、た、たしかに……」

高町恭也に色目を使うなどという小柄な彼女の重い言葉は記憶に新しいし、実際、二大怪獣の激突も目の前で見ている。

まさか、浮足立った事なんて考えてはいけないのだ。

（ていうか、確かに強いし、格好は良いし、……なんか優しいけど、でもだからと言ってそういう相手として想うかっていうと、そんなわけでもないし）

人間、そんなに単純なものではない。少なくとも、自分は違うと思いたい。

「とにかく、行ってくるわね」

「はいはい」

ドアを閉め、ティアナは部屋を出た。

廊下を行って階段を降り、エントランスを抜けて寮を後にする。屋外に出た途端、春の匂いと夜の気配の交じり合った、なんとも言えな

い雰囲気、身に包まれた。

夏よりも緩く、秋よりも色づき、冬よりも賑やかで、しかし陽の降る朝と昼より孤独な時間。木の芽時は変な人間が出やすいというが、この妙なバランスがそうさせるんじゃないだろうか、なんて思う。

(……こんな事、前は思わなかったなあ)

季節感がどうだ、空気がなんだ。

そんな事、気づきもしなかった。自分の頭はずっと、自分の内にだけ向いていたから。

心の奥底の泥沼から、足を引き抜く事だけを考えていたからだ。

「……………」

別に、今だって泥沼は依然としてある。気を抜けば必ずぶと、きつと沈んでいくんだろう。

だけど。

「…………さ、始めるか」

いつもの場所、整備場裏手の林に到着、適当な位置でティアナは目をつむった。

深呼吸。身体のを抜く。

そう、力を抜く事だ。

最近、それを覚えた。

泥沼から足を引き抜くのに、力めば力むほど、それは結局最後は沈んでいくだけだと知った。そもそも馬鹿みたいに力む必要がない事を、初めて知った。

(余裕の無さは可能性の薄さ、だっけ)

仏頂面のその人が言った言葉を、鵜呑みにするわけじゃないけれど、別に、そこまでべったり心を預けているわけじゃないけれど。

それでも、本当の事なんだろうなあなんて素朴に思ってしまうくらいには、その人の言葉には重みがあるのだ。

膝のえぐれた痕と、奥に確かに無念さが見える瞳の揺れ。あの日見たそんなもの達が、その何よりの証明だ。

「……………」

少し、物思いに耽り過ぎた。改めて集中し直し、魔力を奔らせる。

発動する魔法は身体強化。ベルカのお家芸だが、ミッドにだってもちろん存在する基本技術である。

「……………」

しかし、テイアナが今発動させたものが普通のそれかと言うと、そんな事はまるでなかった。

身体強化は主に出力増強や耐久度上昇のために行われるが、身体の機能を上げるという性質上、五感の鋭敏化にも使える。とは言え、魔力・魔法による様々な探知方法がある以上、それは基本的に副次的な効果に過ぎない。

「……………」

だが、今のテイアナの身体強化は、完全に感覚鋭敏化に効力を振っている。しかも五感全体ではなく、聴力ただ一つに、だ。

単純に聴こえる音が大きくなるというよりは、聴こえていなかった音を大量に拾い、一つ一つのディテールもより細かく感じるといふ、聴感上の音密度を上げているような感覚である。

「ぐ、……………」

はつきり言おう。

死にそうだ。

虫の鳴き声、木の葉の擦れ、風の囁きに、整備場からの金属音。隊舎のあちこちに据え付けられた機械が鳴らす細かいノイズまで拾っている。

とにかく、情報量が多すぎるのだ。頭がパンクする。ぼたりぼたりと、自分の顎から落ちていった汗の落下音すら鮮明だ。

素肌で受け止めるのではなく、ガラス一枚を間に挟むようにして冷静に情報の洪水を観察する——あの人が教えてくれたコツを思い返して、必死に実践を試みる。

御神式・心。

周辺の状況を常軌を逸した範囲と精度で把握する本家本元の御神流に存在する同名の技の、簡易劣化版と言ったところ、らしい。

(こ、れが、できるように、なる、と……)

自分の弾を完璧に見切って避けきった、高町恭也の強さの一端に指

がかかる……はずだ。

少なくとも、当人はそう請け負ってくれた。

元となった御神流の技は長い長い精神修業と身体鍛錬の果てに、『氣の流れ』なるものの存在を掴み、研ぎ澄ませた味覚以外の四感と共にそれを感じる事で、周囲の空間を完全に把握するという仕組みらしい。

(……話だけなら、胡散臭いことこの上ない、けど)

”意思を持った万物の身体に、その周囲の空間に、それは必ず巡っている。魔力の様に強く、直接的で多彩な力を持つものではないが、確かにある。信教や信仰の問題ではなく、単なる事実だ”

そう言った彼の能力が、魔法だけでは説明が付かないのは確かだ。だつたら、なんだっていい。

その技術が本当にあつて、それで強くなれるのなら、なんだろうが構わない。

御神式では、身体強化魔法によつて感覚を鋭敏化させる事、研ぎ澄ませる感覚を一つに限定する事によつて、自力で四感全ての感度・練度を極め上げる本家の御神流よりも、氣の流れの知覚に必要な時間を大幅に短縮出来るらしい。

御神式の教え子はティアナが初でありため、その理論は確認されてはいないのだが、しかし恭也にとつてはそれは十二分に確信を持てる事らしく、”魔法を使って身体の性能を引き上げ、聴覚一つの絞れば、素質のある人間にとつて氣の知覚に届くのはそこまで難しい事じゃない。少なくとも、本家の心に比べれば圧倒的に至りやすい”と、力みのない当たり前の現実を語る口調で言っていた。

もちろん、では御神式の方が優れているかといえどそんな事は決してないとの事で、曰く、どうしようもなく伸びしろが狭いらしい。会得した後の成長が、本家のそれと比べればひどく小さいのだと言う。会得にまでは至りやすいが、格段に感度も範囲も劣り、さらに魔法の発動まで前提とあつては、確かに簡易劣化版というのも頷ける話だ。

だが、ティアナにとってはそれで構わなかった。

会得までに何年もかかるらしい本家の技より、伸びしろが狭くとも手を掛けやすい御神式の方が、今の自分には魅力がある。

簡易劣化版だろうが、話に聞くその気配察知の技術は、とてつもなく魅力がある。

(直接の攻撃力や防御力が上がるわけじゃないし、スピードやタフネスが得られるわけでもないけど……私はシューターだ)

シューターにとって大切なのは、撃つべき的位置を素早く正確に把握する事だ。欲を言えば出来る限り静かに、敵に悟られずに。

御神の気配察知は、そういった点において、ほぼほぼ理想的だ。

目視せずとも周辺の状況を高精度で常態的に把握し続けられれば、取れる選択肢は間違いなく大幅に広がる。探知の魔法もサーチャーマも放つことなく、遮蔽物があるうとお構いなしに敵の位置がわかれば、一歩も二歩も相手を出し抜くのは簡単な事だ。

自分には、一応は得意と言える幻術魔法もある。それと組み合わせれば、自分よりも遥かに強い相手でも、真っ向から戦わないという戦術で勝利を拾う事だって望めるだろう。

また、個人としてだけでなく、周りの変化に敏感であるべきシューティングガード、そして現場で状況を読みチームに指針を示すフォワードリーダーとしても、この上ない能力だ。

欲しい、そんな表現では足りない。

縫ったと、そういう言い方が一番適切なんだろう。

強くなりたくて、でもがむしゃらにもがくことも駄目で、焦りばかりが募っていった。

そんなところに、あの誘いは降ってきた。

跳ね除ける選択肢が、頭の片隅にすら不思議と浮かばなかった事をよく覚えている。

直感を信じて動くなんて自分らしくないという自覚はあつたけれど、あの時ばかりはそんな事を言えなかった。

これだ、と。

これを掴もう、と。

あの時、自分は迷いなく、そう思ったのだ。

御神の門を叩いてから、今日で一週間。

「……………」

最初は、30秒も保たなかった。手ほどきを受け、感覚鋭敏特化の身体強化を発動してみても、情報の洪水にすぐさま溺れて崩れ落ちてしまった。

二日目、三日目もほとんど同じ有様だった。少しの変化があったのは四日目、捌き方を掴み始めた……などと言えるほどのものではなかったが、押し寄せる大量の情報に多少は慣れてきたのは事実らしく、二分、三分と持続時間が増えていった。

今では、なんとか五分だ。そしてようやくその五分間、必死に洪水に耐えるだけではなくなってきた。

そもそも、この状態に長く耐えられるようになる事が目的なのではない。

目的は、そう。

「……………」

「昨日よりも、早いな」

周辺把握力の向上なのだ。

その声に魔法を解いて振り返ったティアナの視界の中、そこにはいつの間にか高町恭也が居た。

「うん、順調に上達している」

「……………それでも、この距離まで気づかなかったんですが」

「一応は、俺は暗殺流派の師範だ」

恭也の位置はティアナから五メートルほど。多分彼が本気になれば、余裕でもっと詰められてしまうのだろう。

聴覚を強化し、その捌き方を覚え始めた事で実感したのは、目の前のこの人が魔法抜きでも本当に凄まじいレベルで達人なのだという事だった。

彼は、全てが静かなのだ。

だから、だろうか。

「……………」

「どうした、ぼうつとして」

「え、あ、いえ……」

(……なんとなく落ち着くのは、この人がこう、揺れない感じだからかしら)

大木の傍にいる時と、それはどこか似ていた。

「持続時間も伸びたようだな。魔力の奔りも悪くないようだ」

「ありがとうございます。でも、まだまだです」

「それはそうだ。始めて一週間でものにされてはいくらなんでも簡易版とは言え、何年も修行するこちらの立つ瀬がない」

木の葉の間から溢れてくる月明かりが、彼の顔を柔らかく照らす。その表情は、小さく小さくだが、苦笑しているようにも見えた。

初めて見た時の、凜とした印象。

模擬戦で対峙した時の、恐ろしい鋭さ。

それらとはまた違う今の顔に、どこか暖かい温度を感じ取ってしまったのは、勝手が過ぎる気がして間違っても口に出せない。

「とは言え、多少の手応えはあるか？」

「えと……その、はい」

「うん、やはり筋は良いようだ」

彼の言葉に答えたとおり、正直、そこそこの手応えはある。この技術の有用性が、話としてだけではなく実感としても得られてきた。

「気配、気の流れ、つていうのも読めるようになれば、もっと色々わかるんでしようか？」

「そうだな、例えば相手の筋肉の強張りなんかも掴める。すると、次の行動や狙いも大体透けて見えてくる。かなり便利だぞ」

さらりと言うが、それはとんでもない事なのではないだろうか。

それだけが秘訣の全てではないだろうが、どうりで銃口や目線でフェイクを掛けても弾が当たらないわけである。

「……その域まで、いけるでしょうか」

「御神式の心でも、対象を一人二人に限れば出来るはずだ。さすがに大人数となると聴覚一つだけで見る気の流れだけでは、ぼやけてしまつて厳しいだろうな」

「なら、でもそれは使いようですね？ 大人数相手でも、絶対に役立

たないわけじゃない……ですよね？」

「その通りだ。絶対のカードにはならんが、有効な手札の一枚にはなる」

絶対のカード、それは例えば高町なのはの破壊力、フエイト・T・ハラオウンの機動力、八神はやての制圧力。

そんなもの、持つてはいないし、持てないだろうけど。

それでもこの力は確かに、自分の手札の大きな一枚になってくれる。使いようによつては、絶対のそれさえ覆せると信じられるくらい。

「戦闘は、手持ちのカードの強さだけでは決まらん。それをいつどこでどう出すか、その判断こそが肝だ。戦い方を見る限り、君はそれがわかっていそうだがな」

「……一応は、そのつもりです」

答えたティアナに、恭也は一つ頷いた。

その仕草はやっぱり、どうしても心強くて。

「それでいい。ランスター二等陸士、戦いなど、勝った方の勝ちだ。どちらが強かったかなどというのは、究極的には何の意味もない」

「……戦えば勝つ、それが御神流なんですよね？」

「ああ。御神式の君にも、そうであつて欲しいと願っている」

「はい」

結局、不安だったのだ。

行く先が、ずっと暗かったから。

だから足を速めて、必死に走り抜けようとした。

「もう少し、続けられそうか？」

「はい、まだやれます」

だけど今は、歩こうと思う。

走るんじゃないくて、ちゃんと歩こうと思う。

「そうか。では、丁寧」

「はいっ」

同じ闇の下をかつて走った人が、前からこうして手を引いてくれているから。

道が明るくなったわけじゃないけど、暗い事がもう、そんなに怖くないのだ。

すうっと、深呼吸。ティアナはまた魔力を奔らせ、聴覚を研ぎ澄ます。

「……はあつ、はつ、はあつ、……はあ」

「うん、ランスター二等陸士、今日はこれまでだな」

「……」

まだやりたい。

まだやれます。

そんな言葉が、しかしティアナの口からは出てこなかった。

「……は、………はい」

代わりに、絞り出すようにそう言っていた。そう言う他なかったのだ。

もう、脳がまともに働かない。

身体が動かないならいくらでも気合いで鞭打つけれど、頭が働かないというのは、これがいかんともしがたいのだ。

「……あの、特導官」

「なんだ？」

「……私に、この技の訓練を勧めたのって、もしかして、無茶をさせずに寝かしつけるためだったりします？」

薄々……どころでなく思っていた疑問を初めてはつきり聞いてみると、その人は大真面目な顔で答える。

「まさか。一番の理由は君に最も素質がある技術だったからだ」

「二番目の理由がある事は否定されませんね……」

「一石二鳥と言うべきだな。色々都合が良いのは確かだ」

やっぱりか。恥ずかしいような、いたたまれないような、とにかく悶えたい気持ちだ。

ティアナの身体は、早朝から日が落ちるまでみっちり続く高町なのは教導官の訓練で、ぎりぎりのところまで酷使されている。そこにさらに何か他の練習を乗せようとするれば当然オーバーワークになって

しまうが、この特導官とのものは例外だ。

なにせ、気配察知という技はほとんど身体を疲労させない。使うのはとにかく感覚とそれを処理する脳みそ、つまり疲れるのはほぼ頭だけなのだ。

さらに、この練習は長時間行うことが出来ない。限界が近づくとぼうつとしてきて、眠くて眠くて仕方なくなってしまうのだ。まともに続けられなどしない。

身体を傷めさせず、疲労感と達成感を与える訓練。

強くなるうと逸る駄々っ子には、考えれば考えるほど最適な代物だった。

「そうむくれてくれるな、先人の過保護を寛大な心で許すのも、道を行く者の務めだぞ」

「べ、べつにむくれてはいません」

「そうか？」

「そうですっ」

ならいい、そう言った彼の口の端は、やっぱり僅かに上がっているような気がする。

(……この手玉に取られている感じ、なんかちよつと)

懐かしいと、そう思うのはさすがに、絶対に気のせいだ。

性格も顔立ちも雰囲気も、何かもが違う。だからこれは気のせいなのだ。

時折、兄と居た時の事を思い出すのは、何かの間違いなのだ。

「特導官は……」

「ん？」

「あ、……いえ、何でもありません、失礼しました……ん、あれ？」

変な事を零してしまいそうになった口を、慌てて綴じ合わせた時だった。

「誰か……」

「気づいたか、少しまだ感覚が鋭いままのようだな」

遠くから鳴る不規則な木の葉のこすれる音に混じって、規則的な響きを感じる事に気づく。

誰かがこちらにやってくる足音だ。

「……なんで私、だって魔法はもう切っているのに」

「魔法を使う事で一時的に聴覚を研ぎ澄まし、その状態を続ける事で受け取った音に対する処理能力を向上させる。それが君のしている鍛錬だ。たとえ魔法を切った普段の聴覚に戻っても、その修行の成果は現れる。今まで意識の上には登らなかつた音も、どんどん気付けるようになる」

言われて、改めて確かめると、色んな音がよく感じられるようになっていて……ような気もする。

「もちろん、まだまだそれが定着するほどではない。今は魔法を発動し、鍛錬をした直後だから感覚が鋭いだけで、その内に戻ってしまうだろう。だが、続けていけばそれが自然と、さらに強力に出来るようになる」

「これが……」

周囲の変化に常に敏感である事は、かなりのアドバンテージだ。突発的な事態への対応力が違ってくる。例えば不意打ちなんかには、すこぶる強くなれるだろう。

「……あ、でも、特導官は、私なんかよりもずっと感覚が鋭いですよね？ それが続いたままなんて、日常生活は」

「そうだな、正直、全開の状態ではさすがに気疲れが多すぎる。だからかなり意図的に感度を絞っているよ、調節も技術の内だ」

「なるほど……そういう事も出来るんですね」

「君にもいずれ、必要があるほどに感覚が鋭くなってきたなら教えよう。今の様子を見る限り、そうなりそうだがな」

「……頑張ります、あ」

話している内に件の足音の主はもうこちらへと着いていたよううで、木々の間から一人の人物が姿を現した。

「いやあー、こんな遅くまでおつかれ様ですよ、お二人さん」

「ヴァイス陸曹？ どうしてこちらへ」

顔を見せたのは六課のメインヘリパイロット、ヴァイス・グランセニツク陸曹だった。問うたティアナに、彼は手に持った缶ジュース二

本を掲げて見せる。

「なに、差し入れに来たんだよ。毎日熱心にやつてるみたいだからな」
「そう言うお前も、こんな時間まで作業をしているんだらう？　ちやんと休んでいるのか？」

今度そう問うたのは恭也で、彼にヴァイスは軽く答えた。

「色々こだわっちゃう性質でして、半分趣味みたいなもんですから大丈夫ですよ。あ、コーヒーですけどいいですか？」

「ああ、悪いな」

(……ええ)

ヴァイスが恭也に缶を手渡す光景を見ながら、ティアナは内心驚愕である。

「そうだ、お借りした単車、いいもんすねえ。こっちのヤツにはないエンジンの拍動が心地いいですよ。ただ、タイヤがそろそろ交換時かも」

「ん、そうか……。あちらに戻る暇はさすがにないな。こっちで探せたりするか？」

「それなら、異世界からの輸入物に合わせてパーツを専門で作ってくれるところがありますから、そこに持っていくといいですよ。ツテもあるんで紹介します」

「そうか。すまん、それは助かる」

(か、軽う！　なんでこんなにフランクなの……!?)

どこをどう見ても、下士官と将官の会話、距離感ではない。

「その内どつか、恭也の兄さんとは走りに行きたいんですけどねえ。レリックの件がもうちよい落ち着けばなあ」

「きよ……!?!　あ、あの……、ヴァイス陸曹！」

思わず、ティアナは口を挟む。

「なんだ？　あ、悪い悪い、これお前のな」

「え、ありがとうございます……いや、そうじゃなくて！」

手渡されたスポーツ飲料の缶を受け取りながら、声を上げる。

「な、なんかその、随分とフランクっていうか、……よ、呼び方とかその、それは」

「あー、言いたい事はわかっけど、さすがに勤務時間中のびしつとすべき時にはこんな感じじゃねえよ?」

「そ、それでも、だって……」
「だって、なんだろう。」

(あー……そうか)

混乱した気持ちを探って、すぐに答えは出た。

(ヴァイス陸曹は、こんなにフランクなのに……)

じっくり指導を付けてもらっている自分は特導官と距離を取って役職呼びしているのが、なんだか悔しいような気がするのだ。

「ランスター二等陸士、俺がヴァイスに頼んだんだ」

「……そ、そうなんですか?」

「気安く話せる相手が欲しくてな。ヴァイスとは色々話もあったものだから、つい無理を言った」

「いやー正直、初めてまともに話した時は緊張で死ぬかと思ったもんでしたけどね」

明るく笑うヴァイス、その口調には力みがない。

軽く見えるパーソナリティだが、ティアナの見る限りヴァイス・グランセニツクは決して状況の読めないタイプでも、考えが足りない人間でもない。むしろ、おそらく目端はかなり利く性質だ。

その彼がこうしているというのだから、おそらく、仕事外であれば本当にこれで構わないという事なのだろう。

「ティアナ、お前もどうだよ、兄さんを恭也さんとファーストネームで呼んでみるのも」

「……っば、馬鹿言わないでくださいよ!」

「俺は構わないぞ。勤務時間中はさすがにまずいが、それ以外でならそうしてくれた方が気楽だ」

「え、や、……その」

それは、駄目だ。

(……だ、だって)

そんな風にせき止める自分の気持ちだが、局員としての常識に依ったものだけではない事に、なんだか気づいてしまった。

「……………」

「ランスター二等陸士？ いや、無理なようなら今まで通りでいいぞ？」

「その……………」

じつと、その人を見つめる。

いつも鋭い眼の凜とした表情で、初対面ではなんだか怖い気もしたその人が、実のところ、すごく優しいのはもうわかっている。

こんな駄々をこねている未熟なガキに、毎晩遅くまで付き合ってくれるくらい、面倒見が良くて。

傍にいと、安心をしよう。

これで名前でなんて呼び始めたら、なんとなく、いよいよ預けてしまふ気がするのだ。

今は預けていないと意地を張れている心を、べつたりと。

「や、…………やっぱり、今まで通りで」

「そうか、わかった」

その人が残念そうな顔をしなかったことが残念だなんていうのは、いよいよ馬鹿げている。

気持ちを切り替えようと、ティアナは貰った缶ジュースを空け、中身を喉に流し込んだ。

視界の中では、恭也も缶に口を付けていて。

「つぶ!? ごほっ!」

「おいおいどうしたどうした、普通のスポドリだろうが」

盛大に吹き出したティアナにヴァイスはそう問うてくる。その様子を見て、”ああ、わざとではないんだな”と思った。

だって、わざとだったらもう少ししてやったりみたいな顔になっているはずだ。

いや、そもそも、いくら親しい口調で話しているからといって、そんな事をやっていい相手ではないだろう。

「ランスター二等陸士、大丈夫か？ 気管にでも入ったか」

「え、えと、はい…………」

(…………あれ、モンスターコーヒーじゃない！)

ティアナが吹き出したのは、自分の飲み物が原因なのではない。恭也が口元で傾けていた缶が、あまりに衝撃的だったからである。

黄色と濃い茶色を貴重にしたデザインの缶が目印の飲料、モンスターコーヒー。これは、超激甘の一品として有名なのだ。ティアナも一度スバルに渡されて飲んでしまった事があるが、口の中へ砂糖を一杯に頬張ったような味がして、舌が溶け落ちるかと思った。

『ヴァイス陸曹！ ヴァイス陸曹！』

『なんだよ、わざわざ念話で』

訝しげなヴァイスに、ティアナは噛みつくように返す。

『特導官の飲まれてるの、モンスターコーヒーじゃないですか！』

『はあ？ いや、んなはず……うえええ!? まじだ！』

『まじだ！ じゃないですよ……！ ミンコーヒーと間違えましたね……っ。』

『う、ぐ、やっちゃった……』

ミンコーヒーとは、ブラックに近い渋さながら砂糖をほんの少しだけ使って口当たりの柔らかさも出している人気の品である、のだが一つだけ問題があり、真逆の味を持つモンスターコーヒーと缶のデザインがそっくりなのだ。

出している会社が同じなのだが、日常に不意のサプライズを届けたいとわざとそうしているようで、そもそもモンスターコーヒーが生み出されたのもミンコーヒーと間違えて飲ませて驚かせるためらしい。

ティアナは一度痛い目を見ているため見分けは付けられるようになってるし、買う時には細心の注意を払っているが、ヴァイスのようにならうっかり間違える人間は未だに後を絶たない。

『……特導官、甘党なんですか？』

『いやあ、そんな様子は特に……。一緒に食堂で飯食った時も、デザートなんかはヴィータ副隊長やらにあげてたしなあ』

『じゃああれ、我慢して飲んで下さってるって事じゃないですか』

『う、……そ、そうなるなあ』

『そうなるなあ、じゃないですよ……』

抗議を込めて見つめると、ヴァイスはわかっていると断言するように片手

を上げてから恭也へ声をかけた。

「あのー……恭也の兄さん」

「なんだ？ 変な顔をして」

「いえ、なんつーか、大変申し訳なかったす……決してわざとではなかつたんですが……気を使ってそのまま飲んでいただいて」

「……なんの話だ？」

あれ、と思ったのはティアナだけではないようで、ヴァイスと二人、思わず顔を合わせた。

なんだ、この反応。

「特導官、その、特導官の飲まれているコーヒー、なんとというか、すごくないですか？」

「ん、あー……」

ティアナの言葉に、ちらりと缶を眺め、そして恭也は言った。

「珍しいくらい苦いな、だが飲めないほどじゃない」

「………に、がい、ですか？」

「兄さん、まさか……あ、いや」

しまったといった様子で、ヴァイスは口を嚙む。しかし彼がなんと続けようとしたのか、それは言うまでもない事だった。

「……外したか。コーヒーのパッケージだし、匂いもそのようなものだからと思つたんだが」

観念したように呟いたそんな恭也の言葉は、あまりに決定的だった。

ため息一つ吐いてから、その人は続ける。

「隊長陣は皆知っているし、別に隠さなければいけないわけでもない、とは言え変に気を使われても疲れる。だから黙っておいてくれると助かるんだが」

無言で、ヴァイスと共にティアナは頷く。それを見て、恭也ははっきりと口にした。

「お察しの通りだ。俺の味覚は今、機能していない。何を食べても何の味もしないんだよ」

「……それは、生理的な問題で？」

ティアナの問いに、恭也は何でもない顔のまま首を振る。

「いや、舌自体は正常らしい。神経や脳機能もな」

「じゃ、じゃあ……」

さらに質問を重ねようとしたティアナの肩に、グツと抑えるような感触。見れば、ヴァイスが渋い顔でそこに手を置いていた。

「あ、す、すみませんでしたっ」

それでようやく、自分が踏み込むべきでないところに無神経に立ち入っていた事に気づき、慌てて頭を下げる。

こういうところが、いくら背伸びしていても自分はまだまだガキだ。

「いや、気にしないでくれ。特武官時代にちよつとな」

彼のその言葉に、”度重なる重たすぎる出撃で心身を崩した”というニューズサイトの記事の一文が頭に蘇る。

「戦闘に関係のない感覚だから削れたんだろう。今更戻ってくれというのは少々虫のいい話だ」

何でもない口調で言う彼の言葉が、遠い人の事だと思つてニュースを読んでいた時とは違い、今はひどく生々しく感じる。

あんなに強い人も人間なんだなんて、かつて思った。だけど結局、その時もまだどこかで、高町恭也というのは人外の化け物だと、自分は思っていたのだ。

そんなはず、ないのに。当たり前のように、人外でも化け物でもないのに。

あんなに、こんなに、どんなに強かつたって、人間なのに。

暖かくて、面倒見が良くて、ちよつと意地悪なところもあって、だけど真面目で、斬られればちゃんと血を流し、涙を零す、そんな人間なのに。

「ヴァイスも、ランスター二等陸士も、本当に気にしないでくれ」

「……あの、長いですよね」

手に持った缶を握りしめて、言う。

「長い？ ああ、”ランスター二等陸士”か？ たしかに長いが……」
しつかりその人の瞳を見ながら、ティアナの口からは言葉があふれ

る。

「だから、その、……テイ、ティアナで、お願いしてもいいですか」
急な申し出に、目を見張ったのは隣のヴァイス。だけど彼は茶化すような事は言わずに、ただただ黙って見ていてくれた。

恭也は、いつもどおりの揺れない顔。しかし内側の感情までもがそうだというわけじゃないというのは、ちゃんとわかるべきなのだ。

「そうか、君がいいのなら」

「はい、その……えと」

すうつと、やっぱりちよつとだけ息を整えて、だけど躊躇いに引き倒されない内に、ティアナは言ってしまう事にした。

「恭也、さん」

春の夜に溶けた言葉は、自分で思うよりもずっと、熱が籠っていて。

「ああ、ティアナ」

返ってきたその声に、胸の中がゆらゆらと揺れた。

第29話 抜けてくる弾

「あ、恭也さん！」

見事に揃ったものだなあと、ちびっこ二人の上げた声にティアナは苦笑を落とした。フォワード陣四名で並んで歩くかたまりから、小さなふたつが飛び出していく。

隊舎入り口から出てきたその先の男性は、膝を折って視線を合わせ、彼らを迎えた。

「エリオ、キャロ。午前の訓練はもう終わりか？」

「はい！ 今日のはさんと模擬戦をやりました！」

「やっぱり押し負けちゃいまして……なのはさん、あんなにリミッター掛けるのに……」

「そうか。お前たち四人がうまくやれば、そろそろ突破できる頃ではあるぞ。頑張ってみるといい」

うつむきがちに言ったキャロの頭を撫でる恭也の表情は相変わらず愛想のないものだが、手つきの優しさは遠目にもわかる。

そんなものを見なくなっちゃって、彼が優しいことくらい、もう十分に知っているけれど。そう思う自分はどこか得意そうで、我ながら少し呆れてしまう。

「特導官は、どこかへお出かけですか？」

エリオとキャロ、ちびっこ二人組のところへ追いついて、隣のスバルが彼にそう問う。

「ああ、少しな。外に用がある」

答えた恭也の衣装は、制服をきっちりと着込み、徽章も付けた余所行きのものだ。

そう言えば、聖王教会へ向かうと昨日の夜に言っていた。あそこでは高町恭也と言えば聖人扱いなので、なかなか適当な格好も出来ないのだろう。

「あ、じゃあ、お昼飯は……」

「すまないな、もう食べてしまった」

言葉通りすまなそうな声音で、恭也はエリオに答える。時刻は十二

時を少し過ぎていて、昼を誘うには少し、遅きに失しただろう。

「そうなんですか……残念です……」

「悪いな。夜には帰れるはずだから、夕飯は一緒に食べよう」

寂しそうに呟くキャラの頭を引き続き撫でながらの恭也がそう言え、ちびっこ二人は打って変わって実に嬉しそうな表情を浮かべる。それはいつものしつかりした姿からは遠く、なんだかまるきりどこにでもいる普通の子供だ。

会話の内容も、忙しいお父さんと、彼によく懐いている息子と娘、本当の家族のものにしか聞こえない。

これで実際、彼は子持ちでもなんでもないというのだから、人というの不思議だ。

「どうした?」

「いえ」

あんまりに微笑ましくて思わず少し笑ってしまい、怪訝な顔をされてしまった。そういえばこんな振る舞い、出会った頃では考えられないと思う。

「あ、恭也さん、今日のメニューってハンバーグでしたよね? ソースどっちでした?」

「できれば、私としては甘いやつの方が嬉しいんですが……」

「……ああ、どうだったかな。急いで食べたものだから」

エリオの問いに表情を変えず、しかし恭也の言葉は詰まった。その理由を知っている人間というのは、基本的には隊長陣に限られる。

(ハンバーグのメニューは前に出てたわね、……たしか)

その例外であるティアナは、記憶を探ってから念話を発した。

『恭也さん、白ければ甘めの、茶色だったら辛めのソースです』

『……すまんな、助かる』

彼の目線が、一瞬だけこちらに移る。なんだか秘密のつながりみたくて嬉しく感じるの、少々勝手だろうか。

「甘いやつだったな、キャラの好みの方だ」

「ほんとうですかっ!」

喜ぶキャラはまた恭也に頭をひと撫でされて。

それを羨ましいと口にはしないくらいの節操は、一応、自分にもあった。

「昼はすまなかつたな、助かった」

「昼？ あー、いえ、大したことじゃないので」

彼に答えながら、スポーツ飲料を口元で傾ける。糖分が脳に染み入る感じがたまらない。

「合っていたか？ 甘いソースで」

「ええ、キャロは嬉しそうに食べてましたよ。私もあつちの方が好みます」

「そうか、ならよかつた」

夜の御神式鍛錬、終わり際にこうして雑談もしていくのが、なんだか恒例になっていた。なにか面白い話はあつたけど、この整備場裏手の林に来る前に思い返しているくらいには、ティアナにとってこれは大切な時間だった。

「まだなのはには勝てないか？」

「はい。……でも、近いうちにはいけると思います。それでも実感が出てきたというか」

「そうか」

無謀なアタックや数回に一回成功すれば御の字、といったような戦法は避け、誰からも文句のない安定した勝利を収める。それがチームで立てている方針であり、リミッター付きとはいえあの高町なのはを相手には険しい道だが、だからこそ大きな価値がある。

「なのはは逃げん、じっくり向き合え」

「はい」

大きな壁なのはわかっているけど、ひるまず登っていけばいい。無理して飛び越えるのではなくて、しっかりと掴んで少しずつ。

見てくれている人がいるのだ、何も焦ることなんてない。

「それでも御神式第一期生ですから、強くなってみせますよ！」

恭也に、せいぜい威勢よくティアナは言った。

御神式を初めて、まだ三週間足らず。だけど、その中で得たものは多い。聴覚鋭敏化により周辺察知はかなり実戦的なレベルになってきた。

そうして見えてきた世界は今までとは何もかもが違って、乏しいと思っただ自分の手札でも、こんなに戦えるのだと知った。

誰にでも勝てるなんてもちろん決して言わないけれど、自分を負かすのは面倒だぞと、そんな風にはいつかきつと、たとえ相手がどれだけ強くても啖呵を切れるようにはなりたい。

「……でも、あの、今更なんですけど私でよかったですか、御神式第一期生……っていうか、第一号」

「俺は昔から、弟子には恵まれていてな。今でもそう思っているよ」

「そ……そうですか」

彼らしい言い回しに、うつむきながら夜風が頬を冷ましてくれるのを期待する。

「それから正直、御神と射撃手の相性がここまでいいとは思っていなかった。もちろんある程度役に立ってはくれるだろうと思っただけだが、わからんものだな。良い出会いが出来た」

湯だちそうなの顔を早く冷やして欲しい……しかし、そんな時に限って空気は穏やかで、結局ティアナは熱を吐き出すように口を開いて、話を変える。

「あの、……ちよつと恭也さんに聞きたいことがあるんですけど、いいですか？ 射撃手として、御神の師にお伺いしたいことが」

「ああ、なんだ？」

質問自体は、前々から考えていたことだ。よどみなく、彼に問うてみる。

「一番、撃たれて嫌な弾、ってどんな弾ですか？」

「……ほう、嫌な弾、か」

「はい。もちろん状況によると思うんですけど、比較的こういうのはどんな状況でもやだなー、みたいのってあるかなって。私、そこそこ色んな弾種を扱えるんですけど、軸になるものがあるといいなと思

まして」

言った通り、なにが有効かなどというのは相手や状況によつていくらでも変わるだろう。だからこそ、変わりづらい一手というのは、多分重要になってくるはずだ。

それに、いつでも相手の特性を見切れる時間が与えられるわけでもなく、時には力押しをせざるを得ないときもあるだろう。そんな時、重点的に鍛えた得意と言える弾があると良いとも思うのだ。

「……そうだな」

こちらの質問に少し考えこんだ後、恭也は口を開いた。

「抜けてくる弾、だな」

「貫通力重視の弾ですか？」

「それもある。それもあるが、と言うよりかは意識の話だ」

恭也の語り口はしみじみとして、実に実感が籠っている。

「大きなものや追尾してくるもの、さまざまな効果の付与されたもの……色々あるが、一番嫌な弾といえば、気がついたら撃たれていて、いつの間にか当たっているという類のものだ。俺は、それが嫌で仕方がない」

「つまり、弾速に優れた弾……いや、だけじゃなくて」

「弾速が高く、そして構えてから発射されるまでの時間が短い弾、だな」

いつの間にか撃たれて、すぐに到達する弾。

それはたしかに、意識を”抜けてくる”弾だ。

「用意が早くて弾が速いというのは割りかしらいつでも厄介だ。なにせ、避けるも落とすも間に合わなければ意味がない」

「でも、恭也さんって撃たれる前から察知して避けて……あ、だから」
「そうだ。だから速い弾が、素早く撃たれると嫌なんだ。銃を構え、狙いを定め、引き金を引くまでの間に、こちらはそれらの動作から相手がどこに撃つかを予測する。それを満足にさせてもらえないというのは、かなり困る」

高町恭也のスタイルというのはおそらく、受けより避けと流し。であれば確かに、認識できずに食らうというのは嫌だろう。

「話はティアナのクロスミラーージュのような銃型デバイスに限らん。たとえば杖型でも、射撃が行われる際には可視・不可視の種類はあるが魔力でバレルが生成され、目標へ狙いを定める。それが一瞬で用意されてしまえば、読むことは難しくなってしまう」

「なるほど……」

早くて速い、なるほどそれはかなり強力な弾と言えそうだな。

「これに、最初にティアナが言ったように貫通力が備わっているともう最悪だな。いつ撃たれるかわからない、撃たれたらもう当たっている、そして展開しておいた防御は貫かれる……嫌なものだ、本当に」

「……撃つ側としたら」

「良い弾、だろうな。もちろん規模の大きさや誘導性、爆破力などが頼りになる状況も多々あるだろうが」

（早くて速い弾……それが撃てたら）

どんなにか、心強いだろう。

……まず、早い弾はどうだろうか。

クロスミラーージュを構え、前方の空いた空間に向ける。単純な魔力弾を超特急で生成、放ってみれば。

「あ……」

「……散弾銃のようだな」

構成がすっかり固まっておらず、発射と同時に四散してしまった。夜の空気にパツと散る。

「高速生成……、難しいですね……」

「簡単な技術ではなさそうだな」

事前に弾を生成して用意しておけばすぐに撃てるは撃てるが、そうになると相手にもそれは読まれる。やりたい事とは少しズレそうだな。

あくまで、いきなり撃つというのが重要なのだろうか。

「……弾を作るだけじゃなくて、しっかり狙いも定めなきゃならないし、うーん。……速い弾はどうだろう」

今度はじっくり弾を生成しつつ、その後ろに魔力を集めて圧力を高めていく。発射方式というのは色々あるが、魔力圧で弾をはじき出すというのは速度、特に初速に優れる性質がある。

「よし、……あ」

「宵闇に映えはするな」

発射してみて、結果はというと先ほどと似たり寄ったりであった。発射の圧力の強さに、弾の強度が対応しきれなかった。やはり四散し、鮮やかに木々の間の闇を彩る。

「……うーん」

早い弾、速い弾、これがなかなか難しい。

（抜けてくる、弾か……じゃあ最後に）

最初に自分が言ったもので、話の主題ではなかったらうけれど。

（貫通力、ね）

貫通力を持つ弾というのは、大きく分けて二種類ある。一つは多段殻弾。AMF対策で放つことの多い、バリアブルバレットだ。

しかし、これは多重の構成を作らねばならず、早い準備はしづらい。その上、弾が複雑な作りになるため、加速をさせるのも少々手間である。よって、早い弾にも速い弾にも、おそらくは仕上げ難い。

多段殻と並ぶもう一つは、圧縮弾である。通常よりも使用する魔力量は同じまま弾を小さくする事で弾の密度を上げ、より硬い性質へと変化させるのである。

（……ただ、これ集中力要るのよねえ）

魔法というのは基本的にはコンセンションの問われるものであるが、圧縮弾は中でもその度合いが強い。訓練校時代に実習で撃ったこともあるが、なかなか用意が大変だった覚えがある。

とは言え、試さないでいるというのもなんとなく座りが悪く、結局ティアナは愛銃を構えてその先へ魔力を集めた。

それらを弾の形に形成していくわけだが、通常のサイズを超えるレベルで小さくするあたりで、ぐっと形成速度が落ちてくる――。

「……あれ？」

「どうした？ ……うまくいっているように見えるが」

「いえ、なんか……こんなに簡単だったっけと思ひまして」

ティアナの眼前、生成した弾はほとんどその大きさを縮めていく。以前のように感じた抵抗というのはほとんどなく、スムーズにサ

イズが変わる。

なにを手こずっていたのだろうと思うくらい、随分と簡単な作業に思えた。

いつものサイズの3分の1ほどまで縮めたところで、その後ろに炸薬となる魔力を用意。硬くなっているのだ、圧をそれなりに高めても大丈夫だろう。

そしてティアナは、意識の中で引き金を引いた。

「……………」

「ほう、なかなかじゃないか?」

「は、はい……………」

奔ったオレンジの光の弾は、かなりの速度を纏っていた。斜め上方、まっすぐに宵闇を貫いて夜空へ昇る。まるで逆回しの流星のようだ。

貫通力のためにと選択した圧縮弾だったが、なるほど炸薬を多くしても耐えられる分、速度にも優れていたか。

そしてやはり、気になることは。

「なんか、前より本当に、大分簡単に作れたんですけど……。いや、六課に来てから念入りに鍛えてますしある程度はと思ったんですが、それ以上に」

「…………ティアナ、他を微に入り見やるといっのは、自らを深く認識するということでもある」

「え?」

突然の武道家らしい言葉に首を捻ると、彼は続けた。

「自分を揺れなく立てられなければ、他の声に耳を澄ますことは難しい。気配察知の鍛錬というのはもともと、刃を振るうに十分な集中力を養うという意味合いも、大いにある」

「…………じゃあ」

「功を奏していたのかもしれないな。これは正直、見越していたわけじゃないがな」

少し苦笑気味に彼は言って、こちらの胸の中は暖かくなる。

期待以上のものが見せられているというのが、なんだかすごく嬉し

かった。

「も、もう一度！ もう一度やってみます！」

「今日はもう最後にしておけ、疲れているだろうからな」

たしかに、気配察知の訓練で頭はへとへとだ。あと一回がどっちみち、限度なような気もする。

「はいっ。よおし……じゃあ」

速い弾にはなった。物理的に抜ける弾にも。

だったら欲張って、早い弾も目指してみたい。

(……一気に全力で縮めてみるっていうのはどうかしら)

圧縮はすればするほど弾のサイズは小さくなるが、硬度は上がる。この際、どれだけ弾は小さくしても構わないとして、上限を決めずに圧縮にかかれれば調整をしない分、高速で仕上げられるはずだ。

すうっと夜の少し冷えた空気を肺に取り込み、体の中の熱を移して外に吐き出す。頭が少しクリアになって、準備が整った。

「……っ」

素早く構えた銃の先、放出した魔力を一気に縮める。それは自分の予想を超える速度で、考えていなかった規模まで圧縮することに成功。

「……あ」

否、成功というのは間違いだったかもしれない。

普段の20分の1ほどの大きさまで高速で圧縮された弾丸は、さすがにと言うべきなのかその構成にほころびを生ませ、裂け目から爆炎の花を夜空に咲かせんとする。

早い話が暴発だ。意識がそれを理解して、しかし身体は反応できずに固まったまま。

「……え、あ」

「まったく、無茶をする」

爆音とともに、弾の成れの果てから光と圧力と熱が広がったとき、ティアナの身体はそれとは離れた位置にあった。

「す、すみません……」

「次からはもっと慎重にな」

「は、はい……」

答える自分の身体が放つ、なんだか引き上がってしまった熱が伝わってやいまいだらうかと頭のどこかが馬鹿な心配をしている。

ティアナの身体は彼の脇に抱えられて、当然ながらゼロ距離だ。

「立てるか？」

「は、はい、……あ、ありがとうございました」

恭也はこちらの身体を丁寧に放し、あっさり二人の身体は離れる。それを残念に思う気持ちを、見て見ぬ振りはなかなか難しい。

「し、……失敗、しちゃいました」

「そうだな、あれでは自爆だ」

「うう……」

返す言葉もない。調子に乗ってしまったらどうか。

「だが、まったくの失敗かと言うとそうでもなさそうだが」

「そ、そうですか？」

「ああ。きちんと仕上げれば、いいものになるんじゃないか？」

たしかに、さすがに無制御で縮めるというのは馬鹿だったろうが、それでも生成速度としては悪くないはずだ。出来も、上手く行けばかなり高圧縮な弾になるはず。

（……あれを飛ばす炸薬の生成も同時に、いや、それは厳しいかしら。でもせっかくだから素早い生成にしたい、なにか良い方法は）

「……ティアナ」

「え、あ、はいっ」

ほん、と頭に感觸。思考に沈んでいた意識が浮上する。

「考えるのはいいことだが、今日はもう終わりにしよう。それに、一人でそうするよりも効率的な手段があるだろう」

効率的な手段。

それは、あまりに当たり前の選択肢だろう。

「先達の専門家と一緒に悩め。なのはなら良い知恵をくれるだろう」

「……そう、ですよね」

管理局遠距離最優秀魔導師の一角が指導をしてくれているのだ、彼女に頼らなくてどうするという話である。

自分なんかが考えるよりも……そんな思考が湧いて出て、慌てて奥に押し込める。

こんな温かい時間に、そんな醜い嫉妬と向き合いたくない。

「なのはさん、理論派ですもんね。こういうの、ばっちり組み上げちゃいそうです」

「あー……いや、フェイトに言わせれば、あいつの本質は感覚派らしいぞ」

「え、そうなんですか？」

理系思考なガチガチの理論先行系だとなんの疑いもなく思っていたため、その言葉には意外感がある。

「なのはは、『こうしたら上手くいきそう』で魔法を組んで、後付けの理論で安定したものに仕上げているんだそうだ。理論から入るフェイトからすると、なかなか驚きのスタイルらしいが」

「……天才、ですもんね、なのはさん」

「こと魔法に関しては、確実にそうだろうな」

恭也の口調は、しごく当たり前のことを言うものだった。特段わざわざ誇ることもないという風なあっさりしたその語り口は、だからこそひどく誇らしげで。

自慢の妹、なんだろう。

そんなの、誰が見たってそうだ。

「……あいつは、どうだ。きちんと教えているか？」

それなのに、そんなことを聞く恭也の顔は、一転してどこか確かに心配そうで。

実力をわかかっていても案じてしまう、身内ならではの情がそこには色濃く浮き出ている。

「もちろん、しっかり鍛えて頂いています」

「そうか、ならいい」

彼はこちらの言葉に頷く。

親しくなれたはずの横顔がなんだか遠く思えてしまって、それがたまらなく嫌だった。

「あ、あの、……とところで、弾の話なんですけど」

「ああ、なんだ？」

思わず話を打ち切って、違うものへとすり替える。どうしてもやっぱり、醜い感情を正面から見る度胸がないのだ。

「なんか恭也さんの話、実感が籠っていたってというか、そういう攻撃を撃つてくる相手がいたんですか？」

「ああ、嫌な相手だった。航空戦艦型の自動稼働ロストログアだったんだが、照準がおそろしく早く、弾速はほぼ光速、貫通力も抜群ときていた。あれは骨の折れる手合いだったな」

「うわあ……それ、どうやって倒したんですか？」

こちらのその問いに、恭也の答えはあっさりとしていた。

「簡単な話だ。頭部目掛けて撃つてくる攻撃だけを腕やら仕方なく展開したシールドやらで防いで、あとは無視して突っ込んだ」

「……え、いや、無視って」

あまりに自然に言うものだから頷きそうになってしまったが、それはおかしいだろう。

「だって、え、そんな事したら」

「身体中、向こうの見える穴だらけにされたよ、困ったものだ」

「……いやいや、困ったものだ、じゃなくて」

なんだろう、なにか話が噛み合っていない気さえする。

「……恭也さん、あの、普通、身体に貫通した穴が空くと、ええと、位置にもよりますが、その」

「まあ、重傷や致命傷だろうな。だが俺の場合は少し違ってくるんだ。……これは話していなかっただったか」

そう言いながら、彼が袖口から出したのは一本の小さな刃物。飛針というらしい、御神流の遠距離用武器だ。

そして、彼はそれを握りこんだ右手を左手の上に振りかざし――。「見ていてくれ、……君も現場に出ているからこれくらいの絵面、大丈夫だろう」

「え？ ……え？」

「……あの、フェイトさん。少しお時間よろしいでしょうか」

「……え、私?」

「はい。……その、ご相談したいことがありまして」

意外だ。それが素直な心境である。

就業時、ロビーを通って業務室へと向かおうとしていたフェイトに声を掛けてきたのは、随分硬い顔をしたオレンジ色の髪の子だった。

「……うん、じゃあ、今ならちょうど空いているから、……そうだな、面談室でどう?」

「はい、お願いします」

面談室と呼ばれている小さな個室に彼女と向かいながら、頭の中には疑問が巡る。

(……私に、相談? 仕事のこと、じゃないよね。だったらまず真っ先になのはか、もしくはヴィータに行くはずだから)

直属の上司をスキップして、隣の部隊の部隊長に仕事の相談というのはかなり考えづらい事態である。

となると、プライベートなあれこれということになるだろうが、しかしこちらもちちらで違和感がある。

(私、ティアナとはあんまり、まともに話したことないんだよね……) 自分自身が忙しいというのもあるが、機会がないというのも大きい。任務でも訓練でも、彼女はなのはとヴィータの下にいるため、フェイトがどうこう言うというのはほほほほなかった。

そしてプライベートな交流はどうかと言えば、特にここ最近は何とんど会話を交わしていない。その原因は、言うまでもないだろう。

(……あんな風に脅したから、怖がられてる、はず)

次はないよ。

そう彼女に念話で告げた時の声音というのは、我ながらひどく冷たかったはずだ。公でも私でも、あの時のやり口がそこまで間違っていたとは思わないが、つまり完全に正しかったともやはり言えない。

恭也のことを考えるとあの選択肢しか採りようがなかったのだが、

その後の関係にヒビを入れたのは確かだ。

(でも、御神式の初めての弟子にもなってくれたわけだし、いろいろ話したいなどは思ってたんだよね……)

大元はもちろん恭也の、引いては御神・不破家の技術だが、それを御神式として汎用化する作業には、かなりの部分、フェイトが関わっている。

今は恭也に任せきりだが、そろそろ自分も加わってどんな具合か確認する時期に入ってくるだろうという話もあがっているわけで、いつまでも距離を縮めないままというのはよくないはずだ。

理由はわからないがこうして彼女から声を掛けてくれたのだから、幸運と思つて、せめて誠実に対応しよう。

「空いてるね、じゃあ入って」

「はい」

デバイスから認証を通し、空き状態だったら件の部屋のキーを解除。ティアナを促して、フェイトも中へ入る。

「コーヒーで大丈夫？」

「あ、いえ、私が」

「いいからいいから、ちよつと得意なんだ、淹れるの……つていっても、ここのは全自動だったね」

ティアナを椅子に座らせて、備え付けのメーカーでコーヒーを2つ用意。

本格的な道具があればそれなりのものを淹れられるのだが、淹れ方を覚えた動機は不純である。

好きな人に、美味しいと笑つて欲しかっただけだ。

「お砂糖とミルクは？」

「えつと……1つずつで」

リクエスト通りに仕上げたものをティアナの前に置き、ブラックのものを持つてフェイトも彼女の対面へ腰を掛ける。

一口、喉を湿してみると癖になる苦味が鼻先まで抜ける。覚えた当時は真似っ子で飲んでいたブラックだが、その美味しさがきちんとかかるようになった。

今は味わうことの出来なくなってしまうたあの人とまた、二人で楽しむ日が来てくれることを、フェイトは願ってやまない。

「……ええと、それで、ですね」

「あ、うん」

少し脇道に逸れた思考を、目の前にフォーカスし直す。

ティアナは実に言いづらそうな表情で逡巡していて、なにか助け舟を出せるだろうかと頭をこちらも巡らせて。

そうこうしている内に、彼女は腹を決めたように大きな息を吐いた。

「あの……どう言ったらいいのかわからないので、単刀直入にいいですか?」

「うん、大丈夫だよ。言いやすい言い方で」

「それじゃあ、その……」

彼女はその釣り気味の眦をした瞳をまっすぐこちらへ向けて、そして言った。

「恭也さんは、頭がおかしいんですか」

「……」

それは、随分な言い回しで。

(ティアナ……)

この娘は、当然ながら決して馬鹿ではない。熱くなってしまうこともあるが、本質的には礼儀なしでもない。

そんな彼女がこんな言い方を、よりにもよって一度物言いについて怒りを見せた自分に対してしてくるというのは。

「……なにがあつたか、教えてくれる?」

「はい……」

よほどの事が、起きたはずだ。

身構えるこちらにティアナは、硬い表情のまま語り始めた。

いつものように行った御神式の訓練、その後の雑談。

その中で、有効な弾とはなにかという話になった事。

そして。

「……恭也さんが、その、昔の話をしてくれて、実際に厄介な弾を撃つ

てきた敵についての。……それで、その敵に、頭以外、身体中を向こうの見える穴だらけにされた、って。でも、それって、私、意味がわからなくて……だって、そんなの、普通、そんなことになったら……」

「……うん」

だんだんと、なにがあつたのか、予測が付いてきた。

「そうしたら恭也さんが、右手に飛針を取り出して、自分の左手に対して振りかぶって、……そのまま」

「……突き刺した？」

「はい……。完全に、貫通するくらい」

息を吐いて前かがみ、フェイトは顔を片手で覆った。

「……痛くないんですか、って、き、聞いたら、すごく痛いって、刺したまま答えて。それで抜いたと思つたら、魔法が発動して、傷がどんどん治っていった」

眩体・修は基本的にはカートリッジをロードして行かう魔法だが、一瞬で治すことにこだわらなければロード無しでも出来るということとは、本人から聞いてはいる。

「これがあるから、俺は大丈夫なんだって、言ってみました。……でも、傷を治すときは怪我をしたときの三倍くらい痛むんだとも言つて、……少し困つたような、そんな顔で。……あんなに痛そうな傷の、その三倍だつて言っているのに、少ししか困つてないような、顔で」

俯くティアナの、膝の上で揃えられた手は少し震えている。

それはそうだ、だってそんな静かで、そしてくつきりとした狂気を見せられて、震えを覚えないわけがない。

「それを見て、ああ、この人、本当に、って、思っちゃって……いえ、前から少し感じてはいたんですけど……その、味がわからない事、とか」

「……知ってたの？」

恭也が味覚を失っているのは、昔なじみの面子しか知らないはずだ。問うたフェイトに、ティアナは少しバツの悪そうにうなずいた。

「ちよつとした事があつて、本人から教えてもらいました。ヴァイス陸曹と一緒に」

「……そっか」

別にどうしても秘匿しなればならないことではないが、広く知られて恭也にいい影響があるようなことでもない。

その点、漏れた先がティアナとヴァイスというのは僥倖だったと言わべきか。フェイトの見る限り二人は口の軽いタイプでは決してなく、特にヴァイスは表面上のキャラクターとは裏腹に、そういうところではおそらく、かなり大人だ。

「……………そっか」

「はい……」

そこまで知っているのなら、当然、恭也がどうしてそうなったかというのも、おそらく察しているはずだ。

(ティアナは……今現在、恭也さんのかなり近くにいる)

なにせ毎晩つきつきりで指導を受けているのだ、密接な距離にいるとしていいだろう。

だったら、変に隠す事は無意味だ。フェイトは顔を覆っていた手を膝の上に戻し、まっすぐに彼女に向き合って言った。

「……頭がおかしいのか、って聞いたね。うん、それは間違っていないよ。恭也さんは、人として大事な部分のタガが外れてしまっている。端的に言えば、あの人は壊れてる」

「……………」

はつきり告げた言葉に、ティアナの表情はさすがに固まった。

「……………それは、……………その、特武官の、ときの」

「うん。過酷過ぎる戦場に出続けて、残酷過ぎる期待に応え続けて、それで、壊れてしまった」

より正確に言うなら、おそらく——壊された、だ。

それはさすがに口にはしなかったが、フェイトは自らの手を硬く握りこむ。

恭也の状況があそこまでのものになったのは、どう考えても何者かの悪意や害意に因るものだ。一番疑わしいのは当然、あの白衣を着た技術型の犯罪者だが、彼だけかと言えばそれもどこか怪しい。

静かに、しかし着実に、情報は集まり始めている。なかなか自分や

なのはが直に動くわけにはいかないが、伊達に十年勤めていない。様々な方面に、それなりのツテはある。

それに何より、義兄や聖王教会の有力者たちが影から、しかし全力を挙げて調査をしてくれているのが大きい。

早晚、目星は付くだろう。

(それがどんな結果だったにせ、私のやることは変わらない)
護るだけだ。

あの人を、自分の全てで全てから。

「……フェイト、さん、あの、壊れてしまったって、それは、治療……とかは」

「真っ最中、って感じかな。……ティアナ、この話は」

「わかっていません、誰にも言いません。恭也さん自身にも」

話が早い、声音も重い。それは信頼に足る反応だ。

「一時期よりも、状態はかなり良くなったんだ。本当に、……すごく。だけどやっぱりまだ危うい部分は残っていて、それは長い長い時間を掛けて治していかなきゃならない」

「それじゃあ、今みたいにお仕事には出るべきじゃないんじゃない、ご自宅や病院でゆっくり……」

実にもっともなティアナの言葉に、フェイトは首を振る。

「それがあの人の難しいところだね。穏やかな時間を過ごさせる事が、必ずしも最適な治療じゃないだろうって、そんな結論が出てる。恭也さんはずっと、そこそそ特武官になる前からずっと戦いの傍で生きてきた人だから、……ギャップが大きすぎるとね、それはそれで良くない負荷になっちゃう」

「……そんな、ものですか」

「うん。……そういう人なんだ」

のんびりと縁側でお茶を嗜んだり、盆栽をいじっているような、そんなのどかな時間を好む彼だが、それは他の時間で極めて苛烈に過ごしているからこそという部分もあるのだろうと思う。

穏やかな時間でただ癒やされてくれるような人では、全くないのだ。

「でも、……そうですよ、わかる気がします」

対面のティアナは、コーヒーの水面を見つめるように俯きがちに言う。

「怖いかなって思わせるような雰囲気なのに、その実すごく他人には優しくして……。その分、っていうわけでもないんでしょけど、ものすごく、自分には厳しいんだな、って。そんな気がします」

「うん……」

だから、是非とも徹底的に周りが甘やかすべきだと思うし、誰より自分がしたいとも願う。母親として彼の傍に居た桃子をして、それはとても難しいらしいのだけど、それでも絶対に。

「……あんな事をしちゃうのって、それが行き過ぎて、って事でもあるんですよ？ タガが外れて、歯止めが効かなくて」

「自分に厳しい、で留まらなくなった。自分を大切にしなきゃいけない、そうしたいって気持ちがあひどく薄くなって、傷つくことを厭わなくなってしまった。……繰り返すようだけど、良くなったんだよ、今の状態でも。治りかけではあるんだ」

叫び声を、上げて。

巨大な魔力をその身へ異常なほどに滾らせ、今にも内側から破裂せんとする彼の姿は未だ色濃く、フェイトの脳裏に残っている。

肥大し、暴走した責任感から任務に出続け、そして氣を触れさせて終わりかけたあの姿から考えれば、今のなんと持ち直した事か。

「でも、……やっぱり、あんな事をするのは」

「もちろん、絶対に良くなんかない。ちゃんと伝えて、わかってもらおうよ」

それは、ゆっくりと。落ち着いて、じっくりと。

彼がなくなった当たり前の感情を、拾って集めて手渡すのだ。

「……ごめんね、正直、最近は本当に安定していたから油断していた部分もある。それから、ありがとう、話してくれて。すごく助かる」

「いえ、そんな、……こちらこそ、その」

「……話しづらかったよね、私には」

苦笑しながら言うと、ティアナはこちらの瞳を遠慮がちに、しかし

まっすぐ見返してきた。

「……あの時、フェイトさんがどうしてあんなに怒ったのか……いえ、本当は、ちよつと違いますよね。どうして私にあんなに強く釘を刺したのか、今ならわかります。……本当に、すみませんでした」

「……うん。でも、こつちこそ、もうちよつと言ひ方とかやり方があつたはずだ。ごめんね、乱暴な上官で」

「その、えと、正直に言えば首が落ちたかと思うくらい怖かつたは怖かつたんですが……」

「そ、そうだよね……」

愛してやまない人が事に絡むと、どうも容赦や加減という単語が頭から飛んで行く。母親絡みで犯罪行為にも手を染めた自分の昔からの悪癖である事はわかっているのだが、これがなかなか直せない。

「でも、だから相談しようと思つたんです、フェイトさんに」

「あ、あー、なるほど……」

「はい。あんなにするくらい恭也さんの事を大切に思っているんだなつて、そんな人にお話すれば間違ひはないかなつて」

あの対応がこんな結果を呼ぶとは、禍福は糾える……ではないが、なにがどうなるかわからないものだ。

「恭也さんもフェイトさんの事、すごく信頼しているみたいですし、なんで恋人じゃないのか不思議なくらいです、正直」

「……え、ええと」

「好きなんですよね、恭也さんのこと。……もしかして違ひました？

結構自信あつたんですけど」

問うてくるティアナの顔には、まさか違わなと思うけど……という言葉がありありと浮いていて。

耐えきれずに俯いて、フェイトは問いを返す。

「あの、待って、その、……あの、……私、そんなにわかりやすい？」

「わかんない人、いないと思いますけど……」

「だ、だつて、ほら、弟子として師を大切に思つてるとか、古い友人としてとか、そういう感情だと見ることも」

「そういうのも感じますけど、それだけっていうのは無理があると思います……。正直、ハートマーク飛んでるのが見えそうというか……」

ちらりとティアナの表情を伺ってみれば、それは呆れに近い気さえした。

嘘だ、そんなはずが。

だって、だとすると。

「恭也さん以外、六課の職員、多分全員察してますけど……」

「……うああ嘘だ！ それは嘘だよ！」

「現実を見て下さい……っていうか、わかりやすいつて自覚がなかった事が衝撃的なんですけど」

たまらず両手で頭を抱えるこちらに、ティアナが投げってくる言葉には容赦がない。

「だって！ だって私、結構ひっそりと！ ひっそりと想ってるよ!？」

そんなニアプローチとか、で、できて、ないしー！」

「うーん……そうですか？ 結構、なんだかんだで隣を確保している姿を見ますけど」

「う、く、そ、う、かな？」

これでもかなり抑えているつもりなのだが、傍から見るともしかしてそうでもないのだろうか。

「あと、ちらほら隊長陣あたりからストーカーという単語が聞こえてくるのが気になります」

「それは誤解だよ！ 誤解！」

好きな人の情報をなるべく収集したいと考える事がおかしいわけがないのだから、悲しい誤解のはずなのだ。

はず、なのだ。

「ともあれ、一緒にいるときの表情とか距離感とか、もうそこら辺でもろわかりというかダダ漏れな感があるんですけど……。っていうか、じゃあ違うんですか？ 恭也さんの事は」

「好きだけど！ あ、いや、……その」

もちろん、世界で一番高町恭也を愛しているのはフェイト・テスト

ロツサ・ハラオウンであるという自信は揺るぎないものがある。

これに関しては絶対に、どのだれにも決して負けない。

だけど、口にすることに恥ずかしさがないかと言えば別の話で、さらに言えば周りの人間たちに察されていてなんとも思わないというわけでもないのだ。

「……相談する人は、やっぱり間違えてなかったみたいでよかったです」

なんという事だろう、明日からどんな顔で六課内を歩けばいいのか。

(そんなに露骨だったかな……そんなに露骨だったかなあ……?)

師匠に懐いている弟子、くらいに認識されていると思っていたのだが、まさかまさかである。

もろバレだなんて、考えてもいなかった。

「……でも、あれですよ。一番恭也さんとの間に距離がない人って言う」と

「それは……私じゃ、ないね」

一応、親密な位置にいるという自負ある。

時折、あの人は弱音を吐いてくれて、それはどうやら自分にだけのようで、つまり少しは特別な関係にはなれているとは、思う。

だけど、もつとも近しいのが誰かといえ、それは誰もがわかって
いる。

「なのはさんにだけは、やっぱり全然、違いますよね。なんか、雰囲気
気っていうか、上手く言えないですけど、そういうのが」

「そう、だね」

ベタベタに甘くしているわけではないのだけど、それでも、それは
やはり他とは違う。

何があっても小揺るぎ一つしない深く大きな愛情が根底にあるの
だろうことが、わかってしまう。それは、彼を見つめていれば簡単に。

身内ゆえなのだろうけれど、フェイトの見る限りそれはどこか、他
の高町家の面々に向けるものと比べても特別な色をしているように
見える。

いつか、あの途方もない愛情を超えるほどのものを、彼から向けてもらう事が出来るのだろうか。それは本当に、果てしない道にすら思えてしまう。

脚を止める気は一切ないけれど、竦んでしまわないとは言えないくらいに。

「昔から、あんな感じなんですか？」

「そうだね、昔から、……うん、私が知ってる一番古い二人も、そうだったよ」

魔法のことなどほとんどなにも知らなくて、それでもその脅威だけは間違いない肌身にしみてわかっていたはずなのに、なんの躊躇も一切せず、彼女を護るために命を懸ける。それが、フェイトが一番最初に見た恭也の姿だ。

そんな彼に護られているだけな事に胸を痛めながら、それでもなのは瞳が彼の勝利を疑っていなかったことも、よく覚えている。

あの繋がりは、多分、無敵なのだろう。

「……話を、戻すんですけど」

「え、あ、うん」

「あの、私になにか、出来ることってありますか？ 恭也さんには本当にお世話になっていきますから、なにか、私も」

なんだか随分と、ティアナは彼に懐いてるようだった。

それこそなのはではないが、妹のような心境なのかもしれない。

……異性として見ているかどうかというのは、自分に客観的な判断はできなさそうなので思考から追いやることにした。

「そう、だね。御神式の教え子としてしっかり成長していつてくれるのが、何を置いても一番かな」

「……それ、恭也さんのためになるんですか？」

「なるよ、ものすごく」

ティアナへ告げた言葉はまるきり本音だ。恭也の事を思うなら、それがきつと一番だ。

「恭也さんはね、教えること、育てることが好きな人なんだ。そして何より、それはあの人にとって当たり前前の日常でもあった。壊れてしま

う前の、当たり前」

「……じゃあ」

「うん、だから、あの人の愛していた日常の重要な要素の一つを、担ってくれると嬉しい。もちろん私も弟子としてまだまだ教えてもらっている最中だから、一緒にね」

自分は基本的に毎朝彼に指導を付けてもらっている。一日で一番幸せな時間だが、あれが彼にとってもプラスになってくれていているはずというのは一応、シヤマルなどからも聞けた客観的な事実だ。

ティアナに指導を付けることについても、相変わらず表情はあまり動いてはいないがその実、いきいきとしているのはフェイトの眼には明らかだった。

「わかりました、……御神式の弟子として、立派に強くなってみせませう」

「うん。あ、でも、無理をする必要はないよ？ それは一番、悲しませちやうから。……理由はわかるよね？」

「はい」

この娘に昔の大きな負傷の話をしたというのは本人から聞いた。なるほどそれは、あの時のティアナにとって一番効果的な話だったろう。

「それから……もしもまた同じようなことや、何かまずいつて思うことが起こったら、私でもいいし、なのはでもはやてでも、昔馴染みの人達って言ったたらわかるかな？ その内の誰かなら大丈夫だから、連絡をくれる？」

「わかりましたっ」

「うん、お願い」

「はいー」

彼女の返事に笑顔を返して、改めてコーヒを口に運ぶ。少し冷えてしまったが、それでも鼻に抜ける香りはホツとする。見ればティアナも、同じようにカップに口を付けていた。

「……あの、色々ありがとうございました」

「ううん。こっちこそ話してもらえてよかったし、こうやって話せて

よかった。……えと、なんていうかさ」

少し照れくさいけれど、きちんと言葉にした方がきつといいだろう。

「一応、こんなでもティアナの姉弟子だから、これからも、色々話してもらえたら嬉しいな」

「……フェイトさん」

「私も妹弟子として姉弟子の美由希さんにはお世話になってるんだ、すぐく。……美由希さんの事は、あ、海鳴の任務のときに会ってるか」

少し前、海鳴でレリツク捕獲の任務があつたとき、フワード陣と高町家の面々は顔を合わせているのだ。

ちなみに美由希にも、もちろん御神式を作ることは伝えてある。恭ちゃんの新しい道だねと、彼女はほんの少し寂しそうで、でもとても嬉しそうに笑っていた。

「はい、……でもあの時は御神式を教わる前でしたし、少しお話したぐらいで、……お強いんだってことも知りませんでした。なんだか隙がないなあ、とは思ったんですが」

美由希は剣を握らなければ優しい本好きのお姉さんといった感じなので、武術家という印象は薄いかもしれない。

もちろん、それはただの印象であって、実態とはまったくかけ離れてはいるが。

「そうなんだよね、美由希さんってわかりやすく武術を身に付けてる人って感じじゃないよね。でも、……すぐく強いよ、ちよつと信じられないくらい」

「……なんか、恭也さんが自分よりも強いって、意味のわからないことを言ってたんですけど」

「あー、魔法なしで恭也さんと美由希さんがやり合うと……私の眼には互角かな。美由希さんは美由希さんで恭也さんの方が強いって言ってるし。二人の強さは、ちよつと質が違う部分もあるのかも」

美由希の技は、恭也のものと元を同じにしていながら、また少し凄みの種類が異なる。

純粹な、御神の技を振るう者としての完成度なら美由希が一番、そ

れは恭也も美紗斗も口を揃えて言っていた。

対し、条件の設定された実戦で戦う剣士という観点であれば、恭也に分があるのだろうかと思う。

「……魔法なしとは言え、あの恭也さんと互角なんですか？ 私たちなんてボコボコにされましたけど」

「私も昔、魔法なしの恭也さんに負けちゃったよ。映像で残ってるから今度見る？ とまああれ、そうだね、互角だね」

「……世界って、広いですね」

しみじみと言った彼女の言葉に、苦笑して頷く。

なかなか時間はとれなさそうだが、その内に改めてティアナを紹介できる機会があればいい。

「まあ、そんなわけで、私はまだまだ美由希さんほどの域にはいないけど、一応御神式のことなら答えられることも多いと思うから……」

「はい。……実は、恭也さんに、『御神式はフェイトが作ったようなものだから、色々聞いてみるといい』って言ってもらってたんです」

「あ、そうなんだ。私が作ったようなものっていう部分は否定させてもらうけど、ミッド式での実装なんかが私の領分である事は確かだから、遠慮せずに聞いてね。あ、入隊前の面談でも言ったけど、執務官試験の事とかも」

「はいっ、お願いします」

共通の話題はこうして、大きいものがいくつもあつた。

この娘とは結構、これから良い関係が築けるんじゃないかと、そんな風に思えた。

「……っ、今のは」

「良いね、今のは良い。十二分に実戦レベルだ」

奔った一筋の火線。それに対しての評価を、隣に並ぶティアナに告げる。

言葉通り、なのはの眼から見てもそれは良く出来た一発と言えた。

「ひとまず完成、かな。ティアナの新魔法」

「……はいっ！」

展開された訓練場内、林の中の開けた場所にはなのはとティアナの二人。並んで立つ視線の先には、生成されたターゲット用のガジェットが何体も並んでいる。

「やった……！」

ここで連日、時間を掛けて練り上げられた新魔法が、今、嬉しそうに呟いた教え子の手の中にあつた。

「あとは地道に反復練習、手に馴染ませていこうね」

「はいっ」

「じゃあ早速、基礎射撃訓練三番、ワンセット、いくよー！」

「はいっ！」

なのははコンソールを操作、すると動きを止めていたガジェットがこちらへ向かってくる。規定数を撃ち倒すまで次から次へと湧いてくる彼らを、一体一体きっちり動作不能にする、それが基礎射撃訓練三番だ。

「……っ」

呼吸を吐き出したティアナの手元から、パアン、パアン、と乾いた音が響いていく。フラッシュが辺りに広がって、空気を裂くように飛ぶ極小の弾丸には非常に高い速度が宿っている。

やがて、規定数すべてのガジェットが動作を停止。そのボディに空いた穴は一から三つと言ったところか。

「一発で仕留められたのは二割くらいか。二発が三割、三発が五割」

「まだ狙いが全然、正確じゃないです」

「そうだね、まずはそこを改善していこう。……うん、でも全体の所要時間は短いし、回避された弾は一つもなし。着弾後はもれなく貫通してる。現状だって、大きな戦力の一つにはなりそうだ」

コンソールに表示された結果から告げると、ティアナは一瞬無邪気に嬉しそうな顔をして、しかしそれをすぐに引っ込めた。

「……なのはさんが仕上げて下さいましたから」

「最後に理論をまとめて実装したのは私だけど、素材と骨組みを持つ

てきたのはティアナだよ」

(……やっぱり、心を開いてはもらえてないな)

ティアナに答えながら思うのは、たぶん身勝手なやるせなさだ。こちらに対する彼女の態度には、どこか硬い殻がある。反抗的なわけではないし、ホテル・アグスタ防衛の時のような無茶をするわけでもないが、ある一定のところからは心を閉ざしているのだなというのが、やはり感じられてしまう。

しかし結局、彼女と自分の関係は上官と部下、仕事仲間だ。慣れ合う必要のあるなしで言えばないわけで、ティアナの態度はなんら間違っていない。

開けられた距離に寂しさを感じるのは、こちらの感傷だ。

「でも、……特に圧縮による暴発を逆に炸薬として利用する発想なんて、私には。それにうまく指向性をもたせる処理を合わせてデバイスに魔法補助として実装するのも、自分で組み上げられる気がしませんし」

彼女がこちらと距離を取る理由はいくつかあるだろうが、その内の一つは、言ってしまうえば自分がこれまでの人生でそれなりの回数、色々な場面で向けられてきた感情だろう。

派手な能力、ランクに実績、名声。そんなものを有していれば、当たり前のように嫉妬は受ける。

慣れっこと言えば慣れっこだが、こうして長期で受け持つ教え子に向けられるのは結構こたえるのだなというのは、初めて知った。

「暴発を利用した魔法は、前にも組んだことがあるから」

「……え、そうなんですか?」

「うん、今はもう使っていないんだけどね。ティアナのそれと違って、無茶で馬鹿な魔法」

魔力を超高速で収集、収束させ暴発を起こし、それを砲撃の体に整えて撃ち放つスターライトブラスターという名の愚かな魔法は、五年ほど前に起こった一回目のDr. スカリエツティ一味による襲撃事件以来、撃っていない。

ティアナの手の中にある魔法もこれと似たようなことは一部して

いるわけだが、その規模や安全のための処理がまったく異なるため、特別な負担や危険はないと言っている。

圧縮による貫通力に優れた速い弾を、早い弾として撃ちたい。

ティアナが突然持ってきた相談を、基礎固めが終わってからだと突っぱねなかったのはそこかなりの可能性を感じたからだ。

「たまたま上手く組み上げる技法を持っていたから私が仕上げることはなかったけど、この魔法はティアナが大元を組み上げたものであることは間違いない。新魔法の制作で一番肝心なのは、枝葉末節より根幹だよ。出来も含めて、胸を張っていいと思う」

「……そう、でしようか」

「うん」

用意した魔力を高速で通常と比べて十八分の一程度の極小サイズまで圧縮。その際、デバイス側の処理を合わせ、わざと弾の一部を破れやすく構成する。

そして圧縮された弾はその破れやすくなった箇所、進行方向に対して真後ろとなるところが爆発を起こし、残る大部分が弾として飛んで行く。

以上がこの新魔法のプロセスだが、弾丸生成が極めて速やかで炸薬も同時に用意されるため、全体としてとにかく発射までの時間が短い。また、指向性を持たせつつ強い爆破とすることで弾にはかなり大きなエネルギーが渡されることになるが、高圧縮弾のおかげで崩壊・四散することなく高い弾速を纏う事になる。その上、高圧縮弾の元々の性質通り、貫通力にも優れている。

乾いた発射音に瞬くマズルフラッシュ、速い弾速で規模は小さい……まるで質量兵器の銃弾のようだが、生まれるきつかけとなるアイディアを出したのがそれを敵として戦ってきた兄だというのは、偶然と言おうかなんと言おうか。

しかし、物理衝撃オンリーである事からバリアジャケットに簡単に防がれやすい質量兵器の銃弾と違い、魔力弾なのでおそらく、かなり刺さる。

極小サイズの弾でしかないという大きな弱点はあるが、それも使い

ようだ。

総じて言つて、なかなか強力な魔法である事は確かである。

「それに、この魔法はティアナが使うからこそだよ」

「……なのはさんは、こういう弾は」

「私は誘導なしでの精密射撃はあんまり得意じゃないんだ。となると、生成速度を上げるために誘導機能が省いてある、そもそも誘導している暇がないこの弾は上手く扱えないと思う。その点、ティアナは結構それが上手いから、向いているよ」

なのはのメインは誘導弾と砲撃であり、誘導なしでの直線高速弾というのはあまり使った事がない。扱えないではないが、どうもじっくりこないのだ。

「本当はこういう事は基礎固めがちゃんと終わってからなんだけど、これ自体がティアナの基礎に一つになりうると思つたんだ。実際、現時点でそうなつてくれたと思つてる」

「……はい。フェイクシルエツトと同じくらい、メイン魔法として使うつもりです」

「だよね。だったらその習得は早い方がいい」

それに、言わないが自信を付けてあげたかつたというのもあつた。無力感からくる焦りがどれほど危険かというのは、身を以つて知っている。周りの人達が止めてくれたから良かったものの、そうでなければ間違いなく自分は今、こうして生きてはいないだろう。

自分があまり良くない感情を持たれ続けるのは最悪、仕方ないとしても、それでも彼女がコンプレックスを抱えたままになったり、それで危ない目に遭つたりしないように、できる限りの事はしたかつた。これでも、彼女の先生なのだから。

「ともあれ、ティアナ、最後にその魔法に名前を付けてあげなきゃね」

「え？ あー、そうか、そういう事になるんですかね」

「うん。似たような事をしている魔法はないでもないけど、もうオ리지ナルのそれと言える独自性はあるから、何か固有名はあつた方がいい」

「わ、わかりました。名前、名前かあ……」

首を捻るティアナ。

焦って決めなければならぬわけではないが、名前がないというのはどうしたって不便ではある。なにかしっくりくるものを決めてくれたらと思う。

「早くて、速い、貫通力もあって……うーん、でも全部の要素を入れたら長いし……あ」

「ん」

下を向いて考え込んでいたティアナが不意に、その顔を上げて後方に振り向く。なのはも気づいたのは同時。

ティアナのように御神式を習っているわけではないが、これでも不破の直系だ。周辺の空間把握は昔からの得意である。

「うん、二人とも中々の反応だ」

「きよ……特導官っ」

「お疲れ様です」

ティアナと同時に、堅苦しすぎない程度に敬礼。歩み寄ってきたのは、黒地に青ラインの特導官服に身を包んだ兄だった。

「気配を消して近づくのはやめて下さい」

「お前らが気づく程度には残してあったさ」

こちらの小言に、彼はしれっとそう返してくる。たしかに兄が本気で隠形に入ったなら、完全に戦闘モードの状態でなければその存在に気づく事は出来ないだろうが、だからと言って普段からちよくちよく悪戯に脅かされるのは心臓に悪いのだ。

「それで、どうしてこちらへ？」

「なに、例の弾がどうなったか気になってな。これでも焚き付けた張本人だ」

「あー、なるほど。それならグッドタイミングです。ね、ティアナ」
話を振るとティアナは一見真面目な、しかしその実、振り回すしつぽが見えそうな様子で言う。

「はいっ、実はついさっき完成したんです！」

「ほう、それは良い時に来られたな。見せてもらってもいいか」

「もちろんです！」

「じゃ、ガジェット出すね。動きは止めておこうか」

コンソールを操作、的として三体ほどのガジェットを生成する。

それらに対して身体を向けて、息を整えたティアナは魔法を発動。

「……………」

乾いた音は連続して三つ。さきほどとは違って静止した的だ、ティアナの撃ち放った極小の弾丸は狙い変わらずそれらの中心、コア部分を貫いた。

「…………なるほど、こうなったか。早くて速い…………考えてみれば、そうだな」

彼の顔に苦笑があるのは、奇しくも見慣れた弾と良く似ていたからだろう。

「あ、あの、…………どうですか?」

「その厄介さはよくよく知っている。いい弾だな」

「ほんとうですかっ!」

褒められたティアナは、その顔を喜色満面に染める。

「こんな彼女を、なのはは見たことがなかった。

「あ、そうだっ…………あの、特導官、お願いがあるのですが!」

「なんだ?」

「名前を付けてくれませんかっ、この魔法に!」

(…………ああ、本当に懐いてるんだな)

自分に対するものとは、根底から違ってしているような対応。こちらに当て擦っているわけではないだろうが、やはり寂しくはあった。

「俺がか? セっかくだ、自分で付けた方がいいんじゃないか?」

「うまく思いつかなくて…………。それに、その、きっかけをくれたのは特導官ですし、だから」

「わかった、ではスーパーティアナ弾で」

「ま、まじめに考えてくださいよ!」

からかわれてむくれるティアナ、そんな彼女に恭也はやはりしれっとした、いつもの親しい人間をおちよくる時の顔で。

極めて、身勝手だと思う。

そんな彼らの様子に、教導官としてではない苦味まで覚えるのは。

(……なんか、可愛い妹、って感じ。おにいちゃんも優しいし)

こんな歪な自分よりも、目の前の無邪気に慕う女の子の方が、きつとよっぽど妹の立場にふさわしいんじゃないかなんて考えてしまう。だけど、それはやっぱり、嫌だった。

女として彼を求めている気持ちを抱えているくせに、妹としても可愛がられていたのだ。誰よりも、自分が。

わかっているつもりだったけれど、改めて感じる自分の欲深さは、つくづく浅ましい。

「わかったわかった。そうだな、名前、か。……教導官、こういう魔法の名前というのは、なにがしショットでいいものか？」

「え、あ、はい。そうですね、それがやっぱり一般的です」

「だとすると……」

口元に手をやって、少しだけ沈黙考に入った兄は、やがて顔を上げて言った。

「では、ステインガーはどうだろうか」

「……ステインガー、ステインガーショット、ですか？」

聞き返すティアナに、恭也は頷いた。

「ああ。弾のイメージからすると、そんな感じだろうかと思う」

ステインガー、それは突き刺すものを意味する言葉。

ティアナの魔法の根底にあるのは、鋭く貫き、相手の意識を抜けていく弾というコンセプトだ。であればなるほど、ファストやラピッドよりもきつと、合っているように聴こえる。

「ステインガー、ステインガー……ステインガーショット」

「どうだ？ センスに自信はないからな。じっくりこないのなら」

「いえっ、私、それが良いです！」

恭也の顔をまっすぐに見上げ、その釣り気味の瞳に熱を籠めてティアナはもう一度、言う。

「その名前が、良いです！」

「……そうか。なら良かった」

二人の様子は微笑ましいと評すべきもので、だから、そんな風に思えない自分はせめて、何も言わないでいようと思った。

兄としての彼が盗られてしまうなんて恐怖があっても、まさかこの光景を邪魔なんて、できない。

「最近、ティアすごいよね」

部屋の電気は既に消えている。入隊直後あたりは疲れで即刻眠りについていが、最近はかなり慣れてきた。

「え、なによ急に」

「急じゃないよ、ずっと思ってたの」

二段ベッドの上段、寝転びながら天井を眺めつつ、スバルは下の友人兼同僚兼同室に言葉を続ける。

「新しい魔法含めて個人スキルがあんなにばっちり上達してるのに、だけじゃなくてチーム指揮もどんどん上手くなってるとるじゃん。……上手くなってる、なんて上から目線みたいで変だけど、とにかくさ」
「……それは、まあ、……それが私の役割だからね。一応、フオワードリーダーとしての」

その素直じゃない言葉の中には照れがある事くらい、長い付き合いだ、よくわかっている。

「でも、まだまだよ。山は登れば登るほど、目指す頂上への距離がわかる……受け売りだけど、本当にそうなんだと思う。昔よりはるかに自分の駄目な部分が変わるようになったわ」

「あ、それは私も同じかも。嫌にはならないけど」

「……そうね。足りないなら、これから足していけばいいんだもんね」
それは随分穏やかで、大人なセリフ。少なくともスバルの知る昔のティアナからは決して出てこなかったであろう言葉である。

「見てくれている人は、いるんだもの」

闇に溶けるようなつぶやきは、こちらに聞かせるつもりがあったのかなかったのか。それが指している人が誰かなんて、問うまでもない。

「……明日の模擬戦、特導官も見に来てくれるんだっけ？」

「ええ、そう言ってたわ。ま、いつもどおりやりましょ」

「うん、そうだね」

さざりと流れたティアナの言葉は、しかしどこか自分に言い聞かせるようで、やっぱり気合が入っているんだなあとと思う。

チームリーダーとして、現場指揮として、ティアナはいつも頭をフル回転させて指示を出してくれる。それこそ、チーム戦術の勉強も熱心にやっている姿をスバルは間近でよく見ている。

彼女の努力に報いたいし、彼女の努力に報われて欲しい。

「いつもどおり、全力で勝ちを狙っていこう。そろそろ、結果が欲しいよね」

「……そうね」

高町なのはを相手にした模擬戦。一定以上のダメージを先に相手に与えれば勝ちとなるルールでのその試合に、まだ勝利した事は一度もない。

スバルたちはチーム全員で、対して相手は一人。その上リミッターが大きいかかって、なのはのランクはスリーランクダウンのAAだ。

AAと言えば普通文句なしのエースクラスだが、それを軽く凌駕する人達に毎日毎日しごいてもらっているのだ、四人がかりならそろそろ超えたい壁である。

「いつもどおり、いつもどおり、確実な勝利を目指すわよ」

「まぐれで勝っても意味ないもんね」

これは訓練で、負けても命を取られるわけではない。だから一か八かの戦法を取るといふ事も出来てしまうわけで、おそらく、今の自分たちの実力ならそれで五回に一回くらいは勝利は拾えるだろう。

だが、機動六課フォワードメンバー四人、話し合って決めたのだ。目指す勝利はそれじゃない。欲しいのは、誰からも文句の出ない、運が良かったなんて言われない勝ちだ。

「反対に言えば……負けたって良いなんて気でやるつもりはないけど、もしそうなくても少しずつ改善すれば良いのよ。環境には恵まれているんだから」

「機動六課は天国だよ、……訓練のハードさ的には地獄だけど」

そこそこタフな自覚のあった自分だが、ここに来てから「もう死ぬ」と思った回数は一十や二十では利かない。

「でもほんと、ティアは特導官もだけど、私達、そもそもなのはさんに長期で鍛えてもらえるなんてとんでもなくラッキーだよ」

「……教導官としても優秀よね、あの人。教え方、上手いし」

「うん、すごく丁寧。それに最近ようやくわかってきたんだけど、私たち一人ひとりの育成計画もすごく綿密に立ててくれてるみたいで、なんか至れり尽くせりというか、いいのかなって思っちゃう」

「……そうね、本当に。善人で、天才で、努力家で、……なんか、完璧」最後の一言、そのトーンはどこか暗く。

(ティア……)

どうもあまり、二人が打ち解け合っていないらしいというのは薄々感じてはいた。だが、少なくとも上司と部下、教官と教え子という範囲内では問題なくやってはいるようで、なかなか外野からどうこう言えるものでもない。

それがもどかしいと思ってしまうのは、自分がティアナと友人で、そしてあのエースオブエースに憧れているからだろうか。

自分の好きな二人に、お互い好きになってほしいなんていうのはやっぱりお花畑なんだろう。

「あんな妹なら、それは可愛いわよね」

「ティアだって可愛がられてるじゃんっ、ほら、恭也さんなんて呼んでるしー」

「……弟子としてよ。恭也さんは、私の兄さんじゃない。……私の兄さんは」

その続きは、聴こえてこなかった。

お互いの息がかすかに聞こえるだけの静寂の後、ぽつりとティアナは呟く。

「……でも、弟子としてでもなんでも、私の頑張りを見てくれている。

あの人は、ちゃんと。それこそ、兄さんみたいに」

「うん……」

「だから、いいのよ。妹じゃないけど、だけど、私は私で、きつと、ちゃ

んど、だから」

声量は小さく、音色は硬く。

なんとなくの危うさを感じながら、何も言えなくて。

(明日、ちゃんと結果が出れば……)

そうすれば、すべての方角うまくいく。

信じて、スバルは眼を閉じた。

「おーおーおー、……ありゃあ随分だぞ」

なかなか、敵に回せば厄介なタイプだ。同じ小隊の鼻屑目なしに、ヴィータは本音でそう思っている。

育ちやがったなと言うべきか、育てやがったなと言うべきか。

『おおおおおおお！』『はあああああつ！』

気炎万丈、吠えながらそれぞれ別のビル屋上から空中へと飛び出して言ったのはスバルとエリオ。あちこちに設置してあるサーチャーから、その声や姿がこちらにも届く。

走る体躯の纏った勢いはかなりのもので、まだまだ荒削りだが悪くないレベルだ。

彼らの向かう先にいるのは、二人で挟む中間地点、やはり同じくビルの屋上に佇むなのは。

拳と槍、スバルとエリオがぶつけてくる左右からの突貫を、彼女は両手に展開したバリアで防ぎ。

『っ……』

しっかりと受け止めつつ、途中、その顔がしかめられる。バリアの展開も一瞬だが緩み、スバルとエリオが得物のその切っ先を数ミリ押しこむ。

ああ、本当に上手い。しかしそれは、スバルやエリオの事ではない。

『……レイジングハート！』

『Barrier Burst』

当然ながら、そのまま押される高町なのではない。戦況の変化と

反撃を狙い、彼女はバリアを爆裂させ、二人を吹き飛ばしにかかる。
『でりゃっ！』『はっ！』

しかし、爆炎がスバルとエリオの身体を舐める事はなかった。彼らは素早く身体を翻し、なのはからしつかりと距離を取っている。

あの有利な状況下からあつさりと手を引く判断は、極めて鮮やかと言っているだろう。なのはのバリアバーストはかなり厄介な魔法で、百戦錬磨の術者であってもあれの餌食になるものは少なくない。

そして彼らフォワードチームは、それで終わりとはしなかった。むしろ、最後のこれが本命の狙いだっただろう。

『フリード！』

『……グオオオオオオッ！』

ビルの谷間からバツと翼を翻して現れたのは白銀の竜が一頭と、その主。フリードの口元には、既に赤い光がチャージされている。

間髪おかずに発された火炎は、なのはの居るビルの屋上全面を焼きつくすかのような規模だ。動きの素早くない、ましてやバリアバーストの直後で固まっているのには避ける事の出来ない攻撃である。「堅実で隙がない攻め、言っちゃあなんだがこのレベルの強かさは新人のそれじゃねえな」

「だね。私も、AAランクに落ちた状態だとかなり厳しそうだ」

ヴィータに答えたのは、隣に立つフェイト。

フェイトとヴィータは模擬戦真っ最中の教導官とフォワードチームから十分に距離を取った位置、こちらもやはりと言うべきかビルの屋上に立って、サーチャーの映像・音声と目視で状況を見ている。

もう何度目になるかわからないこの戦い、ついにずっと負けていた方が白星を飾る日が来たのかもしれない。

「いやあ一時はどうなる事かと思っただけどよ、本当に、めっちゃくちや使えるようになったじゃねえか、アイツ」

「スバルもエリオもキャロも頑張ってるけど、現状、ここまで戦えてるのは確実にあの娘の力だろうね」

件の人物はサーチャーの映し出す投影モニターの中、そのオレンジ色の髪を風に揺らしながら、鋭く油断のない輝きを瞳にたたえてい

る。

少し背の高いビルの屋上、屈みながらじつと状況を見やるその少女、ティアナ・ランスターこそが四人の司令官であり、攻勢の要。

派手に技を振るつたのは他の三人でも、それを攻撃として成り立たせたのは間違いなく彼女だ。

『スバル、エリオ、全力退避。後ろは見なくていいわ』

『了解！』

その指示が飛んだ直後、なのはが身を置く屋上に広がる炎が吹き飛んだ。赤い海を払い、空を裂くように放たれたのは桜色の光球群。なのはの十八番の一つ、アクセルシューターだ。

あれだけの炎を受けてなお、リミッターがスリーランクもかかっても、高町なのはは健在だった。さすがの重装甲と言うべきだろう。

なのはの光球はスバルとエリオを捉えんとするが、素早く撤退を始めた彼らにはなかなか追いつけない。かろうじて食らいつかんとしたものも、すべてティアナに撃ち落とされた。

なのはの表情は相変わらず凜としているが、バリアジャケットに損傷はかなり入っている。今の反撃で結果を出せなかったのは痛そうだ。

「……察しが良すぎねえか？　なんでなのはがアクセルシューターで来るってわかった？」

スバルとエリオは揃って後ろの様子などまったく気にせず全力ダッシュで逃げていった。とにかく速度を出せば追尾を振り切れるアクセルシューターだったからそれで正解だったろうが、もしこれがデイバインバスターなどの砲撃系であれば、その速度から言って距離を取って逃げ切るのは不可能と言っている。その場合、よく後ろを見て一瞬の判断で回避をしなければならない。

どちらが来るかなど、術者であるなのはの姿が炎の中に沈んでいた事もあり、撃たれてみなければわからないはず。しかしティアナの指示は、明らかにアクセルシューターで来る事を確信していたものだった。

「撃ち落とし用の球を用意し始めたのもアクセルシューターが飛んでくより前だったぞ。どうなってる……いや、そうか、お前らの仕込みか」

「ティアナがちゃんと上手く使っているんだよ」

御神式の構築、その大部分を担った人物であるフェイトは、妹弟子の勇姿にそう言うてにっこりと笑った。

「音で判断してやがんだな？ 撃たれるタイミングと、撃ってくるものの種類」

「そう。特にティアナはなのはとつきつきりで訓練しているからね、よく覚えてるみたい」

「……厄介だ。本気で厄介だぜ」

仲間の位置や状態に関しても、ティアナは明らかに目視や念話の連絡だけでは説明の付かない把握力を発揮していたが、それどころか敵であるなのはの攻撃に対しても、先読みのような技術を振るっているらしい。

スバルとエリオが危なげなくバリアバーストを避けたのも、それを察知したティアナの指示があったのだろう。

「あと、厄介と言えば、あれな」

「そうだね、……あれはやだなあ」

フリードとキャロに狙いを変更せんとするなのはの動きが、一瞬固まる。その様子はスバルとエリオの同時攻撃を受け止めた際に、バリアが緩んだ時と同じものだ。

パアン、パアンと、響く短く乾いた炸裂音。

片方の銃でビルからビルにアンカーを打ち込みながら跳んで移動しつつ、もう片方の銃から音と共に放たれるのは目視の難しいレベルの速度を誇る弾丸。

貫通力もかなりあるらしいとは言え、それはなのはの防護を一発で抜けるほどではない。

だが発射が早く、弾速も速く、避けるのは難しい。そして、集中して着弾が続けば防護を貫通してくる可能性はあるレベルではあった。避ける事の出来そうにない、無視も出来ない効力を発揮する弾。

そんなものが飛んでくれば、否応なしに意識は取られる。それを非常に上手くティアナは利用しているのだ。

『もう一度いくわよー!』

『了解!』

なのはからの反撃をいなし、無事にチームの体勢を整える事に成功したティアナはやはり油断なく、再度の攻勢に入った。

スバルとエリオを主軸とした攻撃の中に、状況を見て補助をするようにステインガーショットと名付けられた射撃を混ぜ込む。大きく隙が出来たならキャロのブースト魔法とフリードの炎撃も叩き入れる。

抜け目なく、しかし堅実な戦いぶりは安定感があった。

「こりやあ勝負あったかな……いや、わかんねえか」

「ティアナたちの方に戦況は傾いてはいる。だけど、なのはは硬いからね」

並のAAランクの術者ならとつくに圧倒されて敗北を喫しているだろうが、あいにくと彼らの相手は高町なのはだ。ランクを抑えてあっても、その特異な能力は健在である。

派手で強力無比な砲撃に注目が向きがちだが、彼女の強みは攻撃力だけではない。その後ろにある城塞もかくやと言った重厚な防御力は、向こうに回せばあの砲撃と同じくらいに脅威なのである。

「ここから詰め切れるか、だな」

「うん」

見る限り、ティアナたちは四人でちょうどなのは一人と拮抗しているような状態だ。一人でも欠ければ、今度はなのはの側に大きく状況は傾く。

どうなるだろうか、まだまだ眼は離せないだろう。

「……そういや、恭也の奴はどうしたんだ？ 見に来るんじゃないかったのか？」

「上から急な連絡があったみたいで、ちよっと遅れるって。そろそろ来るとは思うけど」

元伝説の特武官、やはりなかなか暇な身ではないらしい。度が過ぎ

るようなら対処が必要だろうが、なのはやフェイト、はやてが大丈夫な範囲だと判断しているのなら何も言うつもりはない。

(……ちよつと馬鹿な事したみてえだけど、あいつ、最近楽しそうだな。やつぱ教えんのが好きなんだな)

フェイトに加えて教え甲斐のある弟子がもう一人出来た事は、どうやらかなり日々に張り合いを与えたようだ。ヴィータの眼から見ても、恭也の状態はいい方向へ向かっている。

その結果、自称凡才の少女が順調に人外の領域にじわじわと近づきつつある気がするのが恐ろしいと言えば恐ろしい。

「ティアナも恭也に見てもらいてえだろーよ」

「ずいぶん懐いてるみたいだからね」

ベタベタとひつつくようなタイプではないのだろうが、パツと明るくなる表情は極めてわかりやすい。

お澄まし顔をしてはいても、あの娘もまだまだまだ十六歳の少女なのだ。誰かに甘えたくなくても、それは何もおかしくない。その相手が父性という概念が具現化したような男だったというのは、傍から見ると分には少なくとも自然な流れであった。

「……なのはの方にも、少しは打ち解けりやいいんだけどな」

「……やつぱり、まだ硬い？」

「なんかな。どうしても色々思っちゃまうんだろーけどよ」

入隊当初やホテル・アグスタ防衛の時のような、全方位に対するコンプレックスはどうもかなり薄れたように見えるのだが、ことなのはに対してはニュートラルには接せないらしい。

ヴィータの見る限りそれはあるいは、皮肉にもなのはが親身に接するからこそというところもあるのかもしれない。

「ティアナの奴、アイツを完璧な女だとも思ってたかね。あんな歪な人間いねえのに」

ズバ抜けた能力を持ちながら、絵に描いたような人格者でもある……そんな風に思ってしまったのである。歳も近く役割も似ていて、直属の指導者としてあんなに近くに居る人間に黒い感情をなにも持たずにいるというのは、少々難しいだろうか。

「なのはは恭也さんと一緒に弱い部分を隠すのがすごく上手いから、傍目に完璧だつて思っちゃうのはしょうがない部分はある」

「まーなー」

ヴィータの思う、高町なのはの一番大きな欠点はおそらくそれである。表面の取り繕い方が見事過ぎて、内側の痛みや葛藤を人に想像させなさ過ぎるのだ。

「それから……ティアナ、もしかしたら恭也さんをちよつとお兄さんと重ねてる部分もあるのかもしれない。そうすると、そこにはなのが居るから」

「あー、……あー、そういうのもあつたか。なるほどなあ……そうなるよ、いよいよややこしいな」

なかなか込み入った状況で、絡まった紐を解くのはそれなりに大変そうである。

「下手に手を突つ込むよか、時間がなんとかしてくれんのを待つっきゃねえかもな。でも、今日のこれでもし勝てるようなら多少は変わってくんじゃねえか」

「うん、一区切りにはなりそうだよね。そうしたら、少しずつ仲良くなっていけるかも……ん」

会話の中、フェイトが後ろを振り向いた。

「恭也さん、来たね」

「お前、気づくの早えよな……」

ヴィータも同じように後ろを見てみれば、たしかに彼女の言葉通り、ビルの上々を軽々八艘跳びのように踏み付けてくる恭也の姿。

「なんであんな派手な動きしてんのに、引くぐらい物音しねえんだアイツ」

「うちの師範ですから」

「それなのに気づくお前つて……ストーカースキルか」

「御神流スキルだよ!! あ、あと、その……あ、愛、とか」

「こわ……」

「え、なんで!？」

人の気配を覚り、自分のそれを消すという技は思えば、この女には

一番身につけさせてはいけないものだったのではないだろうか。

その技をプライベートで向けられうるのが、それらの実力においてフェイトよりも一段も二段も上な人間だけであるというのがせめてもの救いだろう……そんな風に思うヴェータであった。

ここからが中々攻め切れない、そんな焦れが少しずつ背中を這っている事は自覚している。

『つスバル、跳んで！』

『え、うんっ、……おあああああ!?! あっぶなー!』

青い髪のチームメイトがつい先程まで居た場所を、極太の閃光が呑み込む。指示が一拍遅ければ、こちらの人数は一人減っていただろう。

ここまで押し込んでなお、簡単な相手じゃない。そんな今更の事実を改めて、ティアナは実感させられていた。

ビルの上を疾走しながら、目標、高町なのはの様子を伺う。

損傷のあるバリアジャケットを身に纏いながらも、その表情は凜として。奔る魔力のキレは健在、動きにも焦りや迷いは見当たらない。

リミッターでAAランクにまで落とされているが、それでも『高町なのは』だと思わされる。

彼女の威容は、女王という名がふさわしい。

「焦るな、焦るな、焦るな、……焦るな」

念じるように呟いて、一旦屋上から次のビルの中程の階にアンカーを撃って飛び込んだ。フェイクシルエットで自分の幻影を三体ほど作り出し、同時に別方向へ散って出て行く。少しでも攪乱しなければ。

相手の攻撃を無駄撃ちさせて、その分こちらから攻め立てる。地道にそれをやっていくしかないのだ。

ビルから出つつ、ちらりとなのはの方を伺う。彼女の横顔に動揺の色はなく、こちらが押しているはずだという認識が思わず、大きく揺

らいでいく。

勝てるのか、本当に、この人に。

(……ビビるな！)

弱気の種を握りつぶして、隣のビルにアンカーを撃ちながらティアナは心を発動させる。洪水のように押し寄せてくる情報を捌いて、なのは様子仲間たちの位置と状態を把握。

心を常時発動をさせられるほど、まだ上達はしていない。要所要所、必要なときにだけ使うようにしているのだ。

(アクセルシユーターの加速が準備されてる、……危ない位置には、一応誰もいないか？ でも、あの精度と威力と誘導性は危険極まりない、引き続き警戒が必要)

この技を使うと、頭がキンと冷えていく。それは、葛藤や恐れというものを振り切るくらい深くに潜る集中状態に入るからであり、

(……大丈夫、大丈夫、……大丈夫)

自分には、彼にももらったこの技がある。そんな風にお守りを握りしめるような気持ちになれるからだった。

もしも今日、勝つたらまた褒めてもらえるかな。

怯えの反動か、そんな気持ち心が心の中から浮いてくる。

よくやったなって、頑張ったなって。あのゴツゴツとして、だけど優しい手のひらで、頭を撫でてくれるだろうか。

私を、見てくれるだろうか。

そのはずだ、きっとそう。

(……それに、もし勝てたら)

そうしたら、白いバリアジャケットがよく似合うあの人の優しさを、きつと正面から受け取れるようになる気がするのだ。

彼女がどれだけ自分を想って教えをくれていくかくらいわかってる。わかっているのだけど、その優しさがまぶしすぎて、自分はずっとまっすぐに向き合えなくて。

だけど、今日勝てたなら。

つまらない劣等感を踏み越えて、色んな嫉妬を捨て去って、ちゃんと歩み寄る事ができるはずだ。

寸前まで迫ったアクセルシューターを身を捻って躲しつつ、ピルの中へとまた飛び込んでながら、心がまだ発動したままになっている事に気づく。

それほど深く潜ったろうか、それとも模擬戦とは言え実戦で使い続けた事で技がいよいよ馴染んできたのか。

「……………」

もしかしたら、これは後者かもしれない。コツを掴めば、そこから一気に成長する事もある…………そんな風にあの人も言っていた。

成長を意識した途端、心の精度がまた一段引き上がり、今まで聴こえていなかった範囲の音を拾い始めて。

「ようやく来たな、お偉いさんの用事は大丈夫なのかよ」

「ああ、…………まあ、一応話は付いた、はずだ」

「なんだよ、歯切れの悪い言い方しやがって」

（あ…………）

赤毛の教官の声と一緒に、その人の音色が耳に届いた。

（…………見に、来てくれたんだ）

模擬戦開始前、少し遅れるらしいと聞いた時は正直、すごく気落ちしてしまった。だから、今、こうして来てくれた事がとても響く。

「…………なにかあったんですか？ 妙な事を言ってきているのでしたら」

「いや、…………心配してもらおうような事ではないんだ。すまないな」

「そう、ですか？ ならいいんですけど…………」

アクセルシューターの猛攻を避け、仲間たちにフォーメーションの指示を下しながら、やはり心はそれほど力を入れずとも維持できたまま。

（よし、これなら…………）

おかげで対応が早くできて、勝利の実感をようやく手繰り寄せられてきた。

「フォワードチーム、押してますよ」

「お前が来る前に終わっちゃうかもしれないねえって思ってたくらいだぜ」

「ほう、……そのようだな」

彼にお礼を言う時は、ちよつと自慢気にしようかな。どうですか、ちゃんとできましたよって。

（勝つ、勝ってみせる。……冷静に、着実に）

一人で痛みを抱え込まなくなつて、みつともないそれをわかつてくれる人がいる。だから、焦ることなんて何も無い。

「終わる前に来られてよかつたよ、急いだ甲斐があつたな。……少し、気になつてな」

「やつぱ心配だつたか？ ティアナの奴の事」

自分を見てくれている人は、こうしてちゃんと――。

「ああ、いや、なのはの話だ」

「……え？」

一瞬、頭が真っ白に染まって。

桜色の光球が自分の身体ぎりぎりをかすめていくのも、まるで遠い世界の出来事のようにだつた。

『ティア？ おーい、ティア？』

指示を待つチームメイトからの念話が、来ている事はわかつている。だけど、意識は今、そつちには向かなくて。

「なのは？ あんだよ、ティアナじゃねえのか？ あんなに熱心に教えてたろうが」

「あの娘の事ももちろん気にはしている。だが、今は少々、なのはがな。フオローするべきはあいつの方だろう」

『ティア？ どうしたの？ あれ、念話つながつてないのか……』

『……聴こえてる、わよ』

ようやく返した言葉は、自分でも驚くくらいに平坦だつた。

のっぺりとしていて、だつてそれは、きつと何かが振り切れているから。その何かは何なのかは、視線を前に向けた時に、やっぱりはつきりとした。

高町なのは。

ガラスのないビルの大窓越しに見えるのは、周囲を油断ない瞳で見えるその人で。

(……どこが)

どこが、一体どこが。

一体、あの完璧な女のどこが、心配だと言う。

『ティア、次はどうする？ エリオと私で回りこんでフォーメーションD？ それともキャロにブースト頼んで正面からA？』

『……』

いや、だから、結局そういう事なんだろう。

だってそんなの当たり前だ。

(……妹、だもんね。かわいいかわいい、妹だもんね)

あの人は、お兄ちゃんに心配してもらえる、大事な妹で。

『おわっ！ こんなに追い込んでるのはさんの球、キレツキレなんだけど！』

高町なのはは損傷のいよいよ大きくなったバリアジャケットを纏いながら、自分たち四人に囲まれながらも堂々たる風体でビル屋上、三メートルほど上空で髪をなびかせている。

高空の女王の異名を取る、光球群を力強く操るその様はさすが、エースオブエース。

リミッターをスリーランクかけた状態で、自分には決して届かない出力の技を、あんなになんでもない顔でやってのける。

(わかってる、わかってるわよ……ちゃんとわかってたわよ、そんなの)

ティアナの視界は今、驚くほど鮮明で、研ぎ澄まされた感覚は今までにない鋭敏さを誇る。

『……全員、聞いて。私が隙を作るから、各々大きな遠距離攻撃を叩きつけて』

『おっけー了解！』『わかりました！』『やってみます！』

スバル、エリオ、キャロから返ってくる声に、言葉にしないでティアナはやっぱり、ごめんと呟いた。

ごめん、でも、もう止められそうにない。

左の銃からアンカーを撃って隣のビルの屋上へと上がりながら、着地と同時に右手の銃をなのはへ向ける。

撃つ前から着弾位置をはっきり確信できたのは、今がかつてないくらいに集中状態だからだろうと思う。

放たれたステインガーショットは、バリアジャケットに損傷のあるなのはの右腹部へ。当然、それでも身体へのヒットには至らず、割れかけとは言え効力の発揮しているジャケットに阻まれる。

続けて二発目、これもやはり、発射する前に当たる場所がはつきりわかった。

「……………」

寸分違わず一発目と同じ位置に叩きこまれた弾に、なのはが僅かに息を飲む声が聴こえる。一発目で削られた彼女の装甲はその二発目で、さらに大きくえぐられた。

これだけ距離のある相手にホールショットなんて、普段から、最初からやれなんて言われても決してできないだろう。

「……ただ、今の自分はいつもどおりじゃない。」

フラッシュと炸裂音を産声に、三発目がなのはに食らいつく。その着弾位置は一、二発目の作った穴。

「うっ……………」

それはついに、バリアジャケットを抜いて通る。模擬戦用の弾なので、効力はスタンオンリー。

身体の痺れにだろう、小さなうめき声が栗色の髪の女から上がった。

「ツ連発ホールショット!? アイツあんなん出来たのか!?!」

「…………いや、あそこまでの精度は俺も初めて見る」

「ティアナ、怖いくらいに集中してますね……………」

遠くから聴こえてくる声に、しかし今は意識を向けない。見るべきは、そっちじゃない。

『今!』

『はああああああああああ!』『フリード! いくよ!』

合図に、エリオの鋭い雷撃とフリードの煌々と燃える火球が奔り、

『いよおっしやあああああ！』

ブオンと、重厚な音が最後に続く。スバルが戦いの中で崩れたビル
の大きな破片をぶん投げたのだ。ここぞという時、相変わらずやる事
が剛毅である。

「ぐう……！」

対し、なのははいつもよりも明らかにバリアの展開が遅い。言うま
でもなく、身体の痺れが彼女の動きを縛ったのだ。

『……やった！』

結果は、スバルの声が示している通り。鉄壁の城のように思えた高
町なのはがその身体をふらりと揺るがし、やがてビルの屋上、その灰
色の床へと落下する。

すんでのところで受け身は取ったものの、ダメージは大きいだろ
う。それでも模擬戦終了の合図がないという事は、バリアジャケット
の損傷率は規定以下。

まだ勝負はついていない。

それは、今のティアナにとっては願ったり叶ったり。

この気持ちを吐き出す前に終わりになんか、させるものか。

発動させたのは魔法が二つ。その内の一つ、フェイクシルエットの
幻影が全力で走り全力で踏み切り、高町なのはが膝をつくビルめが
け、屋上から空へと身を投げた。真正面から、堂々と。

「……くっ」

いかにもフェイクですと言わんばかりの無謀な突っ込み方だが、そ
れでも一応相手にはしなればと思っただろう。なのはは抜き打
ちの砲撃を一発、放ってくる。

大ダメージを受けた直後という事もあって、その威力は万全の時と
比べてひどく弱々しい……とは言え、それはそれでも『高町なのは』の
砲撃だ。

正面からまともに浴びてまさか、余裕の無事でいられる代物ではな
い。

無事でいられるものではないが、それでもティアナはそれがいざ真
ん前から迫ってきててもなお、怯む事だけはしなかった。

フェイクシルエツトで作った己の幻影が吹き飛ばされて、——その後ろで同じく特攻をかけていた、オプティックハイドで透明化した本物のティアナに桜色の奔流が迫る。

受け流すように斜めに角度を付けたシールドを眼前に生成、さらにバリアジャケットの出力を上げて衝撃に備える。

不思議と、耐えられないとは思わなかった。それは、それだけ高町なのはにダメージがあったという確信だ。

それでも結局バリアジャケットの損傷は規定値ぎりぎり、通った衝撃に意識は飛びそうになったがそれでも、オプティックハイドは意地でも解除しなかった。

「……本体は」

なのはの視線が、こちらから外れる。彼女から見れば撃つて姿が消えたのだから、当然さっきのは幻影だったと判断するだろう。それは間違いではないが、正解でもない。

この瞬間、たしかに彼女はこちらに騙されている。

砲撃をボロボロになりながら耐えてその状況を作ったティアナは、しかしそれがずっと続くものとは決して思っていない。高町なのはの空間把握能力はさすが御神不破の直系とすべきなのか、やはり人間離れしているのだ。

出来る限り柔らかに足首を使って、ついにティアナはなのはと同じ屋上へ着地。どれだけ消したつもりでも、まさか師のようにはいかない。やはり漏れてしまった音を鋭く察知して、なのはの訝しげな視線がこちらに向く。

それはそうだ、まさかこんな馬鹿な特攻をして来るなんて彼女は夢にも思っていなかったろう。

比嘉の距離は七、八メートル。もう、ティアナは隠す気はなかった。隠せる気が、しなかった。

「……あああああああああああああッ！」

自分の存在も、彼女への黒い気持ちも。

オプティックハイドを剥がしながら吠え、ワンハンドモードとしたクロスミラーズを向けて、なのはの元へと突っ込んでいく。両手で

構えた銃に籠めるのはがむしやらかな魔力、制御もへったくれもはやない。

爆発のようになるだろうこの銃撃を、眼前で炸裂させてやる。理性的な選択なんて、もうティアナの頭には欠片もなかった。

「……ッティアナアアアアアアアアアア！」

あと一步、そんな距離だった。

あと一瞬、そんなタイミング。

魔力を解放させんとした寸前、桜色をした横薙ぎの衝撃に吹き飛ばされて、ティアナの身体は宙を舞う。そのまま何回かバウンドをして、屋上の端まで転がって止まった。

全身に奔る激痛は、しかし膜を通したように他人事のようなだった。

「……」

「なにを、どうしてこんな……。ティアナッ……！」

その人は、こちらを睨み、その愛らしい顔を見た事もないような剣幕の重い怒りで染め上げている。

「模擬戦は、喧嘩じゃない……、あんな戦法、一步間違えたら怪我じゃないすまない……。それがわからないわけじゃないでしょ……」

「わかってますよ……」

「……わかってるんなら、なんで」

彼女は、こちらに歩み寄って来る。ダメージの影響か、少し身体は重そうだがそれでも強い、猛烈な意思を感じる足取りで、一步一步迫って来る。

「なんで……ッ！」

ついに彼女はこちらの下に辿り着いて、その細い手でティアナの胸ぐらを掴み、吊るすように引き上げて無理やり自身と視線を合わせる。

「なんで！　なんであんな事をしたッ!!」

形の良い瞳の中は、まるでマグマの煮えるよう。

彼女は、本気で怒っている。

「堅実な方法で勝つんだって言ってたでしょう……、チームの皆と、それを目指して頑張ってたはずなのに……、全部投げ捨てて、なんであ

んな事をした……ッ！」

その灼熱は、当然のように善良だった。チームを裏切り、自分自身の努力も裏切り、勝手な事をした部下に教え子に憤る、美しい熱さ。

「……………わよ」

「……………聴こえるように言いなさい」

そのお綺麗さが何より、癩に障った。

「……………うるっさいっつってんのよッ!!」

「……………っ!？」

言葉と同時に、目の前のお綺麗な顔にヘッドバットを思い切り食らわせて、ノックバツクにたたらを踏みながら、ティアナは力の緩んだ彼女の手を振り払った。

「あんたが正しい事くらいわかってるわよッ！ 高町なのははいつも正しくて、立派で、強くて、綺麗で、完璧よ！」

「ティ、…………ティアナ?」

「努力もしてる、経験も積んで、驕りもない！ なのに才能は飛び抜けて、大天才のエースオブエース！ 口を開けば間違いはなくて！ 皆に好かれて信頼されて！」

どろどろとしたぐちゃぐちゃの気持ちは、一言溢れでたらもう止まらなかつた。次から次へと、白いバリアジャケットが似合いの女性に黒い感情をぶつけ続ける。

「私の欲しいもの全部！ 全部持つてんじやない！ 実力も、実績も、地位も、可能性も、理想みたいな人間性だって！ 全部全部、あんたは持つてんじやない！」

「ティアナ、……………待って、聞いて、私はっ」

「うるっさいわよ！ どうせ正しい事しか言わないんでしょ!? その綺麗な口で、完璧なあんたは！」

「……………っ」

叩きつけた言葉に彼女の顔が深く深く歪む。胸元で握りしめられた手に色みはなくて、どれだけ自分の言葉がその心をえぐったかを思い知らせてくる。

それでも、止まれなかつた。

ずっと心の奥でわだかまっていた醜い気持ちだが、それでも間違いないくティアナ・ランスターの本音が、堰を切つて止まらない。

「あんたの凄さはわかってんのよ！ 嫌つてくらい、わかっているツ！」
まぶしすぎる彼女の光が産んだ、ティアナの中のあまりに濃い闇が、白日の下に晒される。

「わかっているわよ！ わかっているのよ！ わかっているから！ わかっているから、だから！ だけど！」

「ティアナ、わ、私は……！」

「ちよつとくらい、欲張つた私から！ ——奪つてく事ないじゃないツ!!」

その言葉の意味が、彼女の通じたかはわからない。こんなもの、極めて一方的な言いがかりだ。癩癩のように勝手に、当たり前屋みたいに醜悪な。

だけど、本音だ。

本当の気持ちなのだ。

彼は自分の事を見に来てくれたと思つたのに。

実際は、堂々とスリーランクもリミッターを掛けた身でこちらと渡り合う才能豊かな妹を、それでも『心配』して来たという。

自分を見に来てくれると思つた。

自分を見てくれていると思つた。

別にそれは、間違いというわけじゃないだろう。あまりに勝手に自分がそこに期待をし過ぎただけの話。

もし、彼が心配をしたのが自分よりも明らかにそうされるべき人間であつたなら、きつとこんな気持ちにはならなかつたのだと思う。

そうだよ、しょうがないよねと、そんな風に納得が出来たと思う。
だけど実際に対象となつたのは、色んなものを山程持つた、これでもかというくらいに優れた女性。

能力も性格も器量も実績も評判も抜群の、誰もが認めるエースオブエース。

優しい兄にそれでも護られる、全方位恵まれた、奇跡みたいな人。
そんなの、嫌がらせにしか思えない。

「なんで、なんでッ！」

「ッティアナ、止めなさい！」

銃口にありつたけの魔力を注ぐ。さっきの眼前炸裂狙いの時がむしやらだったのが、今度はそれよりもっと乱暴で無茶苦茶だ。

制御も何も考えてない。そんな思考は残っていない。

撃たなくたってわかる、こんなもの、絶対にまともに成立しない。盛大に暴発するだろう。

「なんでこうなるのよお……ッ！　なんでええええええええッ！」

「ティアナっ、つく、お願い、やめて！」

練っているのは曲がりなりにもティアナの残る全魔力、それはそれなりの勢いで空気を揺らし、強力な風を生んでいる。

こちらに手を伸ばすなのははいつもならそんなものは物ともしなかつたろうが、今は負ったダメージが大きすぎたらしい。たまらずと言った様子で二、三步後退する。

「ティアナ、やめて！　話を聞くから！　ちゃんっ、全部聞くからっ！　だからっ！」

その顔にあるのは、自分が撃たれる心配などではないのだろう。

純粹な、こちらを憂う心根が、声音の奥に見えている。

だけどそれは、今のティアナにはふりかけられる新たな燃料にしかない。

「うるっさいわよおおおおッ!!」

喉が焼けるような大きさと痛々しきで叫び、そして銃に籠めた魔法と呼ぶ事も出来ないような愚かさの塊を爆発させんとしたその寸前、

(……あ、れ?)

ティアナの意識は、首筋に奔った衝撃で闇の中へと身を投げた。

最後に目に映った光景は、たったひとつ。

(なんて、かお、してんのよ……)

あまりにも悲壮な色でその面を染めた、妬ましくって仕方のない、それでもやっぱり憎む事だけは出来そうにない、その人の顔だった。

第30話 歪

「……………う、……………あれ」

「……………よかった、気がついたね」

視界のほとんどが白い天井で、声のした方に顔を向ければそこには金髪の美女の姿。

「気分は悪くない？ 大丈夫？」

穏やかな声の彼女を見つめながら上半身を起こし、問われた内容をぼうつと考える。

大丈夫？ なにがだろう。

ぐるりと見渡せば、何回かお世話になった事のある六課内の医務室だとわかった。

自分はどうしてここにいる？ どうしてこんな風に、ベッドで寝ているのだろう――。

「あ……………」

ようやく働いてきたらしい頭は、やがて状況をすべて理解した。自分、ティアナ・ランスターがいったい何をやらかしたのかを。

「……………フェイト、さん」

「……………うん、なに？」

傍に寄り添っていてくれたらしい姉弟子に、言うべきことはたくさんあるはずだ。

あるはず、なのに。

「私を、最後に、気絶させたのは……………」

ティアナの口からこぼれたのは、そんな確認だった。

「私だよ」

そして、返ってきた言葉に深い安堵を覚えたのは、言い訳のできない事実だった。

姉弟子が嫌な役目を担ってくれたというのに、自分の意識を落とし、自分が彼でなくてよかったなんて、そんな醜い安堵をしている。

凶弾を放たんとする自分から、彼が妹を護ったという、そんな構図にならなかつた事を、安心しているのだ。

「…………ごめんなさい」

いい加減、本当に馬鹿すぎる。

馬鹿の上塗り、重ね塗り。

「ティアナ…………」

「ごめん、なさい…………」

なにから謝ればいいのか、もうわからない。

「ごめんなさい、ごめんなさい、…………ごめんなさい…………！」

「うん」

視界ごと包む、暖かくて柔らかい感触。

頭を姉弟子に抱えられ、そのぬくもりの中にいながら、ティアナの顔に血の気はなかった。

「わ、わ、わかって、るんです…………なのはさんは、なんにも、わるく、なんて、ないのに…………！」

「…………」

「わたしの、ことを、かんが、え、て、…………ずっと、ずっと、いろんなこと、してくれたのに…………！」

それなのに、自分が返した行為はなんだ。

「なのに、なのに、わたし、…………あのひとがなんにもわるくないのが！ あんなにかんぺきなのが！ ゆ、ゆるせ、ゆるせなかったんです！」

口にしてみると、いかにも幼稚。

高町なのはは文句なしに完璧で、自分とは、まるで違う。

「それでっ、それで…………！」

「うん」

喚く自分に、フェイトの声音は揺れず柔らかか。子供をあやすその温度が、今はひどく甘い。

思わず縋って、本音を零す。

「あんなにかんぺきなのに！ それなのに！ ……ずるいつて！ お、おもって！ だつて！ だつて！ あんなに！ あんなにやさしくされて！ まもられて！ なんて、なんで！ あんなに、かんぺきなのに！ なんて！」

言葉の足りない自分に、フェイトは問い返す事をしない。代わり

に、わかっているというように、背中を優しく三回叩いてくれる。

「ずるい！　ずるい！　ずるくなんか無いってことくらいは知ってます！　でも、でも、で、でも、でも！」

彼女を尊敬している。信頼している。好ましいという感情だった、たくさん持つてる。

だけど、妬ましい。煮詰まったその感情は、憎いという色合いに変わりさえしている。

「なんで、なんで………なんで、わだじ、こんなに、ばかなの？」

姉弟子の胸にうずまったままこぼした言葉は、その音色ごと自分で自分を引つ叩いてやりたいくらい甘ったれている。

それでも、どこか花に似た香りの女性は笑わず怒らず蔑まず、夜空にそつと寄り添う月のようにティアナを両腕で包みながら。

「……ティアナがね、確実に間違っているとしたなら、それは一つだけだよ」

そんな事を、言う。

「……え？」

「あのね、ティアナ。君は、……君だけじゃないけれど、ずっと勘違いをしているんだ。大きな大きな、思い違い」

フェイトの言葉は絵本を読み聞かせるような口調で紡がれながら、少しの苦味が乗っている。

「なのははね、完璧じゃないよ。これっぽっちも」

「……そんな、こと、だ、だって」

「私が実力的になのはと同じくらいだからとか、そういう事で言っているんじゃないの。純粹に、率直に、はっきり言って、親友としての鼻根目をどれだけ入れたって、間違ってもまともな人間だなんて言えない。それが、高町なのはなんだ」

その柔らかな胸から面を上げて、思わず彼女の顔を伺えば、そこには苦笑が浮かんでいる。

そして、彼女は言った。

「ちゃんと、知りにはいこうか。話してくれる人がいるから」

「お相子だよ、ティア」

「……そんなわけ、ないじゃない！」

フェイトに連れられてティアナが入った部屋には、既に四人の人間がいた。

「私は、めちやくちやにしたのよ！ あんたたちの努力を！ あんなに勝手な事をして！」

その内三人は、合わせる顔のまったくないフォワードのチームメイト。

「うん、それはそう思う。ティアはすごく勝手だった」

「だったらー！」

「それでも、やっぱりお相子なんだよ」

代表のように、スバルは再度そう言った。

「なんで、なにが、お相子だったのよ」

「ティアは、私達のリーダーだ。リーダーは、上に立って指示をしてくれる人で、つまり私達は、ちゃんとその人を下から支えなきゃならなかったはずなんだ」

「支えてくれてたわよ！ あんたたちは、ちゃんと！」

ティアナの言葉は当然本音だ。本当に、自分のチームメイト達は最善を尽くしてくれたと思っっている。だから、責は全部自分にあるはずだ。

「……だったら、ティアナさんがあんな風に泣くことはなかったはずです」

なのに、俯くキヤロはぽつりと零した。

「私、ティアナさんがあんなに思いつめてるなんて、そんなの全然気が付きませんでした」

「それは、だって、そんなの……そんなの、あんたたちが悪いわけじゃ」「もし僕たちがおんなじように苦しんでたら、ティアナさんは気づいてくれます。少なくとも、無茶する前にちゃんと怒って止めてくれま

す。それぐらいには僕たちを見てくれてるって知ってます」

キャロに継ぐようにしてティアナにそう言ったのは、悔しさを隠し切れない子供の顔と、言うべきことをきちんと言うのだという大人の顔を入り混じらせてこちらを見つめるエリオ・モンディアル。

「……買いかぶり過ぎよ。私は、そんなんじゃない」

「私たちはそう信じてる。だから、今回の事は私達も責任を感じなきゃいけないミスだって思ってる。ティアだけのミスじゃない、チームのミスだ。だから、責任云々を言うならお互い様のお相手だ」

「……スバル」

立ち尽くすティアナの肩に優しく手を置いたのはフェイト。

「うちのフォワード陣は、良いチームだよ。もちろん、ティアナを含めてね」

彼女のその言葉にはもう、どう返して良いのかティアナにはわからなかった。言葉の代わりにぽつりぽつりと、熱く透明で情けない雫だけが落ちていく。

「さ、座ろう。座って、これからのための話を聞こう」

フェイトに促され、フォワード陣揃って長椅子につく。

自分たちとテーブルを挟んで対面にフェイトは回り、今までじつと黙っていた人の隣に腰を掛けた。

「……ティアナ」

「……はい」

その人、高町恭也が口を開いたのは、ティアナがひとまず涙を抑えられてからの事だった。

やっぱり、この人にもどうしようなく顔を合わせられなくて、俯いたまま返答をする。

「二つ、質問がある。まず一つ目。君は、なのはの事を完璧な人間だと思っているか？」

「……はい」

そうではないとフェイトに言われたけれど、それでもやはりティアナは即断でそう答えた。

「……では二つ目の質問だ。俺となのは、歳の差はいくつだ？」

「……六つ、です。なのはさんが十九歳で、恭也さんが二十五歳、ですから」

いきなり妙な問いだが、極めて基本的なプロフィールに関する事だ、間違っではないはずである。

「そうか。一つ目も二つ目も、君の答えは間違いだ」

「……え？」

思わず顔を上げてその人の表情を伺えば、ひどくまっすぐにこちらを見ている。

「……どういう」

「これを知っている人間は、局の中でも極一部だ。というのも、機密扱いの事件に関係する事柄だからだ。四人とも、これから話す事は口外しないで欲しい」

「フワード陣が全員領いたのを確認して、恭也は続きを口にする。

「十一、それが俺となのはの間にあつた元々の歳の差だ」

「……十一？ それに、元々の？」

「どういう事だ。歳の差がズレ込むなんて事、カウントの関係で起こる一歳だけのはず。それが五つ？」

片方がいきなり歳を取ったり、逆に片方が突然若くなったりなど、一時的な効果ならともかく恒久的な変化としては現実に起こるわけがないのだから……。

(……いや)

違う。

ありえる、相対的に見れば。

「わかったか？」

「……管理局や管理世界で通常使われる年齢は、細かく言えば主観年齢です。当人の上を『流れていない』とされる時間は省いてカウントします」

それは、儀式や治療、その他様々な理由で肉体の時間が停まった人間の歳をそのままカウントすると、色々と問題が起きやすいからという実務的な理由によるものだ。

つまりは。

「恭也さんの時間が、五年間停まっていた。だから、恭也さんから見ればなのはさんがいきなり五歳、歳を取る形で年齢差がズレた、……ですか?」

「百点の回答だ」

結論を口にしたテイアナに、恭也は頷いた。

そして少しだけ息を吐いてから、話を始める。

「その事件があったのは、今から十年ほど前の事になる。当時、俺となのははまだ局員ではなかったが、なのはは巻き込まれる形で、俺はそれを追う形でその渦中に入っていた。俺にとってはその事件が初めての魔法との出会いだった」

その事件が十年前で、現在に至るまでに途中で五年間加齢が停まっていたというのだから、ややこしいがつまりは当時の彼は二十歳。

魔法と出会う年齢としては、間違いなく遅いと言えるだろう。

「名前や顔は知っていたが、実際にフェイトと初めて会ったのもこの時だ。はやてやリインフォースたちと友人になったのも、同じく」

つまり、今は隣に座って似合いの二人に見えるフェイトとも元々は九歳と二十歳という十一歳差があったらしい。ちょうど、今のフェイトとエリオ・キャロの年齢差に近い。

(……だから、かな)

こんなに似合いに見える彼らが恋人という形になっていないのは、元々はそんな、大人と子供、保護者と非保護者のような立ち位置だったからという事もあるのだろうか。

「色々あったが、事件はやがて最終局面を迎え、俺になのはにフェイト、フェイトの使い魔のアルフ、はやてにヴォルケンリッター、それに当時は執務官だったハラオウン提督に、俺やなのはと同じく民間協力者だった無限書庫のスクライア司書長が各々やるべき事をやって、そして、それは本当に最後の最後だった」

(……あ)

ほんのわずか、恭也の隣に座るフェイトがその表情を硬くした事に気づく。

「端的に言えば、俺たちの前にどれだけ魔法を撃っても消し飛ばせな

い爆弾が現れた。威力はL級艦船搭載の魔導主砲、そのフルチャージショットと同等。起爆までの時間は二秒だ」

「……っ」

それは聞くだに、どう聞いても絶望的な状況。

「なんとかしようと思つてな、俺は少々無茶をやった。やらねばならんと思つた時点で、命は端から諦めた」

そのあつさりとした口調が、だからこそ真実味を伝えてくる。

「結果、爆弾を処理する事には成功したが、俺は死を待つ身となった。その場で即死を免れただけで御の字くらいの有様だ」

「っで、でも、無事、だったんですよね、大丈夫、なんですよね？ ……

その、今でも、とか」

思わずという風にそう問うたエリオに、恭也は穏やかに微笑んだ。

「事件に関係していたとある人物の尽力のおかげで、なんとか命を繋げてな。念入りに治療してもらえた。おかげで、事件前よりも健康体になったくらいさ。後遺症なんかも残っていない」

「そ、そうですか、よかったです」

ほっとしたように言うエリオの隣、うんうんとキヤロも首を縦に振っている。

「その念入りな治療、つてというのが……」

「ああ、冷凍睡眠を使った類だ。詳細はやはり言えないが、患者の時間を長期間停め、その間に治療を行う」

スバルの問いにそう答え、恭也は続ける。

「俺の場合、その期間が五年だった。起きた時には驚いたよ、てっきり死んだと思つたものだったから……まあ、その話はいい。今問題にしているのは、俺が無茶をやり死にかけて、長い期間眠りに着くという着地点に収まった事で、一体何が起こったかだ」

周囲と年齢がズレた、という単純な事実だけではないというのは、もう察せた。

「最初の話に戻ろう。年齢差が元々は違ったというのはわかってもらえたと思う。ではもう一つの方だ……頼む」

恭也の言葉に、頷いたフェイトがテーブル備え付けの端末を操作す

る。スクリーンが浮かび上がり、やがて映像が流れ始めた。

老齢の女性が、金髪の少女の近接攻撃を罨魔法やバインド魔法を使って老獺にやり過ぎしている。

「どうやら戦闘映像らしい。」

「これ、……学長先生」

スバルが呟いたように、老齢女性の方は自分たちも世話になった第四陸士訓練校の学長、ファーン・コラードだった。

「と、……え、これ」「……もしかして」

「うん、私」

驚きに眼を開いて問うエリオとキャロに、フェイトは微笑んで頷いた。

（今のエリオとキャロくらい、かしら。九歳とか十歳？）

めまぐるしく動く戦闘の最中なのでじつとは見られないが、幼いその容姿の中には確かに今のフェイトの面影がある。

意外でも何でもない事だが、やはりとんでもない美少女だった。

そしてこれもやはりと言うべきだろう、凄まじい魔法の実力である。高度な中・遠距離魔法を高速で処理しつつ、身体強化を力強く振るってファーンを苦しめている。

とは言え、さすが訓練校学長。

ファーン・コラードと言えば元教導隊の技巧派魔導師、年老いてなおその技は健在だ。猛攻を掛けるフェイトを上手く捌いて弾き飛ばす事に成功し、

「っ！」

追撃の魔法を彼女が放たんとしたその刹那、場面を桜色の暴虐が覆った。思わず息を呑んだのはティアナだけではなく、フォワード陣全員だ。

なんだ、今のは。

「……集束、砲？ とんでもない威力の、……え」

ティアナは言葉を切った。切らざるをえなかった。

桜色の奔流がようやく画面から消えたかと思った途端、また現れたのだ。そしてそれは驚くべきことにその後、三度続いた。

集束砲、五連発。

フォワード陣だれもが言葉を発せない中、やがて画面はズームしてそれを放った術者の姿を映し出す。

「……ひっ」

引き攣った悲鳴を上げたのは、キャロだった。ティアナは、声から出てすらこなかった。

「もう一度聞くて、ティアナ」

そんなティアナに、恭也は静かに問い直す。

「これが、完璧な人間に見えるか？」

問われずとも。

問われずとも、そんなもの、答えは決まっていた。

「……だ」

気がつけば、

「だめ、でしょう」

ティアナはそう言って首を横に振るっている。

だって、そこに居た少女は、もう駄目だった。

ひと目見て、それがわかる。白いバリアジャケットをはためかす、

九歳だか十歳だかの彼女は、——高町なのはは、もう駄目だった。

意味の分からない集束砲五連発という離れ業をやったのけ、漲る魔力は空気に吠えるかのような雄々しさ。魔導師としての実力、才覚は共に文句のつけようのないもので。

しかし、その愛らしいはずだろう面に浮かんだ表情は、それらを潰して余りあるほどの酷さだった。

のつぺりとした虚ろな顔の中、瞳だけが異様。ドロドロと煮立つ溶岩のように暗く重く熱い輝きを放っているそれは、覗き込んでみると底のない沼に沈められるような気持ちになってくる。

バリアジャケットの一部がバチンと弾け飛ぶ。おそらくは先ほどの魔法の反動だろう、しかしなのははその表情を小揺るぎ一つさせなかった。

駄目だ。

駄目だろう。

これは、もう、駄目だろう。

「なんで」

ティアナの口からは、ごく自然な問いが零れていった。

「なんで、……これで、生きてるんですか？」

映像の中の高町なのはからは、少しだつて未来の匂いがしなかった。鼻につくのは、濃厚な自壊への予感。

べつたりと落ちる、死の影だ。

どんな形にせ早晚、彼女が命を散らすだろうというのはもはや確定事項のようにさえ、思える。

「フェイトを含む、周囲の人達が護ってくれたからだ。実際、あいつはこの時まで一度、この先にもう一度、自殺を凶っている」

驚きの声を上げた人間は、一人もいなかった。それはなんとも、この少女がするには自然な行為だろうから。

「……さっきの、集束砲連発魔法にしたってね」

静かな声で言うのはフェイトだ。

「まともなものじゃない。普通の集束砲と比べて持続時間が格段に短いつつという性能的な意味合いもあるけど、もつと本来的な……集束砲は長いチャージタイムが必要な代物のはずなのに、あんな風に連発なんて事が出来るって面でも」

「……なのはさんの、あれは、どういう」

問うたティアナに、フェイトはやはり静かに答える。

「暴発。無理矢理高速に魔力をかき集めて、わざと危険な高圧縮状態を作り出して爆発させてる。そこに指向性を付与しているから砲撃のように見えるけど、でも本質は暴発だ」

その言葉に、自分が新たに手にした魔法の事が頭をよぎった。

「……暴発を利用した魔法は、前にも組んだことがあるから、つて、たしか、ステインガーショットが出来上がった時に、なのはさん」

「言ってた？ そうだね、ティアナのステインガーショットは似たような事してる。もつとも、きちんと安全な範囲で行ってるステインガーショットと、失敗すれば重傷間違いなしのあれは、同じように語れるものじゃないけれど」

重傷間違いなしという言葉が大げさなものでもなんでもないだろうというのわかる。自分の手元からあの規模、あの威力で魔力を暴発させているのだ、一つのミスでもしようものなら命に関わるだろう。

少し、自分が撃つたらどうだろうと想像してしまって、すぐに血の気が引く。

試すのだから絶対に嫌だ。

制御を誤れば、指はおろか腕はおろか、半身が吹き飛んだっておかしくない。

ましてや、実戦での使用なんて、それも連発。自分には無理だ。

それが出来るのは、技術云々の前に、その精神性は――。

「あんなものを思いついて、使えるように仕上げ、実際に使えてしまう。それはなのはの優秀さを示しているとも言える、けどどね、同じくらいに狂っている事も示してる」

「……」

端的なフェイトの表現に、首を横には振れなかった。

未だ続いている映像を見やれば、どうやら最終局面だ。高町なのは捨て身の特攻をしかけ、カウンター魔法を何重にも起動してファーンが受けた。

叫び声すら、なのはは上げていない。ただただ、あののつぺりとした虚ろな表情で、しかし瞳だけが揺れない重さを有した顔で、待ち受ける魔法へと突っ込んでいく。

人としてのまともさが、そんな光景に欠片でもあるものか。

確かに。

確かに、彼女は、高町なのはは狂っていて。

「壊れてる」

フェイトが放った言葉は、力みがなく、自然な事実を語る音色だ。

「壊れてるんだ。壊れてたじゃない」

「え……」

「なのはの中にはまだ、ああいう部分が残ってる。それがいつかなくなってくれるのか、それすらわからない」

映像の中、ファーンとなのはは相討った。

揃って、空から地面へ堕ちて行く。

「あの集束砲連発魔法、禁止扱いなんだけど、なのははいぎとなった時、使う事を躊躇わないと思う——今だって」

「……そんな、でも、暴発を利用した魔法、今は、もう使っていないって、言っていましたっ」

「最後は五年前かな。確かにそれ以降、なのははあれを撃っていない。だけど、これからも使わないって保証はない」

フェイトの口調は、はつきりとしていて。

その内容はくつきりと、高町なのはという人間の真実を伝えてくる。

「歪な子だ」

ぽつりと落とすように言ったのは、恭也だった。

「俺が言えた事じゃない。それは、その原因の癖に何を、という意味でもだ。だが、それでも言わせてもらうなら、やはりあの子は歪なんだ」
どうか、わかってくれないか。

恭也が声をわずか、しかし確かに揺らして言った。

「完璧なんかじゃないんだ。そんなところで似なくていいのに俺と同じく馬鹿なあの子は、なにも、完璧なんかじゃない」

「隠すのが上手いだけなんだ。綺麗に表面取り繕って、だからなかなか気付けない。……これはなのと言うよりも、私としては美由希さんを抜いた高町兄妹がって言いたいんですが」

顔を少しだけ俯かせていた恭也はフェイトのそんな、少々わざとらしくたしなめるような口調で放たれた言葉に、暗く染まりかけて見えただ面を上げて苦笑する。

どれだけの密度で彼を見て入れればそんな事が出来るのかと言うくらい、それは素早く鮮やかで手抜かりのない、濃やかな気配りだった。
「……ははは」

「ティアナ?」

突然笑みをこぼしたこちらにフェイトは不思議そうな顔をして、ティアナはそんな彼女に首を振って。

「いえ、……なんていうか、……あー、……その、……——っ！」
自分の額を目の前のテーブルへ、思い切り打ち付けた。

「う、うわ、ティア!?」「ティアナさん!」「あわわわわ……」

突然の奇行に慌てふためくフォワードのチームメンバーを尻目に、ティアナは勢いよく立ち上がる。

痛みと衝撃で視界が滲んで揺れているが、知ったことではなかった。

「どこに居ますか?」

「……訓練場、シミュレータのあたりだ」

恭也から聞いた答えに、ティアナは出入り口に向かって部屋から飛び出る。

どんな顔して会えばいいなんて、そんな怯えはもう、どこか彼方に行っていた。

「隣、いいですか?」

自分でも呆れるほどにそれは、あっさりとした声音。

でもどうか、今はこの勢いのままいかせて欲しい。きちんと、この人と向き合うために。

「……ティアナ。……うん」

頷いた彼女のほうがよほど、吐き出す音色は重いだろう。

海上に突き出る形で作られた陸戦用空間シミュレータ、その縁に腰掛けたなのは隣の隣へティアナは座る。

少しだけ吹いている海風が、鼻にからい。

「……ティアナ、私、」

「なのはさん」

遮って、言うことにした。ためらいが背中に押し掛からないうちに。

「私、ここに来る前、なのはさんの事あんまり好きじゃなかったんです」

隣の気配はひるみもしない。隠すのが上手いだけ、そんなフエイトの言葉を思い出す。

「だって、いかにも順風満帆のエリートだし。すごい人だっていうのは知ってても、だからこそ、好きにはなれないだろうなって思えちやつて」

「……そっか」

「それで、実際ここに来て、教導を受け始めて、普通に嫌いになりました」

こんな風に言ってもなお、高町なのは揺れなかった。どんな言葉を投げられてもじつと静かに自分の光を示し続けるその様は、海風に曝される灯台のようだと思った。

それが幻だと言う事は、もう知った。

「頼りになる上官で、親切熱心な教官で、ちよつと話すだけで『ああ、この人良い人なんだろうなあ』ってすぐにわかるくらいのお人好し、ついでに顔は可愛くて……嫌なところが一つもないから嫌いになるって事があるんだって知りました」

「……私は、」

「気分としては最悪ですよ。そんな貴女を好きになれない自分が何より嫌だった。仕事の上では実力不足も才能不足も突きつけられ続けるし、ここに来てから自己嫌悪まみれ」

苦い日々だ。とにかくのたうち回った、苦い苦い日々。

「そんな時、恭也さんと仲良くなれた」

「……っ」

ようやくと、その人が揺れた。

「別に、あの人の妹になりたいわけじゃなかった。私の兄と恭也さんは全然似てないし、当然違う人だし、だから、そういうわけじゃないんですけど、でも、……あつたかさが同じだった」

それに縋りついたときに、自分はまだ求めていたのだと思い知らされた。

兄を喪った事を消化なんて出来ていなくて、だから、どこか似たぬくもりをくれるまったく違う人に縋りついてしまった。

「そしたらなんだかちよつと、穏やかになれてきて。感じてた焦りとかそういうの、どっかに行つちやつて。ああ、これならって思ったんです。これなら私もやっていけるかもって。……今日の模擬戦、これ乗り越えたらようやく、なのはさんと正面から話せる自分になるんだって、そう思つて戦つたんです」

これはまだ、生傷だ。だからこうして空気に晒せばひどく痛む。じくじくと神経を蝕んで、声を揺らさずに保つのはとても難しい。

だけど、それを口を噤む理由にしない意地くらい、自分にもあるのだ。

「そしたら聞こえてきちゃつて、恭也さんの声。私じゃなくて、なのはさんが心配で観に来たんだっていう恭也さんの声」

「……それで」

「はい。その後の事はよく覚えてません、なんて言いません。はつきり覚えてます。貴方が憎かった。だから」

だから、謝つて下さい。

あまりにも、勝手に言う。日の落ちた、それでもなお確かに星明かりが照らす夜の空気を肺に吸い込み、言つてやる。

「……ティアナ、」

「謝つて下さい！ —— そんな風に騙されてた私にです！」

その人の声を遮つて、はつきり顔を見てティアナは大音声を上げた。

「だってそうでしょう!? 完璧だって思つてたんです！ 高町なのはは全方位完璧で！ それでその上、あんな風にお兄ちゃんに護られて！ 全部全部持つてて！ だから憎かった！ ……なのにな！」

そう、なのに。

あの映像は、あの姿は、あの瞳は、もう脳に焼き付いた。

「なのはさんは！ 全然完璧じゃない！」

やっと気づいたその事実は、口にすれば当たり前過ぎる。

「ていうかまともですらない！ スペックが馬鹿みたいに高いだけのポンコツじゃないですか！」

「……ポ、ポンコツ」

投げた言葉にその人はたじろいで、しかしティアナは続ける。

「ポンコツ！ ずうつと騙されてた！ 完全無欠のエースオブエースに！ まさかあんな大穴空いてるなんて思わなかった！」

「……その、ティアナは……色々、聞いた、んだよね。私が」

「聞きましたよ！ なんですかあれ！ よく生きてますね！ なんなんですか！」

「う、う、そ、そうだね、うん」

本来的に責める筋合いでもなんでもないこちらに言われて、なのは小さくなる。

「……みんなが止めてくれなきゃ、私、もう死んじゃってたはずで」

「そりやそうですよ二回も自殺未遂やってんでしょ！」

「う、うん……その、……うん」

ますます小さくなるなのはの姿に、もうティアナは幻を見なかった。

気づいてみればこの人は、小さく細い肩をした、一人の脆い人間だった。

「騙された！ 騙された騙された！ ……もおおおおおおおおお！」

自分の髪を、ティアナはぐしゃぐしゃとかき混ぜて。

「だあああああああつー！」

「ティアナ!?!」

足を投げ出して座る空間シュミレータの縁を、踵で思い切り蹴り飛ばす。当然、そうすれば身体は前方へ吹き飛んで、重力に従い落下する。

地面へ、ではなくて、闇夜に黒い海の中へ。

水しぶき、大きいんだか小さいんだかよくわからない落水音。

海中に沈んだティアナの身体はやがて、仰向けにぷかりと海面に浮き上がった。

「ティ、ティアナ、なに……」

「ちよつと、頭冷やしてんですよ」

湧いていたのも煮立っていたのも、彼女ではなくこちらの頭。

頭から全身ずぶ濡れ、コートタルミみたいな色をした夜の海に浮かびながらティアアナは言う。

「ごめんなさい」

「……それは、私の言う事だよ」

「違います。謝って下さいって私は言いましたけど、でも、なのはさんが謝る事なんてないんです」

自分の主観からすれば彼女に非があるように見えなくもないかもしれないが、客観的に見ればそんなもの、微塵もないだろう。

「勝手にした、私はずっと」

「……」

「貴女は、なのはさんは、ずっとあんなに優しかったのに」

狙ったわけではなかったけれど、海に飛び込んでよかったと思う。身体を包む塩辛い水がほんの少しだけ増えた所で、きつと誰も気が付かないから。

「馬鹿な部下でごめんなさい、扱いづらい教え子でごめんなさい、嫉妬深い人間で、ごめんなさい」

くそう、揺れるなよ。そう声に願ってみても、都合よく言う事は聞いてくれなかった。

「ごめんなさい、なのはさん。ごめんなさい」

喉を締めるように震えを抑えつけて、それでもティアアナは言葉を続ける。

続けなければいけない、じゃなくて。それもあるけれど、一番はそうじゃない。

「……ごめんなさい、でも」

続けたかった。続けて、言わせて欲しい事があるのだ。

「あの、……お願いです、なんて、言えないのはわかってます。でも、……でも、また」

私を。

そう続けたようとしたティアアナの言葉は、上がったドパアンという音にかき消された。

驚いて首を上げて見てみれば、縁に腰掛けていたはずの彼女の姿が

ない。

視線を回せば、海中にわずか、栗色が踊っているのが見えた。

「ぶはっ……うう、足着かないね」

海面から顔を出したのは、こちらと同じく頭からずぶ濡れになった高町なのは。

「……着くわけじゃないでしょう」

この空間シュミレーターは大掛かりな装置で、まさか浅瀬に作ったわけではない。こちらへんは、それなりにしっかりと水深がある。

「……浮くの難しいかも。ティアナそれどうやってるの?」

「どうって、力を抜けば自然に」

「ええー、うーん……つぶ、だめだ、波が顔に」

なんだその微妙な不器用さは。少々呆れていると、魔力の奔る気配がした。たちまち、なのはの身体が安定する。

「なのはさん、魔法使いましたね?」

「……あんまりこういうの、得意じゃなくて。かなり良くなったけど、根っこのところは運動音痴なんだよね」

「……知らなかった」

魔力の制御があまりに上手いからそんなの、知る機会なんてなかった。

「騙された、って言われると、言い返す言葉なんてないんだ」

「……言いがかりですよ、こっちの」

「ううん。……あのね、ティアナ」

彼女はずいぶん、不思議な顔した。穏やかに微笑んでいるようにも、泣き出す寸前のようにも見える。

「お兄ちゃんから私のおかしな所を聞いたと思うんだけど、それ、半分だよ」

「……え?」

「お兄ちゃんは、私の壊れているところの、半分しか知らない。……半分分っていうか、大本かな?」

星々を頭上に頂きながら、彼女の口調は静かだった。

どこか、それは痛いくらいに。

「……なのは、さん？」

「あのね、ティアナ」

直感でわかった。

彼女が、己の臓腑を晒すつもりである事を。

「私は、あの人を愛してる」

叫ぶでもない彼女のその言葉は、はつきりと聞こえて、だけどうまく噛み砕けなかった。

「世界の誰より愛してる。どこの誰にも、絶対に負けない」

易易と噛み砕いてはいけないものが投げられているんだという事は、なんとか察せて。

「私は、愛してる。ずっと、ずっと」

最終的に、ティアナにそれを理解させたのは、彼女の言葉そのものではなかった。

「高町恭也を、愛してる」

炎だ。

炎なのだろう。

海の上、夜の中、高町なのはの瞳の内に、燃える燃えるこのとてつもないものは、きつと炎だ。

踊ることはあれど、揺らぐことなど決してないだろう、あまりに重厚で頑然とした焰。

「家族として、人として、女として。私の全部で、愛してる」

彼女は、それに焼かれながら生きているのだ。

ぞくりと、自分の背筋が震えたのがわかる。

同時、フェイトの言っていた事を本当の意味でようやく理解できた。

変わってないのだ、この人は。あの映像の中に見た瞳と、今日の前にあるものは、決定的なところが同じだ。本質は、変わっていない。

「……いつから」

「わかんない。……本当に、わかんない。ずっと昔から」

ティアナが零した問いに、なのはは少し自分に呆れるように返した。

兄が自分たちをかばって長い眠りに就いた。それは大きな大きなショックではあったのだろうが、この人が『普通の人』と比べて壊れてしまっている事の、原因というわけではなかったのだ。

あるいはもしかすれば。

この人は、高町なのはは、もしかすれば。

「好きなんだ、あの人が」

最初から。

「……私が完璧になんて見えたとしたら、それは多分、必死だからだ」

「……なのははさん」

「自分のおかしきは、わかってる。だけど、あの人にそれを知られるのが怖くて、だから、必死で取り繕ってる」

教導隊きつての魔導師、空のエースオブエース、高空の女王。

頼りになつて優しく、誰が見たって愛らしい容姿。

そんな彼女は嘘じゃないのだろうけれど、最も生な部分でもないのだろう。

「ねえティアナ、私は、こういう人間」

彼女の言いたいことはシンプルだ。

「それでもまだ、教わりたいてって思うかな？」

「……」

問いを頭に巡らせて、ティアナは数秒目を閉じた。
どうしたい。

「……条件が、あります」

そんなこと、言えた立場じゃないのはわかった上で、言う。

「うん」

自分は、どうしたい。

「好きなんですよね、恭也さんのこと」

「……うん」

ここまで晒してくれた人に、どうしたい。

どう、なつて欲しい？

答えはするりと出てきた。

「絶対に落として下さい。他の誰にも奪われないで、がっちり自分の

ものにして下さい」

「……………えっ？」

完全に居を突かれたような声が返ってきて、構わずティアナは続けた。

「なのはさんですよ、くつつくべきなのは」

「……………え、でも」

「なんですかその反応。そのつもりないんですかもしかして」

「な、ないわけではない！ ……けど、でも、なんで、ティアナがそんな」

もつともな問いに、ティアナは夜空のどこにも焦点を合わさずに答える。

「私のお兄ちゃん、すっごいかつこ良かったんですよ」

「え、あ、……………うん。写真で見ただけだけど、うん」

急に舵を切り替えた話に彼女が付いて来てくれたのを確認し、ティアナは続ける。

「本当に我が兄ながらそれは爽やかなイケメンでした。めちゃくちゃ優しいし、魔導師としても優秀で……………って言えば、わかるでしょう？

もう入れ食いですよ入れ食い」

「あ……………だろうね」

「で、寄ってくる女のやり口なんて皆いっしょ！ まずは私からですよ！ 私に懐いてもらおうってやつ！」

「……………う」

なのはがその端正な顔を歪ませた。そこには実感と共感の匂いがある。

それはそうだろう、あんな兄を持っていれば彼女も絶対に同じ目に遭ってきたはずだ。

「でもお兄ちゃんは私を育てる事を一番に考えてくれたから、なかなか誘いに乗らなくて。で、そうなってくると女どもの言い様なんてやっぱりみんな同じ！ 『妹ちゃんにあんまりべったりすると後で辛いよ？』 この娘だってその内、どこかの男の子のところに行くんだから』って！ ……お前に言われる事じゃないっつーの!!」

脳内に思い出された苛立ちに、右手を海面に思い切り叩きつける。

力が入った事でティアナの身体は浮力を失い海中へと沈んだ。

その寸前にちらりと隣を見てみれば、なのはは思い切り渋い顔で頭痛に耐えるように眉間を抑えている。

どう見てもそれは同類の顔だった。

結局なのはのようにティアナも魔法を使って体勢を整え、彼女の隣にまた浮かぶ。

「私は別に、お兄ちゃんのことをなのはさんみたいに好きだったわけじゃないんです」

「……そう、なんだ」

「はい。大好きでした、当然今も大好きです。ものすごく小さな頃は『お兄ちゃんと結婚する』とか言ってたと思います。……でも、違います」

本当の意味で、自分は兄に恋をしていたわけではないのだ。

だが、思ったことはある。

「違います、違うんです。……ただ、だけど」

もし、自分が兄に恋をしていたなら、この状況は腸が煮えくり返ったに違いない。そんな風に思ったことはあった。

「だとしても、なんで妹だっただけで候補から除けられなきゃいけないんですか」

「……っ」

「ていうか、一番近くにいますよ？ 色々ちゃんと知ってるし、

一番関係はしっかり築いてんですよ！ それなのに勝手にありえない可能性にされるってめちゃくちゃ屈辱じゃないですか!? ——

ぽつと出の女風情が何様だツ！」

バアンと壁を打ち壊すような音と共に上がった水飛沫は、ティアナの起こしたものではない。

「……そうだよ。こっちは」

そう叫ぶ、顔を伏せたなのはのダイナミックな左手の振り下ろしによる相槌だった。

「生まれた時からずっと一緒なんだ……、年季も……！ 密度も濃度も違う！」

「……そうですね！　一番兄の事をわかってるのなんて、妹に決まってるんじゃないですか！」

「なのに！　それをわかってない奴らが次から次に……！」

低く唸るように声を上げるなのは顔は、実に迫力があり。

その瞳は、絶対を思わせる灼熱を有している。

(……そうよ)

ティアナはそれを見て、確信する。

これだ。

これなんだ。

「……渡すもんか」

なのはが血がにじむような声を吐き出して。

「おにいちゃんは……」

ティアナはそこに、光を見つける。

「おにいちゃんは、私のだ……！」

この醜く愚かで頭のイカレた世間的には背徳的な、彼女の蓋のない欲望こそがきつと——世界で一番眩しくて。

誰を押しつけたって報われるべき想いなのだ。

「……渡すもんか、………渡す、もんか」

だって、ティアナには生々しく想像が出来てしまう。

そんな絶望的な想いを抱えて生きる事が、どんな辛いかを。

きつと彼女はまともな光に怯えるような朝も、暗い泥沼に沈むような夜も、何度も何度も味わってきたのだろう。

それでもなお、自身の想いに殉じている。高町なのはは、飛ぶことを止めない。

それは、なんて。

なんて、眩しいのだろう。

「なのはさん」

「……っ、あ、……えと」

手を取ると、彼女は正気に返ったようにはっとした。いや、正気に返ったというよりは、なんとか常識を纏う姿に変わったというべきか。

彼女の正気はきつと、先ほどの姿こそだろうから。

「フェイトさん、めっちゃ美人ですよ」

「え、う、うん、そりやそうだけど」

「体つきも色気を煮詰めたみたいだし、なにより性格めちやくちや良
いし。優しくて気配りで包容力抜群。その上、恭也さんとすごく近
い」

「そ……そうだね」

そんな事、言われなくとも彼女の方がよくわかっているのだろう。

「八神部隊長は奥さんみたいに支えてる感ありますし、ラインフォー
スさんはなんか熱量すごいし、シグナム副隊長はよく気が合うみたい
だし、シャマルさんもいい雰囲気なところをなんだかんだ結構見ま
す」

「……うん」

「他の名前もちらほら聞きます。なのはさん」

「……」

ティアナの知るかぎりでも、信じられないくらいに強敵揃いだ。
だから。

「なぎ倒してくださいね」

はつきりと、ティアナは言った。

信頼と、憧れを籠めて言った。

「高町なのはなら、出来るはずです」

受けて、なのはは一瞬だけ目を閉じて。

「……——うん」

その領きは、まっすぐに。まるで、彼女の砲撃のよう。

それがどれくらい強いかなんて、ティアナはよくよく知っている。

「あ、子どもが男の子だったら私、もらってもいいですか？」

「……つちよ、ちよつと待ってそれはどこから突っ込めばいいかわか
らない！」

「だってー、行く気なら行くところまで行かなきゃ」

ぐっと握りこぶしを作ると、なのはの顔は真っ赤だった。

「いや、だって、それは、だって」

「……管理局本拠地のこのミッドチルダはその役割上、多様な文化の許容を掲げています。その理念は口先だけってわけじゃない。とは言え、さすがに決して一般的ではない話ですけれど」
「そ……それは」

「知ってるんじゃないですか、なのはさん。手順はかなり多くなりますけど、申請のやり方を考えれば」

昔、興味本位で調べた知識だが今だってそう変わりはないはずだ。

「し、知ってるけど！ 知ってるけど！」

「法的な話だけじゃなく、技術だって色々あつて」

「知ってるけど！」

「あ、やっぱりそういうのちゃんと調べたんですね。なんだ、やる気十分じゃないですか」

「〜っ！」

いよいよなのは顔についた水気も蒸発させそうな勢いだ。もしかしてこの人、この手の話をするのは苦手なのだろうか。

「一緒の部屋に住んでるんですよね？ そんなのもう毎日が大チャンスでしょう！」

「や、やめてよ……、意識しないように頑張ってるんだから！」

「はあああ!? 意識しないでどうするんですか!?!」

「だ、だって！ 絶対変になつちやうし！」

「んなもんもうなってますよ！」

「そうだけどー！」

何をわだかまっていたのだろうと思うくらい、ティアナの口からはぽんぽんと言葉が出てくる。

「ていうか意識させなきゃいけないんですよ！ 恭也さんに、自分は女だってこと！」

「お、女だって、こと……そ、そうなんだけど」

真っ赤な顔を俯かせる彼女は、その童顔も相まってなんだか年下にさえ思える……なんていうのは、さすがに失礼だろうか。

「十分にわがままボディしてんですからそれとか使つて！ いっそお風呂とか一緒に入ったらいんですよ！ 背中を流すつて言つて！」

「それは、……私の方が、のぼせて倒れる可能性が高いので……鼻血と
か出して」

「……むつつりへたれ」

「ティアナそれ結構ひどいこと言ってるからね!」

その抗議の声を浴びて、ティアナは笑ってしまった。

それはもちろん、自分の馬鹿さ加減にだ。

こんな人の、どこが完璧か。こんなに泣きたいくらいに必死で、誰
より健気なこの人が。

歪で異常でだから愛しい、彼女はどこにでもは絶対にいないけれ
ど、しかし確かにここにいる、一人の恋する女性なのだ。

(……うん)

出来るかぎりを、しようと思った。

「……ま、安心して下さいなのはさん。このティアナ・ランスターがこ
れからはぼつちり援護射撃してみせますから」

出来るかぎり、実は臆病らしいこの人の背中を押そうと思った。

「え、……え？ ほ、ほんと？ ありがた……いけど……でも大丈夫そ
れ……？ めちゃくちゃな事けしかけたりしない？ 本当にありが
たい話なんだけど、なんかちよつとさっきの会話を思い出す限り不安
が……」

「このままずっとまぐまぐしてたら裸にひん剥いて背中を蹴り飛ばし
て恭也さんと密室で二人きりにしますからね」

少し過激な物言いになったが、手段としては最終的にはありだと考
えているティアナである。

「ちよつと待ってよちよつと！ そんな風にやってきてないんだって
！ もうちよつと穩便に!」

「そんな生ぬるいこと言ってるようだからちつとも進展してないんで
しょうが！ 子どもはおろかキスですら先の先ですよそれじゃ!」

「……や、えと」

「……あれ、まさか」

「いや、……ええと、……その」

黙って見つめていると、彼女の勝手な自供は続いた。

「……あれは大変、特殊な状況下で、ちよつとだから、頭が煮詰まっちゃったっていうか」

「よし、頭が煮詰まるような状況なら根性見せるんですね」

「ああああ待つて待つて今のなしいい！」

なのはは悲鳴を上げるように叫びながらこちらに飛びかかってきて。

おかげで二人揃って魔法の制御範囲から外れ、浮力を失い海中に沈んでいく。

海の中から見ると空の星は揺れて滲んでどこか頼りなく、それでもやはり美しかった。

「おかえり、ティア」

「……起きてたの？」

「うん、まあね」

ティアナの言葉に頷いて、ルームメイトは笑みを見せた。

あれからなのはとすったもんだやりながら話し合いらしきものを重ね、びしょ濡れの身体で寮のシャワールームに飛び込んで、着替えを持っていない事に気づいて備え付けの乾燥機で慌てて乾かして……なんてやっていたら、消灯時間はとくに過ぎた。

もう寝ているだろうなというティアナの予想に反して、電気を消した部屋の中、スバルは二段ベッドの上でふりふりと手を振っている。

いや、正直なことを言えば、起きてるだろうなと思っていたかもしれない。

起きていてくれるだろうな、そう思っていたかもしれない。

「……その」

言葉を詰まらせたスバルは気遣わしげに伺うような表情で、彼女が何を言いたいのかなんてわからないわけがない。

「スバル、あんたこの六課の上官陣で一番好きな人、だれ？」

「え？」

「だれ？」

雰囲気を見無視したこちらのいきなりの質問に、明らかにスバルは面喰らった顔だ。

「いや、だれって、比べるような事でも……」

そう言っていたスバルだが、無言で見つめ続けると観念したように口を開いた。

「……そりゃまあ、……だれかって言うなら、元からファンだし、同じ隊だし、教導してもらってるし、なのはさんだけど」

「よし」

「よ、よしって何？」

「スバル、私たちはなのはさん派なわけよ。今後はそのように動いてくれることを期待しているわ……」

「待つて待つてわかんないわかんない！」

二段ベッド上段からこちらを見下ろすスバルの顔がわかりやすい困惑に染まっているのは、証明の消えた薄暗闇の中でもわかった。

「……えと、ティア、……なのはさんとは」

「必要ならあの人の背中を蹴り飛ばす、私はそういう役目になったわ」
寝間着に着替えながらそう答えると、少しの笑い声が聞こえた。

「なによ」

「いや、全然話はわかんないけど……仲良くなったんだね」

「……うん」

支度を整えて、ティアナは自分の寢床に潜り込む。

「なーんか妬げちゃうなー、ティアにもなのはさんにも！」

上からは冗談めかした口調でそんな言葉が降ってくる。

「……ねえ、スバル」

あんな風に言うこの娘が、どれだけ自分の事で気を揉んでくれたいたのかくらい、わかっている。

「なに？」

「私、運が良いんだと思う。六課にも入れたし、その前から、あんたと友達になれた」

「っ……ティア」

「ありがとう、スバル。おやすみ」

自分の身に不幸がなかったなんて絶対に言わない。だけど、幸運がなかったなんて事もないのだ。

その内の大きな一つにお礼を言うくらい良いだろう。気恥ずかしいかなと思っただけで、案外と穏やかに言う事が出来た。

「……あの、ティア。……えと、私だって、そう思ってるよ。えへへ」
割とひどいことばかりしている自分にそんな風に返すこの娘は多分、相当に心が広いんだと思う。

「……もつともつと強くなるうね、ティア！ 六課に恩返しが出来るように！」

「ええ」

そうだ、とにかくそれだ。

強くなるのだ、護れるように。強いけれど、その代わりに弱くもなってしまうた人達を、護れるように。

(……なのはさん、………それから)

目を閉じたティアナの頭の中に、なのはと並んでぼうつと像を結んだのはその人の姿。黒い衣装に身を包んだ男性。

上手くいくだろうか。

上手くいけばいいと思う。

だってあんなにぴったりと寄り添って生きているんだ、引き剥がすなんて絶対におかしい。

二人にはずっと、幸せであって欲しいと思う。

「それじゃくおやすみ、ティア」

「……うん」

「……ティア？」

スバルに返した声には、少しの揺れがあった。ティアナの目端は熱を帯びて、雫は顔の上を流れ、そつと枕を濡らしていく。

「なんでも、ない」

「……うん」

それ以上、何も聞いてこないのがやはり、スバルの優しいところだ。やがてほんの少し溢れ始めた嗚咽にも、彼女は何も言わなかった。

兄ではないけれど、どこか兄のように思っている。頼りになる人で、危なっかしきもあつて、だから目を離せなくて。

自分が彼を見る感情は、色んなものが混ざっていて。

だけど、彼と結ばれるべきは、絶対に高町なのはだと思っていて。だから、これはこれで良いのだ。

心にひび割れは起きて、そこからこうして涙が溢れ出てしまうくらいには、きつと悲しいのだろうけれど。

新しく得た暖かさの代わりに、広がったいつかは塞がるこの亀裂を、たぶん失恋と言うのだろう。淡くはあつても、でも確かに。

受け入れようと思つた。受け止めようと思えた。

この悲しさははつきりと、ティアナ・ランスターだけのものだから。

(ねえ、お兄ちゃん)

いつか兄のもとへと行つた時、自慢気に言おうと思う。

私の初恋は、結構素敵だつたんだと。